

中村優斗の軌跡（現在 修正中）

犬大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは物語であって小説ではない

同時進行で書いてるやつを公開順に出すだけ

タグに原作の大幅なネタバレを追加しました

ネタバレを見たくないという方は・・・絶対に後悔しないという方だけご覧ください
決して原作をバカにはしていません

BLって言っても女体化したやつと男だからな

まあほとんどBL要素ないけど

設定ミスしまくってます

*追記

オリ主の強さに関係するアンケートでもっと強くが圧倒的だったので、これからはその方針で行きます

*追記2020/02/28

容姿を公開するかどうかのアンケートでしてほしいが多かったので

優菜

黒髪

髪の長さは普通・肩ぐらい

164cm

57kg

眼の色は黒

設定上美少女

年齢は・・・数えてくれたら嬉しい（自分でもわからん）

基本武器は素手

誕生日2月22日

優斗

黒髪・長さは普通の人・・・ペルソナで言ったら竜司っていうよりか祐介ぐらいの長

さ

眼は赤い

179 cm

71 kg

年齢は優菜のマイナス20歳ぐらい

基本武器は短剣

誕生日5月26日

い
尚、原作のキャラクターは説明文読んで想像するより、ググって見た方が分かるし速

聞きたい事あったら何でも言っ

て
どんどん追加してくけ

オリキャラの質問なら本人が答えてくれるよ

原作キャラはググろうね

あと、こんな小説俺ならもつとうまくかけるって人は三次創作OK何でどうぞ書いて
ください

マジで書く時は純粹に見たいので教えてください

批判コメント見て思う事

作者「批判するのは構わんけどどこが悪いんか教えてほしいわ」（良くできるとは言っていない）

原作たくさんあるから入らないの下へ

ペルソナ5、暗殺教室、盾の勇者の成り上がり、ジョジョの奇妙な冒険、僕の名前は少年A、TOLOVER、がっこうぐらし！、僕のヒーローアカデミア、アカメが斬る！、ドラゴンボール超、賢者の孫、ペルソナ4、ソードアート・オンライン（SAO）、ペルソナ3、デート・ア・ライブ
入らなかつたタゲ

自己満小説？、将来黒歴史、妄想垂れ流し、駄作、ネタ切れ、吐き気を催すにわか、本気でやる気はさらさららない、三次創作OK、更新ペースナマケモノ、名言の無駄遣い、小説ではない

目次

第一話（ペルソナ5＋Rの軌跡『プロローグ』より）	1	第七話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第五話』より）	41
第二話（ペルソナ5＋Rの軌跡『プロローグ2』より）	9	第八話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第六話』より）	47
第三話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第一話』より）	14	第九話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第七話』より）	56
第四話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第二話』より）	19	第十話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第八話』より）	63
第五話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第三話』より）	24	第十一話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第九話』より）	68
第六話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第四話』より）	35	第十二話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十話』より）	74
		第十三話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十一話』より）	

話』より)	—	80	第二十話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十八話』より)	—	137
第十四話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十二話』より)	—	86	第二十一話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十九話』より)	—	144
第十五話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十三話』より)	—	90	第二十二話(暗殺教室の軌跡『プロログ』より)	—	149
第十六話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十四話』より)	—	98	第二十三話(暗殺教室の軌跡『第一話』より)	—	155
第十七話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十五話』より)	—	113	第二十四話(暗殺教室の軌跡『第二話』より)	—	172
第十八話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十六話』より)	—	125	第二十五話(暗殺教室の軌跡『第三話』より)	—	177
第十九話(ペルソナ5+Rの軌跡『第十七話』より)	—	131	第二十六話(暗殺教室の軌跡『第四話』より)	—	

り)	——	183	第三十三話 (暗殺教室の軌跡『第九話』よ
第二十七話 (暗殺教室の軌跡『第五話』よ	り)	192	り)
第二十八話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二	十話』より)	197	第三十四話 (暗殺教室の軌跡『第十話』よ
第二十九話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二	十一話』より)	202	り)
第三十話 (暗殺教室の軌跡『第六話』より)	——	207	第三十五話 (暗殺教室の軌跡『第十一話』
第三十一話 (暗殺教室の軌跡『第七話』よ	り)	214	より)
第三十二話 (暗殺教室の軌跡『第八話』よ	り)	220	第三十六話 (暗殺教室の軌跡『第十二話』
			より)
			第三十七話 (暗殺教室の軌跡『第十三話』
			より)
			第三十八話 (暗殺教室の軌跡『第十四話』
			より)
			第三十九話 (暗殺教室の軌跡『第十五話』

より)	—	261	第四十六話 (暗殺教室の軌跡『第十八話』)
第四十話 (暗殺教室の軌跡『第十六話』より)	—	265	第四十七話 (暗殺教室の軌跡『第十九話』)
第四十一話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十二話』より)	—	273	第四十八話 (暗殺教室の軌跡『第二十話』より)
第四十二話 (暗殺教室の軌跡『第十七話』より)	—	283	第四十九話 (暗殺教室の軌跡『第二十一話』より)
第四十三話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十三話』より)	—	288	第五十話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十六話』より)
第四十四話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十四話』より)	—	296	第五十一話 (暗殺教室の軌跡『第二十二話』より)
第四十五話 (ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十五話』より)	—	306	第五十二話 (盾の勇者の成り上がりの軌

跡『第一話』より)	—————	367	第五十八話(ジヨジヨ一部の軌跡『第一話』より)	—————	439
第五十三話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第二話』より)	—————	373	第五十九話(ジヨジヨ一部の軌跡『第二話』より)	—————	448
第五十四話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第三話』より)	—————	383	第六十話(ジヨジヨ一部の軌跡『第三話』より)	—————	459
第五十五話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第四話』より)	—————	393	第六十一話(ジヨジヨ一部の軌跡『第四話』より)	—————	467
第五十六話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第五話』より)	—————	406	第六十二話(ジヨジヨ一部の軌跡『第五話』より)	—————	481
第五十七話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第六話』より)	—————	418	第六十三話(ペルソナ5+Rの軌跡『第二十七話』より)	—————	493
番外編(僕の名前は少年Aの軌跡『最初で最後』より)	—————	433	第六十四話(暗殺教室の軌跡『第二十三		

話』より)	—————	505	第七十一話(TO LOVEるの軌跡『第四話』より)	—————	564
第六十五話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第七話』より)	—————	515	第七十二話(暗殺教室の軌跡『第二十四話』より)	—————	572
第六十六話(盾の勇者の成り上がりの軌跡『第八話』より)	—————	521	第七十三話(ジヨジヨ二部の軌跡『第一話』より)	—————	579
第六十七話(TO LOVEるの軌跡『プロローグ』より)	—————	525	第七十四話(ジヨジヨ二部の軌跡『第二話』より)	—————	595
第六十八話(TO LOVEるの軌跡『第一話』より)	—————	530	第七十五話(ペルソナ5+Rの軌跡『第二十八話』より)	—————	603
第六十九話(TO LOVEるの軌跡『第二話』より)	—————	537	第七十六話(暗殺教室の軌跡『第二十五話』より)	—————	612
第七十話(TO LOVEるの軌跡『第三話』より)	—————	546	第七十七話(暗殺教室の軌跡『第二十六話』より)	—————	612

話』より)	—————	623	第八十四話(ドラゴンボール超の軌跡『第一話』より)	—————	747
第七十八話(のびハザの軌跡『第一話』より)	—————	639	第八十五話(ドラゴンボール超の軌跡『第二話』より)	—————	759
第七十九話(僕のヒーローアカデミアの軌跡『第一話』より)	—————	666	第八十六話(ドラゴンボール超の軌跡『第三話』より)	—————	769
第八十話(僕のヒーローアカデミアの軌跡『第二話』より)	—————	679	第八十七話(賢者の孫の軌跡『第一話』より)	—————	793
第八十一話(僕のヒーローアカデミアの軌跡『第三話』より)	—————	699	第八十八話(のびハザの軌跡『第二話』より)	—————	833
第八十二話(アカメが斬る!の軌跡『第一話』より)	—————	720	第八十九話(のびハザの軌跡『第三話』より)	—————	871
第八十三話(ドラゴンボール超の軌跡『プロローグ』より)	—————	743	第九十話(僕のヒーローアカデミアの軌跡『第一話』より)	—————	885

跡『第四話』より)	—————	919	第九十七話 (T O L O V E るに転生した
第九十一話 (僕のヒーローアカデミアに	—————	970	けど、他の小説の奴も来てる件『第五話』
来た『第五話』より)	—————	970	より)
第九十二話 (僕のヒーローアカデミアに	—————	986	第九十八話 (ペルソナ5 + R に転生『第二
来た『第六話』より)	—————	986	十九話』より)
第九十三話 (僕のヒーローアカデミアの	—————	1016	第九十九話 (ドラゴンボール超に来了『第
軌跡『第七話』より)	—————	1016	四話』より)
第九十四話 (アカメが斬る！に来了『第二	—————	1058	第百話 (T O L O V E るに転生したけど、
話』より)	—————	1058	他の小説の奴も来てる件『第六話』より)
第九十五話 (アカメが斬る！に来了『第三	—————	1084	第百一話 (賢者の孫に来了『第二話』より)
話』より)	—————	1084	—————
第九十六話 (盾の勇者の成り上がりに来	—————	1116	第百二話 (ペルソナ4に来了『第一話』よ
た『第九話』より)	—————	1116	—————

り)	1285
第百三話(ソードアート・オンラインに来 ただけど…俺一人? 『第一話』より)	1328
第百四話(ペルソナ5+Rに転生『第三十 話』より)	1357
第百五話(賢者の孫に来た『第三話』より)	1388
第百六話(デート・ア・ライブに来た『第 一話』より)	1416
第百七話(デート・ア・ライブに来た『第 二話』より)	1519
第百八話(ソードアート・オンラインに来	

ただけど…俺一人? 『第二話』より)	1577
第百九話(TO LOVEるに転生したけ ど、他の小説の奴も来てる件『第七話』よ り)	1623
第百十話(TO LOVEるに転生したけ ど、他の小説の奴も来てる件『第八話』よ り)	1647
第百十一話(デート・ア・ライブに来た『第 三話』より)	1680
第百十二話(デート・ア・ライブに来た『第 四話』より)	1768
第百十三話(盾の勇者の成り上がりに来	

た『第十話』より)	1822
第百十四話(ペルソナ3に来た『第一話』より)	1893
第百十五話(ペルソナ3に来た『第二話』より)	1941
第百十六話(ペルソナ4に来た『第二話』より)	1994
第百十七話(ペルソナ3に来た『第三話』より)	2051
第百十八話(ペルソナ5+Rに転生『第三十一話』より)	2108
番外編2	2177
番外編3	2185

第一話（ペルソナ5+Rの軌跡『プロローグ』より）

「二度目の人生」

そこは世界のどこか、地底の下か、はたまた天空の上か、それは誰にも分からない。だが、確かにある場所。それが神界

今、その神界で花を咲かせていた議論がある

それは“人間にこれ以上干渉するかしないか”だ

人にとってはよく分からない議題だが、神にとっては重大な議題である

内容は「人の進化を止めるか」or「このまま突き進ませるか」の二択であった

分かりやすく言えば、高卒で家業を継がせるか、大学や専門に行かせて夢を負わせるかの様な雰囲気の問題だ

ヨーロッパの神話の神「ワシは別にいいと思うがの。このままでも」

アジアの神話の神「良くないだろう。人は科学とやらで私達の力を理解しようとしている。このままでは神は科学的にいないなどとホラを吹かれるぞ」

アフリカの神話の神「人間というモノは己を過信するところがあるからな、必ずまた戦争も起こす。ならばいつそ、我らが道を示すべきでは？」

ヨーロッパの神話の神「まともに聞くような奴ばかりじゃないじやろう。それともあれか？武力で压制するのか？アメリカの、お主はどう思う？」

アメリカの神話の神「どうでもいい。帰る」

アメリカの神話の神は話を碌に聞かずに帰ってしまった

ヨーロッパの神話の神「あやつ、即帰りおった」

オセアニアの神話の神「別にいんじやネーノ？何もしなくてもさ。どうせ科学とやらじゃオレ達の域まで来れんさ」

アジアの神話の神「それはあまりにも楽観的過ぎるだろう。人間の進化のスピードは想像以上だ。本来想定していた成長スピードとは桁違いに速くなっている、正直驚かされるばかりだ」

オセアニアの神話の神「ならさならさ、人間一匹捕まえて観察してみる？」

ヨーロッパの神話の神「それは別に構わんが、誰が管理するんじや？」

アジアの神話の神「そりやあもちろん、一番知名度が高く、信仰心が高い神話だろう」
ヨーロッパの神話の神「知名度と信仰心が一番高い神話か・・・それはどこじや？」
ヨーロッパ以外の神「あんたのどこだよ!!」

ヨーロッパの神話の神「えー・・・嫌じゃよワシ」

アジアの神話の神「真面目な話、私は嫌だな。人間の動向を知りたいという欲はある

が、アジアは今色々忙しい。粗暴な神も多くてな」

オセアニアの神話の神「そりや大変だな。ウチはそこまで悪い奴はいないが・・・まあいいヤツも居ねえな！」

アフリカの神話の神「私の所はただでさえ規律を守らせるのが精一杯だ。残念ながら協力は出来ない」

ヨーロッパの神話の神「それでワシの所か。まあ、確かにワシの所は穏やかじゃが・・・」

オセアニアの神話の神「よっしゃ決まりな！じゃあ、一抜け」

オセアニアの神話の神がそう言い、消えた瞬間にヨーロッパの神話の神以外が全員帰ってしまった

ヨーロッパの神話の神「・・・仕方あるまいか。テキトーに死んだばかりの活きの良い魂がいれば楽じゃが・・・」

そうしてヨーロッパの神話の神も消えていった

俺はどこにでもいる高校生

サッカー部に入っててずば抜けて強いってわけでもなく、運動神経がものすごくいいってわけでもない

勉強がものすごくできるって訳でもないし、全くできないって訳でもない

目の前に神様来るんじゃないやね？とも思ったが誰もいない。「あ、やっぱり死ぬんだ」と思ったね

そして何か光が見えるなあと、その光りの方に進んで行ったら体が小さくなって誰かに抱えられてる様な感じになってお母さんみたいな人に言われたんだ。ごくごく平凡。名前は中村優斗って言うんだが、ひよんなことで死んでしまった

お母さん？「あなたは優斗、中村優斗」

同じ名前によくある苗字によくある名前、異世界転生というより輪廻転生のほうが近いのかも。がっかりしたような、死ななくてうれしいような。まあいいや生きてるんだからこれからのことを考えないと

それからは順調だった。平凡だと思わせるために。これが普通だといわんばかりに平凡に過ごした。学校では常に70〜80点に抑え、体育では体の問題があったが、体もあまり前世と筋肉の構造などが変わっていなかったらしく同じぐらいには動けた。サッカーはやりたかったのでサッカー部に入った

普通に過ごし言葉には気を付ける。今まで大きなミスはしていない。学校は暇つぶ

しの場所と化した。あの日までは

中学二年生になり部活が終わり帰ると家が火事になっていた。何が起こったのか全く分からなかった。野次馬だらけの中に見覚えのあるやつがいた

優斗『スキンヘッドにサングラスの・・・獅童!?ペルソナ5の?ならどうして獅童なんかがこんなところに?』

獅童?「ういいいいヒック・・・タバコ消せてなかったのかあ後ろが騒がしいと思ったらタバコ捨てたところの家が燃えてらあ」

優斗『獅童なのか?本当にしかも今タバコを捨てたって・・・それが本当なら家が燃えた理由は獅童ということになる・・・』

俺の手が少しずつ怒りで握り拳を作って行く

優斗「このくそ野郎がああああ!!!」

獅童「グフウウ」

俺は感情を抑えることができなかった

野次馬「なんだ!?!」

獅童「なんだ!このガキは!」

優斗「お前があ俺の家を燃やしたんだろうがああ!!」

獅童「おいお前たち!早く止めないか!このガキがいきなり殴ってきたんだ!」

野次馬「わ、わかった」

優斗「離せ！」

獅童「このガキ！一発殴ってやる！」

野次馬「やめないか！相手は子供だぞ！」

獅童「チツ！俺を殴ったことを後悔させてやる！」

警察官「お前たち！一体何をしている！」

優斗「こいつが！俺の家を！」

獅童「このガキがいきなり殴ってきたんだ」

警察官「とりあえず事情を聴くから署まで来てください」

優斗「・・・行けばいいのか？」

獅童「くそ、仕方ないか」

警察署

警察官A「つまり君は獅童さんに家にタバコを捨てられてその火で家が燃えてしまった。そしてそれに怒り獅童さんを殴った。これであつてる？」

優斗「間違いありません」

警察官A「落ち着いた？」

優斗「はい、すみません・・・」

コンコン

警察官A 「どうぞ」

警察官B 「失礼します」

警察官A 「どうした？」

警察官B 「今病院から連絡が来しました。優斗君の両親ですが命に別状はないですが意識は戻っていないとのことですよ。」

優斗 「本当ですか!？」

警察官B 「ああ」

優斗 「よかった・・・目が覚めた時まで待たないとな・・・」

優斗に少し笑みができる

警察官B 「それでは僕はもどります」

警察官A 「ああ、わかった」

優斗 「あの、獅童・・・さんは何か言っていましたか」

警察官A 「獅童さんは慰謝料として百万よこせと行ってたよ」

優斗 「俺そんな金持ってませんよ!？」

警察官A 「わかってる。そのあと説得して一万でいいと言っていた」

優斗 「・・・それぐらいなら多分出せます」

警察官A「多分獅童さんは金目的じゃなく前科作るためにやってるんだと思う。相当怒ってたし、あの人そういう性格だから・・・」

優斗「そう・・・ですか・・・」

警察官A「とりあえず今日泊まるところは手配しているから連れて行く」

優斗「わかりました」

警察官A「これからはいろんな大変なことがあると思う気を落とさずにな」

優斗「わかってます」

第二話（ペルソナ5＋Rの軌跡『プロローグ2』より）

「謎の声」

警官A「ここが家が戻るまでの君たち家族の家だ」

中は普通の家の間取りで玄関に入ったらず左にトイレ、そして右に靴置き場。目の前に扉があり、中には右にリビング、右奥に台所、左側には階段がある

優斗「わかりました」

警官A「何かあったら警察を頼ってくれて構わない」

優斗「はい、じゃあさようなら」

警官は帰って行った。

優斗「はあ〜〜、もう疲れたから寝よ。家具は一通りあるみたいだし」

???『おい』

優斗「は？誰だよ」

???『お前は獅童を殺したいって思ってるんじゃないか？』

優斗「全く」

???『嘘何か言わなくていい。お前は俺、俺はお前だ』

優斗「じゃあなんだ？俺は二重人格にでもなったてのかよ」

???『多分そうだろうな』

優斗「嘘だろ？」

???『いや大マジ』

優斗「じゃあ何で俺に話しかけるんだ？」

???『わからん』

優斗「じゃあいいわ。とにかく獅童を殺したいとは思わねえ。めんどいだけだ」

???『そうかよ、まあ俺はずっといるから。あと今お前が俺に話しかけてるが、端から見たら独り言を言ってるだけだから気をつけろよ』

優斗「ちよつといいか？」

???『なんだよ』

優斗「お前名前ないと不便だろ？俺の優斗から斗をとって漢字変えて悠ってどうだ
？」

悠『悪くない、それでいい』

優斗「じゃあおやすみ」

．．．寝たか？

優斗「さて、どうせこの世界も12月になれば壊れる．．．なら、怪盗団に入った方

が賢明か？いや、命を取るなら無関係でいた方がいいか？・・・壊れるぐらいなら死んだ方がマシか」

あれから三年？ぐらいの月日がたった。両親は後遺症などではなく元気に帰ってきた。家は火災保険に入っていたのでどうにかなった。獅童がいた時点でうすうす感づいていたが。ここはやっぱペルソナ5の世界らしい。鴨志田もいたし班目もいる、もちろん秀尽学園もあつた

悠のことだがとりあえずあれからずっと俺の中にいる。そして体の主導権は俺にあるらしい。悠も主導権を取ろうともしてないので仲良くしている

悠には俺が別の世界からきたと説明した。そして悠が「なんだそりや。なら俺が話せるのもおかしいけどお前もおかしいやん。これから面白くなりそうやから、ここにいさせてもらうわ」って言つてた。・・・何でなまつてんだ？

あとこの世界が元はゲームということも言った。だからこれから何があるかわかるとも言った。そして悠は「え、お前チーターかよ」って言われた。なんか誰にも言えなかつたことが言えてすつきりした。あと、少し前に主人公がテレビに出た。名前出さないからわからんけど、写真が悪意しかないわ、モザイク薄くてわかる

今日から秀尽学園の2年生だ。鴨志田うざいけど頑張る

秀尽学園

クラス票を見ると杏と三島が同じクラスだった。とりあえず主人公が来るまで待たないといけないから、それまでは勉強しながら待とう。

現在おつきいほうのトイレ中

悠『なあ』

優斗「どうした」

悠『お前が言つてたことつてさまだなのか？もう三年たつぞ』

優斗「あと半月もないよ」

悠『お？マジで？待つた甲斐があるつてもんだ』

優斗「正直俺も楽しみ」

悠『そういやさ、今更だけどペルソナ？だっけ、俺も使えるんかな？』

優斗「わからん。だけど人格一つに一ペルソナみたいなもんだし、俺とお前でペルソ

ナを二体使えたりしてな」

悠『めっちゃおもしろそうやん』

優斗「とりあえず、あと少し我慢しろ」

その頃天界

ヨーロッパの神話の神「なんじゃあやつ、自分の身体に自分と別の魂を飼っておるのか？・・・面白いことを考えるのう」

第三話（ペルソナ5＋Rの軌跡「第一話」より）

「この世界の主人公」

ジリリリリリリリリ

目覚まし時計が鳴った

優斗「朝か」

母「起きたんでしょ！早く降りてきなさい、朝ご飯出来てるわよ！」

優斗「はーい！わかったよ！」

朝食後

優斗「行つてきまーす」

母「いつてらつしやい」

学校に行くために駅を経由していく。俺が獅童と会つてから覚えてるペルソナ5の
ことをノートに書いておいた。ノートによると雨の中主人公は初登校している。今日
は雨だ。ということは、今日会う可能性が高いということ。そんなことを考えていたら
駅につき、学校までの道に雨宿りをしてるやつがいた。それはもちろん主人公です

優斗「・・・お前傘無えのか？」

主人公「・・・そうですが、いきなりなんですか？」

優斗「いや、見たことないやつがいるなあと思つて」

主人公「そうですか・・・いかないんですか？」

優斗「いやまだ時間あるからなあ、そーいや名前は？俺は中村優斗よろしく」

蓮「雨宮蓮つていう。よろしく」

優斗「ちなみに何年生？」

蓮「二年」

話していたら金髪碧眼で髪をツインテールに纏めた女子学生。杏が来た

杏「えつと優斗だよ？傘あるのに何してんの？」

優斗「転校生の二年の蓮くと話してた」

杏「転校生？同じクラスかもね」

そこに鴨志田の白い車が来た

鴨志田「おはよく学校まで乗つてくか？」

杏「・・・ありがとうございます」

鴨志田「そつちの君たちはどうする？」

優斗「俺は大丈夫です」

蓮「俺も大丈夫です」

鴨志田「……そっちの眼鏡くんはよく見たら前科持ちくんじゃないか。昨日校長先生から聞いたとおもうが……くれぐれも問題を起こすんじゃないぞ」

蓮「わかってます」

鴨志田「遅刻すんなよ」

？「はあ……はあ……」

優斗「ん？」

すると、来た道から金髪で短髪の髪をしたチンピラ風の男子学生が走ってきた。竜司だ

竜司「この変態教師め」

俺「おお竜司」

竜司「ああ、優斗。おはよ」

優斗「おはようさん、なんだよお前変態教師って……バレたら面倒だぞ」

竜司「チクンじゃねえぞ。ってそっちのやつは誰だ？」

優斗「転校生で二年の雨宮蓮君」

竜司「タメか、まあよろしくな」

蓮「よろしく」

優斗「どうせだったらみんなでいかね？いつの間にか雨やんでるし」

竜司「だったらこっちに近道あるんだ」

優斗「行こうぜ蓮」

蓮「OKだ」

優斗「お前キャラブレブレじゃね？」

近道を通るとそこには秀尽と書かれた看板のある城があった

竜司「なんじゃこりゃー」

優斗「入ろうぜ」

竜司「お前好奇心旺盛すぎやしねえか!？」

中に入った。中はエントランス風になっていて、前に二股になった階段、一階と二階の左右に扉がある。そして階段の踊り場には、鴨志田が鎧を着て右手で剣を空に突き上げた悪趣味な絵が飾られていた

竜司「なんかおかしいな」

優斗「なんかどころじやないだろ」

竜司「そうだけだよ」

話をしていたら鎧を着た何かが現れた

竜司「なんだこいつ」

蓮「とりあえずヤバそうだな」

竜司「逃げるぞ！」

優斗「ダメだ！もう囲まれてる」

竜司「それならごり押しで・・・」

優斗「素手で相手になれそうにない！」

竜司「じゃあどうすればいいんだよ！」

優斗「何もしないで従ったほうがいい」

竜司「チッ」

俺たちはよろいを着た化け物に連れていかれた

第四話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二話』より）

「世紀の怪盗」

竜司「ぐえ」

優斗「ぐふう」

蓮「ぐほお」

俺たちは牢屋に蹴り入れられた

竜司「やりすぎだろ！」

優斗「めんどくせえ……」

蓮「何だ？この状況」

鎧を着た化け物、略して鎧化け

鎧化け「喜べ囚人」

優斗「俺たちは秀尽だけど囚人じゃないぞ」

鎧化け「さわぐな！罪状は不法侵入だ。よって死刑とする」

優斗「死刑!？」

蓮「イカれてるな……」

奥から一人近付いてくる

シヤドウ鴨「俺様の城で勝手は許されない」

竜司「お前！鴨志田か!？」

シヤドウ鴨「どんなコソ泥かと思つたら坂本、貴様か。また逆らうのか？貴様、少しも反省してないな？え？一人じゃ無理だからみんな助けてえー、てか？」

竜司「お前教師だろうが！こんなことしていいのかよ！」

シヤドウ鴨「俺は教師などではない。この城の王だ」

竜司「余計意味わかんねえ」

シヤドウ鴨「雑談は終わりだ！こいつらを出せ！処刑だ！」

鎧化け三体が入ってきた

竜司「クソ！」

悠『ずっと聞いてたらなにしてんだよ。これは俺に任せてくれねえか？』

優斗「あんまり体こわすんじゃないやねえぞ危なかつたらすぐひっこめるからな！」

悠『ペルソナなんかねえが時間稼ぎぐらいさせてもらうぜ！』

俺優斗「交代だ」

目をいったん閉じ、もう一度目を開けると優斗の目が黒から赤に変わった

悠「やっとな動ける」

竜司「一体どうしたんだ!? 優斗!」

蓮「様子がおかしい!」

優斗『変な感覚だけど任せたぞ!』

悠「任せろ!」

悠は思いつき踏み込み鎧化けを横からタツクルした

悠「オラア」

シャドウ鴨「そいつ何かおかしいぞ、取り押さえろ!」

鎧化け「は!」

悠「くそが、もう終わりかよ」

優斗『早くね!』

悠「思ったより頑丈なんだよ」

優斗『もうだめなのか?』

悠「全然動けねえ」

優斗『お前このままだと出オチだぞ?』

悠「し、仕方ねえだろ!」

俺『・・・わかった、交代だ!』

優斗の目の色が赤から黒に戻った

悠『すまねえ』

優斗「大丈夫だ」

シヤドウ鴨「なんだったんだ？」

優斗「さあね」

シヤドウ鴨「二重人格ってやつか？」

優斗「あらまあ勘が冴えてらっしゃる」

蓮「だが俺の知ってる二重人格とは違う気がする」

優斗「俺のはちよつと特殊なんだよ」

悠『なめんなよ』

優斗「なめんなよって言ってるぞ」

竜司「なんだそりゃ」

蓮「・・・！うぐ！うがああああ」

蓮が突然苦しみだし、皆が見ると顔に仮面が現れていた。顔に現れた仮面をはがすとそこにはアルセーヌがいた！

アルセーヌ「我が名は、逢魔の略奪者「アルセーヌ」！我はお前に宿る反逆の魂お前が望むなら、難局を打ち破る力を与えてやってもいい」

蓮「死んでたまるか」

アルセーヌ「フン、良かろう」

シヤドウ鴨「先手必勝だ傭兵たちやってしまえ！」

蓮はいとも簡単に倒してしまった

シヤドウ鴨「おのれ！」

竜司「オラア」

シヤドウ鴨「ぐふう」

優斗「早く出ろ！」

全員牢屋から出て、扉を閉めた

優斗「鍵を閉めるぞ！」

竜司「鍵!? 鍵なんてどこに・・・」

優斗「さつきくすねておいた」

竜司「お前らなんなんだよ、いったい、おかしくなるし変なのだし・・・」

優斗「今言う時間はねえ、とりあえず逃げるぞ」

第五話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第三話』より）

「炎の悪魔」

優斗「とりあえず逃げるぞ」

シャドウ鴨「貴様ら！こんなことしてただで済むと思うなよ！」

優斗「じゃあなバ鴨志田」

シャドウ鴨「何をしている！傭兵！追いかける！」

優斗「あの鎧の化け物、傭兵だったんだ」

蓮「余裕あるなら本気で走れ」

少し奥に行くと、右手側に橋があるが上がりきっており渡れなく。左側は檻ばかりで道はない。正面は行き止まりという、もはや下を泳ぐしか・・という状況だった。まあ泳いだら溺死だな

？「おい！」

その声があったのは一番奥にある檻だった

竜司「ん？」

？「生まれ！」

竜司「なんだ？この猫？」

そう檻に入っていたのは、頭が大きく後ろ足だけで立っている猫らしき何かだった
モルガナ「猫じゃない！俺はモルガナだ！」

蓮「止めたつてことは何かあるんだろ？」

モルガナ「ここから出してくれよ、お前たちは城の兵士じゃないだろ？」

優斗「鍵は？」

モルガナ「そこにある」

優斗「ザルすぎんだろ・・・」

モルガナ「ここから出たいんだろ？出してやるから、この牢屋から出してくれ」

蓮「・・・出そう、逃げる手がかりだ」

竜司「はあ・・・仕方ねえか」

モルガナを外に出した

モルガナ「いやーシャバの空気はうまいぜ」

竜司「どうするんだ？」

皆が間に上がっている橋の前の鴨志田像の顎をさげた。すると橋が下がって渡れる
ようになつた

モルガナ「まず・・・つてもうやってるし！」

竜司「何でわかったんだ？」

優斗「なんとなく」

蓮「こつちでいいんだよな？モルガナ」

モルガナ「あ・・ああ、そつちだ」

蓮「行こう」

その頃の担任の川上先生

川上「・・・もう四限じゃない。一体何してるのかしらあの子たち」

戻って優斗達

衛兵「・・・！お前たちが侵入者か！」

竜司「う、うわあ!!やべえ、きたあー!!」

モルガナ「ちっ・素人め!じつとしてろ!来い!ゾロ!」

竜司「お前もそれ出んのかよ!」

蓮「俺もやる!アルセーヌ」

悠『なあ』

優斗「どうした？」

悠『もう一回やらせてくれないか?』

優斗「さつき出オチしたばっかだつてのに、よくそんなことが言えるな」

悠『さつきみたいなことにはならねえ』

優斗「よし！わかった！ペルソナでも出してみる！」

悠「ペルソナでも何でも出してやるぜ！」

竜司「優斗!?また変わった!？」

モルガナ「おい！どういうことだ!？」

優斗『今回は任せたぞ悠!』

悠「おい、ペルソナあ。居るんだったら力かせよ。あんなクズの手下なんかによお。

逃げるのは嫌なんだよ」

ペルソナ? 「フフフ、そうか、俺の力が欲しいのか?」

悠「ああ、そうだ。こんな奴らぶつ飛ばして俺たちはもつと先へ行く!」

ペルソナ? 「ククク、いいだろう!ならば突き進む信念と共に俺の名前を叫べ!」

悠「イフリートオオオオオ!」

その時、悠は現れた赤のメッシュが入った白い仮面をはぎ取りペルソナが発現した

モルガナ「なにいいいい!?!ペルソナ!?!」

悠「これで俺も戦えるぞ」

蓮「行けるな?」

悠「もちろんだ」

優斗『相手はジャックランタンってやつとインキュバスだ』

モルガナ「いいか？戦いで必要なのは相手の弱点を突くことだ！こんな風に！ゾロ、ガルだ！」

モルガナはジャックランタンの弱点を突き、コカした

モルガナ「敵の弱点を突いてコカす、そしてそのすきにもう一度動く！基本中の基本だ！」

モルガナはジャックランタンにとどめを刺した

蓮「アルセーヌ！エイハだ！」

インキュバスにエイハを当てた。だが、弱点ではなかったようだ

蓮「弱点じゃなかったか」

悠「いや、まかせろ！イフリート！突撃だ！」

インキュバスを倒し戦いに勝利した

蓮「ん？アルセーヌがスラツシユを覚えたみたいだ」

悠「俺はとりあえず優斗と変わる」

目が赤から黒に戻った

優斗「終わったか」

竜司「本当になんなんだ!?!お前ら!?!」

蓮「とりあえずここから出ないと」

モルガナ「ああ、先を急ぐぞ」

竜司「・・・わかったよ」

先に進んだ

竜司「？ちよつとまって」

蓮「どうした」

ねえ
竜司「この牢屋に入れられているやつどつかで見たんだよ、くそパニクって頭が回ら

モルガナ「ほかのやつらの心配してる場合かよ、それにそいつは」

兵士「見つけたぞ！」

モルガナ「言わんこつちやねえ」

悠『変われ！』

優斗「わかつてる」

蓮「迎え撃とう」

モルガナ「お前がぶれない奴でよかったよ」

悠「俺もやるぞ」

モルガナ「あつちもやる気みてえだ」

優斗『相手はピクシーが二体だ お前エイハ使えるんだろ？こいつは怨念が弱点だ』

悠「蓮！エイハを使い！こいつらの弱点だ！」

蓮「ホントか？」

悠「信じろ」

蓮「・・・わかった」

悠「片方は任せろ」

蓮「エイハ！」

ピクシーを二体倒した

悠「俺もエイハ！」

二体のピクシーを倒した

蓮「どうして弱点をしかった」

悠「ここから出てからでいいか？今は出るのが優先だ」

蓮「わかった」

モルガナ「新手が来る前に逃げるぞ」

竜司「もうわけわからんねえ」

階段を駆け上がる

モルガナ「ここが正面ホールだここを通り過ぎたら出口は近いぞ」

優斗「逃げるんだよ！スモーカー」

竜司「何言ってるんだ？てかいつの間に戻ったんだよ」

優斗「わからなくてよろしい」

モルガナ「着いたぞ！」

竜司「やつとか！助かった！」

竜司が右奥の扉を開けようとするが

竜司「ん？あかねえ！テメエだましやがたのか!？」

優斗「いやこつちだろ。ホールはこつち方向に扉あつたし」

モルガナ「ああ、そつちだ」

竜司「あ、おい！まてよ！」

蓮「行こう」

中に入った

竜司「ここからどうやって出んだ？」

モルガナ「これだから素人は・・・」

蓮「通気口か」

モルガナ「その通り、お前やつぱり筋がいいな。外までしつかり通じてるぜ」

優斗「もう網は外しておいた」

モルガナ「早くね!」

優斗「こんなところも出るぞ、モルガナも出るだろ?」

モルガナ「いや、お前たちだけで帰ってくれ、オレはやり残したことがあるんだ」

蓮「捕まるなよ」

モルガナ「お前からこそな」

優斗「俺ちよつとモルガナに聞きたいことあるから先行つててくれないか? てか行け」

竜司「すぐ出て来いよ30秒は待ってやる」

蓮達は外に出た

モルガナ「聞きたいことってなんだ?」

優斗「俺がさ、この世界のやつじゃないって言ったらどうする」

モルガナ「言ってる意味が分かんねえんだが」

優斗「俺はこういうところをパレスっていうのもメメントスも知ってるさっきのシャドウの弱点教えたのも俺だ」

モルガナ「・・・じゃあなんだ?何が言いたい」

優斗「割と単純だけどこの中で一番勘が良いのはお前だと思ってる。でも勘違いなんかされても困る。これだけ言っておく俺は別に敵なんかじゃねからな」

モルガナ「言いたいことは分かった、だが俺に言つてよかつたのか？」
優斗「いや、どつちにしろそのうちバレる、おれは面倒なのが嫌いなだけだ。じゃあな」

俺も外に出た

モルガナ「あいつら・・・使えそうだな、だが優斗は要注意だな」

パレスから出た。そこは竜司達と路地裏に入ったところの通りだった

竜司「俺らどうなった？」

異世界ナビ「現実世界に帰還しました。お疲れさまでした」

優斗「出れたっほいな」

竜司「城とか、鴨志田とか、妙な猫とかどうなつてんだよ」

蓮「優斗なんであの時弱点がわかつたんだ？」

優斗「まだ言えない」

蓮「どうしてだ？」

優斗「後ろ見ても」

蓮「?・・・!？」

強気な巡查「ここで、一体何をしている？」

後ろには二人の警官がいた

蓮「いや、その・・・」

強気な巡査「さぼりか？」

竜司「ちげーよ」

優斗「面倒だなもう行こう」

強気な巡査「どこに行くつもりだ？」

優斗「学校だよ学校」

強気な巡査「学校には、今何をしてたか言ってもらわなければ連絡せざるを得ないぞ」

優斗「どっちにしろするんでしょ？それに言っても信じて何てくれないだろうし」

弱気な巡査「だったら今すぐ行くといい」

優斗「わかってますって、行こう」

蓮「良かったのか？」

優斗「さっきも言っただろ？あいつらは言っても無駄だどっちにしろ連絡されるし、

だったら学校に行つたほうがいい」

竜司「だったら急いだほうがよくね？」

優斗「手遅れだよ」

蓮「一応走ろう」

第六話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第四話』より）

「ジヨジヨの名言」

学校について

竜司「マジかよ」

優斗「普通だな」

蓮「とりあえず入ろう」

指導教員「今頃登校か？もう昼だぞ、三人そろって」

優斗「すいません」

指導教員「補導の連絡、あったぞ」

優斗「してもわからないし、何かヤッてるのか思われるの嫌だし」

指導教員「竜司、お前が一人じゃないのは、珍しいな。まあいい履き替えて指導室に
来い」

鴨志田「ん？どうしたんですか？」

竜司「鴨志田!？」

鴨志田「呑気だな、坂本。陸上やってた時とは大違いだ」

竜司「うるせえ！テメエが」

指導教員「鴨志田先生になんて口きいてんだ!? 退学になりたいのか!」

鴨志田「私も配慮が足らなかつたので、ここは両成敗ということだ」

指導教員「え? いや、鴨志田先生がそうおつしやるなら」

優斗「竜司もここでキレるのは得策じゃない」

蓮「面倒なことは避けよう」

優斗「逆に鴨志田を利用して今は入ろう」

竜司「わかつたよ」

鴨志田「とりあえず川上先生が君（優斗）と君（蓮）を待つてると思うから行きなさい」

い

蓮「行こう」

優斗「ああ（・・・こいつ職員室知らねえよな?）」

職員室へ

川上「あなたたちねえ、何してたのよ」

優斗「すいません」

川上「まあいいわ、あなたは遅刻の報告よねもう行つていいわよ」

優斗「はい」

俺は職員室から出て教室に向かった

優斗「さてと、どうしようか」

杏「一体何してたの？あんな」

優斗「何の話？」

杏「とぼけないで」

優斗「わかった、俺は何をしていたのか全部話すぞ」

杏「ええ」

優斗「ありのまま午前中にあつたことを話すぞ。杏と別れたとき俺は転校生と一緒に竜司と近道を通つたんだ。そしたら学校があるはずの場所には城があつたんだ。そして俺たちは牢屋に入れられ（中略）そして俺たちは逃げてここに帰ってきた。何を言っているのかわからねえと思うが、俺も何が起こっているのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった。催眠術みたいなチャチなもんじゃねえ。もつとおかしなモノの片鱗を味わつたぜ」

杏「へ、へえ」

優斗「この話に嘘は1%も入っていません。でも0.9以下はどうかね・・・」

杏「あんた保健室いくか、病院行くか、家帰つたほうがいいんじゃない？」

優斗「もうチャイムなるぞ」

杏「う、うん（手遅れか・・・）」

杏は席に着いた。そしてチャイムがなり、川上先生と蓮が入ってきた

「まさかうわさの？」

「いきなり大遅刻とかやつばヤバいんじや」

「普通に見えるけど？」

「目え合わすと殴られるかもよ」

川上「静かに。えっと転入生を紹介します雨宮 蓮君。今日は体調不良ということで
午後から出席してもらいました」

蓮「よろしく」

川上「えっと、席は、あそこ（杏の後ろ俺の隣）ね。悪いけど、近くの人、今日は、教科書見せてあげて」

優斗「よう」

蓮「同じクラスだったのか」

優斗「教科書は見せてやるよ。ほかのやつには頼みにくいと思うし」

蓮「・・・すまない」

優斗「別にいいって、しかもあんなところから逃げたばかりだぞ。この中で一番信頼
あるだろ？」

クラスのみんな「あいつもそっち系なの?」「あんな奴と知り合いつてことはアイツもやばいんじゃないか」

蓮「ホントごめん」

優斗「・・・実は俺も前科あるんだよ」

蓮「え!?!」

優斗「おれはあんまり大ごとにならなかつたからみんな知らないけど」

川上「あんたたち遅刻組はなんでそんな元気なのかしら」

優斗「すいません」

川上「そういうえば来週は球技大会があるから頑張つてね」

今日は終わり

優斗「蓮帰ろうぜ」

蓮「う!?!」

優斗「どうした!?!」

蓮「いや大丈夫だ。少し目眩がしただけだ」

優斗「そうか」

竜司「おい」

優斗「ん? ああ、竜司か」

竜司「すまん。お前ら、ちよつと話したいことがあるんだ。屋上まで来てくれ、先に
行つとくから」

竜司は屋上上がつて行つた

優斗「行けるか？」

蓮「問題ない」

屋上に来た

竜司「きたな。川上になにか言われたんだろ？」

蓮「あまり仲良くするなと」

竜司「だろうな。そーいやお前、前歴あるんだつてな。どうりで肝がふてえわけだ」

優斗「俺も前科あるんだけど」

竜司「お前もかよ、初めて聞いたわ」

蓮「忘れていたが、優斗」

優斗「なんだ？」

蓮「どうしておまえは、あの敵の弱点を知っていたんだ？それにどこにどのギミック
が、あるかをわかっているようにお前はいつも動いている。お前は一体何なんだ？」

第七話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第五話』より）

「優斗の過去」

優斗「聞かれなかったらそのまま帰ろうと思ってたんだけど」

竜司「は？ どういうことだ？」

蓮「モルガナがなにをすればいいか言う前にやったり牢屋の中でも時間稼ぎのようないこともしていた。ハッキリ言うとな何をすればいいかわかっているというよりわかりすぎているように見える」

優斗「じゃあ真面目に言うけど普通なら信じないぞ」

竜司「あれ見た後じゃ何言われても驚かねえよ」

蓮「言ってくれ」

優斗「俺はな、この世界の人間じゃねえんだ元々」

竜司「どういうことだ？ あの猫みたいなものか？」

優斗「ライトノベルって知ってるか？」

蓮「見たことはないがな」

優斗「あれでよくある。異世界転生ってやつだ」

竜司「は？」

優斗「俺がいた世界ではこの世界はゲームだった」

蓮「だから分かったと。それにしても覚えすぎてはしないか？」

優斗「覚えてるもんは覚えてるんだよ」

竜司「それじゃあ、悠だよな？あいつは何なんだ」

優斗「変わるから聞いてくれ」

悠「よう」

蓮「お前は悠だよな」

悠「そうだ」

竜司「優斗の言ってたことは本当か？」

悠「本当だ」

蓮「お前と優斗は全く別なのか？」

悠「ああ。てかもういふことないから終わりでよくな」

蓮「そうだな」

竜司「じゃあ今日はとりあえず帰るか」

蓮「そうだな」

優斗「蓮は四軒茶屋駅だろ？俺家近いから一緒に帰ろうぜ」

蓮「また明日なえっと」

竜司「そういや自己紹介してなかったか、俺は坂本竜司だ」

蓮「おれは雨宮 蓮だ」

竜司「また明日な」

竜司は帰って行った

優斗「蓮、帰ろう」

蓮「ああ」

俺たちも帰って行った

悠『明日は朝迎え行こうぜ』

優斗「ああ」

お母さん「お帰り〜」

優斗「母さん」

お母さん「何？」

優斗「俺がさもし前科あるやつといたらどう思う？」

お母さん「あなたが一緒にいるっていうことはその人が悪い人じゃないと思ってるんでしょ。どうも思わないわ」

優斗「そうか、分かったよ母さん」

俺は一日を終えた

優斗「行つてきまーす」

お母さん「はーい、いつてらっしやーい。あ、傘持つてる〜?」

優斗「持つてるよ。いつてきまーす」

悠『蓮のどこ行くんだろ?』

優斗「行くよ」

ルブランについた。蓮を呼ぼうと大口を開けて叫ぼうとすると、入り口から出てきた

蓮「あ」

優斗「おはよ」

蓮「ちよつと待つて」

蓮は入り口の札を「CLOSED」から「OPEN」にした

蓮「行こうか」

優斗「俺がいることに関しては?」

蓮「一緒にサボろうとか?」

優斗「そんなわけあるか!」

惣治郎「なんだ!?出ていきなり騒ぎやがつt・だれだ?」

蓮「友達?」

惣治郎「何で疑問形なんだ？」

優斗「友達ですよ」

惣治郎「それは上っ面だけじゃねえよな？」

優斗「何当たり前なこと言ってるんですか？」

惣治郎「こいつが前科持ちつてのも知ってんだろ？」

優斗「そうですよ」

惣治郎「なら大丈夫だな。こいつのこと頼むぞ」

蓮「行つてきます」

駅に着いた

優斗「今、お前が俺に対して何を考えているかは、わからねえ。だが俺はお前たちの味方だ。俺は少し前の廃人化の犯人も知っている。」

蓮「ならどうして何もしない？」

優斗「勝てねえからだ。経験の差がありすぎるから、今は手を出さないと出せない」

蓮「そうなのか」

優斗「というか俺がいる時点でおかしいのにこれ以上捻じ曲げられん」

蓮「まあ、仕方ないか」

優斗「俺は今日もう一回あそこに行くつもりだぞ、少なくとも竜司は」

蓮「その時は俺も行く」

優斗「どつちにしろ放課後だ」

蓮「それまでは普通に、だよな？」

優斗「そうだ」

第八話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第六話』より）

「骸骨覚醒」

午前

牛丸「私は公民の牛丸だ。今年一年、お前らに社会ルールを教える」

優斗「あの先生は一番気を付けたほうがいい理由は」

牛丸「初授業でいきなりおしやべりか」

こつちを見ながら喋る牛丸

優斗「こういうこと」

牛丸「ならそつちの、あく中村とか言ったか？この問題を解いてみる」

ギリシアの哲学者プラトンは人の魂を三つに分類した

人の魂は意思と欲望と？

優斗「知性です」

牛丸「正解だ。なんだ知っていたのか。次からは喋っていたらチョークが飛んでくる

と思え」

蓮「すまない」

優斗「これくらい大丈夫だ」

授業が終わり、放課後

鴨志田「よう、高巻じゃないか車に乗ってくか？近頃物騒だしな」

杏「いえ、今日はバイトで撮影が・・夏の特集号で、外せなくて・・」

鴨志田「おいおい・・モデル業もいいが、ほどほどにな。体調が悪いと言つてたじゃないか。盲腸の疑いだっけ」

杏「忙しくて、ちゃんと病院に行けてなくて。ご心配かけて、すみません。」

鴨志田「親友は練習ばかりで、寂しいだろう？悪いと思つてさっそたんだが。ああそうそう、例の転校生、気を付けたほうがいいぞ。前歴があるからな。お前にもしものことがあつたら」

杏「ありがとうございます」

鴨志田「ちっ」

優斗「あのバ鴨志田は避けたほうがいいな」

校門

竜司「よう」

優斗「そんなに気になるのかあの城が」

竜司「そうだ」

優斗「なら異世界ナビ使えよ」

竜司「異世界ナビ？」

優斗「あの目のアイコンのアプリだよ」

俺達は路地裏に入って行った

優斗「ここならいいだろう」

まず、アプリを開き、こう言った

優斗「鴨志田、学校、城」

異世界ナビ「候補が検索されました。ルート検索します」

優斗「こうすればいい」

蓮「今から行くのか？」

竜司「今、行きたい」

蓮「行けばいいんだな。わかったよ」

鴨志田パレスに入った

竜司「本当に入れた！・・・！蓮！その恰好！」

蓮「服が変わってる!?!」

優斗「もしかして」

悠「出ればいいのか、てかもう変わってるし」

竜司「お前もかよ・・・」

悠「もはやあきれてんな」

モルガナ「お前たち何でまたここに」

竜司「忘れろってほうが無理だろ」

優斗「俺が言ったこと覚えてるか？」

モルガナ「覚えてる」

優斗「つまり来ないといけなかったってこと」

モルガナ「なら俺が何してるかもわかるな？」

優斗「もちろんお宝だろ？」

モルガナ「ここまで来たらとことん付き合ってもらおうぜ」

竜司「意味が分からねえ」

竜司たちに諸々説明した

蓮「そういうことか」

竜司「ならついでにやりたいことがある。昨日の俺たち以外の捕まってるやつら多分
バレー部だ」

モルガナ「だがそいつらは鴨志田の認知だ。連れて帰ることなんてできねえ。だが顔を
覚えたらいいだけだな」

竜司「わかってる」

優斗「じゃあ行くか」

その後、レベル上げをしながら進んで行き、セーフルームで少し休む

竜司「そういや、こんなの持ってきたんだが使えるのか」

モルガナ「銃か」

優斗「まさか、お前・・・」

竜司「モデルガンだからな!？」

モルガナ「さっき言った通りこの世界は認知の世界だ。相手が銃と認識すれば銃にもなる。これは使えるぞ」

優斗「お前ナイス」

竜司「一応持ってきてよかったぜ」

何てこともあった。あと蓮がピクシーを手に入れた。そして・・・

竜司「これで全員の顔を覚えたぞ」

モルガナ「これでさっさとずらかるぞ」

玄関ホール

シヤドウ鴨「また貴様らとはな」

優斗「この学校がお前の城か・・・なめ腐ってんじやあないぞこのゲスがあ!!!」

シヤドウ鴨「こいつらをひつとらえろ!!」

悠『でるか?』

優斗「まだだ」

シヤドウ鴨「ほほう、あの裏切り者のエースがな」

蓮「裏切りのエース?」

シヤドウ鴨「これは驚いた。知らないまま付き合っていたのか。仲間を裏切っているのうと生きている」

坂本「違う!」

シヤドウ鴨「私を手を下すまでもない。やれ」

坂本「あんなもん練習じゃなかった! 体罰だ! テメエが、陸上部を嫌ってやったんだろが」

シヤドウ鴨「実績上げるのはバレー部だけで十分だった。邪魔だったんだよ! あの顧問も正論いって楯つかなければ、エースの足つぶすだけでよかったものの」

竜司「何、だと・・・」

シヤドウ鴨「もう一本も折ってやろうか。どうせ学校が正当防衛にしてくれるからなあ」

竜司「また・・・俺は・・・負けるのか?」

蓮「これでいいのか!？」

優斗「こいつをぶっ倒したいんだろう?このままでいいのか!？」

竜司「いいや・・・ダメだ」

シャドウ鴨「そこでおとなしく見ているといいクズを庇って犬死する、救えないクズどもをな」

竜司「救えないクズは・・・おまえだ・・・鴨志田あああ!!!」

シャドウ鴨「何してる、黙らせろ!」

竜司「にやけた面で、こつち見てんじやねえよ!・・・!ウグ!グアアアア・アアア!!!」

竜司の顔にドクロの仮面が出た

兵「貴様に何ができる。黙ってみているがいい!!」

竜司は仮面をはぎ取りペルソナが出現した

シャドウ鴨「こいつもだと!？」

竜司「これが、俺のペルソナ・・・こいつは良い・この力があれば、借りを返せる」

優斗「さつきは竜司の悪いところ言つて突き放すつもりだったんだろうが俺たちには逆効果だぜ!何せ蓮は前科持ち、そして俺も前科持ちなんだよ!!つまり!むしろ親近感がわいて、結束力が高まったと俺は思っている!」

蓮「その通りだ」

モルガナ「これはすごいことになってきたな」

竜司「行くぞ！」

悠「二体の馬は電撃が弱点だ。でかいやつは任せろ」

竜司「ジオ！」

二体をこかした

悠「アギ！」

最後の一体をこかした

蓮「総攻撃だ！」

総攻撃で相手を全員倒す

優斗「よし逃げるぞ」

竜司「いやこいつら倒してから」

優斗「ペルソナが発現したては気力の消費が激しい、退路があるうちに引くべきだ」

竜司「わかったよ」

皆で全力で逃げた

優斗「取り合えず帰ろう」

モルガナ「ああ帰ったほうがいいだろう」

蓮「お前もこっちにきたらどうだ？」

モルガナ「なに？」

優斗「俺たちが入れるなら逆もあるだろ」

モルガナ「・・・気が向いたらな」

蓮「じゃあな」

モルガナ「ああ」

俺たちはパレスを出た

第九話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第七話』より）

「遅刻だーーーーー!!!」

竜司「戻ったな」

蓮「みたいだな」

優斗「とりあえず、話聞くのは明日にして。今日は帰ろうぜ」

蓮「そうだな、じゃあ竜司、また明日」

竜司「ああ、明日も来いよ」

優斗「あ」

竜司「どうした？」

優斗「メアド交換しない？」

蓮「連絡手段はあったほうがいいな」

竜司「だったら交換しとこうぜ」

優斗「グループは俺が作っておく」

竜司「わかった、じゃあまた明日な」

竜司と別れ蓮を送った。そして夜

SNS（スマホのL〇〇Eみたいなもん）

竜司「ここに連絡でいいんだよな、届いてるか？」

優斗「俺は問題ない」

蓮「届いてる」

竜司「明日は頼んだぜ」

蓮「ああ」

竜司「やっぱ頼りになるぜ」

優斗「あんなクズやろうから救ってやらねえとな」

スマホを閉じた

優斗「さてと、次は杏か。どうしよ属性被るんだけど。まあどうにかなるか」

そのまま寝た。朝起きるとSNSで竜司たちが、寝てる間にしゃべっていたらしい

竜司「そーいやあよ、あの目みたいなのが……異世界ナビとか言ったかあれ何なんだ？」

蓮「俺にもわからない」

竜司「あれ使ったから、あんなところ入ったんだよな？ いつの間にか入ってたよ。俺のにも」

蓮「あそこに行けるんなら、利用するだけだ」

竜司「そーいや優斗は？」

蓮「寝てるんじゃないか？」

竜司「そうか、じゃあ、俺らも寝るか」

蓮「おやすみ」

竜司「おう」

ここで終わっている

優斗「俺が寝た後か」

悠『今何時だ？』

優斗「え？今は、8・・・時？」

悠『終わったな＼（o_o）／オワタ』

優斗「NOOOOOOOOOOOO」

悠『遅刻したくなかったら、早く準備したほうがいいぞ。怒られるのはお前だからな。25分までに着くように頑張れ』

8時10分26秒

優斗「終わったけど、電車ねえぞ!？」

悠『タクシーしかないだろ、遅刻よりましと思うが?』

優斗「背に腹は代えられんか・・・!」

タクシー会社に電話をかけ外に出る

8時11分59秒

奇跡的に早くタクシーがついた

優斗「秀尽学園まで！」

運転手「わかりました」

8時23分50秒

運転手「つきましたよ、846円です」

優斗「1000円をお願いします」

運転手「はい、お釣りね。行ってらっしゃい」

優斗「はい！」

8時24分30秒

優斗「セーフ」

蓮「寝坊か？」

優斗「危なかった」

悠『よかったな、遅刻ギリギリだったぞ』

優斗「何で起こしてくれなかった？」

悠『いやな？起こそうとはしたんだけど、何言っても起きないし。あ母さんは、いび

き聞こえたから寝てるだろうし』

優斗「体を動かせばいいだろ？」

悠『変なところで起きられたら面倒だし、電車とか』

優斗「そか」

HR

川上「今日は球技大会だから今からみんなで着替えてね」

体育館

鴨志田のスパイクが三島の顔面にあたってしまった。鴨志田が驚いていたのでわざとではないと思う。多分。アニメは見たことないけどゲームは興味なしみたいな顔してたんだがな？俺がいるから変わったのか？

鴨志田「すまん。保健委員、三島を保健室に連れて行ってくれ」

竜司が、飛んできたボールをコートに投げ試合がまた始まった

竜司「ちよつと行こうぜ」

優斗「ああ」

中庭

竜司「アイツ現実でも王様気取りかよ。」

優斗「三島は、もうあきらめてんな」

竜司「バレエ部のやつらは今日全員いるはずだから」

優斗「まず、どこから行く？」

竜司「まずD組のやつからだな、ぱっと思いついたただけだが」

優斗「俺が行くよ、蓮は聞きにくいだろうし」

蓮「ああ、頼む」

2—D

部員A「なんだよ、三人そろってサボりかよ」

竜司「城にいたやつだ」

部員A「お前ら、何の用だよ」

蓮「その怪我は？」

部員A「部活だよ！今は関係ないだろ！」

竜司「鴨志田のせいだろ？」

部員A「ちげえよ！これは俺の不注意で・・・」

優斗「よし、お前に選択肢をやろう」

部員A「え？」

優斗「俺たちを信じてこの地獄を抜け出すか、言わずにあのクズの言いなりになるか。

選べ」

部員A「・・・俺には・・・言えねえ」

優斗「そうかい、じゃあ。卒業まで言いなりの奴隷だな」

蓮「いいのか？」

優斗「これ以上は聞けねえよ」

竜司「じゃあ次か」

優斗「いつその事、手分けして探したほうがいいだろう」

竜司「だな。俺は実習棟で部活前のやつ捕まえる、教室棟は任せる」

優斗「すまん。俺どうしても聞きたい奴いるんだ」

蓮「お前が言うなら、何かあるんだろ？」

竜司「じゃあ蓮は3-Cのやつに行つてくれ」

優斗「じゃあお互い頑張れよ」

みんな散開した

優斗「じゃあいくか志保のところ」

第十話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第八話』より）

「志保の為に」

優斗「とりあえず一階か」

一階に降りると、目の前で志保が杏と話していた

優斗「（いたいた）えっと、あんたが志保でいいんだよな？」

志保「え？」

志保の目には、まだ目に生氣がある

杏「どしたの？いきなり」

優斗「ちよつと聞きたいことがあるんだ」

志保「大丈夫だよ、杏」

優斗「すぐ戻るから」

校舎裏

志保「ここまで来て、何の話？」

優斗「実は鴨志田のことなんだが」

志保「!？」

優斗「思ったよりも反応がデカかったな」

志保「私は何も知らないよ・・・」

優斗「あんた以外にも聞いてるから、喋りたくなかったら喋らなくていい。まあ喋るとは思っていないけど」

志保「・・・あんたなんか、どうにかできるわけないじゃない」

優斗「できるって言ったら信じるか？」

志保「・・・信じるわけないでしょ」

優斗「俺らには、秘策がある。まあ、ぶっ飛びすぎて信じようとも思わないと思うがな」

志保「・・・」

優斗「まあ、鴨志田に言いなりになってると近いうち、大切な何かを失うぞ」

志保「・・・どういう意味」

優斗「とにかく鴨志田から逃げろ」

志保「・・・信じられないわ・・・」

優斗「ああそうかい、それじゃあな」

志保「・・・」

校内放送「すべての試合が終了したので皆さん着替えて下校して下さい」

S
N
S

竜司「時間切れか、どうだった？」

蓮「察しろ」

竜司「だめだったか」

優斗「俺はできることはしたが変わるかはわからない」

蓮「優斗でダメなら俺達でも駄目だ」

竜司「とりあえず集まるか、中庭に」

中庭

中庭に入ろうとすると、蓮がいるんだが何故か杏がいる

杏「なんか変な噂あるし」

優斗「どうした？」

竜司「そいつに何の用だ？」

竜司!まさか後ろにいるとは・・・

杏「そつちこそ何?違うクラスじゃん」

竜司「たまたま知り合っただよ」

杏「たまたまって、ってまさか。優斗が言ってたやつ?」

優斗「当ったり」

竜司「はあ!?!お前言ったのかよ!」

優斗「いや、なんつうか、信じないと思ったし、ほら、言いたくなるじゃん」

竜司「その気持ちはわかるけどよ・・・」

杏「志保とかいろんな人に鴨志田先生のこと聞いてるみたいだけど、何するつもり？」

優斗「アイツに今までの罪を吐かせるって言ったら信じるか？」

杏「そもそも、あんたのあの話自体信じてないから」

優斗「なら一つだけ忠告しておく」

杏「何よ」

優斗「志保に何かあったら支えないといけないのはお前だからな」

杏「当たり前よ、友達を支えあうものでしょ」

優斗「わかってるならいいが、お前はむしろ試練かもな」

蓮「なんかシリアスみたいになってるみたいだけど、杏は何の用事できたんだ？」

杏「え、あつそうだった。あんたたちの噂が相当広まっているから。みんなあんたらに協力しないよって言う忠告しに来たのよ。それじゃあバイバイ」

杏は中庭を出た

竜司「相変わらず気のつええ女」

蓮「顔見知りか？」

竜司「同じ中学ってだけだ」

蓮「そうなのか」

竜司「ていうか話脱線してるけど、お前ら聞き込みはどうだった？誰かの名前とか」

蓮「三島とかいう名前を聞いたぞ、特別な指導がうんたらかんたらって」

竜司「特別な指導ねえ」

優斗「一回聞いたほうがいいだろうな」

第十一話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第九話』より）

「普通に玄関にいた」

下駄箱

竜司「話、あんだけど」

三島「坂本？」

蓮「ちよつと聞いてくれ」

優斗「すぐ終わるから」

坂本「ハッキリ言うぞ。その怪我、鴨志田にやられたんだろ？」

三島「そ、そんなんじゃないよ！」

すると二階から降りてきた鴨志田が近づいてくる

鴨志田「何をしてるんだ？それに、三島は今から部活だろう？」

三島「今日はちよつと調子が悪くて・・・」

鴨志田「じゃあやめるか？」

三島「!？」

竜司「具合が悪いつて言ってるだろ！」

鴨志田「来るのか？来ないのか？」

三島「行きます・・・」

鴨志田が今度は竜司を睨みだす

鴨志田「何か問題起こせば、お前、今度こそ学校にいられなくなるぞ？」

竜司「クソッ」

鴨志田「お前もだ、大人しくしてると、校長先生が言ってたんじやないのか？」

蓮「今から帰るところだ」

鴨志田「なら早く帰ることだ。よくない噂が広まって、生徒も不安がるしな」

竜司「そりやあテメエのせいだろう？」

鴨志田「フン・・・話にならないな。行くぞ三島。秀尽学園は、志のある生徒が学ぶ場所。相応しくない生徒に、居場所があると思うなよ？」

鴨志田は去って行った

竜司「くっそ、今に見てろよ・・・！」

三島「無駄だから」

竜司「あ!？」

三島「体罰の証明なんて・・・意味ないんだよ」

優斗「どうしてだ？」

三島「皆知ってんのさ、校長も、親も知ってて黙認してるんだ」

竜司「嘘、だろ・・・」

優斗「本当だよ」

蓮「本当なのか？」

優斗「だから俺たちでやるんだよ。大人が何もしないときは、子供がやらないとな」

蓮「向こうの世界か」

優斗「ああ」

三島「何を言ってるんだ？」

竜司「こつちの話だ。聞かなくてもいい、てかむしろ聞くな」

優斗「お前は、鴨志田がいなくなるって言ったら信じるか？」

三島「信じられない・・・けど、できるんなら・・・やってほしい」

優斗「よく言った！」

三島の背中を叩く

優斗「そう言ったのは、お前だけだぞ！みんな諦めきついていたからな」

三島「で、できるんだよな？」

優斗「間違いなく」

蓮「そろそろ行かないか？」

優斗「そうだな、それじゃあな三島」

三島「う、うん・・・」

中庭

優斗「とりあえずみんな動き回って疲れたろうし、様子見ないといけないから、今日は帰ろう」

蓮「やることやったな」

竜司「お前ら、風邪で休んだりするなよ！俺だけ違うクラスで分かりにくいんだからな」

優斗「わかってるって、ということでは今日は解散！」

竜司と別れ蓮を送った

悠『今日は波乱の一日だったな』

優斗「今日は疲れたから早く寝るわ」

・・・夢？真つ青の部屋だ。まるでベルソナーのベルベットルームみたいだ

イゴール「ようこそ我がベルベットルームへ」

ジュステイーヌ「あなたは・・・囚人ではないのですか」

カロリーヌ「どういうことだ？我々は客人一人一人につくのではないのか？」

優斗「あの、ちよつといいつすかね」

ジュステイーヌ「！なんででしょう」

優斗「客人のことはわからんが、さつき囚人と言ったのは、蓮のことか？」

カロリーヌ「たしか、そんな名前だったか、お前は知っているのか？」

優斗「知ってるもなんも、友達だぞ」

ジュステイーヌ「そもそも、どうして囚人から本人のことが分かったのですか？」

優斗「それは、この世界の人間じゃないもの」

カロリーヌ「どういうことだ？詳しく教えろ」

優斗「それはな（全略）っていうことだ」

ジュステイーヌ「にわかには信じられませんね」

優斗「こつちから言わせてもらったら、この世界が非常識だからな。一部の人を除いて」

イゴール「そろそろいいでしょうかな？」

優斗「構わないけど」

イゴール「では、これを」

イゴールが出したのは、漫画の単行本の1・5倍ほどの大きさの箱だった

イゴール「これは貴方様が来る少し前に、現れたものです。おそらく、貴方が持つべきものでしょう」

優斗「中見ていい？」

中を見ると

優斗「これ・・・銃か？」

イゴール「それは貴方様なら使い方がわかるはずです」

優斗「これはどこに置いてくれるんだ？」

イゴール「貴方様の机の上に置かせていただきます。」

優斗「わかった」

イゴール「ではこちらには定期的に来ることになりますが、まあ分かっていますしやるようなので説明は不要ですね」

優斗「うん、じゃあお休み」

第十二話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十話』より）

「モルガナ現実世界に進出」

悠が何か言ってるのをよそに優斗が起きた

優斗「……！今何時だ!？」

7時

優斗「よし」

悠『いやよく見ろ』

優斗「ん？……！針が……止まってやがる!？」

悠『スマホはどうだ？』

スマホを開くと

7時半

悠『危なかったな』

優斗「マジで心臓にわりい……時計壊れたか？電池が無くなったのかな……」

悠『どっちにしたって、帰ってからだろ。さっさと準備しろ』

さっさと準備していくぞ

授業中 SNS

竜司「証人探しただけどき、高巻から話聞けないかな？」

優斗「無理なことはない」

竜司「行けるってことか」

蓮「ならおれがやろうか？」

竜司「高巻はさ、バレー部の鈴井と友達なんだ」

優斗「俺昨日聞きにいったの鈴井だぞ？」

竜司「俺もだ」

蓮「スルーされたのは置いといて、だから高巻に聞くのか？」

竜司「そうだ。行けるんなら、頼んだ」

放課後

やばい腹痛い……トイレ後

優斗「はあくスツキリした」

悠『中庭見てみるよ』

優斗「？あれ、蓮達がいる」

中庭

竜司「クソ、どうなってやがんだ」

蓮「見つけたのか？」

竜司「見てわかんねえか？」

優斗「じゃあ、直談判にでも行くか？」

竜司「何でそうなんだよ、てかいつ来たんだよ」

優斗「今だよ」

蓮「脱線してるけど、これからどうするんだ」

優斗「向こうの鴨志田を倒せばいいんだよ」

竜司「その発想はなかった・・・けどアイツ倒してどうにかなるのか？」

モルガナ「やつと見つけた」

優斗「やつと来たか」

竜司「なんか聞こえなかったか？」

優斗「下見ろ、下」

モルガナ「上がるから」

モルガナが机の上に乗ってきた。その姿はおかしな姿ではなく、ただの黒猫だった

モルガナ「はあ、ワガハイに仕事させておいて、タダで逃げようなんて思うなよ」

竜司「その声、モルガナ!？」

モルガナ「来たてはいいが、お前らがどこにいるかわかんなかったから苦労したぞ」

竜司「黒猫になったか・・・まあ元から猫か」

モルガナ「猫って言うな！こっちにきたらこうなっただい！」

蓮「どうやってきたんだ？」

モルガナ「ワガハイレベルになると、自力さ。抜け道・・・かなり迷ったけどな」

竜司「つか、なんで猫で喋れんだよ!？」

モルガナ「しるか！」

竜司「お前らも聞こえてるか」

蓮「俺は聞こえてる」

優斗「モルガナが来たのは分かったが、何言ってるかさっぱりわかんねえ」

竜司「ボケなくていいぞ・・・」

優斗「ありや、ばれてたか」

竜司「バレバレだよ。そもそも最初に気付いたのテメエじゃねえか・・・」

モルガナ「それはともかく、オマエら、てこずってるみたいだな？やり方、教えてやってもいいぜ」

竜司「なんだ？教えてくれ！」

モルガナ「まあさつき言われたけどな、そいつに」

蓮「優斗が言ってるのはあってるのか」

優斗「それよりさ、今俺ら傍からみたら、猫と喋ってる変な奴だぞ」

竜司「……とりあえず、あんまり見られないところに行くか」

屋上

モルガナ「鴨志田のパレスからお宝を盗むんだ。お宝は歪んだ欲望からできているからそれを取り除けば……」

蓮「改心するってことか」

モルガナ「だが、他の欲望まで取ってしまうかもしれない。他の欲望まで取ってしまったら、その先にあるのは廃人化だ。それでもやるか」

優斗「その辺は大丈夫だ。シャドウを殺さない限り、廃人にならない」

竜司「もし殺しちまったら、どうするんだ」

優斗「あいつらはそこらへんは妙に硬い、それに体力がゼロになったからって死ぬわけじゃない」

蓮「ならやる以外に選択肢はなさそうだな」

優斗「アイツをぶっ倒してやろうぜ」

全員「おおー!!!」

優斗「モルガナの肉球めっちゃ気持ちいいぞ」

蓮「本当か？モルガナ触らせてくれ」

モルガナ「ワガハイを猫扱いするなああああああ」

第十三話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十一話』より）

「鈴井自殺」

SNS

竜司「ちよつと気になること聞いた。さつき話した鈴井、鴨志田と噂になってんだと」
蓮「心当たりあるのか？」

竜司「いやな？ 中学の時から知ってんだけど、鴨志田みたいなもの、絶対趣味じゃないぜ？ なんて噂なんのかな？」

優斗「鈴井と杏は友達だよな？」

竜司「ああ」

優斗「じゃあ、杏は鈴井のために、鴨志田と一緒になのかも。」

蓮「あるのかもな、そういうのも」

優斗「例えば、付き合う代わりに鈴井をレギュラーにしてくれみたいな」

蓮「考えるよりも聞いたほうが早いかもな」

校門

優斗「あ、ヤバッ」

蓮「?どうした?」

優斗「腹がいきなり痛くなってきて、すまん先帰ってくれ」

蓮「わかったじゃあな。また明日」

蓮と杏を一对一で合わせたいんじゃないやなくて、腹が痛いんだマジで

15分後

帰ろ・・・ん?

三島「鈴井・・・帰るの?」

鈴井「何」

三島「鴨志田先生が呼んでる、体育教官室だつて」

鈴井「先生、なんて?」

三島「・・・知らない・・・伝えたから」

鈴井が歩き出した

!!このままいかせたら、鈴井は・・・いかせたらダメだ!!!

優斗「いくな鈴井!!」

俺は鈴井の前に立ちふさがった

鈴井「何も知らないくせに・・・どいてよ」

優斗「知ってるさ、お前が今まで何をされてたか、今から何をされるかも、全部!!」

鈴井「どいてよ！」

鈴井を少しのすきまを抜けられてしまった

優斗「なに!?!」

鈴井「いいからどつかいてよ！」

優斗「こちとら元サッカー部だぞ！なめんな！」

そのあと俺らは学校を二周くらいした

優斗「お前・・・思った・・・より・・・体力あるじゃねえか」

鈴井「貴方だつて・・・いい加減あきらめなさいよ」

優斗「それは・・・無理・・・だね」

久しぶりにこんなに動いたから・・・体力が・・・

先生「おい！何そんなに走ってるんだ！」

優斗「先生!?!」

鈴井「！私は・・・逃げさせてもらうよ」

優斗「!?!おいちよつとま」

先生から逃げようとするが、すぐに腕を掴まれた

優斗「あ」

悠『終わったな／＼(^ o ^)／オワタ』

先生「話を聞かせてもらおうか？」

優斗「はい（；；ω；；）」

そしてご察しの通り先生に説教された

1時間後

クソツ反省文書かされた。しかも鈴井を助けられなかった。仕方ない・・・帰るしか・・・ないか。俺にできることといえば後は・・・鈴井の自殺はもう止められない領域まで入ってしまった、ならでできることは・・・そうだ！

次の日

優斗『そろそろだ。これのためにあえて遅刻で来て、めちやくちやふわふわの羽毛が入った枕10個入のビニール袋を準備しておいた。自分で受け止めろ？腕が折れるわ』
皆が騒ぎ出した。屋上の志保が目を閉じて、飛び降りる

優斗『今だ！』

俺はビニール袋を投げて上から志保が落ちてきた。しかし運悪く膝から下の部分が地面と激突してしまった。流石に範囲が狭かったか

杏「志保!!」

野次馬がたくさん来てしまった

杏「これって・・・何・・・これ」

優斗「ふわふわ羽毛入り枕10個入ビニール」

杏「いや、なんでこんなの持ってきてるの？」

優斗「昨日志保が鴨志田に呼ばれてたから、まさかと思ってね」

杏「？それだけでわかるの？」

志保「うう・・・」

杏「！志保」

志保「杏？・・・ごめん、私・・・もう・・・無理・・・」

杏「志保？志保！」

優斗「多分気を失ってるだけだと思うが、一応病院に連れて行ったほうがいいな」

救急車がついた

救急隊員「タンカ急げ！」

タンカに志保が乗った

救急隊員「誰か、付き添いを・・・教職員の方はいらっしやいませんか？」

教師1「私は・・・担任ではありませんから・・・」

教師2「こういうのは校長が・・・」

優斗「自分のとこの生徒が自殺しようとしたんだぞ!!だれか行こうって気はねえのか

よ!!」

教師1 & 2 「う．．．」

杏 「行きます！」

救急隊員 「急いで！」

救急車が志保を搬送した

竜司 「どういうことだ？こりやいったい」

優斗 「ここからいったん離れよう」

体育館裏

竜司 「なに!? 鈴井が鴨志田に（ピー）されただつて!？」

蓮 「鈴井は（ピー）されたから自殺しかけたのか」

優斗 「さつき三島が逃げてたんだ。三島が志保に鴨志田に呼ばれてるからって伝えて

いたからだと思う」

竜司 「何で知ってんのに、止めなかったんだ？」

優斗 「止めたけど、ダメだった。学校を二周してまで追いかけたけど、俺だけ先生に

捕まっちゃまって反省文書かされてるうちに多分．．」

竜司 「じゃあ、とりあえず三島探すか」

蓮 「証人になつてもらおう」

第十四話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十二話』より）

「鴨志田に暴言を」

三島を見つけた

竜司「ちよつといいか」

優斗「鴨志田のところに一緒に来てほしい」

三島「お前たちなら、どうにかできるんじゃないのか!!？」

優斗「そのために、お前が必要ってことだ」

三島「・・・一緒に行けばいいんだな？ そうすれば、この地獄は終わるんだな？」

優斗「ああ、だから。鴨志田が今いそうな場所を教えてくれないか？」

三島「教官室だと思う。アイツは機嫌悪いとご指名で殴るんだ」

竜司「本当に体罰マジだったか」

三島「でも鈴井、昨日特にハマしたわけじゃなかったのに急に呼びだされて、アイツ

すぐくイライラしてたから、きつといつもより酷いこと・・・」

蓮「優斗に聞いたんだが鈴井は（ピー）されたんだ」

三島「!?（ピー）されたのか!？」

優斗「とりあえず鴨志田のところに行こう」

体育教官室

鴨志田「ん？」

竜司「テメエ！あの子に何しやがった！」

鴨志田「なんだ、いきなり」

竜司「しらばっくれんな！」

鴨志田「いい加減にしろ！」

優斗「それはテメエのほうだろうが！自分の思い通りにならないから、だから何だ？人はそういうもんだろうが！あんたはバレエで金メダル持つぐらい強い天才でも出来なかったことぐらいあるだろうが！無いとしても、普通の人はな、何度も何度も練習して出来るようになっていく！そしてそれを見守って強くしていくのがあんただろうが！それなのに機嫌が悪かったらすぐ殴りやがる、それでもお前は教師か！お前に味方する運命なんて・・・お前が逃げれるかどうかのチャンスなんて・・・今！ここにある正義の心に比べればちっぽけな力なんだ！」

鴨志田「だからどおした！」

優斗「なに!?!（わざわざ頑張って長文言ったのに、動揺ぐらい見せる!!）」

鴨志田「どうせ、ここにいる全員退学になるんだ。次の理事会で吊るしてやる」

三島「そんなこと・・・簡単にできるわけない」

鴨志田「こんなクズどもの言うこと、誰が本気で取り合うか。三島、一緒に脅迫してきたお前も同罪だからな」

三島「え？」

鴨志田「才能もないのに部に置いといた理由、それに一緒に被害者面してるけど、前歴のコトバラしたの・・・お前だろ」

蓮「だから何だ？」

鴨志田「何？」

蓮「どれだけ言われても、毎回動じてたりしたら身が持たない。過去は振り返らないと決めてるんだ」

鴨志田「だったらこいつはどうなんだ？坂本は、俺を殴って陸上部を廃部にしたんだぞ」

優斗「過去は過去、今は今だ。だろ？竜司」

竜司「あ、ああ。いつまでも振り返っても仕方ないからな」

鴨志田「何・・・だと!？」

三島「言って・・・やる」

優斗「思いつきり言っつてやれ、三島」

三島「お前みたいなやつはこの学校からいなくなつて、野垂れ死にしちまえ！」

優斗「？それは違うぞ。三島」

三島「え？」

優斗「こういうやつは死ぬよりも、生きて！罪を償うのが一番きつんだよ！生き地獄に落とせばいいんだ！」

鴨志田「クソツ！だがな！お前たちは、次の理事会で吊るしてやる！お前たちがどうこうできるほど、世の中は甘くないんだよ！」

蓮「それはどうか？」

鴨志田「なに？」

竜司「言いたいこと言つてればいい、だがな」

優斗「相手が勝ち誇つたとき、そいつはすでに敗北してるんだよ！」

竜司「じゃあな、鴨志田」

俺たちは体育教官室を出た

鴨志田「アイツら・・・一体何者なんだ・・・？」

第十五話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十三話』より）

「なぜそんなものを飲むんだ」

竜司「めちやくちやきれいに決まったな」

優斗「何でだろうな（――；）ウーン」

蓮「事前に何か話したわけじゃないのにな」

三島「お前らヤバくないか？」

優斗「ともかく、モルガナ。一回出て来い」

モルガナ「なんだよ」

三島「え!?!猫!?!」

モルガナ「猫じゃない!」

三島「な、何か言ってるのか？」

竜司「俺たちにはわかるんだけどな？」

蓮「ああ」

三島「お前ら本当に人間か？」

優斗「そのうち、はなしゆ」

竜司「今、噛んだのか？」

優斗「・・・聞かなかったことにしてくれないか？」

蓮「それは無理だ」

三島「なにこれ、さつきまでシリアス展開だったのに・・・」

優斗「とりあえずパレスに行くぞ」

竜司「今からか？」

優斗「当たり前ダルオ？さつきと行ってあの裸の王様倒すぞ」

蓮「いつその事、一気に締め上げるか」

竜司「どこをだよ。まさか首とか言うなよ？」

蓮「・・・」

竜司「無言やめろよ」

すると、俺達を探しに来てた杏が、近づいてきた

杏「あのさ」

竜司「高巻!？」

杏「さつき聞いちゃったんだけど、退学って本当？」

優斗「いや、こつちには策があるから大丈夫だ。でも杏は危険だから来るなよ（フラ

グ）

杏「さつき言ってたでしょ。鴨志田に志保が呼ばれてたって」

優斗「一緒に行くってことか？」

杏「そうよ！」

優斗「いや本当に危ないからダメだ」

蓮「死にたくなかったら来ないほうがいい」

三島「・・・お前ら忘れてるっぽいから言っとくけど。時間的には、まだ授業中だからな」

優斗「あ」

竜司「とりあえず、教室戻るか」

蓮「ああ」

放課後

優斗「じゃあ気を取り直していくか」

後ろから杏が隠れてついて来てるけど、予測通りなのでパレスに入った
モルガナ「さて、こつから俺たちは怪盗扱いになるからな！」

蓮「怪盗・・・かっこいいな」

優斗「それじゃ変わるか」

悠「よし」

杏「なに？ここに」

竜司「高巻!」

杏「どこよここ」

蓮「危ないって言ったのに」

竜司「おい返そうぜ」

杏「あんたたちもしかして、坂本と中村君と蓮君!」

優斗「誰ですか？それ（棒）」

杏を押し返す

杏「ちよつとまってよ！ってお尻触ってるのだr」

杏をパレスからおい出した

優斗「触ったの誰だ？」

竜司「いや、不可抗力だったんだ」

優斗「とりあえず、行くぞ」

モルガナ「その前に、コードネーム決めないか？」

優斗「あつたほうがいいかな？」

モルガナ「蓮はジョーカーとかどうだ？」

優斗「じゃあ竜司はスカル、モルガナは無難にモナとかどうだ？」

竜司「いいなそれ！」

モルガン「俺も悪くない」

優斗「実はな、俺と悠のは決めてたんだ」

モルガナ「なんだ？」

優斗「俺は真実って意味のトゥルース」

悠「俺は虚偽って意味のフォルスだ」

竜司「・・・真実はまだ分かるんだが何で虚偽なんだ？」

悠「なんでも、二重人格なら、表と裏みたいなものかな？って思ったらしい」

蓮「わからなくもないが。それは違うだろ」

悠「とりあえず行こうぜ」

モルガナ「それじゃあいくか」

ここからコードネームになります

ホール

シャドウ鴨「近頃、侵入者が多くなっている！もつと警備を強化し見つけ次第殺せ！」

敵「鴨志田様、ばんざーい」

トゥルース「面倒だな、回っていくぞ」

モナ「ああこつちだ」

しばらく進むと広い部屋に出てシャドウを全員殺った。おつと間違えた。倒した
トウルース「ここ何か怪しいな」

モナ「何がだ？」

原作にはここに何もなかったと思うが・・・何か違和感がある

トウルース「こんなところに樽なんてあったか？」

樽をどけるとスイッチがあった

モナ「まさか隠し部屋か!？」

スイッチを押すと横から扉が出てきた

トウルース「俺見て来るわ、何かあったら持つてくる」

宝箱があった。開けると紫色の薬のようなものと地返しの玉、そしてカギ一つがあつ

た

トウルース「こんなのがあった」

モナ「これは何だ？」

トウルース「こっちは瀕死になっても復活できるアイテム。こっちは知らん」

ジョーカー「アイテムとカギはもらっておこう」

トウルース「こっち飲んでみていいか？」

モナ「好奇心旺盛にもほどがあるぞ」

スカル「・・・本当に飲むのか？」

トウルース「ああ」

俺は薬を飲んだ

スカル「うわ、ホントに飲みやがった!!」

トウルース「!?ぐうう」

スカル「どうした!？」

トウルース「体が・・・焼けるように熱いッ!!」

ジョーカー「コ○ンかよ」

トウルース「知ってんのかよコ○ン!グハツ」

スカル「ジョーカーはなんで生きるか死ぬかの状況で突っ込みさせてんだ!」

モルガナ「!?体が少し小さくなったぞ!？」

トウルース「・・・治まったほい・・・な」

ジョーカー「お前・・・トウルースか・・・？」

トウルース「?俺以外に何がいるんだ」

竜司「クソ!今カメラがあればよかったのに!」

モルガナ「シヨックは受けなくてくれよ?」

トウルース「?もちろんだ」

モルガナ「今、お前は」

第十六話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十四話』より）

「性癖大暴露」

モナ「お前、女になってるぞ」

トウルース「は？」

ジョーカー「間違いない」

トウルース「確かに声は高くなってるけど……髪も伸びてる……背も低い……確定か」

スカル「気を……落とすなよ。プ」

トウルース「スカール？こっちに顔やってごらん♪」

スカル「？いいけど」

カチャ

こめかみに銃口を当てた

スカル「!？」

トウルース「これは何かわかるかな？10秒以内に答えないと死ぬよ？♪」

スカル「じゅ、銃です！」

トウルース「はいせいかうい。それじゃ次は5秒以内に答えてね♪」

スカル「は、はい！（ ; ; ω ; ; ; ）」

トウルース「引き金を引いたらどうなるでしょう♪」

スカル「死んでしまいます!!」

トウルース「謝る?♪」

スカル「す、すみませんでしたm () m (震)」

トウルース「許してやろう」

モナ「アイツって怒るとこんなに怖かったのか」

ジョーカー「俺も今知った」

モナ「トウルース」

トウルース「なに? モナ」

モナ「お前服どうするんだ?」

トウルース「それはたぶん」

フォルス「こつちにしたら怪盗服になるからな」

モナ「だったら大丈夫か? . . . いやでも元の世界に戻ったらどうなるんだ? もしか

したら外でも女って事も . . . 」

ジョーカー「その時は、家に来て写真を撮らせてもらう」

フォルス「・・・どうなっても知らんぞお前」

トウルース『殺すよ?』

フォルス「まあ、なっちまったもんは仕方ねえし先進もうぜ」

セーフルームを見つけたので入って少し休むことにした

トウルース「はあー」

スカル「トウルースに戻ったのか」

トウルース「いいだろ、少しぐらい」

スカル「でもな、服が・・・。その・・・胸元が少し見えちゃうってどうか」

トウルース「お前これで発情したら変態だぞ」

スカル「なら見えねえようにしてくれよ」

トウルース「俺は別にみられても別にいいし」

スカル「お前もう少し考えたほうがいいぞ」

トウルース「何でだ?」

スカル「今お前以外全員男だからな」

トウルース「襲ってきた時は一人一人ヘッドショット食らわせてやるからな?」

モナ「そこまで獣じゃねえよ」

トウルース「発情期だったら?」

モナ「猫扱いするな!! 襲ったりなんかない!!」

トウルース「ならいいけど」

するとセーフルームの外から声が聞こえてきた

敵「しかし、姫はどうしてあんなところに？ 侵入者の気配を追っていたはずなのに」

ジョーカー「姫？」

トウルース「今ある情報からだど・・・姫は杏かな？ スカルが覚醒したときに水着でいたからな。それに、鴨志田は従順な下部（彼女）なら妥当だろうし・・・というか侵入者の反応って事は水着じゃなくて本物って事か？」

スカル「だったらやべえじゃないか！」

話を聞こうとセーフルームを出て、敵につかまり頭に銃を当てた

トウルース「おい」

敵「何だこの女!？」

トウルース「殺されたくなかったら、姫とやらをどこに連れて行つたか教えてもらおうか？」

敵「言うよりも、お前たちを殺して差し出したほうがいいに決まってるだろう？」

トウルース「皆」

ジョーカーたちがセーフルームから一斉に出て、敵を取り囲んだ

トウルース「この状況から覆し方があるなら教えてほしいな？ 叫ぼうとしたら撃つか
ら」

敵「ホールのほうの鎧が並んでる道の奥です！」

トウルース「よく言ってくれた。それじゃあバイバイ」

敵「え？」

バンツ

トウルース「さっき通れなかったところっぽいぞ」

モナ「今、敵じゃなくてよかったって思ったのは俺だけじゃないよな？」

ジョーカー「俺も」

スカル「俺もだ」

言われた部屋に行った

杏「なんなのこれ!? マジで警察呼ぶから!!」

シャドウ鴨「そいつが侵入者か」

杏「鴨志田!?! 誰、そいつ。てか、ここ何? 何で学校がこんなになつてんの?」

鴨志田「こんなのを俺の杏と間違えるとは」

そこに俺達が入って行った

スカル「高巻！」

杏「坂本!?なんか中村君いなくない? 誰その女の子?」

トウルース「俺が中村だよ・・・」

杏「彙」

トウルース「クソ、どうせもう戻れないんだよ、どうせ・・・どうせ・・・」ブツブツ

杏「え、どういうこと!?!」

スカル「話はあとだ!」

フォルス『そのまままでいるなら変わってくれないか?』

トウルース「変わればいいんだろ、ヂクジョー」

フォルス「よし」

杏「え?復活した?」

スカル「ややこしくなったじゃねえか!」

シャドウ鴨「俺様の前でギャーギャーわめくな!!」

ジョーカー「こいつの存在忘れてた」

モナ「俺らも同じぐらい影薄かったぞ」

シャドウ鴨「お前ら全員ここで奴隷にしてやる!」

フォルス「お前は黙れよ」

シャドウ鴨「なあ、杏こいつらのことどう思う?」

鴨志田認知の杏「口答え何て許しちや、だめです」

シヤドウ鴨「というわけで、処刑だな。お前らも動いたらこいつの首すぐ跳ねるからな」

杏「・・・これもさ、ぜんぶ・・・天罰なのかもね、気づけたはずなのに」

トウルース「杏！」

杏「え？」

トウルース「おまえは人間賛歌って知ってるか？」

杏「え？今？」

トウルース「今だ」

杏「知ってるけど」

トウルース「人間賛歌っていうのは、勇気の賛歌だ。そして！人間のすばらしさは優希のすばらしさ！！いくら強くてもこいつら兵は勇気を知らん！そして！覚悟とは！！暗闇の荒野に！！進むべき道を切り開くことだッ！」

モナ「どういうことだ？」

スカル「見てれば分かる、多分」

モナ「多分!？」

トウルース「それでも、お前はあきらめるのか？」

杏「・・・そうね、こんな奴のためにあきらめるなんてムリ。マジでムカつきすぎて、どうにかなっちやいやいそうよ!!」

トウルース「よし、お前ら少し離れたほうがいいぞ」

杏「!!ウグ、カハツ」

スカル「何が起こってるんだ!?!」

トウルース「お前らと同じ、ペルソナ覚醒の瞬間だ」

杏「聞こえるよ、カルメン。わかった、もう我慢しない!」

杏が腕に力を込め、鎖を引きちぎる。そして光りだした! 光が消えると、赤い怪盗服を着た杏が姿を現した

杏「はあああ!」

杏が兵から剣を取り上げ認知の杏を切り裂き消した

杏「私あんたが好きにできるほど、お安い女じゃないから」

ジョーカー「行けるな」

杏「あんなやつ、ぶっ倒してやる!」

? なにかが下りてきて俺の目の前で止まった

トウルース「これは」

モナ「なんだそりゃ!?!」

トウルース「！これはペルソナ4の炎か」

竜司「ペルソナ4って何のこと言ってるんだ!？」

トウルース「それは、帰ってからな」

俺はその炎を握りつぶした。すると、俺の周りから突風が巻き起こり、それがなくなると

ペルソナ「やっと、出れました」

トウルース「あんたが俺のほうのペルソナか」

ペルソナ「私の名前はアリエル。あなたに私の力を貸してあげましょう。その代わりに無限に沸く敵を倒しなさい！」

シャドウ鴨「どうしてこんなに侵入者がいるんだ！お前たち！今すぐひつとらえろ！」

トウルース「俺たちが、お前をひねりつぶしてやる」

戦闘 VS 番兵隊長

トウルース「杏、いいこと教えてやる」

杏「なに？」

トウルース「アイツの弱点は火だ」

杏「え？」

トウルース「お前のカルメンは、火が出せる。そして、その火が弱点と言ってるんだ」
杏「！わかった」

トウルース「怪我したら言え、回復してやる」

皆「ああ！」

トウルース「耐性は物理、電気、疾風だ」

スカル&モナ「俺たちやることなしかよ!？」

トウルース「総攻撃の時にその怒りをぶつけてくれ」

ジョーカー「なら俺はジャックランタンでやろう」

フォルス「攻撃は俺がやるぞ！」

ジョーカー「アギ！」

モナ「総攻撃だく!!」

体力を34%削り残り66%

フォルス「アギ！」

モナ「みんなでぶっ潰せ!!」

体力を30%削り残り36%

番兵隊長「なめるなあ!!」

杏がクリティカル攻撃を受け108ダメージ受け残り1

番兵隊長「ククク、トドメだ!!」

トウルース「任せろ!」

トウルースは杏を庇い74ダメージ受けて残り26

トウルース「メディア!」

トウルースと杏は全回復した

杏「アギ!」

体力を35%削り残り1%

トウルース「お前に覚悟はできているか?」

皆「俺たちはできている!」

モナ「これで終わりだツ!!」

トウルース「アリーヴェデルチ!」(サヨナラだ)

FINISH

番兵隊長「この世に鴨志田様の・・・思い通りにならぬ女が・・・いようとは・・・」

杏「あんなの、学校以外じゃさ、フツーにいたいおっさんだから!」

番兵隊長が消えた

トウルース「また綺麗に決まったな」

ジョーカー「もう突っ込むのはあきらめたぞ」

スカル「ずっと言っていたら身が持たん」

すると、シヤドウ鴨志田がそそくさと逃げて行った

杏「！待て・・・え！」

スカル「お前はもう動けないだろうが！」

杏「今追いかけないと・・・」

モナ「それは大丈夫だ」

トウルース「今は立て直すのが先決だ」

パレスを出る前に一つ確認

スカル「もし出ても女だったらどうすんだ？優斗が行方不明になるのか？」

トウルース「何それ詰みじゃん」

フオルス『その時は俺が優斗な』

トウルース「なんでだよ！」

フオルス『お前が優菜で俺が優斗。それでいいだろ？』

トウルース「よかねえよ!!」

杏「・・・誰と話してんの？」

ジョーカー「もう一つの人格」

杏「え？」

トウルース「なんか、そのままお前が女だったらお前が優菜で俺は優斗とか言い出した」

スカル「まあ、運が良けりやあ男のままだろ」

モナ「男なら堂々と現実を受け止めろよ？」

トウルース「おう。それ女のままって前提だよな？」

俺たちはパレスを出た

駅

竜司がコーラとメロンソーダを買ってきた

竜司「どっちがいい？」

杏「炭酸じゃないやつ」

竜司「どっちも炭酸だ」

杏「じゃあ、コーラ」

竜司「ほら、蓮」

蓮「ああ」

モルガナ「俺のは？」

竜司「猫はダメだろ」

杏「あんたはモルガナって言ったっけ」

モルガナ「ああ」

杏「私、猫と喋れてるんだね。すごく変な感じ」

優斗「そのうち慣れる」

杏「ていうか、中村君戻れてよかったね」

優斗「ああ、あのまま、女だった場合色々怖かったから」

竜司「ところでこれからどうする？」

杏「え？」

蓮「これからも一緒にやるか。それとも、普通に今まで通り過ごすか」

杏「もちろんやるよ」

優斗「なら来るなって言っても一人で来るだろ？」

モルガナ「なら五人でこれからは探索だな」

優斗「それじゃあこれからよろしくな」

蓮「モルガナはどうする？」

モルガナ「俺はいつまでも外にいたくないぞ」

竜司「うちは無理だ」

杏「私も」

優斗「俺も」

蓮「俺の家しかないのか？居候なのにな？」

優斗「うちは、ばあちやんが猫アレルギーだから避けたほうがいいかなって」

竜司「俺は飼ってる余裕ねえわ」

杏「私はインコ飼ってるから」

優斗『インコ飼ってたの？』

そのあと解散し、蓮を送って俺は帰った

悠『優斗になれるチャンスだったのに』

優斗「俺が女になったら名前はやるよ」

悠『言つたな？』

優斗「言つたぜ？」

第十七話（ペルソナ5+Rの軌跡『第十五話』より）

「授業中のスマホはやめましょう」

SNSにて

杏「今日からよろしくね」

蓮「ああ」

竜司「仲間が増えるのはなんだかんだいいな！」

蓮「そういえば、優斗」

優斗「なんだ？」

蓮「お前確かペルソナ4とか言ってただろ？それはどういう意味だ？」

優斗「そのことか。じゃあまず、ペルソナ使いはお前たち以外にもいると思うか？」

竜司「いや違うだろ、だってモルガナがペルソナのこと知ってるんなら誰かから教わったてことだろ？少なくともその単語がある時点で、居るもしくは居たんじゃないか？」

蓮「お前にしては、頭使ったなbyモルガナ」

竜司「あの猫！」

優斗「モルガナはともかく、ペルソナ使いは俺ら以外にもいる。もちろんワイルドもな」

杏「ワイルド？」

優斗「蓮みたいに、一人で複数のペルソナを使う人のことだ」

蓮「こいつみたいなのが、ほかにもいるのか!? byモルガナ」

優斗「一人は死んで、一人は生きてるはず」

竜司「はず？」

優斗「物語の後は分からんから」

杏「私たちが知ってる人の中にもいるのかな？」

優斗「俺たちの世代は5なんだが、4のペルソナ使いならわかるかもな。例えば探偵の白鐘直人、アイドルの久慈川りせとか、天城屋旅館の若女将の天城雪子とかな」

杏「嘘、そんなに!？」

蓮「有名な人ばかりだ」

優斗「大体な」

竜司「すごいな、じゃあ俺たちがどうなってるのかとか分かるのか？」

優斗「いや、ペルソナ5が一番新しいんだ。だから分からないんだ」

蓮「それなら、仕方ないな」

優斗「というかそろそろ寝ないか？」

時計は11時を指している

竜司「だな」

杏「じゃあまた明日」

俺はSNSグループを抜け、蓮との個人チャットを開いた

優斗「蓮」

蓮「どうした？」

優斗「実は今度やりたいことがあるんだ」

蓮「やりたいことって？」

優斗「実はな……っていうのはどうだ？」

蓮「面白そうだな、少し恥ずかしいが」

優斗「案外良かったりしてな」

蓮「じゃあまた明日」

優斗「よく考えたら、あんなことあった後に学校あるってヤバくない？」

蓮「確かに」

優斗「また明日」

俺たちは寝た

次の日学校前

具合を心配する女子「どうしたの？顔色悪いよ？」

具合が悪い女子「なんか最近、具合が悪くてさ。頭重いし、体も妙にだるい感じ。市販の薬、どれだけ飲んでも全然治らないし・まさか新種のウイルス？・ひよつとして、これが例の精神暴走の前兆？ど、どうしよう!?!わたし、死んじやう!?!」

優斗「薬なんか飲んでも気力の問題だ。結局治らない、治らないと思えば。治るもんも治らん。そんならい今どき小学生でも知ってる。なににあんなこと言ってるということは、あれが俗にいうぶりっ子か。初めて見た」

蓮「いや、ぶりっ子とは違う気がするけどな。というか小学生ならそんなこと考えずに遊んでるだろ」

優斗「そういや昨日言ったやつ結局やるのかやらないのか？」

蓮「機会があれば、な」

授業中・SNSにて

竜司「放課後は屋上に集合でいいか？」

杏「今授業中」

竜司「すげえ！ちゃんと受けてんのか？」

優斗「そもそも、あんなことの次の日に授業があるのがおかしいんだ」

竜司「んで、放課後はアジトでいいんだよな？」

杏「とうか入れるの？」

蓮「隠れて入る」

竜司「特別に入れてやるよ」

優斗「蓮、気をつけろよ牛丸見てるぞ」

SNS終わり

牛丸「おい、蓮！今、よそ見してただろう！それが人の話を聞く態度か!!」

蓮がブルつてなったぞ。牛丸がチヨークを・・・投げたー！、蓮の頭にクリーンヒッ

トオオオ

優斗「忠告したのに」

牛丸「チヨークが飛んでくると思えといたただろう。それと中村」

優斗「はい？」

牛丸「お前もよそ見してたよな？」

!?これが殺気!!

チヨークがすごいスピードで飛んできた。あ、これヤバいかも

悠『一瞬変われ』

優斗「？わかった」

悠「ペルソナ」小声

イフリートが出てきた!? イフリートがチョコークの軌道を少し変え、チョコークは後ろに飛んで行った

杏「え? あれって」小声

蓮「なんでだ?」小声

牛丸「少しそれたか、運のいいやつめ」

優斗「なんでペルソナが?」小声

悠『なんか、反射的に出ただけ?』

優斗「説明するの俺なんだけど・・・」

悠『俺出たくないからな』

優斗「はあく」

牛丸「なんだ? もう一発食らいたいのか? 今度は当てるぞ?」

優斗「いや、大丈夫です!」

放課後

屋上

蓮「何でペルソナが出たんだ?」

優斗「何でかわからんが反射的に出たらしい」

杏「らしい？」

優斗「だって悠のペルソナだもん」

モルガナ「今はそれよりも、今も出せるのかだ」

優斗「やってみるか？」

ペルソナというとアリエルが現れた

優斗「でた」

モルガナ「出せるのかよ!？」

竜司「えつと、牛丸の授業でチョコークが投げられて、それを避けるためにペルソナが

出たでいいんだよな？」

蓮「間違いはないぞ」

杏「私もペルソナ出せるのかな？」

優斗「やってみたら？」

杏「ペルソナ！」

シーン

杏「なにこれ、恥ずかし」

優斗「じゃあ俺らだけ？」

蓮「ほいな」

モルガナ「・・・だが、あんまり使ったら使うのに慣れて、使えなくなった時不便になるぞ?」

優斗「わかってるさ」

竜司「それじゃパレスに行くか?」

モルガナ「いや、準備が先だろう?」

優斗「ゲームみたいに考えると、武器、装備、回復ぐらいか?」

モルガナ「ああ、そんなもんだろ」

竜司「武器とか、防具なら売ってそうな店知ってるぜ」

モルガナ「なら、そっちは任せた」

優斗「薬は、あて先がある」

杏「じゃあ、それが揃ったら、行けるってこと?」

優斗「金がなくなれば、パレスで稼げる」

竜司「だったら、準備できたら行こうぜ」

アリエル「私たちを頼ってくれて構いませんけどね」

優斗「・・・ん?今喋った?」

アリエル「ええ」

皆「ええーーーーー!!!」

放課後・四軒茶屋路地裏

優斗「さて蓮」

蓮「医者の方に、行くんだろ？」

モルガナ「ああ、今から行こうと思ってた」

優斗「あそこの医者はやばいぞ。悪い人じゃないんだが、モルモットになる覚悟があるんなら行け。その代わり、回復道具増やしてくれるんだ」

蓮「ヤバくないか？」

優斗「だけどアイツコープ相手だからな」

蓮「避けてちゃダメって訳？」

優斗「おつかれ」

蓮「怒っていいか？」

優斗「とりあえず行くぞ」

モルガナ「逃げられたな」

アリエル「私は、動かなくても勝手に行きますけどね」

蓮「怒る気にもなれなくなってきた」

病院

先生と話した後、男が来て追い出された

優斗「買ったけど、今日はもう無理そうだな」

蓮「そうだな、それじゃあ帰るか」

アリエル「それでは、また明日」

蓮と別れた

アリエル「それにしても、こっち側の世界に来られるとは」

優斗「心の海つてどこにいたんだろ？」

アリエル「ええ」

優斗「ていうか、なんで喋れるんだ？」

アリエル「召喚した時も喋ったじゃないですか」

優斗「じゃあ何で、こっちで出れるんだ？」

アリエル「こっちが聞きたいですよ」

優斗「消えたりできないのか？」

アリエル「言い方が悪いのは置いておいて、ポ○○ンみたいなものですから、呼びたかったら名前 or ペルソナ、戻したかったら、戻れでできますよ」

優斗「ポ○○ンは消されるからやめろ」

アリエル「でもまだ、戻さないでほしいです」

優斗「まあ、俺からしたら話し相手が増えたみたいなものだけだな」

アリエル「私は、貴方の別の人格の人とも話してみたいものですけどね」

悠「俺のことか？」

アリエル「あら、もう変わったんですね」

悠「さっきの話によると、イフリートも呼べるのか？」

アリエル「ええ、そのはずです」

悠「イフリート」

イフリート「ん？なんだ？戦うのか？」

悠「よう、イフリート」

イフリート「お、悠か。ここどこだ？」

悠「お前に分かりやすく言うなら外の世界かな？」

イフリート「そうか」

アリエル「あなたが、イフリートですか？」

イフリート「げ！天使かよ！」

アリエル「大丈夫です。あなたを攻撃する気はありません」

イフリート「本当かあ？」

アリエル「ええ」

イフリート「そう聞いたら安心したぜ」

「アリエル「今は、お互い仲良くしましよう」

優斗「そういや、蓮達のペルソナも話せるのか？」

イフリート「いつもそんな風に、変わってるのか？」

優斗「ああ」

アリエル「あの人たちは、こっちに來れないみたいですが。向こうに行くか、貴方を經由して來れるんじゃないかしら」

イフリート「それだったら、來れるかもな」

家の前までついた

優斗「じゃあ入るか、お前らは入れるのか？」

イフリート「大丈夫だ」

イフリートとアリエルは同じぐらいの身長まで縮んだ

優斗「便利だな」

アリエル「でしよう？」

家に入った

お母さん「おかえr、誰？その人たち」

優斗「え？」

第十八話（ペルソナ5+Rの軌跡『第十六話』より）

「母さんたち順応性高杉晋作」

優斗「見えてるの？」

お母さん「もしかして・・・幽霊!？」

アリエル「アレと同じにしてみらっでは、困ります」

イフリート「俺らはちゃんとした。天使と悪魔だぞ」

お母さん「天使？悪魔？」

優斗「お前ら、素か？」

イフリート「ん？どういうことだ？」

優斗「はあ・・・とりあえず説明するよ」

青年説明中

優斗「つていうわけ」

お母さん「そうなの、すいませんねえ。こんな息子に憑かせちゃって」

アリエル「私たちは後悔してないですし」

イフリート「それより、何で見えるかのほうが気になるんだが」

アリエル「血筋でしようかね？」

イフリート「それか、気を許した奴だけとかな」

アリエル「どうしてですか？」

イフリート「アイツらにも見えてたから、気を許した奴だけだと思ったんだ」

アリエル「確かに、そうかもしれないけどね」

お父さん「ただいま、誰だね。この人たちは」

お母さん「この人たちはね」

母説明中

お父さん「そうだったのか。いやーすいません、こんな息子に憑かせちゃって」

イフリート「あれ？なんかデジャブ」

アリエル「お母さんと同じこと言ってますね」

優斗「おまえ、そんな頭悪かったのか」

お母さん「それでこれからどうするの」

優斗「どうって、戻れって言ったら消えるし」

アリエル「あ」シユン

イフリート「え」シユン

優斗「あ、消しちやった」

お母さん「戻してあげたら？」

お父さん「出してあげなさい」

優斗「アリエル、イフリート」

アリエル「あら」シユン

イフリート「戻ったか」シユン

優斗「すまん」

アリエル「別にいいですけど」

お母さん「そしたら、そろそろ夜ご飯にしましよかね」

お父さん「君達も食べたらどうだい」

アリエル「私たちは食べなくてもいいんですが」

イフリート「食えなくもないしな」

優斗「どうせだから食べてけよ」

アリエル「・・・では、頂きますか」

イフリート「そうだな」

みんなでご飯を食べた後

自室

アリエル「とてもおいしかったです」

イフリート「そういえば・・・優斗」

優斗「ん？」

イフリート「お前の中にいるとき、もう一つ俺たちと似たようなものを感じたんだが
優斗「まさかもう一人いるっていうのか？」

イフリート「いや多分気のせいと思うんだが、一応言っておこうと思って」

優斗「わかった、頭の隅には入れておくよ」

そうして俺は寝た

ベルベットルーム

優斗「ん？」

イゴール「ようこそ、ベルベットルームへ。今回は呼ばせていただきました」

優斗「どうでもいい、寝る」

悠「おい」

優斗「ん？悠か」

悠「話ぐらい聞いてやれよ」

優斗「ん？何でお前実体があるんだ？」

イゴール「私がやらせていただきました。それとそちらにあなた方のペルソナもいま

す」

アリエル「寝てたら、いつの間にかここにいました」

イフリート「どこだここ」

悠「アリエルにイフリートか」

アリエル「あら、ここでは分かれてるんですね」

イフリート「なんか変な感じだな」

優斗「それより話ってなんだ？」

イゴール「それは貴方の能力のことです」

優斗「ペルソナを現実呼び出せることか？」

イゴール「それでございます。そして、その能力はワイルドとは別の能力。ですがこれまでその様な能力を持った者はおりませんでした」

優斗「?つまり？」

イゴール「貴方様の能力は、私が見てきた中では初めてなのです。ですからこの能力の名前を付けていかげじょう」

優斗「そうだな」

アリエル「では、自分の好きな言葉はどうでしょう」

イフリート「何かを英訳してもいいかもな」

悠「能力から何か、言葉を探してみたらどうだ」

優斗「よし、決まった！」

イゴール「それでは、おきかせください」

優斗「俺の、能力の名前は」

第十九話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十七話』より）

「ネーミングセンス？あると思うか？」

優斗「コールだ」

イゴール「コールですか」

アリエル「呼ぶという意味ですね」

イフリート「それなら、いいんじゃないか？」

悠「異議なし」

イゴール「では、これからはその能力をコールと呼びましょう」

優斗「ほかに用事はあるか？」

イゴール「いえ、それだけでございます」

優斗「そか、じゃあお休み」グー

悠「はやっ!？」

アリエル「では私達も寝ますか」

イフリート「そうだな」

悠「もう突っ込まんぞ」

みんな寝た

カロリーヌ「私達」

ジュステイーヌ「空気じゃありませんでしたか？」

イゴール「フッフッフ次はどちらが来るか楽しみだ」

朝

優斗「ん？朝か。二度寝しよ」

悠『いや起きろ！』

優斗「うるせえな」

悠『いいから起きろ』

優斗「はいはい、行くよ」

悠『どこにだ？』

優斗「学校だよ」

悠『今日、日曜だぞ』

優斗「あ」

悠『……どうすんだ？』

優斗「……ゲームでもするか」

次の日

学校

優斗「おはよー」

蓮「昨日何してたんだ？」

優斗「ゲームしてた」

蓮「そうか、まあいいが」

優斗「今日行くのか？」

蓮「そのつもりだ」

優斗「よし」

放課後パレス

敵の弱点を俺が言い、皆で敵を倒して謎を解きお宝まで来た

モナ「まさか初日で来れるとはな」

スカル「これで盗めばいいのか？」

ジョーカー「このモヤモヤしたのがお宝か？」

パンサー「こんなのどうやって持ってかえるの？」

トゥルース「予告状だよ」

モナ「ああ、本人に危機をわからせるんだ。そしたら欲望が実体化し持てるようになる」

ジョーカー「それじゃあ、とりあえず今日は終わりか」

トウルース「とりあえずね」

モナ「帰ろう」

トウルース「にしても女は慣れん」

スカル「もうあきらめたらどうだ」

トウルース「お前にはわからんだろうな女になる感覚が」

パンサー「そんなに嫌？」

トウルース「男が女になるなんてありえねえだろ、それにパンサーがいなかったら俺以外全員男だぞ」

パンサー「あくそういうことね」

トウルース「まあ襲おうとしたら殺すけど」

パンサー「ゑ」

スカル「俺一回頭に銃当てられたぞ」

モナ「トウルースを怒らすとどうなるかわからねえ」

ジョーカー「ああ」

トウルース「まあいい、帰る」

帰った

SNS

優斗「予告状は任せる」

竜司「わかった、任せろ」

杏「竜司にできるの？」

竜司「できるよ！」

蓮「まかせるからな」

竜司「おお」

優斗「また明日」

次の日

掲示板に予告状が張られていた。内容は

「色欲のクソ野郎、鴨志田卓殿。抵抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつける、お前のクソさかげんは分かっている。だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って、お前に罪を告白させることにした。明日やってやるから覚悟してなさい。心の怪盗団より」

竜司「……そこそこやるじゃん。周りを見るとみんながいた」

杏「言いたいことは分かるけど、バカな子が背伸びしてる感ある」

モルガナ「あのマークもイマイチなんだよな」

優斗「今回ののは、いっててもしょうがないだろ」

竜司「そ、そうだよな！」

鴨志田「なんだこれは！一体誰がしたんだ」

優斗「本人のお出ましだ」

モルガナ「みろよ歪んだ欲望に心当たりありまくりのリアクション」

竜司「相当効いてるな」

鴨志田「貴様か？ コラ！ あ？ 貴様か？」

こつちに来た

鴨志田「お前らだな？」

優斗「だつたらなんだ？」

鴨志田「ふん！ まあいいお前らはもうすぐ退学だからな」

鴨志田は行つた

杏「今日ならいけるんだよね？」

優斗「終わらせよう」

蓮「行こう」

第二十話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十八話』より）

「三体目のペルソナ」

放課後・パレスお宝部屋

トウルース「でっかい王冠だな」

モナ「よしお前ら！もってけ！」

スカル「お前らも持ってくれよ」

トウルース「今俺、女だから」

パンサー「私力ないから」

モナ「俺は届かん」

スカル「クソ！」

お宝部屋前大広間

シャドウ鴨「ソラア！」

フォルス「イフリート！」

イフリート「オラア！なんだテメエは」

シャドウ鴨「今のを弾くとはな」

敵「ハア！」

敵に王冠を盗られた

スカル「！しまった！」

悠「バカ！」

シャドウ鴨「よくやった、下がっておけ」

敵「ハ！」

シャドウ鴨「これだけは誰にも渡さん!!!これは、俺様が城主である証明、この世界の

コアだからな！」

トウルース「だから取りに来たんだ」

シャドウ鴨「お前は誰だ？中村がいないようだが」

トウルース「俺が中村だよ」

シャドウ鴨「お前が中村だと？冗談はほどほどにしとけよ小娘が」

カチャ

トウルース「おい、今なんていった鴨志田」

モナ「落ち着けよ、トウルース」

トウルース「アイツ撃つていい？いいよね？あんな奴やつば殺ったほうがいいよ」

ジョーカー「いいから落ち着け」

シャドウ鴨「何言ってるかわからんがこれでも食らっておけ。おいお前らアレ持つてこいー！」

鴨志田が化け物に変身した

パンサー「なに!？」

シャドウ鴨「現役の時ブイブイいわせてた、俺の必殺スパイクだ！必ず、殺す、スパイクだ！」

トウルース「みんな防衛しろ！」

シャドウ鴨「金メダル級スパイクだ！」

ドオオオン

スカル「グアアアア」

ジョーカー「スカル！」

トウルース「嘘だろ、あまりにも呆気なさすぎる」

シャドウ鴨「お前たちもすぐ逝かせてやる」

ジョーカー「鴨志田アア!!」

トウルース「さて、アリエル」

アリエル「カデンツァ、ディア」

スカル「ん？俺今」

パンサー「スカル!?大丈夫なの!？」

トウルース「パンサーはみんなを回復してくれ。モナは鴨志田の王冠を上からとつてくれ」

モナ「お前はとうするんだ」

トウルース「俺は、アイツの相手する」

カアアア

イゴールからもらった銃が光りだした

トウルース「これは・・・」

ジョーカー「何の光だ!？」

トウルース「あの時の・・・」

やつぱりそうか。俺は銃を抜き、銃口を鴨志田に向けた

シヤドウ鴨「そんなもので俺を倒せると思ってるのか?」

パンサー「そうだよ!もつと他の方法があるでしょ!」

トウルース「いやこれはこうするんだ」

俺は銃口を鴨志田から俺のこめかみにあてた

シヤドウ鴨「自害する気か!したいならするがいい!!」

モナ「おい!やm」

パン!!

モナ「な!？」

トウルース「これでいい」

俺の周りを光の粒のようなものが回りだした。そして真上で何かがあうつすらと出てきた

??「お前が俺を呼び出したのか」

トウルース「そうだ」

??「力が欲しいか？」

トウルース「当たり前だ」

??「なら俺の名前を叫ぶといい」

トウルース「クロノス!!」

クロノス「あんな奴、すぐに倒してやろう」

トウルース「ザ・ワールド」

どっかの吸血鬼の技だ。誰とは言わん、てか言わなくてもわかるだろう？ 時が止まっている間に鴨志田の回復手段のトロフィーを盗っておこう

トウルース「そして時は動きだす」

シャドウ鴨「な、何が起k、トロフィーが！」

ジョーカー「一体どういうことなんだ？」

トウルース「クロノスは、時の神様だ。もしかしたらと思っただけ」

スカル「時間を止めたってのか!？」

パンサー「何それ、チートじゃん」

モナ「今だ!よつと!」

モナが王冠を盗った

シャドウ鴨「な、俺の一番大事な……」

トウルース「鴨志田」

シャドウ鴨「な、なんだ？」

トウルース「クロノスは時間の神様だ、つまり死ぬ寸前と死んだ瞬間をループさせたらどうなると思う？」

モナ「なんて残酷な奴なんだ……」

トウルース「終わりが無いのが終わりってことだ。そうなりたいのか？」

シャドウ鴨「何だと……」

みんなで囲んだ

トウルース「てめーの敗因は、たった一つだけ、鴨志田、たった一つの単純な答えだ」

全員「テメーは俺たちを怒らせた」

モナ「トドメだ!!」
鴨志田を倒した

第二十一話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第十九話』より）

「杏の決断」

倒れたところを近付くと起き上がり王冠を奪って窓際まで逃げる

シャドウ鴨「ぐっ」

パンサー「どうしたの？逃げないの？逃げたらいいじゃない。運動神経抜群なんでしょ」

シャドウ鴨「昔からそうだ・・・ハイエナ共が、期待という名の押し付けばかり・・・！」

スカル「だからと言ってやっていい訳ないだろうがよ。あんなこと。お前のその歪んだ心、俺らが何とかしてやるよ」

シャドウ鴨「ぬう・・・」

パンサー「怖い？今あんたは、志保と同じ景色を見てるんだよ。きつと志保も怖かった・・・でも、飛び降りるしかなかった。あんたはどうするの？飛び降りる？それとも、ここで・・・死んでみる？」

シャドウ鴨「う、うう・・・」

スカル「おい！これ以上やったら廃人になっちまうぞ」

トウルース「スカル！信じろ」

シャドウ鴨「やめてくれええ！！頼む！やめてくれえええー！！」

パンサー「みんなツ・あんたにそう言ったんじやないの!?!けどアンタは平気で奪ってつたんだっ！」

シャドウ鴨「ひいっ!!」

パンサーが放ったアギは鴨志田の右斜め上に

シャドウ鴨「わ、分かった・俺の・負けだ！」

シャドウ鴨は王冠をなげ、ジョーカーが受けとった

シャドウ鴨「とどめを刺せよ。そうすれば・現実の俺にもとどめを刺せる・勝ったお前らには、その資格がある」

パンサーがまたアギを放った。しかし今度は左斜め上にあたった

パンサー「廃人になられたら、罪が証明できなくなる」

モナ「杏殿は優しいな」

シャドウ鴨「俺は・負けた。負けたら、終わりだ。これからどうすればいいんだ」

ジョーカー「自分で考えろ」

シャドウ鴨「・わかった・俺は、現実の俺の中に帰ろう。そして、必ず」

鴨志田が光に包まれて消えた

モナ「オイオイ、長話してる暇はないぜ、ここはすぐに崩壊する」
トウルース「死にたくなかったら全力で走れ！」

パンサー「死ぬ、死ぬ、死ぬってばあー!!」

スカル「うおっ！」

パンサー「スカルッ！」

スカル「へっ、久々でもつれただけだ！」

トウルース「早く立て！」

スカル「おう」

後ろの廊下がどんどん崩れていく。必死に走ってパレスを出た

杏「ハア、ハア、ハア・・きつつ」

竜司「ナビ見てみる！」

異世界ナビ「目的地が消去されました」

杏「・・・本当だ、行けなくなってる」

モルガナ「お宝は!？」

蓮が金メダルを出した

竜司「メダル？」

杏「え、あの王冠は？」

竜司「どうなってんだ？」

モルガナ「鴨志田にとつての欲望の源が、それだったってことだ。奴の中じゃ、このメダルが、パレスで見た王冠くらいの価値ってことだろ？」

竜司「これ、オリンピックのだろ・・・あの変態野郎、過去の栄光つてのに、しがみついてただけってことか」

杏「でも、これで鴨志田の心・・・変わったんだよね？」

優斗「問題ない」

蓮「それじゃあ帰るか」

優斗「バイバイ」

蓮「一個優斗に質問」

優斗「なんだ？」

蓮「あの時ループとか言ってたが本当にできるのか？」

優斗「できると思うぞ。まあやらんけど」

蓮「そうか、それじゃあな」

俺たちは解散しみんな家に帰った

優斗「クロノス」

クロノス「ん？なんだここは!？」

優斗「お前の外の世界の俺の部屋」

クロノス「そうか・・・ではなんの用だ？」

優斗「いや、お礼だよ。お前がいたから、楽に勝てた」

クロノス「私は今日からお前のペルソナだ。好きな時に呼ぶといい」

優斗「じゃあ寝るか。お休み」

クロノス「ああ」

俺たちは寝た

第二十二話（暗殺教室の軌跡『プロローグ』より）

「新たな世界へ」

朝起きると変なことになっていた

優斗「どこだここ」

なんか面倒なことになった

優斗「俺の部屋じゃねえ」

悠『おい』

優斗「なんだ？」

悠『お前気づいてないのか？自分の体を見てみろよ』

優斗「体がd・・・ハア!？」

それは明らかに俺自身の体ではなく

優斗「これってパレスの時の・・・」

悠『とりあえず部屋からですよ』

優斗「ああ」

部屋から出た

そこは普通のマンションの家の様な構造だった

優斗「どういうことだ？」

悠『訳が分からん』

優斗「書き置きがあるな」

文面

ずっと同じこととしてたら息が詰まるでしょうし、たまにはほかの世界で息抜きしてみ
てはどうかと、眠ったときに行きたいと考えれば世界を歩き来できるよになりました。
お楽しみください。ちなみにここは暗殺教室の世界です。あなたは優菜という名前で
転校してます。まあ高校生だし大丈夫だよね！神様より

優菜「息抜きで異世界行くやつがどこにいるんだよ!!」

悠『まだ続きがあるぞ』

優菜「ん？」

PS作り方が簡単にわかる料理本を置いておきますこれで自炊してください

優菜「これか」

本を開くと、和風から洋風や中華まで様々な料理の作り方が事細かく書かれていた

優菜「わーお、分かりやすい。じゃねえよ!!一番大事なものが抜けてるよ!!保護者は

!？」

悠『とりあえずここはどこなのかスマホで調べたらどうだ？』

優菜「・・・それもそうだな」

スマホも元の世界のものと同じようだ。パソコンで調べているとあるものが見つかった。これは・・・

優菜「学校の真ん前!？」

悠『遅刻せずに済みそうだな!』

優菜「それに関してはいびらないでくれないか？」

悠『今日何曜日?』

優菜「今日は・・・月曜日すね」

悠『今は何時?』

優菜「今は7時ですね」

悠『少し時間あるな。話しを聞きながら準備しろ』

優菜「?分かった」

準備中

優菜「話って何だよ」

悠『約束覚えてるか?』

優菜「何の?」

悠「ほら、お前がパレスで初めて女になった日。杏が覚醒した日の夜だよ」

優菜「・・・！おいおいまさかお前・・・」

優斗『優斗の名前は頂いた!!』

優菜『約束するんじゃないやなかつた・・・』

優斗『これからもよろしくな。ゆ・う・な』

優菜「その言い方ムカつく」

理事長室

浅野理事長「どうも、君が転校してきた中村優菜さんですね」

優菜「はいそうです」

浅野理事長「君の学力ではA組かな？」

優菜「私、E組がいいんですけど」

浅野理事長「・・・理由を聞こうか」

優菜「理由なんて関係なくE組がいいです」

浅野理事長「私としては、君のような子をE組なんぞに落としたりはしないんだが」

優菜「じゃあこれでどうです？」

悠「イフリート、奥の窓ガラス割って破片は取っておいて」ボソツ

イフリート「全部は無理かもしれんからな」

浅野理事長の後ろの窓が全て割れた

浅野理事長「!!これは君がやったのかい？」

優菜「これなら行けますよね？E組に」

浅野理事長「何故そこまで固執するのかわからないが、仕方ない。君はE組いきだ」

優菜「それじゃあ」

理事長室を出た

優斗『あの山の上だろ？』

優菜「ああイフリートかクロノスに連れて行ってもらおう」

イフリート「俺だけじゃ無理かもしれないから呼んでくれ」

学校の裏に行き、周りに人がいないのを確認しクロノスも呼んだ

優菜「よし、クロノス」

クロノス「ああ、次はどこにいるんだ」（呆）

優菜「それはあとで説明する」

イフリート「俺こっち持つからお前そっち持つてくれ」

クロノス「わかった」

優菜「あの山まで頼むわ」

E組の校舎前

優菜「よし、いいぞ」

?? 「あれ誰？」

?? 「知ってる人いる？」

?? 「私知らない」

?? 「てか飛んでなかった？」

優菜「さて、行きますか」

第二十三話（暗殺教室の軌跡『第一話』より）

「転校してきました！」

職員室

優菜「すみませーん」

??「お前は隠れてろ!!」

??「隠れるスペース無いですって！」

??「どうにかしろ、タコ！」

??「誰がタコですかっー！」

にぎやかだな

優菜「失礼しまーs」

強行突破しようとする、扉が開いた

烏間「向こうで話そう。一旦」ハアハア

優菜「は、はい」

烏間「君は一体誰なんだ？」

優菜「えっと、転校してきたんですけど理事長室にあいさつに行つて戻るときにコー

ド引つ掛けて転んでコードが抜けて、書いてた資料が全部消えちゃったぼくて。つまりE組行きになりました」

鳥間「そお、そうか。では、君は転校生としてここに来たんだな。じゃあ話がある来てくれ」

防衛省の人「君が転校生だね」

優菜「そうです」

防衛省の人「では説明させていただきます。(全略)事情は今話した通りです地球の危機ゆえ秘密の口外は絶対禁止。もし漏らせば記憶消去の治療を受けていただくことになりません」

優菜「怖いですねー。俺は絶対言いませんから大丈夫です」

防衛省の人「・・・俺？」

優菜「俺中身男ですし」

防衛省の人「本気で言ってますか？」

優菜「嘘を言って利益があるのか？」

防衛省の人「ちよつと鳥間呼んできて」

ですよー

鳥間「君が男って本当かい？」

優菜「はい」

烏間「女装ではないのかい？」

優菜「体は女です」

防衛省の人「訳がわからない」

烏間「君は、性同一性障害なのかい？」

優菜「まあそんなところです」

防衛省の人「私休んでようかしら」

優菜「ついでに言うのと二重人格です」

烏間「・・・え？」

悠「ほら」

烏間「目が変わったようにしか見えないんだが」

優菜「じゃあ、あいつら呼ぼう。イフリート、アリエル、クロノス」

イフリート「なんだ？」

アリエル「何でしょう」

クロノス「次は何の用事だ？」

烏間「・・・」（。ん。）

烏間先生のおんな顔初めて見た

防衛省の人「私、やっぱり頭がイカレタのよ。休暇取って病院行こうかしら」

優菜「あ、幻覚じゃないんで、行かなくていいですよ」

烏間「俺たちの頭は大丈夫なんだな」

優菜「はい、ところで俺って二重人格だよな？」

アリエル「そうですよね？」

クロノス「違ったのか？」

イフリート「優菜と悠だろ？」

優菜「ほら」

烏間「・・・話をもどして武器のことだが」

あ、考えるのやめたな

烏間「今予備で置いていた武器を渡す。この武器は、人間には無害だがあのタコには

よく効く」

優菜「あ、了解です」

烏間「それじゃ俺が連れて行こう」

優菜「はい。あ、さっき出した人たちのこと言わないでくださいね？」

烏間「？わかった」

教室前

?? 「HRを始めます。日直の人は号令を」

?? 「起立、気をつけ、礼」

パパパパパパ

B B弾が発射されている音がする

?? 「出欠を取ります。磯貝君」

磯貝 「はい」

?? 「すみません、銃声の中なのでもうすこし大きく返事してください」

磯貝 「はい！」

?? 「岡野さん」

岡野 「はい！」

?? 「片岡さん」

片岡 「はい！」

めつちやワクワクしてきた

烏間 「怖くないのか？」

優菜 「怖いつていうより、楽しみです！」

烏間 「肝が据わってるな」

優菜 「よく言われます」

パパパパ・・・

烏間 「終わったみたいだな」

?? 「皆さん欠席者無しですね。先生ものすごくうれしいです！」

?? 「皆で撃つて当たらないの？」

?? 「皆さんに言わなきゃいけないことがあるんですが言つていいでしょうか？」

?? 「言つていいでしょ」

?? 「実はさつき転校生が来たらしいんですが」

?? 「転校生!?何も聞いてないぞ!？」

?? 「私だつて聞いてないですよ！さつき会おうとしたら烏間さんに止められちゃった
し」

烏間 「たく」

コンコン

?? 「皆さん！来たみたいですよ！早く弾を片付けて!!」

?? 「ええ!？」

しばらくして

?? 「どうぞ!!」

烏間 「行くぞ」

入った

烏間 「彼は転校生なんだが事情があってE組に来た。まあ仲良くしてくれ」

前原 「すいません」

烏間 「なんだ？」

前原 「さつき彼つて言つてましたけど。どう見ても女子ですよね？」

烏間 「中身が男らしい」

前原 「え？男なの？」

優菜 「うん」

前原 「まじで？」

優菜 「もちろん」

みんな 「ええええええええええ」

烏間 「性同一性障害らしい」

優菜 「ついでに言うのと二重人格」

杉野 「お前はネタから生まれたのか!？」

優菜 「そんなわけないじゃん」

殺せんせー「ともかく、どんな人であろうと彼女いや彼は今日からこのクラスの仲間入りです」

優菜「まあよろしく」

昼休み

殺せんせー「昼休みです。ね先生ちよつと中国行って麻婆豆腐食べてきます。暗殺希望者がいれば携帯で呼んでください」

優菜「疲れた〜」

渚「君さっきの話本当なの？」

優菜「うん」

渚「本当なんだ・・・」

岡島「お前、あれはしたのか？」

優菜「アレ？アレか、するわけねえだろ」

岡島「え？でもお前男だろ？」

優菜「元男じゃなくて心が男だ」

岡島「そ、そうか」

中村「残念だったね〜岡島」

岡島「うるせえ！」

あ、トイレ行きたい

優菜「トイレ行こ」

トイレ

優菜「はあく」

優斗『どうした？』

優菜「いやな？一回習ったやつを、もう一回習うって」

優斗『それもそうだな』

岡野「優菜君？」

優菜「そうだけど」

岡野「誰と喋ってるの？」

優菜「あく出てから説明する」

教室

優菜「えーとな？二重人格ってのは言ったよな？」

岡野「うん」

優菜「とりあえず変わるな？」

優菜が一旦目を閉じると赤色になった

優斗「よう、初めてだな」

岡野「え？」

優斗「俺は優斗って言うんだ。よろしく」

優菜『・・・』

岡野「よ、よろしく」

渚「もしかしてもう一つの人格って」

優斗「そ。俺のこと」

渚「もう一つが女の子なのかなって思ったりしたんだけど」

優斗「俺たち以外はもういないぜ」

中村「ところでさ、悠たちは、どこから来たの？」

優斗「俺たち？俺たちは、別のs」シユン

優菜「ごめんちよつともう一回トイレ」

中村「え？ちよつと」

優斗『なんだよ一体』

優菜『バカなのか？』

優斗『別にいいだろ言っても』

優菜『ダメ、まあいいもう言うなよ』

優斗『了解』

また教室へ

優斗「さつきはごめんな？」

中村「さっきなんて言おうとしたの？」

優斗「そのことは優菜に口止めされてんだ」

中村「そっか、それなら仕方ないよ言いたくないことは聞かない」

優斗「そういや、あいつらは出していいのか？」

優菜『・・・まあいいだろう。クロノス以外は』

優斗「何でアイツだけダメなんだ？」

渚「誰と喋ってんの？」

優斗「ん？優菜」

中村「そ、そうなんだ」

優菜『ともかくクロノス以外は良いぞ』

優斗「よし、イフリート、アリエル」

イフリート「呼んだk」

アリエル「呼びましたk」

皆＋α「誰!？」

優菜『あ』

α「殺せんせー誰ですかその人たち!!」 ミサイル持ち

皆「何でミサイル!？」

アリエル「情報量が多いです!!」

渚「根源が何言ってるの!？」

少女説明中

渚「なるほど納得したわけじゃないけど大体わかった」

殺せんせー「そんな能力があるなんて、キャラが立ちすぎている!」

前原「やっぱ、お前ネタから生まれたんじゃないのか？」

優菜「だから違うって」

寺坂「おい渚ちよつとこい」

渚「・・・うん」

渚たちが出て行った

中村「何かする気だよアイツら」

優菜「殺せるに越したことはないんじゃないのか？」

杉野「でも、なんか嫌な予感が済んだよな。アイツ等は碌なやり方しなそうっていうか・・・」

六時間目

殺せんせー「お題に沿って短歌を作ってみましょう。ラスト七文字を触手なりけりで絞めてください」

優菜「全く思いつかん、優斗は分かるか？」

優斗『ちやんと優斗って言ってくれて俺は嬉しいぞ』

優菜「わ・か・る・の・か？」

優斗『全く』

優菜「だよな」

殺せんせー「おや、渚君もうできたのですか？」

優菜「嘘・・・」

優斗『あれができるなんて化け物だぞ』

優菜『いや、後ろにナイフがある。殺る気だ』

もちろんナイフは当たらなかったが、問題は爆弾だ

渚がせんせーの懐に入ったところで爆弾が爆発した

寺坂「つしやあやつたぜ!!百億いただき!!」

茅野「ちよつと寺坂!渚に何持たせ」

優菜「イフリート」

イフリート「殴るのか？」

優菜「泣くぐらいで」

イフリート「OK」

寺坂「な！お前それは」

殺せんせー「待ちなさい！」

殺せんせーは生きてた！しかも天井に張り付いて

イフリート「なんだよ」

殺せんせー「私にらせてください。これでも先生です」

優菜「・・・わかった。戻れ」

イフリート「チツ」シユン

殺せんせー「じつは先生、月に一度脱皮します。脱いだ皮を爆弾に被せて威力を殺した、つまり月一で使える奥の手です」

優菜『真つ黒だねえ。これがド怒りかあ・・・ガチ怖いじゃん。漫画の比じゃねえ』

殺せんせー「寺坂吉田村松、首謀者は君らだな」

寺坂「いや、渚が勝手に」

そのとき先生が消えたかと思うと、また現れた

クラス全員の表札を持って

殺せんせー「政府との契約ですから先生は決して君たちに危害は加えないが、次また今の方法で暗殺にきたら、君たち以外にはなににするかわかりませんよ。家族や友人：：いや君たち以外地球ごと消しますかねえ」

そして悟った。先生からは地球の裏側に行っても逃げきれないと。皆が悟った

寺坂「な、なんだよ！迷惑のやつに迷惑な殺し方して何が悪いんだよ!!」

殺せんせー「迷惑？とんでもない。君達のアイディア自体は凄くよかった。特に渚君。君の肉迫までの自然な体運びは百点です。先生は見事に隙を突かれました」

渚「・・・!!」

殺せんせー「ただし！寺坂君達は渚君を。渚君は自分を大切にしなかった。そんな生徒に暗殺する資格はありません！」

寺坂「・・・!!」

殺せんせー「人に笑顔で胸を張れる暗殺をしましょう。君達全員、それができる力を秘めた有能な暗殺者だ。暗殺対象である先生からのアドバイスです」

これこそが殺せんせーだ

殺せんせー「さて問題です渚君。先生は殺される気は全くありません皆さんとエンジョイしてから地球を爆破です。それが嫌なら君たちはどうしますか？」

渚「その前に先生を殺します」

殺せんせー「ならば今やってみなさい。殺せたものから今日は帰ってよし!!」

茅野「殺せない、先生・・・あ、名前殺せんせーは？」

優菜「せめて触手にしてよ殺せんせー」

殺せんせー「そうですね。私としても殺されるよりいい。しかしどちらにしようときるとは思ってますけどね。いいでしょう触手一本でも取れたら帰ってよしとします」

優菜「言ったね？」

殺せんせー「あなたのその能力ではわたしの触手は取れませんよ？」

優菜「いや、皆に見せてない奴が一人だけいるんだ」

中村「え、何それ」

優菜「クロノス、ザ・ワールド」

時間が止まった。今のうちに触手を切る

荷物をまとめて、時間を動かした

優菜「そして時は動き出す」

殺せんせー「!!な」

渚「切れてる!？」

優菜「これで帰っていいの？」

殺せんせー「今、一体何を・・・？」

優菜「殺せんせーより早く動いたんじやなくて時間を止めたんだよ。こいつ。クロノ

スの能力」

クロノス「こいつとはなんだ。こいつとは」

岡島「お前その能力があれば女湯に」

優菜「一回死ぬか？」

岡島「・・・」

優菜「じゃあ、また明日」

教室を出た

烏間「君は一体何者なんだ？本当にただの転校生なのか。それとも」

優菜「そんなんじゃないよ、防衛省から送られた人とかじゃないから」

烏間「・・・わかった、また明日」

優菜「はい、また明日」

俺はそのまま帰って。寝ようと思ったが

優菜「なんだこれ」

文面

言い忘れてたけど食材は勝手に補充されるから

優菜「ふうん・・・まあいいや」

寝た

第二十四話（暗殺教室の軌跡『第二話』より）

「身体能力化け物で草」

次の日・山前

優菜「行きますか」

昨日は帰りがかったから、あんなことやったんだけど

渚「あれ？優菜君？」

杉野「よ！」

優菜「おお渚に杉野いっつもこれ上ってるのか？」

渚「そうなんだけどね」

杉野「俺らエンドのE組だからな」

優菜「エンドのE組？」

杉野「ああ、頭の悪いやつや素行不良の生徒が来るんだ」

優菜「俺の場合は素行不良かな？杉野たちは？」

杉野「俺は勉強」

渚「僕もなんだ」

優菜「それは……すまん。代わりに言うてはなんだが上まで連れて行こうか？」

渚「え？どうやって？」

優菜「こう。イフリート、アリエル、クロノス」

イフリート「ん？」

アリエル「何でしょう？」

クロノス「最近よく呼ばれるんだが」

優菜「アリエルは俺、イフリートは渚、クロノスは杉野持って山の上まで連れて行っ

てくれないか」

イフリート「別にいいが」

アリエル「わかりました」

クロノス「いいだろう」

杉野「え、もしかして空飛ぶ？」

優菜「そ」

渚「そうなんだ」

上空

優菜「どうだ」

渚「こんなことはじめてだから落ちないか心配だよ」

イフリート「落ちかけても、すぐ拾ってやるよ」

杉野「めっちゃ気持ちいな」

優菜「だろ！いつつもこれで来ようと思っただけど、どう思う」

イフリート&クロノス「歩けよ！」

優菜「たまには歩くつもりだよ」

渚「それにしても……いいの？優菜君はスカートで。この人たちはほかの人には見えないから……」

優菜「つまり？」

渚「いや、その……パンツ……とか大丈夫なのかなって」

杉野「そうだよ、お前大丈夫なのか？」

優菜「いや、減るもんじゃないし」

杉野&渚「そういう問題じゃない!!」

優菜「もう着くぞ」

校舎前

杉野「めっちゃ楽に来れたな」

渚「そうだね」

優菜「じゃあ俺先行つとくわ」

杉野「今から俺ら暗殺しようと思っただけどうだ？」

優菜「うくん俺は良いや」

杉野「そつかじやあまたあとで」

優菜「じゃ」

その後杉野たちは無事失敗

昼休み

あ、杉野が殺せんせーといる。ということはアレか。行こ

渚「思ったより絡まれてる!!?!」

優菜「わーお、すっごい絡まれてる」

渚「何してんの殺せんせー」

殺せんせー「杉野君今朝見せた癖のある投球ホーム、メジャーに行つた有田投手をまねてますね。でも触手は正直です。彼と比べて君は肩の筋肉の配列が悪い、マネしても彼のような剛速球は投げられませんねえ」

渚「!・・・何でそんなことが先生に断言できるんだよ」

殺せんせー「本人に確かめましたから」

殺せんせーはその時の新聞を見せながら言った

杉野&渚「確かめたんならしようがない!!」

杉野「・・・そっか、やっぱり才能が違うんだな」

殺せんせー「一方で、肘や手首の柔らかさは、君のほうが素晴らしい。鍛えれば彼を大きく上回るでしょう」

優菜「やっぱすげよこの先生・・・じゃ俺は行くよ」

後ついでにちよつとやりたいこと。今日の夜にもどるから身体能力はどれくらいか、いろいろやった結果

50メートル7秒台

握力45Kg

脚力は分かんが

走り幅跳び15m

なにこれ、パレスの時と同じだ・・・さてと、そろそろ戻ろう。チャイムがn

キーンコーンカーンコーン

優斗『バカだねえ』

優菜「・・・ちゃんと謝ろう」

そうして一日が終わった

第二十五話（暗殺教室の軌跡『第三話』より）

「業登場」

優菜「おはよーでござんす。学校に行くでやんす」

優斗『言動が変わってるでやんす』

優菜「お前もだ」

昼休み

殺せんせーが北極の水でかき氷出そうです。もらってきマッスル

殺せんせー「ヌルフフフ」

優菜「先生、俺にもくれよ」

殺せんせー「あれ一人ですか？」

優菜「かき氷くれて、暗殺抜きに食いたい」

殺せんせー「ほら、どうぞ」

優菜「うまいな」

殺せんせー「そうでしょう、そうでしょう」

優菜「お前らも来いよ、そんなとこいないで。磯貝に岡野に片岡に不破に矢田に前原」

みんな「え」

殺せんせー「すごいですねー名前もう覚えたんですか」

優菜「やだなー先生もじゃないですか」

殺せんせー&優菜「H A H A H A H A H A H A H A H A」

磯貝「何してんだ？優菜は暗殺に来たんじゃ？」

優菜「俺はかき氷食いに来た」

前原「それだけかよ！」

殺せんせー「貴方たちもさつきから殺気が馱々洩れますよ。それにこんな危ない対先生ナイフなんて持たないで、花でも愛でて良い笑顔から学んでください」

一瞬で持っていた対先生ナイフがナイフから花に変わった・・・しかし

片岡「ん？ていうか殺せんせー!!この花クラスのみんなで育てた花じゃないですか!!」

殺せんせー「にややつそうなんですか!？」

矢田「ひどい殺せんせー大切に育ててやつと咲いたのに」

殺せんせー「す、すいません今新しい球根を」

殺せんせーが一秒居なくなつたかと思うと、球根を大量に抱えて現れた

殺せんせー「買ってきました!!」

岡野「マツハで植えちゃだめだかんね!!」

殺せんせー「承知しました!!」

片岡「一個一個いたわって!!」

殺せんせー「はい!!」

前原「なーアイツ地球滅ぼすって聞いてっけど」

磯貝「お、おう・・・その割にチューリップ植えてんな」

優菜「うめえ〜」

寺坂「・・・チツモンスターがいい子ぶりやがって」

その後

烏間が先生になったと報告があった。あとハンディキャップ暗殺大会が開かれたが逃げられた

その後

皆「いくちにくいさくんしごころつくしっちはっち」

殺せんせー「ひどいですよ、烏間先生。私の体育は生徒に人気だったのに」

菅谷「嘘つけよ、殺せんせー。身体能力が違いすぎるんだよ、この前もさあ」

少し前

殺せんせー「反復横跳びをやってみましょう。まず先生が見本を見せます」

殺せんせーがマツハで反復横跳びをすると、残像ができて三人になった

殺せんせー「まず基本の視覚分身から、慣れてきたらあやとりも混ぜましょう」

皆「できるか!!」

優菜「こうか？」

殺せんせー「そうそう、慣れてきたらあやとりも混ぜてくださいね」

皆「嘘!」

できるわけないだろって？ギャグに正論は混ぜるな危険だぜ

現在

中村「ホントあんたら二人異次元すぎ」

烏間「やつとターゲットを追っ払えた。授業を続けるぞ」

前原「でも烏間先生こんな訓練意味あんスか？しかも当のターゲットがいる前でさ」

烏間「勉強も暗殺も同じことだ基礎は身に着けるほど役に立つ」

優菜「サツカーのトップ選手のヒールリフト見て簡単そうに見えるのも基礎ができて
るからだからな」

烏間「例えがわかりにくいが、言ってることは同じだ」

それから体育の時間は過ぎていき終わった、教室に戻ろうと校舎を向くと停学処分を
受けていた業がいた

渚「業君・・・帰ってきたんだ」

業「よー渚君久しぶり。わーあれが例の殺せんせー？すっげほんとにタコみたい」

殺せんせー「貴方が業君ですね。今日から停学明けと聞いていました。初日から遅刻とはいけませんねえ」

業「あはは、生活リズム戻らなくて。下の名前で呼んでよ、とりあえずよろしく先生
!!」

殺せんせー「こちらこそ、楽しい一年にしていきましょう」

握手をしたら先生の触手が豆腐みたいに崩れていった。そして業君は左腕に忍ばせてた対先生ナイフで刺そうとしたが、当然のごとく殺せんせーはよけた

業「・・・へーほんとに速いしほんとに効くんだこのナイフ細かく切って手に貼っつけてみたんだけど」

優菜「ずる賢いねえ。アイツは強えぞ」

業「けどさあ先生こんな単純な手に引つかかるとか・・・しかもそんなところまで飛びのくなんてビビリすぎじゃね？殺せないから殺せんせーって聞いてたけど」

殺せんせー「!」

業「あツれエ？せんせーひよつとしてチョロいひと?」

優菜『おーつと、せんせーキレイましたねー』

優斗『これはいけません、生徒に手を出してはいけませんからねえ。どうかして抑えてもらわないと』

茅野「渚、私E組来てから日が浅いから知らないんだけど、彼どんな人なの？」

渚「・・・うん一年二年が同じクラスだったんだけど。二年の時続けざまに暴力沙汰で停学食らって・・・このE組にはそういう生徒も落とされるんだ」

優菜「今じゃここ最強だね。ああいうの一番暗殺に向いてるから」

茅野「あれ？優菜ちゃんたちの能力のほうが強いんじゃない？」

優菜「俺のやつは口で言わなきゃ出てこないんだよ。俺自身のスピードより殺せんせーのほうが早いし言い終わる前に口ふさがれたら出せないよ」

茅野「ああ、そういうことね」

というわけで次回に持ち越し

第二十六話（暗殺教室の軌跡『第四話』より）

「テスト中なんですが先生」

教室・小テスト中

ブニヨン ブニヨン

・・無駄にうるさいパンチだ

優菜「うるさいよ先生!!」

「そういい、俺がナイフを投げたら殺せんせーは避けてこう言った

殺せんせー「にゅやっ!!授業中に暗殺はやめろとあれほど」

優菜「じゃあ壁殴んな!!ブニヨンブニヨンうるさいから!!」

殺せんせー「こ、これは失礼」

実は席が業の左隣なんだけど、寺坂との会話が聞こえるんだよね

寺坂「よお、業あ。あのバケモン怒らせてどーなつても知らねーぞー」

村松「またお家にこもつてた方が良いんじゃない」

業「殺されかけたなら怒るのは当たり前じゃん寺坂。しくじってちびっちゃた誰かの時

と違ってさ」

優菜「え、あの時ちびってたの？」

寺坂「そんな訳ねーだろ!!」

業「ところでさあさつき校庭で聞こえたんだけど」

優菜「えっなにが？」

業「君変な能力持つてるって？喋ってるの聞こえちゃった」

優菜「そのことは、授業終わってからにして」

業「え、だって君も俺もテスト終わってんじゃない」

殺せんせー「コラー！君たち何話してるんですか!!」

業「ごめんごめん殺せんせー、俺もう終わったからさ、ジェラート食って静かにして
るわ」

優菜「まだ食ってないなら俺にもくれよ」

業「いいよー。職員室に冷やしてたやつだし」

殺せんせー「そ、それは昨日先生がイタリアに行って買ったやつ!!」

みんなの心の声『お前のかよ!!』

優菜「ごめん、少し食べちゃった」

業「俺、今絶賛食べてる。で、どーすんの？殴る？」

殺せんせー「殴りません!!残りを全部先生が食べるだけです!!」

優菜「あ、先生。下気をつk」

優菜が言い終える前に、業が転がしておいた対先生BB弾をせんせーが踏んでしまつた

優菜「あ、ごめん言うの遅かった」

殺せんせー「対先生BB弾!!いつの間に!!」

業「あつはー!まあーた引つかかった」

業が殺せんせーに銃を撃つが、もちろん避けた

業「何度でもこう言う手使うよ?授業の邪魔とか関係ないし。それが嫌なら・・・俺でも俺の親でも殺せばいい。でも、その瞬間からもう誰もあんたを先生とは見てくれない。ただの人殺しのモンスターさ。あんたという先生は・・・俺に殺されたことになる」

業はそう言いながらジェラートを

優菜「ジェラート食えなくするぐらいならくれよ!!」

業「ホントぶれないね」

殺せんせー「それに、先生のジェラートです!!」

みんなの心の声『なにこれ（遊戯風）』

業「まあいいや。はいテスト多分全問正解」

殺せんせー「!」

業「じゃね先生、明日も遊ぼうね！」

業は先に帰った

殺せんせー「ヌウ・・・」

放課後・みんな帰って職員室

優菜「殺せんせー」

殺せんせー「何ですか？」

優菜「明日、手入れするんでしょう？」

殺せんせー「もちろんですよ。ヌルフフフ」

優菜「だよね。あとさ、後でジェラート買うんでしょう？」

殺せんせー「行くつもりですが」

優菜「金あるの？」

殺せんせー「!？」

殺せんせーが財布見ると、顔が青くなっていた

殺せんせー「なかつたです（；ω；；）」

優菜「だと思った。金貸すよ」

殺せんせー「いや、ダメですって！教師が生徒におごつてもらうなんて・・・」

優菜「大丈夫、金あるし。それに俺の分も買ってきてほしいから」

殺せんせー「いや、ダメですって」

優菜「もらうまで帰らないしもらわないと今すぐ殺す」

殺せんせー「又ウウ・わかりました。帰らないと困りますからね」

優菜「何円？」

殺せんせー「日本円では五百円前後でしょう」

優菜「じゃあ千五百円渡しとくから。味は今日と同じで」

殺せんせー「わかりました。ではまた明日」

優菜「ありがと。じゃあまた明日」

つぐの日「じゃなくて次の日」

優菜「一番だな」

優斗『七時ってバカなのか？』

優菜「別にいいだろ」

職員室

殺せんせー「おお、優菜君おはようございます。来るの早いですねえ」

優菜&悠「こつちのセリフだ!!」

殺せんせー「これが昨日君に頼まれたジェラートとお釣りです」

優菜「ああ、ありがと」

殺せんせー「にしても今日はどうやって手入れしてやりましょうか」

優菜「業のこと？」

殺せんせー「はい」

優菜「実はさ、業がタコ買って教卓の上で殺してるの夢で見てさ」

殺せんせー「？夢でしょう？」

優菜「正夢って言うのか予知夢って言うのかわからんけど、夢で見たリアルなことはよく現実で起こるんだ。それにあの業だからやりかねん」

殺せんせー「ならその時はタコ焼きでも作りましょうかねえ」

優菜「そんなときには俺もくれよな」

殺せんせー「一個だけならいいでしょう」

そんな感じで時間をつぶした

八時前

優菜「そろそろ教室に戻りますねー」

殺せんせー「はい、それではまた教室で」

職員室を出ようとしたら

烏間「おっと」

優菜「あ、烏間先生おはようございます！」

烏間 「元気だね・・・」

優菜 「先生全然元気なさそうですね」

烏間 「最近忙しくて眠れなくてな」

優菜 「どのぐらいですか？」

烏間 「軽く一週間だ」

優菜 「死ぬ前に寝てください。冗談抜きで」

烏間 「今日は寝るさ」

優菜 「はい、それじゃ」

教室

教卓にはタコが刺さっていた。そして業が笑っている

優菜 「お前だろ？」

業 「そうだけど、なに？むかついた？」

優菜 「いや、衛生的にも悪いし教卓汚いし」

業 「あ、そういうこと」

それからみんなが来るたびに顔を歪ませて席に座っていた

そして殺せんせー

業 「あつごめーん！殺せんせーと間違つて殺したちやつたあ捨てとくから持つてきて

よ」

殺せんせー「・・・優菜君!? あなたの夢ってホントに当たるんですか!? それとも目で見てから来たんですか!?!」

業「え?」

優菜「当たると言つたじゃん」

殺せんせー「そういえば、タコ焼き作る約束でしたね」

殺せんせーの指がドリル状になり一瞬でロケットを持ってきてタコ焼きを作つた

殺せんせー「はいこれ」

優菜「あんがと」

殺せんせー「あと業君も」

業の口にタコ焼きが押し込まれた

業「あつつ!!」

殺せんせー「あとは先生の」

みんなの心の声『ついていけない!!』

殺せんせー「先生はね業君、手入れをします。錆びて鈍った暗殺者の刃を。今日日本気で殺しに来るがいい。その度に先生は君を手入れする」

業「!!」

殺せんせー「放課後までに君の心と体をピカピカに磨いてあげましょう」

第二十七話（暗殺教室の軌跡『第五話』より）

「えっ？この状況からでも入れる保険があるんですか？」

一時間目数学

殺せんせー「どうしてもこの数字が余ってしまう！そんな割り切れないお悩みを持つあなた!!でも大丈夫びったりの方法を用意しました!!黒板に書くのでみんなと一緒に解いてみましょう」

業が銃を抜こうとしたけど、一瞬で触手が抑える

殺せんせー「・・・となります。ああ業君、銃を抜いて撃つまでが遅すぎますよ。暇だったのでネイルアートを入れときました」

それからは無謀に等しかった

四時間目家庭科

今度はナイフで切ろうとしたが、ハートのエプロンを着せられていた

五時間目国語

この時間は武器を懐から出させてさえくれなかった

放課後

学校近くの崖

渚「業君、焦らないでみんなと一緒にやってこうよ。殺せんせーに個人マークされちやったら、どんな手を使つても一人じゃ殺せない。普通の先生とはちがうんだから」

業「やだね。俺が殺したいんだ。変なところで死なれんのが一番ムカつく」

優菜「変なところってほかの殺し屋か？そこまで阿保だったらもう殺してる（イフリート、クロノス下で受け止める準備して）」

イフリート『何をだ？』

優菜「（いいから）イフリート、クロノス」

皆に見えないようにして下に行かせた。保険だよ

殺せんせー「さて業君。今日はたくさん先生に手入れをされましたね。まだまだ殺しに来てもいいですよ？もっとピカピカに磨いてあげます」

業「確認したいんだけど殺せんせーって先生だよね？」

殺せんせー「？はい」

業「先生つてき命を懸けて生徒を守ってくれる人？」

殺せんせー「もちろん、先生ですから」

業「そっかよかった。なら殺せるよ」

すると業は後ろから崖を飛び降りた

業「確実に」

優菜『まあ、やばかったらイフリート達に助けらせるし』

殺せんせーが崖の下に飛んで行き、触手をねばねばにして蜘蛛の巣状に張った

もちろん業は助かったためイフリートたちは戻した

業たちが戻ってきた

渚「・・・業君、平然と無茶したね」

業「別に・・・今のが考えた限りじゃ一番殺せると思っただけ。しばらくは大人しくして計画の練り直しかな」

殺せんせー「おやあ？もうネタ切れですか？報復用の手入れ道具はまだ沢山ありますよ？君も案外チョロいですねえ」

業「殺すよ明日にでも」

優菜「あ、そうだ殺せんせーに渡すものがあるんだけど」

殺せんせー「？なんですか？」

優菜「これ」

そう言い、俺は一万円を渡した

殺せんせー「こッ！こんなもの受け取れるわけないでしょ!!」

優菜「理由は二つある。俺ら以外の誰からも殺されるなつて賄賂と先生・・・今金ゼロ

だから」

殺せんせー「?どういうことですか?」

業「帰ろうぜ渚君、帰りめし食ってこーよ」

業は誰かさんの財布を握っている

殺せんせー「ちよッ!それ先生の財布!」

業「だからさあ、職員室に無防備で置いとくなつて」

殺せんせー「返しなさい!!」

業「いいよー」

業が殺せんせーに財布を投げ渡し、殺せんせーが中を確認し震えた声でこう言った

殺せんせー「な、中身抜かれてますけど!」

業「はした金だったから募金しちゃった」

殺せんせー「にゅやーッ不良偽善者!!」

優菜「な?もらつとけつて」

殺せんせー「お世話になりますー」(; ω ;)

優菜「利子は一日イチゴね」

殺せんせー「ゑ」

優菜「意味わかんなかった?一日五割ね」

殺せんせー「にゅやッ!!そんなの返せませんよ!？」

優菜「嘘、嘘。利子は無しでいいよ」

そうして一日が終わった

第二十八話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十話』より）

「殺人鬼」

寝ると、ちゃんと戻れるようになっていた

悠『戻れてよかったな』

優斗「面倒だよ。女になるのはパレスで十分なのに。後こっちじゃ俺が優斗だからな？」

悠『どうせこっちでも女になる日が来るさ』

放課後

優菜『どうしよ、なにしよ。積みゲーもないしな。メモントスにでも行くか』

イフリート『バカか！』

悠『バカなの？』

優菜『バカじゃない』

メモントスきますた

トウルース『さて、金稼ぎとレベル上げ……ん？なんか見覚えがある。ていうか会いたくなかった奴が。わあ、服が真っ黒』

明智「誰かいるのか？」

トウルース『あ、これ終わつたかも』

明智「殺されたくなかつたら今すぐ出て来い」

トウルース「出たら、殺さないのか？」

明智「女か、だがここにいるということはペルソナが使えるんだろ？死にたくなかつたら出て来いと言っている」

トウルース「クロノス、ザ・ワールド」

時間が止まつてる間に明智の横に行つて、こめかみに銃を突きつける

トウルース「そして時は動き出す」

時間が進みだし、明智が銃に気付く

明智「な!？」

トウルース「形勢逆転だね」

明智「何のつもりだ？」

トウルース「こつちのセリフここで何してるんだ？明智」

明智「クソつ、知ってるのか。誰の差し金だ」

トウルース「契約を立てたいんだがいいか？その代わりにこのことは誰にも言わない」

明智「脅しか？」

トウルース「そうだ、取引だ」

明智「条件は？」

トウルース「人の廃人化をやめろ」

明智「それは俺の存在意義に関わる」

トウルース「お前は獅童に利用されて捨てられるだけだぞ」

明智「何に？」

トウルース「俺らのどこに来る気はないか？」

明智「行くわけがないだろ」

トウルース「お前は、獅童の息子だろ？」

明智「!!」

トウルース「それで、獅童から完璧に信じられたときに、裏切る……だろ？」

明智「……そうだ」

トウルース「だけどその前に獅童の認知の明智に殺される」

明智「何だ?!」

トウルース「予言してやろう。お前は家の校長と奥村フーズの社長を殺せと言われるだろう。奥村だけは殺すな。もし殺したらその時はお前の首をへし折る」

明智「……」

トウルース「気が向いたらで構わんが今言ったことは守れよ」

明智「・・・」

トウルース「クロノスザ・ワールド」

明智から少しでも遠くに逃げだし、メメントスから出た

優斗『口から心臓飛び出るかと思った。もう帰ろう』

次の日は学校に行った

放課後

竜司「よお」

優斗「なんだ竜司」

竜司「えつとな蓮と一緒にトレーニング行こうかと思ってんだけど。お前もどうだ

？」

蓮「来ないか？」

優斗「別にいいぞ」

竜司「じゃあ行こうぜ！」

渋谷セントラル街・トレーニングジム前

優斗「ここか」

竜司「そ、入ろうぜ」

中で少しトレーニングした

竜司「ブランクあるにしろ、何でおれより早いんだ？」

優斗「そりゃ異世界の山で走れbゲブンゲブン」

蓮「今なんて？」

優斗「何でもねえぞ」

竜司「いや、今異世界って」

優斗「そりゃ俺からしたらここ異世界だし昨日すごい山見つけたから（早口）」

竜司「ホントか？」

優斗「嘘なんてつかん」

蓮「ならいい」

竜司「今日は帰るか。また明日な」

優斗「ああ」

そのあといつも通り蓮を送り帰って一日を終えた

第二十九話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十一話』より）

「勉強——!!」

一日目は普通に勉強した。向こうの世界の試験が馬鹿みたいにレベル高いからバカだろアイツマジで。俺が一番最初の世界では大学行く前に死んじやったけど流石にこんだけ時間あつたら頭良くなるわ

そして二日目・学校

優斗「よう」

蓮「どうした？」

優斗「今日泊まりで勉強しねえか？」

蓮「おじさんに一回聞かないと」

放課後・ルブラン

惣治郎「勉強か、まあいいだろう。ずっとあの屋根裏じゃ息も詰まっちゃう」

優斗『じゃあなんで屋根裏に!?!』

惣治郎「いっていいぞ。猫の事は任せろ」

蓮「わかった、準備してくる」

優斗「おう」

十分後

蓮「いつてきます」

惣治郎「おう」

優斗「さつき連絡したらめちやくちや歓迎してたぞ家の親」

蓮「そうか。ちなみに今日の夜ごはんは？」

優斗「ガツツリ空気だなお前」

夜飯食つて風呂入って

その夜

蓮「お前どこの勉強してるんだ？」

優斗「ん？高校三年生の終盤の勉強」

蓮「お前、やりすぎだろ」

優斗「やって損はない」

蓮「それはそうだが、今は今度の中間の勉強したらどうだ？」

優斗「それはそうだけでももうすぐ終わるから」

蓮「終わるのか・・・」

悠『今日の夜向こうに行くんだよな？』

優斗『行くよ』

悠『俺向こういったら外出たいんだけどいいか？』

優斗『別にいいぞ。最近お前出す機会ないしお前も何も言わないから。ぶっちゃけ忘れそうなんだよ』

悠『ひでえなおい』

蓮『どうした？』

優斗『いや、この問題考えてた。わかるか？』

蓮『わかると思うか？』

優斗『いや、分かっただらすごいと思う』

蓮『なら聞くな』

優斗『すまん』

12時

蓮『そろそろ寝ないか？』

優斗『それもそうだな』

蓮は客人なのでベッドで寝てもらい俺は床に寝た
ベルベットルーム

カロリーヌ？「・・・い！しゅ・・・ん！お・・・ろ」

優斗『何か聞こえる・・・うるさいから起きよう』

ジュステイーヌ「起きましたか？」

優斗「なんだうるさかったのはジュステイーヌか」

ジュステイーヌ「私ではありません。うるさいのはカロリーヌです」

優斗「え？」

ペルベツトルームがおかしい

優斗「どうなってるんだ？これ」

ジュステイーヌ「あなたと囚人が同時に来たのでこの世界が少し歪んでしまい半分部屋半分牢獄となっています」

イゴール「今蓮様をカロリーヌに起こさせていますが・・・起きないので先にあなたから話しましょう」

優斗「なんだ？」

イゴール「貴方は今こことは違う。そしてあの現実世界とも違う。いわば異世界に行つてはいませんか？」

優斗「いつてるよ」

イゴール「然様ですか。実はその世界にあなたとは別の異端な存在が入りそうなので
す」

優斗「それは仲間だったりする？」

イゴール「それは分かりかねますが・・・少なくとも敵意はありません」

優斗「えつと、仲良くなれってことでいい？」

イゴール「それでいいでしょう。では用はそれだけですのでもた」

優斗「ああ、また今度」

そうして俺は眠りについた

第三十話（暗殺教室の軌跡『第六話』より）

「異端とは？」

起きたよ

うん、起きた

ただねいつもと決定的に違うところがあるんだ

隣に蓮がいるんだけど

優菜「ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ」

蓮「何だ!?何が起こった!？」

目と目があう瞬間

優菜&蓮「ゑゑゑゑゑゑゑゑ」

落ち着いた後・リビング

蓮「誰君どっこい」

優菜「俺はな、優斗だよ」

蓮「なんとなく想像はできてた。それってパレスの時の格好だよな？じゃあここはパ

レスなのか？」

優菜 「ここは一応異世界だよ。割と疲れる」

蓮 「そうなのか？」

優菜 「とりあえずご丁寧に制服たたまれてあるから着替えたらどうだ？」

蓮 「それもそうだな」

その時ふと神様からもらった紙に眼が止まった。紙が増えていたのだ

文面

一人じゃかわいそうかなって思ってた友達呼んであげたよ!!名前そのまま入学して
るから。友達君は君についてくるようにしたからあとは頑張つて!

追伸

友達の分の鍵も作ったよ!!

追伸2

他の世界行くときはついてこないから安心してね!

優菜 『あつたことないのにめちやくちやフレンドリーなの腹立つ。てか他の世界って
何だよ!!行く予定あんのか!?!』

登校中

ここの俺の設定を教えた

蓮 「お前その姿で大丈夫なのか？」

優菜「ああ、それに家真ん前だから遅刻は絶対ないと思う。今から理事長室行くから、壺かなんかぶつ壊してE組はいれ」

蓮「E組がいいのか？」

優菜「死にたいなら？ 以上に行ってもいいぞ」

蓮「E組行きます」

すると、渚が登校してきた。これから山を登るんだぜ？

渚「あれ？ 優菜君その人だれ？」

優菜「隣に引越してきたんだけど、どうすればいいかわからないから教えてくれだ
と」

蓮「理事長室まで連れて行ってくれないか？」

優菜「わかった、渚は先行ってくれ」

渚「じゃあ教室で」

理事長室

蓮「行ってくる」

優菜「がんばれよ」

すると中から陶器が割れる音がしたり、尋常じやない殺気が漏れたりした
そして蓮が死にそうな顔で出てきた

優菜「大丈夫・・・じゃないな」

蓮「殺気ヤバすぎるだろ。絶対何人か殺してる!!」

優菜「E組だよな？」

蓮「もちろん」

優菜「じゃあ、あの山の山頂まで頑張るぞ」

蓮「・・・マジ？」

優菜「無理そうだったらアイツらに連れて行ってもらうが」

蓮「呼んでくれ」

優菜「わかった」

外

優菜「クロノス、イフリート」

クロノス「次は何だ？」

イフリート「何でも任せろ！（ヤケクソ）」

優菜「クロノスは蓮を持ってあげてイフリートは俺」

そうして山頂

岡島「お前いつつも飛んできてずりいぞ!!」

優菜「ごめんて」

蓮「職員室に行けばいいのか？」

優菜「ああ」

岡島「？そいつ誰だ？」

優菜「新しい仲間だ」

岡島「まさか・・殺し屋!？」

優菜「俺と同じでただの転校生だ!!」

岡島「ただの転校生ではないだろ!!」

職員室

蓮は烏間先生に連れてかれた

殺せんせー「ヌルフフ、クラスメイトが増えるのは良いことですねぇ」

優菜「アイツ大丈夫かなあ」

殺せんせー「殺されたりはしませんよ」

優菜「いや、なんか面倒になりそうなこと喋らないか」

殺せんせー「？」

優菜「じゃあ、教室で」

殺せんせー「はい」

教室

渚「あの人結局E組にきたんだ」

優菜「そうなんだよ。なんでも理事長室の壺に肘が当たっちゃって落として割れちゃったんだと」

中村「つまり、あんたと同じでドジやったと」

優菜「まあ、そうなるな」

倉橋「まあ、殺す手が増えるのは良いことだけどねえ」

すると、殺せんせーが教室に入ってきた

殺せんせー「皆さん、席についてください」

みんな席に着いた

殺せんせー「今日は皆さんに知らせたい人がいます。知ってる方もいるでしょうが自己紹介してもらいましょう。どうぞ入ってください」

蓮「えっと、雨宮蓮です。これからよろしく」

殺せんせー「席はどこにしましょうか」

蓮「決めてもいいですか？」

殺せんせー「ああ、はい。いいですよ」

蓮は俺の左隣に来た

蓮「頼むぞ」

優菜「ああ」

殺せんせー「では、出席を取りましょう」

第三十一話（暗殺教室の軌跡『第七話』より）

「次はどうなるんだ？」

理科の授業が終わった。内容は「お菓子の着色料を取り出そう」だったんだが

殺せんせー「お菓子から着色料を取り出す実験はこれで終了!!余ったお菓子は先生が回収しておきます」

前原「給料日前だから授業でおやつを調達してやがる・・・」

中村「地球を滅ぼす奴がなんで給料で暮らしてんのよ」

その時奥田が教卓の前まで歩いてきいた

奥田「あ・・・あのっ先生・・・毒です!!飲んでください!!」

殺せんせー「・・・奥田さん、これはまた正直な暗殺ですねえ」

蓮「正直すぎる」

優菜「アレが奥田さんの良い所だ」

奥田「あつ・・・あのあの、わ、私皆みたいにな意打ちとかうまくできなくて・・・でもっ化学なら得意なんで真心こめて作ったんです!!」

菅谷「これで飲むほどそいつは馬鹿じゃ」

殺せんせー「それはそれは・・・ではいただきます」

みんなの心の声『飲んだ!!』

殺せんせー「!!こ、これは・・・」

にゅつと角が生えた

みんなの心の声『なんか角生えたぞ』

殺せんせー「この味は水酸化ナトリウムですね。人間が飲めば有害ですが、先生には

効きませんねえ」

奥田「そうですか・・・」

殺せんせー「あと二本あるんですね」

奥田「は、はい！」

殺せんせー「それでは・・・ゴクリ。うつつぐあつ！」

バサツと翼も生えた

みんなの心の声『今度は羽生えた!!無駄に豪華な顔になってきたぞ』

殺せんせー「酢酸タリウムの味ですね。では最後の一本」

みんなの心の声『どうなる!?!最後はどうなるんだ!?!』

殺せんせー「ゴクリ」

最後の毒を飲むと、角も翼も消えて白い真顔になった

みんなの心の声『真顔になった・・・変化の法則性が読めねーよ!!』
殺せんせー「王水ですねぇ。どれも先生の表情を変える程度です」

奥田「・・・はい・・・」

杉野「てか先生真顔薄っ!!」

前原「顔文字みてーだな!!」

殺せんせー「先生のことは嫌いでも暗殺の事は嫌いにならないでください」

岡島「いきなりどうした!?!」

優菜「どつかで聞いた事あるセリフだなあオイ!!」

殺せんせー「それとね奥田さん。生徒一人で毒を作るのは安全管理上見過ごせません

よ」

奥田「はい、すみませんでした・・・」

殺せんせー「このあと時間あるのなら一緒に先生を殺す毒薬を研究しましょう」

奥田「!・・・は、はいっ!!」

放課後

優菜たちの家

優菜「どうしようか」

蓮「どうした?」

優菜「どこで寝るかだよ」

蓮「別に同じでもいいだろ」

優菜「・・・お前結構大胆だったんだな。天然か？」

蓮「なにが？」

優菜「まあいいわ。変な気起こしたらどうなるかわかってるよな？」

蓮「そうだったらベッドから出るわ。死にたくないし、そんな気もない」

優菜「それでいい。言うのめんどいから」

S N S

優菜「どうだった？」

奥田「先生から宿題を出されて・・・今作ってるところです」

優菜「紙とかに書いてるってことか？」

奥田「はい」

優菜「写真撮って送ってくれないか？ちよつと見てみたい」

奥田「いいですよ」

写真が送られてきた

優菜「ありがと、また明日」

奥田「はい、また明日」

SNS終わり

蓮「なんだそれ」

優菜「殺せんせーを殺さないようにする薬の元。先生は知らないんだろうけど」

蓮「?でも殺すのが目的なんだろう?」

優菜「そこはおいおい話す。この薬じや1%までしか下がらないから0%にしたいんだ」

蓮「どうやって?」

優菜「アリエル」

アリエル「はい?」

優菜「これ改良できると思うか?」

アリエル「方向性によりますね。何に使うかわかれば」

優菜「化け物に使うんだけど」

蓮『化け物・・・』

アリエル「では化け物のDNAなどを見てからですかね」

蓮「アリエルでできるのか?」

優菜「アリエルをなめたら痛い目見るぞ」

アリエル「任せてください」

優菜「はい、これこの前取った先生の触手」

アリエル「確かに受け取りました。あとはお任せを」

蓮「今日帰るのか？」

優菜「いや明日まではいる予定だぞ」

蓮「そうか・・・そろそろ寝ようか」

優菜「だな」

第三十二話（暗殺教室の軌跡 『第八話』より）

「騙したなッ!!」

茅野「で、その毒薬を作って来いって言われたんだ」

奥田「はい!!理論上はこれが一番効果あるって!!」

蓮「いっつも殺されないように逃げるのに、自分を殺す毒を自分で作らせるって騙されてるとしか思えないんだが?」

優菜「まあ、見とけて」

すると殺せんせーが教室に入ってきた

渚「あ、来たよ。渡して来れば?」

奥田「はい!!」

奥田が殺せんせーに駆け寄った

奥田「先生これ・・・」

殺せんせー「さすがです・・・では早速いただきます」

毒を飲んだ

殺せんせー「・・・ヌルフフフフフ、ありがとう奥田さん。君のおかげで・・・先

生は新たなステージへ進めそうです」

奥田「・・・えっそれってどういう・・・」

殺せんせー「グオオオオオオオオオオオオオオ」

その瞬間殺せんせーがまばゆいぐらいに光、そして・・・

殺せんせー「ヌフウ」

ドラクエにいそうなはぐれ○○○になった

みんなの心の声『溶けた!!』

殺せんせー「君に作ってもらったのはね、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬なのです」

そーいい片岡の机にスポツと入った

殺せんせー「液状ゆえにどんな隙間にも入り込むことが可能に!!しかもスピードはそのままに!!さあ殺ってみなさい!!」

殺せんせーは天井や床の隙間に入り込みながら飛び回った

前原「ちよっ・・・無理無理これ無理!!床とか天井に潜り込まれちゃ狙いようないって!!」

木村「なんだこのはぐれ先生!!」

茅野「奥田さん・・・先生あの薬毒って言ったんだよね」

奥田「だっ……だましたんですか殺せんせー!？」

蓮「あまりにも素直すぎるだろ奥田」

優菜「全くだ」

殺せんせー「奥田さん、暗殺には人をだます国語力も必要ですよ」

奥田「えっ……」

殺せんせー「どんなに優れた毒作れても……今回のように馬鹿正直に渡したのではターゲットに利用されて終わりです。渚君君が先生に毒を盛るならどうしますか？」

渚「え……うーん、先生の好きな甘いジュースで毒を割って……特製手作りジュースだと言つて渡す……とかかな」

殺せんせー「そう、人をだますには相手の気持ちを知る必要がある。言葉に工夫をする必要がある。上手な毒の盛り方それに必要なのが国語力です。君の理科の才能は将来みんなの役に立ってます。それを多くの人に分かりやすく伝えるために……毒を渡す国語力も鍛えてください」

奥田「は……はい!!」

業「あつはは、やっぱり暗殺以前の問題だね」

放課後・職員室

優菜「あ、先生はさ、自分が爆発しなくなる薬があるとすれば飲む？」

殺せんせー「……わかりません……。皆さんともつと一緒にいたいと思えば飲むかもしれないですねえ」

優菜「ふくん。まあいいやまた明日」

殺せんせー「はい、また明日」

優菜が行った後

烏間「みんな帰つたみたいだな」

殺せんせー「烏間先生」

烏間「どうした？」

殺せんせー「さっき優菜君に爆発しなくなる薬があれば飲むかと聞かれたんですが」

烏間「？それがどうした」

殺せんせー「わからないですか？優菜君は転校してきた身ですが、烏間先生たちから

は私が破壊するといっているはずですよ。他の生徒も同様に」

烏間「!!ということとは」

殺せんせー「ええ、私も生徒を疑いたくはないですが、優菜君は素性が知れない危険人物かもしれないということです。蓮君も同様に」

烏間「蓮は、優菜が連れてきたからか」

殺せんせー「ええ、烏間先生が負けるとは思つてはいませんが、あの能力……十分

気をつけてほしいということですよ」

烏間「・・・わかった。警戒はしておく」

その頃の優菜・家

優菜「ハックション!!!」

蓮「風邪か？」

優菜「いや、分からん」

蓮「それとも誰かが噂してるとってヤツか？」

優菜「ドラマの見すぎじゃないか？そんなのホントにある訳ないだろ」

蓮「なら風邪薬飲んで寝ろ」

第三十三話（暗殺教室の軌跡『第九話』より）

「しまったッ！（迫真）」

優菜『今日はビッチ先生の回だ』

蓮「行くか」

優菜「……今日ぐらい山道歩くか」

蓮「……あれをか？」

優菜「……トレーニングと思え」

旧校舎前

蓮「みんな……いつつも……これ歩いてるのか」ゼーゼー

優菜「たまには……いいだろ」ゼーゼー

殺せんせー「ヌルフフフ、今日は歩いてきたんですねえ」

優菜「きつついですよ。これ上るの」

殺せんせー「あ、そうそう烏間先生が優菜君と蓮君を探してましたよ」

優菜「俺らを？」

殺せんせー「ええ、職員室にいると思うので行ったらどうでしょう。先生は今からコ

ンビニでお菓子かって来ます」

蓮「わかりました」

職員室

優菜「失礼しまーす。殺せんせーが俺らを烏間先生が探してたって聞いたんですけど……」

烏間「ああ、君らか」

蓮「用って何ですか？」

烏間「少し聞きたいことがあってな」

優菜「聞きたいこと？」

烏間「この前アイツに聞いたが爆発しなくなる薬があれば飲むかどうかと聞いたのか？」

優菜「?はい」

烏間「俺からはアイツが破壊するといっているはずだが」

優菜「!!」

烏間「単刀直入に聞こう」

蓮『何を言ってるんだ?』

烏間「君たちは一体何者なんだ？」

優菜「・・・フフフ」

烏間「何を笑ってる？」

優菜「いや、やらかしたなあと思って」

烏間「どういう意味だ？」

優菜「言うつもりなかったんすけどね」

蓮『話についていけない』

優菜「俺らはこの世界の人間じゃないっす」

烏間「なに!？」

優菜「どこから来たとかは話が長くなるんで省きますけど、俺はこの世界が三個目の

世界です」

烏間「・・・ならその力はどの世界のものだ？」

優菜「二個目っす」

烏間「そうか、じゃあ蓮はこの世界の友達か？」

優菜「いや、蓮は二個目からこっち来るときに巻き込まれただけです」

蓮が察した

蓮「はい、そうです」

烏間「そうだったのか。だが一番聞きたいのは爆発するとどうして知っていたのかと

いうことだ」

優菜「それはですね。想像で言ったんですよ」

烏間「想像？」

優菜「ええ、ゲームでは大体スピードに振りすぎると力がないですよ。だったら地球なんか壊せるのか？って思ってたたら故意で壊せないんじゃないかと思っただけ。だったら相当の爆発ぐらいかな。それで少しカマかけたらここまでなっちゃったんですよ（ぱっと思いついたこと言っちゃった・・・）」

烏間「それでつい言ってしまったと」

優菜「はあい」

烏間「さっき少しスルーしたが別の世界から来たといったな。それもそれで怪しいのだが・・・。皆には言ったのか？」

優菜「言っていないです。この世界で最初に言ったのは烏間先生が最初です。それで聞きたいことは終わりですか？」

烏間「ああ」

優菜「じゃあもう行きますね」

職員室を出た

第三十四話（暗殺教室の軌跡『第十話』より）

「素性バレ」

優菜「蓮すまん巻き込んで」

蓮「合わせてよかつたんだよな？」

優菜「ありがてえ」

教室に行くとき、茅乃と渚が登校していた

渚「あ、優菜君おはよう」そー

優菜「なぜ目をそらす」

渚「いやその、さつき職員室通ったときに聞いちやっただけ」

優菜「!!」

茅野「何の話？」

優菜「蓮、渚を連行するぞ」

蓮「わかった」

渚「え!?!ちよ」

茅野「なにしてんの!?!」

優菜「ちよつと話すだけだから」

裏山

優菜「どこから聞いた？」

渚「烏間先生の聞きたいことがあるのどこから」

優菜「全部じゃないか」

渚「それで、優菜たちってこの世界の人じゃないの？」

優菜「ああ、そうだよ」

渚「ホントなんだ・・・」

蓮「話したらいいじゃないかみんなに」

優菜「理由があるんだよ」

渚「理由？」

優菜「話すのが面倒だからだ」

渚「へ？」

優菜「特に莉桜とかが、ものすごく聞いてきそうだったから話したくなかった」

すると近くの茂みから物音がした

優菜「誰だ？」殺気満々

何者かはガサガサと音を立てながら逃げだした

優菜「逃がすかよ!!」

それから追いかけたが、結局逃げられてしまった

優菜「もうだめだおしまいだあ（ベジータ風）」

渚「あれがE組の誰かだったらもう話してると思うよ。だからE組じゃないことを祈ろう」

優菜「そのようなことがあるはずがございませぬ（パラガス風）E組以外この時間にいるわけがない」

蓮「……とりあえずいてもしょうがないから戻ろう」

渚「あれ？よく考えたら時間止めればよかつたんじゃ」

優菜「あ……」

蓮「……戻ろう」

教室

中村「おーい優菜くん？」

中村の呼び止める声に背筋がゾツとした。嫌な予感しかしない

優菜「な、何かな？中村さん」

中村「さつき茅野さんから聞いたんだけどさ、渚と何してたのかなあ？」

優菜「いやちよつと聞きたいことがあってね。だる蓮」

蓮「ああ」

中村「へくそうなんだく……てつきりみんなに言えないことかと思つた」

優菜「そ、そんな訳ねえだろ」

中村「だよね、まさか異世界から来たなんて言えないよねえ」

優菜「……は？」

中村「さつき裏山で話してたでしょ」

優菜「どこから？」

中村「全部」

優菜「逃げていい？」

中村「逃がすと思う？」

優菜「思わない」

その瞬間俺は全力でターンし逃げようとしたが

中村「押さえろ!!」

皆につかまつた

優菜「ギヤス」

そして教室まで引きずられて、椅子に座らせられロープで縛られた

優菜「ここまでやることねーだろ」

中村「逃げるでしょ」

業「こんな面白そうなの逃がすわけないじゃん」

寺坂「さっさと吐け」

優菜「何で珍しく寺坂いんだよ!!」

寺坂「業に呼ばれたんだよ!! 最初は面倒だったけど今となつちや面白れえから協力してんだよ!!」

優菜「なんで、そういうところ律儀なんだよ!!」

中村「で、異世界から来たって本当?」

優菜「ああ、そうだよ!! 俺は異世界から来たよ!! だろ蓮」

蓮「? なんのことだ?」

優菜「!? 裏切るのか蓮!」

蓮「俺はただお前の隣に引っ越してきた。ただの中学三年生だ」

優菜「おい! 片手が出るくらいでいい縄をほどいてくれ!!」

中村「面白そうだからいいぞよ」

片手が出た

優菜「ようし、寺坂! 蓮をこっちにやれ!!」

寺坂「よし、任せろ!!」

蓮「おい！ちよつと放せつて、おい！やめ」

蓮が目の前まできた

優菜「ようし手を出せよ蓮」

手を手前までやったが

優菜「おい！全力で握るんじやあない！！業！開かせろ！」

業「OK」

業が手を開かせた

優菜「よし」

俺は蓮の手を握つてこう叫んだ

優菜「出ろ、アルセーヌ！！」

アルセーヌ「む？なんだ？ここはどこだ？」

皆『なんか出た！！』

蓮『何で出た！？』

優菜「これが証拠だ！俺のイフリート、アリエル、クロノスと同じ能力だ！！」

イフリート「呼んだか？ん？お前確か」

アリエル「呼びましたか？あれ？あなたは確か」

クロノス「また呼んだのか？ん？お前は蓮の」

アルセーヌ「お前らは優斗のペルソナだったな確か」

蓮「ああ認めるよ！俺も異世界の人間だよ」

中村「説明を頼めるかな？」

優菜「全部話すから縄ほどいてくれ」

中村「よし寺坂ほどいてやれ」

寺坂「いいのか？」

中村「さすがに逃げんでしょ」

ほどいてもらった

優菜「えつとな最初から話すと（全略）ってことなんだ」

この世界が漫画ってことは言っていないけど

中村「ほお大変だな勉強とか宿題とか」

優菜「いまなんつった？」

中村「宿題とか大変だなんて、てまさか気づいてなかったの？」

優菜「気づきたくなかった・・・」

蓮「夏休みの宿題が二倍・・・」

中村「いや、すぐ思い付くでしょ」

殺せんせー「それで、話は終わりですか？」

殺せんせーが窓からメモ帳に何かを書きながら入ってきた
皆『いつからいた!?!』

優菜「いつからいたの殺せんせー」

殺せんせー「説明の最初の時に入ったんですけど、誰も気づかないので先生ちよつと寂しかったです」

優菜「今の全部聞いてたんだろ? 地味に手にメモ帳持ってるし」

殺せんせー「全部メモっておきました」

優菜「だろうね」

殺せんせー「ですが、どの世界に行ってもあなたは貴方です、ほかの何物でもありません。それぞれの世界で自分がいいと思ったことをすればいい。何をしたいか何をしたらいけないか。あなたならわかるでしょう」

優菜「わかっていますって」

殺せんせー「じゃあ皆さんは席に座りましょう。少し遅れましたがホームルームを始めます」

第三十五話（暗殺教室の軌跡『第十一話』より）

「僕らのピッチ」

殺せんせー「さて、では新しい先生を紹介します。入ってください」

入口からグラビアモデルみたいな体系の金髪外国人が入ってきた

烏間「今日から来た外国語の臨時講師を紹介する」

イリーナ「イリーナ・イエラピッチと申します。皆さんよろしく!!」

烏間「本格的な外国語に触れさせたいとの学校の意向だ。英語の半分は彼女の受け持ちで文句はないな？」

殺せんせー「・・・仕方ありませんねえ」

蓮「すつげえ先生だな」

優菜「でもこの時期のE組に来るってことは」

業「普通の人じゃあないだろうね」

外で暗殺拔きのサッカー中

優菜「先生！パス」

殺せんせー「はい！優菜君！」

先生からパスが通る

デیفエンダーが三人一人ずつ向かってくる

岡島「通さんぞ!! 優菜!! お前が男でも関係ねえ!! 俺はお前の女体に触りたい!!」

優菜「欲全開だなおい!」

岡島「うおお!」

俺はシザーズをしながら左にカラダを寄せ岡島が寄ったら右に切り返す

岡島「なに!」

次は磯貝

磯貝「そう簡単には通さないぞ!」

優菜「止められるかな?」

ちよつと左にボールを出す

磯貝が足を出す

そして俺は右足でボールを右に引つ張り右足で着地しながら左足で前にだす

優菜「マルセイユルーレット」

磯貝「そんな!」

次は・・・杉野か

杉野「俺は野球派だがやるときは全力だぞ!!」

優菜「あれ見てまだやる気があるのか」

俺はチクレからのルーレットで交わした

優菜「そしてこれがアルゼンチン版ルーレット」

杉野「な!？」

ゴールキーパーは寺坂か

優菜「寺坂お前カラダ強いんだから向かって来いよ」

寺坂「へっ挑発には乗らねえぜ」

優菜「そつかくお前馬鹿だから守ることしか考えられないんだねくバカだから」

寺坂「なんだとおー!!」

寺坂がキレて走ってくる

もう少して届く距離まで来て

優菜「そしてこれがヒールリフト」

寺坂「なに!？」

寺坂が手を伸ばすがボールは手の少し上を行きそのままゴールに入った

渚「はい・っつた」

前原「入ったぞ、おい！」

殺せんせー「うまい!!」

木村「強すぎんだろ」

優菜「あ、そうそう寺坂」

寺坂「ああん？なんだよ」

優菜「サッカーはゴールキーパーが一体一の時はゴールコースふさぐために向かつてくるんだよ」

寺坂「へ、知るかよ」

優菜「PKしようぜPk」

寺坂「誰がやるかよ」

優菜「俺に勝ったら一万円やる」

寺坂「早く準備しろ。さっさとやるぞ」

優菜「そういうところ嫌いじゃないぞ」

イリーナ「殺せんせー！鳥間先生から聞きましたわすつごく足がお速いんですつて？」

殺せんせー「いやあそれほどでもないですねえ」

イリーナ「お願いがあるの一度本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて私が英語を教える間に勝ってきてくださらない？」

殺せんせー「お安い御用ですベトナムに言い店知ってますから」

殺せんせーは飛んで行った

磯貝「……で、えーとイリーナ……先生？授業始まるし教室戻ります？」

イリーナ「授業？……ああ、各自適当に自習でもしてなさい。それとファーストネームできやすく呼ぶのやめてくれる？あのタコの前以外では先生を演じるつもりもないし」「イエラビッチお姉さま」と呼びなさい」

業「……でどーすんの？ビッチ姉さん」

イリーナ「略すな!!」

業「あんた殺し屋なんでしょ？クラス総がかりで殺せないモンスタービッチ姉さん一人やれんの？」

イリーナ「……ガキが。大人にはね大人の殺り方があるのよ」

イリーナが渚に近寄る

スマホ用意

イリーナ「潮田渚ってあんたよね？」

カメラの動画起動

その瞬間渚はキスされた

録画中

渚……ファーストキスをあんなビッチに

渚が脱力した

お前の勇士はしつかり収めたぞ

録画終了

イリーナ「あとで職員室にいらつしやい。あんたが調べた奴の情報聞いてみたいわ。ま：強制的に話させる方法なんていくらでもあるけどね。その他も!!有力な情報持つてる子は話に来なさい!良いこととしてあげるわよ。女子にはオトコだつて貸してあげるし、技術も人脈も全てあるのがプロの仕事よガキは外野で大人しく拝んでなさい。あと、少しでも私の暗殺の邪魔をしたら殺すわよ」

優菜「言いたいこと言いきった?」

イリーナ「何ですって?」

優菜「殺すヒントあげるから職員室行こうよ」

イリーナ「・・・わかったわ、行きましょう」

優菜「あ、そうそう寺坂これキャンセル代」

素晴らしい俺は一万円渡した

寺坂「お、おう」

職員室

イリーナ「で、ヒントって何?」

優菜「鉛の玉は使わないほうが良いですよビッチ先生」

イリーナ「それだけ？」

優菜「あとは聞きたいことぐらいかな。さっきのサッカー見てた？」

イリーナ「見てたわ」

優菜「どう思いました？」

イリーナ「中学生じゃ強いんじゃない？サッカーはあまり詳しくないのよ」

優菜「そうですね。じゃあ俺は男でしょう女でしょう」

イリーナ「・・・自分で何言ってるか分かってるの？女でしょ」

優菜「残念正解は男」

イリーナ「何ですって!？」

優菜「先生、殺せんせーなめてたら痛い目見るよ。今の俺みたいに思いもよらないと

こから足元すくわれたりするから気をつけなよな」

第三十六話（暗殺教室の軌跡 『第十二話』より）

「サッカーやろうぜ！」

英語の自習中

優菜 『ビッチ先生ってこれからずっと言われるから、せめて心と名前表記はイリーナにしてあげよう。・・・やっぱ心はやめよう』

イリーナ先生はずっとタブレットいじってる

優菜 『サッカーしてえ：：三回も勉強する必要ないだろ、試験中でもあるまいし（前世＋P5＋暗殺で中学三回）』

よし決めた

優菜 「先生、トイレ行っているんですか？」

イリーナ 「行っていいわよ。他のガキも行きたかったら言わなくていいから勝手に行きなさい」

やったぜ

トイレは行くとして

烏間先生に講義ついでにサッカーしよ

職員室

烏間 「どうした？何かあったのか？」

優菜 「あつたちやあつたのかな？あの先生何もしないからサボろうかと」

烏間 「職員室にサボりに来たのか？」

優菜 「そんなわけないじゃないですか。体育倉庫の鍵取りに来た」

烏間 「倉庫でサボるのか？」

優菜 「いや、ボールだして校庭でサッカーしてます」

烏間 「はあ・・・俺としては授業に出てほしいんだが」

優菜 「教室ヤバイですよ。いつ爆発してもおかしくないもん。みんな、特に茅野」

烏間 「茅野が？」

優菜 「あいつ巨乳に憎悪抱いてるから」

烏間 「そうなのか」

優菜 「爆発したら任せます」

体育倉庫

一番固いのはこれか

校庭

優斗 「リフティングでもするか」

・ ・ ・ 95 ・ 96 ・ 97 ・ 98 ・ 99 ・ 100

優菜『とりあえず終わるか。パス相手居たらいいんだけどな』

蓮「おい」

優菜「ん？なんだ蓮か」

蓮「勉強しないのか？」

優菜「こちとら高3まで勉強してんだ。こころで躓いたりはしねえよ」

蓮「サボるってことか？」

優菜「そ、お前向こうに行ってパス受けてくんね？」

蓮「別にいいが」

優菜「あ、ちよつと待て足痛めたくなかったらストレッチしとけよ」

蓮「どういうストレッチか分からない」

優菜「あく教えてやる」

ストレッチが終わり、蓮は少し離れた

優菜「よし行くぞ」

蓮「ああ」

ドンツと重みがある音を出しながら

蓮「うわ!!」

蓮の足に当たるとバチイイインと音が鳴った

優菜「トラップしっかり」

蓮「無理だつて」

優菜「そつか。じゃあパスとトラップ教えてやる。力は抑えるから」

自習の時間をほとんど削り

蓮「よつと」

優菜「おお、だいぶうまくなつたな。呑み込みが早い」

蓮「そうなのか？」

優菜「じゃあ、とりあえずリフティング100めざそつか」

蓮「マジで？」

優菜「今日中じゃなくていいぞ」

蓮「どこにあてるんだ？」

優菜「えつとな？ 大体基本はインステップとつま先なんだがインステップは足の甲、

つま先はそのままの意味だ」

蓮「どつちですればいいんだ？」

優菜「初心者はずつま先のほうがやりやすいだろ。えつと上にあげるみたいにするん

だ。足と同じ場所ですつと」

蓮「すごい集中力だなそれ」

優菜「ああ、でも俺は別のことを考えてたらいつの間にか終わってたけど」

蓮「そろそろ終わるな」

優菜「じゃあこつから奥のゴールにロングシュートやろうぜ」

蓮「よし、オラア！」

しかしボールはそれで枠内には入らなかった

蓮「あゝ・・・くそ」

優菜「よし今度は俺だ！見とけ、これがドライブシュートだ!!」

どつかのサッカー選手の技だ

キャ○○○○翼の主人公

シュートはゴール前まで飛びゴール前で一気に落ちた

蓮「おお、すげえな！」

優菜「じゃあ、片付けて戻るか」

職員室

優菜「失礼しまーす」

烏間「終わったのか？」

優菜「はい、恐れ入ります」

烏間「今ならまだ間に合う、早く教室に戻りなさい」

優菜「は〜い」

教室

業「サッカー楽しかった？」

優菜「動かないよりました」

業「さっきのシュートはすごかったねえ」

優菜「あれ撃ちたかったら頑張らないとな」

業「そんな気はないけど」

優菜「だろ〜うな」

キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴った

イリーナ「ガキども、もう一回言うけど邪魔したら殺すからね」

これからイリーナ先生の暗殺が始まる

第三十七話（暗殺教室の軌跡 『第十三話』より）

「これでビッチ。これでこそビッチ」

五時間目・校庭

体育倉庫に殺せんせーとイリーナ先生が入ってた

三村「……おいおいマジか。二人で倉庫に入っていくぞ」

前原「……なーんかガツカリだな。殺せんせーあんな見え見えの女に引つかかって」

片岡「……烏間先生、私達……あの人の事好きになれません」

烏間「……すまない。プロの彼女に一任しろとの国の指示でな。だが、わずか一日

で全ての準備を整える手際。殺し屋として一流なのは確かだろう」

蓮『「……」多くないか？』

優菜「あ、先生ちよつと来て」

烏間「なんだ」

校庭の隅

優菜「えつとすね。あの先生に殺せると本気で思ってますか？」

烏間「思っていないな」

優菜「じゃあ、失敗したらどうなるんですか？」

烏間「失敗したら成功するまで残るだろうな。まあ」

体育倉庫から銃声が聞こえてきた

優菜「あ、撃ち始めましたね。あと終わった後大変ですよ。みんな多分爆発するから」

烏間「ホントか？」

優菜「はい」

イリーナ「いやああああ!!」

優菜「あ、手入れされてますね」

イリーナ「いやああああああ．．．」

優菜『ホントこの時何してんだ？』

イリーナ「いや．．．あ．．．」

優菜「あれ？これ大丈夫か？出していいやつか？とりあえず体育倉庫まで行こう」

ちよつと見てきます」

校庭に戻ると、殺せんせーがちようど出てきた

渚「殺せんせー!!おっぱいは？」

殺せんせー「いやあ．．．もう少し楽しみたかったです、皆さんとの授業のほうが

楽しみですから、六時間目の小テストは手ごわいですよお」

渚「・・・アハハマあ頑張るよ」

イリーナ先生も出てきた。しかも体操着で

皆『健康的でレトロな服にされている!!』

イリーナ「まさか・・・わずか一分であんなことされるなんて・・・肩と腰のこりをほぐされてオイルと小顔とリンパのマッサージされて・・・早着替えさせられて・・・その上まさか・・・触手とヌルヌルであんなことを・・・」

イリーナ先生はそう言い残し、膝から崩れ落ちた

皆『どんな事だ!!?』

渚「殺せんせー何したの?」

殺せんせー「さあねえ大人には大人の手入れがありますから」

渚「悪い大人の顔だ!!」

殺せんせー「さ、教室に戻りますよ」

俺はイリーナ先生に近寄る

優菜「大丈夫ですか? ビッチ先生」

イリーナ「たくっ! うるさいわね!」

優菜「どうせ、実弾使ったんでしょ、忠告聞かずに。先生プライド高そうだから」

イリーナ「・・・」

優菜「じゃ、先行ってますね」

教室

イリーナ先生はずっとタブレットとにらめっこ中

業「あはあ、必死だねビッチねえさん。あんな事されちゃプライドズタズタだろうね」

磯貝「先生」

イリーナ「・・・何よ」

磯貝「授業してくれないなら殺せんせーと交代してくれます？一応俺ら今年受験なんで・・・」

イリーナ「はん！あの凶悪生物に教わりたいの？地球の危機と受験を比べられるなんて・・・ガキは平和でいいわね」

優菜「殺したあとのことも考えないといけないだろ」

イリーナ「それに聞けばあんた達E組って・・・この学校の落ちこぼれだそうじゃない。勉強なんて今さらしても意味ないでしょ」

あちやく地雷ふんじやつた

イリーナ「そうだ!!じゃあこうしましよ、私が暗殺に成功したら一人五百万分けてあげる!!あんた達がこれから一生目にするこたない大金よ!!無駄な勉強するよりずっと

有益でしょ。だから黙って私に従い・・・」

消しゴムが投げられ黒板に当たる

寺坂「出てけよ」

優菜「蓮、耳を塞ぐことをお勧めする」

蓮「え？」

村松「出てけ、くそビッチ!!」

倉橋「殺せんせーと変わってよ!!」

イリーナ「なっ・・・なによあんた達その態度っ殺すわよ!」

前原「上等だよ殺ってみろコラア!!」

茅野「そーだそーだ!!巨乳なんていらぬ!!」

渚「そこ!」

鳥間「おい!!お前ら落ち着け!イリーナは職員室に來い」

イリーナ先生が出て行った

鳥間「・・・皆は外で暗殺バドミントンをしてくれ」

第三十八話 「暗殺教室の軌跡 『第十四話』より)

「岡島あーっ!!」

そのあとの休み時間

イリーナ先生が教室に入り

チヨークをもつて黒板に英文を書いた

イリーナ「ユアインクレディブルインベッド、リピート」

皆「(。彡)」

イリーナ「ホラ!!」

皆「・・・ユ、ユアアインクレディブルインベッド」

イリーナ「アメリカだとあるVIPを暗殺したとき、まずそいつのボディガードに色仕掛けで接近したわ。その時彼が私に言った言葉よ。意味は「ベッドでの君はすごい・・・」

皆『中学生になんて文章読ませんだよ!!』

イリーナ「外国語を短い時間で習得するにはその国の恋人を作るのが手っ取り早いとよく言われるわ。相手の気持ちをよく知りたいから必死で言葉を理解しようとするの

よね。私は仕事上必要な時・そのやり方で新たな言語を身に付けてきた。だから私の授業では・・外人の口説き方を教えてあげる。プロ直伝の仲良くなる会話のコツ、身に着ければ実際に外人とあたとときに必ず役立つわ。受験に必要な勉強なんてあのタコに教わりなさい。私が教えられるのは、あくまで実践的な会話術だけ。もし・・それでもあんた達が私を先生と思えなかったらその時は暗殺を諦めて出ていくわ・・ま、それなら文句ないでしょ・・あと悪かったわよいろいろ」

皆「あははははは!!」

業「何ビクビクしてんだよ。さつきまで殺すとか言つてたくせに」

前原「なんか普通に先生になっちゃったな」

岡野「もう、ビツチ姉さん何て呼べないね」

イリーナ「あんた達・・わかつてくれたのね・・」

めつちや泣くやん

矢田「考えてみりや先生に向かって失礼な呼び方だったよね」

倉橋「うん、呼び方変えないとね」

前原「じゃあビツチ先生で」

イリーナ「えつと・・ねえキミ達せつかくだからビツチから離れてみない？ホラ、気

安くファーストネームで呼んでくれて構わないのよ」

前原「でもなあ、もうすっかりビッチで固定されちゃったし」

岡野「うん。イリーナ先生よりビッチ先生のほうがしつくりくるよ。そんなわけでよろしくビッチ先生!!」

杉野「授業始めようぜビッチ先生!!」

イリーナ「キーツ!! やつぱり嫌いよあんた達!!」

やつぱこうでない。ビッチもといイリーナ先生はこういうキャラじゃないと

次の日・全校集会なので昼休みに本校舎に行きます

昼休み

優菜『ありや? みんなないや。もう行っちゃたのか? イリーナ先生はいるのかな?』

職員室

優菜「イリーナ先生」

イリーナ「ん? どうしたの?」

優菜「やつぱりいた」

イリーナ「? どういうことよ」

優菜「みんな本校舎行ってますよ」

イリーナ「ゑ」

優菜「一緒に行きませんか？」

イリーナ「今から行って間に合うの？」

優菜「飛んでいきますから」

イリーナ「は？」

優菜「殺せんせーは？」

殺せんせー「私は烏間先生に来るなど言われたので。シクシク」

優菜「そっか、じゃ行ってくる」

外に出て

イフリートとクロノスを呼んだ

優菜「じゃあ頼んだぞクロノス先行ってるから」

クロノス「まかせろ」

イリーナ「ちよ、ちよっと！ホントに大丈夫なの!？」

優菜「大丈夫ですって、じゃ行きますね」

上から行つてると

？「岡島あーっツ!!」

優菜『これはアニメで見たぞ。岡島がヤバイやつだ。・・・あとで回復してやろう』

本校舎裏門

優菜「岡島お前大丈夫か？」

岡島「大丈夫に見えるならお前の目は腐ってるぞ」

優菜「わかった、アリエル」

アリエル「なんですか？」

優菜「岡島を回復してやってくれ」

岡島「回復？」

アリエル「終わりましたよ」

岡島「え？嘘、疲れも取れてる！」

優菜「じゃ行くぞ」

本校舎に向かうと、渚が話しかけてきた

渚「さっきのやつって何回もできるの？」

優菜「やってほしいならダメだぞ。岡島が一番ひどかったじやねえか。川に流されて、蛇に噛まれて、石に追われて、ハチにもやられかけたのに、回復しないほうがおかしいだろ」

渚「それもそうだね・・・てかそんなひどかったんだ」

優菜「ずっと上から見てたから」

岡島「見てないで助けてよ!!」

第三十九話（暗殺教室の軌跡『第十五話』より）

「ウザい生徒会」

体育館で皆並んだ

他のクラスが来るより先に並んでいないといけないんだってさ

田中「渚くん」

高田「おつかれ」

田中「わざわざ山の上からこっちに来るの大変でしょ」

渚「・・・」

優菜「大変だねーホント、ここに集会の度罵倒されに来るんだろ？」

渚「慣れたくても慣れないよ」

優菜「はあ、これが、この学校の現状か、ひでえな」

菅谷「渚、そーいや業は？」

渚「サボリ、集会フケて罰くらっても痛くもかゆくもないってさ。成績良くて素行不良ってこういう時うらやましいよ」

面倒な校長はカットして

アナウンス「続いて生徒会からの発表です。生徒会は準備してください」
体育館鳥間先生が入ってきた

モブ「・・・誰だあの先生？」

モブ「シユツとしてカッコいい〜」

鳥間「E組の担任の鳥間です。別校舎なのでこの場を借りてご挨拶をと」

モブ先生「あ・・・ハイよろしく」

倉橋「鳥間先生〜、ナイフケースデコってみたよ」

中村「かわいいーっしょ」

鳥間「かわいいのは良いがここで出すな!!他のクラスには秘密なんだぞ暗殺の事は

!!」小聲

中村&倉橋「はーい」

モブ「・・・なんか仲良さそー」

モブ「いいなあーうちのクラス先生も男子もブサメンしかないのに」

次はイリーナ先生が入ってきた

モブ「ちよっ・・・なんだあのものすごい体の外人は!？」

モブ「あいつもE組の先生なの？」

鳥間「何しに来たイリーナ!？」

イリーナ「うるさいわね次の計画への情報収集よ。渚、あのタコの弱点全部手帳に記してたらしいじゃない。その手帳おねーさんに貸しなさいよ」

渚「えっ・・・いや、役立つ弱点はもう全部話したよ話」

イリーナ「そんなこと言って肝心なところ隠す気でしょ」

渚「いやだから・・・」

イリーナ「いーから出させてばこのガキ、窒息させるわよ!!」

渚が顔を胸にうづくまられた

渚「苦しっ・・・胸はやめてよビッチ先生!!」

優菜「はあ、クロノスザ・ワールド」

烏間「ん？」

優菜「俺と先生以外の時間を止めました。烏間先生すまないんですけど、ビッチ先生どうかしててください」

烏間「・・・わかった」

優菜「ちゃんと捕まえてくださいね」

烏間「わかつている」

優菜「時は動き出す」

烏間「イリーナいい加減にしろ」

イリーナ「えつでも」

鳥間「でももへつたくれもない、こい」

連れてかれた

優菜「鳥間先生呼んどいたぞ」

渚「ありがとう」

荒木「・・・はいつ今皆さんに配ったプリントが生徒会行事の詳細です」

杉野「え？」

岡島「え・・・何？俺らの分は？」

磯貝「・・・すいませんE組の分まだなんです」

荒木「え、無い？おかしーな・・・ごめんさーい3のEの分忘れたみたい。すいま

せんけど全部記憶して帰ってください」

モブ達「はははははははははははははは」

優菜「こういうやつは絶対に上司にしたくない」

その瞬間右側を超スピードで殺せんせーが通り手書きのコピーを一人ずつ渡して

いった

第四十話（暗殺教室の軌跡『第十六話』より）

「やるべきこと」

殺せんせー「磯貝君、問題無いようですねえ手書きのコピーが全員分あるようですし」
殺せんせーが変装？して烏間先生たちと立っている

磯貝「・・・はい。あ、プリントあるので続けてくださいーい」

荒木「え？あ・・・うそ、何で!?誰だよ笑いどころつぶした奴!!あ・・・ゴホン、では続けます」

優菜『殺せんせー・・・バカなのか？明らかに変装になってないよ!!』

イリーナ先生が殺せんせーの隣まで行き、ナイフで何度も刺した

優菜『刺すな!!ここで刺すな先生!!めっちゃ見てる！めっちゃ見てるからみんな!!』

イリーナ先生は烏間先生に連れてかれた

優菜『危ねえなおい』

みんな「あははははははははは」

前原「はは、しよーがねーなビッチ先生は」

集会后

杉野「先行ってるぞ渚！」

渚「うん、ジュース買ったらすぐ行くよ」

田中「お前らさー・・・ちよつと調子乗ってない？」

渚「えっ・・・」

高田「集会中に笑ったりして周りの迷惑考えろよ」

田中「E組はE組らしく下向いてろよ」

高田「どうせもう人生詰んでんだからよ」

田中「何とか言えよE組!!殺すぞ!!」

その瞬間渚は笑い

渚「殺そうとした事なんて無いくせに」

モブ達は驚き立ち退いた

田中「なんだ今の・・・さ、殺気？」

渚は歩いて行つた

優菜「ギャーギャーやかましんだよ。発情期ですかこの野郎」

田中「な、なんだお前」

優菜「今のも殺気だけど、本物の殺気つてやつを見せてやるよ」

俺は向こうの世界・・・パレスのシャドウたちが出すような殺気を浴びせた

田中「が……あ……ああ」

優菜「喋れもしないのか。まあいいか、帰ろう」

俺たちは校舎に帰った

五時間目残りテスト勉強

殺せんせー「さて、始めましょうか」

みんな「……何を？」

殺せんせー「学校の間テストが迫ってきました。そんなわけでこの時間は高速強化勉強を行います。先生の分身が一人ずつマンツーマンでそれぞれの苦手科目を徹底して復習します」

寺坂「何で俺だけNARUTOなんだよ!!」

乙、寺坂

殺せんせー「さて優菜君は苦手科目がなさそうですから、まんべんなく引き上げましょうか」

優菜「でも高3まで勉強終わってるからとんとん拍子で大丈夫と思うよ」

殺せんせー「では、問題を出しますのでどんどん答えていきましょう。そして間違っただけ復習しましょう」

優菜「はい」

解く、復習を繰り返しながら五時間目が終わって

殺せんせーは教室を出た

渚「ちよつとトイレ行つてこよ」

渚も出て行つた

しばらくすると二人とも戻つてきた

来たんだが

六時間目

殺せんせー「さらに、頑張つて増えてみました」

増えすぎだ

優菜「殺せんせー、多くても二人でよかつたんじゃない？」

殺せんせー「そのぐらいじゃダメです！本気でやりますよ！」

優菜「やりますつて。．．．つてこれで百点じゃなかったらヤバいな俺」

六時間目終わり

殺せんせーは、肩で息をしている

前原「．．．さすがに相当疲れたみたいだな」

岡島「何でここまで一生懸命先生をすんのかね」

殺せんせー「すべては君たちのテストの点を上げるためです」

三村「……いや、勉強はそれなりでいいよな」

矢田「……うん、なんたつて暗殺すれば百億だし」

前原「百億あれば成績悪くてもその後の人生バラ色だしさ」

殺せんせー「にゅやっ！そ、そういう考えをしますか!!」

岡島「俺たちエンドのE組だぜ。殺せんせー」

三村「テストなんかより……暗殺のほうがよほど身近なチャンスなんだよ」

殺せんせー「……なるほど、よくわかりました」

木村「何が？」

殺せんせー「今の君たちには……暗殺者の資格がありませんねえ。全員校庭へ出な

さい。烏間先生とイリーナ先生も呼んでください」

殺せんせーは出て行った

蓮「……？急にどうしたんだ殺せんせー」

中村「さあ……いきなり不機嫌になったよね」

優菜「お前ら、バカだなく」

渚「え？」

優菜「まあいいや、先行ってるぞ」

校庭にみんな揃った

殺せんせー「イリーナ先生、プロの殺し屋として伺いますかが」

イリーナ「・・・何よいきなり」

殺せんせー「貴方はいつも仕事をするとき・・・用意するプランは一つですか？」

イリーナ「・・・？・・・いいえ本命のプランなんて思った通り行くことのほうが少ないわ。不足の事態に備えて・・・予備のプランをより綿密に作っておくのが暗殺の基本よ。ま、あんたの場合規格外すぎて予備プランが全部狂ったけど、見てらっしゃい。次こそ必ずk」

殺せんせー「無理ですねえ、では次に烏間先生。ナイフ術を生徒に教える時・・・重要な第一撃だけですか？」

烏間「・・・第一撃はもちろん最重要だが、次の動きも大切だ。強敵相手では第一撃は高確率でかわされる。その後の第二撃、第三撃を・・・いかに高精度で繰り出すかが勝敗を分ける」

前原「結局何が言いたいんだ」

殺せんせー「先生方のおっしゃるように自信を持てる次の手があるからこそ、自信に満ちた暗殺者になれる。対して君たちはどうでしょう「俺らには暗殺があるからそれでいいや」・・・と考えて勉強の目標を低くしている。それは・・・劣等感の原因から目を背けているだけです。もし先生が高尾の教室から逃げ去ったら？もし他の殺し屋が先

に先生を殺したら？暗殺という抛り所を失った君たちにはE組の劣等感しか残らない。そんな危うい君たちに・・・先生からのアドバイスです」

そう先生は回りながら言った

そして、それが巨大な竜巻に程になった

殺せんせー「第二の刃を持たざる者は・・・暗殺者を名乗る資格なし!!」

そして雑草や土が落ちてきた

殺せんせー「・・・校庭に雑草や凸凹が多かったのでね少し手入れしておきました」

なんとということでしょう

あんなに雑草や凸凹があつた校庭が

本校舎にある校庭のように、凹凸のない普通の校庭に

殺せんせー「先生は地球を消せる超生物、この一帯を平らにするなど容易いことです。

もしも君たちが自信を持てる第二の刃を示さなければ相手に値する暗殺者はこの教室にはいないとみなし校舎ごと平らにして先生は去ります」

渚「第二の刃・・・いつまでに？」

殺せんせー「決まっています明日です。明日の中間テストクラス全員50位以内を取

りなさい」

皆「!!？」

殺せんせー「君たちの第二の刃は先生がすでに育てています。本校舎の教師たちに劣るほど・先生はトロイ教え方をしていません。自信を持つてその刃を振るって来なさいミッションを成功させ恥じることなく笑顔で胸を張るのです。自分達がアサシンであり・・・E組であることに!!」

優菜「・・・50位でいいの？」

殺せんせー「そういえば、貴方は満点を取るといっていましたね。自信はありますか？」

優菜「俺は、この世界が三個目だつて言つたら? こんだけ勉強して取れんほうが恥ずかしいわ。もしできなかつたら裸で土下座してやるよ」

岡島「裸で!?!」

優菜「過剰反応するな岡島」

そうして一日が終わった

第四十一話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十二話』より）

「鴨志田の最後」

蓮「おお・・・」

優斗「ちゃんと戻れたな」

蓮「それでどうするんだ？向こうに行くのにはまた一緒に寝るのか？」

優斗「いや、一回寝れば俺が行きたいと思った日についてくる

蓮「じゃあ、もういいのか」

優斗「そうだ」

蓮「とりあえず、朝飯か」

優斗「その後ルブランに行つて教科書とかを・・・」

蓮「基本置き勉強だからそこは大丈夫。でもモルガナ取りに行かないと」

今日は理事会だが、まあ、大丈夫だろ

学校に着くといきなり朝礼と言われ

体育館

優斗『いきなり朝礼ねえ』

派手な女子生徒「どうせ前の飛び降りの事でしょ」

悠『簡単に言いやがるなあ』

優斗『ああ、死んでたかもしれないのにな』

そんなことを言っていたら

校長「前校長礼を始めます。先日、痛ましい事件が起きたのは皆さんもご存じのとおりです。幸い怪我をしたのは足だけということですが、回復にはまだ時間がかかるというとの事です。君たち、未来ある若者に、今一度考えてほしいのは、命の尊さ……」
突然体育館の扉が開き、鴨志田が入ってきた

校長「鴨志田先生、どうし……」

鴨志田「私は……生まれ変わったんです。だから皆さんにすべてを告白しようと思
います」

鴨志田は一番前に立つ

鴨志田「私は教師としてあるまじきことを繰り返してまいりました……生徒への暴
言、部員への体罰……そして……女子生徒への性的な嫌がらせ……鈴木志保さん
が飛び降りたのは、私が原因です！」

鴨志田は膝をつき、また話し始める

鴨志田「私はこの学校を、自分の城のように思っていた……気に入らないというだけ

の理由で退学を言い渡した生徒もいます。もちろん、それは撤回します・・何の罪もない青少年を、酷い目に遭わせて本当に済まなかった・・私は傲慢で、浅はかで・・恥ずべき人間、いや人間以下だ・・」

土下座してこう言った

鴨志田「死んでお詫びします・・！」

校長「鴨志田先生！とりあえず、降りて!!」

スーツの教師「解散、解散!!」

鴨志田「私はツ・・・！」

杏「逃げるな!!志保だって・・・死にたいほどの事件の続きを、ちゃんと生きてる!

アంతタだけ、逃げないで！」

鴨志田「その通りだ・・・まったくその通りだ・・・私は、きちんと裁かれ罪を償うべきだ・・・私は、高巻さんにも、酷いことをしました。鈴井さんにポジションを与えることを条件に、高巻さんに・・・関係まで迫りました。今日限りで教師の職を辞して自首いたします。どなたか、警察を呼んでくれ！」

俺はスマホを手に取り警察を呼んだ

蓮「呼んだのか？」

優斗「ああ」

竜司「マジで呼んだのかよ・・・」

スーツの教師「朝礼を終了します！解散！解散して!!」

太った男子生徒「これ・・・予告通りじゃね？」

ラフな男子生徒「怪盗って、マジだったってこと!?!」

太った男子生徒「鴨志田が、なんかされたのか!?!」

ラフな男子生徒「いや、心を盗むとか、ないだろ!」

茶髪の女子生徒「でも、死んで詫びますとか自首しますとか、急に言う?」

派手な女子生徒「バレそうになっただんじやない?自首のが罪軽いんじやないっけ?」

太った男子生徒「何かあつたんだろうな・・・」

スーツの教師「教室に戻りなさい!」

朝礼後・体育館

杏「本当に・・・心が、変わっちゃったんだね・・・」

竜司「みたいだな。でも、これでよかったのか?」

蓮「わからない」

竜司「同感だ、俺もわかんねえ」

三島と女子二人が来た

竜司「なんだ?」

三島「高卷さん……ごめん！」

杏「え？」

三島「俺たち知ってたのに……見て見ぬふりしてた」

背の高い女子生徒「高卷さん。私、誤解してて……変な噂広めちやつて……ごめん！」

黒髪の子女生徒「私、全然、知らなくて……鴨志田に、無理やり迫られてたんだね……辛かったね……！」

背の高い女子生徒「謝りたいって思ってる子きつと、たくさんいると思う。ごめんね……！」

杏「ううん。いいの、私だつて……それに……全部済んだ話だから……」
スーツの教師「おい、そこ！早く戻れ！」

背の高い女子生徒「じゃ、じゃあ……」

三島たちは戻っていった

竜司「心が変わったのは……どうも、鴨志田だけじゃねーみてーだな」

杏「いいよ、私のことは……鴨志田に、志保の事謝らせてやった。私、それだけで……」
竜司「なら、早く報告してやれよ」

杏「……そうだね」

放課後・屋上

竜司「ビビったわ・・・マジで改心だったな・・・聞いた通り廃人化もなかったし、百点満点だぜ！」

モルガナ「ああ、パレスが消えても、廃人化は起きないってことだろ・・・？シヤドウが死ぬ前に本人に返せばいい。つまり廃人化は起きないって訳だ」

竜司「つまり、ちゃんと自白だけ狙えるってことだな？面白れえじゃねえの！」

杏「声でかいから」

竜司「大丈夫だって。つか、どうだった？見舞い・・・」

杏「少しだけ話して、鴨志田が、自分のしたこと認めたよって・・・志保に、言えた・・・！志保・・・私にごめんねだって、私が志保のために鴨志田にこびてたの、バレちゃってみたい・・・謝りたいの、私のほうなのに」

モルガナ「悪いのは鴨志田だぜ」

杏「そうだね・・・志保のお母さんが、回復したら、転校させようと思うって。セクハラとか、自殺未遂とか・・・やっぱレッテルついて回るし。志保も、そうしたいって言うてるみたい」

竜司「寂しくなんな」

杏「でも、私もそれがいいと思った・・・ここにいたら、きっと辛いし」

竜司「いつだって会えんだろ・・・生きてりや、さ」

杏「私も・・・変わんなきゃ」

竜司「にしてもお前、鴨志田のシャドウ・・・よく我慢したな？」

杏「私はただ・・・鴨志田に、直接謝らせたかったって言うか・・・」

モルガナ「杏殿は優しいんだよな」

竜司「クズ相手でも廃人化は目覚めが悪いか」

杏「いや、違うけど？改心させたほうが、復讐になるなって思ってた。アイツのしたことを考えれば、生きてる間、永遠に頭下げ続けることになるじゃん？世の中、死ぬよりむしろ罰もあるなって思ってただけ」

竜司「あれ？そういうえば優斗もそんなこと言ってた気がするんだが？」

優斗「言ったよ」

竜司「ま、ともかく、一件落着だけだよ・・・そういうや一つ気になってんだ。あの城の事。あんなへんな異世界が、何で鴨志田にだけあつたんだ？」

モルガナ「別にあの鴨志田に限ったことじゃない。欲望で心に歪みが起きてる奴なら、誰でも持ち得るモノさ」

杏「誰でも・・・」

モルガナ「確かめてみるか？」

竜司「い、いまはいい。しばらくは大人しくしてねえと。鴨志田の事、また騒がれるだろうしな。ま、パレスでやったこと調べるなんて、ぜってー不可能だろうけどよ」

杏「そのことだけど．．．あんたたち、もう変な噂立てられてたよ。結託して、鴨志田に暴力まがいの脅迫したって．．．」

優斗「やろうと思えばできるぞ」

竜司「やらんでいい！」

杏「さすがに怪盗が実在するなんて、そうそう信じないでしょ。予告状は、鴨志田の悪事を知ってた誰かの悪戯ってことになってるみたい」

竜司「そりやそうか．．．やった本人でも信じ切れてねえし」

杏「ひとまず、今後のことは、事態が落ち着いてから相談だね」

竜司「とりあえず、このメダル、いくらで売れるか確認しよーぜ？こんなの、とつとと売つぱらつちまつたほうが良いだろ」

調べ中

竜司「お、出た！つて三万!?メダルの価値つて三万かよ!?!」

杏「覚えてるー？中学の時に貸したお金」

竜司「いや、三万も借りてるわけねえだろ！」

杏「利子がついてたらこんなもんじゃない？」

竜司「おい！」

杏「誰も全部もらうなんて言っていないでしょ。てか、何年も返さないほうが悪いし！借りたものは返すって常識だし！」

竜司「くっそ……」

優斗「竜司……自業自得だぞ……」

竜司「わかってるわ！」

モルガナ「事態を見守るつてのは賛成だ。しかしな、ワガハイを巻き込んでおいて、作戦成功の祝杯を挙げないなんてナンセンスだ」

竜司「こんなキメエ金なんて、パーツと使っちゃまうのもありだな？」

モルガナ「怪盗の相談は美食の席でと決まってる。どうだ？」

杏「ちよつと、それ……まあ、いいか。だったら行きたい所があるんだけど」

竜司「どこだ？」

杏「志保と行きたいって、前から言ってたこと」

竜司「俺は借金あるし、文句は言えねえ。お前らも、杏が決めた場所でもいいか？」

優斗「俺は良いぞ」

蓮「それでいい」

モルガナ「ワガハイも杏殿に任せる」

杏「じゃあ後で確認しとく」

竜司「いつ行くよ？さっそく明日にでも繰り出すか？」

杏「連休の最後にしない？次の日からの学校生活に備えて、勢いつけるって意味で」

竜司「つてことは、五日の子供の日だな」

杏「で、換金は誰がやるの？」

モルガナ「任せとけ。なんでも買い取る店を知ってる。そうだよな、蓮」

蓮「あそこか」

モルガナ「ああ、あそこなら買い取ってくれるだろう」

杏「じゃあ、お願いね！」

一日が終わり

次の日は勉強して終わった

SNS

優斗「蓮、覚悟しろよ」

蓮「何がだ？」

優斗「試験だよ」

SNS終わり

第四十二話（暗殺教室の軌跡『第十七話』より）

「0と1の差と99と100の差は同じじゃないんだよ？」

試験中

優菜『あく簡単すぎる。ここ何回やったかわからんわ』

見直し中

優菜『あ、ここ凡ミスしてるわ直しとこ。あぶねえ、あぶねえ』

皆筆が止まってらっしゃる

優菜『まあ俺は百点だろ』

次の日

優菜『なんてこつたい。社会だけ99点で。おつかしいなく？見間違いだよね』

優斗『m9（ム）プギャー』

烏間『……これは一体どういうことでしょうか。公正さを著しく欠くと感じましたが』

優菜『落ち着け、見間違いに違いない』

電話相手『……おつかしいですねえくちやんと通達したはずですよ。あなた方の

伝達ミスじゃないですか？なんせおたくら本校舎に来ないからハハハハ」

優菜『目を瞑って、深呼吸・・・』

烏間「伝達ミスなど覚えはないし、そもそもどう考えても普通じゃない。テスト二日前に・・・出題範囲を全教科で大幅に変えるなんて」

優菜『ハイ見る！・・・やつぱり99・・・』

優斗『m9（ハハ）プギャー』

電話相手『・・・わかってませんねえ、えーと・・・烏間先生？うちは進学校ですよ？直前の詰め込みにもついていけないか試すのも方針の一つ。本校舎のクラスでは、なんと理事長自らが教壇に立たれ、見事な授業で変更部分を教え挙げてしまいました』

烏間「・・・!!」

優菜『ホントに面倒なこととしてくれたよ。おかげで余計に勉強しないといけなかったからな。まあ一点逃したんだけどね』

優斗『m9（ハハ）プギャー』

優菜『そろそろ怒るぞ？』

殺せんせーはものすごく落ち込んでいた

だって、俺達に背を向けて、そこから哀愁が漂ってるもん

殺せんせー「・・・先生の責任です。この学校の仕組みを甘く見すぎていたようです・・・

君たちに顔向けできません」

その時業が立ち、ナイフを投げた

殺せんせーは寸前で避けた

殺せんせー「にゅやッ!？」

業「いいの？顔向けできなかつたら俺が殺しにくんのも見えないよ」

殺せんせー「業君!!今先生は落ち込んで・・・」

その時業はテスト用紙をばらまき

殺せんせーがすべて取った

国語98点

数学100点

社会99点

理科99点

英語98点

業「俺、問題変わっても関係ないし」

木村「うお・・・すげえ」

業「俺の成績に合わせてさ。あんたが余計な範囲まで教えたからだよ」

優菜「俺もいいかな？」

片岡「それなら、正直に言えばよかったのに」

中村「ねー怖いから逃げたいって」

殺せんせー「にゅやーっ!!逃げるわけありません!!期末テストでアイツらに倍返し
でリベンジです!!」

そうしてみんなで笑って一日が終わった

第四十三話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第二十三話』より）

「吐くまで食うぞ!!」

昼・バイキング

竜司「うまつ……!」

モルガナ「さすが、杏殿の選んだ店……!」

杏「そりやそうだよ。有名なホテルだよ?……そういえば、学校に警察が聞き込みにくるらしいよ」

モルガナ「厄介だな」

竜司「絶対、俺らの名前、出ちまうよ。鴨志田のことで妙な噂されてるし……けど、学校のやつら盛り上がってるぜ!怪盗がホントに心盗んだってな。マジで信じちゃいねーだろうが、中には、割と本気で感謝してるやつもいる。見ろよ。」

竜司がスマホを開き見せる

杏「怪盗お願いチャンネル……?怪盗よくやった……これで私も頑張れる……勇気をくれて、ありがとう」

竜司「ちよつとうれしくね?」

杏「今まで自分の事で精一杯だったけど、こんな風に言われると・・・なんか不思議」
竜司「なあ、これからどうする？」

優斗「とりあえず時間まで食う」

蓮「それに限る」

みんなで食べる・・・食べる・・・食べまくる

なんとか食べきる

モルガナ「く、食った・・・」

竜司「お、おうよ」

優斗「トイレ行ってくる」

竜司「俺も・・・」

モルガナ「ワガハイもだ・・・た、頼む・・・そつと運んでくれ」

そこを通りかかった男女が

上品そうな女性「ちよつと見て、あのテーブル・・・」

裕福そうな男性「大目に見てあげようじゃないか。普段、ロクな物を食べてないんだ
ろう、きつと」

優斗『ヤバイ』

俺が立ったらムカつく男女は少し驚きこういった

上品そうな女性「な、何!？」

裕福そうな男性「な、なんだ!?!何か言いたいことでもあるのか!？」

杏「問題なんて起こさないでよ!？」

優斗「いや、普通にトイレ」

杏「あ、そう」

優斗「お前らもやばいんだろ、速く行ったほうが身のためだ」

竜司「そうだな、行こう。ゲプツ」

一階のトイレ後

エレベーター前

モルガナ「まだ腹がつっぱてる・・・」

竜司「レストランの階のトイレ、清掃中でマジ焦った・・・」

モルガナ「吐くまで食うって豪語してホントに吐くとか・・・馬鹿なのか?」

竜司「お前もだろうが」

優斗「とりあえず戻るぞ」

エレベーターの前で待っていると、そしたら後ろから掴まれどかさされた

竜司「・・・ツ!はあ?」

獅童「事件の事、まだ掴めんのか」

スーツ姿の男「は、はあ・・・あの、何故そこまでご執心で？正直、気にされるほどの事では・・・」

獅童「貴様の意見などいい！急げと言ったら急げ、この無能が！」

一応スマホの録音機能つけとこう

竜司「フツーに割り込みだろ！」

スーツ姿の男「・・・なにか？」

優斗「いきなりどかして割り込むなって言ってるんだよ」

スーツ姿の男「急いでいる」

優斗「だから？」

獅童「しばらく来ない間に客層が変わったな。託児サービスでも始めたか？」

優斗「やっぱお偉いさんって大体わがままで傲慢で力でねじ伏せて、何でもしていいと思ってるもんなんだな」

獅童「なんだと？」

優斗「そういうやつがたくさんいるから国がダメになっていく」

獅童「・・・何が言いたい」

優斗「あんたみたいなのやつが上に立つところなんていたくないってこと、自分でしたことを止められて逆切れして罪を擦り付ける奴なんか」

獅童「なんのことだ？」

優斗「俺はあんたに家を放火された。そっちの連れはあんたを止めて警察に連れてかれお先真つ暗つてこと」

蓮「なんだって？」

優斗「まだ気づかないのか。お前の仇はこいつだぞ」

蓮「・・・確かに、こんな声だった気が」

獅童「・・・一体何をボヤいているのか知らんが、こいつらをどうにかしろ」

俺たちは殴られ

獅童たちはエレベーターに入っていった

竜司「てめえ、殴んじゃねえ!!」

優斗「ようし」

蓮「どうかしたか？」

優斗「今の全部録音しておいた」

竜司「・・・マジか」

優斗「殴られた音もしっかり入ってる」

蓮「それを、どうするつもりだ？」

優斗「ネットにあげる。拡散希望とか付けたら勝手に広がる気が付いた時には手遅

れってことだ」

竜司「マジかよ、えげつねえ」

優斗「語彙力なくなってるぞ・・・よし上げたお前らも拡散しといてくれ。これが本物の獅童って題名」

モルガナ「とりあえず戻るか？」

蓮「だな」

戻って話していると

怪盗団の名前を決めようみたいな流れになった

蓮「そうだな・・・ザ・ファントムとかはどうだ？」

杏「いいじゃん、それ」

モルガナ「ルーキーにしては良い案だ」

優斗「シンプルでいいな」

そしてルールを決めた。目的などは全会一致で決めるとのことだ

次のターゲット

原作は班目だが・・・

双葉行きたいな

優斗「次のターゲットだが」

竜司「誰にするんだ？」

優斗「実は、目星がついてる」

杏「有名な人？」

優斗「いや、身近な人」

モルガナ「パレスはあるのか？」

優斗「確認済み」

蓮「誰なんだ？」

優斗「佐倉双葉・・・蓮のこのマスターの娘だ」

蓮「娘・・・？いたのか」

優斗「ああ、有名な人じゃないから表沙汰にもならない。それに必要な仲間だ」

竜司「仲間になるってことか？」

優斗「攻撃はしないがサポートがすごい」

杏「サポート？」

優斗「攻撃力を上げたり回復したりな。だから早めに仲間にしたいいしパレスを攻略し

やすくなる」

モルガナ「その前に行きたいところがあるんだが」

優斗「メモントスは双葉がいたほうが断然楽だ」

モルガナ「そ、そうか」

蓮「メモントス？」

青年説明中

竜司「そんなところがあんのか」

杏「そこに行く前に仲間にしたほうが良いと」

優斗「ああ、でも今日はやめておく。時間的に」

モルガナ「だな今日は早く帰って明日会おう」

俺たちは帰った

第四十四話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十四話』より）

「原作改変」

放課後

優斗『いこうぜ、双葉の家に』

佐倉家前

杏「……?」

優斗「……」

蓮がインターホンを押した

杏「あ、ちよつちよつと！もうインターホン押したの!？」

優斗「マスターはルブランにいるから」

・
・
・

優斗「来ないな。開いてたりして。まさかn」

なんと、門は開いてしまった

蓮「開いてるのか!？」

優斗「まさか扉まで開いてるなんてことh」

開くよねもちろん

優斗「もしかしたら、ヤバいかもな」

竜司「空き巣とかか？」

優斗「よし、イフリート、アリエル、クロノス頼む見てきてくれ」

見に行かせたが、怪しいやつはいなかったらしい

優斗「よし上がろう」

竜司「いや、ダメだろ」

優斗「俺は行くぞ」

二階に上がった

双葉の部屋をノックすると、椅子から落ちたような音がした

双葉「痛っー・・・へ？」

そして高い所から物が落ちるような音も・・・

優斗「やらかしたかも」

蓮「音ヤバかったぞ」

優斗「・・・おい双葉ー」

双葉「な、なんだ!?!お、お前たちは誰なんだ!?!まさか泥棒!?!」

優斗「鍵が開いてたから勝手に上がらせてもらった。俺たちは、心の怪盗団というも

のだ。お前を助けに来た」

双葉「助ける？ どういうことだ？」

優斗「お前死にたがってるんだろ？」

双葉「・・・」

優斗「お前はここでこのまま死のうとしてる違うか？」

双葉「・・・」

優斗「ハッキングしてSNSで話していいから」

そう言った瞬間、メッセージが来た

優斗『さすがだな』

SNS

双葉「なぜ知ってる？」

優斗「俺は異世界から来た」

双葉「信じると思うか？」

優斗「お前の母親はいきなりおかしくなって道路に飛び出し死んだ」

双葉「・・・そうだ」

優斗「それをお前は遺書を読み自分が殺したと思ってる。違うか？」

双葉「違うない」

優斗「その時研究資料を盗まれたそうだな認知訶学の」

双葉「ああ」

優斗「だがお前は騙されてるぞ」

双葉「なに？」

優斗「お前の母親はホントにお前を憎んでいたか？よく思い出せ」

双葉「・・・無理だ」

優斗「なぜだ？」

双葉「思い出したくない」

SNS終わり

優斗「なら仕方ない」

蓮「どうするんだ？」

優斗「パレスに入る前に欲しいのがある」

竜司「なんだ？」

優斗「水」

杏「水？」

優斗「紙コップもな」

準備してパレスに入る前

優斗「よし準備は整った」

杏「何に使うの？2L二本と紙コップって」

優斗「絶対感謝するからな」

俺は異世界ナビを開きこういった

優斗「佐倉双葉、佐倉家、墓場」

異世界ナビ「発見しました。ナビを開始します」

パレスに入るとそこは

杏「砂漠かい！」

竜司「あちいい」

優斗「だから言ったら水がいるって、向こうのピラミッドまで行くぞ。モナ車なつて」

モルガナ「はいよ」

モナには車になってもらい、連れてつてもらった

そしてようやく着いた

優斗「水はちようど切れたな」

竜司「ここが、あの家なのか？」

優斗「そうだ。早く入ろう干からびる前に」

ピラミッドに入って長い階段を登っていると

モルガナ「ん？誰かいるぞ」

竜司「もしかして、こいつ・・・」

優斗「双葉のシャドウだな」

シャドウ双「誰だお前たち」

優斗「俺たちはお前を助けに来た」

シャドウ双「必要ない。私はここで死ぬ」

優斗「そうさせないために来たんだよ」

シャドウ双「とれるものなら取ってみろ」

そういうと、シャドウ双が消えてピラミッドが揺れだした

優斗「みんな急いで振り返ってダツシユ！」

道を塞ぐくらいの大きな石が落ちてきた

皆「ギャー!!」

何とか避けたが道を閉ざされてしまった

パンサー「あれ？いつの間にか怪盗服になってる」

トウルース「おい双葉ー!!」

ジョーカー「それで来るのか？」

シャドウ双「なんだ？」

スカル「来るのかよ！」

トウルース「頼むって、あの扉全部開けてくれるだけでいいからさ」

シヤドウ双「じゃあ取引だ」

パンサー「取引？」

シヤドウ双「近くの町にいる盗賊にモノを盗まれた。取り返してほしい。帰ってきたらしいものをやる」

トウルース「よし、行くぞ。ちやっちやと終わらそう」

町の広場

トウルース「どこだよ！」

盗賊「よお、兄さんら、探しもんかい」

トウルース「そうそう、ちようど盗賊を探して……っってお前だよ!!」

盗賊「なんだよ、俺を捕まえに来たのかい。じゃ逃げるとするかな」

逃げられた

トウルース「よし、あとは簡単だ。クロノス、ザ・ワールド」

時間が止まった

今のうち、盗賊を見つけたので持ってきた

トウルース「そして時は動き出す」

盗賊「おや？ここは」

トウルルス「ジョーカーあれやらないか？」

ジョーカー「今か？」

トウルルス「スカルたちちよつとあっち向いててジョーカー恥ずかしがつてるから」

スカル「？おう」

スカルたちは反対方向を向いた

トウルルス「気に入らない奴は？」

ジョーカー「そうだな」

トウルルス&ジョーカー「とりあえず、ぶん殴る!!」

トウルルス「この辺り？」

ジョーカー「そう、そこだ」

トウルルス&ジョーカー「ここが一番、拳を叩きこみやすい角度!!オラオラオラオラ

オラオラオラア」

イフリートとアルセーナでラツシュ

トウルルス&ジョーカー「やれやれだ（わ）」

盗賊は消えてアイテムを残していった

トウルルス「決まったじゃんか」

ジョーカー「二度とやらん」

スカル「おわったか？」

トウルース「ああ、もういいぞ」

盗まれたパピルスを手に入れ

戻った

シャドウ双「戻ったか、見つけたのか？」

トウルース「これでいいんだろ？」

シャドウ双「ご苦労、じゃあそれをお前たちにやる」

トウルース「これ、地図だろ？」

シャドウ双「そうだ」

トウルース「で、下に落とすんだろ？」

シャドウ双「ああ」

パンサー「は？」

床がパカツと開き、俺たちは落とされた

そして地下迷宮は難なく攻略

ピラミッド内攻略中

扉を開けるギミック三つを難なく攻略し

一番奥まできたが

モナ「やつとここまで来たか」

優斗「ちようどガス欠だな」

モナ「こののでっかい扉見覚えがあるな？」

それを遠目からシャドウ双が見ていた

シャドウ双「ここまで来たのか・・・お前たちならどうにかなるかもしれないな」

皆少し考えていたが、俺が答えを出した

トウルース「アイツの部屋だろ」

パンサー「あつそうだ！」

スカル「じゃあまた明日ってことか」

ジョーカー「そうなるな」

トウルース「熱いし、帰るか」

パレスを出た

第四十五話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第二十五話』より）

「力を合わせりや勝てるんだよ!!!」

優斗『よし、行こうじゃないか』

放課後

優斗「また行くぞ」

杏「パレスに入るんだね」

優斗「予告状はどうだ？」

竜司「しつかり作ってきたぞ」

モルガナ「今度はちゃんと頭よきそうに書いたか？」

竜司「うるせっ」

優斗「おし、行くぞ」

部屋前

優斗「双葉ー開けてくれ」

双葉「ま、また来たのか!？」

優斗「そうだ、また来た。入れてくれ」

双葉「何でだ!？」

優斗「お前がここを開けて出てきてくれたら、助けられる」

双葉「頼むって言われても・・・」

優斗「よし、お前が出てきてくれたら、すごいの見せよう」

双葉「すごいのか？」

優斗「普通じゃありえないの」

双葉「・・・わかった」

扉がゆっくりだが、開いた

思ったより簡単に開いた件

双葉「すごいのかってなんだ？」

俺はイフリート達を呼んだ。双葉は目を輝かせて見ていた。まるで初めて星空を見

たときみたい

優斗「あ、あとこれ、読んでいて」

双葉「なんだこれ？」

優斗「予告状・・・まあ、読むだけでいいよ」

双葉「わかった」

優斗「じゃあまた今度」

俺たちは佐倉家を出てパレスに入った
そして一番奥に来た

トウルース「開きそうだな」

地ならしを起こしながら壁が開いた

トウルース「行くぞ、さっさと終わらそう」

途中で気になることがあったので聞いてみた

トウルース「そういえば、リーダー決めてなくね？」

ジョーカー「そういえば、そうだな」

トウルース「俺は蓮がいいと思う」

パンサー「私も」

スカル「俺も」

ジョーカー「そんなに俺にしたいのか？優斗の方が適任と思うが」

トウルース「俺は責任が関わると、あつという間に豚箱行きだぞ。責任を肩代わりし

くれるなら別だけど」

ジョーカー「・・・分かった。俺がする」

リーダーは蓮になったとき

そしてパレス最高階

スカル「よし、ここでいいのか？」

モナ「なんか、あるぞ」

パンサー「よし、早く持って帰ろう！」

地震がして、明らかにヤバそうな気配がした

トゥルース「！ヤバいぞ」

上の屋根のところに穴が開き、そこから大きな目がこちらを見ていた

化け物「フウウタアアバアアア！」

モナ「誰だあいつは！」

スカル「双葉じゃねえぞ！」

そして周りが崩され、化け物の全体が見えた

スカル「こいつ、シヤドウじゃないなら、なんなんだ!？」

モナ「こいつは・・・認知だ！」

トゥルース「こいつ、あのギミックの絵で見た奴に似てるぞ・・・確かあれは」

パンサー「来るよ！」

トゥルース「思い出したぞ！こいつは双葉の母親だ!!」

パンサー「来るってば！」

トゥルース「とにかく！あいつは飛んでるから物理が効かねえ。だが弱点も耐性もな

い一番強い叩きこめばいい！」

パンサー「さつき覚えたばっかのこれを食らえ！アギラオ！」

スカル「俺も！ジオンガ！」

モナ「ガルーラ！」

覚える順番もでたらめになってるみたいだが今都合だ

トウルース「俺も使おうか、イフリートはアギラオ、アリエルはコウガ、クロノスは
指弾」

全部当てたがあまり減らせてないらしい

トウルース「なかなか効いてなさそう」

モナ「どうすんだ!？」

ジョーカー「どつちかが削りきれぬまでやるだけだ」

双葉「なんだここ？」

パンサー「双葉!?!入ってきたの？」

双葉「あれは・・・」

低い男の声「お前が殺したんだ！」

双葉「ひっ・・・」

鋭い男の声「黙ってないで何か言え！」

甲高い女の声「貴方のせい！」

双葉「私のせいで……私のせいでお母さんが……」

認知存在イッシキワカバ「そうだ！お前が私を殺した！」

モナ「欲望と罪悪感が認知を歪ませたんだな。死んだ母が生き返ってほしいという願いと、気味悪い罵声が入り混じっている」

認知存在イッシキワカバ「私の邪魔をする、鬼子め！お前さえいなければ！時間を削られることなく、成果を発表出来たのに！私が心血注いだ、正規の発見を！死ぬのよ！お前は、嫌われ者！生きてる意味なんてない！誰にも必要とされてない！」

双葉「誰も私の事なんて……」

大人の男「……双葉なんて生まなきやよかった……鬱陶しかった……お母さんは、双葉ちゃんのことと悩んでたみたいだね……育児ノイローゼだったんだろう……」

双葉「う、うう……」

若い女性「うっ……あ、ああああ……！……ふ、ふたばああああ……あ、あなた、わああああ」

双葉「ううう……」

スカル「おい、このままじゃヤベエぞ！」

トウルース「お前は、誰にも必要とされてないと思ってるのか？」

双葉「！」

トウルース「俺たちは、必要としてるんだがな。俺たちにはお前の力が必要なんだよ」
シャドウ双「佐倉双葉！ 思い出せ！ 自殺したのは、お前のせい。研究を邪魔したから、なぜ自殺だと思った。そのやつが言つてたはずだ」

トウルース「そのやつて」

双葉「・・・遺書」

シャドウ双「そうだ・・・黒い服の大人に見せられた遺書だ。何が書いてあつた？」

双葉「私への、恨み」

シャドウ双「お前は、辛くて、シヨックで、目をそらした。だが、黒い服の大人は、延々と読み上げた。大勢の親戚の前で」

トウルース「みんなの前で読むには酷すぎるだろ？ そんなこと、わざと以外ですることなんかあるわけないだろ」

シャドウ双「そうだ、良く考えろ。あの遺書は本物か？ 本当に大好きなお母さんが書いたのか？」

トウルース「そんな酷いこと一度でも言われたのか？」

双葉「ない！ 私がワガママ言ったときは怒られたけど、優しくかつた！」

シャドウ双「ならばあの遺書は？」

双葉「真つ赤な偽物だ！」

シャドウ双「お前は利用されたんだ！遺書を捏造し、死を擦り付け、幼い心を傷つけ踏みにじった！怒れ！クズみたいな大人を許すな！」

双葉「わたしが自分自身と・・・お母さんの死と、ちゃんと向き合わなかったせい！何で私、あんなこと言われなきゃならなかったの！」

ネクロノミコン「・・・お前を否定するのは幻影・・・心無きものが施した呪い・・・もとよりお前は知っていた・・・知っていないながら怯えてきた」

双葉「・・・そう、知ってた。でも私・・・」

認知存在イツシキワカバ「お前のせいで私は・・・！今度は、お前が死ぬッ!!」

ネクロノミコン「・・・いわれた通りお前は死ぬのか？お前はどちらに従う？幻が吐く呪いの言葉か？お前自身の魂か？」

認知存在イツシキワカバ「お前のせいだ！全部！お前のツ！」

双葉「私は、もう、歪んだ上っ面なんかには騙されない・・・他人の声にも惑わされない：自分の目と心を信じて、真実を見抜く。お前なんて、お母さんなわけない！腐った大人が創った偽物だっ！ぜったい、ぜったいにつ・・・！許す、もんかつ！」

そのとき双葉の後ろから双葉のシャドウが出たかと思うと

それが大きなUFOになった

パンサー「何、あれ！」

トウルース「ペルソナだろ！」

UFOの下から触手？が出てきた

そして双葉が掴まれて、上に連れてかれた。・・・変な妄想すんなよ？

UFOから声がする

双葉「手伝って、あいつやつつける」

ジョーカー「ああ！」

双葉「ここは私の心の世界だ！自分の心の歪みの一部ぐらいハック出来る！」

素晴らしい双葉は後ろに大きなバリスタを作った

双葉「これで撃ち落とせ！そこからボッコボコにするぞ！」

モナ「なるほどな！やってやるぜ！」

トウルース「みんな、作戦がある」

スカル「それは何だ？」

トウルース「一気に技を出して、混ぜるんだ」

モナ「技の合体!？」

トウルース「ワンチャンあるかなって」

スカル「やってみようぜ！」

パンサー「成功したら強そうじゃん！」

ジョーカー「やるか」

モナ「みんなやる気か・・・」

トウルース「スカル、バリスタは頼んだ」

スカル「おうよ」

バリスタの矛先を調整し、撃って当たった

認知存在イツシキワカバ「ガアアアア」

イツシキワカバが落ちてきた

認知存在イツシキワカバ「くううっ！お前ら・・・よくも・・・！親に逆らう子供は・・・

死ねーっ！」

トウルース「お前は消えろ、行くぞ」

皆「おう！」

ジョーカーが銃を構える

撃った瞬間に弾道に乗せてみんなのガルーラ、アギラオ、ジオンガを撃つそして俺は

指弾に乗せた

全部が合わさり、ワカバの眉間を撃ち抜いた

そしてワカバはピラミッドの一番下まで落ちて行った

スカル「よっしやあ！倒したああああ！」

双葉「なんじゃこりやあ！」

トウルース「怪盗服でいいんかな？」

本物の若葉が現れた

スカル「また出たっ!？」

双葉「お母さん!？」

トウルース「あの人は本物だろうな」

パンサー「え？」

若葉「双葉。本当の私の事、思い出してくれて、ありがとう」

双葉「ワガママ言っつて、ごめんなさい。お母さん……」

双葉が歩み寄ると

若葉「こつちに来てはダメ。あなたの居場所は、ここじゃないでしょ？」

双葉「せつかく、会えたのに……」

若葉「またワガママ？」

双葉「……あの、わたし、お母さん、大好き……」

若葉「私もよ、双葉。ほら、行きなさい」

若葉は消えて行った

トウルース「それじゃあ帰るか！」

双葉「・・・だな」

パンサー「モナ、車になって」

モナ「よし、パレスが無くなる前に急いで帰るぞ！」

パレスを出た

気が付くと、ルブラン前にほっぽり出されていた

竜司「おい、生きてるか？」

優斗「なんとか」

杏「大丈夫」

蓮「問題ない」

双葉「多分」

ルブランから惣治郎が出てきた

惣治郎「なんだ、今の音？って双葉!？」

双葉「惣治郎・・・」

惣治郎「なんだお前たち、知り合いだったのか？」

優斗「そうなんですよ。風の噂で佐倉さんとここにトラウマで引きこもってる娘がいるって聞いて行って見たら会いました、外に出れるようになる手伝いしてたんですよ」

惣治郎「そ、そうなのか？」

双葉「そ、そう！今はここまでしか来れないけど」

惣治郎「そうだったのか、とりあえず入れ」

双葉「話しよせてよかつたんだよな？」ボソツ

優斗「あざつす」ボソツ

ルブラン店内

惣治郎「コーヒーでいいか？」

竜司「すいません、俺ちよつとコーヒーは・・・」

惣治郎「じゃあコーラにするか？」

竜司「コーラでお願いします」

惣治郎「はいよ」

双葉「ちよつと気になってたんだが、お前いたか？」

優斗「俺？」

双葉「なんか女の子一人いたよな？ここにはいないけど」

優斗「それが俺なんだ」

双葉「・・・マジで？」

優斗「マジで」

双葉「どうやったたらそうなるんだよ」

優斗「もう戻れねーし受け入れたほうが楽なんだよ」

双葉「そつか。でも理由は今度ゆっくりな」

優斗「ところでさ、これからどうするんだ？」

双葉「何が？」

優斗「俺たちと一緒に怪盗するか？」

双葉「・・・しようと思う。個人的にちよつと気になる事あるし・・・皆には言えな

いけど、それでもいいな」

優斗「そうか。これからもよろしくな」

双葉『遮られた!?!』

惣治郎「何話してんだ？」

優斗「いや、なんでもないです」

コーヒーを出してくれた

優斗「ありがとうございます」

惣治郎「いや、こっちも双葉にあまり親らしいことできなくてな。お前らにしても

らつてた。お礼だ」

みんなで駄弁つてるとこんな話が出た

杏「また今度、お泊り会とかしてみない？」

優斗「誰の家だよ」

竜司「家は無理」

杏「私も」

蓮「家は・・・」

惣治郎「できればやめてほしいんだが」

双葉「無理だ」

優斗「家は分からんな」

杏「聞いてみたら？」

電話を掛けた

即答でOKされた

優斗「OKだつて」

惣治郎「ちよつと待て、双葉は大丈夫なのか？」

双葉「皆とならいいけると思う」

優斗「家こつから近いですから何かあつたらすぐ帰ってきますよ」

惣治郎「そうか」

竜司「明後日にするか？日曜だし」

優斗「じゃあみんな解散するか」
そして俺は帰って寝た

第四十六話（暗殺教室の軌跡 『第十八話』より）

「拉致の対処ってした事ねえや」

学校に行くと、片岡に聞かれた

片岡「優菜、班なんか入った？」

優菜「班？なんの」

片岡「忘れてんの？来週の修学旅行だよ」

来たーーーー！！

体育

烏間「知つての通り、来週から京都二泊三日の修学旅行だ。君等の楽しみを極力邪魔はしたくないが。これも任務だ」

岡野「・・・てことはあつちでも暗殺？」

烏間「その通り。京都の町は学校内とは段違いに広く複雑。しかも・・・君達は回るコースを班ごと決め、奴はそれに付き合う予定だ。スナイパーを配置するには絶好の場所既に国は狙撃のプロたちを手配したそうだ。成功した場合貢献度に応じて百億円の中から分配される。暗殺向けのコース選びをよろしく頼む」

教室

どこ行こうか

渚「業君！同じ班なんない？」

業「ん、オツケ〜」

杉野「ええー大丈夫かよ業、旅先で喧嘩売って問題になったりしないよな？」

業「へーきへーき、旅先の喧嘩はちゃんと目撃者の口も封じるし、表沙汰にはならな
いよ」

杉野「おい・・・やっぱやめようぜアイツ誘うの」

渚「うーん・・・でもまあ気心知れてるし」

業「でメンツは？渚君と杉野と茅野ちゃんど？」

茅野「あ、奥田さんも誘った」

業「7人班だからあと二人要るんじゃないやね？」

杉野「へっへっ俺をなめんなよ。この時のためにだいぶ前から誘っていたのだ。クラ
スのマドンナ神崎さんでどうでしょう？」

茅野「おおく異議なし！」

優菜「俺もいいか？業がなんかしようとしたら止めるから」

杉野「確かにいざとなったらあの力だったら止められるな」

業「そこまでしなくてもいいと思うけど」

渚「まあ念には念をだよ」

ということを入れてもらった

当日、辞書レベルのしおりを持って駅からいざ出発

菅谷「うわ・・・A組からD組まではグリーン車だぜ」

中村「うちらだけ普通車いつもの感じね」

大野「うちの学校はそういう校則だからな、入学時にh」

優菜「聞いている暇あったら乗れよ」

そのときイリーナ先生が凄い格好してきた

イリーナ「ごきげんよう生徒たち」

木村「ビツチ先生、なんだよそのハリウッドセレブみたいなカツコはよ」

イリーナ「フツフツ女を駆使する暗殺者としては当然の心得よ」

優菜「ビツチ先生、着替えたほうが身のためだぞ」

イリーナ「なんでよ」

優菜「烏間先生がキレかかっている」

烏間先生から殺気が！

イリーナ先生結果着替えた

「そういや殺せんせーがいないな」

渚「何で窓に張り付いてんだよ殺せんせー!!」

殺せんせー「が次の駅で入ってきた」

殺せんせー「いやあ疲れました目立たないように旅するのも大変ですねえ」

優菜「先生、いいこと教えてあげる」

殺せんせー「? なんですか?」

優菜「先生、枕忘れてない?」

殺せんせー「!」

探したらしいが

殺せんせー「忘れたみたいです・・・」

皆「それだけ、あつて忘れ物かよ!」

優菜「で。先生、もしかしてこれ?」

殺せんせー「! それですどこにあつたんですか?」

優菜「職員室」

殺せんせー「ありがとうございます!!」

渚「・・・盗んだの?」

優菜「いや、殺せんせーなら忘れるかなって。期待通りだったし」

そして電車はカット！

第四十七話（暗殺教室の軌跡『第十九話』より）

「無詠唱召喚ぐらいできる様になれ」

宿

殺せんせーが死にかけてる。まあ酔っただけだけど

片岡「・・・一日目ですでに瀕死なんだけど」

三村「新幹線とバスで酔ってグロッキーとは・・・」

岡野「大丈夫？寝室で休んだら？」

殺せんせー「いえ・・・ご心配なく」

茅野「どう神崎さん？日程表見つかった？」

神崎「・・・ううん」

殺せんせー「神崎さんは真面目ですからねえ独自に日程をまとめてたとは感心ですねえ。でも安心を先生手作りのしおりを持ってば全て安心」

岡島「それ持ち歩きたくないからまとめちゃだよ!!」

修学旅行二日目

杉野「でもさあ、京都に来た時ぐらい暗殺の事忘れたかったよな。いい景色じゃん、

暗殺なんて縁のない場所ですか」

渚「それでもないよ杉野、ちよつと寄りたいコースあったんだ。すぐそのコンビニだよ」

移動した先には坂本龍馬暗殺と書かれた石碑があった

奥田「坂本龍馬……つてあの？」

業「あゝ1867年、竜馬暗殺。近江屋の跡地ね」

渚「さらに、歩いてすぐの距離に本能寺もあるよ。当時と場所は少しずれてるけど」

茅野「……そつか1582年の織田信長も暗殺の一種かあ」

渚「このわずか1kmぐらいの範囲の中でも、ものすごいビッグネームが暗殺されてる。知名度が低い暗殺も含めればまさに数知らず。ずっと日本の中心だったこの町は……暗殺の聖地でもあるんだ」

杉野「なるほどなく、いわれてみれば。こりや立派な暗殺旅行だ」

路地裏

茅野「へー、祇園つて奥に入るとこんなに人気無いんだ」

神崎「うん、一見さんお断りの店ばかりだから目的もなくフラつと来る人もいないし見通しが良い必要もない。だから希望コースにピッタリなんじゃないかって」

そうしていきなり高校生が道を塞いできた

高校生A「ホントうってつけだ。なんでこんな拉致りやすい場所歩くかねえ」

茅野「!!・・・え？」

業「・・・何お兄さんら？観光が目的っぽくないんだけど」

高校生B「男に用はねー。女置いてお家帰んな」

その瞬間業は、高校生の一人をあげを掌で突き上げて、顔面を掴んで電柱にたたきつけた

優菜「やりすぎ、業」

業「目撃者居ないとこなら喧嘩しても問題ないっしょ」

優菜「そういう問題じゃな」

業が後ろから鉄パイプで殴られた

高校生C「ほんと隠れやすいなココ、おい、女さくらえ」

優菜「イフ」

口をふさがれてしまった

茅野「ちよ何・・・ムググ」

杉野「おい、何すんだ・・・」

杉野は腹をけられ、渚は顔面を殴られた

俺たちは拉致られた

高校生A 「うひゃひゃひゃ!! チョロすぎんぞこいつら」

高校生C 「言ったべ? 普段計算ばつかしてるガキはよ。こういう力業にはまるつきり無力なのよ」

茅野 「・・・ッ犯罪ですよねコレ男子たちあんな目に遭わせといて」

高校生D 「人間きわりいな、修学旅行なんてお互い退屈だろ? 楽しくやろうって心遣いじゃん」

優菜 「お前今つまらないって言ったか?」

高校生D 「? いったぜ」

優菜 「お前たった二回で飽きてんじやねーぞテメエ! こちとらこれが七回目だぞ!!」

高校生達 「何回行ってんだよ!!」

高校生A 「な、まずはカラオケいこーぜカラオケ」

茅野 「何で京都まで来てカラオケなのよ!! 旅行の時間台無しじゃん」

高校生C 「わかってねーな。その台無し感が良いんじゃないやねえか。そっちの彼女ならわかるだろ?」

ケータイの画像を見せてきた

高校生C 「去年の夏ごろの東京のゲーセン、これお前だろ?」

優菜 「そんな三回も生きてりゃ一回ぐらいあるわ」

高校生B「お前は一体何があつたんだよ」

高校生C「攫おうと計画してたら逃がしちゃった。ずいぶん入り浸つてたんだってなあ。まさかあの柵ヶ丘の生徒とはねくでも俺にはわかるぜ毛並みの良いやつらほどよ。どこかで台無しになりたがつてんだ恥ずかしかるこたあねーよ楽しいぜ台無しは、落ち方なら俺等全部知ってる。これから夜まで台無しの先生が何から何まで教えてやるよ」

優菜「じゃあ、俺と取引しないか？」

高校生C「取引？」

優菜「俺と腕相撲で勝負して一回でも勝つたら俺と（ピー）してもいいぜ複数人同時にやるのは無し複数人で一緒もなし道具も禁止一対一のガチンコ勝負だ」

高校生C「ほう？いいぜ乗った」

よかつた寺坂みたいなやつで

茅野「それって、大丈夫なの？」

優菜「少しは信じろ」

近くの廃ビルに着いた

第四十八話（暗殺教室の軌跡 『第二十話』より）

「自己犠牲」

高校生C 「ここなら騒いでも誰も来ねえな。台持つてくるから、待つとけ」

神崎 「大丈夫なの？」

優菜 「大丈夫、イフリートとクロノスに支えてもらうから」

茅野 「あ、そういうこと」

高校生C 「できたぞ、こい」

台を挟んで腕相撲をするが

高校生C 「何だこりやあ!! 全く動かねえ!!」

優菜 「もう終わり？」

素晴らしい俺は腕を相手側に倒した

優菜 「ドヤア」

高校生C 「負けちまった・・・」

高校生A 「なんだ、てめえ負けちまったのかよ。てことは最初にやるのは俺ってこと

だな？」

優菜「御託言ってる暇あったらあく来いよ」

軽くないなした

後の二人も簡単に倒した

優菜「つじやお互い休みにするか」

俺は戻った

高校生達は動揺してるらしいな

電話してるから誰か呼んだんだろう

茅野「神崎さん、そういえばちよつと意外。さっきの写真、真面目な神崎さんもああいう時期があったんだね」

神崎「・・・うん。うちは父親が厳しくてねいい学歴いい職業良い肩書ばかり求めて来るの。そんな肩書生活から離れたくて、名門の制服も脱ぎたくて、知ってる人がいない場所で格好も変えて遊んでたの・・・バカだよな。遊んだ結果。得た肩書はエンドのE組。もう自分の居場所がわからないよ」

優菜「ふつ、俺なんて世界回ってきたけど。結局前を向いたのは数えるぐらいだ。いつ死んでもおかしくない場所で、殺しに来る奴が誰かも知らないのが普通だからね・・・まあ、だからどうこうって事もないけどね。それが俺の人生だから、やりたいようにやるだけだよ」

第二ラウンド

優菜「何か作戦は立てたのかね？」

高校生C「これとかな」

俺は横から腕をフルスイングでバットののような長いもので骨を折られた

優菜「ガ・・・ア・・・アア」

高校生C「これはルール違反じゃないよな？ 邪魔は禁止されてないからな」

優菜「・・・へっ、無駄に頭使いやがって」

高校生C「もう片方も折っとけ」

もう一つの腕も折られてしまった

優菜「ウツ・・・グ・・・ア・・・アア」

高校生C「もう気力もゼロか？ よしやっちまうぞ」

すると扉が開いた

高校生C「お、来た来た。うちの撮影スタッフがご到着だぜ」

だがそこにいたのはタコ殴りにされた高校生だった

高校生C「!？」

渚「修学旅行のしおり、1243ページ。班員が何者かに拉致られた時の対処法。犯人の手がかりがない場合、まず会話の内容や訛りなどから、地元の者かそうでないか判

断しましょう。地元民ではなくさらに学生服を着ていた場合？1244ページ。考えられるのは、修学旅行生で旅先でオイタをする輩です」

茅野「皆!!」

高校生C「なっ・・・てめえら」

渚「大丈夫?」

優菜「両腕が折られたぐらいだから大丈夫」

渚「大丈夫じゃないよそれ!!」

高校生C「何でココが分かった・・・!?」

渚「土地勘のないその手の輩は拉致した後遠くへは逃げない、近場で人目につかない場所を探すでしょう。その場合は?付録134へ。先生がマツハ20で下見した・・・拉致実行犯潜伏対策マップが役立つでしょう」

神崎「・・・!!」

杉野「すごいな。この修学旅行のしおり!カンペキな拉致対策だ!!」

業「いやーやっぱ修学旅行のしおりは持つとくべきだわ」

高校生達「ねーよそんなしおり!!」

業「・・・で、どーすんの?お兄さんら。これだけの事してくれたんだ、あんたらの修学旅行はこの後全部入院だよ」

高校生C「・・・フン、チューボーがイキがんな」

階段を駆け上がる音がしてきた

高校生C「呼んどいたツレ共だ。これでこっちは10人。お前らみたいな良い子ちゃんはないこともない不良共だ」

しかし入ってきたのは殺せんせーと殺せんせーに手入れされ気絶した高校生だった

殺せんせー「不良などいませんねえ、先生が全員手入れしてしまったので」

渚「殺せんせー!!」

殺せんせー「優菜君!?その腕どうしたんですか!?!」

優菜「折れた」

殺せんせー「折れたあ!!?」

優菜「いいよ、治してもらうから」

高校生C「・・・ケ、エリート共は先公まで特別製かよ。テメーも肩書で見下してんだろ?バカ高校と思つてなめやがって」

殺せんせー「エリートではありませんよ。確かに彼等は名門校の生徒ですが、学校内では落ちこぼれ呼ばわりされ、クラスの名前は差別の対象になっていきます。ですが彼らはそこで様々なことに実に前向きに取り組んでいます君たちのように他人を水の底に引つ張るようなマネはしません。学校や肩書など関係ない。清流に棲もうがドブ川に

棲もうが前に泳げば魚は美しく育つのです」

神崎「……！」

殺せんせー「さて私の生徒たちよ。彼らを手入れしてあげましょう。修学旅行の基礎知識を体に教えてあげるのです」

やったわ。しおりで頭にゴンだぜ？

気絶しちまつてるよ

アリエル「これで大丈夫ですよ」

優菜「ありがと。こいつらどうすんだ？」

業「ほっとけばいいじゃん」

優菜「動けるようには、してやろう」

回復した

殺せんせー「先生がもっと早く来れていれば……!!」

優菜「まあまあ、腕が折れたのは俺がやった事だし。すぐ治せるから。それに、日頃から友達の皆は身を投げうってでも助けるって」

殺せんせー「その皆の中に自分も入れてください!!腕が折れたって聞いて先生心臓止まるかと思っただからですから!!」

優菜「……なら、またすれば殺せるんじゃない?」

殺せんせー「それだけは許しませんよ!？」

優菜「冗談だよ殺せんせー。安心して、これからは自分も大切にするよ」
その夜

第四十九話（暗殺教室の軌跡『第二十一話』より）

「フラグ？へし折るよ？」

優菜「どうしようか」

渚「どうしたの？」

優菜「いやな？俺体は女だろ？でも中身男だから女子のみんなとは寝にくいんだよ。かといって男で寝たらお前ら寝れんと思うし」

蓮「俺が良いが」

優菜「お前は、そうだろうな。平常運転で安心したよ」

渚「うくん、ちよつとわかんないね」

優菜「だろ？マジでどうしよ」

蓮「俺たちは襲ったりするやつはいないと思うが」

渚「いや岡島君ならやりかねないよ」

優菜「よし、お前らのところ行くか」

渚「え!？」

大部屋

優菜「よく」

杉野「おう、どした？」

優菜「こつちで寝ようと思って」

杉野「彘」

磯貝「本気か？お前体は女子だろ？」

優菜「女子の中で寝るのはきついわ」

岡島「俺が襲つても構わないってことか？」

優菜「そんな時はお前の股間を百発殴る」

岡島「ヒィ」

優菜「ところで何してたんだ？」

磯貝「ああ、気になる女子ランキングってのをやってたんだ」

優菜「どうなってんだ？」

俺の名前が書いてあった

一票入ってやがる

優菜「俺に入れてるやつだ誰だよ。マジで」

蓮「俺」

優菜「まさかのお前!？」

前原「俺らもどうなんだ？ って思ったんだが」

優菜「お前ホモか」

蓮「それは違う」

優菜「てか、よく言えたな」

杉野「俺だつたら絶対言えねえわ」

優菜「だよな？ それが普通だよな？ ……さてよ、ならこれってプロポーズなのか？」

前原「まさかそんなことないだろ。だろ蓮」

蓮「……（そういえば、杏たちもこっちに連れてく気なんだろうか）」

前原「蓮？ ……まさか」

蓮が腕をつかみ大部屋からでようとする

優菜「な、おい！ みんな助けて……マジで力じゃ勝てないって！ 男としてこれはダ

メだ！ 尊厳にかかわる！」

業「行ってきたら？」

優菜「マジで殺すよ？」

蓮「話だけだから」

引つ張る力が強くなる

優菜「やめろー！ 死にたくない！ 死にたくない！ 死にたくないーい！ 死にたくないーい！」

連れてかれた

業「音声撮りに一緒に行く人いる？」

渚「業君……さすがにそれはやり過ぎだよ……」

男子トイレ

優菜「一回落ち着け、な？そういうことはダメだ。ましてやルームメイトだぞ？マジ

でこれ以上はダメだ」

蓮「何の話だ？」

優菜「は？」

蓮「俺は杏たちの話なんだが」

優菜「あの流れで!？」

蓮「?ああ」

優菜「お前天然か？天然だろ」

蓮「?まあいいが、杏達がお前と寝たらこっちに来るんじゃないのか？」

優菜「おお、そーいやそーうだったな」

蓮「大丈夫なのか？」

優菜「何か知らんけど来た人の分の制服出るしこっちに来れるなら、来たほうがおも

しろいじゃん」

蓮「そういう問題か？」

渚「なにか、してるの・・・？」

優菜「してないぞ」

渚「そ、そうなの？」

優菜「どうした？まさかアレしてると思ったか？」

渚「いや、何かするのになって」

蓮「ホントに話だけだ」

渚「何の話？」

優菜「そのうち人数が増えるかもって話、後岡島をどうするか」

渚「もしかして、また二人みたいな人が来るってこと？」

優菜「人だけじゃないけどな」

渚「だけじゃない？」

優菜「まあいい、戻るぞ」

大部屋

磯貝「大丈夫か？」

優菜「貞操は守った」

蓮「人聞きが悪いこと言うな」

渚「話してただけだったよ」

前原「そっか」

業「ところでさ、杏って誰？」

優菜&蓮「!!？」

渚「もしかして、ホントに音撮ってたの？」

業「何か脅しとかに使えるかなって思ってたんだけど……それ以上に面白そうなのが釣れちゃったねー。で、杏って誰？」

優菜&蓮「ただの知り合いです」

蓮「何も気にすることはないぞ」

優菜「そーそー早く寝ようぜ」

業「あからさまに何か隠してるよね？」

優菜「隠す訳ないじゃんか、何言ってるの？」

業「じゃあ杏達って、他に誰連れてくる気？」

優菜「そ……それは……」

蓮「……俺の世界の仲間だ」

業「仲間？何かやってんの？」

蓮「……言ってるのいいのか？」

優菜「お前がリーダーだろ自分で決めろ」

蓮「・・・心の怪盗団というチームだ」

渚「心の怪盗団？」

杉野「怪盗って・・・アルセーヌルパンみたいな!?」

磯貝「なら、赤外線くぐり抜けたりお宝を盗んだりするのか？」

前原「あー!だからお前から身体能力おかしいのか！」

木村「で、でもよ。それって泥棒じゃ・・・」

優菜「いや、現実にあるモノを盗むんじゃない。言つたら?」心「の怪盗団って」

菅谷「じゃアレか?ハートを頂くってヤツか？」

三村「なら全員イケメン集団って事か!？」

岡島「いや、杏って人が本当に仲間ならイケメンと美人集団になるんじゃないのか!？」

優菜「まあ、顔面レベルは高いけどさ」

岡島「ほらやつぱり!!美女が俺達のクラスに来るって事だぞ!!」

優菜「もう怪盗団の話題じゃねえな」

渚「じゃあ、僕には教えてよ。皆は美人の話題で持ちきりだし・・・」

優菜「・・・蓮、説明してくれ」

蓮「なんでや!俺関係ないやろ!!」

優菜「大アリだよ!!お前リーダーだろ!」

業「・・・的外れか」

そうしてようやく落ち着いた頃

優菜「俺一番端っこで寝ていいか?岡島は俺と真反対の場所で頼む」

磯貝「わかった」

優菜「蓮と渚は俺の横で頼む」

蓮「理由は?」

優菜「蓮は前の世界からの仲だし、渚は力ないから」

渚「そ、そういうことか・・・」↑力ないの気にしてる

磯貝「じゃあみんな、この投票(気になる女子は?)は男子の秘密な。知られたくな

い奴が大半だろーし。女子や先生に絶対に・・・」

殺せんせーが窓に張り付いてやがった

しかもメモして逃げやがった

前原「メモって逃げやがった!!殺せ!!」

みんな追いかけて行った

蓮「行かないのか?」

優菜「どっちかって言ったらお前のほうが行くべきだろ」

蓮「知られて減るものじゃない」

優菜「そっか。・・・ちなみにさっきの投票はどういう意味で入れたんだ？」

蓮「友達」

優菜「俺が勘違いしただけってことか」

蓮「寝るか」

優菜「だな」

寝た

第五十話（ペルソナ5＋Rの軌跡『第二十六話』より）

「怖い話ってぶつちやけどどの季節でも楽しいよな」

日曜・ルブランに全員集合しましたとき

杏「皆、集まった？」

竜司「おう」

杏「忘れ物は？」

蓮「ない」

杏「双葉は行ける？」

双葉「行ける！」

杏「出発！」

自宅

母さん「いらつしやうい」

杏「今日はありがとうございます」

母さん「こんな人数のごはん作るのって久しぶりだから腕が鳴るわ」

優斗「それなりをお願い。俺の部屋行くか？」

自室

杏「思ったより、広い」

双葉「いきなり来るのは、ちよつとヤバかったかも」

蓮「大丈夫か？」

双葉「一泊二日だし、いつでも帰れるから大丈夫・・多分」

竜司「多分!？」

優斗「とりあえず、試したいことがある、蓮にはもうやったが」

杏「やりたいこと？」

優斗「手、貸してくれ」

双葉「手? いいぞ」

手を貸してくれた

優斗「よし、ネクロノミコン」

ネクロノミコン「なんだ？」

双葉「え？」

竜司「俺らも出せるのか!？」

優斗「手」

竜司「おう」

優斗「杏も」

杏「え？あ、うん」

優斗「キャプテンキッド、カルメン」

キャプテンキッド「呼んだか？」

カルメン「ここはどこ？」

竜司「おおくう!!」

杏「出た！」

アルセーヌも出しましたよ

みんなのペルソナ同士で自己紹介したり

自分のペルソナと話したりしましたわ

そしてご飯も食べて、風呂も入った

後はもちろん

優斗「怖い話だろ」

竜司「いきなりどうした？」

優斗「怖い話しようぜ」

杏「いいね！面白そう」

優斗「意味が分かると怖い話でもするか」

モルガナ「俺、そういうの苦手なんだが」

竜司「なんだ？怖いのか？」

モルガナ「こ、怖い訳ねえだろ！いいぜ！聞いてやる」

優斗「よしまずは、これだな」

飛ばしても構いません

小学校に入る前の娘と遊園地に行った。入り口には看板が貼ってあって、楽しんでねと書かれていた。まだ字が読めるようになったばかりの娘が、まじまじとその看板を見ていて微笑ましかった。ジェットコースター、観覧車、コーヒーカップ、と色々な乗り物に乗ったが、しかしどうにも娘はそわそわして楽しんでる様子がない。俺はせっかく遊園地に来たんだから入り口に書いてあるようにしないと駄目だぞ、というとやたら暗い顔になる。まだ遊園地は早かったのかもしれない。仕方ないから帰ることにした。そして娘はその日自殺した。俺は今でも自分を許せない

竜司「自殺したのかよ」

モルガナ「十分怖いんだが」

優斗「確かに話自体が怖かったかもな」

双葉「わたし、分かった」

優斗「さすがだけど、まだいなよ」

蓮「うくん、なんだ？」

優斗「ヒントいるか？」

竜司「頼む」

優斗「娘はまだ字が読めるようになったただけだ」

杏「あ、わかった」

蓮「俺も」

竜司「嘘だろ!? もう一個、もう一個頼む」

優斗「漢字は読めるのか？」

竜司「・・・! そういうことか！」

正解は楽しんでねの楽が読めなくて、しんでねだけ読んだから自殺してしまっただし

た

その後四個ぐらいして寝た

夢

神様「起きなさい」

優斗「なんだテメエ」

神様「わしの扱い酷くない？」

優斗「そっか？」

神様「こんな人数連れてこようとして、制服買ったり、戸籍作ったり、家買ったり、入学したりするの結構大変なんじゃぞ」

優斗「家？」

神様「この人数で男と女が同じ家は駄目じゃろ。だからお隣さんのとこ買っておいだから、そこ分かれて使って、鍵はリビングに置いておくから」

優斗「あざっす」

もっかい寝た

第五十一話（暗殺教室の軌跡『第二十二話』より）

「転入生」

起きる横見る皆いる

しかも蓮以外起きてるパニくってる

優菜「えっと、大丈夫か？」

竜司「誰だよ！」

優菜「優斗だよ！」

竜司「嘘言ってんじやねえ！」

優菜「嘘じゃねえよ！」

とりあえず落ち着かせて蓮を起こした

優菜「よくあれで寝れたな」

蓮「別によくね？」

杏「どこどこ？」

少女説明中

双葉「がっ・・・こう」

優菜「大丈夫か？」

双葉「行かないといけないか？」

優菜「リハビリと思えば何とか」

双葉「・・・わかった、何かあったら助けに来てくれよ？」

杏「とりあえずこれ着ればいいの？」

優菜「ああ、戸締りは任せて。みんな登校するぞ」

理事長室前

杏と竜司は終わった

竜司「プレッシャーヤバくね？」

杏「何あの人」

双葉「大丈夫なのか？」

優菜「ついて行ってやる」

理事長室

浅野理事長「君は何で入ってきたんだい？優菜さん」

優菜「この子が人見知りだから、付き添いです」

浅野理事長「君だけ出ることとはできないのかい？」

優菜「すいません、離してくれなくて」

浅野理事長「一人で何もできないような子は、本校舎にいる資格はない。悪いけどE組行きだよ」

優菜「そつすか、行こう。双葉」

双葉「う、うん」

出た

優菜「行くか」

杏「どこに？」

優菜「あの山」

竜司「嘘だろ？」

蓮「いや、マジ」

優菜「ペルソナ呼んで送ってもらおう？」

双葉「頼む」

連れてつてもらった

杉野「・・・また連れてきたのか？」

優菜「そう」

渚「あと何人来るの？」

優菜「それは分からん」

双葉「どこに行けばいいんだ？」

優菜「ああ、連れてくから。杏と竜司も来て」

職員室

烏間「あと何人連れて来るんだ？」

杏「ここで授業するの？ トイレとか衛生的に大丈夫？」

竜司「どういうところなんだ？」

烏間「今日別の転校生が来るんだが」

優菜「それは、すいません」

烏間「ハア、よし来てくれ」

連れてかれたので教室へ

教室

岡島「まさか、こう来るとはな」

あれ？ 律の場所がおかしいし

なんか席増えてね？

渚「何で席増えてるの？ しかも気づくか気づかないかぐらい広くなってるよ教室が」

優菜「どう、やったんだ？」

殺せんせー「秘密です」

優菜「教えるぐらい……」

殺せんせー「秘密です」

HR

鳥間「皆、知ってると思うが転校生を紹介する。まず優菜が連れてきた。竜司と杏と双葉だ」

竜司「よろしく」

杏「よろしくお願いします」

双葉「よ、よろしく」

岡島『美女が……二人も……!』

岡島が感涙の涙を流していた

鳥間「そして、ノルウエーから来た自律思考固定砲台さんだ」

律「よろしくおねがいます」

教室の左後ろにある四角い黒い箱のモニターに、淡い紫色の髪をした女の子が無表情で映っていた

鳥間「言っておくが、彼女はAIと顔を持ちつきとした生徒として登録されている。あの場所からずつとお前に銃口を向けるが、お前は彼女に反撃できない。生徒に危害を加えることは許されない。それがお前の教師としての契約だからな」

モルガナ「何話してんだ？」

菅谷「？今にやーって聞こえなかったか？」

奥田「聞こえたような」

蓮「何でいる？」

モルガナ「あそこにいるより、来たほうが良いだろ？だからかばんに入ってきた」

菅谷「やっぱ聞こえる、どこだ？」

優菜「一回黙れモルガナ」

モルガナ「ここどこなんだ？出ていいか？」

菅谷「蓮の机から聞こえるぞ」

優菜「出んなモルガナ」

皆連のほうを見る

モルガナが出てきた

優菜「！バカ!!」

渚「猫？」

中村「何でいんの？」

モルガナ「？どうした」

烏間「お前の家の猫か？」

優菜「蓮と同じ系の猫です」

烏間「何でいるんだ？」

優菜「蓮、向こうじゃ、いつつも入ってるよな？机に」

蓮「ああ」

烏間「・・・とりあえず、職員室に連れて行くぞ」

烏間先生がモルガナを連れて行こうとするが

モルガナ「なっ！何をする！放せ！」

爪を立てて机に引っ付いていた

優菜「何をする、放せって言ってますよ」

烏間「わかるのか？」

優菜「俺らは全員わかります」

モルガナ「放せよ！」

蓮「放せって言ってるんですけど」

竜司「どうせだったら連れてつてもらえばどうだ？」

モルガナ「おい、ひっかかれないのか？」

優菜「とりあえず、放してやってくれませんか？」

烏間「・・・わかった」

放されたモルガナは蓮の机に入った

殺せんせー「では、一時間目を始めましょうか」

あ、スルーなのね

一時間目

授業中

律の側面から重火器の様なモノがたくさん出てきた

優菜「皆、伏せることおすすめる」

蓮「え？」

高速で弾が発射されるが、当然殺せんせーは避ける

殺せんせー「シヨットガン四門、機関銃二門濃密な弾幕ですが、ここの生徒は当たり前にやつてますよ。それと、授業中の発砲は禁止ですよ」

銃が全部しまわれた

律「気をつけます。続いて攻撃に移ります」

うん、話聞いてないね

そのあと先生の触手一本を破壊し、どんどん改良されていく

そして、片付けは俺らがやるという悲劇

授業中？ 自習してたよ

次の日

寺坂がガムテープで縛り

普通に授業を受けた

やばいって言ったたら竜司の学力ぐらい

夜

殺せんせーが改造するころだろうと思つて

学校行つたらビンゴでした

改造する寸前だったから双葉に手伝わせた

体積増えた

次の日

律「おはようございます!! 優菜さん!!」

殺せんせー「親近感を出すための全身表示液晶と体・制服のモデリングソフト、すべて自作で八万円!!」

律「今日は素晴らしい天気ですね!! こんな日を皆さんと過ごせて嬉しいです!!」

殺せんせー「豊かな表情と明るい会話術。それらを操る膨大なソフトと追加メモリ同じく十二万円!!」

双葉「私も手伝ったんだよ」

渚「双葉さんも!？」

優菜「こいつナメたら痛い目見るぞ。メジエドっていうネットの義賊やってただけど、それがすげえのどんなセキュリティも突破すんだ」

渚「急」

殺せんせー「先生の財布の残高・・・五円!!」

優菜「殺せんせー・・・もう一回貸そつか? 一万円」

殺せんせー「・・・お願いします」

優菜「これで貸し二万だな」

殺せんせー「絶対返します」

翌日 まあ元に戻されてたけど

律「おはようございます。みなさん」

双葉「戻ってる・・・」

烏間「生徒に危害を加えないという契約だが今後は改良行為も危害とみなすと言ってきた。君等もだ彼女を縛って壊れでもしたら賠償を請求するそうだ。持ち主の意向だ。従うしかない」

殺せんせー「持ち主とはこれまた厄介で・・・親より生徒の気持ち尊重したいんですかねえ」

律「攻撃準備を始めます。どうぞ授業に入ってください殺せんせー」
銃が出てきたと思ったら、銃ではなくたくさんの花が出てきた

律「花を作る約束をしていました。殺せんせーは私のボディーに……計985点の改良を施しました。そのほとんどは……マスターが暗殺に不要と判断し、削除・撤去・初期化してしまいましたでしたが学習したE組の状況から私個人は強調能力が暗殺に不可欠な要素と判断し消される前に関連ソフトをメモリーの隅に隠しました」

殺せんせー「……素晴らしい、つまり律さんあなたは」

律「はい！私の意志でマスターに逆らいました。殺せんせー、こういった行動を反抗期というのですよね？律は悪い子でしょうか？」

殺せんせー「とんでもない、中学三年生らしくて大いに結構です」

双葉「あ、そういや、あの時バックアップしてなかったけ？」

双葉がメモリーカードを出す

双葉「これに入ってるんだが」

優菜「消したやつ全部入ってるってことか!？」

殺せんせー「……双葉さん入れてください」

優菜「殺せんせーは世界スウィーツ店ナビ機能が使いたいんじゃないのか？」

殺せんせー「にゅやッ！そ、そんなわけないでしょうが！」

優菜「目が泳いでるぞ」

律「私からも、戻るのならば、戻してほしいです。今度はちゃんと隠しきります！」

双葉「インストールするのに時間がかかると思うぞ。てかどこに刺すんだ？」

律「あ、横のどこかにあると思います」

双葉「ここか」

USBポートを見つけ、ぶっ差した

律「あ、来ました。時間短縮のためスリープモードに移行します」

画面が真っ暗になり、律が消えた

優菜「なんか、トントントン拍子に進んでったな」

殺せんせー「ですが、あの膨大な量のデータをどうやってあんな小さなメモリーに」

双葉「企業秘密」

殺せんせー「先生にぐらい教えてm」

双葉「企業秘密」

殺せんせー「少しg」

双葉「しつこい」

渚「なんか、今僕たち空気じゃなかった？」

業「ホントに空気だったね今」

茅野 「とりあえず、いいんじゃないの？」

杉野 「丸く収まったしな」

そうして一日が過ぎていった

第五十二話（盾の勇者の成り上がり）の軌跡『第一話』より）

「盾の勇者」

高い所から落ちたような鈍い痛みが走った

優菜「痛ッてえな（ベッドから落ちたか？）」

周りを見ると、城のような場所にいた

？「やりました！成功です！」

優菜『黙れよ、朝っぱらから起こして……って何が成功したんだ？』

？「いったいこれは……」

？「さっきまでいたとこと違うな」

？「中世というかまるでゲームの中の世界みたいですね」

？「なんだ？この武器は」

優菜『あ、夢だわこれ。もう一回寝たら治るっしょ。よし寝よう、さあ寝よう』

？「おい、寝ようとしてるだろ」

優菜『夢だから、寝たら起きるっしょ』

？「起きろ」

優菜『起きたいから寝るんだよ』

？「・・・起こすぞ」

は？腕をひっぱられ・・・じゃあ夢じゃないのか

優菜「わかつたわかつた、起きればいいんだろ？」

ここが新しい世界だと理解し、今度神様に合ったらぶん殴ろうと心に決めた

？「？どうして勇者様が五人も・・・四人のはずじゃ？」

優菜「またか・・・」

王がうんたらかんたら言つてたけどカットして

天木連つてやつと川澄樹と北村元康。そして岩谷尚文

その後勇者の仲間になるって人が来た

まあ俺には来なかつたけど

優菜「何で俺と尚文居ないの？」

王「何とこのようなことになるとは」

優菜「なに？わかんの？」

王「盾の勇者様は人望がないからであろうが、そなたは得体の知れない女性ですから

だと思われるな」

優菜「女性？」

体を見て、股間を見る

男たちはギョツとしてたけど

うん、いつものやつだ

優菜「・・・まあいいや」

尚文「なにがだ？」

王「貴方は武器も持っていない。ただの巻き込まれた女性としか思えないのです」

尚文「じゃあ、俺の人望がないって、どういう」

元康「だって、負け組の職業だろ？盾って」

尚文「な、それって」

優菜「今はそれよりこの状況をどうするかだろ」

？「あ、じゃあ。私良いですよ」

尚文「え・・・」

マイン「いくらなんでも、一人はかわいそうですもの！私マイン・スフィアって言います。よろしくね勇者様！」

尚文「・・・あつよろしく」

元康「いいのか？」

マイン「はい！」

優菜「じゃあ、俺もいいか？このままじゃ俺一人だし、どうせ来たんだつたら楽しみたい。その責任は王様もあるでしょ」

王「うむ、分かった。では盾の勇者とそなたには銀貨を八百枚を渡す。では旅立つといい！勇者たちよ！」

マインがいいところ知ってるからと言われ武器屋

尚文「おお？・・・すげえ当たり前だけど本物だ」

店員「いらっしやい！お客さん、うちは初めてかい？」

優菜「はい、そうです。武器見せてください」

店員「得意な武器がないってんならまず、まずは剣だな！アンちゃん予算は？」

マイン「大体銀貨二百五十枚の範囲ですかね」

店員「だったらこの辺だろ」

尚文が持つと剣が弾かれたように飛んで行った

どうやら伝説の武器以外を持ってはだめらしい

まあ、俺は関係ないけど

俺は尚文が弾いた剣と同じような剣を買い、装備をそろえた

その後、少し戦って攻撃力などを確認した

その夜夕食を食べ寝た

そして朝

優菜「うくん、朝か。今度は戻らねえのかな」

階段から大勢が駆けあがってくる音が聞こえた

優菜『なんだ？朝っぱらから』

？「盾の勇者!!強姦の罪の容疑で連行する!!」

優菜『あつ、あのシーンか』

そして自室の部屋も勢いよく開いた

？「あなたは優菜様ですね？同行していただきます」

優菜「いいよ」

城

尚文はマインにカモにされ何もかも盗られたそうだ

俺のは無事だったが、尚文は街から出て行けと命じられ、厄介払いされた

王「其方もされたのであろう？これからどうするのだ？」

優菜「ん？尚文についていく」

鍊「な!?!正気か!?!お前は」

優菜「お前らの頭が悪過ぎて、嫌気がさす。ちなみに俺は異世界なんて慣れっこだか

ら」

元康「何を言ってるんだ、お前は」

優菜「まあいいや。とりあえず行くから」

王「傭兵！」

俺は、傭兵に囲まれた

王「わざわざ、あやつのもとになど行かせられない」

優菜「あっそう」

俺はクロノスを呼び時間を止め、扉の前まで行った

王「な!？」

優菜「キチガイとでも何とでも呼べばいい。その度に俺は自分が正しいと実感できる」

そう言い俺は城を出て行った

第五十三話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第二話』より）

「奴隸」

尚文を見つけた

優菜「おっ、尚文っ！」

尚文「……なんだ、来たのか」

優菜「なんだとはなんだ」

尚文「俺についてきたら酷い目に遭うかもしれないのに」

優菜「俺は、見た目中学生だけど、中身はあの王様より老けてんだけどな」

尚文「どうか気になっていたんだが、何で自分の事を俺って言うんだ？」

優菜「俺、中身男だから」

尚文「彘」

優菜「まあ、こうなるのも三回目だし」

尚文「は？」

優菜「とりあえず、これからどうする」

尚文「……ここを出よう。こんな街、いるだけで吐き気がする」

優菜「そっか」

尚文「お前は、俺が信じれるのか？」

優菜「・・・強姦がホントなら俺もされてるし」

尚文「それもそうだな」

優菜「まあ、やりたいならやればいい、オ○ニーでもなんでも」

尚文「な！お前、そういうこと女の体で言うもんじゃ」

優菜「まあ、もと男だから、そういうのしても気にしないから」

？「おいそこの！盾のアンちゃん!!」

尚文「あれは武器屋の・・・」

店員「聞いたぜ、仲間を強姦しようとしたんだって？・・・てかアンタはいんのか」

優菜「俺はされてねえからな。こいつはそんなことするやつに見えねえし」

店員「これからどうすんだ」

尚文「ここを出る」

店員「・・・ならこれを持ってけ在庫処分する予定のやつだ」

服を渡された

店員「そんなカッコじゃなめられちまう」

優菜「払うぞ」

店員「銅貨五枚ってトコだ」

渡した

店員「ちゃんと帰って来いよ」

優菜「気が向いたら」

尚文「行くぞ」

優菜「ああ」

俺たちは町を出て行った

尚文「うおおおっ！」

俺たちは今、草原でレベル上げをしている

優菜「レベル2か」

尚文「やっとな」

優菜「ちよつと見せたいのがある」

尚文「なんだ？」

優菜「これ、渡されたのと同じじゃないか？」

薬草を見せた

優菜「！盾・・・反応してないか？」

俺たちは盾に薬草を近づけた。すると薬草は吸われ、リーフシールドとか言うやつが

使えるようになったんだと

尚文「色々使えばスキルが増えるのか」

優菜「イフリート」

尚文「何言つて」

イフリート「なんだ？」

尚文「は？」

優菜「一体一体倒すのめんどいから一気に全部焼いちやつて」

尚文「え？」

イフリート「わかった」

マハラギオンで焼きまくったらレベル2にあがった

優菜「ありがと、戻つて」

イフリートは消えた

尚文「なんだ、今の」

優菜「ああ、話してなかったな。こいつらはペルソナって言うんだが、まあ簡単にい

えば仲間だな。しかも強い」

尚文「そんなのがあるのか、お前はどこから来たんだよ」

優菜「いろんな異世界だな」

尚文「は？」

優菜「これを見せたのは、この世界でお前が最初だ」

尚文「・・・それぐらい信用してることか」

優菜「じゃあこれからどこに行くんだ？」

尚文「とりあえず、隣町だ」

店

商人「魔物の素材・・・バルーン風船と薬草アエローですね。おやコレは・・・なかなかの品質ですね。ちなみにどちらで採取を？」

尚文「城の外の薬草だ知らないのか？で？いくらになる？」

商人は尚文の顔を見て、少しほくそ笑んだ

尚文「・・・なんだ？」

商人「ああいえ、チョイと噂を聞きましてね。勇者と言えど、罪人になると私にして
もね」

尚文「足元見る気か？いいぜ、ついでに生きの良いのも買い取ってくれよ」

尚文はずっと噛みついてるモンスターバルーンを出そうとしてる

優菜「まて」

尚文「なんだよ」

優菜「一体貸せ」

尚文「?わかった」

渡してくれた

優菜「イフリート、アギラオ」

バルーン「グギギギギギ・・・」

バルーンは燃え尽きた

優菜「お前もこうなりたいなら構わんが」

商人「ヒイイ! わかった! 普通の値段で買い取る!」

優菜「最初からそうすればいいのに」

イフリート「こんなことしていいのか?」

優菜「詐欺しようとしてるんだぞ? いいだろ」

イフリート「そうか」

飯屋

はあ

優菜「まさか、味がないとは」

尚文「確かに・・・これは予想外だ」

優菜「でもこれからどれだけ使うか。わからんから出来るだけ残しておきたい」

尚文「それもそうだが、味はあったほうが」

モブ1「おやおやく見ろよ。あの盾勇者様と一緒に食事する仲間が一人しかいないらしい」

モブ2「俺らが仲間になってやろうか？はははっ！チョーやさしー俺ってば！」

優菜「クロノス、めちやくちや弱く股間を殴って差し上げる」

クロノス「わかった」

クロノスが振りかぶって男の玉を殴った

モブ1「ハウウウ」

モブ2「な、何を!？」

ちようど食い終わった

尚文「出るか」

優菜「ああ」

立ち上がると足をモブに切られた

優菜「痛って」

モブ2「クソが、逃がすと思うかよ」

優菜「お前か・・・」

俺は髪をつかみ顔面に膝蹴りを食らわせた

優菜「お前もしてほしいか？」

モブー「ヒイイ」

出た

尚文「大丈夫か？」

優菜「アリエル、ディア」

アリエル「治しました、あれぐらい無視してくださいよ」

優菜「やだ」

アリエル「やだじゃないですよ。子供じゃないんですから。こんな人ですが、見捨てないでくださいね」

尚文「あ、はい」

？「お困りですか？」

暗闇の中から怪しい男が話しかけてきた

尚文「誰だ!？」

？「人手をお探しではありませんか？」

尚文「間に合っている」

優菜「いや、人手が増えるのは良いと思うんだが」

尚文「こいつ以外は信用ならないんでな」

優菜「え？」

？「うふふふ……仲間だなんてそんな不憫な代物ではありませんよ。私が提供するのには、嘘をつけず決して主人を裏切れない人材」

尚文「お前……」

？「盾の勇者様でしょうか？噂は早いですよ？仲間のいない勇者……とね」

？の店に入った

？「どうぞこちらへ」

中に入るとたぐさんの檻があつた

尚文「なるほど、お前……奴隷商か」

奴隷商「左様で、亜人種が多いですが、これはこれで便利なものです」

そして、話しながら色々見ていく

何か咳払いの音が聞こえたと思つたら、尚文がそこに歩き出し、声のした檻の被つていた布を上げた

檻の中には普通の女の子のような亜人がいた

ほら、よくお前らがケモ耳サイコーとか言ってるやつみたいなの

侮辱じゃない、俺もお前らの中の一人さ

尚文「名前は？」

女の子「・・・え？」

尚文「ないのか？」

ラフタリア「ひつ、ラ・・・ラフ・・・ラフタ・・・リア」

優菜「ララフラフタリアか」

ラフタリア「・・・ち・・・がう・・・ラフタリ・・・ア」

優菜「ラフタリアね。ものすごく咳してるけど、どうしたの？」

奴隷商「・・・そのラクーン種はフォックス種に比べると人気もないうえに、パニツクと病を患っておりまして、手をこまねいております。きつと先もあまり長くは」

尚文「いいじゃないか・・・決めた。この子にする」

第五十四話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第三話』より）

「悪夢」

武器屋にラフタリアを連れていった

オヤジ「らっしやい。おう、盾のアンちゃんじゃねえかどうしたい」

尚文「銀貨六枚ぐらいの範囲の武器をくれ、在庫処分の服があればそれもだ」

オヤジ「・・・アンちゃん・・・」

オヤジはラフタリアの奴隷紋に驚きながらそう言った

少女着替え中

着替え室からラフタリアが出てきた

尚文「終わったか？」

優菜「遅かったね」

ラフタリア「ご・・・ごめんなさい」

優菜「謝らなくてもいいんだけどなあ」

オヤジ「・・・」

尚文「ラフタリア、ナイフを抜け、こいつを倒してみろ」

尚文は時分に嘯みついているバルーンを見せる

ラフタリア「ひっ、モンスター!?!」

尚文「安心しろ、俺が抑えてる。お前は刺すだけでいい」

ラフタリア「い・・・いや・・・いやあ・・・っ」

尚文「命令だ、従わないと」

奴隷の紋章が光る

ラフタリア「いっっ」

尚文「お前が苦しいだけだぞ」

ラフタリア「ぐ・・・っ、ぐう・・・やっ」

ラフタリアはナイフをバルーンに突き立てた

尚文「弱い!もつと力をこめて押し込め!!」

ラフタリア「やあっ!」

バルーンが破裂し、尚文とラフタリアに経験値が入った

尚文「俺にも経験値が・・・?」

オヤジ「・・・奴隷契約の時に同行者設定したんじゃないのか?あの嬢ちゃんと一緒

の時にはしてなかったのかよ」

優菜「そんなの聞いてないけど。・・・初めから裏切るつもりだったって事か」

ラフタリア「あ……あの……」

尚文がラフタリアを睨みつけた

ラフタリア「ひっ」

尚文「……いいか、よく聞け。これから俺はお前に、魔物と戦う事を強要する」

ラフタリアの目から涙が少し流れた

尚文「……その代わりお前は俺が守る」

ラフタリア「……え？」

尚文「せっかくなけなしの金で買ったんだ。せめて値段分働くまで死ぬな」

尚文が出て行くこうとしたので、ラフタリアに行こうと尚文を指さして一緒に店を出た

尚文のやり方はやりすぎとは思うが……まあ、人間不信だから仕方ないのかもしれない

そして野原に出てモンスターの素材や、草などを採取して新しい盾もいくつか解放して、今は野宿してる

尚文は薬の調合をしていて、ラフタリアは少し寒そうに咳をしていた

優菜「大丈夫？」

ラフタリア「はっ、はい」

優菜「寒かったら一緒に寝るか？」

ラフタリア「大丈夫です」

優菜「そっか」

尚文「ラフタリア！これ飲んでおけ！」

尚文は薬を投げ、ラフタリアがナイスキャッチ

ラフタリア「え？」

尚文「その魚はもう食べてもいいぞ」

ラフタリア「！はい！」

ラフタリアが飲むが

ラフタリア「うゝっ、げえゝゝ」

尚文「あつバカ!!もつたいない!!飲めって命令したろ!？」

ラフタリア「だって苦くて痛い」

尚文「痛いのは呪いのせいだ！飲めばおさまる！」

優菜「飲んだ後口直しすればいいから！飲むだけ！飲むだけだから！良薬口に苦しつ

ていうでしょ!？」

尚文「そのことわざこの世界にもあるのか!？」

ラフタリア「うっげゝゝ」

尚文「あゝーっ！一本分無駄にしゃがった!!」

数分後

尚文「クソ、何本無駄にすれば気が済むんだ……まあ調合の練習にはなったのと効き目があるってのは分かった……ってことで良しとするか」

優菜「俺も疲れたわ」

尚文「俺はもう少し調合してみるが、お前は どうする？」

優菜「寝る」

ラフタリア「……う……あ」

優菜「ん？」

ラフタリア「いやあああああ!!!」

尚文「なっなんだ!?!」

ラフタリア「あゝあゝあゝ〜!!!」

尚文「どうした!?!ラフタリア!」

ラフタリア「いやったす……助け……っ」

尚文「しっかりしろ!!」

尚文が腕を引つ張り抱きかかえた

尚文「大丈夫……っ大丈夫だから……!」

ラフタリア「お……父さん……お母さ……ん」

優菜「大丈夫か？」

尚文「落ち着いたし、大丈夫だろう。奴隷になったぐらいだ。きつと辛い過去でもあるんだろう」

優菜「ん？さつきのお父さん、お母さんって傍から見たら俺らの事かと思わないか？」

尚文「は？」

優菜「いや、だから、俺がお母さん、お前がお父さん、でラフタリアが娘・一家分ちようど人数がそろってるよな？」

尚文「寝るんじゃないのか？」殺気交じり

優菜「寝ます！」

尚文「・・・奴隷なるくらいだ。過去に何かあったんだろう。自分から言える様になるまでは待とう」

優菜「意外と優しいところあるじゃんか勇者様」

尚文「意外は余計だ」

次の日、採れたもの売ってきた

ラフタリアが奥で子供がボールで遊んでるのを見ている

優菜「ほしいの？」

尚文「なんだ、あのボールでも気になるのか？」

ラフタリア「え!? あつと・・・ っいいいえ!! ぜ、ぜんぜん欲欲しくなってます!!」
優菜『ほしんだな』

ラフタリアの腹がぐうううううと鳴った

尚文「・・・腹減ったのか？」

ラフタリアは首を横に振る

尚文「・・・へったんだろ、飯にするか」

飯屋

店員「いらつしや・・・げつ、盾の」

他の客1「何? あの亜人」

他の客2「奴隷?」

尚文「この店で一番安いランチを三つ・・・」

ラフタリアは奥の席で、子供が食べているランチが気になってるようだ

尚文「・・・一番安いランチ二つとあの子供が食べてるメニューを一つ」

ラフタリア「え!!」

尚文「なんだ? 食べたくないのか？」

ラフタリア「た・・・食べたくない・・・っ」

尚文「食べてもいいんだぞ？」

ラフタリア「……なん……で……？前のご主人様も……その前もその前の前のご主人様も……私が喜んだり、楽しそうにしたりすると……おこ……つたのに……」

尚文「いいかラフタリア、俺はお前という武器が欲しいんだ、刃のないナイフじゃ意味がないしつかり食べておけ。ほら速く席に着け、飯が来るぞ」

優菜「俺も、ラフタリアを奴隷としては見てないかな、尚文は今言った通りお前を武器としてみるが、俺は仲間としてみる」

店員「どうぞ」

お子様ランチが来た

ラフタリア「ほ……本当にいいの？」

尚文「くどいぞ、命令されたのか？」

ラフタリアは手でつかんで食べた

これは……色々教えることが山積みみたいだ
すると。ラフタリアの耳がピンツと立った

尚文「どうした？まずいか？」

ラフタリア「美味しい……つつごく!!」

尚文「……そうか」

優菜『やっぱり味しない……』

店を出て平原へ

レベリング中にウサギの姿の魔物が出てきた

尚文「お、あれも魔物か？ ついに動物っぽいのも出てきたな！」

魔物がラフタリアにとびかかってきたが

すかさず尚文が前に出る

尚文「よしラフタリア！ 今だ！！ 突き刺せ！！」

ラフタリア「い……いや……」

尚文「どうしたんだ!? ほかの魔物と同じようにやれ！」

ラフタリア「で……でも刺したらきつと血が……血……怖い……」

ラフタリアが助けてと言うようにこちらを見てきた

優菜「……俺が動けないときは、お前がやらなきゃいけない。なんでも俺がやることはできない」

尚文「……いいかよく聞けラフタリア、戦えないのであれば俺たちはもうお前の面倒を見切れない……もうすぐ世界を脅かす波つてのがまた来るらしい。それまでに少しでも強くななきゃいけないんだ。でも俺は盾の勇者だから……武器がもてないんだ誰かに戦ってもらえないお前がダメなら別のやつに……！ だから……」

ラフタリア「盾の……勇者さ……ま？厄災と戦う……の？」
尚文「……ああ、それが俺の役目なんだそうだ」

ラフタリア「……わかった」

その瞬間、ラフタリアは魔物にナイフを突き刺した

ラフタリア「私……戦います血はまだ怖い……けど頑張り……ます……私勇者様の役に立ちます……だ……から見捨てないで……」

尚文「……役割をこなせば手放したりしない」

その後ウサギを焼いて食って宿に戻って寝ましたとき

とりあえず、塩が欲しかったね

第五十五話（盾の勇者の成り上がり）の軌跡『第四話』より）

「ラフタリアの過去」

尚文「すまんが、ラフタリアを起こしてきてくれないか？」

優菜「わかった」

ラフタリアの部屋

ラフタリア「う……ううう……」

優菜「（うなされてる!?!）ラフタリア、ラフタリア、しっかりしろ！」

ラフタリア「お母さん!？」

ラフタリアが突然起き上がり、優菜に頭突きした

優菜「カハッ!」Ω\ゞ。チーン

ラフタリア「イテテ……って優菜さん！優菜さん!？」

叫び声を聞いて尚文が駆け上がってきた

尚文「どうした!？」

ラフタリア「起きるときに頭ぶつけて……」

尚文「……打ち所が悪かったんだらう」

優菜がむくつと起き上がった

尚文「お、大丈夫か？」

優斗「久しぶりに前に出た気がする」

尚文「は？」

優斗「あ、お前が尚文か」

ラフタリア「え？え？」

優斗「よろしく」

尚文「よ、よろしく・・・（記憶障害か？重症だな）」

優斗「こっちはラフタリアちゃんか」

ラフタリア「え？え？」

優斗「よろしく」

ラフタリア「よ、よろしく？」

下に降りた

優斗「えつと、どうすればいいんだ？」

尚文「俺に聞かないでくれ」

優斗「俺のこと聞いた？」

尚文「優菜じゃ・・・ないのか？」

優斗「知らないみたいだな。じゃあ、説明する」

少年？少女？説明中

優斗「つて言うわけ」

尚文「二重人格ねえ」

ラフタリア「でも、なんとなく雰囲気違います」

優斗「とりあえず、優菜が起きるまでつてことで」

尚文「そうか、だったら少し先の町まで行きたい」

優斗「話が早くて助かる」

道中

優斗「ていうか、気づかねえもんなのな」

尚文「何がだ？」

優斗「決定的な違い」

尚文「違い？」

優斗「よくく見らなくてもわかるレベルなんだが」

ラフタリア「・・・あ、わかった！」

優斗「お？わかった？」

ラフタリア「目！目の色が違う！」

優斗「せいかうい」

尚文「確かに赤色になってるな」

優菜『おい』

優斗「お？戻ってきたっばい」

優菜『変わってくれ』

優斗「じゃあ、戻るぞ」

目の色が黒になった

優菜「今北産業」

尚文「ホントに変わるんだな目の色」

優菜「へ？」

ラフタリア「今、次の町に行ってるの！」

優菜「おくそうか、そうか、えらいなく誰かさんと違ってちゃんと答えてくれる」

ハッ！殺気！

尚文「それって誰のことだ？え？」

優菜「頭グリグリはダメ！マジで痛いから！痛いから！」

確かにグリグリはしなかった。だって頭蓋骨がすり減ってるような落としたもん。

ゴリゴリって

優菜「おーい!!グリからゴリになったって!こういう時本気出すのやめて!!」

尚文「謝るか?」

優菜「すいませんでした」スライディング土下座

ラフタリア「あ!着いたよ!」

村

商人「ふむ・・・全部で銀貨二枚といったところですか」

尚文「・・・そうか・・・この辺りで手っ取り早く稼げそうなお金はないか?」

商人「はあ・・・近くの炭鉱でとれる鉱石を売れば多少のお金にはなるかと・・・」

尚文「本当か?そのわりにはこの村は寂れてるな」

商人「波があつてから危険な魔物が住み着いたらしくてね。勇者様も召喚されたらしいが全く何をしてくださっているのか・・・」

さつきからずっと隅にあるボールをラフタリアは見ている

尚文がボールをつかんだ

尚文「オヤジ、これはいくらだ」

ラフタリア「え・・・あ・・・!!」

尚文「欲しかったんだろ?町でも見てた」

ラフタリア「でも・・・」

尚文はボールをラフタリアにわたした

尚文「お前の働きに対して報酬だ受け取れ。ただし遊ぶのは仕事の後だ」

そしてラフタリアの腹がぐぐうううと鳴った

尚文「・・・お前さつき朝飯くったばかりだろう」

ラフタリア「・・・つごめんなさい」

尚文「・・・まあいい、食ったら行くぞ」

ラフタリア「・・・はい」

鉱山前の小屋

尚文「ツルハシとロープと地図・・・助かった結構使えそうなものがいっぱいあるな」

ラフタリア「？」

尚文「エアストシールド!!」

ラフタリアの前に緑色の盾が出現した

ラフタリア「わっ!」

5秒ほどで盾は消えた

ラフタリア「今の・・・」

尚文「便利な力を手に入れただけさ。さて、目指すは探索ポイント・・・だな」

鉱山内にたいまつに火をつけて入って行った

優菜「一応アギラオもつけておこう」

ラフタリア「・・・勇者様コレ・・・」

地面に動物の足跡があつた

尚文「・・・犬？みたいな足跡だな。住み着いた魔物かもしれないがこれくらならた
いして大きくなさそうだ」

ラフタリア「・・・犬」

優菜『わんわん・・・』

尚文「ラフタリア」

ラフタリア「はい！」

尚文「危なくなつたら逃げる、ちゃんとして来いよ。こつちだ」

ラフタリア「・・・はい」

優菜「行こうか」

奥に進むと、滝のように水が流れており、その下に鉱石がたくさんあつた

滝の水は鉱石の前を通り、奥の崖に落ちていた

尚文「お！ここか・・・！よしさつき開放した盾で・・・お、ここを掘ればいいんだ
な」

尚文は、先程の小屋のツルハシを盾に吸収させて手に入れたツルハシの盾を使い鉱石

を掘った

尚文「お！これは高く売れそうだな！」

優菜「こっちはエメラルドだ」

尚文「よし、ラフタリア。今度はあつちのほうを・・・ラフタリア？」

優菜「どうした？あっちm」

ラフタリアの方を見ると、入り口に頭が二つある犬の魔物がいた

尚文「・・・あの入り口の足跡より大きいな・・・気をつけろラフタリア・・・ラフタリア!？」

ラフタリアは小刻みに震えている

ラフタリア「いゝやゝあゝあゝあゝあゝあゝつ」

それに構わずに魔物は向かってくる

優菜「イフリート！」

イフリート「オラア」

左の犬の顎を横から殴ったが、頭が二つあるせいかわれない

犬はら二人に向かって走り、尚文は殴る前にラフタリアを助けるために一緒に崖に飛び込んでいた

優菜「面倒だ、上から一発かましてやれ、脳天落とし」

イフリート「オラア！」

やっと倒れた

優菜「イフリート、下に連れて行ってくれ」

連れて行ってもらった

優菜「大丈夫か？」

尚文「アイツはどうした？」

優菜「脳震盪起こしてやった」

アリエル「怪我をしたなら治しますよ」

かすり傷程度だったが治してもらった

尚文「何があったんだ？夜泣きの原因も同じだろう？放せ」

ラフタリアは話してくれた

自分の生い立ちや両親がどうして殺されたかどうやって助けてくれたか

その時の両親が死んだ瞬間がトラウマになってるらしい

尚文「そうだったのか、ラフタリアお前……」

そこで犬の魔物が追いついてきた

優菜「もう追いかけてきたか!!」

ラフタリア「ひっひいっ!!」

尚文「落ち着け！あれはお前の両親を殺した奴とは違う!!」

ラフタリア「でもっでも・・・っ!」

尚文「いいか!!・・・いいかラフタリア。今、ここでお前がこいつを倒すんだ。お前が戦って、俺が盾の勇者として強くなつて厄災が去れば、これ以上お前のような思いをする子を作らなくて済む・・・！お前の両親を助けることはもうできないが、おまえがその子たちを救うんだ!!安心しろ、お前は俺が必ず・・・守る!!」

犬の魔物は尚文に向かって行き、尚文は盾で抑えた

尚文「今だラフタリア!!早く!!」

優菜はただ見ていた。これはラフタリアが先に進むための試練だ。俺が手を出すべきではないと思うからだ

だがラフタリアは動かなかった。ただ尚文が襲われるのを見て震えていた

そして犬の攻撃が当たり、血が噴き出た

尚文「・・・もしいい、ラフタリア・・・戦わないんだったら・・・逃げろ!!」

その瞬間ラフタリアは自信を奮い立て、片方の頭にナイフを突き刺した
ラフタリア「うああああああつあああああ・・・!!」

その後何度も刺した。しかしナイフが折れ、もう片方の頭は生きている

魔物「ガアアア!!」

犬の魔物はラフタリアにとびつくが

尚文「エアストシールド！」

尚文がエアストシールドで守った

優菜「あとは、任せろ。アリエル、指弾」

弾は残った頭の脳天に当たり、魔物を倒した

尚文「……つて。―盾の加護あつても、やっぱり怪我はするんだな。でもそのお

げで流血の割にはそれほど痛みは」

その時ラフタリアが尚文に抱き着いた

尚文「でっ!!」

ラフタリア「……な……いで……死なないで勇者様……もう……一人にしないで」

尚文「……お前俺を誰だと思ってる？盾の勇者だぞ？俺が死ぬときは、攻め手からお前を守れなかった時だ……よくやったラフタリア」

ラフタリア「……あのつ、お名前……ツ……聞いてもいいですか？まだちゃんとしてなかった……から」

尚文「……あー言つてなかったか……」

ラフタリア「はい」

尚文「尚文、岩谷尚文だ」

ラフタリア「・・・改めてよろしく願います・・・ナオフミ様」

尚文「・・・ああ」

優菜「なら俺も言っておこつか。中村優菜な。ちなみに裏の人格は悠だぞ
そしてラフタリアの腹が鳴った

尚文「またか！」

ラフタリア「ごめんなさい!!」

優菜「とりあえず回復するから、アリエルお願い」

尚文「おお、傷がきれいさっぱり消えていく」

優菜「みんな、出てきて」

イフリート「上に行くんだろ？俺は優菜」

アリエル「私は力があまりないので、ラフタリアちゃんです」

クロノス「ならば私は尚文か」

尚文「いきなり色々出てきたな!!」

上に連れて行ってもらった

優菜「ありがと、みんな戻って、さあ飯にいくか」

尚文「だな！」

ラフタリア「はい！」
俺たちは鉱石を売って食べて寝た

第五十六話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第五話』より）

「厄災」

数週間後

ラフタリアがめちやくちや育ったぞ。小学生から高校生レベルに見た目がランクアップしたぞい

装備を整え、飯も済ませた

いよいよ、波が来るらしい。ラフタリアが言ってた

てか、いつ俺戻れるんだ？神様からは何も言われないし……

オヤジから龍刻の砂時計で残りの時間を確認できると聞いた。ので、来てみた

尚文「これは……波までの時間!?あと二十時間か……もうやれることはあまり……」

マイン「あらやだ！大罪人の盾の勇者じゃない!!」

元康「尚文か？まだあんな装備で戦っているのか？」

マイン「元康様……！」

元康「ああ、そうだった。お前は戦えないんだったな！」

ラフタリア「……？お知り合いの方ですか？ナオフミさ」

尚文がめっちゃ怖い顔してる

元康「お前は確か・・・あ！あの時尚文と一緒にいた！」

優菜「名前ぐらい覚えようか？元康」

元康「えつと・・・確か・・・葵！」

優菜「ちがう、優菜だ」

元康「そうか、それはすまない。それよりも尚文に強姦されたんじやなかったのか？それなのに、まだ同じパーティなのか？装備もだ。そんな安いもので大丈夫なのか？」

優菜「大丈夫だ、問題ない」

てかいきなり饒舌だったな

元康「そ、そうか。それよりもお前らも龍刻の砂時計を見に来たのか？」

俺たちは何も答えない

マイン「ちよつと！元康様が話しかけているのよ！答えなさいよ！」

ラフタリアが立ちふさがる

ラフタリア「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

元康の仲間「なあに？この女、冒険者？」

マイン「元康様を知らないなんて、このお方はね・・・」

元康「可愛い・・・」

マイン「え？」

元康がラフタリアに近づくと

元康「はじめまして美しいお嬢さん！俺は槍の勇者北村元康!!よかつたら俺と一緒に世界を救いませんか・・・？」

優菜『やめろ！ラフタリアが汚れる！』

ラフタリア「あ・・・あいにくですが私はすでにナオフミ様と・・・」

元康「尚文と!?ダメダメ!!あんな奴といたら、君の身がキケン」

尚文が元康を鬼の形相でにらむ

元康「なんだよ、本当のことだろ？お前が波でできることは、せいぜい自分の命を守りながら俺の活躍を見守るくらいだよ！」

優菜「むかしくむかし、あるところに」

元康「は？いきなりなんだ？」

読まなくても特に支障はないです

優菜「いいから。四聖勇者がいました。その四聖勇者たちはそれぞれ仲間を作りそれぞれに強くなりました、ですが盾の勇者だけは蔑まれ他の勇者たちは称えられました。たまたま盾の勇者にならなかつただけなのに。最初の波は楽勝でした。ですが、二度目の波ではそう簡単にいきませんでした、自分の能力を過信し、他の勇者と手を組まず、自

分の知っている攻略法でそれぞれが戦っていました。盾の勇者以外は。盾の勇者は他の勇者が戦っている間、近隣の村の救助に行きました。そして助けた後、盾の勇者が見たものは、ずっと、ジリ貧で戦っている。勇者たちでした。盾の勇者は何をしているのか聞き、全員狙っているところが、違うこと気づき皆に言いました。ですが、聞く耳を持ちません。盾の勇者は弱点を見つけました。しかし自分達ではそれを傷つけることができないとわかり、他の勇者に助けを求めましたが、聞く耳を持ちません。槍の勇者には、「お前の言うことなんて信じられない」と言われてしまいました。そして一人、また一人と、死んでいき、とうとう、最後には盾の勇者だけ残りました。盾の勇者は死ぬ寸前にこう言い放ちました。「こんな世界滅んでしまえ」そして勇者は全員死に波により世界は滅びました。おしまいおしまい」

マイン「……」(。D。)

元康「……」(。D。)

ラフタリア「……」(。D。)

尚文「……」(。D。)

優菜「どうした？ポカーンとして」

尚文「えつとつまり何が言いたいんだ？」

優菜「甘く見すぎ」

元康「は？」

優菜「忘れたのか？俺は異世界は慣れっこだつて」

元康「ああ、そんなこと言つてたな。ただの戯言にしか聞こえないが」

優菜「俺はな、色んなところを回つてきたが、この世界は二回目だ。今話したのは一回目に遭つた勇者たちの末路だ」

マイン「そんなわけないわ！そんな文献城には・・・」

優菜「この世界一巡してるから」

マイン「はあ？」

優菜「一回滅んで、また最初から作り直したとか言つてたぞ」

元康「作り直した？」

優菜「これ以上言うの面倒だから、もう行こうぜ」

尚文「あ、ああ」

ラフタリア「あ、待つてください」

元康が立ちふさがる

元康「行かせない、最後まで話してくれ」

優菜「どけよ」

脇腹をチョップした

元康「グツ・・な、何を・・。」

優菜「え？普通に殴ったただけだけど」

マイン「元康様に何を・・。」

優菜「うっせえだまれ」

元康「クソツ」

優菜「俺たちは、これでも穏便に済ませたい。でもこれだけは覚えとけ、勇者は盾抜きがいいんじゃない。盾がないと、スタートラインにすら立てねえんだ」

元康「何だと・・。」

俺たちは城を出た

街

尚文「さっきのことは本当なのか？」

優菜「あのなつがーい話は嘘！」

尚文「あんな長々と話してたやつが!？」

ラフタリア「すごいですね・・。」

優菜「というか、大体予想だけだな。でも口先八丁でだまされるほうも悪いと思うが・・。まあ、今からは回復アイテムでも買って、ストレッチして寝よう」

尚文「そ、そうだな」

ラフタリア「では、いきましようか」

朝

優菜「起きろー!!」

尚文「は!?!なんだ!?!」

優菜「朝だぞ」

尚文「なんだ、優菜か」

優菜「朝○○させながらよく言えるな」

尚文「な! お前、見るな!」

優菜「なんだよ、姿だけでも女に見られるのは流石にいやか。まあいい、ラフタリアはもう起きてるぞ」

尚文「わかった、すぐ行く」

案外大丈夫そうだ

ラフタリア「どうでしたか?」

優菜「お前の時みたいにはならなかったよ」

ラフタリア「な! あの話はあまり引つ張ってこないでくださいよ!」

優菜「ごめんて」

尚文「フアアア・・・」

優菜「おっ来たか」

尚文「まだ少し時間があるだろ？」

優菜「ラジオ体操しようぜ」

ラフタリア「ラジオ体操？」

尚文「やるのかよ、あれ」

優菜「元の世界じゃ六時だぞ、七時なだけましと思え。あと一時間だから、ちようどいいだろ」

尚文「それもそうか・・・」

ラフタリア「あの、ラジオ体操って・・・」

優菜「ああ、教えるから大丈夫」
ラジオ体操後

優菜「よし、ちようどいいな」

尚文「じゃあ、装備着て来る」

装備を整え、アイテムをそろえ
いざ出発・転送された

転送先は森だった

尚文「どこだここは・・・？」

ピキピキとどこかから音がした

尚文「さつきから・・・何の音だ？」

優菜「上だ」

空に黒い部分が出来上がり、ひびが入った

ラフタリア「空が、割れる・・・!？」

優菜「本番だぜ」

尚文「あいつら・・・！」

元康たちがボスに一目散に走っていく

優菜「俺たちは、近隣の村の避難優先だ！どうせアイツらは言っても聞かない!!」

ラフタリア「あの炭鉱!!近くには・・・お世話になったリユート村があります!!」

リユート村

村人「ヒイイ!!」

優菜「アリエル、指弾」

村人「え・・・え？」

優菜「大丈夫か？」

村人「は、はい！」

尚文「ラフタリア！お前は村人の避難誘導を知ろ!!」

ラフタリア「ナオフミ様は!？」

尚文「俺は敵を引き付ける！」

優菜「なら、俺は一塊にしてくれたら一気に倒せる」

尚文「わかった！どうにかやってみる!!」

優菜「イフリートとクロノスは、村人を助けてくれ」

イフリート達は行っった

優菜「アリエルはまずを村人や駐屯兵を回復して。あとは」

アンデッド「ガアアアア」

アンデッドの首を切って倒した

優菜「アンデッドの頭を撃ちぬいてくれ」

そのあと散らばっている奴を片付け屋根の上で待つ

尚文「頼む!!」

優菜「アリエル!!」

祝福属性の攻撃を降らせて一掃した

アンデッドたち「ガアアアアアアアアアアア・・・」

優菜「あとは、ほんの数体だ。頼む」

ラフタリア「はい！」

尚文「！エアストシールド！」

俺の上にエアストシールドが出来た

すると、火の玉が村に降り注いだ

こんな隕石みたいなやつを、村に降らすのかよ

優菜「イフリート」

イフリート「どうした？」

優菜「あとのハチみたいなやつは焼いてくれ」

イフリート「持って一掃するの？」

優菜「見つけて殺せ」

イフリート「わかった」

これで全部の魔物を倒した

騎士団長「さすが、盾の勇者。頑丈な奴だ」

優菜「もう全部終わったぞ」

騎士団長「ここに魔物が密集していたから、降らせたのだが」

優菜「魔力は使い果たしたが、お前の頭を撃ちのくぐらいなら簡単だぞ」

尚文「これ以上変な噂が立つのは、面倒なんだが」

優菜「・・・わかった。今回はやめとく。こつちもあまり体力は使いたくない」

ラフタリア「空が！もとに！」

そうして一回目の波は去った

騎士団長たちは元康たちの方に行った

優菜「・・・さすがに被害が凄いな。死傷者も何人か出ちまったか・・・」

ラフタリア「・・・ナオフミ様。私・・・頑張りました・・・よね？私のような方を

少しでも減らせましたよね」

尚文はラフタリアの頭に手を置いた

尚文「・・・そうだな。よくやったよ、お前は」

ラフタリアは大粒の涙を流した

第五十七話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第六話』より）

「クズ」

王「勇者諸君!!この度は誠に大儀であつた!前回の被害とは雲泥の差にわしも驚きを隠せん!今宵は宴だ!!存分に楽しむがいい!!」

とゆうことで城にいる

食うぞ!

食費が浮く上にうまいとか一石二鳥過ぎる!

優菜『と、思っていた時期が俺にもありました。なぜだ?何故味がしない・・・確実に上手そうな料理で匂いも美味そう。だが味はしない。・・・俺味覚障害になつたのか?ストレスかな・・・ストレスって色々悪くするからなく・・・』

尚文はちよつと機嫌が悪いか?まあ原作はそうなんだが

元康「・・・あついた・・・!!そこを動くな!!尚文!!」

尚文「なんだ・・・?」

元康「聞いたぞ!!お前と一緒にいるラフタリアちゃんたちは、奴隷なんだつてな!!」

優菜「(たち?え?)それって、俺も入ってたり・・・」

元康「もちろんだ！マインから聞いたが、一度二人で街に出たらしいな。その時にされたんだろ？それなら、あの時尚文のどこに行ったのも納得がいく」

優菜『確かに・・・筋は通ってやがる・・・。証拠も何もないがな!!もちろん奴隷なんかじゃないし、元康がバカって言う証拠になった」

尚文「・・・優菜は違うが、確かにこいつは俺の奴隷だ。気安く触るな」

ありやめんどいことになりそう

アリエルだしとこう。一番常識ありそうだから

元康「決闘だ！俺が勝ったらラフタリアちゃんたちを解放しろ!!」

尚文「はあ？」

ラフタリア「ちよつ、ちよつと待ってください私は：！」

ラフタリアと俺は口を布で引っ張られた

つまり喋れない。あ・・・（察し）

王「話は聞かせてもらった。勇者ともあろうものが奴隷を使っていようとは・・・やはり盾の勇者は罪人というわけか。それに比べて元康殿の慈悲深いことよ、この決闘わしが認める」

優菜『尚文は爆発寸前だな。アリエル』

アリエル『何でしょう』

優菜『ちよつと通訳して』

アリエル『?分かりました』

優菜『喋りかけて。見えるようにするから』

アリエル「あの・・・」

王「な！誰だお主は！」

アリエル「私は優菜様のペルソナのアリエルと申します」

王「ペルソナ？」

アリエル「優菜様が言いたいことがあるというので、言わせてもらいます」

尚文「言いたいこと？」

アリエル「この布を取れ、息苦しくて仕方ない。それに俺の体には奴隷紋はない、なんなら全裸になってもいい。あと、もうちよつと飯食いたいとの事です」

尚文「バカなのか、食い意地が張ってるのか。どっちにしろバカなのは間違いないな。でもおかげで頭が冷えた。いいぜ、やってやるよ。だが、ただで負けてやると思うなよ・・・！」

闘技場・ちよつとヤバいかも

神様「大丈夫か？」

空から筋肉ムキムキのおじいさんが降りてきた

優菜『神様!? 何でいるの? てか今来る!? 会ったら色々言つてやろうと思つてたのに!!』

クロノスに時間を止めてもらい話す

神様「いやもう、世界の行き来中にミスがあつてのう、今まで探していたんじや」

優菜『・・・今戻すのは勘弁してくれ』

神様「わかつておる。どうするつもりじや」

優菜『空間の神様なんかいたらどうにかできそうだ。居たらだけど

神様「だと思つて、お主の体に今宿しておいた」

優菜『それはナイス。何て名前だ?』

神様「カオスじや」

優菜『なんかよく聞くやつだけど神様の名前だったんだ』

神様「そうじや」

優菜『とりあえず、カオス』

カオス「なんだ? 誰だお前は」

優菜『優菜つて言うんだけどよろしく』

神様「あとは、よろしくのカオス」

カオス「は?」

神様は意識から消えて行った

カオス「……俺はたいそうな名前だが、そこまで強いわけじゃねえぞ。まあよろしく」

優菜『ああ、よろしく。早速頼みがあるんだけど』

カオス「なんだ？」

優菜『空間を消すってできるか？』

カオス「できるが」

優菜『口にかかっている布の片方だけ空間消し飛ばして』

カオス「分かった」

布を巻いている部分が片側消えた

優菜「ふはあ、はあ、はあ、はあ」

王「な！どうやって解いたのだ!？」

何とここまで一秒。クロノスの時間停止が解けたのは予想外

カオス「よし、これでいいか？」

王「な、誰だお主は!？」

カオス「俺はカオスって言うんだが、見なくていいのか？」

王「そ、そうじゃった……じゃない！傭兵！もう一度口を塞いでおけ!!」

また口が塞がれた

優菜『まあ、息継ぎできたからいいや。今鼻詰まってるから』

元康「いてついててててっ」

バルーンが元康に噛みついていて……いつ補充したの!?

王「卑怯な……」

尚文はスキルを重ねがけし、トドメを刺そうとした瞬間

後ろから何かされたように倒れかけた

その隙に元康が顔の横に槍を突き刺し言い放った

元康「俺の勝ちだ!!」

はくい動画とつてました

しかし、ラフタリアの奴隷紋は消された

マイン「次は貴方の番ね」

優菜「いやないから」

マイン「嘘は言わなくても結構よ。やってやりなさい」

優菜は熱湯の様なモノをかけられた

優菜「熱いわボケエ！」

その時ラフタリアが元康を平手打ちした

ラフタリア「私がいつ……いつ助けてくださいいなんて頼みましたか!？」

元康「……え!? だって君は奴隷だったんだぞ!? アイツに酷使されて……」

ラフタリア「私が怯えて、いやがっていた時だけ戦うように呪いを使っていただけです!」

優菜「……アイツは、できないことはやらせない。お前らは、ゲームでやったことがあつても俺らはないからな、先入観がないから、勝てそうにない相手は、戦わなかつた。お前らが言つてることをそのままの意味にしたら、勝てない相手にも戦わせたつてことになるが」

ラフタリア「……あなたは病を患つた小汚い奴隷に手を差し伸べることができますか?」

元康「え?」

ラフタリア「ナオフミ様は私にキチンとした食事と病に聞く薬を与えてくださいました……貴重なお金や素材で……貴方にそれができますか?」

元康「でつでできる!」

ラフタリア「ならあなたの隣には、私でない奴隷がいるはずですよ」

ラフタリアは尚文に歩み寄る

ラフタリア「ナオフミ様……」

尚文「・・・くっ来るな!!」

優菜『何だ？体が重い・・・脚に枷がつけられたような・・・この重い空気の所為か？』

ラフタリア「・・・ナオフミ様が仲間を強姦した最低な勇者だという噂は・・・知ってました」

元康「そうだ!!君等だつて被害者だろうに・・・!!」

優菜「一回黙れ、な？お前だつて死にたくないだろ？」

元康「死ぬ!?!何を言つてるんだ？」

優菜「向こうじや何体も殺つてるからな？※シヤドウです」

尚文「やめろ・・・俺に触るな。女はっ・・・俺はっ・・・やつてない・・・っ」

尚文が涙を流したので、流れとか関係なしに一回拳骨を食らわせた

尚文「つてー、なんだよ！」

優菜「なんて？もう一回食らいたい？いいぞ」

殺気よりは弱めに拳骨をした

尚文「やめろ！」

優菜「しつかりしやがれ!!お前の前にいるラフタリアはまだ子供か？」

ラフタリア「・・・逆らえない奴隷しか信じられませんか・・・？・・・怒りを静め

てくださいどうか耳をお貸しくださいあなたに信じていただくために・・・」

尚文「・・・黙れ」

ラフタリア「・・・世界中の全てがナオフミ様がやったと責め立てようとも・・・私は違うと何度だって言います・・・!!あなたはやってない!!」

ラフタリアは尚文を強く抱きしめた

尚文「・・・え?」

ラフタリア「私は貴方を信じています、ナオフミ様・・・!」

尚文「だ・・・誰・・・?」

ラフタリア「え・・・!?!私ですよ!ラフタリアです!!」

尚文「いやいやいやいや!だってラフタリアは子供・・・」

ラフタリア「・・・この際だから言いますね、巫人は人間じゃない。魔物だと差別されるのには理由があるんです。幼い時にレベルを上げると、比例して肉体が最も効率のいいように急成長するんです・・・だから私は精神的にはまだ子供ですけど・・・体はほとんど大人になってしまいました。まだ信じていただけませんか?」

少し呆然としていた尚文は、解放されたようにラフタリアに倒れこみ泣き出した

優菜「さてと、ということで俺は熱湯をかけられただけだから、やり返してOK?」

鍊「よせ」

優菜「あ？」

樹「無駄に偽の罪が増えるだけだぞ」

優菜「チツ」

マイン「蓮様、樹様・・・!?」

鍊「上のバルコニーから見ていたが、さっきの決闘、お前の負けだ元康」

元康「はあ？」

優菜「説明しよう！じゃあまずこれなんだ？」

透明の玉みたいなものを出した

鍊「水晶か何かか？」

樹「にしては、透明すぎるでしょう。というかなんですこれ？」

優菜「よく見ろよ？何が映っている？」

鍊「これは、尚文が倒れる寸前か？」

優菜「時間進めるぞ、クロノス、この視点の空間だけ時間を進めろ」

動画が再生されるように動く

尚文が倒れ元康が勝ったと言っているところが映った

元康「どこか変なところはあるのか!？」

優菜「じゃあもう一回」

分からないみたいだ

優菜「わかった移し方を変えてみよう。カオス、この空間で魔力の流れが見えるようにしてくれ」

カオス「よし」

サーモグラフィーみたいにみえるようになった

優菜「マインさんの手元を見てください、赤く光ったますね？これは魔力が集まっているということです。スロー再生しますね。」

マインの手の魔力が風のように尚文の背中に当たり

尚文が倒れた

優菜「完璧に不正ですね。サッカーだったら、イエローどころか、レッドカードの即退場だぞ」

樹「何でサッカー？」

優菜「あ、俺元サッカー部だから」

錬「そ、そうなのか・・・ともかく、これで不正は確かめられたが、どうするんだ？」

王「・・・ふん」

マイン「お父様!？」

王「・・・最低限の援助金だけは支給してやれ」

樹たちが歩いて出て行こうとすると

元康「おいつ、まて！俺は間違つてなんかいない!!今だつてアフタリアちゃんが洗脳されてるかもしれないんだぞ！」

樹「あれを見てまだそんなこと言えるなんて、すごいですよ」

優菜「よし、来い元康」

元康「はあ？何でだ？」

優菜「お前に拒否権はない」

引っ張つて

元康「おい、待てつて、引くな引くな！」

優菜「持ったほうが早いカ」

お姫様抱っこした

元康「やめろ！これはダメだ！」

優菜「これで、町一周してから、上から下に落としてやる」

元康「いやだ！死にたくない！」

優菜「屈辱に揉まれて恥ずか死しろ!!」

数分後

元康「もうだめだ、終わった・・・何もかも・・・」

優菜「すまん、さすがにやりすぎたかも」

元康「かもじゃなくてやりすぎたんだよ・・・」

優菜「でも、お前はそんなにマインを信じられるのか？」

元康「何を言ってる？」

優菜「最初に言い出したのは、マインだ。だが、俺も一緒にいたし、俺がされてないのがおかしいと思わないのか？」

元康「それは・・・」

優菜「俺に奴隷紋はなかっただろ？アイツは嘘の塊だぞ？」

元康「俺には・・・まだわからない・・・どっちが本当なのか・・・」

優菜「ま、よく考えろといいき。だが、これだけは覚えておいてくれ。俺たちは好きで敵対してるわけじゃないんだ。お前らが差別してこつちだけ仲間と思っても仕方ないだろ？こつちだって普通に接してもらえれば普通にするし、好意的なら、こつちだってなったんだが・・・俺は構わんが、尚文がきつそうだからな」

元康「確かに、俺たちは、差別したが。普通尚文が元からあんな状況ならあなっても仕方ないんじゃないのか？」

優菜「はあ・・・お前らが攻撃して、盾を守るつてのが元々のやつなのに、今の王が腑抜けでバカだから、こんな状況だ。負の連鎖つてやつだな。この前話したのも一部

だ。誰かが止めない限り永遠に続く、なら俺たちで止めちまえばいい。だろ？」

元康「それも、そうかもしれないな。……日が落ちてきた。戻ろう」

優菜「ああ、よく考えておけよ」

元康「わかつている」

宿にて

尚文「お前何してたんだ？」

優菜「あんなに泣きじゃくっていたのに、もう復活したか」

尚文「頼む忘れてくれ」

優菜「ところでラフタリアちよつと来てくれ」

ラフタリア「？なんですか？」

優菜「どこまでいった？」

ラフタリア「どこって？」

優菜「そりゃあキスとか」

ラフタリア「キ……！ちよつと！」

優菜「いやだつて男女が二人でいたんだぜ？聞かないほうがおかしいだろ」

ラフタリア「……ほ……ほつべにされました……」

優菜「お、進展したか！いいぞそのまま頑張れよ！盗つたりしねえから」

ラフタリア「・・・はい（恥）」

尚文の所に戻った

尚文「何話してたんだ？」

優菜「いや、言うことのもんじゃねえよ」

尚文「あ、そうだ。さっき飯食ったんだが味がしたんだよ！」

優菜「マジで!？」

尚文「マジ！」

優菜「食いたかったなあ」

ラフタリア「ちゃんと残してありますよ」

優菜「マジで?？」

ラフタリア「こっちはです。来てください」

味がしたよ!!

そうして一日が終わった

番外編（僕の名前は少年A の軌跡『最初で最後』より）

「無罪」

なんで路地裏に倒れてるのかな俺は

またあの神様か

神様「ほっほっほ、またやらせてもらったぞ」

優菜「今度はどこよ

神様「ちよっとした息抜きじゃ、少年Aって知ってるじゃろ？」

優菜「その世界か。今はどの時間だ？」

神様「殺される、一時間前のはずじゃ」

優菜「助けると？」

神様「どうするかはお主次第じゃ。天界というのは娯楽が少ないんじゃ、こういうのがもの凄く暇つぶしになるんじゃ」

優菜「俺は暇つぶしの道具かよ!!・・・学校ってどこだよ」

神様「通りに出たらわかるじゃろ」

優菜「てか、体は男のほうなのね」

悠「じゃあ優斗か。チツ」

学校・美術準備室前

貴志「何をしてるんだ？この声は一体……」

優斗「何してんだはお前のほうだ」

貴志「だ、だr」

口をふさぐ

優斗「静かに、中が見たいんだろ？」

俺は下にある窓を開け見せた

貴志「！」

呆然としている貴志に気づいた佐々木

佐々木「助けて……」

山下「助けて？」

貴志は気づかれないように

背後に近づき背後からバットで殴った

貴志「佐々木さん！早くここから逃げよう！！」

その時、山下が立ち上がり

貴志の肩をつかんだ

山下「お前教師に、なんてことするんだ・・・何てことおおっ!!」
貴志「うわーっ!!」

その後バッドで何度も殴打したが、流石に大人だ受け止めた

そして、こぼれ落ちたバッドで今度は佐々木が殴りだし

山下は虫の息だ

優斗「殺したら、ダメだ」

佐々木「え？」

優斗「これ以上やったら死ぬぞ」

アリエルに死なないレベルに回復させた

山下は気絶している

貴志「どうすればいいんだ？」

優斗「お前がその子を助けたかったら自分がやったと言うんだな」

貴志「わかった」

佐々木「！いや、私がやったんだから・・・」

貴志「僕に任せて」

優斗「血だらけだから、説得力はあるな」

貴志は歩いて行った

佐々木「どうすれば・・・」

優斗「大丈夫だ」

佐々木「え？」

優斗「助けるために俺は来た。俺はもう行くが、あんたはこの部屋から出たほうが良い。それと俺がいたことは内緒で」

佐々木「・・・わかりました」

窓からの視点をカオスに頼み、切り取って出て行った

その後神様に頼み

裁判前の待合室に来た

弁護人？「な、どこから入ってきた！」

貴志「貴方は・・・」

優斗「よ、ひさしぶりってそこまで時間経ってねえか」

貴志「どうしたんですか？」

優斗「情報提供」

弁護人「情報？」

優斗「これ、見える？」

弁護人「この水晶みたいなやつか？窓が映っているが」

優斗「そ、時間を流す」

すると窓が開いて

山下と佐々木が映った

弁護士「これは！」

優斗「そのままあつたことを映したただけだ」

弁護士「これは、本当なのか？ 貴志君」

貴志「はい・・・」

弁護士「これがあれば、無罪にできるかもしれない！・・・だが、このままじゃよく分からない。せめてデータとしてできないか？」

優斗「それは厳しいな・・・テレビみたいに形を変えるなら出来なくはないと思うけど」

弁護士「それで構わない。あとは任せてくれ」

優斗「これが操作するリモコンです。やり方はテレビの録画と同じです」

行く末を見届けるために傍聴席に入った。ある程度裁判が進み、弁護士がテレビに形を変えた動画を動かした

弁護士「これが証拠です。山下先生は佐々木さんに性的暴行をし、それを貴志君が助けたということです。ので正当防衛で、貴志君は無罪であることを主張します」

裁判長「検察はどうですか？何か異論はありますか？」

検察「・・・ありません」

裁判長「では、お互い異論はもうありませんね？判決を言い渡します。小倉貴志君は・・・無罪」

その瞬間、貴志のお母さんは泣き出した

まあ、あれだけ言われたのに無罪だからね、そりや泣くわ

俺の証拠はやっぱでかかったんだな

その後、俺は佐々木と貴志の家族全員に感謝され戻った

第五十八話（ジョジョ一部の軌跡『第一話』より）

「悪魔の姉」

優菜『またかまたなのか』

俺は何故か馬車に乗っていた

優菜『横には・・・ディオ!』

神様「どうじゃ?」

優菜『何してんだ、俺に恨みでもあるのか?』

神様「暇つぶしじゃ』

優菜『ふざけんなし』

神様「お主の設定は、ディオの一歳上の養子の姉で、今はジョースター家に行ってる途中じやの。言語は日本語に聞こえるようにしたぞ」

優菜『養子ってのは、黒髪だからか?・・・作法とか厳しいから私で行こう』
着いたぜ

ディオが下りる

何故か頭の中にバアーンというのが流れてくる

俺もおりよう

ジヨナサン「君はディオ・ブランドーだね？」

ディオ「そういう君はジヨナサン・ジョースター」

優菜「私も忘れてもらっちゃ困るんだけど・・・」

ジヨナサン「確か君は・・・ユウナ・ブランドーだったよね？」

ユウナ「(そうなるのか) そう、あつてるよ」

ジヨナサン「皆ジョジョって呼んでるよ・・・これからよろしく」

すると、犬が一匹こちらに走ってきた

ダニー「ハツハツハツハツハツ」

ジヨナサン「ダニーッ！紹介するよダニーってんだ！僕の愛犬でね利口な獵犬なんだ心配ないよ！決して人は噛まないから、すぐ仲良しになれるさッ」

ディオ「ふん！」

ダニーはディオに膝蹴りを食らわされた

ジヨナサン「なっ！何をするだアッ！ゆるさんッ!!」

ユウナ「やりすぎだ」

口を見る

ユウナ『歯が折れちゃってるよ』

治した

ダニー「クウン？」

ジョナサン「ダニー!? 大丈夫なのか？」

ユウナ「デイオは犬が嫌いだね、私は大丈夫だから仲良くしたいな」

ジョナサン「う、うん」

デイオ「チツ」

そう簡単にはさせないぞ

館に入る

デイオ「ジョースター卿、御好意大変感謝いたします」

ジョージ「ジョジョも母親を亡くしてるそれに同じ年だ仲良くしてやってくれたまえ

ジョジョ「……ダニーのことはもういいね？」

ジョナサン「はい……僕も急に知らない犬が走ってきたらびびっくりすると思うし、気にしてません」

ユウナ「それじゃあ、行きましようか」

ジョージ「そうだね、部屋に案内しよう」

ジョナサンがカバンを持って行ってあげようとしたとき

ジョナサン「うああ! ……う……う!!」

ディオが思いつきりジョナサンの腕を掴んだ

ディオ「何してんだ？ 気安く僕のカバンに触るんじやあないぜ！」

ジョナサン「え？」

ディオ「この小汚い手で触るな！ と言ったんだマヌケがッ!!」

ユウナ「ディオ！ そんなの後にしなさい、持って行ってもらうだけじゃないか。何をそんなに怒る必要がある、ジョナサンと何かあったなら。ジョナサン以外に持つてもらえばいいじゃないか」

ディオ「チツ」

鞆を用人人に持たせ、ディオは上がって行った

その後の勉強

ユウナ『いや〜簡単だわ。暗殺教室のがむずいぞ』

でもジョナサンは計算ミスをし、鞭で手を叩かれた

ジョナサン「ギャッ!!」

ジョージ「また間違えたぞジョージョ！ 六度目だ！ 同じ基本的な間違いを六回もしたのだぞ！ 勉強がわからんというから私が見てやれば、何度教えてもわからんやつだ！」

見てられないな

ジョージ「ディオ達を見ろ！ 20問中20問正解だ！」

ユウナ「教えてあげようか？」

ジョナサン「え？」

ユウナ「一気に考えたら、分かるモノもわからなくなるよ。一つ一つ大切なところを区切って、考えてみようよ」

ジョナサン「うん」

そして数分・・・

ユウナ「ここがこうでしょ？つまり？」

ジョナサン「正解はこうか！」

ユウナ「そ、正解」

ディオ「・・・」

夕食

ジョナサンは不作法に食事をしていた

ジョナサン「あ！」

飲み物が入っていたグラスも倒してしまい

ジョースター卿がキレた

ジョージ「ジョジョ、お前それでも紳士か！作法がなつとらんど！作法が！」

ユウナ『あちゃ〜』

ジョージ「もうジョジョの食器をさげたまえ」

ジョナサン「えっ！」

ジョージ「もう食んでよい！今晚は食事抜きだ！自分の部屋に行きなさい！ディオが来てからお前を甘やかしてのを悟った！親として恥ずかしい！ディオたちを見習え！ディオたちの作法はカンペキだぞ！」

カンペキらしい

ユウナ「よかつたゝゝゝ」

ディオ「フン！マヌケが」

ちようど俺の食事も終わったので

部屋を出て、食事を持って行った執事に

ジョナサンに作法を教えたいと言ったら渡してくれた

ユウナ「よし、ジョナサンの部屋に行こう」

中からチョコ食ってるような音がした

ユウナはノックをし、返事を待った

ジョナサン「！ど、どうぞ」

どうぞと言われたので入って、テーブルに食器を置き

ジョナサンを見ると、ジョナサンの口の周りにはチョコがいつぱいついていた

ユウナ「アハハハハ！」

ジョナサン「な、どうして笑うんだ！」

ユウナ「鏡見てみなよ」

ジョナサン「うえ・・・チョコがいつぱい・・・」

ユウナ「とりあえず拭きなよ」

ジョナサン「う、うん」

拭いた

ジョナサン「これは？」

ユウナ「もらつてきた。作法を教えるつて言つてもらつてきた。・・・とりあえ

ず、落ちて着いて食べないとね」

ジョナサン「・・・わかったよ」

ある程度教えた

ユウナ「とりあえずはこれでいいかな？」

ジョナサン「今日は終わるかいい？」

ユウナ「終わりにしようか」

ジョナサン「じゃそろそろ寝ようと思つてるんだけど・・・」

ユウナ「じゃあ、最後に一個」

ジヨナサン「なんだい？」

ユウナ「人つて言うのは適度サボらないといけないんだ。頑張つて集中しようとしても、なかなかできないんだ。だから頑張らないといけないときに頑張る。それ以外は適度にサボる」

ジヨナサン「つまり？」

ユウナ「あまり張り詰めんなつてことよ。あと一つ」

ジヨナサン「なに？」

ユウナ「私は女でしよう男でしよう」

ジヨナサン「え？そりやあ女の人じゃないの？」

ユウナ「残念男でした」

ジヨナサン「え!？」

ユウナ「中身だけね。大丈夫イチモツはついてないから」

ジヨナサン「え？」

ユウナ「じゃ、また明日」

ユウナが部屋から出て行った

ジヨナサン「不思議な人だったな・・・」

台所に行く途中

ジョージ「ん？何してるんだい？」

ギクツ

ユウナ「あくこれはくそのくえくつと」

ジョージ「何をしていたか聞いてるだけなんだが」

ユウナ「執事にさげさせた、ジョジョの食事をもって、ジョジョの部屋に行つて作法を教えてました」

ジョージ「そうだったのか、すまない。ホントは私がやらないといけないのに」

ユウナ「それなんですが・・・私にやらせてもらえないでしょうか？」

ジョージ「なに？」

ユウナ「食事の時間を使わせてもらいますが、その分しっかり作法を教えますので」

ジョージ「・・・わかった、任せていいんだな？」

ユウナ「はい」

ジョージ「じゃあ、明日から頼んだぞ」

ユウナ「ありがとうございます」

そのあと食器を洗い、部屋に戻り寝た

第五十九話（ジヨジヨ一部の軌跡『第二話』より）

「ダニイーーーー!!」

デイオとジヨジヨが河川敷のボクシングに行ったので見に行こう

河川敷につくと、歓声が上がっていた

ユウナ「決着がついたみたいだね」

ジヨナサン「う……うう何故ッ！故意だ！わざとだ！なぜこんなことを！うツ目……
目から血が出てる……」

ユウナ「大丈夫!？」

ジヨナサン「ユウナ?」

ユウナ「やられたねえ。歯が少し欠けてるし、目から結構血が出てるよ……待ってよ、アンタにだけ見せてあげる」

ジヨナサン「え?」

ユウナ「アリエル」

アリエル「はい?」

ジヨナサン「誰!？」

ユウナ「治せる？」

アリエル「お安い御用です」

ジョナサンの目や歯を治した

ユウナ「左目は見える？」

ジョナサン「見、見える！大丈夫だ、血も止まってる・・・」

ユウナ「説明は帰ってからね」

家に帰りジョナサンの部屋

ユウナ「というわけ」

ジョナサン「へえ」

ユウナ「まあ、疲れたら威力も効力も多少は下がるけどね」

ジョナサン「でもすごいじゃないか！他には何ができるんだい？」

ユウナ「うーんそうだなくじやあ、あそこにある木を見て」

ユウナは窓の外にある木を指さした

ジョナサン「木？」

ユウナ「行くよ」

カオスの能力で空間を歪ませできた穴に手をつ突っ込み（簡単に言うところでも○○○）
で木の枝を折り、持ってきた

ユウナ「これでどう?」

ジヨナサン「え?これってあそこの・・・」

ユウナ「そ。あそこの木の枝を取ってきたんだ」

ジヨナサン「ど、どうやって・・・!?」

ユウナ「例えば細長い紙の端に点をつけるでしょ?片方の点からもう一つに行くときの最短は?」

ジヨナサンは端から端にスーッと指をやった

ユウナ「普通はそうだね。でも私の考え方は」

ユウナは紙を折りたたんで点を合わせた

ジヨナサン「え!?!」

ユウナ「どう?分かった?」

ジヨナサン「う、うん。でも、凄いな!そんなこと考えた事もなかった。よく思いついたね」

ユウナ「・・・いや、これは私が考えたわけじゃないの。私が言ってる言葉も考えも何もかも誰かの受け入りよ。私が考えた事は、既に誰かが考えた事なのよ」

ジヨナサン「でも、僕に教えてくれたのは貴方だ。例えばそれが誰かの受け売りだとしても、それを知らない誰かに伝えるのは貴方自身だ。人に新しい考えを教えるのも素晴

らしいと思うよ」

ユウナ「・・・その返答は予想してなかったよ」

その後、食事で作法はOKされたぜ

次の日からは、エリナと遊ぶようになったぜ☆

ハッキリ言うとうし寂しいぜ☆

たまには散歩に行こうかな

日が暮れて帰ろうかと思うとディオを見た、エリナを見た

その瞬間わかってしまった。何が起きるのかを

ディオがキスしたアアアア!!

ズキユウウンとか聞こえるんだけど

モブ「やつやつた!!さすがディオ!俺たちにできないことを平然とやってのけるそこ

にしぶれるあこがれるウ!」

ユウナ「ディオオオオオ!!」

ディオ「なんだ?」

ディオの右頬をパーではなくグーで殴った

ユウナ「ディオ!お前は、女のファーストキスがどれだけ大切か知ったうえでやった

んだな!?!そうだろ!!」

ディオ「ペツ（血を吐き捨てる音）だったらどうしたというんだ？」
ユウナ「本気で殴るよ？」

ディオ「やれるものならやってみる!!」

ユウナはディオにアッパーカットをかました

ディオ「グアア！」

モブ「ディオの姉ちゃん強ええええええ!!」

ユウナ「大丈夫？」

エリナ「・・・」

ユウナ「とりあえず、ここから離れましょう？ね？」

すると、後ろから殺気がした

そちらを確認すると、ナイフが飛んできた

もちろん避けたが

ディオ「たとえ、姉と言えど・・・許さん!!」

ユウナ「いい加減にしな!!アンタ今日夕飯抜きにするよ!!!」

ディオ「な!?!」

連れて帰った

ユウナ「大丈夫？口の中洗浄しようか？」

エリナ「大丈夫・・・です」

ユウナ「申し訳ありません・・・うちの弟が・・・アイツ昔からああなんです。何か奪おうとすると、容赦がない」

という設定をつけていくう

エリナ「そうなんですか・・・」

ユウナ「今回はジョースター家の全財産を盗ろうとしてるんでしよう」

エリナ「え!？」

ユウナ「それに、ジョジョと会いずらいかもしれないですけど。あの人は、ファーストキスを奪われたことより、ディオが許せないのほうが前に出ますでしょうし。避けるのはむしろ逆効果ですよ」

エリナ「・・・できるだけ、やってみます」

ユウナ「お願いします」

それから帰る時に何度も振り返って頭を下げた

次の日・またやってらっしゃる

ユウナ「何してる!」

ジョナサン「ディオオオオ!君がッ!泣くまで殴るのをやめない!」

一旦止まったみたいだ

ディオ「よくも！この僕に向かって……」

ジヨナサン「な、涙……!?」

ディオ「この汚らしいアホがアーツ!!」

ユウナ「やめr」

ジョージ「ふたりとも一体何事だッ！」

そうして二人は部屋に連れてかれた

数日後

ヤバい、ダニーの姿が見えない

……まさか!

ユウナ「燃やしちゃったの!?!」

執事「?そうですが」

焼却炉に行き、執事に確認すると火をつけてしまっていた

ユウナ「イフリート、ぶっ壊すぐらい殴って!」

イフリート「オラオラオラオラオラオラオラア!!」

焼却炉の扉をこじ開けると、中から火だるまになったダニーが出てきた

ダニー「キヤイイイイイン!!」

ユウナ「クロノス、ザ・ワールド」

止まってる間に傷を治し川に浸けた

ユウナ「時は動き出す」

ダニーが暴れている

ユウナ「数秒だ！がんばれ！」

数秒すると、火が消えたので引き上げた

酷いやけどだ。一旦治しはしたが、また焼けてしまった

ユウナ「アリエル、お願い」

アリエル「わかりました」

ダニーは完全に治った

ダニー「・・・クウン？」

ユウナ「・・・何とかなったね」

ユウナが地面に尻もちをついた

ユウナ「あく疲れた」

執事「ありがとうございます！まさかダニーがいたとは・・・」

ユウナ「助かってよかった・・・よ・・・」

執事「ユウナ様!?!」

ユウナ「ZZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ」

執事「ね、寝てるだけ？・・・にしても一体どうやって・・・」

寝てます

寝てます

起きました

部屋を出ます

ジョージ「おおう、ユウナ」

ユウナ「はい？」

ジョージ「ダニーの件なんだが」

ユウナ「あく、それですか」

ジョージ「火で燃えたいところを助けてくれたと執事から聞いたのだが」

ユウナ「火傷とかも残ってないと思いますけど、何かあったら言ってください」

ジョージ「何で焼却炉に入っていたかなんだが。警察は、多分私の家に入って物を盗ろうと考えた盗人が、番犬が邪魔でやったことだと言われたよ。警戒を強めなければならんな」

ユウナ「そうですね、デイト達はもう帰ってきたんですか」

ジョージ「いや、まだ帰ってきていない」

ジョナサン「ただいま」

ジョージ「ちよūd帰つてきたみたいだな」

ユウナ「行きましようか」

玄関ホール

ジョージ「ジョジョ！」

ジョナサン「？なんですか父さん」

ジョージ「ちよūtと来なさい」

ジョナサン「？はい」

こつちに来る

ジョナサン「あれ？ユウナ？」

ユウナ「私もね」

ジョージ「入りなさい」

部屋に入った

ジョージ「話というのはダニーなんだが」

ジョナサン「ダニーがどうかしたんですか!？」

ジョージ「まあユウナがもう治したのだが」

ジョナサン「ユウナが？」

ユウナ「この前のボクシングの時と同じようにやっただけだって（小声）」

ジヨナサン「あ！あれか！」

ジョージ「それでな」

経緯を説明する

ジョージ「執事は私が火をつけてしまったと言ってるんだ、処分はジョージョに任せようと思ってるんだが、どうする？」

ジヨナサン「ダニーがいると知らずに火をつけたんですよね」

ジョージ「そうだ」

ジヨナサン「だったら、今のままでいいと思います。ダニーも無事だし」

ジョージ「そうか、執事にはそういつておこう」

ジヨナサン「それじゃあ」

ジヨナサンは出て行った

ユウナ「じゃあ、私も」

ユウナも出て行った

ジョージ「・・・にしても、一体どうやって治したのだ？ジョージョは知ってる風だったか・・・」

第六十話（ジョジョ一部の軌跡『第三話』より）

「七年後」

七年たったよ

今日はジョナサン達の大学のラグビー決勝をみます

ジョナサンが走る！一人がタックルししがみつく！しかしジョジョはまだいける

また一人また一人とタックルしたが倒れない！

ユウナ「ジョジョーッ！行けー!!」

四人目！さすがにぐらついた

ユウナ「パスしろー!」

実況「パスが通ったアーッ！飛び出したのは!?!」

ここ漫画で見るよりヤバイぞ

何メートル飛んでんだよディオ

実況「ディオ！やはりわが校のディオブランドーですッ!」

ユウナ「全力で走れーッ!!」

実況「抜けるッ！抜けたアーッ！単独走ですッ！華麗だ！相変わらず華麗な走りっぷ

り！」

速すぎんか？

いや、今の俺なら行けたりするかも？

実況「トライ！やったアーツ！最後の試合を優勝で飾りましたアーツ！」

勝ったー！

ジョナサン達が着替えたので帰りました

ジョージの部屋

デイオ「お父さん、ご気分はいかがですか？」

ジョージ「うむ・・・大分いいよ・・・ゴホツ。ただ咳が止まらないな・・・今日医者に入院を勧められたよ」

デイオ「入院？それはしない方がいいです。病院は施設が悪いくせに設けることばかり考えて入院を勧めているんです」

ジョージ「うむ・・・私も断ったよ。自分の家のほうが安心していられる。胸の痛みもなくなったし、手の腫れもひいたみたいだ。良くなってる・・・」

ジョナサン「父さん・・・早く元気になつてください。本当に！」

ジョージ「ところでデイオ！ジョージョ！優勝おめでとう！」

ユウナ「ええ！もう知ってるんですか？」

ジョージ「大学の友人がさつき来て教えてくれたよ！」

デイオ「酷い友人をお持ちです！僕らは真つ先に喜ぶ顔が見たくてすつ飛んで帰ってきたのにッ！」

ワツハツハツハツ！と皆が笑っているの俺は見ていた

ジョージ「いやいや喜んで！私は鼻が高いよ素晴らしい息子たちだ！デイオ君は特にガンバツた・・・卒業したらなりたいたいものになるがいい！援助は惜しまない。君は私の家族なんだからね」

デイオ「貧しい出身のこの僕に、チャンスを与えてくれてありがとうございます。ますます励みたいと思います」

執事「ジョースター卿お薬の時間です」

ユウナ「では私達は出ますね」

ジョージ「ああ」

自分の部屋

ユウナ「とうとう来たか」

優斗『なにがだ？』

ユウナ「出たの何年ぶりだよ」

優斗『知らね』

ユウナ「そうか・・・」

優斗『何が来たんだよ』

ユウナ「ジョースター卿が死ぬ」

優斗『マジかよ。どうにか出来るのか?』

ユウナ「助けるさ」

ディオ「あんなクズに名誉などあるモノかアーツ!!」

ユウナ『早速喧嘩やつてるのか・・・。仕方ない、行きますか』

行くとジョナサンがディオを二階から一階に突き落としていた

ユウナ「・・・これが一体どういう状況なの?」

ジョナサン「ディオが・・・毒を父さんに盛っている・・・!!」

ユウナ「・・・(呆)」

ジャンプして降りた

ユウナ「何してるの?ディオ」

ディオ「・・・何のことだ」

ユウナ「・・・まあいいけど。せいぜい骨折らないようにね」

そしてジョージの部屋に行こうとしたら、ジョナサンが出てきた

ユウナ「どっかいくの?」

ジョナサン「オウガーストリートに行つて、ディオに東洋の毒薬を売った奴を探しに行く」

ユウナ「一緒に行こうか？」

ジョナサン「とんでもない！危険すぎるよ!!」

ユウナ「何かあつたら、前に見せたアレで帰れるでしょ？」

ジョナサン「帰るのは早いほうが良いけど・・・」

ユウナ「自分を守る術ぐらい持つてるわよ」

ジョナサン「・・・わかった」

オウガーストリート

ジョナサン「ありがとう、ここから先は歩いていくよ」

御者「や・・・やめなせえ！ジョースターさんたちの行くようなところじゃあねえ！」

ジョナサン「わかつてるよ・・・だけだとえこの右手を失うことになつても行かなくてはならない理由があるのです！」

少し進むとチンピラ三人が向かってきた

チンピラ1「おい、刺青！おめえつちのナイフに任せるぜ！」

チンピラ2「ああ・・・」

チンピラ3「あの身なりの良いアンちゃんの肌を切り刻んで身ぐるみはいじまない

！」

ジヨナサン「なるほどオウガーストリートか・・・」

チンピラー1「ウキヤアアアッ！」

ユウナ「任せろ」

ナイフを刺そうとしたので、避けて顔を本気で殴った

チンピラー1「ブッ」

チンピラー2「アチャツーツ！何を気取ってるねーッ！！東洋の神秘中国拳法この蹴りを食らってあの世まで飛んでいくねーッ！」

チンピラー2をジヨナサンが殴った

ユウナ「あと一人・・・」

ジヨナサン「その東洋人・・・君なら知っているな・・・東洋の毒薬を売っている店を！」

チンピラー3「そりゃあ、知っているが。あんたに教える義理はねえ!!」
時を止めて、近づいて腕を後ろに回して押し倒した

チンピラー3「な！」

ユウナ「私たちは、あんたにどこにいるか聞いてるの。こつちには時間がない」
ジヨナサン「僕がやる」

ユウナ「？」

ジョナサン「やらせてくれ」

ユウナ「・・・わかったわ。でも早く終わらせてよ」

ジョナサン「ああ」

ユウナがチンピラ3を放すとすぐに離れた

チンピラ3の帽子から刃が出てきブーメランみたいに使っている

チンピラ3が帽子を投げジョナサンが頭を守っている腕に突き刺さる。腕からはバ

キバキツと音がした

チンピラ3「ハハハッ!!刃が骨まで達した音！」

その瞬間ジョナサンがチンピラに突進し蹴った!

すると周りに人が集まりだした

今にも襲つて来そうだったので構えると

チンピラ3「や、や・・・やめろみんな！」

ユウナ「え？」

チンピラ3?スピードワゴン「その紳士に手を出すことは・・・このスピードワゴン

が許さねえ！」

ジョナサン「紳士？」

スピードワゴン「ひとつ聞きてえ！なぜ思いつきり蹴らなかつた？あんたのその足ならよお、俺の顔をめちやくちやにできたはずなのによお！」

ジョナサン「僕たちは・・・父のためにここに来た・・・だから蹴る瞬間！君にも父や母や兄弟がいるはずだと思つた・・・君の父親が悲しむことはしたくないッ！」

ホント紳士なこつて。でも悲しきかな

こいつの子孫、不良ばつかだからな

さっきのチンピラとスピードワゴン、ジョナサンの怪我を治した

スピードワゴン「あんたたちの名前を聞かせてくれ・・・」

ジョナサン「ジョナサン・ジョースター」

ユウナ「ユウナ・ブランド」

スピードワゴン「東洋の毒薬だったな、連れて行ってやる。その腕の手当てしな！」

ユウナ「あんたら全員治したから大丈夫だ、傷もふさがつてるだろ？」

スピードワゴン「ほ、本当だ・・・治つてやがる！」

ユウナ「そのアンタラも擦り傷ぐらいは治してやったから、あんまり邪魔しないでくれよ？」

その後行つてからどこでも〇〇で帰つた。ちなみにスピードワゴンが来たいと言つたので一緒に来た

第六十一話（ジヨジョー部の軌跡『第四話』より）

「火事」

入口の扉が開いた

ディオが帰ってきたみたいだ

それじゃあ手錠をかける寸前までカットするぞ。別に書くのが面倒って訳じゃねえぞ

ディオ「俺は人間をやめるぞ！ジヨジョーツ!!」

ディオは懐から石仮面を取り出した

ディオ「俺は人間を超越するツ！」

ディオはナイフでジヨナサンを刺そうとした

ユウナ「避けるジヨジョーツ!!」

だが人影が一つ、間に入った

警官「あああ・・・!!」

スピードワゴン「こ・・・これは！」

ナイフはジヨナサンではなく、ジヨージの背中に刺さっていた！

ジョージが庇つたのだ!

ジョージ「ジョージ……」

ジョナサン「と……父さんッ!」

ユウナ「……ッ!あとは任せてジョージョ!」

ジョージを館の外にどこでも○○で外の茂みに出した

ジョージ「頼む……息子の腕の中で……死なせてくれ……」

ユウナ「誰が死なすといった!!私の前で死なせはしない!!クロノス、ザ・ワールド!」
止まってる間にナイフを抜き、アリエルに回復させた

そして時は動き出す

ジョージ「う……ん?痛みが……傷が治っている!」

ユウナ「アリエル、あとは任せた。義父さんを守って」

アリエル「どうするんですか?」

ユウナ「かたをつける!」

屋敷は火事になっており。玄関から入ると既にデイオは吸血鬼化し、生気を吸われた
警官がスピードワゴンを襲おうとしていた

ユウナ「クロノス、指弾」

屍生人になった警官を撃ち殺した

スピードワゴン「た、助かった・・・」

ユウナ「ジョジョ！ デイオはまかs」

ジョナサン「僕にやらせてくれ！」

ユウナ「アンタじゃ勝てない！」

ジョナサン「こうなつた原因は僕にあるんだ！ 決着は僕がつける！」

ユウナ「・・・危なかつたらすぐ交代してよ・・・」

警官とスピードワゴンを連れて屋敷を出る。ジョナサンとデイオ以外全員出した

スピードワゴン「何で行かせたんだ！ あんな化け物に勝てるわけない！」

ユウナ「アイツはそう簡単に死ぬ奴じゃないでしょ！」

ジョージを連れてきた

スピードワゴン「ジョースター卿！」

ジョージ「すまないね」

ユウナ「大丈夫、助かっただけいいでしょう？」

ジョージ「それも・・・そうだな」

ユウナ「執事！ 任せてもいい？」

執事「お任せください！」

数分後

スピードワゴン「屋敷が崩れるぞーッ！」

ジョージ「ジョジョーッ！」

すると、一人窓を突き破って外に出てきた

スピードワゴン「ああっ！こ……これは！ジョースターさん！」

ユウナが駆け寄る

ユウナ「生きてるぞ！病院に連れてくぞ！」

スピードワゴン「おいおい、治せねえのかよ！」

ユウナ「すまないけど、ガス欠だ」

病院に連れていき、一週間ほどたった

ジョージはほとんど治った

怪我はツエペリさんと会ったときに治るので治さない

ジョージが誰かという

メメタアしてるとこだ！

ついたら丁度話が終わったみたいだ

ユウナ「何を話してんの？」

ジョナサン「ユウナ！」

エリナ「お久しぶりですね」

ユウナ「久しぶりエリナ」

エリナ「はい」

ツエペリ「君は何とこのかね？」

ユウナ「ユウナ・ブランドー」

ツエペリ「ブランドー!?!ということとはディオの!」

ジョナサン「この人は悪人じゃありません。助けてくれたんです」

ユウナ「さつきディオが生きてるとか波紋とか言ってたけど・・・どういこと? なの話をしていたの?」

ツエペリ「君には酷すぎると思うが・・・」

ユウナ「大丈夫、ディオを倒すためにも覚えたい」

ツエペリ「わかった、ではやるぞ!」

ツエペリさんが手でユウナの胸を突き刺した

ユウナ「う・・・」

息を吐きだす

ツエペリ「肺の中に空気を1cc残らず絞り出せ」

何かが湧き上がってくる

いや、何かが消えていく?

あれ？周りが真っ白に

神様「何でここにいるんじゃない？」

ユウナ「はあ？」

神様「死んだのか!？」

ユウナ「死んだの!？」

神様「いや、そう簡単に死ぬはずがない・・・何かの拍子に魂が出てしまったのかも
しれんな・・・ヘルのところ连接到行つてやろう」

ユウナ「ヘル？ヘル・・・あ！女神のヘルか」

神様「あやつなら今お主がどういう状況かわかるじやろう」

道中

ユウナ「・・・ところで神様ってそもそも誰なの？」

神様「・・・そのうち分かるじやろ」

ユウナ「ヘルの所に行けるって事は北歐神話？」

神様「ワシはギリシヤじやよ。ワシはヨーロッパ系列の神話を治めておるからの。北

歐神話にも行けるんじゃない」

ユウナ「へえ・・・じゃあ、オーデインとかも会えるの？」

神様「会えなくはないがの。まあ、あやつはやめといたほうが良いじやろう」

ユウナ「なら、ヘルに会いに行く許可とかは？」

神様「それならもうとっておる」

ヘルハイム

神様「ヘル！いるんじやろ出て来い！」

すると面と向かってみて右半身が青い、カマを持った女性が出てきた

ヘル「何よ、ギリシヤのおじいちゃんがいきなり来て・・・てか誰連れてきたの？」

神様「こやつはわしの暇つぶげフンゲフン・ちよつと仕事をしてもらっている人間

なんだが・・・どうやら死んでしまったみたいでの、調べてみてくれんか？」

暇つぶしって言ったよな今

ヘル「そ。今、調べて来るわ」

しばらくすると

ヘル「わかったわよ、あんたの体は今生きてるけど、魂が今ここにいますから・・・ま

あ、簡単に言うとは植物状態ってやつね」

ユウナ「はあ」

神様「戻すことはできるのか？」

ヘル「できるわよ、体が生きてるなら魂をぶち込むだけよ」

神様「それじゃあ任せたからの」

ヘル「は？嫌よ!?私だつて忙s」

神様は消えてしまった

ユウナ「・・・結局現世に連れてつてくれるんですか?」

ヘル「い・や・よ!これでも忙しいんだから・・・」

ユウナ「あ、そうですか。・・・戻ったら何かごちそうでも用意しようかと思つてたんですが」

ヘル「・・・どんな?」

ユウナ「いや、口では言いきれないぐらいですかね」

ヘル「・・・ちよつと待つてなさい」

しばらくすると、戻つてきた

ユウナ「・・・なんかしてきましたか?見た目変わつてないですけど」

ヘル「分かれてきたのよ」

ユウナ「・・・?」

ヘル「私は本体の一部。本体は今ぜっさん仕事中」

ユウナ「・・・成る程」

ヘル「ちなみにあんたの連れてる悪魔やら天使やらも一部に過ぎないわよ?」

ユウナ「え!」

ヘル「普通に考えて見なさいよ。そもそも神話の力を使えるだけで凄いの、何人もそう簡単に使えるわけないでしょ。普通なら一人分で四肢がボンツよ」

ユウナ「……俺が今使ってる力が小さいから、大丈夫って事？」

ヘル「そうよ。あんたが使ってる力は用途は同じでも質はクソよ」

ユウナ「……じゃあヘルもクソ？」

ヘル「あんたに合わせたの事だから、クソなんて言うんじゃないわよ。それじゃあ入らせてもらうわよ」

ヘルが優菜に入って行った

ヘル「さっさと行くわよ。その扉に入ったら勝手に戻るわ」

ヘルが言う場所を見ると、光を放った扉があつた

ユウナ「改めてよろしく。俺はユウナだ」

ヘル「私のことは聞いてるんでしょ？ ヘルよ」

扉に入ると真つ暗になった

目を閉じてるだけみたいだ

そして目を開けると

ジョナサン「あ！目を覚ましたみたいだ」

エリナ「大丈夫!?!今指は何本立ってる？」

ツエペリ「すまん、ちよつと強く押しすぎたみたい、ホントごめん。死んだと思ったマジで」

ユウナ「一回死にましたよ？」

ジョナサン「え!？」

ユウナ「三途の川つて赤紫色なんですね。知りませんでした」

ツエペリ「マジでゴメン。ミスっちゃたの」

ユウナ「・・・まあいいです。なんとか戻ってきましたから」

ツエペリ「じゃあこれから、波紋の修行なんだけど・・・できる？」

ユウナ「行けます。波紋もできるようになったと思いますし」

ツエペリ「それでは、もう少ししたら修行を始めよう」

一週間後、関節外すの難すぎる

ツエペリ「もつと、速くするんだ！そして呼吸を乱すな！波紋エネルギーは精神のみ

だれに凄く敏感なのだよッ！」

ユウナ「ならこれでどう！」

ユウナの腕は関節が外れ、伸びた

ユウナ「あ！できました!!」

ジョナサン「もう!？」

ユウナ「でも難しいですね・・・」

その後一週間、呼吸を練習し結果ジョナサンより少し弱いぐらいになった

ユウナ「才能自体はジョジョのがあったんだね」

ジョナサン「この前は先越されて驚いたけどね・・・」

ツエペリ「ひとまずこれで、波紋を扱えるようになっただろうが・・・これからは個人で磨くんだ。強くなるかどうかは自分次第だ」

ユウナ「了解です」

ツエペリ「では、ディオのいるロンドンへ行くぞ！」

馬車に乗り込むとき

スピードワゴン「待ってくれー！俺も連れてつてくれー！」

ツエペリ「スピードワゴン君！」

スピードワゴン「ここまで首を突っ込んで、引き下がるのは人間じゃねえし、俺の性分でもねえ！」

ユウナ「・・・ホントに来るんですか？」

ツエペリ「これは相当危険な旅だ・・・それでも来るのか？」

スピードワゴン「ああ！」

ユウナ「死にそうになったら助けてやるよ」

ウインドナイトへのトンネル

スピードワゴン「裏の世界へ手え回して、確かにあの中国人をその町で見かけたって情報を確認しました！」

するとトンネルの中でいきなり馬車が止まった

スピードワゴン「雨が降ってきやがった！トンネルの中で？」

ユウナ「雨じゃあないです。鉄の匂いがします。血ですよ」

ツエペリ「早くも来たか」

ジョナサン「気をつけろツ！スピードワゴン、ここは太陽が届いていないツ!!」

スピードワゴン「お・・・おい御者ア！へ・・・返事をしろオ！」

御者の方を見ると、馬二頭の頭が無くなり、御者に馬の頭がついていた！

スピードワゴン「うっ!!うわあああああーっ!!」

ジョナサン「き・・・奇怪なナイフが御者の全身をつら抜いている！」

ユウナ「デイオじゃあない！デイオはこんなところで自分からくるほど馬鹿じゃない！」

スピードワゴン「み・・・見ろ、馬・・・馬の首の切り口を!!切り口の中に何か・・・いる・・・動いているツ!!」

ツエペリ「三人とも馬から離れていなさい・・・」

馬の中から人が出てきた！

いや、人ではない！残虐性や異常性が圧倒的の吸血鬼だった

誰であろう。かの有名なジャックザリッパーである。FGOのジャックちゃんなら大歓迎なのに

まあ今言ってる間にツエペリさんが今戦っているんだけど

ツエペリ「ジョジョ！戦いの思考その2じゃ！ノミっているよなあ・・・ちつぽけな虫けらのノミじゃよ！あの虫は我々巨大で頭のいい人間に所かまわず攻撃を仕掛けて戦いを挑んでくるなあ！巨大な敵に立ち向かうノミ・・・これは勇気と呼べるだろうかねえ。ノミ共のは勇気とは呼べんなあ、それではジョジョ！勇気とはいったい何か!?勇気とは怖さを知ることツ！恐怖をわがものとするものじゃあツ！呼吸を乱すのは恐怖！だが恐怖を支配したとき！呼吸は正しく乱れないツ！波紋法の呼吸は勇気の産物!!人間賛歌は勇気の賛歌ツ!!人間のすばらしさは勇気のすばらしさ!!いくら強くてもゾンビは勇気を知らん」

そしてツエペリさんは膝に波紋を流し、ジャックの顔面に膝蹴りした！

ツエペリ「仙道波蹴ーツ！」（せんどウウエーブキック）

ジャックの顔が溶けている

ジャック「よくもてめえら！必ずぶつ殺す!!必ず細切れにして食らってやるぜツ!!」

そうしてジャックは、トンネルの抜け穴に入っていき消えた

第六十二話（ジョジョ一部の軌跡『第五話』より）

「姉として」

今はジョナサンがジャックと戦ってるんだが・・・

ジョナサン「仙道波紋疾走ッ！」（せんだうはもんオーバードライブ）

そう聞こえた後にジョナサンが出てきた

ユウナ「終わったかな？」

ツエペリ「なら行くぞ！目的地はすぐそこだ！」

ユウナ『ヘル』

ヘル『何よ』

ユウナ『ジャックの魂をあの世へ連れて行ってくれ。無いだろうけど復活されたりし

たら面倒だ』

ヘル『待ってて』

少しして

ヘル『送ったわ、即地獄だったけど』

ユウナ『ありがとう』

通り道

子供にカバンを盗られたので取り返した

すると下からたくさん屍生人が出てきた

上を見ると

ジヨナサン「デイオ！」

デイオ「陽は落ちた・・・貴様の命も没する時だ!!」

姉として恥ずかしい。本物の姉ではないけど

そして屍生人がたくさん襲ってきた

ユウナ「ヘル」

ヘル「よつと」

ヘルガゾンビ一人の首を切る

そして波紋を流し倒す

ヘル「これだけ？アイツらやつちダメなの？」

ユウナ「斬った奴に波紋を流して倒すから、どんどん斬って」

ヘル「やっていいのね？」

ユウナ「もともとあの世の魂だしいいでしょう」

ヘル無双ちゆうです

とんでもないのを仲間にしたかも

ツエペリさんはディオのところに行く

ツエペリ「個人的には貴様のことは知らん・・だが貴様の脳を目覚めさせた石仮面に對してあえて言おう、とうとう会えたな！」

ちよつと厳しいかもヘルが無双してるけど

数が数だ。波紋をもつと強くしないと押し負ける

ユウナ「ハアツ！」

今の所十体ほど倒している

ツエペリ「ヘイベイビー！そんな不安定なところで戦う気か？降りて来い・・・」

ディオ「凶に乗るなよ！たかが虫けらが、俺は生物界の頂点・・未来を拓く新しい生物となった・・人間ごとときと對等の地においていけるか！無礼者がツ！この腹の傷を癒せばジョジョのやつにつけられた火事での負傷はすべて完治する！こい！呪い師！貴様の命でこの傷の群青消毒してやろう！」

ツエペリ「貴様、一体何人の命をその傷のために吸い取った!？」

ディオ「お前は今まで食ったパンの枚数を覚えているのか？」

ジョナサン「ツエペリさん！」

ツエペリ「任しとけい!!」

ツエペリさんがディオに波紋を流すが気化冷凍法で波紋がかえってき、腕が裂けた
ジオナサンが加勢するがディオが腕を振り薙ぎ払った

ディオ「波紋？呼吸法だと？フーフー吹くなら・・・この俺のためにファンファーレでも吹いてるのがお似合いだぞ！」

ユウナ「ホントにクズだね。ディオ」

ディオ「タルカス！黒騎士ブラフォード!!もはや俺の出る幕はない！出てきてこいつらにファンファーレという悲鳴を吹かしてみろッ！」

下から図体のデカイ男が一人と細身の男が出てきた

細マツチヨってやつだね

ディオがタルカスたちの昔話をし、こういった

ディオ「二人を悪魔もぶっ飛ば復讐鬼に作り上げたぜ!!」

ツエペリさんはスピードワゴンが手当てしている

ユウナ「加勢するよ！」

ジオナサン「ブラフォードは任せてくれ！」

ユウナ「それじゃあ、私の相手は貴方ですか」

タルカス「お前のような小娘すぐに殺してやる」

ツエペリ「一人では勝てないぞ！ユウナ!!」

ユウナ「あの世でメアリーに会ってきたら？会えたらいいけど」（メアリーはタルカスたちが忠誠を誓っていた主人）

タルカスに波紋を流すと、消えて行った

ヘル「終わった？こっちは全員連れてったけど」

ユウナ「タルカスっていうのがいましたけど。そちらはイフリートとクロノスでぶちのめしました」

ジヨナサンも終わったみたいだ

ユウナ「ブラフォードとタルカスって人をメアリー女王に会わせてやってください
あ」

ヘル「いいの？」

ユウナ「根は良い人たちのはずです」

ヘル「じゃあ行ってくるわね」

ヘルが消えた

デイオ「もう倒したのか？」

ユウナ「さつき悪魔も吹っ飛ば復習鬼とか言ってたね」

デイオ「だからどうした？」

ユウナ「アンタの前にいるのは、れっきとした悪魔だよ。ほらこの炎出してるやつ！」

ディオ「俺を倒したければ、屋敷まで来るといい」

ディオは去った

ユウナ「あッ！ちよつとディオ!? ディーオー!! 無視すんなー!!」

追いかけるよりツエペリさんの回復が優先か

ユウナ「大丈夫ですか？」

ツエペリ「もう少しで全快できる」

ジョナサン「では全快したらすぐに行きましょう」

ポコ「どうするんだい？これから」

ポコ忘れてたさっきの盗みを働こうとしたヤツだ。まあディオに操られてだが

ツエペリ「助っ人と呼んである」

スピードワゴン「助っ人？」

ツエペリ「その前に、ジョジョ手を出せ」

ジョナサン「手ですか？」

ツエペリがジョナサンに生命エネルギーを渡した

ジョナサン「これは！」

ツエペリ「私を使うよりも、お前が使ったほうがよい」

ジョナサン「しかし」

ツエペリ「大丈夫、戦えるぐらいには残してある。デイオはお前が倒すんだ、お前に
なら倒せる」

ジョナサン「・・・わかりました」

ユウナ「そろそろいいんじゃないですか？」

ツエペリ「ああ、行こう」

町に入ると既にゾンビだらけになっていた

すると男が一人歩いてきた

ツエペリ「ダイアー君！」

ダイアー「ツエペリじゃないか！」

スピードワゴン「なんだ？知り合いなのか？」

ツエペリ「彼らが私を呼んだ助っ人だ！」

奥にまた二人いる

ツエペリ「彼はダイアーだ。そして私の師匠トンペティそして」

ストレイツォ「ストレイツォだ」

ユウナ「ユウナです」

ジョナサン「ジョナサンです」

ダイアー「二人ともツエペリから聞いているぞ。逸材つてな」

ユウナ「逸材と言われるとプレッシャーがかかります」

トンペティ「ユウナくん。一つ聞きたいことがある」

ユウナ「なんでしょうか」

トンペティ「君はディオ・ブランドーの姉。君は本当に、ディオを殺せるのか？」

ユウナ「・・・」

トンペティ「実の弟を・・・殺せるのか？」

ユウナ「実の弟だからこそ、私は倒さなければなりません。姉として、残ったたった一人の血縁者として私は殺します」

トンペティ「・・・決意は聞き遂げた。それでは行こうか」

ディオの屋敷に入り、蛇を体内に飼っている屍生人を倒しポコの姉を助けた
そしてディオにあった

ダイアーが先に行ったが気化冷凍法で凍らされ割られてしまった

ユウナ「ザ・ワールド」

欠片をすべて集め氷を溶かし全てつなげた

そして時は動き出す

ダイアー「なっ!?今！俺は確かに砕かれたはずだ!!」

ストレイツォ「どうということだ!?!」

ユウナ「いいよ」

また無双中

ユウナ「止めを刺すだけでいいですよ」

ツエペリ「私はジョジョを助けに行く！」

ユウナ「無理ですよ！数が多すぎます！」

スピードワゴン「クソツツ！これじゃ助けに行けないぜ！」

だがジョジョの剣の氷は少しずつ溶けていた！

刃先が火に触つたのだ

そして剣を放し、オーバードライブでディオを殴った

しかし波紋が伝わる前に凍らされてしまう！

ディオが飛び掛かる！

ジョナサンは手に火をつけディオを拳が貫く！

トンペティ「やったな！あの感じ！完全に波紋は入った！」

そしてディオをおしきり、ディオが最後のあがきにもすごい圧力で光線のように体液を出したが当たらなかつた

そして崖下へディオは落ちて行つた

ユウナ「ディオ私はお前に姉として言う。安らかに眠れ」

そして俺は、ディオの身体を焼き、石仮面を砕いた。姉として葬りたいといい、一人でやった。もちろん、首がなかった

私は戦いが終わってすぐに姿を消した

それからしばらくしジョナサンとエリナはめでたく結婚！皆はハネムーンを見送ったが、俺は行かなかった

その後出港した船は沈没

エリナとエリナが抱いていた赤ちゃんだけが生き残った

そして俺は元の世界に帰った

皆からは、いきなりいなくなってしまうと思われたかもしれない

お別れぐらい言ってもよかったかもしれない

ここで一部は終わる

二部にも行くだろうが、ひとまず終わりとしよう

それではまた次回で

第六十三話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十七話』より）

「画家」

優斗「朝か・・・そうだった。皆泊まりに来てたんだった」

蓮「もう朝か」

優斗「おわっ!?・・・蓮も起きたのか」

竜司「ん?あ、戻ってる!」

杏「え?本当!中村君の部屋じゃん!」

双葉「うるさいぞく起きちゃったじゃん」

皆超久しぶりだなあく。ジョジョに残りすぎた。七年だからな七年

優斗「とりあえず・・・学校行くか」

蓮「だな」

朝飯食べた後

杏「よく考えたら、明後日試験じゃん!」

優斗「大丈夫、向こうの世界のが難しいから」

竜司「え?向こうのがきついのか?中学だぜ?」

優斗「あの理事長覚えてるか？」

蓮「ああ」

優斗「あいつが馬鹿みたいに難しくするから」

竜司「じゃあなんだ？向こうのほうが難しいと？」

優斗「覚悟しとけよ☆」

双葉「私もヤバイじゃん、てか時間大丈夫なのか？」

優斗「じゃあ、カオス呼んで・・・」

蓮「カオス？」

優斗「あ、そういえば、こっちは知らないのか。俺実はまたもう三個行かされたんだ

よ異世界」

杏「え？」

優斗「そこで手に入れた新しいペルソナです☆」

双葉「・・・なんか、色々大変なんだな。ご愁傷様」

優斗「というわけで、カオス」

カオス「どうしろと？」

優斗「最寄り駅まで繋げるよ」

カオス「はいはい、神使いが荒い主人だことで」

上手にできました」

どこでも○○かんせうい

優斗「よし、行ってこい」

竜司「大丈夫なのか？」

竜司がまず通る

優斗「よし、杏も行ってこい」

杏「うん」

杏も行って所で、穴を閉じた

優斗「それじゃあ学校行くか」

双葉「行くのか？」

蓮「ああ、行ってくる」

双葉「じゃあ、私は帰るぞ」

双葉は帰った

それから皆登校し、放課後

杏「終わったかも」

優斗「何が」

杏「勉強」

優斗「それはマジで困るんだけど」

杏「今日みんなで勉強会しない？」

優斗「それなら考えがあるぞ」

竜司「考え？」

優斗「明日は勉強道具持って寝ろよ」

蓮「？わかった」

そのあと双葉にも伝えた

双葉「また行くのか!？」

優斗「アイツら今勉強ヤバいんだ。頼む、このままじゃやばい」

双葉「それで？どうしろっての？」

優斗「勉強道具持って寝てくれ、そしたら向こうの世界に持っていけるから」

双葉「私もなのか？」

優斗「興味が出たらいいんだが、双葉にも学校行ってほしいんだよなあ」

双葉「学校・・・」

優斗「無理にとは言わんが・・・やっぱ行ったほうが将来が広がると思うんだ。それに」

双葉「それに？」

優斗「お前、マジエドだったぐらいだから理解さえすれば簡単に問題とか解けるんじゃないかと思つてな」

双葉「・・・気が向いたらな」

優斗「そつか、まあ前向きなだけいいがな、それじゃ明日の朝楽しみにしとけ」

次の日は三島からの情報で流れてきた中野原つてやつを倒した

そしたら班目の名前が出てきた。アイツはそのうちやる

その次の日は向こうの世界に行つた

猛勉強させさせ。誰につて？もちろん律先生だよ。さすがですわマジリスペクト

殺せんせーは放課後ヌルヌルつてヤツがあるからまた別だね

元の世界に戻り試験後

杏「今回いつもよりめつちや解けた気がする！」

竜司「俺も！いつもより手ごたえがあつたぜ！」

蓮「いつもよりは解けてる気がする・・・」

優斗「行つてよかつたろ？」

杏「めつちやよかつた」

竜司「あれしたらいける気がする！」

優斗「そのうち行くつもりだが」

次の日・駅

優斗「終わったと思ったら、気を抜いちまうな」

蓮「確かにな」

杏が暗い表情で歩いてくる

竜司「どうした？痴漢にでもあつたか？」

杏「いや、なんでもない行こ」

歩いていくと

優斗「誰かつけてきてるな」

蓮「マジで？」

竜司「しかたねえな、こい」

上上がり杏を一人で歩かせ、誰か来たので止める

イケメンだなおい

みんなでじーつと見る

竜司「なあ、マジでコイツ？お前の自意識過剰じゃね？」

杏「なっ違！」

祐介「なんだ君たちは？」

杏「それはこっちのセリフ！付きまどつてたくせに！」

祐介「付きまとった？心外だな」

杏「ずっとつけてたでしょ！電車の中から！」

祐介「それは」

すると、横まで来た黒い車がブーツとクラクションを鳴らし、こちらに気付かせてから窓を開けた。中には例の班目がいた

班目「やれやれ、いきなり車を降りたと思えば、呆れるほどの情熱だな。結構、結構：はっはっはっ……」

祐介「車から見かけて……追いかげずにはいられなかった。先生の着信にも気づかないほど。けど良かった……追いついた」

杏「はあ」

優斗「えっと……用件は？」

祐介「君こそ、ずっと探してた女性だ！ぜひ、俺の……」

杏「やだ……ちよっと……」

祐介「……俺の、絵のモデルになっってくれ！」

杏「モデル……？」

優斗「あ！思い出した、その車の人確か画家の班目だよな？」

班目「いかにも」

優斗「その車に乗ってたつてことは……十中八九画家の卵つてとこか？」

祐介「そうだ、だから俺の絵のモデルに……」

杏「いや、ちよつと……」

班目「祐介！」

祐介「すみません、先生。今、戻ります！」

杏に駆け寄る

祐介「明日から駅前のデパートで、班目先生の個展が始まる。初日は俺も手伝いに行くんだ。是非来てくれ。モデルの件、その時にでも返事をもらえると……どうせ絵画には興味がないと思うが……チケットは人数分渡してやるよ」

チケットをくれた

ちよつと上から目線じゃない？

祐介「じゃあ明日、ぜひ会場で！」

祐介は車に乗っていった

竜司「行く気じゃねえよな？」

杏「行ってみようかな……」

優斗「班目に近づくためか？」

杏「ヤバッ！時間！また後でね」

杏が走っていった

そして俺達もいつもの路地裏に入った

優斗「・・・一個試してみるかな？」

蓮「何をだ？」

優斗「俺の周りの空間を目以外囲むだろ？空間の中だけメメントス化させると・・・ほ

ら女子の姿になった」

蓮「とりあえず・・・それで何するんだ？」

優斗「現実でも壁登ったりできるようになったってだけだ（まあ、波紋でできるけど）

お前らにもできるぞ」

蓮「いや、いい」

優斗「あ、そう」

優斗の身体が男に戻った

竜司「戻った・・・」

優斗「とりあえず行くか」

放課後

やっと学校終わったわ

女子「ねえ、これ見てみて！」

女子2 「何？」

女子1 「男子が女子になったって！」

ギクッ

女子3 「・・・大丈夫？そんなのあるわけないじゃん」

女子1 「本当だって！戻るときの動画あるもん！ほら」

撮られていただとーッ!!?

やめてくれーッ！

女子2 「うっそ、マジじゃん」

女子1 「やばくない？」

女子3 「なんか、見おぼえない？この道」

女子2 「あ！あそこだよ！学校の前の路地裏・・・」

女子1 「あ！本当だ！しかもこの人見覚えはない？」

女子2 「確かに・・・しよっちゆう見てる気が・・・」

優斗 「逃げよ」

蓮 「自業自得だろ、いろ」

優斗 「クソ」

一瞬女子になって蓮の腕の下を抜けた

女子に見られた気がしなくもないが、ともかく逃げよう

女子1 「あれ？中村君どこに・・・」

女子2 が立ちふさがる

女子2 「さっき女の子になってなかった？」

優斗 「な、なつてねーよ、なれるわけないじゃん」ダラダラダラ

女子2 「めちやくちや汗かいてるけど？」

優斗 「教室暑いから・・・」ダラダラ

女子2 「そんなに暑い？」

女子3 「ぜんぜん」

女子1 「まったく」

優斗 「トイレに行きたいんだけど、どいてくれないかな？」

女子2 「絶対に、い・や・だ☆」

優斗 「・・・仕方ねえな」

女子2 「お？見せてくれるのか？」

時間を止めて避けて後ろに立つ

動き出す

女子2 「あれ？どこ行った？」

女子3 「後ろ！」

女子2 「後ろ？」

女子2 が後ろを向くと、優斗の背が見えた

女子2 「どうやってそっちに!？」

優斗 「じゃあね！」

優斗 がダアツシュ！して引き離れた

女子2 「ちよつとま・・・速ッ！めつちや本気で逃げてる！」

逃げ切り帰って寝た

第六十四話（暗殺教室の軌跡『第二十三話』より）

「さつさと漏らしちゃいなYO☆」

梅雨です。俺達はもう教室にいるんだが・・・なんか頭でけえよ殺せんせー、水に浸けたら大きくなるスポンジの動物みたいになくなってるよ

律「殺せんせー33%ほど巨大化した頭部についてご説明を」

殺せんせー「ああ、水分を吸ってふやけました。湿度が高いので」

前原「生米みてーだな!!」

優菜「先生の帽子浮いてね?」(小声)

竜司「浮いてるな・・・」(小声)

双葉「・・・何で?」(小声)

倉橋「先生、帽子どしたの?ちよつと浮いてるよ」

殺せんせー「よくぞ聞いてくれました、先生ついに生えてきたんですよ」

殺せんせーが帽子を取ると、

殺せんせー「髪が」

皆「キノコだよ!!」

ホントにこの世界はにぎやかだことで

殺せんせー「ボリボリ」

てか食べてんじやねえよ！

殺せんせー「湿気にも恩恵があるもんですねえ、暗くならず、暗くならず、明るくジメジメ過ごしましよ」

放課後

ペルソナ組は先に帰りました

皆で下校中にクレープを買った

杉野「なー上につてるイチゴくれよ」

茅野「ダメ!!美味しいものは一番最後に食べる派なの!!」

岡野「!ねえあれ」

岡野はカップル?を指さす

杉野「あ、前原じゃなか」

岡野「一緒にいんのは確か・・・C組の土屋果穂」

杉野「はっはー相変わらずお盛んだね彼は」

殺せんせー「ほうほう、前原君駅前で相合傘・・・と」

杉野「相変わらず生徒のゴシップに目がねーな殺せんせー」

殺せんせー「ヌルフフフ、これも先生の務めです。3学期までに生徒玄関の恋話をノンフィクション小説で出す予定です。第一章は杉野君の神崎さんへの届かぬ思い」

杉野「ぬー・・・出版前に何としても殺さねば」

殺せんせー「それはともかく優菜君！」

優菜「え？なに？」

殺せんせー「なんで貴方ゴシップ少ないんですか！」

優菜「いやいや、見せるもんじゃないし」

殺せんせー「じゃあ、蓮君と脈ありと」

優菜「何で!?アイツとはなんもねーよ！」

殺せんせー「そうなんですか？修学旅行の時、隣で寝たそうじゃないですか。そこま
で気にするなら先生たちと寝ても良かったのに」

優菜「それは、アイツを信じてたからだし」

殺せんせー「好きということではないんですか？」

優菜「そんなわけないだろ！あいつに俺夜トイレに連れ込まれたんだぞ！股間蹴る覚悟した瞬間、普通に話したただけだったんだよ。あんどき殺せんせーがメモして逃げた奴書いたあとにだぞ！あいつ多分天然だよ」

殺せんせー「脈ありと」サラサラ

優菜「何で!？」

殺せんせー「明らかに口数が増えましたよ、これを脈ありと呼ぶなくて、なんと呼ぶんですか」

優菜「イフリート」

ユウナの横に雨をもものともせず炎が燃え盛る

殺せんせー「あの一・・・優菜君? その火は何でしょう」

優菜「そのメモ帳を燃やす☆」

殺せんせー「ギャアアアア、私も燃やされるウウウウ!」スザー

優菜「待ちやがれーツ!!」

殺せんせーが逃げるのを超人的なスピードで優菜も追いかけた

渚「あんなとこ初めて見たかも」

杉野「確かに。あんな取り乱してんの初めてだ」

茅野「恋愛は未経験かな? それとも、気づいてないか」

岡野「私は気づいてるけど、信じたくないを押すね」

瀬尾「あれエ? 果穂じゃん何してんだよ」

彼は瀬尾。皆興味ないと思うから説明は省いてこれだけ言う。果穂の今カレ

果穂は少し驚いた後に。前原を押し、瀬尾に駆け寄る

果穂「あっ!! 瀬尾君!! 生徒会の居残りじや……」

瀬尾「あー意外と早く終わってさ、ん? そいつ確か……」

果穂「ち、違うの瀬尾君そーゆーんじゃないよ……」

泥沼! 昼ドラかよ! いや昼ドラ見た事ないけど!!

前原「あーそゆことね、最近あんま電話しても出なかつたのも急にチャリ通学から電車通学に変えたのも、で。新彼が忙しいから、俺もキープしとこうと?」

瀬尾「果穂おまえ……」

果穂「ち、違うって。そんなんじゃない!! そんなんじゃない……」

その時、果穂は一瞬ひどくにやけた面になった

ちよつとヤバそうだから、止めに行こう

渚「行くの?」

優菜「俺だけで十分」

瀬尾に近づくと

優菜「なに……」

前原を蹴ろうとしていたので、一瞬で入り込み

あれ? 身体能力上がってね? とか考えながら

蹴る方向を少しずらして波紋を流しておいた

瀬尾「おわっ！」

思いつきからぶって瀬尾は尻もちをついた

果穂「瀬尾君!？」

前原「え？」

優菜「無茶するなあ、おい」

果穂「誰よあなた！」

優菜「前原のクラスメイト……っていえばわかる？」

果穂「……も、もしかして前原君の今カノ……？あ、あんたもキープしてんじやん!!」

優菜「あ？」

果穂「ヒッ……」

優菜「行くぞ」

瀬尾「ちよつと待ちやが」

瀬尾が立ち上がろうとすると足に電気が走りバランスを崩して

瀬尾「うわっ！」

また尻もちをついた

果穂「瀬尾君!？どうしたの!？」

瀬尾「足が……痺れて立てねえ……」

前原「お前……何したんだ？」

優菜「あとで話す」

優菜が起きるのを手伝うために手を貸そうとし

前原が優菜の手を取ると、電流が走った

前原「うわっ！ 静電気か？ でもこの季節に……」

皆のところに戻る

渚「あれって何したの？」

優菜「手、出してみて」

渚「手？」

渚が手を触ると電流が走った

渚「うわっ！」

優菜「これやっただけ」

岡野「これって何よ？」

優菜「波紋って言うんだが……前に俺は異世界から来たって言ったよな？」

渚「うん」

優菜「あれからまた三個（実質二個）行ったんだよ」

杉野「三個!？」

優菜「で、これを習得、からのカオスとヘルもゲット」

カオス「ゲットはないだろう」

ヘル「今すぐ首切ってあげてもいいのよ？」

渚「えええ!？」

殺せんせー「あの人たちにもまたバリエーションが!？」

優菜「なんでちゃっかり殺せんせーも居るの？」

ヘル「あなたの触手も切ってあげようか？」

優菜「やったら・・・どうなるか分かってるよな？」

ヘル「わかってるわよ!たくもう」

渚「えつと説明してくれない？」

説明中

優菜「というわけで・・・質問は？」

皆ついていけず黙っていた

優菜「無いね・・・てかいつの間に殺せんせー頭でかくなつたの？」

殺せんせー「あの人たち・・・少し皆さんで手入れしてあげましょう。ああいう人た

ちには、少し常識というのを教えなければなりませんねえ」

優菜「・・・本音は？」

殺せんせー「二股なんてけしからん！」

殺せんせーらしい・・・というか、孤独な独身男性の思考かな

次の日、アイツらはカフェにいる

今回はペルソナ組は休み、菅谷の変装マスクで渚と茅野が近づき

皆は向かいの家の部屋に矢田と倉橋がビッチ先生直伝の接待テクで上がらせても
らってる

茅野が近くのコンビニにトイレがあるといい、行くようにを促しトイレに

そして渚がわざと食器を落とし、目をそらせ

その間に奥田さんが作った強力下剤B B弾を千葉と速水がコーヒーに撃つ

そしてそれを飲むと・・・トイレに行きたくなるよなあ？

しかしトイレには今茅野が入っている

そして、さっきの言葉でコンビニを思い出すよなあ？

そしたら走っていくよなあ？プライド高いから近くの民家でトイレ借りようとも思
わねえしよ

そして前原、磯貝、岡野が家の木を伐り上から落とす（許可済み）上からくるぞ！気
をつけろー！

そして俺の出番、水たまりでわざとこけながら波紋を流しておく

優菜「イタタ・・・」

瀬尾「な、なんだお前。かかっちゃまったじゃねえか!!」

優菜「すいません」

瀬尾の腹からこつちにまで聞こえる程のお腹のうねりがした

瀬尾「そんなことよりもトイレエ！」

果穂「ちよつと待ちなさいよオ！」

優菜「ここは通らないことをオススメするよ」

瀬尾「え？」

水たまりを踏んだ瞬間、優菜の波紋が二人の身体に電流が走る

瀬尾「ギヤアアア!!」

果穂「キヤアア!!」

戻ると話は終わって、前原はこのあと他校の子とメシ食いにいくからと走っていった

アイツそのうち何かするんじゃないかと思っただけじゃないはず
ていうかしてんのか？

第六十五話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第七話』より）

「でかい……鳥？」

ラフタリアの奴隷紋を焼き直し、ついでに銀貨百枚の卵買ったぞ

次の波まであと四十五日と十四時間なので……

薬を売って、本もらいーの、魔法書もらいーの、この世界の言葉を覚えながら過ごしていたある日

ラフタリア「ナオフミ様！ユウナ様！」

優菜「どうしたんだ？」

尚文「……どうした？」

ラフタリア「卵にヒビが入ってるんです……!!」

ラフタリアに連れられて卵の所に行くと、ヒビが増えていた
そして卵が割れ、人の頭ほどの鳥が孵った

鳥「ピイイイイ!!」

そして鳥は尚文の頭に乗った

尚文「わっ……元氣だな」

ラフタリア「ナオフミ様のこと親だと思ってるんですね！」

尚文「鳥みたいだが、なんの魔物だ？」

ラフタリア「さあ……」

優菜「詳しい人に聞いたほうが早いだろ」

まずは街の人に聞きに行く。で、一発目から当たりを引いた

場所は馬小屋のような場所

村人「……ああこりやあファイロリアルですね」

尚文「ファイロリアル？」

村人「家のやつも波で大分死んじまいましたが……」

村人は小屋の奥を指さす

村人「ほら、アレです」

奥にはさつきの鳥がまんまでかくなつたのが二匹いた

村人「荷車を引くのが好きで、適度に荷車を引かないと落ち着かない性質をしとるんです」

ラフタリア「エサは何を食べるんですか？」

村人「最初は豆を溶かしたものがいいけど、大きくなれば何でも食べるよ」

優菜「何でも食べるのか。雑食なんだな」

村人「レベルを上げるとその分早く大きくなりますよ」

尚文「なるほどその辺は巫人と同じか、よし早速レベル上げに行くか」

村人「ああ勇者様！よかったらこの豆持って行ってください、そいつのエサお持ちじゃないでしょうか？」

尚文「すまない、いくらだ？」

村人「いえ、いいんですよお代は。この村の者は、勇者様に本当に感謝しております」

尚文「相場がわからない、いい値でいい」

村人「いやいやですから・・・！」

尚文「ずいぶんと魔物が死んだと言ったなここもずいぶん壊れている。俺たちはここに自分の目的があつてきている。悪いが村の復興を手伝う余裕がないソレに感謝はもう十分もらっている。それとも物々交換のほうがいいか？」

尚文は代金を払って、「豆を受け取った

そして俺達はレベル上げを始め、いつの間にか鳥が普通ぐらいまで育っていた

しかもまだ育ちそうだ。食費があゝ！食費が高いよ!!

名前はフイーロだぜ！

で、帰ってくると何故か村人たちが集まっていた

優菜「何かあつたのか？」

村長「実は……」

すると、バカが一人とその仲間が村の真ん中に少しいた

元康「というわけで、王からこの村の復興を任された。俺が新しい領主の元康だ。よろしくな！」

尚文「もつ元康!?!」

元康「尚文!?!」

尚文「何でこんなところに……」

元康「俺はここを拠点にしてるんだ!!」

尚文「いや、そんなことよりお前が領主だつて!?!なんの冗談……」

マイン「あら聞いてなかったの?波での功績が認められてるの、王直々のご決定ですのよ?」

優菜「……尚文。一回殺つていい?大丈夫、後で生き返らせるから」

尚文「やるだけ無駄だ」

優菜「チツ」

マイン「とにかく罪人の勇者はとつとと出て行つてくださらない?」

村長「この領主は私のはずです!そのような話私は一言も……」

マイン「今伝えたでしょう?あなたは解任です、王の決定に背けば……わかります」

ね？」

村長「そんな・・・」

マイン「まずは、この村の出入りに税をかけます。そうね・・・入るのに銀貨五十枚、出るのに五十枚にしましょう」

村人1「合計金貨一枚・・・!？」

村人2「そんな！生きていけません・・・!!」

元康「復興のためだろ？そんなに大金か？」

尚文「・・・この村の宿に一泊するのにいくらかかるか知ってるか？食事までついてもったの銀貨一枚・・・村の大人が一日暮らすのに、銅貨二十枚あればお釣りがくる。復興どころか村人が干からびるぞ」

優菜「それを知ったうえでしてるなら・・・最初から無くす気で来てるようなもんだよなあ？盾の勇者しか助けに来なかった、この村を」

元康「・・・っマイン!？」

マイン「痛みを伴う改革も必要です。でなければいつまでも復興など望めません!!」
優菜『ビツチはビツチ先生だけで十分だったのに・・・』

？「あとは任せてください」

声が聞こえると、マインの周りを黒い布を被った四人が囲んだ

? 「そこまでです、マイン殿。我らのことはご存知でしょう、とある方の命にて書状をお持ちしました」

マインが驚きながらも恐る恐る書状を受け取り、読み上げると共にどんどん顔が青ざめて行った

マイン「……みつまみ認めないわっ! このまま引き下がれるわけじゃないっ!」
するとマインがこつちを見る

マイン「盾の勇者!! 村の権利を賭けて勝負よ!!」

尚文「は?」

一呼吸おいて

尚文「はああああ!」

第六十六話（盾の勇者の成り上がりの軌跡『第八話』より）

「競馬みてえ。見た事ないけど」

マイン「勝負は私達のドラゴンと、罪人勇者の鳥とのレースで決めることにします！」

優菜「面倒ごとになったな」

尚文「・・・本当にな」

ラフタリア「ですがこのままじゃ」

フィーロ「ピイイイイイイ!!」

優菜「フィーロはやる気みたいだぞ、やってやれよ。お・と・う・さ・ん」

尚文「お父さんって言うな」

村長「勇者様っ！村の・・・私たちのためにお願います!!」

尚文「断る!!なんで俺がそんな面倒なことをしなきゃなんないんだ!!」

村長「勝ったあかつきには報酬を約束いたしますから・・・!」

元康「やめとけよ!どうせ勝ってこないんだからさくく・・・ドラゴンと鳥だぜ!?しかもコイツとどこどころ色が交ってて純白じゃないし・・・思いつきり安物だな!!」

その瞬間フィーロの怒りの蹴りが元康股間に・・・!ご愁傷さまです

マイン「モ・・・つモトヤス様!？」

ラフタリア「ナオフミ様フイーロが・・・っ」

尚文はにやつと笑ってこう言った

尚文「いいだろうこの勝負受けてやる・・・!!」

ラフタリア「・・・はあナオフミ様にも困ったものです・・・」

優菜「・・・俺考え思いついたからちよつとやってくる。終わるときには戻る」

尚文「わかった」

マインから見えないところの見張りを、波紋で気絶させて茂みに隠した

そしてイフリートとアリエル、クロノス、カオス、ヘルを見張りの兵士と入れ替えた
他の兵士が身に来たら気絶させて隠しといてって言っておいた。つまりマインのと

ころ以外は、みんな尚文の味方というわけだあく!

そして・・・来たな。でもちよつとフイーロが遅いかな？

じゃあ、邪魔しようか。この前覚えた魔法を・・・

優菜「ファストスピードダウン」

元康「うわっ!どうしたんだ!?!いきなり遅く」

優菜「ファストスピード」

尚文「おわっ!よしっ行くぞフイーロ!」

ファイロが元康を追い越した

元康「いきなりどうした！調子でも悪いのか!？」

今のうちだぜ、尚文。尚文が最終ラップを過ぎ、スピードを戻して俺もラフタリアの所に戻った

優菜「勝ったか、尚文」

尚文「ああ、お前は何してたんだ？」

優菜「俺は、マインの兵士と入れ替わって、元康のスピード落として、ファイロのスピード上げてた。まあ他の兵士が逆のことしてるから・・・実質プラマイゼロだな」

尚文「つまり、今回はファイロの実力勝ちって言いたいのか？」

優菜「そ」

ファイロ「ピイイイ♪」

優菜「わかりやすいぐらい喜んでるな」

その後、村長から行商をやったらどうかといわれ

優斗「やればよくね？」

優菜「だそです」

尚文「素材や薬を売ればそれなりに稼げるか・・・。それにファイロリアルは荷車を引かないと落ち着かないのかも言ってたなそういえば」

優菜「デメリットより、メリットの方が圧倒的に多いな……いいんじゃないかな？」
尚文「……わかった」

その後荷車ができて、ちよつと乗り心地を確認して、みんな疲れたので寝た

第六十七話 (TOLOVEるの軌跡『プロローグ』より)

「私が主人公」

まず、よくある話だが俺は死んだ

電車に轢かれたんだ

手で押されたのか、人が多すぎてはみ出たのか。どちらかは分からないが、落ちたと
思った次の瞬間には記憶が飛んでいた

すると、暗い様で少し明るい五億年ボタンのような空間に自分はいた

現状を理解しようとしていると、後ろから「こっちを見なさい」と言われた

振り返ると魔法使いが被るような帽子を被って、杖をついていて、白髭がぼうぼう生
えているおじいさんがいた

おじいさん「やあ、横田大輔くん」

大輔「何で俺の名前を・・・？」

おじいさん「誰かは知っているさ。君のお父さんの事も、お母さんの事も」

大輔「あんた何もんだ？神様か」

おじいさん「そうじゃな。まあ、知ってるかどうかは別じやが、わしはある神話の主

神として伝えられておる」

大輔「・・・ゼウスとか？」

おじいさん「そうじゃ、それ系じゃ。でもまあ、神話は神が皆で書いた物語じゃからな」

大輔「え、そうなの？」

おじいさん「だから死んでいった者たちは生きておるし、半身半神とかは本当におるしの」

大輔「へー・・・」

おじいさん「で、本題じゃ。お主、まだ生きたくはないかの？」

大輔「・・・は？」

おじいさん「高校生で死んで、悔いがないというにはあまりにも質素な人生じゃ。そこで、改めてここから第二の人生というのを歩んでみんか？」

大輔「・・・何で俺なんだ？」

おじいさん「そこはたまたまじゃ」

大輔「じゃあ、何で転生させてくれるんだ？それであんたにメリットがあるのか？」

おじいさん「・・・実はの、知り合いの神が暇つぶしにある人間させて遊んでおるんじゃない」

大輔「・・・その人は、相当運が悪いね。でも俺には関係ない」

おじいさん「でじゃ。お主を転生させて、人間がどう行動するのかを見てみたい」

大輔「・・・嫌です、元の世界に帰してください」

おじいさん「・・・それだと、お主は大輔には戻れんぞ。全く別の大輔の記憶を持った誰かになるだけじゃ」

大輔「それは転生と何が違うんですか？横田大輔に戻してくれって言ってるんですよ」

おじいさん「それは無理じゃ。お主の身体はもう火葬され、蘇ってもスケルトンじゃ」
大輔「チツ」

おじいさん「で、どうするのじゃ？元の世界で別人になっても、お母さんたちに会えるとは限らん。ワシは最初から始めた方が良くないかと思つての」

大輔「・・・」
おじいさん「・・・ワシの知識欲からの頼みじゃ、行く世界ぐらいは決めて良いぞ。進

撃の巨人やアカメが斬る！みたいにすぐ死んでは無駄じゃからな」

大輔「・・・日常系でいいよ。日常的に戦うなんて絶対に嫌だね」

おじいさん「じゃあTOLOVEるじゃな」

大輔「どうしてそうなるッ!？」

おじいさん「あの発想は面白かった。で、お主にも体験してもらおう」

大輔「嫌だ!!」

おじいさん「これはお主が始めた物語じやろ」

大輔「俺じゃない!!」

おじいさん「特典も一つつけておく。使い方を間違えるなよ」

そして俺は転生した。・・・したのだが、なんだろう嫌な予感がする。というか、あんな強引に転生させられた時点で良い予感がある訳がない

お母さん? 「この子たちが私の子供なのね」

この子達? ってことは双子なのか

お父さん? 「男と女が一人ずつか!」

もう一人は女の子かな、俺男(のはず)だし

お父さん「名前はどうすんだ?」

お母さん「男の子のほうは決めてるわ」リト" ってどうかしら」

大輔『リト!? 俺リト!? 嘘っ!? あのラッキースケベで致命傷になる攻撃をすべて避ける

リト』

お母さん「女の子はあなたが決めていいわよ」

お父さん「メイ・・・メイってどうだ?」

大輔『女の子はメイか、そうか一緒に暮らすんだ覚ええないとな』

すると、お母さんが顔を近づけてきた

お母さん「よろしくねメイ」

お母さんはどうみても自分に言っていた。自分に、メイと

大輔『えっどうということ？俺女!?!』

うん、男にしてくれとは言っていないよ

でもさ男にするのが普通じゃね？常識じゃね？いや、神様に常識がどうこうつてのは

無駄か？

・・・言っても仕方がなかったので俺は気の向くままに日々を過ごした

元高校生だから小・中学校は勉強しなくていいからすごい楽

当然リトと同じ学校に行ってる

特典っていうのはまさかのスタンドだった。しかもザ・ワールド。なんの脈柄もないのにスタンドで。まあ、一応時間は止めれたほんの一瞬だけだけど

そうして時は過ぎていった

あつもちろん美柑は生まれたぞ

そして高校生になった

第六十八話（T O L O V Eるの軌跡『第一話』より）

「入学式」

ジリリリリリリリリリリと時計がなっている

メイ「もう朝か、ねむい・・・」

そう言つて私は着がえて、階段を降りた

美柑「おはようメイ」

メイ「リトは？」

美柑「まだ寝てる」

メイ「起こし行こうか？」

美柑「いいよ、もう起きて来るし」

するとリトが降りてきた

リト「おはようメイ」

メイ「おはようリト」

美柑「もうご飯できてるから座つて」

全員「いただきます」

リト「今日から高校か〜」

メイ「楽しみだね〜（棒）」

美柑「何で棒読み・・・？」

リト「知り合いが同じクラスだったら楽なんだけどなあ。猿山とかいつつもバカやるから一緒にいて飽きねえんだよな」

メイ「そういう言い方はひどいんじゃないかな？」

そうやって私は笑い交じりに言う

リト「それもそうか」

美柑「楽しそうに話すのもいいけど、遅刻だけはしないでよ。入学式から遅刻とか、白い目で見られるわよ」

リト「それもそうだな、悪いメイ先行つとく」

メイ「いや、一緒に行くよ」

素晴らしい私はすごい勢いで朝飯を食べた

メイ「よしっ」

美柑「相変わらず速いね」

リト「それじゃ行つてきまーす」

美柑「行つてらっしゃい」

そう言つて俺たちは彩南高校に歩いていった

彩南高校に着き、俺たちはクラスを確認しに行った

ん？リトがよくわからない微妙な顔をしてるぞ？・・・そうか

メイ「西連寺がいたのはうれしいけど、どうしてメイがいる？つてとこかな？」

メイがいることで驚くのは、普通双子は同じクラスになることなんてないから、だろ

うね

リト「えっ!?何で!？」

メイ「ずっと一緒にいるんだから、わかるよ」

リト「・・・じゃあ何でメイがいるんだ？」

メイ「それは休みのうちに学校に侵入して、この高校の校長先生に頼みに行つてたの」

リト「侵入つてどうやって・・・まさかアレ使つたのか？」

メイ「そ」

ザ・ワールドね。家族は全員知ってる。何故なら、時止めの練習してるところを見られ、相手を殴る練習で木を殴つて折つたとこ見られたから。ちなみに侵入方法は扉をザ・ワールドでこじ開けた

リト「でもよく許してもらつたな」

メイ「ここの校長ヤバイよ」

リト「何で？」

メイ「だってき、頼んですぐ『可愛いからOK〜〜〜』だって」

リト「アハハハハ・・・（失笑）」

メイ「それよりさ、早く教室行こう？」

リト「わかったよ」

そして教室について

ザワザワ・・・

メイ「みんなどこから来たとか聞いているね」

俺たちは黒板に貼られている席表を見た

リト「俺は周りのやつと自己紹介でもしとくから、メイもそうしたら？」

メイ「そうだね」

??「おっ、リトー！メイちゃん！」

リト「ん？」

??「卒業以来だな」

メイ「猿山くん！」

猿山「ところでリト、西連寺に告白はしたのか？」

リト「おい！メイの前で言うな！」

メイ「あれ？気づかれてるの知らなかったの？」

リト「え？」

メイ「いや〜わかるよ流石に」

リト「ま、まじか・・・」

??「あれ？みんな？」

メイ「ん？」

??「そうだよね？」

メイ「春菜〜！」

西連寺「久しぶりだね。三人とも」

リト「あ、ああ」

猿山「告白しちゃえよ（小声）」

リト「お前馬鹿か？（小声）」

西連寺「どうしたの？」

リト「い、いや何でもない」

西連寺「？」

すると扉がガラガラと開き、先生が入ってきた。そして皆も席につき、先生が教壇に

立った

骨川先生「私がこのクラスを担任する骨川です。この後の入学式が終わった後に今後の事に関して説明があります」

そして入学式終了

骨川先生「えー明日は教科書を渡したり、学校を案内したりします。それでは皆さん明日も元気に来ますように。さようなら」

皆「さようなら」

下校中

メイ「色々楽しみだね」

リト「ああ」

メイ「“本当に”色々楽しみだね」

リト「?」どういう意味だ?」

メイ「何でもないよ」

リト「絶対何か企んでるよな?」

メイ「いいや、何も?」

リト「まあいい、早く帰ろう」

家に帰った

リト「ただいま」

美柑 「あ、おかえり〜」

リト 「美柑？帰ってたのか」

美柑 「いや、この前私も始業式だからって言ったよね？」

リト 「そ そうだったかな？」

美柑 「リトがそこまで馬鹿だったなんて」

メイ 「それはひどいんじゃない？美柑」

そんなこんなで↑雑

俺たちはララが来る日まで過ごした

第六十九話（T O L O V Eるの軌跡『第二話』より）

「同じ転生者」

朝起きると、さも当然かの様に路地裏にいた

優菜「・・・またかよッ!!」

神様「またじゃ。今回はT O L O V Eるといふ世界なんじゃが・・・お前と同じ境遇のやつがおるから、仲良くなれるんじゃないかとな」

優菜「・・・何のために？」

神様「会わせただけじゃ」

優菜「・・・まあいいか。どんな人？」

神様「ちよつと待っておれ。盗み見た時に書き写した資料が・・・あつたあつた！結城メイじやな、リトの双子らしいの」

優菜「・・・その人って、アンタが転生させたの？」

神様「いや、知り合いの神じゃ。ワシの真似をしておるらしい」

優菜「ふーん。運が悪いね、その人も」

神様「とりあえず、彩南高校の制服は置いて行く。転校届は済ませたから後は頑張れ」

優菜「は？」

神様は消えた

優斗『災難だな』

優菜「久しぶりに出たと思ったらなんだテメエ」

優斗『行くんだろ？』

優菜「行かないと来た意味ないだろ。で、学校どこだ？」

優斗『・・・ググれ』

学校を調べ、現地に着いたが、まず状況を確認したいため木の上に隠れた

優菜「ここか・・・あれ？リトが登校中か？」

狐色のツンツンヘアーのリトを目視した

優斗『そうらしいな』

優菜「誰か見慣れない奴が一緒にいるな・・・」

その時、メイに寒気が起こった

メイ『あれ？なんかすごい見られてる気がする・・・』

メイが目線のする方を見ると、木に登ってこちらをじっと見る変な女子（優菜）がい

た

メイ『なんかすごい見てる!?!』

リト「?どうかしたのか?」

メイ「いやなんか・・・すごい見られてる」

優菜『アイツがこの世界の転生者・・・』

リト「確かにすごい見てるな・・・ああいうのには関わらないでおこう」

メイ「だね」

優菜『転生者って事は、何かしらの能力を持ってたりするのか?』

メイたちは昇降口に入って行つた

優菜『今の所、変な能力はみられないか・・・』

次は校長室に行き、挨拶をしてから、自分のクラスに行く。という感じなんだが、真

面目に校長室の場所が分からない

ということ、リト達に聞いてみよう

優菜は、木から飛び降り、着地と同時にダツシユでリトに近付いた。それに気づいた

メイがザ・ワールドを出し、殴りかかってきた

ペルソナとスタンドの性質が似ているからか、ザ・ワールドは優菜の目にも見えた。

優菜は反射的にザ・ワールドを避けて、イフリートでメイに殴りかかろうとする

が、二秒ほど動けなくなりその間にザ・ワールドに回りこまれ防がれた

優菜『今の、ザ・ワールド!?神様に貰った力か。時止めもしっかり使いやがる』

メイ『何この人。いきなり超人的なスピードで走ってきたから、反射的にザ・ワールドで殴ろうとしちゃったけど。スタンドを出して対抗した!』

リト「お、おい。お前ら何してんだ?」

優菜はスイツチが入って、獲物を狩る目をしてメイを見ていた

メイ「・・・この人がいきなり走ってきたから驚いただけ」

優菜「こっちは、いきなり前に手が出てきて驚いただけ」

リト「えつと、つまりあんたが走ってきた所にメイの手が飛び出てきたと」

優菜「そう」

メイ「・・・すみませんでした」

優菜「いや、大丈夫ですから。でもちよつと聞きたいことがあって」

リト「聞きたい事?」

優菜「今日転校してきたんですけど・・・校長室はどこですか?」

リト「ああ、校長室なら・・・」

メイ『誰?原作ではモブだった人?ちよつとわかんないな。でも、明らかにスタンドを出してきた。敵なの・・・?』

優菜「ありがとうございます。それじゃあ」

リト「・・・校長には気をつけて」

優菜「？はい、分かりました」

優菜は校長室に行ってしまった

メイ「・・・何て名前だったんだろう」

リト「そういうえば聞いてなかったな。・・・でも同じ高校ならそのうち会うんじゃないか？」

メイ「・・・そうだね（ちよつとマークしといたほうが良いかな）」

そう言つて二人は教室に向かった

その頃、優菜は駆け足で校長室に向かつていた

優菜『・・・敵に回したら面倒だな』

優斗『それより俺はお前が“私”って言った事に驚いたぞ』

優菜『だつてそう言わないとおかしいだろ』

優斗『世の中にはボクっ娘というモノがあつてだな。それ関連でオレっ娘もあるんだ。だからあり得なくはないぞ』

優菜『何で俺より詳しいんだよ』

優斗『まあでも、ホントに俺って言つたら普通にちよつと引かれるぞ』

優菜『結局ダメじゃねえか!!』

喧嘩してると校長室に着いた

中にはスーツで低身長、小太りでサングラスの先生がいた

校長「おや、何の用ですか？」

優菜「(うわ、本物のエロ校長だ) 今日転校してきた優菜です」

校長「おー！君が優菜君か。うん、うん、可愛いねー！」

校長は優菜を舐めますように見た

優菜「(もはや清々しいな) それじゃあもう行きますね」

校長「あ、担任の先生は骨川先生ですからね。それと、何かあったらいつでも来てくださ」

優菜「挨拶だけなんで、もう来ることはないです」

校長「そんな事言わずにく……」

校長が太ももを触った瞬間、校長を蹴り飛ばした

校長「こういうのも……また……」

優菜『さすがにキモい』

そうして校長室を出て行つた

優菜「とりあえず、職員室でいいのかな？」

優斗『直接教室には行かんぞ』

職員室に行き、骨川先生に教室まで連れて行ってもらった

骨川「彼女が新しいクラスの仲間の中村優菜さんでしゅ、仲良くするように」

優菜「よろしくお願いします」

メイ『うちのクラスに来たーア!? え、原作でいなかったよねあんな人・・・後で色々話聞かないと・・・』

優菜『すっげえ見られてる』

休み時間

優菜は男子にもみくちやにされていた

男子1「どっから転校してきたんですか!？」

男子2「好きな物は何ですか!？」

猿山「どういう人がタイプですか!？」

優菜『これが転校生の洗礼! 初めてまともに受けた・・・』

メイ「ねえ、ちよつといい?」

優菜「え、いいけど」

猿山『メイのヤツ連れて行きやがった』

二人は屋上へ

メイ「さて、ハッキリ言うけど、貴方誰よ」

優菜「・・・誰ってどう答えれば? もう一回自己紹介しようか?」

メイ「ふぎないで」

優菜「私は、別にあんたがただの一般人なら、気に留めはしなよい。でもザ・ワールド^①を使ったからにはこっちだって聞きたいことがある」

メイ「・・・ザ・ワールドを知ってるって事は、私と同じ世界からの転生者ってわけ？」

優菜「・・・そういう事になるかな。あと、何で朝殴ってきたの？めっちゃ驚いたんだけど」

メイ「木の上から盗撮してる奴が、いきなり下りてきて自分に向かって走ってきたのよ？殴るわよ」

優菜「あー・・・それはすまんかった。隠れる場所がなかったし、T O L O V E するだから」

メイ「いや、分からない事もないけどさ。先輩の凜さんもやってたし・・・」

優菜「ま、とりあえず敵対する意思はないから安心してよ」

メイ「それならいいわ。じゃあ、これからもよろしく・・・で良いのかしら」

優菜「いいんじゃない？あ、それと一つ頼みごとが・・・」

メイ「なに？」

優菜「家の一部屋を・・・貸してくれませんか？」

メイ「あ」

優菜「この世界に飛ばされたら、制服しかなかったの……」

メイ「えー……私の一存じゃ決められないから……とりあえず今日は野宿して」

優菜「そんな……」

メイ「じゃあ、先に戻ってるから」

メイが先に教室に戻り、優菜はどこで宿をとるか考えながらトボトボと戻って行った

第七十話 (T O L O V E するの軌跡 『第三話』より)

「裸のお姫様」

ジリリリリといつもみたいに時計が鳴った

メイ「朝……」

ベッドから体を起こし、着替えて一回に降りていく

朝ご飯を食べて、学校に行き、授業を受け、休み時間

リト「はあくくく……いつみてもかわいいな、春菜ちゃん。あの優しい眼差し……」

サラサラの黒髪……おしとやかな仕草……サイコーだぜ……」

リトは廊下の角から、友達と話す西連寺春奈をのぞき見していた

猿山「よお リト！ 今日昼間からストーカーかア!？」

リト「誰がストーカーだクルア……!!」

猿山「お、違うっての？ いつも通り憧れの春菜ちゃんを見てたんだろ」

リト「う……うっせーな。今日はただ見てたわけじゃねーよ。タイミングを窺ってたんだ」

猿山「タイミング？」

リト「ああ 決心したんだ。オレ、今日春奈ちゃんに告白する!!」

メイ「あれ? まだしてなかったの?」

リト「え!? メイ!? 聞いてたの!?!」

メイ「まるまる全部ね。期待はしてないけど、まあ頑張れ」

リト「なんかひどくねえか?」

メイ「それはアンタがさっさと告白しなくて、呆れてるからよ」

そして放課後

春菜がリトの前まで本を読みながら来た

リトは告白するかと思った瞬間、ものすごいスピードで茂みに隠れやがった

そんな脚力があるなら、もっと他の事に使ってほしいものである

リトはしばらく感情がオーバーヒートを起こし、隠れ続けた

その頃、メイは優菜の帰路を共にしていた

優菜「それで、家に泊めてもらう件はどうだった?」

メイ「こっちは今それどころじゃなさそうなのよ」

優菜「どういうこと?」

メイ「あの人が今日来るの」

優菜「あの人・・・?・・・まさか」

メイ「そう。裸のお姫様が今日来るのよ。だから、今日まで野宿でお願い」
優菜「ええ……」

そして、別れて帰りメイは家に着き、自室に戻り、荷物を置いた

メイ『さて、外で待ち伏せしとこつかな。リトが逃げるまで』

メイは、窓から下に降り、待ち伏せを始めた

その頃、優菜は私服に着替え、夜の街をぶらぶら歩いていた

優菜『アイツから聞いた話によると、今日ララが来るんだよな？神様にもらった、この偽免許証があれば補導なんて怖くない。ていうかまだそういう時間じゃねーな』

そろそろ行こうか

我らが迷シーンに

その頃、結城家ではリトの叫び声が轟いていた

メイ「そろそろつぼいね」

メイが、敷地の外に出て上を見上げた

そして、リトの部屋の窓が開き、大きい帽子を被った奇抜な服装の女の子を連れて家の上を駆けていく

その後を追って、

メイ「あ！出てきた！」

メイは、二人を追いかける黒服を追いかけた

数分後、優菜は、最終地点に到達した

優菜『ついた。もう、来ててもおかしくないと思うが・・・』

すると、公園の中央から何かを吸い取る音が聞こえた

優菜「こつちか・・・？」

音の近くまで行くと、足が少し浮きだした

優菜「なんだ？・・・体が・・・引つ張られる!？」

足でふんばろうとするも、既に体は浮き、吸い込まれかけたので、木に指がめり込むほどの力で掴まった

しかし、木が地面から抜けた

リト「早く止めろー!!」

ララ「・・・これどうやって止めるんだっけ？」

優菜は木を地面に突き立て、ガイアに大きなくぎを作らせ、イフリートに殴ってもらい、木を地面に固定する

そして自分を吸い込んでいるのは何かと、中央を見ると、タコのような機械があつた

優菜「何だよこれー!」

その声に気付き、リトが優菜を見つけた

リトは街頭に掴まって事なきを得ていた

リト「あんたは確か・・・転校生の優菜だったか!? すまん、巻き込んだらしい!」

優菜「そんなん言ってる暇あったらどうかしろよバカやろー!!」

ララ「でもなー・・・今、修理するにしても材料が・・・」

優菜「止められないなら、壊しても文句言うなよ! イフリート! ぶっ壊せ!」

その頃、メイは吸い込まれる範囲外からリト達を見ていた

メイ「どういう状況? 何でアイツいんの? しかも、今イフリートとか言ってたよね?

もしかしてスタンド?」

メイは色々疑問を出しながらも、目的を明確にした

メイ「ザ・ワールド」

今はただ、あのメカを壊さなければならぬと

優菜『ザ・ワールド! あいつもここに?』

優菜は驚きつつも、やろうとしてることを察し、協力する

そう、今はただ

優菜「ぶっ壊すだけだ」

メイ「ぶっ壊すだけだ」

イフリート「オラオラオラオラオラオラオラア」

メイ「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア」

二人で、メカにラツシユをかけ、ぶつとぼした

そして、メカは光を放ちながら、爆発した

それを背景に二人は

優菜「やれやれだ」

メイ「やれやれだわ」

やはりカツコつけていた

リト「ぶつ壊して良かったのか？」

ララ「いいよ、作ろうと思えば作れるし」

メイ「その時は緊急停止ボタン付けてね!？」

そして翌日

メイとリトは登校中である

メイ「昨日は大変だったね・・・」

リト「いや・・・あれを部屋で使われなかったただけよかったと思う」

春菜「・・・おはよ結城くん」

後ろから春菜が話しかけてきた

メイ『これはッ！離れたほうが吉だね』

メイは、全速力で次の角を曲がり、遠目から見ることにした

リト「オ、オハヨー（頼む、メイ。会話を取り持つて……て、いねええ!!どこ行つた!? 空気読んだのつてのか!? 今じゃなくていいよ!!）」小声

春菜「私、昨日……」

リト「あ……あの!!」

春菜「えっ」

リト「オ……オレ、オレ……オレ」

メイ『あつ、ララが上から下りてきた』

ララはリトと春菜の間へ

リト「初めて見た時から君のことが……!!好きでした!!!だからその……付きあつてください!!」

メイ『あちや……』

リトが目を開けると、入り込んできたのは春菜の顔ではなく、嬉しそうなララの顔だった

ララ「そつちも、そーゆーつもりだったんだ。ちょうどよかった♡じゃ結婚しよ♡リトっ!!」

リト「はあ!?!な……何でお前が……って結婚!?!」

時間は過ぎ、教室・昼休み

優菜は体育から一番乗りで戻ってきた

教室の全貌を見ると、リトが机に突っ伏していたので話しかけてみた

優菜「・・・何で死んでるの？」

リト「別に・・・」

優菜「・・・だれかに告白してフラれた？」

リト「バカ！そんな訳」

優菜「わかった、春菜でしょ？」

リト「・・・まさか見てたのか？」

優菜「いや、メイに聞いたの」

リト「・・・はあ、そうだよ。俺は言っただよ、言っただよ。でも目を開いたらラ

ラがいてな、勘違いされちまったよ。西連寺に」

優菜「まだ終わってないでしょ？」

リト「説得力無いんだが・・・」

優菜「・・・じゃあ、とりあえず、お昼ごはんでも食べる？」

リト「それもそうだな・・・」

そういい、リトが鞆の中の弁当を探すが、見当たらない

リト「あれ弁当がねエ」

優菜「お弁当がないの？」

リト「・・・らしい」

優菜「住所は？」

リト「え？」

優菜「いいから」

リト「○○―△△△」

優菜「地図で言うところ・・・ここね、よしカオスいつもの」

もうドアでもわかるっしょ？アレ

リト「？これどうなってるの？」

優菜「中見えてみて」

リトが頭を入れる

リト「これ俺の家の中か!？」

優菜「お弁当はある？」

リト「弁当・・・ないな」

優菜「・・・道に落としたの？」

リト「・・・あつ！あの時だ・・・ララを振りほどこうと逃げたときに・・・」

すると、教室に誰か走ってきた

猿山だ

猿山「リトツ!!ど・どーゆー事だよおい!!スッゲーかわいいー女の子がおめーの事探してんぞ!!」

優菜「まさか・・・」

その頃、メイは体操服から着替え終わり、教室に戻ろうと廊下を歩いていた

メイ「なんか騒がしいわね・・・」

騒ぎの渦中を見ると、ララがいた

メイ『ええーッ!?!』

すると、二階からリトが降りてきた

リト「ララ!!お前なんでこんなところに!!もう悪戯はやめて帰れって言っただろ!!!」

優菜「ホントにいるなんて・・・」

メイ「どういうことよ!」

ララ「はいコレ!もってきてあげたよー♪」

ララが包みをリトに渡した

優菜「これってさつき落としたって言ってた・・・」

リト「俺の弁当か・・・」

猿山「お……おい誰だよあの子！どーゆー関係だ!？」

リト「え……その……」

リトが弁解しようとする、ララがリトの腕を掴みこう言った

ララ「私？私はリトのお嫁さんでーす♡」

メイ『ここで言う!?!』

猿山「な、何だとツ!？」

男子生徒「そいつを捕まえろーっ!!絶対に逃がすなー!!」

優菜「メイ、どうすればいいかわかる？」

メイ「もちろん」

優菜&メイ「逃げるんだよー!!」

リト「バカヤローツ!!」

ララ「何であの人たち怒ってるの？」

メイ「アンタのせいだーっ!!」

猿山「優菜ちゃんがいながら!!そんなかわいい子まで!!許さねえ!!」

優菜「ごめんなさい、リト。変な誤解されちゃった」

リト「いや、あれはただの猿山の誤解だから……」

優菜「……私が止めるから三人は逃げて」

優菜が立ち止まる

猿山「な、なんだ？」

猿山も立ち戻る

メイ「優菜!!」

優菜「ここは任せて。早く逃げて」

リト「あ、ああ」

優菜は振り返り、猿山の前に立ちはだかる

そして、かかって来いと煽る様に手を広げた

優菜「ほら、おいで」

男子生徒1「どけーっ!!」

この男子生徒を頭の上から肘打ち

男子生徒1「ガッ・・・」

一撃で気絶させ、廊下の隅に寝かせる

優菜「次は誰？」

男子生徒2「クソツ皆一緒に行くぞ！抑えるだけでいい！」

皆「オオーツ!!」

三人ほどが一度にかかってきた

優菜は屈み、足を延ばす

優菜「波紋足払い」

優菜が半回転し、何人かこける

男子生徒3「まだおわってn」

一人が立とうとすると、足が上手く動かなく、こけた

男子生徒3「おわっ！」

男子生徒2「どうした!?!」

男子生徒3「あ、足がしびれて立てねえ!!」

男子生徒4「俺もだ！」

男子生徒5「何されたんだ!?!」

男子生徒2「何が起こってるんだ!?!」

しかし、三人を相手してるうちに、奥に行かれる

優菜「メイ!何人か行かれた！」

メイ「五人ね・・・」

メイはザ・ワールドを出し、四人を殴る。だが、一人が仲間を盾にして抜けた

メイ「一人行かれた!?!」

猿山「逃がすかあーっ!!」

メイ『お前かい!!』

優菜「私は無理!!行けない!!」

メイ「私もちよつと厳しそう・・・」

リト「どうにかできねえのかよ!!・・・そーだ、お前何とかワープってあつたらー!」

ララ「ああピヨンピヨンワープくん?」

リト「そうそうソレ!それ使おう!!」

ララ「別にいいけどく私リトと結婚するから、今日からリトの家に住んでもいいだよ
ね?」

リト「なにいつてんだ!ダメだ、んな事!!」

ララ「えくじやあ使わなーい」

リト「わ、わかった!!わかったからとりあえず何とかしてくれ!!!」

ララ「約束だよ♡」

ララが、ピヨンピヨンワープくんを使うと、リト達は光を纏って消えた

いや、服を残して消えた

猿山「き・・・消えた・・・?」

優菜「終わったく・・・」

メイ「やつとね・・・」

メイがリトの服を取る

ララは、メカのペケが服なので、ここには残らない
すると、更衣室の方から叫び声が聞こえた

春菜「よらないでっ!!!」

猿山「なんだ!？」

優菜「行ってくる」

優菜は、廊下が壊れない程度の力で走った

猿山「まっ・・・速っ!!」

そして、女子更衣室に到着した

優菜「なにがあっ・・・」

優菜の目に入ったのは、すっぽんぽんの二人と下着姿の春菜であった

しかも、リトは泡を吹いて失神していた

優菜「・・・どういう状況？」

春菜「え!?その・・・これは!」

優菜「いや、何も言わなくていいよ・・・大体わかったから。とりあえずこれは保健
室だね」

イフリートを出して持ってもらった

春菜「え!?!浮いた!?!」

ララ「えく?どうやったの?」

優菜「とりあえず、ララは服着よう。ペケ?いるんでしょ?」

ペケ「はいはい」

優菜「じゃ」

リトを保健室へ

御門「えつと・・・とりあえず大丈夫と思うわよ」

優菜「そうですか」

御門「それよりも気になるのは・・・何で入ったとき浮いてたの?」

優菜「この人ですよ」

御門先生にイフリートが見えるようにした

イフリート「はいどもー、帰っていい?」

御門「へえ、いきなり出てきたわね」

優菜「?驚かないんですね」

御門「これでも驚いてるわよ。そろそろ戻ったほうが良いんじゃない?もうチャイム

なるわよ」

優菜「ゲツ一分もない、それじゃあ」

優菜は先程と同じスピードで戻って行った

御門「面白い子が入ってきたわね・・・」

その夜、結城家

リト「ハアアアアア・・・」

優菜「大変だったね・・・」

リト「何でこんなことに・・・」

優菜「もう、諦められたほうが良いよ」

リト「てか何でお前いんだよ!」

優菜「えーだって、私住むとこないし。メイには話したよ?」

メイ「いや、良いとは言ってないよ」

優菜「え!?!」

メイ「・・・まあ、良いんじゃない? 優菜、泊るとこないらしいし」

リト「いや、そう簡単に決めていい事じゃないだろ!?!」

優菜「・・・ホントに無理なら、出て行くよ。大丈夫、二年間野宿するだけだから」

リト「その言い方は卑怯じゃないか?」

美柑「もう、良いんじゃない? ララさんも住む事になったんだし、二人になってもあ

んまり変わらないでしょ」

「優菜「部屋なら自分で作るから問題ないよ。アレだったら、家賃も渡すし」

リト「いや、家賃はいらないよ。・・・仕方ないなあ、分かった。住んでいいよ」

優菜「ありがと！」

ということに住めることになった

その後、リトがララを連れて、外に出て行った

戻ってきたら怪我してたので治した

そしてララと一緒に寝た

第七十一話（T O L O V Eるの軌跡『第四話』より）

「何の気ない日常」

朝起き、パジャマから着替えて、カオスの空間から出る

すると、リトの部屋から声が聞こえた

リト「おはよーじゃねー!!」

おそらく、ララが裸でいるのであろう

美柑はリトの部屋を確認し、そっ閉じしていた

美柑「お邪魔しました」

優菜「あれ？美柑・・・」

美柑「リトに用があるなら後にしたほうが良いよ、今真つ最中っぽいから」

優菜「え？そうなの？」

すると、リトが部屋から飛び出してきた

リト「そんなわけあるかー!!」

ララ「あっおはよー優菜」

リト「お前は服を着ろー!!」

朝から本当に、にぎやかな家だな

ララ「あつ、そういうえば今日出かけなきやいけないだった」

ペケで着替え、リトの部屋の窓を開け、ララはどこかに出かけて行った

優菜「・・・とりあえず、ご飯食べよっか」

リビングへ

メイは既に起きており、席に着席していた

メイ「騒いでたけどなんかあつた？」

優菜「ララが、裸でリトの部屋にいた」

メイ「ありやー、それは災難だったね」

リト「あれは、俺にはきつすぎる・・・」

優菜「あれ？　そういうえば、今日リト日直じゃなかった？」

リト「あ！　そうだ忘れてた」

リトは朝飯をすごい勢いで食べて、行ってしまった

優菜「めっちゃ早かった・・・」

メイ「じゃあ私も・・・」

メイがご飯を食べようとすると、一瞬でなくなつた

優菜「あつ！　時間止めたな!？」

メイ「なんのことかな？時間ないから急いでねー」

優菜「え！」

現在7時47分

メイ「じゃあ先行ってるから」

優菜はクロノスに頼み、周りの時間の流れを遅くし、自分の時間を早めた

優菜「うおおおおお」

そして全力で食べ、完食

美柑「え！もう食べたの!？」

優菜「ごちそうさま、それじゃ」

優菜は、カバンをもって、外に出て、イフリートをだして飛んでった

え？ドア使わないのかって？よく考えろよ？

自分の前にいきなり、空間が歪んでできた穴ができたらどうよ

しかもそこから人が出て来るんだぜ？

どう考えても不自然だろ？

え？飛んでるのも不自然だって？

これから何人飛ぶ奴が出てくると思ってる

メイ「あ！何で飛んでんの!？」

優菜「お先にいってきまゝす」

優菜は学校に着いた

優菜「よいしょっと」

イフリートから降り、

視線がいたい。やっぱり普通に走った方が良かったか？

昇降口の方を見ると、リトがいた

今着いたのかな？

優菜「よ！」

リトに向かって、後ろから声をかけた

リト「え？もう来たのか？」

優菜「そっちは今着いたの？」

リト「ああ、じゃあ一緒に行くか」

教室に行く

優菜「昨日誤解されたの、言わなくていいの？」

リト「言わなきゃな・・・」

優菜「・・・そういえば、今日の日直って、リトと誰だっk」

日直

西一結

連一城

寺一

優菜「リトくんリトくん・・・日直見てみ」

リト「え？」

リトが日直の名前が書かれた場所を見ると

リト「!!」

すぐさま顔が真っ赤になった

優菜がリトの肩に手を置く

優菜「・・・がんばれよ」

リト「そういうのが一番きついかからやめてくれ！」

結局放課後

メイと優菜は教室で待機

メイ「どうするかは・・・」

優菜「わかってるね？」

メイ「音立てないですよ」

現在ドア越しに聞き耳を立てています

春菜「結城君つてき・・・中学のころもよく教室のお花の手入れしてたよね」

リト「え？」

春奈とリトが話しながらやって来た

優菜「来た！」 小声

メイ「黙れ！」 小声

春菜「結構忘れちゃうんだよね・・・お水換えるの、でも結城君はいつもこまめに手
入れしてた・・・」

リト「あ・・・ああ・・・そんなの別にうちにも花とか結構植物があるんだけどさ・・・
オヤジは仕事が忙しくてほとんど家にいないし、妹は家事が忙しくて・・・」

優菜「・・・あれ？メイは？メイは何を？」 小声

メイ「それ以上聞いたら殺すよ？」 小声

優菜「あ・・・サボってたんだな」

リト「自然にそーゆー世話は俺がやるになってるから、習慣ついちゃまったつー
か・・・」

春菜「それはね・・・結城君のやさしさだと思うよ・・・」

リト「・・・西連寺・・・それ・・・どーいう・・・」

春菜「何でもない・・・ごみ捨てて来るね」

春奈は教室のゴミ箱に入っている、ごみ袋を捨てようと教室のドアに手をかけた

優菜「ヤバイ来る！」 小声

メイ「ザ・ワールド」

メイが時間を止めた！

優菜がすぐに教室をドアを開ける

一秒経過

メイが横の教室のドアを開け、優菜は教室のドアを閉める

二秒経過

優菜も横の教室に入り、メイが閉める

三秒経過

そして時は動き出す

動き出した瞬間、春菜が足を引っかけた

春菜「あっ」

リト「・・・！危ない!!」

リトが春菜を抱きかかえて、こけるのを止めた

優菜&メイ『キタアアアアア!!』

リト「あ……ゴ……ゴメン!!」

春菜「……ありがと」

メイ「よし！仲直りだ！」小声

春菜「結城君……ゴミ捨て手伝ってくれる？」

リト「あ、ああ！」

そして帰って来た

なんかララがスキップしてた気がするけど……

嫌な予感がするが、私には関係ないので、気にしなくていいや

第七十二話（暗殺教室の軌跡 『第二十四話』より）

「意地」

英語の授業中・サマンサとキャリーという二人のキャバ嬢らしき人達の、エロトークの動画を見せられた

イリーナ「わかったでしょ？サマンサとキャリーのエロトークの中に、難しい単語は一個もないわ。日常会話なんてどこの国でもそんなもんよ。周りに一人はいるでしょう？「マジすげえ」とか「マジやべえ」だけで会話を成立させる奴、その「マジで」に当たるのがご存知「real y」木村、言ってみなさい」

木村「・・・リ、リアリー」

イリーナ「はいダメー。LとRがゴチャゴチャよ。LとRは発音の区別つくようになつときなさい、私としては通じはするけど違和感あるわ。言語同士で相性の悪い発音は必ずあるの。韓流スターは「イツマデモ」が「イチユマデモ」になりがちでしょ？日本人のLとRは私にとってそんな感じよ、相性が悪いものは逃げずに克服する!!これから先、発音は常にチェックしてるから。LとRを間違えたら・・・公開ディープリキスの刑よ」

優菜『安定安心のビッチだな』

放課後

杏「あの先生ホントヤバくない？」

竜司「あれって大丈夫なのか？ 中学でやっていい授業内容じゃないだろ」

優菜「国公認だからなあ」

蓮「それよりも・・・班目の個展、本当に行くのか？」

杏「行くつもりだけど・・・」

竜司「だとしたら、俺たちも行くんだよな？」

優菜「暇つぶしと思え、てかお前は勉強頑張り」

竜司「それ言ったら双葉もじゃねえか？」

双葉「私はちゃんと向こうでもしている」

優菜「それに、双葉は頭いいから、理解できれば大体出来るからな」

竜司「じゃあ、マジにヤバいの俺だけ？」

優菜「最悪、また律先生に頼むか」

翌日・体育の時間

なんか・・・いる

イリーナ先生となんか怖い男の人と泥棒の格好した殺せんせーが・・・

蓮「どういう状況？」

優菜「俺が聞きたいな」

倉橋「先生、あれ・・・」

烏間「気にするな、続けてくれ」

その後説明してもらった

怖い人はロヴロというプロの殺し屋、そしてイリーナ先生の師匠だという

なぜこの学校に来たかと言うと、イリーナでは力不足だから国に帰って後は私に任せろという事らしい

もちろんイリーナ先生は拒否った

そこで殺せんせーがどちらが、殺し屋として上か。烏間先生を殺す(ゴムのナイフで)事で決めようとの事

ちなみに、烏間先生が最後までやられなかったら、烏間先生の前で殺せんせーが一秒だけ止まるらしい

烏間先生なら、一秒でも十分殺せるんじゃないか？

優菜「なんか・・・大変ですね色々」

烏間「迷惑な話だが、君等の授業に影響は与えない。普段通り過ごしてくれ。今日の体育はこれまで、解散!!」

そして、皆が校舎に戻っていると、イリーナ先生が水筒を持って烏間先生の所へ

イリーナ「烏間先生く、お疲れさまでしたあく。喉乾いたでしょ？ハイ冷たい飲み物」

優菜『怪しすぎん？』

イリーナ「ホラグツとってグツと!!美味しいわよ」

皆『なんか入ってる、絶対なんか入ってるな』

烏間「おおかた、筋弛緩剤だな。動けなくしてナイフを当てる……言っておくが、そもそも受け取る間合いまで近寄せないぞ」

イリーナ「あ、ちよつ待つてじゃここに置くから……あつ」

イリーナ先生は足を滑らせてこけた……多分わざと

イリーナ「いったーい!!おぶつて烏間おんぶくく!!」

烏間先生は、無視して校舎に戻った

磯貝「……ピツチ先生……」

三村「さすがにそれじゃ俺等だつてだませねーよ」

イリーナ「仕方ないでしょ!!顔見知りには色仕掛けとかどうやったつて不自然になるわ!!キヤバ嬢だつて客が偶然父親だつたらきこちなくなるでしょ!?!」

皆『知らねーよ!!』

その後昼休みにトイレから出てきたら

殺せんせーと怖い人と会った

優菜「あ、殺せんせー・・・何でその人の手、そんな腫れてるんですか!？」

怖い人「いや、気にしないでくれ」

怖い人は腫れを抑えながら、歩いていった

今のがロヴロさんだろう

優菜「・・・何があつたんですか？」

殺せんせー「それがですね・・・」

殺せんせーに話を聞くと、ロヴロさんが先ほど烏間先生に攻撃を仕掛けたしかし、返り討ちにあい、先ほどの怪我を負ったようだ

優菜「そなの。ありがとね殺せんせー」

教室に戻った

業「お、見てみ渚君あそこ」

外を見ると木に寄りかかって、昼飯を食べている烏間先生がいた

茅野「・・・ああ烏間先生いつもあそこでご飯食べてるよね」

業「その烏間先生に近づいていく女が一人・・・殺る気だぜビツチ先生」

イリーナ先生が烏間先生に近づき、烏間先生が飯を置く

イリーナ先生がまた近づき、そしてイリーナ先生が糸を引き

ワイナートラップで烏間先生が体制を崩す

そしてイリーナ先生が上をとった！

前原「うおお烏間先生の上をとった!!」

三村「やるじゃんビッチ先生!!」

突き刺すが・・・寸止めで止められた

しかし少しすると烏間先生が諦め、当たった

杉野「当たった!!」

岡島「すげえ!!ビッチ先生残留決定だ!!」

そうしてイリーナ先生が残留確定

イリーナ先生と烏間先生が何か話していたが、気にするほどの内容でもないだろう

そして、そろそろ帰る頃だろうと教室を出て、ロヴロさんの所に

優菜「あなたがロヴロですか？」

ロヴロ「む・・・君はさっきの生徒か、どうかしたか？」

優菜「その手の怪我、治しましょうか？」

ロヴロ「治す？君が？」

優菜「良ければですけどね」

ロヴロ「・・・どうせならやってもらおうか」

優菜「じゃあ、治しますね。アリエル」

ロヴロさんの傷を治し、腫れが無くなった

ロヴロ「!?痛みが．．．なくなつた．．．?腫れもひいている．．．」

優菜「それじゃ」

優菜は教室に戻つた

ロヴロ『彼女は一体．．．!?』

殺せんせー「彼女はですね、いわゆる超能力のような力を持つているんです」

いつの間にか殺せんせーが来ていた

殺せんせー「でも、それを悪用しようなんて少しも考えない。この教室で一二を争うぐらい優しい子です。正直、彼女なら私をいつでも殺せるでしょう。ですが、彼女は優しすぎる。それゆえに殺さない」

ロヴロ「．．．この教室で最も異質の存在というわけか」

殺せんせー「もし、私を殺せるチャンスで、あの子が私を守つたりなんかしたら．．．どうします?」

ロヴロ「．．．さあな。だが、呼ばれるとしたら．．．死神だろうな」

殺せんせー「．．．でしようねえ」

その後、ロヴロさんは帰り、一日が終わつた

第七十三話（ジョジョ二部の軌跡『第一話』より）

「運系の歯車」

アメリカ・???

ユウナ「とうとう来たか。この世界に」

神様「来たのう」

ユウナ「で、ここはどこだ？アイツは？」

神様「そう焦るでない。ここはもうアメリカじゃ。世界線も同じ、ディオの姉として存在しておく」

ユウナ「で？どうすりやジョセフに会えるんだよ」

ジョセフとは、ジョナサンの孫で、二部の主人公の頭がキレルスカタンである

神様「その路地を出て、大通りにある高級レストランに入れ、金は持たせてる」

ポケットを見ると、確かに金はある

神様「あと、姿はそのままじゃ。これからも、基本同じ姿じゃ」

ユウナ「え、それ実質不老不死宣言じゃないか？」

神様「それは解釈にもよるのう」

ユウナ「?どういうこと?」

神様「とにかく、ジヨセフがいる店に行くんじやの。店は、路地裏から出てすぐ目の前じゃ」

すると神様は消えた

それから移動をし始めた

信号待ちなので話しておく。波紋はあれからも少し練習して、ジヨナサンが10なら8ぐらいに強くなった

ユウナ『あそこか、入ろう』

今の俺の姿は普通の服なのだろうか

麦わら帽子をかぶってるけど・・・周りは長袖ばかりだし、季節は間違いなく間違えてるな

とか考えながら入った

ウエイター「何名様でしょうか」

ユウナ「一人」

ウエイター「ではあちらの席へ」

連れられた席に座る

とりあえず安いのを頼んだ

おじさん「この店はあんなクセー豚野郎を入れてんのかアアア〜!?」

ユウナ『このセリフは・・・ジョセフが喧嘩するところだな。店は間違えてなかったみたいだ、よかった』

黒人の男の子「お・・・俺、先に帰るよ」

男の子が気圧され、帰ると言うと、ジョセフが立った

エリナ「ジョジョ!」

ジョセフ「おばあちゃんまさか・・・止めんじやないでしょうね」

エリナ「いいえ!個人の主義や主張は勝手!許せないのは、私共の友人を公然と侮辱したこと!他のお客に迷惑をかけずにきちつとやっつけなさい!」

ジョナサンと結婚したエリナ・・・

ユウナ『止めたほうが良いかな・・・もめ事は面倒だし・・・』

とか考えてる間に、ジョセフは男を瞬殺したよ

身なりのいい男「すいませんが、少しいいですか?マダム:あなたはエリナ・ジョー
スターさんでしょうか?」

やっといざこざが終わったと思ったら、今度は変な奴がエリナたちに話しかけ始めた
身なりのいい男「私はスピードワゴンさんに大変世話になってやしてね。あんたのこ
とも以前、ロンドンで教えられて知ってるんですよ。会えてよかった。さつき知った裏

の情報で、まだこの国の新新聞屋とかには知られてねえんだが・・・スピードワゴンさんが殺されましたぜ・・・うわさでは殺つたのはチベットから来た男」

するとユウナが突然立ち上がった

ユウナ「スピードワゴンが殺された・・・!?」

身なりのいい男「え？」

他の席の客もユウナを凝視した

ユウナ「あ・・・いや、ナンデモナイデス。すいません・・・」

ユウナは周りに会釈しながら、ジョセフの席へ。着いた頃には、客は食事に戻っていった

ジョセフ「・・・いきなりなんだ？あんたも知り合いなのか？」

スモークー『綺麗な人だ・・・』

ジョセフも立ち上がって、ユウナの真つ向に立った

ユウナ「そういうレベルじゃねえ、一緒に戦つた仲だぜこつちは・・・」

ジョセフ「戦つた？」

ユウナが男に近寄り、それに生じてジョセフもそちらを向いた

ユウナ「それは、確かな筋の話なのか？」

身なりのいい男「だと私は聞いているが・・・」

エリナ「なんですと！本当にスピードワゴンさんが！」

すると、小太りのおっさんがジョセフの後ろを通ろうとしたが、なかなか通れなかつた

モブ「ちよいと邪魔よカラダのでかいおにいさん、そこ通しなよ！」

ジョセフ「やかましい！忙しいんだ向こうまわれ！」

モブはそう言われ、少し怯えながら回って行った

ジョセフ「スピードワゴンのじいさんが死んだだと・・・それもやったのはチベツトから来た修行僧！ストレイツオとかのことか！」

ユウナ「ストレイツオ、アイツか・・・アイツが、殺したのか？」

ジョセフ「あんた知ってるのか？」

ユウナ「ああ、一緒に戦ったんだぜ？ジョナサンやツエペリさんと・・・ツエペリさんの師匠が連れてきた二人のうち、長髪の黒髪がストレイツオだった」

身なりのいい男「メキシコ奥地の河で、流れ着いたスピードワゴンとその一行の二人らしい死体をを発見した者の話だ。どこでなぜ殺されたのかも、修行僧がどこへ行ったかも誰も知らない」

エリナ「わ・・・わかるような気がする・・・きつと・・・多分スピードワゴンさんがかつて話してくれた石仮面とディオ・・・それにまつわることのような気がする・・・」

ユウナ「石仮面・・・あれがまだ、続いている・・・？」
ジヨセフ「さつきから、聞いてるとその時そこにいたみたいと話しやがるが・・・あ
んたは一体誰なんだ？」

ユウナ「・・・俺か？」

一旦帽子を取った

ユウナ「ユウナだ、ユウナ・ブランドー」

エリナ「ユウナだって!？」

ユウナ「久しぶりだな、エリナ」

エリナ「50年前に消えてからどこにいったんだい!？」

ユウナ「あの世かな？」

・・・間違つてはないよな？

エリナ「あの世つて・・・まあまた会えただけいいわね」

ジヨセフ「エリナ婆ちゃん知り合いつて・・・あんた今何歳なんだ？見た目は18
ぐらいに見えるが」

ユウナ「合計だと七十はいつてるんじゃないか？」

スモーキー『合計・・・？』

ジヨセフ「なっ!?嘘行つてんじゃないか!？」

ユウナ「嘘じゃないんだけど・・・」

おそらく、合ってるはず・・・自信はない

ユウナ「さて、さっきの話が本当なら、ここにストレイツォが来そうだな」

ジョセフ「それもそうだな、ばあちゃん。歩けるか？」

エリナ「え、ええ大丈夫・・・」

ユウナ「・・・私も、もう少しこの町にいる。また明日五時ごろ、この店に」

次の日、五時のレストラン

スモーキー「今日は冷えるなあ！」

ジョセフ「おい！おいスモーキー、この雑誌のここみろよ！」

スモーキー「なんだよ!？」

ジョセフ「いいから見ろよこいつを」

ジョセフは、雑誌の人を右手で指差し、胸に左手を当てながら言う

ジョセフ「これもしかすつと、ここ盛り上げるやつかよオ、ホヘーツ！」

スモーキー「なにになに？AAカップがCになる・・・ペアで1ドル25セントか。

ヘーツ！だまされるぜ！。気をつけよーぜなあ！」

ユウナ「そこまでしてでかく見せようとする奴の頭がわからんね」

ジョセフ「おや・・・！」

レストランの外にストレイツオがいる

何かを探している様子だ

ユウナ「・・・お先にどうぞ」

ジョジョが外に出て少しすると

ダダダダダダと銃声が聞こえた

ジョジョがストレイツオに向かって撃ってるみたいだが、流れ弾がガラスを突き破って飛んできたりした

女性「きやああああーっ!!」

ユウナ「イフリート、弾を取れるだけとれ」

イフリートに弾を取らせ、後ろに行かないようにした

そして、ジョセフも撃ち終わったようだ

ユウナ「いきなり撃ってくるなよ」

ジョセフ「すまん、すまん」

男性「さ・・・殺人鬼が中に入ってくるぞ!」

ユウナ「お前殺人鬼扱いされてやんの」

スモーキー「ジョ・・・ジョジョ・・・き・・・君、たたたたた・・・大変なことを!

」

ジョセフ「そ……そうだな、ちつと修理代が高くつくなこれは」

スモーキー「違うーツ！き……君は人を！なんてことを！君は人を撃ったツ！」

ユウナ「人だったらいんだがな」

ジョセフ「人だったら、俺たちが刑務所に入るだけでいいからな」

スモーキー「あ、あんたら、気でも狂ってしまったのかアーツ!!」

女性「キヤー！キヤー！」

ユウナ「喚く暇があつたら逃げな！喚いててどうにかなるのか!？」

ユウナが一喝すると、客が全員店の外に走って出て行った

ジョセフ「スモーキーも店の外に出ておけ、ここからは俺たちがやる」

スモーキーも、言われるがまま出て行った

すると、瓦礫が膨れ上がり、中からストレイツオが出てきた

やはりストレイツオは生きていた

ストレイツオがいきなり、筋肉に力を入れだしたかと思うと、撃ち込まれた弾がすべ

て出てきた

ユウナ「本当に残念だ、お前が吸血鬼になるなんて……」

ストレイツオ「お前は……ユウナだったか……なぜ、その姿なのだ？」

ユウナ「何を言ってるんだ？」

ストレイツォ「なぜ貴様は年を取っていない!!」

ユウナ「知るかよ、だがな。少なくともお前は吸血鬼になるべきではなかったな」
ストレイツォ「どういう意味だ?」

ユウナ「本気でキレたぞ、お前は吸血鬼なんか」

ユウナは右足を後ろにさげ、踏み込む

ユウナ「なり下がってしまった」

一瞬でストレイツォの前まで来て、ストレイツォの腕を波紋でぶん殴った

ストレイツォ「何イ!!」

波紋の力で、ストレイツォの腕が溶けていく

ストレイツォ「うおお!!」

ジョセフ「ユウナ!どけ!」

ジョセフが撃とうとするが、カチツカチツとなるだけで弾は出ない

ストレイツォ「ハアハア・・・弾切れのようだな、そして!これが私が最初に使う能力は、デイオがジョナサンを殺った能力!!高圧で体液を目から発射する名付けて空裂眼
刺驚(スピースリバー・ステインギーアイズ)食らえっ!」

ストレイツォの瞳孔が物理的に開き、液体が高圧で噴射され、俺とジョセフの額と喉に穴が開く

ストレイツオ「フン！他愛のないものよ、残るはエリナ・ジョースターただ一人……あの老婆は赤子を殺すより……」

ジョセフ「お前の次のセリフは「赤子を殺すより楽な作業よ」……だ!!」

ストレイツオ「楽な作業よ……ハッ！」

ジョセフはニヤニヤと笑って立っていた

あつ俺も死んでねーぞ

ジョセフ「さらにオメーは「こいつらなぜ穴開けられて生きていられるんだ?」……という」

ストレイツオ「こ……こいつら何故穴開けられて生きていられるんだ?……ハッ！」

ジョセフ「お前はチベットのド田舎何かに引っ込んでねーで都会でもまれたほうがよかつたな……。ほんのちよい注意深けりやあゲームに勝てたのによオ!よく見ろよこの時計の!文字盤をよ!」

時計の文字盤は左右が反転……つまり鏡に映したようなことになっていた

ジョセフ「そして声のする方向にもな!俺は注意深いぜ!マシンガンは左手に持ち替えた!聞いていたぜ!俺のじいさんは目から飛び出す得体の知れねえ能力に死んだんだってな!」

ストレイツオ「鏡かッ！」

ストレイツオがジョセフの方へ振りむく

ジョセフ「気づくのが遅いんだよアホレイツオ！」

ジョセフは、銃の持ち手でストレイツオの頭を殴った

ジョセフ「そして「波紋」つてのは太陽の光と同じでお前苦手なんだってな！食らえ

！」

ジョセフはストレイツオの横腹を殴った

ジョセフ「生まれつき！俺がする呼吸のリズムは奇妙なエネルギーを生むそうだけ

！！

そして壁にストレイツオを叩きつける

ジョセフ「コオオオオオオオーツ！！くらえ！ぶっ壊すほど・・・シュートッ！」

倒れこみかけたストレイツオにアッパーカットをかまし、殴り飛ばした

ジョセフ「どれ？「奇妙な波紋エネルギー」は吸血鬼の顔を溶かすそうだから、本当

にそうなのかたしかめてみつかかな」

完全に倒れたストレイツオに、ジョセフが近づこうとする

しかし、ストレイツオが動き出す

ユウナ「離れろ！ジョジョ！」

ジョセフ「何!？」

ストレイツォはまた能力を使い、目から液体が飛び出た

ジョセフは一つはよけ、もう一つは首をかすった

ユウナ「どうして溶けていないんだ!？」

ストレイツォは着けていたマフラーを手に取り、説明を始めた

ストレイツォ「このマフラーは東南アジアに生息昆虫サティポロジャビートルのほんのちよつびりの腸の筋を3万匹分乾かし編んで作ったもの……この材質は人体よりも波紋の伝達率をはるかに高く散らしてしまう!つまり雷のアースと同じなのだ!」

ジョセフ「ほう……そうかい……そいつはスゲーな……だがよこの俺が「波紋」とかいふチャチな超能力だけに頼っていると思っているのか……?素早いんだぜ俺は!」

ジョセフは、いつの間にか糸を握っていた

それをひくと、何かの取っ手のようなものが出てきた

手榴弾の引き金だ。ジョセフは先程の攻防の内に手榴弾をマフラーにつけていたの

だ

ストレイツォ「ヌツ!ヌウ!手榴弾をマフラーに!いつの間に……」

ストレイツォは手榴弾をマフラーから取り、投げた

ストレイツォ「フン!こんな小細工ウ!」

ジョセフ「フハーツ！だから都会にもまれろって言ったのによ、よく見る今振り払った手榴弾には糸がたくさんついてるだろ・・・！」

ストレイツオの背中にはたくさんの手榴弾！その全ての引き金が今抜かれた！！

ユウナ「よし、逃げよ」

ストレイツオ「ン・・・こいつくくツ　　OOHHHH（ムンンンオオオオオオ）」

ユウナ「うおおお!!」

!!??????

ユウナが外に飛び込むと同時に、店ごとストレイツオが爆発した

ジョセフ「や・・・やったぜツ！」

ジョセフが死んだかを確認するために中を見る

ジョセフ「う・・・な・・・なんだあいつは・・・いったいあいつは何者なんだ!!」

ジョセフの言葉で興味を持ち、スモーキーが中を見ようとすると

ジョセフ「スモーキー見るんじやあねエー！」

スモーキー「もう見ちまったくくく！こ・・・こいつはそんなまさか！信じられない！わーッあああくくく神様！お・・・おいらもう悪いことはしません盗みもひつたくりもしません！あ・・・あの化け物をやつつける方法はあるのかジョジョ！」

ストレイツオは肉片から再生しようとしている

ユウナ『やつぱり波紋じゃないと効かないか。近付いてもいいが・・・お』

すると、進行方向に巨漢が割り込んできた敵かと思ひ、優菜は殺す準備をする

ブルート「よおーしみてなベイビー！このブルートさまがあつた野郎をぶちのめし警察に突き出して新聞でヒーローになつてやるぜ！」

女性「あゝん．．．頼もしいわ！あたしのブルりん！」

ブルート「へへへ、おい！観念しな悪党」

カツコつけたがりのただの馬鹿だった

ユウナ「．．．イフリート」

優菜も拍子抜けしたが、どいてくれないと邪魔なのでイフリートを出した

イフリート「オラオラオラオラオラオラオラア！」

ブルート「グアア!!」

ブルートは軽く、10メートル程吹っ飛んだ

ユウナ「ボラーレ・ヴィーア」

ジョセフ「何してんだ、逃げるぞ！」

ユウナ「分かつてる」

ひとまずストレイツォから逃げる

第七十四話（ジョジョ二部の軌跡『第二話』より）

「後ろだツ！マヌケがア!!」

ストレイツオから逃げた一行は、二kmほど走った橋へ

スモーキー「ハア、ハアア！ハア、わーっ！つられておいら無関係なのにいっしょに逃げて来ちまったーツ!!」

ユウナ「大丈夫だ・・・最悪お前は逃がしてやるよ」

スモーキー「ハアハ、アで・・・でもここまで逃げてくればもう安心だな・・・マルボ口吸う？」

するとどこかから何かを引きずるような音が聞こえてくる

ジョセフ「いや・・・スモーキーあの音を聞きな」

段々と音が大きくなっていく

スモーキー「音だつて・・・？あ・・・河の音か・・・」

音はものすごく近くで聞こえた

ジョセフ「違う、上だーツ!!」

全員が上を見ると、ストレイツオが女を捕え動けなくし、口に指を入れていた

スモーキー「うわーッ!!わーッあ……あいつおとおお追ってくるッ!に……逃げろーッ」

ジョセフ「待て! 一体なんだあの女は? な……なんだ!? あの野郎どういうつもりだ?!」

女性「ああ……うう……助けて」

ジョセフ「なんだその女はッ!?」

ストレイツォ「この女は人質! お前が逃げればこの女は殺す! だがここまで登つてくれば女は逃がす!」

ユウナ「堕ちるところまで、堕ちやがったッ!」

ジョセフ「何考えてんだ、オメーッ! 俺はそんな女は知らねーぜ! 無関係の女なんか人質にとるんじゃないぜ! このタコッ!」

スモーキー「その通りだね、逃げようジョジョ!」

ストレイツォ「私はおまえを「試す!」ジョジョ、お前がどの程度の男かをな。この見知らぬ女を見捨てて逃走すれば、その程度の男と思ひ私も肉体の疲労があるゆえ、もう貴様を追わん。スピードワゴンの復讐に来る男ではない! だが! この女のため上つてくるとあれば! それは貴様の性格を証明するということだ、将来のお前の成長は私にとつて非常な危険となる性格だ! 疲労はあるが、今直ちに全力を尽くし貴様を始末せぬ

ばならん！5秒後にこの女を殺す。逃げるか、上つてくるか決めろ！」

ジョセフ「でくっ！愛を誓った恋人ならともかくよオ！この俺がそんなブスのために戦えるかバーカ!!」

ユウナ「私には無理」

ユウナはクロノスを出し、時を止め、ストレイツオの後ろにクロノスに連れて行つてもらった

そして時は動き出す

ストレイツオ「殺し方はこのままアゴごと口を引き裂く、そのまま一気に引き下ろし喉の肉と胸の肉をえぐり取る！」

ユウナ『まだ気づかないのか』

スモーキーが気付いた

声を出そうとしていたので、「静かに」と合図を出した

それをジョセフも確認し、ストレイツオの注意を引こうと喋りだす

ジョセフ「！（わかった、気づかないふりだな）：：へへへへ、チベットの「波紋法」の後継者ストレイツオともあろうお方が、そんな女の子にむごいことするもんかい！」

ストレイツオ「それはどうかな？」

ストレイツオはこちらに全く気付いていない。昔から影は薄かったが、ここまでとは

ユウナ「少なくともさせねえな」

ストレイツォ「なッ!? いつの間に後ろに!?」

ユウナ「その子は返してもらおう、クロノスザ・ワールド」

ストレイツォの指を、口から抜き、女の子を下におろした

ユウナ「隙だらけだったぜ」

女性「え? え?」

女性は突然視界が変わった事に驚いていた

ユウナ「死にたくなけりや逃げな!」

ストレイツォ「このおおおオオオ!!」

ユウナ「アホレイツォは落ちやがれ」

波紋の呼吸をしながら、クロノスに上まで連れて行ってもらおう

ユウナ「震えるぞハート! 燃え尽きるほどヒート!!」

ストレイツォ「この私にそれが効くと思ってるのかア!!」

ストレイツォは離れていき、下に降りようとジャンプし、落下していった

ストレイツォ「ここまで来れまい! お前よりも足の速さは私の方が格段に上だ!」

ユウナ「刻むぞ血液のビート! クロノスザ・ワールド」

時を止めて近づき、そして動き出す

ストレイツォ「何イイイイ!!?!」

ユウナ「山吹色の波紋疾走（サンライトイエローオーバードライブ）ウウウウ!!!
オラオラオラオラオラオラオラ!!」

波紋が流れ、二人とも川に落ちていく・・・が、ジョセフがストレイツォの腕を掴んだ

ストレイツォ「なぜ・・・私が落ちて行くのを止める!?!お前の右腕を瞬時に吹っ飛ばす力が私にまだ残っているかもしれないのだぞ」

ジョセフ「うるせえやってみる!そんな時は左手でめえをブン殴る用意はできている、ひとつだけ聞きたいんだ。なぜスピードワゴンほか五人の死体を河へ捨てた?じいさんの遺体を見つけて墓に葬りたいこともあるが・・・どうもスッキリしねーぜ!スピードワゴンの死体を河へ捨てなければ、誰にも知られず済んだことなのよ・・・!」

ストレイツォ「・・・ジョセフ、やはりお前はジョナサンの血統を受け継ぐ男だな。表面上の態度はまるで違うが、やはり謎や冒険に首を突っ込む性格!似てるなア!「石仮面」の謎に興味をもったジョナサンの性分に!そしてその性分ゆえにもはや逃れられない運命に、「今」踏み込んだことを告げておこう」

ジョセフ「・・・!?!?なんのことだ?」

ストレイツォ「今に分かる・・・「柱の男」のことを!今に出会う「柱の男」に!」

ジョセフ「てめえ、わけのわからんことをふるんじゃあねえ！俺が聞いているのはスピードワゴンのことだッ！」

ストレイツォ「わからんかもしれん、が死体を河へ捨てた理由は「柱の男」のせいなのだ！洞窟内の「柱」が遺体共の流れ出る血を吸い始めたのだ。植物が養分を吸収するかのようにな……不気味だった……柱の男」が目覚めるようにな……だから外へ運んで河へ捨てたのだ！だがもうすぐきつと目覚めるだろうな血を吸ったのだから……ヤツの4000年の眠りからな」

ストレイツォは意識して呼吸を止らした

ストレイツォ「どんな能力を持っているのか!?どんな生命体なのか!?見てみたかったがな！ジョセフ！近いうち……きつと「彼」にあうだろう……きつとわかるだろう「彼」の正体と生物進化の意味がッ！神が定めた運命のようにな」

ジョセフ「こ……こいつッ!?ストレイツォ！お……お前!?!」

ストレイツォは自分の身体が崩れていこうとも、呼吸をやめない

ストレイツォ「私は後悔していない……醜く老いさらばえるよりも、一時でも若返ったこの充実感をもって地獄へ行きたい……」

ジョセフ「こいつ「波紋法」の呼吸をしているッ!……ということは自分の体内に「波紋」ができていっていること!」

ストレイツオ「若返ったことは、我にとつて至上の幸福だったぞジョジョ！」
ジョセフ「ストレイツオ！待て！話はまだ半分……」

ストレイツオ「さらばだジョジョ！」

ストレイツオの身体は内側から破裂したように散っていった

ユウナ「ストレイツオ……あの世はそこまで悪いところじゃなかったぞ」

ジョセフ「おおおおおおおーッ!!おおおおおおーッ」

川から一人で上がったユウナは、ジョセフを宥めた。すると、ジョセフは橋を渡った先にいる女性の所へ

ジョセフ「大丈夫かよーッ！名前何てーの？家まで送ってくぜ」

女性に声をかけたジョセフが、顔面を殴られた

しかも鼻血が出ちやつてるし……

ジョセフ「な!?あだアーツ！あにひやがるッ！」

鼻が折れたか？まともに喋れていない

女性「あんたよくもさつき！あたしのことブスって言うてくれたわね！ブスって呼んだその償いのパンチよこのタコ！」

ジョセフ「え？なんだっておいスモーキー俺そんなこと言ったか」

スモーキー「うんいった……」ブスのために命がはれるか」とかなんとか

ジョセフ「ホントー!?俺そんなこと言ったくく?イヤアくく変だなーツ!こんなかわいこちゃんにおかしーなー」

今度はスネを一発けられた

ジョセフ「でエくくくくッ!」

女性「自分の言ったことも覚えてねーのかこのイモ!」

ジョセフ「おおおおおこのアマくく」

ユウナ「ジョジョ・・・これは全面的にお前が悪いぞ」

女性は、怒りながら帰ってしまった

ジョセフ「・・・それにしてもストレイツオの言った「柱の男」が・・・気になるぜ・・・

行ってみつかメキシコへ!」

第七十五話（ペルソナ5 + Rの軌跡『第二十八話』より）

「息子が娘にッ!？」

放課後、祐介からもらった招待状で展覧会に、双葉を覗いた皆で来ていた

双葉は「私はパス」との事で来ていない。灰原みたいなこと言うなあ

モルガナ「混んでるな・・・」

竜司「いるのバレたら面倒だから、あんま出てくんなよ？」

竜司の願いは、すぐに打ち砕かれた

祐介「来てくれたんだね！」

優斗「瞬殺かよ」

祐介は蓮達にお構いなしに、杏の所へ

杏「まあ・・・うん」

杏が返事し、ようやく祐介は俺たちの方を祐介は見た

祐介「本当に来たのか」

竜司「テメーで券、置いてったんだろ！」

祐介「他のお客様の邪魔にならないようにな。さあ、案内するよ。俺の描きたい絵の

ことも、色々と話したい」

杏はこつちを向き

杏「じゃ、後で」

と言ひ、付いて行つてしまつた

優斗「行つちまつたな・・・」

モルガナ「杏殿、大丈夫なのか!? 大きな絵の裏でゴニョゴニョなんてこと・・・」

優斗「見てこようか?」

竜司「いや、無理だろ」

優斗「まあ、男じゃ無理だな・・・」

蓮「まさか・・・」

・・・服はカバンに入れて持ってきた、あとは・・・

優斗「あそこに多目的トイレがあるな・・・」

竜司「どうするつもりだ?」

優斗「ちよつとそこで待つてろ」

優斗はトイレに入り、服を脱ぎカバンに入れた

そしてカオスの力で、身体の周囲1mmをメメントス化し、女子になつた

そして、ためらいなく女物の下着を着る

お前マジかって思ったやついるだろ

こちらとら色んな世界で女にされて抵抗もなんも無くなってしまつとるんじや。しかも、私物になるから下着も残るんだよ

そして女子の服を着て出た

外で待っていた蓮は目を丸くした

優菜「終わったぞ」

竜司「ああ、何して・・・」

優菜の姿を見た竜司の顔↓（。D。）

蓮「本当にするとはな」

優菜「近づくだけだからな、お前らはそこらへん回ったほうが怪しまれないだろ」

竜司「え、回るのかよ」

蓮「来た意味が無くなるぞ」

竜司「・・・一周だけだぞ」

優菜「そつちは斑目、俺は祐介だ」

蓮「ああ」

優菜は人ごみに混ざり聞き耳を立てる

実は俺って影薄いんだぜ？

小学校の時ケイドロして人ごみに紛れてたら、鬼が目の前を通ったのに俺に気づかなかったから

つと、こんな話をしてる間に杏たちを見つけたぞ

杏「日本画って、こんな色々種類があるのね」

杏と祐介は並べられた日本画をまじまじと見ていた

祐介「普通はもつと作風は絞られる。でも先生はすべてを……一人で、創作してる。特別なんだ、先生は」

祐介たちに斑目が歩いてくる

斑目「祐介、ここにいたのか」

祐介「先生！」

斑目「昨日の子だね楽しんでもらえてるかな？」

杏「ほんと、すごいつていうか……うまく言えないんですけど……」

斑目「何かを感じてもらえる……それだけで、我々画家は本望だ。いい絵になるといいな、祐介。では、失礼」

斑目はどこかに行ってしまった

杏「芸術家ってとつつきにくそうだけど……先生って親しみやすいよね」

祐介「ああ」

すると、杏が一つの風景画に近づくと

杏「あ、コレだ。生で見たかった絵」

祐介「・・・これが？」

その絵は、赤や黄色、少し緑の混じった紅葉を描いていた

杏「書いた人の、怒り？わかんないけど、暑い苛立ちを・・・感じるの。あんな気さくで紳士的な人なのに、こんな絵が描けるなんて・・・」

祐介「・・・」

杏「どうしたの？」

祐介「何でもない。こんな絵より・・・もつといい絵がある。さあ、こつちだ！」

優菜『自分の先生の絵をこんな絵？これよりいい絵もある・・・ならわからなくもないが・・・これはやつぱり、裏がありそうだな・・・？』

杏「あ・・・ちよつと・・・」

杏がそそくさと歩いていく祐介の後をついて行った

優菜『これ以上は探れそうにないな。蓮達の所に戻ろう』

個展の外に出て、SNSで二人の居場所を聞いて、渋谷駅の連絡橋で合流した

優菜「・・・何をそんなに落ち込んでんだ？」

蓮「あのあと斑目先生だー!!とか言ってる人たちに押されてここまで逃げてきた」

竜司「オバチャンのヒジがモロ……けど、おかげで思い出したぜ」

優菜「何をだ？」

竜司「まあ聞けって……ネットの書き込みだ」

竜司がスマホを取り出す

竜司「……ほら、ここ見てみ」

竜司が画面を見せると同時に、杏がやって来た

杏「何で先帰んの!？」

優菜「すまん、訳を言わせてくれ」

杏「え……優斗くんだよ？何でパレスの時みたいに女の子に……」

優菜「ああ、これはだな」

少女説明中

優菜「というわけだ」

杏「へー、そんなもできるんだ」

竜司「それよりこれ見ろって、この書き込み……斑目のことかもしれねえ」

杏「何で？」

蓮「竜司、書き込みを読んでくれ」

竜司「『日本の大家が弟子の作品を盗作している。テレビは表の顔しか報じてな

い』・・・だとよ」

優菜「実はさっき、杏たちについて行ってたんだが・・・」

杏「え!?! ずっと!?!」

優菜「まあ、聞けって。祐介は杏が絵画を見て言ったあと「こんな絵より」って言ったよな?」

杏「え、確かに言ってたけど・・・」

優菜「自分の先生の作品をこんな絵だど? どう考えてもおかしいよな? これよりも「もつといい絵」ならわかるが、どう考えてもあの言い方は不自然だ。その絵自体の評価が低い、それが盗作ならわからなくもない。そして、そう思っていたということとは・・・祐介なら何か知ってるな」

竜司「書き込みの続きもある『アトリエのあばら家に住み込みさせている弟子への扱いは酷く、こき使うだけで、絵など教えてもらえないし、それどころか人を人とも思わない仕打ちは、飼い犬をしつけるかのようだ』・・・あばら家の班目だからなあ」

蓮「・・・行ってみるか、あばら家に」

竜司「そういうや、モデルの話どうなってるんだ?」

杏「喜多川君から、連絡もらってる。あと斑目先生のアトリエの住所も」

竜司「住み込みだったな。ちようどいい。明日行ってみようぜ、放課後、斑目ん家

に行くぞ！」

杏「え？モデル・・・明日!?急に言われても・・・」

優菜「俺も明日この姿で行こうか？」

竜司「んゝまあ一応な」

その夜帰ると・・・つて、しまった。結局女子のまま帰ってきてしまった

・・・まあいいか、説明すれば通りそうだし

優菜「ただいまゝ」

母さん「おかえr・・・誰!？」

優菜「優斗だよ、アンタの息子」

母さん「ゆ、優斗が！女の子に!？」

母さんは驚きのあまり、倒れてしまった

優菜「・・・ダメだったか」

父さん「何があつt・・・誰だね君は!!」

優菜「優斗だよ」

父さん「本当か？じゃあ・・・母さんは何で倒れてるんだ？」

優菜「女になつてるからショックで」

父さん「そ、そうか・・・」

優菜「・・・じゃあ、男に戻る次いでに着替えてくる」

男に戻り、着替えて戻ってきた

優斗「ほら、本人だぞ」

父さん「ほんとだな」

母さん「ハッ！あれ!? 優斗は!？」

優斗「目、覚めた？」

母さん「あれ？さっき女の子に・・・」

少年説明中

母さん「息子が人間離れしていく・・・」

優斗「結構心につっ刺さるから言わないでほしいんだけど」

父さん「ともかく、今は大丈夫なんだな？」

優斗「ああ」

父さん「なら、この話はやめだ。夕飯食べるぞ〜」

母さん「あ、持っていくから待ってて」

というわけで一日が終わった

第七十六話（暗殺教室の軌跡 『第二十五話』より）

「何で俺？」

今日はどうやら転校生が来るらしい

ハッキリ言うとな面倒だ。人数が増えれば増える程、みんなを連れてきにくくなる。下手すれば、他のくらすより倍になる。牛井の並盛と特盛ぐらい差が出てしまう

そもそも、烏間先生が一番の被害者か？こんな変人が集まりやすい教室に来ちやつたんだから

なんてことを考えていると、教室のドアが開いた

誰かと思ひ見てみると、白装束の人が入ってきた

皆が「こいつが転校生か？」という目で見てみると、手を前に出してきた

そして、男がやつた事に対して皆が驚いた

・・・鳩が出てきた。真つ白な鳩だ。マジシャンかよ

シロ「ごめんごめん驚かせたね。転校生は私じゃないよ。私は保護者・・・まあ白いし、シロとでも呼んでくれ」

茅野「いきなり白装束で来て手品やつたらビビるよね」

渚「うん、殺せんせーでもなきや誰だつて・・・」

はぐメタ先生が教室の隅に・・・

杉野「ビビってんじゃねーよ殺せんせー!!」

前原「奥の手の液状化まで使つてよ!!」

殺せんせー「い、いや・・・律さんがおつかない話するもので」

実は、転校生に関して律がいくらか情報を持っていたのだ

何でも、自分と一緒に来るはずだったが、自分がその転校生よりも弱かった為らしい

化け物じゃねえか

殺せんせーは、自分の服に潜りこみ戻る

殺せんせー「はじめましてシロさんそれで肝心の転校生は？」

シロ「初めまして殺せんせー、ちよつと性格とかが色々と特殊な子でね。私が直で紹

介させてもらおうと思ひまして」

優菜『あれ？そういうえばイトナの教室の入り方って・・・』

シロ「では紹介します。おーいイトナ!!入っておいで!!」

シロがそう言うのと、教室の後ろの壁と黒板が真つ二つに崩れ去り、外から人が入って

きた

皆『ドアから入れ!!!』

蓮「なんというか・・・うん、すごいのが来たな」

優菜「外雨なのに壁ぶつ壊しやがった。雨が入ってくるのに」

竜司「そつちをいうのか？壊したことを言うんじやねえのか？」

イトナ「俺は・・・勝った、この教室のカベよりも強いことが証明された。それだけでいい・・・それだけでいい・・・」

皆『なんかまた面倒くさいの来やがった!!殺せんせーもリアクションに困ってる!!笑顔でもなく・・・真顔でもなく・・・なんだその中途半端な顔は!!』

説明・・・できんわ、文じやとてもじやないけどアレを表現するのは無理

シロ「堀部イトナだ、名前で呼んであげて下さい。ああ、それと私も少々過保護でね。しばらくの間、彼のことを見守らせてもらうよ」

業「ねえイトナ君ちよつと気になったんだけど、今外から手ぶらで入って来たよね。外、土砂降りの雨なのに・・・なんでイトナ君は一滴たりとも濡れてないの？」

イトナが教室を見回す

イトナ「・・・おまえは、多分このクラスで一番強い・・・けど安心しろ俺より弱いから・・・俺はお前を殺さない」

業「・・・それは違うよ、イトナ君」

イトナ「何がだ？」

業「このクラスで一番強いのは……俺はじゃなくてその優菜君だよ……」
おい業君、不敵な笑みでこつちを指さすんじゃないよ。ついでに、イトナ君もこつち
向かなくていいから!!

優菜「……」

イトナは近づいてくる

イトナ「お前が一番強いのか？」

優菜「やだなあゝそんなわけないじゃないk」

蓮「いや、一番だろう」

竜司「リーダーは蓮だが、一番強いのは間違いないお前だろうな」

双葉「間違いない」

優菜『お前らア!!』

イトナ「そうか。じゃあ、今すぐ外に出て来い」

優菜「……ハア？外は土砂降りだぞ？」

イトナ「関係ない」

優菜「あるわ!!」

蓮「行つてこいよ」

蓮、後押しをするんじゃない。俺はバカじゃないんだ風邪ぐらいひく

優菜「あーもうわかった、行けばいいんだな？」

イトナ「ああ」

渚「え？本当にやるの？」

窓を開け、外へ出た

優菜「ルールは？」

イトナ「お前は殺したらダメだ・・・だからどつちかが気絶するまでだ」

優菜「・・・本気でやるのか？」

イトナ「本気でやらないと、死ぬぞ」

イトナは一步？で距離を詰めてきた

ギリギリガードを入れられたが、威力を殺しきれず、校庭の隅まで飛んで行き、木に

ぶつかった

だがみんなが見ていたのは、吹っ飛ばされた俺ではなく

俺がイトナの触手だった

殺せんせー「まさか・・・触手!？」

何で俺に使う!？」

優菜「・・・これはちよつとヤバいかも」

俺の状況も、イトナの頭も

殺せんせー「どこでソレを手に入れたツ!!その触手を!!」

優菜「先生・・・ちよつと本気でやるから、飛び火したらゴメン」

カオスの空間から、対先生ナイフを取り出し、それを口で噛みしめる

そして、木を一本殴り倒して葉っぱをすべて回収した

イトナ「それをどうするつもりだ？」

葉っぱを地面にばらまき、噛んでいたナイフを取って、波紋の呼吸をした

すると、葉っぱが少しずつ集まっていき小舟のような形になった

そして、カオスの空間に入れてその空間のモノ全てを爆弾に換えて上空から落下させ

た

波紋はすでに消え、イトナと優菜の間に少しずつ落ちていく

優菜「スペシャルステージだ。行くぞ」

優菜が距離を詰め込み、胸ぐらを掴んで後ろに倒れこみ、木の葉爆弾へ蹴り飛ばし、イトナが地面に着くと爆弾発動。からの誘爆で、普通なら死ぬぐらいの爆発が起きた

優菜「よし」

竜司「よしじゃねえよ!あれ死んだんじゃねえのか!？」

煙が雨で掻き消され、イトナの姿が現れた

優菜「死なないだろ、あれぐらいじゃ」

イトナは触手で、真下の木の葉を薙ぎ払って回避したようだ

優菜「じゃあ、今度は・・・斬ろうか」

優菜がイトナに向かって突進していく。触手が向かってきたが・・・避けて横から触手を切った

ペルソナ使いでなければ、こんな芸当は到底できない

イトナ「な!？」

優菜「こんなものか？」

イトナ「クソツ!!」

優菜が煽ると、全部向かってきた

優菜「ハアハア、もう終わりか・・・？」

さすがに疲れたが、全部斬り落としてやった

イトナ「そんな・・・」

優菜「いうことはあるか？」

イトナ「・・・」

優菜「・・・あのなあ、お前みたいなやつは負けるって相場が決まってんの。四天王戦で最初のやつが「アイツは四天王の中でも最弱!!」てか言われるのと同じだよ」

すると、下の方から何かが刺さるような鈍い音が聞こえた

優菜「……は？」

下の方を見てみると、腹に触手が刺さっていた

イトナ「お前は強いが……頭は馬鹿だ」

シロ「……!!イトナ!!」

イトナ「お前は殺す」

優菜「へえ、殺せると思ってんだ……」

殺せんせー「優菜君!!あとは先生に……」

優菜「じゃあ、本気出してもいいよね？」

イトナ「なに？」

優菜「イフリート、こいつふつとぼして」

イフリート「オラァ」

イフリートを出し、本気でぶん殴った

しかし、触手でガードされ、あまりダメージは入っていない

よくガードしたな、勘か？

イトナ「……今のをどうやったか知らないが、お前の怪我は致命傷だ。動けるはず

がない」

優菜「アリエル」

アリエルに傷を治療してもらい、すぐに傷口が塞がった
イトナ「!! 治っただど!？」

優菜「真面目に、本気でやってやろう」

カオスの空間を経由し、イトナの足を掴んだ

イトナ「な!？」

そこから空間の穴を広げ、こちらに引きずり出し、腹パンを本気で決めた

イトナ「ガッアア・・・」

優菜「もう気絶、何て言わないよな？」

イトナ「まだ・・・だあ」

優菜「さすがだな」

次は足を持ってグルグル回転し、遠心力で勢いがついたところで手を放し、木にぶつ
けた

イトナ「ウア・・・」

優菜「まだ潰れていないだろ？」

優菜がイトナに向かって歩み寄ると、後ろから手を掴まれた

蓮「もういい、やめろ」

蓮がさすがにマズいと止めに来たのだ

優菜も登っていた血が引き、現状を改めて理解した

やつべやり過ぎた

優菜「・・・これで終わりにしようか」

イトナ「お前・・・何者だ・・・？こんなことが中学生に・・・できるとは思えない・・・」
優菜「・・・超能力を手に入れて、吸血鬼にあつたり宇宙人にもあつた魔法の世界にも行つたゾンビにもあつたな。まあゾンビは全員殺したが・・・」

イトナ「・・・!?お前・・・」

優菜「まあこれで終わりにしようや、お互いそれが一番だ」

デコピンを額に本気でやり、気絶させた

そして、担いで教室に戻った

もちろん、皆にひかれてますね

ハッキリ言ってしまうとここから逃げ出したい・・・

シロ「・・・まさかあなたが倒してしまうとは・・・」

優菜「連れて帰ってやってよ」

シロ「では、転校初日でなんですが、しばらく休学とさせていただきます」

殺せんせー「待ちなさい！担任としてその生徒は放っておけません。ここに入ったか
らには、卒業するまで面倒を見ます。それにシロさん、あなたにも聞きたいことが山ほ

どある」

シロ「いやだね帰るよ、力づくで止めてみるかい？」

優菜「ダメだよ殺せんせー。ソレ、対先生繊維でできてるよ」

シロ「・・・よくわかったね」

優菜「さつき、イトナの触手当たったけど溶けてたから」

シロ「・・・そうかい。そうだ、言い損ねていたが・・・殺せんせー」

殺せんせー「何でしょう」

シロ「君とイトナは兄弟だよ」

皆『兄弟!?!』

杏『最後にでっかい爆弾落とされた!?!』

その後イトナは連れて帰られ

皆が、鳥間先生にもっと強くなりたいと言ったら・・・すごくしごかれていた
皆が弱いわけではないのにね

第七十七話（暗殺教室の軌跡 『第二十六話』より）

「ス〇ムダンク」

桐ヶ丘中学校は、あるイベントに直面していた

HRで殺せんせーがその行事に対して、疑問を問うていた

殺せんせー「クラス対抗球技大会・・・ですか。健康な心身をスポーツで養う大いに結構！・・・ただ、トーナメント表にE組がないのはどうしてですか？」

三村「E組は本線にはエントリーされないんだ。1チーム余るって素敵な理由で。そのかわり・・・大会のシメのエキシビジョンに出なきゃならない」

殺せんせー「エキシビジョン？」

三村「要するに見世物さ。全校生徒が見てる前で男子は野球部の、女子は女子バスケット部の選抜メンバーにやらされたんだ。一般の生徒のための大会だから部の連中も本線には出れない。だからここで・・・みんなに力を示す場を設けたわけ。トーナメントで負けたクラスも、E組がぼこぼこに負けるの見てスッキリ終われるし、E組に落ちたらこんな恥かきますよって警告にもなる」

殺せんせー「なるほど、いつものやつですか」

片岡「そ、でも心配しないで殺せんせー。暗殺で基礎体力ついてるしい試合して全
校生徒を盛り上げるよ。ねー皆」

優菜「俺はバスケか．．．あんまりやったことねーや」

杏「私も」

双葉「最後まで動けるかどうか．．．」

優菜「．．．それぞれあつてるポジションに行くか」

片岡「そうね、それじゃあこれはどう？」

片岡はいくつかの練習方法が書かれた紙を出し、その中の一つを指さした

優菜「ゴールしたからボールを入れる練習か．．．確かに、双葉は体力ないから下

から入れる練習でいいだろう、俺は一人で二人分できるし」

杏「私は普通に練習すればいいのね」

優菜「ああ、俺はとりあえずコントロールドな」

ひとまず昼休みに練習してみる

杏は数本に一本入る程度で、双葉もあまり入らないようだ

杏「結構難しい．．．」

双葉「私にはやっぱりスポーツは．．．」

優菜「でも全員参加なんだよな．．．。双葉は出来る限り出さない方向にはなると思

うが、出た時に動けないんじゃないや流石にダメだし……」

杏「まあ、まだ練習初日だし、これからだよ！」

優菜「あと一週間だけだな」

すると、蓮達も遊びに来た

蓮「調子はどうだ？」

優菜「微妙。そつちの野球は？」

竜司「投げるのはいくらからできるけど、打つ方はてんでダメだ」

蓮「ストレートをかすりはするが、変化球となるともう……」

優菜「調子は似たり寄ったりか……。俺も、体育以外でバスケットかした事ねーし……」

まともに使えるのは脚だけか」

皆で唸っていると、片岡も来た

片岡「調子はどう……よくはなさそうだね」

杏「ボールがまっすぐ飛んでかない……」

片岡「あ、それならシュートフォームが悪いだけだと思うよ。ほら、ゴールに向かって立ってみて」

杏は言われた通り、ゴールを向いた

片岡「シュートの前は膝と肘を曲げて、バレーのトスみたいにボールをもって」

杏「膝を曲げて・・・肘も曲げて、トスみたいにボールを持つ・・・」

片岡「それで、打つ瞬間に左手を添えるようにして右でゴールへ押すの」

杏「左を添えるようにして、右手で打つ！」

杏が放ったボールは、ゴールには届かなかったが、真つすぐに飛んで行った

杏「真つすぐ行った！」

片岡「後は、距離感で強弱付けるだけ・・・なんだけど、こればかりは練習しないとね」

優菜「!・・・片岡さん」

片岡「なに？」

優菜「バスケ教えて」

片岡は快諾してくれた

そして、昼は皆で片岡に教えてもらい、夜は一人で近くの公園で練習した

チンピラに絡まれたりしかけたが、近づいたら殺すオーラを纏っていたので誰も近付いてこなかった

ちなみに、練習のいかいもあってか、黒○スの青峰のゴール裏から決めるシュートがゾーン中に10本中1本入るぐらいに上達した

深夜までやってたから、成果が出てよかったぜ

そうして日は流れ、試合当日

優菜「過程が大事だ、なんて建前を言う気はない。やるからには勝つ!!」

片岡「殺す気で行くよ!!」

皆「オオオーツ！」

E組スターティングメンバー

片岡・優菜・茅野・狭間・原

優菜「狭間さんは、パス優先で。俺貰いに行くんで、出せそうなら出してください」

狭間「オーケーよ」

スタートは、片岡さんがボールを取り、E組ボールから

相手は三人が近づいてくる

狭間さんの近くに行くと、パスが来た

俺の後ろ（前線）には原さんがいる

片手で流すように上からバックパスした

原「え？」

バスケット部員A「しまった！」

バスケット部員B「大丈夫！」

バスケット部員Bがボールを取ろうとすると、原さんが横取りした

優菜「決めて!!」

原さんが落ち着いてシュートしたが、ブロックされて決まらなかった

原「ごめん!」

優菜「切り替え切り替え! デイフェンス行くよ!」

しかし、そのあと30点を入れられた

優菜「さすがに厳しいか」

いくら身体能力があるからと言って、二人分は流石にキツイ

優菜はボールを地面につきながら、パスコースを探すがしっかりとコースは切られて

いる

すると、片岡さんがボールを貰いに来た

片岡「・・・一点目は任せて!」

片岡さんがドリブルでせめて、やっと一点目が入ったが

審判「第1ピリオド終了」

笛が鳴ってしまった

一旦ベンチに戻る

優菜「さあ、どうする?」

狭間「ハッキリ言うて厳しいと思うわよ」

優菜「・・・そろそろ俺も本気出すか？学長とかにバレたら面倒だけど」

片岡「まさかイトナの時みたいにならないよね？」

優菜「ならんならん、そこは大丈夫。ちよつと足速くするだけだから」

審判「まもなく第二ピリオドが始まりま。選手は戻ってください」

ここで選手交代

片岡？清水 狭間？不破 原？奥田

現在2―28

今俺がボールを持っている。今自陣を向いてドリブルをしてるんだが、後ろに相手がいって前を向けない

バスケット部員B「もうあきらめたら？あなたたちエンドのE組に勝ち目何て一切ないわ」

優菜「0点に抑えてから言いな」

相手の又にもボールを通しながらターンしてかわした

油断していたから出来たが、もう通じそうにない

バスケット部員B「あ！」

そして、一旦不破さんに私、ワンツでゴール前へ。そこから本気でジャンプし、スラムダンクを決めた

優菜「よし！逆転するぞーッ!!」

相手ボールを俺がパスカットして、今は茅野がボールをもっているんだが・・・

ありやダメだな殺意がい高すぎて周りが見えてない。目の前に巨乳が居れば当たり

前か

そこに横入りする

優菜「茅野さん、もらうよ」

茅野「え？」

そこから体をねじり、倒れこみながらシュート

バスケ部員C「入るわけ・・・」

優菜『入りますー！一日10時間練習したんだから入りますー!!』

ボールはゴールネットを揺らした

7-28

優菜「取ったら俺に回して！」

そこで清水さんパスカット！

清水「はい」

優菜「よし」

ジャンプしてシュート

優菜「ディフェンス戻って」

茅野「え!?! いいの?」

優菜「落ちても俺がリバウンドする」

優菜はゴール下で待ち構え、ボールはゴールの枠に当たって落ちてきた

そこをジャンプして掴み、ダンクを決めた

次に相手ボールだが、奥田が抜かれて点を入れられた

審判「第二ピリオド終了」

10—30

奥田「すいません・・・私が足手まといなせいで・・・」

優菜「大丈夫、カバーなら任せろ。俺はそのために、体力トレーニングしてきたからな」

奥田「は、はい」

優菜「それより、まだ20点差だが、逆転はまだできる。俺も出来る限り具奥から、頑張ろう」

交代

不破? 岡野 茅野? 矢田 清水? 中村 奥田? 神崎

こちらのボールからスタート

中村「はいよ、あんな大口叩いたんだ。入らなかつたら許さんぞ？」

優菜「大丈夫、はいるさ」

優菜はスリーポイントシュートを入れ

13—30

そして、中村がパスのボールに少し触り、軌道が変わって俺が回収した
なので今俺のところにボールあるんだけど・・・何で相手五人が俺に？

バスケット部員D「あんたさえ抑えれば、点は入らないわ！」

優菜「へえ、そう思ってたんだ」

俺はジャンプしてシュートする

バスケット部員E「ブロック・・・」

バスケット部員Eが手を伸ばして防ごうとするが、その手より高く俺は飛んでいた

バスケット部員E「届かな・・・!？」

そこからシュートしたが、流石に入らなかった

しかし、岡野がボールをとった！

優菜「全員こつちにいるから、落ち着いて入れて！」

俺は落ちながらそう言い、岡野は確実に決めた

15—30

優菜「よし」

中村が手を差し伸べてきた

中村「だいじょぶ？」

優菜「問題ない」

優菜は手を取り、立ち上がった

そして神崎と矢田とのワンツードゴール前

矢田が決めようとしたが上から塞がれた

優菜「後ろ！」

矢田は声に気付き、バックパスする

それをとり、右の方にドリブルする

一人ついてきたが、ターンして中に入る

しかし、シュート体制に入るのは厳しい

なら、ゴールの裏から上に投げる

優菜「裏からでも点はあるよな？（頼む入って!!）」

ボールはしっかりと円の中に入った

そこで交代

神崎？倉橋 岡野？双葉 矢田？杏 中村？片岡

ドリブルで進む

バスケット部員A「行かせない！」

優菜「自分で行くって誰が言った？」

バスケット部員A「なに!？」

後ろにボールを回す

それを杏が受け取り、ドリブルで前へ

そこから左にいた片岡にパス

片岡は中に切り込み、ゴールを決めた

19-30

バスケット部員A「なに!？」

それから一点もやらずに点を決めていき、

29-30

漫画みたいだな

優菜「あと一回決めたら勝てるぞ!!」

あと5秒!!

バスケット部員C「点差なんて考えるな!!ここを守れば私たちの勝ち!!醜態をさらさせる

な!!」

ボールが来た

バスケット部員A「あと5秒、もうあきらめなさいよ。あなただって最初からいて、もうタイムリミットも近いんでしょ？」

優菜「へ、それはどうかな？」

膝を笑わせながらもジャンプして相手ゴールに投げた

一応、リバウンドに行こうと着地と同時に走り出したが、右足がつつてしまい倒れこんだ

タイムリミットギリギリだったのだ。もし、あと一秒でも出すのが遅れていたら、出せずに倒れていただろう

バスケット部員D「嘘でしょ！間に合わない!!」

バスケット部員E「大丈夫よ！あれは入らないわ!!」

バスケット部員B「違う!!あそこに誰がいる!!」

優菜「決めろーッ！双葉ーッ!!」

優菜はもう動けない。ゴール前には双葉のみ、決めなければ負ける

しかし、双葉はボールをしっかり受け取り、構えた

双葉「何回練習したと思っている」

双葉はシュートし、ボールはリングを一周し、入った

そこで笛が鳴った

31—30

杏「かつ・・・た？」

片岡「勝ったー!!!」

皆「やったー!!!」

バスケット部員A「そ、そんな・・・私たちが」

バスケット部員たちは膝から崩れ落ちた

優菜「だ、誰かー!!助けて!!」

杏「ちよつと大丈夫？」

優菜「足がつった・・・助けて・・・」

杏に足をのばしてもらい、なんとか耐えきった

優菜「助かった・・・」

双葉「よし、じゃあ帰るぞ〜」

杏と片岡に肩を貸してもらって、男子たちの試合をやっている野球場に

男子たちは理事長が監督として出てきたが、なんとか勝っていた

竜司「え!?優菜の足がつったのか!？」

優菜「ああ、最後の最後だったから良かったが」

蓮「優菜でもつることがあるのか」

優菜「え？そりやそうだよ、人間だからな」

杏「まあ、とりあえずまたつらないように気を付けてね」

モナ「ワガハイ、見たかったぞ・・・杏殿が汗を流す姿・・・」

優菜「あー、誰か試合の様子撮ってなかったっけ？」

双葉「私が出たぞ。動きを何かに使えたりしないかと思ってな」

モナ「おお！見せてくれー！」

その後、蓮に夜ご飯を作ってもらい、皆が寝た頃に優菜はベランダで夜風に当たって
いた

蓮「どうかしたのか？」

優菜「いや、なんでもない」

蓮「・・・夜出歩くのもほどほどにな。そのせいで足がつったんだろ？」

優菜「・・・全部知ってたのかよ」

蓮「リーダーとして当然だ」

優菜「さすがにもうしないよ。というかしたくない、めんどくさいし」

蓮「ならいい。早めに寝ろよ？」

優菜「分かってる」

蓮は寢室に戻り、
優菜も少しして戻った

第七十八話（のびハザの軌跡『第一話』より）

「悪夢の始まり」

優菜はある静かな住宅街の道路で目を覚ました

優菜「……なんで道路？」

優菜は頭に「？」を浮かばせながら、立ち上がった

優菜「ここはどういう世界なんだ？」

優菜は辺りを見回したが、人っ子一人の声もしない

優菜「……静かすぎる。ここは廃墟か何かか？」

すると、車のエンジン音が響いてきた

優菜「車？……むやみに近づくのは危険か」

優菜は物陰から車を見た

車は普通車の赤。ある家の前で止まると、三人の男が降りてきた

二人は警官。そしてもう一人は外国……アメリカ人だろうか。何の用なのかは知らないが……あまり良い話題ではなさそうだ

優菜「……隠れよ」

優菜が背を向けて離れようと右に二回曲がった通りに行った。だが、ついて来ていたアメリカ人に声をかけられた

アメリカ人「すまない。少し話を聞きたいんだが」

優菜『しまった。離れる判断が遅かった』

優菜は振り返って、アメリカ人にこう返した

優菜「なんででしょうか」

アメリカ人「人を探しているんだが・・・この写真の娘を見た事はあるか？」

アメリカ人は写真を取り出し、優菜に見せた。写真に写っていたのは育ちの良さそうな、胸も大きい娘だった

優菜「・・・いえ、ないですね。この方がどうかされたんですか？行方不明か何かでしようか」

アメリカ人「いや、知らないならいいんだ。・・・お礼は日本語で「ご協力感謝する」
でいいのか？」

優菜「ええ、あつていますよ。写真の娘をもし見かけた場合はどうすれば？」

アメリカ人「警察に電話をかけてくれ。俺がすぐに向かう」

アメリカ人と話していると、後ろの方から男が一人やってきた

男「おい・・・うるせえんだよさつきから」

アメリカ人「？彼は君の知り合いか？」

優菜「いえ、初対面ですが」

男は近づいてきた。アメリカ人は優菜と男の間に入り、男に話しかけた

アメリカ人「すまない。人を探しているのだが」

男「失せろ！二度とその面見せん!!」

男は不躰に言い放ち、アメリカ人が「お邪魔のようだな。失礼するよ」と礼を言つて

戻つてきた

アメリカ人「・・・日本人は礼儀正しいと聞いていたが」

優菜「どんな国でも礼儀がよろしくない人はいますよ」

アメリカ人「日本でもそこは変わらないのか・・・」

優菜「人である限り世界共通かと」

すると、男がナイフを取り出しレオンの背中を両手で突き刺そうとした

優菜「！」

優菜はアメリカ人を左に押しつけて、男の手に右足の蹴りを入れてナイフを落とし、右足が地面に着くと同時に左の回し蹴りで男のこめかみに蹴りを入れて脳震盪を起こした

アメリカ人「・・・今のが武道というヤツか？」

優菜「独学の護身術です」

アメリカ人『・・・日本という国は聞いていたより治安が悪いのか？それとも・・・』
二人で男を拘束していると、南の方角から僕発音が起き、南を見るとそこから中で火事が起きていた

アメリカ人「これは一体・・・!?」

優菜「なんで・・・？何が起こって・・・」

アメリカ人「ひとまず、俺を連れてきた警官の所へ戻ろう」

二人で警官の所まで戻ると・・・

アメリカ人「！車ごと消えている・・・？さっきの暴徒か何かに襲われたか？」
すると、先ほどの暴徒が集まってきた

優菜『囲まれた？明らかに殺す気できてるな』

アメリカ人「一つ聞いておくれが・・・これはこの町特有のお祭りか何かか？」

優菜「こんな奇祭、あつてたまるもんですか」

アメリカ人「・・・日本で使うとは思っていなかったが、使わざるを得ないか」

アメリカ人は、懐からマグナムを取り出し暴徒に向けた

優菜「銃!?本物は始めて見た・・・」

アメリカ人「君はどこかに隠れていなさい。片付けたら呼びかける」

優菜「いえ、この数じゃ逃げられませんよ」

二人が構えると、先ほどの火事が起こっていた南から男の子が一人……いや、高校生ぐらいの男と二人で走ってきた

男の子「何なんだよもうー！！！！」

高校生？「知るか！！喚いてる暇があつたら走れ！！」

アメリカ人「今度は何だ？」

優菜『……聞き覚えがある声？』

優菜が高校生の顔を見て、驚愕した

数分前

高校生？「zzzz……ん？どこだ……優斗は……いや、優菜か？アイツが体を動かしてないって事は……寝てんのか？」

高校生？は優菜の名を知った風に口にし、目覚めた。もう言わずとも分かるだろうが、一応言っておこう。高校生とは優斗である

優斗「……道路？アイツ寝ぼけて道路で寝たのか？いや、あり得ないか。じゃあ、異世界？なら何で優菜がいないんだ？」

優斗が悩んでいると、近くから何かが発したような音がした

優斗「！何だ今の音……」

爆発音のした場所に行くと、車が炎上し、道路までもが燃えていた
優斗「テロか何か起きたか!？」

すると、少し遠くに男女が二人見えたので話しかけようとしたが

男「死ね!死ね!クソが!」

二人はナイフを持っており、一人の男を何度も二人で突き刺していた

優斗「な・・・何でこんな事態に・・・?世紀末寸前か?」

絶句していると、手前の家から男の子が一人出てきた

男の子「何だこれ・・・!まさか外まで・・・!?!」

その声に先ほどの男女が気付き、こちらを向いた

優斗「!向かってくる」

男「野郎・・・ぶっ殺してやる!」

男が男の子を刺そうとしたので、間に入り庇ってナイフを受けると、左腕をナイフが

貫通した

優斗『切れ味鋭すぎだろ!!』

優斗がナイフを折って男を蹴り飛ばした

男の子「うわっ!?!」

優斗「走れるか!?!」

女「死ね!!」

女もナイフを振り回して暴れ始めた

優斗「チツ」

優斗が男の子が逃げられるように時間を稼ごうと向かって行き、押し倒したが女は超人的な力で横にまわり逆に優斗が下になった

女「くたばれ!!」

女が優斗の顔を刺そうとナイフを突き立てたが、優斗が寸前の所で避けナイフを持つてる腕を掴んだ

優斗『嘘だろ・・・!?鍛冶場の馬鹿力つてヤツか?シヤドウぐらい力強いぞ・・・!!』
すると、女の脇腹に銃弾が一発入り、女が仰け反り回った

優斗「弾?」

優斗が起き上がり、弾が飛んできた方向を見ると、先ほどの男の子が銃をこちらに向けていた

どうやら亡くなった警官からハンドガンを拝借し、女を撃ったようだ

優斗はそれを確認した後、女の顔面に蹴りを一発入れて気絶させた

男の子「ハア・・・ハア・・・」

優斗「・・・お前が撃ったのか?」

男の子「僕は今……人を撃ったんだよね……？」

優斗「……人の力じやなかったがな。とりあえず、さつさとどこかに逃げるぞ。ここに居たら銃声を聞いて集まってくる」

男の子「え、その腕で!？」

優斗「怪我を治してる暇も知識も無い。それに、貫通してるなら抜かない方が出血が抑えられたはずだ」

男の子「……この銃は置いて行こうかな」

優斗「何言ってるんだ？ 持つてくに決まってるんだろ。相手が人間かどうかかも分からない、それに警察官もこの様だ。もう銃刀法違反なんて言ってる暇はない。今は武器を持つて、一コンマ秒でも早く安全な場所に行くべきだ」

男の子「……うん、分かった」

優斗「……何があったかは知らねえし、聞く気も無いが、絶対に希望は捨てるなよ。お友達だって生きてるかも知れねえだろ。……そーいや名前は？」

のび太「野比……のび太です」

優斗「(のび太？ 聞いた事あるような無いような……)俺は中村優斗だ。逃げるのは手伝ってやる」

そうして、二人で逃げてたわけだが……

のび太「やっぱり警察署に来たのは間違いだったんじゃ!?」

優斗「何言ってるんだ、銃の球が尽きたら死ぬんだぞ。ここなら銃もたくさんある。弾も取っとけ」

そう言いながら、銃と弾をある分全てカオスの空間の武器庫に入れた

二人で隠れながら移動していると、後ろから「野郎・・・」と声がしたので、二人で警察署を出て走り出した

のび太「も、もう・・・ダメ・・・」

優斗「諦めんなよ！諦めんなそこで!!死ぬんだぞ!!」

のび太「で、でも・・・僕いつつも・・・マラソンもドベで・・・」

優斗「ならいつその事、アイツ等も撃つか!?!」

そう言いながら振り返って人数を確認すると、十数人ほどナイフを持って走って来ていた

優斗「・・・やっぱダメだ！スピード落としたら死ぬぞ!!」

男の子「何なんだよもうー!!」

優斗「知るか!!喚いてる暇があったら走れ!!」

すると、前に男や女の集団が見えた

優斗「!囲まれたか・・・!?いや、誰かを囲んでる・・・?」

優斗は囲みの中の人を見て、吃驚したと同時に安心した

優斗「優菜!!」

優菜「優斗!?!」

のび太&アメリカ人『知り合い・・・?』

優菜が目の前の暴徒を蹴り飛ばして、二人が通れるようにした

優菜「何でお前が俺と別々に存在して・・・ってどうしたその左腕!?!俺の身体に何があつた!?!」

優斗「説明は後だ!ついでに後ろの奴らも任せた!!俺たちは隠れてるからな!!」

優斗の後ろから暴徒が十数人追いかけてくる

優菜「ふざけんなテメエ!!」

アメリカ人『彼女の口調が180度変わった・・・?それに、俺の身体?あとで話を聞く必要があるそうだな』

優菜「!ちよつと待てそつちの子供は・・・!」

優斗「あ?のび太っていうらしいが・・・」

優菜「のび太って・・・あののび太!?!」

のび太「え、あののび太って・・・?」

優菜「ちよつと待て、お前ドラえもんはどこに行ったんだ?アイツが居たらどうにか

なるだろ!？」

のび太「ドラえもんを知ってるの!?! ドラえもんは、僕が昼寝してる間にミイちゃんに会いに行くつて出たつきり……」

優菜「（ミイちゃん……ドラえもんが恋してる猫だっけか？）そうか。ドラえもんはいいないか……秘密道具があれば、この状況も楽に解決できたが……」

アメリカ人「話はひとまず終わらせてくれ。そろそろ暴徒が痺れを切らしそうだ」
アメリカ人がそう言った途端、火蓋を切るように暴徒がレオンに向かって行った。レオンは冷静に蹴り飛ばした

優菜「……チツ、優斗のせいでも本性もバレたし、ネコ被る必要性も無くなったか」

優斗「いや、自分でバラしたようなもんじゃねえか」

優菜「何か言ったか?」

優斗「いや、何でもねえ」

優菜「……とりあえず、暴れるしかねえな」

優斗「そうか、俺は隠れてるな」

優菜は優斗の腕を掴んで、刺さっている折れたナイフを引き抜いた

優斗「イテエエエエ!!」

優菜「アリエル、あとは任せた」

優斗の腕をアリエルに治してもらってる間に、優菜が暴徒に向かって行った

一人目を押し倒しながら、逆立ちした。そこを狙って、横にいた暴徒が刺そうとしたので、腕をバネにして上空に避けた。暴徒が振り下ろしたナイフは、一人目に刺さり、優菜が落ちながら二人目を踏みつけた

そして三人目が優菜を刺そうとするので、波紋の呼吸をしてナイフを折ろうとする
と、レオンがマグナムを撃ち、三人目の脳天に直撃した

そこで優斗の怪我が治ったので、優菜がレオン達の所まで戻った

優斗「よし、それじゃあ道を切り開こうか」

優菜「のび太、俺たちが先行するからついて来い。アメリカのお兄さんも、のび太を守ってくれ」

アメリカ人「了解した」

優斗と優菜が顎、みぞおち、股間などを狙い暴徒を倒していき、のび太を狙う暴徒はレオンが撃ち倒した

二十人ほど倒した頃に、ようやく暴徒の波を抜け、全員で逃げた

優菜「二度とあんな目には会いたくないな」

アメリカ人「この近くに避難所はあるか？」

のび太「僕、知らないです……すみません」

アメリカ人「・・・なら逃げ込めそうなどころはあるか？」

優菜「のび太の学校で良いんじゃないのか？デパートとかスーパーは逆に危険だ。入った時点でフラグが立つ」

のび太「僕の学校は、この先を左に曲がってすぐです」

アメリカ人「優菜といったか、後で聞きたいことがある」

優菜「・・・はい、分かりました」

小学校につき、暴徒を完全に振り斬れたことを確認した

のび太「はあ・・・」

アメリカ人「さて、ようやく聞けるな。君は一体何者なんだ」

優菜「・・・中に入ってからにした方がいいです。ここはまだ危険ですから」

校庭を歩いていると、アメリカ人がこう言葉を零した

アメリカ人「・・・この町はいったいどうなってるんだ」

のび太「わからない・・・旅行から帰ってきたらみんな・・・」

優菜「俺たちはこの町の住民じゃないから知りません」

すると、校門から銃声がした

アメリカ人「！」

優菜「銃声？まだ生存者がいたのか」

？「くそ、こいつら！」

そう言いながら、こちらに逃げてくる男が一人。その男はアメリカ人を連れてきた警官だった

警官「!!あんだ、無事だったか！」

アメリカ人「・・・お前か、生きていたんだな。・・・もう片方はどうした？」

警官「・・・」

のび太「まさか・・・」

優菜「追卓は後にしてほしい。警官さん、今の状況を分かるところだけ説明してくださいませんか？」

警官「・・・？君達は？」

レオン「道中で会った生存者だ。敵意は無いようだから安心しろ」

のび太「の、野比のび太です」

優菜「中村優菜です」

優斗「中村優斗だ」

警官「苗字が同じという事は・・・兄妹とかか？」

優菜「まあ、そんなところ。それより、状況を教えて欲しい」

警官「・・・町中の住人が暴徒化している。理由は不明、既にかなりの数の死傷者が

出ている。この学校は避難場所にしてされた。一応救助隊が来る手はずになっているが、期待はできんな……」

優菜「なら、ここに籠城した方がいいか。食料が心配だが、今は後回しだな。中にも暴徒がいるかもしれないし、生存者もいる可能性がある。探索が先だろう」

四人で昇降口から学校に入った

レオン「……静かだな」

のび太「夏休みでも、先生がいるはずなのに……」

警官「……何があるかわからん。用心しろよ」

優菜が左前方にある部屋の表記を見ると、保健室と書かれていた

優菜「保健室なら、薬とかがあるだろうから、貰っておこう」

優菜が保健室を開けようとすると、鍵がかかっていた

優菜『……鍵ごと壊すか？』

すると、保健室の中から子供の声が出た

？「くそ、いったいどうなったんだよスネ夫！」

スネ夫？「ぼ、僕にだってわからないよ！」

のび太「この声は……ジャイアン、スネ夫！」

優菜『ジャイアンとスネ夫!?!』

のび太「おーい、開けてよ！僕だよ、のび太だよ！」

ジャイアン「の、のび太か!?待ってる、今開けるぞ！」

保健室の扉が開き、中に六人の子供がいるのが見えた

ジャイアン、スネ夫、しずかちゃん、出木杉、それと良い子そうな女の子とチンピラ風の男の子。とても小学生には見えない

のび太はすぐに部屋に入って行った

のび太「・・・みんな!!」

静香「のび太さん、無事だったのね！」

スネ夫「まあ、逃げるだけは得意だもんね」

出木杉「・・・いや、それだけじゃないみたいだよ」

優菜『見た事ある顔ばかりだな』

次にレオンと警官が入っていき、考え事をしていた優菜を、優斗が手を引つ張つて保健室に連れ入れた

スネ夫「け、警察だ！助けが来たんだ！」

レオン「・・・期待に応えられなくて悪いが、俺達も逃げてきたんだ」

スネ夫「え〜！ガックシ・・・」

警官「生存者がこんなに・・・。君達、怪我はないか？」

女の子「はい、みんな大丈夫です」

のび太「あなたは、この学校の生徒会長の……」

聖奈「緑川 聖奈（みどりかわ せいな）よ。よろしくね」

健治「俺は同級生の翁娥 健治（おうが けんじ）だ」

レオン「俺はレオン（レオン・スコット・ケネディ）だ」

出木杉「出木杉 英才（できすぎ ひでとし）です」

静香「源 静香（みなもと しずか）よ」

ジャイアン「剛田 武（ごうだ たけし）だ」

スネ夫「僕は骨川 スネ夫（ほねかわ すねお）

久下「久下という」

優菜「中村 優菜だ」

優斗「俺は中村 優斗」

のび太「僕は野比のび太。みんなよろしく」

ジャイアン「みんな、この学校へ逃げてきたんだが、学校の中も安全じゃねえ。とりあえずこの保健室に立てこもっているが、どうすりやいいのか分からねえ」

それから、のび太が皆に話を聞き始めた

優菜「……ホントにドラえもんの世界とバイオが混ざってんだな。しかもレオンが

いて、出木杉がいる・・・そして金田や太郎もいない・・・IDか」

優斗「何の話だそりゃ」

優菜「気にすんな、お前には言っても分からねえ」

優斗「なんだと？やんのか teme」

すると、出木杉が話し始めた

出木杉「よし、じゃあみんな聞いてくれるかい？」

全員が出木杉の方を向いた

出木杉「僕たちは今、完全に孤立している状態だ。救助が来ればいいんだけど、あの状況じゃ、すぐには来てくれないだろうね。最悪、来ないかもしれない。だから、僕たちが自力で何とか生き延びるしかないんだ。そこで、二つのチームに分かれて行動しようと思う。一つは、この保健室を確保しておくチーム。要するに留守番だね。そしてもう一つは、この学校や近辺の街を調べて、物資の調達と、脱出する方法を探すチームだ。これが僕の考えた案だけど、どうだい？」

レオン「・・・悪くないな。闇雲に行動するよりも、しっかりと役割を決めた方が効率がいい」

健治「で、どう分ける？」

レオン「俺は調査に回る。戦力の配分を考えて、久下はここに残った方がいいな」

久下「む……る、留守……か？」

健治「俺は外に出るぜ。お前達はどうするんだ？」

スネ夫「ぼ、僕はここに残るよ！」

ジャイアン「よし、じゃあ俺はここを守ろう」

聖奈「私は調査をします」

静香「じゃあ、私はここでみんなの怪我の治療をするわね」

優菜「戦力的に俺と優斗は別々だな。俺が先に行くからお前は寝てろ」

皆『俺……？』

優斗「……せいぜい死なねえように頑張るんだな」

出木杉「そうか……のび太君はどうするんだい？」

のび太「僕は、調査をするよ。ドラえもんを探さなくちゃならないしね。出木杉は、ここに居て欲しい押し付けるみたいで悪い気もするけど、ここで落ち着いて、今後の計画を立ててほしい」

出木杉「ん……そうかい？のび太君がそういうなら……」

聖奈「という事は、調査チームが私、のび太君、レオンさん、健治君、優菜さん。お留守番が武君、スネ夫君、久下さん、静香さん、優斗さん、出木杉君ね」

スネ夫「システムに侵入して、一回の防火シャッターを開けておいたよ。ただ、二階

より上のシャッターは何故か違うセキュリティを掛けられているんだ。開けるにはもう少し時間がかかりそう」

優菜『さすがのびハザ版スネ夫、仕事が早いな』

スネ夫「あと、これをみんな持っていきなよ。拾ったんだけど、使えるみたい」

スネ夫は皆に、無線機を渡した

優菜『・・・にしても、何で無線機が落ちてたんだ？警察署でも通ってきたのか？』

ジャイアン「よし、解散！」

優斗「優菜」

優菜「あ？」

優斗「銃だ。持ってけ」

優菜「・・・本物か？」

優斗「警察署から盗んだ。このご時世、罪にはならん」

優菜「他の世界では罪だけだな。でも、貰っておこう」

優菜は優斗から銃を受け取った

五人で保健室から出ると、さっそく暴徒が一人襲ってきたので懐に入ってアッパー

カッターをかました

優菜「もう来たのかよ・・・」

健治「今の動き……人間じゃねえ……」

のび太「さすがだ……」

レオン「……」

優菜「俺のことはどうでもいい。まずどう動く？」

聖奈「出木杉君は学校の中や街と言っていましたか？」

健治「せっかくスネ夫がシャッターを開けてくれたんだし、学校の中から調べようぜ」
のび太「そうだね、他の生存者が見つかるかもしれないし」

レオン『……だといいが』

優菜「……しつかり探そうな。把握漏れがないように」

校舎の中は、板を中から打ちつけられた教室が多く、しかも中からは常人ではないようなめき声が聞こえてくる

優菜『さつきはああ言ったもの……こりや生存者がいる可能性はほぼ無いな』

北にある教室には資料室の鍵があった。取ったと同時にゾンビ犬が窓を突き破って入ってきたが、のび太が攻撃を避けながら撃ち殺した

のび太「ハア……ハア……」

レオン「……君、一体何者だ？」

のび太「え？」

レオン「今の射撃技術、戦闘技術は簡単に真似できるモノではない」
健治「のび太っていえば、ここら辺では有名だぜ？青狸と一緒に、いつつもなにかやっ
てるから」

優菜『劇場版では、数えきれないぐらいの人を救ってるしな』

レオン「青狸？タヌキは茶色じゃなかったか？」

優菜「その話は安全なところでしょう。今は探索優先だ」

レオン「・・・君の話も聞きたいのだがな」

優菜「何を？」

レオン「君の身体能力は、このメンバーではずば抜けて高いが、オリンピック選手と
比べても超えている。君は何者だ？どこでその力を手に入れた」

不穏な空気が流れていく

優菜「・・・その話も後だ。でもこれだけ言っておく、俺は敵じゃない」

優菜は先に教室を出た

レオン「・・・全員、あの女と保健室の男の兄妹には気をつけろ」

のび太「・・・分かりました」

次に、西の方に行くと言った給食室を見つけた

優菜「・・・食料あるかな？」

聖奈「いえ、今は夏休みですから何もなにかと……」

中を進むと、血まみれの死体があつた

のび太「給食のおばさんだ！給食、おいしかったな……」

優菜『なんで学校のカレーってあんな美味いんだろうな』

聖奈「……」

健治「……」

レオン「思う所はあると思うが、立ち止まつてる暇はない」

給食室には、6と書かれた敗れたメモと職員室の鍵があつた

のび太「紙切れ？6ってなんだろ……」

優菜「こっちは職員室の鍵か、職員室はどこか分かるか？」

のび太「職員室は、保健室の東だよ」

優菜「なら戻ろうか」

給食室から出て、職員室に向かっていると、北から叫び声が聞こえた

のび太「……悲鳴だ!!!」

健治「北の別校舎への通路から聞こえたぞ！」

通路に行くと、一人の男が二人の暴徒に襲われていた

健治「あれは……！」

のび太「安雄!？」

優菜『安雄っていえば、空き地や河川敷で野球をするときに、いつつも帽子被ってるやつだっけか?生きてたのか?』

安雄は片方の暴徒に馬乗りになれ、もう一人の暴徒に頭を床に押さえつけられていた
安雄「や、やめろ、何する気だ!」

健治「!!あの二人、何か持つてるぞ!」

レオン「茶色い・・・塊?」

聖奈「う・・・動いてない?あれ・・・」

安雄「話せ、や、やめろ」

優菜「おい、まさか・・・」

安雄「やめろおおおおお!!!」

学生の口に茶色いモノを、暴徒が押し込もうとしていた

するとのび太はすぐに銃を取り出し、押し込む手を撃ち、すぐに押し込もうとした暴徒の頭と抑えていた暴徒の脳天を撃ち抜いた

のび太「安雄!大丈夫!」

優菜『今のはのび太が撃つたのか?・・・人を撃てるのか?』

安雄「の・・・のび太?」

レオン「知り合いか？」

のび太「友達です」

優菜「体調は大丈夫か？一旦保健室に戻ろう、安雄を休ませた方が良さだろう」

健治「だな。立てるか？」

安雄「は、はい」

優菜が手を貸し、安雄を立たせた。すると、優菜がグニツと柔らかいの踏んだ

優菜「？・・・さっきの茶色い物体か」

安雄「それ一体何なんだ？生き物・・・だよな？」

レオン「大方、暴徒化の理由だろうな。捕獲しておきたいが、危険すぎる」

優菜「なら、殺しておくか。生かしておく価値はないだろ」

優菜が物体を撃ち殺し、安雄を保健室に連れて行った

ジャイアン「安雄！無事だったのか！」

スネ夫「よく生きてたね」

安雄「ジャイアン・・・スネ夫・・・！」

出木杉「安雄君はどこに？」

レオン「暴徒に捕まって、茶色い物体を口に押し込まれていた」

ジャイアン「茶色いもの？それっつうn」

聖奈「動いていたから、生き物だと思うわ」

久下「生き物を口に押し込まれるって・・・どんな状況だ？」

優菜「何かあるかわからないから、撃ち殺しておいたけど」

出木杉「妥当な判断だと思います。その生き物が今回の事件に何かしら関わっているのは明らかですし、これから気をつけていきましよう」

優菜「・・・で、何でコイツはぐーすか寝てんだ？」

優斗「Zzzz・・・」

優斗はベッドの熟睡していた

久下「彼は、君たちが行った後、すぐにベッドに入って寝てしまったよ」

優菜「ほーう？」

優菜はベッドの前に立ち、毛布を引つpegした

優菜「起きんかゴラア!!」

優斗「・・・おはよう？」

優菜「おはようじゃねえ、何でこの状況で寝れるんだよ・・・。とりあえず起きろ」

優菜は手を貸して優斗を起こした

優菜「今度はお前が行け、寝てたんだから疲れはとれてるだろ」

優斗「そう強く言うなって、分かったから」

優斗は優菜の頭を少し撫でて、ベッドから出た

優菜「は……え……何で頭……」

優斗「それじゃあ行くか。昨日手に入れたアレで色々試してみたい」

優菜「アレ？アレって何だ？」

優斗「？……ああ、お前はまだ知らないか。寝たら分かるさ。ほらほら」

優斗は優菜をベッドに寝かせた

優菜「何で寝る？」

優斗「寝てから考えろ（早速試してみるか）」

優斗の指が光ったかと思ったら、激しい眠気に襲われ寝てしまった

第七十九話（僕のヒーローアカデミアの軌跡『第一話』より）

「ヒーローになるために」

・・・俺は昨日？優斗に眠らされたはずだ

でも、気づけば路地裏に倒れているではないか

優菜「・・・どういう事だ一体」

優斗「ワケ分かんねーな」

真横で優斗も倒れていた

優菜「お前もいるのかよ!!・・・そういや、昨日は俺に何をしたんだ？」

優斗「？何の話だ？」

優菜「いや、昨日俺に指差して何かしただろ」

優斗「だから知らねーっ t」

すると、近くから妙な雄たけびが聞こえてきた

？「おおおオオオオ!!!」

優菜「なんだ？今の声」

通りに出て、声の方を見ると・・・泥の塊みたいな奴が、中学生ぐらいの子供にまとりついている

野次馬に混じって、様子を見てみた

中学生はもがいてるな。でも、アレは一人じゃ抜け出せないぞ

・・・あれ？あの中学生、爆発してね？

野次馬の女「頑張れヒーローく〜!!」

・・・ヒーローとかいるのか

優斗「俺たちの出る幕はなさそうだな」

でかい女ヒーロー「私二車線以上じゃなきや無理く〜く〜!!」

木のヒーロー「爆炎系は私の苦手とするところ・・・!!今回は他に譲ってやろう!!」
水を出してるヒーロー「そりゃサンキュー、消化で手いっぱいだよ!状況どーなってるの!?!」

ガタイのいいヒーロー「ベトベトでつかめねえし、良い個性の人質が抵抗してもがいてる!おかげで地雷原だ、三重で手エ出し辛え状況!!」

なんだよ助けられねえのか・・・?!

優斗「個性ってなんだ?」

優菜「知るか・・・多分あれだろ、魔法みたいな」

捕まってる中学生がこちらを泣きそうな目で見た

優斗「・・・出る幕っぽいな」

優斗と一緒に野次馬の中から、飛び出した

すると同時にもう一人飛び出してきた

ガタイのいいヒーロー「バカヤロー!! 止まれ!! 止まれ!!」

捕まっている中学生「デク・・・」小聲

優菜「何してんだ!?!」

デク? 「わからない! 考えるより体が先に!!」

優斗「おおくよく聞くやつだな」

優菜「・・・こういうタイプは言っても聞かねえからな。よし、俺達を取り出すから。

連れてけ」

デク? 「わかりました!」

まず、デクが背負っていたリュックを化け物にぶつけた

化け物「ぬっ」

優菜「よくやった! クロノス、ザ・ワールド」

俺と優斗以外の時間を止めた

優斗「引っ張り出すか」

捕まっている中学生を引っ張り出した

優菜「こいつはさっきの奴の所に」

デクの所に中学生を投げ、時間が動き出す

捕まっていた中学生「は？」

優菜「デクって言われてたな？早く連れて行って逃げな！」

デク「う、うん！行こうかつちゃん！」

かつちゃん「はあ？」

ガタイのいいヒーロー「俺たちも行くぞ！」

化け物「邪魔しやがって〜!!ぶっ殺す!!」

化け物が向かってくる。思ったより早い

優斗「お前さく、そのドロドロの身体も個性ってやつなんだろ？こんなことして何か

利益があるのかよ」

化け物「黙れ！」

ダメだな、聞く耳持っちゃいねえ

優菜「やるぞ、優斗」

優斗「了解」

優菜「クロノス、カオス」

優菜「終わりだ」

クロノスが塊を空間に殴り入れたところで、穴が閉じた

野次馬A「何だあいつ……」

野次馬B「相当強かったぞ」

野次馬C「新しいヒーローか？」

優菜「（……目立ちすぎたか）カオス、今のやつが入った空間を瓶にできるか？」

カオス「ああ、できるが？」

優菜「瓶にしてくれ、こいつはこの世界の刑務所に入れる」

カオスが先ほどの空間を瓶に圧縮し、優菜に渡した

瓶の中にはヘッドロがパンパンに入っており、所々に目や口が見えた

それを、先ほど止めに来ていたヒーローに渡した

優菜「それじゃ」

デク「ま、待ってよ」

優菜「……なんだ？」

デク「貴方新しいヒーローですか？だったら名前を……」

優菜「ヒーローじゃないし、まだ学生だ」

デク「え？」

そして、穴をどこかのビルの屋上に繋いだ

優菜「優斗、行くぞ」

優斗「ああ」

そして、ビルの屋上へ

騒ぎ声が聞こえるが、気にせず穴を閉じた

すると、上空から声が聞こえてきた

神様「大丈夫だったかのう」

優菜「今頃かよ」

神様「まあまあ、住む家とか雄英高校の試験受ける紙も出してきたんじゃぞ。筆記試験に関しては、参考書を家に置いてあるぞ。家の場所は地図アプリに送っておいたぞい、A組の人数も二人分増やしておいた。B組もの。それじゃあの」

神様の声は聞こえなくなった

優菜「言うだけ言って帰りやがったあのジジイ……。雄英高校って事は、やっぱりここはヒロアカか」

スマホで自宅を検索すると、あるマンションが出てきた

優菜「ここね……。律儀に、部屋番号まで書いてるし。それじゃあ、帰った卵勉強だな。優斗も」

優斗「そんな殺生な」

カオスの空間を経由しそのマンションへ帰った

試験当日、雄英高校へ

優菜「ここか・・・」

優斗「地味に試験って初めてだ」

優菜「あく、秀尽の試験は私の中にいたからな・・・」

優斗「というか、二人の時ぐらい俺にしたらどうなんだ？」

少年「間に合った・・・」

二人で話していると、一人の少年が走ってきた

優菜「ん？」

デク「え？」

二人は顔を見合わせた

優菜「・・・あ、お前確か・・・」

デク「あの時の！」

優菜「そうだよな？デク、だったか・・・」

デク「本名じゃないんだけどね」

優菜「何だ、あだ名か。じゃあ本名は？」

出久「緑谷出久って言うんだ」

優菜「まあ、デクのほうが呼びやすいか。行くぞ」

優菜たちが歩き出すが、出久は立ち止まったままだった

振り返ってみると、足がガクガクと震えていた

優菜「・・・足・・・震えてるぞ」

出久「だ、大丈夫・・・」

出久が後ろ足から一歩踏み出したが、それが前の足に当たり絡まってしまった

優菜「あ」

とどのつまり、足を引っかけたのだ

・・・いや、浮いてるな？

女の子「大丈夫？」

道を歩いている女の子から声をかけられた

出久「わっえ!？」

女の子「私の個性、ごめんね勝手に。でも転んじやつたら演技悪いもんね。緊張する

よねえ」

女の子が出久をしつかり立たせて、個性を解除して降ろした

デク「へ・・・あ・・・えと・・・」

女の子「お互い頑張ろう！」

女の子は歩いていってしまった

優菜「……とりあえず行こう。な？」

デク「う、うん」

それから、試験の説明を受けた

いくつかの会場へ分かれて、やるらしい

そして、ロボットを壊してポイントを稼ぐという方式になる

1ポイント、2ポイント、3ポイントという感じで強さやデカさに比例してポイントも大きくなる

しかし、メチャクチャデカイ0ポイントの邪魔者ロボットもいるという

それで説明も終わり、会場へ

優斗も、出久とかもいないっぽいな

他の人たちの見覚えもない……。ということはA組のやつはいないのか

でも、他の人に悪いからある程度抑えるか

放送『はいスタート』

1、2、3の合図も無しに試験は始まった

しかし、優菜はすぐに中へ走っていき、次々にロボットを破壊していく

優菜「次、次、次」

優菜はロボットの渦中まで行き、すべて破壊していった

優菜「パレスの中と同じみたいに、身体が軽いな」

結局、ほとんどのロボットを壊してしまった

優菜「もういいいか？」

周りを見回し、ロボットを探していると、どこから爆発音がした

音の方を見ると、ビルを大きく超えた大きさのロボットがいた

優菜『0ポイントのやつか……。アレはやつても無駄だ。無視しよう』

優菜が避けようと反対側に逃げていると、声が聞こえてきた

男子「誰か……。助けてくれ……」

優菜『アイツ、今0ポイントロボットが出てきた時の瓦礫に足つぶされたか』

しかし、皆は無視して逃げていってしまった。まあ、ライバルが居なくなるなら、助けたりしないか

優菜『仕方ねえな』

優菜は男子の所に行き、手を差し出した

優菜「大丈夫か？」

男子「す、すまねえ……」

アリエルを出し、男子の足を治していく

0ポイントロボットが近づいてくる

男子「おい、来るぞ！」

優菜「・・・仕方ねえな、カオス。ここに穴作って、アイツの前にでつかく穴作つてくれ。空間歪ませて、入った奴がでかくなるようにな」

要はガリバートンネルである

男子「お前・・・何言ってるんだ？」

優菜「そこで見とけ」

ロボットの前へ穴が繋がった

そして、威力を多少上げるために、波紋の呼吸をした

優菜「オーバードライブウウ!!」

穴に入った拳は、ビル程の大ききで0ポイントの前に出現し、殴り飛ばした

男子「0ポイントが吹っ飛んで行った!?!」

優菜「よし、お前の脚ももう治っただろ。立ってみろ」

手を貸し、男子を立たせた

男子「あんた一体・・・」

優菜「ん？そうだなあ・・・限りなく人間離れた人間・・・かな？」

放送『終了く!!!!』

放送の音が大きすぎて、耳鳴りを起こしてしまった

優菜「うっさ」

男子「すまない、今回は本当に助かった。俺は落ちたと思うが、またどこかであったら・・・」

優菜「ああ」

その後優斗と合流し結果を待つ為に、家へ帰った

第八十話（僕のヒーローアカデミアの軌跡『第二話』より）

「I—A」

優斗「お〜い」

優菜「どうした？」

優斗「届いてるぞ、結果」

優菜「・・・お前あっさりしすぎじゃね？」

優斗「見るの？見ないの？」

優菜「見る」

リビングのテーブルで封筒を開け、投影機？みたいなものが出てきて、変に影が濃いおっさんが投影された

優斗「誰？」

優菜「参考書で見たぞ、平和の象徴オールマイトだよ。確かNO.1ヒーロー」

優斗「マジかよ。雄英って相当凄い所なのか？」

優菜「オールマイトの母校だ」

すると、オールマイトが喋り始めた

オールマイト「今回は君達の試験結果を言うよ。まず優斗君、君はギリギリだがA組には入れたよ！ハハハハ!!よくやった！そして優菜君！君の成績はすごいね！まさか、あのスピードで壊してしまうなんてね。なかなかできないよあんな事、自分の能力をしつかり理解している証拠だ！」

優斗「お前、本気でやったのか？」

優菜「当たり前じゃん」

オールマイト「来たら、是非君の個性を詳しく教えてくれよ！というわけで二人とも合格！」

優菜「よっしやーッ！」

優斗「そんなに喜ぶことか？」

優菜「そりやそうだろ、倍率何倍だと思ってんだ。俺らで言う、東大だぞ？」

優斗「へえー、そりや凄いな。・・・俺よく合格できたな」

優菜「もはや、裏で神様が何かしてんじやねえのかって感じだしな」というわけで登校初日、学校・・・の前に

登校中、ヴィランが暴れている所を目撃した

どうやら、子供をさらったらしい

優斗「やってんな・・・」

優菜「行つちやダメだぞ。この世界では、ヒーローの資格がない限り、個性を使うのはダメらしい。アレを止める常人なんていない、止めれば捕まるぞ」

優斗「・・・なら見捨てるのか？」

優菜「ヒーローが行つてるだろ。仕事を横取りするわけにも行かん。・・・危なそうだったら、クロノスを出す」

優斗「それでこそ優菜だ」

だが、ヒーローが子供を助け、心配は杞憂に終わった

それから、電車に乗って最寄りの駅へ

優菜「・・・スカートについていつまでたつても慣れないな」

優斗「ジヨナサン・・・だったか？あんときの世界もスカートじゃなかった？」

優菜「うるせえ、お前には分かんねえさ。この気持ちは」

優斗「せいぜい風に気を付けるんだな」

それから最寄り駅で降り、雄英高校の敷地に入った

優斗「えつと・・・俺らはA組だよな？」

優菜「ああ、こつちだ」

優菜がA組の教室に歩いていき、後ろを優斗が付いて行った

そして、教室へたどり着いた

出久「あつた・・・ドアでか」

優菜「あ、デク」

出久「あつ優菜さん！優斗君！二人もA組になれたんですね！」

優斗「じゃあ、三人で入るか？」

出久「はい！」

出久が頷き、教室に入ると

眼鏡「机に脚をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか
!？」

かつちゃん「思わねーよてめーどこ中だよ端役が！」

さつそく喧嘩を始めてる奴がいた

優斗「oh・・・」

優菜「うるさいと思つたら、お前ちよつと前に助けてやった奴じゃねえか。そつちの
金髪の」

かつちゃん「あ？・・・あ、てめえは！」

かつちゃんが向かってきた

かつちゃん「ぶつ殺す！」

右の大振りをしてきたので、後ろに避けた

優菜「おいおい、恩を仇で返すのかお前は」

・ ・ ・ お？こいつの手、光出したな

優菜「優斗、来い！」

優斗「は？」

優斗を引つ張つて、入れ替わる様に離れた

すると、かつちゃんの手が爆発し、優斗に直撃した

かつちゃん「避けてんじやねえぞモブがあ!!」

優菜「本気でやっていい訳？」

眼鏡「君たちやめないか！」

優斗「おい優菜！お前分かっててぶつけやがったな!!」

かつちゃん「死ねええ!!」

かつちゃんは優菜の顔面に手を付け、爆破しようとした

優斗「どけコラ!!」

優斗はかつちゃんを下に押しながら、優菜の頭にかかと落としを食らわせた

優菜「へぶっ!!」

優菜は床に落ちる瞬間に、受け身を取ってダメージを最小限に抑えた。ちなみにかつ

ちゃんは普通に落ちた

そこを優斗が殴ろうと上から落ちてくる

優菜はギリギリで攻撃を避けて、立ち上がり、優斗も立ち上がる

優菜「なんでお前が殴ってくるんだよ！」

優斗「お前、俺を身代わりにしただろ!!」

優菜「さっきのは事故だよ！」

優斗「どつちにしろ謝れよ!!」

女の子「え? どういう状況？」

教室の外から女の子が顔を出した

出久「あれ? 君って確か」

女の子「あ! そのモサモサ頭は!! 地味めの!! プレゼントマイクの言ってた通り受かったんだね!! そりやそうだ!! パンチ凄かったもん!!」

出久「いや! あのっ・・・! 本っ当あなたの直談判のおかげで・・・ぼくは・・・その・・・」

女の子「へ? 何で知ってるの？」

出久「~~~~」

出久は顔を赤らめている

それを優菜たちは、真顔で見ている

優斗「……続きやる？」

優菜「……やめとくわ」

優斗「なあなあ、先生もまだ来てないし、自己紹介でもしたらどうだ？」

麗日「それもそうやね、私は麗日お茶子です！」

飯田「ボ……俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ」

優菜「あ、さつき私のせいで言えなかつたから……」

優斗「俺たちは、俺が優斗でこつちが優菜だ。俺が兄だからな」

優菜「そこ毎回言うの？」

？「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

声のした方を向くと……寝袋を着て立っている人がいた

？「ここは……ヒーロー科だぞ」

皆『なんか!!!いるうう!!!』

？は寝袋から出てきた

先生？「ハイ、静かになるまで八秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね」

出久「てことは……この人もプロのヒーロー……？」

相澤「担任の相沢消太だ、よろしくね」

え・・・？寝袋からなんか出してる・・・

相澤「早速だが、体操服を着てグラウンドに出ろ」

寝袋から出された体操服を受け取り、着替えてグラウンドへ

出久「個性把握・・・テストオ!？」

麗日「入学式!?!ガイダンスは!?!」

相澤「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事出る時間ないよ」

麗日「・・・!?!」

相澤「雄英は自由な校風が売り文句、そしてそれは先生側もしかり」

優斗『つまり、どういふことだっただけよ?』

優菜『下手なモノマネはやめろ』

相澤「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50M走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈、中学のころからやってるだろ?個性禁止の体力テスト、国は未だ画一的な記録をとって平均作り続けている、合理的じゃない。まあ文部科学省の怠慢だよ。爆豪、中学の時ソフトボール投げ何mだった?」

爆豪「67m」

相澤「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい。早よ、思いつきりな」

爆豪「んじやまあ・・・死ねえ!!!」

爆豪は掛け声とともに、爆発させボールを投げ飛ばした

優菜『・・・死ね?』

優斗「めちやくちやとんだな・・・」

優菜「あんなのできると思う?」

優斗「無理だろ」

優菜「お前は私の中にいたんだ。だったら、私と同じように使えるだろ」

優斗「・・・それもそうか」

優菜「私と同じようにやればいい」

すると、相澤先生の持っている端末に距離が出た

相澤「まず自分の「最大限」を知る、それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

705. 2m

男子1「なんだこれ!!すげー面白そう!」

男子2「705Mってマジかよ」

女子「個性思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

相澤「・・・面白そう・・・か。ヒーローになるための三年間、そんな腹つもりで過

ごす気であるのかい?・・・よし、トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除

籍処分としよう」

皆「はあああ!？」

相澤「生徒の如何は先生の自由、ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」

麗日「最下位除籍つて……!入学初日なんですよ!?!いや初日じゃなくても……理不尽すぎる!!」

相澤「自然災害……大事故……身勝手なヴィラン達……いつでもここから来るかわからない厄災。日本は理不尽にまみれてる。そういうピンチを覆していくのがヒーロー……放課後マツクで談笑したかったならお生憎、これから三年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける「P I U S U L T O R A」さ。全力で乗り越えて来い、さてデモンストレーションは終わり、こっからが本番だ」

第一種目：50M走

機械「ヨイ……」

優菜「カオス」

機械「スタート!」

優菜「ホール」

※どこ○○ドア

機械「0秒91!」

麗日「速っ！」

優菜「こうすりやいい」

優斗「おお！お前頭の回転速いんだな」

優斗、1秒02

第二種目：握力

優菜「ほっ！」

優菜、60 kg

優菜『女子の握力じゃねえ！』

優斗「ふん！」

優斗、70 kg

優斗「さすがにこれは俺が勝ったな！」

瀬呂「540キロて!!あんたゴリラ!?タコか!!」

峰田「タコつてエロいよね・・・」

優菜「あれは、人間の域を超えてる」

優斗「間違いない」

第三種目：立ち幅跳び

優菜「カオス!!」

優菜、20M

優斗、20M

優斗「もつと行けたな」

第四種目：反復横跳び

これは普通にやった

優菜140回

優斗130回

優斗「負けたー!!」

優菜「これで一步リードだな」

第五種目：ボール投げ

麗日「せい！」

麗日が個性を使い、あるマークが出た

上鳴「∞!!?すげえ!!∞が出たぞー!!!」

優菜「次はデクか」

飯田「緑谷君このままだとマズいぞ・・・?」

爆豪「つたりめーだ無個性の雑魚だぞ！」

飯田「無個性!?彼が入試時に何を成したか知らんのか!?」

爆豪「は？」

デクが・・・投げた！

・・・でも、あんまり飛ばなかったな

46mか

出久「な・・・今確かに使おうって・・・」

相澤「個性を消した。・・・つくづくあの入試は・・・合理性に欠くよ。お前のような奴も入学できてしまう」

出久「消した・・・!!あのゴーグル・・・そうか・・・!抹消ヒーローイレイザーヘツド!!!」

佐藤「イレイザー?俺・・・知らない」

芦戸「名前だけは見たことある!アングラ系ヒーローだよ!」

相澤「見たとこ・・・個性を制御できないんだろ?また行動不能になって、誰かに助けてもらうつもりだったか?」

出久「そっそんなつもりじゃ・・・!」

相澤「どういうつもりでもいい、周りはそうせざるを得なくなるって話だ。昔暑苦し
いヒーローが大災害の渦中、一人で千人以上を救い出すという伝説を作った。同じ蛮勇
でも・・・お前のは一人を助けて木偶の棒になるだけ、緑谷出久、お前の力じゃヒーロー

にはなれないよ……。個性は戻した……。ボール投げは二回だどつとと済ませな」

優菜「あれ？先生目薬してんな……。授業中に？」

優斗「ドライアイなんじゃね？」

青山「彼が心配？僕はね……。全つ然」

麗日「ダレキミ」

飯田「指導を受けていたようだが」

爆豪「除籍宣告だろ」

優斗「投げるぞ」

相澤「見込み……。ゼロ……。」

いや、なんか出久が小声で言ってるな

出久「今、SMASH!!!」

出久の投げたボールはさつきと違い、遠くに飛んで行った

出久「あの痛み……。程じゃない!!」

記録が出た

705.3m

出久「先生……。！まだ……。動けません」

相澤「こいつ……。！」

麗日「やつとヒーローらしい記録出したよー」

飯田「指が腫れ上がっているぞ。入試の件といい・おかしな個性だ・」

青山「スマートじゃないよね」

爆豪は、キレながら手で爆発を起こしていた

爆豪「どーいうことだコラ！ワケを言えデクてめえ!!」

出久「うわああ!!」

優菜「おい！」

すると、爆後は布みたいなので先生に引つ張られた

爆豪「んぐえ!!ぐつ・・んだこの布固つ・!!」

相澤「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ「捕縛武器」だ。まったく何度も個性を使わずなよ・・俺はドライアイなんだ」

皆『個性すごいのもったいない!!』

優菜『だから目薬刺してたのか』

優斗『いったら？ドライアイって』

相澤「時間をもつたいない。次準備しろ」

麗日「指大丈夫？」

出久「あ・・うん・」

優菜は腕を掴み、怪我を見た

優菜「お前これ・・・折れてるだろ」

出久「え！いや・・・その・・・」

優菜「治してやるからちよつと来い」

出久の腕を引つ張つて、校舎裏に歩いていった

出久「え！ちよつと」

皆から見えないところに着いた・・・つて

優菜「あれ？何でオールマイイトいんの？」

オールマイイト「いや・・・ちよつと気になつてね！」

優菜「デクが？」

出久「！」

優菜「似てるよな？個性が・・・二人ともスマッシュつて言つて個性使うしね」

出久「いや、別に何も」

優菜「まあ別にいいけど、指出せ」

しつかりつ確認し、折れてることを確認した

優菜「・・・オールマイイト、個性見たいつて言つてたよな？」

オールマイイト「優菜君だね？確かに言つたよ！」

優菜「アリエル」

アリエル「はい？」

出久「え!？」

オールマイト「常闇くんのダークシャドウみたい、具現化するタイプの個性かい？」

優菜「この折れた指治してやって」

アリエル「これですか？」

アリエルは出久の手を持った

優菜「そうそれ」

アリエル「分かりました」

アリエルは出久の指を治した

出久「な、治った!？」

オールマイト「これが、君の個性かい？試験の時の個性じゃないみたいだが」

優菜「これだけじゃないですけど……てかここ居ていいんですか？」

オールマイト「これは三人の秘密に！ね？」

優菜「ははは……わかりました、じゃあ行きますね」

出久「そ、それではまた」

そして、皆の所に戻った

麗日「あ！治ってる！何で？」

優菜「終わってから話すから、とりあえず……って私か次！」

相澤「喋ってる暇あったら準備しろ」

先生からボールを受け取り、投げる場所へ

優菜「ホール」

下に穴を作り、そこにボールを落とした

そして出てきた数字は……

2万km

皆「二万!?!」

優菜「二回目はやらなくていいですよね？」

相澤「いや、やれ」

優菜「ええ……」

二回目は普通に投げて

516mだった

優斗「じゃあ俺も」

2万km

そして517m

飯田「なんとという兄妹だ・・・」

まああとは、とくに能力を使わずに普通にやった

相澤「んじゃパパッと結果発表、トータルは単純に各種目の評点合計した数だ。口頭で説明するのは時間の無駄なので一括開示する」

端末から、ランキングが虚空に映し出され、自分の名前を探した

相澤「ちなみに除籍は嘘な」

皆「・・・!?!」

相澤「君等の最大限引き出す合理的虚偽」

出久&麗日&飯田「はーーーーー!?!?!」

百「あんなの嘘に決まってるじゃない・・・少し考えればわかりますわ・・・」

相澤「そゆこと、これにて終わりだ。教室カリキュラム等の書類あるから目え通しとけ」

それから教室に戻って

優菜「安心したく、先生の気が変わって」

百「何言ってるんですの？合理的虚偽とってたじゃないですか」

優菜「八百万百・・・だったよね？推薦で入った」

百「？そうですが」

優菜「なんもわかつちやいなね、あの目は本気だった。私達全員を除籍処分にするかもしれない様な目をしてた」

すると、相澤先生が教室に入ってきた

相澤「お前ら書類に目は通したか？細かいところ説明するから席に座れ」

第八十一話（僕のヒーローアカデミアの軌跡『第三話』より）

「能力の弱点」

次の日の事

俺達は普通に授業を受けていた

マイク「んじゃ次の英文のうち間違っているのは？エヴィバディヘンズアツプ盛り上がれー!!!」

午前は必修科目・英語などの普通の授業！

昼は大食堂で一流の料理を安価で頂ける！

その料理を作るのは、クックヒーローランチラツシュ!!

ランチラツシュ「白米に落ち着くよね最終的に!!」

そして午後の授業！いよいよだ！ヒーロー基礎学!!

オールマイト「わーたーしーがー!!」

出久「来っ」

出久が被せて言おうとしたが、一瞬遅れて

オールマイト「普通にドアから来た!!!」

尾白「オールマイトだ・・・!!すげえや本当に先生やってるんだな・・・!!!」

芦戸「銀時代のコスチュームだ・・・!画風違い過ぎて鳥肌が・・・」

オールマイト「ヒーロー基礎学!ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う科目だ!!早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

爆豪「戦闘・・・」

出久「訓練・・・!」

オールマイト「そしてそいつに伴って・・・こちら!!!」

オールマイトがそう言うと、右のカベからいくつもの引き出しが出てきた

オールマイト「入学前に送ってもらった「個性届」と「要望」に沿ってあつらえた・・・コスチューム!!!」

皆「おお!!!」

優斗「俺等のつてあんのかな？」

優菜「そもそもそんなものは送ってないと思うが・・・」

しかし、皆は取りに行ってる

優菜「探してから考えよう」

探してみたら、隅にあった

優菜「あつたよ」

優斗「安心したわ。言い訳思い付かなかったし」

優菜『ん？そういや・・・』

優菜はオールマイトに近づいていく

優菜「先生、私の個性見たいって言ってたけど個性届見たんじやないの？」（小声）

オールマイト「ああ、見たには見たんだが・・・ペルソナなんて個性初めて聞いてね！

みたほうが早いと思つたのさ！」（小声）

優菜「あ、そういうことですか」

オールマイト「よし、着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ!!」

皆「はーい!!!」

着替えてグラウンド・β

オールマイト「恰好から入るつても大切な事だぜ少年少女!! 自覚するのだ!!! 今日か

ら自分は・・・ヒーローなんだと!!」

出久「皆早い・・・!!」

優菜「急げ〜デク〜」

オールマイト「さあ!! 始めようか有精卵共!! 戦闘訓練のお時間だ!!!」

デクも、皆と並んだ

麗日「あ、デク君!?! かつこいいね!! 地に足ついた感じ! 要望ちゃんと書けばよかつたよ・・・パツパツスーツになった」

峰田「ヒーロー科最高」

出久「ええ!?!」

優菜「私たちはまさかの・・・」

優斗「怪盗服」

優菜「慣れてはいるが」

優斗「周りとズレすぎ」

麗日「優菜ちゃんたちもカッコいいよ!」

優菜「まあ怪盗服は動きやすいし悪くはないか。変なの着させられるよりマシだし」

オールマイト「良いじゃないか皆カッコいいぜ!!」

飯田「先生! ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのですか!?!」

オールマイト「いいや! もう二歩先生踏み込む! 屋内での対人戦闘訓練さ!! ヴイラン退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内のほうが凶悪ヴイラン出現率高いんだ。監禁・軟禁・裏商売・・・このヒーロー飽和社会、ゲフン、真に賢いヴイランは屋内に潜む!! 君等にはこれからヴイラン組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦を行ってもらう!!」

蛙吹「基礎訓練もなしに？」

オールマイト「その基礎を知るための実践さ！ただし、今度はぶつ壊せばオツケーなロボットじゃないのがミソだ」

百「勝敗のシステムはどうなります？」

爆豪「ブツ飛ばしてもいいんすか」

麗日「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか・・・？」

飯田「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか」

青山「このマントヤバくない？」

オールマイト「んんん、聖徳太子イイ!!!いいかい!?状況設定は「ヴィラン」がアジトに「核兵器」を隠していて「ヒーロー」はそれを処理しようとしている！「ヒーロー」は制限時間内に「ヴィラン」を捕まえるか「核兵器」を回収すること「ヴィラン」は、制限時間まで「核兵器」を守るか「ヒーロー」を捕まえること、コンビ及び対戦相手はクジだ！」

飯田「テキトーなのですか!？」

出久「プロは他事務所ヒーローと急増チームアップすることが多いし、そういう事じゃないかな・・・」

飯田「そうか・・・！先を見据えた計らい・・・失礼しました！」

オールマイト「いいよ!!早くやろ!!」

飯田「ん?先生!この人数では一チーム余りますがどういう事でしょうか」

オールマイト「一チームだけ一対一でやってもらうよ!」

結果・・・俺と優斗が一対一になった

優菜「よし、早速こい」

悠「わかった」

出久「なんで!?!」

デクと爆豪がやってる間に、どっちがペルソナの誰を使うか決めようと思ったんだが・・・

優斗「ハッキリ言つて全員くれ」

優菜「それは無理」

優斗「いいじゃねえか!お前は波紋あるし!」

優菜「波紋だけでもキツイわ!」

優斗「だつたらアリエルだけやる」

優菜「それこそおかしいだろ!」

優斗「これ以上は無理だ」

優菜「・・・あくもうわかったよ」

切島「お〜いお前らの番だぞ」

優菜「え!?! 早ない!?!」

優斗「行くぞ」

ヴィランが優斗、ヒーローが俺

最上階に核と優斗がいる

優菜「一階には何もいないか・・・上に行こう」

階段を上り進むと後ろから攻撃が

優菜「!!」

優菜は屈んで避けた

ギリギリで気付いたが、首に鎌がかけられていた

優菜「最初はお前かよ・・・ヘル」

ヘル「やるからには本気でやるわよ」

優菜「殺す気つでことか?」

ヘル「魂はちゃんと回収してあげるわよ」

優菜「死ぬのはごめんだ」

一気に詰める

呼吸をし、波紋を帯びた拳で殴ったが・・・鎌でガードされた

優菜「波紋は間接的にでも流れるんだぜ？」

ヘルの手にも波紋が伝わり、手から鎌が離れかけた

ヘル「ッ！」

ヘルは、鎌をしつかりつかみ、優菜から離れた

優菜「お前には見せたことねえが・・・波紋はこんなこともできるんだぜ？」

ヘル「こんなこと？」

優菜は波紋の呼吸をし、腕の表面に波紋を流す

そしてアリエルに、身体をギリギリ擦るぐらいに銃撃攻撃をしてもらった。その摩擦で腕が発火し、波紋に乗って身体全体に

ヘル「何よそれ!! 熱くないの!？」

優菜「熱いわ!!」

そして一気に近づくと

優菜「緋色の波紋疾走（スカーレットオーバードライブ）!!!」

ヘル「キヤアアア!!」

腹を殴り、炎がヘルの服に燃え移った

ヘル「熱い！燃え移ってる!! 燃え移ってるって!! 消してー!!!」

優菜「先に進んでいいか？」

ヘル「いいから助けて!!」

ヘルの火を消し、アリエルにヘルの火傷を治してもらった

ヘル「はああああ助かった……」

優菜「先、行かせてもらおうぞ」

ヘル「……勝手にしなさい。私もう知らないから」

優菜は上へ上がっていった

ヘル「……こんな事になるなら、やめておくんだったわ。怪我しただけじゃない」

沙姫を進むと今度は、気配のなかった場所から殴られた

優菜「うげっ!」

クリーンヒットしたが……何とか倒れるのは堪えた

優菜「いきなり来たってことは……時間が止まったか、空間に穴開けて殴ったか……」

穴は見えなかったってことはクロノスかな？」

クロノス「そうだ、私がやった」

優菜「やつぱりかよ」

カオスなら攻略法はなんとなく思いついたが……クロノスはヤバいかもしれない

クロノス「時間を止められては、お前は何もできない」

優菜「なら……先手必勝!」

ギリギリ時を止められカウンターを食らった

優菜「グハッ」

クロノス「さあ、どうやって私を攻略するのだ？」

優菜「へへっ・・・分かんね」

クロノス「・・・終わりにしてやろう」

次に時間を止められれば俺はもう終わりだ！なら・・・

呼吸を強めて、横の壁をぶっ壊した

クロノス「!?何をしている!!」

優菜「・・・どうやら俺の運勝ちらしい」

壊れた壁の中からは、液体が流れだした

クロノス「水!？」

優菜「本当に水が通つてるとは思わなかったが、おかげで助かった!!」

流れ出た水を口に含む

クロノス「何を・・・しているんだ？」

優菜「波紋カッター!!」

口から手裏剣のような水を撃ちだし、クロノスがガードする

クロノス「グッ！」

波紋カッターに続いて突っ込み、隙を与えずに攻撃を叩きこむ

優菜「山吹色の波紋疾走!!」

クロノス「ヌアアアア!!」

クロノスが床に倒れこんだ

クロノス「・・・ふっ強いじゃないか十分」

優菜「先に進ませてもらおうぞ」

クロノス「ああ、終わったら戻って来い」

もう一階上へ

優菜「この階が終わったら次は優斗か・・・」

すると、突然穴が目の前に出てきた

そして穴から腕が飛び出し殴りかかってきた

優菜「ッ！」

攻撃を避けて腕を掴み引っ張り出す

優菜「オラア!!」

カオス「おわっ！」

穴が広がり、相手が出てきた

カオス「まさか引っ張り出されるとは・・・」

優菜「あのまま逃がしていたら、さすがにきつい」

カオス「まっ、それもそうだな」

優菜「悪いが速攻で終わらせてもらおう。もう体力がきついんでな」

アリエルの銃撃をカオスに当てようとすると、当たる寸前に穴を作り避けた
そしてその穴の先は、優菜の顔面だった

優菜「！」

弾を咄嗟に避けたが、右頬に少しかすった

優菜「ホント、しんどいわ。受ける側になったら」

カオス「いやいや、わかってただろ？」

優菜「多分お前の攻略法もな」

カオス「なに？」

優菜「オラア！」

カオスの顔面を殴ろうとすると、やはり穴を作られたので止める

カオス「俺には何も効かねえってわかってるだろ？」

優菜「いや、これでいい。これがいい！」

穴の後ろ側から自分の顔面めがけて殴ると、カオスの顔面に当たった

カオス「ガッ！」

優菜「やっぱりか・・・こっち側から殴って返ってくるなら、反対側から殴ったらお前の方に行っただか」

えーつとわかるかな？↓が攻撃で、○が穴だとすると

↓○力だと優↑○と攻撃が帰ってくるわけ

だから優○↑と攻撃すると○↓力と向こうに行くわけ

俺の語彙力じゃ、これ以上に分かりやすく説明できる気がしない

カオス「ハッ！早く立て直さないて」

優菜「震えるぞハート！燃え尽きるほどヒート！刻むぞ血液のビート！山吹色の波紋疾走！！」

カオスに波紋の一撃を食らわせ、殴り飛ばした

カオス「グオオオオオオ!!」

そして、カオスは壁に激しくぶつかつた

カオス「いや〜負けた負けた！」

優菜「後は、優斗だけか？」

カオス「いや、イフリートの奴もいるぞ」

優菜「じゃあ二対二か」

アリエルに傷を回復してもらい、上に向かう

廊下を歩き広い場所に出ると、とうとう優斗と対面した

優斗「やっぱり上がって来たか」

優菜「結構大変だったんだぞ」

優斗「だろうな、じゃあ・・・やるか」

優菜「ああ」

二人とも同時に距離を詰める

優斗「撃つてくると思っていただけだ」

優菜「そんなこったろうと思って、詰めたんだよ！」

そう言いながら、二人はお互いの顔を殴りあつた

優菜「うおおおお」

優斗「うおおおお」

殴り飛ばそうとするが、どっちも引き下がらない

優菜「オラア!!」

もう片方の腕で殴つたが、避けられた

優斗「イフリート！」

イフリート「オラオラオラオラ」

波紋の呼吸をし、拳を前に突き出す

優菜「ズームパンチ！」

すると、腕が手元から一気に伸び、イフリートの顔面に当たった

優斗「伸びた!？」

優菜「止めだ食らえ！普通にドロップキックだ！」

イフリート「遅い！」

両足を両手で掴まれた

優菜「かかったな阿保が！」

開脚しガードを強制的に解き、手刀を交差し無防備な頭に向けて攻撃する

イフリート「ぬああああお!!」

優菜「これはダイオ以外には誰にも破られなかったダイアーさんの必殺技！稲妻十字空烈刃（サンダークロススプリットアタック）だ！」

稲妻十字空烈刃（サンダークロススプリットアタック）がクリーンヒット！

イフリート「グッ!!」

優菜「どうよ！」

優斗「慢心してんじやあないぞ！優菜！」

優斗に横腹を殴られ壁に激突した

優菜「カハッ」

そして血を吐きながら床に落ちた

優斗「手加減はしねえぞ」

優菜「わかつてらあ」

優菜は血を拭きながら立ち上がった

優斗「行くぞ！」

優菜「最終ラウンドだ！」

それから一分ほど殴り合い・

そして

優菜&優斗「オラア」

同時に殴り、二人とも逆側に飛んで行った

二人は立てずに、寝たままだ

優斗「くっそ・・・もう動けねえ」

優菜「俺も・・・もう無理」

優斗「・・・爆弾を取られてないから俺の勝ちだな？」

優菜「いいや、俺の勝ちだね」

優斗「はあ？なんでだよ」

優菜「この訓練がどうやったら終わるか覚えてるか？」

優斗「えっと・・・確か制限時間になるか、ヒーローがヴィラン捕まえる。もしくはヒーローが核兵器を処理する・・・だったよな？」

優菜「捕まえるのと処理の条件は？」

優斗「相手をテープで巻きつけるのとヒーローが核兵器に触る・・・だったよな？」

優菜「さあここで問題です、俺のリエルは今どこでしょう」

優斗「！まさか!？」

優斗が核兵器の方を見る

リエル「私達の勝ちです」

リエルは核兵器に触ってる

優斗「マジかよ・・・いつ出したんだ？」

優菜「お前忘れてねーか？リエルたちは小さくも大きくもなれるんだぜ？怪盗服のポケットの中に入れておいた、そしてお前がよそ見している間に出てもらった」

優斗「殴りあつてる間にはもう俺は負けてたつて訳か」

優菜「頼みがある」

優斗「なんだ？」

優菜「動けない助けて」

優斗「は？（呆）」

優菜「お願い、なんか意識g」

優菜はいきなり白目を？き、魂が上空に抜け出てきた

優斗「オイイイ!?!」

ヘル「死ぬなあああ!!」

上がつて来ていたヘルが優菜の魂を掴み、身体に戻した

優菜「ハッ!・・・死にかけた?今」

優斗「おい・・・お前、前に死んでから死にやすくなつてんじや・・・」

優菜「・・・もしもの時は頼んだ」

優斗「頼まれたくないから死なないでくれ」

そして優斗がこちらに来てくれ、俺をおんぶして戻る途中

優菜「ありがとう、兄いちゃくん」

優斗「お前やっぱ恨んでるだろ」

優菜「へ?なんのことでしょうか」

優斗「悪かったよ、俺のほうを兄にしたのは。でも見た目的に俺のほうが見えるだろ」

優菜「はいはい分かりましたよ・・・てかお前がおんぶしなくてもイフリート達に持たせればいいじゃねえか」

優菜「このまま行ったほうが楽だ。それに、出せるんなら。お前を回復で治す」

優菜「いや、これはカンペキに疲労からくるやつだから。回復しても意味なし」

優斗「あつそうなの」

オールマイト「おい大丈夫かー!？」

オールマイトがこちらに走って来た

どうやら、心配して駆けつけてくれたようだ

優斗「あつ先生、こいつ動けないって言ってるんで」

オールマイト「え!?!怪我したの!？」

優菜「怪我じゃなくて疲労ね」

オールマイト「ああ〜一分ぐらい殴りあつたからね〜君は大丈夫なのか？」

優斗「いや、割と限界です」

優斗の膝は嘲笑っていた

オールマイト「ものすごく震えてるね、手貸そうか？」

優斗「いや、あと少しだから歩きますよ」

優菜『そういうや、出久は怪我して連れてかれてたけど・・・無事なのかな？』

そして、どうにか皆の所へ戻れた

麗日「あつ！優菜ちゃん！優斗君！凄かったよ二人とも！」

優斗「ちよつとどいてくんない？マジで限界」

優斗の足は、先ほどより震えていた

麗日「限界つてどこが・・・足ヤバ!!」

優斗が隅まで歩き、床に下ろしてもらった

優菜「大丈夫か？」

優斗「お互い大丈夫じゃないだろ」

優菜「それもそうだな」

芦戸「そこから見える？」

優斗「見えるからそつとしといてくれ」

芦戸「わかつた」

優菜「ヤバイ・・・眠い・・・」

優斗「俺も」

優菜『意識が……。授業中に一度も寝た事ないのに・・・』

数分後

麗日「うわつ！今のスゴ！みた？優菜ちゃん！」

麗日が優菜たちの方を見るが

麗日「あ、寝ちやつてる」

飯田「訓練中だというのに・・・」

麗日「でもなんか微笑ましいよね、二人とも寄りかかりながら頭くつつけて寝ててオールマイト「それぐらい疲れてるといことだ、そつとしておこう」

第八十二話（アカメが斬る！の軌跡『第一話』より）

「何なんだこの国は」

路地裏・見慣れない街並み・神様

この三つが揃えば、異世界転生は確定である

優菜「もうわかってるよ、来たんでしょ新しいところ」

神様「よくわかったの、今回はアカメが斬るじゃ」

優菜「・・・人を殺せってのか？」

優斗「殺すのか・・・!？」

神様「どうするかは好きにするといい。ワシは見るだけじゃからの」

神様は消え去っていった

優菜「・・・じゃあどうする？」

優斗「とりあえず・・・この町がどういうところか知らないとな」

ちよつと調べた結果、ここは帝都という所らしい・・・だが

優菜「まさか、金がないなんて・・・」

優斗「あのクソじい・・・」

すると、中学生ほどの見た目をした男の子が歩いて来た

男の子「まあいいや。今日は野宿、どこだつて寝られるぜい」

優菜「?誰だお前?」

思わず、男の子に話しかけてしまった。今思えば、ここで話しかけていなかったならば、あんなことに巻き込まれてはいなかったかもしれない

男の子「え?あんたらこそ誰だ?」

優菜「路頭に迷つてる旅人です」

男の子「俺もさつき、胸がボインの姉ちゃんに詐欺られて一文無しになつちまつたんだ」

優菜「ボインて・・・というか、どういう状況なんだよそれ」

男の子「あ!変な意味はねえぞ!」

優菜「ボインには変な意味以外ないだろ」

優斗「まあ、俺たちも一文無しだけどな」

すると、馬車が一台通つていった

兵が二人も付いており、身分の高い人が乗っているようだ

?「止めてっ!」

中からそう少女の声が聞こえてきた

? 「泊まるアテ無いのかなあの人達・・・気の毒に・・・」

「どうやら俺達の事らしい、俺はいざとなれば野宿でも構わんが・・・
付き添いの兵? 「またですかお嬢様!」」

お嬢様 「仕方ないでしょ、性分なんだから」

馬車から女の子が一人降り、近づいてくる

お嬢様 「地方から来たんですか?」

男の子 「あ・・・? ああ・・・」

優菜 「そつちの子とは今会ったばかりだが、私達もそうだ」

お嬢様 「もし泊まるアテがないんだったら、私の家へ来ない?」

男の子 「俺金持ってないぞ」

お嬢様 「持ってたらかんな所で寝ないわね」

兵士1 「 MARIA お嬢様はお前達のような奴を放っておけないんだ!」

優斗 『 MARIA 言って言うんだな』

兵士2 「お言葉に甘えておけよ」

MARIA 「どうする?」

男の子 「・・・まあ、野宿するよりやいはいけどよ・・・」

MARIA 「貴方達はどうす r」

優菜「行かせていただきます（即答）」

優斗「よろしく願います（即答）」

マリア「じゃあ決まりね♡」

それから馬車に乗り、でっかい家に来た

そして中に入ると、複数人の使用人とおじさんとおばさんがいた

おじさん「おおつ、マリアがまた連れて来たぞ」

おばさん「クセよねえ、これで何人目かしら」

優菜『こいつらの後ろにいる二人のオツサン・・・普通の人間にしては強いな』

男の子「拾っていただけありがたいとございます!!」

マリア「いいよいいよ♡遠慮無く泊まってって」

男の子「ハイ!!」

おばさん「人助けをすれば、いずれ私たちにも幸せが帰ってくるものね」

マリア「お母さん! マリアはそんなつもりじゃないよ!!」

おばさん「冗談よ冗談♡」

男の子「あの・・・ついでに一つお願いしたいことがあるんですが・・・」

おばさん「? なにかしら?」

男の子の話を聞いた、こいつはタツミっていうらしい

なんでも村があまりにも貧乏で、出稼ぎに都へ来たという

しかし、ある酒屋で騙されてしまい、金をむしり取られて無一文というわけだ
そのついでに俺たちの自己紹介もした

おじさん「成程、軍で出世して村を救いたいか・・・」

タツミ「ハイ」

マリア「ステキな夢ね」

おじさん「・・・だがね君、帝都の内部は平和だが・・・、この国は三方異民族に取り囲まれている。国境での彼らとの戦いに狩り出されるかも知れないぞ？」

タツミ「覚悟は・・・しています・・・」

おじさん「・・・成程見上げた根性だ！若者はそうでないとな」

マリア「タツミはその村から一人で来たの？」

タツミ「いえ三人です。・・・実は、三人で村を出た後、夜盗に襲われて散り散りになったんです・・・。アイツ等強いんで心配はしてないですが・・・ただイエヤスって奴が凄い方向音痴なんで集合場所の帝都までたどり着けるかどうか・・・」

おじさん「よかろう！軍の知り合いに、口添えをしておこう。あとその二人の搜索もな！」

タツミ「！ありがとうございます！」

「マリア「マリアの勘って当たるんだけどね。きつと近いうちに二人とも会えると思うよ」

タツミ「マリアさん……」

それから、皆が食事を食べ終え……

おじさん「よし……じゃあこの辺にしておくか……」

タツミ「あの……ここにいる間俺に手伝えることってありますか？」

マリア「あつじやあマリアの護衛してよ他の人と一緒に！」

おじさん「それはいい。ガウリ君頼んだよ！」

おじさんはお付きの兵士にそう言った

ガウリ「……わかりました」

タツミ「今日は何から何までありがとうございました！」

お婆さん「助けあいよ、貴方も誰かに良いことをしてね！」

タツミ「ハイッ!!」

という事で次の日タツミ達買い物に行ったので

お婆さんと話していると、ナイトレイドという富裕層をねらってる殺し屋集団がい

るらしい

それから特にどうって訳でもなく、食事も終えて夜

優菜「!?殺気!」

優斗「どうした?」

優菜「・・・ちよつとやべえかも」

通路に出ると、タツミもいた

優斗「何事?」

タツミ「分からない・・・」

外を見ると、複数の人影が見えた

それを見たタツミの顔色が変わった

タツミ「ナイトレイド!!」

優菜「それって富裕層を狙ってる殺し屋集団・・・だったか?」

目を凝らしよく見ると、糸みたいなものに乗っている五人が見えた

優菜「あいつらがそうなのねえ・・・」

優斗「タツミ!お前は、マリア守りに行け」

優菜「ああ、アイツ等は任せろ」

タツミ「でも・・・」

優菜「いいから行け。一緒に来られたら邪魔だ」

タツミ「・・・わかった!」

タツミはマリアの部屋へ走っていった

そしてもう一度外を見ると、兵士が既に三人殺されていた

階段を使つては手遅れになると踏み、窓を割り外へと飛び出した

優菜「あんたらがナイトレイドか？」

まず対面したのは、刀を携えた年端も行かない黒髪の少女だった

黒髪の少女「・・・」

優菜「・・・なんか喋ろよ」

黒髪の少女「お前は標的じゃない。邪魔」

優菜「こつちには、やらなきやいけない理由があんのだよ」

黒髪の少女「邪魔すると斬る」

優菜「じゃあ、とことん邪魔する」

少女は刀を抜き、距離を詰めてきた

そして、斬ろうとしたのでこちらも手を出した

優菜『受け止めるか・・・!?ダメだ、なんかヤバい気がする!』

手を引き、後ろに避けた

優菜「なんだよそれ、禍々しい刀だな」

少女は間髪入れずに、斬りかかろうとしてくる

優菜『またかよ。とりあえず避けるしか・・・』

避けようと動くと、それを凌ぐ速さで少女は斬りかかってきた

優菜「(このままじゃ当たるッ!) クロノス、ザ・ワールド」

時間を止め、今のうちに殴って吹っ飛ばす

そして動き出す

殴った衝撃で、少女は飛んで行った

上にいる男「え!?アカメが吹っ飛んじまったぞ!」

優菜『アカメか』

すると誰かが上から撃ってきた

威嚇射撃のようで、当たりはしなかった

だが、あと5人・・・さすがに厳しい

優菜「一対一にしようぜ、やるなら」

すると、何者かに背中を斬られた

優菜『え?斬られた・・・?』

そして、身体中になんか模様が浮かんでくる

優菜「は?これヤバくね?」

アカメ「油断したあんたが悪い」

優菜『え、死ぬ奴!?!』

死ぬならとヘルを出そうとすると、目の前に火が出てきた

アカメ「!なんだそれは!?!」

神様「呪いも消すし、新しいペルソナ置いてくからこれでお金持たせなかったのチャラにしてちょうだい」

優菜『・・・今回はチャラにするが、次やったら許さん』

心の中で返答し、その火を掴む

すると、女性の声が聞こえてきた

?「今度は私が来たんだけど・・・契約でしょ、さつきとするわよ。面倒だし」

優菜「了解」

ガイア「私は創造の神、ガイアよ」

優菜「・・・ガイアってゼウスのおばあちゃんじゃなかった?」

ガイア「ええそうよ。頼まれたから、一部を貴方に使わせてあげるだけよ」

アカメ「よくわからないけど、呪いが消えたのならもう一度斬るだけ」

優菜「・・・そもそもさ、なんでこんなことしてんの?」

アカメ「あんたに教える必要はない」

優菜「内容によってはここを通すが・・・」

アカメ「・・・あとで教える」

優菜「いやそれじゃダメだろ・・・」

アカメ「ならついて来て」

優菜「は？」

アカメは音も出さずに走っていった

優菜「どこに向かうかぐらい言えよ！」

追いつこうと走るが、アカメは俊足で走って行ってしまい、見えなくなってしまう。館中を探してようやく見つけると、既にマリアとタツミに遭遇していた

優菜「おい・・・場所ぐらい・・・言ってくれよ・・・」

息切れしながら、周りを確かめるとタツミがマリアをアカメから守っていた

タツミ「戦場でもないのに罪もない女の子を殺す気か!!」

アカメが刀を二人に振り下ろそうとすると、先ほどの五人のうちの一人のお姉さんが止めた

お姉さん「待った」

優菜『いつの間にな!!』

アカメ「なに？」

お姉さん「まだ時間はあるだろ？この少年には借りがあるんだ、返してやろうと思っ

てな」

タツミ「!アンタあの時のおっぱ・・・!」

優菜「言つてたやつか!」

お姉さん「そうだよ美人のお姉さんだ♡少年、お前罪もない女の子を殺すなど言つたが」

近くの小屋に近づくとポインもといお姉さん

そしてドアをけり破る

お姉さん「これを見るとそんなことが言えるかな」

中をのぞくと・・・

下半身がない死体・左目がくりぬかれていた死体・頭部がない死体・右胸のない女性の死体・・・どれも弄ばれて死んだような死体ばかりが吊るされていた

お姉さん「見てみる・・・これが帝都の闇だ」

優斗「うわっ・・・(引)」

優菜「お前来るの遅い」

タツミ「・・・な・・・なんだよ・・・コレ・・・!」

お姉さん「地方から来た身元不明の者たちを甘い言葉で誘い込み、己の趣味である拷問にかけて死ぬまで弄ぶ、それがこの家の人間の本性だ・・・」

優菜「ヘル・・・これ確実に地獄だよな？」

ヘル「無間地獄でしょうね。これ以上に救つてゐる人がいるなら別でしょうけど、あの年齢じゃ多くても十人・・・。死んでるのは調べないと分からないくらいとなると、素人目でも分かるでしょ」

タツミ「・・・サヨ？おいサヨ・・・サヨ・・・！」

タツミが見ている方向を見ると、上に右足を落とされた女の子が吊るされていた

お姉さん「知り合いもいたのか・・・」

イフリートを出して女の子を降ろし、優斗が女の子を受け取った

優斗「・・・ダメだな。もう死んでる。昨日言つてた、同じ村の子か」

マリアが逃げようとしたので、服を掴む

優菜「こんなことして逃げようつてのは虫が良すぎるぞ」

タツミ「この家の人間がやったのか」

お姉さん「そうだ、護衛達も黙っていたので同罪だ」

マリア「う・・・ウソよ！私はこんな場所があるなんて知らなかったわ。タツミは助けた私とコイツ等とどっちを信じるのよ!!？」

？「・・・タ・・・ツ・・・ミ・・・タツミだろ、オレだ・・・」

タツミ「い・・・イエヤス!!？」

牢屋に入った男の子にタツミが駆け寄った

イエヤス「俺とサヨはその女に声をかけられて……メシを食つたら意識が遠くなつて、気が付いたらここにいたんだ。そ……その女が。……サヨをいじめ殺しやがった……!!!
う……う……う……」

イエヤスの体中には、黒い模様をした物が浮き上がっていた

マリア「何が悪いって言うのよ!」

マリアが暴れ、腕を振りほどかれた

マリア「お前達はなんの役にも立てない地方の田舎者でしょ!?家畜と同じ!!それをどう扱おうがアタシの勝手じゃない!!だいたいその女、家畜のくせに髪がサラサラで生意気すぎ!!私がこんなにクセツ毛で悩んでるのに!!だから念入りに責めてあげたのよ!!
むしろこんなに目をかけて貰って感謝すべきだわ!!」

俺はその言葉に少しイラつき、後ろから首を掴み持ち上げた

マリア「ウツ……」

優菜「……このまま少し力を込めるだけでお前の首はへし折れるんだぞ」

タツミ「待て、そいつをこっちに」

マリアをタツミの方に向ける

マリア「ぐうう」

お姉さん「まさか・・・また庇う気か？」

優菜「・・・そういうことか・・・わかった」

タツミ「いや・・・」

タツミはマリアの腹を搔つ捌いた

タツミ「オレが斬る」

マリア「あ」

マリアは力が抜けて、下に落ちかけるが、落とさない様に頭を掴んだ

優菜「まだ死ぬなよ。さつきあの世の神様に聞いたんだが・・・お前は無間地獄行きだよ」

マリア「なに・・・それ・・・」

優菜「行くだけでも2000年かかって、それから約350京年苦しみ続ける所だ」

マリア「ヒツ・・・」

優菜「じゃあな」

マリアの首を落とし、止めを刺した

イエヤス「へへ・・・さすがはタツミ・・・スカッとしたぜ・・・！ゴフツ」

イエヤスが吐血した

タツミ「！どうしたイエヤス！」

アカメ「ルボラ病の末期だ……。この夫人は人間を葉づけにし、その様子を日記に書いて楽しむ趣向があった……。ソイツはもう助からない」

優菜「見せろ」

イエヤスの手を取りアリエルに見せる

優菜「どうだ？」

アリエル「……。治せます。任せてください」

優菜「頼んだ」

アリエルが手を取り、手が光りだした。光が消えると、黒い模様は消えていった
イエヤス「え？治った……。のか？」

アカメ「!?そんなはずはない！末期まで行ってしまったら絶対に治せないはず……」
優菜「あの、右足が斬られてる子が女の子がサヨ……。だったよな？」

イエヤス「あ、ああどうにかできるのか？」

優菜「できない」

タツミ「そんな」

優菜「いつもなら言うところだが、さつきガイアが仲間になったからな……。へ
ル、サヨの魂を持ってこれるか？」

ヘル「できなくはないけど……。結構大変なのよ探すの！」

優菜「愚痴なら後で聞くから」

ヘルは少し怒りながら、上空へ飛んで行った

優菜「この子を助けたい。俺の考えてる事、分かるよな？」

ガイア「・・・この子の髪の毛を一本ください」

優菜「すまんないきなり」

優菜は、死体から髪の毛を一本抜いた

優菜「これでいいのか？」

ガイア「はい」

すると、ガイアは髪の毛を口に含んだ

皆「食った!？」

優菜「え？食うの？」

ガイア「髪の毛にはDNAが刻まれていますので、死んだ後でもDNAさえとれば・・・」

イエヤス「えつと・・・どういうことだ？」

ガイア「あつ、閲覧注意だから見ないほうが良いですよ」

ガイアがそう言うと、まず骨が出てきて内臓、筋肉、皮膚、髪と身体が出来上がった

ガイア「後は魂を入れるだけです」

イエヤス「おええええ．．．見るんじやなかった」

優菜「閲覧注意って言ったよな？」

すると、サヨの魂を連れてヘルが戻ってきた

ヘル「つれてきたわよ」

サヨ「えつと．．．なんでしょうか．．．」

サヨは淡く緑に光って、浮かんでいた

優菜「君がサy」

タツミ「サヨ！」

サヨ「タツミ!? 無事だったのね！」

イエヤス「俺を忘れんなよ俺を」

サヨ「はいはい、イエヤスも無事だったのね」

イエヤス「すっげえテキトー!？」

優菜「．．．いいかな？」

サヨ「あつ、はい」

優菜「これがあんたの新しい身体、新しいって言っても前と同じのはずだから、重なるように寝てみてくれ」

サヨ「こうですか？」

サヨは身体の上に横たわった。すると、サヨの魂は身体の中へ溶け込んでいった
お姉さん「何が起こってるんだ!？」

そして、魂が全て入ると、身体が目を覚ました

サヨ「うーん」

イエヤス「もう大丈夫なのか？」

優菜「そのはずだ」

優菜はそう言うのと、後ろに倒れこんだ

タツミ「おい！大丈夫かよ」

優菜「・・・人の体を作るのは、他のより断トツで疲れるらしい」

お姉さん「・・・こりやあ、とんでもないのを見つけちゃったかもね」

アカメ「どうする？連れて帰る？」

お姉さん「アジトはいつだって人手不足だ。少年は運と度胸、才能もあるんじゃないか？二人は経験とあの能力だぞ。連れて帰ろう」

お姉さんが動けない優菜に近付こうとすると、優斗が優菜の前に立ちはだかり、お姉さんを睨んだ

優斗「何する気だアンタ」

お姉さん「私達のアジトに連れて行くだけよ。この国の奴らに利用されるのは面倒っ

てだけ」

優斗「・・・なら俺が連れて行く。道案内しろ」

お姉さん「来てくれるならどっちでも構わないよ」

優斗に抱えられた優菜は、タツミの方を向いた

優菜「お前からどうすんだ？」

タツミ「うーん・・・」

お姉さん「問答無用で連れて帰るZ O ☆」

タツミ&イエヤス&サヨ「え」

三人はお姉さんとアカメに連れてかれ、優斗は優菜を抱えて付いて行った

先ほど廊下で見た、糸の上にいる三人の所へ

鎧の男「やつと戻って来たか」

男「そろそろ引き上げないとまずいぜえ」

女の子「遅い！何やってたのよ！・・・って何よそれ」

お姉さん「仲間だ」

タツミ「はあ!？」

お姉さん「アレ？言ってなかったけ？今日から君たちも私たちの仲間!!ナイトレイド

就職おめでと!!」

タツミ「!?・・・何でそうなるんだよ!!」

イエヤス「おい!なんだよナイトレイドって!」

サヨ「絶対ヘンなのに巻き込まれたー!!」

優斗「・・・どうする?」

優菜「とりあえず動けそうにないから、どうにかしてくれ」

アカメ「諦めろ、レオーネは言い出したら聞かない。逃げてでも無駄だぞ」

優菜「あの姉さんレオーネって言うのか」

レオーネ「さすが親友分かってるねー、ブラッチコイツらよろしく」

タツミ「放せ!俺は殺し屋になる気なんか・・・」

イエヤス「えっ!?この人たち殺し屋なのか!」

サヨ「さつきナイトレイドって言うてたでしょ!!金持ちを殺す、指名手配の殺し屋集

団よ!!」

すると、鎧の男が近づいてきた

ブラッチ「大丈夫だ、すぐに良くなる」

タツミ「何が?てかお前らはいいいのかよ!」

優菜「いや、動けんし」

優斗「別にどこ行こうが変わらないだろうし、逃げられないだろ」

タツミ「そ、そんな・・・」

アカメ「作戦終了、帰還する！」

そうして、優菜たちはアジトに連れて行かれた

アジトの中に入られると、男と女に別れてある部屋に連れて行かれた

レオーネ「ま、とりあえず今日はここで寝てね！ボスは今は出てるけど、帰ってきた

ら会わせるから！明日になったら、どの部屋に住むか決めてもらうからねー」

サヨ「え、ちよつと」

レオーネ「おやすみー」

レオーネは部屋から出て行ってしまった

サヨは、立とうとするが、上手く立てないようだった

優菜「・・・思った通りに動かないか？魂だけだったわけだからな。ちゃんと適合す

るまでリハビリだな」

サヨ「・・・そもそも、貴女たちは一体何者なの？私は確かに死んだはずなのに・・・」

優菜「詳しいことは明日説明するさ。今日は寝ろ。俺も動けないから寝る。危害を加

えられないし、加えるつもりも無い。安心しろ」

サヨ「・・・分かったわ。今日は大人しく寝る！でも、明日ちゃんと話なさいよね!!」

優菜「ああ、分かって r・・・」

サヨ「……? どうかさ」

優菜「……zzzz」

サヨ「もう寝てる……!」

第八十三話（ドラゴンボール超の軌跡『プロローグ』より）

「皆の夢」

神様 「すまんの」

は？何が？

神様 「お主・・・今赤ちやんじや」

ユウナ 「バブ？（え？）」

お母さん？ 「ごめんなさいね、ユウナ」

お父さん？ 「私達は逃げられない・・・だからお前だけでも生き延びてくれ」

ユウナ 「・・・（チョットナニツッテルカワカンナイ）」

周りを見てみると、丸い何かに入っていた

ユウナ 『これは・・・見たことがある・・・一人用のポッドだったか・・・？それに両親？だと思いが・・・この人たち、しつぽがある・・・』

脳内会議した結果・・・ここはドラゴンボールの世界だと分かった

うp主殺してくる

うp主 「少しぐらい良いじゃないか！」

ユウナ『でてくんな』

お母さん「死んだら、また会いましょ」

お父さん「それじゃあな」

ユウナ「ブ？（え、死ぬってどういう・・・）」

すると、ポッドの入口が閉じ、星から脱出した

ユウナ『え？え？飛んじまったよ』

・・・なんだあのデカイ球は

あ、星に!!

あ、ああ・・・

星が無くなっちゃった・・・

そうか、分かったぞ。ここは、フリーザが惑星ベジータを破壊したときか

神様「すまぬ、言い忘れたことがある」

ユウナ『・・・なんだよ・・・』

神様「優斗君はこっちにいるぞい」

優斗『おーい!』

ユウナ「お前そっちにいるのか

神様「優斗君だけこっちに来てしまつての・・・まあこっちはこっちで楽しくやるか

らそつちは頑張るんじやぞい」

優斗『頑張れよく、ちなみにお前尻尾生えてるぞ』

ユウナ『え？マジで？』

下の方を見ると、ブンブン！と揺れる尻尾が見えた

ユウナ『マジだった……。とりあえず、どつかに着くんだらうから、着いてから考えよう』

その後とある惑星に落ち……。地球とかナメック星じゃないよ）

色んな武器を作っては使い、一番使いやすい拳に落ち着いた頃、すっかり育つて（胸以外）18歳

主に時間の流れを遅くしたカオスの空間にいたので、外では41歳ぐらいだらうかそれからモナカという人にも会った

ある日、モナカが来たと言うので会いに行つた

モナカ「何でいっつも会いに来るんだ？」

ユウナ「ん？特に理由もないよ」

モナカ「私は仕事が終わってないから、そろそろ」

？「おい」

突然、後ろに途轍もない気配が現れた

モナカ「ん？」

振り返ると、紫色の肌をした猫の様なやせ細った誰かがいた

ビルス「僕は破壊神ビルスって言うんだが・・・お前！ちよつとついて来い」

モナカ「わ、わたしですか!？」

ビルスはモナカの手を取り、どこかに連れて行こうとした

ユウナ「ちよつと待て！」

俺は止めに入った。モナカとは会ってせいぜい二年だが、連れて行かれて何かされるのなら、俺の方が適任だからだ

ビルス「なんだ？」

ユウナ「それって絶対モナカじゃないといけないのか？」

ビルス「そう言うわけじゃないが・・・じゃあなんだ？お前が来るというのか？」

ビルスは、品定めするように優菜を見た。そして、尻尾を見られた

ビルス「・・・！それはサイヤ人のシツポか？」

ユウナ「あ！これは・・・」

ビルス「ふくん・・・確かにサイヤ人のほうが使えるかもな・・・よし、お前を

連れて行こう」

ビルスはモナカを放し、俺の手を掴んで連れて行った

第八十四話（ドラゴンボール超の軌跡『第一話』より）

「憧れの人たち」

ビルスに連れて来られたのは、四角い箱の様な半透明の部屋だった

ユウナ「・・・それで？何をしに行くの？」

ビルス「戦いだ」

ユウナ「戦い？」

ビルス「他の宇宙との交流試合だ。これから、他の奴らを迎えに行く。お前は最後に戦え」

ユウナ「大将って事・・・？」

ビルス「心配するな。今から連れてくる奴が勝てば。お前は出なくていい」

ユウナ「あ、そうですか」

ビルス「ウイス、行くぞ」

ビルスがそう言うと、杖を持った変人が現れた

ウイス「はい、分かりましたー」

そして、ある星に到着すると、ぞろぞろ人が入ってきた

ユウナ『・・・どうゆうことなんだ一体。今、俺の目の前にはドラゴンボールのキャラたちがいる。ただ、このビルスとかって奴の事は知らないぞ。俺は、魔人ブウまでしか知らないのに・・・』

とりあえず隅っこに座っておく

全員が集まったらしく、騒がしくなってきた

ユウナ『漫画で知ってるとはいえ・・・間近で見ると緊張して喋りづらいな』
ビルス「なに!?超ドラゴンボールは第六宇宙と第七宇宙合わせて七つだど!」

ユウナ「(何も知らない振りをして)」ドラゴンボールって何ですか?」

悟空「お?お前がビルス様が言ってたやつか!オラは孫悟空だ!よろしくな!」

悟空から手を差し伸べられた

ユウナ「(本物の悟空・・・!)ユウナですよろしく」

悟空の手を強く握り返した

M字の男「ユウナだど!」

悟空「知ってるのか?ベジータ」

ユウナ『本物のベジータ・・・!』

ベジータ「お前サイヤ人か!」

ユウナ「?そうですけど」

悟空「おい、どういう事なんだよベジータ」

ベジータ「俺も詳しくは知らんが、変な名前のガキがいると聞いたことがあつてな。そいつがユウナだったんだ」

ブルマ「私達からしたら普通だけどね」

ベジータ『・・・だが、それを聞いたのは俺達が他の星に行く寸前だった。あの年では、まだカプセルから出ることも出来ずに死んだはずだ。カカロットのよう脱出していたとしても、あまりにも若すぎる・・・』

ベジータが送る視線に耐え切れず、話を逸らそうと話し出した

ユウナ「そういえば、今どこに向かつてるんですか？」

ブルマ「え？聞いてないの？」

ユウナ「とりあえず来いって言われてきたので」

ベジータ「戦いだ」

ユウナ「戦い・・・ですか、あんまり好きじゃないんですよね」

ベジータ「なに!? 貴様サイヤ人だろ!？」

ユウナ「無駄に疲れることは嫌です。絶対にしないとイケないなら別ですけど」

ベジータ「ふん、やはり下級戦士というわけか。名前がおかしいように性格までおかしいな」

ブルマ「でも、孫君だってそうじゃない。優しいわよ？」

亀仙人「悟空は、頭を打って今の性格になったからの、その前は違ったじやろう」

ブルマ「そんなこともいつてたわね・・・ベジータが来るちよつと前に」

ウイス「みなさん、着きましたよ」

ウイスがそう言い、外を見ると、オレンジ色の惑星が・・・

いや違う、これは惑星じゃなくて

クリリン「すげえ・・・あれが超ドラゴンボール・・・」

トランクス「で・・・でかい・・・!!!」

ユウナ「星ぐらいあるじゃん・・・」

ウイス「ユウナさん。言い忘れていましたが、戦う前にペーパーテストを受けてもら

います」

ユウナ「テスト!?!」

テストを受けてみると、小1並みの問題だった

もちろん100点

悟空たち第七宇宙と、相手の第六宇宙でやりあうらしい。俺は悟空側だから第七宇宙
ね

相手はロボットやかいかママみたいなやつやフリーザみたいな奴、サイヤ人も一人、

殺し屋一人

審判「それではいよいよ試合を開始します」

第一戦相手はクマみたいなやつもといボタモで、悟空が戦ったが打撃を跳ね返すらしく、攻撃が通らない。しかし、悟空が相手を外に押し出して勝った

次のフリーザみたいな奴もといフロストが、悟空とピッコロを連破、しかし反則していたことがわかり反則負け

毒に乗った針を殴った瞬間に出し、毒で麻痺している間に・・・という感じである
しかしベジータが倒すといいぶつ倒した。悟空とピッコロは反則されていたので戦う権利が復活していたが、ピッコロは棄権

次のロボットもといオッタ・マゲッタ・・・ふざけてないか？この名前

まあベジータが勝ったが

次はサイヤ人のキャベ・・・ベジータが超サイヤ人を伝授し、キャベが超サイヤ人になった・・・まあ倒されていたが・・・

ユウナ「超サイヤ人ってどうやったらなれるの？」

悟空「なんだ？おめえなれねえのか？」

ユウナ「無理無理」

悟空「それでオラより強えんか、すげえな」

ユウナ「そんなことより、どうやったたらなれるの？」

悟空「超サイヤ人のきっかけは怒りだ、キャベも自分の星の悪口言われてなっただ
ろ？」

ユウナ「怒ればいいのか・・・」

対人戦のゲームで、負けそうなときに煽られたことを想像した
すると、髪が少し浮かび上がった

悟空「ん？」

ユウナ「うーん・・・！」

しかしそこから変化はなく、変身を諦めた

ユウナ「まだよく分かんないな・・・」

悟空「へへ、そう簡単には出来ねえからな。でもその内出来るんじゃないやねえか？」

ユウナ「特訓かなあ・・・」

悟空「相手なら付き合うぞ！」

ユウナ「その超サイヤ人っていうのは、いくつか段階とかは？」

悟空「今はオラとベジータがなれるブルーってのが最新だ」

ユウナ「ブルー？」

すると、復活した悟空を何番目にするかでビルス様が強引に順番を決めて、ベジータ、

悟空、俺になった

次が最後の殺し屋ヒットだが・・・ブルーベジータが全然歯に立たなかった
カウンターばかりを食らい、倒された

時飛ばしという技の名前が出てきた。俺はクロノスがいるから見えるが、悟空たちは
見えていない

その後、悟空が時飛ばしを破り、倒すかと思ったが

悟空「よっ」

なんと、悟空は自分から武舞台を降りたのだ

審判「悟空選手場外！ヒット選手の勝利ーッ!!!」

ユウナ「え？マジで？」

ビルス「悟空・・・お前・・・なにしたか・・・わかってるのか!？」

悟空「わかってるさ！だってこれで終わっちゃたら、ユウナの出番がないだろ？オラ
どうしても一番強いやつとの戦いっぷりみてみてえんだよ」

ビルス「バ・・・バカもーん!!!」

悟空「なんだよ、ビルス様でさえ声出して」

ヒット「孫悟空・・・覚えておこう・・・」

ユウナ「・・・回ってきちゃった？」

ベジータ「どれ程の実力か見せてもらおう」

ピッコロ「とても強いようには見えないが・・・」

悟空「ビルス様がいってんだ！強いに決まってるだろ！」

ビルス「もうだめだあ・・・おしまいだく・・・」

ユウナ『・・・死に行くか』

俺は武舞台上に上がり、ヒットの前に立った

ユウナ「よ、よろしくお願いします」

ヒット「ああ」

まず、それっぽく構えてみた

ヒット「青髪にはならないのか？」

ユウナ「私は使えないから・・・」

ヒット「・・・そっちの破壊神の反応を見る限り、数合わせか」

ユウナ「ぼいね」

ヒット「棄権しないのか？」

ユウナ「死んでも大丈夫だから」

ヒット「・・・そうか。なら、せめてもの情けとして、一つだけ技を使っているぞ」

ユウナ「え、いいの？」

ヒット「構わん。避けもせん」

ユウナ「・・・ありがとね、クロノス、ザ・ワールド」

時間を飛ばすのではなく止めた

今のうちに場外にヒットを動かし、そして時は動き出す

ヒット「!? な!?」

悟空「え!?! 今の見えたか、ベジータ!」

ベジータ「全く見えなかった・・・」

ピッコロ「俺もだ・・・」

ビルス「え? か、勝ったのか?」

ヒット「時飛ばしか!?! しかし0.1秒では、ただ動かすのは無理だ・・・」

ユウナ「さんさん悩んで貰っていいよ。私は戻る」

ヒット「・・・フツ所詮俺も未熟というわけか」

悟空「やつぱりアイツが宇宙一かー!」

悟空たちの所に戻ろうと、振り返った

するとビルスが上空に何か、いや誰かいることに気付き、口を開けて驚いていた

ビルス「オ・・・オイシャンパ!」

シャンパ「ただで済むと思うなよ!」

ビルス「オイ！シャンパって!!!」

シャンパ「なんだビルス!!分かってるよ！超ドラゴンボールはお前にくれてやる!!」

ビルス「違う！見ろバカ!!!」

ビルスは、その誰かを指さした

ウイス「いいんですか？指なんか指して・・・」

そう言われ、ビルスが指をひっこめた

シャンパがビルスの刺していた方向見ると、海外の色がちよつと変わってる餡のよう
な頭をした者がいた

シャンパ「ぜぜぜ・・・ぜぜぜ・・・全王様!!!」

ビルス「わたたた・・・!」

ビルスが逃げようとしたが、シャンパに足を掴まれた

シャンパ「ま・・・待てビルス!」

ベジータ「なんだ？全王というのとは」

ウイス「全王様は12ある宇宙の全ての頂点にたたれるお方です」

ピッコロ「すべての宇宙の・・・頂点・・・だと!？」

シャンパ「こ・・・これはようこそ全王様!」

ビルス「ほ・・・本日はどういったご用件で・・・?」

全王「あのね、今日は勝手にこんなことやってるからね。注意しようと思ってきたのね」

シャンパ「ははっ!!」

ビルス「申し訳ありませんっ!!」

全王「でもね、見てたらね。面白かったから今度全部の宇宙でね、やってみようかな
ゝなんて思っちゃった」

ビルス&シャンパ「ははーっ!!」

悟空「マジかよ!そりやおもしろえや!やろうぜやろうぜ!」

ビルス「ごっっっ．．．悟空!!お前ごときが全王様と話すんじゃない!!」

全王「じゃあやろうね!近いうちにね!」

悟空「約束だぞ!」

悟空が全王に向かって手を出す

ビルス「や．．．やめろ．．．ごっくう」

全王は近づいて握手した

全王「うん、やくそくね」

ビルス&シャンパ「ほっ」

全王「じゃあね、帰るね。楽しみだね、またね」

全王は連れの兵士の様な者を連れて帰って行った

ビルス「お……お前……全王様は……その気になれば、宇宙そのものを一瞬で消せるんだぞ……」

悟空「え？マジか……」

その後ビルスが超ドラゴンボールで願いを叶えて帰った

悟空「戻ったらオラと戦ってみねえか？」

ユウナ「別にいいけど」

ブルマ「地球に来るんなら家に来る？行くところないだろうし」

トランクス「来るんなら一緒に遊ぼうぜ姉ちゃん！」

ユウナ「じゃあ、甘えさせてもらおうかな」

地球について、悟空とは判れて西の都のブルマの家に来た

第八十五話（ドラゴンボール超の軌跡『第二話』より）

「未来から貴方へ」

ブルマ「ここがあなたの部屋よ」

これももうホテルじゃん!!

一室にトイレある風呂あるベランダある!

ユウナ「ほ、本当にいいんですか?」

ブルマ「ほかにもたくさんあるから、大丈夫よ」

ユウナ「本当……すごいな金持ちって」

ブルマが後ろを通る時に、何かを踏んだ

ユウナ「あ」

すると、ユウナが力が抜ける様に倒れた

ブルマ「あっ!ごめんシツポふんじやつた」

ユウナ「どいてくれたらそれでいいから……」

ブルマが直ぐにどき、力が戻った

ブルマ「ごめんなさい、ベジータとかいっつもないから」

ユウナ「いや、大丈夫ですよ」

ブルマ「何かあつたら呼んでね。ああ、それとこれお金」

渡された金額は・・・10万ベリー

ユウナ「え、こんなにくれるんですか？」

ブルマ「いいわよそのぐらい、あとこれ服ね。お古で悪いけど」

ユウナ「ありがとうございます」

ブルマは部屋から出て行った

ユウナ「・・・この服、女子用かな？道着とかでいいのに」

ガイア『作りましょうか？』

ユウナ「ああ、頼む。胸のマークはいらなからね。どこの流派でもないから」

ガイア『それじゃあ、明日までに作っておきますね。それっぽい』

ユウナ就寝後、カオスの空間のペルソナ地区

ガイア「あの悟空とかいう人、強さがユウナと段違いよ。この世界で生きていけるのかしら・・・」

ガイアは道着を創りながらペルソナの皆に聞いていた

クロノス「そこをカバーするのが我々の仕事だろう？」

イフリート「でもよ、助けるにしても限界があるだろ」

アリエル「あの方々の力を利用出来たりはしないのでしょうか？」

ヘル「どうやって？」

ガイア「じゃあ、私が力を吸い取るモノを創ります」

イフリード「それはいいけどよ、吸い取った力をちゃんとユウナが扱いきれれるのか？」

ガイア「分からないけど、扱えないとどのみち未来は無いわ」

クロノス「・・・苦渋の選択だな」

そして、ガイアがすぐに吸い取り機（仮）を作り、悟空、ベジータ、トランクス、悟飯、悟天をクロノスの時止めの力を借りて吸い取った

なぜサイヤ人を知っていたかは、カオスの空間に設置されたネットワーク機能から調べたからである

ちなみにユウナたちはまだ知らない。設置理由は、18年間暇だったからである

それから次の日、テーブルの上に白い道着が置いてあった

ユウナ「これ柔道の奴じゃね？」

ガイア『一番身近な道着にしたつもりなのですが・・・』

ユウナ「・・・まあいいか」

優菜は着替えようと服を脱ぎ、道着を着ようとしたところで気が付いた

ユウナ「そもそも俺、道着の着方知らねえや」

アリエル『任せてください』

アリエルに道着を着せてもらい。なんとか、それっぽくなった

ユウナ『六時か・・・腹減ったな』

ブルマ宅を散策すると、レストランがあつたので、その中の台所へ

てかレストランあるのがすげえよ

ユウナ「何か作るか」

朝食を作ったが、なかなか満腹にならず。いつもの数倍の量を食べた

ユウナ『これがサイヤ人の胃袋か・・・！いつも最低限のモノしか食べてなかったか

ら、満腹になったのは十数年ぶりか』

そしてお昼・庭でゴロゴロしてた

寝転んでたのではない、文字通り庭中をゴロゴロ転がっていた

ユウナ「やることない」

ベジータ「特訓すらないとは・・・」

ユウナ「貴方は、悟空とやるからいいでしょ」

悟空「あ、そうだ！オラ、ユウナと戦う約束してたんだった！」

ユウナ「あ、そんなこと言ってたね」

すると、庭の隅に謎の乗り物が現れた

ユウナ「なんだ？」

乗り物まで走り、中を覗いた

ユウナ「誰がいる！」

それを見たブルマはこう言った

ブルマ「ユウナちゃん！中で倒れてるのって、トランクスと同じ髪の色した若い男の人じゃない？」

ユウナ「たぶんそう」

ブルマ「孫君！仙豆取りに行ってくれろ!?!」

ユウナ「仙豆って？」

ブルマ「傷が治る豆よ」

悟空が額に指を当てたとと思うと、消えてしまった

ユウナ『瞬間移動・・・すげ』

ブルマ「ユウナちゃん、中の人をどうにかして出せる？」

ユウナ「出せると思います」

中にカオスの空間を繋ぎ、青年を外に出した

そして、近くの寝せられる場所へ

ユウナ「とりあえずこれでいいかな」

青年は背中に剣を背負っていた。・・・この剣は確かすると、悟空が戻ってきた

貰ってきた仙豆を青年に食べさせた

青年「はっ」

ブルマ「よかった！大丈夫？トランクス」

トランクス？が悟空の顔を見る

トランクス「こ・・・この・・・このヤロー!!!」

トランクスは背中の剣を抜き、悟空に斬りかかろうとした

ユウナ「何してんだ」

クロノスを出し、時間止めて剣を奪って、殴り飛ばした

トランクス「痛てて・・・」

悟空「大丈夫か？トランクス」

トランクス「えっ・・・！悟空さん・・・!? 確、かセルの自爆で死んでしまったのか

と・・・！」

悟空「へへへ・・・まあ色々あってな、生き返ったんだ！」

ユウナ『?・・・ああ、セルの時の未来トランクスか』

ブルマ「何やってんのよトランクス！」

未来トランクス「母さん!!!母さんが・・・生きてる・・・」
ブルマ「えっ」

ベジータ「何があつたか説明しろトランクス」

未来トランクス「父さん・・・!良かった・・・来れたんだ・・・過去に・・・」

ユウナ「ちよつと待つて」

悟空「どうした？」

ユウナ「さつきトランクスって言った？」

ブルマ「ええ」

ユウナ「で、そつちにいるのもトランクスだよね？」

トランクス「う、うん」

ユウナ「どういう事?ベジータのこと父さんって言つてるし」

ビルス「お前、この小僧の未来だな」

いつの間にか来ていたビルスとウイス

全く気付かなかつた・・・

未来トランクス「は・・・はい・・・。あの・・・貴方達は・・・」

トランクス「え?え?えっ!?!」

ウイス「あらあら、これはビックリ!よくそんな装置ができましたね、人間には不可

能だと思っていましたよ」

ブルマ「未来のアタシが造ったのよすごいでしょ！」

ウイス「ブルマさん・・・時間の操作は重罪と聞きませんでした？」

ビルス「お前破壊されて文句は言えんな」

ブルマ「ちよつ、ちよつとアタシだけどアタシじゃないじゃん！」

ユウナ『・・・クロノスのことバレたら終わりだな』

悟空「・・・そういや、ユウナがヒットを倒した時もオラたちにもなにもみえなかつたけど、もしかしてユウナも止めてたりな！」

ユウナは、滝のように汗を流した

悟空「・・・どうしたんだ？その汗」

ビルス「・・・お前まさk」

ユウナは振り返って逃げようとしたが、すぐにベジータに取り押さえられた
ベジータ「ハッキリしないか!!」

ユウナ「・・・確かに、私は時間を止めることが出来るよ。でも、今まではせいぜい自分の周りの空間の時間を弄っただけで、世界そのものの時間は止めただk」

ビルス「止めるだけでも犯罪だバカ!!」

ユウナ「・・・すみませんでした」

ウイス「ちなみに、どうやって時間を？」

ユウナ「協力者というかなんとか・・・」

ウイス「協力者・・・その人を今呼べたりしますか？」

ユウナ「クロノス」

名を呼ぶと、クロノスが現れた

ビルス「へえ、君がクロノスか」

クロノス「そうだが？」

ビルス「時間を止めるんだって？」

クロノス「戻したり、加速したりもできるがな」

ビルス「ふくん、それはすごいね。でもここじゃ時間を扱うのは重罪なんだよ」

クロノス「時間の神から時間を取ったら何も残らんぞ」

ビルス「時間の神様をなんでサイヤ人なんか呼べるんだ？」

ユウナ『余計なことは、喋るなよ』

クロノス「・・・こつちが知りたいな」

悟空「そういうや、ビルス様はユウナと戦ったことあるんだよな？」

ビルス「ああ」

悟空「だったら、時間止めたりできるの知ってたんじやねえんか？」

ビルス「お、俺とやったときは使ってなかったんだよ！」

悟空「だったらよ……全王様が言ってた全宇宙の大会があるんなら、居たほうが良いんじゃないか？」

ビルス「ぐっ……」

ウイス「どうしますか？」

ビルス「……今回は見逃そう」

ユウナ「ふう……」

未来トランクス「あの……そろそろいいですか？」

悟空「ああトランクス！すまん忘れてた！」

未来トランクス「いえ、悟空さんらしいですね。それじゃあ話しますね」

未来トランクスは話し始めた

第八十六話（ドラゴンボール超の軌跡『第三話』より）

「奴の名は……」

未来トランクス「アイツは、正義のために地球人を全滅させるといつていました。：すでにいくつかの星や、その人間を滅ぼしてきたとも……。一年戦って来ましたが、もうほとんど人間は残っていません……。母さんもついにこの前……」

ブルマ「え！あ……。あたし殺されたの!？」

ベジータ「オイ！そのふざけたヤロウはどこのだいつだ……!？」

未来トランクス「そいつは……。悟空さん……」

悟空「！オラ!？」

未来トランクス「あ、いえ……。悟空さんにソックリなヤツなんです」

ブルマ「えっ!!!」

悟空「ま……。まじか!？」

ベジータ「どういうことだそれは!？」

未来トランクス「わ……。わかりません」

ブルマ「だ……。だってそっちの世界の孫君はとつくに死んでるはずでしょ!？」

未来トランクス「は．．．はい。いえでも、何もかも悟空さんなんですけど．．．性格というか、残忍で明らかに悟空さんじゃないんです．．．」

悟空「だからさつき斬りかかってきたんだな」

未来トランクス「はい．．．すみません．．．紛らわしいので、母さんはゴクウブラックと呼んでいましたが．．．」

悟空「なんだよ．．．ちよつとかつちよいいじゃねえか．．．」

ブルマ「げ．．．何そのネーミング．．．未来のアタシのセンス大丈夫かしら．．．」
ビルス「わけがわからんな．．．」

悟空「で！ようするにオラたちにそいつを倒すの手伝ってほしいんだな、いいだろまかせとけ！」

未来トランクス「いえ．．．実は．．．もう戻れないんです．．．」

悟空「え？なんでだ？」

未来トランクス「タイムマシンの燃料が片道分しかなくて．．．」

ベジータ「じゃあお前は何のために過去に戻ってきたんだ」

未来トランクス「母さんは、俺が生き残ることで希望に繋がると．．．でも結局この世界に逃げてくることしかできなかつた．．．」

ベジータ「逃げてきただど!? 敵を討ちたいと思わんのか!!」

ブルマ「ちよつ……ちよつと！やめなさいよあんなたち!!トランクスはやるだけやったのよ！限界まで戦ったんじゃない!!もう休ませてあげようって思いやりはないわけ!?あんな達のような戦闘オタクと一緒にするんじゃないわよ!!」

悟空「ど……どうも……」

ベジータ「す……すまん……」

悟空「トランクスは行かねえでいいからよ……オラたちだけでも……なあベジータ」

ベジータ「う……うむ」

ユウナ「ホントに戦闘狂なんだ……」

ベジータ「何か言ったか？」

ユウナ「いえ、何も」

悟空「ちなみにトランクス、それどんなエネルギーなんだ？」

ブルマ「ちよつ!!!」

トランクス「……青の15号電気液です」

ブルマ「青の15号電気液!うちで開発中のエネルギーじゃない!たいへんよく、すべてのマシン抽出しても、あのマシンタンクかのタンクから想像して丸一日かかりそう」

トランクス「一日!? そんなに早いですか・・・向こうの世界で半分抽出するのに一年近くかかっています」

悟空「やつぱり行けそうじゃねーか・・・行こうぜベジータ」

ベジータ「あの・・・ブルマそういうワケなんだが・・・行ってもいいかな・・・」
ブルマ「好きにしなさい! アンタたちを止めてもムダだってわかるわ! いたい目みても知らないからね! だけど・・・絶対に帰ってくるのよ・・・!」

悟空&ベジータ「はいっ!!!」

未来トランクス「ちょ・・・ちよつと待つてください! アイツ本当にとんでもない強さなんです! 俺も修行して強くなっているはずなのですが、足元にも及ばなかった・・・!」

悟空「うくん・・・よし! じゃあトランクス、ちよつとだけユウナと手合わせしてくれ!」

ユウナ「何で私がそこで出るの!？」

トランクス「今の流れでは悟空さんとじゃ・・・」

悟空「ビルス様によるとな? オラより強いらしいんだけどよ、まだどのくらいの強さか分かんねえんだ。お前たち二人とも強さを知りたいからよ、いっちょ頼むよ」

トランクス「俺は大丈夫ですけど」

ユウナ「ええ……」

それから、いつもベジータが修行している部屋へ

未来トランクス「そういえば、ユウナさんはどうやって悟空さんと知り合ったんですか？サイヤ人みたいですけど……」

ユウナ「ビルス様に連れてこられただけだよ」

未来トランクス「ビルス様って……」

ユウナ「あの猫」

ユウナは、ビルス様を指さした

皆はやめようね！問答無用で殺されるよ!!

ユウナ「この宇宙で一番強いんだって」

未来トランクス「そうなんですか……」

ユウナ「……あと、悟空は私を宇宙最強って言ってたけど、ビルス様が勝手に行ってるだけだし、私一番弱いよ。超サイヤ人にもなれないし」

未来トランクス「そうなんですか!?!」

ユウナ「一応本気でやるけど、出来れば手加減してね」

未来トランクス「ぜ、善処します」

ブルマ『聴こえるー?』

スピーカーからブルマの声がした

ブルマ『聴こえたら何かサイン出して』

グーに親指を立てて、サインを出した

ブルマ『聴こえてるのね。それじゃあ、本気でやってくれて構わないわ。全部壊す気でやっていいわよ!』

未来トランクス「それじゃあ、行きますよ」

ユウナ「お手柔らかにね」

まず、アリエルの銃撃で撃つてみた

しかし、剣で防がれ向かってきた

イフリートで受け流し、殴ろうとすると手から何かが飛び出した

ユウナ『!?!』

それを未来トランクスは軽々と避け、下がった

ユウナ『今のは・・・気弾か?』

ユウナは手を突き出し、何かを手の平から捻りだそうとした

すると、気弾が放たれ未来トランクスへ

そして未来トランクスも気弾を放ち、相殺した

ユウナ『やっぱそう簡単にはいかないか。でも今ので気の使い方が分かったぞ』

気弾を連写し、未来トランクスを追い込んでいった

周りからどんな気弾を放ち、お互いに一直線上の道を作った

その道を未来トランクスが剣を構えて向かって来たので、ガイアに大盾を作ってもらい防いだ

だが壊されるのも時間の問題。何か決定的な一手を打たねば

今使えるのはペルソナ、波紋、魔法・魔法は詠唱覚えてないから無理だな、もつと使いやすかったらよかったのに！考えたものが出せるとか!! ってそんなことは今どうでもいい

まず、使えるのはペルソナのイフリート、アリエル、クロノス、カオス、ヘル、ガイアの六人と波紋は殴ったりだな、身体強化も入るがこの世界では微々たるものだ

時間を止めればどうにでも出来るが、ビルス様にバレれば即死。出来れば避けたい

ユウナ『なら、カオスを使うか』

カオスの穴を未来トランクスの後ろに繋げ、ヘルを送り込んだ

ヘルが未来トランクスに向かって行き、未来トランクスが気を取られた隙に大盾をもつて突進した

未来トランクスは両方を見て、まずユウナの大盾のど真ん中を剣先で突き、貫通させて回転しヘルの方に激突させた

大盾は使えないと判断し手放して、ヘルと共に転がって壁にぶつかつた
ユウナ『?なんだこの感覚』

未来トランクスの姿は見えないのに、近づいてくるのが分かる

ユウナ『まさか、気を感じられるようになったのか!?!』

攻撃しようとしていることを感じ取り、避けてカウンターの気弾ぶっぱしたが後ろに
避けられた

適度に距離を保つてから、自分の気を感じた

ユウナ『これが俺の気か。ならこれを高めれば・・・』

脇をしめ、拳を腰の高さに置き、気を高めていく

ユウナ「ハアアアアア!」

すると、何度も髪が浮き上がっていき、色も何度も金色になつた

未来トランクスも気を利かせて待つてくれた

そしてとうとう・・・超サイヤ人にはなれなかつた

ユウナ「く、くっそく・・・なんか足りねえ」

すると、スピーカーからベジータの声がした

未来トランクス「・・・なんというか、すみません」

ユウナ「あ・・・超サイヤ人になつてもいいですよ。こつちも何とかしますので」

ユウナ「それじゃあ、超サイヤ人になりますね」

未来トランクスは超サイヤ人に

ユウナ「超サイヤ人を相手にするのは正直嫌だから、本気でやるよ」

ユウナはイフリートとガイアを呼び出した

ユウナ「ガイア、剣」

ガイアに剣を造ってもらい、渡された

そこに波紋の呼吸と、気を全身に行き渡らせ剣に二つの力を纏わせた

そしてイフリートの炎を出してもらい、炎は全身の波紋の上を走り、燃え上がった

未来トランクス「なっ!？」

ユウナ「行くよ」

剣を床に突き立て、気と波紋が炎を乗せて広がって行く

未来トランクスは後ろに避けた

ユウナ「避けても無駄だよ」

気は床の全てに広がり、未来トランクスは空中へ。気が壁にぶつかると、波紋が炎を

連れて壁まで広がった

周りを炎で包み終わり、剣を引き抜いた

ユウナ「・・・やり過ぎ?」

未来トランクス「え、ええ、室内でやる事じゃないですね」
すると、ガパツと上から蓋が開いたような音がし、見るとスプリンクラーが飛び出してきた

スプリンクラーが炎を認識し、水をまかれてしまつて炎が弱くなっていく

ユウナ「・・・やり過ぎたね」

そして、スピーカーからブルマが話しかけてきた

ブルマ『やり過ぎよ！ここまで燃えるのは想定外！修理するから、二人とも一回出てきなさい！』

悟空『えく・・・でもよ、トランクスの方がまだ・・・』

ブルマ『外で殴りあえば!』

スピーカーからは何も聞こえなくなった・・・

ユウナ「・・・出よつか」

未来トランクス「そうですね」

外に出ると、悟空たちが待っていた

悟空「凄かったなユウナ！途中で呼んだのは誰なんだ？」

ユウナ「・・・呼んだら来る人、としか皆には説明できない」

ベジータ「説明になつてないぞ。奴らは一体何者だ。お前は一体、どこでその力を手

に入れた」

ユウナ「・・・それは、どこかで座って話すべきかと」

ベジータ「ならついて来い。そこですべてを話してもらおう」

リビングまで連れて行かれ、皆が揃った

ブルマ「それで？あの人たちの事話してくれるんだって？」

トランクス「あの人たちって？」

悟空「ユウナが呼んだら来る人達だ」

ベジータ「それじゃあ、話してもらおうか」

ユウナ「まず、私の最初の記憶は自分の星が爆発されたところでした」

ベジータ「フリーザによって、惑星ベジータが破壊された時だな」

ユウナ「それから、名前も知らない土地にポッドが降り立ってしまったので。とりあえず、出ようと思いました。でも、なかなか入口が開かなくて途方に暮れていたら、ある誰かの声が聞こえて、それに答えるとペルソナの炎の悪魔のイフリートが現れました」

すると、皆の前にイフリートが出現した

悟空「うおっ?!いきなり出てきたなあ」

イフリート「誰だお前ら」

ユウナ「じつとして」

イフリート『なんだその言葉遣い』

ユウナ『黙ってろ』

ブルマ『アンタね、修行部屋を火の海にしたのは！』

イフリート「え、アレはユウナが命令したから・・・」

ユウナ「行つてらっしゃいイフリート」

イフリート「ふざけんなよテメエエエエエエ・・・」

イフリートは命令通りブルマに付いて行つた

ユウナ「見ての通り、大抵の言う事は聞いてくれます」

ビルス「その誰かの声というのは、今の奴の声か」

ユウナ「はい。それからアリエル、クロノス、ヘル、カオス、ガイアと増えていって」

今言つた五人が皆の前に出張つた

トランクス「また出た・・・」

ユウナ「ちなみにこれで全員ね。それで、カオスの能力が空間の制御でした。つまり、自分の領域を広げて自由自在に何でもできるって感じですよ。それで、カオスの作る別空間に入れるようになったので、そこを家にしました」

未来トランクス「さつき、俺の後ろからその鎌を持った子が出てきたのは、その力のせいってことですか？」

ユウナ「はい。それからクロノスの時間を操る能力で、自分の時間を遅らせました。正確にはカオスの空間にいる間だけですが、体力的な限界の約0.4倍まで遅くしました」

ビルス「・・・なるほどな。つまり、お前はそいつ等をこき使って能力を使いまくってるといふわけだ。その能力の一つが、時間操作だったと」

ユウナ「こき使っている気はありません」

しかし、アリエルたちはユウナの意に反するように手を振った

ウイス「本人たちはそう思っているようですけど」

ユウナ「・・・有給を増やします」

悟空「なあ、そのべるそなっちゆうんは、オラも使えたりするんか？」

ユウナ「使えない事はないでしょうけど、そもそも教えて使える様な人達じゃないですし、貴方の方が強いです」

ベジータ「だが、それ自体は厄介だな。それ以上増えるなら、尚更だ」

ユウナ「増える予定はないですけど」

ウイス「最後に言っていたガイアさんが現れたのはいつですか？」

ユウナ「（最近にでもしとくか）・・・一週間くらい前ですかね」

ウイス「なら、これから増えてもおかしくないですね」

ユウナ「……これ以上騒がしくなるのはちよつと」

冗談交じりに言葉を零すと、アリエルたちに少し叱られた

特にヘルがうるさかった

そして皆に日々の不満を吐露されていると、イフリートを連れてブルマが戻ってきてつた

ブルマ「イフリートって人から色々聞いたから、事情は分かったわ。とりあえず部屋に戻って、お風呂に入ったらどう

ユウナ「あ、そうさせてもらいます。カオス、お願い」

そう言うと、空中に穴ができる

ビルス「これがさつき言っていた部屋か」

ユウナ「それでは」

少し会釈し、部屋に入った

ユウナ「用があれば、ブルマさんが用意してくれた部屋に来て下さい」

穴を閉じ、お風呂へ

ユウナ「……この尻尾も俺の一部なんだよな」

たまにあるだろう。今まで普通だったことを、ふとおかしいと思う事が

ユウナは今、もはや日常の一部と化していた尻尾に、改めて疑問を抱いていた

まず、思いっきり握ってみる。だが、すぐに力が抜けて握れなくなる

ユウナ「やつぱり、力が入らない。鍛えたら大丈夫らしいが・・・鍛え方分からんからいいか、弱点一個ぐらいないと怒られそうな気がする」

あとは、超サイヤ人か・・・4とかなったらどうなるのだろう。やはり全身赤い毛だらけになるのだろうか

ユウナ「・・・いや、それを気にするのは早い。まずは当面の目標だ。そうだな・・・すると、ユウナの顔は少しずつ顔が赤みを帯びていった

ユウナ「やつぱ超サイヤ人かな。後は魔法か・・・尚文たちの所は詠唱が必須だから、使うなら覚えないな」

身体は淡い赤色に染まり、顔は火照りを覚えていく

ユウナ「それか」もっと簡単に使える魔法があれば、違うんだろうけど」

改善策を考えていたその時、軽い頭痛に襲われた

ユウナ「うっ・・・のぼせたか？」

風呂から上がろうと浴槽に手をかけ、体を起こそうとするが、身体が水を吸った服のように重かった

ユウナ『身体が動かない・・・!?!』

動かしたい思考とは裏腹に、身体はほとんど動かない

それと共に、身体感覚は鈍っていく

ユウナ『だ、誰かに助けてもらわないと・・・』

誰を呼ぶのが一番いいのかを考えるが、思考も鈍ってきた

ユウナ「(ううっ・・・とりあえず、力の強い)クロノス・・・!」

呼ぶと同時に、意識は遠のいた

クロノス「どうしたユウナ」

ユウナを見た瞬間、危険な状態だと判断し、風呂から引き上げた

その時、バスルームの外から物音がしたため、警戒しながら戻ったが、誰もいなかったため、ベッドの上に寝かせた

すると、アリエルたちが戻ってきた

それから数時間後

目を覚ますと、皆に囲まれていた

ヘル「あ、目を覚ましたわね。のぼせて気絶するなんて、アンタ阿呆ね」

アリエル「大丈夫ですか？この指は何本に見えますか」

アリエルが右手を出し、人差し指を立てた

ユウナ「一本」

イフリート「大丈夫そうだな」

ヘル「じゃあこれは？」

ヘルはおもむろに手を出し、中指を立てた

ユウナ「それはやめろ」

部屋には既に赤みが差しており、時計を確認すると、針は五時を指していた

ユウナ「うわ、もうこんな時間かよ・・・」

毛布を剥ぎ、ベッドから出たところで気が付いた

ユウナ「クロノス、俺風呂入った時裸だったよね？」

クロノス「ああ」

ユウナ「俺がクロノス呼んで、ここまで運んでもらったんだよね？」

クロノス「そうだが？」

ユウナ「今俺が服を着てるって事は・・・俺の裸隅々まで見た？」

クロノス「視界に入らない訳がないだろう」

ユウナ「目、瞑っとけよ!! どうせへピー〜とかへアワビツ〜とかへパオーン〜とか見

たんだろ!!」

イフリート「いやいや、今のお前へパオーン〜ないだろ」

ユウナ「外野は黙らっしやい!!」

ガイア「まあまあ」

ガイアはユウナに、一度座る様に促しながら宥めた

ガイア「大丈夫ですよ。着替えさせたのは私ですから」

アリエル「イフリート達は外に追い出しておきましたし、問題ないですよ」

ユウナ「・・・二人とも、ありがと」

カオス「ついでに言つとくが、お前の寝顔を写真で撮ってユウトに送っておいたぞ」

ユウナ「・・・は？」

イフリート『おいおい死んだわアイツ』

ユウナ「・・・カオスは有給マイナス五日ね」

カオス「ええ・・・」

すると、入り口の扉からノック音がした

ユウナ「はい」

ブルマ「ユウナちゃん、ちよつといい？」

ユウナ『ブルマさん・・・？』

ベッドから立ち上がり、何の用かとも思いながら扉を開いた

目の前には当然ブルマが立っており、手には山吹色の道着を持っていた

ユウナ「え？これって・・・」

ブルマ「何の用か分からないけど、亀仙人のおじいちゃんが近くまで来てたらしいの

よ。それでさっきのを見てこれをつて。どうせなら、亀仙流の道着が良いだろうつて。

「女の子がうちの道着を……ムフフ……」とも言つてたけど」

ユウナ「……私ちよつと怖いです」

ブルマ「何かあつたらクリリンくん呼ぶから大丈夫よ。彼警官だから安心して。それと、もうすぐ夕食だから降りてきてね」

ユウナ「はい、分かりました」

ブルマが去つて行つた事を確認し、ドアを閉めた

ユウナ「とりあえず、着替えるから皆は戻つて。あ、でもアリエルは居てね」

アリエル以外のペルソナは消え、道着を着だした

アリエル「着方も練習しないとですね」

ユウナ「でも、道着なんてそうそう着ないだろ」

アリエル「ですが、何事も覚えておいて損はないですよ。この18年間も色んなことを勉強していたじゃないですか」

ユウナ「あの世の話聞いてただけだ。まあ、死んだらどうなるかを知れて気は楽になつたが」

アリエル「まだ成人もしていないのに、そんなことを考えなくてもいいですよ。まあ、考える頃にはその不安よりも、子供がちゃんと生きていけるかが不安でしょうけど」

ユウナ「子供ねえ」

アリエル「いいらしいですよ、子供作るの」

ユウナ「いや、そっちは分かるよ。ただ、俺の場合はまた別・・・」

アリエル「もしかして、添い遂げる人の事ですか？」

ユウナ「・・・まあ、そうだけど」

アリエル「それならユウトさんがいるでしょう？」

ユウナ「いやいやいや、ユウトは無いよ」

アリエル「そうでしょうか？長い付き合いですし、貴女の事を一番理解していると思
います」

ユウナ「・・・そもそも、結婚願望は今の所無いよ」

アリエル「では、心変わりすることを祈ってます。着付け、終わりましたよ」

部屋に置いてある姿見の前に立ち、全身をくまなく見てみた

ユウナ「・・・本物の亀仙流の道着・・・」

アリエル「写真撮っておきますか？」

ユウナ「・・・撮つところかな」

少しの笑顔とピースをして写真を撮り、悟空たちの居るレストランへ

悟空「あり？懐かしいなあその道着」

亀仙人「やつぱり、ピツタシじやったの」

ユウナ『亀仙人のおじいちゃんいるじゃん』

ベジータ「それを着たのか」

ユウナ「私は怖いぞ。今都合よくここに来て、都合よく私の体形に合った道着を持つてた亀仙人のじつちやんが」

亀仙人「それより、着心地はどうじゃ」

ユウナ「それよりって・・・まあ着心地は悪くないですよ」

亀仙人「ちよつと買物に行かないといけなくなつての。たまたまここを通つたら、挨拶しようと思つたら、この前のサイヤ人の娘がおつたからの。素養があるやつがいたら勧誘のためにと道着を持つてたかいがあつたわい」

ユウナ『あれ？亀仙人って勧誘とかするキャラだっけ？』

悟空「とかいって、実はユウナをつけてたつて訳じゃねえよな？」

亀仙人「そんなわけあるか！」

ユウナ『ゴメンじつちやん嘘にしか聞こえない』

愛想笑いをして話を流し、話題を変えようと咄嗟に思い付いたことを聞いてみたユウナ「そうだ、なんかこう一人で修行できると来ないですかね？」

悟空「ここでベジータが使つてるとこじやダメなんか？」

ベジータ「俺は別に構わんぞ」

ユウナ「私が構います（ベジータと同じ修行とかシヤレならん）」

悟空「一日で、いつペえ修行できる場所・・・あ！あそこはどうだ？神殿の・・・」

ブルマ「神殿って・・・ブウの時に私たちが行ったあそこ？」

ベジータ「精神と時の部屋か」

悟空「あそこなら、いつペえできるんじゃないか？」

説明しよう！精神と時の部屋とは、外の時間と内の時間が一日と一年ほどの差がある空間なのである

要は、この18年間カオスの空間でやってた事の逆。というか、精神と時の部屋の逆の事をしてただけ

ユウナ「行くだけ行っていいですかね？」

未来トランクス「ゴクウブランクはものすごく強いんです。少しでも戦力は増やしたほうが良いかもしれませんね」

悟空「よしじゃあ、手え貸してくれ」

悟空から手を差し出され、その手を掴んだ

ユウナ『うわあ、手でかいな・・・いや俺が小さいのか』

すると、視界が一瞬で替わり、神殿のような場所・・・というか、さつき神殿って言っ

てたね

そして、真つ黒の肌をした人と緑の触角が生えた少年がいた

デンデ「悟空さん！それにユウナさんですね」

ユウナ「あれ？私のこと知ってるの？」

デンデ「地球に来た時からずっと見てましたよ」

ユウナ「なら、何しに来たかわかるよね？」

デンデ「精神と時の部屋ですね、こっちです」

悟空「あとは任せたぞデンデ」

悟空は額に手を当て、消えてしまった

デンデに付いて行き、上がったたり下がったりしていくと、ある扉へ

入ると真つ白の世界があった。入り口の建物以外何も無い。この場所を忘れたら、

帰ってこられる気がしない

そういうえば、ドラえもんの道具でこういうのなかったっけ？

ユウナ「ここがそうなの」

デンデ「はい、こっちが食料です」

見せられたのは、壺に入ったいっぱいのお粉

デンデ「頑張ってくださいね」

ユウナ「・・・了解」

そう言うと、デンデによって扉は閉められた

まず息がしづらい。この方が強くなれると言うが・・・

ユウナ「まずは超サイヤ人だ！」

それから二週間後

ユウナ「まだだ、まだ終わらんぞ!!」

一ヶ月後

ユウナ「何故だ!!怒りが足らんのか!?!」

二ヶ月後

ユウナ「俺には・・・無理なのか・・・?」

一年後

ユウナは燃え尽きていた

ユウナ「もうダメだ。おしまいだあ・・・」

ヘル『もう諦めたら?ある程度は強くなったんだし、挑戦はまた今度にしなさい』

外ではおそらく、一日経った頃だろう

ユウナ「・・・明日帰るよ」

ということで、修行を終わりにし、床についた

第八十七話（賢者の孫の軌跡『第一話』より）

「勉強勉強勉強ーッ!!」

説明は不要だろう。新しい世界だ

ユウナ「説明はよ」

神様「ええ・・・新しい世界だー」みたいななのないのなの？」

ユウナ「ない」

ということで行われたことを簡単に説明

ここは賢者の孫の世界、もうすぐ入学試験だから行ってこい

Sクラス（主人公の居るクラス）二人分増やしたからガンバ

P.S. 大食いだと引かれるかもしれないから、DBの世界以外は胃袋普通にしといた

よ

ユウト「良かったな。胃袋普通で」

ユウナ「・・・まずは、どっかの宿借りるか？」

ユウト「カオスの空間に入ればタダだぞ」

二人はカオスの空間へ

ベッドに二人とも座り、ユウトが抱き寄せようとしたが、ユウナが避けた
ユウナ「・・・そういや賢者の孫って？」

ヘル「それはあれよ。転生したら俺TUEEEだったとかってやつ」
突然ヘルが空間に出現した

ユウト「つまりユウナか」

ヘル「いや、ユウナは後から能力が付け足されてるのであって、俺TUEEEは生まれ時からだから結構違うわよ。とどのつまり、現実で偉業を何も成し遂げられない凡人が、死んだ後に転生して無双するっていう、大概が最初だけ面白い物語よ」

ユウナ「それ、どっかに喧嘩売ってたりしない？」

ヘル「アンタのいた世界の共通認識だと思ってるけど」

ユウナ「どこ情報？」

ヘル「にちゃん〇る」

ユウナ「あそこは信用しすぎるな」

ヘル「それより、この世界の説明をするわよ。この世界はよくある魔法の世界、魔人という怪物を倒した賢者や導師が居たりするわ。で、その賢者に拾われたのが主人公のシンよ」

ユウナ「で、そのシンてやつが強いのか？」

ユウト「やっぱ、魔法の才能が滅茶苦茶ある状態で生まれたとか？」

ヘル「いや、シンの場合は才能よりも環境が良かったわね」

ユウナ「というと？」

ヘル「元騎士団長から体の動かし方や胆力、筋力を鍛えられて、さっき言った賢者や導師達から魔法や付与魔法とかを習ったりしてるわ」

ユウト「・・・確かに凄そうな面子だけだよ。それだけで、俺TUEEEになるのか？」

ヘル「普通ならいわ。でも、シンは転生者よ。科学の基礎くらいは知ってる。そして、この世界の魔法は“頭で想像したモノ”を出せるの」

ユウナ「！想像した奴なら出せるのか？」

ヘル「ええ」

ユウナ「・・・理想の魔法だ」

ヘル「話を戻すけど、シンはその魔法で化学を使って他の人より発想が一步先になってるの。というより、世界が私達の一步後ろをいつてるだけけど」

ユウト「・・・じゃあ、もし俺らも使えたら、この世界では俺TUEEE？」

ヘル「アンタらは魔法無くても俺TUEEEよ」

ユウト「それとこれは別だろ。魔法、使えるなら使いたいよなユウナ」

想像したモノが出せると聞いたユウナは、さっそく魔法を確かめていた。尚文の所で、魔力の感覚は掴めている。外に何かを放出するように魔力を動かし、出てきたのは

魔法「プスウー・・・」

すかしつ屁のような音だった

ユウト「ブホッ」

ユウナ「笑うなっ！魔法が出たは出たんだから、成功だ」

ユウト「なんだ、成功なのか。笑えたのに」

ユウナ「次はどっか広いところでやるか」

ユウト「なら俺にもやり方教えてくれよ」

ヘル「なんか上手く纏まったほしい、私は戻るわね」

ヘルは消え、空間の中に二人だけになった

ユウナ「とりあえず、勉強だな」

ユウト「え」

ユウナ「参考書とか買ってくるから、ガイアは千円札をこの世界のお金に変えて」

ガイア「はいはい」

外に出て、近くの店で赤本的なモノを買って帰ってきた

ユウナ「さあ、地獄の勉強会といこうぜ」

ユウト「嫌だああああああ」

ユウトに強制で勉強漬けにし、数日後の試験当日

まず筆記試験

ユウナ『ある程度は分かるが、ところどころ分からないところがあるな』

ユウト『助けてクレメンス』

ユウナ『ガンバレ』

そして実技試験

先生「次はユウト・ブランドー君」

ユウト『なんでブランドー？』

ユウナ『外国つぼくした方が怪しまれない。苗字はテキトーに、ジョジョでの俺の名前にした』

ユウト『ふーん』

先生「どうかしましたか？」

ユウト「いえ、何でもありません」

実技試験は、横に並んだ三つの的に対する魔法の種類や威力、詠唱のスピードなどが評価点に当たる

ユウト『イフリート、燃やせ』

的を燃やし、跡形もなく消し飛ばした

受験生「なんてやつだ！無詠唱で、あんなでかい火を！」

的の替えを用意し、次の人へ

先生「つ……次はユウナ・ブランドーさん」

ユウナ「はい」

野球のボールほどの水の玉を作り、的に向かって投げた

その水玉は横に広がり、刃のように的を切り裂いた

受験生「い、いまのどうやって……」

先生「嘘……」

そうして試験が終わり、数日後

試験結果の確認に学校へ行くと、掲示板に大きく結果が張り出されていた

しつかりと二人ともSクラスだった

合格者はこちらへと書かれているところへ行くと、制服をもらった

それからまた数日、入学式

同級生「てめえケンカ売ってんのか!!」

ユウト『うるさいな……』

ユウナ『無視しろ』

先生「静かにしろ!! 入場だぞ!!」

先生に言われた通り周りは静かになり、式場へ入った

保護者席や先生陣から拍手が聞こえた

それから、校長とかから色々な話を聞いている

ユウト「だる・・・」

ユウナ『口に出して言うな。頭の中だけにしとけ』

司会「それでは続きまして、新入生代表挨拶です、今年度入学試験主席合格者、シン

ウオルフオード君」

シン「はい」

ユウト『なんだ? なんかザワザワしてきたが』

ユウナ『シンってのは主人公だろ。で、この世界の賢者の名前はマーリンウオルフオード。という事は、シンは賢者の孫だからとんでもない存在だろ』

ユウト『英雄の孫って事か。ル〇イみたいだな』

シンは壇上に立ち、喋り出した

シン「ご紹介に与りました新入生代表シンウオルフオードです。今日のこの良き日に皆様に見守られこのアールスハイド高等魔法学院に入学できた事を大変嬉しく思い

ます」

ユウナ『コイツ、わりと真面か？』

シン「私は幼い頃より祖父母や知人から様々な事を学んで参りました。しかし共に暮らす祖父が森の奥に隠居していた為、私は世間知らずに育つてしまいました。そんな折とある方に言われたんです「学院に入つて常識を学んで来い」と」

ユウト『常識を学ぶために学校に来る奴がいるとは』

ユウナ『俺達も大して変わらんぞ』

シン「王都に来てから、私の環境は劇的に変わりました。すでに何人かの友人も出来ました。私にとって人との出会いこそ、大切に重要なことです。ですので皆様！世間知らずだからと言って仲間はずれにはしないで下さいね？そんな事されると泣いてしまいかもしれません」

周りの生徒は笑う人もしばしばいたが、大人たちはどよめいていた

シン「そして保護者及びご来賓の皆様、そして在校生・教師の皆様。何とぞ、三年間御指導御鞭撻の程よろしくお願い致します。新入生代表シンⅡウォルフオード」

挨拶が終わり、会場全体から拍手が起こった

国王「今年は英雄の孫という規格外が紛れ込んでいる。同級生たちは彼から色々と学ぶと良い。きっと、皆の固定観念吹き飛ばしてくれることだろう。皆が大きく成長して

くれる事を切に願っている」

入学式が終わり、クラス別に先生に連れられ教室へ

先生「ここがお前達Sクラスの教室だ」

言われた通り教室に入り、黒板に書かれた席についた

先ほどのシンや、これからクラスメイトになる人たちも席に着いた

先生「入学おめでとう。担任のアルフレッドⅡマークスだ。元魔法師団所属だ、よろしくな。今日は授業がないから、学院を見て回るなり、他の生徒と交流するなり好きにしろ。明日の午前中は学院の案内、午後からは実技講習に入る」

聞いている間暇だったので、机の中に腕を伸ばして全体を触っていると、何か硬いものに触れた

ユウナ『机に何か入ってるのか？』

自由時間になったので机の中を見てみると、銃があった・・・ペルソナのやつかな？

ユウナ『・・・その時が来たら使うか』

ユウト『なあ、俺の机に変なのあったんだが』

ユウナ『変なのって？』

ユウト『鍵かな？誰かの忘れ物かも』

ユウトが隣に来て、ソレを見せてくれた

ユウナ『鍵?』

ユウト『どうする?』

ユウナ『先生に預ける。俺達が持つてるので、こんな鍵はない』

ユウト『それもそうか』

先生『あいつら並んで何見てるんだ?何も言わないし・・・一体何をしてるんだ?』
その後、シンがシシリーというクラスメイトの女子に呼ばれていたが・・・そんなことはどうでもいいので、学校の中を一通り見て、下校時間になったので帰った

その夜、食事をしてるとユウナが泣きながら飯を食べていた
何故か聞くと、精神と時の部屋の粉が美味しくなかったという

まあ一年水と片栗粉食べてる様なモノだろうから、こうなってもおかしくないだろう

ユウト「あ」

ユウナ「どうかした?」

ユウト「鍵返し忘れた」

ユウナ「・・・仕方ねえ、明日返しとけ」

ユウト「はいよー」

そうして二人は寝た

いや、ユウナだけ寝た

ユウト『寝たかな？』

ユウナから寝息が聞こえた事を確認し、ユウトはベッドから立ち上がった

一応、寝顔を確認しようとして、顔に被った髪をどけると、目を閉じたユウナの綺麗な顔が視界に入った

ユウト『寝てるな。眠りが深いうちに、さっさと済ませるか』

ユウトは寝室から出て、倉庫へ

先ほどの鍵をもって、ガイアを呼び出した

ガイア「何かしら？こんな夜分に」

ユウト「金庫を作ってほしい」

ガイア「金庫？」

ユウト「万が一に備えてだ。頼む」

ガイア「……まあいいわ、それくらい。事が終わったら、すぐに寝なさいよ」
ダイヤル式の金庫を作ってもらい、ガイアは消えた

その金庫に鍵を入れ、番号を1129にし、金庫を閉じた

番号を忘れない様に「優菜が死んだ日」と書いて貼っておいた

金庫はバレないように隠し、寝室に戻った

寝室の扉を開けると、目の前に目が半開きのユウナが立っていた

ユウト「うわっ!?!ど、どうした?」

ユウナ「トイレ・・・どいて」

ユウトが道を開け、ユウナはトイレへ

ユウト「・・・気づかれてないな」

ホツとし、ベッドへ戻った

そしてそれを聞いたユウナは・・・

ユウナ「いったい何の話だ・・・?」

ユウトの発言に疑問に止めながらも、股間のダムは結界寸前だったためトイレへ駆け込んだ

用を足した後のユウナは、スッキリしすぎて先ほどの疑問をすっかり忘れてしまっていた

翌朝、何もなかったように二人は朝食を終えて、学院へ向かった

学院に到着すると、予鐘がなった。どうやら、カオスの空間の時計の時間が少しずれていたようだ

帰ったら、この世界に合わせた時間の時計を作らねば

教室まで走って、先生が来る前に教室に入れた

ユウナ「間に合った・・・?」

優男「ギリギリだったね」

彼はトニー・フレイド。詳しいことはそのうち出ると思うから、次からの人も名前だけで

巨乳の女子はユウナの後ろを注視していた

巨乳の女子はユーリ・カールトンという

ユーリ「そのシツポ・・・何い？」

ユウナ「え？」

スカートの中からひよっこりとしつぽが顔を出していた

ユウナ「いや・・・これは・・・」

その話を盗み聞いていた眼鏡をかけた女子、リン・ヒューズが割り入ってきた

リン「サル・・・ですかね？」

ユーリ「サルのシツポが生えてるの？」

ユウナ「助けてユウト」(小声)

ユウトは　いうことを　きかない！

ユウトは　そつぽを　むいた！

ユウナ『そつぽ向くな！』

ユーリ「どうなってるの？これえ」

ユーリはしつぽを撫でる様に触った

ユウナ「うっ・・・」

しつぽは掴まれば動けなくなるほど、神経の集まった部分であると思われる。ならばそうとう敏感であろう、背中をなぞられるような感覚に陥るほどに

ユウナが少し悶えると、ユウトが流石に止めた

ユウト「その辺にしていってくれ。触られ慣れたりはしてないんだ」

ユーリは尻尾を放し、ユウナは自分のしつぽを守る様に手中に収めた

リン「それどうなってるの？」

ユウナ「これは・・・その・・・」

ユウナがなんとか弁明しようとしたが、教室に飛び込んできたおてんば娘のアリス

コーナーによって邪魔された

アリス「だあ!!間に合った!？」

大声を上げながら入ってきたアリスに、皆が注目した

そして、次の言葉でユウナたちに視線が集中する事になる

アリス「お?何ソレ、サルのしつぽ?」

その言葉にまず反応したのは赤髪の女子、マリア・フォン・メツシーナだ

マリア「え?しつぽ?」

マリアがこちらを向き、それと同時に一緒にいた青髪のシシリーフォンクロード、例の賢者の孫のシンフォールドの二人がこちらを向いた

それに伴い、王の息子であるアウグストフォンアールスハイド、通称オーグ。そのお付き？の小柄でメガネの男子、トールフォンフレール。同じお付きで筋肉ムキムキのユリウスフォンリッテンハイムの三人も優菜の方を向き、これでクラス全員に見られている事になる

ユウナ「あ……えっっ」

ようやく話せると思い、説明しようとしたところで先生が教室にやって来た

まだ名前を言っていないから今言おう。先生はアルフレッドマーカスというSクラスの担任が出来る普通に凄い人だ

アルフレッド「全員いるな……ん？何してんだ？」

ユウナ『皆が説明の邪魔をしてくるんだが!』

オーグ「さつきから見えていましたが、ユウナにしつぽが生えていて、それを皆が知った所です」

先生「え？しつぽ？」

その瞬間、後ろから寒気がしたため横に避けると、後ろからリンが飛んできた
リン「避けられた!？」

ユウナ『この子今、俺を捕まえようとした!?!』

リンが火蓋を切り、皆が詰め寄ってきた

ユウナが警戒している事に気付いたアルフレッドは、皆を宥め話しかけた

アルフレッド「ちよつと見せてくれないか？酷いことはしない、約束する」

ユウナ「先生といえど絶対に嫌です」

アルフレッド「なら、そのしつぽは一体どうやってついているんだ？生えてるのか？」

ユウナ「(それっぽいこと言わないと)これは・・・」

ユウト「妹は小さい頃に父さんが使っていた魔法を暴発させて、その影響でこんな事になってるんだ。詳しいことは休み時間に言うから、今はあまり聞かないでくれ」

アリス「えー今言つてよー」

ユウト「ほら先生、HRの時間が無くなつていきますよ」

アルフレッド「・・・仕方ない。だが、あとで説明してもらおうぞ」

皆が席に座りHRに

アルフレッド「ホームルーム後は、昨日言った様に校内見学に行く」

HRが終わわり、学校案内へ。リンやアリスなどがしつぽに興味津々でいつ襲ってくるか分からないため、ユウトが後ろに付いて行った

先生「まず学院の校舎は大きく分けて二つ、一つは授業で使う校舎。もう一つは生徒

会室、実験室、研究室等に使われる校舎だ。研究室は研究会を作った連中が放課後に使っている」

ユウナ『要は部活か』

ユウト『部活だな』

先生「研究会は例えば・・・放出系魔法を研鑽する「攻撃魔法研究会」付与魔法での魔道具制作を目的とする「生活向上研究会」身体強化魔法極める「肉体言語研究会」・・・等がある」

ユリウス「ぜひ参加したいでござるなあ・・・肉体言語研究会」

オーグ「ユリウス、私の事は気にせず入っていいぞ。むしろ入れ」

ユウナ『アレだな、俺たちは全部できさるな。魔法は俺ら出来なくてもイフリート達ができるし、付与は発想自体ですぐできそうだし、強化はカオスの力で体だけメンテナンス状態にすれば、強くなるし』

ユウト『入っても意味ねえな』

オーグ「シンにはどこも物足りないんじゃないか？いつその事、自分で研究会を立ち上げてみるか」

シン「え!?!」

アルフレッド「ウォルフオードの作る研究会か興味深いな」

リン「確かに興味深い」

アリス「もし作るならあたしも入りたい!!」

ユーリ「私も入りたいかもお」

トニー「僕も入りたいね。そこに入れば、ずっとSクラスにいられそうだ」

オーグ「・・・先生どうすれば研究会を開けるんですか?」

アルフレッド「5名以上の会員と顧問教師後は申請書が受理されれば立ち上げだ」

トール「研究会の名前も必要になりますね」

シン「ちよっ・・・みんなちよつと待って・・・」

シシリー「シン君が研究会を作るなら、私も入らないといけないですね?」

アリス「『英雄研究会』ってのはどう?シン君にマーリン様とメリダ様の事教えてもら

うの」

アルフレッド「もうそれあるぞ」

ユウナ『あるのかよ』

アルフレッド「活動内容は授業後にも決めるか、参加者もその時決めよう」

その後、入試の時に魔法実技をした場所へ

アルフレッド「ここが練習場だ」

ユウナがぶつ壊したのは、綺麗な新品に変えられていた

ユウト『まあ、真つ二つにしたしな』

ユウナ『やり過ぎだったかな？』

それからまた移動

アルフレッド「ここが食堂だ。時間もちようどいいから昼飯食べてから、さつき教えて練習場に来い」

アルフレッド先生はそう言った後、練習場へ歩いていった

見た事の無いような料理がたくさんあったが、精神と時の部屋の粉より確実に美味しいので目に入ったモノを食べられるだけとった

食べている最中、皆が近寄ってきた

アリス「ねえねえ、そのしつぽって生えてるの？」

ユウナ「・・・うん」

頭の中で「黙り続ける」と「嘘を言つてほのめかす」を天秤にかけた結果、嘘を言う方が良さそうという結果になった

リン「やっぱり」

シン「魔法で失敗したとか言つてたけど、元々何の魔法を使おうとしてたんだ？」

ユウト「動物に変身する魔法。父さんが魔法を試行錯誤してる所に、ユウナが邪魔してな。その時に、発動中だった魔法が父さんの意識が逸れた事で暴走。そして今に至る

と

ユウナ『すげえな。今のを一瞬で考えたのか?』

トール「ではお父様にもしつぽが?」

ユウナ「いや、それは私だけ」

ユリウス「? 傍にいたユウナがなったのならば、使った本人のお父様もなるのでは?」

ユウト「それはアレだろ。魔法の思考段階でユウナが邪魔したから、魔法の変化内容にユウナが入っちゃったんだろ」

マリア「つまり、ユウナだけ変わる魔法に?」

ユウナ「多分ねー」

トニー「にしても、元に戻りたいとか思ったりしないの?」

ユウト「まあ本人が気に入ってるし、恩恵もあるんだぜ? ほれ」

ユウナに向かって匙を投げ渡した

すると、ユウナは察したように匙を折り曲げてみせた

シシリー「そんないとまとやすく・・・!?!」

匙を折り戻し、優斗に投げ返した

マリア「へえ、動物の力が使えるって感じかな?」

ユウナ「・・・まあそんな感じ」

という感じでなんとか身バレ（転生等）は避け、練習場へ

先生「さて今日の授業だが：：とりあえず、それぞれの魔法を見せてもらおうか。実際にクラスメートの魔法を見て、各自学べる部分もあるはずだ」

最初はユリウスの身体強化、的を一つぶつ飛ばした

それからどんだん皆が様々な魔法を無詠唱で出して行くが：：

シンは皆と比べれば、相当な物だ

俺が一年前に使えた気功波と同じレベルの威力を持つ魔法をぶつ放しやがった

トニー「：：!!さすがにすごいな!!」

トール「これが英雄の孫か：：!!」

ユリウス「これほどとは：：」

リン「いいの思いついた」

ユーリ「ん？」

リン「研究会の名前「究極魔法研究会」ウオルフオード君なら、すべてを消滅させる攻撃魔法とか、絶対破れない防御とか転移魔法とかそのうち使えそうだし」

アリス「良いね!凄そうな感じ出てるし!!」

ユーリ「参加者はSクラス全員?ユリウス君は?」

ユリウス「あつ、拙者もやはりそつちに：：」

オーグ「ちっ」

アリス「じゃそれで決定くくく♪」

ユウト『なんか俺達も入る流れだぞ』

ユウナ『いいんじゃないか？断る理由もないし』

すると、先生がシンが壊した的を、新しいものに入れ替えて俺達を呼んだ

アルフレッド「後はユウトとユウナだぞ。どっちからするんだ？」

ユウナ「お前先得いいぞ」

ユウト「どうせだから、前と別のにするか」

ユウトはガイアを呼び出し、三本の槍を作って全ての的を貫いた

トニー「こう言っちゃ悪いとは思うけど、シン君のを見た後じゃね・・」

ユウナ「よし、次は私だな。どうせだから、もう壊してしまおう」

ユウナは超サイヤ人になり、気弾を三つ発射

的は輝きに消え、塵も残らなかった

ユウナ「オツケー終わり」

皆『一瞬で金髪になって、的を消し飛ばした!?!』

シン「これが普通じゃないのか？」

皆「非常識だよ!!」

演習を終え、学校が終わった後

リンたちに追いかけられながら帰宅

そして次の日の昼食中。Sクラスの皆が、同じテーブルに座ってきた

オーグ「登下校の送り迎えはどうするんだシン？カートが自宅謹慎になったなら……危険はなくなったわけだが」

ユウナ『こいつらはわざわざ同じテーブルに来て、誰の話をしているんだ？』

ヘル『カートっていうのは、シシリーのストーカーよ。昨日シンが撃退してたわ』

ユウト『ナチュラルに説明してんな、ヘルのやつ』

シン「そうだな……護衛はもう必要ないかもな」

シシリー「え、そう……ですよ、護衛……ですもんね」

シン「けど、護衛じゃなきゃ一緒に通学しちゃいけないってことはないだろ。家同じ方向なんだし」

シシリー「そつ……そうですよ！同じ方向ですもん！一緒に通学したっておかしくないですよ!!……あ」

マリア「もうシシリー興奮しすぎ〜っ」

シン「マリアも一緒に通学するだろ？」

マリア「お邪魔じゃなければね〜」

シシリー「おお、邪魔なワケないでしょマリア！なな、何言ってるの!!」
オーグ「動揺しすぎだクロード。しかし流石だな。みんなの前で「オレと一緒にいろ」とか私には真似できない」

シン「いつ俺がそんなこと言った!？」

シシリー「一緒に……」

マリア「シシリーが変な所にひっかかってまーす」

マリアの言葉で、皆から笑いが零れた

マリア「そういえば、シンって移動中も索敵魔法使ってるよね？あれ何で？」

シン「何でって……こっちに害意向けられたらわかるだろ？」

トール「？シン殿……害意がわかるんですか？」

シン「ああ……そうかえーと……トールは魔物狩った事ある？」

トール「あるわけないじゃないですか。この前まで中東学院生ですよ？」

シン「魔物の魔力って禍々しいっていうか……普通じゃないんだよ。敵意をモ口にこっちに向けてくるからね。そういうのって人間にも少なからずあって……それを察知してるわけ」

リン「ウォルフオード君って魔物を狩った事あるの？」

シン「あるよ」

トニー「ちなみに・・・初めて魔物を狩ったのは？」

シン「100の時」

皆「100歳い!!？」

シン「確か・・・3メートル位ある熊だったかな」

皆「熊ああ!!？」

ユウナ「え？なに？それってすごいのか？」

トール「普通出来ませんよ！100歳で!!」

ユウナ「たかが熊だろ？」

トール「たかが!!？」

ユウナ「たかが熊だよな？」

シン「流石に「たかが」程じゃないけどな」

トール「もしかしてですけど・・・ユウナさんも常識ないんですか？」

ユウナ「そりやそうだろ。異世界人なんだから」

皆「・・・はああああ!!??！」

ユウナ「バカ！何でそれを・・・」

マリア「ちよ、ちよつとそれどういう事!？」

ユウナ「い、いや今のは・・・」

ユーリ「今年ヤバくない？」

アリス「ヤバイ」

ユウナ「ちよつと待って、違うの」

オーグ「落ち着けみんな、後で聞こう。もうすぐ研究会の説明会だ、終わった後ならいくらでも聞ける」

シン「お、もう時間か」

飯の器を下げて、食堂から出た

すると、校門の方に邪悪な気を感じた

ユウナ「シン、何か来てるぞ」

シン「ああ、分かってる」

校門の前に誰かいる・・・しかも殺気を出しながら近づいてきている

誰かは構え、こちらに魔法を撃ってきた

シン「シシリー!! オーグ!! 制服に魔力を通せーっ!!!」

攻撃魔法がシシリー達の方に飛んで行き、ユウナがそれを追いかけた

まず、ユウナが間に合うわけではない。そして、シシリー達が確実に魔力を流し防御が出来るという保証もない

ならばとユウトがカオスを呼び出し、ユウナとシシリー達の間にかオスの空間を繋げ

てショートカットした

ユウナは穴を通り、シシリィ達の所へ

ユウナ「ガイア！」

ガイアの力で大盾を作り、攻撃魔法を受け止めた

オーグ「大丈夫ですか!？」

ユウナ「問題無い」

オーグ「あれは・・・カートか!？」

マリア「何で!? 謹慎中じゃなかったの!？」

シン「オーグ・・・これはもうダメだろ?」

オーグ「ああ・・・これは完全に殺人未遂だ。到底見過ごすことは出来ん・・・!!」

カートは泡を吹きながらシンを睨んだ

カート「貴様きさまキサマキサマキサマギザマ、ーッ!!!!」

カートの魔力は膨れ上がり、目に見える程のオーラとなっていた

シン「・・・なあオーグ」

オーグ「・・・何だ?」

シン「あれ魔力の制御出来てると思うか?」

オーグ「・・・思わんな」

シン「……マズくね？」

オーグ「……マズいな」

シン「皆を避難させる!!」

オーグ「わかった!!」

オーグ皆の所へ行き、避難指示を出し始めた

話を聞いた生徒は、叫びながら校舎の中へ逃げていった

ユウナ「どうしようか……」

これはアレを使う時か？

シン「がっ!!」

カートの魔力による突風でシンが少し後ろへ

シシリー「シン君!!」

すると、カートの髪がだんだん超サイヤ人のように上がっていく

ギリギリと十数メートル離れている優菜の所まで聞こえる歯ぎしりをしたかと思うと、眼が真っ赤に染まっていった……プオーガかな？

シン「マジかよ……魔人化、しやがった……!!」

何事かと校内からぞろぞろ人が出てきた

シン「みんな逃げろーっ!!こいつは魔人化した!!ここにいると巻き添えを食うぞ!!」

男子生徒1「ま・・・魔人・・・!?・・・うわああーっ!!!」

女子生徒「きゃあああ」

男子生徒2「助けてえええ!!」

先ほども叫び声が聞こえたが、今度は阿鼻叫喚の嵐だ

アリス「あたし達も早く離れよう!!」

トニー「こそ、その方がよさそうだっ!」

シン「オーグお前達も逃げろ」

オーグ「!?シン・・・お前まさか・・・」

シン「コイツを王都に放つわけにはいかない、俺が食い止める」

オーグ「ならば私達も・・・」

シン「魔物も狩った事ない奴が何言ってるんだ!!」

ユウナ「まあ私は残るけどねっ!」

シン「お前もだよ!!」

ユウナ「なん・・・だと・・・」

オーグ「・・・シン・・・私達は邪魔か?」

シン「・・・ああ邪魔だな」

オーグ「・・・全員直ちにこの場を離れる!!私達がいっても、シンの足手まといになる

ただだ!!」

オーグの言葉で、恐怖により足をすくませていた生徒も走り出したシシリー「そんな・・・シン君だけ残して何て・・・」

オーグ「メッシーナ!!引きずってでもクロードを連れていけ!!」

マリア「は・・・はい!!」

オーグ「トール!!ユリウス!!教師に連絡して対処を急げ!!」

トール&ユリウス「はっ!!」

オーグ「ユウナも早く逃g」

ユウナ「いや、わたしもやる」

ユウト「そうか、俺は逃げるから任せた」

ユウトは背を向けて逃げていった

ユウナ「おい!?!」

カート「ゴアアアア!!」

ユウナが驚いている最中に、カートは奇声を発しながら向かってくる

ユウナ「!・・・コオオオオ」

カートのパンチを避けたと同時に、顔面に波紋疾走を食らわせた

カート「ガアアア!!ジャマヲ・・・スルナアアア」

シン「言葉を・・・発した!？」

ユウナ「理性が残ってるってこと？戻せるの？」

シン「分からない・・・けど、試したいことがある。カートを抑えてくれないか？」

ユウナ「それなら任せろ」

すぐにカートの後ろに回り込み、羽交い絞めして動けなくした

そしてシンが腹パンを決め込む

カート「ゴウアアッアアッ!!!」

しかしカートの様子は変わらず、むしろ膨れ上がった筋力で振り払われ、学院の壁に叩きつけられた

ユウナ「ガハッ」

血反吐を吐き、壁からズルズルと落ちていき、地面に激突した

シン「ユウナ!」

ユウナ「アンタは・・・戦いに集中!」

カート「ウォルフオオオードオオオオ!!!」

カートは大声を出しながら、何かをためる様に力み始めた

カート「がああああ」

身体の周りのオーラが、より一層濃く、広くなっていく

シン「待てよオイ・・・その魔力量は・・・!!」
 ユウナ『もしかしてヤバい?』

シン「・・・やるしか・・・ない!!」

シンは覚悟を決めた様な顔をし、異空間から超音波振動と書かれている剣を取り出した

シン「カートオオツ!!!」

カートに向かつて走り、剣を振りかぶって、首を叩き切った

首からは、大量の血が噴水のように吹き出した

ユウナ『ヘル、カートの魂を・・・』

ヘル『わかってるわ』

ユウナ『これで済んだって事は、銃はまだ使うなってことだな』

オーグ「大丈夫かシン!?!」

シシリー「シン君ケガは・・・」

シン「・・・ああ・・・大丈夫・・・」

シシリー「シン・・・君・・・」

シン「カート、アイツ・・・シシリーの事つけ狙ってたし、魔人にまでなっちまったけど・・・それでもオレ、討伐するしかできなかった事が悔しくて・・・。絶対におか

しい・・・こんな事!!なにかあるはずなんだ・・・こんなことになった理由が・・・

シシリー「・・・シン君」

オーグ「シン・・・」

ユウナ『俺さ、血反吐・・・吐いたんだけど。誰も心配してくれないわけ?』

マリア「信じられない!カートが魔人化したときはもうダメかと思ったのに・・・」

トール「自分も死を覚悟しました・・・!」

リン「ウォルフオード君凄かった」

アリス「ね!!ね!!魔法もすごかったけど、剣で魔人の首をスツパリって!!」

ユリウス「あれなら騎士養成学院でも主席を狙えるで御座らんか?」

トニー「家は代々騎士の家系だけど、あんな綺麗な剣筋は見たことないねえ」

ユーリ「ウォルフオード君ってえやっぱり凄い人?」

シン「・・・お前ら・・・見てたのかよ・・・」

シンはそこで思い出す

シン「そうだ!ユウナ・・・」

すぐにユウナの方を見るが

ユウナは死んだように動かない

シン「嘘・・・だろ・・・?」

シシリー「そんな・・・！」

ユウト「・・・」

無言のまま、おもむろに優菜に向かって歩き出した

オーグ「・・・付き合いは短かったが・・・立派な墓を建ててやるぞ・・・」

ユウトはユウナの前に立ち、ゆっくりと抱え上げた

ユリウス「ユウト殿・・・」

そして頭を下にし、地面に突き刺すように振り下ろした

皆「ええええ!!？」

ユウナの頭が埋まるのか!?!むしろ砕けんか!?!という勢いで振り下ろしたため、皆はお

もわず目を閉じた

しかし考えとは裏腹に、頭蓋骨が割れる音も、土が削れる音もしなかった

目を開けると、両手で地面を押し埋められるのを拒む優菜の姿が目に入った

ユウナ「お前・・・トドメさす気か!?!」

ユウト「死んだふりするからだ」

オーグ「なんだ、生きてたのか」

ユウナ「これでも死にかけてるんだけど・・・」

ユウト「アリエル、回復してやってくれ」

アリエル「はい」

敵もないため、完全回復中

ユウト「サイヤ人って、死の淵から復帰すると強くなるんだろ？それ狙ったろ」

ユウナ「なんだ、知ってたの」

ユウト「あんなだけ時間ありやあな」

アリエル「終わりましたよ」

ユウナ「え、もう？」

アリエル「いつもいつも怪我ばつかするので、技術が上がってしまいました」

ユウナ「・・・なんかすみません」

オーグ「それにしても・・・シン、お前これから大変だな」

シン「？何が？」

オーグ「歴史上二体目の魔人が現れたんだぞ？それをこんなにアツサリ・・・」

すると、呼んだ兵士がようやく到着した

数人の兵と隊長らしきマントを付けた人が、オーグの元へ

隊長「殿下ーっ!!!ご無事ですかっ!!!魔人はどこに!!!我々が全力をもって・・・!!!」

オーグ「もう終わった」

隊長「えええええ!!!」

オーグ「あそこにいるのがそうだ」

隊長「……!!ま……まさか魔人を……討伐したのですか……!!」

オーグ「ああ……私じゃないがな」

オーグはアイツだというように、シンを指した

隊長「……?こんな……ただの魔法学院の生徒が……?」

オーグ「こんなとはなんだ、彼はシンⅡウオルフオード……魔人討伐の英雄マリー
ンⅡウオルフオードの孫だぞ」

隊長「けっ……賢者様のお孫様ですかーっ!!」

隊長の声が聞こえたようで、生徒たちが校舎から出てきた

男子生徒1「お、おい……魔人は……どうなったんだ……?」

女子生徒1「もう大丈夫なの……!」

男子生徒2「誰かあそこに倒れて……」

女子生徒2「やだ……!!首が……!!」

シン「……すみませんマント……借りても?」

隊長「え?あ……ああ……」

借りたマントを、カートにブルーシートのようにかけた

女子生徒3「ちよつと……何が起きたのよ……!」

男子生徒3 「だ・・・誰か死んだのか・・・!?」

カートを一瞬見た生徒の言葉によって、生徒たちがざわつき始めた

オーグ 「みんな安心しろ!! 魔人は賢者マリーリン殿の孫、シン||ウオルフォードが討伐した!!」

男子生徒4 「お、おお・・・うおおー!!!」

男子生徒5 「凄い!! さすが賢者様の孫だ!!」

兵士1 「英雄!! 新しい英雄だ!!」

兵士2 「賢者様の孫・・・シン||ウオルフォード!!」

皆 「シン!! シン!! シン!! シン!!」

マリア 「すご・・・シンコール」

皆 「シン!!」

シン 「恥ずすぎる・・・やめて・・・」

皆 「シン!!」

オーグ 「やっぱりこうなったか・・・魔人の遺体の処理は頼めるか?」

兵士 「お任せください殿下。今後の処置につきましては、追ってご報告いたします」

オーグ 「シン、皆。一度教室へ戻ろう」

教室に戻る途中

シン「・・・」

シシリー「シン君・・・大丈夫ですか？」

アルフレッド「おお！お前達・・・心配したぞ。ウォルフオード！ケガは無いか!？」

シン「大丈夫です・・・先生」

アルフレッド「そうか・・・良かった・・・！」

シン「アルフレッド先生、オーグ・・・それに皆、聞いてほしい話があるんだ」

話しを聞くために教室へ

シン「今回の騒動・・・最初から最後まで違和感ばかり感じるんだ。まずカートは行動自体が、過去の様子から見ても不自然すぎる。学院での権力行使が禁止されているのは誰だつて知ってること。・・・なのに未遂に終わったとはいえ、二度もそんな行動を見せている、オーグから警告を受けた・・・。だが、そもそもあそこまで身分にこだわる奴が、身分の頂点にいるオーグの言葉をなぜ聞けない？・・・で、ここから俺が今日感じた違和感。謹慎中だったカートがあそこに現れたことも謎だけど・・・それよりも、あんなに簡単に魔人化するものなのか？」

アルフレッド「!!確かにおかしいぞ・・・過去に魔人化した人間は、長年鍛錬を積んだ高位の魔法使いだった・・・!!その魔法使いが超高難度の魔法の行使に失敗し、魔人化したと伝えられている・・・!!」

トール「カートは学院に入学したばかりの人間……たとえ魔力の制御に失敗しても……暴発する程度のはず……!!」

シン「そう……魔力の制御に失敗したただけで魔人化するなら、そこから魔人であふれてるはずだ」

リン「確かに魔法の暴発くらいならよく見る、私もした事ある」

シン「危ねーなおい！周りも吹っ飛ばす危険があるから気をつけろよ」

リン「うん、これから気をつける」

オーグ「……では、なぜあんな不自然な形で魔人化したのか……か」

ユリウス「なぜで御座る？」

ユーリ「分かんないわねえ」

アリス「あたしもっ」

ユウナ「ヒント出まくってるのに分からないのかよ。本来ならない奴がなってしまうたつて事は、そいつに何かを加えられたつて事だろ」

オーグ「!……まさか、そんな事が……!？」

シン「ユウナのヒントで、皆も大方分かったと思う。カートが魔人化したのは偶々じゃない」

シン&オーグ「人為的に、魔人化させられた!!」

ユウナ「よし、結論に達したね。そんじゃ、私達帰るから」
皆「は？」

シン「いやいやいや、ちよつと待て！この流れで帰るのかよ！」

ユウナ「アイツみたいな奴だったら、倒していいなら1000人来ても問題ない」
オーグ「カート以上に強いやつならどうする」

ユウナ「今のところは大丈夫。あそこまでおかしくならないと魔人化しないなら妥当な判断ができてにまっすぐ向かってくると思うから、そこを潰せばいい。でも、本当の問題はその先」

シシリー「その先？」

ユウナ「今の段階で実験途中なら、今よりもっと早い段階で魔人化できるようになつてしまつたら、数は増えるし理性を保つた奴がどんどん出てくるつてことだよ？もしかしたらもういるかもしれない、だから色々試してくる。学院にはちゃんと来るから」

そう言い残し、ユウトと一緒に教室を去つて行つた

家で少し準備をし、荒野でいろいろ試した後寝た

いくつつか面白いのを思い付いたから、そのうち使うと思う

第八十八話（のびハザの軌跡『第二話』より）

「大☆爆☆発」

レオン「どうした？行くぞ」

レオンにそう言われて、優菜の元を離れた

今度は優菜と優斗が入れ替わって、北の別校舎へ

優斗「さて、どこから調べようか」

健治「手当たり次第にやるしかないだろ」

まずは、凶工室から調べることにした。中には暴徒が二人いた

聖奈「ここにも・・・！」

優斗「俺がやる」

優斗は暴徒の持ったナイフをかわして、顎に銃口を当てて撃ち殺し、もう一人が振り回してきたナイフを、暴徒の死体に食い込ませて封じ、眉間に弾を撃ち込んだ

優斗『・・・やっぱり、力のリミッターが外れてるな。常に鍛冶場の馬鹿力にされてるのか・・・？』

健治『やっぱこの兄妹化け物並の強さだ・・・』

レオン「？誰かの手帳か？」

四つのテーブルのうち、一つのテーブルに赤い手帳が置かれていた

優斗「・・・とりあえず見てみるか」

優斗が手帳を開き、中身を見ると、誰かの手記の様だった

優斗「これ日記だな、読む必要あるか？」

レオン「どこかに避難すると書かれているかもしれないだろう」

優斗「・・・それもそうか」

以下、日記文

7月22日

明日は僕の嫌いな図工の授業だ。

図工の下手な僕はどうせまたからかわれるのだろう。

もうすぐ夏休みだというのに・・・早く終わってほしい。

7月23日

いよいよ、図工の時間だ。

粘土で手を作るらしい。

やってみたが、意外とうまくできた。

案ずるより・・・ウブが易し、だっけ？まあいいや。

あと、日記に書くほどの事が分からないけど美術室で変な紙切れを拾った。

何か数字が書かれている・・・？

まあ、ただのゴミだろう。

ごみ箱まで捨ててに行くのも面倒くさいので、そのまま教室の隅に投げたおいてしまった。

いや、誰かが捨ててくれるだろう。

以上

のび太「教室の隅・・・」

それぞれ、ゴミ箱と隅を探してみると、のび太が7と書かれたメモを見つけた
優斗「何の紙切れだ？」

のび太「給食室にあったのと同じだね」

優斗「他にもあんのか。見せてくれ」

そうしてメモが並び、6と7が並んだ

優斗「・・・7まであるって事か？」

聖奈「それか、何かのパスワードとかでしようか？」

健治「他にもあるかもしれねえな」

優斗「じゃあまた探索だな」

それから、図工室から南の教室に行くときネラルウォーターが一つ落ちていた

優斗「・・・逃げる時に落としたのか？」

健治「じゃあ、ここに避難した人がいたって事か？」

のび太「じゃあ、まだ校舎の中に？」

優斗「なら早く調べつくさないとな、暴徒になっちゃう可能性もあるんだろ？」

レオン「他に調べていないのは、ここから東と二階から上か？二階ならいるかもしれないな」

優斗「一応一階も全部調べるんだろ？」

のび太「もちろん」

そして東に行こうとすると、床の一部分に色が違うタイルがあった

優斗「？何でここだけ色が違うんだ？」

のび太「前はこんな色じゃなかったと思うけど・・・」

健治「誰かが変えたってか？何のために？」

レオン「さあな、だが油断ゆるなよ」

優斗がタイルを踏むと、目の先にある廊下の角の置物からナイフが飛んできた

優斗「!？」

ナイフは優斗の首へと空を切り、飛んでくる

優斗は当たる瞬間に魔法障壁を展開し、ナイフを落とした

優斗「・・・面倒な事をする奴がいるもんだな」

健治「今、どうなったんだ？避けてねえよな？」

レオン「・・・」

優斗「あの置物、機械だな？スイッチ切ってくるから待ってるよ」

優斗がスイッチを切って、皆がついてきた

優斗「それじゃここも調べるか」

教室は全て板を内側から打ちつけられて開かず、トイレには何もなし。そして残った

最後の部屋の倉庫には箱が一つ

のび太「暗証番号とかがいるのかな？」

聖奈「もしかして、学校中に落ちていた破れたメモが暗証番号でしょうか？」

健治「そっちの机に紙が一枚あったぞ」

優斗「メモか？」

健治「いや、数字は小さい順にとって書かれてただけだ。メモはなかった」

レオン「金庫は四桁の暗証番号が必要らしい。あとふたつメモがあるはずだが・・・」

優斗「他に探してないのは？」

のび太「保健室から東はまだだよ」

東渡り廊下へ行くと、暴徒が一人突っ込んだ来た

優斗「面倒だな」

優斗は刃物を掴んで砕き、暴徒を殴って気絶させた

優斗「さっさと行こう。時間がもつたない」

レオン『もし、こいつが敵だとしたら・・・俺も覚悟を決めるしかないな』

まずは資料室・・・

のび太「鍵が掛かってるね」

優斗「ブチ破るか」

聖奈「いえ、鍵は見つけてますから普通に開けましょう」

聖奈さんが鍵を開けて、優斗が入ると暴徒がまた一人いた

優斗「どうやって入ったんだテメエはよオ!!」

優斗が回し蹴りで暴徒の頭を壁にぶつけて気絶させた

優斗「・・・で、ここは資料室だったな」

聖奈「はい」

優斗「この中からメモを探すのか?」

のび太「・・・嘘でしょ?」

健治「根気強くやるしかないか」

まず、緑ハープとメモ（4）を見つけた

しかし、ゲームではないので他も全部探す

優斗「・・・他に何かあると思えないのは俺だけか？」

健治「もしかしたらって事もあるだろ、飽きるな」

優斗「・・・仕方ないな。皆、今から本が勝手に飛び出たりするが気にするなよ」

レオン「?どういう意味だ？」

レオンがそう言った瞬間、本が勝手に動き出した

レオン「な!？」

のび太「な、なにこれ!？」

優斗「気にするな、ただの怪奇現象だ」

ペルソナが本の中を確認してるだけです。まだ優斗はのび太たちを信用しきつていないので見えてません

健治「怪奇現象の時点で普通じゃないんだよ!!」

優斗「大丈夫だ、こいつらも一緒に探してくれてるだけだ。何かあったら助けてくれるし、守護霊が手伝ってくれてるとでも思えばいい」

聖奈「ええ・・・」

結果、これ以上の収穫ナシ

優斗「皆ありがとうな、戻っていいぞ」

ヘル『もつとマシな使い方しないと殺す』

なんて言いながら、頼みは聞いてくれるヘルは実は優しいのでは？

そして、最後に一番奥の図書室へ。図書室には女の子の死体が一つあった

聖奈「恵美ちゃん!？」

優斗「・・・息はない・・・か」

健治「知り合いか？」

聖奈「テニスクラブの・・・後輩よ・・・」

健治「・・・そうか」

優斗『ヘルならどうにかできないか？』

ヘル『・・・死んでから時間が経ちすぎてるわ。これはガイアに身体を作って貰った

ら出来るかもしれないけど・・・』

ガイア『これだけ無残に殺されてしまったは、生きる気力がなくなっているのではな

いかしら?』

優斗『・・・ならそつとしておこうか』

そして図書室の奥の方で木箱を見つけた

健治「……怪しすぎるだろ」

優斗「罨……だよな？」

レオン「不用意に開けるのは危険だな」

のび太「とりあえず、どうしよう。開ける？」

優斗「一応俺が開けるか」

健治「ならこのナイフ使えよ」

健治がナイフを渡そうとすると、優斗が木箱の角を掴み、握力で握り潰した

のび太「嘘……」

優斗「ハンドガンの弾入ってた……」

健治「なんでだよ」

レオン「……もしかすると、この事態を引き起こした誰かが置いたのかもしれないな」

優斗「何のために？ 敵に塩を送ったってのか？」

レオン「いや、ここを拠点にしていたか、今もしているかもしれない。だとすると、二階から上のシャッターのセキリユティが違うのも領ける」

優斗「上階に犯人がいるってのか？」

レオン「可能性の話だ。もちろん、全く別の可能性もある。だが、ここから先は今ま

で以上に警戒せねばならないだろう」

そして、ハーブを三種類見つけた

聖奈「こういう時の為に用意していたのかは分かりませんが、学校がハーブを自生してくれていたおかげで怪我が治せそうですね」

レオン「赤いハーブと緑のハーブを調合すれば効果が上がるはずだ」

優斗「・・・よくそんなこと知ってんな」

レオン「職業柄色々とな」

のび太「じゃあこの青色のハーブは？」

レオン「それは知らないな。持っただけで損はないだろうが、何が起るかは賭けになりそうだな」

以上図書室でした

優斗「メモまだ足りなくないか？」

健治「後行つてないとこつてどこだ？」

のび太「職員室だと思ふ、鍵あるし」

優斗「じゃあさつさと行こう」

職員室の鍵を開け、中に入ると、暴徒が二人いた

健治「またかよ！」

のび太「窓が割れてる……」

レオン「割って入ってきたのか」

暴徒が一人、こちらに気付いたと同時に、向かってきたので魔法で眠らせた。ついでにもう一人も

のび太「……寝たの？」

健治「……もう何しても驚かねえぞ」

木箱も二つあったので壊すと、またハンドガンの弾が入ってた

聖奈「あとは奥の校長室ですね」

校長室に入ると、なぜか悪魔と女神の像が三つずつあり、校長先生らしき大人の死体もあつた

のび太「校長先生……」

聖奈「……」

健治「面倒くせーオツサンだったけどな。生徒の為に、夏休みにもこうして校長室で仕事をしてたんだな」

優斗「……先生……か」

のび太たちが悲しんでる間に、レオンがテーブルの上に紙があるのを見つけた
レオン「全員、こっちに来てくれ」

皆も紙に目を通すと「三人の女により扉は開かれる」と書かれていたのび太「？」

聖奈「女・・・あの女神の像でしようか」

健治「三人だし、そうだろうな」

優斗「下のタイルの色が違う所があるぞ、ここの上に乗せるんじゃないのか？」

レオン「奥に隠れ扉を見つけた、おそらくここが開くんだろう」

優斗「じゃあ、ちよつと頑張ろうか」

どうにか悪魔の像をどけて、女神の像を並べた

すると、奥にある扉から鍵が開く音がした

のび太「やったあ！」

優斗「さすがに隠し部屋なら暴徒もないだろうし、俺は見張ってでもいいけど」

レオン「いや、見張りなら俺がしよう」

ということで、レオンが見張りしている間に部屋を調べようとすると、壁に貼られた写真が目に入った

のび太「テニスクラブの写真・・・？いかにも隠し撮りって感じだね・・・。あ、聖奈さんも写ってる」

聖奈「どうして・・・」

健治「……そういや、テニスクラブばかり見回りしてたな、あの校長は」
レオン「……日本はそういう国だったか？」

次に見つけたのは……

優斗「女子更衣室の……鍵」

のび太「校長先生……」

聖奈「あの人……！」

健治「……やれやれ。いい歳して何やってんだか、あのオッサン」

レオン「……」

そしてメモ

優斗「最後の数字は「0」か。これで四つ揃ったな」

レオン「ここにあるという事は、校長も何かしら知っていた可能性があるな」

優斗「もう聞くことはできないけどな」

校長室から出る時に、のび太たちの校長先生を見る目が濁っていた

暗証番号の部屋まで戻り、やっと箱を開けられる

優斗「番号は小さい順で、手に入れたのは、6、7、4、0だな」

のび太「じゃあ暗証番号は「0467」だね」

のび太が暗証番号を入れ、箱があいた

中には、プラーガと書かれているメモが入っていた

優斗「プラーガ・・・？」

優斗が聞きなれない言葉に困惑していると、外から芝刈り機のような音がした

聖奈「何の音!？」

外の声「んぎああああああ!!!」

すると、紙袋を被り、チェーンソーを持った男が入ってきた

健治「何だあいつ!？」

のび太「チェーンソー!? あんなの当たったら・・・!!」

優斗「俺がアイツを抑える! 皆は先に外に出ろ!」

優斗が向かってきたチェーンソーを、抑えようと向かえ打つと、チェーンソーを振り

回してきたので二歩下がった

優斗『さすがに直接当たったら危ないか? サイヤ人はどれぐらい頑丈なのか分からね

え』

のび太「向こう側から誰かが抑えてて開かないよ!!」

のび太がドアを開けようとしても、全く開かず、レオンが突撃しても凹んだだけで開

かなかった

凹むだけでも異常である。鉄だぞ

優斗が一旦チェインソー男を殴り飛ばして、のび太たちの所に行った

優斗「開かないか……。仕方ない、こいつは俺がやるから。こつちを見ずに全員で扉をどうにか開けてくれ」

健治「見ずにか？」

優斗「ちよつと刺激が強すぎるからな」

優斗が魔法で剣を作り出し、チェインソー男に向けると、チェインソー男が立ち上がってチェインソーを振りかぶって向かってきた

優斗「魔法障壁展開」

優斗が障壁でチェインソー男を壁に押しさえつけて、剣を魔法で動かしてチェインソー男の顔面に刺した

そしてチェインソーの電源を切り、イフリートに電子回路を焼き切ってもらった

優斗「そつちはどうだ？」

健治「何とか開いたぜ……」

のび太「はぁ……。はぁ……。もう嫌だよこんなの……」

聖奈「……。このメモには、あまりよろしくない事が書かれているのでしうか」

のび太は苛立ちを覚えながらもメモの表紙を見たが

のび太「何て書いてるんだろう。英語だから全然わからないや……」

優斗「俺も断片的にしか分からないな（優菜なら分かるのか？）」

レオン「・・・みな疲れてるだろうから、一度保健室に戻って少し休んだ方がいいな。メモはそこで俺が読んでやる」

皆で何事も無く保健室に戻った。優菜は既に起きており、保健室も欠員はいなかった。出木杉「それで、そのメモを見つけたのか・・・。大丈夫だったかい？どこか怪我していたら遠慮なく言ってくれ」

のび太「ううん、大丈夫だよ。皆がいてくれたから・・・」

健治「そもそも。優斗が、よくある異世界系のマンガの主人公みたいに強かったから、全く危なげなかったな」

レオン「人間がどうかも怪しいくらいだったな」

久下「それで、そのメモには何が書かれているんだ？金庫なんかで嚴重に保管されているあたり、ただのメモではないと思うが・・・」

皆が話してる間に、優斗は優菜を起こそうとベッドのカーテンを開いた（保健室ってカーテンあるよな？）優菜は既に起きており、ベッドの上に座っていた

優菜「遅いぞ」

優斗「おう、お前も起きてたか」

優斗が優菜の所に行き、耳打ちした

優斗「この世界の事は覚えてるか？」

優菜「覚えてるさ、いくらドラゴンボールに十数年いたからってそう簡単に忘れられるか」

優斗「それもそうか」

すると、レオンにカーテンを開けられ、こう言われた

レオン「メモを読み上げる、少し静かにしてくれ」

優斗「ああ、すまん」

優斗が優菜の横に座り、話を聞きだした

優菜『何でわざわざ俺の隣に座るんだ？』

優菜は疑問に思いながらもレオンの話を聞いた

次のレオンが話してる事がメモの内容です。面倒だと思つたら、セリフの後にある要約から下の地の文を読んで

レオン「ヨーロッパの寒村で発見された寄生生物「プラーガ」。これには、宿主をコントロールするという大きな特徴がある。「プラーガ」の卵を人間に投与すると、「プラーガ」はその人間の体内で孵化し、成長する。そして中枢神経に取り付き、その人間を自在にコントロールすることができるのだ。しかも、寄生後も宿主の知能は失われず、他の寄生者と意思疎通を図ることもできる。この性質を利用すれば我々の目的を達成す

るのも夢ではない。ただ、ひとつ難点がある。それは、宿主の体内に投与してから精神を支配するまでの間に、絶対的なタイムラグがあるという事だ。これは、先に述べた卵の状態で注入されることに関係する。プラーガが孵化し、成長し、中枢新家に取り付くまでにはどうしても時間が必要になるのだ。これでは取り付くより先にプラーガを取り除かれかねない。そこで改良型のプラーガが開発された。我々は、この改良型を「プラーガ・タイプ2」と呼んでいる。タイプ2では、既に成長したプラーガを直接投与するため、精神の支配が即時に行われるという特徴がある。投与の方法は、経口投与。つまりは、口から無理やり押し込むわけだ。経口投与されたタイプ2は、食堂を破って体内に侵入し、延髄精神の支配を始める。実験では、タイプ2の投与から精神が支配されるまで、平均10秒以下というタイムを記録している。これだけの性能があれば、困らないだろう。残るは実験データの蓄積だが、これは日本のすずきが原で行うこととする。実験項目は以下の二点である」

ここは箇条書きにしておく

1、感染

タイプ2の一時投与は10体の被験者に留め、その後の感染の拡散スピードを観察、調査する。

最初の10名の被験者には、十分な量のタイプ2を渡しておく。

2、戦闘

タイプ2の戦闘能力に関するデータを蓄積する。

戦闘対象は、日本の警官隊とする。

要約

ヨーロッパで都合のいい寄生生物発見したンゴ↓でも卵のまま使うと時間かかるし
摘出されるかもしれないンゴ↓なら成長させてから寄生させるンゴ↓茶色い物体（プ
ラーガ・タイプ2）完成

実験は日本のすずきが原（のび太たちの街の名前）でやるンゴ
てな感じ、ンゴ使いすぎたね、ごめん

優菜「言ってもらってなんだけどなっ……がいな」

のび太「宿主を操る寄生生物……!？」

聖奈「そんなのが本当に……!？」

レオン「……にわかには信じられんが、この事態の原因はこれしか無さそうだ」

健治「……確かにな。現に、その寄生体らしきのをその……なんつつたけか」

安雄「安雄です」

健治「そうそう、安雄が入れられかけたところを見た。確証はないが、入れられてた
ら暴徒の仲間入りだったろうな」

ジャイアン「嘘だろ・・・なんてこった・・・」

久下「というか、なぜそんなメモがこの学校にある？」

出木杉「この学校も繋がっていたのかも知れない・・・、そのメモを書いた集団と」
レオン「ああ、その可能性は高い」

スネ夫「前からちよつと変な学校だと思つてたけどさ・・・。こんなので・・・」

安雄『スネ夫はそう思つてたのか・・・俺は予感もしなかつたのに・・・』

静香「あんまりだわ・・・」

そこで。また優斗が耳打ちしてきた

優斗「お前の見解はどうだ？」

優菜「・・・まあ、そうなるのが自然だし、実際そうなんだが・・・。メタい話、そういう方が話を運びやすいし、何より二次創作は何でもできるから」

優斗「・・・そういうもんか」

優菜「そういうもんだ」

そこで、健治がずっと疑問にしていたことを口にした

健治「・・・結局よ、優菜と優斗って何もんなんだ？明らかに人間の域は超えてるし、そのメモを書いた集団の一員って事はないのか？」

部屋の中に不穏な空気が流れる

のび太「ゆ、優菜さん達は僕らを助けてくれてるのに、怪しむのは……」

健治「いや、こちらでハッキリさせておくべきだ。身体能力も技術も、どっちも超人レベルで、変な力も使う。そんな奴がたまたまこの街に来てて、たまたまのび太たちと知り合つて、ついでに助けてくれるなんて都合がよすぎるだろ」

優菜「……まあ、結構妥当だけど、俺たちはそんなんじ」

レオン「その二人が関係者という可能性は、今は限りなく0に近い」

優斗「！……お前は俺らの事ずっと怪しんでたじゃねえか」

レオン「確かに、ずっとお前達が変わな行動をしないか監視していたが……関係者ならこのメモを見つけた時点で、あのチェンソー男と一緒に俺たちを殺していただろう。変な能力の事は気になるが、少なくとも敵でないなら言及もしない。まあ、俺たちから信用を得てから殺すような狂人なら話は別だがな」

優菜「なんか寝てる間に信頼置かれてるの変な気分だ」

優斗「ま、まあ俺らの事こき使うのは別に構わねえからs」

すると、部屋中に腹の虫が鳴った音が響いた

レオン「……」

静香「……」

ジャイアン「のび太……！」

のび太「ぼ、僕じゃないよ！」

すると、聖奈が顔を赤らめながら手を上げた

聖奈「ごめんなさい・・・私です。お腹すいちちゃって・・・」

健治「・・・そういや、何も食ってねえな」

ジャイアン「給食室に何か食べ物はなかったのか？」

出木杉「今は夏休みだからね・・・。給食が無いから、食材もあまり・・・」

安雄「なら、スーパーカーコンビニに行つて取つて来るしかないか？」

健治「コンビニなら、学校の東にあるコンビニが一番近いな」

レオン「確かに、このままでは行動が出来なくなる。俺達調査チームは外へ行つてく

る。留守は頼んだぞ」

久下「ああ、気を付けてな・・・」

優斗「それじゃあ、また交代だな」

優菜「ああ、お前は休んでていいぞ」

安雄「・・・」

優菜『安雄はまだ体力が戻ってない、逃げ回つてたワケだから仕方ないな。もし、戦いに参加できるなら、原作通りロケランでも持たせられれば・・・』

レオン「優菜、準備はいいか？」

優菜「ん……ああ、問題ない」

優菜はレオンについていき、保健室を後にし、学校の外に出た

外は日が落ち始めており、夕暮れ時になってしまっていた

レオン「それで、コンビニとやらはどこだ？あまり遠くないと嬉しいが」

健治「こつちだ、ついてきてくれ」

健治の後についていくと、道すがらに多くの老若男女の死体が転がっていた

のび太「ひどい……僕たちの町が……」

健治「……」

レオン「……いくぞ。保健室の奴らを待たせるわけには行かない」

優菜「こうなったのは残念だが、俺達にはどうもできない。もう“終わってしまった

”事だからな（この人数全員を生き返らせるのは、俺には無理だ。一人を生き返らせて

も家族が死んで、こんな荒廃した世界で独りになるくらいなら、死なせたままの方が良

いだろう）」

のび太「……はい」

レオンが歩き出し、その後をみんながついていく

しかし、のび太たちの足取りが重い、特に聖奈が

優菜もあまりの惨状に絶句しながらも前に進んでいった

優菜『これが実験の結果か。．．．最低だな、この計画を考えた醜悪な奴の顔が浮かんで見える』

優菜がそう考えながら歩いていると、後ろの聖奈が膝をついて足を止めたのび太「聖奈さん!？」

のび太が近寄り、その目に映ったのは、聖奈の涙であった

聖奈「ぐすつ．．．うう．．．」

のび太「聖奈さん．．．」

優菜「．．．キツイことを言うようで悪いが、今泣いてる暇はない。今生きている人だけで生きなきゃならない。あの、人がいっぱいいて平和な日常は、帰ってこない」

健治「おい！さすがに言いすぎだ」

優菜「だから生きるんだ。あの日常が、目の前に帰って来るまで、生き抜くんだ」

聖奈「つ．．．!」

健治「それは理想論じゃないのか？そんな簡単に言っつていい話じゃねえだろ」

優菜「理想論が現実にならないとは限らないだろ。理想論を現実論にするのが俺の役目だ。だから俺達の力は存分に使ってくれて構わないし、俺も余す気はない」

優菜が健治に熱弁していると、聖奈が立ち上がった

のび太「もう大丈夫なの？」

聖奈「うん、ごめんなさい、私のせいで止まっちゃって」

聖奈の涙は止まっていた

優菜「……いや、立ち直ったならいい。もう日が落ちた、早く食料を手に入れて戻ろう」

レオン「健治くん、続きを案内してくれ」

健治「あ、ああ、分かった」

優菜「歩けるな？」

聖奈「はい……！」

5人で歩き出し、コンビニに着いた

健治「ついたぞ、ここだ」

中に入り、アラメイに電気をつけてもらった

のび太「わあ、いっぱいある」

聖奈「でも……本当に持って行っていいのかしら？」

健治「非常時だから仕方ねえだろ。それに……もう、この街で食料が必要な人間は俺達ぐらいだろ……」

聖奈「……」

のび太「……」

レオン「……」

レオンがカウンターの上に一万円札を置いた

レオン「これで気にする必要もないだろう、好きなだけ持っていけ」

レオンが奢ってくれるらしいので、あるもの全部カオスの倉庫にぶち込んだ
健治「やり過ぎじゃねえか？それじゃ一万円じゃ足りないぞ……」

優菜「貰えるモノは貰う性分だな」

その頃、学校の保健室では……

静香「……スネ夫さん、遅いわね……」

ジャイアン「トイレに行つてからもう20分か」

出木杉「まさか……何かあつたんじゃ……」

安雄「相当酷い下痢とかなら分からなくもないけど、この状況じゃ心配だな」

久下「俺が見に行こう」

優斗「いや俺が見に行く。久下さんはここを守つててくれ」

久下「そ、そうか、分かった」

安雄「俺も行かせてくれ」

優斗「体力は戻つたのか？」

安雄「ああ。俺だつて何か役に立ちたいんだ」

優斗「……役に立つも何も、見に行くだけだから別にいいぞ」

出木杉「二人とも、気を付けて」

安雄と共に男子トイレへ行き、扉を開けようとする。「ママアーーーー!!」という悲鳴が中から聞こえた

聞こえたと同時に扉を開き、中に入ると、蠅のような体毛と露わになった筋肉そのもの、そして手の代わりに鎌がついていた化け物がいた

よく分からない? 「バイオ キメラ」で調べてね

優斗「なんだこの化け物!？」

スネ夫「助けてえーーーー!!」

安雄「う、うわああああ!!」

安雄の悲鳴で化け物がこちらに気付き、近寄ってきた

優斗「安雄! テキトーに武器を投げ渡すからどうかしてくれよ!」

安雄「ええ!？」

カオスに銃を一つ渡させて、優斗は化け物の脇腹に蹴りを入れ、すぐに下がった

優斗「取れたか!？」

安雄「と、取れたけどよお。こ、これロケットランチャーってやつじゃないのか!？」

優斗「(ロケラン!?! いや、それなら……) 俺が合図したら撃てよ!!」

安雄「ここ屋内だぞ!」

優斗「俺を信じろ!!」

優斗が化け物に向かって行き、先ほどとは逆の脇腹に蹴りを入れてから一発殴り、同時にカオスの空間が開いて、中に化け物を押し込んだ

優斗「今だ!」

安雄「どうにでもなれえええ!!」

安雄が撃ったロケランの弾はカオスの空間に入り、化け物に直撃、爆風が来ないようにカオスの空間を閉じて始末完了

スネ夫「た、助かった・・・」

優斗「よし、よくやった」

安雄「あ、ありがとうございます。でも、何でロケランなんか持つてるんですか?」

優斗「学校に来るときに警察署から拝借してきた」

安雄「泥棒じゃないですか!!」

スネ夫「はあ、もう嫌だよこんなの・・・」

優斗「じゃあ、さっさと戻るぞ。銃声に驚いてるかも知れない」

安雄「てか、よく20分もトイレに入ってたな」

スネ夫「それがさー、出ようと思ったら誰かが入ってきて」

優斗「入ってきて!? 保健室からは誰も出てないぞ!」

スネ夫「そんなに声を荒げないでよ・・・僕だつてわけわかんないんだから」

優斗「どんな奴だった? 風貌はいい、声色で男か女かぐらいはわかるだろ?」

スネ夫「確か、先に入ってきたのが男で、次に来た人は女だったと思う」

優斗「(二人いたのかよ) 何か言つてたか?」

スネ夫「男は息を荒くして「撒けたか?」つて言つてたから誰かから逃げてたんだと思う。で、そのあと女の人が入ってきて「見つけたツ!!」つて入ってきたんだ。そして、男が何かして二人ともいなくなつたんだ。それで、出てみたらあの化け物がいたんだ」

安雄「俺たちが来た時がグッドタイミングだつたつて事か? なら、なんでその二人はいなかつたんだ?」

スネ夫「もし、あの二人が秘密道具でも使つてたなら、居なくなつた理由も分かるんだけど・・・」

優斗「(この世界ではもう出てくるのか)・・・言つてる事は大体わかつた、だがじっくり考えるのは後にしよう。何かしたつていうのが、まだ残つてるならここが危険な可能性もある。さっきの奴がいたのもそのせいかもしれない」

安雄「そうですね、じゃあすぐ戻りましょう」

そして優菜たち探索組に戻る

優菜「ゴチになりました」

レオン「……」

聖奈「……」

健治「……」

のび太「流石に持ってき過ぎじゃ……」

レオン「……俺の財布の事は気にするな、今は一秒でも早く帰るべきだ」

健治「……だな、いつアイツらが襲ってくるかも分からねえ。下手すらアイツらよ

り危険な奴が来るかもしれねえし」

優菜『え、それフラグ』

優菜が察したと同時に、コンビニの駐車場に放置されていた車が爆発した

皆「!?!」

レオン「全員下がれ!!」

レオンが声をかけ、全員が一步下がる

爆発から出た炎から男が一人出てきた。ニット帽とコートを着た、二メートルはある

うかという巨体の男が炎の中から出てきたのだ

のび太「な、なにあれ……!?!」

レオン「……ヤバそうだな」

コート男「ウウウウウア！」

コート男が少しずつ近づいてきた

レオン「……俺が時間を稼ぐ。君たちは学校まで走れ！」

聖奈「で、でも……！」

健治「ここは言う通りにしとけ！行くぞ！」

優菜「俺は残る、俺なら援護できる。というか、ぶつ倒してやる。のび太、二人を任せろぞ」

のび太「う、うん」

三人は学校の方へ走り去っていった

レオン「さて、またコートを着た男か。少々飽きたが、付き合うか」

優菜「戦った事あるの？じゃあ、弱点教えてよ」

レオン「知らないな」

優菜「知らないのか？」

優菜がコート男に殴られ、一步後ずさりし、一発殴り飛ばした

鼻をつまみ、鼻血を出して立て直し、コート男を見た

優菜「そういうタイプな、OK」

コート男は立ち上がり、こちらを見た

次に気弾を一つ飛ばして、コート男が後ずさりする

レオン「・・・また変な力を使ってるな」

優菜「こいつの相手したいの？俺は長引くのはごめんだね」

優菜はトドメの一撃を食らわせようとすると、自動車が飛んでき、攻撃をやめて車を避けた

レオン「手伝おうか？」

優菜「じゃあ、俺がアイツを車のどこまで引き寄せるから車のガソリンを撃ってくれ。俺が近くに居ても構うな。時間稼ぎだけならそれで十分だろ」

レオン「わかった、遠慮なく撃てばいいんだな」

優菜がコート男に近付き、殴って殴られを繰り返した後、殴ってきた腕を掴み、コート男を背負い投げて車の横に叩きつけた

そこでレオンがガソリンを撃ち、優菜ごと爆発に巻きこませた

レオン「・・・」

炎の中に人影が一つ起き上がるのが見えた。レオンは見えた途端にすぐ銃口を上げなおした

炎の中から出てきたのは、体中が燃え盛っている少女の姿だった

レオン「……それは、生きてるのか？」

優菜は指を空に突き立て、指先に水の塊が出来上がった。優菜が腕を下ろすと、バシヤツと水が優菜に被り、火が消えた

優菜「ふう……」

レオン「火傷を……してない？アレだけ火の中にいれば、皮膚が爛れてもおかしくないと思うが……」

優菜「実は、波紋っていう超能力を使えるんだ。その波紋を肌の上に走らせて、その波紋の上を火が走ってたから火傷してないんだ」

レオン「……それはアレか？魔法瓶とやらと同じ原理か？」

優菜「……厳密には違うけど、まあ、そんな感じだ（適当）。ちなみに覚えたくても、教え方知らんから諦めてくれ」

レオン「安心しろ、お前みたいに人間をやめる気はない」

すると、のび太たちからレオンに無線が来た

のび太『レオンさん？無事ですか？』

レオン「ちょうど今、倒した所だ。俺は外傷無し。優菜は一度火だるまになったが、まあ無事だ」

のび太『火だるまになって無事なんですか……？』

優菜「今からそっちに帰る。先に保健室に入つてもいいぞ」

健治『だったら、先に入つとくからな。油断すんなよ』

レオン「子供に心配されるほど軟じやない」

そして、優菜たちは学校に戻つて行つた。優菜が無線機を落としたことも知らずに学校に着いたが、グラウンドにのび太たちの姿はない。さつき言っていた通り、保健室に行つたのだろう。ので、保健室に行き、皆と合流した

優斗「おかえり」

優菜「ただいま」

出木杉「聞いた話によると、一度火だるまになつたそうだけど……まったくそんな様子は見られないね。あなたホントに人間ですか？」

優菜「直球だな」

健治「まあでも、この人ならあり得るかつて感じただけだな」

のび太「……あれは……何だつたんだろ」

レオン「わからん」

優菜「一応アイツも一緒に火だるまになつたけど、多分生きてるよ」

レオン「アイツは、無差別に襲いかかる他の奴と違って、明確に俺たちを狙っていた節がある。……例の奴らが動いているのかもな」

スネ夫「プラーガのメモを書いた人たちの事だね」

レオン「ああ。なぜ目の敵にされるのかはわからんが・・・」

安雄「いや、そのメモを見つけたからじゃないのか？見つけた時にチェインソー男に襲われたんなら、見つけたのを知られてもおかしくないだろ？」

優菜「十中八九そうだろうな。でも、この街を壊した奴らと戦えられるのか？」

スネ夫「いやいや、戦わないと死ぬの間違いでしょ!?こっちはアンタみたいな力も無いのに、そう簡単に勝てる気なんてしないよ!!」

優菜は、自分の発言が無神経だったことに気付き、少し落胆。すると優斗が「こいつ戦闘狂だから」と傷口に塩を塗ってきて完全にダウンし、優斗の膝に頭を乗せて拗ねた

優斗「えつと・・・それじゃあ、こっちで何があったか話していいかな？」

レオン「何かあったのか？」

優斗は、スネ夫が襲われた化け物について話した

レオン「そんな事があったのか・・・」

優菜「化け物ぐらい一撃で仕留めろ」

優斗「お前だってコート男を仕留めてないんだろ？」

優菜「こっちは鉄殴ってる様なもんだぞ」

優斗「こっちだって蠅の化け物だぞ、触りたくねえよ」

優菜と優斗がいがみ合つてると、ヘルが頭の中で「やめないと殺すわよ」と言つてきたのでやめた

久下「(このままだと、空気が重くなる一方だな)・・・ひとまず、食料は手に入ったんだ。これから何をするか考えた方が良いんじゃないか？」

出木杉「・・・そうですね、今はどうやって生き残るかを考えましょう」

優斗「でもよ、手がかりもねえのにどこ行くつてんだ？」

レオン「・・・二階より上の防火シャッターは開かないのか？」

スネ夫「・・・のび太たちが外に出ている間に一応聞きましたけど」

レオン「俺はこの学校をもっと調べる。奴らと繋がっていた学校だ、何もないとはいえん。だが、相手がこちらを狙っている以上、危険だ。俺がひとりで行く。君たちはここに残れ」

出木杉「待つてください！一人だなんてとんでもありません！・・・あなたは、どうやらこういう状況に慣れていらつしやるようですが、敵は得体の知れない組織です。せめて、この学校の構造をよく知る誰かが同行した方がいいと思います」

久下「・・・確かにその通りだな。この状況下で単独行動は危険だ」

レオン「・・・すまない。あまり君達を危険に晒したくなかつたんだが・・・」

ジャイアン「心配すんな、一致団結した俺達に敵はいねえ！」

スネ夫「よくいうよ・・・まあ、実際みんなで色々な困難を乗り越えてきたもんね」

スネ夫の言葉に疑問を持った優斗が、小声で話しかけてきた

優斗「なあ、こいつ等小学生だろ？」

優菜「ああ、そうだが？」

優斗「こいつ等の言ってる冒険って、裏山を探検したりとかか？」

優菜「んーと、宇宙行ったり、過去行ったり、秘境行ったりだ」

優斗「それ小学生が経験できることじゃないだろ」

優菜「のび太たちは、ずっと日本の看板を背負ってるんだ。毎年映画が出て、その度に新たな冒険を経験する。下手すりゃ、そこらの兵士より場数を踏んでる。そもそも、俺たちが並んで立てるようなキャラクターじゃないんだ」

優斗「ふーん」

優菜『まあ、全部秘密道具在りきだけどな』

その間、皆で話が進み、また探索組と待機組に分かれることに

健治「で、誰が付いて行く？俺は別に構わんが、緑川とかはいい加減休んだ方がいいんじゃないか？」

聖奈「・・・ごめん、確かにいろいろあったからちよつと休みたいかも・・・」

スネ夫「・・・じゃあ、今度は僕の番かな？」

出木杉「……いや、もしもの時の為に、防火シャッターを制御できるスネ夫君にはここに残ってほしい。僕が行くよ。言い出したのは僕だからね」

のび太「僕も行くよ。大丈夫、まだ動けるから」

レオン「……よし、二人もいれば十分だ」

優斗「いや、俺も行くからな？ 何かあるか分からないのなら、俺も行った方が良かった」

優菜「……何かあったら、死んでも俺たちが守る。生命力だけは心配なくていい、捨て駒として使われて生きて帰ってくるようなレベルだから」

ジャイアン「……ゴキブリ並みって事か？」

優菜「……その例えはやめてくれ」

レオン「……それじゃあ、この四人で行こう。何かあったら連絡をくれ」

久下「ああ、気を付けてな……」

優菜たちは、保健室を出て行った

第八十九話（のびハザの軌跡『第三話』より）

「尊敬の末路」

優菜たちが保健室を出て、二階に上がった

のび太「……一階と同じだ。不気味なほど静かだね……」

出木杉「……でも、一階と違って電気がついていいるね。誰かいると思うよ」

周りを確認していると、後ろから何かが落ちた音がした。音がした方を見ると、階段のシャッターが下りていた

のび太「シャッターが閉まった!?!」

出木杉「……!!もしかして……毘!?!無線でスネ夫君に連絡を!」

優斗「もうやってる」

優斗の無線がスネ夫に繋がった

スネ夫「の、のび太達か!?!無事なのか!?!」

のび太「あ、ああ!何故かシャッターが閉まっちゃったんだけど!?!」

スネ夫「誰かに、システムのコントローलを奪われたんだ!今、もう一回クラッシュングしようとしてるけど、プロテクトが固くて……!システムを掌握……すぐに……」

開け・・・まで待つ・・・」

のび太「ス、スネ夫？よく聞こえないよ・・・答えてスネ夫！」

通信が途切れてしまった

のび太「む、無線が通じなくなった！」

レオン「・・・タイミングが良すぎるな。奴らに妨害されたのか・・・？」

？『あー、あー、聞こえてるか？』

優斗の脳内に直接声が響いた

優斗『優菜か？聞こえてるぞ』

優菜『なんか無線繋がらなくなったけど、無事か？』

優斗『今の所、別に何か起こった訳j』

すると、廊下の先から唸り声が聞こえた

のび太「・・・なに、今の唸り声!？」

レオン「・・・!!」

声を上げた者は、肌が腐り落ち、ただ唸り声をあげて近づいて来ていた

レオンが声を上げた者を見ると、だんだん顔が強張っていった

のび太「う、うわああああ!!」

出木杉「何だアレは・・・!？」

優菜『?どうかしたか?さっきから何も喋ってないが』

優斗『なあ、目の前に化け物が居るんだが』

優菜『・・・まあ、ガンバレ』

優菜との会話が途絶えた

優斗「(ガンバレってなんだよ)・・・アンタあの化け物のこと知ってるのか?」

レオン「・・・まさか、また奴らを見る事になるとはな・・・」

出木杉「・・・?」

レオン「いいか、絶対にアイツらに捕まるな。捕まれば命はないと思っただ方がいい」
のび太「ええ・・・!」

レオン「とにかく、いつまでもここにいるのは危険だ。俺達は俺達で、下の奴らと合流する方法を探すぞ」

出木杉「そ・・・そうですね」

優斗「・・・いざとなったら俺が囮になる。一応聞いておくが、弱点はあるのか?」

レオン「脳天、頭を撃ち抜けば死ぬ。だが頭以外の、心臓を撃つても死にはしない」
優斗「つまり、頭をぶつとばせばいいんだな?」

レオン「・・・まあ、そうだ」

そう言われ、優斗は化け物の頭を殴り飛ばし、化け物は倒れた

優斗「・・・腐ってるから飛びやすいな」

レオン「血を体内に入れるな!!」

優斗「血? 何でだ?」

レオン「・・・そいつらはTウイルスというウイルスのせいで、そうなっているんだ。血を体内に入れてしまつては、お前もゾンビになつてしまう」

優斗「・・・そうなのか(こいつらはゾンビじゃないがな)」

優斗は魔法で返り血を洗い流し、死体から離れた

優斗「空気感染はないのか?」

レオン「あるにはあるが、距離が長いほど感染力が弱まるはずだ」

出木杉「じゃあ、すぐに離れましょう。ここには感染してしまう」

そこから離れ、誰もいない教室に入ると、また木箱があつた。いつも通り木箱を割ると、合計で15発のハンドガンの弾があつた

優斗「・・・罌か? 空砲とか」

レオン「いや、俺達を煽っているのかもしれない。敵に塩を送つても勝てるとな。俺達は誘われて、二階に閉じ込められたんだ。少なくとも、ここに忘れたという線は薄いだろう」

優斗「まあ、塩でも何でもくれるなら貰うが」

出木杉「毘だとしてもお構いなしですわね……」

それから男子更衣室で効果が謎の青ハーブ、ミネラルウォーター、ハンドガンの弾10発を手に入れた

優斗「なんで男子更衣室にこんなにたくさん……？」

のび太「誰かがいたのかな？」

レオン「……居たとしても、もうこの世にはいないだろうな」

出木杉「……そろそろ行きましよう。僕らはまだ死ぬわけには行きません」

そして、校長の隠し部屋で見つけた「女子更衣室の鍵」で、女子更衣室を開けると、中には女子がひとり、レッドハーブ一つに、グリーンハーブ二つがあった

のび太「！大丈夫ですか!？」

レオンがのび太を止めて、脈を掴った

レオン「……ダメだ、もう死んでいる」

出木杉「目立った外傷はないですから、死因は衰弱死……でしょうか」

優斗「……あんな奴等と一緒になるよりは良かったのかもな」

のび太「でも、もっと早く僕らが来れば……!!」

優斗「……四の五の言っても後の祭りだ。早く俺達を閉じ込めた奴を探そう。もしかしたら、この階にいるかもしれない」

北の別校舎に行くと、誰かの話し声が聞こえた

レオンが廊下の角から顔を出して、確認すると「青狸がいる」と言い、のび太が飛び出そうとしたので優斗が止めた

のび太「なにするんだ！あそこにドラえもんg」

優斗「静かにしろ、何言ってるか聴こえない」

皆で話し声に耳を傾けた

ドラえもん？「ああ、こちらドラえもん」

のび太『やっぱり……！』

ドラえもん「ああ、こっちは多少のアクションがあつたが、なんとか場所を特定した。もうミスは許されないよ。今までの計画がすべて水の泡になってしまふ。ん……のび太達かい？あんなバカに僕達の事がバレルわけがない。あまり僕をなめないでくれよ？」

優斗『現在進行形でバレてるけどな』

のび太「ドラえもん……!?!」

ドラえもん「とにかく、これから忙しくなる。何かあつたらまた連絡を。じゃあね」

ドラえもんは廊下を進んでいった

のび太「……行っちゃったみたいだ」

出木杉「……忙しくなるとか計画とか喋っていたね。しかも、僕達に隠れて行動しているようだし。まさか……ドラえもんが今回の事件の……」

のび太「そんなわけないだろ!!?ドラえもんがそんなことするもんか!!!」

出木杉「ご……ごめん」

レオン「……あの着ぐるみを着た奴は何だ？君達の友人なのか？」

のび太「え、えくと、なんていうか……」

それから、のび太と出木杉がドラえもんについてレオンに説明した

レオン「……すまないが冗談は後にしてくれないか」

のび太「ほ、本当ですよ！ドラえもんは未来から来た猫型ロボットで……」

出木杉「……時間移動については現代でも真剣に研究されているんですよ。すぐに信じてもらうのは難しいでしょうが、彼は真正銘、未来から来たロボットです」

レオン「……まあ、とりあえずそれは置いておこう。とにかく、あのドラえもんとやらは、友人の君達に隠れて何かをしているのは間違いない。こんな状況で隠れて行動するというのは普通ではない。彼の言った通り、今回の犯人の可能性は高いな」

のび太「そんな……そんな訳……」

優斗「……敵だとして、こんな所を一人で歩くか？化け物がうじゃうじゃいる所で、たった一人。もし、俺達をはめた奴ならどこか安全なところから見たりするんじゃない

のか？まあ、ドラえもんってヤツがドジで、やり残しがあつたから出てきてたんなら別だが・・・ドジだったりするの？」

のび太「・・・」

優斗「・・・ドジなのか。まあ、敵だと確定したわけじゃない。前向きに行こう。次見かけたら捕まえるから、それから考えよう」

出木杉「狩り気分ですね・・・」

それから音楽室でミネラルウォーターを回収。次に相談室に入ったが、鍵のかかった部屋があるだけで他には何もなかった

そして東廊下の一番奥の教室で、足の速い化け物を見つけたのび太「うわあああああ!!」

向かってきた化け物の首に魔法障壁を挿入し、首を落とす

レオンが一旦離れるように言い、動かない事を確認した

レオン「・・・なぜこいつだけ足が速かつたんだ？」

優斗「何か持ってたか？」

優斗が化け物の持ち物をまさぐると、鍵があつた

優斗「鍵・・・？」

のび太「相談室って書いてるね」

出木杉「相談室に開かない部屋がありましたよね？行ってみましょう、何かあるかも
しれません」

ということ、相談室にある扉を開けると、中は個室で先生と生徒が一对一で喋る様
な部屋だった。そして

のび太「生存者・・・!?」

青髪の女子高生がひとり、腕の怪我を抑えて床に座っていた
のび太「だ、大丈夫ですか？」

女子高生「うう・・・アンタ達は・・・？」

出木杉「僕は、暴徒から逃げてこの学校へ来た者です」

女子高生「そう・・・あいつらとは違うのね・・・。うう・・・!」

よく見ると、頭からも血を流していた。とりあえず、アリエルに頼んで回復して
もらった

その頃、保健室

ジャイアン「おいスネ夫！シャツターはまだ開かないのか!？」

スネ夫「急かさないでよ！こつちだつて急いでるよ!」

聖奈「無線も何故か通じなくなつてしまいましたし・・・」

静香「出木杉君・・・のび太さん・・・」

久下「……やはり止めるべきだったのか。敵が見えない以上、迂闊に動かん方が良かったのかもしれん……」

安雄「俺達には何もできないのか……!？」

優菜「……まあ、優斗がいるから命は保証するぞ。いざとなったら、俺がシャッターを引き上げるし」

ジャイアン「できるのか!?!なら今すぐやってくれ!俺がのび太たちを助けに行く!!」
優菜「いや、せっかくあるものをわざわざ破壊する意味がない。スネ夫がクラツキングできるなら、一階がダメになった時に二階以上が使える。なにより、面倒だ」

ジャイアン「あんたは心配じゃねえのかよ!!もし、あいつが負けるような相手が出てきたら……」

優菜「心配?……心配するのなら、優斗がガチで戦う時にこの学校が耐えられるかだ」

ジャイアンと優菜が言い争っていると、保健室の外から唸り声が聞こえた

健治「……外から何か聞こえなかつたか?」

ジャイアン「……くそ、何なんだよ!俺が見てくる!」

健治「待て、一人じゃ危ねえ。俺も行くぜ!

優菜「俺も行く、いざとなったら本気で潰す」

久下「俺も外の様子を見てくる。スネ夫君達はここにいたまえ!」

四人で外に出ると、化け物が保健室を囲うように大量に沸いていた

健治「おい・・・何なんだよあれ・・・」

ジャイアン「し、知るか！」

久下「逃げ道を潰された！」

化け物は一步一步近づいてきた

久下「こつちに来るぞ・・・！ど、どうすれば・・・」

ジャイアン「落ち着けっ！俺達で食い止めるんだ。絶対に保健室に近寄らせるな！」

健治「簡単そうに言うけどな・・・あの数だぞ!!」

ジャイアン「俺達がここを守らないでどうする!?!のび太達が頑張っているなら、俺達だって頑張らなきゃダメだろうが！」

健治「お前・・・」

優菜「・・・まったく・・・数で勝てると思われてるのか。勘違いも甚だしいな。前と右は俺がやる」

久下「一人でか!?!」

優菜「問題無い。三人は左に集中してくれ。一応気にしておくが、助けられないかもしれない」

三人は左に行き、優菜は面積が広い正面の昇降口にペルソナを行かせて、自分は右に

行った

優菜「気は強すぎるからダメ、魔法も校舎が耐えられる保証がない……なら、なぶり殺しだな」

優菜は波紋の呼吸をして、身体能力を上げてから、戦いに赴いた

まず、目の前の化け物の首を腕いで他の化け物に投げつけ。次に、また別の化け物の足に右足をかけてこかし、右足を着地と同時に地面を蹴って化け物たちに、こかした化け物を蹴り飛ばした

優菜「(いつもなら、火でも使って燃やすが、屋内じゃできない……。それなら……) ガイア、カオスちよつと来て」

ガイア「はい。なんですか?」

優菜「ガイアは、鎖を作つて先を俺に渡して、作り続けて」

優菜は鎖の先を左の壁に精一杯投げ、このままだと壁に刺さるため特殊な魔法障壁(威力を反射させる)を展開し、壁に当たると同時に障壁を出し、戻ってきた鎖を掴み、創造をやめて作られた鎖の端と端を持った

そして、思いつき鎖を交差しながら引き、化け物たちを締め上げ、胴と脚をお別れさせた

その返り血が顔にかかるが、優菜は顔色を変えずに正面の化け物が全員倒されてる所

を確認してからイフリート達を戻し、健治たちの所へ

健治「・・・なんとか片付いたな」

久下「ハア・・・ハア・・・こいつらは一体・・・？」

健治「あのプラーガとかいうのと関係がありそうだ。つたく、ゾンビみてえな形しやがって・・・」

ジャイアン「のび太・・・出木杉・・・」

優菜「死んだやつはいないな？良かった・・・」

健治「おわっ!?何だその血の量!!やっぱ二方向は無理だったか!？」

久下「何だその長い鎖は・・・何でそんな血だらけなんだ。というかどこから出した!?」

優菜「これは只の返り血だ。鎖はまあ・・・気にするな」

久下『無下にされた!』

優菜は魔法で水を出し、血を洗い流してから鎖をカオスの空間に放り込んだ。そして優菜「それじゃあお前らはさっさと戻れ。もうすぐ優斗達も問題なく戻ってくるだろ」

優菜がそう言えるのは、気を感じているからである。優斗、のび太、出木杉、レオンの四人の気、新たに合流したもう一人。そして、まだ上に気がたくさんある事も

優菜『プラーガの関係者か？十人もいないが、“相手にしたらのび太たちが危険”なぐらいの相手だな』

ジャイアン「お前らはって、お前は何かすんのか？」

優菜「血を洗い流す」

ジャイアンたちは保健室に戻った。優菜は、カオスの空間でシャワーを浴びた

その頃、優斗達は女子高生の傷が完治したところだった

女子高生「・・・ありがと、もう大丈夫よ。・・・ところで、アンタ達、よく無事に

こんな所までたどり着けたわね。相手はあのプラーガだつていうのに・・・」

出木杉「・・・プラーガの事を知っているんですか」

女子高生「・・・まあ、ちよつと訳があつてね」

優斗『・・・聞いた方がいいのか？聞かない方がいいのか？』

女子高生「というより、アンタ達も知ってるのね」

レオン「この学校で資料を発見してな。なんでも、プラーガやらプラーガ2やらがこの

事件の原因らしいじゃないか？」

女子高生「・・・そうよ。アイツらが世界を支配するための一歩として、この街にプ

ラーガを撒いた」

のび太「世界を支配・・・!？」

優斗「何だその子供向け番組の敵の目的みたいな目標は」

レオン「知能指数が低そうだな」

出木杉「……色々と知っているようですね。良ければ聞かせていただけませんか？」

女子高生「……」

それから女子高生は話をしだした

女子高生「プラーガについては……もう説明はいらなそうね」

レオン「宿主を支配するのは寄生体……か」

女子高生「そう。寄生された人間は「ガナード」と呼ばれているの。彼らは、強い破壊衝動に駆られ……。同時に、「支配種」と呼ばれるプラーガを寄生させた人間に従うようになるの」

のび太「シハイシユ？」

女子高生「そうね……。プラーガのリーダーとでも考えてもらえばいいわ。そして、そんな性質を持つプラーガに目を付けたのが……。オズムンド・サドラー率いる「ロス・イルミナドス教団」

レオン「ロス・イルミナドス？ 囁みそうな名前だな」

女子高生「教団の最終目的は、プラーガにより世界を支配する事。アメリカ合衆国の大統領などを中心に、プラーガを寄生させて手下とし、裏から世界を動かすの……」

出木杉「……恐ろしい話だ……」

のび太「そのロス……なんとかと、この事件の関係は？」

女子高生「恐らく、改良型プラーガのテストとしてこの街にプラーガを撒いたんだと思うわ。日本人は平和ボケした人種だからね。非常時に対しての警戒も準備もほとんどしない。だから、プラーガを広めるには最適だった」

レオン「……まあ、それは言えているかもな」

出木杉「平和ボケ……ですか。耳が痛いですね」

優斗「アニメやゲームの世界だったら、世界トップクラスに危険だけだな……」
のび太「漫画とかは大体東京で何か起こるもんね……」

出木杉「とにかく、そのロス・イルミナドス教団がこの事件の黒幕なんですわ。改良型のプラーガのテストにこの街を使ったと」

のび太「なんて奴らなんだ！そんなくだらない事のために僕たちの町を……！」

レオン「で、何故そんなことを知っている？」

女子高生「……教団は、この日本でプラーガの実験をするにあたって、研究所を日本に設けた。そして日本の科学者を方がいな報酬で雇ったの。「新種の寄生虫の研究」と称して……」

優斗『嘘は言っていないな。新種は新種だから』

女子高生「……あたしのパパも、雇われた研究員の一人だった……」

出木杉「……」

女子高生「……パパはいつでも勘の鋭い人だった。自分が行っている研究の裏に、恐ろしい事実が隠されていることを悟ったの。でも、もう手遅れだった。でも、もう手遅れだった。教壇によって、研究者達には既に原子プラーガが投与されていたの。もちろんパパにも……。成体となったプラーガを除去する方法はない。除去すれば、神経の直結した宿主も死ぬ。……パパは、自分が完全に教団の手に堕ちる事を恐れて、あたしにメールを送った後、ナイフを自分の心臓に刺して自殺したわ……」

のび太「……」

女子高生「……あたしは、教団が許せなかった。唯一の家族を奪った教団が。あたしは。パパのメールの情報を頼りに、単身この学校へ調査に来た。教団と繋がっているからね。……でも、所詮は只の女子高生。プラーガに寄生された人々を前に、あたしは逃げる事しかできなかった……。……馬鹿よね。笑っていいわ」

のび太「笑えないよそんなの……。！ふざけた奴らだ……。教団は！僕たちと一緒に行きましょう！」

女子高生「えっ？」

のび太「教団をぶっ潰してやるんだ！僕たちの手で！」

雪香「ふ……あんたもあたしと同じくらい馬鹿ね。いいわ、一緒に行きましょう。あたしは富藤雪香（とみふじせつか）よ」

優斗「じゃあこつちも自己紹介か。俺は中村優斗」

のび太「野比のび太です」

出木杉「出木杉英才です」

レオン「レオン・スコット・ケネディだ」

優斗「あと一階に七人いる。それで仲間は全員だ」

雪香「そう、思ったより人数がいるのね。それで、これからどうするの?」

出木杉「元々僕らもこの学校の調査をしていたんですが、敵に防火シャッターを閉じられてこの階に閉じ込められてしまいました。今は、なんとか防火シャッターを開けて、一階の仲間たちと合流する方法を探しています」

雪香「なるほどね……なら、そのシャッターを操作している端末を探しましょう」

レオン「……ところで、このフロアにはゾンビのような奴が徘徊しているようだが……あれはなんなの分かるか?」

雪香「……ゾンビ?……失敗作か何かかしら?」

レオン「失敗作だと?」

雪香「この街で蔓延しているプラーガは、「プラーガ・タイプ2」っていう、改良型プ

ラーガだつてことは知つてゐるわよね？でも、もちろん教団もすぐに改良に成功したわけじゃない。無理やり改造されたプラーガは、宿主とうまく適合せず、知能が失われたり、宿主の体を破壊したり……。そうして出来上がった失敗作を何らかの目的で放つたのかもね」

レオン「……なるほどな。だとしたら、その目的はおそらく俺達の排除だろう」

優斗「……つまり、ウイルスに心配しないで殴りまくつていいのか？」

雪香「ウイルスというのが何の話か分からないけど、殴ること自体は大丈夫のはずよ」

出木杉「……保健室の皆が心配だ……」

優斗「下には優菜がいる。いざとなつたら学校壊してでも皆を助けるさ。……そし

たら俺らがヤバいか」

のび太「別の意味で大丈夫じゃないじゃないですか!!」

優斗「ま、その時は俺らにも連絡来るから」

レオン「無線は通じないぞ？どこから連絡が来るんだ？お前達なら、窓から飛び出し

てきても驚かないが」

優斗「だつて俺r」

優斗が説明しようとする、化け物が一体来たので頭を潰して外に投げ捨てた

優斗「説明してる余裕が無いな」

レオン「仕方ない、何もかも終わってから詳しく話を聞こう」

それから、何かないかと色んな場所を回り、音楽室を訪れた時だった

雪香がピアノをじーつと見ていた

のび太「どうしたんですか・・・ピアノなんか見て」

雪香「・・・」

雪香は黙ったまま「月光」を弾き始めた

引き終わると、ピアノの奥の壁から扉が現れた

のび太「わっ！」

雪香「こういう変な学校には、こういうのが付き物なのよ」

扉の中に入ると、箱があつた。箱を開けると、鍵が一つ

出木杉「視聴覚室の鍵・・・この階の内で、最後の部屋・・・ですわね」

のび太「視聴覚室に、僕たちを閉じ込めた敵が・・・」

優斗「・・・皆、銃でバンバン撃つて構わんからな。俺は相手に全力で殴りかかるが、

弾が当たるかもなんて少しも考えなくていい。弾は当たっても問題ない」

雪香「さつきからおかしなことばかり言ってるけど、どういう事？弾が当たっても大

丈夫とか、窓から飛び出てきそうとか」

レオン「それに関しては、見た方が早い」

優斗「じゃあ、さっき言った通りにやこうか」

視聴覚室の鍵を開け、中に入ると椅子が二つずつ並べられ、真ん中にパソコン

そして、パソコンの前に男が一人

のび太「……!!先……生……?」

なんと、二階にのび太たちを閉じ込めた犯人は、いつも「コラー野比!!」とのび太を怒ったり、論じたりするあの先生だった

先生「……ふむ……残念だ、残念だよ野比君。出来れば私が手を下すのは避け
たかった」

のび太「どうして……」

先生「どうして私が教団の仲間となつているかつて? 決まっているじゃないか。このくだらん世は一度壊す必要がある! そして、教団による新世界! それを私は望んでいるからだ!」

レオン「……まさに反面教師という事か」

雪香「こいつ……まさか支配種を……!」

先生「……よく知っているじゃないか、君。ハハハ……プラーガは素晴らしい……最強のパワーを手に入れることもできた……。アア……このこみ上げる力! 満たされてゆく……!」

のび太「そんな……先生はそんな人じゃ……」

出木杉「……地に堕ちましたね、先生」

先生「ふむ……？　どういふことかね、出木杉君」

出木杉「僕は……いや、僕達は、あなたから、様々な事を学びました。そして僕達の尊敬の的だった。今の僕たちは、貴方無くしてはここにいなかったでしょう。そんなあなたが、どうしてプラーガなどに手を染めてしまったのか……僕には分かりません」

出木杉は銃を取り出し、銃口を先生に向けた

出木杉「ですが、どんな事情にせよ、皆を陥れ、世界を滅ぼそうとする教団に加担するあなたを僕を許すことができない！　僕は戦います！　貴方の教えを受けた人間の一人として。同時に、死んでいった仲間達の友人として！」

優斗『仲間から死人出てたか？　瀕死はあったが……ああ、他のクラスメイトの事か？』

のび太「出木杉……」

先生「……君には失望したよ出木杉君。優秀な君が、そんなくだらんことを口にすると……私の買い被りだったか？　どうやら君たち二人は教団の崇高な考えが理解できなかつたようだな……。なら、私が君達の教師として出来ることは一つだ。最後の授業だ野比君、出木杉君！　この世には“絶対的な力”が存在することを教えてやる！」

先生は左腕を水平に上げて、近づいてきた

優斗「全員、撃ちまくって構わないぞ！俺は当たっても問題ない!!」

先生は一步踏み出し、一步で一氣に近づいてきた

優斗『早い!?!』

優斗は拳を逸らそうとしたが、間に合わず腹に拳が直撃した

優斗「っ……!」

一步後ずさりし、すぐに反撃した

先生「ぬっ!……やるではないか。だが、この程度では私には勝てないぞ」

優斗「言つとくが……俺の妹の方が強いからな」

先生と一進一退の攻防を繰り返し、レオン以外は銃を撃つのに戸惑っていた。出木杉と雪香は優斗に当たるかもしれないという懼れから、のび太はまだ先生を撃つ覚悟ができていないのだろう

優斗「そんなんじや、俺の妹には勝てないぞ」

先生「心配するな、お前達を殺した後に、お前の妹たちもすぐ教育してやる」

優斗「それは絶対に出来ないな、こつちも本氣を出させてもらう」

優斗はイフリーストを出し、合計四本の腕で殴り続け反撃の隙を与えなかった

そして最後に顔面とみぞおちに一発ずつ入れ、一步下がった

優斗「今だ、撃てエー……!!」

優斗は集中砲火を指示し、出木杉と雪香が撃ちだしたがのび太はまだ撃たなかった

優斗「……無理に撃てとは言わない。だが、最後まで見届けるんだ。それが、お前にできる最高の弔いだ」

優斗はそう言いながら、木っ端みじんにする気満々にカオスの空間からマシンガンを取り出した

優斗「皆、目を瞑って俺の後ろに」

皆が後ろに行つた所で、先生にマシンガンをぶつ放して先生をハチの巣にした

だが、まだ先生には息があつた

先生「お、お前達は私を尊敬していたのだろう！なら、なぜこの思想が理解できない!!」

優斗「尊敬した相手の全てを理解することはできない。そして、のび太達が慕い、尊敬した先生は今のアンタじゃない。さつさと死んだらどうだ？あの世でまだかまだかと四季様が待つてるぞ」

先生「……そ、そうか。私は、間違いを犯したのだな……」

先生は、一息ついて語りかけてきた

先生「野比君……出木杉君。今さら私が言えたことではないが、教団には関わらな

いでほしい。君達には、これ以上不幸が起きてほしくない」

のび太が何か言おうとすると、先生は被せてこう続けた

先生「だが、君達は私の言った事を守らないだろう。ならば、ひとつだけ……言わせてくれ。私の生徒は、全員素晴らしい子たちだった。本当に……すまな……かつた……」

先生は言い終えた瞬間、息を引き取った

のび太「……先生……」

出木杉「……もつと、貴方からたくさん事を学びたかった……残念です」

レオン「……四季様とは誰だ？」

優斗「閻魔様さ」

すると、雪香が真ん中であつたパソコンを見た

雪香「このパソコンでシャッターを操作していたようね……」

雪香がパソコンを操作し始め、皆はそちらを見に行つた。優斗は、ガイアにブルーシートを作ってもらい、先生にかけた

優斗「……あなたも、こんな世界にならなけりや、良い先生だったんだろ。優菜から色々聞いてみるよ」

そう言い、優斗もパソコンに向かつた

雪香「シャツターは開けたわ」

のび太「よし、みんなと早く合流しよう！」

雪香「・・・ちよつと待って、何やら興味深いデータがあるわ」

のび太「??」

雪香「これは・・・？」

尺足りないから要約

大統領の娘を捕まえた。学校の三階に捕らえている

プラーガ・タイプ2はすぐバレるから、あえて寄生を遅らせるためにタイプ1にし、卵を注入する

そして、大統領の娘をアメリカに帰し、戻った頃に卵が孵り、プラーガが寄生

大統領の娘にプラーガを撒かせて、アメリカの国民を疑心暗鬼にさせ、その間に国を乗っ取る

レオン「アシユリー・・・やはりこの学校にいるのか？」

出木杉「レオンさん・・・貴方は、いったいどのような人間なんですか？ただの警察関係者には見えませんし・・・。そろそろ教えていただけませんか。貴方が何者で、何が目的なのかを」

レオン「・・・すまない。隠しておくつもりはなかったんだが」

優斗「・・・気になるのは分かるんだけどさ。絶対、ここで話すより保健室で話した方がいいと思うんだが」

出木杉「・・・そうですね。すぐにみんなの所に戻りましょう」

一階に降りると、化け物の死体が大量に積まれていた

出木杉「これは・・・!?」

優斗「・・・この殺され方は、優菜か？保健室が責められたのか。まあ、優菜が真面目にやったらしいから無事だろ」

保健室の中に入ると、のび太と出木杉にジャイアンが飛びついた

優菜には優斗が飛びついたが、それは残像だった

そして、久下さんは一人増えてることに驚き、スネ夫は新しく来た人が女性であることにはいかがわしそうな考えている様な考えていないようなよく分からない顔をしていた

安雄「情報量が多い!!」

久下「とりあえず、皆が無事でよかった」

スネ夫「それじゃあ、二階で何があったかを聞いてもいいかな？」

レオン「ああ」

レオンがまず雪香の身の上や動機、先生のことを話した

ジャイアン「そうか・・・先生が・・・」

スネ夫「僕達が、ダメな事をしたら叱ってくれた先生が・・・」

静香「・・・」

安雄「・・・」

優菜「・・・そろそろ、重い話は終わりにしたい。先生の事は残念だと思うが、今はまだ下を向いてる場合じゃない」

レオン「・・・なら、今度は俺の話をしようか」

そしてレオンは自分の身の上すべてを話した

のび太「アメリカのエージェント・・・？」

雪香「これはまた、凄い人がいたものね」

出木杉「・・・成る程。アメリカ大統領の娘の搜索・・・ですか」

健治「どんどん話がデカくなってきやがる・・・」

優斗『俺らの話に比べれば、そうでもないな』

レオン「全く言う機会がなくてな」

静香「別にいいと思うの。敵だった訳じゃないみたいだし」

久下「しかし教団・・・か。そんな話が本当かどうか分からないが、この状況では信じざるを得ん」

レオン「アシユリーの誘拐も計画の一部だったようだ。アシユリーを介して、アメリカにプラーガを侵食させるつもりだ……」

スネ夫「この学校に捕まってるんだつたら、早く助けに行った方が良いんじゃない？」
レオン「そうだな。アシユリーさえ救出できれば、ヘリを呼んで全員脱出することもできる」

ジャイアン「決まりだな！でも、誰が行くんだ？」

レオン「まず、俺は行く。そして順番的に優菜も来るだろう？」

優菜「もちろん」

レオン「なら、後はバランスを考えて……そうだな、あと三人ぐらいが望ましい」
久下「だな。また奴らが攻めてきた時に備えて、この保健室にも出来るだけ多くの人間が欲しい」

雪香「……私は三階に行く。大統領の娘は既にプラーガを投与されている。パパが残した幼体プラーガ駆除用の薬があるわ。間に合えば、プラーガを駆除できる」

聖奈「私も行きます。休憩は十分に取りましたし、私だけじつとはしていられませんから」

のび太「僕も行く。ドラえもんを探すんだ」

レオン「……」

ちな、ドラえもんを見た事は一回メンバー十雪香には言っていないよ

健治「よし、三階チームは緑川とのび太とレオンと優菜とそのねーちゃん、他はここで待機だ」

優菜「敵の襲撃が激化して来てる。いざとなったらいくらでも撃て、弾は任せろ」

久下「・・・コホン。あー、気を付けて」

静香「気を付けてね、みんな」

久下「・・・」

久下に憐れみの目を向けながら、優菜たちは三階に上がった

レオン「情報が正しければアシユリーが捕らえられているのはこの階だ」

雪香「・・・行きましょう」

さっそく、化け物が出てきたが優菜がすぐに殴り殺した

優菜「・・・弱い」

レオン『妹の方が強いというのは本当なのだろうか？』

それからパソコン室で木箱を割り、ハンドガンの弾十発。レバーを見つけ、動かすと扉が出現。中にあった箱から赤い宝石を入手

次に行ったのは、制御室。箱があったが、開けようとしても開かなかった。優菜がこじ開けようとしたが、皆に止められた。その部屋にあった制御パネルにメモが貼ってあ

り、メモには「赤が西むきや青東」と書かれていた

赤というのは、先ほど手に入れた赤い宝石の事だろう。ということは、青い宝石もあるのだろう

宝石を入れる所を探すと、箱の上の方にはまりそうなくぼみがあった。ちなみにレオン以外は背丈的に、手が届かなかった

青い宝石を探すために、北の別校舎を探索。理科準備室の前で優菜が立ち止まった

優菜「・・・」

レオン「何か気になるものでもあったか？」

優菜「この中にいる」

のび太「中？理科準備室？」

優菜「中に気が一つある。大統領の娘かは分からないけど、誰かいる」

レオン「わかるのか!？」

優菜「いや、確証はない。敵の可能性もあるし、慎重n」

レオンは理科準備室に突撃したが、扉はびくともしなかった

レオン「開かないか・・・!」

優菜「・・・」

雪香「理科室は開いてるわ。こっちから行けないかしら」

雪香のいう通り理科室は開いており、ミネラルウォーター、青ハーブ、会議室の鍵を見つけた

聖奈が準備室を開けようとするが

聖奈「こちらからは・・・鍵が掛かっていますね」

優菜「・・・ゲームだと、会議室に行ったら青の宝石があつて、制御室の壁にはめると箱が開いて準備室の鍵があるんだろうな」

全くその通りでした

そして、いまから準備室の鍵を開けようとしていた

レオン「この中にいるんだな？」

優菜「・・・他にいそうなところはない。ほぼ間違いない」

レオン「よし・・・」

レオンが準備室の鍵を使い、扉を開けると中には一人の少女?・・・いや、もうちよつと大人の女性がいた

多分大学生ぐらい

大統領の娘?「!!!」

娘はこちらを見ると同時に、奥に逃げていった

レオン「アシユリー!!!」

聖奈「あれが・・・？」

アシユリー「あっち行つて！」

レオン「大丈夫だ、アシユリー」

アシユリー「イヤー！こないで！」

レオンは近づきながらこう言った

レオン「落ち着くんだ。俺はレオン。大統領の命で君を助けに来た」

アシユリー「えっ？パパが・・・？」

レオン「本当だ。とりあえずここを出よう」

雪香「待つて」

雪香もアシユリーに近付いて行つた

雪香「あなた・・・何か注射みたいなのをされなかつた？」

アシユリー「え？そういえば・・・首になにかされたような・・・」

雪香「・・・黙つてこの薬を飲んで。お父さんの元へと帰りたいのならね」

アシユリー「・・・？」

アシユリーは不思議そうな顔で薬を飲んだ

優菜は、理科室に数人の気が近づいてる事に気付いた

優菜「・・・のび太、ちよつとここにみんなを待たせてくれるか？」

のび太「え？は、はい。分かりました」

優菜が外に出ると、シヨットガンを持った黒ローブの男が五人、その後ろにボス的な立ち位置でいる白髪のじいさんがひとりいた

じいさん「・・・大統領の娘を解放したか」

優菜「あんた誰？邪魔しないでほしいんだけど」

金田「金田正宗・・・ロス・イルミナドス教団幹部・・・」

優菜「そしてこの町の町内会長だろ？」

金田「なんだ、知っているのか」

優菜「ていうか、戦国武将みたいな名前してるよな」

金田「よく言われるな。それはどうでもいいが、君らは我らの計画を知ってしまった。それだけでは命を取るまでも無かったが、娘を助けてしまつてはそうも言つてられない。何か使えるかと思つていたが、ここで芽は詰ませてもらう」

優菜「・・・とりあえず、その銃は貰うね」

優菜は魔法で銃を全部吸い寄せて、シヨットガン五つを回収。安全装置を作動させてからカオスの空間へ

金田「なんだと!？」

優菜は金田に近付き、金田たちは後ずさりする

金田「お、お前達！相手は子供！しかも女だ！怯まず行け!!」

男が五人で抑え込もうとしてきたが、優菜が最初の一人を窓に投げ飛ばし、下に落ちていくところを見て、他の四人は恐れて近づかなかくなった

優菜「お帰りはそちらで御座います」

優菜は、横にあつたシャッターの締まつた階段に気弾を撃ち込み、シャッターを破壊。そつちに逃げるように指示した

優菜『へりで逃げるなら壊しても構わんだろ』

金田「ふ、ふん。ならばこれだけは教えておいてやろう。のび太君の友達のドラえもん君は進んで我々に協力してくれたよ」

優菜「安心しろ、その時はドラえもんのICチップの記憶領域を確認して、あんたら基地見つけて核落とすから」

尚優菜には出来ない模様

金田「なっ!？」

金田たちは優菜に気圧され逃げだした

優菜「あと、保健室の仲間には手を出すなよ。あそこには俺のお兄ちゃんがいる。行つても死ぬだけだからな」

金田達は黙って、逃げていった

優菜「・・・他に、怪しい気も無し」と

優菜が安全を確認したところで、皆が出てきた

レオン「いきなり出てどうしたんだ？」

優菜「気のせいだった、何もなかったよ」

聖奈「皆の所に戻りましょう。皆心配してはるはずですし」

のび太「そうですね、早く戻りましょう」

本校舎に戻ると、ドラえもんの声が聞こえた

ドラえもん「もしもし、聞こえてるよ」

聖奈「・・・誰の・・・声？」

のび太「・・・!!!ドラえもん!!!」

優菜『アレが本物のドラえもん・・・!!やっばどうみてもネコには見えねえ!』

皆で静かに耳を澄ませた

ドラえもん「まったく、厄介な事になったよ。のび太達が動き回ってくれたせいで
ね。・・・まあ、なんとか立て直すさ。それじゃ、切るよ。僕たちの未来のために」

のび太「・・・」

のび太は、脇目も振らずに飛び出していた

レオン「待て、のび太！」

ドラえもんの後ろまで行き、のび太が叫んだ

のび太「ドラえもん!!!」

ドラえもん「!!!の、の、のび太君!!!ぶ・・・無事だったんだね！安心したよ、のび

太君・・・の、のび太君・・・？」

のび太「ドラえもん・・・。君が・・・この事件の犯人なの？教団の仲間なの？違うよね・・・？ドラえもんは、僕達のために隠れて何か手助けしてくれてたんだよね？そうだよな？」

ドラえもん「そ、そうに決まってるじゃないかのび太君！僕は教団の仲間ではないし、この街にプラーガを撒いてもいない・・・！」

のび太「!!・・・なんで君がプラーガを知ってるのさ」

ドラえもん「そ、それは・・・」

優菜「・・・OK、一旦落ち着け、のび太」

のび太「優菜さん・・・」

レオン『アイツ勝手に・・・!』

優菜「・・・ドラえもんだね？」

ドラえもん「あ、ああ。僕がドラえもんだよ」

優菜「・・・正直、疑いたくはない。もし、本当に敵なら君を俺は壊さなきゃならな

くなる。それだけは個人的に回避したい（国民的キャラクター殺すなんてできない）信用が欲しいなら情報をくれ。君が今まで何をして、何のために動いていたか。ついでに電話の相手もね」

ドラえもん「……」

優菜「……のび太を大事だと思ふなら、喋るんだ」

のび太「ドラえもん……」

ドラえもん「……分かった、全部話すよ。僕の目的も、この事件の事も……」

ドラえもんがそう言うと、レオンも来た

レオン「説得したのか……？」

優菜「さあ？」

のび太「そんな事どうでもいいよ！大事なのは、ドラえもんが敵じゃないって事だよ！」

のび太とドラえもんは抱き合っていた

優菜「……まあ、話はまとめて保健室でした方がいいだろう」

それから保健室に戻ると、優斗が飛びついてきたので後ろにスウェイして蹴り上げたドラえもん「は、派手な出迎えだね……」

ジャイアン「ドラえもん!？」

静香「ドラちゃん!？」

スネ夫「生きてたの!？」

優菜「驚くのは早い。ドラえもんは、今回の騒動の大事なところを知ってるらしいから話を聞くぞ」

久下「大事な所？」

優菜「とりあえず、皆ならんでくれ。その方が聞きやすいだろ」

レオン『アシユリーには驚かないんだな』

皆で聞く体制に入った

健治「なんだコイツ？中に誰か入ってるのか？」

ドラえもん「失敬な！」

久下「・・・もう、なんでもアリだな」

優菜「ドラえもん、説明どうぞ」

ドラえもん「そうだね・・・まずはこの事件の黒幕について話そう」

出木杉「ロス・イルミナドス教団かい？」

ドラえもん「・・・性格には違うね。教団は、もともとヨーロッパ地方のただの宗教団体に過ぎない。世界を支配するとかいう思想を持つてるけど、対して力や資金を持つてるわけでもなく、実際に実行なんかできやしない」

優菜「・・・じゃあ、大金を渡して手を貸した奴がいるのか？」

ドラえもん「そう、手を貸した奴がいる。そいつが真の黒幕さ」

レオン「誰だ？」

ドラえもん「それは・・・恐らく、僕と同じ、未来から来た人間だ」

スネ夫「ええ〜!？」

ジャイアン「どういう事だ！」

優菜「・・・！成る程」

優斗「何か分かったのか？」

皆が優菜に注目する

優菜「過去でプラーガを侵食させ、支配すれば、未来も侵食された未来に書き換えられる。過去、つまりこの時代をのつとれば、未来の全てを乗っ取れるって事だ」

分かりやすく説明すると、妖怪ウォッチ2の現代に怪魔が溢れかえった時みたいなの

ジャイアン「でもよ、それならなんでわざわざ過去でやるんだ？未来でやってればいいのによ」

ドラえもん「未来の警察は優秀なんだ。未来でそんなことを図つても、食い止められて逮捕されるのがオチだ」

ジャイアン「それもそうだな・・・」

スネ夫「過去なら、少なくとも時間が稼げるしね。一度支配すれば勝ちなワケだし」
ドラえもん「そもそも、過去の人間へ研究、計画の実行をさせれば、未来の警察にも
感知されにくいんだ」

優斗「だから、研究者を雇ったりしてたのか」

雪香「・・・」

ドラえもん「これから、このすすきが原事件を皮切りにして世界中にプラーガが広ま
る。そして、世界は教団と犯人のものになる」

のび太「そんな・・・」

ドラえもん「それを阻止するために僕やセワシ君が来た。表向きは、のび太君の人生
を変えるため。でも本当は、未来を守るためだ」

優菜「じゃあ、電話の相手はそのセワシって人？」

ドラえもん「そうだよ、でも詳しい話は後でね。正体がバレないようにしつつ僕らは
犯人を特定するため調査し、計画を未然に防ごうとした。でも・・・結局犯人は特定で
きなかった。そして、このすすきが原の事件も止めることは出来なかった。調査を兼ね
ての無人島旅行だったんだけど、まさか裏目に出るとはね・・・。帰ってきて町を見た
時は、愕然とした。・・・何のために来たのか、自分でも分からないよ」

のび太「・・・いいさ。難しい事はあまり分からないけど、君は世界を救う為頑張っ

ていたんだろう？悪いのは僕たちの方さ。良く確かめもせずに疑って」

ドラえもん「別にいいさ。信じてくれてありがとう、のび太君。．．．それに、正直疑われてもおかしくない事ばかりしてたからね」

優斗「のび太のバカたちにはバレないのかな」

ドラえもん「う．．．」

スネ夫「まあ、バカはホントだししようがないよね」

のび太「うるさいなスネ夫！」

ジャイアン「．．．話の中身がさっぱりわからん」

スネ夫「つまり、未来の誰かがこの時代へきて教壇に協力してプラーガを撒いて、未来を変え、世界を支配しようとした。それを阻止するためにドラえもんはやってきた。そうでしょ？」

静香「ちなみに、この学校で何をしていたの？」

ドラえもん「大統領の娘のアシリーさんがここに拉致されていることを掴んだんだよ。救出して計画を少しでも妨害しようと思つてね。でもまあ、いきなり怪物が現れたりして苦労したけどね。君達、教団に目を付けられてたんじゃないか？」

のび太「．．．うん。僕達が目立ったことをしたからドラえもんまで巻き添えを．．．」

ドラえもん「いいさ。それに、僕の代わりに君達が助け出してくれたしね。とにかく、

アシユリーさんが救出できたならヘリを呼んで脱出しよう」

のび太「……どこでもドアは？」

ドラえもん「……例の犯人に僕の事を感じかれて、四次元空間にバリアを張られた。道具を取り出せない。同じ理由でタイムマシンも使えない。犯人は相当の知識と技術を持っているみたい」

のび太「そうなのか……」

健治「よく分からねえけどよ、脱出できるって事だろ？」

ドラえもん「うん。僕の通信機でアメリカに連絡しよう」

という事で、ヘリが来るまで自由時間

優斗と優菜はベッドに並んで座っていた

優斗「……このまま終わると思うか？」

優菜「終わるわけないだろ。まだ決着がついてない」

優斗「だよな……」

優菜「いつ面倒な事になるか分からねえ。いつでも準備しとけよ」

優斗「……お前はいつでも気を張り過ぎだぞ。もっと楽にしろ」

優斗は優菜の頭をそう言いながら撫でたが、優菜は驚いてすぐに手を振りほどいた

優菜「何すんだ!？」

優斗「いや、多少リラックスできっかなって」

優菜「できるか！」

優菜は離れて、ヘリを待った

優菜『・・・誰かにちゃんと撫でられるのは、久しぶりだったな』

すると、外からバラバララララという音が聞こえてきた

久下「・・・ヘリの音だな」

スネ夫「やった！これで脱出できるぞ！」

レオン「・・・やけに早いな」

健治「大統領の娘の迎えだからな。ぶっ飛んで来たんだろ」

のび太「よし、じゃあ行こう」

優菜「・・・」

優斗「本物だと思うか？」

優菜「レオンの発言がフラグだからな・・・でも正直分からん。ヘリで飛んでる時に

撃墜、なんてこともあるかもしれない」

優斗「警戒はしておくんだな？」

優菜「ああ」

皆は外に出て、ヘリを待った。ヘリがグラウンドの真ん中に降り、パイロットが降り

てきた。中にはまだもう一人いる

パイロット「おーい、急いでくれー！」

アシユリー「早く乗って、脱出しましょう」

ドラえもん「おっと、その前にセワシ君に連絡しなきゃ」

のび太「セワシ君はこの町に？」

ドラえもん「ああ。二人で連絡を取りながらそれぞれ行動していたんだ。僕は学校でアシユリーさんの救出。セワシ君には街の調査を頼んだんだ」

ドラえもんは無線機を取り出し、連絡を取り始めた

優斗「・・・あいつらが本物かどうか分かるか？」

優菜「分からない。パイロットと知り合いだったら別だが、初対面だと判別のしようがない。・・・こういう時だけは、相手の心を読む能力が羨ましく感じるよ」

ドラえもん「・・・わかった。じゃあ気を付けてね」

ドラえもんは無線機を斬り、無線機をしまった（どこに？という質問は受け付けておりません）

ドラえもん「よし、行こうか」

全員でヘリに乗り、中にテキトーに座った

もちろん優斗は優菜の隣に座った

健治「……これで、終わったのか？」

出木杉「確かに僕達は、あの地獄と化したすすきが原から、こうして脱出することが出来た。でも……」

聖奈「私たちが知っているすすきが原は、もう無い。亡くなった人も、帰ってはこない。失ったものは大きかった。得たものは無いわ」

久下「……終わらないさ。むしろ、これからもっと大変な事になる」

雪香「そうね。これから、教団はさらにプラーガを世界に広めていくと思う」

ドラえもん「教団を倒し、未来から来た犯人を捕まえなきゃ、世界は終わる。いや、終わるよりもっと酷い事になる」

のび太「……今は、ゆっくり休もうよ。こうしてみんなで生き延びれたじゃないか。まずは、その事を喜び合わなきゃ」

ジャイアン「……そうだな。ここでウジウジ言っても仕方ねえ」

安雄「未来人は探さなきゃいけないけど、まずは基地を探さないといけないしね」

優菜「……未来人を見つけたら、殺すのか？捕まえるのか？」

ドラえもん「……理想は捕まえる事だけど、多分そんな生半可な戦いにはならないよ。殺す気で戦う事になると思う」

優菜「なら、基地を見つけたら即潰していいってこと？」

ドラえもん「まあ・・・出来るならそうだね」

優菜「OK、分かった」

ドラえもん「優菜以外の皆『一人で潰しそう・・・』

すると、優菜の瞼が重くなってきた

優菜『あれ・・・急に眠く・・・』

優菜は優斗の服を掴みながら、力を入れて起きようとするが、どんどん瞼は落ちてい

く

優菜『おかしい・・・なんで起きられ・・・な・・・い・・・』

優菜は優斗にもたれかかって寝てしまった

優斗『?・・・疲れてたんだな』

優斗は優菜が眠った事に気付いたが、特に気にすることも無かった。

しかし、周りのみんなもどんどん眠って行った

優斗『?・・・まさか!!催眠ガス・・・zzzz』

優斗も寝てしまった。そう、今ヘリの中には催眠ガスが充満していた。今起きている

のは、ロボットのドラえもんのみだった

ドラえもん「み、みんな・・・どうし・・・」

ドラえもん「しつぽをパイロットが引つ張った。ドラえもんはしつぽを引つ張られ

ると、機能停止するのだ

パイロット1「しっぽを引つ張つたら止まりやがった。上に言われた通りだな。他のやつも全員が素で眠つたようだし、まんまと成功したな」

パイロット2「写真の奴らをヘリから落とすの忘れんなよ？そいつらが居たら、檻ごと本部が吹つ飛ばされちまう」

パイロット1「わかつてるって」

パイロット1は優菜と優斗をヘリから落とす、席に戻った

パイロット2「よし、さっさとスペインの教団研究所本部まで飛ぶぞ。早くしねエと、本物のアメリカのヘリと鉢合わせ可能性がある」

パイロット1「アメリカの救助ヘリのフリをしてさらうなんて、上手いこと考えたもんだ」

パイロット2「ハハハ・・・」

そうしてヘリは飛び去って行った

第九十話（僕のヒーローアカデミアの軌跡『第四話』より）

「ヴィラン襲来」

？「……て……きて……起きて……起きて！」

誰かに声をかけながら揺らされ、二人は目を覚ました

優菜「へ!?何!?!」

優斗「ん?朝か?」

芦戸「もう訓練終わったよ」

優菜「……ああ、寝ちやっただ」

麗日「仲良さそうに二人とも寄りかかってね」

優菜「……マジ?」

麗日「うん」

ゆつくりと顔を手で塞いだ

そして、少しずつ顔が赤くなっていくのが伺えた

麗日『顔赤い……可愛い!』

峰田『ヒーロー科……最高!』

優斗『え？どういう状況？』

それから数分後・・・

オールマイト「お疲れさん!!緑谷少年以外は大きなけがもなし!しかし真摯に取り組んだ!!初めての訓練にしちや、皆上出来だったぜ!」

切島「相澤先生の後でこんな真つ当な授業・・・なんか拍子抜けというか・・・」

オールマイト「真つ当な授業もまた私たちの自由さ!それじゃあ私は緑谷少年に好評を聞かせねば!着替えて教室にお戻り!!」

オールマイトは出久の所へ走っていった

峰田「?急いでるなオールマイト・・・。かけえ」

シツポは皆に見えないようにして着替えた

それから次の日、登校中

校門にオールマイトが教師になった事についてマスコミが集中し、そのせいで門が閉じてしまっていた

優菜「え?何で閉じてんの?」

マスコミ「君!雄英の生徒ですか?オールマイトについて何か教えてくれませんか?」

優斗「・・・どうする?」

優菜「無視するぞ。優斗、壁のどこに來い」

優菜が壁の前に行き、手で足場を作って踏ん張った

優菜「よしこい」

優斗「そういうことか」

優斗が勢いを付けて優菜の手に乗り、上へ放り投げて優斗は壁の上まで行った

優菜「先行つとけ」

優斗「了解」

優菜は波紋の呼吸をし、壁に張り付きながら登る

優菜「あんまりやり過ぎないでね。面倒だから」

壁を乗り越え、ダツシユで教室へ行き、席に着く

そして、すぐに先生が入ってきた

相澤「昨日の戦闘訓練お疲れ、映像と成績見させてもらった。爆轟、おまえもうガキみてえなマネすんな、能力あるんだから」

爆轟「・・・わかってる」

相澤「で、緑谷は腕ぶつ壊して一件落着か・・・個性の制御・・・いつまでも「出来ないから仕方ない」じゃ通せねえぞ。俺は同じこと言うのが嫌いだ。それさえクリアすればやれることは多い、焦れよ緑谷」

緑谷「はいっ！」

相澤「さてHRの本題だ。．．急で悪いが、今日は君等に学級委員長を決めてもらう」

皆「学校つばいの来たー!!!」

切島「委員長やりたいです！ソレ俺!!」

耳郎「ウチもやりたいス」

峰田「オイラのマニフェストは女子全員膝上30cm!!」

青山「ボクの為にあるヤツ☆」

芦戸「リーダー!!やるやるー!!」

優斗『皆手上げるじゃん』

優菜『まあ、このクラスをまとめた実績狙いとかじゃないか?』

飯田「静粛にしたまえ!!多をけん引する責任重大な仕事だぞ．．!」
「やりたい者」がやれるモノではないだろう!!周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務．．!民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるといふのなら．．これは投票で決めるべき議案!!!
そういう飯田の挙手は、自分なりにたそうに天高く突き上げられていた

切島「そびえ立ってんじゃねーか!!何故発案した!!!」

蛙吹「日も浅いのに信頼のクソもないわ飯田ちゃん」

切島「そんな皆自分にいれらあ！」

飯田「だからこそ、ここで複数票を獲った者こそが真にふさわしい人間という事にならないか!? どうでしょうか先生!!!」

相澤「時間内に決めりゃ何でも良いよ」

結果・・・緑谷出久三票、八百万百二票により、学級委員長は緑谷出久、副委員長は八百万百になった

それから昼飯中

飯田や出久たちと食事をしていると、ウーとサイレンが鳴り響いた

警報アナウンス「セキュリティ3が突破されました、生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください」

飯田「セキュリティ3って何ですか？」

三年生「校舎内に誰か侵入してきたってことだよ！三年間でこんな初めてだ!! 君等も早く!!」

気で空中に飛び、逃げようとする人ごみから抜けた

優菜「どういうことだ？」

外を見ると、校門からマスコミが入って来ていた

優菜「マスコミか・・・」

優斗『助けて……』

助けを呼ぶ優斗を人ごみから引つ張り出し、自分に掴まらせた

優斗「誰が侵入したんだ？」

優菜「多分、マスコミだ。先生が校門に集まってるしな」

優斗「マスコミか。でも、皆はパニックになってるし、叫ぶだけじゃ気づかないな」

優菜「そうだな。皆がすぐに目を向ける応な場所から言わない限り、気づかせるのは
厳しいだろ」

すると飯田が麗日の個性で浮き上がり、エンジンの個性で出入り口の上まで飛んで
行った

優斗「あいつ、何する気だ？」

そして「大丈夫」と大声で叫び、マスコミが原因であるという事も告げて、生徒たち
は沈静化していった

優斗『やるじゃねえか』

優菜『達観してないで、戻るよ』

それから、全員教室へ戻っていった

次の時間は、委員長たち以外の委員決め

八百万「ホラ委員長、初めて」

出久「でっ、では他の委員決めを執り行つて参ります！・・・けどその前にいいですか！委員長はやっぱり飯田君がいいと・・・思います！あんな風にかっこよく人をまとめられるんだ。僕は・・・飯田君がやるのが正しいと思うよ」

切島「あ！良いんじゃないやね！！飯田食堂で超活躍してたし！！緑谷でも別に良いけどさ！」

上鳴「非常口の標識みてえになつてたよな」

相澤「何でも良いから早く進めろ・・・時間がもつたいない」

出久「ひっ！！」

飯田「委員長の指名ならば仕方あるまい！！」

切島「任せたぜ非常口！！」

瀬呂「非常口飯田！！しっかりやれよー！！」

優斗『なあ、アレってマスコミに出来る様なものなのか』

優菜『門のやつか？・・・さあ？分からんな』

つぐのひ（次の日）

相澤「今日のヒーロー基礎学だが・・・俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見る事になった」

瀬呂「ハイ！何するんですか!?!」

相澤「災害水難何でもござれ、人命救助訓練だ!!」

上鳴「レスキュー・・・今回も大変そうだな」

芦戸「ねー!」

切島「バカおめー、これこそヒーローの本分だぜ!? 鳴るぜ!! 腕が!!」

蛙吹「水難なら私の独壇場ケロケロ」

相澤「おいまだ途中。今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく、以上準備開始」

ということ、怪盗服はどっかに引っかかる可能性があるなので体操服でバスの中へそれから優菜は爆睡ルートへ

優菜「スースースー」

優斗「いや寝るなよ・・・」

爆豪「んだとコラ出すわ!!」

上鳴「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだような性格と認識されるってすげえよ」

爆豪「てめえのボキャブラリーは何だコラ殺すぞ!!」

優斗『話の内容が全く見えないぞ・・・』

優菜「うっせえ黙れ!!」

優斗『あ、起きた』

相澤「もう着くぞ、いい加減にしとけよ……」

皆「ハイ!!」

目的地に着いた

切島「すっげー!! USJかよ!?!」

USJの前には宇宙服のような恰好をした人が待つており、説明を始めた

?「水難事故、土砂災害火事……ETC、あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくつ

た演習場です。その名も……ウソの（U）災害や（S）事故ルーム!!（J）」

出久「スペースヒーロー「13号」だ!災害救助でめざましい活躍をしている紳士的

なヒーロー!」

麗日「わー!私好きなの13号!」

皆が興奮して13号に気を取られているうちに……

優菜「今のうちに……みんな出しとくか」

優斗「そうだな

ペルソナを六人とも、全員出した

優菜「まあ、あくまで演習だからそこまで本気にすんじやねえぞ……特にヘル

ヘル「言われなくてもわかってるわよ」

優菜「殺すんじゃないよ、助けるだけだから」

相澤「仕方ない始めるか」

優菜「全員、皆に見えない様にね」

ペルソナたちにそう言い、皆の所に戻った

13号「えー始める前にお小言を一つ二つ・・・三つ・・・四つ・・・」

皆の心の声『増えてく・・・』

13号「皆さんご存知だとは思いますが、僕の個性はブラックホール、どんなものでも吸い込んでチリにしています」

出久「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね」

13号「ええ・・・しかし簡単に人を殺せる力です。皆の中にもそういう個性がいるでしょう。超人社会、個性の使用を資格制にし厳しく規制することで、一見成り立っているように見えます。しかし一歩間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持っていることを忘れないで下さい。相澤さんに体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイト対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思えます。この授業では・・・心機一転！人命の為に個性をどう活用するかを学んでいきましよう！君達の力は人を傷つける為にあるのではない、助けるためにあるのだと心得て帰って下さいな。以上！ご清聴ありがとうございました」

麗日「ステキー！」

飯田「ブラボー!!ブラーボー!!」

相澤「そんじやあまずは・・・」

USJの中に入ると、優菜が何かを感じたように中央を凝視した

優菜『・・・殺気か』

中央に黒い渦のような穴が開き、人が何人か出てきた

相澤も気づき、全体の進行を止めた

相澤「一塊になって動くな!!13号!!生徒を守れ！」

切島「何だアリヤ!?また入試時みたいなもう始まってんぞパターン？」

相澤「動くな、あれはヴィランだ!!!」

相澤先生が応戦に中央へ走っていった

そして、ヴィランを連れてきた黒い霧がこっちへ

黒霧「初めまして、我々はヴィラン連合。僭越ながら・・・この度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは、平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事です・・・。本来ならば、ここにオールマイトがいらつしやるはず・・・ですが、何か変更あつたのでしょうか?まあ・・・それとは関係なく・・・私の役目はこれ」

黒霧が何かをする前に止めようと、優菜は発砲し、爆豪は爆破し、切島が切り裂いた

切島「その前に俺たちにやられることは考えてなかったか!」

しかし、何事もなかったかのように黒霧は下がり、また話し始めた

黒霧「危ない危ない・・・そう、生徒といえど優秀な金の卵」

13号「ダメだどきなさい二人とも!」

爆豪と切島が霧に飲まれて消え、皆も次々と消えていった

出久「皆!!」

優斗は早々に離脱したが、優菜は出久を守ろうとして一緒に消えていった

優斗「面倒な事になったな。イフリートは俺と一緒に、他は皆の救助及び援護をしてくれ」

ペルソナたちは命令通りに散って行き、優斗も捜索に乗り出した

残ったのは飯田と障子に瀬呂、砂藤に麗日、そして13号のみだった

飯田「皆は!?!いるか!?!確認できるか!?!」

障子「散り散りにはなっているがこの施設内にいる」

瀬呂「物理攻撃無効でワープして・・・!!最悪の個性だぜおい!!」

13号「・・・委員長!」

飯田「は!!」

13号「君に託します。学校まで駆けてこのことを伝えてください。警報ならず、そ

して電話も圏外になっていました。警報機は赤外線式・・・先輩・・・イレイザーヘッドが下で個性を消しまわっているにも拘らず無作動なのは・・・恐らくそれらを妨害可能な個性がいて、即座に隠したのでしょうか。とすると、それを見つけて出すより君が駆けたほうが早い！」

飯田「しかしクラスを置いてくなど委員長風上にm」

砂籐「行けて非常口!!外に出れば警報がある!だからこいつらはこん中だけで事做起こしてんだろう!?!」

瀬呂「外にさえ出られりや追つちやこれねえよ!!お前の脚でモヤを振り切れ!!」

13号「救うために個性を使ってください!!」

麗日「食堂の時みたく・・・サポートなら私超できるから!する!!から!!お願いね委員長!!」

黒霧「手段がないとはいえ、敵前で策を語る阿保がいますか」

13号「バレても問題ないから語ったんでしようが!!」

その頃の優菜

優菜『飛ばされたか!?!』

自分の身体が、冷たい液体に包まれたのを感じた

優菜『水?水難か!』

まず武空術で浮き上がり、状況を確認した

ヴィラン「ガアアアア」

ヴィランが一人噛み付いてきたが、すぐにぶん殴って湖に落とした

ヴィラン「ギャアアアア」

倒れたヴィランは魚のようにプカプカと浮いていた

気を探り、出久達が船に上がっていることを確認したため、俺も上がった

優菜「全員、無事か？怪我はないか？」

出久「僕は蛙吹さんに助けてもらったよ」

蛙吹「梅雨ちゃんと呼んで。しかし、大変なことになったわね」

出久「カリキュラムが割れてた・・・！単純に考えれば、先日のマスクコミ乱入は情報を得る為に奴らが仕組んだってことだ」

峰田「でもよでもよ！オールマイトを殺すなんて出来っこねえさ！オールマイトが来たらあんな奴らケチョンチョンだぜ」

蛙吹「峰田ちゃん・・・殺せる算段が整ってるから、連中こんな無茶してるんじゃないの？そこまでできる連中に、私達鬮り殺すって言われたのよ？オールマイトが来るまで持ちこたえられるかしら？オールマイトが来たとして・・・無事に済むのかしら」

峰田「みみみ緑谷ア!!!」

ヴィラン「んのヤロオ!! 殺してやる!!」

先ほどのヴィランが復活して、こちらに罵声を浴びせてきたようだ
すると、次から次に水中からヴィランが湧き出てきた

峰田「大量だあああゝゝ!!」

優菜「・・・」

出久「奴らに・・・オールマイトを倒す術があるんなら・・・!! 僕らが今すべきことは・・・戦って、阻止する事!!」

峰田「何が戦うだよバカかよお! オールマイトブツ倒せるかもしれねー奴らなんだろ!? 矛盾が生じてんぞ緑谷!! 雄英ヒーローが助けに来てくれるまで大人しくが得策に決まってるらしい!!」

出久「峰田君下の連中・・・明らかに水中線を想定してるよね」

峰田「ムシかよー!!」

蛙吹「この施設の設計をした上で人員を集めたってこと?」

出久「そう! そこまで情報仕入れておいて、周到に準備してくる連中にしちゃおかしな点がある。この水難ゾーンに蛙すつ・・・つつ梅雨つ・・・ちゃんが移動させられてるって点!!」

蛙吹「自分のペースで良いのよ」

出久「あ、そうなの・・・」

峰田「だから何なんだよー!!?」

出久「だからつまり！生徒の個性は分かかってないんじゃない?」

蛙吹「蛙の私を知ってたら、あつちの火災ゾーンにでも放り込むわね」

蛙吹はビルが燃え盛るエリアを指しながらそう言った

出久「僕らの個性が分からないからこそきつと、バラバラにして数で攻め落とすって作戦にしたんだよ。数も経験も劣る！勝利の鍵は一つ！僕らの個性が相手にとって未知であること!!敵は船に上がろうとしてこない！これが仮説を裏付けてる！」

作戦を立てるために、全員の個性を確認

蛙吹「私は跳躍と壁に貼り付けるのと舌を伸ばせるわ。最長で20m程ね。あとは胃袋を外に出して洗ったり、毒性の粘液・・・といっても多少ピリツとする程度のを分泌できる」

峰田「分・・・泌・・・!!」

蛙吹「後半二つはほぼ役に立たないし忘れていいかも」

峰田「分・・・泌」

優菜「黙れ峰田」

出久「薄々思ってたけど・・・強いね。僕は・・・超パワーだけど・・・使った先か

らバツキバキになる・・・諸刃の剣的な・・・アレです」

峰田「頭から玉をもぎり、壁にくつつける

峰田「超くつつく。体調によっちゃ一日たつてもくつついたまま。モギったそばから生えてくるけど、モギリすぎると血が出る。オイラ自身にはくつつかずにブニブニ跳ねる」

優菜「……………」

出久「……………」

蛙吹「……………」

峰田「だから言ってるんだろ大人しく助けを待とうつてよお！オイラの個性はバリバリ戦闘に不向きな〜!!!」

出久「ちつ、違うつてば、凄い個性だから活用法を考えて……………」

ヴィランの一人が船に向かって攻撃してきた

ヴィラン「じれつたいだけだ、ちやつちやと終わらそう」

蛙吹「なんて力……………！船が割れたわ」

峰田「ううう〜」

優菜「……………私の個性は、魔法とでも思つて。だいたいなんでもできるわ。攻撃は、入試の0ポイントが破壊できるくらいの威力よ」

出久「え・・・」

峰田「おい、この絶望的な状況で頭イカレたんじゃねえのか!? そんな妄想モリモリみたいな個性あるのか!？」

優菜「火も出せるからあんた燃やそうか」

出久「ちよつと待って・・・」

出久は会話を止めさせ、少し考えた後にこう話し始めた

出久「一つ、提案があるんだけど」

優菜「聞かせて」

出久の語る作戦に、三人は耳を傾けた

一分後、痺れを切らしたヴィランが一人、船に乗り込んできた

ヴィラン「おらガキ共ーっ！覚悟しr」

そのヴィランの喉を掴み、持ち上げた

ヴィラン「ぐ・・・g」

そこに波紋を流し、感電したような痺れを起こさせた

そして、ヴィランの足を湖に浸けた

波紋は湖全体に流れ、ヴィラン達が次々と感電していく

優菜「よし、動きを鈍くしたぞ」

出久「それじゃあ、皆。行くよ！」

まず、優菜がヴィランを投げ捨てて船から飛び出し、水上に浮遊したヴィラン「てめえはさっきの！ぶっ殺してやる!!」

優菜「いくよ！」

優菜は水面に向かって、本気で拳を叩きつけた。地面が見える程水が隅に避け、叩きつけた中心にヴィランと共に戻ってくる

そして蛙吹さんが出久と峰田を抱えて、上空に向かって飛び跳ねた

出久「峰田君！」

峰田「分かった！」

優菜はすぐに武空術で逃げ、ヴィランがつまる中心に次々と峰田のモギモギが投げ入れられていく

そして集まったヴィランが全員くっつき、一掃した

本来なら出久がやるところだが・・・一発だけしかできないなら、俺がやるべきだろう

そして、蛙吹を捕まえた

優菜「梅雨ちゃん！二人をしつかり抱えててよ。陸まで飛ぶから」

その頃、他のみんなは・・・

倒壊ゾーン

カオス「ここは大丈夫なのか？」

爆豪「てめえは確か・・・」

切島「優菜達が使ってたやつだよな？」

カオス「やることあるか？」

切島「いや、ここは全部倒しちゃったよ」

カオス「大丈夫ってことだな？じゃあ他のところ行くか」

火災ゾーン

尾白「クソツ敵が多いな・・・」

ヴィラン「オラア!!」

尾白「後ろから!?!ぐっ」

奇襲に対し、シツポで蹴り飛ばした

ヴィラン「隙あり！」

尾白「しまっ」

その隙をヴィランが突こうとしたが、右方から銃声が聞こえ、襲ってきたヴィランが倒れた

尾白「え？」

アリエル「大丈夫ですか？」

尾白「あなたは優菜の……」

アリエルは群がってくるヴィランを次々と撃ち倒しながら尾白の所

アリエル「怪我してるなら治しますよ」

尾白「あ、ああ助かる」

アリエル『誰か応援来れますか？』

カオス『俺が今終わったから行こう。どこだ？』

アリエル『火災ゾーンです』

すると上空に穴が開き、そこからカオスが現れ、尾白の所へ

カオス「大丈夫か？」

尾白「え!?!ワープ!?!」

アリエル「はい。少々敵が多いですが」

カオス「お前は回復してな。そのうちにこいつらは片付ける」

ヴィラン「なんだとく!!」

カオスはヴィラン達に向かって行き、次々と殴り飛ばしていく

カオス「どんどん来いよ」

土砂ゾーン

轟の個性により、土砂は氷に覆われていた

ヘル「えええええ．．．氷？コレ、すごいわね．．．!!向こうに魂が一つあるわね」
魂に近づいていくと、瓦礫の中に服だけ空中に浮いていた

しかし、魂はそこにある．．．．という事は

ヘル「貴女．．．透明人間？」

葉隠「え!?あつ貴女は．．．」

ヘル「ちよつとヤバそうだから、さっさと出るわよ」

葉隠「はい！」

ヘル『こつち一人見つけた、終わるまで援護しとく』

他のペルソナたち『了解』

カオス『こつちは、アリエルと一緒に応戦中。一人見つけたから終わりまで一緒にいるぞ。あつでもその前に二人あつたが、もう全員倒していたぞ』

ガイア『私は今二人見つけたから、確保したら入口に戻るわ』

暴風・大雨ゾーン

常闇「ちよつときついか？」

口田「．．．」ボソボソ

ガイア「大丈夫ですか？」

ガイアは氷のかまくらを作り、常闇たちに自分ごと被せた

ずらされない様に、地面にかまくらの足元を貫通させながら氷柱を刺した

そしてライトを作り出して中を明るくし、結果的にダークシャドウが暴れないようにした

常闇「なんだ!？」

ガイア「助けに来ました」

口田「・・・」ボソボソ

ガイア「ええ、優菜たちの個性です。それで、今周りにたくさん敵がいますが・・・。手伝いしましょうか？」

常闇「あ、ああ。頼む」

ガイア「よし、任せなさい」

それからペルソナ通信に戻って

クロノス『三人見つけたが、敵を押ししているため見守っている。やられそうだったら助けに入る』

そして入り口付近

イフリート「という事らしい」

優斗「皆は大丈夫そうだな。なら、生徒が居て一番さヤバイのは、俺たちの居るここ

か

黒霧「13号、災害救助で活躍するヒーロー。やはり・・・」

芦戸「先生ー!!」

黒霧「戦闘訓練は一般ヒーローに比べ半歩劣る、自分で自分をチリにしてみました」

13号はブラックホールの個性を黒霧に使ったが、後ろにゲートを繋げられてしまい、自分をチリにしてみました

砂籐「飯田ア走れって!!!」

飯田「くそう!!」

黒霧「散らし漏らした子ども・・・教師たちを呼ばれてはこちらも大変ですので」

黒霧が飯田の前にワープし、捕まえようとしたが、障子が庇った

障子「行け!!早く」

飯田「くそっ!!」

風の魔法で黒霧を吹き飛ばし、障子たちから遠ざけた

優斗「やるんならこつちに来い。委員長の邪魔はさせないぞ」

その頃優菜たちは、中心の相澤先生が戦っていた場所に来ていた

相澤先生は・・・脳が露出した化け物にやられ、地面に横たわっていた

死柄木「対平和の象徴、改人脳無」

優菜『うわ……バイオかよ』

出久「先……生……」

蛙吹「嘘でしょ……相澤先生が……」

峰田「終わりだ……俺達死ぬんだ……」

優菜「しつかりしろお前ら……どうやったら生き残れるか、20秒やるから考えろ。思い付いたら、俺が時間稼ぎしてやる」

そしてまた入り口へ

飯田「くっ……!!」

黒霧「ちよこぎいな……！外には出させない！」

黒霧のワープゲートの個性で入り口の前に立ちはだかれてしまい、飯田が出れずにいた

すると、飛ばし損ねられた麗日が黒霧に向かって走り出した

芦戸「麗日どうしたの!!」

麗日「皆！アレ！」

麗日は、霧の中にちらちらと見える装飾品を指した

優斗「……そうか！」

優斗も走りだす

飯田「ええい!!」

飯田がエンジンで掴まる前に抜けようとしたが

黒霧「生意気だぞメガネ・・・!消えろ!!」

霧が広がり、立ちふさがった

優斗「イフリート!!」

優斗が飛ばしたイフリートは、装飾品を掴んだ

イフリート「こんなのがついているという事は!」

麗日のほうに放り投げた

麗日「実体があるってことよね!!!行けええ!!!飯田くーん!!!」

麗日が装飾品に触り、空中に浮かせた

そして飯田はUSJから出て行き、助けを呼びに行った

黒霧が逃げない様に、テープで引っ付けて地面に叩き落した

優斗「油断するなよ。助けが来ても集中は切らすな」

優斗達が黒霧を抑え込んでいた頃、優菜たちは

相澤「っつ!!!」

相澤の右腕は、有無によりバキバキと折られていく

死柄木「個性を消せる。素敵だけなんてことはないね。圧倒的な力の前ではつま

り、ただの無個性なもの」

そして脳無が左腕も、グシャッと踏みつぶした

相澤「ぐあ……!!」

相澤が悲痛な叫びをあげると、今度は頭を持ち上げて地面に叩きつけた

優菜「思い付いた？ だったらすぐに行って、アレは俺がやる」

峰田「お、俺……？」

優菜「……そこは気にしないで。兎角逃げて、私が相手をするから」

出久「それは……」

蛙吹「それはダメよ優菜ちゃん」

優菜「何でだ？ 私はまだ本気で相手できてないんだ。少しぐらいやらせてほしい」

蛙吹「……やけに好戦的なのね。それに、口調も少し荒っぽいわ。でも、ここは逃げるべきよ。私達が行っても無駄よ。貴女は強いかもしれないけど、私たちは違う。戦略的撤退をすべきよ」

優菜「……間を取って殿」

蛙吹「それでいいわ。入り口に行きましょう。皆もあそこを目指していると思うし」

蛙吹達が物音を立てないように忍び足で、入り口の方に歩いていき、優菜はずっと死柄木を見つめていた

優菜『あいつが主犯だな。顔を覚えておこう』

顔を覚えようとじっと見ていると、死柄木の目がこちらの目と重なった

優菜「走れ！見つけた!!」

出久「え!？」

脳無が相澤をいたぶるのをやめ、こちらへと走ってくる

優菜「俺が相手する！早く行かねえと、入り口まで蹴り飛ばすぞ!!」

峰田「ヒイイ!!」

向かってきた脳無に、蹴りを入れようとするがガシツつと掴まれてしまった

優菜「なっ!？」

そして振りかぶって投げ飛ばそうとしたため、すぐに気の剣で腕を切り落とした

すぐに離れて、気弾を撃って牽制する

優菜『出久たちは逃げたか・・・?』

後ろを確認し、30メートルは遠ざかったことを確認した

優菜『よし、これだけ離れば・・・』

前を向いたら、ピンク色のしわが目の前に広がった

優菜『は・・・?』

身体を掴まれて、地面に叩きつけられた

その拍子に、全身の軋んだ音が聞こえた

優菜「ア……」

脳無はすぐに頭を踏みつぶそうとしたが、風の魔法で吹き飛ばしてすぐに逃げた離れてから脳無の姿を確認すると、先ほど切り落とした腕が綺麗に再生していた

優菜「再生持ちかよ」

死柄木「お前、雄英のガキか」

優菜「だつたら何？今考え中だから喋らないでくれる？」

死柄木「……へえ……お前人殺したことあるんじゃないか？いや、あるだろ……その目は殺したことがないといけない目だぞ」

優菜「黙ってろっ」

隙をつかれ、殴り飛ばされた

優菜「ウガ……」

瓦礫に叩きつけられ、ズルズルとずり落ちた

地面に仰向けで墜ち、激突した瞬間一瞬意識が消えた

天井のガラスから見える空の水色は、上方から真っ赤に染まっていた

優菜『血が出てるのか？当たり前が悪かったか……』

赤い視界の中、死柄木の所に霧が向かっているのが見えた

黒霧「死柄木弔」

死柄木「黒霧、13号はやったのか」

黒霧「行動不能には出来たものの。散らし損ねた生徒がおりまして……一名逃げられました」

死柄木「……は？はー……はあー……黒霧お前……お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしてたよ……。さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバーだ、あーあ……。今回はゲームオーバーだ。帰ろつか」

優菜『帰る……？』

死柄木「けどもその前に、平和の象徴としての矜持を少しでも」

死柄木がこちらに向かってくる

死柄木「へし折って帰ろう！」

目の前で止まり優菜の顔を触ろうとするが、触られない様に腕を掴み離そうとする
死柄木「どうした？この程度じゃ触っちゃまうぜ」

目の先まで手が近づき、とうとう触られてしまった

しかし、何も起こらない

死柄木「……本っ当かつこいいぜ、イレイザーヘッド」

相澤先生の個性により、死柄木の個性は相殺されたようだ

死柄木「脳無」

脳無は相澤先生にトドメを刺そうと近付いて行った

しかし入口から飛んで来た者によって、脳無はぶっ飛ばされた

？「もう大丈夫」

聞き覚えのある声と言葉だ

オールマイト「私が来た!!!」

これをいうのは・・・

優菜『オールマイト!?!』

死柄木「あー・・・コンティニューだ」

オールマイト「嫌な予感がしてね・・・。校長のお話を振り切りやってきたよ。来る途中で飯田少年とすれ違つて、何が起きているかはあらし聞いた」

皆「オールマイトオオ!!!」

入口からこつちまで聞こえてくるほどの音量で、出久たちが叫んでいた

特に出久は、本人だと分かるほどの音量だった

死柄木「待ったよヒーロー、社会のゴミめ」

ヴィラン1「あれが・・・!!生で見るの初めてだぜ・・・!!迫力すげえ・・・」

ヴィラン2「バカヤロウ。尻ごみすんなよ、アレを殺つて俺たちが・・・」

オールマイトは喋ってたヴィランを倒し、相澤先生の所にオールマイト「相澤君すまない」

相澤を抱え、今度は俺を死柄杓から離れたすると、入り口から優斗が飛んできた

優斗「大丈夫か優菜！」

オールマイト「優斗君、良い所に来た。相澤君と優菜君を頼んだ。相澤君は意識がない、優菜君は一人で歩けそうにないから早く!!」

イフリート「みんな聞いてたな？入り口に皆を」

クロノス『そろそろ終わりそうだから、終わったら行く』

ガイア『今終わった、向かうわ』

ヘル『こっちはさっきから待ってたわよ』

カオス『こっちも今終わった、向かう』

イフリート「だそうだ」

優斗「イフリートは先生を空から連れてってくれ」

山岳ゾーン

ヴィラン「手え上げる個性は禁止だ。使えばこいつを殺す」

ヴィランは電気を使い果たしてウェイウェイ言ってる上鳴に銃口を向けた

八百万「上鳴さん……!!」

耳郎「やられた……!!完全に油断してた……」

ヴィラン「同じ電気系個性としては、殺しはしたくないがしょうがないよな」

耳郎「全滅させたと思わせてからの伏兵……。こんなことも想像出来ていなかったなんて……」

八百万「電気系……!恐らく轟さんの言っていた通信妨害してる奴ね……!」

ヴィラン「そっちへ行く。決して動くなよ」

耳郎「……上鳴もだけどさ……電気系つてさ「生まれながら勝ち組」じゃん?」
八百万「?何を……だつてヒーローでなくても色んな仕事あるし引く手数多じゃん、いや純粹な疑問ね?なんでヴィランなんかやってんのかなつて……」

で
耳郎の右耳からプラグが伸びて、右足のスピーカーまであと少しの所まで来たところ

ヴィラン「気づかないとでも思ったか?」

上鳴「ウェイ!」

ヴィランは上鳴の頭に銃口を当てた

耳郎「くっ!!」

ヴィラン「子供の浅知恵など、バカな大人にしか通じないさ。ヒーローの卵が人質を

軽視するなよ。お前達が抵抗しなければ、このアホは見逃してやるぜ？他人の命か自分の命か……！さあ……動くなよ……」

クロノス「行かればといけないか」

クロノスは時間を止めて上鳴を助けた

そして時は動き出す

上鳴「ウエイ？」

八百万「上鳴さん！」

クロノス「しっかり守りなさい」

耳郎「あんたは！」

ヴィラン「クソツ」

クロノス「全く。貴方の方こそ、相手が子供だからといって油断しすぎです」

ヴィラン「ならお前を先に殺してやる！」

クロノス「何を言っている。お前はもう負けているのだぞ」

ヴィラン「なn」

ヴィランの身体は次々と殴られたように、凹んでいった

クロノス「お前に起こる事、その全て時間を遅らせた」

先ほどの時間停止の間に、何度も殴っておいた

それが経った今届くように時間を調整しておいた

耳郎「とりあえず、もう大丈夫ってこと？」

クロノス「他のやつはもう入口の所にいる。さっきオールマイトとか言う奴も来たらしい」

八百万「オールマイトが!?!?!?! わかりました、早く行きましょう」

上鳴「ウエイ？」

そして優斗は優菜を抱えて逃げていた

優菜『あれ……今、どういう状況なんだ?』

優斗「逃げるぞ! 優菜!」

優菜『逃げる……? 確かオールマイトが来て……そうだ、今脳無と』

逃げる優斗を尻目に、オールマイトは脳無と戦っていた

オールマイト「そういう感じか……!!」

オールマイトが脳無を地面に突き立てたかと思うと、黒霧の所為で背中にワープゲートを繋げられ横腹を掴まれてしまい血がにじんでいるらしい

優菜『よし、大体わかったぞ。まず今の視界は血で赤く染まっている。だから、赤+何か!! の色で見えるはずだ。で、今はやや紫ぐらいの色だから赤と青系の何かか。多分空だなああのピンクのはまさか!! 月か!!』

※太陽です。月は昼にはほぼ見えません。血を出し過ぎて、頭に血が回っていないのか
な？いえ、回っていないのは私（作者）の頭ですな

優菜『いや、月じゃないな。あんなに明るくない。でもそうか、月なら・・・』

優菜は優斗の服を引っ張り、耳を傾けさせた

優斗「どうした？」

優菜「ちよつと止まって」

優斗は立ち止まり、優菜の顔を覗き込んだ

優菜「降ろして」

優斗「そんなヒマは無いだろ」

優菜「早く!!」

優斗「・・・分かった」

言われた通り、優菜をゆっくり地面に降ろした

優斗「何する気だ？」

優菜「俺が今から、気弾を月に見立てて大猿になる。様子がおかしくなったら、オー

ルマイトの方に投げ飛ばしてくれ」

優斗「正気か？大猿になっても意識を保てる保証は無いだろ」

優菜「・・・やってみせる」

優斗「目が泳いでるぞ」

優菜「オールマイトは強いが、あいつらはそのオールマイトを殺すために来てるんだ。せめて「何ここカオスすぎ、今回は諦めた方が良さそう」とか思わせた方が良い」

優斗「・・・まあ確かに、でっかい猿が暴れてたらヤベエとはなるだろうが・・・」

優菜「すぐ行くからな。さっさと飛ばせよ」

優斗「だが、意識を保てなかつたらどうする？」

優菜「・・・殺せば？」

優斗「他人事みたいに・・・。どうなつても知らないからな」

優菜は手の平に丸い気弾を作り、空へ挙げた。それを月に見立て、尻尾はビクンと反応する

ドクンと脈が速くなる。本能と理性が混濁していく

優斗「よし、行くぞ」

右足を全力で踏み込み、オールマイトの上空へと優菜を投げ飛ばした

優斗「逃げるぞイフリート!!」

優菜の身体は巨大化していき、どんどん毛深くなっていく

骨格は変わり、服は裂け、ビルを越える程の大きさになり、咆哮をした

それに黒霧が気付き、上を向いた

その隙をつくように脳無の右半身が凍った

オールマイト「これは・・・！」

脳無の凍った部分を割り、オールマイトが抜けだした

そして、凍らせたのはもちろんこの人である

轟「オールマイトを助けたのはいいが・・・こりや一体何だ？」

轟は優菜を見上げた

大猿優菜「ウギャアアアアア!!」

黒霧「これは一体!?!」

死柄木「はあー・・・面倒なことになりやがった」

爆豪「なんだあれ・・・」

オールマイト「一体どういうことだ!?!」

優斗「どうだ・・・？」

大猿優菜「ウアギャアアアア!!」

優菜はオールマイトに向かって腕を振り落とした

オールマイト「なッ！」

優斗「カオス!!」

カオスを緊急で呼び出し、オールマイトの上に壁を作り、攻撃を防いだ

優斗「やつぱダメじゃねえか!!」

優斗は大猿優菜の後ろに行き、膝の裏を思いつき蹴って片膝をつかせてこちらに注意を向けた

黒霧「今度は何だ!？」

次に脳無を上に乗っ上げたら、大猿優菜はレーザーポインターを見た猫のように叩き潰した

優斗「そのヴィランたち任せていいですか!？」

オールマイト「任せなさい!!」

轟「俺達も手伝うか?」

優斗「いや、一人で大丈夫だ」

優斗は優菜を湖の方に追いやり、一対一の状況を作った

死柄木「まさか生徒に殺られるなんてな」

オールマイト「どうした? 来ないのかな!?! クリアとかなんとか言ってたが……出来るものならしてみろよ!!」

死柄木は何も言わず、黒霧は困った様に

オールマイト「さあどうした!?!」

黒霧「……なら、そうさせてもらいましょう」

黒霧がオールマイトへ飛び込んで行った

そこへ逃げたと思っていた出久が飛び込んできた

切島「な・・・緑谷!!」

出久「オールマイトから離れる!!」

黒霧「二度目はありませんよ!!」

死柄木の手がワープゲートを通して、緑谷の顔へ

しかし当たる瞬間、入り口から放たれた攻撃によつての死柄木たちの攻撃は妨害され
た

オールマイト「来たか!!」

入口には数々のヒーローが並び立ち、そのセンターに飯田が立っていた

飯田「ごめんよ皆、遅くなったね」

麗日「飯田君・・・!!」

飯田「すぐ動けるものをかき集めてきた、1―Aクラス委員長飯田天哉!!ただいま戻
りました!!」

死柄木「あーあ来ちゃったな・・・。ゲームオーバーだ、帰って出直すか」

銃を使うヒーローが死柄木に向かって、次々と弾を発砲した

死柄木「ぐっ!!」

銃を撃っているヒーロー「この距離で捕獲可能な個性は……」

死柄木がワープゲートで逃げようとする

黒霧「これは……」

しかし、黒霧は何か引つ張られて逃げられない

13号「僕だ……!!」

死柄木「今回は失敗だったけど……今度は殺すぞ平和の象徴オールマイト」

そこに出久が捕まえようと飛び込んだ

だが、寸前でワープゲートで逃げられた

13号は気絶し、止めきれなかったのだ

出久「……何も……出来なかった……」

オールマイト「そんなことはないさ、あの数秒がなければ私はやられていた……!ま

た助けられちゃったな」

出久が泣きながら言う

出久「無事で……良かったです……!」

オールマイト「さて、あとの問題はあつちか」

オールマイトは、大猿優菜を注視した

そして、入り口のヒーローたちも湖へ

大猿優菜を何とかしようと、優斗は奮闘していた

優斗「どうすんだよこれ。ヘル、お前なんか知らないのか？ シン達の事知ってただろ」

ヘル『大猿なら、尻尾を切ればいいわ』

優斗「・・・切って大丈夫なのか？」

ヘル『平衡感覚が慣れるまでイカれるけど、今の状況では最善策よ』

大猿優菜は口から火炎砲を放ってきたが、水の魔法を連写して蒸発させた

優斗「仕方ねえか。でもどうやって切るんだ？ 後ろに回る余裕なんてないぞ」

ヘル『知らないわよ。あんたも超パワーとかないわけ？ 変身とか』

優斗「ねえよ。魔法だけだ」

ヘル『私は手伝えないわよ。いま透明の子を送ってるから』

優斗「どうしたもんかな・・・」

話している間も、大猿優菜は暴れ続けている。しかも、少しずつ中央に向かっていくのだ

このままではヴィランの一人として迎撃されかねない

轟「大丈夫か！」

轟が心配して、こちらまで来てくれたようだ

優斗「正直キツイ！ 手伝ってくれるか!？」

轟「分かった。こいつを凍らせればいいか？」

優斗「足元だけでいい、湖ごと足を凍らせてくれ」

轟「任せろ」

出久「二人とも待って!!」

優斗「?どうした出久」

出久「僕にも手伝わせて欲しい」

優斗「・・・なら足元を凍らせた後、後ろから倒れるようにぶん殴ってくれ」

出久「分かった!」

まず優斗が上空へ注意を引いて、その隙に湖ごと轟が凍らせ、後ろから出久が腕を折りながら殴って前に倒し、優斗が異空間から剣を取り出して尻尾を切り落とした

大猿優菜「ウギャアアアアアア・・・」

大猿優菜の身体はどんどん小さくなり、サルのも毛も消え去って裸の優菜が姿を現した
優菜は氷の地面に倒れこみ、意識は手放されているようで起きて来なかった

出久「ゆ、優菜さん・・・?」

出久が駆け寄ろうとしたが、優斗が先に近寄り、カオスの空間から取り出した毛布でユウナを包み、抱え上げた

轟「・・・大丈夫なのか?」

優斗「慣れるまで歩く事が難しいだろうが・・・まあ、リハビリ次第でどうにでもなる。それより、この事態をどう説明するかを考えただけで頭が痛い」

出久「大きい猿になったのは優菜さんの個性だったりするの？」

優斗「まあ、個性つちや個性だ」

すると、切島が駆け寄ってきた

切島「緑谷あ!! 優菜あ!! 大丈夫か!？」

出久「切島君・・・!」

切島「おう、皆大丈夫そうだな。さっきのでっかい猿は倒しちゃったのか?」

優斗「そこはおいおい説明する。多分、先生たちに先に説明した方がいい」

切島「?そうか」

切島はそう言いながら優菜の顔を覗き込んだ

切島「優菜は寝ちまつてるのか?」

優斗「気絶してるんだ。リカバリーガールのところに連れて行きたい」

切島「そつか。なら、先生たちには説明しとくから、先行つてていいぞ。緑谷も腕折れてるっばいし」

出久「ありがとう。切島くん」

優斗「そういえばオールマイトは?」

切島「オールマイトなら向こうに・・・」

切島はオールマイトの居た場所を指したが、オールマイトがいたところは四方をセメントで固められていた

切島「何だアレ？」

すると、セメントの塊のようなヒーローが近づいてきた

セメントス「君たち、生徒の安否を確認したいからゲート前に集まってくれ。ケガ人の方はこちらで対処するよ」

切島「そりゃそうだ！ラジャツす!!」

切島は入口へ走っていった

すると、入り口と逆側のセメントが崩れ、中からやせこけた姿のオールマイト？が出してきた

オールマイト「ありがとう助かったよ・・・セメントス」

セメントス「俺もあなたのファンなので・・・このまま姿を隠しつつ保、健室へ向かいます。しかしまあ、毎度無茶しますねその子・・・」

セメントスは誰のことを言っているのだろうか。無茶している人が多すぎるのである

オールマイト「ああ、だけどすごい個性だ。優菜君にも助けられた。気絶してるみた

いだけどね」

優斗「・・・オール・・・マイト？」

出久「え、えつとね!?! これはその・・・」

オールマイト「少年、あとで私から説明する」

そうして全員で保健室へ

まず優菜に服を着せ、リカバリガールに診てもらった後ベッドに寝かせた

オールマイト「優菜君はどうですか？状態は」

リカバリガール「見た目よりは良かったよ。少し休んだら動けるさ」

優斗「それじゃあ、その姿の事聞かせてもらいますよ。優菜には俺から話します」

オールマイト「OK分かった。それじゃあどこから話そうか・・・」

説明はバツサリカット。原作見たらわかるからね

優斗「つまり、そのヴィランの攻撃を受けてから、常に筋肉モリモリマツチョマンの

変態にはなれなくなったって訳ですね」

オールマイト「変態はいらないけどね」

優斗「じゃあ、出久とはどういう関係なんだ？随分と入れ込んでるようだが」

オールマイト「それは・・・」

優菜「うーん・・・」

優斗「お、起きたか？」

優菜を揺ると、半目でこちらに視線を送ってきた

優菜「・・・優斗・・・？」

優斗「ああ、今の状況は分かるか？」

優菜「分からない・・・。飛ばされてからどうなった・・・？オールマイトたちは？」

オールマイト「おそらく全員無事だ。ヴィランも撤退した」

優菜「オールマイ・・・ト？」

優斗「本人だ。何で痩せてるかは後で教えてやる」

優菜「・・・分かった。とりあえずスルーしよう」

優菜が起き上がるが、体重移動がまともに出来ず、ベッドから落ちてしまった

優菜「ギフツ」

オールマイト「大丈夫かい!？」

立ち上がるとうとするが、すぐに肘やら膝をついてしまい立てない

優斗「やっぱ立てないか」

優菜の頭に「？」の文字が浮かび続けていると、優斗が抱え上げてベッドに座らせた

優菜「・・・お前なんかした？」

優斗「お前が大猿を制御出来てなかったから、尻尾を切り落とした」

話を聞き、優菜は頭と共に肩を落とした

その拍子にまた落ちかけたが、優斗がすぐに支えた

優菜「自業自得か・・・」

優斗「あんだけ行ける行ける言つといて、暴走したんだから文句ないだろ」

優菜「うん・・・」

後ろに青いフォントの「ズーン」という文字が見えるが、気にせずに優斗が横に座り、自分に持たれかけさせた

優斗「これで倒れられんだろ」

優菜「・・・ありがと」

優斗「それじゃあ話を戻すが・・・」

オールマイトと出久は微笑みながらこちらを見ていた

優斗「あー・・・いいか？」

出久「う、うん。ごめん、大丈夫だよ」

優斗「これから言う事は予想だが・・・出久とオールマイトの個性はよく似てるよな。そこで質問だが、出久の個性はコピーか？」

出久「ううん、違うよ」

優斗「じゃあ、その個性はいつ発現した？」

出久「……」

優斗「少なくとも、小学生とかじゃないだろ。つい最近のはずだ」

優菜「結論を言え。何が言いたいのかわからん」

優斗「はいはい、つまりだ。出久の個性は、オールマイトの個性か？」

出久「えーつと……」

オールマイト「……その通りだよ」

リカバリーガール「いいのかい？言っちゃってしまってる」

オールマイト「言っても言わなくても同じだと思おうし、君達なら周りには言わないかなって思ったからね」

優斗「恐縮です」

優菜「……え、じゃあ出久はオールマイトの息子だったりするの？」

出久「違うよ!？」

オールマイト「私の個性は「ワン・フォー・オール」未来へと受け継がれていく個性だ」

優菜「……出久がその個性を受け継いだってこと？」

オールマイト「そういうこと」

優菜「……というか、これって機密情報だったり……？」

オールマイト「まあ、そうだね」

優菜「・・・代わりと言っちゃなんですが、私の身の上話柄も聞きますか？」

オールマイト「身の上話かい？ いいね、私も聞きたかったんだ」

これまでの経緯を話した

オールマイト「・・・すごいね、にわかには信じられないよ」

出久「最初からもう一回いい？ メモに書いておくから」

優菜「それ癖なの？」

すると、保健室のドアが開き、刑事のような恰好をした男が入ってきた

刑事「失礼します・・・オールマイト久しぶり！」

オールマイト「塚内くん!! 君もこっちに來てたのか!!」

出久「オールマイト・・・! え・・・良いんですか!? 姿が・・・」

オールマイト「ああ! 大丈夫さ! 何故って!? 彼は最も仲良しの警察、塚内直正くんだ

からさ!」

塚内「ハハッ! 何だその紹介。早速で悪いがオールマイト、ヴィランについて詳し

く・・・」

オールマイト「待った待ってくれ。それより・・・生徒は皆無事か!? 相澤・・・イレイ

ザーヘッドと13号は!!」

塚内「……生徒はその彼と彼女以外で軽傷数名、教師二人はとりあえず命に別状なしだ。三人のヒーローが身を挺していなければ、生徒らも無事じゃすまなかつたろうな」

オールマイト「そうか……。しかし一つ違うぜ塚内君、生徒らもまた戦い身を挺した!! こんなにも早く実戦を経験し、生き残り、大人の世界を恐怖を知った一年生など今まであっただろうか!? ヴィランもバカな事をした!! このクラスは強いヒーローになるぞ!! 私はそう確信しているよ」

優斗「まあ、一番やらかしたのはこいつだけど……」

優菜「傷口に塩を塗らないでくれ……」

その後出久に経緯をもう一度言って、メモを取り終えてから教室に戻ろうとしたが、早退扱いにしてもらったので優斗と帰った

もちろん歩けないので車いすを借りようとしたが、優斗に「なくても問題無いだろ」と言われ抱えられて連れ帰られた

明日は臨時休校なので、次回は明後日から

第九十一話（僕のヒーローアカデミアに来た『第五話』よ
り）

「たとえこの足を捨てても（脚とは言っていない）」

二日後・教室

飯田「皆ー!!朝のHRが始まる、席につけー!!」

瀬呂「ついてるよ、ついてねーのおめーだけだ」

飯田も席に着くと、教室の扉が開いた

そこには、ミイラのように包帯ぐるぐる巻きの相澤先生がいた

相澤「お早う」

皆「相澤先生復帰早えええ!!」

相澤先生は一昨日の襲撃で全身の骨を折っていたりしていたんだが・・・

飯田「先生無事だったのですね!!」

麗日「無事言うんかなあアレ・・・」

相澤「俺の安否はどうでもいい、何よりまだ戦いは終わってねえ」

爆豪「戦い？」

出久「まさか・・・」

峰田「mata

ヴィランがー!!?」

全員が怖がる中、相澤先生は一呼吸置き、こう叫ぶように言った

相澤「雄英体育祭が迫ってる！」

皆「クソ学校っぽいのが来たああ!!」

先ほどの沈黙とは打って変わり、教室中に歓声が沸き上がった

芦戸「待つて待つて！ヴィランに侵入されたばつかなのに大丈夫なんですか!!」

相澤「逆に開催することで、雄英の危機管理体制が盤石だと示す・・・って考えらしい。

警備は例年の五倍に強化するそうさ。何より雄英の体育祭は、最大のチャンス。ヴィランごとときで中止していい催しじゃねえ」

峰田「いや、そこは中止しよう？」

出久「峰田君・・・雄英体育祭見たことないの!？」

峰田「あるに決まってんだろ。そういう事じゃなくて」

相澤「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ!!かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した。今は知っての通り規模も人口も縮小し形骸化した・・・そして日本に於いて今「かつてのオリンピック」に代わるのが雄英体育祭だ!!」

百「当然全国のトップヒーローもみませすのよ。スカウト目的でね！」

上鳴「資格習得後はプロ事務所にサイドキック入りが定石だもんな」

耳郎「そつから独立しそびれて万年サイドキックも多いんだよね。上鳴、あんたそーなりそう。アホだし」

上鳴「くっ!!」

相澤「当然名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値も話題性も高くなる。時間は有限プロに見込まれればその場で将来が拓けるのだ。年に一回・・・計三回だけのチャンス、ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ！」

昼休みのみんなのテンションはマックスだった

もちろんあの会話もあった

オールマイイト「ごはん・・・一緒に食べよ？」

麗日「乙女や!!!」

ちゃんと見た後、優斗と一緒に校舎裏へ

優菜の足取りは、フラフラと千鳥足のようになっていた

優斗「一人で歩けるまでは復活したが・・・まだ走れたりは出来そうにないな」

優菜「体育祭までにはリハビリは済ませてみせる」

優斗「なら、さっさと走れるようにならないとな」

優菜「…………リハビリを手伝ったりは…………？」

優斗「…………そんな目で見るな。手伝ってやるから」

優斗が手を取り、歩く練習をした

優菜「でも、こんなことになるなんて夢にも思わなかったな」

優斗「考えなしに大猿になるからだ。もつとなんかあったんじやないのか？」

優菜「…………」

優斗「嫌などこ突かれたら黙るよなお前」

優菜「それより、俺のしつぽさ。また生えたりすんのかな？」

優斗「知るか。ヘルに聞け」

すると二人の間にヘルが現れた

ヘル「呼ばれた気がしたんだけど」

優斗「呼んではない。でも用はある」

ヘル「じゃあ用って何よ」

優菜「しつぽ切っちゃたじゃんか。また生えたりすんのか？」

ヘル「生えない事も無いわよ。ただ、今すぐって事なら難しいわね」

優菜「どういうこと？」

ヘル「まず、尻尾を切られた描写は複数あるわ。まず、ピラフ城で悟空のしつぽはヤ

ムチャに切られたのが最初。次に生えたのは天下一武道会の最中よ。でも、その後すぐに孫悟飯・・・おじいちゃんの方ね。その悟飯によって千切られてしまうの。で、次の天下一武道会までにいつの間にか再生。で、ピッコロ第魔王戦後に神様によって切られてからもう生えていないわね。まあGTは含めてないけど」

優菜「・・・お前がドラゴンボールのファンって事はよく分かったよ」

優斗「今すぐなら難しいってのは、生えるまで待たないといけないってことか？」

ヘル「GTでは、凄い大きいペンチで尻尾の先を掴んで引きずり出すことで生えさせ
たわ」

優菜「なる・・・ほど」

優斗「それするか？」

優菜「・・・やめとく」

優斗「なら一歩でも二歩でも多く歩け」

優菜「・・・ふぐう」

それから一日百回腕立て伏せ、腹筋、スクワット、ランニング10KM+瞑想しまくつ
た

優斗も一緒にやっていたが・・・あくまで補助としてやっていたせいかな。あまり強くなるためのトレーニングとはいかなかった

そして体育祭当日の朝

優菜「さて、行こうか」

優斗「正直、ほぼ元の状態まで調子を戻せるとは思わなかったぞ」

優菜「でもまだ違和感あるんだよな」

優斗「せいぜい頑張る事だな。俺は今日は手伝わんからな」

体育祭控室

飯田「皆、準備は出来てるか!? もうじき入場だ!!」

障子「コスチューム着たかったなー」

尾白「公平を期す為、着用不可なんだよ」

轟「緑谷」

出久「轟くん・・・何?」

轟「客観的に見ても、実力は俺の方が上だと思う」

出久「え!? うつ、うん・・・」

轟「お前オールマイトに目えかけられてるよな。別にそこ詮索するつもりはねえが・・・お前には勝つぞ」

上鳴「おお!? クラス最強が宣戦布告!!?」

切島「急にケンカ腰でどうした!? 直前にやめろって・・・」

轟「仲良しごっこじゃねえんだ。何だって良いだろ」

出久「轟くんが何を思って僕に勝つて言ってるのか……は分かんないけど。そりゃ君の方が上だよ……実力なんて大半の人に敵わないと思う……。客観的に見ても……」

切島「緑谷も、そーゆーネガティブな事言わねえほうが……」

出久「でも……!!みんな……他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕だって、遅れを取るわけにはいかないんだ。僕も本気で、獲りに行く!」

轟「……おお」

優菜「皆、入場だよ。ちゃんと並んで」

二列に並び、体育祭の舞台へ

マスコミ「一年ステージ、生徒の入場だ!!」

会場のスピーカーから、耳がキーンとなるぐらいの音量で司会の声が聞こえた

プレゼントマイク「雄英体育祭!!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!どうさせてめーらアレだろこいつらだろ!!?ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!ヒーロー科!!一年!!!A組だろおお!!」

出久「わあああ……人がすごい……」

飯田「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを發揮できるか……!これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」

切島「めっちゃ持ち上げられてんな・・・なんか緊張すんな・・・！なア爆豪」

爆豪「しねえよ、ただただアガるわ」

プレゼントマイク「B組に続いて普通科C・D・E組・・・！！サポート科F・G・H組もきたぞー！！そして経営科・・・」

という風に次々とクラスが入場し、全クラスが並んだ

ミッドナイト「選手宣誓！！」

観客席にいるヒーローの声が聞こえてくる

ヒーロー1「おお！今年の1年主審は18禁ヒーロー「ミッドナイト」か！」

ヒーロー2「校長は？」

ヒーロー3「校長は例年3年ステージだよ」

常闇「18禁なのに高校にいてもいいものか」

峰田「いい」

峰田よ、真顔で言うのはやめろ

ミッドナイト「静かにしなさい！！選手代表！！1―A爆豪勝己！！」

出久「え〜〜、かっちゃんなの!？」

瀬呂「あれ？あいつは入試2位じゃなかったか？」

B組女子「ヒーロー科の入試な」

優菜「私は目立つの嫌だから降りたの」

出久「そうだったんだ・・・」

爆豪が台に立ち、だるそうにこう言った

爆豪「せんせー・・・」

皆が不安そうに見守る中、爆豪が言った言葉は・・・

爆豪「俺が一位になる」

皆「絶対やると思った!!」

B組男子「調子乗んなよA組オラア!!」

飯田「何故品位を貶める様な事をするんだ!!」

B組女子「ヘドロヤロー!!」

爆豪「せめて跳ねの良い踏み台になってくれ」

爆豪は首を切るジェスチャーをしながら台から降りていった

優菜「・・・」

優斗「お前がした方が良かったんじゃない?」

優菜「もう俺知らん」

ざわつく中、ミッドナイトが目次を進め始めた

ミッドナイト「さーて、それじゃあ早速第一種目行きましょう!!」

麗日「雄英って何でも早速だね」

ミッドナイト「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ!!さて運命の第一種目!!今年は・・・コレ!!」

モニターに映し出されたのは「障害物競走」という文字だった

出久「障害物競走・・・!」

ミッドナイト「計一ークラスでの総当たりレースよ!コースはこのスタジアムの外周約4KM!我が校は自由さが売り文句!ウフフフ・・・コースさえ守れば何をしたらって構わないわ!さあさあ位置につきまくりなさい・・・」

優菜「さあさあ来るぞー」

狭い入口の上にあるレースシグナルがすべて点いた瞬間、ミッドナイトが叫んだ
ミッドナイト「スターーーーート!!」

いざ走ろうとすると、轟が足元を凍らせて動けなかった

優菜「おいおいマジかよ」

抜け出したのはA組の皆や、B組の上位に当たる人たちだった

優斗も、避けていた

優菜「ああ!!」

優斗「先に行かせてもらおうぞ」

優斗は今朝言った通り、助けることなく先へ進んでいった

優菜「やらかした・・・」

狭い入口で凍らせるなんて・・・何て合理的で面倒な!!

しかも、密度が高すぎて氷を割ろうにもかがめない!!

優菜「・・・いつそのこと、腕ぐか」

しかし、体育祭でそんなことしていいのだろうか。学校のイベントで足が無くなるってヤバくないか？他に方法は・・・

優菜「・・・そうだ、脱げばいいんだ」

靴を脱ぎ、上空に飛んでから集団を抜けた

靴の代わりに波紋の呼吸をして、砂利などが足の裏に刺さらないようにした

すると、道にあるスピーカーからプレゼントマイクの声が聞こえた

プレゼントマイク「さあいきなり障害物だ!!まずは手始め・・・第一関門ロボ・インフェルノ!!」

皆に分かりやすく言おう。0ポイントヴィランがいつぱいだった

飛んで行こうと思っただけど、邪魔してくるからちよつとイラつと来た

一体殴り倒してから先に進んだ

他のやつは轟が凍らせたり上から行ったり（俺行けなかったのに・・・）して通って

行つてしまつてゐる

するとまたスピーカーから声が聞こえた

プレゼントマイク「オイオイ第一関門チヨロいつてよ!!んじや第二はどうさ!?落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!ザ・フォール!!」

切り立つた足場を丸い柱の道で繋いだステージを、皆は掴まつて這つて進んで當つた
優菜「うわー飛べなかつたらしんどかつたな」

これも飛んで回避し、次へ

プレゼントマイク「戦闘が一足抜けて下は団子状態!上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進め!!そして早くも最終関門!!かくしてその実態は・・・一面地雷原!!!怒りのアフガンだ!!地雷の位置はよく見りや分かる仕様になつてんぞ!!目と脚酷使しろ!!ちなみに地雷!威力は大したことねえが、音と見た目は派手だから失禁必至だぜ!」

いや・・・これ全部飛ぶだけでいいやん

でも、それは人としてどうなんだろう。あまりにもズル過ぎるのではないだろうか

優菜「・・・最後ぐらい、歩くか」

地面に降り立つと、足元がカチツといった

優菜「・・・あ(察し)」

足元にあつた地雷がドオオオオオオオオオオと爆発した

まあ、せいぜい2m浮いたぐらいだ

優菜「そういえば轟たちは・・・？」

吹っ飛びながら前線を見ると、轟と爆轟が競っていた

優菜「あそこか」

あとは出久だが・・・出久の個性では、張り合うのは厳しいだろう。ならあの二人を越えることを考えよう

そんなことを考えていると、後ろから大きな爆発音が聞こえた

プレゼントマイク「後方で大爆発!!?なんだあの威力!?偶然か故意かー！ー！A組緑

谷爆風で猛追ー!!?つか!!抜いたああああー!!」

出久が先ほどの0ポイントヴィランの装甲に乗って前線へ飛んで行った

優菜「まさか俺が壊した奴の!？」

しかし、爆豪たちが速度を上げて抜かせないようにした

だが、出久は二人の肩に乗り地面に装甲を叩きつけ、地雷を爆発

轟たちの邪魔をしながらも、自分は爆発で前へ

優菜「すつげえ・・・よくできんなあんな事」

そう言いながらも、隅から全力で走って地雷を発動させながら通り抜けた

プレゼントマイク「緑谷間髪入れず後続妨害!!なんと地雷原則クリア!!イレイザーヘッドお前のクラスすげえな!!どういう教育してんだ!」

全力で追いかければ余裕で抜けるが・・・まあ、別に2位でもいいので出久の5Mほど後ろを走った

プレゼントマイク「さアさア序盤の展開から誰が予想できた!?今一番にスタジアムへ帰って来た、その男・・・緑谷出久の存在を!!」

うおおお!!と歓声が湧きたち、俺も二位かゝみたいな顔して入った

優菜「やったじゃんかデク!」

出久「あ、ありがとうございます・・・」

それから次々とゴールしてきたが・・・常闇と優斗がいなかった
というか、入り口以外で優斗を見た覚えがない

優菜「お、来たか」

優斗がゴールしたのは43人目だった

そして予選通過は・・・42人まで

優菜「お前、何してたんだよ。俺より先に行つてたくせに」

優斗「最初の0ポイントヴィランに潰されてた」

優菜「バカらしい・・・」

優菜がほくそ笑んでいると、優斗が怒って掛かってきたので攻撃を受け流したりして十分後

ミッドナイト「予選通過は上位42名!!残念ながら落ちちやつた人も安心しなさい!まだ見せ場は用意されてるわ!!そして次からいよいよ本選よ!!ここからは取材陣も白熱してくるよ!キバリなさい!!!さーて第二種目よ!!私はもう知ってるけどくくく…何かしら!!?言ってるそばからコレよ!!!」

次にモニターに映し出されてのは「騎馬戦」だった

上鳴「騎馬戦…!!」

峰田「騎馬戦…!!」

優菜『峰田は別の想像したな』

蛙吹「個人競技じゃないけど、どうやるのかしら」

ミッドナイト「参加者は2く4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおう!基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど、一つ違うのが…先ほどの結果に従い、各自にポイントが振り当てられる事!」

砂籐「入試みてえなポイント稼ぎ方式か。わかりやすいぜ」

葉隠「つまり組み合わせによって騎馬のポイントが違ってくるぞ!」

ミッドナイト「あんたら私がしゃべってるのにすぐ言うね!!!ええそうよ!!そしてポイ

ントは下から5ずつ！42位が5ポイント41位が10ポイント・・・といった具合よ。
そして・・・1位に与えられるポイントは1000万!!!」

出久「・・・1000万？」

優菜「そうはならんやろ」

優斗「なつとるやろがい」

ミッドナイト「上位の奴ほど狙われちゃう・・・下剋上サバイバルよ!!!」

第九十二話（僕のヒーローアカデミアに來た『第六話』よ
り）

「適任すぎる」

ミッドナイト「上を行く者にはさらなる受難を。雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ、これぞブルスウルトラ！予選通過一位の緑谷君!!持ちポイント10000万!!制限時間は15分。振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、騎手はそのポイント数が表示されたハチマキを装着！終了までにハチマキを奪い合い、保持ポイントを競うのよ。取ったハチマキは首から上に巻くこと。取りまくれば取りまくるほど管理が大変になるわよ！そして重要なのはハチマキを取られても、また騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ！」

百「ということは……」

砂籐「42名からなる騎馬10〜12組がずっとフィールドにいるってわけか……？」

青山「シンド☆」

芦戸「いったんポイント取られて身軽になっちゃうのもアリだね」

蛙吹「それは全体のポイントの分かれ方見ないと判断しかねるわ三奈ちゃん」

優菜『二位のポイントはいくらなんだ？』

ミッドナイト「個性発動アリの残虐ファイト！でも……あくまで騎馬戦!!悪質な崩し目的での攻撃等はレッドカード！一発退場とします！それじゃこれより15分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

すると、早速声をかけられた

切島「優菜！俺と組まねえか？」

優菜「え？」

切島「いや二位だからよ。最初から高いポイントでできるかなって」

優菜「切島くんは、私より仲間になるべき人がいるでしょ」

切島「なるべき人」

優菜「爆豪くんの爆発の耐えられる馬はあなたぐらいでしょう？」

切島「！確かにそうだ！行ってくる！」

という感じで、その後何かと理由をつけて勧誘を回避していると……

出久「君だ！」

優菜「え？」

出久「お願い！僕と騎馬を組んでくれ！」

優菜「（やつと来たか。出久のポイントなら守り抜けば勝てるから待ってたんだ

ぞ。・・・分かった。メンバーは？」

出久「麗日さんと、サポート科の発目さんだよ」

優菜「私の役割は？」

出久「ペルソナで守ってほしい」

優菜「なるほどね・・・わかった、やろう」

そして、全員がチームを決め終わった

プレゼントマイク「シア上げてけ鬨の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!!狼煙を上げる!!!」

とうとう騎馬戦が始まる

騎手はもちろん出久。右後ろを麗日、左後ろを発目が持ち、前を優菜が持った

出久「麗日さん!!」

麗日「っはい!!」

出久「発目さん!!」

発目「フッフ!!」

出久「優菜さん!!」

優菜「はい」

出久「よろしく!!」

気合を入れると、プレゼントマイクが合図を出した

プレゼントマイク「スタート！」

すると早速、B組の鉄哲のチームと葉隠のチームが迫ってきた

鉄哲「実質その争奪戦だ!!」

葉隠「はっはっは!!緑谷くんいったくよー!!」

優菜「まあ来るよね。逃げる？」

出久「もちろん!!」

逃げようとしたことを察知したのか、B組の骨抜くんが個性を使った

骨抜「けっ・・・!!」

地面が沼のようになり、足が沈んでいった

出久「沈んでる!あの人の個性か!麗日さん発目さん!!顔避けて!!」

二人が個性と道具を使うと同時に、出久が発目のバックパックのロケットを使った。

優菜も一緒にジャンプした

鉄哲「飛んだ!?サポート科のか!追ええ!!」

葉隠「耳郎ちゃん!!」

耳郎「わってる」

耳郎のイヤホンジャックが飛んできた

だが、それくらいで同行できると思わないでほしい
優菜「イフリート！」

イフリートを呼び出し、イヤホンジャケットを弾いた

耳郎「優菜の個性か・・・！」

優菜「それくらいじゃ、うちのハチマキはとれないよ」

出久「すごいよ！僕らに足りてなかった防御力・・・それを補って余りある全方位中距離防御!!すごいや優菜さん！」

優菜「どうせならあと二人ぐらい出しておこうか？」

麗日「着地するよ！」

それぞれ個性やメカでしっかり着地。優菜も出久に衝撃が伝わらない様に、足裏から気を放出して着地した

発目「どうですかベイビー達は!!可愛いでしょう!!可愛いは作れるんですよ!!」

出久「機動性バツチリ!すごいよベイビー!発目さん!!」

発目「でしょ!?!」

麗日「浮かしとるからやん・・・」

優菜『ベイビーってメカの事・・・?』

その頃、葉隠たちは・・・

葉隠「私達も追うよ！さア次郎ちゃんリベンジ・・・」

砂籐「つーかおい！葉隠!!ハチマキねえぞ!!」

葉隠「はっ?!?!いつの間にくく!!」

その後ろにいた物間のチームに、鉢巻を取られてしまっていた

物間「漁夫の利」

という感じで他のチームも戦っている中、スピーカーからまたあの人の声が聞こえた
プレゼントマイク「さくく!まだ二分も経ってねえが早くも混戦混戦!!各所でハチマキ奪い会い!!1000万を狙わず2位く4位狙いのもって悪くねえ!!って、2位は一位
んと同じか!」

峰田「アハハハ!奪い会い・・・?違うぜこれは・・・一方的な略奪よお!!」

出久「障子くん!?!アレ!?!一人!?!騎馬戦だよ!?!」

峰田のチームは障子が一人で馬になり、触手の間にある水かきの様な膜で背中を囲んでハチマキを取られないようにしていた

優菜「あれアリなの・・・?」

出久「峰田くんからハチマキを取るのには難しそうだね・・・」

優菜「じゃあ、いったん距離とろうか」

後ろに下がろうとすると、足が地面にくっついたように動かなかった

足元を見ると、くつついて取れない峰田のモギモギがあった

麗日「何!? 取れへん! 峰田君の!! 一体どこから・・・」

峰田「ここからだよ緑谷あ・・・」

触手の間からこちらを睨むように見てくる峰田の顔が見えた

優菜『まあ、傍から見ればハーレムだしな。妬むのも無理ない』

出久「なアア!? それアライイ!!」

ミッドナイト「アリよ!」

優菜「足斬れば逃げられるかな?」

出久「斬らないで!」

すると峰田の横から何かが飛び出して出久の鉢巻を掴もうとしたが、イフリートがす

ぐに弾いた

出久「わっ!!」

蛙吹「さすがね緑谷ちゃん・・・!」

出久「蛙吹さんもか!! すごいな障子君!!」

蛙吹「梅雨ちゃんと呼んで」

優菜「じゃあ、今のは舌ね。斬り落とすとこだった・・・」

プレゼントマイク「峰田チーム、圧倒的体格差を利用し、まるで戦車だぜ!」

優菜「でも、私達に目を付けたのは間違いだったわね」

優菜がそう言うのと、モギモギはくつつかなくなり、出久チームは逃げられるようになつた

麗日「あれ？ 峰田君の取れた！」

峰田の玉は、時間が経つとくつつかなくなる。なので、クロノスに時間を加速させておいた

途端に爆豪のチームもこちらに攻撃してきた。というか、爆豪だけ飛んできた

爆豪「調子乗ってんじゃねえぞクソが！」

出久に爆発で目くらましをし、鉢巻を取ろうとしたが

優菜「カオス！」

少し遠いイフリートを呼び戻すより、新しく出した方がいいと判断し、カオスと呼び出して盾にした

カオス『この扱いは酷くないか・・・？』

優菜『すまん。後でお詫びするから』

爆豪「何だこいつはよオ！」

プレゼントマイク「おおおおお!!? 騎馬から離れたぞ!? 良いのかアレ!!?」

爆豪に瀬呂のテープがくつつき、戻っていった

ミッドナイト「テクニカルなのでオツケー!!地面に足付いたらダメだったけど!」
 プレゼントマイク「やはり狙われまくる一位と猛追を仕掛けるA組の面々、共に実力者揃い!現在の保持ポイントはどうなってるのか……。7分経過した現在のランクを見てみよう!：：：あら!!?ちよつと待てよコレ：：：!A組緑谷以外パットしてねえ：：つてか爆豪あれ．．!?」

現在のポイントは以下の通りだ

- 1 ? 緑谷チーム10000325P
- 2 ? 物間チーム1350P
- 3 ? 鉄哲チーム1125P
- 4 ? 拳籐チーム685P
- 5 ? 轟チーム615P
- 6 ? 鱗チーム195P
- 7 ? 爆豪チーム0P
- 8 ? 小大チーム0P
- 9 ? 角取チーム0P
- 10? 峰田チーム0P
- 11? 心操チーム0P

12? 葉隠チームOP

物間「単純なんだよA組」

優菜「爆豪くん、取られてやんの」

爆豪「んだためエコラ！返せ殺すぞ!!」

芦戸「やられた！」

爆豪チームの皆があたふたし始めた

どうやらあの物間とかいうヤツは順調にポイントをためて、現実の進出を狙ってるよ
うだ

物間「ミッドナイトが第一種目といった時点で、予選段階から極端に数を減らすとは
考えにくいと思わない？だからおおよその目安を仮定し、その順位以下にならないよう
予選を走ってさ。後方からライバルになる者たちの個性や性格を観察させてもらった。
その場限りの優位に執着したって仕方ないだろう？」

優菜『あながち間違いとも言えんな。まあ、正解とも言えんが』

切島「組ぐるみか・・・！」

物間「まあ全員の総意ってわけじゃないけど良い案だろ？人参ぶら下げた馬みたい
な仮初の頂点を狙うよりさ・・・。あ、あとついでに君有名人だよな？「ヘドロ事件」の
被害者！今度参考に聞かせてよ。年に一度ヴィランに襲われる気持ちってのをさ」

爆豪「切島・・・予定変更だ、デクの前にこいつら全員殺そう・・・!!」

爆豪チームが物間をターゲットにし、こちらから目が逸れた

優菜「こつちからしたら一石二鳥だね」

出久「うん、逃げ切りがやりやす・・・」

すると、満を持してあいつがいるチームが目の前に立ちふさがった

プレゼントマイク「さア！残り時間半分を切ったぞ!!」

出久「そう上手くは・・・行かないか」

立ちふさがったチームは、今まで鳴りを潜め、確実に出久のハチマキを取りに来ていた

そのチームとは

轟「そろそろ、奪るぞ」

轟率いる、正直一番相手をしたくないチームだった

プレゼントマイク「B組隆盛の中果たして1000万ポイントは誰に頭を垂れるのか!!!」

轟のチームは飯田、上鳴、八百万、轟のチームであり、優菜にとって最も闘いたくない相手だ

なぜなら、こいつ等の個性がまあ厄介なのである

優菜「クロノス、戻って!!」

後ろを守らせていたクロノスを消し、かわりにガイアを出した

出久「時間はもう半分！足止めないでね！仕掛けてくるのは・・・」

轟「飯田、全身」

飯田「ああ！」

轟「八百万、ガードと伝導を準備」

百「ええ！」

轟「上鳴は・・・」

上鳴「良いよ分かってる!!しっかり防げよ・・・」

出久「一組だけじゃない！」

轟が何をしたかと言うと、上鳴の個性で周りに放電、そして動けなくしようとしたのである。それを察知し、電撃が等倍のガイアを呼んで、イフリートとカオスにも守ってもらった

轟「残り6分弱。後は引かねえ、悪いが我慢しろ」

障子「ぐっ!!」

イフリート「うおっ!?!」

プレゼントマイク「何だ何した!?!群がる騎馬を轟一蹴！」

相澤「上鳴の放電で確実に動きを止めてから凍らせた……。流石というか……。障害物競走で結構な数に避けられたのを省みてるな」

プレゼントマイク「ナイス解説!!」

優菜「うっそ、ここで・・・!?」

優菜は片膝をついたが、騎馬を崩さない様にカオスに支えてもらい。すぐに立ち上がった

優菜「氷は勘弁してほしいな・・・」

轟は、今の攻撃で動けなくなった騎馬からハチマキを奪い取っていた

拳籐「あーハチマキ! くっそおお!」

轟「一応貰っとく」

マズイ、周りの騎馬が動けなくなるだけじゃない。半径5メートルほどの円を氷で作られていた。つまり、サシのフィールドを作られてしまった

そこから逃げようと、出久がバックパックを使おうとしたが。エンストしたかのように動かなかった

出久「バックパックがイカレタ!!?」

発目「ベイビー!!! 改善の余地アリ」

麗日「強すぎるよ! 逃げきれへん!」

けん制しようと瀕死のカオスを呼び出し、攻撃を仕掛けた

優菜「カオス！」

しかし、八百万の個性で作られた板でガードされた

優菜「創造……！厄介だね」

轟「なあ優菜」

優菜「なに？こつち今頭パンクしそうなんだけど」

轟「クロノスは……だったか？アイツならまだ元気なんじゃないのか？」

優菜「何の話？敵に塩贈る気？」

轟「違うそうじゃない。なんで元気なクロノスじゃなく、疲れてるカオスを使つたん

だ？」

優菜「……そんなの気にしてたら頭禿げるよ？」

轟「クロノスは、上鳴の個性を使う前に消しただろ。つまり、電気が弱点なのか？」

優菜「……さあね」

轟「ついでに言うアレだろ。イフリートは氷が弱点だな？アイツを凍らせた瞬間、お前も片膝をついた。そうだな？」

優菜「……だからなに？というか、よく名前覚えてるね。でも、勝利の糸口が見えたと思つたなら残念。こつちだって切り札は残してるのよ」

まだまだ元気なイフリートを呼び出し、頼みごとをした

優菜「イフリート、右手の部分代わりに持つてくれ」

そして瀕死になりかけのカオスを戻し、カオスの空間に入れておいた銃を出すした
出久「え？それって大丈夫なの!？」

優菜「これは自分に使うの。ちよつと揺れるかもだから気をつけてね」

銃口をこめかみにあて、引き金を引いた

その瞬間、優菜の身体を風が纏った

優菜「お願い、一発逆転できる人!!」

？「我は汝、汝は我・・・」

出久たちの上に青くも淡い水色の様なオーラを纏ったペルソナが現れた

それを、会場にいる全ての人が目を丸くしながら見ていた

優菜『よし、気を取られてるな。これですこしでも時間を・・・』

しかし思惑通りとはいかず、轟チームがこちらに詰めてきた

優菜「ゴメン！時間なさそう!!」

ミヅノハメ「・・・わかったわ。私はミヅハノメ・・・日本神話の氷神よ」

優菜「ありがとう。じゃあ早速お願い!!」

新しく加入したミヅハノメの力は、轟、上鳴、八百万の個性に対してまさに特攻とも

言える力を持っていた

上鳴の攻撃は絶縁体の水によって防ぎ、轟の水も同等の力で防ぐこともでき、八百万の創での攻撃にも氷の粒手を当てて防いだりと・・・

妙にこの場面に合いすぎている能力のペルソナだと疑問に思ったが・・・いつも起こっていた不運の裏返しと考えよう

優菜『でもどうする？せめて氷のフィールドから出ないと厳しいぞ。ここから出られれば、出来ることは山ほどあるのに・・・』

それでも耐え続け・・・五分後

プレゼントマイク「残り時間約一分!!轟フィールドをサシ仕様にし・・・そしてあつちゅーまに10000万奪取!!!とか思ってたよ五分前までは!!緑谷、何とこの狭い空間を五分間逃げ切っている!!」

優菜「そろそろしんどいね・・・」

轟に対し、フィールドの逆側に常に位置するように動いて寄せ付けさせなかった

水を溶かして逃げることも試みたけど、すぐに近づかれて離れ、溶かした所を凍らされる・・・という事を繰り返して

一気に溶かそうとすると、イフリートを数秒出さなければいけない。たった数秒でも、氷の攻撃をされればこちらにダメージが入ってしまう。しかもそれでバランスが崩

れようものなら大事だ

今「なら高火力で溶かせばいいんじゃないかよ」とか思った奴いる？それしたら、他の騎馬への攻撃レベルになってしまいうから出来ないんだ

優菜『せめて、現状維持を続けるしかないか・・・』

するとまた上鳴が電撃を出してきたが、こちらも氷で防いだ

上鳴「ウエーイ・・・」

優菜『よし、ウエイ化した！』

一旦大丈夫と安堵してしまった瞬間、氷の横から轟たちが飛び出してきた

優菜「ガイア!!」

ミヅハノメは自分達から離れてしまっているため、ガイアを呼びだし受けようとしたが、八百万の創造で作られた棒によってどけられてしまった

優菜『そんな力あんの!?!』

これですぐ出せるのはイフリート、アリエル、クロノス、カオス、ヘル

イフリート（氷）アリエル（物理）クロノス（電気）ヘル（氷）という感じでもれなく弱点である攻撃があるので、カオスを出した

カオスは守る様に目の前に立ちふさがったが、轟チームは気にせずこちらに突っ込もうと走って来ていた

飯田「皆、残り一分弱・・・この後俺は使えなくなる。頼んだぞ」

轟「飯田？」

飯田「しつかり掴まっけていろ、奪れよ轟くん！トルクオーバー！」

何をしようというのか、飯田のエンジンがドルドルと音を立てて煙を出していた

そして次の瞬間、轟たちは視界から消えてしまった。周りを探すと、真後ろで逃げようと走る轟チームがいた

出久「は？」

優菜『何をした!?見えなかったぞ!!』

何もしていないという事は絶対でない。まず、ハチマキを確認した。察しの通り、出

久の頭にハチマキは無かった

優菜「嘘！取られた!？」

プレゼントマイク「なー!!?何が起きた!!?速っ！速ー!!」

轟「飯田！何だ今の・・・」

プレゼントマイク「飯田、そんな超加速があるんなら予選で見せろよー!!!」

飯田「トルクと回転数を無理やり上げ爆発力を生んだんだ。反動でしばらくするとエンジンストするがな。クラスメートにはまだ教えてない裏技さ」

プレゼントマイク「ライン際の攻防！その果てを制したのは・・・」

轟チームがこちらに向き直し、飯田が真剣な顔でこちらを見た

飯田「言つたら緑谷くん、君に挑戦すると!!」

プレゼントマイク「逆転!!轟が1000万!!そして緑谷急転直下の0ポイント!!」

これはマズい。正直、取られると思つてなかつた。こうなるならクロノス出して時間止めればよかつた……。もう後の祭りだな

優菜『ペルソナを全員出して取りに行くか?でも、今の体力で持つのか……。?』

出久「突っ込んで!!」

麗日「よっしゃ!取り返そうデクくん!!絶対!!!」

発目「正念場ですね……。!!」

……。皆は、ここが一番の頑張りどころと見たようだ。だとしたら、俺だけ本気を出さないというのは、どうなんだ?

優菜「……。やるしかないね」

出久「皆……。!!」

ペルソナを全員出し、他のチームのハチマキを取らせに行つた

そして自分たちは轟の所へ

どうにかして、1000万ポイントを取り返さなければ……。セーフラインが分から

ない以上、全部取りに行く

残り20秒・・・

轟チームが逃げられない様に舞台の隅で追い詰めた

轟VS出久の取り合いになるようにし、騎馬の俺達は逃げられない様にけん制しあっていた

なんとか取ってくれと願いを込めていると、とうとうが出久が轟の防御を崩し、轟の持っていたハチマキを取り上げた

出久「ああ!!とった!!とったああ!!」

優菜『とった!?!』

出久が持っていたハチマキを確認し、歓喜した。しかし、そのハチマキに描かれているポイントを見て驚愕した

プレゼントマイク「残り17秒!こちらも怒りの奪還!!」

発目「待つて下さいそのハチマキ・・・違いますか!?!」

そのハチマキに書かれていたポイントは「70」だった

出久「やられた・・・!!」

飯田「轟くんしっかりしたまえ!!危なかったぞ!」

八百万「万が一に備えてハチマキの位置は変えてますわ!甘いですわ緑谷さん!」

優菜「マジか・・・」

出久「優菜さん・・・ごm」

優菜が悔しさに顔をしかめているのを見て、出久が謝ってきたが・・・

優菜は突然にやけだした

優菜「なんちやつて☆(セル風)」

出久「え？」

すると、アリエルたちが戻ってきた

アリエル「取ってきました」

優菜「ありがと」

取れたハチマキは一つだった。しかし本当のことを言うと、皆を散開させたのは揺動に過ぎない。このハチマキを取るためだけの揺動に

八百万「取ってきた？」

轟「やられた!!」

轟は自分の持っているハチマキを確かめ、絶叫した

優菜「忘れてるみたいだから言っとくんだけどさ。私のペルソナって、大きさも自由自在なのよね」

麗日「もしかして、そのハチマキって・・・!!」

ハチマキのポイントが皆に見えるように、出久に返して頭に巻かせた

そこに描かれたポイントは「10000325」

出久チームのハチマキだった

麗日「逃げよう！」

轟「皆、すまない！」

飯田「取り返そう!!」

轟チームが取り返そうとこちらに走ってきた

優菜「ミツハノメ！」

だが、氷の壁を作り進行を阻んだ

優菜「思えば作戦は遠回りした感じだったし、もつと簡単に勝つ方法はあったと思うけど」

プレゼントマイク「そろそろ時間だカウントいくぜエヴィバデイセイハイ!10!
9、8、7、6、5、4、3、2、1」

優菜「最後に立っていればそれでいい！」

プレゼントマイク「タイムアップ!早速上位4チーム見てみようか!!おお!?1位の座を奪還!1位緑谷チーム!!2位爆豪チーム!!三位鉄て・アレエ!?オイ!!!心操チーム!!?
4位轟チーム!!以上4組が最終種目へ・・進出だあああー!!」

出久を降ろし、全員で勝利を喜び合った

出久「・・・」

出久はずっと目から滝のように涙を出して泣いていたが・・・

優菜「そこまで泣かなくてもいいだろ・・・」

プレゼントマイク「1時間ほど昼休憩挟んでから午後の部だぜ！じゃあな!!! オイ、イ

レイザーヘッド飯行こうぜ・・・！」

相澤「寝る」

プレゼントマイク「ヒュー！」

鉄哲「・・・何が起きたんだ？いつの間にか0ポイントになって終わったぞ・・・」

塩崎「あの小人の方のポイントけがらわしい取り方をしてしまった罰でしょうか・・・」

どうやら鉄哲チームは峰田のポイントを隠れて取っていたらしい・・・。その所為か

は分からんけどな

蛙吹「悔しいわ。三奈ちゃんおめでとう」

芦戸「爆豪、轟の氷対策で私入れてくれてただけで実力に見合ってるのかわかんない

よ」

麗日「飯田君あんな超必持ってたのズルイや！」

飯田「ズルとはなんだ!! あれはただの謝った使用法だ！」

上鳴「ウエーイ（楽しかった）」

飯田「どうにも緑谷くんとは張り合いたくてな」

麗日「男のアレだなく……ていうかその緑谷くん。デク君は……どこだ？」

優菜「なんかさつき轟くんといったけど……」

その後の昼食中……峰田が女子組十優菜についてきた優斗に話しかけてきた

峰田「午後は女子全員ああやって応援合戦しなきゃいけないんだって！」

峰田は歩いていくチアリーダーたちを指しながらそう言ってきた

八百万「聞いてませんけど……」

峰田「信じねえのも勝手だけどよ……相澤先生からの言伝だからな」

峰田はそう言い残し、歩いて行った

優斗が何か聞きに着いていったが、気にせずに昼食を終えた

ということ、更衣室

八百万「チアリーダーの服、全員分出しましたわ」

優菜「え？」

昼食の椀や皿を返していると「女子集まれ」と呼ばれたのでついてきたのだが……

優菜「……戻っていいかな？」

八百万「ダメです」

葉隠「やろう！」

A組女子皆の押しに負け、優菜もチアリーダーの服を受け入れた

優菜「・・・どうなっても知らないからね」

優菜のしつぽは、切れてはいるが切り株のように根本は残っているので、皆に見えない様に着替えた

そして騎馬戦をしたに戻ってきた。観客席には、先ほど歩いていたチアリーダーたちが技を披露していた

プレゼントマイク「最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ！あくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクレーション種目も用意してんのさ！本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ・・・ん？アリヤ？」

相澤「なーにやってんだ・・・？」

プレゼントマイク「どーしたA組!!？」

観客席からはチアリーダーの格好をしている自分たちを笑うような声が聞こえてくる

八百万「峰田さん上鳴さん!!騙しましたわね!？」

優菜「だから言ったじゃん・・・」

二人の横にはグッジョブと親指を立てた優斗の姿があった

優菜「アリエル、アレ撃っていいよ」

葉隠『殺気を・・・感じる・・・!?!』

八百万「何故こうも峰田さんの策略にハマってしまったの私・・・」

耳郎「アホだろアイツら・・・」

葉隠「まあ、本戦まで時間空くし張りつめててもシンドイしさ・・・いいんじゃない

!!? やつたら!!」

皆が峰田たちに呆れてる中、葉隠は乗り気なようではしやぎだした

蛙吹「透ちゃん好きね」

芦戸や蛙吹が楽しんでるのを壁に寄りかかりながら見ていると、観客席から何か落

ちてきた

それは優斗だった。しかも、カメラをもってこちらを連写していた

優菜「え?」

優斗「よし!」

優斗は空中で一回転し、足で着地したと同時に会場の外に逃げていった

訳が分からず数秒唖然としていたら、優斗の目的がチア姿の自分の写真という事に気

付き、消させるために追いかけていった

ようやく捕まえ、カメラを取り上げて写真データを消した

優菜「勝手に撮んな!!」

優斗「頼んでも撮らせてくれないだろ!？」

優菜「当たり前だバカ!!」

口喧嘩をしていると、最終種目に進出している生徒は会場に入場するようにというアナウンスが流れた

優菜「・・・話は後にするぞ。これは返すから、勝手に撮るのはやめろ」

優斗「チツ」

優菜「聴こえる様に舌打ちすんな」

優斗は観客席、優菜は会場に戻ると、プレゼントマイクの声が聞こえた

プレゼントマイク「さアさア皆楽しく競えよレクリエーション!それが終われば最終種目、進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式!!一対一のガチバトルだ!!」

切島「トーナメントか・・・!毎年テレビで見てた舞台に立つんだあ・・・!」

芦戸「去年トーナメントだっけ」

芦戸の疑問に、瀬呂が答えてくれた

瀬呂「形式は違ったりするけど、例年サシで競ってるよ」

優菜『じゃあ、騎馬戦より数段やりやすいな』

ミッドナイト「それじゃあ組み合わせ決めのくじ引きしちゃうわよ!組が決まったら

レクリエーションを挟んで開始になります！レクに関して進出者は参加するもしないも個人の判断に任せるわ。息抜きしたい人も温存したい人もいるしね。んじゃ一位チームから順に……」

尾白「あの……！すみません、俺辞退します」

突然、彼は手を上げてそう言い出した

出久「尾白くん！なんで……!?せつかくプロに見てもらえる場なのに!!」

尾白「騎馬戦の記憶……終盤ギリギリまで、ほぼボンヤリとしかないんだ。多分奴の個性で……。チャンスの場だったのは分かってる、それをふいにするなんて愚かな事だったのも……！」

出久「尾白くん……」

尾白「でもさ！皆が力を出し合い争ってきた座なんだ。こんな……こんなわけわからないままそこに並ぶなんて……俺は出来ない」

葉隠「気にしすぎだよ！本戦でちゃんと成果を出せばいいんだよ！」

芦戸「そんなん言ったら私だって全然だよ!」

尾白「違うんだ……！俺のプライドの話さ……俺が嫌なんだ。と何で君らチアの格好してるんだ……！」

庄田「僕も同様の理由から棄権したい！実力如何以前に……何もしてない者が上が

るのは、この体育祭の趣旨と相反するのではないだろうか！」

切島「なんだこいつら・・・!!男らしいな！」

プレゼントマイク「なんか妙な事になってるが・・・」

相澤「ここは主審ミッドナイトの采配がどうなるか・・・」

ミッドナイト「そういう青臭い話はさア・・・好み!!!庄田、尾白の危険を認めます

！」

優菜「青山君は？同じ騎馬だったよね？」

青山「僕はやるからね？」

ミッドナイト「繰り上がりは拳籐チームだけど・・・」

拳籐「そういう話で来るんなら・・・ほぼ動けなかった私らよりアレだよな？な？最

後まで頑張って上位キープしてた鉄哲チームじゃね？馴れ合いとかじゃなくてさフ

ツーに」

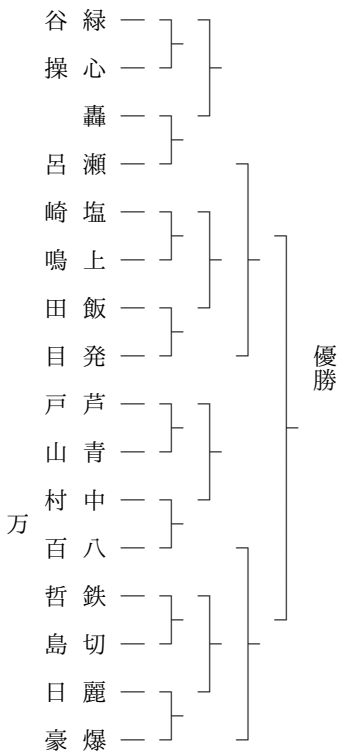
鉄哲「お・・・おめエらア!!!」

鉄哲が感涙を流しながら拳籐に抱き着こうとしたが、それを嫌がつて個性で手を大き

くして遠くへ離れた

ミッドナイト「というわけで鉄哲と塩崎が繰り上がって16名!!組はこうなりました

！」



優菜「・・・お手柔らかにね」
 八百万「負けませんわよ」
 その後、ストレッチなどして休憩。トーナメントへの準備を進めた

第九十三話（僕のヒーローアカデミアの軌跡『第七話』より）

「ペルソナ連発」

セメントス「オツケーもうほぼ完成」

トーナメントの舞台をセメントス先生がセメントで作ってくれた

プレゼントマイク「サンキューセメントス！ハイガイズ、アアユウレディ!?色々やってきましたが!!結局これだけガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ!ヒーローでなくともそんな場面ばかりだ!わかるよな!!心・技・体に知恵意識!!総動員して駆け上がれ!!」

出番が後半のため、観客席でそれまでの試合を見ることにした

そして当然のように優斗は隣に座ってきた

優斗「勝てそうか？」

優菜「ここまで来て負けるわけにはいかないでしょ」

優斗「じゃあ負けたら罰ゲームな」

優菜「なんでそうなる・・・？」

すると、舞台の上に二人の生徒が現れた

プレゼントマイク「一回戦!!成績の割に何だその顔、ヒーロー科緑谷出久!!対ごめんまだ目立つ活躍なし!普通科心操人使!!ルールは簡単!相手を場外に落とすか行動不能にする。あとは「まいった」とか言わせても勝ちのガチンコだ!!ケガ上等!!こちらら我らがリカバリーガールが待機してっから!!道徳倫理は一旦捨ておけ!!だがまあもちろん命に関わるよーなのはクソだぜ!!アウト!ヒーローはヴィランを捕まえる為に拳を振るうのだ!」

普通科の心操・・・始めて見る奴だな

優菜「何か知ってる?」

優斗「知らん。でも名前にアレだろ。洗脳とか」

優菜「・・・だとしたら出久はどうやって勝つの?私らは波紋で一応無効化できるけど」

優斗「何かしら制限はあるだろ。それ次第では勝つんじゃないか?」

プレゼントマイク「そんじや早速始めよか!!」

プレゼントマイクの始まりの掛け声が始まった

プレゼントマイク「レディイイイイ」

どちらから動くのかと二人を凝視していると、心操が出久に何かを言っているようだ
プレゼントマイク「スタート!!」

それに反応し、出久は何かを叫びながら一歩踏み出し固まった心操「俺の勝ちだ」

尾白「ああ緑谷出久折角忠告したつてのに!!」

優菜『尾白・・・何か知ってるのか?』

プレゼントマイク「オイオイどうした大事な初戦だ盛り上げてくれよ!? 緑谷開始早々ー完全停止!? アホ面でビクともしねえ!! 心操の個性か!!?」

麗日「デクくん・・・!!」

優斗「ほらやっぱり」

優菜「マジに的中?」

スピーカーからは想像だにできなかったといわんばかりの声で、プレゼントマイクが叫んでいた

プレゼントマイク「全つつつ然目立ってなかったけど、彼ひよつとしてやべえ奴なのか!!」

相澤「だからあの入試は合理的じゃねえって言ったんだ」

プレゼントマイク「ん? 何?」

相澤「二人の簡単なデータだ。個人戦になるからまとめて貰つといた。心操あいつ、ヒーロー科実技試験で落ちてる。普通科も受けてたのを見ると、想定済みだったんだろ

う。アイツの個性は相当に強力な物だが、あの入試じゃそりゃポイント稼げねえよ」

心操が出久に何かを命令し、出久は振り向いて場外へと歩いて行った

プレゼントマイク「ああー！緑谷！ジュージュン！！」

優菜「どうやって抜け出すと思う？」

優斗「自傷とか？」

優菜「確かに、洗脳から抜け出すっていったらそれだよな」

出久はあと一歩で場外という所で個性を暴発させ、指を一本犠牲にすることによって踏みとどまった

プレゼントマイク「これは・・・緑谷とどまったああ!!？」

尾白「すげえ・・・無茶を・・・！」

心操に向かって出久が近づいていく

近づいてくる出久に対して様々なことを言っているのは見えるが、内容までは分からない

こんなことなら、ドラゴンボールの18年間で読唇術でも覚えるんだった

そんなことを言っている間に、出久は心操の眼前までたどり着き、柔道の掴み合いのように服を思いつきり掴んだ

それに驚いた心操に、咄嗟に顔面を殴られるが気にせず、場外へ押し出そうと体当た

りした

しかし負けじと体制を崩そうとし手を出した

その腕を掴み、大声を上げながら出久は一本背負いを食らわせた

倒れた心操の足は、場外へ出ていた

ミッドナイト「心操くん場外!!緑谷くん二回戦進出!!」

プレゼントマイク「イヤハ！初戦にしちや地味な戦いだつたが!!とりあえず両者の健闘を称えて、クラッププアハンズ!!」

会場中から出久たちに拍手が送られた

それから部隊を整えて次の試合へ

プレゼントマイク「お待たせしました!!続きましてはくこいつらだ！優秀!!優秀なのに拭いきれぬその地味さは何だ！ヒーロー科瀬呂範太!!対3位4位の同じくヒーロー

科轟焦凍!!スタート!!」

瀬呂は開始と同時にテープを轟にくつつけた

おそらく即場外を狙つての事だろう

プレゼントマイク「場外狙いの早技!!この選択はコレ最善じゃねえか!?!正直やつちまえ瀬呂ー!!!」

しかし、轟はものともせず個性をつかった

優斗『これやべいな。伏せとこ』

優菜『何してんだ優斗？』

キインと空気が凍った様な音がしたと思ったたら、目の前が水色でいっぱいになった

優斗「でかすぎだろ・・・」

轟は個性を使い、巨大な氷塊を生み出した。その氷塊は、スタジアムに蓋をするように広がり、遂にはスタジアムの外へはみ出した

瀬呂「やりすぎだろ・・・」

瀬呂の身体は氷塊に飲み込まれており、ガタガタと震えていた

ミッドナイト「・・・瀬呂くん・・・動ける？」

瀬呂「動けるはずないでしょ・・・痛ええ・・・」

ミッドナイト「瀬呂くん行動不能!!」

ヒーロー「ど、どんまい・・・」

一人のヒーローがそう言いながら手を叩くと、会場中に伝染していき「どんまいい、どんまいい、どんまいい」と瀬呂を慰めるような言葉が鳴り響いた

優斗「まさかここまでですとはな・・・。優菜は大丈夫k」

隣に目をやると、そこに数秒前まで居た優菜の姿はなかった

優斗「あれ？優菜？」

辺りを見回すと、氷塊に頭が埋もれた優菜を発見した
優斗「優菜!？」

駆け寄ろうとすると、頭の周りの氷が溶けそのまま落下してきた

麗日「優菜さん!?なんでそんな濡れとるん・・・?」

優菜「気にしないで、ちよつと氷漬けにされただけだから」

階段を濡らしながら、優斗の席へ戻っていった

ミッドナイト「轟くん2回戦進出!!」

プレゼントマイク「ステージを乾かして次の対決!!B組からの刺客!!綺麗なアレにはトゲがある!?!塩崎茨!対スパークキングギリングボーイ!上鳴電気!!」

塩崎「申し立て失礼いたします。刺客とはどういう事でしょう。私はただ勝利を目指しここまで来ただけであり・・・」

プレゼントマイク「ごっ、ごめん!!」

上鳴「B組にもこういう感じいるのね」

プレゼントマイク「すっ、スタート!!」

先ほどの出久と心操の会話を聞けなかったので、今度は舞台の近く目に見えないほど小さい穴をあけて、そこから会話を聞いてみた

上鳴「体育祭終わったら飯とかどうよ?俺でよけりや慰めるよ。多分この勝負、一瞬

で終わっから」

上鳴が電撃をくわらせようと体に電気を纏わせた

しかし、地面から生えた塩崎の個性による茨に絡めとられ、動けなくなってしまうた
プレゼントマイク「瞬殺!!」

しかも茨は本人から切り離されているため、どれだけ電流を流しても無駄である
そして、上鳴は電撃を流しすぎて例のウエイ状態になった

上鳴「ウエ……」

プレゼントマイク「あえてもう一度言おう！瞬・殺!!!」

ミッドナイト「2回戦進出塩崎さん！」

塩崎「ああ……与えられたチャンス無駄にせずに済みました……」

切島「相性があるからなア。そん中で上手く立ち回ればまた良かったが……」

障子「焦ってぶっぱなしだったな……」

麗日「……!ん?」

麗日は横でぶつぶつ話す声が気になり、そちらを見るとメモを凝視しながら書いてい
る出久がいた

出久「上鳴君の個性も強力なハズだけど……塩崎さんは入試で4位の実力者……ツ
ルカシンリンカムイと同じ様なものかなやっぱり拘束系は強いなあ破られてるのあま

り見ないしあの無数のツルを避けつつ間合いを詰めるのは無理だから拘束を引きちぎったりとか力任せな対策しかないけど・・・ああでもそれをさせない為にまず手を縛りにくるよなうーん」

麗日「終わってすぐなのに先見越して対策考えてんだ？」

出久「ああ?!いや?!一応・・・ていうかコレはほぼ趣味というか・・・せつかくクラス外の凄い個性見れる機会だし・・・あ!そうそうA組の皆のもちよこちよこまとめてるんだ。麗日さんのゼログラビティも」

麗日「デクくん会った時から凄いけど・・・体育祭で改めてやつば・・・やるなアツて感じだ」

プレゼントマイク「さアーどんどん行くぞ、頂点目指して突っ走れ!!」

ミッドナイト「ザ・中堅って感じ!?!ヒーロー科飯田天哉!対サポートアイテムでフル装備!!サポート科発目明!!」

ヒーロー1「どんな戦いになるんだ・・・?」

会場の全員が沸き上がりながら、飯田の服装に疑問を抱いた

ヒーロー2「つーか何だアリヤ・・・飯田もサポートアイテムフル装備じゃねえか!?!」

飯田は戦隊ヒーローの小道具のような装備をいくつも携え、舞台へ上がっていた

ミッドナイト「ヒーロー科の人間は原則そういうの禁止よ?ないと支障をきたす場合

は事前に申請を」

飯田「は!!忘れておりました!!青山君もベルトを装着していたので良いものと……!」
青山「彼は申請しています」

飯田「申し訳ありません!だがしかし!彼女のスポーツマンシップに心打たれたのです!!彼女はサポート料でありながら「ここまで来た以上対等だと思おうし、対等に戦いたい」と俺にアイテムを渡して来たのです!この気概を俺は!!無下に扱ってはならぬと思つたのです!」

ミッドナイト「青くっさ!!!いいよ!!!」

プレゼントマイク「いいんかい……」

相澤「まあ双方合意の上なら許容範囲内……でいいのか……?」

優菜「そろそろ控室行つてくる」

優斗「負けたら一万円お小遣いくれ」

優菜「すでに負けてるやつが言うな」

ということと優菜は控室へ行き、戦いを見るのは優斗だけに

プレゼントマイク「スタート!」

発目『素晴らしい加速じゃないですか飯田君!!』

プレゼントマイク「は?」

発目の声はカオス式のイヤホンからではなく、会場中のスピーカーから聞こえた

飯田「マイク？」

どうやら、発目はバラエティ番組で使われるような服につけるタイプのマイクをつけているようだ

発目「普段よりも足が軽く上がりますか!? それもそのハズ!! そのレッグパーツが着用者の動きをフォローしているのです! そして私は「油圧式アタッチメントバー」で回避もラクラク!」

飯田「どういうつもりだ・・・」

発目「飯田君鮮やかな方向転換!! 私の「オートパランサー」あつてこそその動きです!」
プレゼントマイク「何コレ・・・」

相澤「売り込み根性たくましいな・・・」

優斗「まさかずっとこれ・・・?」

10分後・・・

発目「ふ・・・すべて余すことなく見ていただきました、もう思い残すことはありません!!」

光で輝く汗をぬぐい、この世でできることすべてをやり遂げ墓に眠るときのように清々しい顔で、発目は舞台の外へ出た

ミッドナイト「発目さん場外!! 飯田くん二回戦進出!!」

飯田「騙したなあああ!!」

発目「すみません、貴方利用させてもらいました」

飯田「嫌いだああ君ー!!」

出久「きつと飯田君真面目すぎたから耳障りのいいこと言って乗せたんだ・・・あけすけなだけじゃない、目的の為なら手段選ばない人だ」

麗日「っし・・・そろそろ控室行ってくるね」

そして優菜へ

控室に入り、どの程度まで制限をかけるかを考えてみた

本気を出せば会場が消し飛ぶと思われるため、どの能力を使うかを厳選するべきじゃないだろうか

使えるのはペルソナ、波紋、気、魔法。この中で比較的威力が高い気は使えない

ペルソナは威力の高い技も無理そう・・・ということは魔法と波紋を中心に倒すしかないか・・・?

でも、相手によってはペルソナの使用も視野に入れたほうがよさそうだ。爆豪とか轟とかに関しては、ペルソナ使わないと厳しそうですらある

すると控室に置かれているテレビから、今やっている試合の様子が放映されていた

芦戸が青山のベルトを個性で溶かし、焦っている間に物理で勝ったようだ
優菜『終わったか。・・・そろそろ行こう』

控室の扉へ歩を進めた

胸の高鳴る音が聞こえる。一步進めるごとに音は大きくなっていく

身体が震えているのが分かる。これは緊張か、はたまた武者震いか、

爆発するかのようにも思えた鼓動は、会場の歓声によつてかき消された

優菜『・・・こんなに歓声を浴びるのは初めてだな』

舞台上がり、八百万と向き合った

プレゼントマイク「2位1位と来てここで負けたら恥だぞ!?中村優菜!!対、騎馬戦で

は結構活躍してたぞ!八百万百!!」

優菜「それじゃあ、やろつか」

八百万「ええ」

プレゼントマイク「スタート!!」

八百万「ハッ!」

八百万は個性を使い、機動隊の盾を出してきた

それに対抗し、こちらは風魔法を手に纏った

そして気弾を放つ様に風を放った

百「クッ……！」

何度も風を放ち、守ることに集中した瞬間

足元に身体が浮くほどの強風を起こし、バランスを崩した

優菜『今だッ！』

そこに向かって体当たりし、一気に部隊の外に押し出した

舞台に戻ってこられないように風の壁を作り、その後ろに火を放つという万全の対策をし、八百万は舞台に戻ることはできず地面に落ちた

ミッドナイト「八百万さん場外!!中村さん二回戦進出!!」

八百万「押し出されてしまいましたわ……」

優菜「絶対優勝するから」

八百万「……ええ、負けないでくださいまし」

舞台を降り、優斗のいる席に戻ると、ちょうど次の人たちが終わった

次の対戦者は切島と鉄哲という暑苦しくも荒々しい漢同士の戦いを繰り広げた

そして勝利したのは……切島だ!

それから二人の握手で拍手が巻き起こり、戦いは幕を閉じたらしい

優菜「見てるだけで暑そうだな」

優斗「暑かったぞ」

話している間に一回戦の最後の二人が出てきた

一回戦最後の戦いは麗日と爆豪

爆豪に対して麗日は必死の攻撃で善戦する。しかし実力の差がハッキリ出てしまい、勝利したのは爆豪だった

そこからプロヒーローと相沢先生のいざこざがあつたが、そこは割愛する
続いて、二回戦が始まる

プレゼントマイク「今回の体育祭両者トップクラスの成績!!まさしく両雄並び立ち今!!緑谷対轟!!スタート!!」

この二人の戦いは熾烈を極めた

初めに轟の氷が出久に迫る

その氷を指を一つ犠牲にする自損覚悟のワンフオーオールで打ち消した

プレゼントマイク「おオオオ!!破ったああ!!」

轟はもう一度氷を放ち、出久も負けじと他の指を潰しながら応戦する
プレゼントマイク「まーた破ったあ!!!」

優斗「このままだと指全部追ってリタイアじゃないか?」

優菜「いや、デクなら何か考えがあるだろ」

優斗「でも耐久戦は無理だろ。勝ち筋は見えんぞ」

轟は痺れを切らし、出久に向かっていった

プレゼントマイク「轟、緑谷のパワーにひるむことなく近接へ!!」

氷で出久の上へ斜めに道を作り、直接氷殴りに行った

出久は向かって右に避けるが、右足が少し凍り付いた

その氷を左手を犠牲に吹き飛ばす

すると、カオス式のイヤホンから会話が聞こえてきた

轟「・・・さつきよりずいぶん高威力だな。近づくなんてか・・・守って逃げるだけ

でポロポロじゃねえか」

出久は応戦に集中し、答えずにいた

轟「悪かったな、ありがとう緑谷。おかげで、奴の顔が曇った。その両手じゃもう戦

いにならねえだろ。おわりにしよう」

どうやら轟の親のナンバー2ヒーロー「エンデヴァー」が見に来ているらしい

だがそのエンデヴァーのことを、快く思っていないようだ

プレゼントマイク「圧倒的に攻め続けた轟!!とどめの氷結をー・・・」

出久「どこ見てるんだ・・・!」

氷を放った轟が少し目をそらすと、出久は壊れた指でまた吹っ飛ばした

轟「てめえ・・・何でそこまで・・・!」

出久「震えてるよ、轟くん個性だって身体機能の一つだ。君自身、冷気に耐えられる限度があるんだろう・・・!?で、それって左側の熱を使えば解決できるもん何じやないのか・・・?」

轟「・・・っ!!」

出久「皆・・・本気でやってる、勝って・・・目標に近づくために・・・っ!一番になる為に!半分の力で勝つ!?まだ僕は君に傷一つつけられちゃいないぞ!全力でかかって来い!!」

と出久が煽りに煽り、轟も感情をあらわにしだした

轟「何のつもりだ、全力：：?クソ親父に金でも握らされたか：：?イラつくなア：：!!」

二人同時に相手に向かって走り出し、これまた同時に殴り掛かった

先に殴り、そしてぶっ飛ばしたのは

プレゼントマイク「モロだア!!生々しいの入ったア!!」

優菜「殴り飛ばせたのか!?!」

あれほどボロボロになりながら、それでもあきらめない芯の強さには目を見張るものがある

すると、カオス式イヤホンから出久の声が聞こえた

出久「氷の勢いも弱まってる……」

壊れてる右手の親指で、轟を守る氷を弾き飛ばした

轟「何でそこまで……」

出久「期待に応えたいんだ……！笑って答えられるような……カッコいい人に……なりたいんだ。だから全力で！やってんだ皆！君の境遇も、君の決心も、僕なんかに計り知れるもんじやない……。でも、全力も出さないで一番になつて完全否定なんてふざけるなつて、今は思ってる」

轟「うるせえ……」

出久「だから、僕が勝つ!!君を超えてっ!!」

轟は出久の勢いに気圧され、出久の攻撃に耐えることができずにしりもちをついてしまった

轟「親父を……」

出久「君の！力じゃないか!!!」

出久のその言葉が轟に火をつけた

心にも、体にも

轟は火……いや炎、いや業火を纏い

プレゼントマイク「これは……!?!」

飯田「使った……！」

優斗「何だアレ!? あんな火出せるのか!？」

優菜「暑う……。ここまで熱が伝わってくる……。…」

轟「勝ちてえくせに……。ちくしよう……。敵に塩送る何てどつちがふざけてるって話だ……。俺だつてヒーローに……。!!」

すると、静観していた轟のお父さんが叫びだした

エンデヴァー「焦凍オオオ!! やつと己を受け入れたか!! そうだ!! 良いぞ!! ここからお前の始まり!! 俺の血をもって俺を超えて行き……。オレの野望をお前が果たせ!!」

プレゼントマイク「エンデヴァーさん急に激励……。か? 親バカなのね」

出久「凄……。…」

轟「何笑ってるんだよ、その怪我で……。この状況でお前、イカレてるよ。どうなつても知らねえぞ」

二人は全力を出そうと踏み込み、突撃した

しかしそれを先生たちが危険視した

セメントス「ミッドナイト!」

二人が個性を発揮すると同時に二人を守るために真ん中にセメントが並び立った

このままイヤホンをつけていると鼓膜が死にそうなので、カオス式イヤホンを消した

轟「緑谷、ありがとうな」

それがイヤホンを消すとき、最後に耳にした轟の言葉だった

二人の個性のぶつかり合いに会場が揺れ、ゴオオオオという大きな音が鼓膜を突き破りそうだった

揺れが収まると、舞台には煙が燻り、二人の姿が視認できなかった

セメントス「威力が大きけりや良いつもんじゃないけど、すごいな・・・」

プレゼントマイク「何今の・・・お前のクラスなんなの・・・」

相澤「散々冷やされた空気が瞬間的に熱され膨張したんだ」

プレゼントマイク「それでこの爆風でどんだけ高熱だよ！つたく何も見えねー・・・オ
イこれ勝負はどうなって・・・」

すると、舞台上の煙が晴れ、轟の姿が見えた

しかし出久の姿はどこにも見えなかった

優斗「あれ？出久は・・・」

どこかにいないかと思回してみると、舞台外の壁にめり込んでいた

ミッドナイト「緑谷くん、場外。轟くん、三回戦進出！」

優斗「負けちまったか・・・」

優菜「勝ってたとしても、あの怪我で次の試合なんて無理だろ」

試合を見ていた観客達は、様々な言葉を零していた

青年「緑谷のやつ、煽つといってやられちまったよ・・・」

女性「策があつたわけでもなく、ただ挑発しただけ？」

男性「轟に勝ちたかつたのか負けたかつたのか・・・」

中年の男性「なににせよ恐ろしいパワーだけありや・・・」

女性のヒーロー「気迫は買う」

男性のヒーロー「騎馬戦までは面白いやつだと思つたんだがなア」

出久に対する評価はあまりよくなようだ

優斗「てか、控室いなくていいのか？次の次だろ？」

優菜「そうだった！行かねえと・・・」

優斗「負けたらデスソース一本な」

優菜「シヤレにならんからやめれ」

控室に向かっていると、すでに試合が終わり自分の番が回ってきてしまった

なんでも、飯田が始まってすぐに騎馬戦の時の「レシプロバースト」を使い、背後を

とつて場外勝ちらしい

まあ、相手のイバラにからめとられてしまつては勝ち目はなくなるのでいい判断だ

そして、優菜と芦戸が舞台上がった

プレゼントマイク「さあ次は今回大注目のこいつだ！今度も一瞬か!?中村優菜!!対酸危険すぎやしねえか?今回は使うのか!芦戸三奈!!」

芦戸「私が勝つからね!」

優菜「負けないよ」

ミッドナイトが旗を振り上げ「試合開始」と叫びながら振り下ろした

芦戸はこちらに酸を飛ばしてきたが、それを避けて魔法で水を飛ばし牽制した

しかし水は当たらずに避けられたため、カオスの空間でこちらに水を戻し、氷魔法で凍らせて手でつかんだ

優菜「やつぱりそう簡単にはいかないね」

少し時間を止め、氷にある魔法を付与し、時間を動かして芦戸に向かって投げつけた
それを酸で溶かそうとしたが、それに伴い氷が分身していき芦戸を飲み込んでいった

芦戸「ギヤアアアア!!」

自分を包もうとする氷をなんとか酸で溶かしていくが、氷はすぐに再生し、次々と増えていった

そして身動きが取れなくなったところで、場外へと転がしていった

ミッドナイト「芦戸さん場外!中村さん三回戦進出!!」

決着がついたので、氷の付与魔法を消していき、芦戸を引きずり出した

優菜「大丈夫？どこか痛んだりする？」

芦戸「いや、大丈夫だよ・・・」

その後、芦戸は念のため処置室へ

優斗のところへ戻っても、すぐに戻らないといけなかったため、控室に残った

次の試合は切島対爆豪、勝利したのは爆発の物量で押し切った爆豪だった

その次の轟対飯田は、飯田がレシプロで先手必勝を狙ったが、エンジン部分を冷やされ失速……。全身を凍らされ戦闘不能に陥り、轟が勝った

・・・それじゃあ行きますか

プレゼントマイク「さあ、ここを勝てばとうとう決勝だ！まずは、まだ隠し札はあるのか！？中村優菜!! 対容赦なくぶっ潰せ!! 爆豪勝ち!!」

爆豪「ぶっ殺す!!」

優菜「・・・」

プレゼントマイク「スタート!!」

爆豪「オラアア！」

爆豪が開始の合図と同時に突撃し、顔に爆発を叩き込んできた

プレゼントマイク「早速行ったあ!! 今度は効いたか!?!」

会場中のほぼ全員が最高の先制攻撃を当てたと感じた

しかし皆の思惑は外れ、爆月の煙の中から手が伸び、爆豪の腕をつかんだ

爆豪「なっ!？」

優菜「落ち着いて、まだ始まったばかりだよ」

爆豪は腕を振りほどき、一旦離れた

爆豪「くそっ!!死ねや!!」

爆豪は優菜の周りを回るように動き、爆発の煙で取り囲んだ

それに対し、風魔法で煙を吹き飛ばしたが、飛ばした途端に爆豪の爆撃を食らい、後ずさりした。すぐに視認しようとしたが、文字通り煙に巻かれてしまい見えなかった

優菜「どうしたもんかね・・・」

気を読めば場所を充てるのは簡単だ

だが、見栄え的にそれはどうなんだ？どうせならもつと派手に戦ったほうが見てるほうは盛り上がるのではないか？

そう考えていると、目の前に一つの火が灯った

優菜「これは・・・」

その火が灯った理由を諒解し、両手で包み込むようにつかんだ

会場内では、煙で何も見えない十戦闘音がしないため、どよめきが起こりプレゼントマイクも実況を言いあぐねていた

プレゼントマイク「おいおい！何も見えやしねえぞ！中では何が起こってんだ!?」
すると、先ほどまで快晴だった空から無数の雨粒が落ちてきた
会場の皆が空を見上げた。そこには、先ほどまでどこにもなかった積乱雲が蠢いて
た

プレゼントマイク「・・・今日雨降るって言ってたか？」

相澤「雲一つない快晴のはずだ」

最善席に座っている人たちが雨から避難していると、舞台の上に動きがあった
煙が雨で消えていき、二人の姿が露わになった

立ち尽くす爆豪に対し、優菜の後ろには薄光を放つ成人男性が立っていた

プレゼントマイク「とうとう出た出たお出ました!!優菜の個性のペルソナだア!!」

爆豪「やつと本気出しやつがたか・・・!!」

優菜「なんだ、ずっと待ってたの？さつき本気出しとけばすぐ勝てたかもしれない
に」

爆豪「ああ!?俺は本気でやりあった上で、完膚なきまでに勝ちてえんだよ!!」

優菜「そう。なら、こつちも本気でやるよ。ホバル」

ペルソナの名を呼ぶと、後ろの男が天に向かって手を広げた

したらば積乱雲が会場に向かって落ちてきた

上空10メートルほどになると、降下をやめ雨もやんだ

爆豪は何が降るのかと身構えたが、積乱雲が牙を剥いたのは爆豪ではなかった
積乱雲が青白く発光し、優菜に向かって降り注いだ

優菜「ギヤアアア!!」

雷をギリギリで避け、一旦ホバルを呼びつけた

優菜「なんでこっちに落とすの!!」

ホバル「いや、俺は雷を降らせろとしか言われてない」

優菜「察して!？」

二人の無駄なコントに痺れを切らした爆発さん太郎が突っ込んできた

優菜「ホバル!」

ホバルは積乱雲をつかみ、半分ほどを爆豪に投げつけた

そして残り半分を後ろへ回し、包み込んで上空へ上がっていった

ここでようやく、雷攻撃をくらわせることに成功した

決着がついたように思ったが、積乱雲が爆破で霧散し、その思いは払拭された

爆豪「クソがっ!!」

優菜「まだ耐えられるの・・・? 計算違いだったか・・・」

爆豪「何ぺチャクチャ喋ってんだ!? さっさとかかってこいや殺すぞ!!」

優菜「・・・わかった。じゃあ真正面から行くよ」

まずは走り出したと同時にガスを掌にため、爆豪の爆発に合わせて噴射

大火傷を負っていたら観客がビビるので、すぐに治して場外へ蹴りこんだ

しかし、場外になるギリギリで耐え、こちらにまた突っ込んできた

腕を掴んで投げ飛ばそうと腕を伸ばしたが、ビルの訓練の時のように爆発で目くらま

ししながら上を通り、後ろから殴ろうとしてきた

だがこの戦い方は覚えていたため肘打ちをしようとしたが、それに対してのカウン

ターを食らい一瞬景色が歪んだ

しかしすぐに腕を掴み、投げ飛ばした

このまま場外に落ちてくれれば楽だったが、爆発で場外に留まられてしまった

プレゼントマイク「お互い一步も譲らない接戦！今日一番の試合だア!!」

優斗『やけにてこずってるな・・・さっさと終わらせたほうがいいのに』

二人は向き合い、真っ向からぶつかり合った

優菜は爆発を食らいながら爆豪の腹を殴った

もろに一発入ったが、爆発を止めることなく爆豪は抵抗し続けた

とうとう爆発を顔にまともにくらい、後ろによるめいた

そこを待っていたように爆豪が突っ込んできたが、優菜は新体操の選手の様体をく

ねらせて爆豪を蹴り上げた

そのまま一回転したあと、爆豪と距離を開き改めて身構えた

そのとき、思考を重ねていた頭の中が一瞬でクリアになり、漠然とある予感が際立つた

優菜「くる・・・」

渾身の一撃がくると謎の確信を得て、それに対処するようにペルソナを全員出した
爆豪は確信の通り、回転しながらこちらに突っ込んできた

この攻撃は十中八九、榴弾砲着弾へハウザーインパクトだろう
それに対抗できるのは・・・

優菜「イフリート!!」

似ている系統の火で爆豪に向かってマハラギを放った

しかし爆豪の攻撃にかき消され、場外へ吹っ飛ばされてしまった

優菜『マジかよ押し負けるのか・・・!!』

舞空術で空中に何とかとどまり、舞台へ戻った

優菜「こんな派手なことされたら・・・こっちまでしたくなるじゃないか」

ホバルを呼び出し、また雨を降らせた

そして舞台を雲で覆い隠し、お互いしか見えないようにした

優菜「カオス」

カオスの空間から銃を一つ取り出し、自分の頭に突き付けた

爆豪「!?何してんだお前!!」

優菜「ちよつと見てなつて」

躊躇なく引き金を引き、頭から飛び出したのは新鮮な脳みそではなく、先ほどのホバ
ルと同じようなエネルギー体だった

銃をカオスの空間にしまつてから、舞台周りの雲を上空に戻した

優菜「行くよ、ウンディーネ」

エネルギー体が女性の形に姿を変えると、雨粒が優菜の前へ集まり槍を形作つた

氷の槍に波紋を纏わせ、矛先を爆豪に向けた

落ちてくる雨粒が氷の槍を伝い、地面へと落ちていく

ウンディーネが腕を払うと、舞台上の雨がすべて優菜の身体を纏い始めた

雨は仮面ライダーやプリキュアの変身シーンの様に鎧に変化した

優菜「死なないでよ、爆豪くん」

爆豪「死ぬかよ」

こちらの目をまっすぐ見つけながらそう言い返され、こちらも最高の一撃を食らわせ
るために構えた

爆豪は手に力を込めて、突っ込んできた

こちらでも走り出すと、鎧の水が槍の先へ集まり、爆発から防ぐように優菜の周りに円錐状に広がった

それに対し爆豪は腕に異常が出るのではないかという程の爆発を起こし、それにより雲も水も槍もすべて蒸発した

しかし優菜の身体は絶えず進み、渾身の一発を爆豪の顔面に叩き込んだ

優菜「私の・・・勝ちだッ」

爆豪を場外の壁まで殴り飛ばし、勢い余って自分もうつ伏せに倒れこんだ

ミッドナイト「爆豪くん場外！これで決勝は轟くんと中村さんに決定!!」

判定を聞きホツとした。もし爆豪が場外でなければこの状態では間違いなく負けていただろう

地面を押し立て立ち上がろうとしたが、右腕にズキツと痛みが走った

い どうやら殴った反動で、前腕の骨にヒビが入ってしまったようだ。痛くてしょうがない

優菜『・・・このまま寝てよう。治療室まで担架で連れて行ってくれたほうが楽だ』

治療室に連れて行ってもらい、骨折をおばあちゃんのリカバリーガールに治してもらった

優菜「ありがとうございます」

リカバリーガール「お礼なんていいよ。私はそのためにいるんだから」

優菜「いえいえ、あなたがいるおかげで思いつき殺り合えるんですから」

リカバリーガール「あんまりやりすぎないようにね」

身体が万全に動くのを確認してから舞台へ向かった

舞台への入り口につくと、実況席に連絡がいった

プレゼントマイク「さアいよいよラスト!!雄英1年の頂点がここで決まる!!決勝戦

!!

轟、優菜共に舞台へ上がった

プレゼントマイク「轟対中村!!今!!スタート!!」

スタートと同時に足を凍らされ、一步目を塞がれた

優菜『やべっ!凍らされた・・・!』

その後すぐに頭を含めて全身を凍らされ、完全に動けなくされてしまった

プレゼントマイク「いきなりかましたあ!!中村との接近戦を嫌がったか!!早速優勝者

決定か!」

とりあえず、全身を凍らされる前に波紋の呼吸をしていたため目や鼻などに氷が入る

のは防げたが・・・

優菜『でもこっからどうするか・・・燃やすにしても砕くにしても、相手が何してるかまでは見えないからな。カウンターでもされたら面倒だし・・・』

プレゼントマイク「ん？本当に終わりか？クリーンヒットしちまったか？」

すると氷の中で悩む優菜に、神様が物理的に下りてきた

優菜に入り込んだのは、破壊の神である

その力を氷に向かって放つと、氷の原子は次々と消えていき、まるで何もなかったかのように消えてしまった

プレゼントマイク「何だ!?氷が溶けた!?いや、消えて無くなったぞ!」

氷から放たれた優菜は独り言を始めた

優菜「トラウイスカルパンテクトリ（以降、トラ）・・・だっけ？お前これは強すぎ」
何者かに話しかけるように話していたと思うと、突然横に男が現れた

トラ「ダメだったか？」

優菜「いや、能力ヤバイよ。気を付けないと相手も消しかねないし」

轟は新しい能力を危惧し、すぐに氷で優菜を捕らえようとした

しかし、優菜は空を蹴ろうとしながら呟いた

優菜「距離破壊」

すると、彼女は瞬間移動にしたように轟の前に現れた

空への蹴りは轟へと牙をむいたが、寸でのところで少年は避けた

優菜「イフリート」

轟「クツ!!」

避けた轟にイフリートが殴りかかったが、氷で防がれてしまい、とりあえず離れた

優菜「・・・なあ、何で左を使わないんだ？」

轟「お前もそういうのか・・・」

優菜「?・・・ああ、そういや出久にも言われてたんだっけ」

轟「聞こえていたのか？」

優菜「で、なんで使わないの？」

何も起こらない現状に痺れを切らし、プレゼントマイクが口を開いた

プレゼントマイク「あれ?何を話し込んでるんだ?決勝戦なんだからバンバンやって

くれよ!」

轟「・・・」

優菜「ほら、早く使いなよ。盛り上がるし、こっちだってその方が面白い」

轟は否定するように優菜に氷を放ち、それを彼女は避けた

優菜「・・・まさか、使わないで勝てるか思っつてないよね」

その言葉と同時に気配に圧をかけて、炎も出せないと勝てないと思わせるほどの殺気

のようなものを放った

優菜『見様見真似だが、できてるか・・・？』

轟「・・・！」

優菜「出せないなら、面白くないからすぐ終わらせるよ？」

一歩ずつ脅すように近づいていく。さっさと使えと、使わないと殺すぞと。並々ならぬ覇気が轟を襲う

轟「俺は・・・俺は・・・！」

反応があつたので足を止めた

轟「・・・クソッ！」

間に氷の壁を作り、こちらを近づけないようにしてきた

優菜「何をいまさら・・・」

その氷を砕くと、炎が襲ってきた

優菜「おわっ!？」

咄嗟に後ろに避け、魔法で水を噴射し相殺した

轟「この試合、どうやってもお前に勝つ!!」

プレゼントマイク「ようやく、始まるか!？」

轟「うおおお!!」

左腕に火炎を走らせながら、轟が走って向かってきた

優菜「なら俺も、本気でやってやる」

気弾を放つのはさすがにダメなので、波紋の様に腕に纏わせてボクシングのグローブのようなものを作った

優菜「ホバル、ウンディーネ」

雨を降らし、雨粒を凍らせられないようにグローブへ集めた

まずはそれで受けきり、反撃をしたが躲され、また離されてしまった

優菜「クロノス」

時間を止めて詰め寄り、上空に飛ぶように攻撃を加え時間を動かした

轟は訳も分からず殴り飛ばされ虚空へ

優菜「カオス」

轟の上へ空間をつなぎ、地面に落とすよう殴った

落ちてきた轟を場外へ蹴飛ばし終わらせようとしたが、氷で止められてしまい出せなかった

優菜「トラ、氷破壊」

トラの粒子が轟に近づいて行つた

先ほどのを見ていればソレを触ることはないだろう。速度も遅いため、ゆっくり確実に

に避けた

その粒子が氷にあたると、連なっていた氷すべてが消え去った

優菜「（やつぱり、破壊先を指定すれば他には被害は及ばないな）ガイア」

銃のようなものを作ってもらい、轟の足元に打ち込んだ

打ち込んだところから気の塊が飛び出し、轟に絡みついた

優菜「イフリート」

波紋の上に炎を流し、轟に走りこんだ

すぐさま氷の壁を作り、壊されたらすぐに燃やそうと左手も燃やした

それに対し優菜は、今更氷の壁を作ることには不信感を抱き、裏で何か罫でも貼ってい

るんじゃないかと睨んだ

カオスを呼び、まず轟の左側に穴をあけた

轟はそれに反応するが、そこからは誰も飛び出なかった

すると、後ろから別の穴が開いて音がし、振り返ったがそこにも誰もいない

どこから来るのかと四方八方を見回すがどこにも優菜の姿はない

轟はそこでようやく上空を見た。十数メートル先から誰かが落ちてくるではないか

それから身を守ろうと氷の箱を作り、自分を守った

だが、それが優菜だと誰が言った。本命は下、意識外からの一発だ

地面に穴が開き、それに気づいた時にはもう遅い

そのころにはすでに、勝負は決着するのだから

優菜「緋色の波紋疾走!!!」

拳は轟の顎にクリーンヒット

その衝撃は氷の箱を砕き霧散させ、燃え盛った才能を虚空へ打ち飛ばした

プレゼントマイク「いったー——!!!」

疲れ切った身体を倒さずに、拳を突き立てたまま静止した

優菜「頼むから勝たせてくれよ……」

轟が落ちたのは舞台の隅、片腕のみが垂れていた

誰もが戦闘不能と思ったその瞬間、轟は起き上がりこちらに向かってきた

優菜「嘘だろおい……」

乾いた笑みを浮かべながら轟を見た

その目には迷いがあった

何を迷っているのかと考えていると、左腕で炎を出す仕草をしたので魔法で氷を放つ

た

しかし、炎で溶かすことはせずに氷を避け、右腕でこちらを凍らせようとしてきた

なので目の前に土の壁を作って氷を防ぎ、火で氷を溶かしウンディーネの力で溶けた

水を轟に向かわせた

轟はまた左は使わずに水を凍らせた

優菜「・・・なんだ、そういうことか」

優菜は呆れ、一瞬で勝負を決めに行った

手で気弾を作り、轟の前に落とすとした。着弾すると同時に衝撃波が氷をすべて破壊し、

轟を吹き飛ばした

そしてついに、ミッドナイトが勝者を示した

ミッドナイト「轟くん場外!! よって・・・中村さんの勝ち!!」

プレゼントマイク「以上で全ての競技が終了!! 今年度雄英体育祭1年優勝は・・・A

組中村優菜!!!」

優菜「・・・」

試合が終わり、緊張の糸が切れ、仰向けに倒れた

優菜「結局、原作と変わらるか」

二人は担架で運ばれ、治療のち表彰式に

ミッドナイト「それではこれより!! 表彰式に移ります!」

優菜「おいおい、爆豪しっかりしてくれよ」

爆豪「んゝんゝゝゝゝ!!」

爆豪はセメントで三位の台にはりつけにされ、しかも口もふさがれるってしまつていた

優菜「暴れるからだぞ」

ミッドナイト「3位には爆豪くんともう一人飯田くんがいるんだけど、ちよつとお家の事情で早退になつちやつたのでご了承くださいな。それじゃあメダル授与よ!!今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

すると、空から大男が降つてきた

男はセリフを言いながら着地、司会も男の紹介をした

オールマイト「私がメダルをもつて来た!!!」

ミッドナイト「我らがヒーローオールマイトオ!!」

つまり盛大にかぶつたのである

ミッドナイトはオールマイトに全力でゴメンとジェスチャーした

男のヒーロー「今年の1年は良いなアオールマイトに見てもらえてんだよなー」

上記のように羨ましがれるヒーローが大多数いる中、オールマイトはまず三位のところ

へ

オールマイト「爆豪少年!!つとこりやあんまりだ・・・」

爆豪の口を塞いでいたマスクを外した

爆豪「オールマイトオ！3番なんて、何の価値もねえんだよ!!世間が認めても俺が認めなきやゴミなんだよ!!」

オールマイト「うむ！相対評価に晒され続けるこの世界で、不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそう多くない。受け取っとけよ！傷として！忘れぬよう！」

爆豪「要らねつつつてんだろが!!」

メダルを首にかけようとするが、拒否してあがくので口に向けた

次は

オールマイト「轟少年、おめでとう」

轟は拒否せず、首にメダルがかけられた

オールマイト「最後、左腕を収めたことには訳があるのかな？」

轟「緑谷戦でキツカケをもらって・・・わからなくなっていました、貴方が奴を気にかけるのも少しわかった気がします。俺もあなたのようなヒーローになりました、貴方が奴をつた、ただ・・・俺だけが吹っ切れてそれで終わりじゃ駄目だと思った、清算しなきゃならないモノがまだある」

オールマイトは轟を鼓舞するように抱きしめた

オールマイト「・・・顔が以前と全然違う、深くは聞くまいよ、今の君ならきつと精算できる」

そして最後にこっちへ来た

オールマイト「優菜くんおめでどう、よく頑張ったね」

優菜「ありがとうございます」

オールマイト「見たことない技ばかりだったけど、未だに隠し札があると思わなかったよ」

優菜「まだまだありますよ。出来るものもまだ出来ないものも、思いつくものは全部使えるようにするつもりです」

オールマイト「それは楽しみだね！しっかりと頑張ってくれよ！」

優菜にメダルをかけ、背を向けた

オールマイト「さア!!今回は彼らだった!!しかし皆さん!この場の誰にもここに立つ可能性はあった!!ご覧いただいた通りだ!競い!高め合い!さらに先へと昇っていく姿!!次代のヒーローは確実にその目を伸ばしている!!てな感じで最後に一言!!皆さんご唱和ください!!せーの」

観客「プルスウ」

オールマイト「お疲れさまでした!!!」

みんなの期待を裏切ったオールマイトはブーイングを浴びていた

ミッドナイト「そこはプルスウルトラでしょオールマイト!!」

オールマイト「ああいや・・・疲れたろうなと思つて・・・」
閉会式も終わり、教室へ戻つた

相澤「お疲れつうことで、明日明後日は休校だ。プロからの指名等をこつちでまとめて休み明けに発表する。ドキドキしながらしつかり休んどけ」
その日は寄り道もせずに戻つて、二人でベッドにぶつ倒れた

第九十四話（アカメが斬る！に来た『第二話』より）

「予告詐欺」

アレ（一話）から三日がたった

俺たちはまだナイトレイドに正式には入っていないかった

シエーレ「まだ決心できてないんですか」

優菜「いや、そう簡単にできることじゃないだろ」

このようにしつこくナイトレイド入りを促されていた

シエーレ「さつきタツミ君にも言いましたが、アジトの位置知ってる時点で仲間にならないと殺されますよ」

優菜「殺される気はないけど、面倒ごとは避けたいな」

優斗「やろうと思えば今からでもカオスで逃げれるし」

シエーレ「カオス……ですか。色々種類があるみたいですが、まだ全部教えてくれ無いですか？」

優菜「そのうちな」

シエーレ「……それってもしかして帝具だったりしますか？」

優斗「帝具？」

シエーレ「ぎっくりいえば武器です。私だったらハサミ、アカメなら刀です」

優菜「ああ・・・死にかけてたあの刀か・・・」

シエーレ「斬られたのに生きてるってだけで凄いですよ」

優菜「らしいけど、神話の力にはまだ及ばないみたいだな」

ヘル『あくまで力を借りてること忘れないでよね』

という風にゴールのない駄弁りをしていると、アカメが急いでやってきた

アカメ「会議室に來いって、ボスが」

優斗「ボスって？」

シエーレ「話すより見たほうが早いよ」

二人に連れられ会議室へ

ボスと呼ばれている女「成程、事情は全て把握した。タツミ・・・ナイトレイドに加わる気はないか？」

考えていた印象と違ったのか彼女を訝しげに見つめていた優斗は、ペルソナ越しに語り掛けてきた

優斗『あれがボス？代理とかじゃなくて？』

優菜『俺の記憶の上ではそうだ。名前は・・・ナジエндаだっけか？』

優斗『ナジエンダ・・・覚えにくいようなやすいような・・・』

すると、先ほどのナジエンダの問いにタツミは答えた

タツミ「断つたらあの世行きなんだろう？」

ナジエンダ「いや、それはない。・・・だが帰す訳にもいかないからな、我々の工房で作業員として働いてもらう事になる。とにかく断つても死にはせん、それを踏まえた上で・・・どうだ？」

タツミ「・・・俺は、帝都へ出て、出世して、貧困に苦しむ村を救うつもりだったんだ。ところが帝都まで腐りきってるから地方が貧乏で辛いんだよ。その腐っている根源を取っ

ブラート「中央が腐ってるから地方が貧乏で辛いんだよ。その腐っている根源を取っ払いたくねえか？男として！」

ナジエンダ「ブラートは元々有能な帝国軍人だった。だが帝都の腐敗を知り、我々の仲間になったんだ」

ブラート「俺達の仕事は帝都の悪人を始末することだからな。腐った連中の元で働くよりずっといい」

タツミ「でも悪い奴ボチボチ殺していったところで、世の中大きく変わらないだろう？それじゃあ辺境にある俺の村みたいな所は結局救われねえよ」

ナジエンダ「成る程、ならば余計にナイトレイドがピツタリだ」

タツミ「なんでそうなるんだ？」

ナジエンダ「帝都のはるか南に反帝国勢力である革命軍のアジトがある」

タツミ「・・・革命軍？」

ナジエンダ「初めは小さかった革命軍も、今や大規模な組織に成長してきた。すると必然的に情報の収集や暗殺など、日の当たらない仕事をこなす部隊が作られた。それが我々ナイトレイド。今は帝都のダニを退治しているが、軍の決起の際は混乱に乗じて腐敗の根源である大臣を・・・この手で討つ！」

タツミ「大臣を討つ・・・!?」

ナジエンダ「それが我々の目的だ、他にもあるが今は置いておく。決起の時期について詳しいことは言えんが・・・勝つ為の策は用意してある。その時が来れば確実にこの国は変わる」

タツミ「・・・その新しい国は、ちゃんと民にも優しいんだらうな？」

ナジエンダ「無論だ」

タツミ「成る程、スゲエ・・・。じゃあ今の殺しも悪い奴を狙ってゴミ掃除してるだけで、いわゆる正義の殺し屋やつじゃねえか！」

タツミの発言にナイトレイドの全員が目を丸くし、一拍おいて笑い始めた

タツミ「な・・・なんだよ、何が可笑しいんだよ!!」

レオーネがその質問に、重苦しくも単調に答えた

レオーネ「タツミ、どんなお題目つけようがやっつてゐることは殺しなんだよ」

それにシエーレたちも同調する

シエーレ「そこに正義なんてあるわけないですよ」

ブラート「ここにいる全員……いつ報いを受けて死んでもおかしくないんだぜ？」

ナジエンダ「戦う理由は人それぞれだが皆覚悟はできてる……。それでも意見は変わらないか？」

タツミは驚愕しながらも、呼吸を整え問うた

タツミ「……報酬はもらえるんだらうな？」

ナジエンダ「ああ、しっかり働いていけば故郷の一つは救えるだらう」

その瞬間、タツミの眼に覚悟が宿るのが見えた

タツミ「だったらやる！俺をナイトレイド入れてくれ!!そういう大きな目的の為に、サヨもイエヤスもきつとそうしてる！」

マイン「村には大手をふって帰れなくなるかもよ？」

タツミ「いいさ、それで村の皆が幸せになるなら」

マイン「……フン」

これも彼女なりの歓迎なのかもしれない

心を読んだりはずすがにできないので真偽はわからないが、そう思うことにしておこう

ナジエンダ「決まりだな、修羅の道へようこそタツミ」

タツミを仲間に取り入れ、こちらを向いた

ナジエンダ「次は君達だな、どうする？」

優菜「……」

人道的に人を殺すということは絶対に許されることではないと思う

まあ元ヒトを殺したことはあるし、タツミが人を殺すのにも加担したが、自分自身は人を殺したことはない

優菜『……ここは断っておこう。まだ人殺しになる気はない』

質問に答えようとすると、ナイトレイドの一人であるラバツクの糸の帝具が引つ張られた

ラバツク「侵入者だ！ナジエンダさん！」

ナジエンダ「人数と場所は？」

ラバツク「俺の結界の反応からすると恐らく8人！全員アジト付近まで侵入しています！」

気を探ると、1キロほど先に8人分の気を感じた

ナジエンダ「手強いな、ここを嗅ぎつけてくるとは。．．．恐らく異民族の傭兵だろう。仕方ない、緊急出動だ。絶対に生かして返すな」

優菜「．．．」

優斗「どうする？」

優菜「．．．オレが何とかする」

窓から侵入者のところまで最速で飛んでいき、侵入者を見つけた

視界に入ったのは七人のみだったが、ひとまず気絶させてカオスの空間に入れた

優菜「あと一人は．．．」

もう一人を探ろうとすると、どこからか炎が上がったような音がした

そのころ優斗はというと．．．

優斗「優菜に先行かせて、オレはじっとしてるなんて選択肢はないぞ！．．．迷った

けどな！」

ナイトレイドの連中とともに基地を飛び出した優斗は、侵入者を探して森の中を彷徨っていた

誰にも会わないので基地に戻ろうかと思ったところに、闇も深くなった森の奥懐から悲痛な叫び声が聞こえた

？「頼むっ！見逃してくれ！俺が死んだら里が．．．！」

優斗「あつちか!!」

声の下に走ると、タツミの襲われている姿が見えた

敵「ハハハ、甘いな少年!一族の為死んでもらうぞ!!」

優斗「イフリート!!」

敵から後ずさりし倒れたタツミと敵の間に火の壁を作り、火に驚いて後ろに重心をかけた敵を、警察が犯人を捕まえるときの様に地面に押さえつけて肩を外した

敵「ウワアアア!!」

優斗「大丈夫か?」

タツミ「あ、ああ・・・」

動けなくなった敵から手を放し、タツミを起こした

敵「くっそ・・・」

優斗「今樂にしてやる。アリエル、指弾」

指から放たれた弾を、女子の手が掴み止めた

優菜「別に殺さなくていいだろ。他の奴らも捕まえた」

優菜の言葉に呆れたように優斗はこう返した

優斗「捕まえたところで、あいつらに渡した時点で死ぬだろ。それとも、そいつら連れて逃げるのか?」

優菜「無抵抗な状態にすれば、さすがに情報を聞くまでは殺したりしないだろ」
優斗「そんな常識、通じるような奴らじゃないだろ。そもそも裏世界に常識があるの
かも怪しいし」

すると、近くの茂みから音がし、ロボのような鎧を着た男が飛び出してきた
ブラート「トウツ！敵がこつちに逃げて来ただろ？後は俺に任せなっ！」

優斗「もう終わった。全員残らず捕まえたはずだ」

ブラート「そうか、なら後は殺して終わりだな」

優菜「いやいや、せっかく捕まえたんだから尋問ぐらいしてから・・・」

ブラート「それは甘いな。そんなんじや、ナイトレイドは務まらないぞ？」

優菜「入るとはまだ言っていないんだが!？」

ブラートと口論になっていると、遠くから厚みのある光線が侵入者たちを貫いた

優菜「!？」

ブラート「マインのパンプキンか、まあ終わったんなら戻るか」

溜息をつきながら、彼は 森に消えていった

優菜「・・・」

何も言わず、無言のままの優菜の肩をたたいた

優斗「もう行くぞ。早く割り切れよ」

そう言い残し、後を追うように去っていった

死体を眺めながら、肩を震わせ零れるように呟いた

優菜「そう簡単に、割り切れるかよ……」

アイツもまた自分だということに、心底吐き気がした

それと同時に、この状況を慣れ始めている自分をも嫌悪した

優菜「せめて、墓ぐらい」

彼らの死体を移動させていると、一人のポツケからカギが落ちた

優菜「？」

銀色のよく見るようなカギを拾い、模様をマジマジと見てみると、全体に大きく天秤が彫られており、片側の器には銃、もう片方には西洋の剣が描かれていた

優菜「家の鍵か何かか？にしてはバイオに出てきそうなぐらい精工な気が……」

生前、バイオの実況プレイをただ一人の友と見ていた優菜は、このカギが纏っている
仰々しくも不気味な気配に飲まれ始めていた

優斗「おい、何してんだ？」

カギに集中していたため、肩を叩かれるまで優斗が戻っていたことに気づかなかつた
優斗「全然ついてこないと思つたら、こいつらの墓でも作つてたのか？」

優菜「あ、ああ……」

カギを後ろに隠し、質問に頷いた。鍵を隠した理由は自分でもわからない、そうするべきだと予感したんだ

優斗「?今なんか隠したか?」

優菜「気のせいだろ、ほら何も持っていない」

カオスの空間にカギを落とし、何も持っていない手を広げて見せた

優斗「そうか、ならいい。さっさと埋めて帰るぞ」

ガイアにスコップを作ってもらい、サクツと掘ってサクツと埋めた

優斗「お前を後ろにしたらまたどっかで止まるかもしれん、先に行け」

優菜「はいはい、分かったよ」

優菜が先に飛んでいき、優斗はずっとこちらを見ていた何かを殺してからついて行っ

た

優斗『こいつのせいで無駄に疑われたか?まあいい、大した事にはならんだろ』

戻って夜飯

料理ができるといった瞬間、任された件

ブラート「おおー!うめー

ラバツク「確かに少し辛いがいけるな!」

ブラート「ビールに合う!」

一氣!一氣! *一氣飲みはやめましょう

俺と悠も呼ばれた

ナジエンダ「初陣ご苦労様だったな、タツミ、優菜、悠」

タツミ「あ、ああ」

優菜「楽勝でしたけどね」

悠「俺はそこまで何もしないすけどね」

ナジエンダ「だが悠の報告を聞き、不安なところもある・・・お前が生きぬく為には

誰かに色々と教えて貰う必要があるみたいだ、アカメと組んで勉強しろ」

タツミ「いいっ!」

ナジエンダ「お前達もついでに行ってこい、いいなアカメ」

アカメ「うん」

タツミ『アツサリ!』

ナジエンダ「足手まといになる様なら斬っていいぞ」

アカメ「うん、わかった」

タツミ『分かったのかよ!』

ナジエンダ「かわいい子に教えて貰えるなんてついてるな、殺されない様に頑張れ!」
次の日

皆「おかわり」

優菜「何杯食べるんだよ!」

悠「まあまあ」

優菜「お前は別の仕事だろ」

厨房

優菜「皿洗い頑張れよ」

悠「わかつてるって」

タツミ「くそーっ殺し屋なのに来る日も来る日も炊事かよ」

アカメ「仕方ない、私はアジトでは炊事担当だからな、私についてるお前も当然炊事担当になる」

と味見しながら言う

タツミ「味見や試食が無限だから炊事なんだな?」

アカメ「そんなことはない」

タツミ「説得力ねえよ」

マイン「やっぱり新入りにはその姿が一番サマになつてゐるわね」

タツミ「何イ!?…つてアレ?皆どつか行くのか?」

マイン「ええ、依頼が來たから帝都で殺しよ」

タツミ「依頼?」

シエーレ「留守はよろしくお願いします」

タツミ「え、俺は?」

マイン「新入りアカメ留守番!大人しくきゆうりのへタでも落としてなさい!じゃあね」

タツミ「ぐぬぬ」

アカメ「よしっじゃあ次は私達も命を奪いに行こうか」

タツミ「炊事班の狩りつてオチですね、分かります」

山の中

タツミ「なあ、アジトから結構離れてるけど大丈夫か?」

アカメ「山奥に行く分は問題ない」

優菜「お前大丈夫か?」

悠「あの時…ちゃんと…一緒に…走っておけば…」ゼーゼーゼーゼー

アカメ「着いたぞ」

滝壺? みたいなどころについた

タツミ「へえーっ綺麗な所だな」

アカメ「川の獲物を葬る」

服を脱ぎだす

タツミ「まさか全裸で・・・!?」

もちろん水着

アカメ「この水の中で動きやすい服で・・・狙いはコウガマグロ、ここはポイントだ」

タツミ「え・・・それって確か警戒心の強いレアな怪魚じゃ・・・」

バシヤ

ドバツ

タツミ「爆釣!?!」

アカメ「川底に潜り気配を断ち、獲物が通りかかった瞬間に襲う思い切りの良さが重

要だ、出来るか?」

タツミ「上等だ!!!」

服を脱ぎ捨て

ドボン

優菜「私ないわ、水着」

悠「俺も」

優菜「お前はパンツで行け」

結果2匹だった

悠「次は俺か」

優菜「これ使え」

銃を渡す

悠「これは！」

優菜「わかるよな？使い方」

こめかみに当てる

パン

？「我は汝、汝は我。今ここに契約をかわさん」

悠「よろしく」

ウンディーネ「私はウンディーネ、よろしくお願いします」

悠「早速」

滝壺に渦ができる

優菜「ほお」

そしてマグロが打ち上げられた

悠「3匹か」

優菜「よし、私も・・・」

パアン

？「我は汝、汝は我」

優菜「はいよろしく」

アラメイ「私はアラメイ、これからよろしく頼むぞ」

優菜「じゃあ、お前も・・・」

ゴロゴロゴロ

タツミ「へ？」

ピシヤ

ドーン

悠「雷かよ」

プカー

悠「ウンディーネ、取り入ってくれ」

水がここまで運んできた

アカメ「よし、帰るぞ」

ナジエンダ「で、結局タツミが捕まえたのは2匹と・・・初めてにしては上出来じゃないか」

レオーネ「服脱ぎ捨てて上等! って言ったんだって?」

アカメ「まだまだ甘い」

優菜「クソツ、一番最後だったからか5匹しかいなかった」

悠「俺は3匹・・・特にいうことない」

ナジエンダ「レオーネ、数日前帝都で受けた依頼を話してくれ」

レオーネ「標的は帝都警備隊のオーガと油屋のガマルって奴だ、依頼人が言うには」

その日の事

女性「オーガはガマルから大量の賄賂を貰ってるんです」

レオーネ「続けて」

女性「ガマルが悪事を行うたびに代理の犯罪者がオーガによってでっち上げられるんです、私の婚約者も濡れ衣を着せられ死罪になりました。あの人は牢屋で二人の密談を聞き処刑前に手紙で私に知らせてくれたんです・・・どうか、どうかこの晴らせぬ恨みを・・・」

レオーネ「・・・分かった、そいつら地獄に叩き落してやる!!」

女性「ありがとうございます!!ありがとうございます!!」

戻つて

チャリン

レオーネ「これはその依頼金だ」

優菜「ずいぶん入つてるな」

タツミ「その人よくこんなに貯めたな」

レオーネ「性病の匂いがした・・・体を売り続けて稼いだんだろ」

悠「嘘だろ・・・？」

タツミ「・・・そんな」

ナジエンダ「事実確認は？」

レオーネ「有罪だ、油屋の屋根裏部屋にて断定できた」

ナジエンダ「・・・よし、ナイトレイドはこの依頼を受ける。悪逆無道のクズ共は新

しい国にいらん、天罰を下してやろう」

レオーネ「ガマルを殺るのは容易だが、オーガはなかなか強敵だぞ」

鬼のオーガ

鬼と呼ばれるだけあり・・・その剣の腕は犯罪者たちから恐怖の対象とされている、普段は多くの部下と見回りに出ており、それ以外は警備隊の詰め所で過ごす。賄賂は自室にガマルを呼んで受け取っている、非番の日は役目詰め所を離れるわけにもいかず、宮

殿付近のメインストリートで飲んでゐる

タツミ「実行は非番の時にしか無理そうだな」

ナジエンダ「……だが宮殿付近の警備は嚴重だ、指名手配中のアカメに頼むのは危険だな」

アカメ「メインたちが戻るのを待つのは？」

タツミ「でもアイツ等いつ仕事が終わるかわかんないんだろ？」

アカメ「うん」

タツミ「だったら、俺たちだけでやり遂げようぜ！」

ナジエンダ「ほう……お前がオーガを倒すというのか？」

タツミ「え？」

レオーネ「私も顔バレしてないが今の発言、責任は取つてほしいよなあ」

アカメ「今のお前には無理だ……」

タツミ「こうしてる間にもまた濡れ衣を着せられる人がいるかもしれないんだろ？」

だったら俺はやるよ、大切な人が理不尽に奪われる……そんな思いもう誰にもさせた

くねえ……」

ナジエンダ「分かった……お前の決意くみ取ろう、オーガを消せ」

レオーネ「よく言つたタツミ！気持ちのいい覚悟だ！」

ナジエンダ「レオーネとアカメは油屋を頼む」

レオーネ「分かったよ」

ナジエンダ「優菜と悠も一緒にオーガを消してこい、多分大丈夫だろう」

タツミ「どうだアカメ！俺だって決める時は決めるんだ！」

アカメ「・・・きちんと任務を遂行し、報告を終えて初めて立派といえる。この時点でいい気になってるようでは死ぬぞ」

タツミ「なっ」

街へ

レオーネ「ここを真つすぐ行けばメインストリートだ」

タツミ「分かった」

レオーネ「・・・これはアカメの昔話なんだけどな」

タツミ「ん？」

レオーネ「アカメは子供の頃終い揃って帝国に買われたんだよ、まあ・・・貧乏な親が子供を売るのはよく聞く話だ、そして同じ境遇の子と一緒に暗殺者育成機関に入れられ殺しの教育を受けて・・・過酷な状況の中を生き延びてきた、そうして帝国の命ずるままに仕事をこなす。一人の暗殺者が完成した・・・だがアカメは任務をこなすごとに帝国の闇を感じ取り、当時標的だったボスに説得され帝国を離反、真に民を想う革命軍

側についたんだ。そうなるまで共に育った仲間ほとんど死んだらしい・・・何が言い
たいかわかるかい？」

タツミ「殺しのプロとして素人の俺がぬるいつて言いたいんだろ？」

レオーネ「ま・・・今日のが成功したらお前にも分かるさ」

タツミ「おう！絶対成功してくるぜ！」

レオーネ「グツドキル！」

その後

オーガ「たつぷり尋問した後の酒はうめえや」

男「オーガ様！」

オーガ「あん？」

男「お勤めご苦労様です、先日はお世話になりました」

オーガ「おう、困ったことがあったらいつでも言ってみてこい」

タツミ「・・・あのう、オーガ様」

オーガ「あん？」

タツミ「ぜひお耳に入れたい話があるんですが・・・」

オーガ「なんだ・・・？言ってみろ」

タツミ「表ではちよつと・・・路地裏でお話しできませんか？」

オーガ「オラ、ここならいいだろ」

タツミ「お願いします!!俺たちを帝都警備隊に入れてください!」

スライディング土下座ア

オーガ「ハア・・・」

悠「金を稼いで田舎に送らなきゃならないんです」

少し泣きながら

優菜「もう手持ちもなくて・・・このままじゃ飢え死にしています」

号泣で

オーガ「んな事だろうと思っただけ、正義の手順を踏んでこいボケ!」

タツミ「・・・ですが、この不景気では倍率が高すぎます」

オーガ「仕方ねえだろお前が力不足ってこったな」

全員剣を抜きオーガとタツミ斬りかかる

ドサツ

タツミ「・・・やった」

すぐに起き上がりこつちに来ていたので

優菜「邪魔すんな」

タツミ「え!?!」

腕を切り落として

悠「イフリート」

イフリート「オラオラオラオラオラオラオラア！」

ドゴオ

優菜「最後任せた」

タツミ「おう！」

ザザザ

戻った

ナジエンダ「強敵の始末ご苦労だったな！見事だ！」

タツミ「おう！どーだアカメ！報告おえて任務終了、なんとか無傷でやり遂げたぜ、

さあ俺を認めろ……」

バツ

上半身を脱がす

タツミ「なっ……なんだ！何すんだ！」

アカメ「皆抑えて！」

ナジエンダ「分かった」

レオーネ「お！なんだか面白そうだな」

悠「なんだこれ？」

優菜「知らね」

タツミ「え・・・何・・・この展開・・・これってまさか・・・！」

パンツ以外全部脱がせた

タツミ「いやあああああ!!」

アカメ「・・・よかった・・・強がつて傷を報告せずに毒で死んだ仲間を見たことがある、ダメーじがなくてなによりだ。初めの任務は自防率が高い・・・良く乗り越えた！」

タツミ「あ・・・ああ」

レオーネ「アカメはお前に死んでほしくないから厳しく当たってたんだよ」

ナジエンダ「料理は仲間とのコミュニケーション、難しい狩りで暗殺を学ぶ・・・ど

れもお前に取つてプラスな日々だと気づいていたか？」

タツミ「え・・・あ・・・そうなの？ごめんアカメ・・・俺・・・誤解してた」

アカメ「いいさ、これからも生還してくれ・・・タツミ」

タツミ「ああ、これからもよろしくなアカメ！」

レオーネ「何も着ないで何をヨロシクするつもりなんだよ」

タツミ「お前らが脱がしたんだろうが！」

ナジエンダ「・・・よし、じゃあ次はマインの下について頑張ってみろ」
タツミ「えっ」

レオーネ「一難去つてまた一難だな」

タツミ「あ・・・あいつですかあー？」

優菜「こりや大変だわ」

第九十五話（アカメが斬る！に来た『第三話』より）

タツミ「憧れてた帝都もこうして見回してみると、表情暗い人も多いなー」

マイン「そりやこの不景気と恐怖政治じゃね」

悠「日中こうも堂々と歩いて平気なのか？」

マイン「え・・・だって、顔割れてんのあいつ等四人だけだし」

指名手配所を見る

優菜「上がアカメ、左からナジエンダ・・・一個飛ばしてシエーレか」

悠「一個飛ばして？」

タツミ「真ん中のやつ誰だ？」

マイン「ブラートよ」

タツミ「ええっ!？」

マイン「ナイトレイドに入ってイメチェンしたの」

タツミ「変わりすぎだろ!？」

優菜「この爽やかイケメンが、あの優しい不良みたいなのに・・・」

マイン「てことで堂々と歩けるあたし達はここで任務よ」

タツミ「・・・上等だ、その為に俺を連れて來たんだろ？」

マイン「よしっ！帝都の市街調査開始っ!!」

タツミ「何だかわかんないけどおうっ!!」

市街調査Ⅱ荷物持ちですね、はい分かってましたよ

マイン「ふーっ買った買った、やっぱ春はピンクの服が映えるわね」

悠「そうだね」

マイン「オフの時くらい羽を伸ばさないとね♪」

優菜「ソウダネ」

マイン「よしっ任務達成！」

タツミ「これただのシヨツピングじゃねえかあ!!!」

マイン「頭が高い」

パン

ピンタア

タツミ「おふう!？」

マイン「アタシが上でアンタ等が下！部下が口答えスナナ！荷物持ちになれただけで

もありがたいと思いなさい」

踏みつける

タツミ「グエツ」

悠「怒らせない様にしよう」

優菜「うん」

タツミ「上司たって一時的な上司じゃねえか！」

マイン「上司の力なめんな新人、例えば」

何かを書き出す

マイン「あんたをこのルーレットで他の漫画に飛ばすことも可能!!!」

嘘だろオオオ!?

マイン「あんたの好きな「はつきあい」もあるわよ」

優菜「いやそれより、それ挟んでるの「コープスパーティ」!？」

タツミ「そこ外した時恐すぎだろ!もつと萌え系マト広げてくれよ!!・・・ったく」

ざわざわ

なんだ?カイジか?

タツミ「なんの騒ぎだ・・・?」

マイン「帝国に逆らった人間の公開処刑でしょ、帝都ではよくあることよ」

何人か血だらけで張り付けられている

優菜「全員右腕がないな」

タツミ「な・・・なんて非道いことを・・・」

マイン「ああいう事を平気でやるのが大臣・・・世継ぎ争いで今の幼い皇帝を勝たせたキレ者よ、アタシは・・・あんな風にはならないわ、必ず生き延びて勝ち組になつてやる!!!」

優菜「可哀そうだ、こんな世の中で悶えながら死ぬよりは・・・」

悠「どうするつもりだ？」

優菜「来世にかけたほうが救いだな、アリエル指弾」

ピンピンピン

バシユバシユバシユ

ガクツ

気が消えた

優菜「ちゃんと天国に送つてやる、安らかに逝け」

その後

ナジエンダ「新しい依頼だお前達、標的は大臣の遠縁にあたる男イヲカル。大臣の名を利用し女性を拉致しては死ぬまで暴行を加えている、奴を警護しおこぼれに与る傭兵五人も同罪だ。重要な任務だ、全員で掛かれ!!」

またその後

優菜「さてそろそろか」

敵「なんとしても刺客に追いつけ！逃げられれば我々が大臣に殺されるぞ！！そう遠くへは行つてないはず・・・」

レオーネ「来た来た、さて今回は暴れちゃうぞ」

・・・

一瞬！

優菜「出る前に全部倒しちゃった」

レオーネ「あくスカツと爽やか♡」

シエーレ「なかなか強かったですね」

優菜「いや、気が一つ逃げてる」

レオーネ「何!？」

優菜「タツミ方へ行つてる・・・一応行つた方がよさそうか？」

アカメ「行こう」

行つたら・・・

マイン「何よせつかく認めてあげようと思つたのに！

タツミ「うるせえ！お前天才じゃないな！秀才止まりだ！」

マイン「ハア!?天才にに決まつてるでしょ！」

タツミ「だいたい天才は自分で天才って言わねーんだ！」

アカメ「……………」

レオーネ「駆けつけなくても大丈夫だったな」

次の日

ナジエンダ「今回の標的は帝都で噂の連続通り魔だ、深夜無差別に現れ首を切り取っていく。もう何十人殺されたかわからん」

タツミ「その中の3割は警備隊員なんだろう？強えな」

ラバック「間違いなくあの首斬りザンクだろうね」

タツミ「なんだソレ？」

マイン「知らないの？ほんとト田舎に住んでたのね」

シエーレ「スミマセン、私も分かりません」

マイン「シエーレは忘れてるだけだと思っわ」

タツミ「首斬りザンク、元は帝国最大の監獄で働く首斬り役人だったそうよ」

悠「大臣のせいで処刑する人数が多くて毎日毎日繰り返し繰り返し命乞いする人間の首を切り落としていたんだと」

優菜「何年も続けてるうちにもう首を斬るのが癖になってしまったそうよ」

タツミ「そりゃおかしきもなるわな……………」

マイン「で監獄で斬ってるだけじゃ物足りなくて辻斬りに、討伐隊が組織された直後に姿を消しちゃったんだが・・・まさか帝都に出てくるとはな」

タツミ「危険な奴だな、探し出して倒そうぜ!!」

ブラート「まあ待てタツミ」

タツミ「・・・兄貴?」

ブラート「ザンクは獄長の持ってた帝具を盗み、辻斬りになったんだ。二人一組で行動しねえと・・・お前危ないぜ」

優菜「そういや帝具ってみんなの以外ここに残りはねえのか?」

アカメ「今はない、それに合ってなかったら本部に送る」

タツミ「合ってない?」

ブラート「帝具は人を選ぶんだ、最初にどう思ったかとかかな?カッコいいと思ったら使える、逆にかっこ悪いと思ったら拒絶反応を起こすぞ」

アカメ「私達は殺し屋チームだが帝具集めもサブミッションとして存在する」

優菜「タツミは何かカッコいい!とか強そう!とか思ったやつないか?」

タツミ「・・・兄貴のインクルシオはカッケえと思った」

優菜「・・・ブラート、インクルシオ一回貸して」

ブラート「別に構わねえが」

貸してもらった

優菜「ガイア、出来るか？」

ガイア「人間は面白い物を作りますね、出来ますよ簡単です。言ってもコピーですから」

優菜「作ってくれ」

ポン

ブラート「そいつは・・・！」

ナジエンダ「インクルシオか・・・」

優菜「ほい、タツミつけてみる」

タツミ「ああ・・・インクルシオ!!」

ゴウ

ギユアアアア

ギン

タツミ「お、おおー！使えた!!インクルシオが使えたぞ!!!」

ナジエンダ「帝具のコピーか・・・凄いな、使える」

優菜「戦力UPってことで」

夜にしばらくすると

優菜「タツミ気が小さくなった！近くに大きな気もある、ザンクだろう」
悠「なら行こう」

着くと

ザンク「その刀……かすり傷も許されないってのはズルいねえ……」
アカメ「私も動きや心を見られている……お互い様だ」

優菜「なんだ、もう決着か」

ザンク「また仲間か、それじゃあ」

アカメ「!!避ける!!」

ガキイイイン

ザンク「……お前も強いんだな、避けようとしていなかった」

優菜「ガードしなくても、お前くらい秒で倒せる」

ザンク「本音のようだな、よしならば死ね！」

!!!

蓮？

今度は竜司……杏……双葉……母さん……父さん……悠

入れ替わりながら何度も現れる

タツミ「どうしたんだオイ！優菜!!」

ザンク「幻視、その者にとって一番大切な者が目の前に浮かび上がる」

タツミ「優菜!! 見えているのは幻だ! 騙されるな!」

ザンク「無駄だ、一人にしか効かぬが催眠効果は絶大、そして・・・どんな手練れの者であろうと最愛の者を手にかけることなど不可能、愛しきものの幻影を見ながら死ぬ!」

優菜「確かに斬りにくいな、だが」

ザンク

優菜「意味なんてねえ」

ザンク「コイツ・・・容赦なく・・・何故だ!! 一番愛する者が視えたはずだ!!!」

優菜「知らんね、何人も現れやがって気持ちわりい。お前が死ぬ」

さつき見た通りなら心を読まれるんだらうなら単純に行こう

ザンク

ザンク「一瞬で・・・」

優菜「じゃあな」

ドサツ

ザンク「音が・・・止んだ・・・」

優菜「これはもらって行くぞ」

帝具を取る

優菜「向こうに行ったらしつかり謝って来い」

ガクツ

優菜「おっと」

少し無茶したか

一瞬だけ3になったが、まだちよつと厳しいな
だけどこれができれば・・・まあその話は後だな

次の日

次はシエーレらしく

今は

悠「死ぬうううううう」ブクブクブク

優菜「おい!!しつかりしろ!!」

タツミ「・・・」

優菜「き・・・気絶してる・・・」

パシン

タツミ「はっ!!!」

優菜「あともう少しだ頑張れ!」

鎧泳ぎやべえ

ついた

ゼーゼーゼーゼー

シエーレ「鎧泳ぎお疲れさまでした」

悠「重いいいい」

優菜「手え貸してやる」

悠「ああ」

グツ

ガシヤン

悠「ゼーゼーゼーゼー」

タツミ「重え・・・ハードだぜ」

シエーレ「暗殺者養成カリキュラムに記された鍛錬法です、私はアジトでは役割とかありませんので集中して鍛えられます」

タツミ「・・・なんで役割なの？」

シエーレ「料理は焦がしてアカメをクールに怒らせました、掃除は散らかってブライトを困らせてしまいました、買い出しは塩と砂糖を間違えてレオーネに笑われました、洗濯は・・・うっかりマイン本人も一緒に洗ってしまいました」

タツミ「なんていうかドンマイ『最後のは良くやった』」

悠「そういえばシエーレ、俺たちと皆が会った時帰還メンバーにいなかったよね」

シエーレ「えー何か理由があつた気もしますが忘れました」

優菜「ソウデスカ」

シエーレ「こんなんですいませんせ」

ポロリ

眼鏡落ちた

シエーレ「あつ！眼鏡眼鏡・・・」

タツミ「シエーレはなんでこの稼業に？」

シエーレ「・・・遡つて説明しますと・・・私は帝都の下町で育ちました。幼い頃から何をやってもドジばかりで、私には一つとして誇れるものがありませんでした「アイツはどこか頭のネジが外れてる」そんな風によくからかわれていました・・・ですが、そんな私にも仲良くしてくれる友達がいたんです。私がこんなにドジをしても、彼女がは決して私の事をバカにはしませんでした。彼女という時間だけが私にとつて唯一の幸福でした。その日までは・・・彼女の家で遊んでいると男が殴りこんできました。友達の元彼氏でふられたことを逆恨みして家で暴れ始めたんです。そして・・・とうとう私の目の前で彼女の首を絞め始めました。男は麻薬でおかしくなつて、私は・・・彼

女を助けなきやと思いました。驚くほど冷静でした。刃物を持ってきて隙だらけの男の首筋……急所に差し込みました。男はあっけなく死にました……彼女はその様に震えていましたが、逆に私の頭はクリアでした。正当防衛として片がつきましたが、私が彼女と会うことは二度とありませんでした。そして後日……道を歩いていると男達胃がいきなり襲いかかってきました。殺された仲間の復讐だと、どうやら男はギャングの下つ端だったようです。「お前の親はさつき殺しておいた……次はお前だ」と四人は猛りきっていました。そんなことを言われたのに私は、驚くほど平常心でした。男の単純な一撃をかわしに、護身用のナイフで急所を刺す。その男を盾に他の男たちも次々と殺していききました。男たちを全員殺した時……私は確信したんです。ネジが外れていくからこそ、殺しの才能がある。社会のゴミが掃除できる。役に立てることが一つある……と、以後帝都で暗殺をやっていたところを革命軍にスカウトされました」

優菜「そこで暗殺者養成カリキュラムか」

シエーレ「ハイ、私は貴方達ほど即戦力ではなかったですから」

数日後

ナジエンダ「悠、優菜……そろそろ傷も癒えてきただろ、ザンクから奪取したこの帝具……二人のどちらかつけられるならつけてみる」

悠「他の皆はいいのか？」

ブライト「帝具は一人一つだ」

ラバツク「体力、精神力の摩耗が半端ないからね」

悠『能力は良いんだが外見がなあ・・度胸いるよな』

優菜『いつもカオスの所に入れておけば目立たないな、見た目は悪くない。第三の目っほくて・・・厨二病言うな』

まず悠がつけた

ナジエンダ「文献に載っていなかった帝具だから謎が多いが・・・」

アカメ「心を覗ける能力があったろう、私を見てみる」

悠「夜は・・・肉が食いたいと思っている」

アカメ「完璧だな」

レオーネ「いやまだ能力発動してないだろ」

マイン「心の覗かれるなんて嫌よ、五視あるならもつと別の能力試しなさいよ」

悠『俺が視たいのは・・よく聞くのは透視だな、あるなら出る!』

カツ

マイン「どう?」

悠「ブツ」

ブツ?

*悠は皆の下着姿を見て興奮して鼻血が出ています

タツミ「え？鼻血!？」

ラバツク「拒絶反応か!？」

優菜「いや、なんか違う気が・・・」

ブシュ

タツミ「今度は頭!？」

ラバツク「今度は拒絶反応だよな！」

アカメ「急いで外そう」

ナジエンダ「相性だ・・・お前には合わなかったのさ」

優菜「いや、こいつ安らかな表情で気絶してやがる」

タツミ「なんでだよ！」

優菜「じゃあ次は私か」

付ける

頼むぞ

まずは洞視はやったから・・・遠視

おおく遠くが見える

じゃ次は未来視

悠が起きる

悠「はっ!!」

レオーネ「あつ起きた」

幻視、タツミにしよう

タツミ「サヨになった!」

最後に透視

皆の下着が見える

あつコレで悠が・・・

ナジエンダ「大丈夫みたいだな、ならその帝具はお前のものだ。あとこの帝具に関する文献を読んでおくといい」

三人でのぞき込む

悠「たくさんあるな」

優菜「これで一部?」

ナジエンダ「そこに載ってる帝具だけでも頭に入れておけ」

タツミ「ところで一番強い帝具ってなんだ?」

ナジエンダ「・・・用途と相性で変わるさ・・・だがあえて言うなら・・・氷を操る帝具・・・だと私は思う。幸い使い手は北方異民族の征伐に行ってるがな」

ナバツク「北の異民族は強いからね、ホラ北の勇者つているじゃん」

タツミ「あ、それは俺でも知ってる」

優菜「北の勇者ヌマ・セイカ北方異民族の王子、槍を持つては全戦全勝。凄まじい軍略を併せ持ち民の絶大な信頼を受ける正に帝国の脅威。彼の精強な軍隊は自国の要塞都市を拠点とし、帝国への侵略を強めていた。故に帝国は侵略に対抗すべく北方征伐部隊を組織した・・・だよな確か」

ラバツク「心配いりませんっていくらあの女でも征伐に一年はかかりますって」

ナジエンダ「・・・そうだな・・・」

タツミ「フツフツフツ強敵上等！どんどん帝具も集めようぜ！」

レオーネ「やけにゴキゲンだな、いきなりどーした」

タツミ「いや？なんでもねーよ」

優菜「そろそろ寝よう」

悠「だな」

優菜「それじゃ、お先に」

次の日

女性「こんにちはレオーネ」

老人「今度肩もんどくれよ」

青年「今日もエロイな！今夜飲もーぜ！」

少年「レオーネ遊んでよーっ」

タツミ「他と違つてスラムは生き生きしてんだな」

レオーネ「雑草魂だね、生まれたときから酷い貧乏ならたくましくもなる」

悠「にしても姐さん凄い人気だな」

レオーネ「私の生まれ育つた場所だからなホームだホーム！これでもマツサージ屋として腕がいいと評判・・・」

小太りの男「いたぞっレオーネだ!!溜まったツケを払つてくれ！」

893 風な男「博打で負けた金清算しろ」

893 風な男2「兄貴からちよろまかした金返せゴルア!!!」

逃げながら

レオーネ「どーだ、面白いところだろ？」

優菜「姐さんそのうち標的にされるよ!？」

逃げ切つた

タツミ「ここまで来ればまいたる、なあ姐さ・・・つてアレ？」

優菜「姐さんどこ行つた？」

？「ややつ私の正義センサーに反応アリ！そこな君等！何かお困りですかな？」

タツミ「その服は・・・」

セリユー「帝都警備隊セリユー、正義の味方です!」

犬? 「キュウウン、キュウウン」

優菜『ギャワイイ!!!』

セリユー「コロちゃんお腹すいたの? ガマンしてね!」

悠「ソイツ・・・犬か?」

セリユー「帝具ヘカトンケイル、ご心配なく悪以外には無害ですから」

優菜「コロちゃんの方が呼びやすいな」

セリユー「ところで何を困ってたんですか?」

タツミ「あ：いや、道に迷ってしまったって、元いた酒場の名前は分かるんですが・・・」

セリユー「それは大変! パトロールがてらお送りしますよ。こっちは、はぐれない

てくださいね!」

タツミの手を引く

コロ「キュウ! キュウウ!」

優菜「あつ嫉妬してんなコイツ」

タツミ「帝都警備隊は全員この生き物を飼ってるんですか?」

セリユー「まさか、帝具持つてるのは私だけです。コロちゃん・・・あ・・・私がつ

けた名前なんですけど・・この子は相性が良くない使い手だと動こうともしないらしいんです。上層部には使える人間がいなくて、私達ヒラまで適性検査を受けてまして、その時私の正義の心にこの子が応じてくれたんです。だから今では私の相棒なんですよ。ね、コロちゃん」

コロ「キューツ♡」

タツミ「へ・へえーっ」

セリユー「ではお店はこちらになりますので」

優菜「ありがとうございます」

セリユー「なんの！悪を見つけたらご一報ください、私達が消滅させに行きますので！」

タツミ「アハハそれは心強いです」

セリユー「行くよコロちゃんお腹すいたでしょ、死刑囚5人でどうですか？」

コロ「キュー♡」

行つた

優菜「報告だな」

タツミ「ああ」

その夜

色街の屋根の上

タツミ「ここが帝都の色街か・・・ドキドキするな」

レオーネ「そのストレートな反応可愛いねえ、さーてお仕事して借金返さないと！変身！ライオネル！」

獸耳が生えて髪が伸び手全体に毛が生えた

レオーネ「よしっこの格好になると昂ぶる昂ぶる！さ、潜入して殺すよお前ら」

タツミを担ぐ

優菜「悠は私ごと」

ダウン

超サイヤ人1

オーラは消す

屋根裏まで来た

レオーネ「ふいーっ到着！」

タツミ「これ潜入って言うのか？」

レオーネ「こっちこっち早く来いよ！」

のぞき込む

下は乱れに乱れた女達が

優菜「この匂いは・・・薬か」

タツミ「うゝっ」

男がやって来た

親分「おーやつてるやつてる、お前達ちゃんと働けばもつと薬回してやるからな！」

女達「ハアーイ♡」

子分「ん？親分・・・コイツ見てくださいよ」

一人倒れている

親分「あーダメだなコリヤ、魚くせえし壊れてるわ」

女「ああ・・・もつと薬をおおっ」

親分「廃棄処分、新しいのと入れ替えろ」

子分が女を殴った

子分「またスラムのアホ女達に声かけましようよ」

親分「おう、あそこのろくでなし共は金の為なら何でもするからな」

悠「依頼通りのヒデエ奴らだな・・・許せねえ！」

レオーネ「今殴られた子・・・スラムの顔馴染みだ・・・ムカツク・・・さつさと標的

始末しよう！」

タツミ「了解・・・オレもシエーレの話で麻薬関係には腹立ってたんだ・・・」

優菜「奴らが集った所を叩こう」

居間

子分「親分……そろそろ葉の販売ルートも拡張しましょうよ!」

親分「そうだな……チブル様の所へ相談に行ってみるか」

ゴガア

優菜「お前達が行くところは」

タツミ「地獄だろ!!」

優菜「先行くぞ」

周りのやつを全員悠たちに任せて子分の前に行く

子分「なっ……!ざ……ざけんな!!」

パンパンパン

優菜「……この中村優菜は……いわゆる不良のレッテルをはられている。ケンカ相手を必要以上にぶちのめし、今だ病院から出てこない奴もいる。威張るだけで能無しなので気合を入れた奴は二度と来ることはなかった、料金以下のマズい飯を食わせるレストランには、代金を払わねーなんてのはしよっちゅうよ!だが、こんな私にも吐き気のあるような悪は分かる!!悪とは、てめー自身の為だけに弱者を利用し踏みつける奴の事だ!!ましてや女を!!おめーのやることは被害者にはわからねえし表ざたにはならね

え・・・だから、私達が裁く!!」

親分「悪だと？悪とは敗者の事、正義は勝利の事、勝ち残った者の事だ、家庭は問題じゃない敗けた奴が悪なんだよ!!」

優菜「この世で一番悪い奴は、自分が悪だと気づいていない最もドス黒い悪だ。お前達の裏にいるのはそういうやつだ、違うか？」

子分「黙れえ!!」

手で受け止め

ベジツトソードで斬った

親分「な、何が欲しい！金か！薬か！ほしけりやくれてやる！助けてくれ!!」

優菜「二度とこんなことはしないと約束するなら、私達は手を引く」

タツミ「何を考えているんだ！優菜!!」

親分「わかった・・・二度としねえ、だからたす・・・」

パパパン

親分「え・・・？」

優菜「さつき撃つておいた弾の時間を衝撃を遅らせておいた、イエスと言おうがノーと言おうが殺すためにな」

親分「二度としなかつたら、もう手を引くつて・・・さつき・・・」

レオーネ「スラムに元医者の子いさんが居るんだが……これがまだまだ腕がいい、事情を話して診てもらうさ。若い女の子大好きだから喜ぶだろ」

タツミ「姐さん……」

レオーネ「助かる可能性があるに越したことはないからな……」

タツミ「……へっなんだかんだで優しいじゃん」

レオーネ「私の顔馴染みがいたからだよ」

タツミ「どんな理由だっていいよ、そこに少しでも希望があるなら」

レオーネ「……タツミ、前から思ってたけど」

ペロ

レオーネ「お前のそういう顔……可愛いなあ……」

耳舐めた！

タツミ「な……なっ……！」

レオーネ「ふふ……文字通りおねーさんが唾つけておいたんだ」

優菜「へい、顔赤くしてる！」

悠「へいへい、デレてるデレてる!!」

レオーネ「いい男に育てばおねーさんのものだ……さて、別動隊の皆も無事かな

？」

ヘル『ヤバい!こっち來て!!』

向こうに行かせてたヘルから・・!?

優菜「どうした?」

ヘル『シエーレが!!!』

悠「カオス!!」

タツミ「どうしたんだ!?!」

優菜「行つてくる」

レオーネ「まて」

グオン

シエーレの胴体が・・・!

優菜「クロノス!!」

ドオオオオオオ

コイツは・・・ヘカトンケイルか、ということはセリユーカー

とりあえず、こいつの口開いて

シエーレの上半身を出す・・・

下半身とくつつける

そして時は動き出す

シエーレ「え？」

マイン「シエーレ！」

シエーレ「私は今確かに・・・」

セリユー「なんで！どうして生きてるんだ！」

優菜「よお」

マイン「あんたは！」

セリユー「お前は昼間の！！お前もナイトレイドだったのか！！」

兵士「あれだっ！交戦してるぞ！！応援をもっと呼べえ！！」

優菜「お前達は逃げてくれ、あとは任せろ」

シエーレ「ですが！」

優菜「ですがじゃない！死にたいのか！！」

悠「俺達は死にやしないさ」

兵士「うおおお！！」

ドガ

肘でみぞおちを突く

兵士「ガハッ」

ガクッ

優菜「任せろ」

グオン

セリユー「逃がさない!!!」

ドガガガガ

口から機関銃かよ

キンキンキンキン

全部弾く

優菜「もし、帰れたら・・・また一緒に飯食つて馬鹿笑いしようや」

シエーレ「優菜さん・・・」

ガオン

セリユー「せめてお前達だけでも!!」

優菜「お前・・・両腕がないじゃないか・・・そこまでしてなんで」

セリユー「正義のためですよ!!お前達倒すために!!師匠の仇を返すために!!!」

優菜「・・・歪んでる、お前からしたら私達は悪かもしれねえが・・・お前は正義な
んかで動いてねええ・・・私情の恨みでしか動けねええ奴に!!正義を名乗る資格はねえ
!!!」

セリユー「悪に言われたくないですねえ!!コロちゃん!!!」

コロ「ガアアアア!!!」

悠「イフリート!!」

イフリート「オラオラオラオラオラオラ」

コロ「ごっ!」

イフリート「オラア!!!」

悠「ボラーレヴィーア!」

セリユー「そんな!コロちゃん!!」

兵士「皆進めー!!」

避けて殴ってセリユーの弾幕をかわしながらやりあつてると

コロ「ガアアアア」

ダブルラリアット!!?

ドガア

兵士「捕らえろ!!」

ピカーッ

神様「潮時じゃの」

優菜「なんだ?この話は終わりなのか?」

神様「終わりじゃ連れて行くぞ」

兵士「撃てーッ」

パアン

兵士「当たらない!？」

神様「行くぞ」

ピカーッ

兵士「グッ」

光が消える

兵士「!? 奴らはどこに!？」

セリユー「クソーッ!!!!」

？「クツクツク、奴らは元の世界に帰ったか・・・」

？「この世界から連れて行くのは、ナイトレイドただぞ。分かっているな？あの方

からもらったのは少ししかないからな」

？「分かっている、行くぞ」

ドギューン

第九十六話（盾の勇者の成り上がりに来た『第九話』より）

ん？朝か・・・起きよ

グッ

・・・は？

悠「うくんむにやむにや」

何だ悠か・・・裸!?

尚文「優菜、大変だ！フイーログ・・・（。ㇿ。）」

優菜「おい、固まるなって」

ダダダダ

ラフタリア「何してるんですか、ナオフミ様！優菜さんh・・・（。ㇿ。）」

尚文がラフタリアとの目を塞ぐ

尚文「お前が見るにはまだ早い・・・戻るぞ」

優菜「おい！誤解するな！」

尚文「邪魔したな」

バタン

優菜「あ・・・」

悠「ん？どうした？」

優菜「お・ま・え・はく（怒）」

ゴツン

悠「痛つてえー！何すんだ！」

優菜「何すんだじゃねーよ、お前なんで裸でいるんだよ！勘違いされたじゃねえか！」

と思つた」

悠「そんなもんいくらでも挽回できるだろ」

優菜「とりあえず・・・服着ねえとお前」

悠「ああ、服がないのか、どうりで寒いと思つた」

優菜「はあ、待つとけ」

尚文のところへ

尚文「終わったか？」

優菜「だから勘違いしてんじゃねえ、アイツ服無いからなんかないか？」

尚文「なんだよ、連れ込んだ時服着てなかったのか？」

優菜「連れ込んでない！」

尚文「わかつたわかつた、ちよつと待つとけ」

少しして

尚文「これでいいのか？売るつもりだったんだが・・・」

優菜「助かる」

戻った

優菜「持ってきたぞ」

悠「助かった・・・」

服を着た

優菜「おおくサイズはちょうどよかったな」

悠「ああ、それじゃ、下行くか」

下に行く

尚文「おおく来たか」

悠「なんか誤解させたみたいで、すいません」

尚文「行きながら聞こう」

道中

尚文「もう一人の人格？本当か？それ」

優菜「ファンタジーだよなホント」

尚文「いや、その前に・・・お前二重人格だったのか」

悠「俺からしたら・・・なんでフィーロこんなでかくなってるの？」

いつもの何倍だ？これ

尚文「今から聞きに行くところだ、あいつ・・・」

優菜「お前なんか悪いこと考えてるだろ」

尚文「後は任せろ」

奴隷商の所へ

尚文「奴隷商！」

奴隷商「おや勇者様何用で・・・」

尚文「・・・正直に話せ、お前俺に何の卵売った・・・？」

奴隷商「何といわれましても内訳にはフィロリアルと・・・」

尚文「フィロリアルだって!?!じゃあコレのどこがフィロリアルなんだ!?!」

奴隷商「お・・・っおおおお・・・っコレはコレは・・・まだ数日ですのにここま
で育てるとはさすが勇者様!!」

尚文「世事はいいからどうなんだ!?!」

奴隷商「もしかしたらフィロリアルの主かもしれません」

尚文「主？」

奴隷商「野生のフィロリアルには群れをつくる習性がありました、それを取り仕切る

主がいるという話です。フィロリアル・キングもしくはクイーンと呼ばれています。これは雌ですのでクイーンですネハイ！」

尚文「・・・本当なのかそれは」

奴隸商「実は私も見たことがないんですよ、めったに人前に現れないとのことでは」

尚文「結局知らないんじゃないか!!」

奴隸商「預からせていただければもう少し調べてみますが・・・ハイ」

後ろから筋肉モリモリモリマツチョマンの変態ゲフンゲフン・・・大男が二人出てきた

尚文「それはいいが・・・間違ってもバラさないと分からないと言つて殺すなよ」

フィーロ「クエ!!」

奴隸商「分かっておりますとも」

尚文「何かあつたら慰謝料を要求するからな」

フィーロ「クエ・・・ツ」

ラフタリア「またねフィーロ」

悠「ちよつと酷じゃねーか？」

フィーロ「クエ・・・」

ガシヤンツガシヤツ

フィーロ「クエエエエツクエエツ」

奴隷商「ああ困りましたねそちらを抑えなさいつ」

悠「まだ生まれただばかりだ、寂しいんじゃないか？」

尚文「……そんなこと言ってもな……」

フィーロ？「……さま」

奴隷商「こ……これは……つ」

優菜「女の子になりやがった……！」

フィーロ「ご……ごしゅじんさま……！」

その後

尚文「親父親父親父くく!!」

ドンドン

扉を叩く

親父「なんだなんだ？もう店じまいだぞ……ん？」

フィーロ「ごしゅじんさまー？このひとだれー？」

尚文「お前は黙ってろ!!」

ラフタリア「夜分にすみません……」

親父「……なんだアンちゃんたちか……いい奴隷を買えたからって自慢に来るな

よ……」

尚文「ちつげーよ!!」

ファイロ「んー?なんか食べもののニオイがするー!」

親父「ああちようど晩飯にするトコロだったんだ、よければ一緒に・・・」

ファイロ「本当ー!?わああああーいつ」

尚文「あつコラ!!ファイ・・・」

シチューの入った大鍋を直に持ち上げ

ファイロ「いっただっきまー・・・すっ!!!」

フィロリアル^の姿になつて全部食つちまつた

ファイロ「うーん味はいまいちー」

ラフタリア「あああ・・・!!親父さんのご飯を全部・・・!!」

尚文「・・・すまん、あとでなにか奢らせてくれ・・・とりあえずファイロ!!人間に

戻れ!!」

ファイロ「ご飯食べたばっかだからあとでねー」

パッ

ピピッ

ラフタリア「あ・・・っ」

尚文「・・・いいからもどれー!!」

ビリビリビリ

ファイロ「びぎやゝゝゝつ」

戻った

ファイロ「うわあああんつイタイいゝゝゝつ」

尚文「主人に絶対に逆らえない設定にした」

優菜「尚文……」

ファイロ「うわーんっ」

親父「まさかその子が魔物だとは……それにしても相変わらずアンちゃんはスパルタだな……」

尚文「スパルタなもんか！ 奴隷商のトコでも暴れて大変だったんだ！ しかも普通の魔物紋じゃ効かないから高位の紋を刻み直して……というかなんで変身するんだ!？」

親父「ま……まあまあ落ち着け」

ファイロ「ぶーっだつてこの姿じゃないとごしゅじんさまファイロと一緒にいてくれないんだもん」

尚文「なんだつて!？」

ファイロが尚文の腕に抱き着く

じ……

俺とラフタリアを見る

ラフタリア「なっなんですか？」

フィーロ「ごしゅじんさまはあげないよ？」

ラフタリア「な・・・何を言ってるんですか!? この子はっ」

優菜「私は・・・」

悠の腕に抱き着く

優菜「悠がいるから大丈夫だから」

ラフタリア「ちょ・・・っなんで私だけ相手がいないみたいになってるんですか!？」

尚文「というかやっぱりお前・・・」

ん?・・・ハツΣ(・□・;)」

優菜「違う! 違うぞ!! そういう意味じゃない!!!」

親父「何コメントしてるんだよ」

尚文「そもそも俺はお前らのものじゃないぞ」

フィーロ「だっごしゅじんさまはフィーロのお父さんでしょ?」

尚文「違う! 俺はお前の飼い主だ」

フィーロ「・・・違うの? じゃあラフタリアお姉ちゃんは?」

尚文「ラフタリアは俺の娘みたいなもんだ」

ラフタリア「違います!!」

フィーロ「んー?よくわかんない・・・」

親父「・・・で結局アンちゃんはなにしに来たんだ?」

尚文「変身しても破れない服はないか?!魔物紋でも変身自体を禁止にはできないんだっ」

親父「・・・言つとくがウチは服屋じゃないんだが・・・」

尚文「全裸のしかも魔物に変身する女の子を外にほいほいと連れていけないだろ?」

親父「・・・つたく・・・お得意様の頼みとあつちや断れねえな・・・」

尚文「あるのか!」

親父「ウチにはないが心あたりはある、専門家を紹介してやるよ。変身といやあの人だろう、明日になったら行ってみな」

次の日

魔法屋へ

魔法屋「そうね・・・あるわよ」

尚文「本当か!」

魔法屋「私も魔女ですからね、まあ動物に変身するのは面倒だからあまりしないけど・・・変身の度に服が破けてちや困るからそういう技術があるの、一部の亜人もよく

使うわね」

尚文「技術？」

魔法屋「ようは魔力なのよ、魔力で糸を作ることによって変身時に魔力に変換しておけるの、任意で服か魔力かを選べるから元に戻ったときちゃんと服を着ていられるってワケ、ただねー……その意図を作るのに必要な宝石が壊れちゃってるのよね。すぐには使われないしと思ってたから……市場で買うと高いし……」

尚文「何とかならないのか？」

魔法屋「……そうね勇者様なら平気かしらね、この子がファイロリアルならきつとすぐ着くわ。案内してあげる」

道中

尚文「なんだそれ？カード？」

優菜「ちよつと待つとけ……悠、アレ」

悠「アレ？……使うのか？今？」

優菜「ああ」

銃を渡される

尚文「なんで銃が……？」

こめかみに撃つ

アウラ「我は汝・・・汝は我（全カッタ）私はアウラ」

優菜「よろしくね、早速だけどこれ使うね」

スキルカードを八枚渡す

他の皆にも渡す

優菜「これで全員俺が考えたスキルのはずだ」

ガイア「本当、すごいこと考えますね。スキルカードを作れとは・・・」

イフリート「これ最早チートだろ」

優菜「フフフフ・・・」

ブルツ

悠「なんか寒気した」

着いたつばい

何か神殿みたいなのが立ってる

尚文「ここか？その宝石が取れるってのは・・・」

魔法屋「そっちは違うわ伝承だと邪悪な錬金術師が根城にしてたつてトコロよ」

尚文「へー・・・」

魔法屋「私達が行くのは別の横穴・・・」

尚文「あ、ちよつと待ってくれるか？・・・大丈夫かお前達」

ラフタリア「だ……だいじょ……うぷっ」

優菜「あく……」

ヤバイ……吐きそう

悠「出る……」

魔法屋「あら、乗り物酔い？」

エチケツト袋を作る

優菜「悠……コレ使え」

悠「う……オロロロロ」キラキラキラ

尚文「まいったな……しかたない、お前達はここで休んでろ」

ラフタリア「で……でも……」

尚文「足手まといだ……休んどけ」

ラフタリア「……すみません、どうかご無理はなさらずに……」

しばらくすると……

悠「オロロロロ」キラキラキラ

そろそろ胃の中何もなくなるんじゃないか？

男性「おや？ここで何してるんだい？」

!?

ラフタリア「え!?何でここに人が」

立とうするが

ラフタリア「ぐっ．．．まだふらふらす．．．」

男性「馬車酔いかい？立たなくても大丈夫だよ」

ラフタリア「馬車？何言って．．．」

優菜「ラフタリア、私が話をつける」

男性「それで？どうしてこんなに奥まで？」

優菜「そっちこそ．．．そんな鋭利なもの持って何する気だ？」

男性「気づいていたの．．．かつ!!」

ナイフを突き刺そうとするが左手で弾くと

ジュツ

男性「ぐっ!!」

優菜「あんた．．．人間じゃねえな？」

ラフタリア「え？どういう」

優菜「波紋が効くという事は．．．今の所ゾンビにしか効果がなかったはず!!そして意識がありゾンビでいるのはディオの時のゾンビだけ!!さっきの言葉で確信した!!お前はフィロリアルじゃなく馬が引く馬車と答えた時点でこの世界のやつじゃないことは

分かった!!お前・・・あの世界から来たな!!」

ゾンビ「言う必要はないね、ここで死ぬからね!!」

周りからゾンビが出てきた

コオオオオ

波紋疾走!!

優菜「久しぶり?に使ったなコレ」

ドロオ

オラオラオラオラオラオラ

オラア!!

吹っ飛んだ

ゾンビ「ぐ・・・」

ガクツ

じゆわ・・・

優菜「なんでこんなにいるんだよ」

悠「ペルソナ新しいのやったんだろ?使ったらどうだ?オロロロロ」

優菜「それもそうだな」

というかお前まだ吐いてるのか

優菜「そうだな・・・イフリート！」

イフリート「どれを使う？」

優菜「大炎上」

ゴオオオオオオオ

ゾンビたち「うぐあああああ!!!」

優菜「ヘル、後始末お願い」

スパ、スパ

どんどん切っていく

終わったときにあいつら戻ってきた

魔法屋「あら？何かあったの？」

優菜「ちよつとゾンビがね」

尚文「大量だな」

素材を取る

尚文「？スキルは取れないか・・・まあいいだろう、戻ろう」

ラフタリアはフィードに乗って戻る

俺は飛んだ（武空術）

悠も飛んだ（ペルソナ）

戻る途中

ヘル「ちよつといい？」

優菜「どした？」

ヘル「さっきのあれって前の世界のやつよね？どうしてこの世界に・・・」

優菜「・・・わからん、だが俺のせいかもしれないねえな・・・このだれか知らねえが・・・

面倒なことすんならぶちのめすだけだ」

その後服を作り

武器屋

フイーロ「ごしゅじんさまー！」

尚文「お、着られたか」

フイーロ「じゃーん！どう？似合う？」

尚文「まあ似合うんじゃないか？」

フイーロ「ほんとー？」

尚文「まさに天使って感じだな、いいデザインだ」

親父「良い洋裁屋に頼んだからな」

尚文「親父が料金を立て替えてくれてるんだよな」

親父「ああ、糸を布にしたり洋裁を頼んだり・・・合計で銀貨四〇枚ってトコだな」

尚文「……高位魔物紋と購入代も合わせると全部で銀貨三四〇枚か……ラフタリアはもつと安かったな……」

親父「あと俺の飯代……」

尚文「ああ忘れてないよ」

その後料理作って一緒に食って

宿で寝た

天界

神様「なぜあの世界に異世界の敵がいるんじや？」

秘書的な存在「分かりません。全くの不明です」

神様「……ともかく、原因をすぐ調べろ。ワシは他の神話の神に少し提案をしてくる」

秘書的な存在「はい、かしこまりました」

第九十七話（T O L O V Eるに転生したけど、他の小説の奴も来てる件『第五話』より）

今の状況・・・わかるよね？

ララはたぶんリトのところにいると思う・・・うん

悠「・・・」グーグー

優菜「この状況でどうやって説明したらいいの？」

この世界は二重人格って言ってるのに

1. 起きたらいた？

それだったら悠が捕まるわ！

2. 実は二重人格でなんか知らんけど分かれた

1の苦し紛れの嘘にしか聞こえねえ！

3. 説明できない、現実是非常である

これしか思いつかねー!!

ガチャッ

美柑「朝ご飯出来てるから、速く起きよー」

優菜「あ」

美柑「え？」

悠をみる

美柑「・・・」

バタン

出て行かれた

優菜「待て！誤解だ！」

悠「え？何が？」

優菜「お前はそこで待ってる！」

ガチャ

リト「どうしたんだ？さつきからうるさいけど」

さつきと同じ

リト「誰だそいつ!？」

優菜「待て！誤解するな！こいつは違うんだ！」

悠「は？え？」

優菜「お前は寝とけ！」

ゴッ

説明中

リト「えつと・・・二重人格でそいつがもう一つの人格だったと・・・？」

優菜「そうなんだよ・・・だから変な誤解はするな」

リト「百歩譲って二重人格だったとして・・・何で分かれてんだ？」

優菜「それは私が聞きたい」

悠「とりあえず、時間いいののか？」

リト「え？あつ！ヤバイ！」

優菜「待って私も行く」

朝飯を食べた

ララが居なかつた気がするが・・・どこかに出かけたんだろう

優菜「そういうや名前どうするよ」

悠「何が？」

優菜「メタいけどこの小説中村優斗の軌跡とかいう名前ですとまとめるから、名前使っ

たほうが良いと思うのよ」

悠「あー・・・別に俺優斗でもいいぞ」

優菜「なら優斗で出すぞ、ついでに他の世界でも優斗な」

優斗「えー・・・てかもう変わってるし！」

ホールを使って学校に行き

優斗の入学手続きをし

H R

先生「えー突然ですが転校生を紹介します。入りなさい君」

ララ「ハイ!!」

リト「今の声・・・まさか・・・」

ララ「やつほーリトー!!私もガツコ来ちやつたよーっ♡」

リト「ラ・・・ララ!!?」

優斗「そんな自己紹介があるかっての」

H R 後

女子1「どこから来たの?」

女子2「好きな食べ物は何?」

女子3「好きな女の子のタイプは何?」

優斗「そんないきなり一気に言われても・・・」

優菜「優斗、ちよつと来い」

優斗「え?良いじゃねえか少しぐらい・・・なんだよ嫉妬してんのか?」

イラッ

優菜「そうかそうか、嫉妬してほしいのか。よーし分かった」

ゴツ

屋上

優菜「たくつ、今日二回目だぞ」

優斗「いや、本当ごめん」

リト「ララは何のつもりなんだよ!!いきなり転校してくるなんてっ!!おかげで俺達学校中のウワサ的じゃねーか!おまけに俺んちにいる事までバラしちまって!!」

ララ「えーだって・・・いつもリトのそばにいたかったんだもん」

あつりトの顔が赤くなった

リト「い・・・一応遠い親戚同士だっていい訳はしといたけどよ・・・でもどうやって転入手続きしたんだ?宇宙人なのに・・・」

ララ「あーそれはカンタンだよ♪このガツコのコーチョーって人をお願いしたら」

校長『可愛いのでOKッ!!』

ララ「って!」

優菜「あのエロ校長・・・」

ララ「でも心配しないで!宇宙人って事はヒミツにしてあるから」

リト「そんな当たり前だ!ただでさえお前注目されてんの宇宙人なんて知れたら

大騒ぎに・・・」

ペケ「そんな単純な問題ではない!! ララ様はデビルーク星のプリンセス! それが公になれば命を狙われる可能性もあるのです!! ま、リト殿が本当に頼りになる男ならそんな心配する必要はないのですがね」

優菜「こつちからしたらあんたが喋るだけでおかしいんだから、喋らないでくれる?」

優斗「こわっ! 笑顔こわっ!」

リト「つてあれ? ペケじゃんもしかしてその制服つて・・・」

ララ「そ! ペケが制服にチェンジしてるの、大丈夫だよペケ! リトはいざつて時頼りになるから!!」

リト「いや・・・そんなアテにされても・・・」

優菜「そんな奴いたらひねりつぶしてやるよ」

優斗「さつきから笑顔が怖いよ優菜・・・」

きりーつれーい

朝のHRが終わり

骨川「あそだ西連寺君、キミ学級委員だよね」ララ君達に学校の部活の案内を頼みた
いんだがいい?」

春菜「あ・・・ハイ」

ララに近づく

春菜「西連寺春奈です」

ララ「よろしくーっ」

優斗「お手柔らかにね」

リト尾けてたからついていく

優菜「お前はララか」

リト「お前は優斗か」

優菜「音立てんなよ」

西連寺「ここは科学部」

ララ「へーっ」

優斗『あく暇』

リト「てかき、そのシツポ前からあつたか？」

優菜「起きたら生えてた」

リト「え？それって大丈夫なのか？」

優菜「触らなかつたらいいわ」

ララ「ねーねー春菜くくくく」

春菜「は、はい？」

ララ「ガツコって楽しいね〜同じ場所にみんなが集まってワイワイやって！やっぱり来てよかったよ」

春菜「？そ．．．そう．．．」

優菜「今相当怪しく見えるね」

リト「だな」

メイ「ちよつと何してんの？」

優菜「ゲツ」

メイ「ゲツって何よ」

ララ「ねー春菜ー」

春菜「なあに？」

リト「あつ！行くぞ」

ララ「春奈は好きな人いる？」

春菜「な．．．なに!?!いきなり．．．」

ララ「私ね、最近生まれて初めて好きな人できたの、好きな人ができるととても不思議な気分になるんだね．．．胸がドキドキしてる」

リト「な．．．何話してんだ？よく聞き取れねー」

優菜「このぐらいの距離なら聞こえ．．．」

!!

パシッ

野球ボールが飛んできた

メイ「おぉ〜」

パチパチパチ

優菜「ちよつと行ってくる」

スタスタスタ

リト「なんか嫌な予感するんだが・・・」

メイ「間違いなくなんかするね」

優菜「ちよつとー！ボール飛んできたんだけど!!」

部員「あつすいませーん！」

優菜「しつかりしろよな」

弱めに投げるか

何でかって？ 悟飯 野球で調べよう

優菜「よつと」

ビシユ

部員1「いいっ!？」

バシユ

部員2 「すげえ豪速球」

ララ 「あれ何？」

春菜 「あれは野球部よ」

ララ 「へへへへねー私にもやらせてー!!」

春菜 「ララさん!？」

部員3 「!おいあの子」

部員4 「ウワサの美少女転校生!」

部員5 「野球やりたいって?」

弄光 「おもしろーじゃんか」

部員6 「弄光センパイ!」

弄光 「せっかくだ、野球部エースのこのオレ自ら相手してやるかな」

ララ 「これであの球をはねかえすのね? よーし!!」

捕手 「カワイー」

弄光 「フフン、確かにイケてるな・・・手加減してやるか」

投げる

ララ 「ほっ」

カッ

ギヤウオツ

キラーン

部員7 「す……すげえ……」

ララ 「おーっ 飛んだ飛んだ！」

ペケ 「マズいですよララ様地球人のパワーに合わせないと」

弄光 「フ・フフン、カワイイだけじゃなくなかなかやるじゃねーか。気にいったぜ、お前オレの彼女にしてやる！」

部員8 「おおっさすが弄光センパイ！早くも口説きにかかった！」

部員9 「しかもものスゲー上からの発言だア!!」

ララ 「え？お断り」

部員10 「ああっ!! 弄光センパイが即座にフラれた!!」

弄光 「な……ならオレと勝負しろ!! 一球勝負でオレの本気球をを打てなければ彼女になつてもらおう!!!」

部員11 「おおっ！さすが弄光センパイ!! 何て一方的な条件だっ!!!」

ララ 「勝負？別にいいよ負けなしい」

ペケ 「ララ様！ダメですこれ以上目立つちゃ!!」

ララ「あそつかさういやさうだったね、でも逃げるのはくやしな〜〜」
戻って

メイ「なかなか戻ってこないね」

リト「俺見てくる」

ララ「あ！リトーーーーー！ちよーどよかった♡」

リト「へ？」

事情を話す

リト「オ・・・オレが代わりに〜!？」

ララ「リトなら大丈夫だよお願いね、そだ！待ってて!!」

校庭の隅まで走っていく

優菜「リト・・・強く生きろよ」

リト「え？」

戻ってきた

ララ「はい♡コレ使って！」

リト「え？何したんだ？」

ララ「名付けて「ぶんぶんバットくん」！」

バッターボックスに立つ

リト「うゝゝゝ．．．何でオレがこんな事に．．．」

優斗「腹くくって振り切れー!!」

弄光「お前が代わりだと？ハハハッ!!なめるんじやねーぜ！将来はプロ確実（予定）のこのオレの球を！素人なんか打てるワケが．．．ねエ!!」

リト「は、はえーっ!!」

ピッ

ピッ?

バットの裏からエンジンが出てきて

ボッ

リト「へ？」

撃ったー!!

ピッチャー返しー!!

弄光「はぶう」

ギョオオオオ

球と一緒にリトも飛んで行った

リト「止ーーーめーーーてーーー．．．」

ララ「キヤーリトかつこいゝゝゝ♡」

優菜「リト連れてくる」

ドウン

ギューン

優斗「超サイヤ人で行く必要あるか？」

ララ「あー楽しかった!!さ、次行こ春菜！」

春菜「え・・・あ、うん・・・」

リトに追いついたんだが・・・

ピク・・・ピク・・・

優菜「どうしてこうなった」

リト「ふらふらする・・・」

優菜「戻るぞ」

ガシッ

リト「え？ギャアアア!!」

ギューン

ザステイン「一体何が・・・」

その頃学校では・・・

春菜「じゃ次は私が入ってる女子テニス部を紹介しますね、もちろん男子もあります

よ

ララ「うん！」

優斗『さつきから変な気配がする……』

春菜「あ、佐清先生こんにちは」

佐清「やあ西連寺くん」

春菜「今転入生のララさんと優斗君に部活を案内してるんです」

佐清「ほう、ようこそ……テニス部へ」

春菜「佐清先生はね学年の頃インターハイで常に上位にいた凄い人なのよ」

ララ「ふーん」

佐清「フツそんな大したことじゃないよ……腐☆腐……」すいませんふざけまし

た

夜ご飯

ララ「おいしーこのスープ!!」

美柑「しじみのみそ汁だよ」

ララ「へー地球の食べ物っておいしーんだね美柑!」

美柑「ちゅちゅちゅ甘いよララさん、作る人のウデってヤツ?」

リト「はあ……」

優斗「後で話ある、食べた後すぐ部屋に来てくれ」

優菜「・・・わかった」

美柑「ねえリト」

リト「ん？」

美柑「それでララさんとはいっ結婚すんの？」

ブツ

吹くな

リト「み、美柑く！っ！かお前何でもうララを家族の一員扱いなワケ？宇宙人だぞ!!」
美柑「えー？別にいいじゃん見た目人間だし、どーせウチって普段あたしら二人だけで部屋余ってるんだからさ。ララさんが来てから家が明るくなってるれしーよあたい」

♪

ララ「リトーご飯も食べた事だし一緒にお風呂入ろーよ！」

リト「は!?ダ、ダメだんな事ー!!!」

美柑「ララさんムリムリ、リトにそんな度胸ないって」

ララ「むー、じゃあ美柑！一緒に入ろー」

美柑「へっ私？」

ララ「一人で入るので落ち着かないの、今まではお風呂入る時は侍女が大勢いて

ねー」

美柑「何ソレうざそー」

優斗「ごちそうさん」

優菜「私も」

部屋

優斗「佐清って先生……鴨志田の影響もあるかもしれんが、いやな予感がする」

優菜「まあ敏感になるのは仕方ねえよな」

実際あんな大人ザラという

優菜「とりあえず、様子見だな」

優斗「あ、それと……ペルソナを分けたいと思うんだが」

優菜「どっちかに出てるときとか呼び出し合いとかになつたら面倒だしな、決めとこ

うか」

優斗「もちろんイフリートはもらうぞ」

優菜「ならこっちはアリエルだな」

結果

優斗 イフリート・ガイア・トラ・アラメイ・アウラ・ウンディーネ

優菜 アリエル・クロノス・カオス・ヘル・ホバル・メツハノメ

優菜 「いんでねーの？」

優斗 「だな、バランスもいいだろう」
その後寝た

第九十八話（ペルソナ5 + R に転生『第二十九話』より）

お母さん「もう七時半よ！行かなくていいの？？」

ん？朝か・・・

お母さん「入るわよ」

ガチャ

お母さん「早く起きなs・・・優斗が二人!？」

優菜「え？」

なんか重い

優斗が上に乗ってる

優斗「なんだ？どうした？」

優菜「とりあえずどけ」

どかした

お母さん「で？これは一体どういう状況？」

優菜「自分でもわからない」

優斗「俺は、あれだよ。こいつが二重人格ってのは知ってるよな？」

お母さん「ええ」

優菜「俺が優斗で」

優斗「俺がもう一個の人格の悠」

お母さん「え？分かれたの？」

優菜「何でわかれたかは」

優斗「わからないよな」

お母さん「なら二人とも、学校に行かないとね」

優斗「学校ね・・・」

優菜「行くならお前な」

お母さん「いいえ、二人とも行ってもらいます」

降りると何故か制服とメモ書きがあった

優菜「なんだこれ」

メモの内容

これ制服ね、あと入学届は出しました b y 神

グシヤ

なんか見せたらいけない気がする

優菜「入学届・・・出してるって」

お母さん「え!? さっきの今よ!」

優斗「出てるなら都合じゃねえか! 一緒に行くぞ!

優菜「はいはい、分かりましたよ」

登校中

蓮「なんで二人いるの?」

優斗「分かれた」

優菜「分かれた」

蓮「いつ」

優斗「さっき」

蓮「じゃあなんで制服があるんだ?」

優菜「知らない」

蓮「なんか聞いても無駄な気がしてきた」

優菜「だったら速く行こうぜ」

蓮「わかった」

八時、学校

職員室

川上「貴方が転入してきた、中村優菜さんね」

優菜「はい」

川上「優斗君のところに泊まってるのね・・・」

優菜「どうかしました？」

川上「いや、何でもないわ」

優菜「そうですか」

川上「これが教科書とか諸々のやつね、今からホームルームだから行きましょう」

重いな教科書

教室で自己紹介し

川上「次は全校集会だから、優菜さんはとりあえず一番後ろに並んで」

全校集会なんてあったか？

いや、無かったよな？

体育館

校長「・・・例の事件以来、皆さんからの不安の声は、私の耳にも届いています。急に皆さんのメンタル面のケアが必要と感じ、担当の先生に来ていただいた次第です。それでは、先生」

白衣を着た先生が来る

こんなイベントはなかった・・・まさか!?ロイヤルか!?そうだな!?4はゴールドデン出

たし、元居た世界でロイヤルが出ててもおかしくない！新しく追加されたペルソナとか分かんぞ

浮ついた女子生徒「カッコよくない？」

男性教師「初めまして」

真面目そうな女子生徒「声、渋い……！」

男性教師「僕の名前は、まる……」

ブチッ

ん？マイクが切れたのか？

男性教師「……あれ？」

トントン

直ったのかな？

丸喜「丸喜、拓人と申します、よろしくどうぞ」

ゴンッ

キーン

礼でマイクに頭ぶつけるか？

クスクスクス

フフフ

丸喜「た、担当はカウンセリングです・堅苦しく構えなくて大丈夫だから、相談なら何でも・あつ。お金の相談は困るかな」

校長「・・ありがとうございます」

その後

竜司「うつす。まさかうちの学校が、メンタルケアとか言い出すなんてな」

杏「ニュースにもなってるし、放置はマズいつて思ったんじゃない？」

竜司「つか・・なんだっけ？名前」

杏「丸喜先生」

竜司「ツツコミどころ満載すぎじゃね？お前も」

優菜「そりゃね、分かれて女体化継続とか思わなかった」

竜司「本当にカウンセリングできんの？」

丸喜先生が歩いてくる

杏「竜司」

丸喜「どうも、坂本君に、高巻さんだよ。それに雨宮君に優斗君に君は・・」

優菜「あつ優菜です」

竜司「何で名前知ってんすか？」

丸喜「鴨志田先生と、その・・いろいろあつた生徒の何人かは、前もつて聞かせても

らったから、雨宮君、転校早々、大変だったね」

蓮「それなりにです」

丸喜「君は、よくこの学校に来たね」

優菜「もう手続き済んでたんで、入学の」

丸喜「まあ、そこまで悪くない学校だとは思うから」

竜司「それ、来たばかりの先生がいう事じゃないですよ？」

丸喜「それもそうだね」

竜司「つか・俺らになんか用つか？」

丸喜「ああ、そうだった。さつき集会でも言ったけど、君達カウンセリングに興味あつたりするかな？」

竜司「別にねえっすけど」

丸喜「え!？」

竜司「いや『え』、じゃなくて」

丸喜「思ったより直球で断られたからさ・あ、でも今ならお菓子もあるよ？食べ放題・はちよつと無理だな。でも、そこそこ食べられるし、どう？」

優菜「詳しく」

杏「バツチり釣られちゃってるよ・・・」

丸喜「実は・・・鴨志田先生の事で、関係性の強い生徒は、必ずカウンセリングするように言われてね。一応、学校側からの・・・気遣いなんだけど」

竜司「気遣いねえ・・・」

丸喜「いきなり見ず知らずの僕と話せて言われても、困るのは分かるよ。こういうの強制でやつても意味ないし。せっかくなら、君達にも何かメリツトが・・・そうだ！カウンセリングに来てくれたら、代わりにメンタルトレーニング教えるよ。テスト前の集中力の上げ方とか、デートの時に緊張しない方法とかさ。どうかな？」

杏「どうかなって・・・」

丸喜「今ならお菓子も・・・」

竜司「お菓子はもういいっつもの！」

優菜「行く」

竜司「お前は菓子目当てだろ！」

蓮「話ぐらいなら・・・」

竜司「まあ・・・受けねーなら受けねーで面倒なことになりそうだしな」

杏「んー、そうだね」

丸喜「本当かい？それじゃあ、取引成立って感じかな？僕は保健室にいるから、都合のいい時にでも来てよ」

竜司「じゃ、俺等はこれで」

丸喜「うん、またね」

放課後

優菜「行ってくる」

杏「仕方ないか・・・」

保健室

丸喜「やあ、優菜さん・・・だったよね？」

優菜「そうです」

丸喜「お菓子ならテーブルの上にあるよ」

優菜「いただきまーす」

食べながら

丸喜「カウンセリングって言っても特に気を張らなくてもいいよ、話したいことを話せばいいからね」

優菜「おうでふか（そうですか）」

丸喜「食べてから話してもいいよ？」

ゴクン

丸喜「この学校に来て、何か思ったりしたかい？」

優菜「ああいう事が起こった後にしては、明るいですよね。一番思ったことはそれで
す」

丸喜「あく確かにそうかもね」

優菜「私が、転校してきた理由ってわかりますか？」

丸喜「そういうのって聞いていいのかい？ダメって人もいるからね」

優菜「大丈夫です」

丸喜「いじめかい？」

優菜「違う」

丸喜「前科とか？」

優菜「遠い」

丸喜「親の転勤」

優菜「違う、正解は・・・」

丸喜「うん・・・」

優菜「の前に」

ガクツ

優菜「私は女子でしょうか男子でしょうか」

丸喜「え？・・・女子？」

優菜「残念、男子」

丸喜「えええ!!」

優菜「元だけどね、朝起きたら女になってたっていうよくある展開だよ」

丸喜「・・・本当にあるのか・・・」

優菜「向こうじゃそれでは、住むのは無理だろ？だから親からも気味が悪がられてたらい回してわけでここに来た」

丸喜「大変だったね」

優菜「ですけどね、もう友達出来ましたよ」

丸喜「坂本君達かな？」

優菜「だから特にどうって訳でもないっす」

丸喜「なら大丈夫そうだね」

その後少し話して終わった

優斗「どうだった？」

優菜「とくになんも、頑張れよ」

優斗が入れ替わりで入る

優斗 side

優斗「失礼します」

丸喜「君が優斗君だね、座っていいよ」

優斗「はい」

座る

丸喜「最近周りで嫌な事とかあったかい？」

優斗「まあ、もちろん鴨志田ですよ」

丸喜「ああ・・・やっぱりそうなるよね」

優斗「バレー部員・・・俺で言ったら三島とかですけど・・・普通に怪我するんです

よ、部活で・・・生傷が絶えなくてですね・・・それでちよつと反発したんですよ」

丸喜「そういうことか・・・でも鴨志田先生のやってた事は、先生とか保護者も黙認してた事だからね・・・反発できるって言うのはすごいと思うよ、僕だったら周りみただい知らんぷりしちゃうかも」

優斗「後は、志保が落ちて来た時の周りの反応ですかね」

丸喜「何かムカつくことでもあったかい？」

優斗「写真とか動画撮ってるやついたんですよ」

丸喜「!!」

優斗「ホントに何をどう考えたらそうなるのか理解に苦しみますよ」

丸喜「・・・少し話を変えようか・・・君は志保さんが落ちたときに、羽毛がいつぱ

い入った枕を下に投げ込んだらしいね」

優斗『ああ、優菜がしてたな』

丸喜「?どうかしたかい?もしかして聞かない方がよかつた?」

優斗「いや、なんでもないです」

丸喜「じゃあ、今君の家には優菜さんがいるらしいけど。様子とかはどうだい?」

優斗「・・・特にどうってことはないですね」

丸喜「そうかい、わかつた。他に話したいことはあるかい?」

優斗「俺は、モテないんですよ。どうやったらモテるんですかね・・・」

丸喜「・・・残念ながら、それは僕にも分からないよ・・・」

優斗「ですよね・・・」

この空気がつつ!

優斗「それじゃあ、帰りますね」

丸喜「わかつたよ、また気が向いたら来てくれて構わないよ」

優斗「はい」

出ると

ドン

優斗『ヤベッ』

芳澤「あつ」

優斗『倒れる！』

ガシッ

手を掴む

優斗「すまん」

芳澤「いえ、こちらこそすいません。では」

保健室に入っっていった

優斗『教室に戻るか』

教室

優斗「行っってこい」

蓮「ああ」

蓮 side

保健室前

丸喜先生と芳澤がいる

芳澤「あ、お疲れ様です。丸喜先生のカウンセリング、受けられるんですか？」

蓮「君も？」

芳澤「はい、そうなんです。丸喜先生、良い方ですよ。私、先生が秀尽に来られる前

からお世話になつてゐるんです。」

丸喜「あれ？芳澤さんと知り合いなんだね。そんなにいいものでもないから、ハードル上げないでよ」

会つてゐる気がする……（ω・ω）キリッ

芳澤「私、もう行きますね。それじゃ」

礼をして行つてしまつた

丸喜「それじゃ入ろうか」

入る

丸喜「いらつしやい、よく来てくれたね」

蓮「取引したから」

丸喜「そういえばそうだったね」

少し話す

丸喜「なるほど……うん、ありがとう。雨宮君の状況は、大体把握できたよ……実は、君がここに転入してきた経緯とかは、学校からも軽く説明は受けてたんだ」

蓮「もう大丈夫」

丸喜「もう大丈夫、か……でも、無理はしないでね……今、話をさせてもらつて思つただけだよ。きっと君は、自分の中にある『現実』で、きちんと折り合いをつけ

て生きてるんだね。すごいと思うよ。大人だつて皆が出来てるわけじゃないんだから？

丸喜「ほら、人つてさ、自分の中にある現実・・・こうありたいって理想があるわけじゃない？テストでいい成績を残す自分！他人を助けて、役に立ちたい自分！みたいなさ。けど外の現実には、理想通りにいかない事もある。多くの人はその内と外のギャップに苦しむんだ。誰しもがテストで満点を取れて、人を救うヒーローになれるわけじゃないからね・・・君に起きたことを思うと、苦しむどころか歪んでしまつても不思議じゃないと思う。けど君は辛いはずの現実にあつてすぐ立ち向かっているように見えてね。それが凄いなと思うんだ・・・つて、会つたばかりのおじさんにこんなこと言われるなんて、ちよつと変かな？」

蓮「事実だ」

丸喜「謙遜はしない、か。本当に強いね、雨宮君は」

時計を見る

丸喜「さて・・・ごめんね、少し長くなっちゃたね。君と話していると、不思議と話が弾んじゃつてさ・・・あのさ、最後に一つ提案があるんだけど、聞いてもらえる？実は僕、カウンセラーの仕事かたわらにある研究をしていてね。それは、カウンセリングとはまた違う、心理療法のようなものについてなんだけど・・・まあつまり、人の心を知

るための研究でね。上手くいけばたくさんの人を助けてあげられると思うんだけど……
どうかな！」

蓮「もう少し詳しく」

丸喜「ごつ、ごめん！えーと、何が言いたかったっていうとね。僕の研究を手伝ってほしいんだ！雨宮君には、ボクの話の話を聞いてもらって気づいた事や思った事を教えてもらいたい。頼むよ、君の気が向いた時でいいし、時間も融通するからさ！ほら、お菓子をいくらでも食べていいから！」

蓮「なんで俺？」

丸喜「あー……実は時々、研究で息詰まる時があつてさ。今まで一人で進めてたんだけど、君みたいな人から意見を貰った方が研究も捗りそうだなって。あ、もちろんお礼は用意するよ？見返りは……そうだな、とっておきのメンタルトレーニングを伝授……つていうのはどうだい？僕のノウハウを尽くした君だけの為のスペシャルコースだ。努力次第で、君の持つ存在能力を最大限に引き出せるようになるはずだよ！」

蓮「……わかつた協力する」

丸喜「よし！あらためて、取引成立だね」

丸喜との関係が深まる感じが カットオー！

丸喜「……あ、そうだ！連絡先とか教えてもらつていいかな？時間が空いてるとき

や相談に乗ってもらいたい場合は連絡するから……これだよ！と！さて！じゃあ早速、今回の見送りを渡さないかね。メンタルトレーニングを教えるよ。最初は、そうだな……」

しばらくして

蓮は教室に戻ってきた

保健室

コンコン

丸喜「はい」

ガラガラ

杏「えつと……」

杏視点

丸喜「いらつしやい。もしかして、カウンセリングかな」

杏「はい、今から出来ますか？」

丸喜「もちろん！いつでも大歓迎だよ。いや嬉しいよ。あ、よかつたらどうぞ」

座る

丸喜「じゃあ始めよつか。あ、全然楽にしているよ？とりあえず話したい事聞かせてくれれば」

杏「はい……って言ってもかうんせりカウンセリングで話すことって、例の話しかないですよね」

丸喜「まあ……そうかもしれないね。ただ、無理にじゃなくていいよ。今日はお菓子だけ食べて帰る！とかさ、はは」

杏「いえ……大丈夫です。話した方がいいの分かってますし。まあ……少しずつでも聞いてもらえるなら」

丸喜「もちろんだよ。急がなくても大丈夫」

少し話す

丸喜「……なるほど、確かに許されない事実だね」

杏「……はい。だから私、志保の仇を討ちたくて……」

丸喜「うん。それで君は？」

杏「……鴨志田がああなって、一度は志保と同じ目に遭ってみろって思った。でも……」

丸喜「でも？」

杏「……違うなって。そんなことしてもアイツが楽になるだけで、志保の痛みが消えるわけじゃないから」

丸喜「そっか……高卷さんは冷静だし、すごく賢いよ」

杏「えっ？ いや、そんなこと……」

丸喜「ううん、きつと僕なんかよりよほど頭がいい。そんな事、僕が高校生の時は考えられなかったし」

杏「・・・好きで考えるようになったわけじゃないですけどね。私も、あんな事がなければ、考えなかったと思います、多分」

丸喜「そうか・・・今はどう思ってるの？」

杏「今、ですか？うーん・・・とにかく志保が早く元気になれたらつて。あんな事はあつたけど・・・早く笑つて、前みたいに一緒に買い物とかしたいつて思います。鴨志田の事とか、もうどーつてもいいんで！」

丸喜「そうなるといいね・・・起きてしまった事は変えられないけど、前を向いて進む、か」

杏「そんな感じかも、まあ・・・そんなの最初から起きないほうが良いに決まつてますけどね」

丸喜「そうかもしれないね。でも、今の世の中、悲劇全てを消すことは出来ないからね」

杏「ホントそうですよね。そんな世界あつたら幸せだけど」

キーンコーンコーン

丸喜「つと、もうこんな時間だね。今日は終わりにしようか、話してくれてありがと

う

杏「ううん、話せてスッキリしたし。ありがとうございます」

丸喜「はは、そう言ってくれると助かるよ。またいつでもおいで」

杏「はい、それじゃ！」

礼をして保健室を出て行った

杏と蓮と優斗が行った後（竜司は行かなかった）

杏「あれって優斗知ってたの？」

優菜「知らね、あと今は優菜だ」

優斗「で、俺も改名して優斗な」

モルガナ「そうだ、忘れていたが。今日は班目のところに行くのはやめて行きたい所があるんだが」

優斗『あ、スルーなのね』

竜司「いきなりどうした？」

モルガナ「渋谷の駅前に行ってくれ」

優菜「ああ〜メメントスか」

竜司「今言うか？」

モルガナ「一応先に行った方が良いかと思ってるな」

蓮「なら行こう、この前三島からも依頼が来ていたし」

杏「依頼？」

竜司「しかも今三島って言ったか？」

スマホを出して怪盗お願いチャンネルを開く

優菜「これに書いてた、『元カレが最近ストーカー化して困ってます。名前は、中野原

夏彦』って奴だろ」

蓮「ああ」

竜司「公務員がストーカーかよ」

三島はまだ来ないはずだが・・・まあ大きく支障が出なければいいだろう

いや、やつぱり来てたっけ？・・・あんま覚えてないや

？誰かつけてきてる

優菜「渋谷だろ、速く行くぞ」

急ぎ足でいき

振り切った

この時期だと・・・真か

渋谷に着いた

優菜「行くんだろ？」

竜司「俺はいいぜ」

杏「私も」

蓮「問題ない」

双葉に電話する

双葉「なんだ？」

優菜「今から異世界に行くが・・・来るか？」

双葉「急にかよ・・・すぐ行く、どこだ？」

優菜「渋谷だけど・・・まあそこで待ってる」

カオスで連れて来た

優菜「メモントス」

ブワッソ

杏「人が消えた・・・なんか・・・フワフワしてるっていうか・・・」

竜司「ここが、メモントスか・・・？怪盗服にはならないのか？」

優菜「ここは違う、下に行くぞ」

モルガナ「このシャドウは地下に溜まってるんだ。何かに惹かれて集まるのかもしれないが、理由はよくわからない」

杏「地下って・・・どうやって入るの？」

優菜「普通に降りる」

優斗「待て、その前に双葉のコードネームだろ」

双葉「私はナビがいい」

杏「ナビ？」

双葉「皆を勝利に導いてやる」

階段を下りていく

怪盗服になつて周りを見る

スカル「んだよ、ここ・・・つか、変わってる!？」

フォルス「いや、気づくの遅い」

パンサー「シャドウに気づかれてんの!？」

モナ「とつくにな」

スカル「先、言えって!？」

モナ「ここはまだ大丈夫だ、何度か来て調べたがシャドウはこのフロアまでは上がつ

てこない」

トゥルース「でも、一步でも進めば別だぜ？ウジャウジャいるぞ」

ナビ「ああ、雑魚ばつかだけどたくさんいるな」

フォルス「とりあえず、行けばいいんだろ？」

スカル「けどコレ、だいぶ広いんじゃないか・・・？歩きで行けんのか・・・？」

モナ「ついにこれを見せる時が来てしまったな・・・もるがなー、変・・・身ッ！バスになった

モナ「さあ、パンサー、トウルース、ナビ。レディ・ファーストだ」

パンサー「くるま・・・!?」

トウルース『ネ○○スですね』

スカル「あり得ねえ!!」

モナ「認知が具現化する異世界の仕組みを逆に利用して、ちよいと修行した成果だ。ま、オマエラの変身と同じようなもんだな」

スカル「服が変わんのと、車になんのは違いだろ!？」

モナ「大衆の心の中には『猫はバスに化ける』って認知が何故だかものすごい広く浸透してんのさ」

パンサー「何でバス？」

モナ「・・・知らね」

ナビ「ジ○リだな」

フォルス「言うな」

トウルース「ま、これで移動楽になったしいいだろ」

全員乗る

スカル「出発シンコー！」

エンジンをかける

ドドドドドドドド

パンサー「運転できんの？」

トウルース「多分」

スカル「オイ、ゴロゴロ言い始めたぞ・・・気持ちわりー、乗りもんだな！」

モナ「ニャーターリーエンジンをバカにすんなよ？エンジン全開！かつとぶぜ！」

入っていく

スカル「この雰囲気・・・確かにパレスっぽいな・・・」

パンサー「車がレールの上走るって、なんか新鮮だね・・・このどっかに中野原が

居るの？」

モナ「パレス程じゃないが、そいつも恐らく自分だけの空間に閉じこもってるはずだ。

入り口を見つける必要がある」

スカル「入口ってどんなんだ？」

モナ「知らん。でも歪みの強い場所は、見ればわかる」

スカル「適当にうろついて探すしかねーワケか、面倒だな・・・」

トウルース「いや、わからんぞ」

フォルス「あれか」

帝具、スペクテッド

スカル「なんだそりや・・・目？」

フォルス「異世界でゲットした」

モナ「こつちからは見えないんだけどな」

トウルース「後で見せるから」

遠視・透視同時発動

ギューン

・・・

ジョーカー「どうだ？」

優菜「いた、あつちの方向だな」

ナビ「道案内は任せろ」

ナビのおかげもあつてすぐ着いた

スカル「うおつ、なんだよこれ・・・うねってんぞ？」

モナ「ここだ・・・ここから『入れる』、この先からターゲットの気配がする。さあ準

備はいいか？ジョーカー」

ジョーカー「行こう」

入る

降りる

スカル「おつ、なんか居やがるぞ？」

モナ「アイツが、ナカノハラのシャドウらしいな」

スカル「確か、区役所の窓口係がストーカーになったんだっけか？」

パンサー「どこまでワルか分かんないけど、誰かを困らせてんなら、なんとかしなきゃ」

モナ「よし、まずは話してみろ」

近づく

シャドウ中野原「なんだお前ら！」

パンサー「アンタがストーカー男ね!?相手の気持ち、考えたことないの?」

シャドウ中野原「あの女は俺の物なんだよ!俺の物をどう扱おうと、俺の勝手だろ!俺だって物扱いされたんだ!同じことやって何が悪い!?!」

スカル「自分がやられたからって人を物扱いすんな!ふざけやがって・・・テメーみてえなヤロウは、改心させてやる!」

シャドウ中野原「俺より悪い奴はいくらでもいるだろ!そうだ、マダラメ・・・俺か

ら全てを奪ったアイツはいいのかよ！」

スカル「!!今斑目つつつたか!？」

変身した

モナ「構えろ！来るぞ！」

トウルース「これは、やるしかないな」

シヤドウ中野原「俺の物を取るんじやねえよ・・やつと手に入れたんだ・・世の中、
やつたもん勝ちなんだよツ！コイツ！ブツ倒してやる！」

ナビ「コイツの弱点は・・電撃だ！」

スカル「奪え！キツドオ！」

ビリリ

HOLDUP!!

スカル「ざまあねえな！」

モナ「我らの恐ろしさを味わえ」

ナビ「ボッコボコにしちやえー!!」

ドカバキボコ

トウルース「耐えたか！」

フォルス「アラメイ！心理の雷!!」

ドゴオ

シャドウ中野原「グアアア!!」

勝った

シャドウ中野原「わ・・・悪かった、もう許してくれ・・・俺、執着心が止めらん無くなつてた。悪い先生に使い捨てにされてき・・・」

スカル「さつき言った斑目だろ?」

シャドウ中野原「知っているのか?」

トウルース「怪盗団って聞いたことあるだろ?それが俺達だ、そして次の標的は班目」
シャドウ中野原「そうだったのか・・・」

トウルース「だから、ストーカーはやめて俺たちに任せな!失恋は誰もが経験することだ、そのうち『そんなこともあつたな』って言えるくらい立派に、強くなれ、お前なら出来る」

シャドウ中野原「わかった・・・」

パアア

消えて行つた

?何か残つた

スカル「ん?その光つてんの、なんだ?」

モナ「オタカラの、芽だな。放っておいたら、パレスに育ってたかもしれない。ジョーカー、報酬に頂いとけ！」

ジョーカーがとる

スカル「中野原って改心したんだよな・・・？」

モナ「おそらくな」

パンサー「でも確認する方法なくない？」

スカル「ネットに実名書くぐらいだ、マジ改心したら、きつと書くんじゃない？」

モナ「確かにそうだな」

ナビ「にしてもメメントスって言うのは、RPGで言うレベル上げにもってこいの場所だな。ここで腕磨くのもアリだな」

パンサー「悩みを書き込んだ人たちを勇気づけてあげられるし、いいかもね」

モナ「オタカラもゲット出来るし、売れば報酬も入る」

スカル「いい事づくめじゃねーか！面白そうだ！・・・よし、今日んとこ目的達成だな！」

モナ「待った、ちよつとだけ付き合っただけ欲しい所がある」

スカル「んだよ、まだ何かあんのか？」

モナ「長くはかからん・・・まあ、まずはここから出ないか？」

出た

スカル「んで？あと何がしたいんだ？」

モナ「更に下のエリアだ。そこで確かめたいことがある、まずは下に降りられるホームを探そうぜ」

スカル「そういや、前にココ来てたんだろ？見取り図とか残してねエのかよ？」

トウルース「無駄だ、ここじや毎回構造が変わる」

モナ「ああ、パレスと違つてここは途方もない人数の認知が融合した場所だ。常に変わり続けてるのさ」

フオルス「だが目的地が遠い訳じゃないだろ？ならさっさと行こうぜ」

ナビ「向こうだな」

シャドウ「うがあああ!!」

スカル「おわっ!？」

トウルース「構えろ！」

ナビ「雑魚二体！大丈夫すぐ倒せる」

バイコーンか、ならアラメイで・・・

・・・？なんかカラフルな色した沼？からなんか出てきた

ドリアン

モナ「ア、アイツはっ!？」

ブツブツ

出久かな？

スカル「なんかアイツ、様子おかしくね？ブツブツ言ってるくせに、動かねえぞ……」

モナ「気をつけろ、ワガハイの予想通りならアイツはちよつと厄介だぞ！」

スカル「よし、ならオレが速攻で黙らせてやるか！」

モナ「気をつけろよ！」

スカルが殴る

バイコーンの目の色が変わる

スカルに襲いかかる

避けた！

スカル「うわ、なんだよアイツ急に！」

モナ「……攻撃したら動き出したか、やっぱり予想通りのヤツみたいだぜ。だが、アイツを倒せば……オマエたち、見てろよ！」

バイコーンを斬りつける

すると丸くなり宝玉を落としてはじけ飛んだ

スカル「うわ、なんだ？爆発したぞ？」

モナ「説明は後だ！今は戦闘に集中しろ！」

ジョーカーとパンサーが残りを倒す

WARNING

また出てきやがった

モナ「またさっきのがいるな・・・あいつは中途半端に手を出すと厄介だ。叩くときは弱点を突いたりして一気に畳みかけて、爆発させるのがよさそうだ。眠らせたりで動けなくするか、いつその後回しにするのも手だな」

フォルス「アラメイ、心理の雷！」

ドカーン

ナビ「敵三体撃破、フォルスいいね」

パンサー「あんなシャドウもいるんだ・・・」

モナ「ワガハイはあの特殊なシャドウを、『凶魔』と呼んでいる」

ジョーカー「そんな奴いたのか？」

トゥルース「そんなシャドウ知らねえ・・・」

フォルス「・・・まあ今考えたって仕方ねえだろ」

スカル「ならさっさと行こうぜ」

ホーム

スカル「ちよ、ちよつと待て・・・なんか音しねえか？」

ホームの逆側に人がたくさん並んでいる

電車が来た

スカル「電車、モロ営業中じゃねえかコラッ!!」

モナ「ここは地下鉄だぞ？電車走ってるのは当たり前だろ？」

パンサー「そうじゃなくて！ここ、パレスみたいなどこなんでしょ!？」

モナ「ならこの景色が、大衆にとつての日常の光景ってことなんじゃないか？よく知らんが」

パンサー「こんな暗がりか・・・日常・・・？」

トウルース「お前は学校に行きたいと思つて行くか？」

パンサー「・・・確かに行かないわ」

スカル「つか、俺らレールの上走って大丈夫なのかよ!？」

モナ「同じレールに乗らなけりや平気だろ・・・ま、ワガハイ電車の事は詳しくないけどな」

スカル「マジかよ・・・」

モナ「それより、下のエリアに進もうぜ。そこのエスカレーターを下ればすぐだ」

下ると・・・

ホーム

奥に壁がある

モナ「よしっ、あつた！確かめたいのは、あの奥だ！」

近寄る

パンサー「・・・何ココ？なんか、ちよつとだけ不気味」

フォルス「なんか変な模様だな」

スカル「つーか、行き止まりじゃねえか。こんなどこに何の用だ？」

モナ「まあ、見てろ。多分コイツは、ただの壁じゃない。ワガハイの勘が正しけれ

ば・・・」

触ると・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

壁が開かれた

パンサー「開いた・・・！」

イセカイナビ「最深部に新規エリアが確認されました。案内情報を更新します」

モナ「見ろ！思った通りだぜ！」

パンサー「どういうこと？」

モナ「前に一人で来た時は、触ってもウンともスンとも言わなかったんだ。けどメメ

ントスの一番下がこんな何の変哲もないフロアだなんて、妙だろ？」

スカル「更に奥があつたつて事か」

フォルス「ここで専門家に聞いてみましょう」

トウルース「えー私が思うに、次の階層が終わつてもまた何かを起こし壁を開けば先に進めると思いますな」

フォルス「との事です」

スカル「乗るのかよ」

トウルース「真面目に言うと、俺等が鴨志田を倒して有名になつたから開いたんだ。この先もそれで開いてたし」

ナビ「私のは公になつてないから、鴨志田だけつてことだな」

パンサー「それじゃあまず、降りてみる？」

モナ「いや、やめとこう。今回はそこまでのつもりで来てない。目的はもう達した、一旦戻ろう。説明はその後だ」

トウルース「わかつた、カオス」

どこ〇〇ドア

地下一階まで戻ると

パンサー「ちよ、アレ・・・！」

モナ「メメントスに、ニンゲン・・・!?」

トウルース「あんな奴知らねえぞ」

白い服の少年「うん・・・」

花が入った・・・シャボン玉?・・・どういう事だ?

花からジューズに変わり少年が持っている

白い服の少年「これはどうだ・・・」

ジューズを飲む

白い服の少年「・・・ぶは! うまつ!」

スカル「・・・なんか、飲んでね?」

白い服の少年「ん・・・? 変な気配がすると思ったら・・・おにいさんたち、何者・・・?
?」

モナ「いやこつちが聞きてえよ・・・」

白い服の少年「そうだったね、ごめんなさい。名前を聞くときは自分から名乗るのが人間の礼儀だ。ご指摘ありがとう。えーと・・・タヌキ・・・じゃない、ネコさん?」

モナ「迷うんじゃないよ! つかどつちもちげえし!」

スカル「や、そこは迷うだろフツーに」

トウルース「でもタヌキはないだろ」

ナビ「タヌキ・・・ネコ・・・ド○○もんか!？」

フオルス「マジで消されるやめろ」

ジョゼ「僕の名前はジョゼ、花を探してるんだ。でも驚いたな、おにいさんたち普通の人間でしょ?こんなところに来られる人もいるんだね」

モナ「まあ、ワガハイたちが特別っていうか・・・って、そうじゃなくてだな!オマエは何者なんだって話だ」

パンサー『花を探してる』って言ってたけど、さっきのやつのこと?」

ジョゼ「そうだよ、綺麗なお姉さん。さっきの花、あれがボクの探してる花みたい。僕人間を勉強しなきゃいけないくて、あの花をいっぱい集めたいんだ」

スカル「勉強って・・・さっきの、ジュースにして飲んでたやつか?」

ジョゼ「そう」

スカル「花のジュース飲むことが、勉強になんの・・・?」

この子何者か分からないから、心を読もう。スペクテッドどこにいたっけな
・・・そういやスペクテッドつけたままだった・・・

洞視

スカル『そんなんでできるならオレがしてえわ』

竜司・・・

ジョゼ「ねえ、おにいさんたち、ボクの勉強、手伝つてくれないかな？
もっかい洞視

ジョゼ『ボクとおにいさんたちで集めたほうが早いよね？あつでもなにかと交換した
ほうが良いよね？』

ものすつごい良い子

パンサー「手伝う？」

ジョゼ「花を集めてきて、それをボクに譲つてほしいんだ。もちろんタダでは言わないよ。この場所は色々と役立ちそうなモノが落ちてるみたいだし・・・ボクが拾つて
おくから、おにいさんたちが集めた花と交換しようよ」

スカル「どうする？花集め手伝つてだと」

モナ「ワガハイたちにもメリツトはありそうだが相手は正体不明の子供だ・・・ここ
は慎重に・・・」

パンサー「えー、いいんじゃない？手伝つてあげようよ」

トウルース「心読んだけど、下心はなかったぞ」

ナビ「探索のついでは良いんじゃないか？まあ最終判断はジョーカーに任せる」
スカル「因みに杏は他にあんじやねーのか？」

パンサー「・・・綺麗って言われちゃったし」

モナ「ガーン！アン殿・・・」

スカル「ま、別にいつか。お礼くれるって言ってるし」

ジョゼ「どうかな、おにいさんたち、花集め手伝ってくれる？」

ジョーカー「わかった、手伝おう」

ジョゼ「ありがとう！」

モナ「ま、待て待てっ！コイツが何者かまだわかんないだろ!?お前もありがとうとか言ってるなって！」

ジョゼ「ネコさん、疲れてるの？すごくイライラしてるけど」

モナ「ネ、ネコじゃねーし！イラついてねーし！」

ジョゼ「あ、わかった。お腹空いてるね？そういうイライラ、ボク、勉強したから知ってる」

クツキーを取り出した

ジョゼ「よかったら、これどうぞ」

モナ「気持ちだけでもらつとく・・・」

スカル「気い使われてんじゃねーか・・・完敗だな」

ジョゼが車に乗る

ジョゼ「ボクもこの中で花集めてるから、見かけたら声かけてよ。あと、ただ集めて

るだけじゃつまらないでしょ？人間は『遊び』が好きだつて勉強したから、面白そうなる仕掛けを準備しておくね・・・つと、思い出した。勉強して覚えた、人間の挨拶。おつかれ〜」

行つてしまった

スカル「なんだつてんだ、アイツ」

パンサー「人間をお勉強つてことは、人間じゃないのかな？・・・いい子っぽかつたけど」

モナ「まあ・・・アイツからシャドウの気配はしなかつた。少なくとも今は、危険もなさそうだな」

スカル「さっき言つてた花？それ見つけたら拾つてとくか」

出ようとしたら

ジョゼ「忘れてたーっ！」

戻つてきた

ジョゼ「おにいさんたちに渡そうつて思つてたモノがあるんだつたよ」

ジョーカー「渡すもの？」

ジョゼ「うん、何かつて言うかね・・・この前探索してたら変なモノ拾つたんだ。これなんだけど・・・」

光ってる星？

スカル「は？なんだよそれ」

ジョゼ『『ホシ』だよ？星の形してるから、僕はそう呼んでる」

モナ「ホシ？」

パンサー「えつと、それがどうかしたの？」

ジョゼ「人間ってさ、みんな星にお願い事するんでしょ？面白いよね。お星様は願いを叶えるもの……だからこの『ホシ』もおにいさんたちの願いを叶えてくれる……」

モナ「願いを……!？」

ジョゼ「……とかだつたらいいよね」

モナ「いいよね、かよ……」

ジョゼ「これ、おにいさんたちあげるね。キラキラで綺麗だし、おにいさんもほいでしょう？『オチカツキノシルシニ』つてやつだよ。僕、知ってるんだ。それじゃまた、おつかれ〜」

モナ「あ、おいちよつと！」

スカル「行つちまつた」

フォルス『『ホシ』ねえ……怪しさ満点だけど」

ナビ「でも、もしかしたらホントに叶ったりしてな！」

モナ「さすがのメモントスでもそんなことは起きないとは思うが……とりあえず、願
い事を言ってみればいいんじゃないか？」

パンサー「じゃあ……パフェ食べ放題！カロリーゼロで！」

スカル「牛丼特盛り！豚汁つきで！」

トウルース「だつたら金！何でも使える」

モナ「……何も起きないな」

パンサー「スカルの願ひ事が下品すぎたんじゃない？」

スカル「オメーに言われたかねーよ！」

ナビ「それが、何か条件があるのかな」

モナ「ま、そう都合よくはいかないだろ。とはいえ捨てるわけにもいかねーか……一
旦そいつはオマエが持つててくれ。予想外の出来事はあつたが、戻るとしようぜ」

今度こそ出れた

竜司「メモントスなあ……しかし、よくわかかんねえ場所だつたな。んで、最後に見
たあのか『壁』みてえのは、何だつたんだ？」

モルガナ「詳しくはわからんが、アレのせいで一定より深く入れなかつたんだ。だが
『大衆のパレス』なら……大衆がワガハイらを信じたり受け入れたりすれば、影響はあ
る」

杏「何でモルガナは、あんな場所の事いろいろ知ってるの？」

モルガナ「どうも記憶がはつきりしないんだが・・・メモントスの奥がどうなってるのか、どうしても知りたいんだ」

杏「どうしても・・・？」

モルガナ「メモントスは『みんな』のパレスだが、同時にすべてのパレスの源でもあるんだ。昔は、カモシダの城みたいで、あんな一人が支配するパレスなんてなかった。だからゆがみの大元であるメモントスを何とかできれば、ワガハイのこの姿だって・・・！」

杏「モルガナも助けてほしかったんだね・・・」

モルガナ「て、手駒が欲しかっただけだ」

竜司「そうか・・・だから俺達にちよっかい出してきたのか」

杏「・・・私、協力してあげるよ。失くしたものを、戻るといいね」

モルガナ「・・・宜しく・・・頼む・・・」

杏「・・・ところでモルガナってさ、男？もしかして女？」

優菜「さすがに男だろ」

杏「だよね・・・念のため、確認したかっただけ」

竜司「意外と歳くってるヤツかもな？加齢臭すごかったりして・・・」

モルガナ「やめろ．．．ていうか、男に決まってる？．．．だって．．．ワガハイは．．．」

杏「．．．何？」

モルガナ「いや、なんでもない。話は終わりだ！ともかく、小物の改心はメメントスで出来ることが分かった。目につく情報があつたら実戦練習のついでに退治するのもアリだな」

杏「他に目ぼしいのはいなかったけどね．．．」

竜司「『大物』を改心させて怪盗団の名前を売れば、そんなもん山ほど書き込まれる」

優斗「ならまずは、班目だな。明日行くか」

双葉「まだパレスには行ってないんだろ？私準備するから行くとき言ってくれ」

帰って自室

優斗「ところでよ、本当に何も知らねえの？」

優菜「とりあえず、確か死ぬ前にペルソナの新しいやつがあった．．．5が二学期まであった、4はゴールドデンが出ていたから、5もロイヤルつてのがあった。それが何かしらの（多分作者の意向）輩が途中から混ぜたんだろう、だが出る前に死んじまったから内容は分からん」

優斗「そう・・・なるのか？」

優菜「あくまで予想だ」

優斗「ま、分かんことをいつまでも考えても仕方ねえな」

優菜「てかお前こそなんか変わったことないのかよ」

優斗「ん？・・・気になったことは、カウンセリングの後にあつた赤髪の女子かな」

優菜「赤髪？」

優斗「単純に普通の髪色じゃない奴、基本ストーリーに関わってくるからな」

優菜「あるあるだな」

赤髪の女子・・・ちよつと調べるか

寝た

第九十九話（ドラゴンボール超に來た『第四話』より）

朝か・・

久しぶりに会うな、向こうからしたら昨日の今日だけど

外に出たら皆いた、皆早いな・・いや、俺が遅いのか！※現在AM9時

界王神「キビトですかね！」

ユウナ「え？何が？」

悟空「あ、ユウナ！起きて來たか」

ユウナ「深夜のうちに帰ったからみんな気づいてなかったよ」

悟空「そっか、今話してるのはゴクウブラックの正体だ」

ユウナ「未来のトランクスに聞いたのか？特徴というか・・つけてたものとか」

悟空「そーいや聞いてないな、おおきいトランクス！來てくれ！」

ユウナ「キビトって誰よ」

悟空「いつも界王神様というアイツだよ、顔がいかつい」

ユウナ「神ってことか・・じゃあ神の中にいるって考えてるのね」

未来トランクス「どうしました？」

ユウナ「ゴクウブラックって何かつけてなかったか？悟空がいつも付けて無いやつとか」

未来トランクス「付けて無い物・・・片方の耳にそういえば界王神様と同じようなものをつけてました」

ウイス「ポタラですか・・・ではこのような色のポタラでしたか？これは界王神様だけがつけられる色です」

未来トランクス「これです！この色です！」

ユウナ「それじゃあ、界王神の誰かって訳か・・・」

チカチカ

ウイス「おや？着信が・・・あら！大神官様からですよ！」

ビルス「なに!?大神官だど!？」

ウイス「もしもし大神官様？ご無沙汰しております・・・はいはい・・・了解しましたそれはまた後程・・・やれやれ・・・これは大変なことになりましたね・・・」

ビルス「どうした？なんの用だったんだ？」

ウイス「悟空さん！」

悟空「ん？オラ？」

ウイス「全王様があなたにお会いしたいのですぐ王宮に来るようにと」

悟空「え？全王さんが？」

ビルス「な・・・なんだと・・・!?」

悟空「なんでオラなんだ？・・・武道会のことかな」

ウイス「さあそれは・・・」

悟空「今忙しいからまた今度って言ってくれ」

ビルス「バ・・・バカたれ！全王様がすぐについておっしゃったら何があつてもすぐに会いに行くんだ!!」

悟空「なんだよ、遠いのか？そこ」

ウイス「私でも片道2日ほど」

悟空「二日!!? そんなバカ遠いとこ言ってる場合じゃねえだろ!!」

ビルス「何度も言わせるんじゃない!! さっさと行け!!」

界王神「あ・・・あのもしよければ私がお連れいたしましょうか・・・あそこになら私の瞬間移動使えます」

悟空「ホント!？」

ビルス「それがいい！お前と一緒にならまだ安心だ！ウイス！お前も行ってこい！」

ウイス「はい、ビルス様はどうなさいますか？」

ビルス「冗談じゃない！オレはゴメンだ、悟空くれぐれも粗相の内容にしるよ！お前

の態度に全宇宙の運命がかかっていると思え・・・！」

悟空「ちえ・・・じゃあとつとと済ませちまうか、行こうぜ！界王神様」

ビルス「さて！お前その恰好くつもりか？正装に着替えてこんか!!」

悟空「そんな面倒なことすんのならオラ行かねえぞ」

ウイス「まあ今回は慌てていたので・・・と私から無礼を詫びておきましょう」

ビルス「むうそれからゴクウブラックの事は絶対に秘密しておけよ、全王様の耳に入れば怒りのために世の中が消滅しかねんからな・・・！」

ウイス「たしかに」

ビルス「最後に1つ！」

悟空「まだなんかあんのかよー」

ビルス「お前じゃない界王神だ」

界王神「！はい」

ビルス「ぜつつつたいに死ぬんじゃないぞ！」

界王神「え？あ・・・はい」

悟空「よし！じゃあOKだな！行ってくんぞ」

界王神「あの・・・私何かまずいことでもしました・・・？」

ウイス「ホホホ・・・お気になさらずに・・・」

行つてつた

とりあえず朝飯食お

食べ終わつて戻つたら

みんな戻つてきてた

ユウナ「何だもう戻つてきたのか」

ブルマ「ようするにザマスつてヤツが師匠の界王神様を殺してイヤリングを奪い界王神になつて「時の指輪」つてやつでおつきいトランクスの世界に行つたかもつてことよドラゴンボールを使つてあんたの体を奪つた後にね」

あゝ大体わかつた

悟空「なんでわざわざトランクスの未来の世界に行つたんだ？」

ウイス「多分我々の世界では地球の戦士やビルス様が生きているからでしょう、支配するのに都合が良い世界だった・・・とでもいいでしょうか・・・」

ビルス「お前が死ぬからだ！」

ポカツ

界王神を殴つた

ウイス「とはいえこちらの世界も安全とは限りませんよあちらの世界に身を潜めてこちらの世界の神々を殺すチャンス疑っているのかも・・・」

ビルス「ウイス！第10宇宙の界王神界に行くぞ!!今のうちにザマスを破壊してやる・・・!」

界王神「そ・・・それでは未来が変わってしまったってまた新しい世界ができてしまうのは・・・」

ビルス「それがどうした!このままだといずれ皆殺されるかもしれないんだぞ!」

界王神「わ・・・わかりました」

悟空「じゃあオラも!」

ウイス「ザマスは悟空さんの体を狙っているんですよ、今お会いになるのは危険かと・・・」

ビルス「特別にオレが行ってやるからお前らはここで待っている!」

悟空「なんだよ・・・」

界王神「ビルス様、それではまた私が連れて行きましょう!」

ビルス「いや、お前には別の頼みがある」

何かを伝えて行ってしまった

ベジータ「ちっ・・・気に入らん・・・大会を見て強い体が欲しくなったならなぜオレではなくカカロットなんだ・・・!」

ブルマ「どんなどこ張り合ってるのよ!」

ベジータ「だいいち優勝したのはユウナじゃないか」

悟空「アイツになるのは嫌だったんじゃないか？女だから」

ユウナ「私は安心したけどね」

中に入って少し行くと

ピラフ「あ、奥様タイムマシンの燃料たまりましたよ！」

ブルマ「あらありがとう」

悟空「お！じゃあもう行けんだな！よし行くかベジータトランクスユウナ！」

ブルマ「え？ビルス様たちを待たなくていいの？」

悟空「まあ正体が誰だろうと倒さなきゃなんねえのは変わりはないから、早えほうがいいだろ」

ベジータ「キサマらしいな、いいぞ準備はとづくにできてる」

ユウナ「いつでも行ける」

悟空「トランクスも大丈夫か？」

未来トランクス「はい！大丈夫です、悟空さん父さんユウナさんよろしくお願いします！」

ブルマ「まったくサイヤ人つてのは……うまくいってもいなくても……一旦帰ってくるのよトランクス」

未来トランクス「はい！わかりました」

タイムマシンの中

ユウナ「ゴクウブラックはどこまで変身できるんだろうか」

悟空「超サイヤ人にはなれるだろうな」

ベジータ「トランクスは何かわからないか」

未来トランクス「すみません、わかりません」

着いた

皆降りたけど

悟空がうずくまる

悟空「う……うええ」

トランクス「どうしたんですか？」

悟空「……外みてたら気持ち悪くなった……」

ベジータ「ガキか！ほっとけトランクス」

悟空「ま……待ってくれよ……」

ベジータ「……これが未来の地球……くそつたれめ……」

荒廃した世界……

悟空「ひええ……こりや確かにひでえもんだな」

未来トランクス「く……」

悟空「……あつちの山ん中にあるのがブラックか？……！動き出したぞ……オラたちに気づいたのかもしれないねえタイムマシンを隠してここを離れた方が良い」

未来トランクス「わかりました！」

カプセルに戻す

ニヤー

優菜「猫？」

未来トランクス「！お前……」

中に入っていく

未来トランクス「ま……まって……」

未来トランクスも入っていく

俺も行こう

……！これは！

優菜「悟空！仙豆をくれ!!」

悟空「どうしたんだ？」

悟空たちも来た

未来トランクス「マイが……マイが生きています!!」

仙豆を口移しで食べさせる

悟空「うひゃーっあいつよくクチとクチをくつつけるなあ．．．！」

ベジータ「お前．．．したことないのか？」

悟空「ん？何をだ？」

ベジータ「その．．．キスを．．．」

悟空「あつたりめえだろ！」

ベジータ「．．．結婚しているじゃないか．．．」

悟空「え？なんか関係あんのか？それが」

ベジータ「も．．．もういい．．．」

スウ

未来トランクス「マイ!!!」

マイ「トランクス!!!」

未来トランクス「よかった．．．よかった．．．！」

マイ「なんで．．．ここにいるんだ？過去には行かなかったのか？」

未来トランクス「いや：過去には行けたよ、あっちの母さんのおかげでこうして戻っ

てくることができたんだ」

マイ「そうか、上手くいっただんな：．．でもそれなら何で戻ってきちゃったんだい：．．

？」

悟空「オラたちとゴクウブラック倒しに來たんだよ」

マイ「はっ!!ブ・ブラック!？」

未來トランクス「大丈夫この人は本物の悟空さんだよ！」

悟空「オス！」

ベジータ「なるほどどこかで見えた顔だと思つたらウチにいるガキの未來の姿か」

ユウナ「・・・」

ドンドン近づいてくる

未來トランクス「こっちは俺の父さん、そして隣にいるのがユウナさん3人とも17

年前から來てもらつたんだ」

ベジータ「とりあえずお前達ここで隠れている、俺たちは離れた場所で闘う」

未來トランクス「え・・・？俺も戦わせてください！」

ベジータ「ピンチになったら頼むかもしれん、だがそれまではタイムマシンとその娘

を守るんだ。万が一ヤバそうになったらお前らだけで元の世界に戻るんだぞ、いいな」

悟空「あいつああいうこと言うようになったんだよ、進化しただろ？」

ユウナ「・・・それを言うなら進歩しただぞ」

ベジータ「さあ始めるぞカカロット」

悟空「おう！」

ユウナ「気をつけろよ」

ギューン

広いところに来た

悟空「ここならこれ以上街を壊さないで済むぞ」

ベジータ「そんな簡単な闘いになるとは思えんがな」

ユウナ「どうせ一人ずつやるんだろ」

悟空「来たぞ」

ベジータ「ようやくご対面か」

上に黒い悟空がいる

ゴクウブラック「お前達が・・・なぜここにいるんだ・・・？」

ベジータ「なるほどありやお前そのものだな」

悟空「ほんとだ・・・なんだか妙な気分だなあ・・・」

ベジータ「カカロット俺に先にやらせろ、お前と同じ顔のやつを倒せるなんてワクワクするぜ」

悟空「おめえがブラック・・・っていうかザマスって奴なんだな！全部わかってんぞ！おめえドラゴンボールを使ってオラの身体と交換したんだってな！」

ゴクウブラック「・・・そんなことまで知ってるのか・・・」

悟空「やつぱりそうなんだな！じゃあおめえの身体のオラがいるってことだろ？そいつはどうしちまったんだ!？」

ゴクウブラック「心配するなすぐに殺した」

悟空「・・・くそ、じゃあついでにオラの敵討ちもしねえと」

ユウナ「私も質問がある」

ゴクウブラック「答えると思うか？」

ユウナ「殺す気だろ？冥途の土産の意味でな、いっちよ頼むよ」

ゴクウブラック「・・・いいだろう」

ユウナ「お前はあの試合を見て、悟空の身体と決めたと思うが・・・なぜ優勝した私にできなかった？」

ゴクウブラック「お前が相手の・・・ヒットといったか、奴を倒したのは体の強さというより。能力のたぐいだと感じた、しかも相当特殊な能力をな。そういうものは魂とセットになっているからな。だからお前の体じゃなく孫悟空の体に決定した」

ユウナ「あつそうすか」

ゴクウブラック「どうやって来たんだ？この世界のお前達はとつくの昔にいないはずだ」

ベジータ「そんなことでめえなんぞに教える義務はない」

ゴクウブラック「トランクスはどうした・・・一緒か？」

ベジータ「俺たちは話し合いに来たんじやない！てめえを退治しに来たんだ！はっ

!!!」ドンッ

超サイヤ人になり顔を殴ろうとするが

かわされる

すぐにまた脚で連打する

ゴクウブラックはずっと防御している

悟空「オイ！ベジータまだ誰が先か決めてねえだろ!!」

ベジータ「あいつのツラを見ていたら我慢できなくなつてな！」

悟空「しょうがねえな・・・オラも自分と同じ顔だとやりずれえからな・・・まいい

か」

ユウナ「私は眼中にないのね・・・まあいいけど」

ゴクウブラック「丁度いい・・・毎回トランクス相手では退屈していたところだ」

ドウン

ベジータ「フン！金髪か」

悟空「やっぱあいつも超サイヤ人になれんだな」

ゴクウブラックが殴りかかる

全て防御しベジータは上に避ける

ゴクウブラック「はっ!!!」

ゴクウブラックがかめはめ波のようなものをだし

ベジータは避けて左わき腹を両手で殴り数百メートル先まで飛ばした

ゴクウブラックが飛び

ベジータも飛び

ベジータが左チョップし

ゴクウブラックが左腕でガードする

ベジータが右腕で殴りゴクウブラックがよける

そこから殴って避けての繰り返し

最後にベジータがゴクウブラックの顔面を殴り、グミ撃ち

ゴクウブラックはバリアみたいなので回避

ベジータ「なるほどな・・・確かに今のトランクスには手におえんわけだ」

ゴクウブラック「これほどまでとは・・・キサマの時代のベジータだ!」

トより未来のカカロットの身体だったな・・・ということはキサマもブルーになれると

いうことか、ではお互い最終形態で決着をつけるとするか」

ドオン

ベジータがブルーになった

ユウナ「そういえば悟空約束覚えてるか？」

悟空「約束？」

ユウナ「ゴッドだよ」

悟空「そうだった！忘れてた!!」

しっかりしてくれよ

ベジータ「どうした？貴様も早く変身しろ、殺してしまうぞ」

ゴクウブラック「・・・私は・・・まだそれになれない・・・」

ベジータ「なれないだと？はっはっは思った通りだ」

左ブローの腹パンがゴクウブラックに決まる

ベジータ「その体はな細胞の隅々まで・・・ヤツが永く激しい歴戦で作り上げたものだ」

吹っ飛んだゴクウブラックをけり上げ上に向かってゴクウブラックを殴り続ける

ベジータ「キサマにはしよせん借り物・・・」

ゴクウブラック「ぬっぐおっ!!」

ベジータ「ヤツのような純粋なバカにしか使いこなせない……」

ゴクウブラックの上に行く

ベジータ「サイヤ人の細胞が……」

両手を組み下に突き落とす

ベジータ「あるんだよ!!」

ドドン

ゴクウブラック「ぐう……」

悟空「うわぁ……オラがやられてるみてえでなんか複雑……」

ゴクウブラック「こ：こんなところでキサマなんか計画を潰されてたまるか：だあ

あ!!!」

二人とも突っ込む

カッ

ゴクウブラックが吹き飛ぶ

ゴクウブラック「人間が支配するこの世界は間違っている、人間は必ず争いを繰り返
し星を破壊する。この世界に人間などいらぬ！人間の存在こそ悪!!!それを正す我こそ
が……正義なのだ!!!」

ベジータに突っ込む

ベジータ「ざれごとを言いやがって」

ゴクウブラックの攻撃をよける

そして掴む

ベジータ「神だか界王だか知らんが俺たちには関係ない」

ゴクウブラック「うぐぐつ!!!」

下に投げ飛ばす

ベジータ「この世界からとつとといなくなれ」

ゴクウブラック「・・・わ・・・私はすべての神を倒した・・・」

悟空「それって破壊神様たちは自力で倒したんじゃないやなくて界王神様を殺して一緒に消

しちゃったってことだろ? きたねえよな、おめえ」

ゴクウブラック「・・・過程はどうあれ私はこの世界において最後の神なんだ・・・」

ベジータ「だからなんなんだ?」

ゴクウブラック「この世界では・・・私がルールだ!!」

ゴクウブラックが気弾を撃ちまくる

ゴクウブラック「だあああ!!!」

すべて避ける

ベジータが地面に降りる

ベジータ「歪んだ正義を押し付ける神なんか必要ないんだよ」

ゴクウブラック「だまれ・・・だまれ人間!!」

ユウナ「神は絶対だ!!!神である私のおこないはすべて正義なんだ!!!」

殴って守って

未来トランクス「悟空さん!」

悟空「なんだよおめえたち来ちまったんか!」

未来トランクス「聞いて下さい!ブラックの超サイヤ人が前よりも強くなっているんです」

悟空「ふーん・・・あいつも修業したんかな・・・まあそれでもだいぶ差があるみてえだし・・・勝てんだろ」

未来トランクス「嫌な予感がします・・・早く決着をつけた方が・・・」

悟空「・・・そうかわかった、オーイ!ベジータ」

胸ぐらをつかんでこっちを見る

悟空「オラたちの番はもういいから決着をつけてやれ!」

ベジータ「フン!ハナからキサマらに回すつもりなどないわ!」

悟空「あんにやろ!」

ゴクウブラックを上につけり上げる

ベジータ「これでおしまいだ！夢が叶えられなくて残念だったな!!」

ゴクウブラック「く・・・くそ・・・」

ベジータ「くらえ!!!ファイナルフラッシュ!!!」

ズギャン

当たる瞬間に誰かが助けた

ユウナ「嫌な予感ほどよく当たりやがるな」

ベジータ「・・・！誰だ・・・？」

悟空「誰がいるぞ!?仲間か？」

未来トランクス「ブラックに仲間!?知らないぞそんな奴・・・!!」

ベジータ「ブラックが回復しやがった!」

ゴクウブラック「助かったぞ・・・」

ザマス「死なれてしまったては元も子もない、人間0計画には・・・我々が2人必要なのだから」

ベジータ「誰だ?あいつは・・・」

未来トランクス「あの格好・・・もしかしてあいつが・・・ザマスなのか!」

悟空「え!?ザマス?ブラックの中身がザマスなんだろう?なんで二人いるんだ!」

優菜「ブラックは私達の世界のザマスでもう一人はこの世界のザマスだろう」

未来トランクス「まさか二人が手を組んでいるとは……!!」

悟空「ややこしいけどどりあえず敵が二人になったってことだな!」

ベジータ「フン! 一人だろうが二人だろうが関係ない、雑魚が増えたただけだ」

ベジータがゴクウブラックに殴りかかり、ゴクウブラックがよける

殴りあい

ベジータの蹴りを屈んでかわし

その反動で一回転し下に蹴り飛ばす

気弾の雨を降らすベジータは避けながら突っ込む

ゴクウブラックが手をかざすと

ベジータが動かなくなる

ベジータ「ぬおおお……!!」

悟空「お……おい! ベジータのやつおされてねえか……!?!」

未来トランクス「ブラックがまた……強くなってる!」

ゴクウブラック「お前の言うとおりでベジータ、私は孫悟空の体を奪えばすぐさまそ

の力が手に入ると思っていた」

ベジータ「ぐ……!! うぐつ……!」

超能力のようなものでベジータを金縛りにする

ゴクウブラック「しかし・・・それは違った・・・」
ベジータ「だあつ!!!」

バンッ

金縛りを振り切る

ベジータ「ハア・・・ハア・・・」

ゴクウブラック「ブルードころか普通の超サイヤ人にさえ満足に変身できない状態だった」

悟空「なんだ？なんの話をしてんだ？」

ゴクウブラック「私は考えた、どうすればこの体に眠る力を全て引き出すことができるのか・・・そして発見したんだ、サイヤ人の特徴を」

ザマス「ニヤ・・・」

口でニヤツというやつ始めて見た

ベジータ「特徴だと？」

未来トランクス「あいつ・・・もしかして・・・!」

マイ「なんだいトランクス・・・」

未来トランクス「俺たちサイヤ人は瀕死の状態から回復すると劇的にパワーアップするんだ・・・」

マイ「そうなのか!？」

未來トランクス「あいつ・・・それを利用して・・・!」

ベジータ「ベジータがやられ落ちてきた」

悟空「ベジータ!!!」

駆け寄る

悟空「仙豆だ・・・!」

マイ「そ・・・そうだよ、それだったらベジータさんだって仙豆で回復すればいいんだ!」

ガリツ

ベジータ「はっ!!!」

ドギユツ

ドカツ

ドドドツ

同時に顔を殴り

ゴクウブラックが腹パンを決め

ベジータ「こ・・・こおっ!!!」

頭突きをする

マイ「ああっ!!!そんな!!」

未来トランクス「瀕死からの復活でのパワーアップはおそらく父さんたちにはもうできない、それ程極限まで鍛えてあるんだ。あの三人は・・・」

マイ「・・・ユウナさんもなのか?」

ユウナ「私はまだいけると思う」

未来トランクス「え?」

ベジータ「キサマ・・・」

ゴクウブラック「いいねえ私を高めるのに丁度いいレベルだベジータ」

スタツ

ザマスがゴクウブラックのそばまで行く

悟空「ま・・・まずい!!」

ザマス「はっ!!!」

ベジータ「ぐ・・・っ!!」

ゴクウブラック「いいぞ・・・いいぞ・・・!ダメージを受けた細胞が再生される度に私の物になっていく、神の心とサイヤ人の体が結びついていくのだ」

超サイヤ人のオーラを解く

ベジータ「?」

ゴクウブラック「ニヤ・・・」

どっちもザマスだな・・・

ゴクウブラック「所詮人間であるお前らには立ち入ることのできない世界に私は到達した」

悟空「・・・何言ってるんだあいつ・・・」

ゴクウブラック「はあああつ!!!」

ブワオツ

ベジータ「何っ!!?」

悟空「え?ピンク!?なんだおめえその色!」

ザマス「おお・・・これは素晴らしい・・・神が超サイヤ人ゴツドを超えると青ではなく薄紅色になるのか!」

ゴクウブラック「お前らのセンスに合わせてこの姿を超サイヤ人ロゼ・・・と呼ぶことにしよう」

悟空「ベジータ、さすがに二人で戦ってみつか?」

ベジータ「冗談じゃない、貴様はあつちの野郎をなんとかしろ。ダメージを受ける度に回復されたんじゃラチがあかん」

悟空「わかったよ、オイ!そつちの・・・ザマスだったか、オラが相手になるぞ!」

「ザマス「・・・いいでしょう」

飛んで行った

ユウナ「ベジータ、交代」

ベジータ「なんだと？何故交代なんだ！」

ユウナ「私だけ戦ってないの、わかる？（#^ω^）」

ベジータ「うっ・・・」

交代した

ゴクウブラック「今度は貴様か、ベジータはもう終わりか？」

ユウナ「私だけ何もしないのは無しでしょ」

ゴクウブラック「クツクツク」

ユウナ「なに笑ってんだ？」

ゴクウブラック「いくら私を倒そうとし交代しながら戦おうと、勝てるわけがなからう」

ユウナ「そう思ってた・・・なら」

ドカッ

ユウナ「グッ」

ゴクウブラック「何をしている？戦いはもう始まっているぞ？」

ユウナ「クロノス、ザ・ワールド」

まずスペクトेटドをつける

ユウナ「トラ、悪魔の審判」

ドカツ

ユウナ「そして時は動き出す」

ゴクウブラック「グハツ!!」

未来トランクス「!?今何が!」

ユウナ「お前が言ったんだろ？戦いはもう始まっていると、油断しやがって……へ
ル、デビルスマイル」

ゾワアアア

ゴクウブラック「なっ!」

自動スキル恐怖率UP発動

ホバル特性悪天候の申し子発動

自動スキル浮かない空発動

ゴクウブラック「ぐううう……」

ユウナ「これで終わりだ、亡者の嘆」

ザシユ

真つ二つにされる

ゴクウブラック「油断したのは貴様だったな」

マイ「そんな!!」

未来トランクス「ユウナさん!!!」

ユウナ「油断してるのはお前だろうが何度も言わせるな」

不屈の闘志発動

ゴクウブラック「なぜその状態で生きていられる!!」

ユウナ「ヘル、漆黒の蛇」

ゴクウブラック「グオツ!!」

ドゴオ

吹き飛ばしていく

さつきくすねた仙豆を食べる

ユウナ「確かにこりやすげえな」

ガイアにも食わせる

ゴクウブラック「ぐうう・・・」

ユウナ「イフリート、インフェルノ」

ゴオオオオオ

ゴクウブラック「そんなもの効かないぞ」

ユウナ「ならホバル、火炎ガードキル」

パキン

ゴクウブラック「なんだ？」

ユウナ「もっかいインフェルノ」

ゴオオオオオ

ゴクウブラック「グアアアアアア!!!」

ユウナ「熱いか？なら、ミヅハノメ、ダイヤモンドダスト」

パキン

ゴクウブラック「ガッ……」

凍った

悟空「そいつは……オラの仙豆……！」

ユウナ「ん？」

ザマス「便利だろ？神の力というのは」

ボツ

悟空「あ！なにすんだおめえ！」

えく仙豆無くなったの？

ドコオ

ユウナ「グエツ！」

なんだ!?!何が起こった!?!

ゴクウブラック「大きい隙だったぞユウナ」

顎か・・・

ガン

ガクツ

ゴクウブラック「ククク・・・このあふれるパワーついに私は手に入れたぞ、お前らが他の世界の間だろうが関係ない。どの並行世界でも人間が生き残る未来はない。人間0計画は全ての並行世界で実行されるのだ！」

ドゴオ

蹴り飛ばされる

グツ

未来トランクス「ユウナさん！」

近寄ってくる

悟空「く・・・くそ・・・」

悟空も少し押されてるな

ゴクウブラック「フン・・・トランクスか・・・」

未來トランクス「悟空さん！一旦退却しましょう！このままでは全員殺されてしまします！」

悟空「退却・・・？」

ビツ

ザマスがゴクウブラックの横に来る

ザマス「なあもうトランクスは用済みだろ？さっさと殺してしまえ」

ゴクウブラック「・・・たしかにな、私のパワーアップによく貢献してくれたなトランクス礼を言うよ」

未來トランクス「ちくしょう・・・オレは生きのびていたんじゃないかって、生かされていたのか・・・!!悟空さん！マイ！父さん！目を伏せてください!!」

悟空「え？何？」

未來トランクス「くらえ・・・!!!太陽拳!!!」

カツ

全員出して下水に連れて行つた

よしつ 隠蔽魔法かけたぞ

未來トランクス「いきましよう父さん」

ベジータ「あ．．．ああ」

悟空「おめえ太陽拳よく知ってたな」

未来トランクス「ええ．．．昔悟飯さんから教わりました、しかし．．．ブラックがあれほどの強さを秘めていたとは．．．しかも不死身の仲間まで．．．完全に想定外でした申し訳ありません、いったん過去に戻ってた対策を．．．」

マイ「．．．でも対策って言ったって．．．不死身のやつがいたんじゃ．．．」

ベジータ「．．．カカロット、お前は何かないか？」

悟空「．．．一つだけ方法があんぞ」

未来トランクス「な．．．なんですか悟空さん」

悟空「オラが生まれるよりずっと前．．．めちやくちや強え敵が地球に現れたときがあったんだ、そんな時に地球で戦えるのは亀仙人のじっちゃんとそのお師匠様ぐらいだった。でもじっちゃんたちはどうやってもそいつには敵わない」

未来トランクス「．．．ではいつたいどうやってそいつを．．．」

悟空「閉じ込めたんだ、電子ジャーに」

マイ「電子ジャー!？」

未来トランクス「そ．．．そんな技が．．．!」

悟空「ああ魔封波ってんだ、じっちゃんならその魔封波のやり方を教えてくれるはず

だ」

ユウナ「それなら出来るかもな」

未来トランクス「封印……！その方法しかありません！急いで過去に戻りましよう

！」

ユウナ「だが気づかれたりしないか？」

未来トランクス「なら俺がブラックの気を引きます！その間に父さんたちは過去に戻つてください！」

マイ「なら私も行くよ！少しぐらい手伝わせてくれ！」

ユウナ「なら……物理反射の魔法をかけておこう」

マイ「魔法!？」

ベジータ「魔法とはなんだ？」

未来トランクス「魔法ってフィクションってやつでできる力ですよね!？使えるんですか？」

ユウナ「まあな」

ブオン

マイ「その魔法って言うのがかかったのか？」

ベジータ「ならさっきのブラックをおしていた力もその魔法というやつなのか？」

ユウナ「あれはペルソナ」

悟空「ペル・・・なんだって？」

ユウナ「後で説明する」

未来トランクス「ならこれ、タイムマシンのホイホイカプセルです」

トランクスとは別行動に

隠蔽魔法は解いた

タイムマシンに乗る

ドン

ベジータ「グアアアアアア!!!」

悟空「ベジータ!!!」

ユウナ「どこから撃ってきたんだ・・・!?」

ドンツドンツ

悟空「危ねえ!!」

バシユ

ドカン

ゴクウブラック「フン、逃げようなどとそんなことはさせんぞ」

悟空「ブラック!? どうしてここが分かった!!」

ゴクウブラック「その女……優菜と言ったか、そいつの気がほんの少し漏れていたらぞ」

ユウナ「気が!？」

漏れていたのか!!

ゴクウブラック「それがタイムマシンか、マシンもろとも死ね！」

マイ「だああああっ!!!」

ドウンドウン

ゴクウブラック「!?なんだ!!」

未来トランクス「邪魔するなーっ!!!」

ギャン

ドドン

未来トランクス「今のうちに……早く!!!」

浮かんで

悟空「すまねえトランクス、オラたちが戻ってくるまで何とか持ちこたえてくれ」

シユン

飛んで? 行った

ユウナ「ギリッギリだな」

悟空「まずユウナはそのペルソナってなんだ？」

ユウナ「え〜とっ・・・簡単に言うとなんか人格の具現化・・・でいいのかな？」

悟空「ん〜？どういうことだ？」

ユウナ「人ってさ普通はいろんな面があるんだよ」

悟空「オラはちよつと何言ってるかわかんねえな」

ユウナ「簡単に言うとなんか魔人ブウの時のベジータだな、いつもいい面にいるけどバビ
デいのせいで悪い面が露出しただろ？」

悟空「うーん・・・まあ、ほんの少しはわかったぞ」

ユウナ「ペルソナはその別の人格が具現化・・・つまり目に見えるようになったって
訳だ。ただし、ペルソナをつけない奴には見えねえ」

ピピピ

タイムマシン「間もなく、目的地です」

悟空「おつ、ついたみてえだな」

シュワワワ・・・

ブンッ

シュウウウ

ウイイイ・・・ン

出る

悟空がベジータを担いで出る

トランクス「パパ!!」

ブルマ「孫くん……!」

ガタツ

ブルマ「トランクス!!」

ネコ「ニャー」

ブルマ「え?」

中に入る

悟空「ふう……」

ブルマ「仙豆……こっちに少し残しておいて良かったけど……これでもうあと三つしかないわよ……」

悟空「……トランクスを置いてきちまったのはすまねえ……でもこうするしかなかったんだ、オラが魔封波を覚えて……すぐに戻る」

ブルマ「戻るって言ったって往復の燃料を抽出するのに丸一日かかるのよ」

ベジータ「カカロット……キサマそれをわかっていてトランクスを置き去りにしたのか」

ブルマ「孫くんを責めてもしようがないわよベジータ、状況が状況なんだから……」
悟空「……本当すまねえ……でもよ、よく考えたらタイムマシンなんだからこつちで一日経ったって同じ日に戻ればいいんじゃないやねえか？」

トランクス「そうか！頭いいな悟空さん！」

ユウナ「いいや、ダメだ」

ブルマ「そうなの、よく考えて！あれはタイムマシンなのに未来じゃなくて並行世界に繋がっているのよ。それは最初の設定がそのままになっているからなの、設定を変えると同じ未来には二度と行けなくなるわ！」

ベジータ「なんだと!？」

ブルマ「だから設定は変えられない。こつちで一日経てば未来の世界でも一日経ってしまうことになるの」

界王神「……!」

ブルマ「しかも……実はそのつながりもだいたい弱くなってきて……どつちにしても次の往復が最後ね、二度とトランクスの未来には行けなくなる」

トランクス「そ……そんな!!」

ウイス「なんと……」

悟空「まいったな……」

ガタンッ

界王神が立つ

ビルス「……どうした？界王神」

界王神「あ……いえ……ゴワス様との約束を思い出しました。ひとまず事情を説明しなくてはなりませんので、第十宇宙に行つてまいります」

ウイス「そうですねか、お弟子さんがこんな事になり氣を病んでいらつしやるかも知れませんのでフオローしてあげて下さい」

界王神「はい、わかりました」

行つてつた

ビルス「ちなみにオレは未来には行かんぞ」

悟空「え？何でだよ」

ビルス「現在のザマスを破壊してやつたんだ、後はお前らでどうにかできるだろ。オレはここで美味しい物でも食つて待つていた方がいい」

ウイス「賛成ー♡」

ブルマ「ちよ……ちよつと！そんな無責任な……」

悟空「そーういや未来のウイスさんつてのはどうしてゐるんだ？死んじやいねーんだろ？」

ウイス「天使は仕える神が死ぬと次の神が現れるまで機能を停止するのです」

悟空「え!?!じゃあ本当に未来に味方はいねえんだな・・・」

ブルマ「どうすんのよアンタ」

悟空「オラはどつちにしろこの一日で魔封波を覚えねえといけねえからじつちゃんの所へ行ってくる、おめえはどうする?ベジータ」

ベジータ「フン!キサマの知ったことか!オレはそんな技には頼らん」

ドギユ

飛んで行った

ブルマ「ベジータ・・・」

とりあえず仙豆でも作るか

悟空「ん?何してんだおめえ」

ユウナ「仙豆作ってる」

ガイアがカオスの空間に大量に作ってる

ブルマ「仙豆!?!」

ユウナ「大体こんだけでいいだろ、見るか」

悟空「ああ」

空間を覗く

悟空「うひゃー！こんなにおおい仙豆見たことねえぞ！！」

ユウナ「じゃ、ちよつと鍛えてくるわ」

ブルマ「ユウナさんも行くの？」

ユウナ「明日までには帰ってくるさ」

ブウン

精神と時の部屋

ベジータ「！お前は」

ユウナ「やっぱりここにいたんだ」

ベジータ「邪魔はするなよ」

ユウナ「するわけねえよ」

さてまずは・・・どうやってゴッドになろうか

悟空あれ完璧に忘れてるし

ベジータ、儀式？せずにブルーになったからいけるはず

ペルソナ全員出してみるか

クロノス「私達の気に似せたらどうだ？」

ユウナ「出来るのか？」

イフリート「さあな」

カオス「お前はもう少し考えろ」

ベジータ『誰と話してるんだ？ペルソナというやつか？』↑聞いてた

ミヅハノメ「単純に修行じゃだめなんですか？」

アリエル「修行して神の域に行けるとは思いませぬえ」

トラ「いつその事神の力渡したらどうだ？」

ガイア「普通そんなことしたら四肢がもげます」

ユウナ「もげる!？」

ホバル「一回殺してヘルに復活させるときに神の力をそつと・・・」

ヘル「復活させるの見た目より大変なだけど!？」

ウンディーネ「サイヤ人って瀕死から復活するとパワーアップするんだろ？」

アラメイ「やってたら心が先に折れますよ」

アウラ「あの・・・」

皆「うん？」

アウラ「普通に全員で少しずつ分けたらダメなんですか？（ゴッド作る時そんな感じ

だったから）」

皆「・・・その発想はなかった!!」↑皆頭が残念だった

ベジータ「頭がおかしくなったのか？どうしてあんな所で円になる時みたいな格好し

てるんだ？」

イフリート「よし、合わせろよ。でなきやユウナも俺たちもオダブツだ」

ユウナ「地味に怖いこと言うのやめて」

ムワーン

グオオオオ

イフリート「よし、その調子だ」

クロノス「ヘル、少し量が多いんじゃないか？」

ヘル「分かっているわよ！調整が難しいのよ！」

カオス「今度は小さいぞ」

ヘル「うるっさいわね!!分かってるわよ」

ホバル「バカ!!でかすg」

ドカーン

ベジータ「!!？」

パラパラパラ

煙に包まれる

ホバル「バカ野郎!!お前なんで怒って大幅に大きくするんだよ!!その所為で死んじ

まったじゃねえか!!」

ヘル「死んでないわよ!!魂まだ出てないもん!!」

アリエル「あの・・・」

ホバル「まだって何だよまだって!!死ぬ前提じゃねえか!!!」

ウンディーネ「やめておきなさい、多分そのままにした方が面白いわ」

ユウナ「おい」

ヘル「ほら生きてるじゃない!」

ホバル「そういう問題じゃねえよ!!」

ユウナ「おい」

ガシツ

ヘル「ヒツ!!」

ホバル「ヒツ!!」

ユウナ「一回黙れ」

煙が晴れる

イフリート「あつ、赤髪」

ユウナ「つたく、しようがねえなあ・・・にしても変な感じだな」

クロノス「そうなのか?」

ユウナ「なんつうかこう・・・」

ヘル「ことう？」

ユウナ「こんな感じ」

ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜言〜葉にできなくい

*文才がないからです

シユウウ

黒髪に戻った

ユウナ「あれ？」

アリエル「戻りましたね・・・」

ミヅハノメ「正攻法じゃないからでしょうか」

アラメイ「だが一度感覺掴めば変身できるようになるんだろ？」

ユウナ「はずだ」

その後一か月ほどかけてゴツドになれた

かかりすぎ？

チツチツチ

今までが早すぎたんだよ!!

その後倒れこむように寝た

第百話（T O L O V Eるに転生したけど、他の小説の奴も
来てる件『第六話』より）

体育

ん？朝はどうしたって？

特になんもなかったからカットやで

女子「よーい」

パン

ギャウツ

ララ「ほ！」

女子「・・・ひや・・・100m・・・10秒9」

ウソ・・・？計り間違いでしょ!?

そ・・・そうよねきつと

ペケ「ララ様、ドーもまだ力を抑えた方が良さげです」

ララ「むくく」

里紗「ちよつとーあの娘マジですごくくない？ねー春菜・・・春菜？」

リトの方をじーっと見ている

ポーン

ドカッ

優菜「痛く・・・」

男子「すまん！大丈夫か？」

優菜「この野郎・・・」

ドリブルして

男子の前まで行く

優菜「私のドリブル止めたら、許してあげるよ」

男子「え？」

優斗「おいおい、キレんたって」

誰がキレてるだど？

ざわざわ・・・ざわざわ・・・

右から左のくるぶし辺りまでころがし

上にあげ空中エラシコで抜く

男子「え？」

次は・・・

浮かせて頭の上を通す

シヤペウ成功

そのままドリブルで抜けていき

サッカー部男子「これ以上行かせねえぞ」

優菜「ほーう？」

猿山「よしっ！サッカー部のアイツなら！」

ものすごい左回転をかけながら左に蹴る

そして右から抜ける

そして受け取る

イナイレの一人ワンツー

サッカー部男子「そんなのありかよ……」

猿山「こうなったらファール覚悟のスライディング……」

ズザザ

ボールを少し上げながらジャンプして避ける

猿山「そんな……」

優菜「遅い」

トップスピードで前線に

右足で左足の裏を通しDFを避ける↑ロナウドチョップ

ロナウドチョップで左に避け

戻ってきたDFを左で引き右で持つてくる

おなじみマルセイユルーレットでよけ

右でシュートと見せかけて左足の後ろを通し

GKが右に行つたところで

左足で左サイドネットにシュート

ズザザ

おわっ!?

リト!?

リト「危ねええ・・・」

いや、まだだ！跳ね返ってきたボールを・・・

オーバーヘッドキック!!

ズドン

スパン

優菜「よしっ！」

優斗「よしじゃねえ」

ドカッ

イフリートで当て身

優菜「グハッ」

優斗「すいません、こいつちよつと頭冷やしてきます」

佐清「あ・・・ああ」

飛んでる!?

どうなってるの? なにか種あるの!?

リト「・・・(。Д。)ポカーン」

ララ「ははっ! 面白ーい!」私もやりたーい!

キーンコーンカーンコーン

リト「あっ」

里紗「終わった」

その後

保健室

メイ「おーい!」

優菜「フアッ!」

メイ「フアッてなんよフアッて」

優菜「ああ、メイか・・・あれ？メイ前回いたっけ？」

メイ「熱出て休んでたよ！」

優菜「え？でも晩飯の時・・・」

メイ「ええ、いなかったわよ!!だって作者に存在自体を忘れられてたんだもん!!!（半泣き）」

優菜「そーいや優斗は？」

メイ「あんたねえ・・・普通男と女が一室にずっといるかっての」

それもソーデスネー

とりあえず着替えて外に出ると・・・

ドタドタドタ

うん？リトが走ってくる

一緒に走る

優菜「どした？」

リト「西連寺が、佐清のところに・・・」

メイ「それだけで走ってるわけじゃないでしょ？」

リト「とりあえず一緒に来てくれ！」

これはヤバそうだな・・・優斗に連絡しておこう

優斗視点

イフリート「おい、なんか西連寺？ ってやつが大変だと。優菜から」

優斗「なんだそれ、場所は？」

イフリート「体育倉庫」

優斗「まあ、行ってみるか」

その頃優菜は・・・

リト「おりやああっ!!」

バンツ

優菜「佐清先生じゃん」

佐清? 「ほーなかなか早かったな結城リト、もう少しのんびり来てくれてもよかったのに・・・」

春菜が触手に絡まれている

何かするの!? エロ同人みたいに!! エロ同人みたいに!!!

リト「てめーっ何してんだっ!!」

佐清? 「はああああア」

骨格が変わっていく

リト「い!?!」

佐清? 「うかつに近づくんじゃねーぜ、この女を無傷で解放してやりたいならな……
地球人は同族を大事にするんだろオ? キヒヒヒヒ」

リト 「や……やっぱ宇宙人……!!」

ギ・ブリー 「そう……佐清の姿を借りてただけ……擬態つてヤツさ、全くヒト型に化けるのは神経使うぜエ。俺の名はギ・ブリー、結城リト。ララから手を引いてもらおう、ララと結婚しデビルーク王の後継者となるのはこのオレだ、フシユー。お前なんかじゃねえんだよ、応じなきゃKの女は返さねーぜ? ま……それもアリかもしれねーがなククク……」

優斗 「よーす」

ギ・ブリー 「!？」

優斗 「え? 何そのカメレオンみたいなやつ」

ピッ

ギチチ

ビリイイイッ

触手が体操服やぶきやがった

ギ・ブリー 「キヒヒ……お次はもつと大変な事になるぜエさあ言え! ララから手を引くと!!」

リト「て・・・てめー、そんな事してまでララと結婚したいのかよ・・・」
ギ・ブリー「あ？」

リト「カンケーない女の子を人質に取って、ひでー目にあわせて・・・それでララがふりむくとも思ってたのかよ」

ギ・ブリー「キヒヒヒ、何かカン違いしてねーか？お前、ララはオレと結婚するんだよ。オレがそう決めたんだ、まあ性格だつて教育してオレ好みにすればいいしなア」

リト「てめーにとつちやララも春菜ちゃんも、道具みたいなもんつてワケか・・・」
ギ・ブリー「ハハ！そんな言い方されたら俺が悪人みてエじやねーか」

リト「ああ最悪だっ!!!」

ララ「リトー♡」

ガチャ

ララが飛び込んできたのでリト以外全員避ける

リトに飛びつく

ララ「やっと思つけたー!!こんな所にかくれちゃってもー♡」

リト「げ」

ララ「あれ？え・・・あいつギ・ブリー!?何であいつが・・・!!春菜!!ギ・ブリー!!
春菜に何してるのよっ!!」

ギ・ブリー「ララ・お前はオレのものだ」

ララ「ベアーっだ、あなたなんかキライって何度も言ったでしょ!!!それより春菜をはなして!そのコは私の大事なトモダチなんだから!!」

ギ・ブリー「だまれ・・・ララ・・・」

メキツ

リト「な!なんだア!?!」

ギ・ブリー「オレを拒むなら!!全員地獄を見る事になるぞ!!!このギ・ブリー様の真の姿でなアア!!」

メイ「何コイツ、触りたくない」

優斗「なんかねちやねちやしてそう」

優菜「汗だったら燃えるんだっけ?」

優斗「燃やすなよ?」

ギ・ブリー「ララ・・・これが最後の忠告だ、オレと結婚しろ。でないところにいる全員が地獄を見るぜ、お前も含めてな・・・」

ペケ「な!キサマ、ララ様を脅すつもりかっ!!」

ギ・ブリー「キヒヒヒ、その方が手つとり早いからなア言つとくがお得意の発明品でオレをどうにかしようなんて考えるなよ?もしお前がそんな動きを見せたら、お前が友

達と呼んだこの女は……」

ララ「!!春菜っ!!もう!何でそういう事するのギ・ブリー!春菜は関係ないでしょ!!
そんなだからあなたなんて……」

リト「そのコから手エ離せ」

ララ「リト!?!」

リト「てめエはオレがぶつとばす!!」

ギ・ブリー「お……おいおいオレとやる気か?言つとくが今のオレは地球人の10
0倍以上のパワーがあるんだぜ!?!ほ……本気か?」

優菜「安心しなリト」

リト「え?」

優菜「個人的にやりたくなつた」

メイ「私もちよつとムカついたわね」

優斗「やるなら俺もやるぜ?最近少しなまってるからな」

優菜「リト、お前には攻撃力UPと物理反射の補助魔法をかけた。最後お前の方向に
飛ばすからお前が決めろ」

リト「……分かつた!!」

ギ・ブリー「な、なら!これでどうだ!!ぬううん」

ボコオ

ギ・ブリー「はははーどうだギ・ブリー様の超本気モード!!これなら怖くて手も足も出ねーだろオ!!」

サツ

メイ「ララちゃん、春菜見てて」

ギ・ブリー「え？」

ザ・ワールドか

優菜「さてと、ギ・ブリー・・・お前さつき地球人の100倍以上とかいってたな」

ギ・ブリー「あ？あ、ああ！怖いだろう!!」

優菜「誰が全員地球人だと言った？」

ギ・ブリー「な、なんだと!？」

優菜「戦闘民族サイヤ人のちからを見せてやろう」

メイ「あれって大丈夫なん？」

優斗「一応時系列的に扱ってる作品だから大丈夫だと思うが・・・」

メイ「地味にメタイね」

ダウン

優菜「これが超サイヤ人」

ギ・ブリー「な、なんだよ。金髪になっただけじゃないか」
ドウン

バチバチバチ

優菜「これが2」

ドウン

ヒューヒューヒュー

優菜「これが3」

リト『髪伸びた?』

優菜「そしてこれが」

ピカーッ

優菜「4」

ギ・ブリー「サルみたいだな!!」

優菜「そしてこの前身につけた、ゴッドを重ねると・・・?」

ギ・ブリー「ゴッド・・・!?!」

ララ『なんか強そう・・・!』

優菜「グウウウ!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

リト「なんだ!?地震か!？」

ピカーツ

赤いオーラに赤い瞳そして圧倒的な存在感!!

そのかわり圧倒的消耗!!

恐らく30秒しか持たない!!

優菜「さっさと終わらせるぞ」

ギ・ブリーの後ろにザ・ワールドでメイと一緒に来た

ギ・ブリー「何!？」

メイ「ザ・ワールド!!」

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!!

ドコオ

ギ・ブリー「グエツ」

優斗の方へ飛んでいく

優斗「イフリート!!」

オラオラオラオラオラオラオラオラオラア!!!

ボコオ

ギ・ブリー「グハッ」

優菜「オラオラオラオラオラオラ」

四方八方から殴り倒し

優菜「オラア!!」

リトの方向に行き

リト「だあああああ!!!」

シユウウウウ

スカッ

リト「え？」

ドガシヤ〜〜ン

優菜「おいおい、大丈夫・・・か」

ドサ

優斗「お前が大丈夫じゃないじゃねえか」

メイ「何コイツ」

ペケ「おや！これはバルケ星人じゃないですか、優れた擬態能力を持つ代わりに肉体的には極めてひ弱な種族ですぞ」

メイ「ひ弱って・・・死んでないよね!?!大分強めにやっちゃったけど」

ギ・ブリー「う・・・うう・・・」

ペケ「ララ様こいつどうします？」

ララ「うーん」

じゃーじゃーワープ君!!

ララ「これに流して地球外へ追放しちやおう!もう二度と来ないでねギ・ブリー!!」
ぽいつ

リト「なんつーメカだ」

優斗「おーい、大丈夫か？」

優菜「・・・」チーン

優斗「こりやダメだな」

ガイア「前作った、仙豆?って言うのが使えるんじゃないですか？」

優斗「だな」

仙豆を取り出す

ヘル「瀕死の時は、自分で嘔んでから口移した方がいらしいわよ」

優斗「瀕死・・・なのか?これ、体力切れだろ・・・まあいいか」

ヘル「え!?!ホントにやるの!?!」

ガリツ

カオス「ヤバい!!他に見せるな!!」

優斗達の周りの光を歪ませ見えなくした

只今映像が乱れています 今しばらくお待ちください

優斗「プハア・・・」

優菜「う・・・ん？」

優斗「おおく起きたか」

ヘル「今起こった事は、絶対言ったらダメよ!!!いいわね!!!」

ペルソナ組「もちろん」

優菜「お前らどうかしたか？」

ヘル「いやなんでも!」

ふーん・・・まあいいか

リトとララはもう行つたのか、春菜もいないし

優菜「戻るか」

優斗「だな」

その後、何事もなく一日が終わり

寝た

第一百話（賢者の孫に來た『第二話』より）

借りてる家に誰か來ますた

国のなんたらとか言つてたけど

簡単に言うとなんにも魔人化のこと言うなですな

もうそのまま朝になつたから

ユウトは蹴つ飛ばして起こした

学校行くときに

シンの事がなんたらとか言つてたけど

どうでもいいからさつさと学校へ

教室に行く前にシンにあつた

ユウナ「大變そうだな」

シン「そりゃね」

マリア「この二人すつごい見せつけてくんよ!!」

シシリーとシンを指さす

ユウナ「あく大体わかつた、大變だつたな。でもアイツら二人とも悪気がないってい

うのが恐ろしいよな」

教室について

ガラ・・・

アリス「昨日うちに国の使いの人が来たんだけど・・・」

リン「私の家にも来た」

トニー「ボクの所もだねえ」

アリス「街の様子見てきたんだけどだね、みんな浮かれてたよ。新しい英雄が生まれたって」

トニー「それは僕も見ただね、でも昨日の話を聞いてしまうとねえ・・・」

ユーリ「私も家族に聴かれたわあ話せる範囲で話したら皆凄く興奮しちゃった」

先生「ほら皆、席着けー」

席に着く

先生「昨日の騒ぎで学院中が浮ついている、ウォルフオードはなるべく一人になるな。出来れば女性陣の誰かと一緒にいる・・・男だけでいると女に囲まれるぞ」

オーグ「よく知りもしない女に囲まれてみる、面倒くさいぞ」

経験ありきだな、あれは

シン「困ったな・・・」

オーグ「諦めろ、今度叙勲を受けるさらに騒ぎが大きくなるぞ」
研究会説明後

ウオルフオード君!! ぜひ!! ぜひとも我が「攻撃魔法研究会」へ!!

何言つてんのよ!! メリダ様から直々に付与魔法を教えてもらつてるのよ!! 彼には「生
活向上研究会」が相応しいわ!!

いいや彼の身体強化魔法は「肉体言語研究会」でこそ生かされるものだ!!
英雄様のお孫さんは「英雄研究会」に入るに決まつてるでしょ!?

助けてやろう

飛んで上から捕まえる

ユウナ「大丈夫か?」

シン「大丈夫じゃねえよ・・・」

ユウナ「カオス、教室までつなげてくれ」

ブウン

アリス「ええ!?!」

ユウナ「シンが逃げるのにしんどそうだったから連れて來た」

ユウト「・・・それ笑うところ?」

ユウナ「違う」

がやがや

トール「我々「究極魔法研究会」に入りたいつて一年が殺到してますけど……」

先生「全員入れるわけにもいかんしな……異空間収納の魔法が使える事……を最低基準とするか」

一年たちに近づき

先生「黙れっ審査するから全員並べっ!!」

オーグ「やっぱり騒ぎになつたな……」

シン「実感した……」

オーグ「まあこれが落ち着けばとりあえず叙勲まで騒ぎにはならないだろう、明日からは通常の授業のみになるしな。後はお前が気を付ければいい」

シン「……だといいいけどな」

次の日の放課後

シン「今更だけどさあ、俺達の「究極魔法研究会」って何を研究すんの？」

オーグ「ノリで決まった感じだったからな、何をするかまでは知らん」

シン「ノリかよ、命名者さんは？」

リン「私もノリで言った、後悔はしてない。ウォルフオード君なら色んな魔法を極めそう、私もそれに協力したいし極めたい」

シン「……んじやみんなで魔法を極めましようって事でいいの？」

リン「それでいい……というか今はユウナの生い立ちの方が気にn」

失礼します!!

男子「お疲れ様っス!!」

女子「お、お疲れ様です」

シン「君らがAクラスから研究会にはいる事になった二人だね、どうぞ中へ。えーと……いつの間にかこの「究極魔法研究会」の代表になってた……シンllウオルフォードです、よろしくね」

ぼかん

？

男子「き……究極魔法研究会？」

女子「そんな名前だったの？」

ユウナ「名前知らないで入ったのかよッ!!」

マーク「自分はマークllピンです!!家は鍛冶屋をやってます!!「ピン工房」って

ご存知ないっすか!？」

トニー「へえ「ピン工房」って有名な所じゃないか」

シン「知ってるのか？トニー」

トニー「うちは騎士の家系だって言ったろ?・・・僕はあの男女比に耐えられずに魔法学院に来たけど、ブーン工房の武器は切れ味もいいし憧れだったんだよねえ」

マーク「入り用のものがあれば言ってください!サービスするっす!」

トニー「それはうれしいねえ」

ユウト「怪盗の時のナイフとか作ってもらったらどうだ?」

ユウナ「・・・あいつらに本物は扱わせられねえ、作ってもらうにしろ私達だけだな」

アリス「何の話?」

ユウナ「・・・まあ後で話す」

オリビア「えと、オリビアⅡストーンです。マークとは・・・幼馴染です、家は「石窯亭」っていう食堂をしまして・・・店の手伝いの為に魔法を覚えました」

アリス「石窯亭!?超有名店じゃん!!あそこの石釜グラタンが最高なんだよねえ、学院の合格祝いを「石窯亭」でしたんだ!超くく美味しかったんだから!」

トニー「ボクの家は予約が取れなかったよ」

オリビア「あ・・・あの良かったら皆で来て下さい、おもてなしします」

アリス「やったねシン君!これは凄い人材だよ!」

シン「失礼な褒め方すんな!・・・ところでマーク、オレ武器を新調しようと思ってるんだけど・・・頼めない?」

マーク「イヤイヤ！ウオルフオード君の剣つて魔人を倒した剣つスよね!?それに代わる剣なんてそうそうないっスよ!」

剣を出しながら言う

シン「じゃ、俺の剣ちよつと見てくれる?」

マーク「・・・!!普通の・・・鉄製の剣じゃないっスか・・・!!しかも薄くて耐久性もあまり・・・本当にこれで魔人を切ったんスか・・・!」

オーグ「見せてくれ、確かにこれは・・・」

シン「剣は普通だけど魔法を付与してあるんだ、魔力を通してみるよ」

オーグ「・・・!!これは・・・刃が微細に振動している・・・!」

丸太を取り出してオーグに投げる

シン「・・・で、これ切ってみ?」

ユウト「普通に丸太を取り出すのをやめてほしいんだが・・・」

スパツ

オーグ「なっ・・・何だこれは・・・全く力を加えずに・・・」

シン「バイブレーションソード、刃に超高速な振動を加えるとそういう風に物が切れる様になるんだ」

マーク「・・・薄い刃・・・そういう条件だけでいいなら自分でも打てます・・・後

はウォルフオード君と相談しながらになるっすけど・・・」

シン「助かるよ！今までは人伝に頼んでたから細かい調整とか出来なくてさあ」

マーク「こんな物まで作っていたんだねえ・・・」

ユーリ「凄いわよねえ、私も付与魔法得意なつもりだったけどこれ見ちゃうとなあ・・・」

シン「ユーリだってその内出来る様になるよ、付与魔法ならばあちゃんに教えてくれるよう頼んどこうか？」

手を掴んで

ユーリ「ええっメリダ様にい!?やあん超嬉しい!!私の家ホテル経営してるのくお泊まりしたい時はいつでも言っただねえ、お礼にサービスするからあ」

シン「・・・それにしても叙勲が終わったらますますますます気軽に外を出歩けなくなりそうだな・・・いつそ変装するか姿を消して出歩けしか・・・」

トール「・・・姿を消すって何ですか？」

シン「いやこうやって」

パッ

シシリー「え!?シン君どこですか!?!」

マリア「うそ、急に消えた・・・!?!」

ユウト「いや、ここにゐるだろ」

ドカツ

シン「いや、痛えよ！」

ユウナ「ユウト、ちよつと来い」

ユウト「え？」

ズルズルズル

ユウト「え？ 彘？ 絵？」

ドカア

ユウト「すいませんした」土下座アアア

シン「うん、まあいいけど」

皆『何されたんだ・・・？』

マリア「それより今の!! どうやったの!？」

シン「光学迷彩の魔法を使ったんだよ、人間の目つて光が反射したものを見てるだろ？ だからオレの周囲に魔法で干渉して光を歪めてやると、オレの周りの風景に反射した光がオレを迂回して前にゐる人間に見える。結果オレが消えた様に見えるつてわけ」

俺以外分かつてねえ・・・優斗は分かれよ

シン「ここは「究極魔法研究会」なんだからこれくらいで驚くなよ・・・」

皆「いきなり究極すぎる」

マリア「これはあれね、シンが究極の魔法を開発していくのを生暖かく見守る会になりそう」

リン「そんな事ない、私は少しでもウオルフオード君から学びとる」

シシリー「陛下が仰っていたシン君が魔法の固定観念を壊してくれるって・・・こういう事ですね」

ユリウス「ちよつと壊しすぎな気がするで御座る」

マーク「む・・・無詠唱っスか・・・!!」

オリビア「さすがSクラスね・・・」

リン「ていうか、シンのインパクト強すぎてスルーされかけてたけど。ユウナってどういう感じでここまで行きついたので？」

ユウナ「・・・とりあえずあの二人について来れなそうなんだけど」

マーク「行けます!・・・多分」

オリビア「はい・・・多分」

あつダメな奴だこれ

ユウナ「キャバオーバーしても知らんからな」

これまで経緯を話した

マーク「……………」

オリビア「……………」

ユウナ「明後日の方向向いてるよ」

オーグ「私もいまだに信じられない、だが信じるしか……ないのか？」

ユウト「ないな」

ユウナ「間違いない」

シン「当たり前だ」

オーグ「なぜお前も乗つかてくる」

リン「ごめん、よく考えたら。シンの後にこんな話させられたら、理解できないわ……」

結果

キャバオーバー 五人

ギリギリ 六人

余裕 二人

そのあと何とか意識を戻して放課後

シン達が何か喋ってるが……

それより右斜め前のでつかい建物が気になるんだが……

シン「うおっ……デカイ建物だな何だこころ？」

オーグ「警備隊の練兵場だ」

シン「国が管理する設備なのに割と庶民の区画に建てられてんだ」

オーグ「軍務局と違って民間での活動も多いからな」

ユウナ「誰かいるな、しかも相当強い」

オーグ「何？」

ゴゴゴゴ・・・

ユウナ「危ない!!」

皆を押しつける

ドゴォ

道の逆側に吹っ飛ばされる

ユウト「ユウナ!!」

シン「なっ・・・何だあ!?!壁が急に・・・」

中に入っていく

おいてくなよお・・・

男「おや」

シン「やっぱり中に人が・・・」

一旦起きて・・・

ガラガラガラ

シン「両目に眼帯・・・オーグ・・・まさかあれって前に言ってた中等学院の・・・」
コオオオオ

波紋で壁にくつついて・・・

ダウン

超サイヤ人に変身

身体強化魔法からの跳躍強化、そして速度上昇

オーグ「間違いない・・・オリバーⅡシユトロームだ・・・!!」

オリバー「これはこれは・・・アウグスト殿下にシンⅡウォルフオード君ではないですか」

グググ

ドミニク「お逃げ下さい殿下!!奴は魔人騒動の首謀者です!!」

シン「お前がカートに・・・何かしたって事か?カートの今までの不自然な行動も・・・魔人化したのも・・・!!」

オリバー「・・・そうですよ、いやあ面白い程思い通りに踊ってくれましたねえ・・・とはいえ、魔人化したにも拘らずあそこまで弱かったのは計算外でしたけどねえ・・・」
おや、貴方も私が許せませんか?」

シン「ああ・・・許せねーよ・・・!!お前を放置するとまた騒動を起こしそうだから・・・!!」

ドン

ユウナ「後で説教な」

シン「え？」

殴る瞬間に障壁ができる

ギャン

ピシ・・・ピシピシ

シユン

バリン

割れる瞬間に逃げたか

シユン

オリバー「まさか、物理で障壁を破るとは・・・」

シンがオリバーの後ろに行き

切る瞬間に避けられる

オリバー「危ないですねその剣、魔道具ですね？」

シン「さあねっ」

ドドドドドドドド

地面から大きな針が出てくる

それを避け空中に行つた所で

ゴオオオオ

また障壁を出して防御

シン「なつ・・・宙に浮かぶとか反則だと思つてすけど？」

オリバー「今のは焦りましたよ、さすがは英雄の孫・・・魔人を討伐するだけの事は
ある」

シン「そりやどう・・・もっ!!」

オリバー「何っ!？」

ドウツ

シン「一瞬ならオレでも飛べるんだよっ!!」

オリバー「く・・・あつ・・・!!ぐ・・・」

ザザザザ

魔法でおしていく

ピシ

仮面にひびが入る

オリバー「……調子に……のるなああー!!!」

ゴア

魔力で振り払う

ルーパー「うおっ!!」

カラン……

仮面が取れる

シン「赤い……目……!?」

ドミニク「そんな……まさか……」

ルーパー「嘘だろ……」

オリバー「やってくれましたねえウォルフオード君、出来れば正体を隠したまま去りたかったんだすけどねえ」

ドミニク「そんな事がありえるのか……!? 理性を失った魔人でさえ国を滅ぼしかけたんだぞ……」

オルト「それが……意識を保ったまま……!?」

兵士「ひ……マ……マジかよ……」

シン「理性があるって事は好き勝手暴れまわるってわけじゃなさそうだな」

オリバー「無秩序に力を使えばあなた方は私を討伐に来るでしょう? そんな面倒で愚

かな事はしませんよ」

シン「……!?!人間に害を与える気はないって事か?」

オリバー「フフアハハハ何を期待しているのですか?君は!人間なんて心底どうでもいい存在ですよ!!利用しようが!騙そうが!殺そうが!!この体になつては何とも思わなくなつたんですよ!!アハハハハ!!」

ドドドッ

ギユアッ

ドゴッ

天井に穴をあける

オリバー「……フフ、あらぬ方向に魔法を放つてどうしました?恐怖で手元が狂いましたか?」

ユウト「アウラ」

オリバー「いつまでも何のつもりですか!?!」

シンに突つ込む瞬間

ユウト「万物逆転!!」

ブオオオオオ

オリバー「なっ!?!」

止まる

オリバー「これは!？」

シン「風魔法!？」

ユウト「ユウナ!!」

ゴオオオ ドウン

超サイヤ人ゴッド!

ユウナ「ゴッドバインド!!」

動きを止める

オリバー「こ．．．れは．．．!!」

ユウナ「動きを止めた!さっきから溜めてる魔法を撃て!!シン!!!」

シン「わかった!!」

手を振り上げ．．．そして振り下ろすと無数の熱光線がオリバーに降りかかる

オリバー「グウアアアアッ」

ゴッ

爆発が起きる

ルーパー「おおあつ」

ゴゴ．．．

オーグ「奴はっ・・・!!」

兵士「や・・・やったのか・・・!!」

ユウナ「フラグ言うな！」

ユウト「だが魔力探査にはかからんぞ？」

ユウナ「気は・・・わからない、消えたのか、小さすぎるのか」

シン「・・・倒した・・・のか・・・!!」

魔術師「お・・・おお、魔人を・・・それも理性を保ったままの魔人を・・・討伐し

てしまうなんて・・・」

うおおやったぞーっ!!さすがは賢者様のお孫さんだっ!!

シシリー「シン君!!」

マリア「ちよっと平気なの!」

シン「ああ、オレは大丈夫・・・夫・・・って、え？」

ぺたぺたぺた

めっちや触るやん

シシリー「ほ・・・本当ですか!?!ケ・・・ケガとかは・・・?」

これは脈あり・・・

シシリー「し・・・心配させないでください・・・」

スウウウ

黒髪に戻る

ユウト「なあ、俺たちも頑張ったよな……?」

ユウナ「主人公は一番目立つものだ……私達は小説では主人公でもこの世界では所詮仲間どまりだよ……ハハハ」

オーグ「なんだか、あそこだけ不穏な空気なんだが……?」

ドミニク「ご無沙汰しております、アウグスト殿下。一体、なぜこのような所に?」

オーグ「なに、学校帰りに友人と街を歩いていただけだ」

ドミニク「危のう御座います……お立場をお考え下さい」

ルーパー「固いこと言うなよドミニク、護衛に加えて彼まで付いてんだぜ?見たろ?

魔人を討伐しちまう程だぞ」

シン「討伐……ですか……」

ヘル「ちよつと」

ルーパー「何だあ?浮かない顔してよ、魔人とはいえ人を手にかけるのは気が滅入るか?」

ユウナ「何?」ハハハ

ルーパー「胸を張りな、君のおかげで魔人と相対しながら生き延びる事が出来た。改

めて礼を言うぜウオルフォード君」

ヘル「まずその乾いた笑いやめなさいよ」

ルーパー「・・・にしても噂通りスゲエ強えな」

オルト「新英雄と言われるだけ、ありますね」

ユウナ「ごめんごめん、で？何だ？」

ドミニク「劍の腕も一流だ、ミッシェル様に聞いていた通りだな」

ヘル「あいつ、生きてるわよ」

そこから先、シン達の話は耳に入ってこなかった

ユウナ「それは・・・本当か・・・？」

ヘル「ここから北北東、数km先の路地裏」

スペクテッドを取り出しその方向を見る

遠視、透視発動

いる!! 確かにいる!!

・・・飛んで行っちゃまった

シン「どうしたんだ？・・・てかなんだそれ」

ユウナ「いや・・・なんでも・・・ない」

シン「？まあいいけど、そろそろ行くぞ」

トール「それじゃあ、まだシウトロームは倒せてはなく。また誰かを魔人に……？」
オーグ「なら今分かっただけいいだろう、知らず知らずのうちに來られるよりはましだ」

シン「ならすぐに、じいちゃんたちにも言っておかないとな」
その夜

ユウト「なあ」

ユウナ「なんだよ」

ユウト「お前、男だよな？」

ユウナ「……頭打ったか？そりや男だよ」

ユウト「いや……日に日にどんどん女っぽくなつてきてるから……」

ユウナ「マジで？」

ユウト「たまに女の子座りするし、ちよくちよく口調まで女っぽく」

ユウナ「まあ、何年も女の子してたらそうなるか」

ユウト「……」

ユウナ「……」

ユウト「寝るか」

ユウナ「だな」

寝
た

第一百二話（ペルソナ4に来た『第一話』より）

ん？

家？

優斗「なんだよ、ここまで来てまた増やすのか？」

神様「今回はペルソナじゃの」

優菜「ペルソナって・・・もうあるだろ？5が」

神様「今回は4じゃ」

優斗「じゃあ、今いる家は・・・」

神様「登校用の家じゃの、この世界にいる間はこの家で過ごしてもらおうぞ。もちろん自炊の金と登校手続きはやってるぞい、後学校の場所はスマホに送っておいたぞ。クラスは鳴上悠と同じだ、ちなみに米は重いから一か月分はとりあえず置いてあるぞ」

優菜「？俺のじゃないんだけど？」

よくこんな高価なもの出せるな・・・まあ時代が違ったら色々おかしくなりそうだし
な

夜十神高校・・・だっけか？検索っと

おっ出てきた出てきた

神様「しつかり制服もあるぞ」

優菜「そーいや、いつもピッタリなんだよな・・・スリーサイズとかも、どうやって知ってたんだ？」

優斗「いや、お前計った事あんのか？」

優菜「まあちよつとな・・・」

神様「・・・」

優斗「何で何も言わないんだ？」

シユン

優菜「逃げた!？」

優斗「今逃げる要素あつた!？」

*忘れてるかも知れないけど二人はバカです

優菜「・・・まあいいか」

優斗「・・・!?!今の時間見てみるよ」

優菜「んあ?えつと・・・!?!8時15分!？」

優斗「ヤバいんじゃない?」

優菜「ほぼ確定でヤバい」

即着替えてダツシユで学校に行く

20分

ザアアアアア

優菜「着いた・・・」

優斗「もう・・・ムリ・・・」

優菜「倒れこむなよ・・・？グシヨグシヨになるから・・・」

あのクソ爺、何でもっと早い時間にやらなかった・・・

？「大丈夫か？」

優菜「え？」

男「いや、なんかすげえ辛そうだったから・・・」

優斗「いや・・・1kmぐらいダツシユできたから・・・疲れてるだけだよ・・・」

男「そういや、見ない顔だな」

優菜「転校してきたんだ」

男「あつそゆこと、なら職員室まで連れてつてやるよ」

優斗「あざす」

職員室前

男「そういや、走ってきたらしいのに全く濡れてねえな」

優菜「さあね、何でだろう」

俺は波紋で弾いて、優斗はウンディーネで雨を操って避けてた・・・なんて言えないよな

男「ここが職員室だから、後は大丈夫だよな？」

優菜「大丈夫、ありがとね・・・そういや名前は？」

陽介「俺か？花村陽介、同じクラスになれると良いな！」

優菜「花村？」

確かそれって・・・うーん記憶があやふやだな・・・相当時間たってるしな

優斗「どうした？」

優菜「いや、なんでもない」

陽介「じゃあな」

職員室に入るとなんか一人いた

優菜「おっ？転校生か？それともやらかしか？」

男「転校生だ」

優斗「こんなこと言ってるけど、俺らも転校生だぜ」

わしゃわしゃ

優菜「わしゃわしゃすんな！」

優斗「ん？お前ちゃんと髪洗ってるか？なんかゴワゴワしてるぞ？」

優菜「え？嘘・・・ちゃんと洗ってるぞ」

優斗「今度ちゃんとした洗い方調べたらどうだ？」

先生？「何してんだ？もう行くぞ！」

男「その二人は良いんですか？」

先生「ああ・・・遅刻かと思ったが今来たのか、なら一緒に行くぞ。そこに教科書やらはあるから早く持て」

わくお・・・多いな

カバンに教科書入れて教室に行く途中

優斗「お前なんて名前？」

悠「鳴上悠」

優斗「悠か・・・」

優菜「よかったじゃんか、名前変ええといて」

優斗「いや、なんかあれだな・・・自分の名前呼ぶのって変な感じだな」

悠「お前達は何て名前だ？」

優斗「兄弟で俺は優斗でこいつは妹の優菜」

悠「？同じ学年で兄妹なのか？」

優斗「俺が四月生まれでこいつは二月生まれなんだ」

悠「聞いたことはあるが、ホントにそんな事あるのか」

先生「お前達！喋ってないで静かにしてろ！」

がやがや

・・・中の方が騒がしいな

ガラガラガラ

シーン

?えっ!?この先生そんな怖いのも・・・?

諸岡「今日から貴様らの担任になる諸岡だ!いいか、春だからって恋愛だ、異性交遊だと浮ついてんじゃないぞ。ワシの目の黒い内は、貴様らには特に清く正しい学生生活を送ってもらうからな!」

これ怖いじゃなくて面倒くさいだな

諸岡「あー、それからね。不本意ながら転校生を紹介する。ただれた都会から、へんぴな地方都市に飛ばされてきた哀れな奴らだ。いわば落ち武者だ、分かるな?女子は間違つても色目など使わんように!では、鳴上悠。簡単に自己紹介しなさい」

悠「誰が落ち武者だ」

!?

諸岡「む……貴様の名は腐ったミカン帳に刻んでおくからな……」

優斗「俺は中村優斗、えー……まあ落ち武者ではねえな」

優菜「私は中村優菜、刀よりはナイフかな。使い道多いし」

諸岡「貴様らも腐ったミカン帳に刻んでおくからな！ここは貴様が今まで居たイカガワシイ街とは違うからな。いい気になって異性の生徒に手を出したりイタズラするんじゃないぞ！……と言っても、最近は昔と違って、ここいらの子供もマセてるからねえ。どーせヒマさえあれば、ケータイで出会い系だの何だのと……」

優菜「出会い系、ホントの恋愛、出来ない系」

諸岡「む……まあ全くその通りだがな！」

淡々と話し続ける

？真ん中空きすぎじゃね？

確か……前から天城雪子、里中千枝、でさつき思い出した花村陽介

全員の隣が空いてるって……そこに座ってくれって言ってるようなものじゃねえか
千枝「センチ。転校生たちの席そこそこここで、ちようどだからそれでいいですかー？」

諸岡「あ？そうか。よし、じゃあ貴様らの席はあそこだ。さっさと着席しろ！」
サツ

千枝「早っ！」

前から優斗、悠、俺・・・と

千枝「アイツ、最悪でしょ。まー、このクラスなっちゃったのが運の尽き・・・一年間、頑張ろ」

ザワザワ

噂・・・？

男子「かつわいそ、転校生。来ていきなりモロ組か・・・」

ボヤク女子「目エつけられると、停学とかりアルに食らうもんねえ・・・」
 さめた女子「ま、私ら同じクラスだから一緒なんだけどね・・・」

諸岡「静かにしろ、貴様ら！出席を取るから折り目正しく返事しろ！」
 放課後

諸岡「では今日の所はこれまで、明日から通常授業が始まるからな」

優菜「終わった〜」

陽介「ホントに同じクラスに来るとはな・・・」

キーンコーンコーンコーン→

校内放送「先生方にお知らせします。只今より、緊急職員会議を行いますので至急、職員室までお戻りください。また全校生徒は各自教室に戻り、指示があるまで下校しない

てください」

キーンコーンカーンコーン←

諸岡「うーむむ、いいか？指示があるまで教室を出るなよ」

ガラガラガラ

茶髪の女子「あいつ・・・マジしんどい」

ピーポー

興奮した男子「なんか事件？すっげ近くね、サイレン？クツソ、なんも見えね。なんだよ、この霧」

噂好きな男子「最近、雨降った後とか、やけに出るよな」

情報通の男子「そーいや聞いた？例の女子アナ。なんかパラッチとかもいるって」

噂好きな男子「ああ、山野真由美だろ？商店街で見たやついるらしいぜ」

情報通の男子「てか、俺聞いたんだけどさー・・・」

噂好きな男子「マジかよ!？」

天城の方へ歩いていく

噂好きな男子「あ、あのさ、天城。ちよつと訊きたい事あるんだけど・・・天城ん家の旅館にさ、山野アナが泊まってるって、マジ？」

雪子「そーいうの、答えられない」

噂好きな男子「あ、ああ、そりやそっか」

男子は戻り今度は千枝近づく

千枝「はー、もう何コレ。いつまでかかんのかな」

雪子「さあね」

千枝「放送なる前にソッコー帰ればよかった・・・ね・・・そういえばさ、前に話したやつ、やってみた？ほら、雨の夜中に・・・つてやつ」

雪子「あ、ごめん、やってない」

千枝「ハハ、いいって、当然だし。けど、隣の組の男子、俺の運命の相手は山野アナだー！とか叫んでたって」

キーンコーンカーンコーン

校内放送「全校生徒にお知らせします。学区内で、事件が発生しました。通学路に警察官が動員されています。出来るだけ保護者の方と連絡を取り、落ち着いて、速やかに下校してください。警察官の邪魔をせず、寄り道などしないようにしてください。繰り返し、お知らせします・・・」

興奮した男子「事件!?!」

茶髪の女子の連れ「なにになに、どういう事?」

優斗「見に行くか?」

優菜「いや、そこは帰れ」

帰ろうとしたら・・・

ドカッ

陽介「どわっ！」

優斗「は？」

パカッ

千枝「なんで!?!信じられない!ヒビ入ってんじゃん・・・あたしの成龍伝説があああ・・・」

優菜「見せてみ」

陽介「俺のも割れそう・・・つ、机のカドが、直に・・・」

優斗『股間抑えてる・・・』

確かにヒビ入ってるな・・・*DVD

優菜「クロノス、このDVDの時間戻して」ボソツ

グググ

雪子「だ、大丈夫？」

ス・・・ス・・・ス・・・

陽介「ああ、天城・・・心配してくれんのか・・・」

ス・・・

よし戻った

優菜「さつきから探してるんだが、ヒビなんてどこにあるんだ？」

返す

陽介「え？」

千枝「え？確かにここにヒビが・・・ない!?え!?確かにここにあつたよね花村！」

陽介「ああ！確かにここにヒビ入れちまつたはず・・・」

優菜「じゃ、バイなら」

帰る途中

優斗「何あれ・・・」

優菜「まあ死体だろうね」

優斗「お前それ、死体見たときの反応じゃねえだろ」

優菜「まあ、あの世界でさんざん殺ればね・・・まあ嘘だけど、グロ画像見すぎて耐性ついた」

優斗「さんざんって言うほど殺ってないけどね」

優菜「ていうか、家隣だぞ」

優斗「げ、マジだ・・・確かにここ家だわ」

家に入る

優菜「てか、普通にいい家だよな」

優斗「頼むく飯作ってくれ」

優菜「じゃあ肉、魚、中華、麺、どれがいい？」

優斗「肉」

優菜「肉な、じゃあ買ってくるわ」

優斗「あつ、また女言葉」

優菜「か、買ってくる・・・米ぐらい炊けるよな？」

優斗「そんぐらいはできるさ」

優菜「ホントに頼むぞ、肉は米命だ」

優斗「大丈夫だ」

優菜「よし」

買ってきた

優菜「どうだ？」

優斗「もう炊き始めてる」

優菜「よしじゃあ、やるか」

2人分

材料

鶏もも肉

二枚(300〜350g)

顆粒鶏ガラだし

小さじ2

醤油

大さじ1

ごま油

小さじ1.5

すりおろしにんにく、すりおろし生姜

各小さじ0.5

小麦粉 or 片栗粉

適量(目安大さじ4)

サラダ油

適量

まず鶏もも肉を気持ち小さめの一口大に切りビニール袋に入れる、その方が染みこませやすい

この中に鶏ガラだしと醤油、ごま油、にんにく、生姜を入れる

優菜「優斗、これ握ったりしてて」

優斗「握ったり?」

優菜「まあ一緒に入れたの染みこませて」

優斗「分かった」

今のうちにサラダ油で中温まで温める

菜箸入れて泡がずっと出たら中温、泡がデカかったら高温だぞ

優斗「これでいいか？」

優菜「よし、じゃあ」

小麦粉をまぶして・・・真っ白になるぐらいかけたらかけすぎだから・・・これぐらいか

油も中温・・・二分揚げる

二分後

取り出して

三分置く、その間に油を高温に泡がデカく（割愛）

高温の油で一分ぐらい揚げて色づいたら取って完成

あとはキャベツとかいれたらおかずになる

優斗「やつべ、普通に美味そう」

優菜「もうちよつと待て、持ってくから」

置いて

いただきまーす

食事後

「アナウンサー」ではまず、今日最初のニュース。静かな郊外の町で、不気味な事件で

優斗「さっきのか」

優菜「なんかスルーつといたけど、なんで俺を囲うように座ってんだ？」

優斗「さあね」

優菜「さあねじゃないだろ」

優斗「まあまあ、いいじゃねえか。こういうのしてみたかったんだ」

優菜「ごめん、今お前と犬が重なった」

優斗「犬!？」

アナウンサー「遺体で見つかったのは、地元テレビ局のアナウンサー、山野真由美さん、27歳です。稲葉警察署の調べによりますと……」

優斗「アナウンサー……」

優菜「これからもう一人死ぬ、だけど助けることは出来なそうなんだ」

優斗「そうか……」

優菜「さてと、じゃあ。0時まで待とうか」

優斗「なら先に風呂だな」

ピピー

優斗「やつといた」

優菜「おう」

サーツ

優斗「何してんの？」

優菜「ネットでブラッシングを先についているんなサイトに書いてた」

優斗「なんで？」

優菜「抜け毛が何たらって」

優斗「ふーん」

優菜「じゃ、入ってくるわ」

ガララ

服を脱いで

ガラ

優菜「え？」

ジー

優菜「何普通に見てんだよ」

バチン

平手打ち

ガララ

優菜「アリエル、あいつが入ってこないようにして」

アリエル「了解です」

バタン

入ると

うん、なんか知らんけど広い

2人なら余裕で入れるな

それじゃ

ジャッパン

一回やってみたかった

その頃優斗は・・・

優斗「頼む！」

アリエル「ダメです！」

* 優菜は防音魔法で聞こえません

優斗「頼む!!」

アリエル「ダメです!!」

優斗「頼む!!!」

アリエル「しつこいですね！ダメです!!!」

優斗「なら・・・トラ、ガイア！」

ガイア「ねえねえ、ちよつと一杯やろうよ」

アリエル「!?ですが・・・」

トラ「少しぐらいバレやしないって、今の社会はな。どれだけサボれるか・・・真面目な話、人間サボらないと過労死するぞ」

アリエル「私達人間じゃないですよね!？」

ガイア「まあ、そこんところは気にすんなって」

優斗「トドメだ・・・ウンディーネ!」

ウンディーネ「せっかくだからパーツと行こうよパーツと!」

アリエル「わ・・・わかりました・・・」

優斗『やはりッ!予想通りアリエルは押しに弱いタイプだッ!!』

その頃の優菜は

そろそろ髪洗うか

ザパー

まず髪を濡らして・・・シャンプーをつける・・・終わったらすすぎをシャンプーの倍の時間やる・・・だったよな

また戻って優斗

優斗「みんな!ありがとう!!皆のおかげで俺は聖地に行けるぞ!!!」

ガイア&トラ&ウンディーネ「行けー！（早よ行けすぐ行け、速く反応みたい）」
彼らを駆り立てていたのは、命令だからではない。単なる好奇心から来ていた！
バタン

優菜「・・・」

ザー

優斗『すすぎをしてるのか・・・よし！』

少しずつ扉を閉め

ス・・・

優斗『すすぎが終わった！、行けー！！』

ギユ

優菜「ひやあああああ！！！！」

キーン

優斗「耳が・・・」

優菜「何ではいつてきてるの!?アリエルは!?」

優斗「ガイア達が連れ去った」

優菜「連れ去った!?!」

優斗「うん、多分今リビング」

優菜「なんでついて行ってるの!？」

優斗「もういいじゃねえか、一緒に入ろうぜ」

優菜「いや、それは世間的に……」

2人ですったけど何もなかったよ!ホントにね!!

優斗&優菜「ふく……」

ウンディーネ「う……」

優斗「!?どうした!」

ウンディーネ「我々は……敗……北……した……相手を……見誤……った……」

優斗「なにがあつた!!」

ウンディーネ「ごめん……ちよつと、トイレ貸して」

優菜「トイレはそっちいって左」

ウンディーネ「あんがと」

バタン

オロロロロロ

アリエル「あれ?皆さんもうリタイアですか?」

優菜「あく……うん、大体把握できた」

アリエルって酒強いんだ

とりあえず

優菜「クロナス、酒類の時間を戻して」

ロロロロロオ

全部戻った

ウンディーネ「・・・なんかまた吐きそうなんだけど・・・」

優菜「そりゃ胃に入ってまた出てきたらそうなるよ」

優斗「あ！ここAMAZUNPRIME見れるぞ！」

優菜「お前は良く見つけたな」

優斗「貞○VS伽○子があるぞ！」

優菜「そっちは変えてないんかい」

トラ「今春なんだが・・・」

ガイア「どうせだから見ましようか」

ウンディーネ「人間が作ったホラーというジャンル・・・気になるわね」

アリエル「いいですね」

もう全員出した

へル「・・・さつきから気になってるんだけど・・・なんで優菜、優斗の前で小さく

体操座りしてるの？優斗も足で囲ってるし」

優斗「さつき、自分で嫌だつて言つてたんだが」

優菜「怖いんじゃない、ただ狭いところが好きなんだ・・・」

ピシヤーン

優斗「あつ、かみなr」

優菜「ギャアアアア!!!」

ヘル「・・・怖いんでしょ」

優菜「怖くない」

ヘル「・・・じゃあなんで目がウルつてきてんのよ」

優菜「怖くない」

イフリート「これ、夏に恐いくせにホラー番組見る奴と同じじゃないか？」

クロノス「それにしか見えないな」

ギユ

優斗「すぐそばにいるから、安心しろ」

優菜「優斗・・・」

優斗「そのかわり、この場から逃がさないけどな！」

知☆つ☆て☆た

盛大に叫んだ

見終わって

ガクガクガク

優斗「うーん・・・なんか物足りねえな」

カオス「これがホラーか・・・もつとガンガン来てもいいと思うんだがな・・・V
Rとか」

優斗「じゃあ、他のも見てみるか」

ガシッ

優菜「なあ、嘘だよな・・・？」

ブルブルブル

優斗「すっごい震えだな・・・わかった、寝ようか」

イフリート「それじゃあ、俺達も消えるか」

優菜「消えるな、頼むいてくれ。怖い訳じゃないが、いてくれた方が安心するんだ」

アリエル「それじゃあ、寝ましょうか」

サツサツ

優菜「寝る準備は出来てる！よし寝よう、さあ寝よう！」

アウラ「ですが、そもそも映画見る為に夜更かししたんですっけ？」

アラメイ「いや、違ったような気が・・・」

優菜「ハッ！マヨナカテレビ！」

外は!?!?!雨じゃない!?!?

優菜「雨降ってないから今日ないわ」

ミヅハノメ「私達は、貴方の弱点がホラーだったことが驚きよ」

ホバル「予想外すぎる」

皆に囲まれて寝た

次の日

放課後

クラスメイトは千枝たち以外なくなつた（雪子は旅館の手伝い）

千枝「ねえ！昨日のあれどうやったの!?!」

優菜「いやいや、大したことは何も!?!」

千枝「ビフテキ奢るから教えてよ!?!」

陽介「ビフテキ奢る!?!おい、この話は乗っておけ!里中が肉を奢るなんてめつたにな
いぞ!?!」

優菜「いや、やめとくよ。それじゃ」

キヤー！助けてー!!ひつたくりよー!!

陽介「ひつたくり?ここからじゃ見えな」

ガララ

窓を開ける

優菜「優斗！」

優斗「わかった！」

優斗が優菜の足を掴み

イフリート達で支える

優菜「もうちよい右！」

グググ

優菜「後は頼んだ」

ドンッ

ビューン

千枝「どわっ!？」

犯人「へ！ちよろい・・・な!？」

ドカツ

ガシヤーン

優菜「自転車で・・・か、よくある手だな」

犯人「こいつ！ぶっ殺してやる!!」

ナイフを取り出し刺そうとしてくるが
ス・・・

先を掴んでるだけなんだが

まあ波紋流してるから指紋はつかない

犯人「動かねえ？どうしてだ!？」

優菜「やめましょうよ、こんなの余罪が増えるだけですよ」

犯人「この・・・化け物!!」

銃!?

パアアン

犯人「の・・・脳天直撃・・・だろ？」

ポロツ

カチャン

犯人「なんで、穴が開かねえんだよ!!」

優菜「お兄さん」

犯人「ヒツ!!」

優菜「銃はやめようよ、銃は」

犯人「は、ハイハイ!! やめさせていただきます!!」

優菜「警察行こっか」

犯人は警察の方向に歩いていく

優菜「逃げようとしても無駄だからな」

その頃優斗は全力疾走で家に帰っていた

家

帰ったんだが

優斗「お前、教室でいきなりあれはないわ」

優菜「仕方ねえだろ」

まあその後飯食って・・・怖かったから二人で風呂入って

午後11時59分45秒

優菜「さあ、見とけよ」

ノイズが走って

自販機と女子生徒が出てきた

まあすぐに消えたが

優斗「今のがマヨナカテレビか？」

優菜「そ、そして画面に触れると・・・」

ズズズ

優斗「え!?入ってるのか!？」

優菜「これが、ペルソナ4のできる能力!!」

ズズズズ

優菜「ん?何して・・・ゲエエエ!上半身全部入ってる!!みんな出て来い!!!」

何とか出した

優斗「ありがと・・・」

優菜「鼻血!?大丈夫か!？」

優斗「大丈夫・・・でもあれ見たら・・・」

ブフツ

優菜「鼻血がそんなに出るものなんてなかったぞ!？」

何とか寝て次の日

放課後

陽介「なんか天城、今日とつくべつ、テンション低くね?」

千枝「忙しそうだよね、最近・・・ところで、昨日の夜・・・見た?」

陽介「え?や、まあその・・・お前はどうかだったんだよ」

千枝「見た!見えたんだって!女の子!・・・けど運命の人が女つてどゆ事よ?誰か

までは分かんなかったけど、明らかに女の子で・・・髪がね、ふわつとしてて、肩ぐ

らい。で、ウチの制服で……」

陽介「それ……もしかしたら、俺が見たのと同じかも。俺にはもつと、ぼんやりとしか見えなかつたけど……」

千枝「え、じゃ花村も結局見えたの!?!しかも同じ子……? 運命の相手が同じって事?」

陽介「で、お前は見た?」

悠「ああ、全く同じ人が見えた。それと汝は我……とか言ってる妙な声と後テレビに吸い込まれた、まあテレビが小さくて右腕と頭しか入らなかつたけど」

陽介「そうか……しっかし、妙な声つてのはともかく、テレビに吸い込まれたってのはお前……動揺しすぎ?……じゃなきや、寝落ちだな」

ン

千枝「けど夢にしても面白い話だね、それ。テレビが小さいから入れないってとことか変にリアルでさ。もし大きかったら……! そういえばウチ、テレビ大きいの買おうかって話してんだ」

陽介「へえ。今、買い替えすげー多いからな。なんなら、帰りに見てくか? ウチの店、品揃え強化月間だし」

千枝「見てく、見てく! 親、家電疎いし、速く大画面でカフー映画見たい! チョアー、

ハイッ！」

カンフー映画の真似事をしている

陽介「だいぶデカいのであるぜ。お前が楽に入れそうなのとかな、ははは」

優菜「尾けるぞ」

優斗「了解」

ジュネス家電売り場

カオスで服装は着替えた

千枝「でか！しかも高っ！こんな誰が買うの？」

陽介「さあ：：金持ちなんじゃん？けど、ウチでテレビ買うお客とか少なくてさ、こ

の辺店員も置かれてないんだよね」

千枝「ふうん・・・やる気ない売り場だねえ。ずっと見てられるのは嬉しいけど」

二人ともテレビに触るが

陽介「・・・やっぱ、入れるワケないよな」

千枝「はは、寝オチ確定だね」

悠「確かに入ったと思っただが・・・」

陽介「大体入るったって、今のテレビ薄型だから裏に突き抜けちゃうだろ・・・ってか

何の話してんだっつので、里中。お前んち、どんなテレビ買うわけ？」

千枝「とりあえず安いヤツって言った。オススメある？」
奥に行く

悠「……」

悠がテレビを触る

ス……

右手が入る

陽介「そーいやさー、鳴上。お前んちのテレビって……!？」

千枝「何?どしたの花村……!？」

陽介「あ、あいつの腕……ささってない……?」

千枝「うわ……えつとー……あれ……最新型?新機能?ど、どんな機種?」

陽介「ねーよッ!」

悠に近づく

千枝「うそ……マジでささってんの!？」

陽介「マジだ……ホントにささってる……すげーよ、どんなイリユージョンだよ

!?!?で、どうなってんだ!?!?種は!?!？」

悠「種なんてない……もう少し行けるかも」

手を抜いて頭を入れる

陽介「バ、バカよせて！何してんだ、お前ー!!」

千枝「す、すげえーっ!!」

悠「中になんかデカい空間がある」

陽介「な、中って何!?!」

千枝「く、空間って何!?!」

悠「だいぶ広いぞ」

陽介「ひ、広いつて何!?!」

千枝「つていうか、何!?!」

陽介「やっべ、ビックリし過ぎで、モレそう・・・」

千枝「は?モレる?」

陽介「行き時無くて、ガマンしてたってか・・・うおダメだ！もる、もる!」

優菜「ちよつと近づくぞ」

ダダダ

優斗『い!?!来た!?!バレた!?!』

ダダダ

戻ってくの早すぎん?

陽介「客来る！客、客!!」

優斗「いや・・・気づかんの？」

優菜「驚きすぎて、注意力が散漫になってるんだろう」

千枝「え!?ちよつ、ここに、半分テレビにきさった人いんですけど!!ど、どうしよ!!」
走り回って同時にぶつかり

陽介「うわ、ちよ、まっ!!」

・・・

優菜「入ったかな？」

優斗「入るのか？」

優菜「ちよつと待ってな」

一分後

優菜「よし、入ろう」

ズブ・・・

入ったんだが

優斗「おわっ!!」

優菜「アウラを使え！」

ブワッ

ゆっくり降りた

優斗「怪盗服か」

優菜「まあいいだろ」

気は・・・

優菜「向こうだ、行くぞ」

ダダダ

千枝「キヤアアア!!」

千枝が倒れる

陽介「里中ーっ!」

優斗「シヤドウか!」

優菜「多いな、これは全員出すしか・・・」

クマ「もうダメクマー!!」

すると炎を纏った愚者のアルカナが下りてくる

悠「ペル、ソナ!」

悠がアルカナを掴むと周りから風が出てきてペルソナと剣が現れた

クマ「クマー!?!」

陽介「なんだよ・・・これ!!」

優斗「あれはペルソナか!?!」

優菜「イザナギってんだ」

周りの何体化をジオで倒す

だが周りからどんどん出てくる

陽介「おわわわわ!!」

クマ「どええええ!!!」

上に集まり、悠たちの上に落ちてくる

優菜「カオス！悠たちの周りをドーム状に守れ!!」

陽介「うああああ・・・あれ？」

クマ「何クマ!？」

ドームの中にカオスで入る

優菜「悠、大丈夫か？」

陽介「だ、誰だ!？」

クマ「こんな人知らないクマー!!」

悠「大丈夫」

陽介「お前はもつと焦ろ!!」

優菜「ちよつと待てよ」

ドウ

陽介「金髪!？」

悠「ハイカラだな」

か・・・め・・・は・・・め・・・

優菜「波ーっ!!」

真上に放ち倒しながら周りに散らばす

優菜「さあ、悠、ペルソナ使えるんならさっさと倒すぞ！」

悠「イザナギ！」

剣を掴み飛んでいきどんどん倒していく

陽介「すげー・・・」

優菜「アリエル、クロノス、カオス、ヘル、ホバル、ミツハノメ！」

優斗「イフリート、ガイア、トラ、アラメイ、アウラ、ウンディーネ！」

バババババ

陽介「えええええ!!」

優菜&優斗「さあ、暴れろ!!」

みんなどんどん倒していく

クマ「こんなの初めてだクマー！」

悠「凄いな」

優斗「お前も初めてにしては凄いなんだけど……」

優菜「じゃ、私も行ってくる」

陽介「え？」

ピカーッ

陽介「なんだ？それ……」

クマ「真つ赤だクマー！」

ビュン

気の剣に波紋を纏って切り刻んでいく

少しすると

優菜「次は！……あれ？もういない」

戻る

陽介「終わった……のか？」

優斗「多分な」

ス……

千枝「う……う……う……」

陽介「里中！」

千枝「……あれ？あの化け物は？……!?その人たち誰!？」

優菜「まずここから出るんだろ？そこの・・・クマ？が知ってるだろ」

陽介「事情は歩きながら話す」

道中

千枝「えー!!あの化け物君らが倒したの!？」

優斗「ペルソナってんだ」

クマ「そもそも、あれは化け物じゃなくてシャドウだクマ!」

優菜「・・・まあ、簡単に言ったらある場所から来た奴らだな」

千枝「・・・?」

陽介「どうかしたか?」

千枝「いや、その変な服着てる人たちの声聞いたことあるなーって」

ギクツ

優菜「ま・・・まあそのうち分かるよ」

クマ「というか、君達が犯人なのかクマ?」

陽介「犯人?」

クマ「近頃、ここに人を投げ込んでいる奴がいるクマ。その所為でこつちの世界がおかしくなってるクマ」

優菜「さっきのシャドウの量も異常だったな、それもか?」

クマ「そうクマ、何か知らないクマ？」

優菜「知らないな」

悠「俺達も知らない」

クマ「なら、探すの手伝ってほしいクマ！」

陽介「え、ヤダよ」

クマ「なっ！なら出る方法教えてあげないクマ!!」

陽介「ズリイーぞてめえ!!」

優斗「まあ、今入れられてるやつがいるって何人だ？」

クマ「二人だクマ」

優斗「一人はニュースキャスターの・・・なんつったつけ」

優菜「山野真由美だろうな」

陽介「それって、死んだって報道されてたよな確か！」

千枝「じゃあ、もう一人もやばいんじゃないの!？」

優菜「いや、多分手遅れだ」

気を微塵も感じねえ

優菜「多分、明日報道されると思う」

陽介「そ、そうか・・・」

千枝「と、とりあえずいったん戻る？」

クマ「そうクマね、シャドウが来る前に早く帰ったほうが良いクマ」
落ちた場所についた

悠「多分また来ると思う」

クマ「クマはずっとここで待ってるクマ」

テレビが出てきた

クマ「そこから出れるクマ」

陽介「これ入れんのか？」

優菜「行けるだろ」グイグイ

千枝「ちょ！押さないでよ！」

シユン

入って戻った

千枝「あれ、ここって……ってあー！」

優菜「ははは……」

千枝「聞いた事ある声だと思ったら、転校生の！」

優菜「目立つから移動してから話そうか」

陽介「いや、いいわ。明日も学校あるし、ハートの的に無理だわ」

千枝「そ、そうだね。今日の事は忘れて明日も普通に過ごそうか、うん」
優斗「おいおい、こんな事そう簡単に忘れられるもんじやないだろ」

結局別れて帰った

普通に飯食って・・・風呂はご想像にお任せする

そして寝た・・・はずだったんだが

優斗「ベルベットルームだったっけ？」

女の子「君達誰!？」

優菜「ストップ、安心しろ何もしない」

イゴール「これはこれは、お久しぶりですね」

?ここは時間軸は過去のはずだが・・・話を合わせてみるか

優菜「久しぶりだね、イゴール」

イゴール「前は、まさかあんなことが出来るとは思いませんでしたな」

優菜「あん時はああるしかなかったからな」

イゴール「またここに来たという事は、また何かあるんでしょうな。お手伝いは、さ

せてもらいます」

エリザベス「私はエリザベス、そちらはマリーです」

マリー「よ、よろしく?」

優菜「ヨロシクであつてるよ」

優斗「ちよつと特殊なんだが、俺とコイツは元々一つで、俺が優斗でこいつは優菜だ。ちなみにこいつホントは男だぜ」

マリー「え!?!嘘・・・」

優菜「いや、女歴のが長いから、変な事とかはしないぞ」

マリー「そ、そう」

イゴール「では、またお会いしましょう」

戻った

てかそのまま寝た

第百三話（ソードアート・オンラインに來ただけど…
俺一人？ 『第一話』より）

ドサツ

ユウト「今度はなんだよ一体!! 優菜次はどこに來たんだ!？」

シーン

ユウト「・・・優菜?」

シーン

神様「ホツホツホ、今回はお前ひとりじゃぞい」

ユウト「・・・マジで?」

神様「今回はSAO・・・まあお前に言っても分からんからいるのは全部持たせたぞ」

ユウト「何で俺一人なんだ?」

神様「最近優菜ばっかり目立ってるからの、優菜は何個か一人でやってるやつがあるが、お前はないじゃろ?」

ユウト「・・・!! 無い・・・」

神様「じゃろ? どんどん影が薄くなってるお前にチャンスをやったと取ってく

れて構わんぞ！」

ユウト「ハイハイ、そうですかっ」と

神様「ちなみに、お主はこれから全体的に身体能力を・・・主に動体視力と瞬発力を上げておるからの」

ユウト「へーい」

神様「面倒臭がるな」

男「ハーハーイ！それじゃあそろそろ、始めさせてもらいまーす！」

ん？なんだ？

神様「ほら、行ってこい」

なんか広い場所に出て、階段状の石段で囲まれた場所に大勢・・・とは言えないほどには人がいた

とりあえず座ろう

男「今日は俺の呼びかけに応じてくれて、ありがとう!!俺はディアベル!職業は:気持ち的には騎士やってます!」

アハハハハ

ジョブシステムなんてないだろ!(笑)

ジョブってなんだ?

くどいようだが言わせてもらう、こいつはバカである

まあまあとディアベルが落ち着ける

顔が変わり

ディアベル「今日、俺達のパーティーがああ塔の最上階でボスの部屋を発見した！」

マジ？

マジか・・・！

ディアベル「俺達はボスを倒し第二層に到達して、このデスゲームをいつかきつとクリア出来るという事を始まりの町で待っている皆に伝えなくちゃあならない！それが！今この場所にいる俺たちの義務なんだ!! そうだろ!? みんな!!」

ザワ・・・ザワ・・・

パチパチ・・・パチパチパチ・・・パチパチパチ

ピューピー

拍手と混じり指笛も聞こえる

ディアベル「オツケー！それじゃ早速だけどこれから攻略会議を始めたいと思う。まずは、六人のパーティーを組んでみてくれ」

当然俺は入れない

男「あんたもあぶれたのか？」

女「あぶれてない、周りがみんな仲間同士だったみたいだから遠慮しただけ」
男「ソロプレイヤーか・・・ならオレと組まないか？ボスは一人じゃ攻略出来ないって言ってる？今回だけの暫定だ」

女は頷く

すると男が右手で空中を指で上から下にし（語彙力無くてゴメン）何かをタップするように押し女を見る

すると女も空中を押す

?????
何してんだ？

・・・とりあえず俺も入れてもらえないか聞いてみるか

ユウト「なあなあ、俺もあぶれちゃって・・・入れてもらえないか？」

男「・・・暫定ならいいが、あんたは？」

女「暫定なら構わない」

男「わかった」

空中をまた上から下にし何か押すが・・・

男「?どういふことだ？」

女「どうかした？」

男「出てこない」

女「え？」

男「パーティ申請先が出てこない」

女「バグか何か？」

男「分からない、でもさつきは出来たよな？・・・なあ」

ユウト「何？」

男「アンタからもやってみてくれないか？」

ユウト「え・・・っと・・・」

ブンブン

二人と同じように指を振るが・・・

女「どうかした？」

ユウト「ちよつと待って・・・」

ブンブンブンブン

もつと振るが何も出てこない

男「大丈夫か？」

ユウト「大丈夫じゃない」

男「・・・」

女「この人のアバターがバグってるのかしら・・・」

男「ちよつといいか?」

女を連れてどこかに行く

?

しばらくすると戻ってきた

男「後で外に来てくれ」

ユウト「?ああ」

ディアベル「よおーし!そろそろ組み終わったかな?じゃあ」

?「ちよつと待ってんかー!」

石段の上の人がそう言い、ジャンプしながら降りてくる

・・・俺がやったら足首逝くな(変換ミスじゃないです)

おじさん「おつとく・・・」

おおく降りきった

キバオウ「ワイはキバオウってもんや、ボスと戦う前に言わせてもらいたいことがある!こん中に!今まで死んでいった2000人に詫びいれなあかんヤツが居るはずや

!!

皆の方向に指を向ける

ディアベル「キバオウさん、君の言う奴らとはつまり元ベータテスターの人たちの事だな」

キバオウ「決まってるやないか！ベータ上がり共はこんクソゲームが始まったその日に！ビギナーを見捨てて消えよった！奴らは美味い狩場やらぼろいクエストを独り占めして、自分らだけポンポン強なつて！その後もずーっと知らんぷりや．．．こん中にも居るはずやでやでえ！ベータ上がりの奴らが！そいつ等に土下座させて！貯めこんだ金やありとあらゆるアイテムを吐き出してもらわな！パーティーメンバーとして！命は預けられんし！預かれん！」

．．．

えつと．．．つまり．．．わかんね

いかつい男「ちよつといいか？」

キバオウの前まで歩いていく

エギル「俺の名前はエギルだ。キバオウさんあんたの言いたい事はつまり、元ベータテスターが面倒を見なかったからビギナーがたくさん死んだ。その責任を取って謝罪、賠償しろ．．．ということだな？」

キバオウ「そ、そうや」

本を取り出す

エギル「このガイドブック、あんたも貰っただろ？道具やで無料配布してるからな」
キバオウ「もろたで？それがなんや！」

エギル「配布していたのは、元ベータテスター達だ」

マジで？

そうだったのか・・・

うん、わけわからん

エギル「いいか、情報は誰にでも手に入れられたんだ。なのにたくさんプレイヤーが死んだ・・・その失敗を踏まえて、俺達はどうかボスに挑むべきなのか。それがこの場で論議されると、俺は思っていたんだがな」

キバオウはふてくされて石段に座る

エギルも戻る

ディアベル「よし、じゃあ再開していいかな？ボスの情報だが、実は先ほど例のガイドブックの最新版が配布された。それによると、ボスの名前はギルファンングザ・コボルトロード、それとルインコボルト・センチネルという取り巻きがいる。ボスの時は、斧とバツクラ、四段あるHPバーの一段が赤くなると、曲刀カテゴリのタルワールを持ち替え攻撃パターンも変わるということだ！」

ザワザワ

ディアベル「攻略会議は以上だ！最後に、アイテム分配についてだが金は全員で自動均等割、経験値はモンスターを倒したパーティーのもの、アイテムはゲットした人のものとする。異論はないかな？・・・よし、明日は朝10時に出発する。では、解散!!」

男「それじゃあ、ついて来て。君もね」

女「気になるからいいわよ」

ユウト「どういうこつた？」

エリアの外（モンスター等がいるところ）

ユウト「それで？なんだ？」

男「殺しはしないよ」

剣を抜く

ユウト「は!？」

女「ちよつと！どういうつもり!？」

男「気になることがあるんだ」

ユウト「ストップ!どうするつもりだ？」

男「ちよつと切る」

ユウト「やっぱり殺す気やん!」

男「多分大丈夫だよ」

身構える

斬られる！

・・・アレ？

男「やっぱり・・・」

女「え!?!これって・・・」

目を開けると・・・

immortalObject

男「破壊不能オブジェクト・・・!!」

女「どういうこと!?!」

ユウト「どういうことだ!?!」

男「おかしいと思ったんだ・・・お前は俺たちが着ている防具も着ていないし、何よりメニューが開けていなかったらな」

ユウト「・・・つまりどういうことだ・・・?」

男「一つはバグでNPCがプレイヤーみたいに動けるようになったか、もしくは茅場晶彦の仲間か」

女「なんですって!?!」

シャー

ユウト「剣を抜くな!!」

男「待て、後者の可能性はほとんどない」

女「なんでよ」

男「こんなデスゲームができるのに、こんなバカみたいなミスをするわけがない」

女「でも、こいつが確実に安全とも言い切れないんでしょ!？」

男「どうするべきか……」

ポロン

ユウト「ん?なんだ?」

メニユーってやつか?

女「何する気!？」

ユウト「待て!俺は何もしていない!!」

男「メッセージか?」

ユウト「えつと……君が中村優斗君か?私はただの住人のNPCとして作ったはずだったんだが、何かのバグで自我を持ってしまったようだね。実に面白い。だから君にプレイヤーの権限をあげよう他のプレイヤーたちと共に100階層までクリアしてくれたまえ、まあ君は所詮NPCだからね、ゲームがクリアされれば君も消える。それでも構わないのなら頑張りたまえ。茅場晶彦』だだよ」

女「茅場晶彦!？」

男「まさか直接メッセージが来るとはね・・・」

ユウト「ともかくこれで、茅場?の仲間じゃないってことが分かっただろ!？」

男「いや、そうとも言い切れない。今の状況を見て、お前を助けたのかもしれない
あつそうなつちやいます〜？」

ユウト「・・・さつきプレイヤーの権限がどうとかって書いてたよな?メニューって
どう開くんのだ?」

キリト「右手で空中を下にスワイプしたら出てくる」

ポン

出た

ユウト「ほおほお・・・うん、大体わかった」

キリト「パーティ登録だけでもしとくか?」

ユウト「まだおぼつかないから、お前からやってくれ」

キリト「わかった」

ススス

速っ!

ポン

ユウト「えっと・・・OKと」

よく見ると視界の左上にHPバーと名前・・・YUTOとKIRITOとASUNAと書いてある

俺の名前が書いてある・・・男の方はキリトかな？あの女はアスナって言うのか
アスナ「終わった？それじゃあさっさと行くわよ」

明らかに早足

キリト「行こうか」

ユウト「ほい」

しばらく歩くとパンがあり、買ってアスナが近くにいたので横に座って一緒に食べる
ガブツ

ユウト「固え・・・」

キリト「お前はずっとこの町にいたんじゃないのか？知ってるものかと思つたんだが・・・」

ユウト「突然、路地裏にいて『始めさせてもらいまーす』って聞こえて、聞こえる方に行つたらお前がいた」

キリト「自我が出来てすぐだったのか・・・なら茅場はバグにすぐ気づいてあんなメールを送ってきたんだな」

ユウト「ところでよ、あんた素で無口なのか？それとも人見知りか？」

アスナ「あんまり馴れ合いたくないだけよ、特にアンタとは」

ユウト「なんでだよ」

アスナ「敵になるかもしれないと仲良くできるわけないでしょ」

ユウト「敵？」

アスナ「茅場はこの世界はクリアされれば消えると書いてた、NPCの貴方も消えるんでしょ？だったらそれを阻止しようとするかもしれないじゃない、それに情が出来る前に早めに離れておきたいわ」

キリト「そうだよ、お前はこのデスゲームがクリアされれば消えるのに手伝うのか？」

ユウト「別に消えるのは構わねえし、邪魔する暇があるならむしろ手伝ったほうが良いだろ」

キリト「そうか、少しの間かもしれないがよろしくな」

ユウト「ああ」

食べ終わって

ユウト「この世界がどういう所か教えてくれよ」

キリト「えつとだな・・・」

ざっくり説明

VRMMOをやっていたら外の世界と隔離、そして外に出たいなら百階層までクリアしろだと・・・死んだら終わり、復帰なんてできない、死んだら外の自分も死ぬ

ユウト「・・・RPGでそれは鬼畜だな」

キリト「俺は何年立ってでもこの世界をクリアしてやる」

ユウト「そっか、俺もすっかり手伝ってやるよ」

アスナ「それじゃあ、また明日」

ありや、行っちゃった

キリト「お前は一旦武器や防具を買ったほうが良いんじゃないか？」

ユウト「それもそうだな」

その後別れて武器を買ったんだが

ユウト「短剣って結構値段張るんだな」

金ない

RPGって敵倒したら金手に入るよな？

しばらく狩った

防具を一式買って寝た

防具で金は全部飛んだからカオスの空間で寝た

次の日

キリト「そんな装備で大丈夫か？」

ユウト「大丈夫だ、問題ない」

という訳で戦略をキリトが説明しながら行くとなんとかついた

ディアベル「聞いてくれ皆、俺から言う事はたった一つだ。勝とうぜ!!行くぞ!!」
扉を開き中に入ると

デカイボスが出てきた

横から鎧をまとったやつが出てきたのでそいつらを倒す

ディアベル「攻撃、開始!!!」

おおおお!!!

ユウト「死にそうなやつは、後ろに戻れよ!回復してやる!」

キリト「どういうことだ?そんなにクリスタルは持つてなかつただろ?」

ユウト「見てたら分かる」

少しすると

男「回復してくれ!」

ユウト「アリエル!行ってくれ」

ばああ

男「ホントに治った!!よっしゃー!やってやらー!!」

キリト「本当に回復した！」

ユウト「ディアベルがリーダーシップあってよかったよ」

あいつのおかげで食らうダメージ量が少なくなってる

ユウト「イフリート、逆側を守りに行ってくれ」

イフリート「わかった」

ドカツ

男「なんだ!? 敵がいきなり吹っ飛んだ!？」

ボス「グルルルル」

武器と盾を投げる

キバオウ「情報通りみたいやな！」

ディアベル「下がれ！俺が出る！」

タツタツタツ

ユウト「なんで全員で行かないんだ!？」

ボスは武器を取り出す

キリト「ダメだ！全力で後ろに飛べ！」

ボスが周りの壁を飛び

ヤバそうだな！

ユウト「アウラ！オレを飛ばせ!!」

ビューン！

ディアベルに剣が当たる瞬間に間に入り

ディアベルをイフリートに遠くにやらせ

俺が攻撃を受けた

ユウト「グアアアア!!」

ディアベル「そんな・・・！」

キバオウ「大丈夫か!？」

ボスはキバオウたちの所に行き

ボス「ゴアアアア!!」

武器を振り下ろす瞬間に

神様「大丈夫かの？」

ユウト「ヘルを出しておいて良かったぜ」不屈の闘志発動

神様「今は時間が止まっておるんじゃないが、どうじゃ？優菜のように変身したいと思わんか？」

ユウト「まあ強くはなりたくないな」

神様「なら、ペルソナを纏うように想像してみい」

ユウト「纏う？」

・
・
・

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシユーン

ユウト「なんだこれ」

赤い鎧？

イフリートだところなるのか

ユウト「これでいいのか？」

神様「OKじゃ、怪盗服みたいに動きやすいじゃろ？」

ユウト「確かに、鎧って感じがしねえ」

神様「ならさつさと時間を戻すぞい」

ユウト「ちよつと待て」

一応ポーションをディアベルに使う

そして振り下ろされる下に行き左手を上げ

時間が動き出す

ガキイイイン

キバオウ「なんだ!? 誰だお前は!!」

ボス「グギャアア!!」

ユウト「俺だよ」

キバオウ「その声は! デイアベルはんを助けたやつか!」

ユウト「動かせないんだろう? さっさと決めてやるよ」

短剣が光る

ユウト「行くぞ! イフリート!!」

イフリート「一発決めるぞ!」

ユウト「シミラーダガー・インフェルノ!!」

炎を纏いながら

ボスを7回ほど切り裂く

ユウト「キリト!!」

キリト「ああ!」

キリトがボスを切り刻み

キリト「スイツチ!!」

アスナが入るが

ボスが斬ろうとする

キリト「アスナ!!」

アスナ「!!」

屈んでよけロープがボスによって剥がれる

アスナ「せやあああ!!!」

剣先が全く見えないほどの攻撃を繰り返す

そこからはキリトが攻撃を剣で受けて

アスナが斬る

今のうちに

ユウト「アリエル、メシアライザー」

パアアア

キバオウ「これは・・・!!」

キリト「しまった・・・!!」

ザシユ

アスナを巻き込んで吹っ飛ぶ

カランカラン

キリトの剣が落ちる

そこにボスが来る

ボス「ウガアア!!」

ユウト「イフリートからウンディーネ!」

鎧が赤から青に変わる

テトラカーンを発動しながら間に突っ込む

ガキイイイン

ユウト「テトラカーン効果で、反射!」

ドオオオン

ボス「ガアアアア!!!」

エギル「おりゃあ!!」

どがあああん

エギル「今だ!行けええ!!」

うおおおお!!!

エギル「回復するまで、俺達が支えるぜ!」

キリト「あんた・・・!」

エギルも応戦に行く

ユウト「アリエル、メシアライザー!」

パアア

ユウト「皆の体力回復したぞ！ ippその事決めちまえ!!」
うおおおおお!!!

ボスが皆を振り払いディアベルを殺そうとした技を出そうとする
キリト「危ない!!」

ユウト「来い!!」

足場を作る

キリトが片足を乗せジャンプと同時に投げる

キリト「届けええええ!!」

ソードスキルでボスを斬り

ボスが飛んでいく

キリト「アスナ！最後の攻撃、一緒に頼む!!」

アスナ「了解！」

ユウト「カオス、ランダマイザ！相手の防御力を下げた!!決めちまえ!!」

キリト&アスナ「ハアアアアア!!」

ボスが斬ろうとするが

キリト「うおおお!!」

キリトが剣ではね返し

アスナ「せい!!!」

アスナがボスの剣を落とす

キリト「でりやああ!!」

ボス「ガアアア!!」

キリト「うおおおお!!!」

腹から頭の先まで一気に裂いた

パアアア

パライイイイイン

・・・

や・・・やったー!!!!

上にCongratulation!!と文字が浮かんでいる

うおおお!!!

やった!やったぞー!!

俺達は勝ったんだー!!!

鎧を解く

ディアベルの所に

ユウト「大丈夫か?」

ディアベル「済まない、最後は全部任せてしまって・・・反動で足が動かなかったんだ、助けてくれてありがとう」

ユウト「気にすんな、この世界は死んだら終わりなんだ。だったら殺させないようにすればいいだけだ」

ディアベル「なんだそれ・・・ハハハハ！」

ユウト「とりあえず、終わったな」

キリト「ひとつ聞きたいことがある」

ディアベル「なんだい？」

キリト「ラストアタクボーナスによるレアアイテム狙い・・・お前もベータ上がりだったのか」

アスナ「それじゃあとりあえず、お疲れ様」

エギル「見事な剣技だった congratulation この勝利はアンタのものだ」

キリト「いや・・・」

パチパチパチパチ

拍手が起こる

エギル「アンタもよくやってくれたな、しかしあんな力この世界にあったのか・・・魔

法関連の力はないと聞いていたんだが」

ユウト「まあ、後で話すよ」

キバオウ「なんでやつ!!なんでディアベルはんを・・・ワシらを騙したんや!ジブンが最初から情報を伝えとつたらディアベルはんが危険な目に遭うことも・・・ワイらが死にかけることもなかった!」

ユウト「結局は俺が回復したり盾になって、だれ一人死ななかつたじゃないか」

キバオウ「それは結果だけの話や。こいつはディアベルはんに、危険を押し付けて手柄の横取りでボスを倒したんや!」

まさか・・・ディアベルさんをおとりにして攻撃を回避したのか?

こいつ、元ベータテスターなんだ!ボスの攻撃パターンも全部知ってて手柄を独り占めする気だったんだ!

他にもいるんだろ!?ベータテスター共!!出て来いよ!!

キリト「・・・ハハハハ・・・アハハハハハハハ・・・元ベータテスターだつて?俺をあんな素人連中とは一緒にしないでもらいたいな」

キバオウ「な、なんやと・・・!?!」

キリト「SAOのベータテストに当選した1000人のうちのほとんどのほとんどはレベリングのやり方も知らない初心者だったよ、今のアンタの方がまだマシさ。でも俺はあんな

奴らとは違う、俺はベータテスト中に他の誰も到達できなかった層まで登った！ボスの刀スキルを知ってたのは、ずっと上の層で刀を使うモンスターとさんざん戦ったからだ！他にも色々知っているぞ？情報やなんか、問題にならないくらいな！」

キバオウ「な、なんやそれ・・・そんな、ベータテストどころやないやないか？！もうチートや！チーターやろそんな!!」

そうだ！

そうだぞ！

チーターだ！

ベータとチーター・・・だからベーターだ！

キリト「ベーター・・・いい呼び名だな、それ」

メニユールから服装黒装束にしなから言う

キリト「そうだ、俺はベーターだ。これからは元テストごとときと一緒にしないでくれ」

奥の階段を進む

アスナが近づくと

アスナ「待って・・・あなた、戦闘中に私の名前呼んだでしょ」

キリト「ごめん・・・呼び捨てにして・・・それとも、読み方違った？」

アスナ「どこで知ったのよ」

キリト「この辺に自分の以外に追加でHPゲージが見えるだろ?その下に、名前が書いてあるから」

視界の左上を指さす

アスナが目をこらす

アスナ「キリ・・・ト・・・キリトね、覚えておくわ」

キリト「君は強くなれる、だからもしいつか誰か信頼できる人にギルドに誘われたら断るなよ。ソロプレイには絶対的な限界がある」

アスナ「なら、あなたは・・・?」

パーティーが解散された

扉が開きキリトが入っていき扉が閉じた

それから結構数か月が立ち

ディアベルは第一層攻略から攻略組から抜け、攻略組は二つに別れ解放組とドラゴンナイトだかナイトだかとなのり・・・まあ仲は悪いが一緒に攻略して行ってる

俺の身の上は話した自分がバグ上の存在であること；そして他の世界から来たと、あの力はその世界のものと

わけが分からないという顔をされたが、なんとか信じてもらえた

ちなみにその後イキリトにたまたま街であつたから話した……目が点だつたが……
それまたちなみにキバオウに『お前の方がチートやないか!!』つて言われた

俺が最初に入り少し情報を収集してカオスで出る

そして準備し倒すが最早セオリーになつてきた

そして一日が終わり
寝た

第一百四話（ペルソナ5 + Rに転生『第三十話』より）

蓮「電車に乗るんだろ？もうすぐ出るぞ」

杏「うわ！ヤバイよ走って！」

電車

優菜「思ったより余裕あったな」

杏「あそこ開いてるから座ろう」

結果杏と蓮、俺が座って悠と竜司が立ってる

竜司「てかよ電車で移動する怪盗ってよ・普通の下校風景じゃんか」

優菜「ならお前はビルの上走って帰るのか？バレルよりはいいだろ」

杏「うん、それに電車が一番早いでしょ。ペット乗せても大丈夫だしね」

モルガナ「おいコラだれがペットやねん」

竜司「ちよつ、会話に入ってくんな。ペット運賃、払ってねえんだよ」

モルガナ「ワガハイが、お前らを連れてやってんだ」

ガッ

ズボッ

押し込んだ

優菜「黙れ、穴の中に入れるぞ」

モルガナ「穴？」

優菜「入りたいか？俺が開けるまで出れなくなるが」

モルガナ「わ、わかった！もう喋らない！」

車掌アナウンス「間もなく渋谷へ渋谷へ。お出口は左側に変わります」

杏「あ、着いたよ」

降りたよ

竜司「んで、何線に乗り換えだ？」

杏「住所によると、あんま近い駅ないんだよね。あえて言うなら、最寄り駅はここ」

竜司「はあ？あと全部、歩きかよ！？電車の次は、歩きつて！どんな怪盗だよ！！」

モルガナ「いちいち文句タレるな」

杏「あばら家つて言つても、こんな都会に住むなんて・流石有名芸術家だよね。駅

前広場に出て、セントラル街の方に行くのが早い見たい。行つてみよ！」

場所は双葉に調べてもらった

あばら家前

竜司「もしかして、アレ・・・？」

優菜「ボツロ」

杏「住所も、あつてるけど．．．表札は「班目」つてなってる」

竜司「チャイム押してみろよ」

杏「私!? 押したら、壁倒れたりしないよね．．．」

優菜「なら、私が押す」

竜司「私?」

優菜「そう言わないとおかしいだろ」

竜司「いやでも」

杏「流石に私って言われるのはちよつと」

ピンポーン

杏「え?」

竜司「押したのかよ!」

優菜「時間が惜しい」

祐介「どちら様でしょうか」

優菜「じゃ後は杏に任せた」

杏「え! ちよつ」

祐介「先生なら、今は．．．」

杏「高巻ですけど」

祐介「すぐ行くよ！」

優菜「すごい食い付きだな」

悠「なんか釣りみたいだ」

竜司「お前ら釣りすんの？」

優菜&悠「しない」

ガララ

祐介「高巻さ・・お前らもか」

竜司「ちいっす」

祐介「ん？一人増えてるようだが・・」

優菜「え？あ、私？・・まあ気にしなくていいよ」

祐介「まあ今はいいか、何の用事だ？」

竜司「悪いけどモデルの話じゃねえんだ。訊きてえことがあつてよ・・斑目が盗作してるってマジ？虐待もなんだろう？」

祐介「正気か？」

竜司「ネットに出てんだよ」

スマホの画面を見せる

祐介「これ・・・？」

フフフ・・・アハハハハハ

大声で笑っている

祐介「くだらない！盗作もあり得ないが・・・虐待だと？虐待するほど子供が嫌いなら、住み込みの弟子なんて取るものか！それに今は、住み込みの門下は俺一人。俺が無
いと言うんだから、疑う余地はない。」

竜司「お前が嘘ついてつかも知んねえだろ！」

祐介「それは・・・くだらない、身寄りのない俺を引き取ってここまで育ててくれたのは先生だ!!恩人をこれ以上愚弄する気なら許さん！」

杏「・・・本当にそうなの？」

斑目が出てくる

斑目「祐介？どうしたんだ？大声を出して」

祐介「こいつらが、根も葉もない先生の噂を！」

斑目「・・・許してやりなさい。悪い噂を耳にして、彼女の事を心配してきたんだろう」

祐介「・・・はい」

斑目「まあ、この偏屈な年寄りが、万人に好かれているとは自分でも思わんさ」

杏「そんな・・・」

斑目「横から出しゃつばって、すまなかつたね。けど、ご近所の手前もある。ほどほどに頼めるかね？それじゃ、失礼」

中に入っていく

祐介「・・・非礼だったな・・・すまん・・・そうだ、あの絵を見れば、先生を信じてもらえるかもしれない」

スマホを取り出す

祐介「先生の処女作であり代表作・・・『サユリ』だ」

真ん中に赤い服を着た女性がいて、後ろに満月と木の枝

女性は何かには微笑みかけているが

目線の先は霧のようなものがかかって見えない

杏「サユリ・・・？」

祐介「俺が画家を志す、きつかけをくれた絵なんだ」

杏「きれい・・・」

竜司「ゲーヅツわかんねえけど、これすげえのは、わかる・・・」

スマホをなおす

祐介「高卷さんを始めて見たとき、この絵を見たのと同じ感動があった・・・」

杏「私？」

祐介「俺は、こんな「美」を追求したい。君を描くこと、その一環だと思ってる。どうかモデルの話・・・よろしく頼む。せっかく訪ねてもらったんだが、今日はこれから先生の手伝いなんだ。また、日を改めて・・・それじゃ」

祐介も入っていく

竜司「なんか・・・いいヤツじゃね？二人とも」

杏「メモメントスで聞いた『マダラメ』とは、別人なのかもね。優斗・・・優菜はどうなの？」

優菜「普通中身（パレス）の変更はあっても敵自体の変更はありえないはず、前は『班目』、『あばら家』、『美術館』だったと思うんだが・・・」

竜司「せっかく『大物』見つけたと思ったのによ・・・」

モルガナ「イセカイナビはどうなってる？」

イセカイナビ「ナビゲーションを開始します」

竜司「おいこれ、ナビ・・・」

杏「さっきの会話を拾ってたの!？」

ぶわくん

竜司「え!?!ちよまつ!」

モナ「おい!いつの間開始したんだ?ビックリしただろ!」

スカル「優菜が言ったやつがそのままだったんだから仕方ねえだろ」

モナ「もしワガハイが気付かずに歩いてって、また敵に捕まったらどうすんだよ！」

スカル「二本足で歩いてる時点で分かれよ」

モナ「むむむ……」

トウルース「……とりあえず、少し見てみよう。先っぽだけ」

フオルス「だな、先っぽだけ」

スカル「……それ素で言ってるのか？」

トウルース「あそこのトラックから行こう」

スカル「つか、アレ！あばら家が……美術館、マジ？」

パンサー「行こう」

塀に上り屋根の上を通って行く

すると

スカル「おっ！天窓が空いてんぞ！こっから入れんじやね？」

パンサー「でも、けっこう高さがあるよ……戻ってこれる？」

モナ「フフ・・ロープを用意してあるぜ！ワガハイ、道具のプロだからな！どうする

ジョーカー、潜入するか？」

降りると

モナ「・・・静かだな、不気味なくらい」

パンサー「ね、ねえ・・・これ・・・」

スカル「なんだよ、パレスなんだし、ビビる事じゃねえだろ？」

モナ「パレス在り様は、主の心の在り様だ。絵は調べておいた方が良くもな・・・」

スカル「おつ、説明書いてあんな・・・えーつと・・・名前と年齢？なんだこりや？」

パンサー「絵のタイトル・・・じゃないよね？作者の名前かな？」

トウルース「絵に描かれてる人の名前と年齢つてところだな」

モナ「・・・一応、他の絵も調べてみよう」

少し進むと・・・

パンサー「え？この人って・・・」

スカル「コイツって確か、メメントスにいた・・・中野原？だっけ？」

モナ「ああ、プレートに書かれてる」

トウルース「で、向こうは・・・」

パンサー「え・・・嘘っ!!」

スカル「この絵、アイツじゃねえの・・・？」

モナ「『喜多川祐介』って書かれてる、間違いないだろう」

パンサー「え・・・なら、ひよつとして・・・ここにある絵って全部・・・」

ジョーカー「班目の弟子」

パンサー「うん、そうだよね」

スカル「マジか、この人数全部か？前に屋敷に行ったときは・・・」

トウルース「他は全員逃亡、もしくは死亡だな」

パンサー「そんな・・・！」

フォルス「もう少し進んでみよう」

ジョーカー「何だ？あの冊子、光ってるぞ」

身に行く

パンサー「これって・・・このパンフレット？」

スカル「パレスのクセに芸が細げえよなあ・・・こんなモン、無視でいいだろ？」

モナ「でもこれ管内案内図も載ってるぜ？使えそうだから頂いとこう！」

パンサー「もしかして、コレにオタカラの場所まで載ってたりして！」

モナ「あり得ない話じゃないぞ？少なくとも、規模を知る参考にはなる」

パンサー「あれ・・・でもこの案内図・・・半分しか載ってないみたい・・・」

トウルース「残り半分は道中で探そう」

先に進むと

モナ「こいつは・・・」

スカル「なんだ？これ……何か書いてんな」

パンサー「『無限の泉』……？『彼らは、班目館長様が私費を投じて作り上げた作品群である。彼らは自身のあらゆる着想とイメージーションを生涯、館長様に捧げ続けなければならぬ。それが叶わぬ者に、生きる価値無し！』ねえ、コレ……たぶん、盗作のことだよね……？」

スカル「クソ、とんだ食わせジジイだ、あの野郎！」

モナ「弟子は『俺のモノ』ってことか。ホントなら、まともな絵描きですらないぜ。画才のある弟子の着想を、生活を保証する代わりに盗んでるんだ『生きる価値無し』ってのは虐待の事じゃないか？マダラメ様の役に立つうちは置いてやるけど、駄目になったら……」

パンサー「まるで奴隷や道具じゃない！」

スカル「なんで祐介は黙ってたんだ？かばう理由ねえだろ！」

パンサー「引き取ってくれた、恩人だって言ってたよね……」

スカル「だからってよ……！」

トウルース「あいつを引き取ったときは祐介から見たら恩人だからな、班目の中にまだ汚れてない部分があるんじゃないかと思ってるんじゃないのか？」

バタン

殿様? 「なんだ貴様ら!!なぜ盗人が入り込んでいるんだ」

モナ「しまった!長話が過ぎたぜ!!」

殿様? 「であえー!!」

周りにシヤドウが出てきた

スカル「マジかよ・・・!」

ジョーカー「逃げ道はないか!」

殿様「ふん、さっさと済ませろ」

バタン

トウルース「マジでヤバいかもな・・・なら、みんな少し目を閉じろ!」

ピカーツ

トウルース「みんな俺の後に続け」

ドカツ

ドガガガガ

スカル「よ、よしっやってやろうじゃねえか!キャプテンキッド!!」

ドガアアン

パンサー「カルメン!!」

ゴオオオオオ

モナ「ゾロ!!」

ブオオオオオオ

ジョーカー「アルセーヌ!!」

キシヤアアン

フォルス「イフリート!」

ゴオオオオオ

・・・・・

あと一人だ!!

トウルース「行くぞ!! 優斗!!」

フォルス「ああ! みんな出て来い!!」

ピカーツ

ジョーカー「星が!!」

フォルス「インフェルノ、サイコネシス、アトミックフレア、心理の雷、万物逆転、コウガオン!!」

トウルース「ワンショットキル、ギガントマキア、エイガオン、漆黒の蛇、明けの明星、ダイヤモンドダスト

!!」

敵に全方向から攻撃が降り注ぐ

そして

フォルス「イフリート!!」

ブワッ

ヒュルヒュルヒュル

バシューン

赤い鎧を着る

スカル「なんだよあれ!」

モナ「あんなこともできるのか!!」

パンサー「行けー!!」

フォルス「シミラーダガー・リニアー!!!」

ダダダダダダダ

相手に剣先の雨を降らせ

右に避け

ドゴゴゴ

ドウン

バチバチバチ

青い気のオーラ周りに黄色い雷がまばらに、そして青い超サイヤ人4
持つのは五秒ぐらいか

かめはめ波ー!!

ドギューン

ドガガガガ

ドギヤーン

トウルース「ふう・・・」

スウウウウ

ドサツ

パンサー「ちよつと大丈夫!?!」

フォルス「いつもの体力切れだ、心配ない」

モナ「聞きたいことは山ほどあるが、とりあえずここを出るぞ!」

ぶわくん

外に出た

杏「寝ちやってるよ」

モルガナ「ともかく、みんな疲れてるだろうから優斗達の変身は明日へ。ターゲットは班目でいいな?」

竜司「俺はいいぜ」

杏「私もいいよ」

蓮「俺もいい、双葉には聞いておく」

優斗「俺もいいぜ、こいつも多分OKだ」

モナ「なら意識が戻ったら改めて聞いててくれ」

優斗「ああ」

蓮「まず、祐介から裏を取ったほうが良いだろう。班目の事を俺たちはぜんぜん知らない」

杏「なら私、喜多川さんに連絡してみるね。モデルの話受ければ、真相聞けるかもしれない」

モルガナ「え？やんの!？」

杏「もちろん皆も来てよね！怖いし」

竜司「それじゃあ後は明日の放課後、学校の屋上に集まろうぜ」

蓮「それじゃあ、今日は解散だな」

優斗「あー、ちよつと待ってくれ。皆に聞きたいことがあるんだ、怪盗関係ではないんだが」

蓮「なんだ？」

優斗「ウチの学校で、赤い髪の女子っているだろ？名前わかるか？」

竜司「ん？なんか見たことあるような・・・」

杏「あの人かな？一年生の芳澤さん、新体操の推薦って聞いてるけど」

優斗「芳澤ね・・・わかった、ありがとう。じゃ、また明日」

竜司「ああ」

その夜

優菜「う、うくん・・・」

優斗「おう、起きたか」

優菜「ああ、優斗か・・・家に着いたのか・・・!!?・・・なんで私服なんだ・・・？」

(#、w、)

優斗「そりゃあ、俺が着替えさせたからな」

優菜「・・・とりあえず、飯だろ？」

夜ごはんを食べる

優菜「ちよつと散歩してくる」

お母さん「気を付けなさいよ」

優斗「俺もいるから大丈夫だよ」

ガチャ

優菜「公園に行くぞ」

優斗「ああ」

丸い石椅子の前に行く

優菜「お前が腕相撲で勝つたら、さっきの着替えの分はチャラにしてやる・・・その代わり、負けたらわかかってるな？」

優斗「やってやろうじゃねえか」

優菜「無いとは思うが・・・引き分けならお前の勝ちでいいぜ？」

ドガッ

スタート!!

グググ

優菜「な!？」

おされてる!?

優斗「別の世界でいいさんが、身体強化してくれたんだよ！」

優菜「それでも強化しすぎだろ!!」

ドウン

シューインシューインシューイン

超サイヤ人1

優斗「お前！超サイヤ人はなしだろ!!」

優菜「これぐらいハンデになんねえだろうが!!」

グググ

いける!!

優斗「なら俺だつて!!」

ブワッ

ヒュルヒュルヒュル

バシユーン

優斗「イフリート!!」

赤い鎧を纏う

グググ

持ち直しやがった!!

優菜「ならこれでどうだ!!」

ダウン

バチバチ

超サイヤ人2

優斗「な!?!」

グググ

優斗『こ、このままじゃ・・・殺される!!』

神様「神は言っている・・・ここで死ぬ定めではないと・・・」

優斗『黙れジジイ!!』

神様「ペルソナを重ねたらどうじゃ?」

優斗『・・・やってみるか』

ブワーン

優斗「ウンディーネ!!」

ドゴォ

鎧の右半身が青くなる

優菜「クソツッ!なら俺も!!」

ドウン

ヒューヒューヒュー

超サイヤ人3

優斗「俺だつて!アラメイ!!」

鎧の下半身が黄色くなる

優菜「クツソー!!」

ゴオオオ

ドウン

超サイヤ人ゴツド

優斗「アウラ!!」

鎧の下半身の右半身が緑になる

優菜「まだ終わってねーぞ!!」

ゴゴゴゴ

ドウン

超サイヤ人ブルー

優斗「ブルーなんかには負けてたまるか!!! ガイア!! トラ!!!」

右手袋が紫、左手袋が藍色になる

ドゴゴゴゴ

優斗『耐えきれるか!?!』

優菜「うおおおお!!!」

ピカーッ

超サイヤ人4

優斗「アリエル! クロノス!!!」

左靴が白、右靴が灰色

優菜「ぶっ壊れるまでやってやらー!!」

ドゴゴゴ

ドウン

超サイヤ人4+ゴツド

優斗「カオス！ヘル!!」

両腕が黒く染まる

ドゴゴゴ

ドウン

バチバチバチ

超サイヤ人4+ブルー

ピシピシ

石椅子にヒビが入っていく

優斗「ホバル!!ミツハノメ!!」

両足水色に変わる

優斗&優菜「うおおおおおおお
!!!!!!」

バカッ

優斗&優菜「バカッ？」

グラッ

体制が崩れ……!!!

ドカッ

あた……ま……

ドサッ

Ω\&。〜チーン

スウウウウ

優菜「……動ける？」

優斗「初めてであんなにやっちゃまったんだぞ？無理だろ」

優菜「……どうする？」

優斗「……どうしようか」

イフリート「仕方ねえな」

アリエル「皆さんで連れて行きますよう」

ヘル「周りから見たら飛んでるように見えるけど自業自得だからね」

なんとか家まで付いた

お母さん「おかえ……り!? ……何したの？」

アリエル「すいません、腕相撲してたら体力全部使っちゃったみたいで……お風呂
沸いてます？」

お母さん「沸いてるけど……その状態で入れるの？」

アリエル「体とかは私達がやりますから大丈夫ですよ、では」

もちろん男と女に別れてな

風呂

アリエル「ちゃんと髪洗ってるんですか？」

優菜「洗い方がわかんねえ……」

ヘル「何でこんな事私が……」

ウンディーネ「まあまあ、たまにはいいじゃんか」

優菜「また優斗が入ってきたりとかねえよな？」

アリエル「安心してください、今度は三人いますから。それに、動けないでしょう？」

優菜「いや、向こうにはカオスがいるからな……もしかしたら仙豆で回復してるか

も

外では

ガイア「誰一人通さないわよ」

アウラ「入ろうとしたら、吹き飛ばしてあげるわ」

ミヅハノメ「または凍らせてあげるわ」

トラ「チツ、ダメそうだ」

優斗「クソツ！ダメなのか!？」*予想通り仙豆で回復してた

イフリート「死ぬ前に、やめるのも手だが」

クロノス「そもそも、何でこんな事をするんだ？そんなに死にたいのか？」

カオス「男の、ロマンじゃねーか」

アラメイ「バカだろ、お前ら」

戻って

ウンディーネ「そういえば・・・この前優斗が押し入ったとき、ガイアさん軽くキャ

ラ崩壊してましたよね」

優菜「え？そうなの？」

優斗たちは

ホバル「そもそも、カオスの力使えば直接風呂に行けるだろ」

優斗&イフリート&トラ&カオス「その手があった・・・!!」

アラメイ「やっぱバカだろお前ら・・・てかカオスは忘れんな」

優菜 side

優菜「さてと、少しは動けるようになったな」

アリエル「それじゃあ、私達は出ましようか？」

優菜「どっちでも構わねえよ」

優斗 side

優斗「だがどうする!?このまま行ってもアリエルたちに殺されるだけだぞ!!」

カオス「忘れてもらっちゃ困る、俺は空間を支配できる。つまりお前の周りの光をな

くすこともできる!!」

イフリート「だがどうする?中に三人、外にも三人だぞ?」

トラ「任せろ」

風呂の外

ガイア「まだでしょうか」

ミヅハノメ「さあね」

トラ「入れろー!!」

ガガガ

三人とも連れて一気に出る

アウラ「な?」

ミヅハノメ「覚悟は?」

トラ「出来てない!」

ダダダダ

ミヅハノメ「待てやゴラアーーー!!」

ダダダダ

ガイア「とりあえず戻りま・・・」

ペタペタ

アウラ「何この壁!？」

ガイア「カオスの!!しまった!!!」

その頃風呂の外

アリエル「さつき、なんか物音したと思っただけど・・・」

ヘル「いないでしょ」

イフリート「それ!」

グイ

二人を外に出す

ヘル「何すんのよ!」

イフリート「いや、何でも?」

アリエル「とりあえず、戻りましょう」

ゴツン

ヘル「壁!？」

チーン

ヘル「アリエル!?!?・・・そうか、アリエルは物理弱点だから・・・!」

イフリート「これは想定外・・・」

ウンディーネ「どうかした？」

ヘル「戻って!」

ウンディーネ「え?なん・・・」

ヘル「早く!」

ウンディーネ「わかったわよ・・・あれ?何この壁」

ヘル「しまった・・・!アウラたちは外!アリエルは気絶、ウンディーネと私は動けな

い!!」

優斗 side

優斗「グツジョブ」

カオス「後は任せたぞ!!」

ブワン

優菜 side

優菜「あいつら、何してん・・・」

何あの隅の黒いの

髪・・・？

あれ・・・？なんかどどんこつち向いて・・・！！

優斗「よお、優n」

優菜「ギャアアアア！！」

一分後

優菜「何であんな隅から出てきたんだよ、俺がドツキリ系一番無理って知ってるよな？」

優斗「場所はたまたまだよ」

優菜「ところでよ、なんでお前俺一応今女なのにあんな普通に入ってこれるんだ？」

優斗「だってよ、もともと一つなんだから自分の裸見てるのと同じじゃんか」

優菜「いや、圧倒的に違うよな？」

優斗「じゃあなんでお前は普通に一緒に入れるんだ？」

優菜「いや、なんつうか慣れた・・・さっきのでトラウマがぶり返したとかじゃな

いからな」

優斗「ぶり返したんだな」

優菜「してないっていつてんだろ！！」

その夜

優菜「やっぱお前ってバカだよな」

優斗「俺がバカならお前もバカだ」

優菜「そもそも人格違うからそうはならないんじゃないか？」

優斗「そか？」

優菜「なんかバカバカしくなってきた」

優斗「あ、そういや赤い髪の女子の情報があつたぞ」

優菜「本当か？」

優斗「こいつらしい」

スマホの画面を見せる

優菜「芳澤・・・かすみ？こいつで合ってるのか？」

優斗「あん時もこいつと全く同じだった」

優菜「なら、こいつもストーリーに深く関係してくるだろうな」

優斗「髪が普通じゃない奴は大体、ストーリーに係わってくるからな」

優菜「情報も出たし、夜も更けて来たな」

優斗「じゃあ寝るか」

寝たんだが・・・

トラ「しつけえぞ!!」

ミヅハノメ「逃がさん!!」

この夜、謎の物音が街中であつたという・・・

第百五話（賢者の孫に来た『第三話』より）

叙勲式はカッター!!して

数日後

ユウナ「バカヤロー!!何で起こさなかった!!?」

ユウト「俺も今起きたんだよ!!そもそもこんな事してる暇ねえだろ!!?」

ユウナ「それもそうだ!!」

さっさと朝飯と服を着替えて

ユウナ「カオス!」

ブワーン

トニー「うわ・・・君たちもできるの?」

ユウナ「何が?」

通ってゲートを閉じる

ユーリ「どう考えたらそんなのできるのお?」

ユウナ「いや、別に場所と場所を繋いだけだぜ?」

・
・
・

????
うん、分かってないね

シン「何でわからないんだろうな、皆」

皆「賢者様も分からないのに分かるわけないよ!!!」

ユウナ「うくん・・・そうか？」

ガラガラガラ

先生「何してんだ？速く席に座れ」

ユウナ「へーい」

放課後

シン「おほん、ここの所異常な事件続きでまだ何か起こる可能性は十分に考えられるので、それに備えて皆のレベルアップを図ります！」

オーグ「お前が企んでたのは、これか・・・」

マリア「具体的には何するの？」

シン「まずは皆がある程度の攻撃・防御魔法を使える様にする、まず確認。強力な魔法を使う為が一番必要な事は？」

リン「詠唱の工夫」

アリス「イメージを強める」

めちやくちや驚いてるな

アリス「え？違うの？」

シン「何より大事なのは魔力の制御だろ!? 大きい魔法を使うにはそれなりの量の魔力制御が出来なきゃ話にならない!!」

ユーリ「魔力の・・・制御？」

リン「それそんなに大事・・・？」

シン「・・・試しにマリア、魔力障壁を展開してみ」

ブントツ!

マリア「ほいよ」

シン「・・・ダメだね障壁が薄い、これじゃほとんど魔法を防げないぞ・・・じゃ今度はシシリー、この前付与した指輪の防御魔法を展開してみて」

トニー「わ!!」

アリス「すごい魔力障壁!!」

ユーリ「壁が二重に・・・? あつ物理障壁も付与されてるう」

シン「これにはオレの魔力制御のイメージが付与してある、そのイメージに添って付与してある魔法が必要な魔力を集めて魔力・物理障壁を展開してるんだ」

オーグ「・・・確かに制御されている魔力が凄い・・・」

シン「オーグ達はシュトロームの障壁を見たら？あれだけ扱える魔力がデカけりや障壁も相当のものになる、確かにイメージは大事だけどそれを具現化するには、それに見合った魔力が必要になる。だからまずは全員魔力制御を鍛えよう」

アリス「シン君はいつも魔力制御の練習してるの？」

シン「ああ毎日ね。試しに今からオレが、この教室だけに魔力を制御して見せようか？」

!?

ドウン

シュインシュインシュイン

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシューン

ぞわぞわ

オーグ「……………っ!!」

シシリー「これ……………は……………」

マリア「何て……………濃密な……………」

フツ

スウウ

鎧と超サイヤ人が解ける

シン「……って事でこれから毎日魔力制御の練習！サボんなよ？」

何で超サイヤ人に……体が反応したのか？

イフリート「いきなり変なの感じたから、急いで鎧になったが……大丈夫か？」

ユウト「大丈夫だ」

シン「あと目標は全員無詠唱で魔法が使える様になる事」

皆「えー!?」

シン「戦闘中そんなヒマないし……相手に使う魔法バレたら意味ないだろ……リ

ンは暴走させんなよ」

リン「させないったら！」

シン「……何かリンって暴走魔法少女ってイメージだよな」

リン「……その呼び名は気に入った」

シン「いやほめてねえぞ？」

マリア「何ていうか……やっぱり」

トニー「彼だけは規格外だよねえ」

一番後ろにいたから気づかなかったみたいだな

帰りなんだが

來たぞー!!

シン様あー!!

シン「げっ」

ウォルフオード君一言ーっ!!

シン「学院まで押し掛けるか……」

マリア「凄い執念……」

アリス「ていうか私達学院から出られないじゃん！」

シン「……仕方ない……ここはまた……」

ゲートでシンの家へ

メリダ「おやシン、こりやまた沢山友達連れてきたね」

シン「いや、校門の前も凄い人だからで……仕方ないから皆連れてきた」

アリス「けけ、賢者様だよ!!導師様も!!本物!!」

ユーリ「感激くっっ」

マーリン「ほう、そうかそうか。シンの指導で魔法の練習を始めたか」

アリス「シン君には、賢者様が魔法を教えられたんですか？」

マーリン「まああの……ただ、この子の場合イメージの仕方が特殊なんじゃ」

アリス「え？」

マリーリン「そこはワシとも違っているのう、シンは魔法を使う時「結果」ではなく「過程」をイメージする。例えば火の魔法を使う場合・・・「火とは何か?」「なぜ燃えるのか?」そこに明確なイメージを求めるんじや、その結果同じ火の魔法を使つたとしても、シンの場合には全く別物のとてつもない威力になるわけじや」

マリア「確かにゲートの魔法や光学・・・姿を消す魔法なんかも、私達とはそもそも発想が違う魔法だものね」

シシリー「シン君のその発想は・・・いつもどこからくるんですか?」

シン「え!?!」

ユウナ「なんかこいつの発想って俺の世界と似てんだよな?まるで俺の世界から来たみたいに」

マリーリン「詠唱はあくまで魔法を使う際のイメージの補完。まずは制御できる魔力の量を増やす事じや、さすれば自ずとイメージ通りの魔法が使える様になる・・・例えばこんな風にの」

ゲートを開く

シン「あ!!じいちゃんそれ!!」

マリア「シンのゲートの魔法・・・!!」

マーリン「ほっほっ苦勞したかの、仕組みと理屈を紙に書いてもらつてようやつと理解出來たわい・・・シンの魔法はシンしか使えないわけではない、魔力制御とイメージがちゃんと出來ればみんな使えるんじや。皆覚えておいてくれ、シンは規格外であっても決して理不尽な存在ではないよ」

!!

ドウン

ヒューヒューヒュー

ビツ

バシユ

ビームが飛んできたのを掴んで消す

ユウナ「誰だ!!」

ダダダダ

ユウナ「チツ」

逃げ足が速い

マーリン「おかしい、この家の周りは悪しき者が入れない様にしているはずなのだ

が・・・」

メリダ「どこかミスして穴でも空いてるんじやないのかい？」

マーリン「そうじゃの・・・とりあえず皆はそろそろ帰ったほうがいいじゃろう、シン」

シン「うん、それじゃあみんな帰ろう」

マリア「う、うん」

次の日

ガラツ

シン「おはよう、暴走魔法少女」

リン「・・・」

シン「暴走させた？」

その日の放課後

剣が完成し

防御魔法付与のアクセサリーを貰い

数日後

先生「この度王国から通達があった、今の所シウトロームからは何の声明もない為各国が連携し「旧帝国」を監視するという事で話が進んでいるが・・・有事に備え軍人はもちろんだが学生もレベルアップを図ることに決まった、具体的には騎士と魔法使いの連携の強化だ・・・よってお前達には騎士養成士官学院との合同訓練に参加してもら

う」

その後の休み時間

シン「合同訓練かあ、確かに騎士との連携は将来的に必要なだろうからなあ……？
何？皆のそのビミョーな顔」

オーグ「そうか、シンは知らないのか」

シン「何が？」

マリア「あのねシン、魔法学院は魔法をメインで強化するから身体をあまり鍛えない
でしょ？逆に騎士学院は身体を鍛えるのがメインで魔法はさっぱりなワケ、それで昔か
ら騎士学院の生徒は魔法学院をモヤシってバカにしてて……」

トール「うちは向こうを脳筋ってバカにし合ってるんですけどよ」

シン「だけど非常事態にそんなこと言ってる場合かよ」

アリス「分かってるんだけどさあ」

リン「モヤシと言われるのはガマン出来ない」

ユーリ「イラっとするわよねえ」

シシリー「私は別に大丈夫ですけど……」

トニー「僕もちよっと前までアッチ側だったからねえ」

ユリウス「拙者は何も言えんで御座る」

マリア「シンみたいに両方使えれば問題ないんだけどさー」

シン「オレだつてたまたまミツシエルおじさんに教わっただけで・・・」

トニー「ミツシエルつて・・・劍聖ミツシエルⅡコーリング様!?!」

シン「うおつ何だ急にトニー・・・そんな有名なの?」

トニー「剣で右に出る者はいないっていう程の大人物だよ・・・」

トール「賢者様に魔法教わつて導師様に魔道具教わつて劍聖様に剣を・・・」

マリア「そりやシンみたいなのが出来上がるわけよ」

アリス&マリア「とにかくあいつらと仲良くするのは絶対ムリ!!」

ユウト「とりあえず、面倒な事になりそう」

当日

訓練内容は各学院から4名ずつ計8名でパーティを組んでの実践だ

それぞれが王国近くの森に入り魔物を討伐してもらう

国から派遣された教官が同行するが決して油断はしない様に

一応結構進んで

トニーとユリウスといるんだが・・・

ピタッ

フリオ「魔法学院に逃げた軟弱者め・・・!!見ていろよトニーⅡフレイド・・・!!」

ユウト「お前何したの？」

トニー「ごめん心当たりない」

オオカミが出てくる

フリオ「おらっ!!くそっ」

ユウナ「また一人で・・・」

教官「コラア!!フリオオ!!連携の訓練だっつってんだろぅがあ!!」

ドウ

ギヤイン

トニー「危なかったねえフリオ君」

ニコニコニコ

フリオ「誰が助けろって言った!?!邪魔すんじやねえ!!」

ユリウス「・・・まだ一匹噛みついてるで御座るが・・・」

教官「いいかげんにしろ!!」

バコツ

トニー「昔は仲良くやってたじゃない、せつかくの機会だし強力出来ないかなあ」

フリオ「・・・いつだってお前はそうだ・・・俺より一歩先へ・・・くそっ・・・」

魔法まで使える様になりやがって・・・」

ユウト「ライバル心からか対抗意識持つてるんだな」

ユウナ「それだけじゃないだろ．．．ていうかトニーの性格ならなんかやらかしてそう」

ユリウス「絶対何かあったで御座る」

トニー「ひよつとして．．．昔あれが好きだった子が僕に告白してきてさ、お付き合
いする事になったんだよ．．．そーいえばその頃から彼が冷たくなったような．．．」

うん、それだよ

トニー「．．．あの時は悪かったよ、だけど僕にとつても君はライバルなんだ。昔み
たいにお互い認め合ってやっていきたいと思ってる」

フリオ「．．．!!フレイド．．．くそっ．．．彼女がお前と仲良くしてるのを想像
して．．．俺はそれが許せなくて．．．どうせちっぽけだよ俺は．．．」

トニー「ああ、その点なら大丈夫!!割とすぐ彼女とは別れたから!!キスマでしかして
ないし!安心してフリオ!!」

フリオ「テメエやっぱり殺すっ!!」

トニー「ええっ何でだい!？」

!!

この気は!!

ユウナ「皆じつとしとけよ」

トニー「え？」

魔物「ガルルルル」

教官「ライオンの魔物!? 災害級だぞ!!」

ユウナ「ユウト、やるぞ」

ピカーツ

ユウト「わかった、みんな出て来い!!」

バババババ

最上級魔法（インフェルノとか）が全方向から降り注ぐ

ユウト「イフリート」

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシユーン

トニー「何それ、始めて見た」

ユウト「シミラーダガー・リニアー!!」

ババババババ

ユウナ「か・・・め・・・は・・・め・・・」

シユタタタ

ユリウス「ユウナ殿はどうするで御座るか!？」

ムクツ

トニー「え!？」

ユウナ「悲しみの輪か．．．首の皮一枚つないだな、カオス」
スペクトツドを取り出す

ユウナ「さっきの奴は．．．向こうか、アリエル回復してて」

シユタタタ

教官「あ．．．あいつら本当に人なのか．．．？」

トニー「そのハズなんですけどね．．．」

フリオ『あれ？俺のこと忘れてる？』

ユウトはというと

シユタタタ

ユウト『止まった？』

ザツ

ユウト「なんだお前は．．．？ゴキブリ？」

？「あんなものと同じにされたくはないな」

ザツ

ユウナ「くそっ一体誰だった……んだ……セル……だと……!?」

ユウト「セル?」

セル「私を知っているのか、なら話は早い」

何故だ……? B○Xさんの動画を見たうえで作者は出したのか……?

セル「あの方にお前達を殺せと言われた」

ユウナ「またあの方かよ、名前を言えよ名前を」

セル「名前は絶対に言うなと言われているものでな」

ユウナ「お前は誰かの下に着くような奴ではなかったと思うのだが」

洗脳か何かか?……こいつがそんな隙を見せるか?

セル「私はお前達の知っている次元から来たのではない、この意味が分かるか?」

悟飯たちを殺したのか?

ユウナ「超サイヤ人2じゃ倒せないってことだろ? だったら3もしくは4で倒せばい

いだけだろ」

セル「それで済めばいいなあユウナ」

ユウナ「行くぞ!!」

ピカーツ

ユウト「ああ、イフリート！ウンディーネ！アラメイ！アウラ！！」

ユウナ「・・・本当カラフルだなお前」

セル「よそ見をしているのか？」

ユウナ「なっ!？」

速い！

ドガア

グッ

ギューン

ドガアアン

ユウト「クツ・・・オラア」

シユン

ユウト『避けられた!!』

ドガア

ユウト「ぐっほおおお」

ドガガガガガ

セル「もう終わりか？ウォーミングアップにもならないぞ？」

ガラララ

ユウナ「くそ・・・」
シュン

セル「みじめだな、今まで戦って来たといつても、身体がいくら強かろうと所詮は戦鬪力も無い雑魚なんだよ。貴様は」

ユウナ「俺は・・・!!」

セル「これで終わりだな」

ドオオオン

セル「!!」

シュン

よけて撃ち放った方向を見る

シン「お前・・・!!俺の友達に何してんだ!!」

シシリー「大丈夫ですか!？」

ユウナ「来るな!さっさと逃げろ!!」

セルがシンの後ろに行き殴ろうとするのを見て

ユウナ「クロノス!!」

ドギューン

ユウト「くそっ・・・」

ユウナ「やるぞ」

ユウト「わかった」

両方で挟んで

殴り倒す

ドカバキ

ドドドドドドドドド

ユウナ「そろそろいいだろ、それじゃあ」

誰もいない方向に殴る

ユウナ「そして時は動き出す」

ドゴオオオオ

セル「ブルアアアア!!!」

バキバキバキバキ

ドガシヤア

シン「どういふことだ？」

ユウナ「とりあえず、アイツは敵だ。他の皆がいたら本気も出せないし、もしかした

ら死人が出るかもしれねえ」

ユウト「皆は引き上げさせてくれ」

ジーク「・・・わかった！俺は他の班に知らせてくる、お前はこいつらを安全な場所にやってくれ！」

クリス「私が行った方が良いんじゃないかしら？」

ジーク&クリス「あ？」

シン「今それしてる場合じゃないから!!」

ジーク「さっきの見ちまったらあつさり倒せるんじゃないのかって、ちよつと思つたりな」

オーグ「いつその事、ここで見た方が勉強に・・・」

ユウナ「あいつは流石にダメだ、ピッコロの細胞ですぐに回復しちまうし、倒しきれなかったら悟空やベジータの細胞でパワーアップしちまう・・・そもそも普通に強い」

ユウト「死にたくなかったら、さっさと逃げたほうが」

ドガア

ユウトを殴ろうとしたセルを真正面から同時に殴る

ザザザ・・・

ユウナ「油断してんじゃねー！」

セル「ウォーミングアップはこれくらいにするとしようか」

マリア「今のがウォーミングアップ!？」

オーグ「これは本当に逃げた方がよさそうだな．．．！」

クリス「皆さんこっちへ!!速く!!」

ダダダダダ

セル「本当にこの私を倒せると思っているのか？」

ユウナ「やってみなきゃわかんねえ!!」

セル「ふっついて来れるのか？」

飛んで

ドガッ

ドガッドガガガガ

ゴゴゴゴゴ

シン「戦いの反動で星が揺れてるのか!？」

バキ

同時に顔面を殴る

ユウナ「お前もそろそろ本気出せよ!!」

セル「お前ごときこれで十分だ!!」

ドガガガガガ

ドゴッ

ドン

ドン

ドン

衝撃波がどんでんできる

セル「まだまだこんなものではないだろう!!」

ユウナ「オラア!!」

ドガガガガ

セル「まだまだ弱いぞ!!」

ドガア

ズザザザザ

回し蹴りを食らい

下に落ちていく

セル「最後はこの技でこの星ごと消してやろう」

まさか!!

ユウナ「ふざけんなよクソが!!」

ドゴゴゴ

ダウン

バチバチバチ

セル「かめはめ……」

ユウナ「かめはめ……」

シン「何をする気なんだ……!!」

セル&ユウナ「波——!!!」

ドギューン

ガガガガガガ

シン「そういう事か！なら俺だつて!!」

ドギューン

何かを放ち

グググ……

上にやつてから

セルに落とす

ずっと続くがぜんぜんこたえてない

ユウナ「く……これで少しは……!!」

セル「ぐ……とでもいうと思つたか？」

ゴゴゴゴゴ

おされ始めてる!?

ユウナ「うおおおおお!!!!」

セル「それで終わりか？」

ユウト「インフェルノ！ワンシヨットキル！ギガントマキア！エイガオン！漆黒の蛇
！サイコキネシス！アトミックフレア！心理の雷！万物逆転！コウガオン！明けの明
星！ダイヤモンドダスト!!」

周りに攻撃が行く

セル「ぬうう・・・」

ユウナ「今だー!!!」

ゴゴゴゴゴ

セル「な!？」

ゴゴゴゴゴ

セル「ブルアアア!!!」

・・・

倒した・・・？

ドサツ

シン「やつとかよ・・・あんな強いやつがいるなんて・・・」

ユウト「はあ・・・はあ」

セル「今のは少し危なかったな」

ユウト「なんだと!？」

シン「うおお!!」

セル「邪魔だ」

ドガア

腹を肘うちする

シン「ぐっ・・・」

ガクツ

ドサツ

ユウト「シン!!」

セル「お前も黙っている」

ビツ

ユウト「ゴフツ」

ドサツ

デスビーム!!

セル「後はお前だけだ」

ここで終わりなのか？このまま何もできずに死ぬのか・・・？

セル「ぬ？」

・・・なんだ？

セル「いいのか？・・・わかった」

ユウナ「・・・殺さない・・・のか？」

セル「今は生かしておいてやるとのことだ、命拾いしたな」

シユン

気も・・・消えた・・・

ユウナ「皆・・・とりあえず俺たち連れてって・・・」

イフリート達に連れてってもらった

ザワザワ

アリエル「回復終わりました」

ユウナ「ふうふう・・・そっちはどうだ？」

シシリー「終わりました」

シン「全く歯が立たなかった・・・」

マリア「あんな敵がこれから何体も出てくるの・・・？」

ユウナ「あいつは魔人とはレベルが違う、それにアイツはたぶん当分出ない」

リン「ねえ！大變だったって聞いたけど・・・」

シン「お前も大丈夫じゃないだろ・・・また暴走させたな？」

ユウト「しみりしてんのも俺等らしくねえな！」

ユウナ「それもそうか」

シン「ところでよ、ピッコロやらサイヤ人つてなんだよ」

大体話す

シン「そんな世界があるのか・・・」

ユウナ「そのうち会う機会があつたりしてな！」

シン「さすがに勝てる気がしねえな・・・」

ジーク「大丈夫だったか!?上には連絡しておいた、今日は休めだど！後は」

ジーク&クリス「俺&私に任せろ&て・・・あ？」

ユウナ「ぶれないな・・・」

シン「昔からだよ」

その日はさっさと帰って寝た

第百六話（デート・ア・ライブに來た『第一話』より）

ゴゴゴゴゴ

スツ

あら？

何で俺の周りがこんなに崩壊してるのかな？

奥は普通の町だな

ということとは俺が來たからこうなったのか？

何それ怖い

優菜「クロノス、崩壊してる範圍全域全ての時間を戻せ」

ギュルルルル

ドヒューン

ドヒューン

は？なに？

なんか口ケランみたいなのが向かってきてるんですけど!?

優菜「これ普通の人だったら死んでたな」

ダダダダダダ

気弾で全て撃ち落とす

コントロール上手くね？

ドヒューン

ドヒューン

ダダダダダダ

ドヒューン

ドヒューン

もうやめて！俺の心のライフはもうゼロよ！！

こうなったら・・・

優菜「ハアアアアアア！！」

ドウン

シユインシユインシユイン

わざわざ声出してやったんだぜ？これでもう撃つてこな↑パニック状態

ドヒューン

ドヒューン

そう思ってた時期が俺にもありました

よく考えたら相手が変身しても来るよな？

つまり俺が馬鹿つてことだ！アハハハハハ（；ω；）

白髪の一人が目の前まで飛んできて銃？を向けてきた

ギューーン

さすがにそんな至近距離でやられたら・・・！

ドヒューーン

あふん

シユウウウウウ

白髪の女「やった!？」

優菜「そういうのフラグって言うんだぜ？」

白髪の女「なっ！」

ザシユ

シユン

優菜「すぐ斬ろうとするのやめようや」

白髪の女「ぐっ！」

そうだ、あれ言おう

優菜「いいか？俺は今この変身をしてるけど、強さが一個変身するだけで数倍にまで

跳ね上がる。その変身を俺はあと・・・ちよつと待つて数えるから」

超サイヤ人2（1）超サイヤ人3（2）

チュドーン

超サイヤ人ゴツド（3）超サイヤ人ブルー（4）

シュン

超サイヤ人4（5）超サイヤ人4+ゴツド（6）

チュドーン

超サイヤ人4+ブルー（7）

シュン

で、全部だな

白髪の女「避けないでくれると助かるんだけど」

優菜「うん、避けるよ？俺の変身は後7個ある」

白髪の女「そんなの関係ないわ、私が貴方を殺せば終わるんだから」

優菜「別にお前らが何もしなかったら何もしねえよ？でもお前らが何かするなら、抵

抗するで！拳で！」

チュドーン

シュン

優菜「やめて!？」

ヘル出しとこう

死ぬとは思わんが念には念をかけて

優菜「そろそろやめてほし」

ぐわーん

!？視界が・・・

意識・・・が・・・

優菜「グッ・・・」

気づいたら暗闇の中にいた

何もいない

何もない

何この世界

五億年ボタンかよ

いやでもここじゃ自分の手も見えないな

優菜「皆いるか？」

ペルソナたち「いるよ」

優菜「この世界なんだ？」

アリエル「そもそもあの世界はなんていう世界ですか？」

優菜「俺は見たことない」

カオス「とりあえず、お互い全然見えないし。俺の空間入る？」

優菜「この闇のなかじや何も見えないしな」

その数時間後

すうすう

優菜「あら・・・？（汗）なんで・・・？」

身体が聖杯に負けたときみたいに消えていく!!（詳しく知りたいならP5R買おう

か）

優菜「と・・・またですか」

ザアアアア

クロノスを呼んで直し中

とうか前出たときヘル出した意味なかったな

優菜「誰も来ないな」

待とうか

・
・
・

とうか雨宿りしたほうがいいか？

・
・
・

チュドーン

シュン

優菜「やつと来たか」

まあ

優菜「速攻逃げるんですけどね」

集めてから逃げた方が逃げやすいわ

グワーン

近くの路地裏

グタッ

ザアアアア

ハア・・・ハア・・・

意識・・・が・・・

・・・

風邪・・・ひいたか・・・？

・・・

ハッ！

男「大丈夫か？」

優菜「・・・あんた誰？殺す気は無いみたいだけど」

やべえ寝かけてた

士道「俺は士道、五河士道だ。君は？名前はあある？」

優菜「（名前はあある？ってどういう質問だよ）・・・中村優菜だよ、ここはどういう世

界で何が俺に起こってるのか。お前にはわかるんだろ？そういう質問の仕方だ」

士道「・・・ならまず、移動して方が良いと思うんだが・・・いいか？」

優菜「アイツらが來たら面倒だからな」

色々教えてもらった

士道「という訳だ」

優菜「ほうほう、それじゃあ俺はその精霊というやつか（とうとう人間ですらなくなつ

たんですけど!?)」

士道「ところで一つ聞いていいか？」

優菜「なら俺も聞きたいことがあるんだが」

士道「そつちからでいいよ」

優菜「その右耳につけてるのはなんだ？」

士道「!?」

優菜「通信機か？補聴器か？まあ必要な物なら構わないんだが、何か変な事をすれば・・・分かってるな？」

士道「・・・はい、インカムって言って通信機です・・・」

優菜「それじゃあ、用件を聞こうか」

士道「えーつとですね、なんで一人称が俺なんでしょうか？」

優菜「・・・敬語じゃなくてもいいんだが・・・まあ理由は俺が男だからだ」

士道「え？」

どこか遠いところ『え？』

なんか聞こえたぞ？

士道「とつとところでよ、一つ頼みがあるんだ」

優菜「死んでくれ以外なら出来る限りやろう」

士道「俺と……デートしてくれないか!？」

……

優菜「ふあ!？」

士道「ふあ?」

優菜「お前、俺が男と知ってて言ってるのか?」

士道「あ、ああ……」

優菜「お前、すげえ震えてない?」

士道「な、何が……?」

優菜「いきなり、デートねえ……俺の頭の中には今三つの意味が思いついてる」

士道「三つ?」

優菜「一つ目は単純なバカ、二つ目は動揺を誘って不意を突いて殺すか、三つ目は俺を揺さぶって出来た隙に逃げるか」

士道「……そのどれでもないよ」

優菜「……ちよつと待て」

スペクテツドを出す

士道「な、なんだそれ……」

優菜「……こつち向いて質問にだけ心の中で答えろ、口に出さなくていい。さつき

の意味は何番だ？」

士道『俺は君を救いたいんだ……!!』

優菜「……救うって何？」

士道「……俺には、」

士道「ああ……キスしたら、俺の中に精霊の力が入って精霊は普通の人間になる……って俺の妹が言っていた」

優菜「妹が？」

士道「ああ、俺の妹はフラクシナスってところで指揮官をやってるんだ。知ったのは最近だけだよ」

優菜「ふーん……お前は家族が好きなのか？」

士道「……まあ、人並みにね」

優菜「……俺は、昔と今じゃ親が違うんだ」

士道「今と昔？」

優菜「今は周りに良い人ばかりで、幸福だったんだけどな。訳の分からない事態ばかり起こって、今はちよつと疲れてる」

士道「それじゃあ、昔は？」

士道がそう問うと、優菜の顔に悪役の触れちゃいけない部分に触れた時のように闇が射した

インカム『ちよつと士道！感情値が低くなってるわよ!!』

優菜「アンタが妹さん？ちよつと黙つてて、次強引に喋ってきたらお兄ちゃん殺すよ」すると、インカムから声がしなくなった

士道「み、耳いいんだな」

優菜「昔はクソババアに、呼ばれてすぐ来なかったら暴力ふられたから、すぐ行けるように耳を澄ませてる間に良くなっちゃったんだ」

優菜の顔から闇が晴れ、ようやく顔が見えたと思うと、優菜は悲しそうな顔をしていった

士道「・・・なんというか、ごめん」

優菜「いや、いいよ。俺も悪かった。さっきの発言は取り消すよ」

優菜は体操座りをし、顔を伏せた

優菜「・・・昔はほとんど一人だった。友達は一人いたけど、高校からは学校が別になって、ちよつとずつ疎遠になって・・・、俺は事故で死んじまった」

士道「死んだ!?!」

優菜「で、二度目の人生は打って変わって幸せだった。そのうち、色んな厄介事に巻

き込まれて流れ着いた先がここだ。しかも、精霊何て訳の分からないものになってるし……連れ添って来てたやつはいないし……」

優菜の目から少しづつ涙が出てくる、土道は話題を変えようと考えたすると、スペクテッドが目に入った

土道「そ、それ、心が読めるんだろ？俺にも付けたらできるのか」

優菜「グズツ……やめた方が良くよ、合わなかつたら血がブシャー——つて出るよ。気になるなら外そうか？」

スペクテッドを外し、カオスの空間にしまった

優菜「……封印するっていうのは、精霊の力だけ？それ以外は封印されないの？」

土道「……多分な」

優菜「そう……でも、俺までファーストキス誰にも渡してないから絶対嫌だからね」

土道「……やつばそうだよなー。そうそう渡せるもんじやないよなー……」
すると、またさつききの邪魔者が来た

攻撃を防ぎ、こう言い放った

優菜「お前らしつこいぞ!!」

しかし、背中に刺されたような痛みが走った

優菜『土道は絶対違う。こいつはそんな奴じやない。そう言う奴だつたらさつき見た

時に奇襲を考えてるはず……』

後ろを見ると、白髪の女が自分を刺していた

白髪の女「大丈夫!? 士道君……!!」

士道「折紙!!」

折紙という女は士道に駆け寄った

優菜「へえ、あんた折紙って言うのか」

刃を抜き、アリエルに速攻で治してもらった・

優菜「ここでおっぱじめるのはやめようや、周りに被害が出るし、何よりあんたの好きな士道君が死ぬよ?」

折紙「っ!!」

高速移動で空に行き、論そうとした

優菜「さて、これからあんたにはたくさん道があるが」

だが、折紙はすぐに撃ってきた。だが、当然のように避け折紙の目の前へ

折紙「私は話す気は無い」

優菜「おーおー……こっちはやめてほしいけどね!」

銃をこちらに向かつて乱射されるが

優菜「クロノス、ギガントマキア」

クロノスに全弾破壊してもらおう

優菜「・・・そっちがその気なら、いつその事この街全部ぶっ壊そうか!？」

折紙「させない!」

折紙が近づいて斬りかかってきたが、波紋と念のために超サイヤ人2になり、指一本で受け止めた

優菜「超サイヤ人2でも十分だったか?波紋までしなくてもよかったな」

折紙「クッ!」

折紙が何度も斬りかかってくるが、すべて指一本で止める

優菜「それで終わりか?」

折紙「ま・・・だあああああ!!!」

優菜「アウラ、万物流転」

折紙に向かって突風を起こし、方向感覚を狂わせた

折紙「キヤアアア!!!」

折紙は地面に落ちていく

士道「おい!やめてくれ!!」

士道がそう言ったので、地面すれすれに突風を起こし、ゆっくり降りた

優菜は、士道の前にゆっくり降りた

優菜「相手がかかってきた、ら全力やるのが筋だろう」

士道「俺はそんなの認めないぞ!!」

優菜「じゃあ、お前には何が出来る？俺が今まで会った奴らはみんなそれなり……いや俺より強いやつだっっていた」

士道「俺は……お前を助けたいんだ!!」

優菜「助ける……？俺を？笑えない冗談だな」

士道「冗談じゃない」

士道の眼は、まっすぐ優菜の眼を見ていた

優菜「……ふーん、まあそれが本当ならこつちからしたら願ったり叶ったりだな」

士道「だろ!?!ならおれと一緒に」

優菜「でも俺は最悪元の世界に帰れたらいいからな」

優菜「でもごめんな、そろそろ行かねえと」

士道「え？」

優菜「時間切れらしい」

ぐわーん

また数時間後

ぐわーん

ハッ!

寝てた・・・

ってあれ?

俺がいる?

俺? 「あ? どうかしたか優菜」

優菜 「なんだ優斗か」

優斗 「そりやそうだろ」

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!

優菜 「な・・・んだ・・・これ!!」

頭が・・・

!!

コオオオオ

ボコオ

ハア・・・ハア・・・

優菜 「何だ今の、咄嗟に洗脳やら催眠みたいなのが頭をよぎったから顔面を波紋で

殴ったんだが・・・大丈夫か?」

優斗「・・・お姉様・・・美九様」

コオオオオ

ボコオ

優斗「グホツ・・・ハツ！俺は何を・・・」

優菜「今お前が出てきた理由は分からんが・・・とりあえず」

ボコオ

優斗「ガハツ!？」

優菜「肺の空気を全部出せ」

出し切って

優菜「お前の呼吸法を変えた、これで波紋が使えるぞ」

洗脳されるんなら波紋使える様にした方が良いよな

優斗「ホントか!？」

コオオオ

優斗「おりやああ!!」

ペチツ

バリバリバリ

優菜「使える様になってすぐでこれはすげえな」

優斗「ホントか!？」

優菜「とりあえず、さっきの音が聞こえた方に行こうか」

ギューン

優菜「・・・いつまでも飛べないんじや締まらないな、今度教えてやろうか？」

優斗「そのうちな」

ドギューン

何これ交戦中？

とりあえずあの建物から音がしたのかな？

女「なんだ貴様は・・・!?!精霊!？」

優菜「優斗! さっさと入るぞ!!」

ベジツトソードを入れて、てこの原理で開ける

入ると

?なにこのライブ感

水色の髪の女「誰ですか貴方達は!!」

優菜「こっちのセリフなんだけどな」

優斗「とりあえず、やっていいか?」

優菜「ダメに決まってるだろ」

青髪の女「お前達は操られていないのか!？」

この気は・・・

優菜「お前は確か土道だな」

土道「え？分かるの？」

紫色の髪の女「知り合いか!？」

優菜「分かる」

土道「でも早く逃げてくれ！お前達まで操られるぞ!!」

優斗「ところでよ、あいつが美九？」

土道「え？そうだけど・・・」

優斗「なら、アイツ倒した方が早いじゃん」

ギューン

優菜「あのバカ!!」

ギューン

パキイン

フードを被った女の子「・・・お姉・・・さまを傷つけるの・・・は許さない・・・」

優斗「イフリート！インフェルノ!!」

ゴオオオオオ

ジユウウウウ

士道「やめてくれ四糸乃!!」

優菜「他のやつの名前は!?!」

士道「え?」

優菜「早く!!」

十香「私は十香でオレンジ色の二人が夕弦と耶? 矢だ! ちなみにあのデカイやつはよしのんだ!」

優斗「うおおおお!!」

優菜「お前は一旦やめんかい!!」

耶? 矢「はああああああ!!」

ドウン

ヒューヒューヒュー

ガキイイン

武器を払って

ゴッ

デコピン

ギューン

ドゴオオオオ

後ろから夕弦が来るが武器を掴んで引っ張って
耶？矢「ぐっ・・・はああ
!!!!」

ドーン

ビュン

夕弦「なっ!？」

ドゴオ

ぶつかって落ちていく

ドゴオ

四糸乃「みんな・・・!」

優斗「よそ見してんじゃねえよ」

ブワッ

ヒュルヒュルヒュル

バシユーン

ゴオオオオ

ドゴオオオオ

よしのんが防ぐ

よしのん『君もお姉さまに酷いことするの?』

優斗「邪魔、燃えろ」

ボツ

よしのん『なっ?!?放せ!!燃えてる!!燃え尽きちやう!!!』

優菜「やめい」

ドカッ

ヒューン

優斗「何すんだお前!!」

よしのん『あれ?仲間割れ?なら・・・』

シュッ

殴ろうとしてきたけど

ガシッ

掴んで

優菜「ちよつと黙れ」

引っ張って

気弾ごと落とす

ドオオオオオン

ドカッ

四糸乃も落とす

士道「やめてくれ!!」

優菜「動けなくしてただけだ、ケガも治す術はあるし命に別状はないと思う。もし死んでも生き返らせてやるよ」

インカムから何か流れてるらしいが・・・

士道「こ、とり・・・?」

優菜「どうした?この前の通信相手もやられたのか?」

士道「なんだよこれ・・・!」

優菜「ホントにどうした?」

士道「よくわかんねえけど・・・何かがここに放たれるみたいな」

優菜「ビームみたいなヤツ?」

士道「多分・・・」

優菜「この皆を助けたいんだな?」

士道「ああ、でもどうすれば・・・」

優菜「お前達は逃げろ、後は俺達がやる」

士道「でも・・・」

優菜「お前らがここにいたら全力でやれねえ、お前になにかできるのか？」

士道「うっ・・・」

十香「何もできなくはないぞ!!？」

優菜「まあいい、優斗！一回出るぞ!!」

優斗「でも・・・」

優菜「出るぞ？（#^ω^）」

優斗「分かったよ・・・」

ギューン

優菜「あいつら全員相手に出来るほど強くはねえんだろ？ならさっさと逃げて体制を立て直してこい、助けたいんだろ？あんな事になっても」

士道「・・・！ああ!!」

外に出ると

なくんか光ってんな

優菜「よし、フュージョンをやるるか」

優斗「フュージョン？」

優菜「あれはたぶん普通に受けたら死ぬ、合体だよ合体」

優斗「なら急いだほうがよくね？」

速攻教えた

どこで覚えたのかつて？

皆もよくやってただろ？ 小学校の時に

優菜「幸い、神様が同じレベルまでお前を強くしてくれてる」

シユン

神様「それだけじゃないぞ」

優菜「言いたいことは色々あるけど、無視するからな」

神様「優菜が強くなるたびに優斗も同じレベルになるからな」

優斗「チートじゃないすか」

優菜「ていうか、呼んでも來ないくせにいらぬときに出ないで下さいよ」

神様「それだけ言いに来た」

シユン

優菜「とりあえず、やるぞ」

二メートルぐらい開けて

優菜&優斗「フュー・・・ジョン！はっ!!」

ピカーッ

ギューン

ドカーン

身体は女だが元に戻ったことだな

まつ、戻っただけだから名前は優斗だな

優斗「さーてと、いっちょやるか」

ていうかよく一発本番で成功したな

その頃琴里たちは

ポチッ

ドギューン

琴里「お姉さまに齒向かうものは全員始末してあげるわ」

ドガッ

琴里「ヒグッ・・・」

青髪の女の子「くそっ！少し間に合わなかった!!」

戻って

A S T 隊員 1 「なんだあれは!？」

A S T 隊員 2 「なんか強そう・・・」

A S T 隊員 3 「向こうからも何か来るぞ!!」

ドオオオン

その頃令音たちは

令音「いや、大丈夫かもしれない……あそこに誰かいるぞ……！精霊か？」

青髪の女の子「一人じゃ無理ですよ!!」

令音「いや……何か見覚えがあるな……確かあれは……」

戻って

A S T 隊員「くっ、一旦退け！」

一人だけ残る

優斗「ん？ああお前は白髪の！折紙だっけか？」

折紙「貴方に覚えはないわ」

優斗「中に人がたくさんいるが、士道も一緒にいるぜ？」

折紙「それは本当!？」

優斗「マジマジ」

ギューン

優斗「さてと、さっさとやりましょうか」

ドゴゴゴ

ダウン

バチバチバチ

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシューーン

全力だ

ドギューン

ドカーン

両手で地面に方向をそらす

ドドドドドドドド

シューウウウウウ

優斗「ふうっ」

ドンツ

え？

後ろから押された？

A S T 隊員？「おつとすみませんね」

優斗「いい!? 落ちる！落ちる落ちる落ちる!!」

ひゅうううううう

ドンツ

着地イイイ

シューウウウウウ

変身が解ける

んん？ さっきの奴が持つてるのって・・・

十香!?

追いかけてよ・・・うっ!?

ポンッ

優菜「つと・・・フュージョンが切れたか」

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

優菜「ウグッ!?! 波紋の呼吸をしろ!」

コオオオオオ

優斗「わかった!」

コオオオオオ

オオオオオオオオオ・・・

優菜「大丈夫か?」

優斗「一応な」

優菜「でも今ので逃げられたな・・・十香・・・」

一時間後

優菜「すっかり夜だな」

優斗「何がどうなってるんだか、あそこから人が出てきたと思っただらゾンビみたいだったな。この周りを徘徊しやがって」

優菜「多分土道を探してるんだろうな」

優斗「なら土道を探してみるか、わかるだろ？」

あのビルか

シユン

優斗「ちよ！俺それ出来ないんだけど!?!」

優菜「すまん、これなら見られにくいと思っただが」

優斗「俺は高速移動できねえから!!」

優菜「ならあれだ、俺に捕まってる」

魔法で隠れる

フニツ

むっ・・・

優菜「どこ触ってるんだ！」ボソッ

優斗「わざとじゃねえ」ボソッ

まあついた

廃ビル

優菜「この下だ」

ビツ

穴開けて

入るとゴスロリの女と士道がいた

優菜「お取込み中だった？」

ゴスロリ「いえ、大丈夫ですよ」

士道「お前は大丈夫なのか？」

優斗「どういう状況だ？」

上から覗く

優菜「お前は降りて来い」

士道「そっちは初めてだな？俺は五河士道だ」

優斗「俺は中村優斗だ」

スタツ

ゴスロリ「今休戦協定の相談に来ていたんですよ」

優菜「何？お前ら敵同士なの？」

士道「まあ・・・仲間じゃねえけど」

ゴスロリ「ですが私も、士道さんの力は買ってるんですよ？わたくしが何人、人を殺そうとも『助けてやる！』と言える度胸があるのですから。あなたもそのつもりでしょう？」

優菜「何でもお見通しってわけ？」

あいつの元仲間の精霊たち攻撃したとき『やめてくれ!!』って言ってたしな、自分も攻撃されてたように見えたけど

ゴスロリ「あら？この状況ではそう考えるのが自然ではなくって？」

優菜「こいつ何か好きになれねえ」

士道「それは分かる」

ゴスロリ「白状をすれば、わたくしも別口でDEMインダストリーに用事がございませぬ。手を貸す代わりに、わたくしも士道さんたちを囷として利用させていただきますわ。ギブアンドテイクでしょ」

優斗「用事・・・？」

ゴスロリ「ええ、とある方をお探ししておりますの」

士道「とある方？一体誰だ？」

ゴスロリ「それは、秘密ですわ」

優菜「ていうか『士道さんたち』ってことは俺たちも困か!？」

ゴスロリ「そうですね、通りかかった船。というヤツですわ」

優菜「腑に落ちねえええええ」

士道「…分かった、信じるよ。頼む、俺に手を貸してくれ、狂三、優菜、優斗…！」

狂三が優雅にスカートの裾をつまみ上げ、膝を屈んで

狂三「ええ…喜んで」

優菜「てかお前狂三って言ったのか」

狂三「そういえば貴方達には言っていないませんでしたわね」

優斗「ならまずどうする？俺は速攻で連れ去りに行ってもいいけど」

狂三「論外ですわね」

優斗「論外…!？」

優菜「ようし、こいつは俺が抑えとくから喋っていいぞ」

狂三「ですが悠長に構えてる暇はありませんわ。急かねばことは、し損じる前に終わりますよ」

士道「ああ…俺は何をすればいいんだ？十日を助ける為なら何でもやってやる」

狂三「ああ、ああ、いいですわね、十香さんは。こんなにも士道さんい思っていただ

けて。うふふ、嫉妬してしまいますわ」

士道「か、からかうんじゃないよ」

狂三「からかつてなどいけませんわ。でも残念ながら、そちらはまだ動けませんの。今『わたくしたち』がと岡さんの居場所を確認してる最中ですよ。もう少しだけお時間をいただけませんか?」

わたくしたち?

士道「・・・準備のいいことだな」

狂三「うふふ、だって、士道さんがこのお話を断るはずがございせんもの」

士道「ぐ・・・」

???「わけがわからないよ」

今何かいた?・・・気のせいかな

士道「で、でもそれじゃ動きようがないじゃないか」

狂三「そんなことありませんわ。十香さんを助けに向かう前に、手を打っておかねばならない方々がいるではありませんの」

優斗「あの他の精霊従えた女だな?美九つつたか?」

狂三「ええ、確かそんなお名前でしたわね、あのお歌の上手な方は」

クスッ

士道「・・・なんだよ」

狂三「いえ、今日のステージを思い出しまして。うふふ、似合っていましたわよ、士道さん。いえ、士織さん、でしたかしら？」

士道「・・・うぐ」

コイツ敵じゃなくてホント良かったって思った

狂三「そういえば、あなた方もすごかったですね。フラクシナスの最大出力の攻撃を合体して思いつきり当たっても全くこたえてなかったじゃないですか」

士道「え？お前から合体出来んの？見てなかったんだけど」

優菜「出来る」

狂三「さて、話を戻しますと。まあ、理由はどうあれ、美九さんは士道さんを血眼になつて追いかけている。しかも何万という人間と、精霊三人までもその軍門に従えて・・・間違いありませんわね？」

士道「・・・ああ、間違いない」

狂三「ふむ・・・それではやはり、そちらから片付けてしましましょう。彼女は着々と支配領域を広げていますわ。このままでは、と岡さんを助けに行くのを邪魔される可能性すらありますよ。士道さんたちが彼女に捕まってしまうては、わたくしも少々困りますし」

士道「片付けるって・・・簡単に言うけどよ」

狂三「事実、そう難しい話ではありませんわ。見たところ、あの方は実戦向きの力を持っているわけではなさそうですし」

士道「そうは言っても、美九には人を操るあの『声』と天使があるじゃないか」

狂三「問題ありませんわ。わたくし、あのような演奏に心揺らされるほど純真ではございませんし。わたくしの任せていただければ華麗に殺ってみせますわよ？」

士道「だ、駄目だそんなこと！」

狂三「うふふ、冗談ですわよ。優しい士道さんがそんな解決を望んでおられないことくらい承知しておりますわ。こんなわたくしでさえ救おうとした酔狂なお方ですもの。わたくしより、貴方の方が心配なのですけど・・・」

優菜「ん？俺達は大丈夫だ、効かなくする術はある」

狂三「そうですね。でも、その手段が取れないとすると少々骨ですわよ。この短時間で説き伏せるのは不可能としても、最低限、十香さんを救い出すまでの間、こちらに手を出さないという約束をさせるくらいはしておきませんか？」

士道「約束・・・か」

あいつのあの反応じゃ厳しいよな

士道「でも、一体どうやって交渉するんだよ」

「狂三「もしも美九さんと士道さんを二人きりにすることができたら……どうですか？」」

士道「え？そりゃあ、そんな事が出来たら……いや……難しいだろう。お前も見てもたかもしれないけど、まともに話を通じる相手じゃないんだ。特に俺は今最悪レベルで嫌われてるし……それに何より、人を操る『声』を生まれ持つちまった精霊だからか、人間に対する価値観が異質なんだ」

ピクツ

士道「どうかしたのか、狂三」

狂三「……それは、どうですかしらねえ」

士道「え……？」

狂三「うまく説明できませんけれど、本当にあの方の価値観は、先天的なものなのでしょうか」

士道「どういうことだ……？」

優菜「俺たちみたいに元人間って言いたいのか？」

狂三「情報が少なすぎますわね……士道さん。何か美九さんの持ち物が手に入りますんこと？」

士道「美九の……私物？なんでまたそんなものを」

狂三「わたくしの予想が正しければ、彼女の泣き所を抑えられるかもしれませんわ」

士道「なんだって・・・!?というかスルーしかけたけどお前ら元々人間なの!?」

優斗「精霊になっても別にあんま変わってないけどな」

優菜「私物が欲しいなら家に行けばいいだろ、今あの歌うたつてたところにいるんだろ？」

気はそこから動いてないように感じるが

士道「美九の家なら行つたぞ」

狂三「そうなんですの、士織さん？」

士道「それはもうやめてくれ・・・」

優菜「後、こいつと姿似てるから俺呼びから私呼びにしとくわ」

士道「突然だな」

優菜「今のうちに言つとこうと思つて、それに私歴のが長いし

美九の屋敷前

優斗「チツ、今ならここら一带吹き飛ばせるのに・・・」

優菜「やめろよ？」

狂三「ここ・・・ですの？」

士道「ああ、間違いない」

もう真つ暗とか言つてたけどもう21時なんか

狂三「さ、では早速調べましょう」

優菜「なら俺が開ける」

ミニベジツトソードを出す（人差し指だけ）

ピンツ

ゴトツ

錠前が落ちる

狂三「便利ですわね、今度教えていただけでしようか？」

優菜「確実に出来る様になるとは言わんぞ」

士道「ちよつと待つてくれよ、狂三」

狂三「どうかしましたか？士道さん」

士道「こんな静かな住宅街で銃声なんて響かせたら警察呼ばれるかもしれないから、

銃は使わないでくれよ？」

狂三「警察の方々は今、大暴動の対応に追われて大変なのではございませんこと？そ

れに、優菜さんが代わりをやっていただければわたくしもやらないですみますわ」

優斗「調べるなら早いに越したことはないんだろ？ならさっさと入るぞ」

入ると

士道「ええと、多分この辺に……」
カチツ

シャンデリア型の電灯が光って周りが見えるようになった

狂三「さ、それで、どこを調べますの？」

士道「ん……そうだな……一回の応接室には大したものはない。何かあるとすれば美九の寝室とか……かな」

狂三「そうですね、では参りましょう」

士道「ああ」

二階に上がって

優菜「あれかな？『BEDROOM』って書いてるし」

ガチャ

優斗「うわっ……すげえでけえベッドにクローゼット、戸棚があつて加えてテレビまであんのかよ……」

士道「こりやまた……凄いな……お邪魔します」

そこら中を探し回る

狂三「士道さん、士道さん。見てくださいまし」

士道「どうした？何か見つけたのか？」

狂三「ええ、凄いものがありましたわ」

クローゼットの引き出しを指さし

士道が移動し

ピタッ

士道「んな・・・っ」

狂三「ほら、見てくださいます。すごいサイズですわよ。私の顔が入ってしまいそうですわ」

ブラジャー・・・!!

狂三が一つ摘まみ上げて両手で広げる

士道「な、何やってんだよおまえ・・・今はそんな場合じゃないだろ」

狂三「うふふ、士道さんは真面目ですのねえ。少しは肩の力を抜かないといけませんわよ」

士道「・・・う」

狂三「ほら、士道さんも着けてみませんか?」

士道「は・・・はあっ!? な、何で俺が・・・」

狂三「ああ、これは失礼しましたわ。士織さんも、いかがでして」

士道「・・・ぐ」

狂三「ステージに立っていらっしやったのは見ていましたけれど、近くで土織さんを見る機会はありませんでしたの。一度じっくり拝見してみたいのですけれど」

士道「じ、冗談抜かせ。もう御免だつての・・・！」

狂三「なぜそこまで嫌がるのかわかりませんわ。別に減るものでもないでしょう？」

士道「減る！確実に！時間と俺の尊厳が！」

狂三「そうつれないことを仰らないでくださいまし。少しの間でいいんですのよ？一度、可愛い可愛い土織さんの顔が、恥辱に震えるところを見せていただければ・・・」

士道「何するつもり!?土織ちゃんに変なことしないで！」

狂三「よいではありませんの。よいではありませんの」

狂三が絨毯に躓いて

狂三「あら」

士道「う、うわっ！」

優斗「イフリート」

ガシッ

イフリート「大丈夫か？」

士道「あ、ああ助かった。狂三は大丈夫か？」

狂三「ええ。問題ありませんわ。士道さんが助けてくださいましたし」

優斗「ん？なんで周りが白黒に？」

優菜「どうかしたか？」

優斗「いや・・・なんか周りが白黒になったんだ」

優菜「目の病氣じゃねえよな？」

優斗「いや、なんかあそこだけ青いな。いやよく見たら黄色いのもあるな」

白黒、青に黄色・・・もしかして・・・？

優斗「その棚の上のやつイフリート取って」

持つて降りてくると

優菜「缶？クツキーとかが入ってそうな缶だな」

士道が開けると

優菜「CDか。しかも全部美九が印刷されてるな」

士道「こんなに曲出したのか・・・って、あれ？『宵待月乃』？何だこの名前」

物語？が進んだ・・・間違いねえサードアイだ

士道「どういことだ・・・？」

狂三「どうかしましたの？」

士道「ん、ああ・・・」

ケースからCDを取り出してオーディオコンポが都合よく？あったから流してみた

狂三「あらあら、可愛らしい曲ですわね」

士道「美九の声……だよな？」

優菜「なんか若いな……声が」

優斗「でも俺はこっちの方が好きだな」

優菜「一枚貰つとくか？」

士道「盗みだからな？それ」

優菜「なら今の俺達は不法侵入だよ」

士道「う……あれ？これは……写真……？……え？」

優菜「なんだその写真……!？」

それはありふれた家族写真だった

真ん中に子供がいて、両親らしき人が両脇にいる

そう、皆も見たことがあるだろう。そんなありふれた写真だった

だが

ありふれているからこそおかしいんだ

士道「まさか……これは……でも、もしそうなら、なんで……」

スツと狂三が写真を取る

狂三「面白そうなものがありましたわね。少し、お借りしますわ」

CDと写真を重ねて

狂三「へ刻々帝」（ザフキエル）・・・【10の弾】（ユツド）」

CDと写真を後頭部に当てて、それに向かって銃を撃つ

は!?

士道「く、狂三!？」

優斗「何してんだよ!」

ユツド

狂三「うふふ、大丈夫ですわよ。【10の弾】の力は回顧。打ち抜いた対象が有する過去の記憶を、わたくしに伝えてくれる弾ですわ」

士道「過去の・・・記憶?」

狂三「なるほど・・・そういうことでしたの。断片的にですけれど、彼女に覚えていた違和感の正体がわかりましたわ」

士道「な、何かわかったのか!？」

狂三「ええ。どうやら美九さんは・・・」

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

士道「な、警報・・・!?これは・・・美九の・・・!」

優菜「優斗!分かつてるな!？」

優斗「ああ！」

コオオオオ

狂三「あらあら、随分と派手にやってくれますわねえ」

優菜「面倒な事をしやがるな、これでまた敵が増えたのか」

狂三「仕方ありませんわね。お話は道中するといたしましょう。あくまでわたくしはお手伝いをするだけ、場所は如何様にでも整えましょう。でも、引き金を引くのは士道さんですわ」

士道「え・・・？」

士道が何かに気づいて

士道「手を貸してくれ、皆・・・あの駄々っ子と、話をしに行く」

狂三「喜んで」

優斗「俺はあいつに借りを返す」

優菜「私は士道に借り作って何かさせてやるわ」

士道「出来る範囲で頼む・・・」

歌うたつてた場所・・・天宮スクエアって言うらしい

そこの近くに来たんだが・・・

士道「さすがに本拠地はすげえ人数だな・・・」

優菜「報道のへりまで操られてるな」

優斗「下はまるでがっこうぐらし！の世界のゾンビみたいに徘徊しまくってるから、さすがに無理だつて俺でもわかる」

士道「ここまでは来れたけど・・・さあ、ここからどうするか。正門がこの調子じゃあ、他の入口もガチガチに固められてるだろうし、天井をぶち抜いて中に入ろうにもへの監視があるしな・・・」

狂三「何を仰っていますの、士道さん。そんなの、考えるまでもないではありませんの」

士道「何か方法があるのか？」

狂三「ええ、もちろんですわ。きちんと士道さんを美九さんのもとにお送りして見せますわよ・・・まあもちろん、その後は士道さんの手管次第となりますけれど」

士道「・・・本当にそんな事が出来るのか？」

狂三「あら、信じてくださりませんか？悲しいですわ、泣いてしまいますわ」

士道「お、おおい・・・」

狂三「士道さんが眼球を片方くれるか、生き血を啜らせてくれるか、頭をよしよししてくれるかしないと涙が止まりませんわ」

士道「・・・よしよし」

優斗「お前ら付き合ってるのか？」

優菜「いや、今の選択肢はあってない奴だぞ。あれだよ、世界を救ってくれって言われてからN o っって言ってもそう言わずにつてくるやつだよ」

狂三「さ、では参りませうか。これ以上時間を無駄にしても、状況は悪くなる一方ですし」

士道「・・・でも、一体どうするんだ？監視の目がこんなにあつちや・・・」

狂三「きひひひ、ひひ。簡単ですわよオ」

士道を抱えて

士道「え・・・？」

狂三「さあさ、参りませう」

優斗「え？降りるの？」

優菜「この高さなら別に問題ないだろ、まあ一応風の魔法やつとくか」

ブワッ

士道「え？え？え？」

優菜「よしっ行くぞ！」

シユタッ

士道「う、うわあああああーッ!？」

スウウウウウ

狂三「あらあら、士道さんたら。大きなお声ですわね」

士道「い、いいから、下ろしてくれ……！」

狂三「うふふ、別にわたくしはこのままでも構わないのですけれど」
下ろすと

カッ

優菜「サーチライトか、怪盗やってるとたまにあたるんだよな」

士道「それは怪盗としてはダメじゃないか？ていうか怪盗なのか」

優斗「とうかこうなつたのもお前のせいだけだな」

士道「う……心の準備をさせてほしかった……」

優菜「さてと、乱暴には出来ねえな。死んじまうから」

何を隠そう

敵はもうすでに数万レベルまで増えていた

シャドウなら一掃できるのにな

狂三「まあ、敢えて大声を上げて自分の存在を示すだなんて、さすがですわね」

士道「誰のせいだ、誰の……っ！」

どんどん人が集まってくる

美九「わざわざ私のお城に戻ってくるだなんて、随分と余裕があるんですねー。士織さん……いえ、五河士道……ッ」

スピーカーから流れてくる

士道「美九……！」

美九「一体何のつもりかは知りませんが、こうなつた以上はもう逃げられませんよー？さ、皆さん、捕まえちゃってください。少しなら痛めつけてもいいですけど、できるだけ丁寧に扱ってくださいねえ？……でないと、私がやる分が減っちゃいますしい」
ブツツ

うおおおおおほおおおおおおおおおおーッ!!

士道「う、うわ……っ！」

一斉に襲ってくる

士道「く、狂三！このままじゃヤバい！逃げるぞ！」

優菜「どこに？」

士道「く……！」

ガクン

ドサツ

士道「え……？」

周りに狂三の影が広がり

どんどん倒れていく

ガクッ

俺まで!?

士道「こ、これ、は……」

優斗「何これ」

優菜「うわ……動けねー……」

士道「〈時喰みの城〉……っ!?!」

狂三「きひ、ひひひッ。ご明察。よく覚えていましたわね、士道さん」

優菜「なに……それ」

狂三「私は天使の力を使う時に時間を消費しますの、これを使えば周りの人から時間を貰えますわ」

な……ら……

優菜「クロノス、俺達の時間を守ってくれ……」

スウウウウ

けだるさが消えていく

スッ

狂三「あら？もしかして無効化しましたの？」

優菜「こっちは仲間に時間の神様がいるんでね」

狂三「神様……ですか、やっぱり貴方達は面白いですね」

士道「狂三、お前、こんな危険な……！」

狂三「あらあら、ではあのまま捕まった方が良かったと仰いますの？」

士道「く……加減……しろよ……ッ！」

狂三「ええ、ええ。わかっていますわよ。人数が人数ですから派手に回ってはいけませんけれど、一人あたりからいただいている時間は大したことはありませんわ。今から撰生に努めれば十分お釣りがくるレベルですわよ」

倒れた人の隙間を通っていく

士道「うぐ……」

優斗「お前大丈夫か？」

士道「なんとかな……！」

入口まで付いたつばい

狂三「さ、士道さん」

士道「おう……！」

扉を開ける

中の観客席は女の子でいっぱい

全員狂三のせいであろうくまってる

ステージにはでつかいパイプオルガンを背に美九が立っていて脇に四糸乃達がいた

士道「美九！」

美九「なんですかあ、その声。汚らわしい音声で私の精霊さんたちの鼓膜を汚さないでくれませんかー？ 本当に不愉快な人ですねえ。無価値を通り越して害悪ですねえ。たとえその身が粉となって地に還っても、新たな生命を育むことなくその地に永遠に消えない呪いを振りまくレベルの醜悪さですねえ。ちよつと黙ってくれませんか歩く汚物さあん」

士道「……ぐ」

優菜「今の言葉を引つかからずに言える凄いな活舌……もし、あの言葉の羅列を考えてすぐ言ってるなら文章力もすごいな」

優斗「さすがにそういう状況じゃないよな？」

士道「美九！聞いてくれ！俺は今から十香……あのときさらわれた女の子を助けに行かなきゃならない！だから……」

美九「黙ってくださいって……言ってるでしょおおおうッ！」

空中に光る鍵盤が現れて

美九「〈破軍歌姫〉（ガブリエル）・・・【行進曲】（マーチ）!!」

身が奮い立つみたいいな勇ましい曲が流れてきた

作者「俺の好きなP5Rの曲で例えるならLast Surprise・Life
Will Change・I Believe・Take Overですかね。あそこ
らへんを聞きながら戦うと『勝つぞー!!』つてなりますよね（笑）あれが奮い立つであつ
てるんですかね？」

なんか変なのが頭の中に流れてきたが

流れた瞬間ぐったりしてた女の子たちが立ち上がっていく

士道「こ、これは・・・」

狂三「あら、あら、驚きましたわね。ただの人間がわたくしの影を踏みながら動ける
だなんて」

美九「うふふつ、どうですかあ、凄いでしょう？私の〈破軍歌姫〉（ガブリエル）の力
は、人を心酔させるだけじゃあないんですよ？さあ・・・もう捕まえろだなんて悠長
な事は言いません。私の可愛い女の子達！私の目の前で！その男を殺しちやつてくだ
さいっつ！」

士道「く・・・っ！」

狂三「きびひ、駄ア目、ですわよ。それくらいで勝ち誇ってしまったては、だつて、そ

の少女たちをいくら強化しようど……『わたくし』には敵わないんですもの」
美九「な……!？」

狂三の影から無数の狂三が一気に出てきてどんどん女の子たちを拘束していく

士道「狂三！」

狂三「わかっていますわよ。殺しはしません」

美九「な、なんですかこれはっ！一体何が……！」

取り押さえええな

まあ全員じゃないが

耶？矢「へ颯風騎士」(ラファエル)……【穿つ者】(エル・エレム)！

夕弦「呼応。へ颯風騎士」(ラファエル)……【縛める者】(エル・ナハシユ)

ブオツ

突風が向かってくるが

優斗「アウラ、万物逆転」

ブオオオツ

風同士がぶつかって相殺した

優斗「お前らに用はねえんだよ」

士道「耶？矢、夕弦……！」

耶？矢「また性懲りもなく来おったか！く、面妖な手を使いおって！姉上様に危害を加えようとする者は、たとえ誰であろうと容赦せぬ！煉獄に抱かれたくなくば疾く去ね！」

夕弦「警告、最後通牒です。今すぐ消えてください。これ以上刃向かうようであれば、士道さん、本気であなたを排除せねばなりません」

四糸乃「お、お姉さまには・・・指一本、触れさせません・・・！」

美九「ふ、ふふ・・・そうですよ。私には今、可愛い可愛い精霊さんが三人も付いてるんです・・・！まけるはずがありません！」

「きひひひ、ひひひ」

「ひひひひひひ」

「ああ、ああ」

「確かに精霊さんを」

「相手にするのに」

「天使なしでは」

「少しばかり」

「分が悪いかもしれないわねえ」

*今の全部狂三です

狂三が天使を出して

狂三「さあ、士道さん。準備はよろしいのですの？」

士道「え？準備って……」

狂三「今から美九さんと二人きりにして差し上げますわ。なんとか説得を試みてくださいます。改心させられるのであればよし。それが不可能なのであれば、十香さんの救出を邪魔しない事だけでも約束させてきてくださいまし」

優菜「あいつらは死なない程度に動けなくするから安心して行ってこい」

士道「行けねえよ！」

狂三「（刻々帝）（ザフキエル）……【一の弾】（アレフ）」

銃を握った狂三たちが出てきた

そして影の銃弾を耶？矢たちに撃つ

耶？矢「く……鬱陶しいわ！夕弦！」

夕弦「応答。耶？矢、手を」

二人で空中で周り銃弾を消していく

あれだよ……あの……二人でスケート滑るやつあるやん、あんな感じ……あれっ

て二人で回らんのやったっけ？

あれ？どっちだっけ

まあいいや

耶? 矢「くかかかか! 斯様なものが我ら颯風の御子に効くと思うてか!」

ペルソナで使つてる銃を出す

優菜「アトミックフレア付与」

夕弦「一蹴。このような攻撃、夕弦たちの風の前には豆鉄砲と変わりません」

狂三「では、任せましたわよ、『わたくし』」

ガシツ

士道「え?」

狂三「ええ、承りましたわ、『わたくし』」

アレフが後者の狂三の眉間に突き刺さる

サツ

士道「うわ・・・っ!」

耶? 矢たちの下を通り抜けていく

耶? 矢「な・・・!」

夕弦「旋律。今のは・・・」

スッ

パアン

優菜「これはモデルガンだ、確かにお前らからしたら何もしなくても豆鉄砲だろう……だが、能力によっては」

タアン

耶？矢「な!？」

夕弦「困惑。これは一体……」

ピッ

ドゴオオオオン

優菜「本物よりも強くなる」

四糸乃「……!」

よしのん「わっ!わわっ!」

よしのんが氷の壁を作るが

狂三「きひひひひひッ!」

四糸乃「き、きや……っ!」

よしのん「のわー!なんなのよき君たちはー!」

優斗「イフリート、インフェルノ!」

ゴオオオオオオオ

ジュウウウ

シユンツ

美九「ひ・・・っ」

狂三「・・・ばア」

あれは怒るよ

士道「狂三！危ない！」

狂三「あはア」

美九の足元から別の狂三が出てきて口をふさぐ

美九「む、むぐっ!？」

どんだん狂三が出てきて影に引きずり込んでいく

美九「んぐーっ！むんんんーっ!？」

士道「く、狂三！何してるんだ！話が違うじゃ・・・」

士道もずぶずぶと影に入っていく

士道「な・・・！狂三!？」

どんだん入っていく

士道「く・・・あ・・・っ」

狂三「きひひ、ひひひひ」

入りきった

優菜「影の中で二人きりって訳か」

狂三「よく今のだけでわかりましたわね」

優菜「これでも、学年一位なんですね。それにこれまた仲間に似たようなのがいるから」

狂三「そうなんですか」

優菜「さっそく優斗が一人相手してるから」

優斗「アラメイ、心理の雷連チャン」

ドオオオン

ドオオオン

ドオオオン

夕弦「危険。このままでは当たってしまいます。耶？矢、早く」

優菜「もう一人は私がやる」

狂三「では私は奥の氷の人ですわね」

優菜「そういうことだ」

とその前に・・・

優菜「カオス、この空間の一般人を安全な所に」

影の上からまたカオスの空間が広がる

ズブズブ

優菜「邪魔になるだろうしな」

全員入りきった

狂三「わたくしも一対一の方が集中できますわね」

優菜「一じゃないだろ」

シュン

優菜「誰だろうと容赦しなかつたな？」

耶? 矢「え? ああ! もちろん相手が恋人であろうとな!!」

夕弦「耶? 矢」

優菜「はあ・・・」

耶? 矢「なんだそのため息は!!」

夕弦「耶? 矢?」

優菜「お前はただの人形だ、ただただただ、言われたことをやるだけ。今のお前は言われなきや何もできないただの阿呆だ、お前ごとき本気を出す前に殺せる」

耶? 矢「なんだと!?!」

夕弦「耶? 矢! 先にこつちです!!」

耶? 矢「こいつ倒してから行く!!」

こういうタイプは煽ったらすぐこうなるから

優菜「ならこいよホラホラ」

風の攻撃をしてくるが

シユン

ドカツ

シユン

ゴツ

ドオオオン

優菜「攻撃が単調だな、だから隙が出来るんだよ」

その頃優斗は

優斗「あつらくこれはやらかしたな」

地面に割れ目が入るくらいの勢いで落ちたらしい

だって割れ目にハマってるから

夕弦「無様。ふっ」

優斗「笑うな！」

アラメイ「いや、流石にアウラ出しながら使うのは俺もどうかと思うぞ」

アウラ「ていいうかなんで私出したんですか？」

優斗「いや、こつち来てたから跳ね返そうと思っただが。ブワツと」

アラメイ「だからってなんで範囲技使ってから出すんだよ、極・電撃見切りって言うても必ずよけるってわけじゃねえんだぞ？」

アウラ「それは私も思った、なんで自分の攻撃を自分の弱点に当てるんですか？」

夕弦「同意。訳が分かりません」

優斗「お前らどつちの味方なの!？」

ポウッ

ポウッ?

火が下りてきた

コイツは確か・・・

アラメイ「戻るぞ」

アウラ「え?分かった」

スウウウウ

夕弦「困惑。今度は何ですか？」

我は汝、汝は我

ざっくり言うとかイツバカだから助けただけと言われたので

助けに来ました

優斗「えつと・・・つまり?」

新しいペルソナという事です

優斗「MA☆ZI☆DE?」

MA☆ZI☆DE☆SU

優斗「やったー!!」

この火を掴めばいいんだな？

ガシツ

ブワツ

メーティス「私はメーティス、知恵の女神メーティスです」

優斗「よしっ行くぞメーティス!・・・とりあえずどうやって出ればいい?」

メーティス「タルカジャ」

パアア

メーティス「力を強くしました、それで出れるでしょう」

バキツ

わくおここういうの初めてだわ

攻撃優先だったからな

作者「俺もポ〇〇ンやつてる時は攻撃技しか入れたなかつたなく、最近になって補助効果が大切ってわかつたからなく↑脳筋」

優斗「メーテイス、ヒートライザ」

ペアア

優斗「クロノス、コンセントレイト」

ペアアア

優斗「ウンディーネ、マカラカーン、テトラカーン」

パシン

優斗「ホバル、疾風ガードキル」

パリイン

夕弦が風の攻撃をしてくるが

パリイイン

マカラカーン効果で跳ね返る

ブワツ

ピシユツ

ピシユツ

かまいたちみたいに切り刻まれていく

夕弦「驚嘆。なぜ跳ね返る」

優斗「ほらほら、いまガラ空きだぞ？来ないのか？」

直接殴ってきたけど

パライイン

テトラカーン効果で跳ね返る

ドオオオオン

夕弦「ガハ・・・っ！」

優斗「アラメイ、心理の雷」

ドゴオオオン

ガラガラ

ドゴッ

下に落ちた

優斗「このぐらいで死ぬとは思わねえ、さっさと出て来い」

アウラ「ガツチガチに固めてそれはエグいです」

アラメイ「死んでもるかもしれねえぞ」

メーテイス「大丈夫です、恐らく今はダウン中です。あなた方の世界では今の状況は

moreってやつです」

優菜は

優菜「もう終わりか？」

空中で首を掴んで言う

耶? 矢「ぐ・・・」

手を放そうとするが力は緩まない

優菜「中二病はもう終わりにしろ、作者が「中二病かかった事ないからなんて書けばいいかわかんねー!!!」って叫んでたからな。それに私も意味がたまに分からん」

耶? 矢「な・・・にを・・・言つて」

優菜「こつちのセリフじゃボケエ」

耶? 矢「ボケ・・・言う・・・な」

その状態でもツツコめるのか

優菜「お前の素の状態と喋りたいな」

耶? 矢「何を・・・言つて・・・いる・・・我は・・・これが素」

優菜「それはねえ、絶対にねえ」

スペクテツドを付ける

洞視発動

優菜「お前の素はどつちだ?」

耶? 矢「我は・・・これが・・・素だ」

『威厳を保たないと・・・!』

優菜「威厳ってなんだ？ 私は威厳なんてどうでもいいから、お前はそれでいいのかって」

耶？矢「!?」

優菜「お前はそれでいいの？ なら……もういい」

放して落とそうとすると

耶？矢「お前……だつて……素じゃ……ないだろ……」

優菜「なんだと？」

耶？矢「初めて……会った時……俺と言っていた……のに……今は……私、じゃ

ないか！」

優菜「俺は男だ」

耶？矢「お前は……心は男なのか……？」

優菜「当たり前だ」

耶？矢「なら……どうし……て……私……なんだ？」

優菜「それは……」

耶？矢「お前だ……つて……本当の自分……を……隠してる……」

そんなハズはねえ……

耶？矢「だから……お前に……！ 言われる……筋合いはない!!」

優菜「黙れ……」

？「昔から見た目だけは女々しかった、皆に笑われて自分が初めて周りとの違いが分かった」

周りから子供の声が聞こえる

『お前女みてえだな』

『やーい、やーい！女子が文句言うんじやねえよ!!』

『女子ってぜんぜん食わねえんだろ？だったらそれよこせよ!』

優菜「やめろ……」

優斗？『やめてよ！僕は男だよ!!』

!?

『何言ってるんだよ！どつからどう見ても女だろお前wwwwww』

？「それからその子たちは敵にしか見えなかった……しまいは」

後ろに誰か映る

お母さん？「ホントに……ダメな子だねえ！」

優菜「やめてくれ……」

優斗「やめてよ……お母さん……」

ドカツ

腹を蹴られる

優斗「あが……っ！」

お母さん「産むなら女の子が良かったわ」

!!!

お母さん「あんたなんか、産まなきやよかった」

優斗「ううう……お父さん……」

お父さんと思わしき人は一目見るが、すぐに目を背ける

優斗「そ……んな……」

ドカツ

優斗「う……おえええ……」

？「お前はこう思ったはずだ、俺が女であれば、こんな仕打ちは受けなかつたんじゃないか？いつそのこと死んだ方が……」

優菜「黙れ!!それ以上何も言うな!!」

？「黙らねえよ」

優菜「な……!」

？「認める、お前はずっと前から女になりたいと思つた。違うか？」

優菜「ぐ……」

？「それから、せめて勉強だけは頑張ろうと思つて勉強を始め。少しでも家にいる時間を減らすためにサッカー好きな友達サッカーして気を紛らわせてたなあ。休みの日はいつも友達の家に行つてゲームしてたな、そこでやったゲームが「ペルソナ5」だった・・・他に知つてたゲームや漫画は全部友達のだ。そして勉強は高校の三年でやつとの思いで一位を取つたけど、通知表を貰つた時に金持ちのクラスメイトDQNに破られ、フルボッコだどんにされて学校のトイレで大泣きしたなあ。ええ？高3にまでなつてよお、まあ泣きたい時は泣くに限る。真面目な話、泣いたら涙と一緒にストレスも一緒に出てくから泣きたい時は泣いたほうがガマンするより断然いい。そうだよなあ優斗お・・・おつとすまねえ、今は優菜だったな」

優菜「・・・」

？「その夜は怒られたなあ・・・いや、あれは怒るつてレベルじゃなかったなあ・・・何回吐かされたっけな？次の日は通知表の事を先生に言つたけど取り合つてもらえなかったなあ、所詮あの先公は自分の生徒も守れやしない・・・いや守ろうとしないか。その後トラックに轢かれて、死亡。しかも事故じゃなくてDQNの親がやらせたことだ。何が普通の高校生だ。部活は入つてねえし、頭はいいのに常に暴力を受け続けてきた。結果、努力もなんも水の泡だ」

優菜「・・・」

？「それでもお前は恨みを晴らさなかった。恨みを晴らす利益よりもガマンするほうが利益がある。そう判断したからだ、「我慢すれば高校卒業と一緒に家を出たら忘れてしまえばいい」そう思ってたな。でも我慢した結果がこれだ。だがトラックに轢かれたときこうも思ったはずだ「これでやっとこんな世界から、消えることができる、せいせいした・・・」すると突然目の前が真っ黒になり「死ぬのか・・・さつさとあの世に連れて行つてくれ」そう言つてたな。そして一筋の光が見えたときに、天国かと思つて光の方に進むと突然体が小さくなって、目の前に女の人がいて優斗と名付けられた。ここなら普通に過ごせる、あんな風にもうならずに済むと思つた。その矢先で獅童に家を燃やされた。その時に生まれたのが悠だ、おっと今はそいつが優斗か」

優菜「・・・何を言いたいんだ・・・？」

？「いつまで我慢するんだ？我慢した末に結局死んだじゃねえか、我慢してきたからこそこんな事態になつたんだ。お前は女になるのを我慢しているんだよ、何が悪い。お前は身体は女になつた、じゃあ次はどこが女らしくなるんだ？中身だろうが。自分が自分じゃなくなるのが怖いのか？・・・子供の時密かに女になつた時ように練習してたじゃねえか一人で」

優菜「やめろ！黒歴史だから!!それ黒歴史だから!!!」

？「お前は どうしたいんだ？」

優菜「……せめて中身だけでも男でいてえよ……女らしくなるのは嫌だ」

? 「女らしいってなんだ?」

優菜「そりゃあ……」

? 「『可愛い』か? 『清楚』か? 『ぶりっ子』か? 何も全部女に成れとは言わねえ、だが戻れるかも分からない事に固執してどうする。恐怖してどうする、うろたえてどうする。世の中、男勝りな子が好きな人もいるし、ロリコンだっている」

優菜「……なんかすっごい最初の話から脱線してる気がするんだけど」

? 「それじゃあ、話を戻そうか。お前は男でいたい、であつてるか?」

優菜「ああ」

? 「なら、男でいたいなら、せめて信頼できる奴らには「俺」でいいんじゃないやねえの?」

優菜「!!」

? 「知らない人、信頼できない人、グレーゾーンな人には「私」でいい。というか「私」じゃないと変な目で見られる。だが信頼できる奴なら、「俺」でもいいんじゃないやねえのか?」

優菜「……なんだよ、そんな簡単な事だったのか」

? 「そんな簡単な事にすらお前は恐怖していた、女でいることに恐怖していた。本来信頼できる仲間ですら恐怖感を抱いていた、全て腐った奴らのせいだな。お前はお前

だ、何を恐怖することがある！嘘で作り上げた自分なんかいらないだろ！今被っている偽りの仮面なんか剥ぎ捨てろ！」

優菜「なんか、すげえスッキリしたよ。途中から言ってる意味わからなくなったりしたけど」

？「それでも、出来る限り。簡単に言っただがな、すまんな語彙力無くて」

優菜「助かった、ホント感謝してるよ。それじゃあ、偽りの自分とおさらばしてくる」
ぐわ〜ん

戻ると

耶？矢「どうした？さっきまでの威勢はどうした!?これで終わりか!?やはり我には誰も敵わないのだな!!」

優菜「お前には感謝するよ」

ブワツ

仮面が顔に現れる

優菜「おかげで自分と向き合えた」

耶？矢「!?なんだその仮面は!!」

優斗たちは

アラメイ「優斗、一回ストップしてあれ見てみ」

優斗「ん?・・・!!ペルソナの仮面じゃねえか!!」

夕弦「疑問。なぜ攻撃をやめた?」

優斗「あれ見てみる」

夕弦「質問。なぜあなたの仲間は仮面をつけているのですか?」

優斗「見てたら分かる」

確かに俺は仮面を剥いだが、あいつはまだ剥いでなかったなそういや!

一切書いてないけど狂三たちは

狂三「?あらあら、もしかしてまた増えるのでしょうか・・・わたくしとしても弱い人を食べるより、強い人を食べる方が面白いですわ」

よしのん「なんかヤバそうだよ!」

四糸乃「なにを・・・するつもり・・・?」

優菜に戻る

優菜「はあ・・・確かに私は・・・いや、俺は女だよ。だが女だからなんだってんだ?女だつて強いヤツは強い(例・吉田沙保里)・・・だが、俺は完全に女になるつもりはねえ。俺は俺だ、それで十分だよなあ。お前に恨みはねえ、むしろ感謝したいくらいだ」

耶?矢「貴様は一体何を言ってるんだ!」

優菜「感謝してるからこそ、お前を倒す」

ガッ

仮面を掴む

優菜「ぐっ……！」

痛え……けど！あの時の方が……痛かったぞおおおお!!!

優菜「うおおおお!!!」

ベリベリベリ

パリーン

優菜「カマエル!!」

優菜の周りを大きな天使の羽が包み込み

開くと

後ろに天使の羽が生えた男が立っていた

優菜「へっ、想像よりでけえじゃねえか」

カマエル「さあどうするんだ？使うのには慣れてるんだろ？」

優菜「ならまず……カマエル、ランダムマイザ!!」

ポポポポ……

耶？矢「!!体が……重く……!!」

優菜「一応、デカジャ」

ボボボボボ・・・

耶？矢「ぐっ!!」

優菜「ブレイブザッパー！」

バキイイイン

耶？矢「グアッ!!」

ドサッ

夕弦「耶？矢!!」

シュウツ

アラメイ「しまっ!!」

優斗「いやっ、多分大丈夫だ」

ドサッ

優菜が膝をつく

優菜「やつぱり最初は消費がえぐいな・・・」

スウウウウウ

タツ

優斗「大丈夫か？」

優菜「歩けるかは微妙」

シユッ

ガキイイイン

優斗「イフリート？」

イフリート「誰だ!!」

イフリートは弾丸？を持っている

飛んできた方向を見ると・・・

優菜「!!アイツは!!」

優斗「なんだアイツは・・・」

冗談じゃねえ！あんなやつどうやったら・・・！

メモントスで一回だけあったが、速攻逃げたからあの時は助かったのに（ペルソナ5の世界じゃ結構頻繁にメモントス行ってます、個人で）・・・

優菜「逃げろ!!」

ジャラジャラジャラ

優菜「カオス！仙豆だ急げ!!」

ガリッ

シユタタタタ

優菜「早くこれ食って!!耶？矢にも!!」

夕弦「驚嘆。何をする」

優菜「あいつは、お前らとやってる場合じゃねえ!!マジで全員殺される!!」
食べさせた

ジャラジャラジャラ

来た!!

優菜「休戦だ!!狂三たちも!!こいつはやべえ!!」

狂三「いったいどうしましたの?」

よしのん「いきなり休戦だなんて凶々しいね」

優菜「お前らはアイツの恐ろしさを知らねえからそんなこと言えるんだ!!」

パアン

シユン

優菜「一人一人でやっても勝てねえぞ!!!」

すでにジャラジャラジャラで気づいてる人もいるだろう

ペルソナ名物?狩り取るものだよ!!

普通ならレベル上げまくって、装備Maxのアイテム買いまくって倒す相手だぞ!?!も
しかしたらラスボスより・・・は強くないか・・・

ともかく!!

勝てる気がしねえぜええええ（；ω；；）

もしここに連れてきたヤツ見つけたら全力でしばく

走りながら喋る

優菜「あいつは、普通にやったら勝てねえ!! 状態異常も効かないし、体力も防御力も攻撃力もなんもかんもレベルが違う!! 中二台詞言ってる余裕もねえぞ!!」

耶? 矢「だから私は中二病などではない!!」

優菜「もしかしたら、喋る余裕もねえかも・な!!」

ドカツ

ドロップキックを食らわすが

優菜「やっぱぜんぜん聞いてねえ・・・!」

ブンツ

ギユンツ

うつぷ・・・酔う・・・

バシユーン

コンセントレイト!?

やばい! あれが来る!!

クツソ!!

優菜「へル!!」

メギドラ

ドゴオオオオオン

耶? 矢「なんだあの威力は!!?」

優斗「冗談じゃねえよ、強すぎんだろ」

優菜「食いしぱり・・・! 耐えたぞ!」

ガリツ

ふうふうふう

優菜「今の見てわかっただろ!? お姉さまの為とかじゃなくて、次会う前に死んじゃうぜ!」

狂三「確かにこれは・・・戦ってる場合じゃありませんわね」

優菜「今ここで死ぬか! 休戦してあいつを倒すか!! 選択肢はないだろ!」

ジャキツ

後ろに!!

耶? 矢「【穿つ者】(エル・エレム)!」

夕弦「【縛める者】(エル・ナハシユ)」

ブワツ

狩り取るものが吹っ飛んでいく

耶？矢「今だけだからね!!」

夕弦「呼応。休戦してでも倒すべきと判断しました」

優菜「助かる！四糸乃たちはどうだ!？」

四糸乃「仕方・・・ない・・・」

よしのん「君達と一緒に倒すのは、気に入らないけど仕方ないかな」

優菜「なら皆で少し時間稼いでくれ!!」

シユンツ

優菜「あれやるぞ!!」

優斗「あれか？」

ステージの上に立つ

狂三「わたくしたち！その化け物を少し捕まえてください」

影から何人もの狂三が出てきて動きを止める

優菜「フュー・・・」

優斗「フュー・・・」

パキイイン

よしのん「これでいい？」

バリイイン

氷で固めるがすぐに割られる

優菜「ジョン！」

優斗「ジョン！」

ブオツ

しかしすぐに耶？矢たちの風で吹き飛ばされる

優菜「ハッ！」

優斗「ハッ！」

ピカーツ

グオツ

狩り取るものが一気に近づいてくる

耶？矢「速い!!」

よしのん「一気に行かれちゃったよ!？」

狂三「ですが時間稼ぎは出来たそうですね」

ピカーツ

ギューン

ドカーン

ドンツ

受け止めて

ドカツ

殴り返す

優斗「さあ、show timeだ」

まず

優斗「クロノス、フュージョンの持続時間を止めてくれ」

次は

優斗「メーテイス、ヒートライザ、リベリオン。カマエル、ランダムイザ。クロノス、

チャージ」

仕上げて

ドゴゴゴ

ダウン

バチバチバチ

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシューン

優斗「全員来い!!」

ヒュル

ヒュル

新しく兜つぼいのが付きました

左がメーティスの深緑

右がカマエルの橙

優斗「カオスの力」

グオン

怪盗服を鎧の上に出来る

身体強化魔法発動

コオオオオ

波紋で身体能力強化

短剣を取り出す

優斗「うおおお!!」

ザシュ

ザザザ

優斗「シミラーダガー!!ブレイブザツパー!!!」

ザザザザザザザ

野球ボールくらいの気弾を作る

優斗「アトミックフレア付与」

2 mほど上に投げる

シユン

トンッ

一瞬で大きくなる

ドオオオオオオオオオ

名付けてギガンティックフレア!!

狂三「そこまで強くなれるのですね・・・少し・・・たぎってきましたわ」

優斗「何が!？」

ザクッ

ゲボオ

優斗「なに・・・？」

腹に風穴がぁぁぁぁぁ

優斗「ワンショット・・・キル・・・か」

ドサッ

「狂三「あらあら、今死なれては困るのですけれど・・・」

よしのん「そんなこと言ってる場合じゃないよ!?」

狩り取るものが皆の所に行く前に

パアン

優斗「アリエルのワンショットキルだ」

こつちを向く

まだ死なねえのかよ

優斗「不屈の闘志で復活したが・・・」

ドクン

優斗「ぐ!?!」

膝をつく

ムドオンかハマオンか

だが

優斗「生還トリック・・・!!!」

シユタタタタ

ドドドドドド

悲しみの輪で生きかえられるのは後四回!!

ドドドドドド

ダンッ

あと三回!!

ドドドドドド

ダンッ

あと二回!!

ドドドドドド

ダンッ

あと一回!!

ドドドドドド

ダンッ

これで終わり・・・!!

グラッ

しまっ!!!

バランスが!!

銃を向けられる

だが

狂三「それ以上はさせませんわよ」

影の狂三が出てくる

その内にバランスを立て直し

優斗「すまねえ、もう大丈夫だ!!」

狂三が離れる

優斗「シミラーダガー!!」

シュンツ

離れる

優斗「ハウザーインパクト!!」

ドオオオオオン

優斗「止めだ!!」

虹色の球を作る

優斗「ソウルパニツシャー!!!」

ドゴオオオオン

優斗「気は!!」

・・・ない!

優斗「ふうふううう・・・全部解いてくれ」

ポンツ

ドサツ

ぷしゅうううう

優菜「よっしやー！倒したついでに、昔からの念願のソウルパニツシャーも撃てたぞー！！」

耶？矢「じゃあ、やるか」

夕弦「呼応。やりましょう」

よしのん「チャンスだね〜」

四糸乃「やつちや・・・おう」

優菜「え？ちよ、ちよつと！助けたじゃん！！俺助けたじゃん！！！」

耶？矢「助けてくれたのは感謝してる」

夕弦「呼応。ですが、それとは別です」

よしのん「まあ、相手が弱ってるのに逃がしたりはしないよね〜♪」

四糸乃「ジ・・・エンド・・・」

やだ怖いこの子達！！

狂三「今はそんなことをしてる場合じゃないのではなくて？」

耶？矢「なんだと？」

ドサツ

士道「う、うえ・・・っ」

四糸乃「お、お姉さま・・・！」

耶？矢「姉上様！無事であつたか！」

夕弦「安堵。何よりです」

狂三は士道に駆け寄る

狂三「立てまして？士道さん」

士道「狂三・・・、一体、今のは・・・」

詳しい話は後でしますわ。わたくしの『時間』も無尽蔵ではありませんし、そろそろ退散いたしますわよ」

士道「ちよつと待ってくれ！もう少し・・・」

パキイイン

士道「けほつ、な、何すん・・・！」

氷が襟元までいった

四糸乃「お、お姉さまの敵は・・・許しません・・・っ！」

士道「よ、四糸乃・・・」

狂三「状況が理解できまして？」

銃を取り出す

優斗「おくい、俺達も連れてってくれ〜」

狂三「さすがの私でも、三人同時には無理ですわ」

優菜「つまり？」

狂三「自力で戻ってきてください（刻々帝）（ザフキエル）【一の球】（アレフ）」

飛び去って行った

優菜「うおおおおおおい!!!」

優斗「・・・どうする？」

優菜「もうダメだ・・・おしまいだあ・・・」

耶？矢「・・・敵なのに可哀そうに思えてきたのだが・・・」

夕弦「質問。彼女らも仲間に来れないのですか？」

美九「うくん・・・でもお・・・何回かやったはずなのにできなかったのよねえ」

夕弦「解答。先ほど戦って分かりましたが、彼女たちは『心が』ではなく、防ぐ『術』

の様です。疲弊している今ならできるかもしれません」

やっぱい

美九「そうなの？なら・・・」

ヴオオオオオオオオ

コオオオオ

オオオオオオオオ・・・

俺はギリギリでいけたが・・・

優斗「・・・カオス、仙豆」

ガリツ

美九の所に行く

優斗「お姉さま・・・」

知☆つ☆て☆た

美九「あら、本当にできたわ！ありがとうね！！」

夕弦「感激。ありがたき幸せ」

美九「でも、もう一人は出来なかつたみたいねえ・・・なんでかしら」

耶？矢「疲弊が足りないのかもしれないな」

夕弦「同意。足りないのなら、足すだけです」

優菜「死ぬ！！冗談抜きで！！体力もうないから！ついでに言うど復活スキルも品切れだ

から！！

美九「なら抵抗しないでくれます？」

優菜「・・・嫌だね」

美九「だったら私とこの子（優斗）を置いてさっさとどこかに行つて消えてくれませ
ん？」

優菜「・・・そうやったら、助けてくれるのか？」

美九「ええ、約束しますわ」

優菜「そうかそうか・・・」

美九「ええ」

優菜「だが断る」

耶？矢「なんだと!？」

優菜「この中村優菜の最も好きな事は、自分で強いと思つてるやつに！NOと断つて

やることだ!!」

耶？矢「姉上様の誘いを断るなんて不屈き千万！成敗してくれる!!」

お前はどこの時代から來たんだよ

美九「ちよつといいですか？」

耶？矢「え？わ、わかりました・・・」

美九「わかりましたわ、では・・・貴方の元お仲間によらせましょう、いいですか？」

優斗「はい、勿論・・・」

優菜「なら回復してからは・・・？」

美九「ダメに決まってるでしょう？」

優菜「それなら俺にも考えがあるぞ？」

アリエルを出して・・・

優菜「アリエ・・・むぐっ!？」

口を・・・塞がれ!!

＼(^ o ^) / オワタ

乙

バイなら

優斗「ちよつと黙れ、動くな」

優菜「ん・・・ぐっ!」

優斗「大丈夫だ、安心しろ」ボソツ

優菜「・・・？」

優斗「流石にそこまで馬鹿じゃねえ」ボソツ

ここからはペルソナ越しで話してます

優斗「暴れる振りはしてくれ」

ゞ(: 3 ノシゞ) ノシ

優菜「大丈夫なのか？」

優斗「なら今波紋の呼吸してやるよ」

コオオオオ

優菜「・・・記憶はあるか？」

優斗「問題ない」

優菜「そりゃよかった」

優斗「アイツらの所に行くのか？」

優菜「もちろんだ」

優斗「じゃあ、バレねえようにもうちよっとくつつくぞ」
むぎゅ

優菜「・・・近い」

優斗「理由があつてこんなんできるの今だけやし」

優菜「・・・やりたい時は言っていぞ」

優斗「マジで!？」

優菜「99%断るけど」

優斗「なら1%がでるまで何回でもやってやる」

ペルソナ会話終わり

優斗「カオス、アイツ等の所に」

ズブズブズブ

美九「ちよっと！何してるんですか!？」

優斗「アンタには嘘ついたわ、でも謝る気はねえよ。バーカ!」

優菜「あの女の子達は返しとくぜ!」

席にカオスの空間に入れておいた女の子達が一気に出てきた

ドブン

ズズズズズズズズズズ

フワッ

あれ?なんか浮いてるな

狂三「あら、ホントに戻れましたのね」

背中と膝裏に手の感触が・・・

!!まさか・・・

狂三「あらあら、お熱いことですね」

士道「お前ら・・・そっち側だったつか（GL）」

優菜「違うからな!？」

士道「安心しろ、言いふらしたりしないし邪魔もしないぞ」

優菜「そもそもこいつ男だから!精霊じゃなくなったら多分男になるから!!」

狂三「それなら願ったり叶ったりじゃないですか、お幸せにどうぞ」

士道「いや、待てよ？優菜も中身は男なんだよな？だったらBLか？」

優菜「なんで、結婚する時みたいになっただよ！」

優斗「それじゃあ結婚式はいつするんだ？」

優菜「乗るな！それに俺ら未成年だからまだ結婚できねえよ！てか下ろせよ！！」

士道「お前ら未成年なのか・・・なら高校ぐらいか？」

優菜「二年だよ」

士道「ならよかったじゃねえか、来年から結婚出来るぞ」

優菜「フラグっぽくなるからやめて!？」

優斗「それじゃあどこで結婚式揚げる？」

優菜「しねえから!!」

優斗「そもそもな、俺は何もが起きた時でも迅速に動けるようにこうしてんだよ」

優菜「おーそうかそうか、そいつは助かるな。じゃねーんだよ！知ってたぞ!?!下心

満載だつて!!仙豆くれたら歩けるからな!?!」

メーティス「・・・もしかして、いつもあんな感じですか？」

イフリート「あれが普通だ」

メーティス「私が呼ばれた理由がよく分かりましたわ」

カマエル「これは先が思いやられるな・・・」
ズブ

士道「うおっ」

もう一人狂三が出てきて元からいる狂三に何か話してる

狂三「・・・ふむ、なるほど・・・ご苦労様。下がっていいですわよ」

士道「い、今のは？」

狂三「ええ。別行動で情報を探らせていた『わたくし』ですわ」

士道「情報・・・って、それは・・・」

狂三「ええ・・・十香さんの居場所が判明しましたわ」

第一百七話（デート・ア・ライブに來た『第二話』より）

士道「ほ、本当か!? 一体どこだ!? 無事なのか!？」

狂三「本当に士道さんは十香さんが大好きですね。妬けてしまいますわ……十香さんの救出に協力するのに、条件を増やしてしまいそうですわ」

士道「条件……?」

狂三「十香さんの前で『俺は十香より狂三が好きだ』とでも言っていたかどうか」

士道「お、おい……」

狂三「うふふ、冗談ですわよ」

士道「それで……狂三。十香はどこに連れてかれたんだ?」

狂三「ええ……デウス・エクス・マキナ・インダストリー日本支社、第一社屋。そこに……十香さんは幽閉されているようですわ」

優斗「なんだその海外っぼい会社は」

狂三「日本支社と言っているでしょう? 本社は海外ですわ」

優菜「それで? その会社はどこにあるんだ?」

狂三「では早速行きましょうか」

オフィス街

仙豆で回復しました a

士道「ここに・・・十香が」

狂三「気づかれまして？ここから先一帯は、DEMの関連施設ばかりですわ。見えるビル群は、全て系列会社の社屋や事務所、研究施設などですわ」

士道「全て・・・それで、どれが第一社屋なんだ？」

狂三「ええ、ビル群の中央にある建物ですわ。その中のどこにいるかまでは、残念ながら探れませんでしたけれど」

士道「なるほどな・・・」

狂三「まずはそこまでたどり着かない事にはお話になりませんわ。なるべく見つからない様に進みましょう。・・・さて、これからわたくしと士道さんはDEMの敷地内に侵入するわけですけど・・・」

あれ？俺達は？

狂三「その前に簡単な打ち合わせをしておいた方がいいかもしれませんね」

士道「つていうと？」

狂三「ええ、作戦自体は単純なものです。まずわたくしと士道さんはDEM日本支社第一社屋に向かいます。ここまではよろしいですわね？」

優斗「俺達はどうするんだ？」

狂三「それは今から説明しますわ、士道さんはどうですか？」

士道「俺は大丈夫だ」

優菜「俺も」

狂三「では続けますわ。とはいえ、ここは日本におけるDEMの拠点。何の防備もな

いとは考えづらいですわ」

士道「・・・だろうな」

狂三「そこで優菜さん達と『わたくしたち』の出番ですわ」

優斗「揺動か」

優菜「他の施設とかを襲撃するの？」

狂三「その通りですわ」

士道「なるほど・・・その騒ぎに乗じて目的地に入り込もうってわけか。でも、そんなに派手な襲撃をしたら、かえって警戒を強めちゃうんじゃないかねえか？DEMだって、十香を奪い返されないよう気を張ってるはずだろ」

狂三「確かに、十香さんは今施設内にある中で最も重要なサンプルです。施設が襲撃されたとなれば、かれらも第一に十香さんの警備を固める事でしょう」

士道「そうだろ。なら・・・」

優菜「だからこそ、そんな重要な十香さんを幽閉している社屋内に、全く気付かれずに侵入するだなんて、不可能に近いとは思いませんか？ならば、少しでも彼らの目を他の建物に向ける方が賢い選択ですわ。如何に十香さんが大事とはいえ、他の施設が襲われているのを完全に無視できるわけでもありませんでしょうし」

士道「ふむ．．．わかった。それでいこう」

狂三「ご承諾いただけて嬉しいですわ．．．さ、では参りましょうか」

士道「おう．．．！」

敷地内に入った瞬間

ぞわぞわぞわ

士道「おい、今のって」

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

優菜「見つかったのか!？」

士道「空間震警報．．．っ!?精霊が現れるってのか!?!この辺りに!?!」

周りにいたサラリーマンやコンビニの店員が泡吹いて逃げてる

狂三「いえ、どうやらそういうわけではなさそうですわねえ、空間震が起こる際の空間の揺らぎを全く感じませんわ。少なくとも、精霊が臨界からこちらに出現するという事はないと思いますわよ」

士道「じゃあ、この警報は一体……」

狂三「……ここからはあくまで仮説ですけれど。恐らく、この警報はDEM側が鳴らしたものですわね。士道さんもお気づきになったようですよけれど、魔術師（ウィザード）の随意領域（テリトリー）に触れるような感覚がありましたわ」

士道「え……？で、でもこれは空間震警報……だよな？」

狂三「そうですねえ。考えられる可能性としては、たとえば……」

突然士道の襟首をつかんで右方へと飛び退いた

同時に俺達も避ける

士道「ぐえ……っ!?な、何すん……」

さつきまでいた場所に光の塊みたいなのが突き刺さって爆発し、大穴が開いていた

士道「な、な、な……」

狂三「……目撃者を極力減らして大暴れするつもり、かもしれませんわね」

上空にはロボットみたいなやつが何体もいた

士道「あれは……〈バンダースナッチ〉……!?!」

バンダースナッチは銃っぽい物の銃口をこっちに向けて躊躇いもなく引き金を絞ってきた

士道「うわっ!」

狂三「人形や魔術師（ウイザード）さんたちに『わたくしたち』をぶつけますわ。その隙に、一気に防衛ラインを抜けますわよ」

優菜「それじゃあ、俺達は抜けるまで援護して終わったらここでやりあつてりやいいか」

優斗「俺は追いつけないから、先にやつとく」

狂三「では・・・全速力で参りますわよ。振り落とされないよう掴まっています。お願いします！（刻々帝）（ザフキエル）・・・【一の弾】（アレフ）・・・ッ!!」

シユタツ

ボウツ

狂三を全速力で追いかける

弾薬を当たる前に気弾で落として

抜けきつた

狂三「大丈夫ですの、士道さん」

士道「あ、ああ・・・なんとかな」

優菜「それじゃああととは任せたぞ」

士道「時間が惜しい。行こう、狂三」

狂三「ええ。第一社屋はこちらで・・・」

飛んで戻ろうとした瞬間に
ズドン

狂三「あ……」

狂三の首が宙を舞った

士道「え……？」

ブシャー

狂三の首から血のシャワーが噴き出す

優菜「!？」

士道「う……うわあああああッ!？」

優菜「誰だ!? 誰がやった……!!」

士道「く、狂三! 狂三!」

優菜「お前か……？」

士道「あ……」

狂三の後ろに誰がいる

青髪の女だ

青髪の女「やれやれ……ようやく見つけましたわよ」

シュン

首を掴もうとした寸前に

士道「真、那……？」

ピタッ

優菜「知り合いか……？」

真那「兄さま……！よくぞご無事で！」

士道「わ、わっ!？」

優菜「兄さま……？え？兄妹？いやでも妹は琴里つて言つてなかつたか？」

士道「実は琴里は義理の妹なんだ。真那は血の繋がった兄妹……らしい」

真那「まだ信じてくれないんですか!？兄さま!!」

優菜「うん、お前の立ち位置は理解したよ。うん、でもさ。狂三殺されたんだけど!？」

真那「ああ、それなら多分大丈夫でいやがりますよ。いつそのことこのまま死んでくれた方がありがてえです」

狂三「ききひひ、相変わらず手荒な歓迎をしてくださいますわね」

優菜「ええええ……」

士道「狂三……！無事だったのか!？」

狂三「ええ。まさか、これくらいでわたくしが殺れると思ひまして」

真那「ちっ……これは残念ですね。もう少しでその深い極まる薄ら笑いを消してや

れたのに」

狂三「言ったではありませんの。あなたには無理、ですわよオ」

真那「ハン、試してみやがりますか？ご自慢の弾が今の私に当たればいいですけどね」
狂三「きひツ、ひひひひひひッ！わたくしの気まぐれと偶然で命を拾ったお方が、随分と愉快なことを仰いますのねエ。それとも、あまりの恐怖に記憶を失ってしまいました？」

真那「おや、戦闘狂で殺人狂あなたが、口だけで一向にかかってきやがらねーとは珍しいですね。挑発に乗る余裕すら無くなりやがりましたか？」

狂三「うふふ、今度は間違っても助からないよう、全身をバラバラに解体した後、そのよく回る舌から堪能して差し上げてもよろしいんですわよ？」

士道「ま、待てて、二人とも……！」

優菜「それじゃあ、後は任せた」

士道「あつ！逃げんな!!」

優菜「あつそういや……あれいるかな……？」

士道「アレってなんだ？」

優菜「ほれ」

パシッ

士道「・・・なんだこれ、「豆？」」

優菜「それ食ったら体が全回復するぞ、あつやべつ死ぬって時に食え。副作用って言うのかわかんけど、食べた後は十日間何も食べなくても大丈夫になっちゃうけど。まだいっぱいあるけど、いるか？」

士道「いや、多分大丈夫だ」

ドギューン

士道「結局行くのかよ!!」

狂三はどっかに行ったみたいだな

ん？

なんだ？あの赤い装備を着たやつは・・・

ギューン

!?

ドオオオオン

優菜「なんだ今のは・・・」

あの赤いやつか？

士道たちの所に飛んでいく

・・・ヤバそうだな

優斗「優菜？聞こえるかー？」

ペルソナ越しか

優菜「聞こえてる」

優斗「なんでか分からんが、シャドウがいるんだが」

優菜「・・・は？」

数十秒前優斗

優斗「ミツハノメ、大氷河期」

パキイイン

魔術師「くっ！一旦テリトリーを解除しろ！」

優斗「ホバル、気象雷雨」

ゴロゴロゴロ

優斗「アラメイ、エル・ジハード」

ドゴオオオオオオン

*ポ○○ン脳

*ポ○○ンでは雨が降つてると雷の威力が上がる・・・はず（うろ覚え）

魔術師「ぐあああああ!!!」

ひゅううううううう

ドサツ

優斗「そろそろ戻ってきてほしいな」

魔術師「キヤアアアアアアア!!!」

ん？

見ると

さつき落とした魔術師が変なのに襲われてる

優斗「仕方ねえな」

ヒユウウウウ

ドカッ

優斗「大丈夫か？」

妖精？「ちよつと！いきなり何すんのよ!!」

魔術師「どきなさい！精霊に助けられるぐらいなら死んだ方がマシよ!!」

優斗「なら俺はこいつらがムカつくから倒していたら、たまたま居合わせたお前を助けてしまった。ってわけだ」

こいつ、見覚えあるな

・・・!

思い出した！こいつらシャドウだよ

優斗「なら一旦飛んで、弱点を聞いとうころう」
ガシッ

魔術師「ちよつと！放しなさいよ!!」

優斗「あーしまったーミスって敵の服に引っかけたー連れてきちゃったー（棒）」

魔術師「棒読みすな！」

近くのビルに降ろした

優斗「優菜？聞こえるかー？」

優菜「聞こえてる」

優斗「なんでか分からんが、シャドウがいるんだが」

優菜「・・・は？」

優斗「こつちのセリフ」

優菜「・・・とりあえずどんな奴がいるんだ？」

優斗「妖精っぽいのとカボチャに馬、サキユバス？にち〇こがでかいやつ、壺に入つた奴もいるな、メイドみたいなやつもいるし溶けた馬に植物に猫に羽生えた浮いてるやつ男女二種類に馬に乗つたやつが二種類今言つたやつがたくさん」

優菜「ピクシーとジャックランタン、バイコーン、サキユバス、インキュバス、アガシオン、シルキー、ケルピー、マンドレイク、エンジェル、アークエンジェル、ベリス、

エリゴールかな？猫は分からねえ。メーテイス、弱点教えるから覚えて」

メーテイス「はい、わかりました」

優菜「ピクシーは銃撃、氷結、呪怨。ジャックランタンは氷結、疾風。バイコーンは電撃。サキュバスは疾風、祝福。インキュバスは火炎、祝福。アガシオンは疾風。シルキーは火炎、電撃。ケルピーは電撃。マンドレイクは火炎。エンジェルは銃撃、呪怨。アークエンジェルは電撃、呪怨。ベリスは氷結。エリゴールは電撃。猫は弱点探してくれ」

優斗「助かった」

さてと

優斗「どいつからやろうかね、じゃあみんな出て来い」
ブワツ

優斗「弱点は今聞いた通りだ。ということ、弱点突けるなら突いて無理なら叩け!!」
クロノス「至高の魔弾」

ドドドドドドドオオオオ

アラメイ「エル・ジハード」

ドカーン

ミツハノメ「大氷河期」

パキイイン

イフリート「大炎上」

ゴオオオオオ

アウラ「真空波」

ブオオオオ

カオス「煉獄の翼」

ドワツ

優斗はシャドウを斬りつけていく

優菜は

さて、見に行った方がいいかな？

着くと土道はいなくなっており

真那とさっきの赤いのが戦ってた

優菜「どうしたんだ？」

真那「戻ってきたんでいやがるんですか!？」

赤い女「よそ見をするなアアアアアアアアアアア!!」

!!

シユン

ガギイイン

押し切って

ドン

気弾で少し離す

優菜「アイツが敵だな？」

真那「・・・はい！」

優菜「名前は？」

真那「ジエシカ・・・昔の同僚です」

優菜「手加減は？」

真那「いらねえです！」

ドドドドド

ミサイルが向かってくる

シュン

シュン

シュン

周りの魔術師やバンダースナッチに被弾して墜ちていく

真那「・・・あなた、味方を！」

ジェシカ「ははははハ！無駄よオ！」

真那「どうやら・・・まともな判断力さえ残ってねーようですね」

優菜「手加減はいらねんだよな？」

ボヒユン

ドガン

ジェシカ「それくらいじゃア、倒れないわよオ？」

優菜「短期決戦は無理だな」

ドギユン

シユアアア

シユウ・・・

優菜「なら一個落としてゴツドだ」

こっちの方が安定してるからな

4の方がもっと安定はしているが、仙豆の効果はあまりないからな。普通の回復もダメだし

ドドドド

避け続ける

真那「くっ！なかなか近づけねえですね」

パキイーン

真那「これは……！」

優菜「なんでここに!？」

真那「へハーミツト」……いえ、四糸乃さん……!？」

美九がいるのか？

四糸乃「お姉さまの……命令です。魔術師へウイザード」さんは、みんな……やっつけます！」

氣を探ると土道の隣に美九の氣を感じた

よしのん「おーし、その意氣だよ四糸乃！うしやー！あの子も凍らせちやおー！」

氷柱が生成されて真那に向かってくる

シユン

!!

一旦借りるぞ！

優菜「ミツハノメ！」

トトトツ

腕に刺さる

氷結耐性持ちのミツハノメを出したためダメージはたいしてない

優菜「何のつもりだ？」

ブオツ

今度は風か

優菜「アウラ！」

スススッ

疾風耐性

真那はテリトリー？で抜けたらしい

耶？矢「くく、なんだ、やるではないか。そこらに蠢く凡百の魔術師とは違うというわけか」

夕弦「警戒。耶？矢、注意を。あれは確か士道の妹です。相当な腕と聞いています。ついでにあの時士道と一緒にいた子もいます」

優菜「おい！悪意あるよな絶対!!」

!!

チャキ

耶？矢「今頃そんなものが効くと思っているのか？」

優菜「お前らはどけ」

夕弦「質問。それはどういう意味でしょうか」

優菜「どかないなら風で飛ばすなよ」

パアン

ブワツ

耶？矢「信じるわけがなからうて！」

優菜「バカ野郎!!」

シユン・・・

ブワツ

風が起こる前に近付く

両方の肩に足を乗せる

耶？矢「なっ!？」

夕弦「警告。さっさと降りなさい」

優菜「動くな」

パアン

耶？矢たちの後ろにいたやつを撃つ

シャドウ「が・・・」

ひゅうううう・・・

耶？矢「何だ今のは!？」

夕弦「驚嘆。あんな不思議なものが存在するのですか？」

優菜「カハクだ、弱点は銃撃、氷結」

耶? 矢「カハク？」

優菜「シヤドウって言うんだが、詳しい説明は後だ。真那は今士道の味方だ。美玖は今士道を助け? に行ってるから、俺たちは今仲間だ。つまり敵はあの赤いヤツだ」

夕弦「疑問。そうなのですか？」

耶? 矢「口車に乗せられるな夕弦！」

優菜「いいのか? 真那が死んだら士道が悲しむよな? 士道が悲しんだら美九が悲しんで美九が悲しんだらお前らも悲しいよな?」

耶? 矢「う、うん？」

優菜「それが嫌ならあの赤いの倒せ!!」

耶? 矢「とりあえずわけわからんけどやってやる!!」

なんか勢いに任せたらいけた

今のうちに離れよう

真那「あ……隊長！」

燎子「え……? は、あんた……真那!？」

シユン

真那「エレン……ッ！」

イエーガー？

???「駆逐してやるッ!!この世から……一匹残らず……!!!」

進○○○人はやってないからいけんて!!

エレン「襲撃者たちの中に大きなネズミが一匹紛れていると聞いてきましたが……貴方でしたか、真那」

優菜「……あとは任せた」

ガシッ

真那「逃げんなです」

優菜「ちよつと何言ってるか分かんない。オレは優斗とフュージョンして戻ってくるから!!だからH A ☆ N A ☆ S E !!!」

真那「絶対に嫌です」

エレン「……貴方が敵とは残念です。あなたのことはD E Mの中でも私に次ぐ実力者として認めていたのですけれど」

真那「は……ッ、冗談じゃねーです。人の体を勝手に弄つといて」

エレン「……なるほど。そこまで知ってしまいましたか。へラタトスクに拾われたというのは本当の様ですね」

真那「ふん、驚かぬーところを見ると、あなたも共犯らしいですね。理想的なシナリオとしちゃあ、真実を知ったあなたが改心して一緒に社長をぶっ倒してくれることだったんですが」

エレン「残念ですが、私がアイクを裏切れることは有り得ません」

真那「・・・でしょうねえ」

ジェシカ「消え口！へブラスターク〜！」

スツ

優菜「盾にするな!!チツ、ウンディーネ!テトラカーン」

パライイン

ドオン

ヒユツ

避けやがった

真那「・・・思ったよりもいい盾で嫌がりますね」

優菜「さっさと放せ!!」

エレン「二対一というのは気が進みませんが・・・まあ、アイクの意向であれば仕方ありません。手早く終わらせていただきます」

優菜「俺敵認定されてない!？」

ジェシカ「あ、は、はははハ、マナ、マナ、ついに追い詰めたわヨ。マアアアア
ナアアアアアア？」

???「どいつもこいつも狂ってやがる!!」

優菜「カ○ジ出てくんな!!」

真那「エレンは任せて構わないですか？」

優菜「・・・たぶん行ける」

真那「相手は何人も精霊を殺してます。気を付けてくださいよ」

優菜「六回までなら死ねる・・・その前に」

シユンツ

真那「あっ!!」

優斗達

ザシユ

バシユーン・・・

優斗「こいつで終わりか・・・」

ガリツ

仙豆を食べて回復

シユンツ

優菜「優斗！」

優斗「どうした？そんなあわてて」

優菜「さっさと合体して戻るぞ!!」

優斗「合体!？」

優菜「フュージョンだ！」

三回目なのでカット

持続時間はすでに止めてある

優斗「行くか」

シュンツ

バババババババババ

優斗「アリエル！」

スウ

極・物理見切り

優斗「待たせたな」

真那「優菜ですか!?!ならさっさとエレンと・・・」

チルドーン

真那「くあ・・・ッ！」

「ジェシカ「きゃははははハ！大当たりイイイ！駄目よオオウ、後ろにも注意しなくつちやア！」

優斗「真那！」

エレン「よそ見しないでくれるかしら？」

サツ

斬ろうとするが

極・物理見切り

優斗「チツ！」

真那も逃げようとするが

真那「な・ツ!!」

限定テリトリーで邪魔される

ジェシカ「甘いわヨオオウ？これで終わりネ、マナーアア！」

真那「この・・・舐めた真似を！」

エレンが隙を突こうとしたので

優斗「ワンシヨットキル」

ドギユン

サツ

エレン「貴様……!!」

チユドン

エレンに向かって何かを撃たれる

エレンは撃たれたソレを打ち落とした

真那「今は……」

撃たれた方向を見ると

真那「と……鳶一一曹!?!」

折紙「無事?」

……折紙のことすっかり忘れてたな

昨日会って折紙に土道の場所教えて

飛んで行ったんだがその後知らんな

エレン「鳶一折紙……? 治療中のはずでは。それにその装備、ASTのものでは……」

治療中? あのあと何があったんだ?

折紙「……土道は?」

真那「え? 兄様……ですか。はい、無事でいやがりますよ」

折紙「今、どこにいるの?」

真那「えっと、第一社屋の方に」

折紙「そう」

ビューン

ビューン

エレン「行かせると思えますか？」

折紙「・・・押し通る」

シュンッ

ガキイイイン

テリトリーでガードされるが

ドギユン

シューアアアア

シューウ・・・

優斗「ハアアアアアア!!!」

バリイイン

エレン「な!?!テリトリーが!!」

優斗「落ちろおおおお!!!」

ドガアアア

エレン「ウグッ・・・」

ドゴオオオオオン

優斗「行け、アイツは俺がやる」

折紙「・・・助かった」

ビューン

優斗「トラ、アトミックフレア!!」

ヒュウウウウウウウ・・・

ドオオオオオン

ビューン

エレンが折紙の方に飛んでいく・・・と思つたが

折紙を抜き去り

第一社屋に行く

優斗「まさか!!」

ギユーン

真那「どこに行くんでいやがるんですか!？」

ジェシカが常に邪魔してくるので真那は近づけない

四糸乃達はいつの間にかASTと戦ってるし

折紙はさつき会つたASTの・・・燎子だったよな？が止めていて動けそうにない

優斗「オレが行くしかないか」

ドクン

突然激しい吐き気が襲う

優斗「うっ・・・!!」

なんだこのおぞましい感覚は・・・

どこから・・・

第一社屋の中!!?

嫌な予感・・・というかほぼ確実にマズい状況だ

ギューン

近くまで行くと

ドゴオオオオオン

!?

第一社屋の上空に何かいる

この気は・・・十香だったか?なんて気になってるんだ・・・

何か持っているものを振り下ろすと

ミシ

!!

ブワッ

ヒュルヒュルヒュル

バシューーン

ドゴゴゴ

ドウン

バチバチバチ

衝撃波をガードする

ドオオオオオオン

シューウウウウウウ

ここまでやってやっとなんて耐えられるか……!!

なんつー力だよ

ギューーン

士道の所に着くと

エレンたちはもういなくなっていた

優斗「どういうことだ？」

十香? 「なんだ貴様は」

優斗「こつちのセリフだ」

士道「優菜？優斗？どっちか分からないが十香がおかしいんだ!!」

優斗「わけわからんが、とりあえず殴るか」

士道「やめろよ!?!」

十香「何をゴチャゴチャと言っている」

優斗「アンタを止める算段だよ！メーティス」

スツ

!!

コオオオオ

ガキイイイン

衝撃波でこの威力って・・・

直接受けたら死ぬだろ

十香「ふん、何だか知らぬがまあいい。屠れば済む話だ。どうやら先程の女程の力は
ないようだしな」

優斗「ならこつちも本気だ」

いま喋ってる間に限界まで身体能力を底上げした

優斗「行くぞ」

十香「何を言っている。私はもう攻撃しているぞ」

優斗「何？」

反射的に振り返ると

攻撃が士道の目の前まで行っていた

美九「あああああああッ！」

美九の声で不可視の壁を作り

辛うじて守り切った

士道「美九……！」

美九「勘違いしないでくださいよー。言ったでしょう？ 私は『好き』とか『大切』とか『死んでも』って言葉を軽々しく使つて、簡単に翻すような男が大っ嫌いなんですー」

士道「え……？」

美九「あなた、言いましたよねー？ 命を懸けてでも十香さんを助けるつて。なら、最後まで責任持つてください。私を……失望させないてください。私は……それを見る為にここまで來たんですから」

士道「美九……ああ……そうだな」

士道のそばまで降りる

士道「さあ十香。じきに朝だ。家に帰つて飯にしよう。今ごめんなさいつて言えば、今日は朝昼晩、お前の好きなメニューで統一してやるぞ」

十香「……何を言っている？」

十香に向かって駆けだすが

剣を振って衝撃波で戻される

士道「うぐ……っ！」

優斗「おいおい……」

美九「何やってるんですー。格好悪い」

士道「うるせ、他に方法がないんだよ！まずはアイツの近くに行かなければどうにもならない……！」

美九「十香さんの近くに行ければ、何か方法があるって言うんですねー？」

士道「……、ああ。成功するかどうかは、やってみないと分からないがな」

美九「ふーん……そうですか……〈破軍歌姫〉（ガブリエル）【輪舞曲】（ロンド）

優斗「おおー……」

美九「……いいですよ。特別です。十香さんの為に単身ここまで乗り込んだ、果てしなく馬鹿で愚直なあなたに、一度だけチャンスをあげます」

士道「え……？」

美九「防御の声全方位から十香さんにぶつけます。彼女相手では何秒保つかわかりませんが、少しの間であれば動きを止められるはずですよ。その間に、その方法とやらを試

してみてくださいい！」

士道「美九、おまえ・・・」

美九「やるんですかー？ やらないんですかー？」

士道「・・・おうっ！」

美九「では、いきますよ・・・スウ」

ーーーーーッッッ

ものすごい高音な声が響き渡る

十香「む・・・なんだ、これは」

優斗「メーテイス、ヒートライザ」

美九の壁と士道を強化する

優斗「カマエル、ランダマイザ」

十香を弱体化する

その間に士道が走る

十香「ふん・・・」

十香が床を片足で蹴り床材が散弾のように士道に降り注ぐ

当たる前にそこに飛び全弾に当たる

優斗「行け!!」

十香「ち……鬱陶しいぞ」

十香は音の拘束を引きちぎろうと両腕を開いていく

美九「——!?」

どんだん声が掠れていき

美九「————」

とうとう声が出なくなつた

士道「な……!」

十香「ふん、小賢しい真似を」

剣を振り上げる

士道「な……っ!」

十香「私の身を縛ろうとは。身の程を知れ」

士道「美九——ッ!」

優斗「嘘だろ?」

クソが!

シュンッ

美九を士道が守り、士道と斬撃の間に入る

ペルソナを全員鎧にする

せめて方向を変えねえとな

受け止めようとした瞬間

シューアアアアア

冷気の壁が突然できて斬撃は冷気に触れ消えた

優斗「これは？」

士道「何とかなったな・・・」

美九「あ・・・」

士道「よう・・・美九、無事か？」

美九「あにを、やつえ・・・」

士道「約束・・・したからな」

美九「え・・・？」

十香「う、う・・・シドー・・・シドー・・・」

士道「・・・!？」

十香「う、あ、あああああッ！」

右手に握った剣を地面に突き立てて

左腕を刃で斬りつけた

十香「あぐ・・・っ！」

こつちを血走った目で見ろ

十香「面妖な手を……！私を惑わすか、人間！」

地面を蹴って上空に舞い上がる

十香「よかろう……ならば一撃にて塵も残さず粉碎してくれ！」

空に波紋が現れ、そこから十香の倍以上の巨大な玉座が出てきて

バラバラになって十香の剣にまとわりつく

剣が黒く大きくなっていき

最後の欠片が同化すると

雲を突き抜けるほどの大きさになった

十香「我が【終焉の剣】（ペイヴァーシユヘレヴ）で……ッ!!」

優斗「ごめん今なんて言った？」

士道「あれは……！」

美九「……！」

声は出ない

美九「……っ」

美九は士道を庇うように抱きしめて背中は十香に向ける

士道「美九……!?!」

優斗「あれはやべえな・・・耐えきれるか？」

十香「去ね、人間・・・ッ！」

振り下ろそうとする

それだけの動作で周りの空間が軋む音がする

十香「・・・!?!」

低くなった温度がさらに下がった予感がすると

四糸乃「〈氷結傀儡〉（ザドキエル）・・・っ！」

よしのん「よっしやおっけーいっくよーっ！」

十香に冷気の奔流が襲いかかる

十香「く・・・？」

靈力の壁で相殺する

四糸乃「十香さん・・・！一体どうしたんですか・・・!?!士道さんを攻撃するなんて・・・

！」

皆が引き留めてる間にどうすればあの攻撃を無効化できるか考える

火とか電気とかは通り抜けるから根本的に無理

カオスの空間で斬撃全てを入れる？

・・・いや、広がる前にやられる

氷とかの硬い物を作る？

耐えきれないだろう

後は・・・

!!

そうだ

あれがあつたじゃないか

優斗「おい土道・・・土道？」

気づけば土道は十香に近付いて行っていた

うおい！

十香「へ暴虐公（ナヘマー）【終焉の剣】!!」

ドオオオン

空が割れる音がする

ギューン

時間の流れを止める

奔流に触れて

優斗「トラ、破壊」

サアアアアア

奔流が消えていく

十香「なん・・・だと・・・!?」

今のうちに十香の後ろに士道をカオスの空間で送る

士道「うわあああああああ!!!」

・・・あれ？

カオス「すまん、ミスって空に繋げちゃった」

やりやがったあああああああ!!!

十香「な!?!そこから私が倒せるとも・・・」

【終焉の剣】の状態を解除して剣を振り上げようとするが

十香「あ・・・私は、この光景を、どこかで・・・く・・・」

十香がよろける

士道「・・・十香!」

士道が十香の懐に入る

士道「よう、十香。助けにきたぞ」

十香「貴様・・・っ!」

士道は持っていた剣を手放す

十香「貴様、何を・・・」

士道「こんなの持ってちや．．．痛いだろ」

十香「な．．．貴さ．．．」

士道が十香にキスした

ワーオ

キスが終わると

十香「．．．シ、ドー．．．?」

十香が着ていたもの（霊装って言うらしい）や剣は消えた

士道「．．．おう」

耶? 矢達の風でゆっくり降りてくる

士道「ぐ．．．」

十香「し、シドー! 大丈夫か!」

士道「おう．．．なんとかな．．．十香こそ．．．大丈夫か? 一体あれは何だったんだ．．．?」

十香「あれ．．．? 何のことだ?」

士道「いや．．．いい。そういうのは、琴里や令音さんに任せよう。今は．．．おかえり、十香」

十香「む．．．? うむ、ただいまだ．．．シドー」

優斗「お熱いところ悪いけど、士道お前忘れてるだろ」

士道「え？何を？」

優斗「仙豆だよ。豆、渡しただろ？あれで回復しとけ」

士道「あ・・・」

仙豆を取り出す

じつと見つめる

優斗「安心しろ、毒なんか入ってねえって」

士道「・・・よし」

ガリッ

スウウウウ

傷が治った

士道「おお！ホントに治っちまった！」

十香「なんだそれは！私も食べていいか!？」

優斗「これは回復用にとつてあるの！だから今はダメだよ」

十香「一個ぐらいいいじゃないか！」

優斗「これは一個食べたらず十日間あんまり食べ物は食べれなくなる（大嘘）士道の飯を食えなくても食べるか？」

十香「十日!?!・・・ならやめておく
耶?矢」ところで貴様は誰なんだ?」

優斗「後で話すよ。その前に」

街を見るASTとかと戦ったせいで街中ボロボロだ

優斗「クロノス、分かってるな?」

スウウウウ

街が少しずつだが戻っていく

そして全部戻った

優斗「ふう・・・今ので気力使い切ったな・・・ということとは・・・」

ポンツ

二人に戻った

ドサツ

優菜「ああ・・・やべえ動けねえ・・・」

スウウウウウウ

優斗「あ・・・」

士道「これって・・・」

琴里「優菜たちは回収したわよ」

士道「琴里・・・」

琴里「あんたたちも回収したげよっか？」

士道「頼む」

次の日

いろいろ試した結果

あの暗闇の世界の縁をちよん切ってやりました

つまりあの世界にはもう行かなくて済むという事だ

どうやったかって？

細かいことは気にするな

そして・・・

フラクシナス

士道「優菜たちはどうだ？」

琴里「別々の部屋で優斗の方は回復してるけど・・・」

士道「けど？」

琴里「優菜は何でか分からないけど入口に向かってずっと土下座してるわ・・・たまに寝転んでるけど」

士道「わ、わかった。見てくる」

優菜は

はあああああああ……

まだ来ないか……

気は……

!?

扉から右5m!?

来てる!!

ドアが開く

士道「大丈夫か優菜」

優菜「頼みがあるんです!」

士道「……とりあえず土下座やめたらどうだ?きついだろ」

優菜「……スだけは」

士道「え?」

優菜「キスだけは勘弁してください!!」

士道「ちよつと待ていきなりどうした!?!」

優菜「俺は男だ。だから男とキスするのは勘弁してください!!指でも何でも詰めます

から!!」

士道 「893!?! そんなことで指詰めるな!」

優菜 「キスだけは本当に嫌なんです!」

士道 「そういわれてもなあ・・・」

優菜 「・・・それじゃあ、バイバイ」

士道 「え?」

カオスの空間に一步入ってる

ガシツ

士道 「ちよつと待て!!」

優菜 「だつて向こうの世界に行かなかつたら空間震もないしキスする意味ないだろ

!?!」

士道 「それはちげえよ! 精霊である限りASTに狙われるぞ!!」

優菜 「あんな奴らいつでも倒せるしー?」

士道 「そういう問題じゃねえだろ!?!」

優菜 「やだやだやだやだキス何て絶対いーやーだー!!」

士道 「何で幼児退行してんだよ!!」

優菜 「俺まだ体的には未成年だから幼児退行とは言わねえよ!!」

士道 「それ精神的には大人って事じゃねえか!!」

「優菜「そりや合計は百いつてるだろうからな!!」
ピタッ

士道「マジで?」

優菜「マジ」

・
・
・

士道「・・・お前百歳でさつきあんな事したのか?」

優菜「よく考えたらめつちや恥ずかしいから忘れて!!」
ていうか今ので服乱れたし

優菜「ちよつとあっち向け」

士道「え?」

優菜「服見たらわかるだろ」

士道「ああ、すまん」

後ろを向く

今のうちに逃げ

ウイイイン

扉が開く

優斗「おーい、そろそろ土下座やめたr」

ピタッ

・
・
・

優斗「お楽しみの最中だったか、すまんな邪魔して」

優菜「誤解すんな!!」

士道「誤解すんな!!」

琴里「何で空いてるの? どう? どうにかなった」

シーン

琴里「何してるの?」

士道「今こいつを食い止めてんだ。他意はねえからな!」

琴里に近付く

優菜「そうそう、俺が逃げようとした所を止めてただけで……」

琴里「へえ……逃げようとしたんだ」

ハッ

不気味な笑みでこつちを見る

カオスの空間に片足入れる

優菜「なんか嫌な予感するから逃げる!!」

士道「だから逃げんな!!」

ガシッ

ヒッ

優斗「自業自得だよな？」

優菜「やめろー！ー!!」

琴里「いや別にそこまでしなくてもいいんだけど」

士道「え？」

琴里「だって強制でやったら封印できないし」

士道「でも、またここに来るって保証は・・・」

優菜「向こうの世界には行けなくなったから、ずっとこの世界にいる予定だぞ」

士道「え？」

優菜「常時隠蔽のネットワークスかなんか作ればいいし」

士道「どういうことだ？」

ポンッ

優菜「早速作ったからつけてみるぞ」

スッ

優菜「どうだ？」

優斗「似合ってる」

優菜「そういう意味じゃない」

スタスタスタ

令音「何があつたんだ？いきなり優菜の反応が無くなったが・・・おや？いるね。故障かな」

ドヤツ

琴里「へえ、凄いわね。でもこっちは出来れば封印したいのよねえ」

優菜「金ならある」

メモントスで合計約二百時間倒しまくった結果

いつの間にか123万溜まつた

嘘だろって？

俺も数え終わつたときは気絶しかけた

琴里「ごめんなさい。そういう意味で言つたんじゃないの」

優菜「それじゃ何をすればいいんだ？」

琴里「条件を飲んでくれたら、衣食住は約束するわ」

優菜「条件の中にキスは？」

琴里「入ってないわ」

優菜「条件を言つてくれ」

琴里「1、普通に学校に通う。2、精霊のことは他言無用。3、精霊の力はできるかぎり使わない」

・
・
・

優菜「え？それだけ？」

琴里「こつちだつて精霊をどうこうしたいつて事もないし、守ってほしいこと守つてくれたらどうこう言わないわ。どう？」

優菜「・・・断る理由がない」

琴里「そう。なら士道と一緒に帰つてくれる？私はもう少しやる事あるから」

優菜「わかった」

キス回避？

家に着いた

優菜「・・・マンションじゃん」

士道「俺も横に建てられたときは驚いた」

優菜「これもアイツらが建てたの？財力どうなつてんの？ていうか経歴とかなんでそんなボンと作るの？どこから金が出てくんの？」

士道「それは聞いたらいけない気がしたから聞いてない」

優菜「わかる」

部屋に入るとベッドが二つあった

優菜「二人で一部屋？」

士道「らしいな」

バフバフ

優菜「ふかふかだなくお前も触ってみろ」

士道「・・・俺の毛布よりふかふかだ」

優菜「それはすまん」

バフンバフン

優斗「結構跳ねるなコレ」

優菜「お前それはやめとけ」

大の字で寝転ぶ

優菜「お前も寝てみるよ」

士道「ブフツ」

優菜「笑う要素あった!？」

士道「何でか分からんけど犬とお前が一瞬被った」

優菜「何いってんだ？」

士道「だよな。自分でもそうおm」

優菜「犬は優斗だろ」

士道「何いってんだお前」

その後士道の家に来た

四糸乃「おかえり・・・なさい」

士道「四糸乃、ただいま」

優菜「よっ！」

優斗「よっ！」

両脇から出る

四糸乃「この前の・・・お姉ちゃんたちも・・・？」

士道「それは皆が帰ってきてから話すよ」

全員学校から帰ってきた

俺達は士道の部屋で待機してた

ちなみにエロ本はなかった

ガチャ

士道「優菜、来てく・・・れ・・・？・・・!?どこ行つた!？」

優菜「上だよ」

波紋の修行中

士道「……何してんだ？」

優菜「波紋の修行」

士道「……とりあえず降りてくれ」

スタツ

士道「ずっとやってたのか？」

優菜「ああ」

士道「……凄いんだろうな。多分」

優斗「とてつもなく凄い」

士道「みんな集まってるんだ。下に降りよう」

優斗「あれ？スルー……？」

よしよしゞ（・ω・、）

サスサス

士道『ホントに犬だ……』

噴出さない様に口を押える

その後改めて自己紹介して

学校は士道の隣のクラスになった

その夜

優斗視点

なかなか寝れねえ・・・

優菜「う・・・ううう・・・」

優斗「・・・うなされてるのか・・・？」

優菜「もう・・・一人は嫌だ・・・」

・・・

同じベッドに入る

よしよしゞ（ω・ω・ω）

抱きしめながら寝た

第百八話（ソードアート・オンラインに来ただけど・・・俺一人?『第二話』より）

今日はクリスマス

何でもサンタ風のボスがどつかの巨大樹の下にいるんだと

適当な場所に来たんだが・・・あれはキリトか？

ユウト「何してんだ？キリト」

キリト「ああ・・・お前か・・・お前も蘇生アイテム狙いか？」

ユウト「いや、違うな・・・ところでさっきから尾けてるのは誰だ？」

クライン「よお」

ユウト「お前が尾けてたのか」

クライン「まあな、蘇生アイテム狙いか？」

ユウト「キリトはそうらしい」

クライン「なに!?!: :ガセネタかも知れねアイテムに、命かけんなよ!このデスゲームはマジなんだよ、ヒットポイントが0になった瞬間現実世界の俺たちの脳を・・・」

キリト「黙れよ」

クライン「な・・・ソコ攻略なんて無茶はやめろよ！俺らと組むんだ！蘇生アイテムはドロップさせたやつのもので恨みっこなし！それで文句ねえだろ！」

キリト「それじゃあ・・・意味ないんだよ・・・俺一人でやらなきや」

キリトが剣に手をかける

クラインの仲間が構えかけたがクラインが止める

クライン「お前えをよ！こんなところで死なすわけにはいかねえんだよ！キリト！」

ユウト「その前にだ、お前らそろそろ姿明かしたらどうなんだよ」

周りに何人も人が出てきた

クライン「な！」

キリト「お前達も尾けられてたみたいだな、クライン」

クライン「ああ、そう見てえだな」

クラインの仲間「げっ成龍連合かよ、レアアイテムの為ならヤバいこともやる連中だぞ」

ユウト「キリト、お前先行つてろ」

キリト「何・・・？」

ユウト「こいつらさっさと退かせてドロップ盗ってやるから先行つてろっていつてんだ」

キリト「・・・わかった！」

ダダダダ

クライン「俺のセリフ取りやがったな？」

ユウト「そうだよ！」

行かせるか！

ガン

な!?

なんだよこれは!?!透明な壁!?!

クライン「お前の力だな？」

ユウト「ああ、先に進みたきや俺たちを倒して行けつてな！」

この野郎・・・!!

ユウト「さっさと来いよ、ウスノロ」

ブワッ

ヒュルヒュルヒュル

バシユーン

ユウト「行くぞ、イフリート！」

その後しばらく戦い続けた

相手は殺さずに……ただし瀕死まで追い込み身ぐるみ剥いで装備は捨てたけどな（ゲス顔）

お、覚えてろよ!!

ダダダダダダダ

ユウト「もう終わりか!?この雑魚!!」

クライン「俺たちはもうしばらく動けそうにねえ、お前はキリトに手伝いに行つてくれ」

ユウト「最初からそのつも……」

キリトが歩いてきた

クライン「キリト……!」

ユウト「え……めちやくちや暗い顔してますやん」

手に持つてるアイテムをクラインに投げる

キリト「それが蘇生アイテムだ……」

クライン「えつと何々……?対象のプレイヤーが……十秒以内!」

ユウト「死んで十秒以内に使わないと効果はないって事か……」

キリト「次にお前の目の前で死んだやつに使つてくれ……」

歩いていく

クライン「キリト・・・キリトよお！お前えは・・・お前えは生きろよ!!最後まで生きろよ!!生きてくれ!!ぐううう・・・」

キリト「・・・じゃあな・・・」

ユウト「アイツに何があつたかは全く分からねえ・・・だけど今のを言ったからにはお前も生きろよ、俺は絶対死なねえ・・・お前達がクリアしてこの世界が消えたとしても、どうにかして生き延びてやる」

また月日たちが（アニメの展開早すぎやろ）

突然花が見たくなり

カップルだらけだが47層の花を見て思い出の丘?とかつて名前の方に行く

イフリート達が邪魔するモンスターを片っ端から倒していく

?何してんだ、あの女+見た目モブ達は

キリト・・・だよな?あれって

バカだろ

さつきからバカたちが斬りかかっているがHPが減ったり増えたりしてる

自動回復ってやつか

ユウト「よお、キリト。何してんだ?」

女「なんだい、アンタは!」

キリト「助けなくても大丈夫だ、もう終わるから」

話を聞きやあこいつら人殺して身ぐるみ剥いでを繰り返してるらしく

キリトは依頼でこいつらを監獄に入れるらしい

ユウト「ならクロノス、ザ・ワールド」

ぐわゝん

当て身！

全員当て身！

そして時は動き出す

ドサドサドサ

女の子「え？え!?何が起きたの!？」

男「ううう・・・」

ユウト「イフリート」

ドガッ

ドサッ

ユウト「それじゃあ、後は任せた・・・ふわあゝ・・・眠い・・・先に戻つとくぞ」

次の日キリトが戻ってきて

攻略会議

第56層

クライアント達もいる

アスナ「フィールドボスを村の中へ誘い込みます」

ザワザワ

キリト「ちよ、ちよつと待つてくれ！そんなことしたら村の人たちが・・・」

アスナ「それが狙いです、ボスがNPCを殺してる間にボスを攻撃、殲滅します」

キリト「NPCは木みたいなオブジェクトとは違う！彼らは・・・」

アスナ「生きている・・・とでも？あれはたんなるオブジェクトです、たとえ殺されようとまたリポップ（出現）するのだから」

キリト「俺はその考えに従えない」

ユウト「俺の前でよくそんなこと言えるな・・・もちろん俺も反対だ、その方法でやるならオレは今回は何もしないぞ」

アスナ「今回は作戦は私、血盟騎士団副団長のアスナが指揮をとることになっていきます。私のいう事は従ってもらいます」

結局俺は何もしなかったが・・・いや回復だけしたな

ともかくクリアし

59層

ユウト「おりやあ!!」

・・・気力が尽きたか・・・

一旦戻って休んだ方が良いな

ユウト「ふう・・・」

迷宮区から出たらもう夕方になっていた

ユウト「あちゃー・・・昼飯食い損ねたな・・・ん？」

キリト?

ユウト「何してんだ？」

キリト「静かに・・・」

チヨイチヨイ

後ろを指さす

アスナが寝てる・・・

アスナ「クシユン・・・」

ユウト「・・・一緒に寝たのか？」

キリト「・・・起きたら横にいたんだ」

アスナ「ううん・・・んん?・・・」

ユウト「起きた・・・」

アスナ「え?・・・え!?なっ!?ど、どうして・・・」

キリト「おはよ、よく眠れた?」

アスナが剣を握る

キリト「いい!」

ユウト「落ち着け!」

アスナ「ぐ・・・うう・・・ご飯一回・・・!」

キリト「はあ・・・?」

アスナ「ご飯!なんでもいくらでも一回奢れ・・・それでチャラ!どう?」

ユウト「・・・俺はお邪魔かな?それじゃあバイなら」

キリト「おい!ちよつと待て」

ユウト「またない」

ダダダダダダ

ユウト「俺は蓄えがあるから大丈夫だから!ごゆつくり!」

まあ街がある57層まで戻ったんだけど

多分キリト達もこのレストランにいるんだろう

キヤアアアアア!!!

なんだ!?

ダダダダダダ

!!

教会のような場所から男が吊るされて胸を刺されていた

キリト「早く抜けろ!!」

抜こうとするが

深く刺さっていて自分では抜けない様だった

アスナ「君は下で受け止めて!」

アスナが教会を上っていく

キリト「わかった!」

ユウト「イフリート!」

イフリートが降ろしに行く

キリト「待ってろ!」

男「う・・・ぐ・・・ああああ!!」

すると動かなくなり

バシユーン

身体が消え槍が落ちる

キリト「クソツ・・!皆!デュエルのWinner表示を探せ!」

しかしどこにも表示は見つからない

ユウト「・・・一旦上を見に行くぞ」

キリト「ユウト?・・・わかった」

上に行くよ

吊っていたロープは手すりに括りつけられて垂らされていたようだ

キリト「どういうことだ・・・これは・・・」

アスナ「普通に考えればデュエルの相手が被害者の胸に槍を突き刺してロープを首に引つ掛けて窓から突き落とした・・・って事になるのかしら」

キリト「でも・・・Winner表示がどこにも出なかった」

アスナ「ありえないわ、圏内でダメージを与えるにはデュエル以外の方法は・・・」

ユウト「とりあえず、どうにかするつきやねんじやねえのか?」

アスナ「そうね・・・このまま放置はできないわ」

キリト「ああ」

アスナ「もし、圏内PK技みたいのを誰かが見つけたのだとすれば・・・外だけでなく、街の中においても危険という事態になってしまうわ」

キリト「そうだな」

アスナ「前線離れる事になっちゃうけど・・・仕方ないか・・・なら、解決までちゃ

んと協力してもらおうわよ。言っとくけど、昼寝の時間はありませんから」

アスナがキリトに近付いて手を出す

キリト「・・・してたのはそっちの方だろ」

キリトも手を握るが

アスナ「ひっ・・・！」

ギユツ

キリト「ギャアアアア!!!」

ユウト「・・・流石に俺までいなくならない方がいいか」

アスナ「そうね・・・」

ユウト「ならこの一件はお前たちに任せる、お前達がない分は俺が頑張るさ」

キリト「ありがとう、助かる」

ユウト「皆にも説明はしとくさ、でも出来るだけ早く戻って来いよ」

その後三日ほどで戻ってきた

帰ってきた

どうなったかというと

あの時減っていたのはHPではなく鎧の耐久値のみで

耐久値が切れる瞬間に結晶でレポートし殺されたように見せつけた

何故そんなことをしたかというと

ギルドでレアドロップで使うか売るかで争った結果、多数決で売る事になり
売りに行ったやつが殺された事件の犯人をあぶりだすためだったと

人間の恨みとは恐ろしい・・・

キリト「ところでよ、結婚ってどう思う?」

ユウト「・・・いきなりどうした?」

キリト「いや、レアアイテムを売りに行った人を殺したのがその夫だったんだよ。それで結婚っていったい何なんだったって思ってたな」

ユウト「・・・俺がいた世界には気になる奴がいるけど」

キリト「お前がいた世界か・・・結局あの話は本当なのか?」

ユウト「信じてねえのかよ」

キリト「普通信じねえよ」

ユウト「ならば本当に異世界から来た体で話を進めるが、この体も元々俺のじゃねえんだ」

キリト「・・・そりゃデータだしな」

ユウト「ごめんそういう意味じゃない」

キリト「ならどういう事だ?」

ユウト「俺は二重人格ってやつだったんだよ」

キリト「!？」

ユウト「でな？俺は後から出来た方なんだけども、そいつ高校二年で変な事に巻き込まれてるんだけども。パレスやらシャドウやらがな？でさ、多分元々なかつたんだろうけど。変な飲み物？見つけて飲んだら女になつてよ」

キリト「ごめん、途中から言ってる意味が分からなかつた」

ユウト「うん、俺もいいながら薄々思つてた。理解しなくてもいいから聞いてくれ」

キリト「なら話す意味ないか？」

ユウト「その後、なんやかんやあつて別れたんだけど」

キリト「なんやかんやが一番気になるんだけど」

ユウト「後から出来た方の俺が残つて別れて女になつちまつたのが元の人格の優斗つ

てわけだ・・・今の名前は優菜だけだ」

キリト「なんていうか・・・とりあえず大変だったのは伝わつたが、どう気になるつて言うんだ？」

ユウト「元が男だから・・・結婚とか出来ねえんじやねえかつて」

キリト「確かに・・・普通は男が男と結婚つてのは見ねえな」

ユウト「いや、同性愛がダメとは言わねえんだけどよ。実際結婚する人はいるし。で

もあいつは普通に過ごしてきたからよ、無理なんじゃねえかと思つてよ」

キリト「だから心配で気になるって事か？」

ユウト「だからいつそ俺がアイツと結婚したほうがいいんじゃないかと思つてよ」

キリト「ちよつと待てそれはおかしい」

ユウト「なんでだ？俺は事情知ってるし、昔からの幼馴染みたいな感じでもいいじゃねえか」

キリト「そもそも戸籍とかはどうなんだ？いきなり女になつたつて言つても、戸籍があるわけじゃねえだろ？」

ユウト「なんか家帰つたら保険証とか諸々全部あつた、学校の制服とか学生証とかも」

キリト「何で!？」

ユウト「知らねえ」

キリト「今の一言で信憑性が皆無になつたぞ!？」

ユウト「まあ、結構早く慣れたっぽいけど」

キリト「何に!？」

ユウト「女になつたら下着とか服とか焦るじゃん？でもあいつすぐ服買つて下着買つて普通に過ごしてんだよ。スカートとか何食わぬ顔で着るんだぞ？」

キリト「俺が女になつたらスカートとか絶対着ねえ」

ユウト「なんかおかしいんだよね」

キリト「結局、お前は今どういう状況なんだ？」

ユウト「えつとな？ 優斗だな、うん」

キリト「うん、わからないぞ？」

ユウト「あいつは俺と同じクラスに転入してきたって事になってる。で、俺はあいつの元身体で過ごしてると感じて」

キリト「ふくん．．．なんだかんだ楽しそうだな」

ユウト「でもなく違和感するんだよ」

キリト「どういうことだ？」

ユウト「なんか自分を出し切ってないって言うか．．．何か我慢してる感じがするんだ」

キリト「そもそも優菜？ はどういうやつなんだ．．．？」

ユウト「．．．頭いい？ ．．．いやなんか違うな．．．とりあえず美人だけど異常つてだけは言える」

キリト「そ、そうか．．．だけどそんな奴でも会えなくなるよりこのゲームをクリアして戻らないとな」

ユウト「俺は寝たら戻れるけど」

キリト「何!?!」

ユウト「それで色んな世界を歩き来してるから、更新来たら「なんか変なの使ってる!?!」って読者が思ってるそう。ついでに言うとなんかそれでお気に入り外されそう」

キリト「・・・急に何の話してるんだ?」

ユウト「なんでもねえ、それじゃまた明日な」

キリト「ああ」

それからしばらくして

55層に武器の素材があると聞いた

なんでもドラゴンの体内にあるんだとか

よし行こう!

55層

寒いので常備ミヅハノメで進む

ユウト「朝早くじゃないか?」

ダダダダダダ

タツ

ズザザザ・・・

ユウト「でつかい穴だな・・・イフリート、見てきてくれ」

ドラゴン「ガアアアアアア!!!」

上から!?

隠れよう

サツ

中に入っていくするとまたすぐ出てきて・・・つて

キリト?

ドラゴンはどっか行っただけどキリトと・・・あと一人誰かいるな

ユウト「イフリート、クロノス。行ってくれ」

ビューン

ビューン

下ろした

キリト「・・・なんで行く先々にお前がいるんだ?」

ユウト「それはわからん」

女「知り合い?」

ユウト「色々とな」

キリト「こっちはユウト、一緒に攻略組やつてるんだ。こっちはリズベット、武器店をやってるんだが今日は新しい武器の素材を取りに来たんだ」

リズ「攻略組!?もしかして相当強い!」

ユウト「よろしく」

リズ「う、うんよろしく」

ドラゴン「ガアアアアア!!」

キリト「もう戻ってきたのか!」

ユウト「・・・ここはやらせてくれないか?」

キリト「流石に相手が相手だぞ!?やるとしても一緒だ!!」

ユウト「いや、多分一発で倒せる」

リズ「一発!」

向かってくる

ユウト「カオス」

ガキイイン

壁を作って

怯んだ隙に

ユウト「イフリート、インフェルノ」

ゴオオオオオオ

ドラゴン「ガアアアアア!!」

状態異常炎上

ユウト「一発じゃ無理だったか・・・炎上してるよな？ だったら何をぶつけたらいいんだけっか・・・」

回想シーン

ある日の夜

優斗「こんなことして何の意味があるんだよ早くねよーぜー」

優菜「必要だし、戦略の幅が広がるから覚えて損はない」

優斗「それじゃあさっさと終わらすぞ」

優菜「よし、まず炎上には疾風と核熱。次は凍結には物理と銃撃と核熱。感電には物理と銃撃と核熱。目眩と睡眠は何でも。混乱と恐怖と激怒と絶望と洗脳と忘却には念動」

優斗「・・・簡単にまとめてくれ」

優菜「・・・目に見える異常は核熱、精神的な異常は念動」

優斗「よし！ 覚えた寝よう！」

優菜「お前な・・・」

回想終わり

ユウト「思い出した・・・トラ、アトミックフレア」

ドオオオオン

テクニカルダメージ

ドラゴン「グガ・・・グオオオオオオオオ!!!」

状態異常激怒

ユウト「確か精神的な異常は念動って言ってたよな? ガイア、サイコキネシス」
ブワーン

テクニカルダメージ

ドラゴン「ガアアアアアアアアア・・・」

キリト「倒した・・・」

リズ「・・・ちよつといい?」

ユウト「なに?」

リズ「あんた武器持つてる意味ある?」

ユウト「最後の手段だ」

リズ「そ・・・そう」

リズがキリトに耳貸しての合図をする

リズ「あの人っていつもあんななの?」

キリト「・・・あんな感じだな」

その後見送って別れた

ユウト「あつそういや素材取り忘れた・・・まあいいや、もう戻っちゃったし」
また何日・・・ごめん覚えてない

74層

迷宮区

ユウト「アンデッドモンスターはウンディーネ、コウガオン」

パアアア

シユウウウ

今のでレベルが上がったな

89か・・・あともう少して90か

・・・今頃だけど、このレベルの強さって他の世界も受け継がれてるのかね？

トツトツツ

？

ユウト「誰だ？」

キリト「・・・何でプライベートでこんな頻繁に会うんだよ」

ユウト「なんだキリトにアスナか・・・レベル上げか？」

アスナ「そんなところ」

キリト「他の所はマッピング終わって後この奥だけなんだ」

ユウト「・・・ならこの先にボス部屋があるのか」

キリト「・・・多分な」

ユウト「なら俺も一緒に行つていいか？」

アスナ「別にいいけど」

奥に進むと

アスナ「キリトくん・・・あれ」

キリト「ん？」

奥に扉が見える

扉の前まで行き

アスナ「これってやつぱり・・・」

ユウト「ボス部屋か」

キリト「多分そうだろう」

アスナ「どうする？覗くだけ覗いてみる？」

キリト「扉を開けるだけなら大丈夫のはずだ」

アスナ「そ、そうだね」

キリト「一応、転移結晶も用意しておいてくれ」

武器を振り下ろそうとする

ユウト「おい！チツ・・・イフリート、クロノス」

ガツ

ダダダダダダダダダダダ

逃げ切ったようだ・・・

アスナ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

キリト「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

ユウト「グ・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

ユウト「ちゃんと・・・逃げてくれよ・・・」

アスナ「ごめん・・・」

キリト「助かった・・・」

アスナ「にしても・・・あれは苦勞しそうだね・・・」

キリト「そうだな・・・パツと見、装備は大型剣だけだけど・・・特殊攻撃ありだろ

うな・・・」

アスナ「前衛に硬い人集めて、ドンドンスイッチしていくしかないね」

キリト「盾装備のやつが10人は欲しいな」

アスナ「盾装備ねえ・・・」

ユウト「どうかしたか？」

キリト「な、なんだよ」

アスナ「君、なんか隠してるでしょ」

キリト「いきなり何を……」

アスナ「だっておかしいも、普通片手剣の最大のメリットって、盾を持てることじゃない？でも、キリト君が盾持ってるって見たことない」

ユウト「……でもアスナも片手剣じゃないか？」

アスナ「私のレイピアはスピードが落ちるからだし、スタイル優先で持たないって人もいるけど」

キリト「う……」

アスナ「リズに作らせた剣も使っていないみたいだし」

ユウト「剣を使ってる？……片手剣が二本って事は二刀流とか？」

キリト「!!？」

ユウト「あれ？今動揺した？」

キリト「してない」

アスナ「怪しいな……む……まあいいわ、スキルの詮索はマナー違反だもんね」

キリト「はあ・・・」

アスナ「そろそろお昼にしたいところだけど・・・キリト君と二人だと思ってたから二人分しかないの・・・」

ユウト「安心してくれ、俺も昼飯持参してるから」

キリト「そ、それで・・・手作り・・・ですか・・・!？」

アスナ「そ、ちゃんと手袋外して食べるのよ」

キリトはアスナの手料理が大好きらしい

かぶりついてるし

キリト「しかし・・・この味どうやって・・・」

アスナ「一年の修行と計算の成果よ」

さて・・・俺も出しますか

カオスの食料が入ってる空間を開ける

腐ったりしないように時間は常に止まった状態で固定してある

SP使わないのかって？

「固定したら消費しないのだよ」

って優菜が言ってた

キリト「マヨネーズだ・・・!」

何が？

でこれがとっておきの作って一晩置いてあつたためそのまんまで置いといた国民食キリト「こ、この懐かしい味は……！醤油だ!!」

……とりあえずイチャイチャしてるのは分かる

キリト「すごい……完璧だ……!!これ売り出したら、すごい儲かるぞ!!」

出したんだが

キリト「いや、やっぱりだめだ」

アスナ「え？どうして……?」

キリト「俺の分が無くなったら困る」

アスナ「はあ……意地汚いなあもう……気が向いたらまた作ってあげるわよ……」

ユウト「話は済んだか？」

キリト「ああ……つてこの匂いは……!!」

アスナ「懐かしいこの匂いはまさか……小学校の時給食の王様と言われた……!!」

ユウト「そう」

一晩置いたで大多数は分っているだろうと思うが

ユウト「カレード、しかも一晩置いて状態のな」

キリト「一口くれよ！」

アスナ「私も！カレーのルーとか売ってないからまだ一回も作れてないの!!」

ユウト「安心しろ、スプーンは常備五本持っている!」

ブウン

カチャカチャカチャ

ユウト「誰か来たか・・・」

キリト「はっ!」

クライン「はあああ・・・うん!?この匂いは!!カレー!?!」

こつちを向く

クライン「おお!キリト!しばらくだな!」

キリト「まだ生きてたか・・・クライン」

クライン「相変わらず愛想のねえ野郎だあ・・・あれ?なんだよ!ソロのお前が女連

れってどういう事・・・なんだ・・・?」

キリト「あーつと・・・ボス戦で顔合わせてるだろうけど、一応紹介するよ。こいつ

はギルド〈風林火山〉のクラインで、こつちは〈血盟騎士団〉のアスナ」

完全に固まってる

キリト「おーい、何とか言え。ラグってんのか?」

クライン「こつ、こんにちは!!くくクラインという者です二十四歳独身」

後ろの仲間たちがクラインの口を塞いで我先にと自己紹介する

キリト「・・・ま、まあ、悪い連中じゃないから。リーダーの顔はともかく」
クラインがハツと正気に戻る

クライン「ところでよ、この匂いはカレー・・・だよな？」

ユウト「ああ、一晩置いたカレーだ」

キリト「だがこの人数で分けるには量が・・・！」

ユウト「安心しろ、これとは別にもう一個あるんだよ！」

アスナ「でもさっきスプーンは五個しかないって・・・」

ユウト「ないなら作ればいい!!」

いっその事五本足して十本にした

あと運動会のとときかキャンプとかに使う紙皿も作った

皆で分けて食べてる

キリト「そういえば、これお前が作ったのか？」

ユウト「優菜が作ってくれた」

〈風林火山〉の皆様「優菜・・・!?!」

ん？

クライン「優菜って誰だよ!!」

ユウト「うゝん・・・もう一人の俺？」

クライン「え？」

ユウト「キリトにはもう話してるから、キリトに任せた」

キリト「おい！そこで俺に振るなよ!!」

丁度みんな食べ終わってんだが

アスナ「キリト君、〈軍〉よー」

軍の男たちはリーダー以外は休んで

リーダーは近づいてきてヘルメットを取った

コーバツツ「私はアインクラッド解放軍所属、コーバツツ中佐だ」

ユウト「ユウトだ、攻略組に入っている。そっちの黒髪はソロのキリト」

コーバツツ「君らはもうこの先も攻略してるのか？」

キリト「・・・ああ、ボス部屋の手前まではマッピングしてある」

コーバツツ「うむ。ではそのマップデータを提供して貰いたい」

クライン「な・・・て・・・提供しろだど!?!お前、マッピングする苦勞が解ってるの

か!?!」

コーバツツ「我々は君ら一般プレイヤーの解放の為に戦っている！諸君が協力するのは当然の義務である！」

アスナ「ちよつと、あなたねえ……」

クライン「て、てめえなあ……」

ユウト「コイツ一発ぶん殴っていい？」

キリトがやめろとなだめる

キリト「どうせ街に戻ったら公開しようと思っていたデータだ、構わないさ」

クライン「おいおい、そりゃあ人が好すぎるぜキリト」

キリト「マップデータで商売する気はないよ」

コーバツツ「協力感謝する」

キリト「ボスにちよつかい出す気ならやめといたほうがいいぜ」

コーバツツ「……それは私が判断する」

キリト「さつきちよつとボス部屋を覗いてきたけど、生半可な人数でどうこうなる相

手じゃないぜ。仲間も消耗してるみたいじゃないか」

コーバツツ「……私の部下はこの程度で音を上げるような軟弱者ではない！ 貴様等

さつきと立て！」

ガツ

襟首を掴む

コーバツツ「……何の真似だ？」

ユウト「お前・・・ホントに行くつもりか？」

コーバツツ「もちろんだ」

ユウト「行けば部下が死ぬとしてもか」

コーバツツ「私の部下はこの程度では」

ユウト「死ぬんだよ」

コーバツツ「!!」

ユウト「外の世界ならオレがいれば、いくらでも生き返らせてやるよ。でもなこの世界はゲームだ。データなんだよ、この体は。二度と生き帰れないんだよ・・・無理なんだよな？」

ヘル「魂は回収できても戻る場所がなかったら、死ぬしかないわね」

ガイア「作るにしてもデータですし、作ったとしてもリアルで死んだら意味ないです」

ユウト「・・・ということ、それでも行くのか？」

コーバツツ「我々に後退という選択肢はない！」

チツ

バツ

ユウト「・・・アリエル、メシアライザー」

アリエル「・・・いいんですか？」

ユウト「何言っても無駄だ」

パアア

部下「！これは・・・」

ユウト「傷は治した、もうどうなっても知らねえからな」

キリト「・・・お前はいいのか？」

ユウト「一個忘れてた。ガイア、めちやくちや抑えてサイコキネシス」

部下「ガアア！」

ドサツ

テクニカルダメージ

コーバツツ「何を!？」

アスナ「ちよつと！いきなり何して・・・」

キリト「待て」

ユウト「テクニカルになったって事はだ。疲弊しすぎてるぞ、お前の部下は」

コーバツツ「どういう意味だ！」

ユウト「さっさと帰って休んでから来いってことだよ」

パアア

治した

・・・

ザザザ・・・

無言で横を通り過ぎていく

ユウト「これでも行くのか」

コーバツツ「・・・」

ユウト「死んだらあの世に行っても殴るからな」

奥に進んでいった

クライン「・・・大丈夫なのかよアイツ等・・・」

アスナ「いくらなんでもぶっつけ本番でボスに挑んだりしないと思うけど・・・」

キリト「・・・一応様子だけでも見に行くか・・・？」

ユウト「なら俺は先に行くぞ」

ダダダダダダダダダ

クライン「あっ！ちよつと待てよ!!」

俺の勤が正しかったら・・・!!

結局ボス部屋まで来たんだが・・・

ユウト「まさか・・・!!」

キリト「おい！ユウト!!」

ユウト「キリトか」

アスナ「いきなり走らないでよ!!」

ユウト「すまねえ、だがあいつらを見らずにここまで来たって事は・・・」

クライン「いや、わからねえぜ?もうアイテムで帰っちゃったかもしれねえし」

部下? 「ああああああ!!」

!!

アスナ「悲鳴!?!」

ユウト「やっぱりか!!」

ギイイイイイイ

中是最悪だった地獄絵図だった

ボスの体力はそこまで削れてなく

さつき会った時から二人いなくなっていた

助けようにも悪魔が邪魔して行けない

ドガア

そんな事を考えてる間にまた一人やられかけてる

キリト「何をしている!早く転移アイテムを使え!!」

部下「だめだ・・・!く・・・クリスタルが使えない!!」

キリト「な・・・」

アスナ「なんてこと・・・!!」

コーバツツ「何を言うか・・・ツ!!我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない!!戦え!!
戦うんだ!!」

キリト「馬鹿野郎・・・!!」

この状況で転移アイテムが使えない・・・という事はいない二人は死んだという事だ
ユウト「クロノス、ザ・ワールド」

ドゥーン・・・

時間が止まってる間に

ユウト「ヘル、悪魔の頭落とせ」

その間に軍を全員出す

ヘル「終わったわよ」

ユウト「よし、そして時は動き出す」

ドゥーン・・・

キリト「え?」

ユウト「お前らもさっさと出る」

ボス部屋を出た

クライン「今どうやったんだ？」

ユウト「時間を止めた」

クライン「時間!?!」

コーバツツ「なぜ邪魔をする!!」

ドカッ

ユウト「・・・おい、勝手に何してんだ？」

イフリート「お前が殴るより、俺が殴る方がダメージが少ないと思っただけだから」

ユウト「・・・俺はお前の方がダメージデカいと思うけどな」

コーバツツ「今・・・どうやって・・・!?!」

ユウト「二人死んだんだろ？お前のせいで」

コーバツツ「!!」

ユウト「作戦も立てずにただのゴリ押しでいつまでもできると思うな」

コーバツツ「我々は・・・」

ユウト「お前達は、まったく攻略組と一緒にやろうとしたことがあったか？今回で初

めて人が死んだ。ボスに対して、調子に乗って挑んで。お前らは仲間を殺したんだよ。

現実で家族が待ってる仲間を」

部下「う・・・うううううう・・・」

ユウト「なんで忠告を聞かなかった」

コーバツツ「・・・我々は一般プレイヤーの解放のために・・・」

ユウト「命を失つてでもお前はそれが突き通せるか？」

コーバツツ「・・・」

ユウト「命と引き換えにまで何かをできる奴なんて小説みたいにくささんいるわけじゃねえ。それを統制も取れない、リーダーシップもないやつが命張つてまで出来るなんか思つちやいねえよ。でもなあ。お前は真正銘のクズだ」

コーバツツ「なんだ」

ユウト「お前には引き返す選択肢があつた。身の丈に合わないことをしてまで、仲間を殺してまで倒して何の意味がある。お前は選択を間違えたんじゃない、選ぼうとしなかつたんだ」

コーバツツ「・・・」

ユウト「お前はリーダー・・・いや、人失格だよ」

タツタツタ

キリト「おい！まさか行くつもりじゃねえよな!？」

ユウト「あのぐらいなら一人でも倒せる」

キリト「出来るわけねえだろ!!」

ゴオツ

ビリビリビリ

ユウト「あいつはとことんぶつ殺す」

キリト「くっ……行くなら俺も行くぞ!!」

クライン「お前まで何言ってるんだよ!!」

アスナ「……私も行くわ!!」

クライン「おいおい、アスナさんまで何言ってるんだよ!!さっきの見ただろ!?自殺行為だ!!」

ユウト「攻撃ならオレが受ける、死にかけてたら回復してやる」

クライン「そういう問題じゃねえだろ!!」

キリト「確証はないけど、コイツなら何とかかなりそうな気がする」

アスナ「私も、どこから湧いてくるのか分からないけど何故か信じられるわ」

クライン「ぐ……ああもう分かったよ!!なら俺だっけ行ってやる!!やけくそだ!!」

〈風林火山〉の皆様「やりますよ!!」

ユウト「ハッキリ言うて助かる」

キリト「……一つ頼みがある」

ユウト「なんだ?」

キリト「十秒持ちこたえてくれたら、俺のとおつておきの技をだす。頼めるか？」

ユウト「・・・ふん、十秒立つ前に倒してやるよ」

ギイイイイイイ

ブワツ

ヒュルヒュルヒュル

バシューン

ユウト「行くぞ!!」

ボスが武器を振り下ろそうとするが

ユウト「アリエル!!」

シュタツ

極・物理見切り発動

ガツ

腹を搔つ捌く

ユウト「スイツチ！」

クライン「おう！」

バババ

だがやはり全員攻撃が軽い

ユウト「なら・・・シミラーダガー・アトミックフレア!!」
ドオオオオン

キリト「あとは任せろ!!」

ザザザッ

ボス「グオオオオ!!」

キリト「スターバースト・ストリーム!!うおおおおおああ!!」

何でも斬りつける

そして

十六撃目が胸を貫き

キリト「・・・ああああああああ!!」

ボス「ゴアアアアアアア!!」

パライイイン

するとキリトがよろめいて・・・倒れた

クライン「おい!キリト!!」

ユウト「アリエル!」

アリエル「・・・大丈夫です、ほんの少しですが体力は残っています」

パアアアア

「アリエル「最大値まで回復しましたが、疲労がたまってるのもう少し寝てしまおうと思います」

アスナ「そう・・・」

ユウト「今ホツとしたな？」

アスナ「なっ!?!してないわよ!!」

ユウト「俺はあいつらと話をしてくる」
外に出て

コーバツツ「・・・勝てたのか」

ユウト「ああ」

コーバツツ「・・・私は間違っていたのか？」

ユウト「ああ」

コーバツツ「・・・私はもう何もできないのだろうか」

ユウト「それは違う」

コーバツツ「？」

ユウト「生きているという事は、お前にやらなくちやならねえことがあるって事だ」

コーバツツ「何を知ろというのだ・・・」

ユウト「まずは死んだ部下の墓でも作ってやれ」

コーバツツ「・・・そうさせてもらう、色々済まなかった」

ユウト「アイツらをお前が殺した。それは変わらねえが、乗り越えられるのが人だ。成長したお前を楽しみにしてるぞ」

去って行つた

・・・

アリエル「あなた本当は結構頭いいんじゃないですか？」

ユウト「・・・勉強は出来ねえよ」

アリエル「頭は回るといふ事ですか」

ユウト「優菜には内緒な」

アリエル「わかつてます」

メーテイス「しかし記録はしておきます。ついでにキリトさんの技もです」

戻つたらキリトは目を覚ましてた

クライン「そりやあそうと、オメエなんだよさっきのは!？」

キリト「・・・言わなきやダメか？」

クライン「つたりめえだ！見たことねえぞあんなの！」

キリト「・・・エクストラスキルだよ。〈二刀流〉」

クライン「しゅ、出現条件は」

キリト「解ってりやもう公開してる」

「そーいや俺もダガー一本だが二本に出来るのかな？」

クライン「つたく、水臭えなあキリト。そんなすげえ裏技黙ってるなんてよう」

ポンツ

キリト「スキルの出し方が判ってれば隠したりしないさ。でもさっぱり心当たりがないんだ」

出来た

キリト「・・・こんなレアスキル持つてるなんて知られたら、しつこく聞かれたり：いろいろなあるだろう、その・・・」

ユウト「シミラーダガー・スターバーストストリーム」ボソツ

クライン「ネットゲーマーは嫉妬深いからな。オレは人間が出来てるからともかく、妬み嫉みはそりやあるだろうなあ。それに・・・」

シユバババババババババ

ダガー版みたいに技が淡々とする

クライン「!!おいおい、今のは」

キリト「お前・・・嘘だろ？」

ユウト「何が？」

キリト「……こいつには勝てる気がしねえな……」
その夜

ユウト「……そろそろ戻ろうかな？」

イフリート「どの世界にだ？」

ユウト「さあね、とりあえず優菜と同じところがいいけどな」

だってこの前寝る時抱いて寝たからな！

……変な意味はねえからな

抱き着いてだからな？

それ以外考えたやつは心がブラックコーヒーかなんかで出来てるんじゃないか？

とか考えてたら寝てた

第百九話（T O L O V Eるに転生したけど、他の小説の奴も来てる件『第七話』より）

日曜なので皆で遊びに来たんだけど・・・

ララ「わーこれが地球の街かーなんかゴチャゴチャしてて面白ーい!!!」

視線が凄い・・・

ララ「わ、なにアレー」

ざわざわ

リト「ララ！ちよつと来いっ!!」

ララ「え？え？」

路地裏

リト「うろろうろする前にそのカツコ！何とかねーのか？やっぱり目立ちすぎだ」

ララ「えー・・・ドレスモードだめ？」

メイ「地球見物が目的なワケだしね」

優斗「何事もなく街を見て回りたいならもつとフツの服の方がいいかもな」

ララ「そっかー」

ペケ「仕方いですね」

優菜「ペケはどんな服にも変身できるんだろ？」

優斗「ならその辺歩いている人の真似すりゃいいんじゃないやねえの？」

ララ「うーん・・・じゃあアレかな？ペケ！」

ペケ「了解です、衣装解析完了！フォームチェンジ!!」

会社員の男性の服になった

ララ「どう？」

リト「それ男じゃねーか!!」

女性警官の服になり

ララ「これは？」

リト「それもちがーう!!」

バニーガール!?

ララ「じゃーん!!」

リト「どこ歩いてたんだそんなの!?!」

怪獣の着ぐるみ・・・?

ララ「こんなのも！」

リト「ダメ!!」

原始人!?

どっかいる!?

リト「NO!!」

悟空の格好

リト「アウト!!」

メイ「一旦ストップ」

リト「え?」

メイ「単純にどれにすればいいか言えばいいんじゃないの?」

リト「それもそうだな・・・なら、アレ」

普通の服になった

美柑「あ、それ可愛いー」

リト「それならOKかな・・・」

ぐっ

腕を組んで進んでいく

ララ「よしじや出発ー♫」

リト「こ、こら腕組むなー!!!」

美柑「ラブラブだねーリト」

メイ「私達付いてこない方が良かったんじゃないのー?」

優斗「・・・この世界は平和だな」

優菜「おい待てそれフラグじゃねえよな?」

その後色々周って

ララ「このメカはなあに?」

美柑「お金を入れてクレーンでぬいぐるみを取るんだよ」

ララ「へー! わーあれ可愛い!」

ウサギのぬいぐるみか

優菜「でかいから結構難しいぞ?」

リト「・・・つたくしょうがねーなー」

取った!

優斗「おー・・・凄いな」

ララ「リトすごい!!」

美柑「そーゆー細かいこと無駄に得意だよねえ・・・」

ララ「ありがとうーリト!! これ私の宝物にするね♡」

その後

リト「美柑なんだそれ?」

美柑 「ん、さつき服買ったらもらったんだ。最近この辺に出来た水族館の割引券だつて」

ララ 「スイゾクカン？」

リト 「魚とか海の生物がたくさんいる所だよ」

ララ 「へーっ楽しそー！」

ス・・・

？

美柑 「ララさん後で行ってみようか」

スウウ

!?

リト 「お、おいララ!!？」

服にどんどん穴が!!

優斗 「服が消えてく!!!」

美柑 「どーゆー事!？」

ペケ 「も・・・申し訳ありませんララ様」

ララ 「ペケ!？」

ペケ 「どうやらエネルギー切れのようです・・・先程の連フォームチェンジが思った

より負担になったようで・・・」

メイ「嘘でしょ!？」

美柑「エネルギーが切れるとどうなるの？」

ペケ「コスチューム形態が維持できなくなります・・・おそらくあと三分程で・・・スツポンポンです」

ララ「あは♪困ったねー」

パサ

パンツ!?

リト「少しはあわてろよお前くく!!」

ララ「どこ行くの?リト」

リト「と、とにかく一旦どこかへ隠れるんだっ!!」

優菜「メーテイス、下着の店とか分かるか？」

メーテイス「この先にランジェリーショップがあります」

おほ♡

すげー!!

新しいファッション?

優斗「目立ち始めたぞ!!」

優菜「あそこの店だ！入るぞ!!」

リト「ランジェリーショップに!？」

メイ「スツポンポンよりマシだよ！」

美柑が下着を持ってきて

美柑「ララさんこれ持って試着室入って!!」

中に入れた

美柑「これで下着は何とかなったね」

リト「あ・・・ああ」

美柑「じゃ今度はララさんの着る服買ってくるから」

・・・なんか覚えがある気が

その方向を見ると

優菜「・・・春菜？」

ララ「こんなの着てみたよー♡どう？リト似合うー!?あれ？春菜だ」

メイ「出てくるタイミングが・・・」

その後美柑が戻ってきて

水族館に行くことになって

道中

美柑「えーと・・・春菜さんって呼んでいい？」

春菜「あ、うんよろしくね。美柑ちゃん」

優菜「・・・あれは運が悪かったな」

優斗「まだ終わったわけじゃねえ、正気を保てよ」

メイ「大丈夫、案外気にしてないかもよ」

リト「・・・慰めはよしてくれ・・・」

水族館

ララ「わあーきれいー!! いろんなおサカナがいるねー」

リト「当たり前だろ、水族館なんだから」

ララ「あ! あれすごーい♪」

美柑「ララさんあんまりはしゃぐと迷子になるよー」

ララ「見てーこれ大きいよ春菜ーっ」

メイ「解ってるよね？」

優菜「もちろん」

優斗「OK」

数分後

メイ「これだけ時間稼げばいいだろう」

キヤーツ

な・・・なんだア!?

ペンギンが飛んでる!!?

優菜「ララがなんかしたな・・・」

優斗「みんな・・・捕まえてくれ」

そのうちにリトの所に・・・

ズルズル・・・

??

バシユーン

優菜「シヤドウ!？」

メイ「シヤドウ?」

優菜「コイツは俺がやる。お前はリトの所に」

優斗「わかった」

メイ「え?どゆこと?」

優斗「いいから行くぞ!」

ダダダダダダダ

カオスで怪盗服になる

バイコーンがいつぱい

優菜「アラメイ、行くぞエル・ジハード」

ドゴオオオオオン

ピクシーもいるのか

銃を取り出す

パンッ

バババババババババ

シューウウウウウ

やったか

警備員「君！何やってるんだ!!」

後ろにピクシーが!!

優菜「しやがめ!!」

銃口を向ける

警備員「ひっ!」

パンッ

シューウウウウウ

優菜「これで全部か？」

警備員「そ、それは本物なのか？」

優菜「モデルガンだよ、それじゃ」

ダダダダ

怪盗服を解く

優菜「大丈夫だったか？」

優斗「やったか？」

優菜「なんとかな」

メイ「ララがやらかしたし、とんずらする？」

リト「仕方ねえか・・・」

次の日はリトが親父の手伝い行っただけなんでカツト

登校中

ララ「むくく何で朝からこんなに暑いのか？リト」

リト「そりや夏だからな」

メイ「しかも日本の夏は湿気のせいで余計熱く感じるからね」

リト「これで参ってたら午後からはもっと暑くなるぜ」

ララ「デビルークにはナツなんてないもん・・・もう今日ずっと裸のままですごそそ」

かなく」

リト「絶対ダメ!!!」

ララ「あは! ジョーダンだよリトってばあわてちゃってカワイーんだからあ♡」

リト「お前の場合冗談に聞こえねーんだよ!!」

ララ「暑いけどおー今日はプールってやつに入れるからいいんだ♫」

リト「ん? ああ女子は今日から水泳だっけ、もしかしてペケが水着になるのか?」

ペケ「当然です。私は完全防水ですから」

メイ「タオルとかは家のだけどね」

リト「ん? おいお前!! そこで何やってんだ!!」

黒ずくめでこつちにカメラを向けてるやつがいた

ダッ

リト「待てっ!!」

結局逃がしたらしい

授業中

朝のは誰だったんだ?

急すぎて気も探れなかった

リト「あつ! てめー授業中までっ!! 逃がしてたまるか!!」

ダダダダ

先生「え、なになにわしの授業つまらんかった？」

猿山「トイレじゃねースか？」

ざわざわ

ララ「どうしたんだろリト」

ペケ「さア・・・」

その後水着に着替えてプールへ

佐清「えー今日の水泳授業は一回目でもあるし、自由時間にしようと思う」

佐清先生気前いい♡

メイ「結局あのリトの奇行は何だったんだ？」

優菜「さあね」

佐清「ではその前に準備体操をしようか。西連寺前に出て手本を」

西連寺「はい」

佐清「まずこのように体を曲げて・・・」

いち・につ

さん・しー

準備体操して入ろうとしたが・・・

ブクブクブク

?

なんか隅に泡が

気を探る

リト・・・?

・・・いくら特技がラツキースケベでもあいつに除き出来る度胸はねえ

ということは事情ありか

メイ「どうかした?」

優菜「なんでもない」

入ってリトの近くに

ボガッ

リト「!?!」

落ち着け

俺が逃がすと分かるようにジエスチャーで表現した

リト「!」

コクッ

すると

ザザザザ

佐清「な．．．何だ!? プールに渦が!? みんなあがりなさい! 早く!!」

リト「ぎやー何だコリヤアアアー!!」

優菜「うおー．．．死にはしねえがめんどくせえな」

俺は真上

リトは校舎の方に飛んで行った

渦を戻っていく

何事もなかったのように戻る

メイ「あれをよく泳いで戻ったね．．．」

未央「な．．．何が起こったの?」

里紗「さア．．．」

ボテツ

里紗「!?」

未央「え? この人．．．野球部の弄光センパイ!?」

パラパラパラ

写真が落ちてくる

何コレ!? 女子の盗撮写真がいっぱい!!

弄光「あら．．．」

この女の敵!!

ボコボコにされて二週間停学・・・自業自得だな

放課後

教室を出て

メイ「さつきは運よく？弄光が落ちてきたからあやふやになったけど、普通にあれ泳いで戻るのありえないからね？」

優斗「一応先輩だろ？・・・先輩だよな？」

優菜「安心しろ、先輩だ」

リト「俺の苦労って意味なかったのか・・・？」

ララ「苦労って・・・何かしたの？」

リト「いや、なんでもねえ」

何気なく校門の前を見ると道を挟んでおくにお母さんと男の子という平凡だがこれぞ平和という組み合わせの二人が歩いてた

子供はボールを持つてる

公園とかで遊んできたんだろう

最初の世界でもあんな時代あつたっけ・・・？

・・・思い出したくもないけどな

すると男の子はこけてボールを落とす

道路までボールが転がっていく

あちやー・・・ありやもうあきらめた方が良いぞ

左から大きめのトラックが来る

ボールは潰されちまうな

すると男の子が取りに行く!?

優菜「馬鹿野郎!!」

リト「おい優菜! どうした?」

俊敏性強化魔法

優菜「メーティス、ラクカジャ! スクカジャ!」

ヒュンツ

*超スピードで動いてるので時間の流れを遅く感じて周りがよく見えています

お母さんは絶叫して子供の名前を叫んでる

トラック運転手はスマホを見ながら運転してやがる

今の時代一発免停もあるんやぞ?

・・・あつたよな?

飛んでギリギリトラックと子供の間に入って

子供に抱き着く

空中なので飛ばされるからゴロンゴロン転がっても子供が怪我しない様にする

そして

ドンッ

ドカッ

ドン

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

止まった

優菜「ちよつと痛いな・・・」

子供「お姉ちゃん誰？」

子供を足の上からどける

優菜「君今危なかったんだぞ、トラックに轢かれそうになって」

子供「え!? そうなの!？」

優菜「私がいなかったら危なかったね・・・でも道路にボールが転がってつても取りに行ったら危ないからな? もうやめとけよ?」

子供「うん!」

お母さんが子供に駆けよる

お母さん「息子を助けていただきありがとうございます!!ありがとうございました!!ありがとうございます!!」

優菜「お母さんもちやんと見とかなね。次も助かるとは限らんのよ?」

お母さん「すいませんでした!!」

運転手が下りてきた

運転手「すいません!!オレがスマホ見てたばっかりに・・・大丈夫でしたか!?

優菜「大丈夫だけど・・・ちよつとこつちに顔近づけて」

運転手「?はい」

バチン

運転手「いったーい!!!」

デコピン

優菜「ながら運転は犯罪だからな?」

運転手「す、すいませんでした!!」

土下座

優菜「謝って済むなら警察はいらんのよ。わかる?」

運転手「は、はい・・・」

優斗「そこらへんにしといたらどうだ?」

優菜「優斗……」

優斗「第一、お前大したケガしてないだろ」

優菜「……そりゃそうだが」

今話してる間に子供が立とうとするが・

子供「痛！」

尻もちをつく

優菜「おっと、大丈夫か？」

脚を打撲したのか

これなら……

優菜「この指見ても」

子供「え？」

パアア

子供「光ってる!!」

優菜「これを痛いところに当てると……？」

スウウウウ

光が足に入っていく

子供「わああああ……！」

優菜「立ってみて」

スッ

子供「痛くない！ありがとうねお姉ちゃん!!」

回復魔法・・

優菜「今度から気を付けろよ。後アンタはちゃんと警察な」

運転手「はい・・・すいませんでした・・・何か謝礼をさせてもらいませんか？」

優菜「いや、いいわ。そういうのは」

優斗「よし、なら行くぞ」

運転手「あ！ちよつと！残ってもらわないと色々面倒に・・・」

優菜「あ・・・じゃそれをどうにかしてくれ！それが謝礼だ」

運転手「そんな・・・」

優斗におんぶしてもらう

優菜「それじゃ！また!!」

ダダダダダダダダ

リト「・・・あいつら地球人か？」

メイ「マジトーンやめろ」

ララ「宇宙人でもあんなに速いのは珍しいよ？」

道中

ゆっさゆっさ

優菜「お前わざと揺らしてないか？」

優斗「気のせいだ」

優菜「こ〇〇ぼのク〇〇マみたいなことしてないよな？」

優斗「してない」

優菜「・・・いやしてるよな？」

優斗「ちよつと急ぐぞ」

ダダダダ

数日経って

明日は臨海学校

だが・・・

リト「台風!!？」

美柑「しかも今夜から直撃だつてサ」

メイ「そういえば雲行きが怪しいね」

優斗「こりゃ臨海学校は中止かもな」

ララ「えーそんなのやだよー!!!せっかく色々準備してきたのに!!!」

リト「しよーがねーだろ、台風が来たんじや泳げもしねーし・・・」

ララ「私は何とかする!!行くよペケ!」

リト「おいララ!?!ちよつと待てよ!どうする気だ!?!」

ビューン

優斗「飛んでったな・・・」

優菜「・・・扉閉めてけよ」

ガチャ

優菜「ホバル、台風を消したりできないのか?」

ホバル「できるけど、やったら一か月ぐらい世界単位の異常気象だ」

優菜「マジか」

・・・その後帰ってきて

アナウンサー「えー大変珍しい現象です!台風は突如大きくカーブを描き日本から遠ざかりました!!私も長年気象予報士をやっていますがこんなことは初めてで・・・」

美柑「何したの?ララさん」

リト「うゝゝゝん・・・声つつーか、気合で解決つつーか・・・さすがは宇宙の帝王の娘・・・」

当日

校長「さー諸君!! いざ出発ー!!!」

おーーーっ!!!

なぜだろう

いやなよかんが

おさまらん

第一百話（T O L O V Eるに転生したけど、他の小説の奴も来てる件『第八話』より）

バス内

ララ「わあー地球ってキレイな所がたくさんあるねー春菜!!」

春菜「地球？」

優斗「こういうの久しぶりだな」

優菜「流石に変なのは出ないだろ」

優斗「それフラグだろ」

メイ「それいっいたらマジになるよ」

旅館前

女将「彩南高校のみなさーん、遠い所よくぞいらつしやいましたくくく!!」

猿山「おおっ！美人女将だ」

校長「高美ちゃん♡会いたかったよオーオー♡♡」

ゴツ

顔を迷いなく殴った

優斗「意外と武闘派・・・？」

校長「相変わらずつれないなア高美ちゃん♡」

優菜「校長の根性もすごいな」

女将「こちらが大広間でエーす」

大広間

校長「えー今日から三日間の臨海学校!!皆自然と大いに触れあつて楽しい思い出を作ってください!!というワケで今夜はさつそく恒例の肝試し大会があります!お楽しみに~~~~!!」

マイクを旅館の人に渡すと

校長「ねエー高美ちゃん♡」

アツパーカットをかます女将

リト「この臨海学校つて・・・もしかして校長があんな女将に会いたいための企画なんじゃねーか？」

猿山「ありえるな」

浴衣に着替えて

優斗はリトと同じ部屋割

宿泊部屋

猿山「んじや早速風呂行くか」

リト「そーだな」

猿山「女子も今頃入ってんだろな〜」

クラスメイト「ここはやはり男としてやっつくべきかね？」

リト「お前ら・・・何を・・・!？」

猿山「決まってるだろ、ノ・ゾ・キだよ」

クラスメイト「よし行くぞ!!」

リト「お、おい！待てよ何で俺まで!!」

優斗「なんか面白そうだから俺も行くわ」

猿山「おお！こいこい！」

その頃風呂

部屋割はララたちと一緒に来てる

メイは別の部屋

未央「えーララちい肝試し知らないの!?!そっかー、海外生まれだもんね」

ララ「うん！キモダメシってなんなの？」

未央「肝試しっていうのはね・・・ま、わかりやすく説明するとお。男女ペアで暗い夜道を歩いて目的地を目指すゲームみたいなもんだよ」

ララ「え？夜道を歩くなんてカンタンじゃないの？」

未央「ところがそーはいかないの！」

春菜「夜道の行く手を阻むオバケたちが」

里紗「うらめしやくくってね・・・ま、もちろんそれはオバケ役の人なんだけど」

ララ「へー」

里紗「でもさー高校生にもなって肝試しってガキっぽくない？」

未央「言えてるー」

優菜「はあ・・・」

メイ「どした？ため息ついて」

優菜「いや・・・なんでもない」

メイ「もしかして肝試しが怖いのかな？」

優菜「そ、そんなわけないだろ・・・」

メイ「怖いのか」

優斗たちは

ここの風呂は男湯と女湯の境目に大きい岩があるんだが

そこを登っている

リト以外な

リト「お・・・おいやっぱやめよーぜ覗き何て」

クラスメイト「バカ、ここまで来て何言ってるんだ」

猿山「リトだつてホントは見たいだろ？西連寺のハダカ！」

リト「な!!何言ってる・・・」

ガバツ

口を押える

未央「でもさー結構馬鹿にできないかもよ。知ってる？この肝試しのジンクス」

優菜「ジンクス？」

未央「この臨海学校の肝試しで最後までたどり着けた勇氣あるペアはね。必ずその後

結ばれてカップルになっちゃうんだって!!」

里紗「えー？ウソ々々」

未央「マジだつて！去年も一昨年もこれでカップル誕生したらしいよ！」

ララ「キモダメシつて面白そーだね。楽しみー」

・
・
・

里紗「ねえララちいの尻尾・・・直に生えてルポクない？」

未央「ま・・・まさかアキつと海外の精巧なアクセサリーだよ」

優菜「案外生えてたりな」

里紗「……ならアンタもそれ生えてんの？シツポを指さす」
優菜「……ご想像にお任せするよ」

未央「生えてるわけないって、ねえ春菜……春菜？」
するっ

里紗「もー何ボーっとしてんの春菜くく」

春菜「キャーーーーー!!」

里紗「キャハハハ春菜ビツクリしすぎー」

優斗達

猿山「くっ……あと少し……」

キャーーーーーのぞきよオー!!!

猿山「やべ……見つかった!？」

こんな所に校長がいるく!!!

猿山「へ？」

校長「いやー私はただ見張りを……」

シユンツ

ドカツ

ドカツ

顎を殴って気絶させた

優菜「エロ校長が・・・」

引きずって外に出した

里紗「・・・今近付いたとこ見えた？」

未央「見えなかった・・・気づいたら校長の目の前にいた」

ララ「やっぱり優菜は速いな」

優斗は

猿山「・・・帰るか」

クラスメイト「だな」

優斗「いや、俺は行くぞ」

猿山「やめとけ！今ので女子は覗きに敏感だからバレたら殺されるぞ!!」ボソツ

クラスメイト「そうだけ!?今なら誰にもばれずに未遂で終わるんだ、やめておけ!!」ボ

ソツ

リト「そもそも除き何てしようとしたのが間違いだったんだろうが、気づけよ!!」ボ

ソツ

優斗「いや、俺はやるぞ」

登っていく

猿山「自殺行為だー！」ボソッ

クラスメイト「さっきの見ただろ!? 優菜に一瞬でやられるぞ!」ボソッ
山頂まで行き

リト「やめろおおお!!!」ボソッ

見ると同時に顔面にお湯がたくさんかかる

優斗「ギャアアアア!!!」

ドシン

里紗「男湯から悲鳴が!」

猿山「言わんこっちゃない!!」ボソッ

リト「と、友達が滑って頭打っただけだ!問題ない!!」

未央「お大事にー」

猿山「ナイスリカバー」

リト「でもお前……大丈夫か?」

優斗「安心しろ……このぐらい大丈夫だ」

クラスメイト「今度こそ戻るか」

優斗が顔を出す十秒前

優菜視点

イフリート「・・・優斗が覗きするつもりだぞ」

アリエル「じゃあ私が伝えておきます」

覗きは犯罪だぞ？なのに校長がするなよ・・・

アリエル「今度は優斗さんがしようとしてますよ」
なに？

アリエル「五秒後に岩山の山頂です」

手でやる水鉄砲を作る（伝われ）

3・・・2・・・1

ビュッ

バシヤン

ドシン

優斗「ギヤアアアア!!!」

里紗「男湯から悲鳴が!？」

リト「と、友達が滑って頭打っただけだ！問題ない!!」

未央「なんだ・・・お大事にー」

優菜「馬鹿だな」

春菜「？」

夜外

校長「さて!!では今から肝試しのペアをくじ引きで始めます!各クラス男女それぞれでくじを引き同じ番号同士がペアです!!」

引くと

優菜「14か」

その後聞いて回ると

優菜「・・・お前かい」

優斗「・・・そんなとこだろうとは思ってた」

優菜「いや、案外助かったかも」

いきなり来たら飛びつくかもしれないなかったし

優菜「お前が相手でよかったわ」

校長「では肝試しスタート!!」

数分後

優斗視点

優斗「さてやつと順番が回ってきたか」

優菜「・・・た、頼みがあるんだがいいか?」

優斗「なんだ?」

優菜「て、手を繋いでで・・くれるとつとと・・たた・・助かる・・い、色んな意味で」

ガクガクガク

優斗「・・・お前そんな駄目だっけ？」

優菜「あ、あれでも我慢してつて、る方だったけっけど・・・か、カマエルのせい・・・で歯止めがき、効かなくなつた・・」

優斗「・・・なんかよく分からんがとりあえず分かつた」

猿山「ひいひい!!」

ダダダダダダ

サツ

優斗の後ろに隠れる

通り過ぎて走つて行つた

続々と逃げてくる

優斗「行くぞ」

優菜「あつ！ちよつと待つて・・」

優斗『ヤバイ、いつもとギャップ差がありすぎて一線超えそう』

ゆつくり歩く

うらめしやく

優菜「ギャー!!落ち武者!!!」

うおおおお!!

優菜「ジェ○ソー○!!13日○金○日に帰れ!!」

ガアアアア!

優菜「狼男ー!!月消してやろうかー!!?」

優斗『自分より怖がつてる人がいると怖くないって本当なんだな』

優菜「うう……」

優斗『涙目!!……一線超えていい?いいよな!?!』

ガアアア!!

優菜「ギャアアアアアア!!!」

ダダダダダダダダ

優斗「あつ!おい!!」

シユタタタタタタタ

オバケ役の山本さん「やっぱりあの子が特殊なだけなんだな……にしてもあの子たち速いな、陸上部かな?……ってそつちは道じゃないよ!!」

追いつけねえ!本気で逃げてやがる!!

優斗「カマエル、スクンダ。メーティス、スクカジヤ」
コオオオオ

ついでに波紋で身体強化、魔法もかけたから
近くまで来て

腰を抱きかかえて捕まえた

ジタバタゞ（：3ノシゞ）ノシ

優斗「暴れんな！」

優菜「アババババババババババ」

優斗「・・・」

ふにっ

*どこを触ったかはご想像にお任せする

!!

バキッ

優菜「どこ触つとんじやボケえええ!!・・・ハッ!すまん!!」

駆け寄る

優斗「ててて・・・やっと正気に戻ったか」

優菜「いや、ホントにすまん。今回は全体的にオレが悪い・・・」

落ち込んでるな

優斗「・・・やっぱそっちのがお前らしいわ」

優菜「そりやどういう意味だ!？」

優斗「にしても、ここはどこだ?どこまで走ってきたんだ?」

優菜「気を探って戻るか・・・どうやらもう肝試しは終わったらしいな。みんな集まってる」

ガサガサ

ビュンツ

優斗「危ない!!」

コオオオ

波紋で地面に方向をそらす

優菜「誰だ!!」

優斗「これは・・・矢か?」

優菜「気は感じないぞ」

ガシヤガシヤガシヤ

県や弓を持った骸骨がたくさんいる

優菜「も、モンスターか・・・」

優斗「やつぱりフラグ回収か・・・お前アイツアンデッドだけど大丈夫なのか？」

優菜「多分大丈夫・・・他のやつらは身体が受け付けないが、モンスターは大丈夫らしい」

優斗「ならやるか」

優菜「ああ！」

ドウン

シュインシュインシュイン

ドカツ

ドガガガガ

バキッ

優斗「ミツハノメ！大氷河期！！」

パキイイン

優斗「クロノス！ギガントマキア！！」

パライイイン

優斗「たくっ！多いな！！」

春菜「優菜さん達どこに行つたのかな？」

未央「こつちの方にいるかな？」

里紗「帰り道解ってるよね？私らまで迷子になるのは勘弁だよ」

モンスター「ガアアアア!!」

未央「え？これは・・・偽物だね・・・？」

!!ヤバイ

優菜「オレが行く！」

優菜視点

モンスター「グアアアア!!」

いやあああ!!

優菜「ハアアア!!」

ドガア

ベキベキベキ

ボキヤアア

粉々にした

優菜「・・・大丈夫か？」

里紗「いた！今の何？ドツキリか何か？」

優菜「だったら嬉しいんだがな」

春菜「!!後ろ!!」

回し蹴りで倒す

優菜「多いんだよ。優斗！こつち来てくれ」

シユタツ

優斗「どうする？」

優菜「火炎で燃やしたら火事になるし、核熱は一帯が消えちまうな。」

里紗「どういうこと・・・？」

未央「こつちが聞きたいよ」

優斗「じゃあどうするんだ？」

優菜「モンスターは死んだら消えるよな」

優斗「ああ」

優菜「なら・・・カオス、アイツら全員を上空にまとめろ」

モンスターが浮いていく

優菜「あそこに雷ドーンだ」

優斗「アラメイ、エル・ジハード」

ドゴオオオオオン

モンスターは全員消えた？

優菜「はあ・・・終わったか」

里紗「……とりあえず戻る？」

優菜「そうさせてもらおうか」

未央「……後でいろいろ聞かせてもらっていい？」

優菜「洗いざらい話すよ」

スタスタスタ

ララ「あついたよー！」

リト「ハア……ハア……何でこんなところまで来てんだよ……」

メイ「クラス全員で探してるから、皆伝えてくるよ」

優菜「その必要はないよ。もう行かせてるから」

メイ「誰が？」

優菜「ペルソナ」

メイ「そ、そう」

ガサガサやって宿まで誘導させる

優菜「とりあえず、説教かな？」

メイ「だろーうね」

ガサガサ

シュバツ

メイ「ザ・ワールド」

ドガア

シユウウウウウウ

優斗「・・・まだ残っていたか」

優菜「・・・よく考えたら探知魔法使えばいいんじゃないん」

ブワツ

・・・もういないな

優菜「もういないみたいだな」

リト「とりあえず戻るぞ、向こうだ」

優菜「ああ」

その後校長に怒られはしたがなんていうか・・・うん、優しかった

こういう時はありがたく感じる

消灯前

里紗「それでー？色々聞かせてもらおうかー？」

優菜「お前楽しんでるよな？」

未央「さーさー早く説明してもらおうかー？」

ララ「私も聞きたい！」

春菜「私もちよつと聞きたいな」

優菜「お前らはエサやつてる時のコイか」

とりあえず全部話した

里紗「それ本当？」

未央「なんか女子になつたり宇宙人になつたり最後に人間やめたりして大変だね」

ララ「そんな経歴聞いたことないよー」

優菜「聞いたことあつたらおかしいよ」

里紗「というか、私ら男と風呂入つてたの？」

優菜「大丈夫だ、元は男でも精力皆無だったから」

未央「そ、そう」

優菜「それに男やつてた時期より女の時期のが何倍もあるから」

春菜「なんていうか・・・結構女の子っぽいよね。男の子だったとは思えないぐらい」

優菜「努力の成果だ」

里紗「さ！聞くこと聞いたし寝よう！」

優菜「え？」

未央「だねー」

優菜「え？」

春菜「明日も早いしね」

優菜「ちよ」

ララ「おやすみー」

おいしいいい

優菜「・・・はあ・・・仕方ねえな」

とうか男と寝るの抵抗ないのか・・・？

寝た

次の日

く・・・

どうしてこんなことに・・・

これだけは避けたかった、いや避けねばならなかった

里紗「結構かわいいじゃん！」

未央「やっぱり海といたらこれでしょ」

メイ「結構似合ってるよ・・・ブフツ」

優菜「笑うな!!」

そう

俺は今水着を着ているのだ

優菜「・・・何でこんなに布面積が少ないんだよ・・・」

優斗「俺は好きだけど」

!!

シユタタタタタタタタタ

・・・逃げよう

変な顔する前に逃げよう

ザブン

優斗「あ・・・」

メイ「あーあ逃げられた・・・」

優斗「・・・俺も追いかけてよう」

シユタタタタタタタタタ

バシヤバシヤバシヤ

バシヤバシヤバシヤ

優菜『追いかけてくんない!!』

優斗『絶対（・・・）ヤダ』

クソが!

地上に上がっても追いかけてくる

優菜「しつこい!!」

シユタタタタタタタタ

里紗「砂浜ってあんなに速く走れるものなんだね」

未央「宇宙人だからでしょ」

優菜「お前らは受け入れるの早すぎない!?!」

里紗「だってあれ見た後じゃね」

キヤー!!!

水着ドロボーよーーッ!!

?

リト「な・・・なんだ!?!水着ドロボー!?!」

その後春菜も取られてた

皆海から上がった後

何かがザーツと通り過ぎて行つた

今のは・・・

優菜「・・・ちよつと見てくる」

優斗「俺も行くぞ」

あそこか

コオオオオ

シユタタタタタタタタ

未央「えー海の上も走れるの？」

近くの岩場

・ ・ ・ 見逃したか

優斗「どこに行つたんだ？」

リト「おーい！お前達も探してるのか？水着ドロボー」

リトとララが来た

優菜「ああ、だが見失っちゃった」

ララ「でも最初に盗られた人はこの辺りで泳いでたんだって」

優斗「だがここで見失つたんなら遠くに行つてるかもしれないぜ？」

リト「・ ・ ・ それにしてもホントとんでもねーヤローだよな。泳いでる女子から強引に水着を剥ぎ取る何て・ ・ ・」

スウー

ペケ「ララ様!!」

ピッ

水着が取られる

ララ「リト！おねがい！！」

リト「ふぬっ！！」

ララ「やった！！捕まえ・・・」

リト「これは・・・」

イルカ？

ララ「あーこれ知ってる！イルカだよね凶鑑で見たよ！！」

スウウ

水着が消えて

ララの水着は戻る

ララ「へへーザンネンでしたっ！頭のペケがついてる限り水着盗られてもへーきなん
だもんねー」

リト「しっかしコイツ何で水着を・・・」

バシヤ

イルカがペケを取ろうとしたので横入りするが

ビツ

水着を取られる

バシヤ

海に全身入る

優菜「見るなよ？」

優斗「・・・保証は出来ねえな」

ララ「つて逃げて行つてるよ!？」

優菜「ウンデーネ」

足裏の（ふくらはぎ方面）水を壁のように固める

そして水泳の授業の時のように一気に加速

バシヤン

ギューン

優斗「ついでに行くぞ」

また近くの岩場

水着は取り返した

優菜「たく・・・!!こいつは・・・」

優斗「おーい！取り返せたかー？」

優斗達全員きた

優菜「ああ！ちよつとこつち来てくれー！」

リト「おいこれ!？」

ララ「親イルカ？さっきの子ののかな？」

優斗「砂浜に乗り上げちゃってるな」

さっきのイルカがジツと見てる

優菜「よしっ、お前らちよつとどいてて」

ウンディーネで海水を泳げるぐらいまで寄せて

浮いたところで戻す

二匹とも沖まで泳いでこつちを見る

リト「大したケガもねーし大丈夫そうだな」

ペケ「あの親子何だかお礼を言ってるみたいですね」

ララ「親子・・・か」

リト「ん？どーしたララ」

ララ「あ！んーん何でもない、ちよつとね。デビルークの事思い出しちゃったの・・・よ
かったね、イルカさん♪」

優斗「・・・お前は最初の世界に戻りたいと思った事はあるか？」

優菜「・・・んなもんねーよ。今の暮らして十分幸せだ」

優斗「だよな、同意見で安心した」

優菜「いやお前は最初いなかったけどな」

夜

リトたちの宿泊部屋

猿山「あーあ明日で臨海学校も終わるかアくなーんか思い返すと校長に振り回されて
ばつかだつたな〜」

クラスメイト「ほんとほんと」

猿山「せめて最後に楽しい思い出の一つも残したくねー？」
クラスメイト「確かにこのまま終わるのはさみしすぎる！」

リト「でも、今からじゃもう寝て起きたら帰宅だぜ」

猿山「いや!!まだやれる事はあるぜ!!ララちゃん・・・もとい女子の部屋へ遊びに行
くのだ!!!」

リト「へ？」

猿山「善は急げだ!行くぜリト!!」

リト「あ、おい待てよ!!本気かー!？」
走って出て行つた

・・・

よし優菜に会いに行こう

優菜たちは

未央「このエアコン効いてんのかなー」

里紗「なんかあつついよね・・・ロビーの自販機でジュース買ってくる？」

未央「そーね」

ララ「あ、私も行くー」

今日で終わりか・・・最後に優斗にあつとくか？

明日寝たら多分別の世界で戦うだろうからな

平和な世界は一旦終わりだ

ララたちは出て行った

春菜は残ったらしい

優菜「俺もちよつと出てくる」

春菜「あ、うん。わかった」

外に出て男子の部屋方向に行くと

優菜「猿山？何してんだ？」

猿山「お、おう！お前は男子の部屋に行くのか？・・・好きな奴でもいるのか？」

優菜「いや、優斗に会いに」

クラスメイト「ゆ、優斗!？」

優斗「呼んだか？」

優菜「おお」

優斗「俺も会いに行くところだったんだ」

優菜「やつば考えることは同じか、ならちよつと付き合え」

スタスタスタ

猿山「・・・あいつら肝試し同じだったよな・・・？」

クラスメイト「しかも二人で迷子だったって言つてたよな・・・？吊り橋効果つてやつか・・・？」

リト「いや、アイツ等は関係ない気が」

鳴岩「おい!!そこにいるのは男子か!!もうじき消灯時間だぞ!!女子の部屋の前で何やつとるんだ!!!」

猿山「げつ指導部の鳴岩だ!!逃げろ!!」

リトはおされて春菜たちの部屋に入る

優菜たちは・・・

えっ?

リトのその先が知りたい?

原作買おうか

ということでは優菜たちは

共有スペースにいた

優菜「にしても・・・バトル系じゃなくて日常系の世界増やしてほしいわ・・・」

優斗「いや、サイヤ人とかになってる時点でダメだろ。無理だろ」

優菜「ならこの世界に頻繁に來たいわ・・・百話超えても作者のクオリティ上からんし、評価は平均約一ぱつかだし。最近じゃ『100話以上続いているのは凄いと思う。しかしそれを考慮しても0点すらつけてあげられないレベルの作品ですね。逆に天才だと思いません。』（*まとめ小説中村優斗の軌跡より引用。あああ様より）って感想も見ただぜ？何で続けられるか疑問だぜ」

優斗「やりたいからやるんだろ」

優菜「え？」

優斗「作者がどういう気持ちでやってるか分からねえ、号泣してるかもしれないし笑ってるかもしれないねえ。だがこれが出てる時点で作者は続けようとしてるんだよ。初めはやったらどうなるんだ？ぐらいだったかもしれないねえが、百話も続けば別の感情も出てくるだろ。例えば楽しいとかな、もしかしたら世間の目何て全く気にしちやいないかもしれない。あくまで趣味としてやってるんなら、楽しくなきや続かねえよ。例えば誰かに『もうそろそろ書くのやめたら？』とか言われても続けるだろうな、でなきやもうやめてるさ。人にこうあるべきだ、こうしろ、ああしろ。って言われてやるのは趣味

じゃなくて作業だ。だからこそ楽しく面白く趣味やんのがいいんじゃないか」

優菜「・・・何かお前が言うのと違和感しかねえわ」

優斗「そか？」

優菜「・・・それが本当だったら、案外俺たちが戦って、勝つたりしてるところを書くのが楽しくてやめられねえのかもな」

優斗「なら最後まで付き合ってやろうぜ」

優菜「・・・だな」

ジリリリリリリリ

!!

優菜「なんだ!? 火事か!」

優斗「この音はどこからだ!」

優菜「俺が止まってる部屋の前らへんからだ!!」

ダダダダ

担任の骨川先生がエレベーター呼ぼうとしたんだと

この旅館エレベーターないよ・・・

優菜「なんか緊張感が綺麗さっぱり無くなっちゃったな」

優斗「じゃあ、また明日な」

その後お互い戻って質問責めにされたのは言うまでもない

次の日

家に帰り最後の調整を行い（トレーニング等）

寝た

第百十一話（デート・ア・ライブに來た『第三話』より）

優菜「何で一緒に寝てんだ・・・？」

ギユウウウウ

優菜「俺は抱き枕じゃねえぞ・・・」

・・・なんか妹みたい

優斗「ううん・・・」

ガシツ

服を掴む

優菜「え？」

ググググ

優菜「脱がそうとするな!!」

ズボンは脱がされた

優菜「やめんか！」

優斗「んん・・・」

起き上がる

パチパチ

優斗「ん・・・？」

優菜「顔洗ってこい、ねぼすけ」

優斗「うん・・・」

顔を近づけてくる

優菜「ど、どうした？」

優斗「ん」

ズキユウウウン

*そこまで激しくないけど何したか分かるよね？

!!?

勢いに任せて押し倒される

優菜「んんん!!!」

引きはがそうとするが寝起きすぎて力がなかなか入らない

琴里「ねえ、話があるからちよつと来てもらっていい？」

く、来るな!! 来ないでくれ!!（切実）

ガチャ

琴里「二人とも一緒にフラクシナスに・・・」

優菜「んんんん!!!」

琴里「・・・何してんの？」

優斗「ぷはっ・・・」

そのまま倒れこみ

優斗「ぐう・・・」

優菜「あ・・・あ・・・」

俺の・・・ファーストキスが・・・

カアアア

優菜「ふにやあ・・・」

パタン

琴里「・・・何でこうなったのかしら」

フラクシナス

・・・ハッ!

ここは・・・

令音「大丈夫かい？色々大変だったそうだね」

優菜「ああ・・・そっすね・・・はい」

令音「・・・精神的にまいってるところ悪いけど、琴里に気がついたらつれてきてほ

しいって言われてるからね」

優菜「・・・なら起こしますね」

パシイイン

優斗「痛つてえええええ!!!」

優菜「お前がやったことは忘れねえからな？」

令音「それじゃあついて来て」

優菜「その前に口ゆすいで来ていいですか？」

令音「構わないよ」

ゆすいだ後

スタスタスタ

ウイイイイン

令音「連れてきたよ」

琴里「ありがとう」

令音「また何かあつたら言つてくれ」

令音さんは戻つていく

琴里「座つて」

椅子に座る

琴里「色々聞きたいことはあるんだけど・・・まず朝何があったの？」

優菜「こ、こいつが寝ぼけていきなりキスしてきたんだ！」

優斗「悪かったって、こっちだって悪気はねえんだよ。俺はお前好きだし」

優菜「お前そういう事ポンポン言うもんじゃ」

優斗「なんならまたキスしてもいいぜ？」

優菜「お前・・・」

優斗「可愛いし、結婚するならお前がいいし、やっぱ可愛いし」

カアアア

優斗「別になんも考えがねえわけじゃねえ。俺はお前にどう使われようとかまわねえし自分同士なら何したって気にしねえし、金なら共有財産いっぱいあるし。ただし結婚式は」

優斗「絶対しない」

優菜「絶対しない!!」

・・・つい乗ってもうた・・・

ガタン

優斗「やっぱ自分同士だと気が楽だろ？」

琴里「そのくらいにしときなさい、優菜が恥ずかしすぎて顔伏せてるわ」

優斗「ごめんて」

さすさす

優菜「うう・・・」

琴里「とりあえず、優斗が相当優菜の事が好きなのはわかったわ」

優斗「それで話って言うのは？」

琴里「普通ならどうして精霊になったとか聞くんだけど・・・」

優斗「何で精霊になったかって？神様の所為だよ」

琴里「！・・・美九も神様に力を与えられたって言ってたわね」

優斗「俺が言ってる神様とその神様は別だと思うぞ。俺が言ってるのは俺たちをこの

世界に連れてきたヤツだよ、なんなら呼んでみるか？」

琴里「神様って呼べるものなの？」

優斗「神様ー！」

・・・

優斗「・・・遅いな・・・」

ポーン

優斗「え？」

『現在外出中です。またのかけ直しをお願いします』

ピンポンパンポン

頭に直接流れてくる

優斗「えーと……今の聞こえた？」

琴里「……ええ、聞こえたわよ」

優斗「まあ……気ままな神様なんだよ。なにせ俺たちを色んな世界に行かせてそれを楽しみながら見てるぐらいだから」

琴里「そ、そう」

優斗「だよな？」

優菜「……うん」

優斗が優菜を膝の上に座らせる

優斗「そろそろ機嫌直せよ……」

優菜「んん……」

優斗「まだ駄目か」

琴里「……それじゃあ、今までどういう世界でどういう能力や力を手に入れてきたか教えてくれる？」

優斗「ああ」

全部話して

優斗「今の最後はこの世界で、精霊の力も上乘せされてんのかな？」

琴里「それで全部？」

優斗「いや、美九の家で変なのが見えた気がするな」

琴里「変なの？」

優斗「ああ、周りが白黒になってあるものだけ黄色や青く見えるんだ」

琴里「・・・眼科行く？」

優菜「サードアイだよ。黄色になるのは換金アイテム・・・つまり金目の物と色々な

素材。青いのは何か探してるものとか、必要な物だ」

優斗「そういやあの時美九のCDも青く光ってたな・・・機嫌直ったか？」

優菜「少しは・・・でもさっき俺のファーストキス奪ったのは許さん」

優斗「ファーストキスならだいたいぶ前にやったぞ」

優菜「え？」

優斗「ララたちの時に変な宇宙人が学校に來た時あっただろ？あの時疲れきったとき

仙豆食べさせようとしたときヘルに言われて口移しで食べさせたんだ」

優菜「・・・ヘル」

ヘル「だって本当にやるなんて思わないじゃん!! ジョークが通じないんだもん」

ピンツ

ドンッ

ヘル「痛い!!!」

指弾（物理）

これは空気を魔法で固めてデコピンで打つ

今のは弱気なので威力は幽遊○書の初期霊○ぐらい

つまり○丸である

優菜「次やったらもつと強めにやるからな？」

ヘルは戻る

そしてまた顔を伏せる

琴里「にしても・・・貴方達ってほんと姿が似てるわね」

優斗「なんならキスして男に戻ろうか？」

琴里「・・・あんたはいいの？さっきの話どうりなら精霊の力はなくなるのよ？」

優斗「俺は男のがいいわ、こいつの為にも・・・比べ易くするためにも」

琴里「・・・でも好感度が上がらない限りは・・・」

優斗「俺は士道の事好きだぞ」

琴里「・・・二股？」

優斗「勘違いするな、LOVEじゃなくてLIKEだ」

琴里「・・・なら學校が終わつたら土道と呼ぶわ。それまで待つてて」

優斗「へーい」

琴里が出ていく

優菜「お前抵抗ないのか？」

優斗「だから土道とキスした後、お前とキスして口直しする」

優菜「やめれ」

琴里「聞き忘れてたけど」

優菜「ギヤアアアア!!!（；ω；；）ブワツ」

琴里「・・・そこまで驚かなくてもいいじゃない」

優斗「コイツ結構ホラーとか駄目なんだ」

琴里「・・・まあいいわ、學校は高校でいい？」

優斗「いいか？」

ブンブン

優斗「いいらしいぞ」

琴里「そう。お昼は食堂でとってもらって構わないから」

優斗「へーい」

琴里は出て行った

ブルブルブル

優斗「……大丈夫か？」

よしよしゞ（ω・ω・ω）

落ち着いた後昼飯食べた

数時間後

士道「……何でそんな男物のぶかぶかの服着てるんだ？」

優斗「これは俺が男の時に来てた服だ」

士道「そ、そうか……それで用ってなんだ？」

優斗「キスして欲しい」

士道「え？」

優斗「男に戻りたいからキスして欲しい」

士道「……急だな」

優斗「さっさとやるぞ」

ガシイ

士道「な!？」

イフリート「少しの辛抱だ」

優斗「安心しろ、終わったら放す」

チュツ

パアアア

優斗「おおおお・・・」

スウウウウ

士道「でか・・・」

優斗「お前結構ちっさいんだな」

士道「お前何センチ？」

優斗「181ぐらい」

士道「10センチ以上差があるじゃねえか」

優斗「それじゃありがとな、バイなら」

ダダダダダ

士道「・・・アイツ結構行動派か・・・そういや美九の家行くときもアイツだけ『突つ

込むか?』って言ってたな」

琴里「さっきの優斗?でかいわね」

士道「何食ったらあそこまで伸びるんだ?・・・というかムードの欠片も無かった

な・・・」

優菜のどこまで来た

優菜「やっぱそっちのがいいな」

優斗「おお、だからキスしようぜ」

優菜「何でそうなる」

優斗「ダメなら土道の家行こうぜ。そろそろ飯だし」

優菜「わかった・・・よ!？」

ヒョイ

お姫様抱っこされる

優菜「・・・お前なあ・・・」

優斗「あんま嫌がらねえな」

優菜「いやもう・・・言っても無駄な気がするから」

優斗「分かっているじゃねえか」

数日後・・・

10月15日曜日

ウウウウウウウウウウウウウウ

空間震!?

よしつとりあえずフラクシナスに行こう

カオスの空間で来た

優菜「今度はどういうやつなんだ？」

琴里「さも平然と乗り込んでくるわね．．．あの魔女みたいなやつよ」

優斗「ふうん．．．勘だけどウィッチとか呼ばれてるんじゃないか？」

ブウン

琴里「士道、選択肢よ！」

優斗「あれ？最近よくスルーされるな．．．（；ω；）ブワツ」

浮いて

よしよしゞ（・ω・、）

1 「理由は一つです。あなたに、会いに來たんです」

2 「ぼ、僕、何もわからないですよ．．．逃げ遅れて、気づいたら、ここにいて．．．」

3 「とりあえずおっ○い揉ませてもらってよろしいですか」

優菜「3は論外だろ」

結果2

士道「．．．え、えええ．．．」

ウィッチ？「?どうしたのかしら？」

士道「あ、あの．．．僕．．．何もわからないですよ。逃げ遅れて、気づいたら、こ

こにいて．．．」

ウイツチ? 「……………!ふうん……. そうなの。お名前は?」

士道「え、ええと……. 五河士道です」

ウイツチ? 「士道君ね。うふふ、可愛いお名前」

士道「あ、あの、あなたは……」

七罪「私は七罪。まあ……. 貴方達にはへウイツチ^へって呼ばれているみたいだけど」

士道「七罪…….さん」

七罪「ふふつ、七罪でいいわよ。敬語もいらないわ。堅苦しいのは好きじゃないの」

士道「え、ええと……. じゃあ、七罪」

七罪「ああ、そうだ。ふふふ、今度人にあつたら聞いておこうと思ってたんだ。ねえ、

士道君。お姉さん、聞きたいことがあるんだけど、一つ質問してもいいかなあ?」

士道「え? は、はあ……. どうぞ」

七罪「士道君、私の事……. 綺麗だと思っう?」

士道「へ?」

…….

琴里「士道、何してるのよ。あんまり時間をかけると、七罪の機嫌を損ねるかもしれないわ」

士道「あ、ああ……. 凄く、綺麗だと思っう」

七罪「！やっぱいい!? ねえねえ、士道君。具体的には？お姉さんのどんな所が綺麗？」
士道「え？ええと・・・その、目が切れ長で、鼻筋がスツと通つてるところとか・・・」
七罪「うんうん！」

士道「あと、すらつと背が高く、スタイルがいいところとか」

七罪「あとはあとは!？」

士道「それに、髪もつやつやして綺麗だし・・・」

七罪「そう！分かつてる！士道君わかつてる!!」

そう叫ぶと思いつき士道を抱きしめた

七罪「・・・やっぱ、この私が・・・綺麗よね・・・」

士道「え？」

七罪「あらあ・・・？」

七罪が後ろを振り向いたのでその方向を士道が見る

士道「AST・・・！」

七罪「士道君、ASTを知ってるの？」

士道「！あ・・・」

夏未が士道の頭をなでながら言う

七罪「物知りさんね。偉い偉い」

士道「は、はあ・・・どうも」

琴里「士道！逃げなさい！」

ドヒュンドヒュンドヒュン

優斗「助けに行くか？」

優菜「さつきの七罪の反応だと大丈夫そうだけどな、気に入られてるっぽいし」

士道「う、うわ・・・っ！」

七罪「・・・さあ、仕事よ〈贗造魔女〉（ハニエル）」

箒のような天使が出てきた

箒の柄尻を地面に突き立てると先端が光り

次の瞬間

ポンッ

優菜「ポンッ？」

ミサイルが全てデフォルメされたようなニンジンになった

士道「は・・・？」

ニンジンが地面に着弾すると

BOMB

とギャグマンガみたいに爆発する

士道「い、今のは一体……」

七罪「ちよつと待つててね、士道君」

A S T「……！來たわよ！撃て！」

七罪「向かつて夥しい量の弾薬をばらまく

七罪はさつきと同じように光をA S Tや弾薬に放つ

A S T「な……何よこれ……っ!？」

ミサイルだけじゃなくA S T達もウサギや犬やパンダになつた

優菜「犬だ！」

優斗「ワンワンだ！」

琴里「何その食いつき……着ぐるみよ？」

七罪「うふふつ、みんな、そっちの方がカワイイわよ？」

A S Tは混乱している

七罪「さ、一丁上がり。今のうちにあの人たちのいない所まで逃げちやおうと思うけ

ど……士道君も一緒に來る？」

士道「え……いいのか？」

七罪「もちろん……もつとお姉さんを褒めてくれたらね」

B O M B

士道「うわ……っ！」

いつの間にか誰かミサイルを撃つたらしい

まあニンジンだから威力はないが

至近距離で爆発したから砂埃で辺りが見えなくなる

士道は目に砂が入ったらしく目をこすっている

七罪「ふ……ふ、ふえつくしよん！」

七罪も砂埃で鼻が擦られてくしゃみした

するといきなり光る

光が収まり

士道が目を開ける

士道「ん……」

ビービービー

フラクシナスにアラームが鳴り響く

琴里「士道！気を付けなさい！七罪の機嫌数値が急降下しているわ！」

士道「……え？」

砂埃が晴れて七罪が見えると

顔を真っ赤に染めて指導を睨みつける

七罪「……見たわね？」

士道「み、見たって、何を……」

七罪「惚けないで！今、私の……私、の……！」
箒に跨り

七罪「見られた以上、ただで済ますわけにはいかない……！覚えてなさい。あんたの人生、おしまいにしてやるんだから……！」

するとものすごいスピードで空の彼方に消えていった

AST「！逃げたわよ！追いなさい！」

元に戻ったASTたちが追いかける

士道「な……なんなんだ、一体……」

その後緊急対策会議が開かれて先に帰された

次の日

士道はまだ帰ってないらしい

優斗「俺たちはこの世界でも学生か……」

優菜「ほとんどそうだよな？」

学校に着いて職員室に行き色々準備し「8時20分までなら校内を見回っても構わないよ」と言われ出ると

士道が歩いていった

あれ？・・・会議は終わったのかな？まあ入れ違いか何かで会わなかったのだろう
優菜「用事は済んだのか？ならこの学校案内してくれよ」

士道「ん？ああお前らか、いいぜ。なら最初に連れていきたい所がある」

優菜「ああ」

体育館裏

優菜「・・・何でここなんだ？」

士道「ああ、最初に知っておいて損はないと思つてな。例えばラブレターとかで呼ばれて・・・」

ドンッ

壁ドンされた

士道？「こんな状況になつたりな」

優菜「・・・」

サア・・・

眼が死んでいく

ガシッ

優斗「そんなぐらいにしといたらどうだ？こいつも目に光が無くなつてきてるぞ」

士道？「おっと濟まない」

離れる

優斗「それにな・・・それやっていいのは俺だけなんだよ!!」

優菜「いやお前もダメだよ!!」

優斗「よし、戻ったな」

士道？「君も後でしつかり相手してあげるよ」

優斗「何言ってるんだ？お前・・・キスした仲だろうが、もつと氣樂に言ったらどうだ

？」

士道？「そ、そうだな」

・・・様子がおかしいな色々と

偽物か・・・？

本物の氣を探ろう

優斗「・・・やっぱなんか違うんだよなあ・・・」

士道？「な、何がだ？」

優斗「雰囲氣？」

士道はフラクシナスにいるな・・・ということとは

優菜「士道、私が最初に言ったこと覚えてる？」

士道? 「ああ、「お前誰?」だよな!」

優菜「ああ、そうだな。なら私がこいつと付き合ってるのはもちろん知ってるよな?」
優斗に抱き着く

士道? 「ああ、もちろん。急にそんなこと聞いてどうし」

ビッ

気の剣の先を向ける

優菜「バーカ、俺はこいつと付き合つてねえよ。お前誰だ? 士道に化けて何しようとしてる?」

士道? に近寄りながら言う

士道? 「……はあ……君達にはもう無駄みたいね。なら……」

パアアア

突然士道が光だし優菜が光に包まれる

優斗「優菜!!」

士道? 「それじゃあね」

士道? は箒に乗って飛び去った

優菜を見ると……

優菜「今の飛び方は七罪か……今のは何を……」

優斗「あつ……犬の着ぐるみ……」

優菜「……どうしろと……そだ。クロノス、効果時間を加速」

ポンツ

優菜「戻った……」

優斗「……もうちよつと見たかった」

優菜「おい」

アイツまた來る気がするな

その後見て回り、戻って教室に上がり

自己紹介して昼休み

やつと士道が学校に着いたな

優菜「優斗、ちよつと來て」

優斗「?ああ」

教室を出る

士道「ご、ごめんなさあああああああいつ!」

ダダダダダダ

横を一緒に走る

優菜「よお」

士道「!?お前も俺に何かされたのか!？」

優菜「壁ドンされた。まあ偽物だったけど」

士道「!俺の偽物がいるのか」

優菜「今はどこにいるのか知らないけどね」

士道「ん……?おう、耶?矢、夕弦……って……」

優菜「何で水着?」

夕弦「発見。士道です」

耶?矢「お前達も今すぐ士道から離れろ!」

優斗「何で?」

士道「も、もしかして、お前らも俺に何かされた……とか言うんじゃないだろうな?」

耶?矢「惚けるな!先刻我は貴様にパンツを奪われたのだ!さあ早く返すがいい!!」

夕弦「憤慨。『俺、実は透けブラフェチなんだ』と、夕弦に水をかけたのはどこの誰ですか」

士道「い、いいつ!？」

耶?矢「何を考えているのかは知らぬが、油断も隙もない奴め」

夕弦「首肯。着替えの体操服がなくて焦りましたが、プールバッグを置きっぱなしに

していたのは僥倖でした」

士道「お、俺はそんなこと……」

耶？矢「しらばつくれるつもりか!？」

優菜「一旦事情は説明するから落ち着け!!」

岡峰「五河くん……!」

士道「た、タマちゃん……じゃなくて、岡峰先生」

岡峰先生は士道のシヤツの裾を掴む

士道「ど、どうしたんですか、先生……」

岡峰「あ、あんなことをしておいて、何を言ってるんですかあ……!も、もう私、お

嫁に行けません……、ちゃんと責任取ってもらいますからね!」

士道「え、ええツ!？」

優斗「ずいぶん暴れてるな……お前の偽物」

次は曲がり角から出てきた

男子が士道を見るなり「ひッ」つと怯えて震える

士道「と、殿町……?」

殿町「五河……くん、あの、な……俺、よく冗談飛ばしてたし、誤解させてたか

もしれないけど……そういう趣味、ないから……」

士道「お前は一体何されたんだよ!？」

優菜「あの偽物はどうやらお前の友人関係熟知してるらしいな、変な事になったら気まずいところを的確に突いてる」

士道「そうらしいな・・・って」

士道の言葉が詰まる

見ている方向を見ると

士道の姿をした

七罪がいた

優菜「いた!」

手を振りながら廊下を歩いていく

優斗「煽るねえ」

士道「ま、待て・・・っ!何なんだお前は・・・!」

耶?矢と夕弦が邪魔しようとするが

俺たちが抑える

耶?矢「何をする!」

優菜「さっさと行けよ、士道!偽物さんによろしく言っといてくれ!」

士道「ああ!」

ダダダダダダ

耶？矢「あくまで我たちの邪魔をするというのか？」

優菜「さあね、でもこっちにもいろいろ事情があるんでね」

耶？矢「なら押し通るだけだな」

優菜「やれるもんならやってみろってんだ」

岡峰「ケンカはダメですよ!!」

優斗「なら俺はお前とか」

夕弦「疑問。なぜそんなに士道の味方をするんですか？」

優斗「事情が事情だからかな」

岡峰「ケンカはダメですって!!」

優菜「お前に何かした士道は士道じゃないんだよ」

シュッ

殴ろうとするが避ける

優菜「グーだと印象悪くなるからせめてパーにしとけよ、こんな風に」

ダッ

腹を押しながら走って壁に押し付ける

耶？矢「ガハッ・・・」

優菜「・・・さすがに少しやりすぎたか（汗）」

優斗「印象悪くなったのはお前の方だったな」

優菜「良くも悪くも、有名になるのはいつもの事だ」

優斗「それもそうだな」

夕弦が近づいてくる

蹴ってくるが防御する

優斗「お前はまだやるのか・・・」

脚を掴んで転ばせる

優斗「ふう・・・」

優菜「いや待て、十香と折紙が行ってる」

曲がり角を曲がるのが一瞬だが見えた

優菜「急ぐぞ」

ダダダダダダ

気は屋上に行っていた

屋上に上がると

士道1「十香、折紙！聞いてくれ、こいつは・・・」

士道2「こいつは偽物なんだ！俺に化けて、みんなに悪戯したのはこいつだったんだ

よー！」

士道1 「な……！だ、騙されないでくれ、二人とも！本物は俺だ！」

士道2 「何言つてやがる！俺が本物だ！」

優菜 「……どういふ状況？」

士道1 「優菜！お前ならわかるだろ？俺が本物だつて言つてくれ！」

士道2 「お前の味方するわけないだろ！？俺が本物つて言つてくれ！」

優菜 「……大体状況は分かつた。なら私の質問に答えてもらおう」

士道1 「わ、わかつた」

士道2 「何でも答えるぞ」

優菜 「三つ質問をする。まず一つ目、お前の実の妹は誰だ？」

士道2 「真那だ」

士道1 「実の妹なら……真那だよな」

優菜 「……フラクシナスに侵入すればわかるけどな、次だ。私のペルソナは今全部

で何人？」

士道2 「14だ」

士道1 「12じゃないのか？」

十香 「食い違つた？」

優菜「最後の質問だ。次言う中で俺の知り合いにいないのは？1、モデル（杏）。2、怪盗（ザ・ファントム）。3、賢者（マールン）。4、宇宙人（ララ）。5、ある企業の社長（春）。6、神様（そのままの意味）。7、探偵（明智）。8、生徒会長（真）。9、ハッカー（双葉）。10、勇者（尚文）。尚、答えが一つとは限らない」

士道2「……？」

士道1「紙に書いてくれると嬉しいんだが」

優菜「メーテイス、紙二つに書いて」

スラスラストラ

優菜「はい」

渡す

士道2「……5と7……？」

士道1「……1と5と7……？9もあるか？」

紙回収

優菜「まあそこまで意味はないんだが」

士道1「無いのかよ!!」

優菜「まあ最初からどっちが本物か分かってたし」

士道2「なら最初から言えよ!!」

優菜「お前らも分かってたんだろ？」

十香「ああ」

折紙「うん」

士道2「だったらせーのと言ってくれ、どっちが偽物か。偽物の方を指さしてくれ」

優菜「せーの」

十香「お前が、偽物だ」

折紙「あなたが、偽物」

優菜「諦めな、偽物」

全員士道2を指さす

七罪「な・・・!? な、何言ってるんだ、三人とも。俺が士道だぞ・・・？」

優菜「それは違うな」

???「それは違うよ！」

七罪「・・・なんで、わかったんだ？ 変身は完璧だったはず。当てずっぽうだとしても五分と五分。なんでそんなに自信を持って俺を指させたんだ？」

十香「なんでと言われてもな・・・なんとなくだ。確かにシドーそっくりだが、本物と並び立つと、何か匂いが違うような気がした。それだけだ」

折紙「あなた一人しかこの場にいなかったのなら、騙されていたかもしれない。実際、

先ほどまで私は貴方を士道だと思っていた。しかし、二人士道がいて、どちらかが本物であるという条件下での問いなら話は別。あなたは本物の士道よりも瞬きが0.05秒ほど速く、また、身体の重心が士道よりも0.2度ほど左に傾いている。間違えようがない」

優菜「俺は……アリエル、出てきて」

士道のポケットからアリエルが出てきた

士道「いつ入ったんだ!？」

優菜「今日最初に会った時」

士道「全く気付かなかった……」

優菜「後ついでに言えば……さっきの問題、七罪は全問正解してた」

七罪「ならそれこそどうして俺にしたんだ?」

優菜「あれは士道は知らないはずの部分の問題にした。士道は狂三といたときに俺のペルソナの数を確認したが、新しく入った二人、カマエルとメーティスは士道が狂三の影に入っていた時、つまり見ていないんだよ」

七罪「だがその後見てたかもしれないぜ?」

優菜「見てはいたかもな、だが12人を全員覚えてるとも言えないな。双葉ならともかく、士道には無理だ」

七罪「ぐ……」

優菜「三つめは、士道には話してないが琴里には話した。つまりお前が調べたところには書いていたわけだ……ちなみに5（春）はまだあつてない。7（明智）は会つてはいるが相手は俺を見ていない。つまり知り合ひとは呼べないわけだ」

七罪「な、何なの……何なのよ、この子達！どうかしてゐるわ……！」

士道「……いや、それは、まあ……」

優斗「否定しきれないんだが」

七罪が元の姿に戻る

十香「な……っ！」

折紙「……！！」

七罪「あり得ない……あり得ない……あり得ない……！」

士道「な……」

七罪「秘密を知られた挙句、私の完璧な変身まで見抜かれたっていうの……？嘘よ……こんなの嘘！絶対……絶対認めないんだから……ッ！」

俺たちを指さす

七罪「このままじゃ済まさない……！絶対に一泡吹かせてやるんだから……！」
箒にまたがつて飛んでいく

士道「あ……お、おい！」

一気に飛んで行つてしまった

士道「く……」

十香「シドー」

折紙「士道」

士道「な、なんだ、二人とも」

十香「あやつは一体何者なのだ!？」

折紙「あの女は誰。どういう関係なの」

優菜「はあ……」

優斗「これからどうする？」

ドタドタドタ

耶? 矢「優菜ー!!」

優菜「げっ」

耶? 矢「さっきの恨み返させてもらおう!!」

ガッ

ズザザザザ

優菜「詳しいことは士道が説明するつてよ」

耶？矢「何？では説明してもらおうか」

優菜「今のうちに逃げよう」

その後白い目で見られたのは言うまでもない

放課後

フラクシナス

正座中

琴里「初日から暴れるとはね」

優菜「面目ない」

琴里「まあ、七罪が來たんじゃ仕方ない……と言いたいとこだけど、暴れた相手が

耶？矢達とはね」

優斗「いや……あそこで行かれたら話がややこしくなると思ってたな」

琴里「暴れた方がややこしいわよ」

優菜「いやでも……学校で良くも悪くも有名になるのは慣れてるといふか……ペルソナ5は先生に逆らったし、ペルソナ4は校舎から飛び降りたし、賢者の孫は強すぎて有名になったし、T O L O V Eは宇宙人ってバレたし、暗殺教室はエンドのE組だし」

琴里「そ、そう……」

優菜「だから一個増えても・・・ねえ」

優斗「ねえ」

琴里「はあ・・・まあいいわ、それじゃあ帰ろっか」

次の日登校中

スタスタスタ

!!

変な気配がする

・・・

気のせいかな・・・?

優斗「どうかしたか?」

一気に飛ばして四日後

10月21日土曜日

士道家

士道「何でここにいるんだ・・・?」

優菜「昼めし食いに来た」

士道「家はレストランじゃないぞ」

優菜「・・・じゃあコンビニ弁当にするか」

士道「それじゃ栄養が偏る」

優菜「どうしろと!!」

サツ

優斗「それじゃあ、部屋に戻るわ」

優菜「H A ☆ N A ☆ S E !!」

優斗「絶対やだ」

琴里「何してんの？」

優斗「別に？」

・・・封筒？

次の日

優菜「昨日のは何だったんだろう？」

優斗「何が？」

優菜「封筒だよ、中身が気になるんだ」

優斗「昔の友達とかだろ」

優菜「そうか・・・にしても暇だな」

優斗「なんか運動するか」

優菜「走るか？」

優斗「サッカーしようぜ」

優菜「ボールは？」

優斗「金はあるだろ？」

優菜「お前な・・・」

スポーツ用品店

優菜「やるなら全力だ」

優斗「スパイクまで買うのか？」

優菜「服もだよ」

合計ざっと4万5千円

その後広いサッカーOKの所に来た

優斗「やるのか？スパイクで？」

優菜「やるぞ」

まずは体を慣らす

その後パスとロングパス

後は逆足練習とかオフエンスデイフェンスの練習

夕方までして

着替えて帰った

道中

優菜「ずいぶん久しぶりにやったな」

優斗「だ、だな」

・・・なんかよそよそしいな

優斗『途中シャツが透けてた事は伏せとこう』

優菜「どうかしたか？」

優斗「いや、何でもない」

優菜「そか」

夜中

優菜「ふあああ．．．トイ．．レ」

え？

何で七罪の天使が．．．？

何かしようとしたので

シュンツ

ミシミシミシ

頑丈だな

ドギユン

シユアアア

シユウ・・・

天使だしな

神のゴツドなら折れるだろう

ベキッ

折った

スウウウウ

すると消えていった

・・・何だったんだ？

とりあえず優斗をカオスの空間に入れる

そして俺も入って・・・

トイレ・・・

トイレに行つてから入つて寝た

次の日

優菜「結局、早めに起きちまった・・・」

昨日、七罪の天使が現れたぐらいだ。皆何かあったかもしれない

とりあえず人数確認・・・

!!

夕弦が・・・いない!?

・・・話は後で聞こう

とりあえず学校か

学校には士道はいなかった

休みらしい

まあ気では琴里の横にいる

という事は話し合っているんだろう

放課後

琴里の次は耶? 矢

その次は知らない三人・・・いや誰?

こっちは今やってるから行ってみよう

見たけど・・・あれクラスメイトだな

・・・あいつ等に変な気はない

・・・どつちかていうと・・・結構純粋なんだな・・・この時代には珍しい

キラキラしてる

その夜

飯を食べた後

音を消す魔法と姿を消す魔法を使い

隠れてる

音を消すつてどんなイメージかって？

・ ・ ・ ワンピ〇スのナギナギの実の効果反転バージョン

優斗は寝るつて言つて帰つた

リビング横の廊下で聞き耳を立てる

士道「・・・疲れた・・・」

琴里「まったく、情けない・・・とは言わないでにおいてあげるわ。今日はね」

炭酸飲料の缶を渡す

士道「おう、ありがとう」

琴里がソファに座る

琴里「で、どうなったのよ、昨日、今日と調査してみて」

士道「・・・ん、そうだな。疑おうと思えば疑わしいやつはいたけど・・・とにかく、

全員を調べてみないことにはなんとも言えないな」

琴里「ふうん・・・そ」

・ ・ ・ もう少し聞こう

琴里「後二日で一応写真に写っていた容疑者の全て調査が終わるわ。できるだけ早く寝て、少しでも疲れを取っておきなさい」

写真・・・容疑者・・・放課後の三人も容疑者なのか

士道「ああ、そうだな。そうさせてもらうよ。でも・・・」

もしかしたら俺たちも入ってるのか？

士道「今ベッドに潜っても・・・しばらく眠れそうにはないな」

琴里「・・・でしようね」

おっと、そろそろ12時か

戻ろう

歩き出すと・・・

士道「な・・・ッ!？」

？

シュバツ

戻る

士道「琴里！」

中を少し除くと

七罪の天使が出てた

天使と琴里との間に士道が琴里を守るように入っている
琴里「！士道!?!危険よ！退いて！」

七罪「・・・ふふっ」

士道「七罪・・・ッ!?!」

天使から声がする

天使の先端の鏡に七罪が映る

七罪「ゲーム二日目終了よ。楽しんでもらえてるかしら？」

ゲーム・・・あいつはゲーム感覚で何かやってるのか

ゲーム感覚でサマ○ウ○ーズのラブ○シーン思い出した

士道「・・・一体どういうつもりだ」

七罪「どういうつもりって？」

士道「夕弦を・・・どこにやったんだ」

七罪「それは、ヒ・ミ・ツ。きちんと私を当てる事が出来たら返してあげるわ。でも、もし最後まで私を当てる事が出来なかったら・・・そのときは、彼女の「存在」は私のものよ」

士道「存在・・・？」

七罪「ええ。このゲームに私が勝利した場合、消えた容疑者はもう戻らないわ。その

代わり、私はその顔で、声で、姿で、そちらの世界を楽しんであげる」

・ ・ ・ 腹黒 ・ ・ ・ 明智といい勝負だ

理由はたぶん明智の方が深いな

士道「 ・ ・ ・ ふざけるな。そうは、させない ・ ・ ・ っ! 」

七罪「なら方法は簡単よ。私を、当ててご覧なさい。 ・ ・ ・ さあ、一体誰が私だと思う? 回答時間は ・ ・ ・ そうね、一分もあれば十分かしら」

士道「回答 ・ ・ ・ !? 今か! 」

琴里「どうやらそのようね ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ふむ ・ ・ ・

七罪「ふふっ、だって、士道君たらしれたいんだもの。一日目は結局誰も指定してくれなかったし。だから少し私がナビゲートしてあげなくちゃ ・ ・ ・ って思ったの」

琴里「 ・ ・ ・ ふん、よく言うわ」

士道を見る

琴里「どうなの、士道。さっき、疑おうと思えば疑える人がいたって言うってたじやない」

士道「ああ ・ ・ ・ そりゃそうなんだが、まだ確証は ・ ・ ・ 」

琴里「黙ってたら、今日も一人消されて終わりでしょ。駄目元でいいから言ってみな

さいよ

一人消される？

つまり昨日は夕弦というわけか

士道「・・・そうだな」

天使の方を向く

士道「・・・七罪。お前が化けてるのは・・・四糸乃だ」

七罪「四糸乃？」

士道「・・・ああ、昨日、今日と調べた中に限って言うなら、一番違和感があったのが四糸乃なんだ」

七罪「一応聞くけれど、理由は？」

士道「・・・調べた中で一番、らしくない行動があったというか」

七罪「ふうん・・・」

琴里「・・・言い方は悪いけど、もし間違ってたとしても容疑者が一人減って、消える人も一人になるはずよね」

七罪「あら？誰が一人って言った？」

士道「何？」

七罪「間違っていた人も、もちろんお手付きとして減るわよ」

琴里「なんですつて？」

四糸乃が消えて・・・

もし他なら・・・

そして優斗も多分容疑者・・・

っ!!

――

魔法で音は消える

ゲートで部屋に戻る

優斗・・・いる！

ゲートを閉じて

カオスの空間を開き

優斗を投げ入れる

優斗「ぐえっ！」

俺も入る

入口を閉じる

優菜「優斗!!」

抱き着く

優斗「……どうかしたのか？」

優菜「……なんでもない」

優斗「お前が何もなくてこんなんしないだろ」

優菜「……」

優斗「変なとこ触るぞ？」

優菜「……っだ」

優斗「ん？」

優菜「お前が無事でよがっだ」

優斗「……泣くほどのことかよ」

よしよしゞ(・ω・)

優斗「……今日は一緒に同じ布団で寝るか？」

優菜「……うん……」

一緒にいる

優菜は抱き着いている

優斗『……溜め込んだのが全部出たのかもな』

グスッ

優斗『何があっただか……』

優菜「あのな……？」

優斗「うん？」

優菜「詳しいことは……明日話すけど……消えていつてるだろ……？」

優斗「うん」

優菜「それで……お前がいなくなったらって考えたんだよ……」

優斗「うん」

優菜「そしたら……恐怖が込み上げてきてな……なんだかんだ付き合い一番長いのお前だし……」

優斗「ああ」

優菜「お前が無事で本当に安心じだ……」

優斗「俺がそう簡単にやられるかってんだ」

優菜「でも……」

抱きしめる

優斗「俺はこればっかしか出来ねえし、ハッキリ言うとお前の方が強いし。俺はむしろたまに足引つ張るし……でもせめて、心の拠り所ぐらいにはなれねえかなって思ってたところなんだよ」

優菜「……バカやろう……」

優斗「弱みを見せる所がないんなら、俺の前ぐらいならいいんだぜ？」

優菜「・・・うん」

寝た

次の日

・
・
・

なんか恥ずい

優斗「どうしたんだ？昨日はあんなに泣きじゃくって抱き着いてきたのに」

優菜「やめろおおお!!」

優斗「なんだあ、お前、今頃になって恥ずかしくなつてのか？」

眼をそらす

優斗「凶星だな」

優菜「うるせえ！」

優斗「安心しろ俺はいつでもウエルカムだ」

優菜「何が!？」

優斗「いつでも飛び込んでこい」

優菜「しねえからな？」

ギョッ

抱き着いてきた

優斗「で？結局原因は何だ？」

優菜「・・・七罪だよ」

優斗「あの魔女か」

優菜「・・・七罪が何とかなるまで俺はお前と一緒にいる」

優斗「お？マジで？」

優菜「・・・お前だけだと色々心配だ」

優斗「俺は嬉しーぞ」

優菜「むうう・・・」

その後靴を忘れたことに気づき取りに行った

そして授業中に消えたやつを確認

・・・多分消えたのは四糸乃と昨日の三人のうちの一人・・・名前は知らね

放課後

士道はおそらく俺たち以外とは全員できたんだろう

次の日

十香がいなくなった

琴里から今日は学校を休んでほしいと言われた

士道の家に行くよ

優菜「・・・大丈夫か？」

士道「ああ・・・」

優菜「十香がいなくなったからか」

士道「・・・やっぱり気づいてるのか」

優菜「もちろんだ、四糸乃や夕弦もだろ？」

士道「・・・」

優菜「やる気が起きないか？・・・お前、気張りすぎだ。ちよつと遊び行こうぜ」

士道「え？ちよつとま」

優菜「いいからいいから」

優斗も連れてきた

士道「何でサッカーなんだ？」

優菜「サッカーが好きだから」

士道「そ、そうか」

その後サッカーして

休み

優菜「どうだ？」

士道「ああ、たまにはスポーツもいいな」

優菜「だろ？」

士道「・・・優菜、頼みがある」

優菜「なんだ？」

士道「俺とキスしてくれ！」

優菜「おことわり」

士道「だ、だよな・・・あはは・・・」

優菜「七罪だろ？」

士道「・・・そこまで知ってるのか」

優菜「今のも、いつもと違うところを探すためだろ？なら俺たちは大丈夫だ」

士道「どうしてだ？」

優菜「姿や声は真似れても、能力までは無理だ。俺たちはペルソナが出せる、アリエル」

アリエル「はい」

優斗「イフリート」

イフリート「おう」

優菜「な？だから俺たちは違うぞ」

士道「・・・だな・・・それじゃあもうちよつとやるか」

優菜「よし、それならとっておき見せてやるよ」

士道「とっておき？」

優菜「行くぞ」

ダダダダ

ドンッ

無回転シュートを蹴る

相当ぶれて壁に当たり跳ね返ってくる

士道「おお・・・プロの試合で見たことある」

優菜「無回転は練習すれば蹴れるようになる。けど相当難しいからな」

跳ね返ってきたボールをトラップする

優菜「サッカーするならまずリフティング百回な」

士道「百回!？」

優菜「それだけすれば、ある程度コントロールは身に着く。実際中学の時から俺やり始めたんだけど、リフティング百回が練習参加条件だったぞ。ちなみに半年で俺は終わった（*実話）」

士道「・・・すげえのか？」

優菜「わからん、周りのやつは皆小学校とかからやつてたからな。そんな時のキャプテンは三年かかって百回できたって言ってたぞ」

士道「じゃあ凄いのか・・・？」

優菜「らしい、たまに時間の流れが遅くなって神パス出す事とかあるけど」

士道「お前何もんだよ」

優菜「あとはマルセロの足裏トラップ？とか（伝われ）走りながらヒールリフトとかなら出来たぞ」

優斗「・・・マルセロのトラップしたときは皆めちやくちや驚いてたけどな」

作者「ヒールリフトと無回転以外は体験談だぞ！」

優菜「うるせえ黙れ」

その夜

・・・

優斗を先に帰らせて、飲み物買って部屋の前まで来てるんだが・・・

どうしよう、気まずい

ヘル「・・・何してんの？」

優菜「いや、入ったら昨日の思い出しちゃうから・・・」

ヘル「・・・自分が男っていうの忘れていったらいいじゃない」

優菜「それとこれとは別だろ」

ヘル「・・・相手がいるなら、しっかり相手するほうがいいわよ。明日にはいなくなるかもしれないんだから」

優菜「・・・経験談か何か？」

ヘル「経験談かネットで拾って来たかは・・・想像に任せるわ」

優菜「ネット使えるの？」

ヘル「カオスの空間にパソコン置いてるとこ作ってるのよ。知らなかったの？」

優菜「初耳なんだが・・・」

ヘル「暇な時はそこで何か見てるわよ皆」

優菜「マジで？」

ヘル「うん」

消えた

優菜「・・・腹くくるか」

ガチャ

優斗の前に七罪の天使がいた

!!

シュンツ

ボツ

ベキツ

優菜「……懲りねえな……」

優斗「今のが七罪の天使か……」

優菜「……とりあえずカオスの空間に入るぞ」

ぐわーん

ヘル「あ……」

優菜「七罪の天使がもう来てたんだ」

ヘル「……じゃあここでイチヤイチャするの？」

優菜「しねえよ！」

ヘル「まあ、昨日のはゆっくり見せてもらったからいいけど」

見られてたのかよ……

優菜「プライベート!!」

ヘル「それじゃあ、こっちの部屋にいるから」

扉が現れる

ガチャ

カオス「おう、ポテチ食うか？」

ヘル「食べる」

ガチャ

なんだあの生活感のある部屋は

優斗「イチヤイチャするか？」

優菜「・・・考えてはいる」

その後飲み物を飲む

優菜「はあ・・・」

アイツ等昨日あそこの部屋から見てたのか・・・

見られたくなかった・・・

優斗「もう寝るか・・・？」

優菜「・・・うん・・・俺も強く見せるのは一旦やめるわ」

優斗「そか」

ジャンプして優斗に抱き着く

優菜「優斗・・・大好き〜！」

優斗「・・・お前それ明日なったら後悔してるやつだろ」

優菜「・・・お前の前でぐらい甘えていいって言ったのはお前だからな？」

優斗「いやだからって・・・」

チユツ

優斗「……お前……」

優菜「私は今だけ女になるから、お前もそれらしく扱ってくれよ？」

優斗「……はいはい、分かったよ」

抱き合いながら寝た……ように見えたが、優斗の目がパツと開く。

優斗「夢？……どこからだ？どこから夢だった？」

優菜の方を見ると、涎を垂らしながら寝ていた

優斗「まあいいや、寝よ」

ちなみに「もう寝るか……？」の後に速攻で寝てました

寝た後ヘルたち

ヘル「それでいいのよ、甘えられるときに甘えなくちゃね」

カオス「いやいや、あれ男同士だろ？」

アウラ「世の中BLっていう部類の本もあるんですよ」

クロノス「それはどういう意味だ？」

メーテイス「ボーイズラブですね。男同士が恋愛するんです」

イフリート「男同士が……？ゲイってやつか？」

トラ「ちよつとググってくる」

二分後

トラ「見つけたぞ」

アラメイ「どうだった？」

トラ「ゲイは「男の体だが心は女で、男が好き」な男。ホモは「男の心と体で、男が好き」な男。ちなみに「にゅはーふ」？つていうのは心も体も女になって、男が好き男。らしいぞ。Yahoo!知恵袋で言つてた」

ガイア「優菜さんは、心は男ですから「にゅーはーふ」・でしたか？ではないですね」
トラ「ああ、だから優菜はどう言われるんだ？と思つて調べておいた」

カマエル「さすがですね」

ホバル「敬語やめていいんだよ？」

トラ「優菜は「によたいか」というらしい」

ウンディーネ「によたいか？」

トラ「男が何かのきつかけで女になるといふ・・本や小説などで書かれることもある。ネットでも偉人などがによたいかした絵とかがあつたな」

ウンディーネ「そういうえば・・前見たことあるわね。海外では「日本は凄い」つて言われてるぐらい完成度が高いらしいわ。ゴキブリとかも擬人化つていので書いてる人もいるぐらいだし」

アリエル「Gをですか・・!?」

イフリート「お前ゴキブリの事Gって言うのか」

ウンディーネ「海外では「発想が凄い」「頭の中どうなってるの?」「狂ってる（誉め言葉）」とか言ってる人もいるし」

イフリート「最後のやつ絶対日本人だろ」

二日後

士道は悩みに悩んだが、未だに七罪は出てこない

指名と消える人合わせて四人消えた

士道のクラスメイトの残り二人と男友達・・殿街とかいったか?・・おっと漢字が違ふ殿町ね。そして先生が消えた

優菜「・・・どう考えても焦ってるな、士道は」

優斗「そうだな」

ピンポン

優菜「誰だ?」

ガチャ

優菜「はーい」

ラタトスクの人「優菜と優斗だな? ついて来てもらう」

優菜「・・・七罪の事に関してですよね？」

ラタトスクの人「そうだ、来てくれるね？」

優菜「分かりました」

車に乗る

ラタトスクの人「大体のことは把握してるようだから、大体は省かせてもらう」

今から行くところに士道と残りの容疑者がいるとのことだ

そして着くと

耶？矢と美九、そして折紙がいた

耶？矢「何だ、お前たちも呼ばれたのか」

美九「あら、優菜さんじゃないですかあ」

折紙「・・・男の方は誰」

優菜「お前は知らなかったか・・・もう一人いただろ？アイツが男に戻ったんだよ」

折紙「・・・男だったの」

優菜「そこからかよ」

ラタトスクの人「では、あちらの扉の先に士道さん達はいますので」

ガチャ

なんだこの薄暗い部屋は

耶？矢「くく、なんともお誂え向きではないか。我が、彼の蛇王に審判を下すに相應しき舞台よ」

美九「すごい、なんだか秘密基地みたいですねー」

折紙「……」

優菜「で？今度はどういう話？」

全員座る

琴里「……よく来てくれたわね、みんな」

士道「……みんな、もう話は聞いてると思う。まずは……謝らせてくれ。ごめん。俺のせいで皆を巻き込んだしまった。……本当に、ごめん」

耶？矢「ふん、気にするでない。どちらかと言えば、そのような重大な問題を我らに黙っていたことを謝ってほしいくらいだな」

美九「うーん、あのデートは調査の一環だったわけですかー。それは少し残念ですねー」

折紙「……」

士道「身勝手だつてのは分かつてる。でも……頼む。皆の力を……貸してくれ……っ！」

折紙「士道、一体これはどういうこと」

士道「!すまない、折紙。でも、頼む。お前の力が必要なんだ」

折紙「勘違いしないで欲しい。士道に力を貸すのは当然。精霊がかかわっているのであればなおさらに。……私が聞いているのは、そのことではない」

士道「え?つていうと……」

折紙「ここは、一体どこ?先ほど私達に事情を説明したのは一体誰?前からずっと思っていた。貴方は一体、何と関わりを持つているの?」

士道「そ、それは……」

琴里「あんまり細かいことを気にしすぎると、皺が増えるわよ」

折紙「……五河、琴里」

琴里「……何よ」

・
・
・

空気が重いよ!

折紙「……話は、後で聞く。とにかく、士道に協力することに異論はない」

士道「あ、ああ……ありがとう、折紙」

折紙「構わない。でも」

士道「でも?」

折紙「急に呼び出されたから、少し、期待した」

士道「……それは……なんというか、すまん」

耶？矢「くく、話は纏まったようだな」

バツと両手を広げてポーズを取りながら高らかに声を上げた

耶？矢「ならば始めようではないか。我が中に潜みし悪逆の物を炙り出す、選別の議を！」

琴里「あら、随分気合が入ってるわね」

耶？矢「当然ではないか！この中に、夕弦を拐かした不届き者がおるのであるう!?ならばそやつを見つけたし、相応の代償を支払わせてやらねば……気が済まないし……」
今素が出たな

それに気づきコホンと咳払いする

耶？矢「とにかくだ！夕弦たちを消した精霊とやらは、我が必ず見つけてみせる！」

琴里「はいはい、気合十分なのは分かったから、とりあえず落ち着きなさい。状況は、この部屋に入る前に説明した通りよ。この中に一人、変身能力を持った精霊が紛れ込んでいて、私達はそれを見つけないといけない。今まで行つた調査の結果は、この資料に纏められるわ。何か質問や気になることがあつたら、どんな小さいことでも構わない。遠慮なく言つてちょうだい」

美九「なるほど……あの時のダーリンの質問はこういう意味だったんですよねえ」

折紙「……だーりん？」

士道「ま、まあ、それは後でいいじゃないか」

折紙「……」

耶？矢「して、士道。その七罪とやらは、一体どんな容貌をしておるのだ」

士道「え？ああ、それは……」

琴里「……見るもおぞましい、酷い不細工面よ。例えるなら、車に轢かれたヒキガエルみたいな。ギョロつとした目は異様に離れ、鼻は豚のように上を向いていて、肌は月のクレーターみたいな痘痕だらけだったわね。体も丸々太っていて、もうバストウエーストヒップが全部同じ数字じゃないかと思えるくらいに酷い体型よ。そしてとにかく顔が大きい。多分三等身暗いじゃないかしら。なんかもう精霊つてよりモンスターね」

……

え？

士道「おい、琴里……」

琴里「しっ……」

優菜「お前なあ……色々言いすぎじゃないか？嘘でも流石に可哀そうだぞ……」

……他も（。ㇿ）って顔になつてえる

琴里「……ええ冗談よ。これを見てちょうだい」

端末に七罪の姿が映る

美九「ええー……話と全然違うじゃないですかー。琴里ちゃんたら怖い子」

琴里「他に何かある？」

耶？矢「しかし、士道や琴里がこれだけやって尻尾も掴めぬというのは、些か気になるな。そもそもこの中にその七罪とやらがいるのは確かなのだろうか？実は誰かに化けているなどというのは嘘で、慌てる士道を見て愉悦に浸りただけ、という可能性もあるのではないか？」

琴里「……もちろん、その可能性もゼロじゃないわ。でも……」

士道「ああ。俺もそんなに長い時間話したわけじゃないんだけど……たぶん、嘘はついてないと思う」

耶？矢「ほう？何故基の様な事が言えるのだ？相手は夕弦たちを消してしまうような精霊なのだぞ？信頼せよという方が難しかろう」

士道「ん、なんていうのかな……七罪は、自分の能力にも凄く自信を持ってるように感じたんだ。それに、七罪は確かに『この中に私がいる』って明言した。ルールの隙を衝くならともかく、明らかルール違反はしてこないと思う」

耶？矢「ふむ……なるほどな。まあ、直接七罪と会話をしたお主が言うのだ。信じ

ようではないか」

折紙「士道。精霊へウィッチ」が送ってきたという写真とカードを見せてもらうことは可能？」

士道「ああ、もちろん」

士道が鞆から白い封筒を出して折紙に渡す

折紙が中の写真とカードを並べる

・・・あ

見ると俺の写真はカメラにどう見ても感づいているように、カメラと目が合っている・・・七罪と学校であった次の日だったか？あの時撮られたのか

耶？矢「ふん・・・なるほどな。隠し撮りをおつたということか」

美九「ちよつとー！私目が半開きなんですけどおー！」

折紙「・・・一つ、確認しておきたいことがある」

士道「ああ、なんだ？」

折紙「へウィッチ」の変身能力というのは、人間や精霊以外のものに変身することも可能なの？」

士道「え・・・？人間や精霊以外の・・・？」

折紙「そう。もっと詳しく言うのなら、生命活動を行っていない物質、また、元の姿

から明らかに体積の違う存在に変身することは可能か、ということ。たとえば、手のひらに収まるくらいのおおきさになったり、紙のように薄くなったり」

士道「多分可能だ。ただ、極端に大ききの違うものに変身できるかどうかは・・・わからない」

折紙「不可能とはいいい切れない、ということ？」

士道「ああ・・・そうだな」

折紙「そう」

優斗「お前は どう思う？」

優菜「耶？矢はないと思うな・・・折紙もさっきの反応じゃないと思うし、美九は・・・うん」

美九「うんって何ですか!？」

優菜「まあ、気は同じだから本物だろ」

優斗「じゃあ消去法で琴里か」

優菜「・・・俺ならここに残ってる奴らには絶対に化けないけどな」

士道「どうしてだ？」

優菜「耶？矢は中二病入ってるし、琴里は士道と長年住んでるから圧倒的にバレやすい。折紙はアレだから絶対になりたくないし、美九はアイドルがしんどい」

優斗「それ全滅じゃねえか」

優菜「俺だったら、もつとボロが出にくい奴にする。一応今いない奴も言うと夕弦はない・・・土道の友達や先生は性格を知らないが・・・土道はどう思った？」

土道「俺は皆は違うと思う」

優菜「だろうな。先生はブラックって言うし、女の子たちは仲がいいからちよつとした事でバレるかもしれない。男の・・・殿町だったか。あいつと風呂に行ったんだろ？」

土道「・・・何で知ってるんだ？」

優菜「俺はいつでもどこでも気を感じれば、そいつがどこにいるかは分かる。何をしてるまでは分からないがな」

琴里「初耳なんだけど・・・」

優斗「・・・すまん、詳しく言うの忘れてた」

優菜「お前と誰かが風呂に行くのを感じた。まあ一緒に風呂に行けるヤツなんて男以外は無理だからな。だから殿町だと思った。・・・どうせなんかして逃げられたんだろ？ 急激に気が変化したからな」

土道「う・・・」

優菜「だから俺は人の中にはいないと思う。俺だったらもつと安全な場所から見ようとす」

耶？矢「どうということだ？」

折紙「こういうこと？」

ドンツ

写真を重ねてナイフで全部一気に刺した

いやいやいやいや

士道「い・・・ッ!？」

折紙「これが最も簡潔、かつ速やかな確認方法」

優菜「違う、そうじゃない・・・てか怖い・・・いつも持ってるのか？・・・俺がさっき今いない人まで言ったたのは七罪の気を感じないからだ」

琴里「どうということ？」

優菜「既にこの世界にはいないって事だ」

士道「だったら本当に今までの容疑者の中にいるのか？」

ダ○ガ○ロ○パの江ノ島みたいなことするな・・・

作者「ダンロンやろうぜ！VITAかPS4買ったら売ってるはず・・・マジでおもしろいよ」

優菜「・・・さっきの折紙の話の通りなら・・・写真の中に映ってるものなら、なんにでもなれる・・・なら服や靴、身につけていたものや周りにいた生き物も容疑者にな

る」

グワン

七罪の天使が部屋の真ん中に現れる

皆「な・・・っ!?!」

部屋の時計は23時10分・・・まだ0時まで50分も残っている

士道「どういことだ？まだ今日は過ぎてないじゃないか！」

鏡に七罪が映る

七罪「・・・うふふ、そう慌てないの。最後の夜なんだから、もっと楽しみましょう。

最後の夜の特別ルールよ。今日の指名時間は、いつもの10倍、10分間あげるわ。10分で私を当てられなかった場合、もしくは指名がなかった場合、また10分間の指名時間をあげる。最終的に、容疑者が一人になるまでに私を当てられなかったらあなたの負けよ。今ここにいるみんなの「存在」はすべて私がいただくわ」

士道「く・・・!」

琴里「50分・・・ね。また、いやらしいことを考えるわ」

士道「どういことだ?」

折紙「・・・残った容疑者は四名。今から、一度も犯人を指名できずにタイムオーバーを迎えた場合、ちょうど午前0時には、容疑者が一人だけ残る事になる。つまりへウイツ

チへは、日付が変わると同時に、このゲームを終わらせるつもり」

士道「……ぐ」

「……まあ、大体予想はついてるけど」

七罪「ああ、そうそう。せっかくみんな集まってくれてるんだし、今日は士道君以外が私を指名しても構わないわよ。でももちろん、指名タイミングは10分に一回だから、よく考えて指名してね。もし投票が同数の場合は、その指名は無効とさせてもらうから」

士道「……随分と、勝手にしてくれるな」

琴里「……ちようどいいわ。ゲームマスターに確認しておきたいことがあるの」

七罪「あら、何かしら？」

琴里「このゲームのルールは、この写真の中にあなたがいる。当てられなかった場合、一日につき一人が消されてしまう。犯人の指名を間違った場合、間違えられた人も消えてしまう……で会っているのよね？」

七罪「さあ、どうでしょう……とりたいところだけど、まあ、それくらいなら答えてあげる。……貴方の認識に間違いはないわ」

琴里「……そ」

優菜「……話を遮られたが、さつき言った通り俺は人の中には七罪はいないと思う」

琴里「あら？それはまだ分からないわよ？」

優菜「・・・話を聞こうか」

琴里「だってそれって・・・あなたが七罪だとしたら折紙の流れからそう言えば、ほぼ確実にそつちに目が傾くわ。そうしたらあなたには完全に目が向かなくなるわ」

優菜「俺と優斗はペルソナが使えるんだぞ？それが本物って証拠だろ」

琴里「七罪の変身能力なら可能だわ」

優菜「・・・お前は俺が七罪で着眼点を逸らそうとしてると」

琴里「ええ」

優斗「・・・まあいつもなら抱き着いてはこないよな・・・なら本当に・・・？」

琴里「いつもと違うところがあつたの？」

優菜「バカ！言うな!!やめろ!!」

優斗「・・・」

目を見るが・・・

優斗「実はこの前から頭の中の何かがほどけたみたいに甘えてきてな。抱き着いたりキスしたり」

ビッ

優菜「それ以上言うな」

気の劍を首に突き立てる

優斗「・・・これは危ねえよ」

琴里「ちよ、ちよつと！」

優菜「黙れ」

ぞわぞわぞわ

耶？矢「な・・・なにこれ・・・！」

折紙「何ていう殺気・・・!!」

士道「優菜！一旦落ち着け・・・!!」

美九「・・・」

美九は泡を吹いている

優斗「・・・やるの？」

優菜「言つたお前が悪い」

シュンツ

ドンツ

同時に顔面を殴る

拳をすぐにほどき

優斗の首を掴んで地面に叩きつける

ドガア

馬乗りし

思いつきり殴ろうとすると

ドゴオ

ギリギリ避けられ

腹を蹴られる

少し浮いて

その間に蹴った反動で優斗が起き上がる

そして優斗が右足の蹴りを入れるが

ガードする

攻撃の反動で一回転しこっちも左足で蹴りを入れようとしたが

脚を掴まれ

引つ張られ仰向けに押し倒される

その上に乗っかる

優斗「正気に戻れ」

ペシッ

優菜「あべっ・・・」

スウウウウ

士道「殺氣が……消えた？」

琴里「さすがに煽りすぎたかしら……」

耶？矢「やりすぎ！」

美九「……」

士道「あつ美九……」

美九「ハッ！……今何が起きたんですか？」

優斗「いきなり暴れるなつて」

優菜「いや普通言わないよね!?普通隠れて裏でイチャイチャするもんでしょ!？」

優斗「ごめんて」

優菜「ごめんて済んだら警察はいらんのじゃああああ!!」

ペシッ

優菜「ギャッ……」

優斗「……落ち着いたか？」

優菜「……ああ……でもお前が悪」

ペシッ

優菜「音の割に結構痛いんだよ!？」

士道「お前らそろそろ夫婦喧嘩はやめろよ」

優菜「夫婦!？」

七罪「・・・えつと・・・そろそろ時間だけど・・・どうする?」

士道「ほら七罪まで困ってるじゃねえか・・・」

優菜「・・・」

ドンツ

優斗をどかして

部屋の隅に体操座りで座る

優斗「あちやー・・・」

近付いて

ズルズル

壁との間に

入れる隙間を作り

そこに座る

よしよしゞ(・ω・、)

士道「・・・どうすればいいんだ、これ・・・」

七罪「とりあえず・・・誰か指名してくれないと・・・」

優斗「……それってさ、全部まとめたりできないの？」

士道「え？」

優斗「あと40分あるなら最後まで全部まとめてやったりとかできないのか？」

琴里「どういうこと？説明の仕方が下手過ぎてわからないんだけど」

優菜「……残りの指名を全部まとめて最後に持つてくつて事だよ」

耶？矢「それでは最後の指名の重みが増すではないか！」

優菜「優斗はそれを考慮してでも考える方に時間を裂いたほうがいいと思つたんだよ。指名を續けて焦るより、最後まで考えた方が良いつて事だ」

優斗『……そこまで考えてないけど』

折紙「なら貴女は何が怪しいと思うの」

優菜「……美九の髪飾りによしのんに先生の眼鏡とかの身につけるものに化けてると思う……もしよしのんに化けてるとしたら、士道ならわかつたりするだろうけどな」

士道「よしのん……」

ギユ

優菜「ギヤツ」

美九「ギヤツ？」

へなへなへな

優菜「ゆう……と……お前……」

尻尾を……掴むな……!!

優斗「優菜は尻尾を掴まれたらこんな風に力が抜けるんだ。まあこれが本物って証拠だな」

琴里「……何で今？」

優斗「ん？容疑を晴らしたほうがいいと思つて」

優菜「放……せ……」

ギョツ

優菜「ぎやああああ!!!」

琴里「……まあ、それを知つてゐるって事は優斗も本物そうね」

士道「もしか、して……」

今のいざこざのうち何か思い出したらしい

耶？矢「何か思い出したか!？」

士道『この中に、私がいる。誰が私か、当てられる?』……」

一つの写真を見る

士道「……七罪。一つ確認したいことがある」

七罪「ふうん？何かしら命乞いなら聞かないわよ」

士道「……お前の送ってきた写真は12枚。でも、容疑者の数は……本当に12人か？」

七罪「ふふ、さあて、どうかしらねえ」

……やっぱりか

優菜「そろそろ放せ……」

スツ

尻尾を放す

優菜「容疑者は全部で12人と1体だ」

折紙「どういうこと」

士道「七罪は最初から安全圏にいたんだ。普通ならよしのんは容疑者には入らないが……折紙と優菜のおかげで分かった。調査一日目、四糸乃とよしのんが仮装をして俺の家に來た時……最初にドアの隙間から顔を出したよしのんに驚いて、持ってた携帯を投げちまったんだ」

琴里「そういえば……そんな映像を見た気がするわね」

士道「でも、よしのんは、その形態を綺麗に避けてみせたんだ。まるで、携帯が飛んでくるのが見えたみたいだ。……四糸乃の目は、確かにドアの向こうにあったのに」

琴里「あ……！」

士道「それに・・・もう一つ。俺が昔のことを確かめようと会話を振った時、よしのんは、折紙の家にいたときのことを話したんだ。確かに、四糸乃がよしのんをなくしたとき、俺はよしのんを折紙の部屋で見つけた。でも・・・知るはずがないんだよ。四糸乃から離れたよしのんは、ただの人形なんだから」

折紙「！やはりあの時なくなっただのは士道が持つて行ったからなの」

優菜「・・・今はスルーするね」

士道「お前は声を発してしまった。動きも声も、すべて四糸乃に任せていればよかつたのに・・・！情報を補足して疑いを晴らそうとしたのか、余裕をかましてヒントを与えたつもりなのかは知らないが、一言だけ、言葉を発してしまっただ・・・！さあ、どうなんだ、七罪！お前が化けていたのは、よしのんなのか!？」

七罪「それは・・・」

ブルブルブル

ブブブブブブブ

天使が突然震えだす

ピシッ

ピシピシピシピシ

パアアア

今までより強力な……まるで部屋の真ん中に太陽があるような光を放つ

士道「く……」

琴里「な、何よ、これ……！」

美九「きやあつ！」

耶？矢「何だこの光は……！」

優斗「優菜！」

優斗は優菜を光から庇うように抱き着く

優菜「ちよ」

スウウウウ

光が消えていく

すると周りには消えていた人たちが現れていた

士道「！みんな！」

十香「こ、ここは……一体……」

耶？矢「夕弦！夕弦！」

耶？矢が夕弦の体をゆする

夕弦「朦朧。耶？……矢。相変わらず……騒々しいです」

耶？矢「！夕弦……っ！」

耶？矢が夕弦に抱き着く

夕弦も優しく抱き着き返す

先生や殿町、女子三人衆は気絶したままだった

士道「よかった．．．みんな．．．無事で」

十香「シドー！」

十香が士道に駆け寄る

十香「な、何があったのだ？ここはどこだ？」

士道「．．．おう」

十香「ぬ．．．つ、どうしたのだシドー．．．むー．．．」

ふう．．．終わったか．．．

しっかし．．．七罪にはダ○ガ○ロ○パ全シリーズやった後人狼やってみてほしい

士道「！あれは．．．！七罪．．．！」

七罪に近付くが．．．

あれ？なんか小さくない？

士道「．．．俺たちの勝ちだ。観念してもらおうぞ」

七罪「．．．っ」

ゆつくりと顔をあげる

七罪「一度ならず二度までも……私の秘密を見たな……っ！ゆ、ゆゆ許さない。絶対に許さない。全員、全員タダじゃ済まさないイイイイツ！」

天使を掲げる

七罪「〈贗造魔女〉(ハニエル)……!!」

士道「な……っ!?!」

ペアアア

士道「く……」

スウウウウ

これ……は……

十香「シドー!シドー!」

視点が低く……というか全体的に小さくなったというか

十香「シドー、なんだこれは。体が思うように動かんぞ……!?!」

士道「な、な……!」

優菜「なんじゃこりやああああああ!!」

士道「これは……一体……」

七罪「ふふ、ふふふふふふ……っいい様だわ……っ!あんたたちみいーんな、ずつ

とちびすけのままでもいいのよ……っ!」

天使に跨つて天井に穴を開けて逃げていく
士道「まッ、待て！七罪！七罪いいいつ！」

第百十二話（デート・ア・ライブに来た『第四話』より）

10月29日

日曜日

五河家

日曜はぐうたら過ごしたい・・・のだが

十香「シドー！おなががすいたぞ、シドー！」

折紙「しどう、おしっこ。ひとりではできない。ついてきて、しどう」

美九「だーりーん！だーりーん！」

四糸乃「あ、あの・・・しどうさん・・・」

琴里「みんなちよつとおちつきなさい！つて、あ！かぐや、それわたしのチュツパチャ

プスじゃないの！」

十香「シドー！ごはんがたべたいぞ、シドー！」

耶？矢「くく、ちいさきものよ。さまつなことにこうでいするは、おのがわいしよう
さをろていするにほかならんぞ」

夕弦「しゅこう。ひとつくらいいいではないですか」

琴里「つて、あなたも！かえしなさいよー！」

四糸乃「う．．．つ、うええええええ．．．」

よしのん「ああつ、ほら、だいじょーぶ、だいじょーぶ」

折紙「しどう、もれてしまう」

耶？矢「くーくくく！いちどわがりようちにはいったものはかえせぬなー！」

夕弦「どうぼう。かえしてほしかつたらつかまえてみるがいいです」

美九「だーりーん！だーりーん！」

the 大☆惨☆事

優斗「学級崩壊してるみたいだな．．．？」

優菜「どうすればいいんだ．．．」

士道も頭を抱えてる

士道「七罪．．．一体、なんでこんな．．．」

十香「シドー！シドー！」

折紙「しどう、そろそろげんかい」

四糸乃「う、うう．．．」

琴里「この、まちなさいよつ！」

耶？矢「ふはは！ここまでくるがいい！」

夕弦「ちようしよう。そのていどですか」

美九「だーりーん！だーりーん！」

士道「わかった！わかったからとりあえず皆一旦落ち着いてくれ……！」

令音「……お邪魔するよ」

士道「令音さん！」

令音「……大変そうだね、シン」

耶？「矢と夕弦の首根っこを掴み動きを止める

耶？「矢「のあッ!？」

夕弦「しようげき。くはっ」

令音「……耶？矢、夕弦。人のものを取つてはいけないよ。君たちも、自分のお菓子を勝手に食べられたらいやだろう？」

耶？「矢「ぐむ……」

夕弦「……はんせい。すみません」

令音「……よし、では二人で琴里に謝ろう」

耶？「矢「ふん……すまなかつたな」

夕弦「しゃざい。もうしません」

令音「……どうだろう、琴里。取られた分のキャンディは後で補充しておく。彼女

たちを許してやってはくれないだろうか」

琴里「も、もういいわよ、別に。．．私も、分けてあげなくて悪かったわ」

令音「．．．ん、三人とも、いい子だ．．．さて、そちらはどうしたのかな」

士道にしがみついでる

十香、折紙、四糸乃、美九の方を見る

令音「．．．十香、今シンはちよつとだけ忙しいんだ。ご飯はもう少し待つてくれるかな？その代わり、特別にこのクツキーを上げよう。．．折紙、シンは一人でトイレに行ける子が好きだと言っていたよ。．．四糸乃、安心したまえ。君が朝、食器を壊してしまった事なんて、シンは気にしてないさ。．．美九、シンはちゃんと君の声を聞いているよ。無視しているわけではないんだ」

．．鮮やかだ

士道「すいません．．助かりました。俺だけではどうにもならなくて．．」

令音「．．．優菜たちはダメだったのかい？」

士道「．．．なんかずつと明後日の方向を見ました」

令音「．．．まあ、皆の世話を任せてしまつてすまなく思っているよ」

士道「いえ、七罪の反応を捜してくれてるのはわかつてますから。にしても．．す
ごいですね、令音さん。まるでお母さんみたいだ」

・ ・ ・ ちよつと待て令音さんって独身だったよな？

独身の女性にお母さんみたいはいかんぜよ ・ ・ ・

士道も気づいたらしい

士道「す、すいません。違うんです。そういう意味じゃなくて ・ ・ ・」

令音「 ・ ・ ・ いや、構わないよ」

士道「そ、そういうえば、令音さん。七罪は見つかつたんですか？」

令音「 ・ ・ ・ やはり七罪は霊波を隠蔽することができ様だ。広範囲に観測機を回しているが、未だに反応は見受けられない。 ・ ・ ・ 無論、既に臨界に消失しているという可能性もあるが」

士道「そう ・ ・ ・ ですか ・ ・ ・ でも ・ ・ ・ 何で七罪はこんなことをしたんでしょう」

令音「 ・ ・ ・ そうだね、あの場から逃走するための緊急措置という可能性もあるし、精霊たちの戦力をそぐことにより、君に何らかの警告を残していったとも考えられる。あとは ・ ・ ・ 」

士道「あとは？」

令音「 ・ ・ ・ 単なる嫌がらせ、かな」

士道「 ・ ・ ・ 」

SO・RE・DAー（ベストハウス風）

その夜

士道の部屋と琴里の部屋に分かれてみんな寝た

折紙は「やることがある」と名残惜しそうに帰ってつた

俺と優斗はカオスの空間に入る

優菜「・・・どうにかして戻さないとな」

優斗「いつまでもこれじゃ流石に過ごしにくいな」

優菜「・・・俺は今この状況で別世界に行ったらこのままいつてしまう気がする」

優斗「つまり？」

優菜「ご教授しよう。つまり元の体に戻るまではこの世界から出ないほうがいいとい

うわけだあー！」（パラガス風）

優斗「・・・じゃあ寝るか」

優菜「うん」

ぐう・・・

次の日

寝坊したんだけど

優菜「起きろ！今の時間見ろ！！8時だぞ八時！HA☆TI☆ZI!!!」

優斗「うん・・・？この体じゃいけないだろ」

優菜「ハツ・・・それもそうだ・・・」

優斗「どうかしたかお前」

優菜「いつもの癖が・・・」

優斗「お前それ重症だぞ」

優菜「・・・とりあえず出ようか」

士道家

優菜「誰もいない・・・？」

四糸乃「あ・・・優菜さん」

優菜「四糸乃、他の皆は？」

四糸乃「琴里さんと美九さん以外は・・・学校に行きました」

優菜「学校!？」

・・・色んな意味でマズい・・・特にそこに折紙がいるなら「父がお世話になってます。母は鳶一折紙です」とかいいかねない

優斗「回収しに行くか」

優菜「クロノス」

優斗「イフリート」

イフリート「飛んでいくのか？」

優菜「いや、バレたら厄介だ・・・普通の格好とかになれたりするか？」
スウウウウ

イフリート「人に化けるくらいなら朝飯前だ」

優菜「よし、おんぶして学校までダッシユだ」

ダダダダダダダダ

イフリート「とんでもない過ちをした気がするんだが」

優斗「気のせいだろ」

学校に着くと

士道が走って入っていくのが見えた

十香たちの気は・・・職員室!?

優菜「急ぐぞ」

ダダダダダダダダ

気が上に？

ダダダダダダ

ガラガラ

十香「シドー！」

遅かった・・・

士道の教室の入口に十香たちが・・・

士道「な・・・っ!？」

岡峰「ああっ、駄目ですよ！職員室で待っててくださいって言つたじゃないですかあ
！」

十香「む？なぜだタマちゃんせんせいよ。わたしはきょうしつにいてはいけないのか
？」

岡峰「えつとですね、ここはお兄さんやお姉さんたちが勉強をするところな
で・・・」

十香「わたしもシドーといっしょに勉強をするぞ！」

岡峰「ええと、だからそれは、もう少し大きくなったらで・・・」

耶？矢「くく、なにをしておるか」

夕弦「じやま。あとがつかえてます」

なんでこんなところに小学生が・・・？

やーん、可愛いー！

あれ？なんかこの子達、どこかで見たような気が・・・

士道「・・・ああ、こつちに来てるよ」

琴里と話してるらしい

耶？矢「おおシドー！やはりここにいたか！」

つて止まつてる場合じゃねえ！（笹食つてる場合じゃねえ！！風）

耶？矢「おいしどう、われらがにねんさんくみのたんにんに、はなしをとおすがよい。

われらがやまいといつてもしんじぬのだ」

夕弦「ためいき。がいけんでしかものごとをはんだんできないおとなです」

ロリコン

犯罪

ダメ、ゼツタイ

ほら士道に風評被害が！

士道「・・・おまえら、なんでここに」

十香「む？おかしなことをきくな。きようはがつこうではないか。いっしょにねてい

たのに、きづいたらシドーがいなくなっていたのでびつくりしたぞ！」

!!

ちよつと五河くん、この子たちは・・・？

一体どーゆー関係で・・・？

ていうか一緒に寝てるの・・・？

距離があとちよつとの所で折紙が士道に抱き着き

折紙「パパ」

おい!!

士道「な・・・ッ!?!」

パパ!?!今パパって言った!?!

えっ、パパって!?!ポリネシア神話の地母神!?!ギリシアの数学者!?!

お、お嬢ちゃん、お名前は・・・?

折紙「五河千代紙です。いつももちちがおせわになっています」

やっぱり言いやがった!!

士道「お、おい・・・!?!」

折紙「ママのなまえは鳶一折紙です。わたしはパパとママのあいこのけっしょうです」

さっきの予想通り過ぎてヤバイ

優菜「おい!何で学校まで来てるんだよ!」

十香「ん?おおーゆうなか」

士道「優菜!?!十香たちを頼んでいいか?」

優菜「ああ」

今の誰?知ってる?

隣のクラスで見た気がするな・・・

クラスの人たちは色々と動揺している

折紙は最優先で捕まえた

士道「この子たちは・・・その、あれだ！親戚の子供を預かってるだけなんだよ！パパとかいうのはほら、あだ名みたいなもんでさ！」

ええー・・・？

うーん・・・なるほど。五河の事だからそういうのもあるのかと思っちゃったぜねー。ありそうだよねー

でもこの子達と一緒に寝てたのは本当なんだろ？ロリコン疑惑は消えないぞ

士道「・・・おい」

アハハハハハハ

士道「つたく、好き勝手言いやがって・・・ほら、みんな。今日は俺も学校早退するつもりだったし、一緒に帰ろうな」

十香「ぬ？もうかえるのか？」

士道「ああ、もう目的は果たしたしな。ホームルームが終わったらすぐ行くから、ちよつと職員室で待っててくれないか？」

十香「むう・・・わかった。シドーがそういうならまっているぞ」

士道「悪いな。じゃあ少しの間・・・」

十香の肩に士道が手を置くと
スツ・・・

士道「え・・・？」

十香「な・・・っ！」

士道「？どうした、十香・・・」

十香の服の縫製が士道が触ったところから服が解けていった
なんでやっ!!

ダッ

十香「な、なにをするのだシド」

抱えて

ダツシユ

ダダダダダダ

優菜「あとは任せた！」

優斗「任せろ」

トイレに入る

十香「いきなりなにをするのだ！」

優菜「ガイア、服作って」

ポ
ン
ッ

優菜「はいこれ着て」

十香「わ、わかった」

優菜「じゃあ外で待ってるから」

出
る

・ ・ ・ 十中八九七罪だろうな

なら近くにいるのか

じゃあ氣を探つて

き、きやあああああああああッ!?

な、何よこれえええええええ!

ルカナアアアアアン!?

・ ・ ・ 今のはこの前の女子三人組だな

しつかり名前は聞いておいた

亜衣、麻衣、美衣だな確か

その頃教室前の優斗たちは

殿町「お、おい、やり過ぎだぞ五河・ ・ ・ !」

殿町が肩に手を置く

士道「いや、俺は何も・・・」

パアア

窓の外が光り

パアアアン

殿町の服がはじけ飛んだ

殿町「いやあああッ!？」

奇跡的に股間は布で隠れていた

お、おい、何だよ今の・・・!

一瞬にして服を・・・!？」

五河くんに触られたら脱がされる!？」

士道「いや、だから、俺は・・・」

スパアアアン

岡峰「うわきやあああつ!？」

今度は士道の視線の先にいたタマちゃん先生の服が吹っ飛んだ

岡峰「な、何するんですか五河くん!これはもう、責任取って結婚してもらおうしか・・・」

!

士道「いや、今のは俺触ってませんよね!？」

まさか、視線だけで・・・!?

なんてこった！奴は化け物か!?

優斗「士道！収集つかなくなる前に逃げた方が良いぞ！」

士道「もうつかない気がするんだけど!？」

優斗「どつちにしろ七罪がいる！逃げる方が賢明だ！」

耶？矢達は気づいたらしい

士道「・・・仕方ない、一旦帰るぞ！」

士道がこつちに走ってくる

その後ろで亜衣麻衣美衣が

亜衣「ちよつと待てコラ五河アアアアツ！」

麻衣「次きたとき覚えてろよおおお！」

美衣「マツパに？いてやるからなあああ！」

その後優菜たちと合流し

折紙と別れ

歸路に就く

士道「・・・大変な目に遭った」

十香「だいじょうぶか、シドー」

優菜「このままじゃ士道が精神的にもきついし社会的にも危うくなってくるぞ」

士道「早く・七罪を見つけないとな」

耶? 矢「くく、そうであるな。われをかようなすがたにしたいしよう、そのいのちをもつてつぐなつてもらうぞ」

夕弦「しゅこう。ぼかすかじゃんです」

優斗「それはやり過ぎだ」

士道「・・・ん?」

十香「おお! ドリームパークではないか!」

優斗「なんで士道の家がホテルになつてるんだ?」

優菜「七罪だろ」

・・・さすがにこの話が広まったら面倒だな

優菜「・・・とりあえずさっさと入った方が良いだろ」

士道「ああ」

入っていくが

優斗「中は無事だな」

士道「中まで変わってたら大惨事だよ」

今のうちに

外に出て石を四つ取る

家の四隅に置き

全部に幻惑魔法かける

すると外装が元の士道の家に見えるようになる

まあ見えるようになるだけだから魔法無くしたらホテルだけど

三日後

士道「・・・おお」

優菜「・・・大丈夫か？」

十香「シドー、げんきがないぞ、だいじょうぶか？」

優斗「あれからも何度も嫌がらせされたからな」

ペアアア

!?

シュンツ

優斗の腕を掴んですぐにカオスの空間に入る

5秒後出ると

皆がバニーガールに

優菜「・・・逃げてよかった」

優斗「・・・同感」

琴里「逃げてんじゃないわよ！」

優菜「しかもリビングが檻になってるし、壁がなくなつてご開帳になってるし」

優斗「『僕だけの動物園』なんて看板掲げられてるし」

士道「近所にいい訳のしようがないんだが」

優菜「仕方ねえ・・・」

外に出て

地面に手を置く

手が光ると

ドドドドドドドド

士道家の周りを土の壁が覆う

優菜「これで見えなくなつたはずだが」

パアアアア

土がすべてガラスの壁になる

ピキッ

優菜「ほお・・・そつちがその気ならこつちにも考えがあるぞ」

カオスを出す

優菜「範圍はこの家、誰にも干渉できない様にしろ」

どういう意味かって？

干渉できないって事は

スウウウウ

全部戻るといふ事だ

ポンッ

優菜「さあ・・・神を怒らせるといふ事がどういふ意味か教えてやろう・・・」

士道「なんか変なスイッチが入ったな・・・」

シユンッ

外に出る

ヒユンッ

ドーン

士道「あつ！」

優斗「行つちまった・・・」

士道「・・・あれヤバくないか？」

優斗「間違いなくヤバイ」

優菜へ

さすがにあの後すぐ追いかけるのは可哀そうだと思ったから泳がせておいたが
おいたが過ぎるぞ七罪

ドヒューン

さつき感じた気の場合はこの辺りか

!?

七罪の気が凄いスピードで逃げてる!!

誰かが追いかけてるな

・・・仕返し関係無しにヤバいな

仕方ねえ・・・

全速力だ

ドギューン

ヒューン

・・・

あれか!

A S T ! ?

いや

D E M か !

あの金髪は……

十香を攫った奴だったか？

……色々マズいな

七罪の腹が斬られてる

相手はあの十香を攫えるレベルで強い

ここは様子を見た方が

七罪「……ツ、だ、ず……げ……、死に……だぐ、な……い……」

……やっぱ無理だわ

ドヒューン

バキイイン

劍を折る

DEM隊員「なっ!？」

エレン「……あなたは……」

優菜「そうやすやすとやられちゃあこつちのメンツが立てれねえんだよ」

七罪「あん……たは……!!」

優菜「貸しを作りに來た」

DEM隊員「貴様!!」

ドギユン

ビユン

ドカーン

優菜「逃げるぞ、こいつら相手にするのは楽だが手加減できねえかもしれねえ」

エレン「手加減？なめられたものですね」

ヒユン

コオオオオ

ガキイイイン

優菜「・・・思ったよりは速いじゃん」

パキイイイン

？

DEM隊員1「ぐ・・・!？」

DEM隊員2「随意領域が凍結を・・・!？」

DEM隊員3「このままでは危険だ！随意領域を解除したのち、再展開、空中へ離脱

せよ！」

四糸乃か？

耶？矢「くくく！さかしいせんじゅつよ！まあ、ふつうであればそれがせいかいだ！」

夕弦「さんねん。しかし、ゆづるたちがいるいじょう、それはあくしゅといわざるを
えません」

ブオツ

DEM隊員「う、うわっ!？」

耶? 矢「くかかか!ぬるい!ぬるいぞ!」

夕弦「ちようしよう。なさないです」

優菜「ホント助かるよ」

士道「七罪!」

ダダダダダダ

士道「血が・・・!七罪!大丈夫か!」

優菜「七罪は連れて行ってくれ!こいつは俺がどうにかする」

優斗「俺達だろ」

優菜「はいはい、分かってるって」

エレン「貴方達も子供になっているのに勝つ気があると」

優斗「もちろん」

優菜「それじゃあ、バフデバフ全部かけて」

ヒュン

コオオオオ

ガキイイイン

優斗「準備中、もうちよつと待つとけ」

エレン「それではあなたは待つのですか？」

優菜「待たないねえ」

もう準備は終わったから

ブウン

優斗「さあ、さっさと終わらせるぞ」

ピカーツ

優菜「・・・やっぱり超サイヤ人4は元の姿か」

ドヒュン

ドンツ

エレン「ぐっ・・・」

優菜「行くぞ」

ヒュンツ

ドガガガガガガガガガ

バババババババババ

エレン『一つ一つが重い!!』

交互で常に殴る

ドンッ

ヒューン

ドオオオン

優斗「なんだ、もう終わりか？」

気は・・・

相当小さくなってるな

まあ、精霊＋宇宙人＋ペルソナだから普通に無理があるけど

どれだけの装備揃えてもかめはめ波で一発だろうし

優菜「人を殺す趣味はないからな、このままでいいか」

優斗「このままは流星に酷じゃね？」

優菜「死ぬこたあねえだろ」

他の皆は回収されたらしい

優菜「さっさと戻るか」

ドギューン

エレン「ぐ……まさかあんな奴に負けるなんて……何てスピードとパワーなの……」

反撃する機会がなかった・・・」

数日後

姿はすでに戻ってる

七罪が起きたらしい

士道が会いに行つたが

ネコに引つかかれたみたいになって帰つてきた

優菜「七罪つてネコだっけ？」

士道「ちげえよ」

優菜「まあ、いくら命の恩人でも心はそう開かないつてのは分かつてたしな」

士道「どうやらあの子供の時の姿がコンプレックスらしい」

何ソレむずくね？

士道「しかもあと二日以内にデレさせなきゃいけない」

結構詰んでね？

士道「それで頼みがあるんだが」

優菜「頼み？」

士道「他の皆にも頼んでるんだが、お前と優斗には護衛を頼みたい」

優菜「護衛？そもそもどこで何をするんだ？」

士道「地下の施設でエステとか散髪とか服とかで自分が可愛いって自覚できるように変身させるんだが、DEMとか諸々から守ってほしい」

優菜「まあいいけど、俺は化粧とかそこらへんは期待すんなよ？危なそうなときだけ出る」

士道「それで構わない」

優菜「時間は？」

士道「明日の朝、七罪が朝食を食べてから仕掛ける予定だ」

優菜「なら今日は早く寝るか・・・」

その夜

ヘル「あの子大丈夫なの？」

優菜「何が？」

ヘル「あれ絶対被害妄想も入ってるわよ」

優菜「何かあったらどうかするしかないさ」

優斗「結構しんどくないか？朝だろ？」

優菜「誰が二人でって言った？もちろんヘルたちも護衛だからな」

ヘル「ちよつと！今初めて聞いたんだけど!!」

優菜「今初めて言ったからな、だからお前らも早く寝ろ」

ヘル「……私達は寝なくても大丈夫なんだけど」

次の日

優菜「起きろおおおお!!!!」

ドカア

優斗「痛」

優菜「反応薄……ともかく早速行くぞ」

優斗「朝飯どうすんだよ」

優菜「途中で食う」

朝飯も済ませた

優菜「それじゃあ優斗は中回っててくれ、後はそうだな……イフリート、クロノス、カオス、アリエル、ヘルは一緒に外に来てくれ」

優斗「他は中か」

優菜「ああ、あんまり大勢が色んな同じところを何回も回ったら不自然だから」という事で別れた

今の所異常はない

七罪は琴里たちに連行されて色々されてる

優斗「ふう……」

ラタトスク職員「あ、見張りお疲れ様です」

優斗「まあ、何もないのが一番だけどね」

ラタトスクの人「ですなー・・・」

優斗「ところでよ」

ラタトスクの人「なんですか？」

優斗「お前の後ろにいるのは知り合いか？」

ラタトスクの人「後ろ？」

振り向くと

ラタトスクの人「!?誰だアンタは!!」

バリバリバリ

ヴィラン「お前は雄英高校の生徒だな？」

優斗「アンタはいつのやつだ？」

ヴィラン「俺をどこに連れてきたのかは知らねえが、殺せば戻れるよなあ」

話がかみ合わねえな

優斗「アンタは逃げな」

ラタトスクの人「は、はい！」

ダダダダダダ

優斗「話を通じないみたいだな」

電気系か

優斗「アラメイ」

シュンツ

アラメイ「どうした？いきなり呼び出して」

優斗「アイツ電気系だから任せた」

ヴィラン「なんだお前は」

アラメイ「電気系か・・・なら、カオスの空間でやりたいんだが」

優斗「カオス」

シュンツ

カオス「どうした？」

優斗「あいつとアラメイを何もないとこに入れて」

ブウン

入っていった

優斗「ありがと、後皆に敵が出たって伝えて」

カオス「分かった」

外では

優菜「中に出たか、OK分かった」

・・・・毎度毎度あつら沸いてくるんだか

ヒュンツ

シュンツ

弾？

方向を見ると

オバリヨン・・・？

銃撃属性の指弾辺りか

ピクシーが三体で支えて飛んでるな

ならまず

パパパン

シュワアアア

最後に

電撃付与

パン

シュワアアア

他もちよつと探してみるか

後10ぐらいいた

ホントどつから沸いてくるんだ

終わったらしいから戻った

優菜「で？結果は？」

士道「成功と言えば成功だな」

優菜「KWSK」

士道「変身自体は成功したんだが動揺と戸惑いで逃げて滑って頭打って今元の部屋にいる」

優菜「成功つて事は好感度みたいなのは上がってんだな」

士道「なんとかかな。それに一応お前達も呼んで正解だったばいな」

優斗「思ったより敵いたな」

琴里「結構異常なんだけどね・・・どこから入ってきたのかしら」

優菜「ま、また何かあったら呼んでくれ」

士道「ああ、今回は助かった」

その後

なんとか七罪に自覚させようとしても

なぜか心にもないことに言葉が七罪の中で変換され

自虐になるという面倒な展開になり、なかなか進めれないらしい姿を消して見に行ってみるか

地下施設

優菜「優斗は休憩所に飯食いに行っちゃったな・・・まあいいか」

つてもう姿消してるからあんま喋らないほうがいいか

琴里？

歩いてくるな

隅に避けとこう

女性「あれ、司令？」

あれは・・・藁人形（ネイルノツカー）椎崎雛子だっけか

琴里「・・・っ！」

椎崎「どうかしたんですか？こんなところで。さつきへフラクシナスに戻るって言つてませんでしたっけ？」

琴里「・・・ああ、ちよつと、七罪の様子を見て行こうと思つて」

まあいいか

七罪のどこに行こう

椎崎「あ、そうなんですか。．．．まあ、難物ですものね。このままじゃ封印もままなりませんし．．．」

琴里「封印？何の話よ」

!?

ピタッ

なんだと？

椎崎「そりゃあ、霊力封印の話ですよ。士道君にキスをさせて、精霊の力を封印する。私達はそのための組織じゃないですか」

琴里「．．．っ！ああ．．．そうだったわ。悪いわね、少し疲れてるのかも」

椎崎「あはは．．．無理もありませんよ。では、私も仕事が終わったら戻りますので、後ほど」

琴里「ええ．．．と、そうだ。一ついいかしら」

椎崎「はい？何でしょう」

琴里「十香たちを．．．見なかった？ちよつと、用があるのだけけれど」

椎崎「はい？なんででしょう」

琴里「？十香たちを．．．見なかった？ちよつと、用があるのだけけれど」

椎崎「十香ちゃん．．．ですか。ええと、確か向こうの休憩エリアにいた気がします」

けど」

琴里？「そ、ありがとう。また後でね」

椎崎「あ、はい。では後ほど」

スタスタスタ

琴里？「おかしいとは思ってたのよ。あの偽善者め……！」

歩いていく

明らかに様子がおかしい

……俺はおかしなところがあつたらとことん調べるんだ

なんでか？

パンケーキ探偵でわかるかい？

え？わからない？

なら

ペルソナ パンケーキ

で調べてみ

つと今喋ってる間に偽琴里がどっか行きそうだ

ついでに喋ってる間に気を確認したけど七罪だねあれ

十香たちの所に入っていく

七罪「・・・ハイ、十香、四糸乃」

十香「む？」

四糸乃「あ・・・こんにちは」

よしのん「おおー？琴里ちゃんじゃなーい」

優斗「どうかしたか？」

七罪「ああ、アンタもいたの」

優斗「え？ヒド・・・」

十香「琴里！ここは凄いな！ジュースがタダで飲めるとは！」

四糸乃「琴里さんも、飲み物・・・ですか？」

よしのん「何がいいのー？よしのんが幻の左で押したげるよー？」

七罪「今はいいわ。それより、皆はどう思う？・・・あの、七罪ってヤツの事」

優斗『ヤツ？』

十香「どう・・・とは？」

七罪「あの七罪って奴、気持ち悪くない？私達がちよっとおだてたら調子に乗っちゃってさ。ブスのくせにみつともないっいたらないわよね」

十香「ぬ？」

四糸乃「え・・・？」

よしのん「んんー？」

優斗「どうした？熱でもあるのか？」

七罪「え……？」

十香「琴里……一体どうしたのだ？そんな事を言うなど、らしくないぞ」

四糸乃「あ、あの……七罪さんは、気持ち悪くなんか、ないと……思い、ます」

よしのん「そうだよー。どったの琴里ちゃん。司令官業務でお疲れモード？」

七罪「な……っ」

おお、動揺してる動揺してる

七罪「ど、どうしたのよみんな。いいじゃない、そんないい子ぶらなくても。どうせみんなだつて思つてたんでしょ？あんなみすぼらしい女の機嫌取らなきゃならないなんて面倒だなーつて」

十香「何を言うのだ。そんなことはないぞ？服を選ぶのもとても楽しかったしな！」

四糸乃「はい……七罪さん、きれいでした……」

よしのん「いやー、土道君のメイクすごかったねー。今度よしのんもやつてもらおうかしらん」

優斗「疲労困憊か？俺は変身後の七罪の姿は見えないんだが、どう考えても言い過ぎだ。ていうか精霊つて基本顔整つてるから普通にかわいいと思うんだけど」

その発言は語弊がある

間違つてはないけど間違つてる

七罪「う、嘘よ。どうして……」

!!

サツ

あぶねえ

真後ろに耶? 矢達がおつた

当たる直前に避けた

マジ神回避

耶? 矢「くく、何を集まっておるのだ?」

夕弦「請願。夕弦たちも混ぜてください」

美九「ふふつ、皆でお茶会ですなー」

七罪「か、耶? 矢、夕弦、美九……!」

耶? 矢「ふん、どうした琴里。ただならぬ様子ではないか。闇に封じられし地獄の門でも開いたか?」

琴里「き、聞いてよみんな。十香たちがちよつとおかしいの」

夕弦「疑問。おかしいとは?」

琴里「あの七罪を綺麗だったとか、アイツを構うのが面倒じゃなかったとか言うのよ？ あはは、笑っちゃうわよねえ。あんなブス、見るだけでもテンション下がってるのに」
耶？ 矢「ふん、おかしなことを言っているのは琴里、御主ではないか。一体何があった。月の毒に狂うには、些か時間が早いぞ」

月の毒とは何ぞや？

夕弦「怪訝。琴里とは思えない言葉です」

美九「七罪ちゃんをそんな風に言っちゃだめですよー。あんまり度が過ぎると、私も怒っちゃいますからねー！」

琴里「ち、ちよつと待ってよ……あいつは、私達を鏡の中に閉じ込めて、私達に成り代わろうとした悪い精霊じゃない！ 普通に考えなさいよ！ なんであんな奴の肩を持つのよ！ アンタたちどっかおかしいんじゃないの!？」

美九「まあ……確かに七罪ちゃんには怖い思いさせられましたけどお……」

琴里「でしょう!?! なら……」

美九「でもお……それを言ってしまったら私も結構やらかしちゃいましたし……水に流そうとか、そういうこと言う気はありませんけど、少なくとも私は、七罪ちゃんと仲良くしたいと思つてますよ?。」

十香「おお！ 私もだぞ！」

四糸乃「わ、私も……です。きつと……仲良くできると、思います」

よしのん「話によると、変身先によしのんを選んだって話じゃない？ いやー、違いの分かる女だよなー」

耶？ 矢「ふん、まあ、我をあそこまで追い詰めた剛の者よ。軍門に置く価値はあろうて」

夕弦「首肯。見どころがあります」

優斗「別に今まで濃いやつが多かったからなく……そこまでどうって事はねえな」

七罪「……ッ！」

優斗「先生やら画家にもケンカ売るし宇宙人にラッキースケベの権化にゾンビに吸血鬼、勇者もいるし殺し屋もいる、賢者の孫もいるんだが英雄って言われてるし王子様もいるな。ああ、あとタコの先生にA Iとか中学生の殺し屋30人とか破壊神もいるな」

よしのん「優斗くん達の経歴の方がエグイね……」

七罪が出てくる

つと避けよう

扉が閉まる

優斗「……」

十香「何かあったんだろうか……」

優斗「……怪しいな」ボソッ

優菜は

追いかけてマッスル

ドン

あつ士道

士道「おつと、おう、琴里」

七罪「……」

士道「なんだよ、元気ないな。どうかしたのか？」

七罪「……別に。どうもしないわよ」

スタスタ

士道「あ、ちよつと待てつて」

七罪「……何よ。私だつて暇じゃあないんだけど」

士道「ああ、悪い悪い。すぐ済むよ。……七罪の事なんだけどさ」

七罪「……！七罪が、何？」

士道「あ、ああ……七罪の食事の事なんだが」

今のうちに

七罪が逃げそうな方の突き当りに隠れる

七罪「・・・ふふ、ああ、ようやく本性を現したわね」

士道「え？」

七罪「なんでもないわ。それで、何を知ろつて言うの？ 今日からしばらく食事を出さないようにした方がいいのかしら？ それとも毒でも混ぜてみる？」

士道「いや・・・何言ってるんだよおまえ。冗談にしても笑えないぞ」

七罪「じゃあ、何よ。どうしろつていうの？」

士道「今日の夕飯さ、七罪をあ部屋から出してやることつてできないか？」

七罪「・・・？ どういうことよ」

士道「せっかくみんないるんだし、一緒にどうかなと思つてさ」

七罪「・・・は？」

士道には気付いてほしかったな

七罪「なるほど、封印の爲つてこと。あんたも性悪ね。そんな手段で籠絡して、七罪から靈力を奪い取ろうだなんて」

士道「何言ってるんだよ。靈力を封印して、精靈を安全に、幸福に暮らせるのがヘラタトスクの目的だろ」

七罪「え・・・？」

士道「それに・・・好感度だけの為じゃなくてさ、ほら、いくら隔離状態とはいえ、一

人でござ飯つてのは寂しいだろ。みんなも七罪ともつと話したいだろうし」

七罪「……」

士道「もしかしたら、美味しいもの食べながらだと七罪の気も少しは和らぐかもしれないし……つて琴里？」

修羅場か？

士道「お、おい、どうしたんだよ一体！俺何かしたか!？」

七罪「な……でも、ない……っ」

士道「いや、何でもないことはないだろう！安心しろつて、ちゃんとお前の分も作るか
r」

七罪「うるさい！死ね！ばかあああつ！」

ダダダダダダ

あ……逃げた

追いかけて見たけど

消えてた

その後士道も来たけどもう消えちやつてるから

……俺も探してみるか

外に出て

気を探すが・・・

士道と重なってるな

一緒にいるのか？

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

!!

空間震警報!?

新しい精霊なら見てみたい感はある

・・・待ってみるか

数分後

・・・来ないな

誤報か何か

ならみんなの所に戻るか

ドオオオン

上？

・・・何アレ・・・人工衛星ってヤツか

あんなもんが落ちてきたら洒落ならんぞ

シユタタタタタ

あの下まで行つてみよう

気温が下がった？

四糸乃たちもいるのか？

シユタツ

優菜「これはなんだ？ どういう状況なんだ？」

士道「優菜?! どこにいたんだ？」

サンダルフォンまで出してやがる

ブオオオオオオ

竜巻とかも作られてるんだけど

優斗「ざっくり説明するぞ。あの衛星を空高くでぶつ壊す」

優菜「OKわかった」

歌も聞こえるが・・・美九だよな

ヒュー

ドオオン

耶？ 矢「・・・あがつ！」

夕弦「苦悶。うぐっ」

士道「耶？ 矢！ 夕弦！」

耶？矢「ぐ……何者だ！我らの邪魔をするとは……！」
夕弦「無粋。鬱陶しいです」

士道「な……つ、あれは……！」

優菜「パンダースナッチか、よしあいつらは任せろ」

ボウツ

シユンツ

ドガツ

優斗「今のうちにどうにかできるな？」

コオオオオ

近くのビルを波紋で登っていく

ドヒユン

サツ

ドヒユン

サツ

士道「スリッパで叩くときのゴキブリ並みに素早いな……」

優菜は

後ろから掴まれ一瞬でどんどん重なり球体が出来る

圧迫が凄い・・・

・・・

ハアアアアアアアアア

ドオオオン

気を爆発させ押し返す

一体一体の腹に穴を開けて

倒していく

クソツ何体いるんだよ!!

スクランブル並みに出てきやがる

十香「!シドー!」

美九「だーりん・・・!?!」

士道の方を見ると

!!パンダースナツチが士道の目の前まで!!

カオスと呼んでも間に合わない・・・

士道「くそ・・・っ!」

間に合うか!?!

十香「シドー!」

ガアン

士道「へ．．．？あ、飴玉．．．？」

ベジットか！魔人ブウ編のベジットか！！

バチバチ

バンダースナッチがもう一度攻撃するが

飴玉がまた弾く

そしてバンダースナッチの頭部を破壊して光出す

士道「な．．．七罪!？」

飴玉は七罪でした

途中から察してた

士道「七罪、お前．．．」

七罪「．．．く、しなさいよ」

士道「え？」

七罪「．．．早くしなさいよ。あのでかいの、壊すんでしょ」

士道「．．．おうッ！」

優菜「みんな出て来い、全力で援護だ!!」

シユバババ

分かれてバンダースナッチを潰していく

バツ

パアン

バキツ

ボツ

ボツ？

なんか変な擬音があつたが無視しよう

十香「大事ないか、シドー！」

士道「あ、ああ……大丈夫だ。それより……」

衛星を見上げる

十香「うむ……だが、一体どうすればいいのだ!?ここであれを破壊すれば、大爆発

が起きてしまうのだろう!」

七罪「……ふん……いいから、ブツ壊しちやいなさいよ、あんなの。あんたたち、立

派な剣を持つてるじゃない」

士道「いや、あれには爆破術式っていうのが……」

七罪「ふん……〈贗物魔女〉（ハニエル）!」

パアアアア

光に包まれる

士道「うわ・・・っ!?」

十香「ぬ!?!」

スウウウウ

士道「なっ・・・」

優斗「豚の貯金箱になった・・・」

お前いつの間に登りきった!?

士道「ほら、早くしなさいよ・・・!」

優斗「メーテイス! ヒートライザ!!」

スアアア

士道「いくぞ、十香!」

十香「うむ! いつでもいいぞ!」

二人同時にサンダルフォンを構える

そして同時に振りぬく

士道「うおおおおおっ!」

十香「はあああああッ!」

ガキイイイン

テリトリー!?

まだ出来るのかよ!

士道「く……!あと……少しなのに……!」

七罪「〈贗物魔女〉（ハニエル）!……〔千変万華鏡〕（カリドスクーペ）!!」

天使の形が粘土のように変わっていき

士道「は……!?!」

天使はサンダルフォンになり

七罪「士道に何してくれてんのよ……!こいつに悪戯していいのは……私だけなんだからあああああああッ!〈塵殺公〉（サンダルフォン）……!」

ババババババ

ピシピシピシピシ

バリイイイン

テリトリーが割られ

パアアアアン

豚は弾け飛び

無数のチュッパチャップスが辺りに降り注ぐ

やっとな終わったか……

フラッ

あれ・・・？

ヒユウウウウ

シュバツ

ガッ

優斗「しつかりしろ」

優菜「たゝすかつたゝ・・・」

優斗「カオス」

グオン

グオン

地面に降りる

皆は七罪の周りでいろいろ喋ってるな

優斗「さすがに全員出しとくのはキツイか」

全員戻す

優斗『・・・でもカオスのとこ全員いなかったけ？』

優菜「・・・いっつも思うんだけどさ」

優斗「どうした？」

優菜「俺たちの周りっってお人好しげっかじゃね？」

優斗「・・・お前もだろ？」

その三十分後

俺たちは七罪と土道がキスするのを目撃し

十香が少々キレてた

以上、今日は終わりです

あざした〜

第百十三話（盾の勇者の成り上がりに来た『第十話』より）

尚文「だー!!くそ!!引き受けるんじゃないやなかつた!!!」

ラフタリア「ナオフミ様!!むやみに叫ぶと魔物が寄つてきます・・・!」

尚文「これが叫ばずにいられるかってんだ!このありさま全部・・・つ、あの元康（バカ）のせいだつてんだからな・・・!!」

優菜「長らく飢饉に苦しんでいた村がありました。そこへ槍の勇者様がやってきて奇跡の種を恵んでくださりました。おかげで村は飢饉から救われたのです。奇跡の種の成長はすさまじくみるみるうちに様々な実をつけ、気が付いた時には村中が・・・何とこの事でしょう。一度は活気が戻った村はたった数日で植物に覆いつくされ、荒廃一步手前まで来てしまったのです」

尚文「バカじゃないのか!?挙句の果てには魔物まで生み出しているじゃないか!!」

むしやむしや

フイーロ「でもごしゅじんさまーこの実美味しいよ?」

尚文「お前は何呑気に食つてんだ!!」

優斗「いやでも美味しいぞ」

優菜「だから食うな!!」

尚文「行商を始めて数日……除草剤を大量にほしいというから来てみれば……とんだ災難だ……!」

フィーロ「えー?でもごしゅじんさま駆除代前金でいっぱい貰って嬉しそだったよ?」

ラフタリア「しっ!」

!

子供「うう……」

子供の腕や顔にまで植物の根が張ってる

ラフタリア「これは……」

尚文「こいつ寄生能力まであるのか?……おいお前、金は持ってるのか?」

ラフタリア「ナオフミ様!」

尚文「わかってるよ」

ジャバツ

植物に除草剤をかけて子供には治療薬を飲ませる

ラフタリア「よかった……!通常の除草剤と治療薬で効きましたね!」

尚文「俺の習得した薬効果上昇のスキルが効いたかもしれないな」

子供「・・・あの」

尚文「そこでじつとしてろ、後で報酬を貰いに来る」

コオオオオ

ボオオオオ

波紋で火を作つて植物のモンスターを燃やしていく

ダダダ

尚文「待てラフタリア！先行しすぎ・・・」

バツ

尚文の横からモンスターが出てくるが

ザツ

ラフタリアが斬る

がその瞬間に

ボフウツ

花粉？が飛び散る

ラフタリア「ゲホツゴホツ」

尚文「大丈夫か!？」

フィーロ「ごしゅじんさまー！」

もしやもしや

まだ食つてるのかよ

フイーロ「みてみてーでっかい木ー!!」

でっかい大木に花が咲いており、花の真ん中に眼がある

尚文「あれが本体か・・・」

優菜「燃やすか？それとも塵にするか？」

尚文「眼のどこだけ破壊すればいいだろうからな・・・」

優菜「なら任せろ」

ポツ

気弾を眼に撃ち

ドオオオン

粉々にする

優菜「・・・これで大丈夫か？」

尚文「動かなくなつたから大丈夫だろう」

優斗「でもこれでまた飢饉に逆戻りになるのか・・・」

尚文「・・・」

シユウウウ・・・

植物が枯れていく

？

優菜「なんだこれ・・・種？」

優斗「最初の種のやつか？」

尚文「・・・ちよつと貸してくれ」

優菜「いいぞ」

渡す

尚文「植物改造スキルで・・・これでいいか」

優菜「何したんだ？」

尚文「植物改造スキルで変異性を下げた。これでもう大丈夫だろう」

埋める

ピヨコッ

優菜「もう芽が出た・・・」

尚文「さてと・・・それじゃあ赤い実を取ってさつさと村を出るぞ」

優菜「よしつみんな、実を取れ！」

皆で取った

ついでに言うど種が落ちてたから種も取った

尚文「これくらいでいいだろう」

優菜「じゃあもう出るのか？」

尚文「ああ、種も変異性は全部下げたからどつかそこらに置いていこう」

子供「あ、あの・・・」

尚文「ん？」

子供「助けてくださり・・・あ、ありがとうございます」

尚文「さっきの子供か」

子供「報酬はどうすれば・・・」

尚文「それなら実を取ったからもういい・・・それとこれを持っていけ」

種を渡す

子供「種？」

尚文「その種はおかしくならない、もう大丈夫だ」

子供「もう・・・行かれるんですか？」

尚文「ああ、大人たちにも大丈夫と伝えてくれ」

村を出た

その後野宿をし

次の日

盾は本にして移動していると

途中行人を拾った

行人「まさか神鳥の馬車に乗せていただけるとは！」

ラフタリア「神鳥？」

行人「おや？ご存じない？神の鳥が引く馬車に乗った聖人様が奇跡を振りまいて各地で商売をしている・・・と巷で噂ですよ！」

尚文「・・・奇跡ねえ、俺たちはただ薬の行商や乗合馬車がわりとなんでもこなしてただけだが？」

行人「またまご謙遜を、薬の調査は貴方がされてるんですよ？もしかしてそも本にとくべつな調査レシピが書かれているんですか!？」

尚文「・・・まあな」

フィーロ「よかったね！ごしゅじんさま！その本が盾だつて気づか・・・」

尚文「フィーロ!!」

フィーロ「あつ」

行人「すごい!!喋る魔物なんて珍しいですね！さすが神鳥!!」

フィーロ「えへへー♡フィーロほめられたー♡」

尚文「・・・」

いいな、こういうの

何気なく外を見てみると

・・・？なんだあの村は

優菜「廃村・・・？」

行商人「廃村ですか？村ならありますがこの辺りに廃村はないはずですが・・・」

優斗「一度停まってみた方が良いんじゃないか？」

尚文「・・・少しだけだからな」

停まつて村を散策していると

尚文「窓が全部割られてるな、扉も碎け散つてる」

優斗「廃れたというよりは、襲われたみたいにながなくなつてるな」

角を曲がると

!!

何だこの血だまりは・・・

優菜「・・・本当に襲われたのかもしれないな」

まだ固まつてない

優菜「何があつたんだ・・・？」

ガタッ

家から物音が？

優菜「誰だ！いるなら外に出て来い！」

ゆつくり扉の前まで行く

優菜「怖いだけなら今すぐ出てくるのをオススメするぞ」

誰も出てこない

ラフタリア「動物ではないんですか？」

優菜「・・・一応調べておこう。皆は少し下がって」

フィーロ「動物だったら焼いて食べようね」

優斗「こんな時まで何言ってるんだ」

メーティスの知恵とガイアの創造で作っておいたマジモンの銃を取り出す

今日日本に行ったら銃刀法違反でお縄です

行商人「おおー！凄い力ですね！」

優斗「しっ」

石ころを投げる

・・・

入ってみよう

ギシ・・・ギシ・・・

足音？

丁度見えないところか

優菜「死にたくなかったら出て来い」

銃口を向ける

ギシ・・・

!!

優菜「今すぐ馬車に戻れ!!」

尚文「どうした！」

優菜「後で話す！後変なのがいたら絶対に噛まれるな!!」

ダダダダダダダダ

？「あゝあゝあゝあゝあゝ」

優菜「何でこう面倒な奴ばかり出てくるんだよ」

よりよってゾンビとか

パンツ

パンパンツ

ヘツドシヨット

ドサツ

ドオオオン

優菜「……後は範囲外にいないのを祈るだけか……？」
いや

探知魔法発動

ボワーン

いたわ

優菜「カオス、これでヘッショしてきて」

いかせた

優斗「噛まれた奴はいるか？ いるなら死にたくなかったら今すぐ言え」

皆噛まれていなかった

優菜「一応、スペクテツドで見ておこう」

透視したが

誰も噛まれていなかった

優菜「大丈夫だな……はあ……」

尚文「アイツらは何だったんだ？」

ラフタリア「アンデッド系の魔物に見えましたが……」

優菜「ゾンビ」

尚文「墓から出てくる？」

優菜「いや、ウイルス系。だから嘔まれたらいけないんだよ」

尚文「バ〇オカ」

優菜「バイ〇」

その後行商人とは別れ

行商で渡り歩いて？いると

ある村

尚文「ドラゴンの死骸が原因の疫病？」

ラフタリア「はい、剣の勇者が退治したドラゴンの素材ほしさに山を登った冒険者が最初の犠牲者だったようです。今では病が蔓延し山の魔物の生態系まで変えてしまつたそうです」

尚文「山に入る事すら困難つてか・・・」

優斗「素材になりにくくて腐りやすいといえれば肉か臓物だな」

優菜「村も素材目当ての冒険者で潤つてたから処置も取らなかつたんだと」

まあゲームなら死体なんか綺麗さっぱり無くなるもんな

ゲームなら・・・ね

病人の部屋に入り

数秒後

村長と一緒に出てきた

尚文「このこと国には報告したか？」

村長「はい」

尚文「そうか・・よし俺たちがやれる事はやった、帰るぞ」

村長「ええ!?このままいかれてしまうのですか・・!?」

尚文「俺レベルの薬じゃ完治はムリだ。国に報告したならそのうち勇者が来るだろう」

村長「そんな・・!いつ来るかわからないのに・・とてもじゃないですが待てません・・!どうか我々をお救いください・・!!聖人様・・!!」

尚文「・・!どうしてもというなら報酬は先払いで。何があっても後から苦情は聞かないからな・・!」

村長「はい!すぐに集めます・・!」

よかつた・・!」

これで助かる!

尚文「皆!」

ラフタリア「はい」

尚文「目的はドラゴンの死骸の処分だ。馬車で近くまで一気に駆け抜けてさっさと帰ってくるぞ、魔物の相手は極力するな」

村人「聖人様、村中からかき集めてきました。これでどうか・・・」

ジャラ・・・

中身を確認し

尚文「・・・よし、じゃあ行くか」

盾を変える

盾・・・!?まさかあの・・・悪名高い盾の勇者・・・!?

まさか我々から金をとるために騙して・・・!?

尚文「ま、それでもいいさ。どうせ俺が何を言っても信じないだろ。皮肉なものだよな。まともな勇者様は、慈善活動でえ忙しくて助けに来てくれないんだもんな!」

出発し

最低限の魔物をサイレンサーを付けた銃で倒していく

尚文「・・・思ったより瘴気が濃いな・・・!」

遠くに何か見える

尚文「あれか・・・!」

近くまで行き馬車を下りる

蠅の魔物や蜂の魔物が腐った肉を食べている

掃除のときにするマスク？というか布？……まああれ越しても停電して二日ぐらいの冷蔵庫の中の匂いがする

尚文「う……」

ファイロ「わーおいしそー」

優菜「あれ見て食欲沸くのか……？」

優斗「魔物だからか……？」

ファイロ「ファイロも食べていー？」

尚文「だめだ！腐ってるんだぞ！」

ファイロ「ちえー」

ラフタリア「……でもオオフミ様、この死骸どうしましょう？」

尚文「普通だったら埋める所だが……盾に吸わせて消した方が安全だろうな」

ごそごそ

ファイロは馬車から何を取ってるんだ？

尚文「とにかく死骸を解体しよう。デカすぎて盾に吸わせられない、ファイロ！お前は群がる魔物の駆除だ！」

ファイロ「ふあーいっ」

ばくばく・・・

取つてたの実かよ

優菜「なら俺も解体するか・・・優斗は皆と一緒に駆j」

ゴソ・・・

・・・?

ラフタリア「ナオフミ様」

尚文「ん？」

ラフタリア「今・・・ドラゴンが動いたような・・・」

尚文「はは・・・まさか！」

じゅる・・・

びちや・・・

!!

優菜「離れろ!!」

ズオオオオオオ

ドラゴンが立っていく

尚文「なっ」

ドラゴンゾンビ「GYA O O O O O O!!」

尚文「ドラゴンの……ゾンビ……!?」

ゴボボボボッ

メキキッ

ラフタリア「ナオフミ様！牙も角もなかったのに……再生して行きます！」

尚文「……まずいぞ、ドラゴンゾンビって言えばゲームとかだと生前より強かったりするじゃないか……!!逃げるぞ！今の俺たちには荷が重い!!」

ダダダダ

ドラゴンゾンビ「GYA O O O O O O!!」

バシイッ

フィーロが攻撃される

尚文「フィーロ!!!」

にいいっ

フィーロに向かってドラゴンゾンビが嘲笑する

フィーロ「むっ、むっかー!!」

ダッ

優菜「フィーロ!?!」

ラフタリア「本来フィロリアルとドラゴンは仲が悪いと聞きますが」

尚文「そういえばレースのときもそうだったな．．．つ、ダメだファイロ!!戻ってこい!!俺の言うことが聞けないのか!？」

優菜「バカ!!」

バチバチ．．．

バババババババ

ファイロ「びぎやあああああっつ!!!」

尚文「しまった!ファイ．．．」

バクンッ

ゴボオ．．．

ばぐつばぐ．．．

ゴクンッ

食われ．．．た．．．？

尚文「ファイロオオオオオ!!」

色々マズい!!

尚文は眼が虚ろになってしまっている．．．

チッ

優菜「ラフタリア!尚文を連れて逃げろ!!何とかして食い止める!!」

ドウン

シュインシュインシュイン

ラフタリア「・・・はいっ!!」

瀕死ならまだ助けられる・・・!

まずは頭か!?

シュタツ

ビツ

スツ

避けられた!?

*この世界はレベル制なのでレベル差があるという事れす

ドガツ

クソツ!!

ラフタリア「ナオフミ様!!しっかりしてください!ここはひとまず逃げましょう!?!ナ

オフミ様!」

ドウン

バチバチバチ

シュンツ

ビッ

今度は斬ったぞ!!

ビュッ

一瞬で戻りやがった!!

優斗「面倒な野郎だな!!」

尚文「憎い、世界の全てが・・・スベテキエテシマエバイイノニ」

どうした!?

ゴッ

ドラゴンゾンビが尚文に攻撃しようとする

しまっ

ガアアンッ

ニッ

ゴオオオオオ

炎!?!カウンスタースキルか!?

いやそんなスキルなかったはずだ

様子がおかしいのが関係あるのか?

ドラゴンゾンビ「GYA O O O」

尚文「そうだ燃えろ・・・!!」

優斗「しっかりs」

ラフタリア「だ・・・め・・・」

ドサツ

尚文「あ・・・」

もう一度ドラゴンゾンビが攻撃しようとしたから

間に入って

攻撃を受けようとする

優斗「!!ウンディーネ!テトラカーン!!」

テトラカーンが当たる寸前に付き

パライイイイン

ドオオオン

優菜「助かった!」

優斗「お前はラフタリアを回復してやれ!!」

尚文「ラフタリア!?!しっかりしろ!!なんでこんな・・・」

優斗「スイツチ!!」

スイツチ?

!?

突然ドラゴンゾンビの身体が割られた水風船のように崩れていく

尚文「・・・なつなにな・・・」

ファイロ「ん~~~~ん~~~~ん~~~~あんまり味しなあ〜い」

尚文「あ・・・あ・・・っ」

ブバツ

ファイロ「ぶあーやつと出られたー」

尚文「ファイロ!!」

ファイロ「あつごしゅじんさまー」

尚文「お前つ怪我は!?!あんな血がでて・・・」

ファイロ「血? あーあれファイロのゴハン!」

尚文「ゴハン!?!」

ファイロ「ドラゴンにバツクンされたとき、おなかの中の赤い実吐いちゃったの!!」

尚文「・・・じゃあお前は平気なんだな・・・?」

ファイロ「うん!!あれくらいじゃ痛くもかゆくもなーい!」

尚文「そうか・・・」

ファイロ「もしかしてごしゅじんさまファイロの心配してくれたの??!」

ヘタツ

優菜「はあ・・・気が抜けちまったよ」

優斗「抱っこするか？」

優菜「するかボケ」

尚文「・・・ラフタリア大丈夫か？」

ファイロ「あーんごしゅじんさまーっ」

尚文「うるさいラフタリアのが重傷なんだ」

ラフタリア「・・・ナオフミ様私なら自分で馬車まで行けますから・・・」

尚文「しかし・・・」

ラフタリア「ユウナ様の魔法のおかげです。それに・・・今はあのドラゴンの処分の
方が先かと・・・ほらファイロが待ってますよ」

涙を浮かべながら言う

尚文「・・・そうだな・・・よしっファイロわかってるな!？」

ファイロ「はーい! いったただつきまーすっ」

尚文「違うっ食うな!!」

ファイロ「えー？」

よっこらせっつと

優菜「みんな出て来い、片付けるぞ」

バツ

優菜「腐った肉を触りたくない奴は馬車に行ってラフタリアと馬車を守るグループと俺たちに向かってくる魔物の駆除を頼む」

女性陣は触りたくないだつて

解体して全部盾が吸収した

村に戻り宿に入れてもらい村長にドラゴンゾンビにやられた場所を見てもらう

村長「これは・・・呪詛ですね。しかも相当強い、これをそのドラゴンが？」

尚文「・・・あ、いや・・・」

ラフタリア「はい、私が誤って腐肉を浴びてしまつて」

村長「そうですか・・・呪いは聖なる力で除去するのが一番なんです・・・」

瓶を棚から取り出す

尚文「それは？」

村長「聖水です」

ジャバツ

尚文「それで治るのか!？」

布を聖水に浸しながら言う

村長「いえ、簡易なものですし時間をかけてゆっくりでないと……もつと強力な聖水をおすすめします。大きな協会のある町でなら……」

布を呪詛につけると

ジユウウウ

ラフタリア「うゝっ」

村長「我慢してください」

優斗「……見た目的には日焼けした日の風呂みたいだけど」

優菜「あれの数倍は痛いと思うんだが」

その後村長は出て行った

尚文「……すまなかった」

ラフタリア「ナオフミ様……」

尚文「俺がお前達を守らなきやならなかったのに……逃げようと……失わない様に下がるうとして、こんなことに……」

ラフタリア「いいえ、ナオフミ様は間違っていないです。勇氣と無謀は違います」

尚文「そうだ、そして……慎重と臆病もまた違う」

優菜「……ならお前はどっちになりたいんだ？」

尚文「どういう意味だ？」

優菜「お前はまだ臆病でいるつもりなのか？それとも慎重に行き時に大胆に行動がとれる奴になりたいのか？どっちなんだ？」

尚文「・・・」

優菜「普通なら慎重に行き大胆に行動がとれる奴になりたいって言うよな、だが現実はそのままで甘くない。人間、芯を変えるの何でどれだけかかるか俺にも分からねえよ。だけどな、そもそもそれを言えねえ奴は前すら向けねえんだよ」

尚文「何が言いたいんだ？」

優菜「名言つてのもあるよな。努力は裏切らないとか、努力は実るとは限らないが成功した者は全員努力しているだの。色んな名言があるな、だが見ていくとな、真逆の事を言ってる名言もあるんだよ」

尚文「つまり？」

優菜「名言つてのは内容が深いから名言になるんじゃない、有名人が言うから名言になるんだよ。成功したから、強いから、そういう奴の名言の通りにしたら自分も成功できる思うだろ？だがそこらの気違いが全く同じことを言っても何言つてんだこいつつてなるだけだ。つまりだ、名言は所詮いう奴次第なんだよ。だけどな、実際それで成功するやつもいるんだ。だから最終的に言うとな、名言は人が前を向くためにそれぞれのジャンルで色んな名言が出されてるってこつた。」

尚文「・・・」

優菜「分かったか？」

尚文「・・・すまん、最後の方は意味が分からなかった」
ガクツ

優菜「まあいいや」

ラフタリア「そういえば・・・あのドラゴンはなぜ自ら滅びたのでしょうか？」

優菜「・・・確かに全く攻撃が通ってなかったからな」

フィーロ「フィーロがごりつとしちやったからかな？」

優斗「ごりつ？」

尚文「そう言えばあの時何か食べて・・・」

フィーロ「うん・・・味がしないから少し残しちやった」

石を取り出す

フィーロ「お胸のところにあったやつだよ」

ラフタリア「もしかしてこれがあのドラゴンを動かして・・・？」

尚文「・・・お前は何でそうなんでも・・・まったく」

フィーロ「あ！ごしゅじんさま笑った！」

ラフタリア「ええ！よかった・・・!!・・・戻ってきてからずっと思いつめた顔をされ

ていたので……」

ファイロ「うん！ファイロどのごしゅじんさまも好きだけど、やっぱり笑ってる方が
良いな！」

ラフタリア「ナオフミ様が私達の事を大切に思ってくださるように、私達もナオフミ
様をとっても大切に思っています。頑張りましょう、一緒に」

尚文「……ああ、頼りにしてるよ……」

次の日

帰ってきてから村の人たちは普通に接してくれるようになった

魔物の見回り中

ファイロ「でねーでねー」

尚文「ファイロ！あんまり気を散らすな！強い魔物だつて下りてきてるかもしれない
んだぞ！」

ファイロ「えーだつて……？」

ラフタリア「どうしたの？ファイロ？」

ファイロ「あそこー、なんかおいしそうな鳥が集まつてる」

いやあれは……

尚文「おいしそうつて……野生のファイロリアルじゃないか！あれはお前と同族だぞ

!?

フィーロ「今なら仕留められるよ!!」

尚文「だから話を聞け！」

女の子「フィーリアルさん・・・？」

フィーロ「ん？フィーロのこと・・・??」

女の子「・・・まあ、まあ、まあ!!喋るフィーリアルさんなんてっ夢見たい!!!

尚文「・・・?!人間の女の子・・・？」

女の子「フィーロちゃん・・・貴方のお名前はフィーロちゃんっていうの？」

フィーロ「うん!そうだよ!」

メル「わたしは・・・メルっていうの!ねえ、もっとお話ししましょう!!」

フィーリアル「くえええっ」

ダダダダダッ

メル「あ・・・っ」

尚文「あれ野生のフィーリアルだよな・・・?なにしてんだ？」

メル「・・・あの子たちは私に親切にしてくれたんです」

尚文「親切・・・？」

メル「そうだ、フィーロちゃん」

ファイロ「？」

メル「干し肉食べる？」

ファイロ「わあ・・・っ、ありがと!!!」

尚文「ファイロリアルが食いしん坊であることを知ってるな・・・」

ラフタリア「ええ、随分身なりがいい子ですけど・・・ファイロリアルのこと、本当に好きなんですわね・・・」

尚文「・・・ファイロ！お前そのこと少しの間遊んでやれ！」

ファイロ「えっ本当!？」

尚文「ああ、だが陽が落ちるまでに帰ってこいよ」

ファイロ「やったあ!!!」

メイ「やったあ!!!」

ファイロ「メルちゃんいこ？」

メル「うん!!」

走って行った

ラフタリア「・・・いいんですか？」

尚文「通りすがりの行商の娘とかだろうけど・・・あの身なりだ、金持ちだろう。よ
うするに恩を売っておくのは悪くない」

ラフタリア「……ナオフミ様らしいですね」

尚文「……よし、もう少し見回ってから村へ戻るぞ」

ラフタリア「はい！」

・
・
・

優菜「カオス、迷子になりそうな予感もしなくもないから付いてて」

特に異常もなく帰った

新しい銃とか作ってたら

尚文「……ん？皆！ちよつとパーティー一覽を見てくれ！」

ラフタリア「え？」

開くと

岩谷尚文：Lv38

中村優菜：Lv40★

ラフタリア：Lv40★

フイーロ：Lv40★

中村優斗：Lv40★

優菜「星……？」

尚文「ああ、今見たら付いててな。何か知ってるやつはいないか？」

ラフタリア「……すみません」

優菜「知らないな」

優斗「俺も」

尚文「……ヘルプでも探してみるか……」

優菜「ゲームとかだとなんかの区切りみたいな感じかもな、ここからレベルを上げるには何かアイテムが必要的な」

ガチャ

ファイロ「ごしゅじんさまー!!ただいまー!!」

尚文「ああ、おかえり」

ファイロの後ろからカオスも入ってきた

優菜「おかえり、大丈夫かだったか?」

カオス「大丈夫っちゃ大丈夫なんだが……」

優菜「?」

ファイロ「あのねーファイロお友達ができちゃった!」

尚文「さっきの子だろ?」

ファイロ「そう!ファイロと同じでいろんな所を旅してるんだってー、フィロリアル
の伝説とかも教えてもらったのー!!」

尚文「おお、よかったな」

フィーロ「でねーフィロリアルたちと遊んでたら皆とはぐれちゃって困ってるんだつて！」

!?

尚文「へー」

ラフタリア「・・・ナオフミ様聞いてました？」

尚文「ん？」

メル「・・・夜分遅く申し訳ありません。どうか少しの間ご一緒させてもらえないでしょうか・・・？」

尚文「待て待て待て！はぐれたって・・・!？」

メル「非常に厚かましいお願いですが・・・メルロマルクの城下町に行かれると聞きました。そこまで送っていただけ、だけで構いません。どうか・・・！」

尚文「そもそも何なんだお前は、城下町に家でもある貴族かなにかか？」

メル「・・・はい、向かう途中だったのですが護衛とはぐれてしまつて」

・・・

フィーロ「ねーおねがいごしゅじんさまーっ」

ラフタリア「私からもお願いします、ついでじゃないですか・・・」

むく……という顔をしている

尚文「……礼金はきっちりもらうからな」

メル「はい！父上に頼んでみます!!!よろしくお願いします！聖人様!!!」

次の日

ガラガラガラ

移動中

メル「わあ！すごい!!旅の途中噂は耳にしていたのですが、まさかファイロちゃんはその神鳥だったなんて!!」

・・・

移動中は常に感知魔法は張っておこう

ラフタリア「メルさんは本当にファイロリアルが好きなのね」

メル「はい！」

ファイロ「えへへ♡もっと早く走ってみようか??」

!?

メル「できるの!?!」

ファイロ「らしくしょー!!!」

ラフタリア「えっ、これ以上は危険……」

優菜「ちよっ！まつ!!」

フィーロ「それー！ー！ー！
!!!」

ドヒュンツ

メル「ぎゃー♡」

ラフタリア「ぎゃー!!!」

優菜「イヤー！ー！ー！
!!!」

あ・・・これすぬ（死ぬ）

数時間後

フィーロ「つーかまえた!!」

メイ「つかまつちやたーつ、フィーロちゃん人型でも速ーい!」

フィーロ「えへへー」

尚文「・・・大丈夫か？ラフタリア」

ラフタリア「・・・はい」

尚文「そつちはどうだ？」

優斗「魂が出かけてる」

Ω\と。）チーン

ヘル「逝くのはまだ早いわよ!!戻って来なさい!!」

尚文「……大丈夫そうだな」

ポウツ

ヘル「あゝ!!」

なんか光に包まれてるみたいになんか……

魂をヘルに掴まれて

押し込まれる

が何故か跳ね返り

優斗に当たり優斗が出てきて優菜が優斗の体に入つて

優斗の魂がヘルにぶつかり

跳ね返つて優菜の体に入る

つまり入れ替わつた

ムクツ

優菜 in 優斗「は？」

優斗 in 優菜「は？」

同時にお互いを見る

……

うん

優菜 in 優斗 「とりあえず、一回カオス呼んで」

優斗 in 優菜 「ああ・・・カオス」

カオスの空間に入る

優斗 in 優菜 「・・・何がどうしてこうなった」

優菜 in 優斗 「・・・とりあえず抱き着いていい？」

優斗 in 優菜 「やめろ」

ヘル 「ちよつと大丈夫？」

優斗 in 優菜 「ヘル、何でこうなった？」

ヘル 「魂がぶつかり合つて、入れ替わつたのよ」

優菜 in 優斗 「つまり今優菜に抱き着いたりしたら好き好きアピールできるのか」

優斗 in 優菜 「好き好きアピールて」

ヘル 「・・・まあ間違つては無いわね」

優菜 in 優斗 「よし優菜ちよつと横なれ」

優斗 in 優菜 「やめろ!!」

優菜 in 優斗 「先つぽだけだから!!」

優斗 in 優菜 「それ先つぽだけじゃ済まねえヤツ!!」

パシヤツ

バツ

一瞬視界が暗転したが

スウウウウ

優菜「・・・戻った」

よし

優菜「イフリート再起不能にしてくるわ」

ガシツ

脚を掴む

優斗「行かせねえぞ・・・」

優菜「どんだけ必死なんだよ!!」

はあ・・・

優菜「もういいや」

優斗「いいのか!？」

優菜「もういい、めんどくさい・・・もう寝よ」

タンクトップとショートパンツに着替える

優菜「おやすみく・・・」

バサツ

寝る……？

優斗「……俺も確認するのは明日にするか」

優斗も寝る

優斗「ぐう……」

寝たな？

起きる

イフリートを探し出し

カメラを手に入れ（取り上げ）

削除

カオスの空間の倉庫みたいな場所で

優菜「見つけれない様にしよ」

隠せる場所を探していると……

ん？

優菜「これは……確かペルソナの銃だな。いつこんなところに入れてんだ？……ま

あそのうち使うかもしれないしな。置いてこう」

その後カメラを隠し

寝た

数分後

イフリート「あれぐらいで諦めるかってんだ」

パシヤ

イフリート「あんなどこぐらいすぐ見つけられる……ふふふ、しっかり寝顔は撮つてやったぞーッ!!」

次の日

優斗視点

パチパチ

朝か……

目を開くと

優菜「はむ……」

何で優菜を抱いてるみたいな感じになってるんだ？

てか……腕噛まれてる!?

優菜「……ちゅ……」

いや……吸われてる？

とりあえず引き離し……て……

ぐ……

何という吸引力!!

優菜「うくん……」

ギョッ

腕に抱き着かれたんだが

（ω^）ペロペロ

……こいつは犬か？

……よしよしゞ（ω・、）

頭をなでる

優菜「うくん……」

ガッ

!?

引つ張るな……って何ズボンの中に入れてようとしてんだこいつ!!

優菜「うくん……何でパンツが逃げようとするの？……」

どんな夢見てんだよ!!

……待てよパンツって言ったか今

……ということは……

手をパンツの中に入れてようとするな!!

これは起こさないとヤバい!!

優斗「おい! おい!! 起きろ!!」

優菜「ふえ?」

優菜視点

ん? 朝か・・・?

起きる・・・か

目を開け周りを確認すると

何コレどういう状況? (; ∇ ;)

優菜「え? え? え?」

優斗「俺は何もしてないからな!?! お前が寝ぼけてただけだからな!?!」

ポフツ

顔が真っ赤になる

優菜「そ、そつか。ごめん・・・」

離れる

優斗「・・・恥ずかしいんだろ」

優菜「忘れろ」

優斗「やだね」

優菜「忘れろーツ!!!」

パシヤ

イフリート『怒つてるところも撮つてやったぜ、ついでに言うのと昨日の写真はもう既に別のSDカードにコピーしてあるんだよマヌケがア!!』

優斗「ハイハイ、忘れる忘れる」

優菜「あーっ！それ絶対忘れないヤツだろ!!」

優斗「・・・お前さあ、男に戻る気つてあるのか？」

優菜「・・・いきなりどうした？」

優斗「今まで戻りたいとか言つてたっけ？つて思つてな」

優菜「・・・無いのかもなく・・・戻りたくないつてよりかは戻れなくても仕方ないつて感じだな。腹はくくつてる」

優斗「ふくん」

優菜「何だその興味が無い時の返事みたいな返しは、お前から聞いたんだぞ」

優斗「いや、なら結婚する気はあるのかなー？つて」

優菜「・・・どうだろうね、でも結婚するなら優t」

バツ

口を押える

俺は今とんでもない失言をした気がする

気がしたではない、してしまっただ。訂正する

優斗「ほほう？」

距離を詰める

優斗「結婚するなら俺がいいのか、なら何で毎度毎度あんな強く当たるのかなあ？」

顔を隠す

優斗「あれあれ？どうしたのかな？もしかして恥ずかしくて顔も合わせられなく

なっただのかな？」

うわこいつうぜえ・・・

優菜「もういつそ一回殺してくれ!!」

優斗「悪かったって・・・もうそろそろ出たほうがいいか」

目をそらした隙に

シュンツ

ガッ

蹴ろうとしたが足を掴まれた

優斗「寝起きだから動きにキレがないな」

優菜「寝起きはお前の方が良いからな・・・」

ヒヨイツ

優斗「さて行くか」

優菜「お姫様抱っこはやめろ!!」

スウウウウ

優菜「だから出ていくな!!」

外に出る

優斗「おはよー」

尚文「ああ、おはよう・・・何でお姫様抱っこしてるんだ？」

優斗「・・・色々あった」

尚文「そうか・・・合計でどこまで行つたんだ？」

優斗「キスまで行つて」

優菜「わあああああ!!!」

優斗の口を塞ぐ

優菜「何もなかった!!良い!？」

尚文「・・・わかった、これ以上は聞かねえよ」

眠そうに尚文は馬車の方まで歩いて行つた

優菜「降ろせ」

優斗「えーでももう少s」

優菜「降ろせ（庄）」

優斗「はいはい、わかつたわかつた」
降りる

優菜「はあ・・・朝から疲れた・・・」

優斗『色々眼福だったな』

出発し

道中

優菜「今度はもう何もないよな？」

優斗「それフラグじゃね？」

フイーロ「あれ？なんか変な人たちがいるよ？」

優菜「・・・フラグだったな、俺が行くからみんな待つてて」

優斗「他に誰か来たらそんな時は任せろ」

優菜「ああ」

馬車を出て近寄りながら身なりを見る

明らかに盗賊である

しかも十人いる

優菜「ゾンビよりマシか」

盗賊「おい嬢ちゃん、持つてるもん全部出せや。そしたら見逃してやるよ」

優菜「いやだつて言ったら？」

盗賊「そんな時はこいつでブスリよ」

ナイフを取り出す

優菜「ふくん・・・それよりもつといいものあるけどどうする？買いたいなら売るけど」

盗賊「何？・・・話を聞かせてもらおうか」

優菜「なら全員一旦こつち来な」

まさか話に乗るとは思わなかったが・・・

油断した隙に一気に叩こう

リーダー？「おい待てお前ら」

盗賊「どうした？良い武器くれるんなら貰ったほうがいいだろうが」

リーダー「口車に乗せられるな。隙を見て一気にやろうとする気に決まってるんだろ
うが、少しはその小さな脳みそを働かせろ」

盗賊「・・・それもそうか」

リーダー「そもそも、武器ならこいつら殺した後奪えばいいだろうが」

おつとこりや面倒な方向に
バツ

銃口を向ける

リーダー「動くんじやねえぞ、お前のお仲間さんは俺たちの仲間が既に撃つ準備をしているんだ。動いたら一齐に殺す。冗談だと思ふなよ、俺の首には懸賞金がかかっているんだからな。今まで殺した奴らはもう既に百人を超えてる」

へえ・・・殺ろうと思えばやれる数だな

優菜「なら目で追えないスピードでやればいいだけだろ」

リーダー「何？」

シユンツ

ドカツ

金☆的

リーダー「ガハツ・・・」

ドサツ

尚文「うわっ・・・平気でえげつないことするなアイツ」

優斗「うん、いつも通りだ」

メル「あれがいつも通りって結構人として駄目じゃないですか？」

盗賊「リーダーがやられた!!」

優菜「お前らも眠っとけ」

パンパンパン

ドサツ

お前殺したじゃんって思ったそこの君

覚えてるかな？対先生用BB弾

あれで股間撃つただけだよ

まあでも

シヨック死はしてるかもね

そんな時はそんな時だ

今の所死にそうなやつはいないから多分大丈夫だろう

後は全員カオスの空間にやって・・・

・・・待てよさつきこいつ他にも仲間がいるって

優斗「おーい！なんかこつち狙ってたやついたけど倒して良かったかー？」

・・・大丈夫そうだ

メルロマルク城下町

メル「聖人様、お世話になりました」

尚文「フイーロ、必ず送り届けて礼金を貰ってこい」
フイーロ「はい！」

メル「それではごきげんよう！」
去って行った

優菜「・・・お前達は装備と聖水だろ？ だったら俺たちは食糧とか買ってくわ」

尚文「わかった、それじゃあ後で合流しよう」

別れた

そして色々買った

ついでに盗賊たちは兵士の詰め所の前に置いてきた

すると・・・

元康「みつみみみみつけたぞっつ尚文いい!!」

優菜「この声は・・・」

尚文「げえっ元康!？」

ガシヤアツ

槍を尚文に刺そうとするが

避ける

尚文「いついきなりなにすんだ!!」

ざわざわ・・・

優斗「何してんだ？」

元康「お前というヤツは・・・どこまで・・・!!」

尚文「うわっ」

今度は斬ろうとするがまた避ける

尚文「くっ」

キヤアアア

ワアアアツ

尚文「おい！何を考えてるっこんな町中で・・・っ」

元康「それはコツチのセリフだ!!彼女を解放しろ!!この奴隷使い勇者め!!」

優菜「何?どういう状況？」

尚文「優菜か、元康がまたラフタリアの事を・・・」

元康「違う!!俺は知ってるんだぞ!最近お前が・・・魔界大地のフレオンちゃんみた

いな子を新しく奴隷にしたってなあ!!」

優斗「魔界・・・なんて？」

元康「俺・・・天使萌えなんだ」

尚文「・・・ああ人型フィードロのことが・・・お前・・・女なら何でもいいのか・・・」

「？」

元康「違う!! 彼女は俺が救ってみせる!!!」

尚文に攻撃しようとするから

コオオオオ

ガキイイイン

波紋で跳ね返す

優菜「正気になれ、一時のテンションに身を任せる奴は身を滅ぼすんだよ」

優斗「それアニメのセリフだろ」

優菜「うん、き〇魂」

優斗「銀〇だろ、点を取るな」

元康「どうして邪魔をする!!」

優菜「やるなら外でやれ、街の人に迷惑だろうが」

ガキイイイン

話を聞かねえな

尚文「! おいっお前達もなんで止めないんだよ!」

マインたちもいるのか

でもアイツらは根が腐ってるからな

止めるつもりは

兵士「おやめください!! 槍の勇者様!!」

尚文「・・・お前さっきの・・・?」

元康「なんだお前・・・っ」

兵士「ここをどこだと思いですか!?! ここは民の従来です。どうか武器をお納めください」

魔だてすれば・・・わかりますね?」

兵士「そ・・・それでもボクは民を守る兵士です・・・っ」

マイン「無礼者!! 国の意向を無視すればどうなるか・・・」

優菜「王女より兵士の方が常識あるってこの国終わってんな」

メル「勇者同士の私闘は許可いたしません。槍の勇者様どうかご理解ください」

尚文「・・・っ」

マイン「なっなっ・・・なぜお前がここに・・・っ」

メル「お久しぶりです姉上。こたびの騒動、槍の勇者様、姉上の権力でどうにかできると思わぬようお願いいたしますわ」

尚文「・・・メルがマインの妹・・・?という事は・・・まさかメルはこの国の・・・」

!？」

メル「姉上？随分とお戯れが過ぎる様ですが・・・」

マイン「聞き捨てならないわね。私は勇者様の補佐として責務を全うしているだけで
すわ」

メル「民の往来で死闘をさせるのが補佐だと？」

マイン「あ・・・あら、死闘だなんて大げさだわメルテイ」

本名はメルテイか

マインに近付く

マイン「な、なんですか？く、国が認めてるんですよ？」

まだ言うか

優菜「悪評がこれ以上付いたら面倒だから言つてなかつたけどな・・・こんな国いつ
でも消せるんだよ・・・こんな風に」

ボツ

シャドウ「ガアアアア・・・」

シユウウウ

マイン「なっ！魔物!？」

優菜「何でここにもいんだよクソが」

優斗「チツ・・・おいお前！」

兵士「は、はい！」

優斗「早く住民を避難させろ！」

兵士「はい!!」

誘導する

優菜「マイン、元仲間だから言ってるが・・・お前じゃ足手まといだから早く逃げろ」

マイン「なっ！貴方達より私達の方がレベルは上」

ドガア

マインの後ろにいたシャドウを倒す

優菜「さっさと逃げろって言うてんだ。三度目はねえぞ」

マイン「ヒツ・・・」

ダダダダ

ふうふう・・・

カハクカ

銃を取り出す

パン

パンパンッ

元康「銃!? 一体どこでそんなものを!!」

元康に銃口を向ける

元康「待て! 撃つな!!」

パンッ

後ろにいたやつを撃つ

優菜「さっさと逃げな」

元康「ぐ……」

パンッ

優斗「ちよつと多くないか?」

優菜「多いな、弾が足りん……仕方ねえ、ミツハノメ。大氷河期」

パキイイイン

バリン

シューウウ

優菜「カハクは銃撃氷結弱点だからな」

これで終わりか?

索敵魔法を使う

*感知魔法ってなんかおかしいな〜って思ってたらこれだね。索敵だね
いないな……

優菜「クロノス、壊れたところの時間戻して」

元康たちは少し離れたけど逃げてはないか……

ラフタリア「ナオフミ様！」

尚文「ラフタリアア！フイーロ！お前が連れてきてくれたんだなラフタリアア」

ラフタリア「はい……何がどうなってるんですか？」

尚文「ああ、じつは元康の奴がまた」

元康「お嬢さん」

フイーロの手を取りながら言う

元康「お名前は？」

フイーロ「えつとね、フイーロ！好きな事は馬車を引くこと!!」

尚文「素直に答えるな!!」

元康「……デブ鳥を神鳥なんて呼ばせていい気になってるみたいだが……フイー

ロちゃんにまでそんな酷使を……ゆるさん!!」

槍を振り回す

尚文「わわっ」

優菜「おい、それ以上やったら槍折るぞ」

メルティ「ですから！決闘はダメです!!」

元康「早く逃げるんだ！コイツはとても危険な男なんだっ」

こつちを向く

元康「フイーロちゃん!?道を開けて!!そいつを処分できないっ」

フイーロ「・・・フイーロのことデブ鳥っていった!」

元康「なんだって!?尚文っ女の子になんてこと・・・っ」

フイーロ「前に会った時もフイーロのこと笑ったし!」

元康「え、笑ったっていつ・・・」

ボウンッ

フイロリアルに戻る

フイーロ「槍の人、きらいいっつ」

元康「え・・・まさか、君がああデブ・・・」

ギランッ

ゴキンッ

ドゴオッ

元康を蹴り飛ばす

優菜「なぐにやっつてんだか」

ドシヤヤア

屋台に突つ込む

マイン「モトヤス様つはやくつ治療院へ!!」

尚文「・・・くつくくくつあつはつはつはつ」

ラフタリア「・・・つナオフミ様がこれまでにない爽やかな笑みを・・・つ」

尚文「よくやったフィーロ!!これから元康に会うたびにけりまくれ!!」

ラフタリア「ナオフミ様!!フィーロになってことを教えるんですか!!」

尚文「何を言う!悪いのはあつちだろうが!いつも酷い目にあつてるんだ。あれくら

いのこと・・・」

メルティ「聖人様・・・いえ盾の勇者様」

尚文「お前・・・」

メルティ「どこかでお話をさせていただけないでしょうか・・・?」

親父の店

親父「で?何でウチなんだ?」

優斗「逆にここ以外いけるとこあるか?」

尚文「まず、お前の本当の名前を教えてもらおうか」

メルティ「改めて、わたしはメルロマルク王位継承権一位第二王女メルティⅡメルロマルクと申します」

優菜「継承権一位だと？」

メルティ「姉上はあの性格ゆえ昔から色々と問題を起こし今では私の方が上なのです」

尚文「ふーん……」

ラフタリア「……ナオフミ様……？」

尚文「まあ、これでハッキリしたな。フィーロ」

フィーロ「なあーに？」

尚文「もうコイツとは遊んではいけませんよ」

メルティ「えっ」

フィーロ「えくくくく!？」

ラフタリア「ナオフミ様なにを……っ」

尚文「もつと早くおかしいと思うべきだったんだ。あんな場所に、子供一人でいるなんてな！身分を隠して俺に近付いた目的は何だ？」

メルティ「!?それは誤解ですつ。そもそも私は貴方の事をずっと聖人様だと……」

尚文「どうだか……あの村では俺の正体はバレていたし、気づきようはあった」

優斗「おい」

尚文「フィロリアル好きとしてフィードロに近づいたのは考えたよな。そうか！目的はフィードロだな！じつはお前も元康とグルなんじゃないのか!? 飛んだ茶番を仕組んでくれたもんだが、俺は騙されないぞ……！」

メルティ「待つてください！少しは私の話を……」

尚文「お前の姉と父親は人の話を聞くどころか会話にもならなかったぞ」

優菜「一回止まれ」

尚文「残念だが血縁者だというお前の事は信じられない」

暴走……はしてなさそうだな

まあ、アイツ等の家族じゃ信じられないのも無理はない

メルティ「……っ」

ギイイ

老けた兵士「失礼、メルティ様ここにおいででしたか。王がお呼びです。ご同行を」

メルティ「……分かりました……またねフィードロちゃん」

フィードロ「うん！またね！」

尚文「フィードロ！」

・
・
・

優菜「メルティ」

尚文「お前まで！」

優斗「ちよつと待て、頭につけてるやつ見ろ」

尚文「?・・・あれは確か・・・」

スペクテツドの洞視を発動させながら言う

優菜「お前は俺たちの味方か?それとも敵か?」

メルティ「・・・味方です」

嘘ではないな

老けた兵士「メルティ様」

優菜「・・・今の所は信じてやる、物理的な何かで困つてるのを見かけたら助けては

やる」

メル「はい」

帰っていった

尚文「嘘じゃなかったのか」

優菜「ああ、でもお前の気持ちは分かるからな。それに呼ばれてたし」

ラフタリア「ですが少しくらい話を聞いてもよかつたのでは・・・?」

親父「そうだぜアンちゃん、あれはねえよ」

尚文「ふん」

兵士「盾の勇者様……」

尚文「わつ、なんだお前あの時の……つ、お前もさつさと帰っちまえ！」

兵士「いいえ！帰りませんっ、街の見回りの時に盾の勇者様を見つけたらお話を聞いていただこうと皆で決めたのです。だから……つ、一步も引きません!!」

尚文「……わかつたわかつた!!聞くだけ聞いてやる、話せ！」

兵士「あつ、ありがとうございます!!じつは……波の間だけ……私達兵士を……緒させてください!!」

尚文「……はあ!？」

兵士「前の波の時盾の勇者様の戦い方に感銘を受けまして、考えを共にする者たちが集まりぜひ勇者様の力になりたいと……」

尚文「俺の力にね……だが、他の勇者についたほうが出世できるんじゃないか?」
ラフタリア「ナオフミ様っ」

兵士「……その、私はリユート村の出身でして……波と戦うことも必要ではありませんが、国を守る兵士として国民への被害を抑えるのが最優先であると考えます」

尚文「……高尚な考えだな」

アクセサリーを出す

ラフタリア「ナオフミ様が作ったアクセサリー」

親父「へー、アンちゃんそんな細工もするようになったのか」

尚文「銀貨百五枚だ。それでコレを買ったら考えてやる」

皆（フイロー以外）「え〜〜〜!?!」

フイロー「ごしゅじんさま、それ行商してる時の売れ残り・・・」

尚文「お前は黙ってる! どうした? 金を出すだけでお前は俺から信用が得られるんだぞ?」

兵士「・・・つ、わかりました! 今からお金を工面してきます!!」

ダダダダダ

バタンツ

あれは持つてくるな、と考えながらスペクテッドを取る

尚文「さて・・・ラフタリア、フイロー行くぞ」

ラフタリア「え・・・? 行くつてどこへ・・・」

親父「おいおいつ、あの兵士はどうすんだよつ」

尚文「まあ戻つてくるようなら待たせておけ、また来る」

面白い物してる間に尚文が親父にあの名前の横にあつた星の事を聞いたら

クラスアップしないとこれ以上上がらないんだと

それをする場所が龍刻の砂時計だったので来た

尚文「なんだって？ クラスアップに金貨十五枚だと!？」

聖女「一人につき、金貨十五枚でございます」

ファイロ「高いの？」

ラフタリア「当たり前です……!! 十分高いですよ……!」

尚文「……わかった。ラフタリア、お前が先にクラスアップしろ!」

ラフタリア「え……っ、私だけ!？」

ファイロ「えっファイロもっ!」

優菜「俺たちはまた今度で十分だからな、ラフタリアが妥当だろう」

ざわ……

ん？ なんか持ってきたな

聖女「あーえーおほん……っ、盾の勇者様一行のクラスアップの許可はおりません」

優菜「なんだと……?」

ラフタリア「え……!?! でもさつきは……」

聖女「王直々の命令です」

ラフタリア「そんな……っ」

尚文「……っくっ」

奴隷商の所へ

奴隷商「おや、これはこれは盾の勇者様。今回はどのようなご用件で？ もしやフィオリアルの実験にご協力を？」

尚文「奴隷商！ お前の所でクラスアップの斡旋とかできないか？」

奴隷商「クラスアップ・・・ですか？」

尚文「お前の所でレベル40越えの奴隷がいただろう。国が勇者に出さない許可を、奴隷には出したのかと思つてな！」

奴隷商「・・・ああ、そういう事ですか。残念ですが私どもでは・・・」

尚文「・・・くつとなるかどうかすれば・・・」

奴隷商「なに、簡単な事です。他の国の龍刻の砂時計でクラスアップすればよいのです」

尚文「他の国にも・・・あるのか!？」

奴隷商「ええ、ですが信用を得なければいけないのは同じです」

尚文「どちらにしてもすぐにはムリか・・・次の波は何とか乗り越えるしかない・・・ということか」

奴隷商「で、勇者様ご用件はそれだけで・・・？」

尚文「ん？」

フイーロの装備を買った

そして親父の店に戻ると

兵士「お待ちしておりました!!盾の勇者様!!」

お金を集めに行つた兵士が五人で待っていた

巫人の子もいる

兵士「寮もまわつて皆に少しずつカンパしてもらいました!銀貨百五枚です。これで、信じてくださいますか・・・?」

尚文「・・・わかつた」

銀貨をアクセサリーを渡しながら押し返す

兵士「!?あの・・・」

尚文「・・・代表はお前でいいか?」

ピコンッ

兵士「・・・!?勇者様・・・っ」

尚文「・・・金が惜しい奴なら断りやすかつたんだがな。そのアクセサリーは文体の証としてくれたやる」

親父「なんだアンちゃんコイツを試したつてワケだな」

兵士「・・・では!!」

尚文「まだ完全に信用したわけじゃない、少しでも俺をはめようとするば……わかっているな？」

兵士「……はい!!よろしくお願いします……!」

その後

宿屋に戻り

色々尚文たちが喋っていたが

まあそこは小説は買っていないからわからんが
漫画なら四巻に書いてるから買って見てくれ
特に何かしたわけでもなく、普通に寝た

第百十四話（ペルソナ3に来た『第一話』より）

目を開けるとそこは家具などが一つもない部屋だった

そこに寝転んでいた優菜が口を開く

優菜「またか、もうとやかく言う方が面倒だな」

そう言いながら立ち上がる

いつものパターンならここに住むのだが

今回はそんなことはなさそうに見える

なぜなら先ほども言ったが家具が一つもないからだ

優斗「さつきから何黙ってたんだ？来たら来たで仕方ねえだろ、とりあえずこの家は何だ？」

優菜「今度はどういう世界なんだ？」

面倒くさそうに言いながら家を徘徊する

この家は階段がないからマンションか何かだろうか

そう考えながら調べていると

優斗「おい、こんな見つけたぞ」

優斗が四つ折りされた紙と財布、そしてバックを二つを持って戻ってきた

優菜「何でそんな沢山・・・」

優斗「玄関に置かれてたぞ」

紙を開くと0

優菜「えーと、なになに・・・？」

今回の世界はペルソナ3です

一応今はペルソナシリーズで書くのは最後にしようと思っていたそうです

よ

君達が今いるのはただの空き家です

高校の制服などはすでに用意してバックの横に置いておきました

大きい荷物も既にこの世界で登校してもらおう学校に輸送済みです

持っていけそうな物は一緒に置いてあったバックに入れておきました

○○駅から巖戸台駅まで移動してください

移動分のお金はこの紙と一緒に置いてあった財布に入っているとあります

これを見たという事は全て受け取ったという事で構わないでしょうか??

電車は終電に乗ってください

では幸運を祈ります

by 神様の秘書

PS 電車に乗る前に制服に着替えること

優菜「部下に書かせてんじゃねえよ!!」

『お前の好きでやってんのに何で部下まで巻き込むんだよ!!』という気持ちも込めて叫ぶ

優斗「移動分の金はこれか」

財布の中身を確認し時間を確認する

優菜「十一時前か、なら今から出発したほうがいいだろう」

優斗「バレたら面倒だからな、さっさと行こう」

○○ 駅についた

11時半ぐらいか

このくらいの時間ならちよつとヤバいかもね

最悪間に合うとこまでダツシユだね

最終電車は・・・32分につくと書いてある

優菜『なら急ごう切符とかいろいろ買わなきゃ』

電車に乗ると青髪の高校生ぐらいの子が音楽プレイヤーをヘッドホンで聞きながら

外を見ていた

あれがキタローって言われてるやつだよな

別の車両の方を見ると

?あれは・・・P S Pの女主人公か? いやまさかな

今のでフラグが立ちました、気づいたけどもう遅いです。ということであの子はP S

Pのハム子確定です

ていうか俺よく考えたらこいつらの名前知らねえわ

10分後

メーテイスに調べてもらった

色々調べてキタローは漫画版は有里湊、映画版は結城理、舞台版では汐見朔也だ

ハム子は公式スクリーンショット等で主人公子、舞台版は汐見琴音

へえくそうだったんだ。マジで知らなかった

「車内アナウンス「巖戸台く巖戸台く」

ここだな

優菜「降りるぞ」

優斗「へいへい」

キタローとハム子も降りた

そして改札を出ると周りの掲示板などの電氣が使われてるものが全ての電源が落ちたように消える

時計は0時を指したまま動かない

てか同じ学校の人が四人0時にいるってヤバない？

キタローはため息をつき進んでいく

ハム子は少し動揺を見せるがキタローと同じ方向に進んでいく

そして俺はというと

優菜『0時はやべえって、まじ恐いんやけど。外暗すぎやし、なんか棺桶いっぱいあるし』

優斗『あつ、こいつ恐がつてんな』

優菜「とりあえず行くよ」

優斗が後をついて行く

優斗『異様な景色だな』

信号なども全く動かない

人通りは皆無、その代わりに顔桶がずらりと立っている

自分たち以外の人が全員死んだかの様に

優菜『あゝ……やべえ今何か出たらショック死するわ』

コツコツコツコツ

四人の足音のみが町中に響く

ペルソナの主人公というのはなぜこんなに神経が図太いのだろうか

と考えながらキタローについて行くハム子について行く

するとある寮にたどり着く

そこだけは外に光が漏れていた

つまり客観的に見ればデート・ア・ライブの空間震の時のシエルターである

何故かって？ 周り電気全部消えてんのに電気がついてたら安全そうに見えるだろう

？

キタローが入口の取っ手に手をかけ中に入る

入るとロビーは右にソファア、ガラスで仕切られた奥にテーブルやキッチン

少し古いがテレビもある

左にはホテルでいう、チェックスイン・アウトの時のカウンターがある

どう見てもホテルを改造している

だがどこか違和感を感じる

全員入るとハム子は動揺している

当然だ、というかそれが普通の反応だ

キタローがヘッドホンを外すとさっきのカウンターから子供の声がある

子供「遅かったね。長い間、君達を待っていたよ」

キタローは涼しい顔で子供の方を見る

ここまできると感情がないのかと不安になってくる

少しぐらい動揺してもいいのではないか

ハム子を見る、子供とお前を三度見ぐらいしているぞ？

「パチン」と子供が指を鳴らす

子供「この先を進むなら、そこに署名を」

カウンターに置いてある「寮に入っている人の名前が書かれてるアレ」（名前わから

ん）を指さす

子供「一応契約だからね。怖がらなくていいよ、ここからは自分の決めたことに責任

を取ってもらうっていう当たり前の内容だから」

キタローはカウンターの前まで行きスラスラと名前を書く

そしてハム子恐る恐る書き、俺たちも書く

ついでにキタローたちの名前も確認する

キタローは有里湊、ハム子は主人公子だな

優菜『よし覚えた』

書き終わると子供が票を手に取り

子供「確かに、時は全てのモノに結末を運んでくる。たとえ耳と目を塞いでいてもね」
票が手品のように消える

子供「さあ、始まるよ」

そう言い残し消えていった

そして周りの電気も一緒に消える

ここでやつとハム子・・・公子が口を開く

公子「ごめん、この状況が理解できてる人手を上げてくれない？」

誰も手を上げない

公子「だよね・・・なんかごめん」

優斗「・・・謝る様な事じゃないと思うぞ」

女子の声「誰!!？」

女子は身構える

女子「ハア・ハア・ハア」

呼吸が荒くなり右足の太ももにさげた銃をに手をかけ、抜こうとすると

別の女子の声「待て」

その声に気づき女子が振り返るとそこには大人びた女子がいた

すると電気が戻り色んな意味で安堵する

美鶴「到着が遅れたようだね。私は桐条美鶴。この寮に住んでいる者だ」

少女「・・・誰ですか？」

美鶴「彼たちは転入生だ。ここへの入寮が急に決まってね・・・いずれそれぞれの寮への割り当てが正式にされる

だろう」

少女「・・・いいんですか？」

美鶴「さあな。彼女は岳羽ゆかり。この春から二年生だから、君たちと同じだな」

ゆかり「・・・岳羽です」

公子「！・・・もしかして今自己紹介したほうがいい感じですか・・・？」

優菜「・・・また明日でも良くない？・・・いや0時過ぎてるからまた朝か」

美鶴「自己紹介はいつでもできるからな、今は体を休めた方が良さだろう。他に聞きたいことはあるか？」

湊「・・・何で銃を・・・？」

ゆかり「えっ・・・」

優斗「その右足につけてるやつだろ？さっきに取ろうとしてたし」

ゆかり「あ、なんていうか、趣味っていうか・・・あ、いや、趣味なわけないや・・・」

ええと・・・」

明らかに動揺している

美鶴「世の中物騒だからな。護身用といった所さ・・・もちろん、弾が出るわけじゃない。部屋は二階と三階に男子と女子分かれて用意してある。荷物も届いてるはずだ。すぐに休むといい。ゆかりは男子を頼めるか？」

ゆかり「あ、はい。それじゃ、案内するんでついて来て下さい」

湊と優斗がついて行く

美鶴「それじゃあ、君達の部屋に案内する。ついて来てくれ」

公子「はくい」

優菜『俺たちが入るスペースはなかったと思うが、最悪カオスの空間で寝泊まりすればいいだろう』

公子「?どうかした?」

優菜「いや、なんでもないよ」

優斗達は二階に上がり優菜達は三階に上がった

さあまず優斗たちの方から見ようではないか

優斗視点

二階に上がって右にある通路の突き当りまで来た

そして右側を向く

ゆかり「ここがそつちの青髪の君の部屋だよ」

湊「……僕の名前は有里湊だ」

優斗「俺は中村優斗だ」

ゆかり「……何とか覚えるわ。優斗君の部屋は湊君の向かいの部屋だからそつちだよ」

反対側、つまり突き当りの左側の部屋である

……言わなくてもわかるねゴメン

ゆかり「一番奥だから、覚えやすいでしょ？あ、鍵は無くさないでね。すごい怒られるから……」

優斗『さつちの人にか……簡単に想像できる』

ゆかり「えっと、何か訊きたい事ある？」

湊「あの子供も寮生？」

優斗「？……ああ、さつき消えた子か」

ゆかり「子供？……誰の事？ちよつと、やめてよ、そういうの……」

湊『何も知らないのか……』

優斗『触れないほうがいいか……』

ゆかり「あの……ちよつと聴きたいんだけど……駅からここに来るまでの間、ずっと平気だったの……?」

湊「どういう意味?」

ゆかり「どういう意味って……その様子だと、ほんとに平気みたいだね……」

優斗「荷物はもう部屋にあるんだろ?ならまた明日な」

ゆかり「あ、うん。また明日」

部屋に入る

机やベッドは既に置かれていてタンスまである

優斗「さて、どうするかな?」

優菜達もみましようか

美鶴「このこと反対側の部屋が君達の部屋だ」

優菜『さっきの違和感の正体はアレか、この寮が広くなってるんだ』

美鶴「これがカギだ、左側が君（優菜）右側が君だ（公子）」

扉を指さしながら言う

鍵を渡される

美鶴「無くしたときは……覚悟はしておけよ?」

公子&優菜「は、はい!!」

怖え・・・

美鶴「それじゃあ、私は明日用事があるから案内はゆかりにしてもらってくれ」

優菜「はい」

降りて行つた

公子「・・・」

優菜「・・・」

公子「と、とりあえずあの人に逆らつたらダメな気がするね」

優菜「・・・うん、あの人を敵に回したら終わりだね・・・」

公子「それじゃあ、色々話したいことはあるけどまた明日ね」

優菜「うん、また明日」

公子部屋に入り優菜も部屋に入る

荷物は全て整頓されている

それとは別にダンボールが置かれている

貼られているガムテープには「下着」と書かれている

優菜「・・・まあ流石に開けないわな」

・・・あ

*以下ペルソナ越しで喋ってます（ジヨジヨ三部の潜水艦のときみたいな感じ）

優菜「優斗か、どうした？」

優斗「お前部屋に何かあったか？」

優菜「ダンボールぐらいだな、それがどうかしたか？」

優斗「寝る前に色々整理しようと思つたんだが・・・ダンボールつてなんだ？」

優菜「それはダンボール自体が何かか？それとも中身が何かか？」

優斗「中身に決まつてんだろ」

優菜「下着だった」

優斗「俺のそこには何もなかったぞ・・・？」

優菜「タンスとかに入ってるんじゃないかねえか？男物の下着には需要ほとんど無いだろ、

俺は気にしないタイプだし」

優斗「タンスに入ってたわ・・・」

優菜「とりあえず0時過ぎてるし寝た方が良いだろとりあえず」

優斗「だな、じゃあお休み」

寝る前に・・・覚えてるぞ俺は、衝撃的だったからな

テレレレー監視カメラ

フツ取つたらバレるからな、ちよつと細工

メーテイスに出かけてもバレない様にしてもらった

翌朝

起きて時間を確認する

優菜「五時か」

微妙な時間帯だ

四時ならばまだいいのだが五時では時間を過ぎる危険がある

優斗に起こしてもらおう手もあるがアイツはむしろ俺より起きるのが遅い

・・・寝起きはいいくせに

優菜「仕方ねえ、起きるか」

ついでなので朝のランニングでも行く

動きやすいものに着替え外に出る

まずは寮の外を10周程する

サイヤ人+ジョジョの波紋で肺も鍛えられてるのでこれでも楽な方

タツタツタツ

スピードを出し過ぎたら色々面倒なので普通の人レベルまで下げる

のでハッキリ言えば普通の人で言う歩いてるのと同じだ

人の見えないスピードで走ってもいいが、それでは通行人にかまいたち現象が起きる

可能性まで出てくるのでやめておく

なんてことを頭の中で考えてるうちに今やつと一周だ

・・・一周ずつスピードを上げよう

30分後

十周しランニングが終わり

帰るとロビーにはまだ誰もいない

朝飯は作るのが面倒だったので見られる範囲に誰もいないのを気で確認し
カオスの空間に備蓄されているものを食べた

何でもあるからあらゆる時間帯の飯を作ることもできる
うらやましいと思った奴、大丈夫俺も羨ましい（作者）

食べ終わり優斗の部屋まで行く

優斗の気を探ればすぐだ

ドンドン

・・・出てこないな

六時だぞ？そろそろ起きろ

・・・よし

優菜「イフリート、優斗を起こせ」（小声）

優斗「痛あああああああ
!!!!」

突然後ろから声がしたので叫んだ

湊は耳を塞ぐ

優菜「居たの!?!」

湊「あれだけ叫び声を上げられたら誰だつて起きるよ」

優菜「ああ、さっきの・・・起こしちゃったか、ごめんね」

湊「別にいいよ、でも朝からあんまりうるさくしない方が良くと思うよ」

部屋に戻つていった

優菜「気配が全然しなかった・・・一旦部屋に戻ろう」

その頃の優斗

優菜「ギヤアアアアア!!!!」

優斗「!!?!」

ガチャン

優斗「やべつ飲み物こぼした・・・クロノス、コップと飲み物の時間を戻して」

ギョルルル

優斗「よし」

その後優菜は公子とあつたけど挨拶してすれ違つただけ

そして七時半

優菜「おーい、起きろー！」

優斗が出てきた

優斗「準備は出来てる」

優菜「なら行こうぜ」

優斗「案内役とかいなくていいの？」

優菜「大丈夫・・・と思う」

優斗「思うじゃダメだろ」

優菜「なる様になるよ」

公子「あれ？優菜ちゃんどうかしたの？」

ビクッ

優菜「・・・この人たちは心臓に悪い・・・」

公子「・・・なんかごめん」

優菜「ていうかちゃんって言った？」

公子「ダメかな？」

優菜「ダメじゃないけど」

ゆかり「部屋にいなかったからどこに行ったのかと思つたら・・・ここにいたのね」

優菜「それはごめん」

ゆかり「まあ、いいわ」

コンコン

湊の部屋の扉をノックする

ゆかり「岳羽ですけど、起きてますかー？」

湊が出てきた

湊「おはよう」

ゆかり「おはよう、よく眠れた？」

湊「なんとか」

ゆかり「先輩に案内しろって、頼まれちゃって。準備は四人ともできてるよね？」

湊「できてる」

公子「もちろん」

優菜&優斗「すぐ出れる」

ゆかり「じゃあ行こっか」

行きながら思う

転校生四人が同じ寮ってレアじゃね？

電車で学校まで向かう

優斗「電車通学は初めてだな」

優菜「小学生の時にいたなく友達に電車通学の子、よく遅刻してた」

公子「電車が遅れたら仕方ないよね？」

湊「・・・よく喋るね」

ゆかり「昨日会ったばかりとは思えないわ・・・」

公子「ていうか優菜ちゃんと優斗くんってどっちも同じ中村だけど、双子？」

優斗「兄妹だよ、俺が兄」

優菜「生意気だけどね」

優斗「一言余計だ」

公子「仲いいんだね」

ゆかり「！あれが学校だよ」

外を指さしみんなが見る

優菜「でか・・・」

優斗「想像以上だな」

公子「私は想像通りかな」

湊「・・・」

駅につき

学校の敷地に入る

リンリン♪

自転車に乗った女子「おはよう」

ゆかり「おはよう」

優菜『友達か?』

ゆかり「さ、着いたよ。ここが、月光館学園の高等部よ」

下駄箱まで入る

ゆかり「ここからはそれぞれ違うと思うから、もう大丈夫よね? あ、でもまず先生に挨拶か。この先を左に入ってすぐだから、詳しいことはそこでね。以上、ナビでした。他に分からないことはある?」

公子「ゆかりちゃんは何組?」

ゆかり「え・・・さあ? まだクラス分け見てないし。・・・あのさ、昨日の夜いろいろ見たでしょ? あれ、他の人には言わないでね・・・じゃあまたね」

歩いていった

公子「とりあえず職員室かな?」

優菜「クラス見てもいいんじゃない?」

優斗「職員室に行つてクラス言つたらスムーズに先生のところに行けるんじゃないか

?」

湊「クラス見たほうがいいか……」

掲示板まで行く

………

優菜「あつた？」

優斗「なくね？」

湊「見つからない……」

公子「もう少し探してみようよ」

………

優斗「あ、あつた」

優菜「どこ？」

公子「あつ、ほとんど。右下に小さく」

2年F組有里湊

2年F組主人公子

2年F組中村優斗

2年F組中村優菜

湊「……？全員同じクラス……？」

優斗「……マジ？」

優菜「マジじゃん・・・」

公子「運命の赤い糸つてやつ・・・？」

優菜「電波つて思われるからやめた方が良いよそれ」

湊「・・・とりあえず職員室に行こう」

職員室

歩き回つてる先生がいる

女性教師「おっと、君達全員転入生かな？・・・有里湊に主人公、中村優斗に中村

優菜。2年生で間違いないわよね？ふうん・・・結構転々としてきてんのね・・・」

資料を見ている

きつと忙しかつたのだろう

女性教師「転校生を4人も押し付けるなんて・・・ほんつと何考えてるのかしら・・・

自分たちが面倒だからって・・・」

優菜『愚痴が漏れてるぞ先生』

鳥海「ええと、私は国語科主任の鳥海です。よろしくね」

湊「・・・どうも」

優斗「よろしくお願ひします」

優菜「よろしくお願ひします」

公子「よろしくお願いしまーす」

鳥梅「三人は元氣ねー。クラス分けは、もう見た？貴方達は私の担任するF組よ」

優菜「確認済みです」

鳥梅「そ、でもこの後すぐ始業式だから、先に講堂ね。案内するわ、ついて来て」
確信した、この担任は当たりだと・・・

講堂

席は湊の斜め後ろに座っている

公子と優斗は他の場所にバラバラに座っている

校長「えー、諸君らの新しい1年の始まりにあたり・・・あー、文筆頻々、然る後君子という言葉を紹介します。うー、コレの意味はと申しますと・・・」

優菜『校長の話つてのはホントどうして長いんだろうな』

その後授業・・・まあ学活のようなものも終わり

放課後・教室

帰ろうとすると

男子生徒「よつ、転校生！」

優斗「ん？」

優菜「あんた誰？」

公子「ちよつと、あたり強いよ」

湊「・・・誰？」

順平「思つた以上の反応だつたが・・・まあいいだろう！俺は伊織順平。ジュンペー
でいいぜ。実はオレも、中2ん時、転校でココに来てさ。転校生つて、色々一人じや
わかんねえじゃん？俺が最初に声かけなきやつてな。へへッ、イイ奴だろ？」

優菜「一人じゃないけどね」

優斗「四人だしな」

公子「自分でイイ奴つていう・・・？」

順平「なんかすごい言われてるんだけど!？」

ゆかりが来た

順平「おつゆかりっちじゃん。またおんなじクラスになれちゃうとは思わなかつた
ぜ」

ゆかり「まったく、相変わらずだね・・・誰彼構わず、馴れ馴れしくしてさ。ちよつ
とは、相手のメーワクとか、考えた方がいいよ？」

優菜「でも結構好感度は高い方だぞ、そういうキャラは嫌いじゃない」

ゆかり「あんたは珍しい方よ」

順平「な、なんだよ。ただ親切にしてるだけだつて」

ゆかり「ふうん、なら、いいんだけど。なんか……偶然だよ。同じクラスになるなんてさ……」

優菜「もはや奇跡だよ」

優斗「四人とも同じなんてありえないから、普通は」

公子「やっぱり運命の赤い」

優菜「言わせないよ？」

湊「……賑やかだな」

順平「おいおい、俺だって同じクラスだぜ？なんか扱い違わねーか!?てか、実際、訊きたい事あんだだけさ。お前ら、仲良く皆で一緒に登校したんだって？」

公子「間違つてはないね」

優菜「とりあえずだけど同僚に入ったから、学校まで案内してもらっただけ」

順平「なんだ、そういうことか。なら何もなかったんだな？」

ゆかり「え？どういう事？」

順平「いや、噂でゆかりっちとお前が付き合ってるなんてのを聞いてな」

公子「……今頃だけど自己紹介したほうがいい？」

順平「あゝ……頼む」

自己紹介した

ゆかり「とりあえず、そんな根も葉もない噂信じないですよ？」

順平「もちろんだつて」

ゆかり「・・・ちよつといい？あの事とか・・・言つてないよね？」

湊「・・・何も言つてない」

順平「え!?何もなかったんだよな!？」

優斗「湊の横の部屋だった俺が保証する。何にもなかった」

順平「ホントだな!？」

優斗「安心しろ」

優菜「アイツらはほつといていいと思うよ」

順平「おい!？」

ゆかり「とにかく!あの噂は真つ赤な嘘だから、広げないですよ!？」

行つてしまった

優菜「さ、帰ろう」

優斗「うん」

順平「変わり身速いな!？」

その後皆で帰つて

夜

飯を食べ、風呂に入り、自室に戻る

そして0時

ドワーン

影時間だ

優菜「さて、どうしようか。寝てもいいがタルタロスを見に行くのも悪くない」

窓から外に出る

そして学校まで飛ぶ

遠くからでもわかるデカイ塔

近くの氣に降り立つ

敵に見つかつたらたまつたもんじゃない……

いや外にはいなかつたな、まだ

じゃあタルタロスに入る

男「誰だ！」

優菜「!？」

男「女子……？ウチの生徒か？何かあつたのか？どうしてそんなところにいるんだ

？」

優菜『質問攻めは勘弁……よし逃げよう』

ヒュッ

男「!?消えた!」

影時間にいる十男Ⅱ真田先輩だな

・・・面倒な事になった

自室に戻り

何とか寝た

誰か来た気もするが気のせいだろう

翌朝

問い詰められるのは勘弁なので部屋以外にいる時間を短くし出てきた・・・が

校門前

公子「でねく?」

優斗「マジで?」

湊「・・・」

優菜『何でコイツらもいるんだろう』

話好きの生徒「ねえ、聞いた・・・?あの噂」

背中を向けている生徒「あー、アレでしょ?トイレの・・・何だっけ?」

優菜『古ッ!!』

話好きの生徒「古ッ！ちーがーくーて！一年の、ナントカさんって子の話！学校來な
くなつちやつてね、家でずーっと、壁に向かつてるんだって。で、お母さんが声を掛け
たらね、来る……来る……つてつぶやくんだってー！」

背中を向けている生徒「ふーん」

話好きな生徒「……信じてないでしょ」

優斗「……それで？怖いのが苦手な優菜はどう感じた？」

優菜「小説と話を聞くだけなら怖くないけど、体感するのとみるのは怖いのよ」

優斗「今のは怖くない部類という事か」

公子「なら話すときが來たら格別怖い話持つてくるから！」

優菜「うん、やめて？」

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴った

そして授業が終わり

夜まで時間をカットーツ！！

夜

皆で帰ってきた

ゆかり「あ、帰ってきましたよ」

謎のおじさん「なるほど・・・彼たちか」

近付いてくる

昨日の事を問いただされる前に行こう

謎のおじさん「やあ、こんばんは」

優菜『チツ、逃げられなかった』

幾月「私は、幾月修司。君らの学園の理事長をしている者だ。イ・ク・ツ・キ・・・言いにくだらる？おかげで自己紹介はどうも苦手だよ。油断すると、噛みかねん・・・まあ、かけて」

優菜『あつ、理事長様でしたか！すいませんねえ！さすがに遠い昔過ぎて忘れてしまつててねえ！』

公子「どうも」

優斗「よろしく」

優菜「・・・お願いします」

公子&優斗「イエーイ！」

優菜「あんたらいつの間そんな仲良くなつたの!？」

ソファアに腰掛ける

幾月「部屋割りが間に合わなくて、申し訳なかったね。正式な割り当てが決まるまで、

まだもう少しかかりそうだ」

優斗「このままでもいいですよ」

公子「ものすごく楽しいです」

優菜「……」

湊「……」

修司「そうかい、さてと。何か訊きたい事はあるかい？」

湊「なぜ寮に来たんですか？」

幾月「なぜって……君達を迎える為さ。ダメかい？ま、ほんと言うとそれだけじゃないけどね……あ、岳羽君。そういえば、桐条君は？」

ゆかり「ハイ、もう上に」

幾月「いつもながらマジメだねえ、顔くらい出せばいいのに。他には何かあるかい？」

湊「他の住人は誰がいるんですか？」

幾月「この寮の住人は、君達を含めて七人だ。ここにいる岳羽君と、それから、桐条君。あと三年生の男子で真田明彦君という生徒がいる。ひとつ、仲良くね。他には？」

湊「……実はここに來るときに変なモノを見たんですが」

優菜「うん、みんな見てるから」

幾月「変なモノ？……何の事だい？」

公子「それじゃあ、あれは夢! 私達は寝ながらここまでたどり着いたの・・・!」

優斗「確かにあの子供が消えたところまでが夢なら、ゆかりの声で目を覚ましたという説も・・・!」

優菜「全員が同じ夢を? そんなわけ・・・いやでもTHIS MANなんてのもあるから・・・無くはない・・・のか?」

優斗「いやTHIS MANはまた別だろ、サブリミナル効果とかで意識の底に刷り込まれるとか何とかってやつだろ確か」

幾月「夢かどうかは別として・・・多分、疲れてたんじゃないかな? あまり気にしない事だ」

湊「・・・それじゃあもう訊く事はないです」

幾月「よろしい。じゃあ、よい学園生活を。私はそろそろ失礼するよ。転入したては色々疲れるだろ? 早めに休むといいよ。身体なんて、ぐーぐー寝てなんぼだからね。昔、マンガにあつたらう? ぐーぐーナンボ? なんちゃって」

どこかに行ってしまった

ゆかり「・・・ごめんね・・・」

そして深夜

・・・出るのは得策じゃないな

寝よう☆

0時2分

優菜『うーん・・・』

起き上がる

優菜「・・・トイレに行こ」

カサカサカサ

優菜「!？」

カサカサカサカサカサカサカサ

優菜「ゴキブリ!？」

カオスの空間からゴキジェットを取り出し音がする方にぶっかける

カサカサカサ

・・・動かなくなった

カオスの何もない空間に入れて、燃やした

・・・トイレ行こ

トイレ後また寝ると

ぐわぐん

優菜「今度は何だ!？」

周りを見るとイゴールと・・・エリザベス・・・とあれは・・・テオ・・・テオ・・・イゴール「ようこそ、我がベルベットルームへ」

優菜「テオドアだ！」

テオドア「いきなりなんですか!？」

イゴール「これはこれは、お客人が三人も来るとは思いませんでしたな。一人迎えるだけでも久しぶりなのですが・・・」

優菜「三人？私の他に誰か来たのですか？」

エリザベス「ええ、青髪の男性の方と茶髪の女性でしたわ」

優菜『湊か』

エリザベス「それと無理に女言葉をしなくても大丈夫ですよ。むしろ不自然ですから」

優菜「・・・わかった、じゃあ普通にさせてもらおうよ」

イゴール「さて、ここはベルベットルーム、そしてこの主を務めさせてもらっている。イゴールです、以後お見知りおきを、そして左にいる男の人がテオドア」

テオドア「よろしく願います」

イゴール「そして右にいるのがエリザベスです」

エリザベス「エリザベスでございます」

イゴール「私達はこの住人です」

優菜「大丈夫、知ってるから。ああ、後そのうちまた来ると思うから、あと数年後にもね」

イゴール「・・・そうですか、では私共は精一杯お手伝いをさせていただきます。あなたの運命が定まるその時まで・・・」

優菜『この世界がペルソナ最後と言っていた、ならこの世界をクリアした先にあるんだから4で知ってるのは当たり前だ。5はピーーーーーーだから知らないのは当然だからな』

翌朝

ベルベツトルム・・・これで初めては最後だろう

戦うならエリザベスは絶対に嫌だね

学校は飛ばして

影時間

優菜「はあ、今日湊たちはペルソナを・・・」

ドゴオオオン

!?

マズそうだ

とりあえず優斗の所に！

カオスで移動する

優斗「何だ今の揺れは！」

優菜「多分シャドウかなんかだ！いつつもそうだろう！」

優斗「ならあいつら起こさねえと！」

優菜「お前は湊を頼む！俺は公子を！」

分かれて起こしに行く

公子部屋前

ドンドンドンドン

公子「なに!？」

優菜「私！とりあえず出てきて！」

公子「優菜ちゃん!？」

出てきた

公子「さっきの揺れは何？」

優菜「分かったら苦労しないよ」

ドタドタドタ

下から誰か上がってきた

ゆかり「起きてる!？」

優斗「優菜! 湊もいるぞ」

湊「一体何が起きてるんだ？」

ゆかり「とりあえず裏口から・・・」

ピピピピピピ

美鶴「岳羽、聞こえるか!？」

ゆかり「ハ、ハイッ! 聞こえますっ!」

美鶴「気をつけろ! 敵は一体じゃないみたいだ! こことは別に本体がいる!」

ゆかり「マジですか!？」

ドンッ

優斗「下から物音が!」

優菜「多分裏口のとこだ! そこから音がした!」

ゆかり「ええと、どうしようどうしよう・・・正面玄関は奴らがいるし・・・」

公子「とりあえず上に行こう!」

ゴゴゴゴゴゴ

優菜「急げっ!」

ダダダダダ

四階まで上がると

バリント

ゆかり「な、何今の！」

優菜「何か、来る!!」

ゆかり「う、上よ！上に急いでっ!!」

屋上まで逃げてきた

ゆかりが全員来たのを確認し扉を閉め鍵をかける

優菜「とりあえず大丈夫か!？」

優斗「それフラグ!!」

公子「バカーツ!!」

ドドドドドド

ゆかり「う、うそっ！」

後ろを振り向く

何かが下から這い上がってくる

シャドウ！

仮面を持つて剣を四本を持ち、歩く用の手が何本も生えたシャドウ!!

優斗「嘘だろ!？」

優菜「！優斗、何もするなよ」（小声）

優斗「！・・・わかった」（小声）

ゆかり「ここを襲ってきた化け物、シャドウよ!!」

ゆかりが銃を引き銃口を額につける

ゆかり「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・!!・・・うっ!!」

引き金を引こうとした瞬間

シャドウに突かれ銃を投げてしまう

そして湊がその銃を手に取り

優菜「・・・公子、お前に渡すものがある」

公子「え？なに？」

『そのうち使うかもしれないしな。置いていこう』

アレを使う時が来た

優菜「これだ」

公子「これって・・・ゆかりちゃんの銃と同じ・・・」

優菜「それを頭に向かって撃つ。それだけだ、言つてたる？弾は入ってない」

公子「・・・うん！」

湊と公子が同時に右手で右こめかみに銃口を突きつける

湊&公子「……ペ……ル……ソ……ナ」
パン

周りから青色の粒が舞い上がり

少しずつペルソナが見えてくる

湊のオルフェウスは白髪で体が青色

そして公子のオルフェウスは茶髪にオレンジがかつた長い髪で体は黄色

何か言っているがよく分からない

そして二人とも苦しみだし二人のオルフェウスの首から手が出て

二人のオルフェウスが割れ……というより粉々にされタナトスが出現し二体のタナ

トスがシャドウを切り刻む

タナトス「ガアアアア!!!」

そしてノイズのようなものが起こり二体ともオルフェウスに戻る

オルフェウスは消えた

ゆかり「終わった……の？」

シャドウ「ガアアアア!!!」

また二体出てきた

湊「っ！」

優斗「初ペルソナは疲れるもんだ、あとは任せな」

優菜「一体ずつだ、速攻で終わらせるぞ」

優斗「イフリート、ブレイブザッパー！」

優菜「アリエル、ワンシヨットキル！」

ドオン パアン

シユワアアア

優斗「まだ来てもらっても構わねえが」

優菜「もういいだろ、むしろこれからが面倒だ」

公子「大丈夫!？」

優菜「こつちのセリフだ、まさか暴走するとはな。そこまでは予想してなかった、す

まん」

バタツ

湊が倒れる

ゆかり「ちよ……大丈夫!？」

公子「ごめん……私もちよつときつ……」

バタツ

公子も倒れる

優菜「優斗、頼む」

優斗「ああ」

優菜「暴走は想像以上に体力の消耗が激しいみたいだな、メーテイスは知ってた？」

メーテイス「もちろんじゃないですか」

優菜「教えてくれてもいいじゃないか」

ジユグ

パアン

シユワアアア

優菜「油断も隙も無いな・・・ってこれ実弾じゃん！間違えた!!」

改めてモデルガンを取り出す

なんか違和感がすると思ったら重さか

優菜「今のは見なかった事に・・・」

ゆかり「それよりペルソナ使えたの!? 召喚器を使わずにどうやって・・・ていうか公子に召喚器渡してなかった!？」

優菜「・・・ともかくだ、とりあえず。アリエル、メシアライザー」

パアアア

優菜「ふう、さてこれからどうしようかね」

タツタツタツタ

晶彦「無事か!」

優菜「氣絶してただけだよ、回復したけど一応病院に連れて行つたほうがいいともうよ。もちろん公子も」

美鶴「・・・君には色々聞きたいことがある。一緒に来てくれるな?」

優菜「・・・嫌だつて言つたら?」

美鶴「力ずくでも連れてくまでだ」

優菜「・・・ホントにやる氣はないですよ。その前に連れて行つた方が良いんじゃないんですか?」

美鶴「既に幾月理事長が手配している」

優菜「優斗、来てくれ」

優斗「また面倒な事にしたんじゃないやねえだろうな?」

優菜「した」

優斗「バカじゃねえのお前」

優菜「有名になるのはいつも通りだろ」

優斗「そういう問題じゃねえ」

優菜「行く先々でシャドウやらヴィランやら、色んな敵が出てるし今更じゃんか」

優斗「はあ……」

晶彦「……緊迫感が全くないな」

美鶴「警戒はしておこう。岳羽、手配した人が来たら二人を連れていくのを手伝ってくれ」

ゆかり「……はい」

優菜「今頃二人はベルベットルームかな、まあ今はどうでもいいか」

優斗「お前ひとりで説明してくれないか？」

優菜「絶対やだね、逃げて捕まえて戻ってくるからな」

作戦室

幾月「……色々聞きたいことはあるんだけど、まず最初に聞きたいことがある。君たちは何者なんだい？僕たちの味方が敵か、うやむやにせずちゃんと話してほしい」

優菜「何者かというのは……そうだねえ、理事長先生たちからしたら未来人つてやつだよ」

晶彦「……ふざけてるのか？」

優菜「ふざけてはいないさ、二年後に霧で覆われた街がニュースで取り上げられるだろうがそれを消すのは俺と仲間だ」

幾月「俺？」

優斗「ああ、こいつ体は女子だけど中身は男だから」

晶彦&美鶴&幾月「!!」

幾月「……未来にはそういう技術もあるのかい？」

優菜「あく……それは違う。これは今でいうタルタロスの中で見つけたモノを飲んだら女になった」

晶彦「タルタロスまで知ってるのか……」

優菜「後ついでに言うとな数年後に東京で心の怪盗団というのが流行る、そして有名人が次々と自分のやった悪事を暴露しまくるだろう。それも俺だ、ちなみにさっきのとは別の仲間だ」

幾月「よく分かったよ、それじゃあ君たちは敵かい？味方かい？」

優菜「……敵になる気はない、メリツトがないしな。それに味方したほうが都合はいい」

幾月「わかった。それじゃあ最後に、湊君達と話してる時、僕らの目には仲良く見えた。あれは全て演技だったのかい？」

優菜「……そんな演技やったことないし出来る気もしないよ」

優斗「俺も普通に楽しくやってたぞ」

幾月「そうか。色々聞きたいことはあるが、とりあえず今日はいいかな」

美鶴「!いいんですか?」

幾月「彼女・・・いや彼は大丈夫だよ。少なくとも今は敵意も全くないし」

美鶴「・・・わかりました」

優菜「とりあえず部屋に戻っていい?」

幾月「ああ、構わないよ」

作戦室を出てそれぞれ部屋に戻った

思ったよりは大丈夫だったな

ともかくこれでperlソナ3もできるようになった

公子の性格は予想外だったがまあいいだろう

それではまた次の話で

バーイ

第一百十五話（ペルソナ3に來た『第二話』より）

まず前回の訂正、タルタロス以外もシャドウは出る

あれからとりあえず17日までいるんだが

警戒はされているが別に嫌われているというワケではない

むしろ幾月理事長には色々未来の事を聞かれたけど面倒だったので必要以上のことは言えないと言ったら黙った。（まあこっちも全部が全部を言えるわけではない）そのかわり蓮や悠とか仲間の事を聞いてきたけど

自分の事を聞かれる前にぎっくりと身の上は全部話した。∴幾月理事長がめっちゃ真剣に聞いてたのは覚えてる

後ついでに言うのとゆかりに実は男って話が耳に入ってからゴミを見るような目で見られるようになってもうたわ

しかしあれだな、公子がいないと静かだな

まあ大分気は戻ってきてるから今日か明日で復帰するだろう

などと、そんなことを考えながら授業を聞き放課後

湊達が入院している病院へ

湊の所にはゆかりが行ったので

俺たちは公子の所へ

優菜「今日か明日には回復すると思うが」

優斗「・・・まあ待つしかねえか」

数分後

優菜「あつ、湊戻ってきた」

気が完全に回復し動いているのを感じる

優斗「公子は・・・」

公子「うくん・・・」

!!

優菜「気づいた？」

公子「あれ？優菜ちゃん？鼻の長い人は・・・？」

優菜「それは忘れろ」

優斗「忘れたらダメだろ」

公子「ずっと寝てたの・・・？」

優菜「まあね、聞かれる前に言っとくとここは病院だよ。あの後倒れてるのは覚えて

る？」

公子「なんとかね」

優菜「それでここまで搬送、一週間も寝てたけど大丈夫そうだね。湊はついさつき起きたよ」

公子「そうなんだ・・・入院費とか大丈夫なのかな・・・？」

優斗「そこなん？」

優菜「そこは理事長・・・というか学校が負担するんじゃないか？俺はなつた事ないからわからんけど」

公子「俺？」

優菜「ああそつか、公子たちは知らないか。理事長やゆかりたちには言ってるんだが、俺実は男なんだよ」

公子「・・・女装？」

優菜「中身が男な」

公子「へく・・・」

優菜「・・・」

優斗「・・・」

公子「・・・」

優菜「えっ、それだけ!？」

公子「うん」

優斗「リアクション薄いってレベルじゃねえぞ」

公子「逆に聞くけどいきなりそんなこと言われて信じると思う？」

優斗&優菜「ごもつともですな」

公子「まあ嘘を言ってるようには見えないけどね」

優菜「・・・ホント調子狂うな・・・」

公子「男かくそっかく・・・まあいいけど」

優菜「あとは未来人とか言ってるけどどっちかって言う二元だしね」

公子「突然そんなこと言われて全部理解できると思う？」

優菜「そう思つて紙に書いてきた」

紙を渡す

公子「えーと・・・元男で未来人で宇宙人で異世界人で精霊・・・設定が渋滞してるね」

優菜「俺も書いてて思った」

公子「ペルソナも使えて、二人とも変身もできる・・・変身？見たい！」

優菜「また今度でいいか？」

優斗「俺もな」

公子「じゃあペルソナって？」

優菜「夢の中で鼻の長い奴が説明してなかった？」

公子「なんかよく意味わからなくて」

優菜「・・・ペルソナは使う人の心の鑑みたいなものだな、それでペルソナがやられたらその人自身もやられる、運命共同体というかまあ簡単に言えば思った通りに動かせる武器みたいな感じだな。難しく言っても分からんだろ」

公子「それじゃあ、あの黒いのは？」

優菜「シヤドウか？あれは普通の人には見えない所に住んでる敵みたいなものだ」

公子「へえ・・・でもなんかすごい友達出来ちゃったな」

優菜「やっぱり神経図太いな」

公子「何か言った？」

優菜「いや、なんでもない」

優斗「とりあえず、先生に報告だろ。お前ら忘れてるけど」

優菜&公子「あ・・・」

優斗「仕方ねえな、じゃあ行ってくるから待っとけ」

ガラガラ

外に出ると湊の病室からゆかりが出てきた

ゆかり「あ……湊は起きたよ、公子はどう？」

優斗「こつちもさつき起きた、報告だろ？なら一緒に行くこうぜ」

歩きながら話す

ゆかり「聞きたいことは色々あるけど、言えてなかったけどあの時はありがとうね」

優斗「困つてるやつがいたら助けるのは当たり前だからな、心の怪盗団としての弱気を助け強きをくじくの精神っていうのもあるが、人を助けるのに理由はいらないな」

ゆかり「ふーん……怪盗か……」

優斗「お人好しつて思ったんならそれで構わねえよ、実際お前から見たらお人好しに見える奴らばっかだから」

ゆかり「そんなことは思つてないけど……」

普通に喋れるぐらいには仲は回復したようだ

その後湊と合流、帰宅し

幾月理事長と優菜と優斗二人と三人で話をするこゝになり作戦室へ

幾月「さて、仲間とかは色々聞かせてもらったし面白かったよ。でもまあ、全部が全部信じてるわけじゃないよ。というか普通に考えたら色々混ぜすぎて嘘としか思えないからね」

優菜「ごもつともですが嘘は全く言つてませんし、そんなこと言われても」

幾月「とりあえず今僕が一番聞きたいのは君のペルソナだ、実は君たちの部屋に監視カメラを置いておいたんだが優斗くんがペルソナを召喚していたのを見た。そして君たちがシャドウを倒した時のペルソナが違うと思うんだ」

優菜「・・・お前いつ使つたんだよ」

優斗「ほら、学校に行く前に部屋に来て朝飯渡しに来ただろ？あの時食べてる時に前の「ギヤアアアア」って叫び声で飲み物こぼしてクロノスで飲み物の時間を戻したんだよ」

優菜「ああ、あの時か・・・」

幾月「それと優菜君はシャドウを倒した後また別のペルソナを使つていたがそのペルソナは何というんだい？」

優菜「メーテイス、知恵の女神ですよ」

幾月「知恵の女神・・・！テストとかに使つたことは？」

優菜「ないです、学力は実力です」

幾月「それを聞いて安心したよ、シャドウを倒したペルソナは言つてたイフリートとアリエルでよかつたかい？」

優菜「合つてます」

幾月「一人で二つのペルソナを使うだけでもすごいのに加えて未来人……面白いね」
優菜「まあペルソナは全部で14人ですけどね」

幾月「14!?!」

優菜「ペルソナは二人で共通ですからどつちからでも呼べますが、被つたら面倒なので二人の時はどつちが誰を使うかは決めてます」

幾月「14か……! そんなにペルソナを使えるものなのか……興味深い」

優菜「知ってる中で召喚器を使って出してるのはここの皆だけだから、今までの仲間
は普通に出せてたよ。まあ特定の場所だけけど」

幾月「特定の場所……タルタロスのような場所かい?」

優菜「二年後はテレビの中、また未来は人の心の中かな」

幾月「人の心の中?」

優菜「歪んだ欲望の世界、パレスという場所です。人それぞれ違うんですが、最初の
パレスで女になつちやいました」

幾月「へえ」

その後11時ぐらいまで食事も交えながら素性を細かい部分も全て話した

そして翌朝

公子「おはよう!」

優菜「朝から元気いいな」

湊「むしろ、うるさいぐらいだけどね」

優斗「そう言うなって」

ゆかり「何もなかったみたいによく話すわね」

公子「未来人ならむしろ面白いじゃん、それに貴重な体験だよ？」

優菜「ほんと、調子が狂わされるよ。まったく・・・」

優斗「なんかアイツだよな、ララだよな？ テンションが」

優菜「それだ」

公子「ララ？」

優菜「友達っていうか、ある世界の同居人で宇宙人」

公子「宇宙人・・・！そのうち会えるかな？」

優菜「さすがに難しいだろ」

ゆかり「・・・忘れる前に言っとくけど、起きて急で悪いけど今日理事長から話があるらしいの。放課後、寮の四階よ。忘れないでね」

優菜「昨日俺らが駄弁ってたところか」

ゆかり「そ、だから早めに帰ってね」

授業などはカット

昼休みに湊と公子に誰もいない場所で皆と同じことは言っておいた
そして放課後

即帰り先にラウンジへ

中にはテーブルの上にあタツシユケースが二つ

テーブルの左に三個椅子があり奥の椅子に真田先輩、テーブルの奥の大きい椅子に幾
月理事長、テーブルの右に詰めれば四人ほど座れるソファに桐条先輩が座っている

優斗「あ、どうも」

美鶴と明彦に会釈する

そして隅に立つ

明彦「・・・座ってもいいんだぞ？」

優菜「いや・・・なんか座りにくいですが、それに座ったらダメオーラが先輩たちから
溢れてるんで」

美鶴「何だそのオーラは・・・」

幾月「座っても大丈夫だよ」

美鶴の横に座る

ガチャ

ゆかりと湊、そして公子が入ってきた

幾月「お、來たか。身体の方は大丈夫そうで何よりだ。安心したよ。退院早々ここへ呼んだのは、他でもない。君に、話さなきやいけないことがあつてね。まあ、かけて」
ゆかりは優斗の隣に、湊は明彦の隣に、公子は湊の隣に座つた

幾月「あ、そうそう。前に名前だけは言つたと思うけど、彼が真田くんだ」

明彦「よろしくな」

幾月「さて……いきなりでアレなんだけど……実は、一日は24時間じゃない……なんて言つたら、君は信じるかい？」

湊「話が見えない」

美鶴「フフ、まあそうだろうな……しかし君達は、もう実際にそれを体験しているんだ。初めてここに來た夜の事を覚えてるか？あの日……君は色々と不思議な体験した筈だ。消える街明かり……止まつてしまふ機械……道に立ち並ぶ棺のようなオブジェ……薄々は感じたんじゃないか？自分が普通と違う時間をくぐつた事……あれは影時間……一日と一日の狭間にある隠された時間だ」

公子「隠された時間？」

幾月「隠されたというより、知りよしの無いものつてとこかな。でも影時間は、毎晩深夜0時になると必ずやつてくる。今夜も、そしてこの先もね」

明彦「普通のやつは感じられないってだけだ、皆俺桶に入つてお休みだからな。けど

影時間の一番面白い所は、見た目なんかじゃない」

明彦が立ち上がる

明彦「お前も見たる・・・怪物を、俺たちはシャドウと呼んでいる。シャドウは影時間だけに現れて、そこに生身で居る者を襲う。だから、俺たちでシャドウを倒す。どうだ・・・面白いと思わないか？」

美鶴も立ち上がる

美鶴「明彦！どうしてお前はいつも・・・」

優菜「ちよつと樂觀視しすぎじゃないですか？シャドウに殺されたホントに死ぬんですよ？しかも、シャドウが来た時に怪我したばかりじゃないですか。もつと慎重に動いてください」

幾月「ま、まあいいじゃないか。ちゃんと戦ってくれてるワケだし」

憮然とした顔で二人とも座る

幾月「結論を言おう、我々は特別課外活動部。表向きは部活って事になってるけど、実際はシャドウを倒すための選ばれた集団なんだ。部長は、桐条美鶴君。僕は、顧問をしている」

美鶴「シャドウは精神を喰らう。襲われれば、たちまち生きた屍だ。このところ騒がれている事件も、殆どが奴らの仕業だろう」

公子「事件？」

優菜「無気力症の事だよ、前に学校に入る前に校門の前で噂を聞いただろ？」

公子「あー『来る・・・来る・・・』ってやつ？」

優菜「そ」

湊「そんな敵と戦えるのか？」

幾月「実は、ごく稀にだけど影時間に資源に適応できる人間が居てね。そういう人間は、シヤドウと戦える力を覚醒できる可能性がある。それがペルソナ・・・あの時、君が使つて見せた力さ。・・・優菜君」

優菜「なんですか？」

幾月「確か14体のペルソナを使えるんだっただね？ここで全員出してもらえるかな？」

明彦「14体!？」

美鶴「それは本当か？優菜」

優菜「マジですけど・・・俺のペルソナめちやくちや喋りますよ？」

幾月「構わないよ、どういふペルソナがいるか知りたいんだ」

優菜「・・・みんな出てきて」

入口に並んで出てきた

イフリート「呼んだか？」

ヘル「夜中にどうしたのよ」

ウンディーネ「あれ？コレどういう状況かな？」

カオス「とりあえず面倒なのはわかる」

ホバル「面倒なのか・・・」

ガイア「まあまあ、とりあえず付き合つてあげましょうよ」

トラ「俺戻つていい？」

メーテイス「このまま戻つて優菜さん達に殴られる確率は64.3%です」

アウラ「微妙ですね・・・」

カマエル「一応、いた方が賢明かと・・・」

クロノス「もし戻つても私が連れて来るからな？」

アラメイ「よし、隅に隠れよう」

ミヅハノメ「何してるんですか？」

アリエル「とりあえず皆さん落ち着いてください」

明彦「・・・想像以上に賑やかだな」

優菜「めちゃくちゃ喋るって言つたじゃないですか」

幾月「これは暇しなさそうだね」

公子「個性が凄いな」

美鶴「羨はなつてないみたいだな」

優斗「羨けるものじゃないと思います・・・」

幾月「えーと・・・君達、ちよつといいかな？」

ペルソナたち「はい？」

幾月「とりあえず初めましてかな？僕は君達の・・・主人でいいのかな」

優菜「そこは決まつてないけど面倒だから仮で」

幾月「わかつたよ。主人が通つてる学校の理事長の幾月修司です。そして僕の右側の椅子に座つているのが桐条美鶴君、そしてもつと手前にいるのが岳羽ゆかりくん。そして僕の左にいるのが奥から真田明彦君、有里湊君、主人公子君だよ」

イフリート「もしかして挨拶だけか？」

幾月「いや、優菜君のペルソナがどういふ感じか見てみたいと思つてね。14人もいるという事はそれぞれ役割があるんだろう？それを教えてくれないかい？」

イフリート「・・・俺はイフリートつて言つて火の悪魔だ、能力はそのまんま火炎だ」

公子「火の悪魔・・・カッコいい！」

アリエル「私は大天使のアリエルです、回復をすることが多いですが攻撃する時は銃を使います」

明彦「回復か・・・大切なサポートキャラだな」

クロノス「私はクロノス、時の神だ。時間を操れる」

ゆかり「時間を止めるってチートじゃん！」

カオス「俺は空間の神力オスだ、指定した空間の全てを操れる」

美鶴「全てをか・・・無敵の空間を作れるというわけだな」

ヘル「私は死の女神ヘルよ、魂とかを触れたりするわ。だから殺したり生き返らせた
りできるわ、入れ替わりなんてのも・・・」

優菜「付け加えるところの中で一番じゃじゃ馬」

ヘル「一言余計よ！」

ガイア「私は創造神ガイアよ、人の作れるものなら何でも作れるわ。それ以上のものは用途によっては作ってあげるわ」

幾月「創造神・・・！応用力がどれだけあるかだね」

トラ「俺は破壊神のトラウイスカルパンテクトリ、名前が長いからトラって呼ばれる。なんでも破壊できる」

湊「・・・ミスして大事なものを破壊しないでくれ」

トラ「しないわ！」

アラメイ「俺は雷神アラメイ、能力は電撃を使える」

公子「雷神……という事は次は風神？」

アウラ「はい、風神のアウラです。能力は疾風を使えます」

美鶴「二人とも無難だが必要な力だな」

ウンディーネ「私はウンディーネ、水の精霊で水を思ったように操れるわ」

優斗「まあそれだけだったら特に使えそうに思えないが」

ミヅハノメ「私はミヅハノメ、氷神で能力は氷結です」

優菜「つまりウンディーネで水を相手にかけてミヅハノメで凍らせるってワケだ」

ホバル「俺は雨神のホバルだ、天気はいくらでも変えられる」

明彦「何!?なら雨が降ってる時に晴れにすればトレーニングできるじゃないか」

優菜「なんか真田先輩って何でもプロテインかけて食ってそうですね」

明彦「お、分かるか？」

優菜『マジかこの人……』

メーティス「私は知恵の女神メーティスです、皆さんのサポートをやっています」

ゆかり「なんか秘書みたいね」

公子「わかる」

カマエル「私は人を恐怖心から守る大天使カマエルです、皆さんのサポートをしています、皆さんのサポートをしますね？」

優菜「ということだ、少なくともこいつの前では悪口は言うな。殺されるぞ」

幾月「個性があふれてる方たちばかりだね。優菜君のペルソナは喋れるようだけど、少なくとも僕らのペルソナは喋らないけど、これがペルソナ。君たちが発現した力だ」

公子「めつちやカッコいいですね！」

湊「・・・大体の事は分かった」

幾月「飲み込みが早くて助かるよ」

美鶴が立ちテーブルの上のアタッシユケースを二つとも開く

中には湊と公子、二人の召喚器が入っていた

美鶴「要するに、君達に仲間になってほしいんだ。君達専用の召喚器m」

公子「いいですよ」

湊「別に構わない」

優菜「即答過ぎるだろ」

ゆかり「早すぎて驚いたけど・・・良かった。断るかと思つてたから・・・」

幾月「いや、感謝するよ、ホントに。ああ、そうそう。君達の寮の割り当てだけだね。

このまま今の部屋に住んでもらう事にしよう。偶然、のびのびになってたけど、こりゃ

ケガの功名だね、ハハハハ・・・」

ゆかり「偶然のびのびって、あれは・・・調子いいと言うか・・・いいけどさ、別に・・・」

優菜「割としよっちゅう振り回されたりしてそうだな・・・」

優斗「俺たちは振り回されるのに慣れてるから、別にどうってことはないけどな」

優菜「慣れて良いものかどうかは分からんけどな」

湊&公子「!？」

？・・・ああコミュカ

特別課外活動部は愚者だっけ？

幾月「それじゃあ、まず特別課外活動部新メンバー四人加入という事でいいかな？」

優菜「四人？それって俺たちも入ってないか？」

幾月「もちろんだよ」

優菜「いやまだ入るとは言っていないんだけど！」

幾月「いやくやくに協力的だからもう仲間に入るものかと・・・でもまあ、まだ言っていないって事は入る気はあるんだね？」

優菜「はあ・・・入りますよ、でもそのかわり危ない時だけ出ますからね？成長の阻

害はしたくないですから」

幾月「それで構わないよ、こっちも君達も入ってくれるのはありがたいからね」

ということとで特別課外活動部に入った

次の日、日曜なので優斗と一緒に勉強をした

ほとんど優斗に教えていたので勉強はそこまでできなかった

そして夜、下の階から呼ばれた

ゆかり「あのー、私だけど。ちよつといい？」

新メンバー全員が一階のロビーに集まった

扉の前に真田先輩が立っている

ゆかり「・・・あの、呼んで来ましたけど、どうしたんですか？」

明彦「わざわざ済まないな。ちよつと、紹介したい奴がいるんだ・・・おい、まだか？」

外に向かつて問いかける

聞き覚えのある声「ちよつと待って、重つ・・・」

公子「この声・・・！」

ガチャ

同じクラスで初日に言い寄ってきたアイツ・・・順平が入ってきた

ゆかり「えっ、順平っ!?!・・・なんであんたが、ここに!?!紹介って、まさか・・・」

明彦「2年F組の伊織順平だ。今日からここに住む」

順平「テヘヘ。どうもっス」

湊「前、校門で様子がおかしかったのはそのせいかな」

ゆかり「今日から住むって……うそっ!? 何かの間違いでしょ!」

明彦「この前の晩、偶然見かけたんだ。目覚めてまだ間もない様だが、彼にも間違はなく適性がある。事情は大体話したが、俺たちに手を貸すそうだ」

ゆかり「適性があるって……それ、ホントなの!」

順平「オレ、夜中に棺桶だらけのコンビニでマジベソかいてたらしくてさ。つか、正直あんま覚えてないけど、見られてみたいで……ハツズカシー! でもまー、なんつーか、最初のうちは仕方ないんだってさ。記憶の混乱とか、アリガチらしいんだよね。キミたち、そういうの知ってた?」

公子「私達は結構大丈夫だったけどね」

順平「え!」

優斗「湊に関しては動じなさすぎる」

湊「それを言うなら、あの子供の正体がいまだに分からないんだが」

ゆかり「それまだ言ってるの……? 私達もそんな子供知らないわよ」

優菜「……とりあえず、俺らが普通じゃないだけだ」

順平「俺……ああ、そういう男なんだって?」

優菜「……引いたか?」

順平「いや、むしろ男だったら話しやすいから嬉しいぞ」

優菜「やっぱお前バカだろ」

順平「何でだよ！」

優菜「いやー・・・どこにでもバカはいるんだなーって」

明彦「じゃあ他のバカはどんな感じだったんだ？」

優菜「アイツらはバカなりに色々考えて行動力だけはあつてな、いつつも切り込み隊長やつてたよ。そして俺らがほとんど尻拭いしてた」

優斗「まあどっちもムードメーカーだけだな」

順平「なんかすっごい悪口言われてるみたいなのがするけど・・・別にいいか！」

優菜「ほら、こういうところ」

順平「・・・でもさ、正直言うのと驚いたぜ？お前らも、そうだって聞かされた時はさ・・・でも、知ってる顔が居て良かったよ。一人じゃ、不安だったしな」

優菜「逆にほとんど知った顔だけだな」

順平「ま、お前らも、俺っちが仲間んなって、ホントんとこ、嬉しいだろ？」

ゆかり「え？」

順平「え？」

公子「私は嬉しいよ！」

湊「僕も順平が仲間になるのは心強いよ」

優斗「精神的にも戦力的にもな」

優菜「・・・まあ戦力が増えるのは嬉しいことだ、けど危機感を持つてよ？危なかったら呼べ、一瞬で行つてやる」

順平「お、おう。色々ありがとな」

明彦「それじゃあ後はよろしく頼むぞ。よし・・・大体戦力も整つてきたな。これで、始められそうだな」

順平「おつ！早速なんか始まるんすか!?!なんかワクワクするっス！」

優菜「・・・緊張感を持つてと言つたばっかだぞ」

明彦「これだけ頭数が揃えば、あの場所に挑める」

ゆかり「あの場所つて・・・タルタロスですよね・・・」

優菜「まあ、行つても問題はないだろうな。もし何かあつてもそんな時は飛んでいく」

順平「タル・・・？なんすか？ソレ」

明彦「影時間の謎を解くカギがある場所だ・・・恐らくな」

ゆかり「謎を解く鍵・・・か」

優菜「場所は現実の時間の学校だ」

明彦「まあ、明日の夜、理事長から詳しい説明がある。そのつもりで準備しておいてくれ」

優菜「とりあえず、部屋まで案内した方が良いんじゃないですか？」

明彦「それもそうだな、それじゃあついて来い」

順平「ちよ、ちよっと待って下さいよ。結構重いんですから」

優菜「・・・イフリート、持ってやれ」

順平「うおっ!?!誰だ!?!」

優菜「俺と優斗のペルソナだよ」

イフリート「ほらっ貸せ」

優菜「口は悪いがいい奴だぞ」

順平「そうか、とりあえずよろしく!」

荷物を渡す

そしてイフリートが先に荷物を持って行った

優菜「男の部屋は二階だからな」

イフリート「分かってる」

順平「なあ」

優菜「どうした?」

順平「いっつも荷物持たせてるのか?ペルソナって執事みたいな感じで使えるのか

?

優菜 「いや俺と優斗のペルソナだけだ、今まで俺たち以外いなかった」

順平 「そうか・・・」

優菜 「・・・必要な時は貸してやるよ」

順平 「おっそうか！ありがとな！」

優菜 「調子のいいやつだな・・・」

公子 「それじゃあまた後で集まる？」

順平 「そうすつか！それじゃあロビーで待っててくれ」

その後・・・順平が下りてくることはなかった・・・

なんてことはなく普通に降りてきたので順平が持ってきたUNOでラウンジでUN

○中

ルールは二枚だしあり、最後の一枚はワイルドドロフオーでもOK。

他？何かがある？ゴメン分からん

順平 「理解しようとはしてるんだが、未来人ってマジかよ・・・あ、そこスキップ」

優菜 「まあ、それが普通の反応だよ」

優斗 「でも最低でもこいつの弱点ぐらいは教えた方がいいか？赤の6」

ゆかり 「え、何ソレ弱点とかあるの？緑の6ね」

公子 「えー、知りたい知りたい！緑の1！」

湊「弱点は知っておいた方が良い。黄色の1」

順平「それって戦いとかの話？黄色の5」

優菜「いや、こいつの事だから絶対ちげえ。黄色の0」

優斗「こいつの弱点はな？黄色の9」

ゆかり「早く言いなさいよ。黄色のリバーズ」

優斗「前にホラーはダメって言ったよな？黄色の3」

優菜「お前どれ言うつもりだ？青の3」

順平「それでそれで？青のリバーズ」

優菜「変なこと言ったら速攻でカオスの空間にぶち込むからな。青の4」

優斗「コイツ宇宙人の時にサイヤ人つてのになつたんだが、それでしつぽが生えてよ。

サイヤ人つてのはシッポは鍛えないと掴まれたら全身の力が抜けるんだ。ドロツ

(2)

ゆかり「え、でもそれだったらペルソナ使えばいいんじゃないの？はいドロツ(4)」

公子「召喚器無しで出せるんならそれで大丈夫よね？ウノ、ドロツ(6)」

湊「他に弱点は？ドロツ(8)」

順平「流石に一個じゃないだろ？ドロツ(10)」

優菜「まあ、他にも何個かはあるけど。ウノ、ドロツ(12)」

優斗「後は、口を閉じられたらペルソナを出せねえな。ドロツー（14）」

ゆかり「ていうかすごいドロツー繋がるね、ドロツー（16）」

公子「ギヤアアアア!!!・・・引きます」

順平「一枚から一気に17・・・ヒエッ恐ろしい」

湊「というか皆気づいてないかもしれないけど、優菜も後一枚。ワイルドカード、緑」

順平「よし！ワイルドドロフオー！それとウノだ！」

優斗「よし、とりあえずこれでしのげるな」

優菜「なあ、お前ら」

公子「なに？どうかした？」

順平「まさか・・・！」

優斗「アレを残してるのか!？」

優菜「無敵って知ってる？」

ドロフオーを出す

ゆかり「マジ!？」

湊「・・・」

順平「マジかよ・・・よく最後まで残したな」

優菜「魔法で運上げといたからな」

公子「魔法!？」

優斗「うわっズリイな・・・」

湊「そろそろ寝ないと」

順平「そうか」

UNOを片付け持っていき

順平「じゃあまた明日な」

上にながっていった

優菜「それじゃあまた」

部屋に戻った

そしてカオスの空間（物置）の整理をし

ベッドの上に使っているものを並べる

コンコン

優菜「?誰だ?」

扉を開けると

順平「よ、よう」

優菜「どうした?」

順平「とりあえず入っていいか?」

優菜「いいぞ」

中に入れる

順平「な、なんだこれ・・・銃？召喚器つてやつじゃなくて？」

優菜「それは別の世界で使ってるんだ、下手に触るなよ？弾出るから」

順平「本物かよ・・・」

全部カオスの空間（物置）に直す

優菜「それで？女子の部屋に來た感想は？」

順平「ハッキリ言つて女子感無いな」

優菜「だよね〜」

順平「用事はな？・・・その・・・しつぽつて結局見てないだろ？」

優菜「ああ、優斗以外は見てないな」

順平「それがよ、氣になつて氣になつて眠れねえんだ」

優菜「・・・お前結構可愛いとこあるな」

順平「だから頼む！見せてくれないか？」

優菜「そんぐらいなら別いいけど、掴むなよ？」

順平「弱点だからだよな？分かつてる」

優菜「よし、じゃあ魔法を解くぞ」

しつぽを隠してる魔法を解く

順平「これは・・・サルのしつぽか？」

優菜「なんだ？犬とか猫とかのしつぽ期待してた？」

順平「・・・少し・・・キツネとか」

優菜「・・・ごめんな、でもサイヤ人は全部これなんだ。だが諦めるのは早いぞ」

順平「どういふことだ？」

優菜「変身魔法を使えば・・・」

ポンッ

順平「おわっ！」

優菜「・・・よし、どうだ？」

順平「狐のしつぽ？本物か!？」

優菜『思った以上にデカくなっちまった』

順平の頭縦3つ横2つ奥ゆき2つぐらいの尻尾になった

優菜「ほれほれ、触りたいか？」

順平「た、頼む！」

優菜「・・・わかった、いいぞ」

スリスリ

順平「あく……こんなデカイモフモフ触ったのは初めてだぜ……」

優菜「こっちは慣れてないから……ちよつとゾワゾワする」

順平「こういう枕が欲しい（切実）」

優菜「とりあえず一回放そうか……」

順平「もうちよつといいか……?」

優菜「お前寝かけてない?」

順平「ふう……ぐう……」

優菜「やつぱり寝てるし!」

順平「ぐう……」

優菜「起こしちや悪いか?……よし」

カオスの空間でしつぽが順平の横に行くようにして順平は部屋に連れてった

翌朝

優菜「朝か……そろそろ起きないと……!?力が……入らない……!?」

その頃の順平

順平「ぐう……」

寝ぼけて優菜の尻尾を掴む順平

そして昨日やった事を忘れ金縛りにあつたのかと驚く優菜

7時頃に昨日のことを思い出し、イフリートに順平を起こさせた

その後寝落ちしたことで、思いっきり掴まれたことを謝られ

仲間じやなかったら殴ってたかもと思つた優菜であつた

しつぽは戻して隠した

そして皆で登校中

ゆかり「順平は昨日夜中に優菜の部屋に何しに行つてたのよ」

全員が振り向く

順平「え！いや・・・その・・・」

優菜「・・・昨日俺の尻尾の話しただろ？それで気になつて眠れなかつたんだと」

公子「じゃあ見せたんだ・・・」

優菜「うん・・・え？どうかした？」

公子「どんなしつぽだった？」

順平「サルのしつぽだったよ」

湊「猿か・・・」

公子「お猿さん・・・」

優菜「お猿さんやめい」

ゆかり「皆もうちよつと声のトーン下げてくださいない？」

優斗「ちよつとうるさいぞ」

話好きの生徒「おはよ。月曜は眠いよねえ・・・」

背中を向けている生徒「同感。一限は寝るしかないよね・・・つて、あ！明日、朝礼
じゃん！」

優菜「もし寝たらペルソナに起こさせるからな」

優斗「他の人には見えないからな」

そして昼休み

ゆかり「あー、ねむ・・・マジ、寝ちやうかと思つた・・・」

優菜「一人も寝なかつたみたいだな」

ガラガラ

教室に美鶴先輩が入ってきた

美鶴「ちよつといいか。今日、帰つたらラウンジに集合してくれ。全員に伝えること
がある」

順平「お、例の話つスね？」

美鶴「詳しい説明はその時にな。じゃあ、伝えたぞ」

去つて行つた

順平「ほんつと、用件だけ言つて去つてつたな・・・」

ゆかり「私達と違って、忙しいんでしょ？生徒会とか、そういうのでさ」

順平「え・・・あれ？ゆかりツチって・・・桐条先輩の事嫌い？」

ゆかり「別に・・・嫌いじゃないけど」

優菜『にしては随分言葉が尖ってる気がするな・・・まあ今は触れないでおこう』
放課後、すぐに寮のラウンジへ行こうとする

優菜「何してんだ？さっさと帰るぞ」

順平「いや、速えよ！お前陸上でもしてたのかよ！」

優菜「中学までサッカー部やってた、でも戦う時はこれ以上に走ると思うぞ」

順平「マジかよ・・・」

公子「これ以上に・・・？」

湊「死と常に隣りあわせならそれぐらい走るだろ」

ゆかり「むしろ順平は楽観視しすぎ」

順平「ぐ・・・」

優斗「もつと頑張れよ！順平」

優菜『また今度鍛えてやるか・・・真田先輩に任せてもいいかもな』

ヒユウウウ

サツ

野球ボールが飛んできたから避けようとする

バシッ

優斗が止めようとして打ち上げる

優斗「すまん、ミスった」

優菜「大丈夫だ、どけ」

野球部員がいる場所を確認し野球ボールをポレーシユートで返す

丁度野球部員の所に飛び、キャッチする

野球部員「え・・・あ、ありがとうございます！」

順平「・・・マジか今の・・・」

ゆかり「強豪とかにいたりしたの・・・？コントロール？が凄くなかった？」

優菜「そんぐらいなら県一ぐらいなら出来なくはねえ」

優斗「県大会優勝ぐらいはしてたからな」

公子「県大会って結構すごくない!？」

優菜「まあその次の九州大会は負けたけどね」

湊「その身体能力で・・・？」

優菜「あん時はまだ普通の学生だったから」

そして夜、寮のラウンジ

幾月「よし、全員来たようだね。ちよつと聞いてほしい。我々の擁するペルソナ使いは、長い間、桐条君と真田君の二人だけだった。けど最近とんとん拍子に仲間が増えて、今や8人にまで増えてる・・・そこでだ。今夜0時から、いよいよタルタロスの探索を始めようと思う」

順平「あの、昨日も聞いたんすけど、タル・・・なんとかって、ソレなんすか」

ゆかり「タルタロスよ。てか順平、あれマジ見た事ないの？」

順平「ハテ・・・？」

優菜「まあ、最悪ちびんな」

順平「なっ!!?もうしねえよ!!」

幾月「まあ、見てなくても不思議はないさ。何せタルタロスは、影時間の中にだけに現れるからね」

順平「影時間の中だけ・・・？」

明彦「シャドウと同じって事さ・・・面白いだろ?それに、俺たちのスキルアップにもうつてつけの場所だ。あそこは言ってみればシャドウの巣だからな」

順平「お、おお・・・シャドウの巣っすか」

ゆかり「ていうか、先輩・・・その体で行くんですか?」

美鶴「晶彦は怪我が治ってない。同行はしてもらうが、探索は無理だ」

明彦「……分かってるさ」

優菜『すっごい残念そう』

幾月「まあ、深入りしなければ、真田君抜きでも大丈夫だろう。シャドウを相手にしていく以上、タルタロスの探索は避けて通れないからね」

順平「先輩の分は俺がバッチリ、カバーしますって！」

ゆかり「なんか不安だな……」

美鶴「理事長は、どうされますか？」

幾月「僕はここに残るよ……どうせホラ、ペルソナ出せないしき……」
そして移動中

優菜「どうせタルタロス行ってもお前らに戦わせたいから俺たちは戦わんけど、途中で出たら倒してやるよ。ここで消耗したくないだろ」

優斗「でもどうせワンパンだろ」

シャドウ「ガアアアア！」

優菜「早速出たか、よしじゃあこの中でおそらく一番戦歴の長い俺が行っていいかな？」

優斗「すぐ終わらせろよ」

シャドウが襲いかかってくる

優菜「アリエル」

バババババババババ

ゆかり「全部避けてる!？」

優斗「アリエルはスキル極・物理見切りを持つてる、まあ動体視力もあるだろうがな」
そして盾の勇者の成り上がり時の時、移動中暇だったので作った

アレをカオスの空間から取り出す

優菜「バイバーイ」

ガッ

シャドウの口らしき部分に押し込み逃げる

そして

ドーン

優菜「手榴弾の味はどうか？まあ美味しくはないだろうけどね」

優斗「それは使わない方がいいだろ、下手したら欠片とか残るぞ」

優菜「まあ、これからだから」

周りからどんだんシャドウが出てきた

明彦「流石にこの数はマズいか？」

美鶴「くっ……応戦するぞ！」

優菜「いや、皆は消耗したらダメだから、ここはオレと優斗に任せな。真田先輩は大丈夫な範囲で援護してください」

優斗「なら全員出すか？」

優菜「皆がスキル使ったら速攻でSP尽きるわ、前もやって倒れた・・・というか落ちただろ？普通にやるぞ」

優斗「普通について・・・いつも普通じゃねえだろ」
パン

優菜「じゃあいつも通りだ」

優斗「OK」

ババババ

気弾をシャドウが集まってる場所に撃ち

シャドウを消し飛ばす

優斗「イフリート、大炎上」

ゴオオオオオオオ

優菜「カオス、俺たちの周り半径50mの敵を全て固定。ヘル、残りの敵全部にデビルスマイル。そして亡者の嘆きだ」

シューアアア

優菜「これでいいかな？」

優斗「索敵魔法使え」

優菜「・・・いなさそうだな」

順平「俺たちいるか？」

ゆかり「確かに・・・アイツらだけでシャドウ殲滅しそう」

優菜「言つとくが、タルタロスにはお前らだけだからな？」

そして月光館学園の校門まで来た

明彦「・・・そろそろ0時だな」

優菜「順平ちびんなよ？」

順平「しねえよ!・・・多分」

優菜『そういうや、生で見るのは初めてだな』

優斗「あと三秒で0時だ」

3・・・2・・・1

すると学校が縦に伸びていき、中や周りから様々な物が飛び出してきた

そして結果高層ビル程、いやそれ以上に高く大きい塔になった

美鶴「これがタルタロス・・・影時間の中にだけ現れる迷宮だ」

順平「メーカーキューって・・・なんなんだよ、それ!?俺らの学校、どこいつちまったん

だよ!？」

美鶴「影時間が明ければ、また元の地形に戻る」

順平「こんなデカイ塔が、丸ごとシャドウの巣つて……てか、オカシイつしよ!？」
んだつてウチの学校んトコだけ、こんな……」

美鶴「……」

順平「先輩達にも……分からないんスか?……じゃあ優菜は……」

優菜「それが分かつてたら言つてる」

ゆかり「きつと色々あるんでしょ……事情が。いいじゃん、別に。知らなくたって
私達は戦えるワケだし」

公子「でも気になるな」

明彦「分からなきや、調べればいい。ここを本格的に探索するのは、俺や美鶴にとつても今夜が初めてだ。ワクワクするだろ?どう見たつて、ここには絶対何かある。影時間
の謎を解く、鍵になるものがな」

美鶴「明彦。意気込むのは勝手だが、探索はさせないぞ」

明彦「う、うるさいな……何度も言うな」

皆の後ろから中に入る

目の前には階段、その先には迷宮への入口があり

右には謎の機械

左には時計とベルベットルームの扉がある

順平「おお・・・中もスゲエな・・・」

ゆかり「でも、やっぱり気味悪い・・・」

優菜「まるでメメントスだな」

公子「メメ・・・？」

公子が優菜たちを見ると

公子「!?変身してる・・・！」

優菜「え？」

順平「黒ローブ？いつの間に着替えたんだ？」

優菜「あく・・・怪盗服か・・・」

湊「怪盗服？」

優菜「未来で怪盗やってるっていったら？シャドウが出る場所に行ったら勝手にこうなる」

明彦「・・・動きにくそうに見えるがどうなんだ？」

優菜「見た目より動きやすいですよ。簡単に言えば戦闘服みたいな感じですよ」

美鶴「ともかく、ここはまだエントランスだ。迷宮は、階段の上の入口を抜けてから

さ」

明彦「まずは慣れてもらおう。今日の探索はお前達四人で行ってこい」

ゆかり「えっ!? 新人だけでですか!？」

美鶴「深入りさせるつもりはない。それに、必要な情報は、私がここから通信でナビゲートする」

順平「つまり、先輩たちは元々来られない、と・・・」

明彦「そういうことだ。それとな、現場でのチーム行動を仕切るリーダーを決めておこうと思う」

順平「リーダー? それ、つまり探検隊の隊長!? ハイ、ハイハイッ! オレオレッツ!!」

明彦「・・・有里。お前がやれ」

順平「なんでっすか!?! こいつ、体長っぽくないっしょ?」

ゆかり「あのね、彼はもう実戦経験者なの」

順平「えっ・・・マジ?」

公子「それなら私もだけど・・・まあ、何事にも動じない湊の方が適任かな」

明彦「確かにそれもあるが、選んだ理由はもつと簡単だ。順平。それに岳羽もだが・・・」

明彦が召喚器を取り出し頭を銃口を向ける

明彦「ペルソナの召喚、アイツのようにちやんと出来るか？」

順平「も、勿論ツス！バツチリ、決めますって！」

ゆかり「私も、大丈夫です」

公子「私も大丈夫、いつでも撃てます」

明彦「相手はシャドウだ。出来なきや話にならないぞ」

ゆかり「はい、分かっています」

湊&公子「！」

ベルベツトルームの扉に気づいたか

二人ともベルベツトルームの方へ行く

二人で行って行った・・・様に俺達からは見えるんだが

美鶴「二人ともどうしたんだ？いきなり隅に行ったかと思ったら、二人して同じとこ

ろを見つめてるが・・・」

優斗「・・・ベルベツトルーム？」

優菜「そーだねー・・・待ってれば戻ってくるよ」

順平「ベル・・・何て？」

美鶴「ベルベツトルームとは何だ？」

優菜「夢と現実、精神と物質の狭間の場所。まあ、簡単に言ったら不思議な部屋だな。

行ったことがある、それだけだ」

優斗「何で確信できるかって言うと、外から故意的に入ったらあんな風にぼーっとして
るみたいになるからだ」

ゆかり「え？結局どういう場所なの？」

優菜「ペルソナ諸々のお手伝い、強化とか」

明彦「そうか・・・俺達は入れないのか？」

優菜「どこかで契約をしないと入れないから諦めてください」

順平「契約!?どっかでアイツらそんなことしたのか!？」

優菜「・・・俺が知るか」

優斗『まあ来た日の子供だろう、契約は契約だから的な事言ってたし』

優菜『ワイルドの事は今話していいのか・・・?』

湊達が戻ってきた

優菜「さ、戻ってきたから行つといで」

公子「・・・?」

優菜「・・・?どうかしたか？」

公子「あの鼻の長い人、何でああいう言い方なんだろうって思つて」

優菜「・・・さあ?それは分からん」

湊「さつきの人を知ってるのか？」

優菜「入ったことがある、それだけ」

公子「それじゃあ、先輩・・・なのかな？」

優菜「時代的にはお前らの方が先輩ちゃ」

順平「ちゃ・・・？」

優菜「・・・今のは忘れる。ほら！さつきと行け！何かあったら助けるから！」

四人とも入って行った

優菜「・・・方言が出た、一番最初の世界の・・・」

優斗「お前どこ出身？」

優菜「福岡の北九州市」

優斗「・・・どこ？」

優菜「福岡の上の方にあるんだよ」

美鶴「お前達も楽しんでいいぞ、何かあった様だったらすぐに呼ぶ」

優菜「はい」

隅に座る

優菜「さて、どうしたののかな」

優斗「どうせやることもないんだ、組手でもするか？」

優菜「まあ二階ぐらいなら消耗しても殴れば倒せるしな」

優斗「じゃあ、ペルソナ無し変身無し武器無しでやるぞ」

優菜「そうだな、やろう」

やりあつてたら

美鶴「どうした!?!何があつた!」

優菜「!?!」

近付く

優菜「どうしたんですか!?!」

美鶴「わからない・・・突然鎖のような音がしたと連絡があつた瞬間誰かが攻撃された音がした」

優斗「刈り取るものか!」

優菜「行くぞ!」

カオスの空間を繋いで行くと

ゆかり「なにコイツ!凄く強い!」

優菜「お前ら!そいつはダメだ!今すぐ逃げろ!」

公子「優菜ちゃん!?!」

刈り取るもの「・・・」

優菜 「とりあえず皆その穴に入れ！先輩たちの所に繋がってる！」

順平 「だ、大丈夫なのかよ！」

優菜 「俺も勝てるかどうかは分からねえ！だから急げ！」

優斗 「こいつはあつたら即逃げるのが定石だ、足も遅いからな」

湊 「皆走れ！」

ドウ

シュインシュインシュイン

公子 「あれが変身・・・！」

ゆかり 「ちよつと、早く！」

ドガア

優菜 『全然効いてない・・・』

パアン

ガードするが弾が来ない

優菜 「まさか！」

順平の方に弾が行くのが見え

シュンツ

ドオン

優菜「ガハツ・・・！」

順平「！おい！大丈夫かよ！」

優斗「心配だったら早く逃げろ！」

順平「っ・・・！」

パアン

優菜「ぐ・・・ヘル！」

タアン

食いしぱり発動

優斗「皆はもう戻ったぞ！戻った方が良くないか!?」

優菜「そう・・・だな・・・クロノス、ザ・ワールド」

ギューン

優菜「よし・・・戻る・・・ぞ」

優斗「運んでやるから道を開けてくれ」

優菜「カオス」

一階に戻った

優菜「時を動かせ」

時間の進みが戻る

順平「おわっ!?いつの間に戻ってきたんだ!」

明彦「大丈夫なのか!?その怪我は・・・」

優斗「アリエル、メシアライザー」

ペアアア

優菜「はあ・・・」

湊「もう大丈夫なのか?どうやって一瞬で戻ってきたんだ?」

優菜「時間を止めた、初日でアイツに会うなんて災難だったな。逆に運がいいぞ、アイツ以上に強い奴はいないからな。いい経験になったはずだ」

美鶴「まさかそんな奴がいるとは・・・」

優菜「アイツはそうそう会える奴じゃないですけどね、まあ合わないのが一番ですけど」

明彦「流石に遭遇したらすぐに逃げた方がよさそうだな」

公子「それよりあの変身は何!?何で金髪!」

優菜「ああ・・・説明は後で」

公子「ええ」

優菜「順平、どう思った?あれと遭遇して戦意喪失したか?」

順平「え?そ、そんなわけないだろ!・・・俺はまだ戦える」

ゆかり「私も、これぐらいで落ち込んでなんかいられないわ」

湊「皆大丈夫そうだね」

優菜「公子に關してはむしろ興奮してるし」

公子「早く変身のこと教えてよ」

優斗「確かに大丈夫そうだな」

美鶴「だが最初から先に進む予定はなかったからな、今日はもう引き上げる」

順平「へい、分かりました」

帰る途中で

順平「・・・くそっ・・・なんでだ？」

優菜「どうかしたか？」

順平「いや、なんかミョーに体がシンドいんだ・・・」

ゆかり「単なるハシヤギ過ぎなんじゃないの？」

順平「んなこと言つて・・・ゆかりツチだつてもろバテ気味じゃんか」

ゆかり「バテるつてか、なんか息苦しいような・・・なにコレ」

美鶴「それは影時間のせいだ。平時よりもずっと早く体力を消耗するからな。心配ない、じき慣れる。しかし、想像してたよりも、行けそうじゃないか。明彦も、うかうかしてられないな」

明彦「フン、ぬかせ」

公子「ていうか早くあの変身説明してよ！」

優菜「・・・超サイヤ人って言うんだよ、まだ変身のバリエーションはある」

公子「見たい見たい！」

優菜「えー・・・（ハハ）ヤダ」

公子「なんで!？」

優菜「疲れるから、戦う時以外使いたくない」

公子「そっか・・・それじゃあ優斗君は？」

優斗「何でそこで俺が？」

公子「覚えてるよ、病室にいる時に優斗も変身できるって紙に書いてたでしょ」

優菜「・・・また今度にしてやれ」

公子「えーそつちもダメ？」

優菜「ダメd」

ガッ

優菜『ヤベツ足引つ掛けた』

優斗「つと、大丈夫か？」

お腹を支えられこけるのを止められる

優菜「あ、ああすまん」

優斗「足元気をつけろよ」

優菜「分かってる」

公子「ほぅう・・・？」（小声）

帰って寝た

第百十六話（ペルソナ4に来た『第二話』より）

朝起きると

ウウウウウウウウ

パトカーのサイレンが聞こえる

色んな世界行きすぎてどの世界か分からんな

・・・ペルソナ4かな・・・？

えつと・・・

そうだ！今日また死者が出るはずだったんだ

見つけたのかもしれないな

優斗「おはよー・・・」

優菜「うん・・・行くか」

登校中

優菜「ん？・・・悠か」

悠「おはよう」

優菜「おはよー・・・」

優斗「……さつきからなってるサイレンは死体が見つかったんだろうな」

悠「……そうかもしれないな」

優菜「とりあえず、学校に行かないと」

午後・体育館

噂好きな女子生徒「昨日さ……見た？」

ロングの女子生徒「見ないって、あんなの。けど、あの話ってマジなの？」

噂好きな女子生徒「分かんないけど、なんか見たって人、割といるみたいだよ」

噂話が聞こえる

千枝「雪子、午後から来るって言ったのに……何だろ、急に全校集会なんて」

優菜「十中八九はこの前のキャストの殺人事件だろうな。それか……学校関係者

が今日の死者か……」

里中「……ってアレ？花村どしたの？」

陽介「ん？いや、別に……」

女性教師「えー、皆さん静かに、これから全校集会を始めます。ではまず、校長先生

の方からお話があります」

校長「今日は皆さんに……悲しいお知らせがあります。三年三組の小西早紀さんが……

亡くなりました」

千枝「な、亡くなった．．!?」

陽介「．．．」

校長「小西さんは今朝早く、遺体で発見されました．．．小西さんが何故、亡くなったのか、警察の方々が捜査してくださっています．．．協力を求められた時は、我が校の生徒として、節度ある姿勢で応じてください」

ざわざわ．．．

ざわざわ．．．

校長「えー、静かに、静かに．．．それから、先生方からは、いじめなどの事実はないと聞いています。くれぐも、軽い気持ちで街頭取材などを受けたりしない様に．．．」

千枝「遺体で発見って．．．そんな．．．」

陽介「．．．」

校長の話が続く

教室に戻る時

噂好きな女子生徒「超ビビったよねー。死体、山野アナンときと同じだったんでしょ？」

女子生徒の連れ「前はアンテナだったのが今回は電柱らしいじゃん。連続殺人つてことだよな」

噂好きな女子生徒「死因は正体不明の毒物とか、誰か言ってた」

女子生徒の連れ「正体不明って……そりやちよつとドラマの見すぎだつて。そう言えばさ、例の夜中テレビで早紀に似てる子が映ったらしーよ。超苦しがつてたとかつてー、怖くない？」

噂好きな女子生徒「ハハ、そつちこそ絶対ユメだつて。今マスコミとかめつちや来てるし、取材でも受けて影響されたんじゃーん？」

スタスタスタ

千枝「つたく、他人事で好き勝手言ってるよ……」

陽介が歩いてくる

陽介「なあ……お前ら、昨日、あの夜中テレビ見たか？」

千枝「あのさ、花村まで、こんな時に何言ってるの!？」

陽介「いーから聞けつて！俺……どうしても気になつて見たんだよ。映つてたの……あれ小西先輩だと思う。見間違ひなんかじゃない。先輩、なんか苦しそうに、もがいてるように見えた……それで……そのまま画面から消えちまった」

千枝「なによそれ……」

優斗「あのテレビに映つた奴は死ぬんだろうな、山野アナも映つてたらしいな」

優菜「殺されたんだろうよ。あのテレビの世界で」

陽介「言い切れないけど・・俺もそうじゃないかって思ってるんだ。あの世界のクマが危ないとか霧が晴れる前に帰れとか・・確か、誰かが人を放り込むとも言ってた。だからよ、もう一回あの世界に行こうと思うんだ」

千枝「またあそこに行く気なの!?!死にかけたんだよ!?!」

陽介「でも、もし繋がりがあつたら先輩と山野アナも、あの世界に入り込んだのかもしれねえ」

千枝「でも人が死んでるんだよ!?!私達じゃどうにもできないって、ここは警察に任せた方が・・」

陽介「警察とか、アテにしていいのかよ!山野アナの事件だつて進展なさそうじゃなか!第一、テレビに入れるなんて話、まともに取りあうわけねーよ!全部見当違いなら、それでもいい・・いや、むしろそうであつて欲しい・・でも、先輩が何で死ななきやんなかつたか、自分でちゃんと知つときたいんだ・・」

千枝「花村・・」

陽介「こんだけ色んなもの見て、気づいちまって、なのに放つとくなんて、出来ねーよ・・悪イ・・けど頼むよ。準備して、ジュネスで待つてっからさ・・」

ダツダツダツダ

優菜「私らは行くけど、お前らはどうすんの?」

悠「一緒に行こう」

千枝「ま、まじで・・・？」

優斗「なら急ぐぞ」

ダダダダダダダダダ

シユタタタタタ

千枝「速っ!!」

優斗「先行ってるから」

シユタタタタタ

陽介「つてうおおお!!速いなおい！」

優斗「ペルソナが使えない奴だけで行かせるわけにはいかねえからな」

優菜「手伝ってあげるよ」

陽介「・・・正直助かる！」

ジェノス・家電販売スペース

ダダダダ

陽介「お前達も来てくれたのか・・・！」

優菜「遅いぞ」

千枝「あんた達が速いのよ！」

優斗「とりあえずどうするんだ？早速入るのか？」

陽介「ああ、前と同じところから入ったらクマの所に行けるかもしれねえと思つてな」

千枝「そんなの、なんも保証無いじゃんよ！」

陽介「けど他の奴らみたいに、他人事つて顔で盛り上がつてらんない」

千枝「そう、だけど・・・」

陽介「お前は どうする？このまま放つておけるのか？」

悠「放つておけない」

陽介「そうだよな。うん・・・よかつた。お前がそーゆーヤツでよかつたよ。心配すんなつて、ちゃんと考えはあるんだ。里中は、コレ頼む」

千枝「え？なにそれ・・・ロープ？」

陽介「俺ら、これ巻いたまま中入るから、お前、端っこ持つて、ここで待つててくれ」

千枝「な、なにそれ、命綱つて事？ちよ、ちよつと待つてよ・・・」

陽介「鳴上。お前には、これ・・・渡しとく」

悠「ゴルフクラブ？とこれは薬か」

優斗「ないよりマシつてことか」

優菜「私達はもう武器は持つてるから大丈夫だよ」

陽介「よし・・・じゃあ、行こうぜ。ぐずぐずしててもしょうがないからな。里中、ロー

プ放すなよ！」

スタスタ

千枝「ちよつと待つてつてば！」

テレビの中に入る

グワアアアン

ドサツ

スタツ

陽介「いつててて・・・」

優菜「大丈夫か？」

手を貸し悠と陽介を立たせる

悠「ここは・・・？」

優斗「前と同じ場所っぽいな」

陽介「ほらみる！ちやんと、場所と場所ですながつてんだ！」

クマ「キ、キミたち・・・何で來たクマ・・・」

優菜「おおクマか、昨日來た時に手遅れのやつがいるって言っただろ？そいつが
そつちの茶髪の陽介が好き先輩でな。それでこの世界が關係してると思ってきたん
だよ」

クマ「そうだったクマか・・・でもココは一方通行！入ったら出られないの！クマが出してあげないと出らんないの、味わったでしょーが！」

陽介「うるせー、関係ねーだろ！お前の力なんて借りなくてもな、見ろ、今日はちゃんと命綱を・・・おあつ！」

優斗「バツサリと切れてるな、先が」

陽介「テ、テメー、調べが済んだら、こつから俺たちを出してもらおうからな！」

クマ「ムツキー！調べたいのは、こつちクマよ！クマずつとここに住んでるけど、こんな騒がしいこと、今までなかったクマ」

優菜「ならこうしましよ、お前が帰り道を保証してくれるんなら私たちは調べてあげるわ。ギブアンドテイク、取引よ？」

クマ「こつちもそれで構わないクマ」

優斗「ていうかそろそろ女言葉やめろよな、男なんだからよ」

陽介&クマ「エツ!？」

優菜「それもそうだな、口調変えるのダルイしちよくちよくミスって素が出るし」

悠「本当だったのか・・・凄いな」

優菜「言つとくけど男の娘じゃなくて中身が男だからな？」

陽介「体は女って事か・・・？」

優菜「そういうことだ、変な薬飲んだらこうなっちゃったけど「まあいいか」みたいな感じになつてな」

陽介「反応が軽いわ！もつと真剣に考えろよ!!」

優菜「とりあえず、入れられた奴が消えた場所まで連れていったりできるか？証拠まで行かなくても手掛かりぐらいいはあるかもしれない」

クマ「出来るクマ、この前消えた人間でしょ？」

陽介「小西先輩の事か！」

クマ「案内してやるクマ、でもその前に」

メガネを取り出す

クマ「四人ともこれをかけるクマ」

優菜「俺達仮面あるんだけど」

クマ「それはどうにかして欲しいクマ」

優菜『・・・仮面の下にかけるか』

かけると周り霧が無くなりクリアに！

陽介「うお、すつげえ・・・こないだと視界が全然違う。かけてると、濃い霧がまる

で無いみたいだ」

優菜『スペクテッドでもいけるがあれは疲れるからな、こっちのが移動する分は楽だ』

クマ「クマに出来るのは案内だけだから、自分の身は自分で守ってほしいクマ」

優菜「最悪俺たちがぶっ潰す」

陽介「めちやくちや頼りになるな！頼むぞ!!」

悠「そろそろ行こう」

優斗「だな」

クマの案内に沿って行く途中

陽介「そーいや何でお前らはその恰好なんだ？」

優菜「あー・・・簡単に言くと、こういう場所に入ったら勝手にこうなる。体質み

たいなもの」

優斗「端折り過ぎだ」

優菜「まあ、勝手にこうなっちまうから気にしてもしょうがナツシングって事で」

優斗「・・・」

悠「・・・」

陽介「・・・」

クマ「・・・」

優菜「スベったらスベったで何か反応してくれ！」

目的地に到着した

陽介「な、なんだよ……ここ……町の商店街にソックリじゃんか……一体、どうなってるんだ!？」

クマ「最近、おかしい場所が出現しだしたクマよ。色々騒がしくなって、困ってるクマ……」

悠「……どうしてさつきから離れているんだ?」

陽介「いざとなったら逃げる気じゃねえよな」

優斗「判断は間違ってるねえだろ」

クマ「いや、あんまり近くにいたら君たちの活躍の邪魔になるから……」

優菜「っていう言い訳か」

陽介「しつかし、どの辺まで続いているんだ……? てか、街のいろんな場所の中で、なんでこんなんだ?」

クマ「何でって言われても……ここににいる者にとってここは現実クマ」

陽介「ハア……相変わらず、よく分かんねえなあ……けど、ここがウチの商店街ならこの先は、確か小西先輩の……」

タツタツタツ

陽介「やつぱり……ここ先輩ん家の酒屋だ。先輩……ここで消えたって事なのか? 一体なにが……」

入口には赤と黒の渦が巻いている
ん？意味がよく分からない？

P S V i t a でゴールデン買ってこい

俺もそれでクリアしたから

クマ「ちよ、ちよつと待つクマ。そ、そこに、いるクマ！」

陽介「いるって、何がだよ」

クマ「・・・シャドウ。やっぱり・・・襲って来たクマ！」

ブワッ

グジュ

こいつは！

優菜「クソツP4のシャドウの知識はあんまりねえんだよ！」

優斗「とりあえず、メーティス！こいつの弱点分かるか!？」

メーティス「5秒待つてください」

優菜「とりあえず、殴るぞ」

ヒュッ

ドガア

シューアア

優菜「よし」

陽介「ワンパンじゃねえか！」

メーテイス「弱点わかりますけど教えましょうか？」

優菜「一応」

メーテイス「弱点は電撃ですね」

・
・
・

優菜「よし悠、ジオで倒していいぞ」

悠「分かった、イザナギ！」

ドゴオオン

倒しきれなかった

優菜「倒しきれなかったか、なら総攻撃やるぞ」

優斗「OK」

ドガガガガ

バシューーン

シューアアア

優菜「雑魚だったな」

陽介「お前ら今までどんな生活してたんだよ」

優菜 「ほとんど異世界」

クマ 「え？ どういう事クマ？」

優菜 「後で話す」

陽介 「にしても……ここで一体、先輩に何があつたんだらうな？」

ざわざわ……

優菜 「なんだこの声……」

悠 「静かに」

「ジュネスなんて潰ればいいのに……」

「ジュネスのせいで……」

陽介 「な、何だよコレ……」

「そういえば小西さんちの早紀ちゃん、ジュネスでバイトしてるんですってよ」

「まあ……お家が大変だった時に……ねえ」

優菜 「最低だな、どうせ小西先輩を見ながら言ってるのが目に浮かぶぜ」

「ジュネスのせいでこのところ、売り上げも良くないっていうし」

陽介 「や、やめろよ……」

「娘さんがジュネスで働いてるなんて、ご主人も苦勞するわねえ」

「困った子よねえ……」

陽介「おい・・・おい、クマ！ここは、ここに居る者にとつての現実だとか言っていたな！それ・・・ここに迷い込んだ先輩にとつても現実って意味なのか・・・？」

クマ「クマは・・・こつちの事しか分からない」

陽介「・・・上等だよ、一体何がどうなっているのか・・・俺達で確かめてやる！」
クマ以外渦の中に入り小西先輩の家に入り

怒鳴り声が聞こえる

陽介「くそっ・・・またか」

「何度言えばわかるんだ、早紀！」

陽介「こ、これ・・・先輩の親父さんの声か・・・？」

「お前が近所からどう言われてるか、知らない訳じゃないだろ！代々続いたこの店の長女として、恥ずかしくないのか！金か？それとも男か!?よりによってあんな店でバイトなんかしやがって・・・」

陽介「何だよ、これ・・・バイト・・・楽しそうだったし、俺にはこんな事、一言も・・・
こんなのがホントに先輩の現実だったのかよ」

優菜「どうする？これ以上聞いたら俺はマズいと思うぞ。特に陽介に精神的ダメージが来ると思うが、聞くか？陽介」

陽介「・・・覚悟はできてる」

優菜「二言は無いな？」

陽介「おう」

優斗「お前らちよつとこつち来てこれ見てみろ」

近付いてテーブルに散乱されているのを見る

陽介「これ、何かの写真だよな．．．あれ．．．これって．．．」

写真を一つ取る

陽介「これ．．．前にバイト仲間と、ジュネスで撮った写真じゃんか．．．な、なん
で、こんなこと．．．」

早紀「ずつと．．．言えなかった．．．」

陽介「この声．．．先輩!？」

早紀「私、ずつと花ちゃんの事．．．」

陽介「え．．．？俺の事．．．？」

早紀「．．．ウザイと思つてた。仲良くしてたの、店長の息子だから、都合いいつて
だけだったのに．．．感知がして、盛り上がって．．．ほんと、ウザい．．．」

陽介「ウ、ウザい．．．？」

早紀「ジュネスなんてどうだっていい．．．あんなののせいで潰れそうなのウチの店も、
怒鳴る親も、好き勝手いう近所の人も．．．全部、無くなればいい．．．」

陽介「ウ、ウソだよ……こんなさ……先輩は……そんな人じゃないだろ!!」
優菜「それはお前が今まで見てきた表の顔だろうが、お前には都合がいいからそれだけ見せてただけだ」

陽介「違う……そんなわけない……」

優菜「さっき言ったことはどうした、二言はないんだろ?」

陽介「俺は……」

? 「可哀そうだなあ……俺……」

声のした方を見ると

陽介? 「てか、何もかもウゼイと思ってるのは、自分の方だつーの、あはは……」

クマ「あ、あれ? よ……ヨースケが二人……クマ?」

陽介「お前、誰だ!?! お、俺はそんな事、思ってる……」

優菜「あれが陽介のシャドウか……」

シャドウ陽介「……アハハ、よく言うぜ。いつまでそうやってカツコつけてる気だ

よ。商店街もジュネスも、全部ウゼーんだろ! そもそも、田舎暮らしがウゼーんだよな

!?!

陽介「な、何言ってる……? 違う、俺は……」

シャドウ陽介「お前は孤立すんのが怖いから、上手く取り繕ってヘラヘラしてんだよ。」

一人は寂しいもんなあ、みんなに囲まれてたいもんなあ。小西先輩の為に、この世界を調べに来ただあ？お前がここに興味を持ったホントの理由は・・・」

陽介「や、やめろ!!」

シャドウ陽介「ははは!何焦ってんだ!俺には全部、お見通しなんだよ。だって俺は・・・お前何だからな!お前は単に、この場所にワクワクしてたんだ!ド田舎暮らしには、うんざりしてるもんな!何か面白いモンがあんじやないか・・・ここへ来たワケ何て、要はそれだけだろ!」

陽介「違う・・・やめろ、やめてくれ・・・」

シャドウ陽介「カッコつけやがってよ・・・あわよくば、ヒーローになれるって思ったんだよなあ?大好きな先輩が死んだっていう、らしい口実もある事だしなあ・・・」

陽介「違う!!お前、何なんだ!誰なんだよ!」

シャドウ陽介「くくく・・・言ったろ?俺は、お前・・・お前の影・・・全部、お見通しだつてな!」

陽介「ふ・・・ぎげんなつ!お前なんか知らない!」

優菜「それ以上言うな陽介!」

陽介「お前なんか俺じやない!!」

シャドウ陽介「ふふふ・・・アハハハハ!!いいぜ!もつと言いな!!」

陽介「俺じゃない・・・お前なんか俺じゃない」

口を塞ぐ

シャドウ陽介「もう遅い！俺は俺だ、もうお前なんかじゃない」

陽介が気絶する

黒い瘴気を発しながら発光・・・そして蛙のような下半身に、上には人型の何かがついている

優菜「悠！ペルソナを出せ！戦うしかないぞ!!」

シャドウ陽介「我は影・・・真なる我・・・退屈なモノは全部ぶっ壊す・・・まずは・・・お前からからだ!!忘却の風！」

優斗「ウンディーネ、マカラカーン！アウラ！」

パリエイン

マカラカーン発動、しかし風属性はあまり効いてない

シャドウ陽介「さあ！どれだけ耐えられるだろうなあ！」

優菜「疾風属性を使うやつは最初の方は大体電撃だ！悠、イザナギでいけるぞ！」

悠「分かった、イザナギ！」

ドオオオン

優斗「総攻撃だ！」

悠「それも陽介らしさだ」

陽介「お前……」

優斗「安心しろ、お前よりも悪い奴沢山見てきたから俺たちは大丈夫だ」

優菜「感覚麻痺ってるかもしれないねえけどな」

陽介「……ちくしよう……ムズイな、自分と向き合うって」

シャドウ陽介と向き合う

陽介「分かってた……けど、みつともねーしどーしよもなくって、認めたくなかった……」

お前は俺で……俺はお前か……全部ひつくるめて俺だって事だな」

シャドウ陽介が頷く

そして姿が変わりはじめて消えた

優菜「……今のがお前のペルソナだ、悠と同じ力だよ」

陽介「これが俺のペルソナ……あの時、聞こえた先輩の声……あれも、先輩が心のどつかで抑え込んでたモンなのかな……はは……ずっとウザいと思ってたか……」

優菜「フラれたな」

陽介「ああ、これ以上ねーってぐらい、盛大にフラれたぜ……つたく……めつと

もーねー……」

優斗「みつともねーな、皆の前で告白してフラれたぐらいみつともねー」

陽介「復唱しなくていいわ!!」

優菜「クマ、先輩はここでもう一人の自分に殺されたのか。それとも別の何かに殺されたのか。どっちだと思う?」

クマ「多分自分のシャドウに殺されたんだと思うクマ。ここにいるシャドウも、元は人間から生まれたものクマ。でも霧が晴れると、皆暴走する・・・」

優菜「その時に俺たちの世界では霧が起きる、だよな」

クマ「よく知ってるクマね。そうクマ、クマたちの世界に霧がある時はそっちにはなくて、こつちの世界が晴れたらそっちで出るんだクマ」

悠「シンクロしてるのか」

クマ「話し戻すとさつきみたいに意思のあるシャドウを核に、大きくなって宿主を殺してしまうクマ」

陽介「それが・・・町で霧が出た日にこつちで人が死ぬ原因なのか・・・」

クマ「ヨースケ、だいぶ疲れてるクマね・・・もともとこつちの世界は、人間にはちつとも快適じゃないクマ。も何の声も聞こえなくなつたし、これ以上、ココには何も無さそうクマ。一旦戻るクマね」

最初の場所まで戻ってきた

陽介「なあ、クマ。お前、ここが現実だつて言つてたよな? さつきの商店街・・・そ

れに、前に見たあの妙な部屋

・ ・ ・ あれは、死んだ二人がこっちへ入った後で、二人にとつての現実になったって事なのか？つまり・ ・ ・ 二人が入ったせいで、あんな場所が出来たのか？」

クマ「今まで無かった事だから、分からないけど・ ・ ・ ここで消えた人たちも、きっと、さっきのヨースケみたいになったクマね・ ・ ・ 」

悠「つまり二人はこの世界に殺されたという事か？」

優斗「それはちよつと違うんじゃないか？」

悠「どう違うんだ？」

優菜「クマが言つてただろ。この世界に二人を入れたやつがいるって、もしそいつがこうなることを知っているんなら・ ・ ・ そいつが殺したに決まってるだろうが、知らなかったとしても自分でも何が起こるか分からない場所に入れるんだ。少なくとも普口クナ思考回路してねえ」

陽介「・ ・ ・ つまり、もう死ぬ奴をなくすにはそいつを見つけるしかねえって事か」

クマ「センセイたちはこれから来るクマ？」

優菜「また誰か入れられたら来るかもな」

クマ「それなら気づいた事を言わせて欲しいクマ」

悠「なんだ？」

クマ「二人とも、ここが晴れた日に消えたけど、それまではシャドウに襲われなかったクマ。なのに僕ら、さつきは襲われたクマ。シャドウ達、すごく警戒してた・・・探索してる僕らを敵と見なししてるのかも・・・キケンだけど・・・でも僕らなら、戦って救えるかも知れないクマ」

陽介「俺らなら・・・この先また誰かが放り込まれても、その人を救えるって事か・・・!?消えちまう前に・・・俺自身が、さつき助けられたみたいにな!!」

悠「そうなるだろうな」

陽介「・・・とにかく、ここに人を入れてる犯人を捕まえて、やめさせるしかない。そうか・・・ようやく少しは状況が分かってきたぜ」

クマ「あ、あのさ・・・逆にちよつと訊いていいクマ・・・? シャドウが人から生まれるなら、クマは何から生まれたクマか・・・?」

陽介「お前、自分の生まれも知らねーのかよ!? そんな事、俺らに分かるわけねーだろ」
クマ「この世界の事ならいくつか知ってる・・・けど、自分の事は・・・分かんないクマ。ちゅーか、今まで考えた事無かった・・・」

陽介「マジかよ・・・」

クマ「もう一つ言っとかないといけない事があるクマ」

優斗「今度は何だ?」

クマ「これからクマは、ここでキミ達が来るのを待つてるクマよ。だから君達は、必ず同じ場所から入るクマ」

悠「ジュネスのテレビからという事か？」

クマ「ジュネスって所がどこかは知らないクマが、そういう事クマ。センセイ」

陽介「とうかセンセイってなんだ？」

クマ「その銀髪の人クマ」

悠「俺か？」

クマ「そうクマ、前に助けてもらった時の感謝を込めてクマ」

優斗「それって俺らもだろ」

クマ「キミ達はなんか違うクマ」

優菜「なんか違うって・・・まあいいけど」

クマ「話を戻すクマね？違うところから入ると、違う所に出ちやうクマ。もしそれが、クマの行けない場所だったらどうしようもないクマ・・・以上、分かったクマ!？」

陽介「まあ、だいたいな・・・じゃあ、出口ヨロシクな」

クマ「オーツス！リョーカイだクマー！」

テレビを出してくれた

陽介「さてと・・・まず向こうに店員とか来ちやってないか、確認しないと・・・」

クマ「ハイハイー、行って行って行ってー！ムギユウ！」

陽介「のわっ、だから、最後無理に押すなつての！バカ・・・おわあつ！」
ぐわーん

千枝「あ・・・か・・・帰つてぎだあ・・・!!」

涙や汗やら諸々で顔がぐしやぐしやになった里中がテレビの前にへたり込んでいた

陽介「あ、里中？うっわ、どしたんだよ、その顔？」

千枝が立ち上がり持っていたロープ陽介に投げつける

陽介「あがつ！」

千枝「どうした、じゃないよ！ほんつとバカ！最悪!!もう信じらんない！アンタら、サ
イツター！ロープ切れちやうし・・・どうしていいか分かんないし・・・心配・・・し
たんだから・・・すっげー心配したんだからね！あーもう、腹立つ！」

走って行ってしまった

陽介「・・・ちよつとだけ、悪いことしたな。いや、やべーかな、これは・・・まあ、
しやーない、明日謝ろ。今日はもーへトへト・・・帰つて、風呂入つて寝るわ。今日は：
眠れそうな気がする」

優菜「じゃあまた明日か」

優斗「じゃあ学校で」

悠「また明日」

家まで帰ってとりあえずリビングで寝転がってる

テレビから何か聞こえる

アナウンサー「では、今夜のトップニュース。稲羽市で起きた異常殺人の続報です。今朝七時頃、稲羽市の住宅街で地元高校の三年生、小西佐紀さんが遺体で見つかった事件。警察は、遺体の状況が極めて似ている事や、被害者が遺体発見者であった事などから・・・先の山野アナの事件から続く連続殺人の可能性もあると見て、捜査を進めています。警察の調べによりますと。小西さんの死亡は昨晩一時過ぎ頃と見られています。ですが現場は未明から濃い霧で視界が悪く、発見が遅れたのではないかという事です」

そしてそして画面が切り替わり

ナレーター「・・・鮫川の上流に軒を構える、地元随一の歴史を持つ高級温泉宿、天城屋旅館。温泉かけ流しのラドン泉の露天ぶろを備え、遠方からのリピーターも多い高級旅館だ」

現場リポーター「えー、事件後、女将が一線を退き、今はこちら、一人娘の雪子さんが代わりを務めています」

和服姿の雪子が映る

現場リポーター「言ってみれば現役女子高生女将・・・と行った所でしようか。何と

もこう、惹かれる響きです。お話うかがってみましょう．．．すみません！」

雪子「．．．え？私．．．私ですか？」

現場リポーター「女子高生で女将、という事ですが」

雪子「いえあの、私は代役で．．．」

現場リポーター「でも、後継ぐワケでしょ？ていうか和服色っぽいね、男性客多いで
しょ？」

雪子「えー、や、あの．．．」

優菜「このリポーター私情多くないか？論点ズレてるけど．．．これがマスゴミか」

優斗「こいつはいい年して思春期真っ盛りのゴリラだろ、それよりさ」

優菜「どうした？」

優斗「ネット見てたら催眠術とか見つけたんだけど、やってみるか？」

優菜「暇だしいいぞ」

二人とも座る

優斗「よし、それじゃあ見たままにやるからな」

優菜「来い」

コオオオオ

ピンッ

優菜「あいたつ！」

鼻ピンされた

優斗「波紋使つたら出来ねえだろうが」

優菜「チツ」

*ここから先の事は必ずしも成功するとは限りませんのでリアルでやって失敗したなどという輩が出た場合、無視します

優斗「目を閉じてください」

優菜「はいよ」

目を閉じる

優斗「体の力が抜けてリラックスしていきます」

ぐだあ

優斗「あなたが今好きな人、恋をした時の事をイメージしてください」

優菜『誰だろうか・・・おそらくアレだろう、多分・・・な』

優斗「3つ数えると目が覚めます。目が覚めると私の事が好きになってしまふでしょう、貴方が好きな人と同じくらい好きになってしまふ。私の事が好きで好きでたまらなくなる、必ずそうなります。3、2、1ハイッ！ゆつくりと目を開けてください」

目を開ける

優菜『何でこんな事してんだろ・・・』
ポンッ

優菜『あれ・・・？なんか気分が変だ・・・』

優斗『どうせダメなんだろうけど』

優菜『どうして優斗があんなに魅力的に見えるのだろうか・・・フィルターがかかったように周りに花がいっぱい・・・』

優斗「私の目を見てください私のことどう思いますか？」

優菜「カッコいい・・・」

優斗「え？」

優菜「ちよつと抱き着いてもいい？」

優斗「別にいいぞ」

ギユ・・・

スンスン

優斗『匂いを嗅いでいる・・・？明らかに様子がおかしい、まさか成功したのか？』

優菜「なあ」

優斗「どうした？」

優菜「俺らって付き合えるんだよな？」

優斗『いつもなら絶対と言わない事だ・・・なら少し遊ぼう』

優菜「どうなんだ？」

優斗「・・・お前が男言葉をやめて、方言出してくれたらな」

優菜「分かったわ。これでいい？」

優斗『ホントに上手くいくとは思ってなかった』

優菜「それじゃあまづは・・・」

ちゆう~~~~~

優菜「どう？キスの味は美味しい？」

優斗『俺はどうすればいいのだろう、この状況が記憶に残るなら俺は少なくとも半殺しになるだろう。だが俺の本能はヤレと言っている。皆なら迷いなくヤルだろう？だがこの小説は全年齢指定なのである。出来ることは恋人つなぎや相合傘、キスや食べ物を交換し間接キスしまくりながら食べ、一緒に風呂に入るぐらいである。つまりその先まで行ってしまうこの小説は速攻で年齢制限が上がるだろう、だが俺はそれは望んでない。今「そこだけ切り取れば？」と思った奴、面倒である。ヘタをしたらそのまま忘れ去られ、確実に出世なくなるのである。じゃあどうするk」

優菜「ちよつと、何か言いなさいよ」

優斗『マズい、ひとまずこの場をどうにかしないと・・・もういつその事解いて

しまおうか。だが俺はまだこの状況に満足していない、どうせ死ぬなら満足して死にたい。ついでに言うとうヘルを出してから死にたい。フフフ・・・やる事は決まった。もう少し遊ぼう』

優菜「どうかした？」

優斗「いや、美味しかった」

優菜「そりゃ私のキスですから！」

優斗「もうちよつと寄り添って」

優菜「？うん」

すぐ横まで来た

優斗「俺の前に座ってくれるか？」

優菜「なんかかればいいの？」

足を広げた真ん中に座る

子供が人形をなでる等の時のような感じだ

よしよしゞ（・ω・、）

優菜「はわぁ・・・」

スリスリ

お腹もなでる

優斗『俺この後処刑だな』

優菜「ちよ、ちよつとそこは……」

優斗「ん？ここは嫌か？」

優菜「いや・・・そういう訳じゃないんやけど・・・ちよつと恥ずかしいつちゆうか・・・
くすぐつたいつちゆうか・・・」

優斗「ほほう・・・？」

コチヨコチヨコチヨコチヨ

優菜「アハハ！ハハハハハハ!!ちよ、無理！無理!!脇腹はだめえ!!!」

優斗「ココが弱いのか？」

コチヨコチヨコチヨコチヨ

優菜「んくく!!!」

優斗「口で抑えても無駄だぞ？」

優菜「お、お願い・・・！一回止まって・・・」

優斗「・・・よし」

手を放す

すると過呼吸になった息を整え、こつちを見て頬をぷくーつと膨らませながら睨む
優菜「コチヨコチヨは嫌いです！」

優斗「ごめんって・・・後もう一つ頼みがあるんだけどいいか？」

優菜「・・・何？」

優斗「もう夜だし晚ご飯作ってくれないかなー？って」

優菜「・・・それじゃあ何系がいいですか？」

優斗「じゃあ中華」

優菜「それじゃあ麻婆豆腐でもしましょつか」

料理はすつ飛ばして夜ごはん

優菜&優斗「いただきますーす！」

食べ進める

優菜「はい、あーん♡」

優斗「あーん」

はむっ

優斗「美味い！」

優菜「でしょー？」

優斗『これが終わったら戻さないとな』

優菜「えへへへー」

優斗『こっちの方が可愛げはあるがやっぱりいつもの優菜の方がいい』

優菜「食べ終わった？それじゃあ洗うね」

ガシヤ

ジャーツ

洗い終わって

優菜「お風呂沸いたよー、一緒に入る？」

優斗「ああ、入るか」

洗いつこ十抱き合いながら風呂が終わり

今日は雨、という事は

優斗「マヨナカテレビ確認するか」

優菜「あ・・・忘れてた」

テレビを見ていると

気象アナ「今日のニュースにもありました稲羽市ですが、今年も頻繁に濃霧が観測されています。実はこれは、ここ数年見られるようになった異常現象で、原因はよく分かっています。しゅうへんにお住まいの方はご注意ください。今日は、稲羽市の事件について時間を延長してお伝えしました・・・間もなく午前0時です」

テレビを切る

そして画面が光りだし誰かが映り始めた

優菜「女の人？」

優斗「来てるのは和服か？画質が荒すぎて顔が分からないな」

消えていった

優菜「消えちやった・・・」

優斗「とりあえず寝るか」

ベッドの上

優菜「それじゃあ寝よつか？」

優斗「その前にちよつといいか？」

優菜「何？」

優斗「3つ数えると催眠が解けます3、2、1ハイッ！」

優菜「？」

優斗「私の事どう思いますか？」

優菜「？・・・カッコいい？」

優斗「!？」

優菜「・・・？」

優斗『催眠が解けてない!？』

優菜「どうかしたと？」

優斗「3つ数えると催眠が解けます3、2、1ハイッ！」

優菜「催眠……？」

優斗「……とりあえず寝よつか」

優菜「そやね、寝よつか」

毛布の中でめちやくちや抱き着かれた

脳内会議（ペルソナたちあり）

優斗「どういうことだ？何故催眠が解けない？」

ヘル「また何かしたんでしょ？」

メーテイス「ネットの情報を使うのみにするからですよ」

優斗「そこは今どうでもいいだろ!?!どうやったら戻るかだ」

アリエル「見た目は催眠というより洗脳のように見えますが」

イフリート「洗脳系のスキル持つてるやついるか？」

……

カオス「いないな」

ガイア「そもそもスキルだとしたら効果時間が永過ぎです」

カマエル「確かに厳しいですね」

ウンディーネ「ならほかに意見は？」

ミヅハノメ「深層心理とかじゃないんですか？」

トラ「頭の底に訴えかけるみたいないな感じか？」

ホバル「あの催眠術にそれ程の価値があつたらあんなとこにないだろ」

アラメイ「だが明日は乗り切るしかないだろ」

アウラ「そこはもう優斗さんに任せます」

クロノス「それではまた明日だな」

優斗「勝手に終わらせんな！」

戻ってきた

優菜「さつきからボーっと、どっか見ようと？」

優斗「幽霊」

優菜「え・・・？」

優斗「幽霊」

優菜「イヤアアアアアアア!!」

ギユウウウウウウウ

優斗「・・・ホント、ホラーダメだよな」

優菜「わ、わかってていていつ言つてんじやななない!!!」

ギユウウウウウウウ

優斗「ちよつと強い．．．折れる．．．！折れる！！」

優菜「はあはあはあはあはあ」

優斗「折れる！．．．折れる！！」

優菜「アンタが悪い！！」

その後気絶し次の日

優斗「痛．．．」

周りを見るが一人のようだ

優斗「優菜？」

とりあえずトイレに行く

ガチャ

優菜「あ．．．」

優斗「あ．．．」

．．．

優菜「し、閉めてよ！！」

バタンツ

ジャーツ

ガチャ

優菜「入る時はノックぐらいしてよ！」

優斗「いや、カギ閉めろよ」

優菜「・・・とりあえずご飯食べよっか」

トイレに行つた後飯を食べて

制服に着替えて登校中

優斗『ていうかこのままいつて大丈夫なんだろうか、少なくとも違和感はあるぞアレ』

優菜「どうかした？」

優斗「ナンデモナイ」

悠「おはよう」

優斗「おはよう」

優菜「おはよ」

悠「昨日のマヨナカテレビは見たか？」

優菜「もちろんです」

悠「？優斗、優菜はどうかしたのか？」

優斗「それが催眠術を暇だったからかけたんだが、解けないんだ」

悠「アイツがあんなこと言いだしたら本物の女子だぞ」

優斗「何とか解こうとはしたんだがな」

優菜「どうかした？」

優斗「いや、なんでもない」

悠「とりあえず、普通に接するか」

優斗「そうするしかない」

陽介「よっおはようさん！」

自転車に乗って来た陽介が降りながら言った

優菜「おはよう陽介」

陽介「おう、おはよう」

優菜「今日も自転車ですか、もう転ばないでくださいね」

陽介「!？」

優斗「被害者がまた増えたか」

陽介「その口調・・・何があった!？熱でもあるのか!？」

優菜「どうかしたの？」

陽介「こっちのセリフだよ!!」

優斗「簡単に言うとかイツがやらかした」

陽介「何した!？」

優斗「催眠術」

陽介「催眠術!」

悠「しかも解けないらしい」

陽介「何してんだよ!!」

優斗「ハッキリ言っただろうだ!前と今!どっちがいいんだお前は!!」

陽介「前をほとんど知らねえんだよこっちは!!」

優斗「戻そうとはしたんだよ!だが何度やつても戻らないんだよ!!」

陽介「じゃあどうすんだよ!!」

優菜「ねえ」

悠「どうした?」

優菜「そろそろ行かないといけないんじゃないんじや?」

優斗「・・・とりあえず行こう」

陽介「遅刻するわけにはいかねえか・・・」

校舎に入った途端雨が降り出してきた

教室につき荷物を置き話していると千枝が血相を変えて入ってきた

陽介「さ、里中!その・・・き、昨日は・・・わりい、心配さして・・・」

優斗「とりあえず優菜は喋んなよ」(小声)

優菜「?分かった」(小声)

千枝「そんな事より、雪子、まだ来てない？」

優菜&優斗「!？」

陽介「え、あ、天城？さあ……まだ見てないけど」

千枝「ウソ……どうしよう……ねえ……あれってやつはホントなの？その……マヨナカテレビに移った人は向こう側と関係してるってヤツ」

陽介「……誰かに聞かれたら面倒だから、昼休みに話す」

雨が止んだので昼休み・屋上

魔法で周りを乾かした

皆と一緒に昼飯食べながら千枝に昨日の事を説明した

陽介「つてわけなんだ」

優菜「あーん♡」

千枝「何それ、テレビの中ってそんな危ない世界だったの？ていうか優菜が男ってマジ？」

優斗「あ、あーん」

食べる

悠「ならまずどうする？」

優菜「おいしい？」

千枝「ていうか聞きたい事あるんだけどいい？」

優斗「ああ・・・美味しいぞ」

陽介「それなら多分俺も同じと思うから言わせてもらうが・・・お前ら見せつけてんのか!？」

優斗「いや・・・食べないと多分泣くから・・・」

陽介「なら「あーん」とかいらねえだろ!?愛妻弁当はまだいいんだよ、「あーん」はやめろ「あーん」は!!」

千枝「優菜ってこんなキャラだっけ・・・」

優菜「陽介も食べたいと？」

陽介「あるのか？」

優斗「いいのか？」

優菜「入らなかつた分があるんやけど、どうするか迷つとつたからいいちや」

カオスの空間から出す

優菜「食べるど？」

陽介「つてそうじゃない!今はそうじゃない!!」

優菜「いらんと？」

陽介「・・・貰ってはおく」

千枝「食べたいんじゃない．．．」

陽介「一応女子の手作りだぞ!?!この先食べれるか分からないんだ．．．どっちにしろ損はない!」

悠「頼めば作ってくれるんじゃないか?」

優菜「別に作っちゃってもいいよ?量が増えるくらいなら簡単やけ」

陽介「マジか」

優菜「明日から?」

陽介「いや、その前に本当に戻せないのか調べた方がいいだろ!」

優菜「とりあえずお弁当はどうすると?」

陽介「頼む」

千枝「ていうか優菜に何があったの?なんていうか．．．私より女子っぽいんだけど、男って言ってたよね?」

優斗「ネットで見つけた催眠術を遊び半分で作ったら見事にかかって戻らなくなっ
た」

千枝「バカじゃん」

優斗「少なくともお前より頭はいい」

千枝「ちよつとそれどういう事!?!」

陽介「どうかどういいう催眠かけたんだよ」

悠「自分を女子と思わせたりか？」

優斗「相手が好きになる催眠・・・」

悠「なに!？」

陽介「優斗、俺にもそのサイト教えてくれ」

千枝「ちよつと！悪用しようとしてんじゃん！」

優菜「ていいうか何で集まったと？話すことないなら教室に戻りたいちゃ」

千枝「ちや？さつきも言つてたけどそれなに？」

優斗「好きになる催眠の後、女の子っぽい喋りと前任んでたこの方言使つてつて

言つたらこうなつた」

優菜「どうしたと？なんか変なこと言つた？」

陽介「いや、大丈夫だ。言いたいことは大体わかる」

優菜「ならいいわ。あと食べたらちちゃんと返してや？なおすけ」

陽介「なおす？この容器どつか割れてんのか!？」

優菜「なおすだけやけど」

優斗「こいつの方言は福岡の小倉とかの北九州なんだが、なおすつていうのは戻すと

か収納するとかって意味だ」

陽介「入れてた所とかに戻すって事か？」

優菜「そうやけど、分からんかったん？」

千枝「それは流石に分らないかなー・・・」

優菜「さつき大体わかるっていつとつたやん」

千枝「あと・・・昨日のマヨナカテレビ。色々考えて見たけど、あれ雪子だと思う。あの着物、旅館でよく着てるのと似てるし、この前インタビュを受けた時も着てた。心配だったから夜中にメールしたんだけど返事来なくて・・・でも、夕方ごろにかけた時は、今日は学校来るって言うってたから・・・」

陽介「まだメールは帰ってきてないのか？」

千枝「うん・・・」

陽介「それじゃあ電話したほうがいいだろ、まず安全かどうかを確認した方がいい」

優菜「待って、気を探ってみるから」

千枝「気って何!？」

優斗「生き物はそれぞれ違う、気っていうのを持つてるんだ。優菜はそれが分かる」

千枝「じゃあどこにいるか分かるって事!？」

優菜「ここら辺の地図見れる？」

優斗「これだ」

地図が出ているスマホの画面を見せる

優菜「ここにいる」

千枝「ここって・・・天城屋旅館？よかった～・・・手伝いしてたら携帯触らないもんね」

優菜「人の気がたくさんあるから、団体さんとかが入ったんやと思う

陽介「・・・とりあえず今日の放課後、クマの所にまた行こうと思ってる」

優菜「そうなん、私も行った方が良いと？それとも陽介だけで行くと？」

陽介「一人で行くかよ！」

優菜「それは流石に嘘ちや、行くなら私もついてつちやるよ」

陽介「それじゃあ放課後にジュネスな」

優菜「じゃあそんな時に容器返してね？」

陽介「わかった」

優斗「それじゃあ、普通に食うか」

悠「そうだな」

優菜「とりあえず、早く食べな時間がそろそろヤバいちゃ」

陽介「マジかよ！」

そして放課後・ジュネス

改めて昨日の事を説明した

陽介「ま、まあまあ、俺のイタイ体験とか、その辺はいいから、な？」

千枝「そんな話・・・普通、絶対信じないよね。実際にあの中、見てなかったら」

陽介「まったくだぜ。で、とにかく中の様子を知りたい訳んだけど・・・ハア・・・
何で今日に限って客がこんな・・・そういや今、家電はセール中だっけか・・・」

千枝「なんとかクマ君の話、聞けないかな・・・」

陽介「そだ、ちよつと来てみ」

テレビの目の前まで行く

陽介「なあ、手だけ突っ込んで読んでみねえ？どうせクマ、入り口でウロウロしてんだろ。お前らはこつちね。俺と一緒に壁やって」

周りから見えない様に壁になる

悠「とりあえず手招きしてみる」

ガブツ

悠「うつ・・・」

手を抜いた

陽介「ど、どうした!？」

千枝「しーっ！バカ、声デカいって！は、歯形ついてるし!!ちよ、大丈夫!？」

悠「なんとか」

優斗「クマに噛まれたか」

優菜「後で皮剥ごうかな」

陽介「怖えよ！女子っぽくなつたんじやなかったのか!？」

優斗「いや、こういうところは元のままだから」

優菜「ていうか冗談だから、別にそこまで怖がらんでもいいとよ?」

千枝「おい、クマきち！そこに居んでしょ！出てこないと皮剥がれるよ!」

クマ「なにになに?これ何の遊び?」

陽介「遊びじゃねえつつの!今、中に誰かの気配はあるのか?」

クマ「誰かって誰?クマは今日も一人で寂しん坊だけど?むしろ寂しんボーイだけど

?」

千枝「うっさい!けど、誰もいない・・・?ホントに?」

クマ「ウ、嘘なんてつかないクマ!クマの鼻は今日もビンビン物語クマ

優菜「ならまだ入ってないって考えるのが妥当かしらね、知らんけど」

陽介「知らんけど?」

優斗「感覚的に八割方そうって感じの方言、これは関西全体で使われてる」

千枝「・・・あたし、やっぱり雪子に気をつける様に言ってくる。土日は旅館が忙し

いだろうから一人で出歩いたりしないと思うけど・・・」

陽介「そうだな・・・月曜、一緒に来るんだろ？」

千枝「うん、家まで迎えに行く」

陽介「もしかしたら、今夜のマヨナカテレビでまた何か分かるかもしれない。全部勘違いならいいんだけどな・・・今日、見たら電話するわ。携帯の番号、教えてくれ」

優斗「あ、じゃあ俺達も」

皆で交換した

陽介「じゃあ、今夜見るの忘れんなよ」

優菜「それじゃあ、また月曜かな？でたんめんどくさいけど、まあ仕方ないやんな」

陽介「優斗は優菜を早く戻してくれ、方言が全く分かんねえ」

優斗「善処はするけど期待はするな」

陽介「頼むぞ」

そして帰って

優斗「みんな出てきてくれ」

ペルソナを全員出した

優斗「何とかして優菜を戻そう」

ヘル「もう諦めたら？こつちの方が可愛げあるし、いっしょに風呂まで入れるんだか

ら今の方が得じゃない」

クロノス「お前は怒られたくないだけだろう？」

アウラ「ですが真面目に対処法が分かりませんし」

イフリート「メーティスだったら何か分かるんじゃないか？」

メーティス「判断材料が足りないです」

アラメイ「もういつその事、一回殺って復活させたらどうだ？」

ウンディーネ「脳筋は黙ってて」

カマエル「ですが復活というより回復なら効果があるかもしれませんね」

カオス「だがそれだと効果時間が永過ぎないか？」

ホバル「でも、状態異常なら回復できるんじゃないのか？」

ガイア「やってみる価値はありますね」

ミヅハノメ「というわけで後はアリエルに任せるといふ事で」

アリエル「話が早すぎません!？」

トラ「とりあえず、やるしかないだろ」

アリエル「分かりました、それじゃ優菜さんちよつと来て下さい」

優菜「うん」

優斗「くそっ・・・戻すことを迷ってる俺がいる・・・」

ヘル「やっぱり今の方がいいってわけ？」

優斗「いや、戻った後記憶あつたら怖い」

ヘル「腹くくりなさいよ」

バンツ

優斗背中をヘルが思いつき叩く

そして優斗がよろめいて優菜にかぶさり倒れる

ヘル「あ」

優菜「え？」

優斗「あ」

バタン

アリエル「何してるんですか!？」

ヘル「いや、喝入れようとしたんだけど強すぎたわ」

優菜「何すんだよヘル!!」

ヘル「その言い方は・・・戻った!？」

クロノス「逃げるなよ？」

優斗「ヘル、危ないよ・・・」

アウラ「あれ？なんかこっちは気が弱くなったような・・・」

優菜? 「ん? あっ! 嘘だろ. . . またかよ. . .」

優斗? 「あ、また入れ替わっちゃたね」

イフリート 「は!?!」

ヘル 「えっうそ. . .」

カオス 「またお前のせいだよ!」

ヘル 「もしかしてしよつちゆう死んだり復活したりしてるから、魂が出やすくなってるのかもね. . . ほらぬく〇くで心臓麻痺で死んだ後にあぎようさんと復活して、その次かなんかの話で給食のどに詰まらせて魂が出かけてたじゃない。あれよ」

優斗 in 優菜 「結構深刻じゃないの? それ」

優菜 in 優斗 「相当深刻だよ!」

イフリート 「てか〇くべくってなんだ?」

メーテイス 「ぬ〇べくはジャンプで連載してたオカルトホラー漫画ですよ。今はNEOというのがグランドジャンプと最強ジャンプで続編が出たんですが、それも終わって今は最強ジャンプでSというのが連載してますね」

カオス 「そのぬくべ〇つてのをお前見たのか?」

ヘル 「AMAZUNGPRIMEで全話見たわ、広のお母さんの記憶が蘇ってたのは驚いたわ。私からしたらよくあることだから」

アラメイ「お前達は隠したいのか知らせたいのかどっちなんだよ」

優菜 in 優斗「ていうか早く戻して」

ヘル「いや、出やすくなってるなら一日に二回も入れ替わるなんて危険だから一日置いたほうがいいわ」

優斗 in 優菜「じゃあとりあえず、明日の夜までは入れ替わったままという訳ですか？」

優菜 in 優斗「優菜、俺の体の時は女言葉やめてくれ。方言とかももういいから」

優斗 in 優菜「分かった」

優菜 in 優斗「それじゃあとりあえず飯作って」

優斗 in 優菜「皆は食べるか？」

イフリート「俺は食うぞ」

アリエル「じゃあ私も頂きます」

ヘル「そんなに作れるの？」

クロノス「すぐじゃないか？」

カオス「すぐではないだろ」

ガイア「とりあえずみんなで食べましょう」

トラ「じゃあ食べてくか」

ホバル「別に食べなくても大丈夫だけどね」

ウンディーネ「そこは雰囲気だよ・・・」

メーテイス「どうせなので頂きましょうか」

カマエル「では頂きましょうか」

ミツハノメ「食べます」

アラメイ「俺も食べる」

アウラ「私も」

優斗 in 優菜「分かった、じゃあ作るか」

皆で食べた

そして風呂に入り色々面倒な事が残って、しかもややこしさが増したがこの後どうなるんだろ↑

ともかく一日が終わり寝た

第一百十七話（ペルソナ3に來た『第三話』より）

優菜 i n 優斗「ていうか結局メシアライザー使ってないじゃん!!しかもマヨナカテレ
ビ見てないし!!!」

目が覚め毛布の中でゴロゴロしているとそれを思い出し唐突に叫んだ

優菜 i n 優斗「・・・ここはどこだ？俺の体が無いという事は、ペルソナかドラゴン
ボールか？とりあえず着替えて外に出よう」

制服を見る

優菜 i n 優斗「ペルソナ3か、見つからない様に行こう」

制服に着替えて部屋を出ると

公子「あつ優菜ちゃんおはよう！」

優菜 i n 優斗「お、おはよう・・・『しまった・・・公子に出会ったのはマズいか？』」

公子「これから優斗くんの所に行くところ？」

優菜 i n 優斗「・・・そうだけど・・・何でわかった・・・？」

公子「昨日の見てたらそれぐらい分かるよ、頑張つてね！」

優菜 i n 優斗『何を？』

公子「じゃあまた後でね」

下に降りて行つた

優菜 in 優斗「バレてないか・・・？とりあえず優菜の所に行こう」

優斗も下へ

その頃のゆかり

ゆかり「今の何・・・？バレてないって・・・しかも優菜ってアンタじゃん・・・え？どうということ？」

実は公子があいさつした時点で扉が少し開いていたのである

そして着替えて挨拶しようとした所、公子が降りて行つた

しかたないので優菜だけでも挨拶しようとしたらあの言動であつた

怪しくなるのは当然である

そして優斗の部屋前

コンコン

優菜 in 優斗「俺だ」

優斗 in 優菜「入ってくれ」

ガチャ

優菜 in 優斗「とりあえず、改めてメシアライザーしてみるか」

優斗 in 優菜「やるのか？」

優菜 in 優斗「アリエル、頼む」

アリエル「はい」

パアアアア

優菜 in 優斗「・・・どうだ？」

優斗 in 優菜「・・・優斗、俺に何かいう事は？」

優菜 in 優斗「・・・怒ってる？」

優斗 in 優菜「そう思うのはお前に心当たりがあるからだ。そして、悪いと思うなら
まず謝れ」

土下座ア

優菜 in 優斗「すいませんでした!!!」

優斗 in 優菜「俺に女言葉や方言を使わせたのはどうだったんだ？優斗」

優菜 in 優斗「いや・・・その・・・」

優斗 in 優菜「面白かったかって言ってるんだよ、キスマでしたよなあ」

優菜 in 優斗「それはお前からやってきて」

優斗 in 優菜「きさん、いい加減せんとくらすぞ」

優菜 in 優斗「すいません!!何言ってるか分かりません!!!」

優斗 in 優菜 「ていうか性格変えすぎだし、あれじゃビッチじゃんかイリーナ先生
じゃんか」

優菜 in 優斗 「それは偶然の産物というか・・・」

優斗 in 優菜 「・・・はあ、もういいや。しゃつちが怒つても無駄やし」

優菜 in 優斗 「許してくれるのか？」

優斗 in 優菜 「もういいよ、後扉の前で聞いているゆかりと公子に・・・順平と湊もい
るかな？入って来ていいよ」

順平 「うわっ！バレてたのかよ・・・」

ゆかり 「・・・ほら、順平から入りなさいよ」

順平 「ちよ、ゆかりっチ！押さないで！」

公子 「待たせたら悪いって、ほら早く！」

湊 「順平、早く開けた方が良いんじゃないか？」

順平 「開けるから押すな！」

優斗 in 優菜 「とりあえず入れよ」

ガチャ

順平 「催眠って何だよ！女言葉や方言ってなんだ!?!」

ゆかり 「ていうかさつき、バレなかったって言ってたけど、どういう事!?!」

公子「二人つて結局どういう関係なの!？」

湊「とりあえず皆落ち着いて」

優斗 in 優菜「まず言わせてもらうと、俺と優斗は今入れ替わってるんだよ」

ゆかり「バレなかったってそういう事・・・じゃないわよ!一晩で何があったの!？」

公子「さっきのきさん、とかくらすぞ、とかは何?」

優斗 in 優菜「小倉の方言、さっきのをそのまま共通語にすると「貴様いい加減にしないで殴るぞ」つて意味だ」

順平「割と恐ろしいことサラツと言うなよ!」

優菜 in 優斗「催眠は俺がネットで催眠術を見つけてやって見たら見事にかかったんだが、戻せなくなって・・・まあ色々あった」

公子「一番大事なところ説明してないよね、それ」

優斗 in 優菜「公子は俺と優斗の関係とか言つてたけど、簡単に言えば同一人物のうな違うような」

公子「そこはハッキリ言つてどうでもいいよ」

順平「いやよくねえだろ」

公子「私が知りたいのは二人の間の好きって感情がLIKEなのかLOVEなのかって事だよ!」

優斗 in 優菜 「お前は思春期の女子か！」

公子 「そうだよ!!」

優菜 in 優斗 「俺は相思相愛だとおm」

顔を掴む

優斗 in 優菜 「お前は一回黙っとけ」

優菜 in 優斗 「ひゃい・・・すみません」

順平 「自分の体なのに容赦ねえ・・・」

公子 「優斗くんは尻に敷かれるタイプか・・・」

優斗 in 優菜 「とりあえず、俺はLIKEだと思ってる」

公子 「え〜」

優斗 in 優菜 「追及は禁止、そろそろ行かないと遅刻するぞ」

公子 「私は諦めないからね」

優斗 in 優菜 「諦めてくれ」

順平 「ちよつと待て！」

優斗 in 優菜 「どうした？」

順平 「お前はいいのか!? お前の体に何かさされるかもしれないんだぞ!!」

優斗 in 優菜 「こいつにそんな度胸はない」

優菜 i n 優斗「やったら即死だよ、即死」

順平「あ・・そすか」

登校中

ゆかり「そういえば今日、全校朝礼じゃん」

優斗 i n 優菜「普通にしてろよ？」

優菜 i n 優斗「お前にとっての普通って何？」

公子「何？今の会話」

順平「にしても入れ替わりか・・俺もできたりすんのかな？」

優菜 i n 優斗「出来なくはないだろうな、ヘルにやつてもらえばできるはずだ」

湊「やめろよ順平」

順平「勘違いすんな!」

公子「女子と入れ替わろうなんて思ってたら・・美鶴先輩に処刑されるよ？」

順平「やらねえから!信じてくれよ!」

ゆかり「日頃の行いが悪いからよ」

順平「会ってからまだそこまで経ってない!」

校門前

他の生徒とかたくさんいるので優斗は今女言葉です

優菜 in 優斗 「ねえ、寝ぐせ治ってないよ」

優斗 in 優菜 「いいって寝ぐせぐらい」

優菜 in 優斗 「ダメだって、そういうとこちゃんとしないと」

優斗 in 優菜 「どうせ今は出来ねえよ」

優菜 in 優斗 「そこは唾液で」

優斗 in 優菜 「汚ねえよ！」

優菜 in 優斗 「それは流石に冗談だけど、どうにかしないと、水かなんかで」

周りの男子生徒たちの心の声 「タヒねリア充」

同じクラスのなんとか 「あ、おい。有里」

湊 「?ごめん先行ってて」

順平 「じゃあまた後でな」

少し行つて

優菜 in 優斗 「アイツって確か・・・」

ゆかり 「同じクラスの人よ・・・確か名前は」

優斗 in 優菜 「友近健二だよ」

順平 「ああ、いたな確かに」

優斗 in 優菜 「クラスメイトだぞ、覚えろよ」

そして一旦教室に集まり並んで講堂へ

司会「・・・以上で、全校朝礼を終わります。続きまして、生徒会から、新しい役員
の紹介があります。生徒会代表、生徒会長、三年D組桐条美鶴さん」

美鶴「はい」

マイクの所まで行く

ゆかり「やっぱり先輩に決まったんだ。まあ・・・あの人の人気、凄いもんね」

順平「なんつっても桐条だもんね。オーラ出てるっつーか、近寄り難いつつーか。し
かも桐条グループって、このガツコの母体なんだろう？」

ゆかり「まあね。あんま日頃は考えないけどね」

美鶴「生徒会長という大役を拝命するにあたり、私の所信をお話しておきます。学園
がより良くあるために一人一人の積極性は確かに大事です。しかし、全員が一つの思い
を一年間ずっと切らさずおくのは、簡単ではないでしょう。大事なものは、それが途絶え
ても確実に回る仕組みをいかに造っておくかです。その為に、各自の中の明日への思い
を確認し、今この青春の時をどう過ごすのか。現実から逃げることなく、如何にして未
来を直視するのか。全てはそれに掛かっています。私一人の視野では、見えない物もたく
さんあるでしょう。充実した学園生活を共にするため、皆さんの知恵と力を貸してくだ
さい。よろしく願います」

パチパチパチパチパチパチ

順平「すげー・・・なんだあれ。お前は意味わかった？」

湊「なんとか」

順平「普通の高校生が言うことじゃねえよな・・・あの人じゃなきや笑い話だぜ」

そして午後

鳥海「じゃあ今日は明治の文学ね、教科書の十二ページ・・・あ、先生、この小説もう飽きたな。さっきのクラスでやったもん。先生ね、とつてもいい詩を知ってるの。はい、みんな教科書閉じて。山の彼方のはぐれ雲・・・」

優斗 in 優菜『午後までやつと来たか・・・あともう少し・・・』

鳥海「ちよつと後ろの男子！友近か！まさか寝てるんじゃないでしょうね!?先生、一生懸命読んでるのよ？可哀想じゃないの！反省文出しなさい！ケーキもつけてよね！前みたいなのやつすいケーキじゃダメよ！」

優菜 in 優斗『俺も眠い・・・』

優斗 in 優菜『寝るんじゃねえぞ優斗・・・』

優菜 in 優斗『なんか後ろから殺気がするから何とかして起きとこう』

そして放課後

皆（ゆかりは部活）で帰る時

下駄箱前で

真田ファン1 「來たわよ、真田先輩！」

真田ファン2 「えっ・・・ほんとだ！」

真田先輩を四人で取り囲む

明彦「・・・」

湊「・・・」

順平「お前、真田さんの事、よく知らないだろ？ いいよなー、アレ・・・」

公子「私は鬱陶しいと思うけど」

順平「分かってねえなあ」

優菜 in 優斗「いや、公子が正しい」

順平「え？」

優斗 in 優菜「知り合いの王子が言ってたんだが、よく知りもしない異性に取り囲まれるのって苦痛以外の何物でもないって私怨込めて言ってたぞ」

順平「マジでか・・・でも全戦無敗のボクシング部主将、確かにカッコいいと思うけどさ・・・普通ボクシングって、こんなキヤーキヤー騒がれるもんか？」

公子「顔でしょ」

順平「やっぱり？」

優菜 in 優斗「あんな感じで集まるのはボクシングにわかばっかだと思っぞ、よく知りもしないでただカッコいいだけ」

優斗 in 優菜「全員がとは言わないけどな、でも大体がそうだろう」

順平「結局顔か・・・」

湊「順平は落ち込んだら順平じゃなくなるぞ」

順平「俺の取り柄テンションだけ!？」

真田先輩が帰ろうと歩いていくと

真田フアン1「先輩!」

真田フアン2「待ってくださあーい!」

また取り囲む

優斗 in 優菜「な?鬱陶しいだろ?」

順平「俺っちもさすがに分かってきたぞ」

明彦「!」

優菜 in 優斗「あっ気づかれた」

明彦「おい、お前達、これから暇か?」

公子「ですね、特にやることもないです」

優菜 in 優斗「ひたすら暇です」

ビツ

優斗 in 優菜 『ファンに凄い敵視されてるな、いやこれは殺意も入ってるか？人の恨みというのは恐ろしいものだ』

明彦 「なら今からボロニアンモールまで来てくれ。場所は知ってるな？その交番で合おう。いいな」

湊 「分かりました」

順平 「え？交番？」

明彦 「俺は先に行くからな、必ず来いよ」

真田ファン1 「ちよつとセンパクイ、少しは相手してくださいよ〜！」

真田ファン3 「でも、そういう冷たい感じ、スツゴイ、いいと思います、アタシ！
付いて行った

優菜 in 優斗 「ある意味すげえな」

優斗 in 優菜 「ちよつと尖ってるやつが好きになるらしいからな、学生は」

公子 「なんで？」

優斗 in 優菜 「日常の中で刺激が欲しいから、そういう人が好きになるんだよ」

順平 「じゃあ俺も真田先輩みたいになつたらモテる・・・!？」

湊 「順平は逆効果じゃないかな」

優菜 in 優斗「ていうか交番だったよな？行こうぜ」

てこでボロニアンモール・交番

明彦「じゃあ黒沢さん、これ頂いていきます。あと、さっきの話、こいつらの事です」

黒沢「・・・」

明彦「待つてたぞ、紹介しておこう。この人は黒沢巡査、俺たちの活動に協力してくれてる。それと・・・これは幾月さんからだ」

順平「え、マジいいんスカ!？」

それぞれ五千円貰った

優菜 in 優斗「これをはした金と思ってしまふ俺は末期なんだろうな」

優斗 in 優菜「おい、まさか隠れて使ってるんじゃねえよな？」

優菜 in 優斗「いや、そんなことはねえですよ。マジで」

優斗 in 優菜「・・・課金か？」

ギクツ

優斗 in 優菜「後で覚悟しとけよ」

優菜 in 優斗「はい・・・」

明彦「そういえば、二人とも今日は雰囲気が違うな。全くというより、逆なような」

公子「昨日の夜中色々あって入れ替わったらしいですよ」

明彦「なに!？」

優斗 in 優菜「夜ちゃんと戻りますから」

明彦「そ、そうか。とりあえず、手ぶらじゃ戦えないからな。ここで準備しろ。黒沢さんは、仕事のコネで俺達の装備品を揃えてくれる。もつとも、タダにはしてくれないけどな」

黒沢「当たり前だ、世の中にタダのモノ等無い」

明彦「分かってますよ。じゃあ、俺はこれで」

出て行った

黒沢「君達の事は聞いている。俺の仕事は、街の治安を守る事だ。たとえそれが、どんな事情であつてもな。力など無くとも、俺にはこの町の異変は分かる。俺は、俺が信じることをする・・・それだけだ」

優菜 in 優斗「かつけえ・・・」

優斗 in 優菜「でも俺と優斗は武器あるからな、今のうちはまだ大丈夫だろう」

公子「私は買つところかな」

順平「こういうのはちゃんとしねえと・・・」

優菜 in 優斗「ていうかお前は殴るだけだろ」

優斗 in 優菜「後で殴るからなお前の頭」

優菜 in 優斗 「お前の体だろ！」

優斗 in 優菜 「だから本気で殴れるんだよ」

優菜 in 優斗 「いやだああああ!!」

湊 「騒がしい奴ばかりですいません」

黒沢 「元気なのはいいことと思うが、ここでは静かにしてくれ」

そして帰って一発殴った

ラウンジにいるが・・・

公子 「それじゃあ、戻るの？」

優斗 in 優菜 「ああ、ヘル」

ヘル 「なに？もう戻すの？」

優斗 in 優菜 「当たり前だろ」

ヘル 「ええ、面白いじゃない今の方が・・・アンタはどう思う？」

順平 「え？俺すか？・・・そのままの方がいいかと（ー、ドー）キリッ」

ヘル 「ほら、こいつもこう言ってるし」

優斗 in 優菜 「ヘル、早くしろ」

ヘル 「分かったわよ、戻せばいいのよね」

魂を掴んで入れ替えた

公子「……戻った？」

優菜「ああ、めんどくさかった……」

優斗「やっぱこっちの方がいいか」

ヘル「戻さなかった方が面白かったわね」

順平「ヘルさんヘルさん」（小声）

ヘル「なに？」（小声）

順平「俺も誰かと入れ替えてくださいよ」（小声）

優菜「何話してんだ？」

順平「大丈夫だー、なんでもない」

ヘル「……やっぱり女子とがよかったり？」（小声）

順平「当たり前じゃないですか、女体は男のロマンですよ」（小声）

ヘル「優菜がいいの？命を捨てる覚悟がいるけど」（小声）

順平「それは流石に恐いから……公子で」（小声）

ヘル「公子って誰？」（小声）

順平「その茶髪の子です。お願いできますでしょうか」（小声）

ヘル「分かったわ、まかせなs」（小声）

優菜「誰かと入れ替わろうなんて思っていないよな順平」

順平「お、思ってたねえよ！」

優菜「・・・公子、部屋まで逃げろ」

公子「順平まさか・・・！」

順平「いや信じてくれよ!!」

ゆかり「あれ?どうかしたの？」

順平「ゆかりっちまで来ちまった・・・ヘルさん、今の話はなかったことに！」

ヘル「いいの？」

順平「やったら殺される!!」

部屋まで逃げて行った

ゆかり「・・・ホントに何があつたの？」

公子「順平が欲望を解放しようとした」

優斗「とりあえずもういいだろ」

優菜「ていうかヘルはやろうとしてんじやねえよ」

ヘル「チツ」

優菜「おい今舌打ちしただろ、戻れ」

戻した

湊「そうだ。言い忘れてたけど、今日タルタロス行くよ」

皆「え？」

順平を連れてタルタロスまで来た

順平「いやホント・・・さっきはすみませんでした」

公子「そういうえば、あの時って誰狙ってたの？」

順平「それ言わせる？」

公子「言つて」

順平「・・・公子」

公子「マジ？」

順平「マジ」

公子「私とがいいのか・・・嫌だからね」

順平「ですよね・・・」

湊「順平、お前には一生無理だ」

遠くから見てた優菜たち

ゆかり「順平そんなことしようとしたの？・・・いや順平ならしそうだなー」

優菜「まあヘルにはくぎ刺したからできないだろ」

美鶴「準備は出来たか？」

湊「はい。皆行くよ」

その後探索が終わり帰って寝た

そして変わったことはなく・・・まあ湊と公子は部活入ってたけど

ついでに言うとうと優斗は入らんで、俺は公子と同じ女子テニス入った

タルタロスを進めながら日々を過ごして

てわけで数日後

学校・講堂

司会の先生「えー、では全校朝礼を始めます。まずは校長先生からのお話です。では

お願いします」

校長「うむ」

ゆかり「急に、なんだろう？・・・やつぱり、最近の事件の事かな。世間も騒がしいし

ね・・・」

順平「さあな・・・でも、シャドウの事とか、校長が知ってるわけないしな」

優菜「普通に言ってるじゃねえ」

順平「あ、すまん・・・でもまあ、あんま長くならなきゃいいけどナ・・・」

ゆかり「うちの校長。話し好きで有名だもんね・・・」

校長「えー、諸君らに今日は特別に、大切な話をしようと思います。あー、世間では、

不可解な事件や、理不尽な事件が多いようですが・・・うー、この学園の生徒である諸

君らには、関係ないことだろうと思います。えー、しかし高校生という若い時期には、様々な悩みもあるでしょう。まー、だからといって、あまり、思い悩むことはないのです。えー、過ぎたるは及ばざるが如しという言葉を紹介します。あー、これの意味はといいますと……」

まだ続いている

ゆかり「これって……もしかして、前の桐条先輩のスピーチ、意識してる……？」
順平「たぶん、そんなトコだな……ま、同じ男として、気持ちは分かるけど……」

そして放課後に湊と公子が生徒会室に入って行くのを見た

まあ俺は女子テニス行つた

部員は数はいるが、合コンとかばっかでろくに練習しない

俺？初心者だから普通にできない、まあ運動神経でカバーしてるけど

そして一週間後

学校から帰つてくると

美鶴「シャドウの襲撃のせいで不通になっていたインターネットだが……明日には復旧する予定だ。部屋にパソコンがあるなら繋いでみるといい。これでシャドウにやられたものは全て……いや、明彦のアバラが残ってたな」

そしてやる事が無さ過ぎていつの間にか五月一日

放課後・教室

順平「そういうや、知ってた？真田さん、今日、検査入院でさ。さつき連絡あつて、病院に届け物頼まれちゃったんだよネ。俺って、結構頼られてる？」

ゆかり「そんなの、帰宅部なら暇だろうって頼んだんでしょ」

順平「そ、そんな事ねーだろ」

ゆかり「ハハ、冗談だつて。で？何を持って来いつて？」

順平「隣のE組のクラス名簿とハンドグリップだつてよ」

湊「ハンドグリップつて・・・握力鍛えるやつだっけ」

公子「いや、大丈夫なのそれ」

ゆかり「名簿・・・？どうすんだろそんなの。ていうか、今日たまたま部活休みだし、付き合おつかな、それ」

優菜「どつちにしろ、呼び出されてるんなら早く行ったほうがいいだろ」

公子「なら早く行こうよ」

湊「僕も行かないとダメか？」

優斗「この流れで行かないのはダメだろ」

病院の明彦の病室へ

中に入ると真田先輩の姿はなく

椅子にニット帽をかぶった高三程の男子が座っていた

荒垣先輩だ

順平「？ここつて真田さんの病室・・・」

荒垣「・・・」

順平「・・・じゃなかったりします？」

明彦「お前達、どうした？大勢で」

後ろから明彦が入ってきた

ゆかり「お見舞いに來ましたっ！・・・でもなんか平氣そうですね」

明彦「ただの検査入院と言ったろ」

荒垣先輩が立ち上がる

荒垣「アキ、もういいか？」

明彦「ああ、参考になった」

荒垣「つたく・・・いちいちテメエの遊びに付き合ってもらえるか」

優菜「クロノス、ザ・ワールド」(小聲)

時間を止めて、紙に

「奴らから薬を貰うのはやめろ、お前自身それを飲み続けていたら先が短いというのは分かっているであろう。薬は私がかする、下記の電話番号に電話してくれ・・・

060—@@@—***」

そう書き荒垣のポケットに入れた

時間を動かすと荒垣は出て行ってしまった

優菜『荒垣先輩はあんな感じなのか・・・コロマルとのイベント早く見てえな』

順平「だ・・・誰っすか、今の？」

明彦「一応、同じ学園の生徒だ。先月から増えだした謎の無気力症・・・お前達も知ってるだろ。アイツたまたま、患者の何人かを知ってな。話しが聞きたくて呼んだ。それより順平、頼んでた物は？」

順平「モチ、持ってきたっす」

クラス名簿とハンドグリップを渡す

すると早速ハンドグリップをしだす

順平「ちよっ、そんな動かしたら・・・」

明彦「平気だ、このくらい。あまり長いと部活にも響くだろ、取り戻す時間が惜しい」
順平「おお、さっすがボクシング部のエース！四角いリングが俺を待ってるぜ！・・・つてワケっすか！」

明彦「意味が分からん」

ゆかり「そう言えば先輩って、何でボクシングを？」

明彦「・・・始めた理由か？ そうだな・・・別にボクシング自体に思い入れはない、素手の格闘技なら何でも良かった。昔、自分の無力さを思い知った事があってな・・・もう、ああいう後悔はしたくないんだ・・・それに、自分がどこまで強くなれるのか、興味もあるしな。まあ、言ってみれば自分対自分の終わらないゲームみたいなものだ」

順平「な、なるほど・・・ゲームっすか・・・好きっすよ！俺もゲームツ！」

ゆかり「あんたのはテレビゲームでしょ？」

順平「あ、でも格ゲーもやるよ？」

優菜「・・・」

公子「？どうかした？」

優菜「いや、サッカー部入ってた時に台風で試合が中止になつてな。それで友達に「ゲームしまくるわ」って言ってたのを聞いて、サッカーって試合の事ゲームって言ったりするから「えっ?! 試合するの!？」ってなつた事あつたなあ・・・って思い出してきた。それでサッカーに脳が侵食されてきてるなつて思った」

順平「サッカー部ならではって事か？」

優菜「だね」

湊「そろそろ帰らない？」

明彦「時間が時間だしな・・・俺は今日一日いるから帰っていいぞ」

ゆかり「それじゃあまた」

明彦「ああ」

次の日・朝

順平「明日からゴールデンウィークか・・・お前らなんか予定ある?」

ゆかり「部活」

公子「部活」

優菜「部活」

優斗「無し」

湊「部活」

順平「ほとんど部活じゃんか・・・」

公子「でも最終日は休みだよ」

ゆかり「私も」

優菜「公子と同じ部活の俺ももちろん休み」

順平「おつ、じゃあ遊ぶか?」

優斗「じゃあカラオケかなんか行くか?」

順平「おー、いいなそれ」

優菜「なら街皆でぶらぶらすればいいじゃん」

ゆかり「どっちにしろ、今日は学校だからね」

順平「へーい・・・分かってます・・・」

キーンコーンカーンコーン

湊「チャイム・・・」

順平「げっ！もうそんな時間!？」

優斗「急げ！」

そして放課後

順平「結局どーすんの？」

ゆかり「無し」

優菜「分かんらん」

公子「分かんない」

湊「さあ？」

優斗「サツカーしようぜ」

順平「なんか最後全然関係なさそうな事聞こえたんだけど・・・みんな遊ぶ気ねーのかよ」

ゆかり「ていうかゴールデンウィーク明けたらすぐに中間試験よ。勉強は大丈夫なの？」

順平「あー・・・それは言わんでくれ」

優菜「遊べる暇があるのは今だけだが、赤点は回避しろ」

順平「分かってますよー・・・」

優菜「遠い目をするな」

そしておそらく公子と湊がコープ上げまくったゴールデンウィークも終わり

満月の日

放課後、皆すぐに帰ってきた

深夜0時

影時間・開始

作戦室

美鶴が通信機器をいじっている

美鶴「ふう・・・」

そこに明彦が来る

明彦「なんだ、まだやっていたのか？」

美鶴「まあな。敵はいつ来るとも限らない」

明彦「タルタロスの外まで見張ろうなんて、そう簡単に出来るものか？」

美鶴「本音を言えば、力不足だな・・・私のペンテシレアでは、情報収集はこの辺り

が限界かも知れない」

ガチャ

優菜が入ってきた

優菜「あれ？先輩たち何してるんですか？」

美鶴「ああ。通信機器の整備をな」

優菜「美鶴先輩のペルソナってサポート専門じゃないですよね？」

美鶴「・・・確かに私のペンテシレアでは限界を感じ始めている。しかし、ペルソナの力というのは、想像していたよりだいぶ幅広いものらしいな。何しろ、次々とペルソナを替えながら戦えるものまで現れたぐらいだ。しかも四人」

優菜「俺と優斗は別ですけど、湊と公子はワイルドつて言うんですよ。会ったのはこれですよ」

明彦「他に二人いるのか。立ち合いたいものだな」

優菜「ただワイルドにも欠点はある」

美鶴「欠点？」

優菜「普通のペルソナ使いが使えるペルソナは一体だが、その分成長の幅は広く、最終的に強くなる。でもワイルドは色んなペルソナを使える分一体一体の成長の幅は狭い、だからペルソナの合体というのを繰り返して強いペルソナを作って戦うんだ」

明彦 「じゃあペルソナの合体というのは、どこでするんだ？」

優菜 「全員同じ場所でやっていた。ベルベツトルームだ」

美鶴 「それは確か、前に湊と公子がボーっとしてた時に入ってたという場所か？」

優菜 「そうです。あそこはどこかで契約を結んだ者のみが入れる場所」

美鶴 「そうか、色々聞きたいことはあるg」

ビッ

優菜 「美鶴先輩、周りのシャドウ反応を探知してみてくださいよ」

美鶴 「？わかった」

通信機器を使い、索敵すると

美鶴 「これは・・・シャドウの反応!？」

明彦 「なに!? ホントに見つけたのか!？」

優菜 「こりやちよつと強くないですか？」

美鶴 「ああ、大きすぎる。こんな敵は今まで・・・」

明彦 「まさか、先月出たのと同じ、デカい奴か!？」

美鶴 「・・・間違いないだろう」

明彦 「そうか・・・思いがけず、楽しめそうじゃないか」

優菜 「ならとりあえず皆呼んで来ましょうか？」

明彦「いや、ここからサイレンを鳴らしたら起きるはずだ」

入口から左手側にある機器を使ってサイレンを鳴らす
少しすると

ゆかり「お待たせしました！」

順平「何スか!?! 敵スか!?!」

公子「いないと思つたら、ここにいたんだ」

優菜「たまたまだよ。ホントにたまたま」

美鶴「タルタロスの外で、シャドウの反応が見つかった。詳しい状況は分からないが、先月出たような大物の可能性が高い。外に出た敵は仕留め逃がす訳にはいかない。影時間は大半の者にとつて無いものだ。そこで街を壊されたりすれば矛盾が残る。それだけは絶対に避けたい」

順平「ま、要は倒しやいいんでしょ? やつてやるっスよ!」

ゆかり「また、あんたは・・・」

美鶴「晶彦はここで理事長を待て」

明彦「なっ・・・冗談じゃない! 俺も出る!」

美鶴「まずは身体を直す方が先だ。足手まといになる」

明彦「なんだと!?!」

公子「真田先輩、長期的に見て今やってケガが悪化して前線に戻るのが遅れるのと、ここは湊たちに任せてその後戦線復帰するか。どっちがいいんですか？」

美鶴「そういうことだ。彼らだつて戦えるさ。少なくとも、今のお前よりはな。明彦……もつと彼らを信用してやれ。みんなもう実戦をこなしてるんだ」

優菜「いざとなつたら俺が入る。心配しなくても大丈夫ですよ」

美鶴「大人しく、ここで理事長を待て」

明彦「……。……クソッ」

順平「任してください！オレ、マジやりますからっ！」

明彦「仕方ないな……湊、現場の指揮を頼む」

順平「やつぱ、コイツかよ……」

美鶴「頼むぞ……出来るな？」

湊「……分かりました」

順平「つーか、何かお前、このままリーダーが定位置になりそうだよな……ま、別にいつけど」

明彦「なら六人は先行して出発だ。お前は、外でのバックアップとなると、準備がいるだろ」

美鶴「駅前で待っていてくれ、すぐに追いつく」

ゆかり「了解です。じゃ、行きますか!!」

駅前

ゆかり「まだかな・・・」

順平「すぐ来んだろ」

ゆかり「今夜は満月か・・・なんか、影時間に見ると不気味ね」

優菜「湊達が覚醒したときも満月だったな」

公子「あの時のシャドウも強かったんでしょ？暴走して倒したけど」

優斗「なら満月に強い奴が来るのか？」

順平「たまたまじゃね？湊はどうよ」

湊「どうでもいい」

順平「どうでもいいって・・・」

ブルン

ブルルルルルルルル

順平「・・・ん？なんだあ!？」

美鶴がバイクで到着した

ヘルメットを取る

美鶴「遅れてすまない。いいか、要点だけ言うぞ。情報のバックアップを、今日はこ

ここから行う。キミたちの勝手はコレまで通りだ。シャドウの位置は、駅から少し行つた辺りにある列車の内部。そこまでは線路上を歩く事になる」

順平「え、線路歩くつて、それ、危険なんじゃ・・・」

優斗「今は影時間だぞ、電車が動いてるわけないだろ。下に落ちない限り大丈夫だ」

順平「え、でもそのバイク・・・」

美鶴「これは特別製だ。それに、状況に変化があつたら私が逐一伝える」

ピピピピピ

美鶴「よし、では作戦開始だ！」

ゆかり「はい」

順平「う・・・うっす！行つてくるっす！」

線路に乗る

美鶴「そこから約200メートル前方に停車しているモノレールがあるはずだ。乗客に被害が出るとマズイ。急行してくれ」

公子「今回は来るの？」

優菜「相手が相手だしな、何かあつた時用だ」

順平「助ける暇もないくらい一瞬で倒してやるよ！」

優菜「そういうのフラグつて言うんだぜ、順平」

ゆかり「電車つてアレじゃない？」

少し奥に電車が見える

優菜「多分そうだな、一寸確認してこようか」

シユタタタタタ

公子「速ッ!!」

優斗「ホントなんでアイツ陸上入らねえんだろ」

湊「人外レベルだからじゃない？」

順平「お前から驚かなさすぎだろ！」

追いついた

優菜「ココっぼいな」

ピピピピピピ

美鶴「六人とも、聴こえるか？」

ゆかり「あ、はい、大丈夫です。今着いたんですけど、パツと見じや、特に・・・」

美鶴「敵の反応は、間違はなくその列車からだ。六人とも、離れすぎない様に注意し

て進んでくれ。優菜と優斗はサポートだな？」

優菜「じゃあ死にかけたやつが出たら回復だけしますよ」

美鶴「生きて帰って来い、頑張ってくれ」

通信が切れた

優菜「あの人最後にフラグ立てていきやがったよ……」

順平「へへッ、腕が鳴るっつか、ペルソナが鳴るぜ！」

優斗「とりあえず入ろう。入らないと始まらない」

ゆかりが梯子を登ろうとすると

ゆかり「……ノゾかないでよ」

優菜「だったら男から先に入れ、なんだったら俺から入るぞ」

公子「いや男子から入ってもらおう!?ね!」

そして全員入ると

車内左側に黒い棺が立っていた

順平「これ、人間……つか、乗客だよな?象徴化つてやつか……マジ、気味わりイ……」

でも影時間に気づいてない人って、今の時間、無いことになってんだよな。嫌な事なら、

いつそ知らない方が幸せってか?」

ゆかり「あれ……ちよつと待って。こんな駅でもないところに停まってんのに、ドア

全開って、おかし……」

プシュー

ガシャン

ゆかり「あっ!?!」

優菜「閉められた!?!」

順平「くそっ……開かねえっ!ちつくしよ……やられた!!」

公子「でも最初から倒すつもりだったからあんまり関係ないんじゃない」

優菜「最悪あの穴で脱出できるし」

順平「つか、指スッゲー、イテエ!見てほらここんとこ、指先へこんでんだろ!?!」

優菜「大丈夫だ。そのくらい誰でもなる」

美鶴「どうした、何があつた!?!」

ゆかり「それが、閉じ込められたみたいで……」

美鶴「シャドウの仕業だな……確実に、君らに気づいてるといふ事だ。何が来るか分からない。より一層、注意して進んでくれ!」

ゆかり「りよ、了解です」

次の車両に進む

順平「あれ?シャドウいないじゃん。んだよ。拍子抜けだよ……」

優菜「!」

ヒユッ

ドガア

ゆかり「何!？」

優菜「どうやら敵はシャドウだけじゃないらしい、ゾンビだ」

ゾンビ「ヘッ、奇襲は失敗か」

優菜「喋れるって事は、ディオに作られたヤツか。アイツどんだけ作ってんだよ」

ゾンビ「誰が俺だけって言った？」

さつきまで居た車両の奥に穴が開く

そこからぞろぞろとゾンビが出てくる

優斗「めんどくせえな」

美鶴「今度はどうした!？」

優菜「あく、面倒な奴がぞろぞろと出てきちまいやして、ここは俺がやります。任し

てください、一分とかからず殺しつくしますよ」

カオスの空間から手のひらサイズの白い棒を取り出す

そして口にくわえる

順平「お前、それタバコか!？」

優菜「ココアシガレットだよ、俺は心も体も17歳だバカやろー。お前らも食った事

あるだろうが」

公子「いやそれより、ゾンビ!？」

優菜「嘸まれて感染するような奴じゃなくてよかったな」

湊「・・・どういふ人生送ってきたの？」

優菜「ここは俺に任せていけ、大丈夫だこんな奴らワンパンだ」

優斗「俺はこいつ等と一緒に一緒だな？」

優菜「ああ」

順平「なんでさつきからフラグにフラグを重ねてんだよお前ら!!」

湊「・・・任せよう」

公子「うん、相手のこと分かってるみたいだし任せよう」

優菜「ああ、敵さん凄い待っててくれるから行ってあげてくれ。そろそろ車両がパ

ンパンだ」

公子「ゆかりはさつきから喋らないけど、大丈夫・・・って泡吹いて倒れてるんだけど!?!」

ゆかり「ぶくぶくぶく・・・」

順平「ゾンビとかそういうのダメだったか！」

優菜「とりあえず行け!!」

優斗「終わったらすぐ戻って来いよ」

優菜「・・・当たり前だ」

皆次の車両へ

さっきのゾンビ「良かったのか？仲間を行かせちゃまって」

バリバリバリバリ

さっきのゾンビ「なに普通に菓子食ってんだ!？」

優菜「いや、久しぶりに食ったらめっちゃくちや美味かったんだ。すまん」

さっきのゾンビ「まあいい、お前ら行くぞ!!」

コオオオオオ

ドガッ

ドババババ

優菜「お前らもあの世に行ってこい」

湊達は

公子「ゆかり！起きて！気づいて！」

美鶴「良かったのか？おいてきて」

優斗「アイツがやられるときは世界の終りです」

ゆかり「うーん・・・」

順平「起きたか？」

ゆかり「あれ？私何してたんだっけ・・・」

優斗「思い出してる暇があるなら倒しに行つた方が良いじゃないか？」

ゆかり「あ、うん。分かつた」

湊「・・・思い出されて倒れられても困るからね。ナイス判断」

優斗「何気に死地を超えてきてない」

少し進むと

ゆかり「ずいぶん静かね・・・」

順平「優菜が居なかつたら、今頃ゾ・・・」

すると上からシャドウが降つてきた

ゆかり「うわっ!？」

順平「出やがつたなッ！」

次の車両へ入つて行つた

順平が追いかけてようとすると

美鶴「待てっ！敵の行動が妙だ。嫌な予感がする」

順平「そんなっ！追つかけないと、逃がしちまうっスよ!？」

美鶴「有里、現場の指揮は君だ。この状況・・・どう思う?」

湊「確実に罠ですね」

美鶴「私も同意見だ。うかつに追うべきじゃないな」

順平「なんでだよ!? イチイチお前の意見なんか要らねーよ! あんなの俺らで倒せんじゃん! てか、俺一人だつてやれるっつーの!」

ゆかり「あ、コラ、順平ッ!」

美鶴「危ない、後ろだ!!」

直ぐにナイフを取り出し攻撃を受け止める

優斗「イフリート、大炎上」

ゴオオオ

ゆかり「つたく・・・さっそく敵のペースじゃん・・・」

美鶴「こうなつては仕方ない。とにかく、君らも伊織を追つてくれ。このままでは各個撃破の的だ」

湊「行こう」

優菜は

カオスの空間から銃を取り出し乱射する

後ろから湊達の所に行こうとした奴が居たので波紋を纏ったヘッドショットを決める

この距離なら波紋が飛ぶ前に当たる

優菜「血だらけにさせやがって、これじゃあ影時間が終わったら矛盾が出るだろうが」

やっと出て来なくなるぐらいには掃除できたが

優菜「この穴がある限り出てきやがるよな・・・核かなんかでもあれば・・・」

穴の中にクリスタルのようなものがみえる

優菜「絶対あれだ・・・よし」

パアン

ピンッ

優菜「硬いな・・・じゃあこれでどうだ」

気の剣を伸ばして切り刻む

優菜「これでどうだ？」

すると穴がちじみ始める

優菜「プレゼントだ」

手榴弾を投げ込む

襲いに・・・いや涙目で逃げてくるゾンビが吹き飛び、穴が閉じた

優菜「行くか」

湊達は

次の車両へ行こうとすると

シャドウが向かってきた

優斗「お前らは温存しとけ、こんな奴ら一発だ」
ザザッ

向かってくるシャドウをどどん倒していく

公子「強い・・・」

優斗「ついて来い」

少し進むと

優菜「お前ら大丈夫か？」

湊「もう後ろは大丈夫？」

優菜「アイツらなら根絶やしにした。ところで順平がいないみたいだが・・・まあ大体予想はつく」

ゆかり「つたく・・・一人は危険だつてわかってるはずなのに・・・順平何かおかしかったよね。有里君何か言った？」

公子「考えるより訊いたほうが早いんじゃない？」

優菜「気はもう二個先の車両にいる」

湊「急ごう」

二個先の車両へ

ゆかり「あ、いた！ヤバ、敵に囲まれてるじゃん!?助けるよ!」

近付く

ゆかり「順平っ！」

順平「くそっ・・・オレ一人だっつて！コノ、コノツ！」

ドガツ

順平「ぐあっ!!」

ドサア

公子「順平！」

優菜「おい、俺の仲間に、何してくれてんだ？」

シャドウ「ガアアア!!!」

優菜「死ね」

パンパンパン

シューアアア

ゆかり「言わんこっちゃやない！一人で勝手するからよ、もう・・・で、大丈夫？」

順平「大丈夫に決まってるだろ!？」

公子「裏返った声で言われても説得力無いよ」

順平「っーか、別に助けなんか・・・」

ゆかり「ちよつと、アンタねえ！」

胸ぐらをつかむ

優菜「お前今の状況分かってんのか!?今ここで倒さねえとあのシャドウがどうなるかなんて俺にも分からねえ!だがな、そこでお前が一人でやるこたあ、ねえんだよ!!一人で出来ることなんてたかが知れてる!!お前に出来ないことは俺たちがやる!!だから俺たちが出来ねえことはお前がやれよ!!」

美鶴「おい、気をつけろ!敵の動きが急に静まった。警戒を怠るな!」

ガシャン

公子「電車が!」

順平「なんだよ!動かねえんじやなかったのかよ!」

美鶴「どうやら、列車全体がシャドウに支配されてるらしいな」

ゆかり「らしいって・・・ちよつと、大丈夫なんですか!」

スピードが上がる

順平「お、おい・・・ヤバくねえ?」

美鶴「マズい、このままスピードが落ちないと、数分で、一つ前の列車に衝突する!」

ゆかり「衝突!?!何なんですかそれ!」

美鶴「いいか、落ち着いて聞くんだ。さつきから先頭車両に強い反応を感じる。多分

それが本体だ。行って倒し、列車を止めるんだ」

優菜「チツ、説教は後だ。さっさと倒しに行くぞ」

シヤドウが落ちてくるが

シュバツ

気の剣で切り裂く

優菜「どけ」

進んでいく

優斗「キレてるなあ・・・」

公子「やっぱり？」

優斗「もしかしたら一人で倒しちゃもうんじゃねえか？」

湊「それって、冷静な判断が出来てないって事じゃない？」

優斗「ああ、そうなるな」

ゆかり「とりあえずついて行かないと！」

順平「・・・」

ゴゴゴゴゴ

ゆかり「え、何!?!もしかして加速してる!?!」

優菜「さっさと行って倒せばいいだろうが」

戦闘車両の扉まで来た

美鶴「本体はその中だ！準備は良いな？」

湊「はい」

中に入ると左半身が黒、右半身が白で周りに伸びた髪は左が白、右が黒の大きなシャドウがいた

順平「うつわ・・・すげー事になってんな・・・こいつが本体？」

ゆかり「先はもう無いし、コイツで間違いないよ！」

美鶴「急ぐんだっ！」

優菜「決めた、今回から俺も戦線に加わる。まずはこいつを倒すぞ!!」

順平「当たり前だ！うおらあ!!」

シャドウが順平にブフを使おうとする

優菜「ミツハノメ！」

ミツハノメが間に入り攻撃を肩代わりする

優菜「やれ順平！」

順平「ヘルメス!!」

ゴオオオ

優斗「美鶴先輩！弱点分かりますか!?!」

美鶴「調べてはみる！」

ゆかり「イオ！」

ブオツ

優菜「効いてはいるが、弱点ではないか」

湊「ジャックフロスト！」

跳ね返ってきた

しかしジャックフロストに氷結は無効

湊「氷結はダメらしい」

公子「オモイカネ！」

ピシャーン

公子「弱点あるのこれ!？」

優菜「カオス、エイガオン」

優斗「ウンディーネ、コウガオン」

シユウウウ

優菜「これは無効か・・・弱点無しか」

優斗「核熱と念動は？」

優菜「この時代はその概念が無い、P5から出たからな」

ボスシャドウ「ゴアアアア!!!」

シャドウが出てきた

優斗「雑魚シャドウは任せていいか？」

優菜「いつその事状態異常からのTECHNICALができれば・・・」

？「貴方達ホント鈍感ね。私達はずっと貴方達の中に居るのに」

優菜「なんだ？誰だ！」

？「俺達はずっと前からお前達の中に居た」

優斗「まさかペルソナ？」

？&？「新たな力を欲するならば、我たちの名を呼べ」

優菜「・・・言おう」

優斗「ああ」

優菜「アフロディーテ!!」

優斗「エロス!!」

ブオオオオオオ

アフロディーテ「やっと出番ですか、待ちくたびれました」

エロース「呼ぶまでが遅すぎだ」

優菜「俺はもういないもんかと思っただよ」

優斗「だがここで出るって事は使えるって事だろ？早速使わせてもらうぜ。闇夜の閃光!!」

目眩率UP＋特性淀みきったオーラで雑魚シャドウ×2が目眩状態

ゆかり「ありがと！」

順平「おりやあ！」

雑魚シャドウ二体ダウン

優菜「アフロディーテ、ブレインジャック!!」

洗脳UP＋特性淀みきったオーラ＋特性汚れた霊の巣窟

雑魚シャドウ二体洗脳

優菜「その二体は少し置いとけ！洗脳中はこっちに攻撃はしてこない！」

優斗「だが肝心のかい奴に効いてないぞ」

優菜「さつきアフロディーテのスキルをチラ見したが、魔道の才能があった」

優斗「なんだそれ」

優菜「全属性の魔法攻撃力が自動的に25%UPだ。お前の・・・エロースだよな？」

そいつは何かないのか？」

優斗「ちよっと待て・・・それっぽい奴なら魔術の素養つてのがあるぞ」

優菜「それはアレだ。自動的にスキル使用時のSP使用量が半分になる。強えな」

公子「そろそろどうにかならない!？」

美鶴「相手も弱ってきている! たたみかけろ!!」

優菜「いつの間にかもう終盤か」

優斗「じゃあブツ倒そうか」

優菜と優斗が斬りこみ

続いて公子が槍で刺す

三人が避けるとゆかりが弓を射る

そしてそこに湊と順平がいく

湊「行けるな順平」

順平「あたぼうよ!!」

ズザッ

そしてシャドウが消え去った

順平「ギリギリ・・・セーフか?・・・ってオイ! 止まんねえじゃんか!」

ゆかり「そっか! ブレーキかかかないと、すぐには・・・!」

美鶴「おい、どうしたっ!? 前の列車は、すぐそこだぞ!」

優菜「俺が飛んで外から止める。お前達はブレーキ頼む」

順平「うがー! こんなモンの運転なんて分かつかよ!」

ゆかり「キヤアアア!!!」

ヒュンツ

湊「勘でやってみる」

公子「分かった!」

湊と公子がそれらしき棒に手をかける

優斗「順平とゆかりは任せろ!」

優菜「行くぞ! セーの!」

キキーツ

ガガガガガガガ

.....

順平「と・・・止まった?」

ゆかり「止まつてる・・・みたい」

美鶴「おい、怪我はないか!?!」

公子「なんとか大丈夫です」

ゆかり「や、やば、あたしヒザ笑ってる・・・」

優菜「真面目に死んだかと思っただぞ」

順平「戻ってきたのか・・・」

優菜「あと5メートルだったぞ」

湊「ギリギリの戦いだっただぞ」

優菜「スツキリしたけどな」

順平「あーっ、あーもうっ、メチャクチャ、ヤな汗かいたっつーの・・・」

美鶴「ふう・・・無事らしいな。今回はバックアップが至らなかった。済まない・・・私の力不足だ」

優菜「そういう時の俺ですよ」

美鶴「シヤドウの反応はもう無い。よくやってくれた、安心して戻ってくれ」

ゆかり「てか、ブレーキよく分かったね？」

湊「聞こえてなかった？勘だよ」

順平「マジかよ!?!」

公子「結果オーライだよ!」

優斗「最悪俺が止めてたしな」

順平「つか、帰り、何か喰ってかねえ？安心したら腹減っちゃまったよ」

湊と公子のコープが上がったのを見届けて戻った

優菜「ふわぁ・・・この時間まで起きてるのはP3ぐらいだな」

公子「そういえばさつきP5とか言ってたけどそれなに？」

優斗『何でコイツは割と痛いところついてくるんだろう』

優菜「気にしたら負けだ」

公子「えゝ教えてよ」

優菜「どうすつかね」

公子「いいじゃん教えても」

グイイイイ

優菜「ほっへをひっはるな（ほっぺを引っ張るな）!!」

公子「なら教えてよゝ」

優菜「ほのほきがひたらおひえる（その時が来たら教える）」

公子「それいつ？」

優菜「へかいのひんりがわはるとき（世界の心理が分かる時）」

公子「うん、いつ？」

順平「てかよく会話できんな」

優斗「何気に凄いやな」

美鶴「おかえり・・・何をしてるんだ？」

ゆかり「多分無視してOKです」

美鶴「そうか、連絡は既にしておいた。帰るぞ」

ゆかり「はい、分かりました」

優菜「ひひかげんはなへ（いい加減放せ）」

湊「そろそろやめたあげたら？」

公子「ダメか・・・」

放した

優菜「ほっぺが・・・ほっぺが・・・」

優斗「大丈夫か？」

優菜「一応・・・」

公子「じゃあその時が来たら、ちゃんと喋ってもらうからね」

優菜「分かってるって」

帰って

優菜「そういやあの催眠ってこの時代でもあるのか？」

優斗「調べてみるか」

優菜「この時代で消しておけばアレはなかった事になる」

アフロディーテ「あれ、何してるん？」

ヘル「黒歴史消そうとしてるだけよ」

アフロディーテ「あく、催眠術使つてた時に洗脳使つたのなら私よ」

優菜「え？」

ヘル「・・・逃げることをオススメするわ」

アフロディーテ「・・・そうさせてもらうわ」

ヒュン

優菜「待てゴラア、逃げようとしとんちやうぞ」

アフロディーテ「ヘル、皆に今までありがとうって言つて」

ヘル「私達は会つてだいぶたつてるからね、言つておくわ」

アフロディーテ「じゃあね」

その夜、誰かの叫び声が町中に響き渡つたらしい

優菜はその後ベッドにダイビング就寝した

第百十八話（ペルソナ5 + R に転生『第三十一話』より）

学校・屋上

竜司「なんでペルソナで鎧が作れんだ？」

優斗「俺が聞きたい」

モルガナ「じゃああの変身は何なんだ？」

優菜「超サイヤ人4」

蓮「じゃあなんであの時星が光ったんだ？」

優菜「それは分からねえ、そもそもあの星自体よく分からねえ」

優斗「あの時思った事がまんま出来たけど、なんか関係あんのかな？」

杏「願いが叶うとか言ってたよね」

蓮「・・・大体わかった」

杏「そういえば、喜多川くんから返事きたよ。今日の放課後、来て欲しいって」

竜司「そりゃ願ったりだ。最速で予定に入れやがったな、アイツ」

杏「パレスで見たこと、ホントかどうか喜多川くんに確認しないと・・・」

優菜「そういや、双葉もいるから今日で終わりかもな。屋上に集まるのも」

竜司「そうだな、名残惜しいってわけじゃないんだが……どこで集まんだよ」

優菜「渋谷の連絡通路でよくね？」

蓮「楽だな」

杏「そういう問題？」

優斗「双葉といっても後輩とか言えばいいからな」

ガチャと入口の扉が開き中から生徒会長の真が出てきた

杏「あ……」

真「ここ、進入禁止のはずだよ？」

竜司「……話、終わったらすぐ出るって。つか、会長さんが何の用つか？」

真「問題児君に、噂の彼女、普通の転校生に中間試験学年一位……それに訳ありの転校生。変わった取り合わせだなって思って……特に転校生の貴方と学年一位の貴方は何でこの三人と一緒にいるのかなって」

杏「……っ！感じワル……」

真「ところで……鴨志田先生と、いろいろあつたみたいだけど？」

蓮「それにはな」

杏「この学校にいれば、嫌でも鴨志田先生と接点あるでしょ」

真「ふうん……前歴のこと、鴨志田先生が広めたらしいわね。バレー部員を使って、

憎くない？鴨志田先生の事」

蓮「別にどうということはない、いづれ分かった事だろうしな」

竜司「さつきからなんなんスか？つか、こいつすげえ人間出来てるんで」

真「気を悪くしないで、鴨志田先生の件で動揺してる生徒も多いの。予告状みたいな妙な張り紙の噂も中々消えないし」

杏「以外、新島先輩って、あんなセンスない張り紙のこと気にしてんだ」

竜司「センスねえことはねえと思うけど・・・」

優菜「絵、以外はな」

真「あら、あの張り紙を見た事あるの？」

優菜「ネットで広まりまくってますから」

真「ていうか、どうして貴方さつきから男口調なの？」

竜司「つか、もうよくねえっスか？話しかけられてると出れねえし」

真「悪ふざけに付き合わされる身にもなつてよ」

優菜「それで何もしてないのに疑われる私達の身にもなつてよ」

真「なんですって？」

優菜「焦つても仕方ないと思うよ？そのうち分かる時が来るかもしれないし、それまでは頑張ってみたら？」

真「……そうそう、ここね、例の事件もあつたし閉鎖する事になったの。誰かさんたちが無断で入ってるって、そんな噂もあるしね……お邪魔してごめんなさい」

ガチャ

杏「何よアレ！」

モルガナ「……目つけられてるな、あのオンナ……なかなか頭がキレそうだ。用心しろよ」

竜司「マジでムカつく！」

優菜「どつちにしろ、ここも潮時だったからな。ちようどいいだろ」

モルガナ「それじゃあそろそろ行くぞ」

優菜「そーいや俺一位とったんだから成績落とすなよ!？」

優斗「俺の学力で出来るわけないだろ!？」

優菜「だったらみっちり教えてやる」

優斗「チツ……」

渋谷・連絡通路

竜司「いよいよ、デカイ仕事だな。班目の尻尾、掴んでやろうぜ」

杏「ていうか喜多川くんってさ、明らかに班目の事庇ってるよね？一緒に住んでるんなら、班目の本性、知っててもおかしくないのに」

優菜「うくん・・・弱みじやなそうなんだよな・・・」

竜司「まあ、様子はおかしいよな。つか、これからそれを調べんだろ？大丈夫なのか？モデル」

杏「まあ一応、準備してたけど」

竜司「準備？・・・どっか変わってる？」

蓮「いつも通り」

優菜「いつも通り」

優斗「(ここは乗っておこう) いつも通り」

竜司「でもなんか、いつもよりメイク濃い気が・・・」

杏「いつも通り」

竜司「そ、そうか。まあ・・・行こうぜ、喜多川から話聞かねえと・・・」

杏「モデル引き受けたら、喜多川くん、かなり喜んでくれた。絵を描いてもらって場が和んできたなら、班目の話を出す感じで行こう？」

優菜「周りからどんどん行かねえと一発で追い出されるぞ」

竜司「それじゃあいくか！」

あばら家に行く途中で

お婆さん「誰かー！ひったくりよ!!誰か捕まえて!!!」

竜司「なんだ!？」

ひったくり犯「どけ!!」

こっちに向かつてナイフを右手に持ちながら走ってくる

左手にはお婆さんの物と思わしきバッグを持つて

優菜「任せろ」

蓮「大丈夫か？」

優菜「今さらこんな奴にやられはしない」

ひったくり犯「どかないなら刺すぞ!!」

優菜「やってみな」

俺もバッグを置く

顔に向かつてナイフを刺そうとしてくる

左手の親指と人差し指でナイフを止めて

ドカツ

腹パン

ひったくり犯「グハツ・・・!」

ドサツ

バッグを落とす

優菜「終わり」と

竜司「うわー・・・手慣れてるぞ、あれは」

優斗「何でか分からんがアイツ昔から色々巻き込まれてたからな」

杏「それなんかの呪いじゃないよね？」

お婆さんにバッグを返す

お婆さん「ありがとうねえ、あなた強いのね」

優菜「まあ日ごろから鍛えたりしてますから・・・コイツはお縄だな」

プルルルル・・・プルルル・・・ガチャ

110番「こちら110番です。事件ですか？事故ですか？」

優菜「事件です。場所は○○区△丁目の？番の辺りで、ひったくりです。犯人は気絶

してるんで、気絶してる間に来てくれると助かるんですけど」

110番「すぐに向かわせます」

その後こいつはお縄になって

あばら家へ

祐介「高卷さんだけだと思ってたんだがな」

杏「二人だけだ・・・緊張しない？」

竜司「監視だよ、お前が変なことしねえようにな」

祐介「妙な勘探りはやめてくれ、彼女に異性としての興味は一切ない」

杏「えっ？」

優菜「お前それ・・・男としても最低だぞ？」

祐介「何か問題でも？」

杏「・・・うん、別に」

ちよつとふてくされてるな

祐介「よし、じゃあ始めよう」

・・・

その後は熱中して聞く耳持たなかった

というかモルガナいつ消えた？

数時間後

聞いたら

『自分は先生の作品だ』

『俺は着想を譲った、だから盗作とは言わない』

『先生は今、スランプなんだ』

『弟子が師匠を・・・助けて何が悪い!?!』

『被害者など、どこにもいない！身勝手な正義を押し付けるな！』

それを聞いて俺は「やらない善よりやる偽善」ってコメントのある動画で見たのを思い出したぜ

『二度と来るな・・・次は迷惑行為で訴えてやる』

その後『完璧な裸婦画を完成させてみせる!』と暴露されて、出てきたんだがカメラをさげた女性「ちよつと君達、話いいかな?」

竜司「ん?」

カメラをさげた女性「見たとこ君等、ただの押し掛けファンって雰囲気じゃないよね」杏「あの・・・?」

カメラをさげた女性「あ、ごめんごめん。実は、班目の門下生と知り合いの人間を探してんの。昔、盗難にあつたつていう、『サユリ』って絵があるんだけどね。当初の門下生が、班目の虐待の腹いせに盗んで出てつた・・・つて噂を掴んだワケ。何か・・・聞いたことない?」

優斗「知らないっすね」

カメラをさげた女性「そつか・・・被害者がいて、初めて事件になる。虐待がないとなれば・・・書きようもないか・・・一旦出直すかな・・・時間取らせて悪かったね」蓮に近付く

カメラをさげた女性「アタシ、記者やってんの。何かネタあつたら、ここに連絡くれ

る?」

名刺を渡して帰って行った

竜司「……今日は解散すつか」

その夜

SNS

竜司「班目の事でヤバいことわかった。盗作を断れなくて自殺した弟子もいるんだ」と

蓮「本当か？」

杏「記者の人も班目のこと調べてたよね」

優菜「ありえねえ情報じゃねえだろ」

竜司「死人だぜ？公になってないって事は圧力かけたんだ、きっと」

杏「喜多川くん、何か知らないのかな？」

優斗「協力してくれたら助かるんだけどな」

竜司「それは無理じゃね？今日のこともあるし、むしろ警戒されてただろ」

優菜「杏ならいけるだろ」

蓮「それは切り札だ」

杏「できればその切り札は使いたくない」

竜司「つか、明日集まろうぜ。初の新アジトだし」

杏「渋谷の通路のどこだよね？わかった、また明日ね」

渋谷駅

優斗「昨日はすっかりしごかれた・・・」

優菜「成績落としたら超サイヤ人4+ブルーでタイキックだからな？」

優斗「骨盤が複雑骨折するからやめてくれ」

優菜「いや、多分複雑骨折って言うより腰だけぶつ飛びそうだな」

優斗「・・・嘘だよな？」

にしても周りはスマホスマホスマホって・・・

学生「よっしゃ！SSR!!」

ドンッ

かすみ「きやつ！」

学生「あつ・・・」

サラリーマン「危ない！」

OL「電車がすぐそこまで!!」

仕方ねえ

コオオオオ

ズームパンチでリーチを伸ばして

ガシッ

一気に引つ張る

ドサッ

優菜「大丈夫か？」

ざわざわ・・・

かすみ「はい、ありがとうございます」

学生「すみません！俺のせいで・・・」

優菜「こういう場所ではスマホはあんまりすんなよ」

優斗「それじゃあそろそろ行くか、あんまり目立ってたら面倒だ」

少し注目されたが普通に駆着いた

優斗「なあ」

優菜「どうした？」

優斗「お前一回お祓いしてもらったらどうだ？」

優菜「なんでだ？」

優斗「お前あんなん巻き込まれすぎだろ、絶対呪われてるって」

優菜「そもそもこんな小説の主人公やってる時点で呪いだよ」

優斗「それもそうか」

放課後・HR直後

川上「あ、優菜さん」

優菜「?どうしました?」

川上「今日今から時間ある?」

優菜「あー、ちよつとどうしても外せない用事がありました」

川上「だったら明日の朝、少し早めに来れる?」

優菜「それなら大丈夫です」

川上「じゃあ明日の朝、話があるから」

優菜「?分かりました」

そして渋谷

双葉は連れてきた

そして蓮が来て

竜司「よお」

杏「私もこれからアジトに行くところ。!あのひとつで・・・?」

スーツ姿の男「君・・・」

モルガナ「中野原だ。三島から連絡を受けて、今日渋谷で会う事になってたんだよ」

竜司「マジ・・・？」

双葉「先に連絡しろ、モナ」

モルガナ「ワガハイじゃなくて、蓮に言ってくれ！」

優菜「黙れ」

中野原「・・・中野原です。怪盗お願ひチャンネル書き込まれた、中野原夏彦」

杏「なんか、優しそうな感じだね。ストーリーカーしてた印象ないよ。多分、改心うまくいったんだね」

中野原「管理者から、連絡もらってる。猫を連れた、秀尽の制服を探せて・・・」

優斗「それで？何の用ですか・・・？」

中野原「聞いてると思うけど、怪盗団に改心して欲しいヤツがいる・・・斑目って画家だ」

皆「!!」

竜司「おいおい、キタンじゃね？弟子が師匠のヒミツを告白とかあ？」

杏「そういえば、あの人のシャドウも、マダラメのこと言ってたよね」

中野原「私は班目の・・・元弟子なんだ。住み込みで、絵の事ばかり考えていた。本気で画家になりたいって思ってた・・・少し上に、兄弟子がいてね。とても才能のある人だった。当然、班目に目を付けられたよ。作品はみんな、班目のモノにされた。ま

あ……兄弟子に限らずの話なんだがね……」

優菜「……弟子全員から……つつーことか？」

中野原「ああ……」

双葉「盗作のウラとれたな」

中野原「その兄弟子ね……自殺したんだよ」

杏「自殺……」

中野原「班目が自分作品で評価されているのを、よっぽど耐えられなかったんだろうさ……流石に恐くなって、私は班目の反対を押し切ってアトリエを出た……けど、方々に圧力をかけられて、私は、絵の道を断たれてしまった……心機一転で絵とは別の道を、区役所に勤めたけど……ダメだった。絵の執着で、気持ちが悪んでしまつてね。なんにでも執着するようになった……ついにはストーカーにまで……ハハ……改めてお願いだ。班目を改心させてほしい。一人の男の命を……救うためにも」

優斗「今いる祐介の事か」

中野原「ああ、絵の才能があるばかりか、彼、身寄りがなくて班目に恩義がある」

竜司「喜多川、言いなりになるしかねえって事かよ！」

中野原「まだ班目の所にいた頃、その彼に聞いたことがあるんだ。班目と一緒にいて、辛いのかいってね。そしたら彼、こう言ったよ。『逃げられるものなら逃げ出した

い』ってね」

杏「喜多川くん……」

中野原「逃げだした私が言うのもなんだが、自殺した兄弟子の悲劇を繰り返したくない……！せめて前途ある若者だけでも、助けられないかと……斑目の改心……検討していただけるよう、どうか、よろしくお願いいたします」

蓮「みんないいか？」

優菜「ひとつ聞きたいことがある」

中野原「なんだい？」

優菜「私達とあつた事諸々、誰にも言わないと約束できるか？」

中野原「勿論だ」

優菜「指名手配されて、情報提供で3000万貰えても？」

中野原「……承知の上だ」

優菜「……よし、ならあとは任せな」

去って行った

双葉「指名手配ってどういう事だ？」

優菜「クギを刺しただけだ」

モルガナ「マダラメの被害者から直接、頼まれたんだ。マダラメを改心させるのに、も

う迷つてる暇はなさそうだ」

蓮「祐介を助けよう」

竜司「おうよ！班目は強い奴らを食いモンにする、真正正銘のクスだ！」

杏「自殺なんて・・・私の周りで、そんなことさせない！」

双葉「準備は出来てるけど、早速行くか？てか行こう、一刻も早く」

優菜「さっさとやろうぜ」

優斗「お灸をすえてやらねえとな」

モルガナ「じゃあ、全会一致つてことで、話の続きは新アジトでだ！」

新アジト、連絡橋へ

モルガナ「諸君、ようこそ新アジトへ！今回のターゲットはマダラメだ！見ただろ、あのパレス。前と同じなんてナメてたら痛い目見るぜ？」

双葉「私見てないんだが？」

優菜「入ったらわかる」

モルガナ「それに・・・杏殿の貞操がかかってる!!」

杏「はあ!!」

モルガナ「やることはカモシダやフタバの時と同じだ。まずはパレスで潜入ルートを確保。その上で『心を頂く』予告。オタカラを『実体化』させて、いただく」

竜司「はいはい、質問！班目って、俺らの事知らねえじゃん？何で警戒されてたわけ？」

優菜「誰も信用してないからだ」

モルガナ「ああ、知らない相手は全員敵扱いなのさ」

杏「でも、悪い噂が広まってるって知って、イライラしてるだけなのかも・・・」

優菜「少なくとも、班目が悪い奴なのは確定だ」

モルガナ「なんにせよ、ワガハイ達は、いい子ちゃんदैいつとこうぜ。無駄に警戒度を上げたたら、お宝を盗りづらくなる」

杏「今回は喜多川くんにも気をつけないとね。見られた事は、すぐ班目にも伝わるだらうし」

モルガナ「その通りだぜ！」

杏「てか班目のオタカラって、見た目どんなの？また王冠？それとも自分自身？」

優菜「オタカラは主が歪みの源をどう思ってるかによって変わるはずだ」

モルガナ「モノを見れば、ワガハイの直感で確実に分かる」

竜司「ああ、変なテンションになるからな、お前」

双葉「今回の期限は個展の終了でOKか？」

優菜「OKだ」

杏「つてことは・・・六月五日だ」

モルガナ「今回も『予告状』を出した後で『決行』だ。だから戻って、『六月二日』には潜入ルートを確定しないとな」

杏「いい？絶対つつつつ対に、失敗できないんだからね？」

蓮「よし、行こう」

班目パレスへ

モナ「分かっているとと思うが、まずは潜入ルートの確保だ」

スカル「その後で、予告状だろ？分かっているって、気を引き締めて行こうぜ！」

そしてみんなにペルソナやってほしいからギミックはカットして・・・

あく、そうそう言い忘れてた

なんか最初のギミック？というか赤外線が変わって通れなくなってたからモナが

ジョーカーにワイヤーを渡してそれで飛び越えた

後、何か変なイシがあつたぜ

え？もつと詳しく？原作プレイしたらわかる事だし書く意味ないね

こちら辺は全く知らないからちよつと焦つた

パンサー「だいぶ進んだね」

ナビ「全体で言ったら、そろそろ半分ぐらいか？」

スカル「まだ半分かよ・・・」

トウルース「そろそろ、障害があってもおかしくないな」

ジョーカー「ん？なんだ、あのデカイ襖は？」

右方向を見ると何個もの襖が道を閉ざしていた

ナビ「左の道の奥にある部屋は、セーフルームっぽいな」

フォルス「通らなきやダメか」

モナ「慎重に行けよ」

触ろうとすると、バババツと襖が開いて行つた

ジョーカー「・・・ただの演出？」

ナビ「・・・シャドウに気づかれたわけでもないし・・・確実に演出だな」

スカル「ていうか、開きすぎだろ」

奥に行くとき少し広い道に出たが赤外線柵が何重にもあり、しかもその奥にはさつき
の襖よりも大きな襖があったまあそのまた奥に建物があるんだが

そして手前の右側には立札が立てられていた

スカル「げっ、何だこりゃ！」

パンサー「これ、例の赤外線だよな？こんな超えられないじゃん・・・」

モナ「だがこれだけ嚴重って事は、守りたいものがこの先にあるって証拠だ」

トウルース「赤外線は超えられなくはない、ただあの襖の先に道があるなら襖を開けないとダメだろう」

パンサー「待つて、立札になんか書いてある……『警備員各位。展示期間中、宝物殿への扉は、殿内の警備室のみで開閉が管理される……外からの開錠は不可能なため、各員とも注意されたし』……」

スカル「外から絶対に開かねーって事かよ!? どうすんだこれ……!」

モナ「待つて……あの奥の扉……あの柄……どこかで見た様な……」

トウルース「あるとしたら、あばら家じゃないか? 班目のパレスだからな」

モナ「……そうか! あそこだ! あそこの襖と同じだ、間違いない! お前ら、一旦引き上げだ!」

スカル「はっ? なんでだよ!」

モナ「あれが現実のどこの扉の認知か、見当がついた。『別のやり方』で、こじ開けられるかも知れない! 説明は後だ、とにかく戻るぞ!」

トウルース「どっちにしろ、これ以上進めないからな」

ジョーカー「分かった」

そして今日の探索が終わった

竜司「どうやったたらあの先に進めんだ?」

杏「さつき優菜があばら家のこと言ってたし、あばら家のどつかにあるの？」

モルガナ「その通りだぜ杏殿、前に来た時に偵察してたら二階の一番奥にあれと同じ襖の部屋があった。しかも不自然にゴツイ鍵がかかってた」

竜司「双葉の時と同じなら、そこが開けばいいのか？」

モルガナ「本人の目の前でな」

杏「でも開けるにはゴツイ鍵があるんじゃないの？」

モルガナ「ワガハイにかかればヘアピン一本で楽勝さ。でも多少はかかる、流石にこじ開ける所からぜんぶ班目の前でこなすのは無理だ。ほんのちよつとの間、目を逸らしといてくれる人が……いたらなあ……」

杏「……ん？」

竜司「あー……あーあー。つーかあー、屋敷に入んのもー、どうやるかなー。無理に入ったら、今度こそ通報だしなあー……」

杏「なに？」

竜司「やつば……ヌードしかなくね？」

杏「はあ!？」

竜司「奇遇だぜ、リユージュ。同じこと考えてた」

杏「ふざけてんの!？」

モルガナ「班目の家に怪しまれずに入るには、それが一番の口実だ……杏殿に、一芝居うつてもらいたい」

優菜「杏、これは運命だ。大丈夫、大変な事にはならないから」

双葉「それフラグってヤツだ、リアルで初めて聞いたぞ」

優菜「いや、普通に着込んで着込んで着込みまくって脱ぐ時間に時間かければ行けるだろ」

杏「でも、そのカギのかかっていると、私知らないよ？」

モルガナ「大丈夫、ワガハイも同行する」

杏「けど、実質私一人じゃん……最悪、バレた時どうすんの……？」

モルガナ「パレスに逃げ込む……とか？」

杏「それ……大丈夫なの!?! 解決になってる!?! てか、自信無さげに言わないでよ!……ホントに私が……囿やるしかない……?」

蓮「任せても大丈夫か？」

杏「……それしかないんでしょ? 分かった、やる」

双葉「我らの命運は、杏に託されたというワケだな!」

優菜「いざとなつたらいつでも逃げていいからな」

杏「仕方ない仕方ない仕方ない……」

優斗「・・・大丈夫だよな？」

竜司「頼んだぞ、モルガナ！ちやっちやと開けるよ？」

モルガナ「任せろ！」

杏「無理に脱がせようとしてきたら・・・あの家、ぶっ壊す・・・！てか、ここまでやってパレス開かなかつたら暴れるからね！」

竜司「どのみち、悪事の裏取りしようって流れだし、むだにはなんねーよ。よし、早速明日な」

杏「明日!?!」

竜司「早い方がいいに決まってるだろ？」

杏「え、でも・・・そう、喜多川くんが、いいって、いうかな？」

竜司「んなの『私明日じゃないと無理』とか送つときやいいだろ」

そして杏がため息をついたのち、解散した

夜、SNS

竜司「祐介と連絡ついたか？」

杏「明日、家に来てくれたって」

竜司「食いついたか！」

優菜「さつきも言ったが、危ない時は、はよ逃げろよ。捕まって動けなくなったりし

たら元も子もない件」

蓮「件？」

優菜「誤字った」

双葉「明日決行だよな？」

蓮「ああ、杏殿とワガハイがあばら家で、オマエラはパレスで待っていてくれ。開けた後に装置を解除するためだ。byモルガナ」

優菜「解除したらさっさと逃げるからな」

蓮「それじゃあまた明日」

そして次の日

優菜「今日は朝から川上先生に呼ばれてるから先に行かせてもらおうぞ」

優斗「おう」

スマホで天気予報を見る

優菜「今日は午後から雨か、傘を持って行かないとな」

お母さん「いつてらっしやーい」

優菜「行つてきまーす」

7時30分

優菜『さてと、まず職員室に行こう』

下靴を脱ぎ靴箱に入れ、上靴を出して履こうとするが

グリツと違和感があり、上靴を脱いで中を確認すると、針が90度曲がった画鋲が入っていた

優菜『なんだこれ、画鋲か？久しぶりだな。いじめかな？いやでも、俺嫌われるようなことしたっけ？』

女子「クスクス」

優菜『ん？』

声のした方向を見ると、女子がいて、そそくさと逃げて行った

優菜『あいつか、いじめはめんどくさいからな。一回めるか』

川上「あれ？優菜さん？どうかした？」

優菜「あ、なんでもないです」

川上「？そう、なら話はもう通してるから生徒指導室に来て」

先生は三階の方に行った

優菜『とりあえず邪魔だから画鋲取ろう』

全部処分した後二階の生徒指導室へ

川上「座って」

椅子にテーブルを挟み先生と向かい合って座る

川上「聞きたい事ってというのは・・・見せた方が早いわね」
そう言つてスマホを取り出しあるサイトを見せる

優菜「秀尽学園裏サイト・・・どの学校にも裏サイトつてあるんですね。というか先生裏サイトとか確認してるんですか？」

川上「今はそこは関係ないでしょ、聞きたいのはこれよ」

画面を見ると2016年5月16日や18日、つまり昨日の書き込みまであった
優菜「皆割と見てるんすね」

川上「一番大事なのは、これよ」

指差された書き込みを読む

2016年5月13日20:26:40

学校だるい名無し「今日転校してきた優菜つて子、初日から優斗くんの色目使つてマジだるい」

学校めんどい名無し「マジそれな」

学校だるい名無し「絶対優斗くん迷惑してるって」

学校消えてほしい名無し「なら今度少し懲らしめない？」

学校めんどい名無し「どんなの？」

学校消えてほしい名無し「上靴に画鋏とか」

学校だるい名無し「でもそれバレたらヤバくない？」

学校消えてほしい名無し「だったら三人で少し考えない？」

学校めんどい名無し「だったら明日もこの時間ね」

学校だるい名無し「OK」

ここで13日の書き込みは終わってる

優菜『俺ってモテたの!?!』

川上「貴方と優斗くんは同じ家に住んでるのよね？あなたが居候という形で」

優菜「はい」

川上「それで事情を知らずに、こんなことを言ってる人がいると」

優菜「そうですね」

川上「次の日も言ってたけど、昨日の書き込みが一番ひどかったわね」

2016年5月18日22:14:01

学校だるい名無し「結局どうすんの？」

学校めんどい名無し「原点復帰の上靴に画鋲はどう？」

学校消えてほしい名無し「もうそれでよくない？」

学校だるい名無し「もうそれでいいよ」

学校消えてほしい名無し「じゃあ誰がやるの？」

学校めんどい名無し「じゃあ私やるよ」

学校だるい名無し「OK、バレないですよ？」

学校めんどい名無し「分かってる」

とここで終わってる

川上「今日、貴方の上靴に画鋏を入れる。みたいな書き込みがあっただけど……さつき上靴の中見てたけど、画鋏が入ってたの？」

優菜「……いや、ただの埃ですよ」

川上「……とりあえず、何かあつたらすぐ言つてよ。問題になつてからじゃ遅いんだから」

優菜「分かりました」

生徒指導室から出て教室に入ると

優菜「……マジかい」

黒板に「優菜は優斗と付き合っているにも関わらず五又している」と書かれていた

優菜「……それは蓮だろ。3以降は何又できるかだぞ、このゲームは。まあこの世界の蓮もそうとは限らんがな」

ついでに俺の机に「死ぬ」や「消えろ」や「見るだけで吐き気がする」などが書かれていた

筆跡的には三人ほどだ

とりあえず消す

ちなみに黒板は黒板消しで縦に消してから横に消すと綺麗になる

そして優斗や蓮たちが登校してk

クラスの女子「ねえねえ優菜ちゃんってき、優斗くんのことどう思ってるの？」

・・・みんなは覚えているだろうか・・・前、分離する前だっただろうか。あの時に現実で一回優菜の姿になり、その時に偶々動画を撮られた上にネットに投稿された。しかもそれをクラスの女子に見られ、問い詰められたあの時の事を

あの時の女子である

優菜「な、何の話？」

そういえば名前を書いていなかったな

木幡美穂（きはたみほ）な

美穂「優菜ちゃんは、転校してきてからいつつ優斗くんと一緒にいるでしょ？」

優菜「あー・・・まあ居候してるしね」

美穂「え、そうなの!？」

優菜「理由は聞かないでめんどくさいから」

美穂「へー、そうだったんだ」

そして昼休み

キーンコーンカーンコーン

優菜『弁当食べる前に、トイレに行こうかな』

トイレの個室へ

すると誰かが二人ほど入ってきた

だるそうな女子「さっき優菜が入って行くのが見えたよ」(小声)

強い口調の女子「よし、用具入れにバケツあるから水入れて上から流すよ」(小声)

優菜『来たか、なら魔法で水の受け皿でも作って濡れるの回避しよう』

だるそうな女子「せーのっ！」(小声)

ザバーツ

強い口調の女子「逃げろっ！」

ダダダダッ

優菜『さてと、この水どうしようか・・・とりあえず出よう』

出て誰も居ないのを確認し水を捨てようとすると

ツルツ

優菜「え？」

ドテツと転ぶ

優菜「なんで通路がこんな水浸しに……って水のコントロールがザパーン

優菜「……とりあえず優斗に代えの制服かなんか頼んで……」

スマホがつかない……壊れてしまっている

優菜「クロノス、スマホの時間戻して」

時間を戻して連絡した

優菜「保健室に行こう」

周りの視線が痛い……

保健室に行くと、丸喜先生がいた

丸喜「あれ？優菜さん？どうしたん……って何でずぶ濡れなの!？」

優菜「トイレの水浸しの所で盛大に転んだだけです」

丸喜「盛大に転んでもそんなに濡れないと思うけど……とりあえず保険の先生呼んでこようか？」

優菜「いや、保健室ならシャワーあるんじゃないやと思つて来ただけなんで。着替えは友達に連絡済みだからもう少しで届くと思います」

ガラガラ

優斗が手提げを持って入ってきた

優菜「あ、ちょうど来ましたね」

優斗「制服なんか何に使うんだ？・・・というか何でそんな濡れてんだ？」

優菜「説明は後」

丸喜「とりあえず・・・シャワーはここかな？」

シャワー室の前のカーテンを開けて中を見ながら言う

優菜「ですね。それじゃあ、先生は反対側の壁見ててください」

丸喜「ああ、うん。分かったよ」

優菜「優斗は手提げ置いて戻ってて」

優斗「ああ、早めに戻って来いよ」

優斗は教室に戻り優菜はシャワーを浴びる

丸喜「あれ？そういえばタオルはあるのかい？」

優菜「あ、無いですね」

丸喜「じゃあ少し探してみようか？どこかにあると思うし」

そしてシャワーが終わり出ると同時に

丸喜「これでいいかな？」

そう言いカーテンが開く

丸喜「つてうわあ！ご、ごめん！！」

丸喜が目を手で隠す

優菜「いや、別にいいですけど」

丸喜「こ、これタオルだから！ホントにゴメン！」

タオルを渡し丸喜が外に出てカーテンを閉める

タオルで体の水を拭く

丸喜「・・・少し聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

優菜「大丈夫ですよ」

丸喜「身体にあるその無数の傷・・・それは一体何だい？」

優菜「・・・喧嘩とも思ってください」

丸喜「全部治ってはいるけど後は残っているよね。相当な喧嘩だったんだね」

優菜「喧嘩というより死闘ですけどね」

丸喜「死闘!？」

優菜「まあその話はまた今度でいいですか」

丸喜「う、うん」

着替えも終わり

優菜「それじゃあ、また」

丸喜「話したいことがあったらいつでも来ていいからね」

優菜「はーい」

外に出て教室に戻る

優菜『さて、弁当を……無い?』

鞆の中を探るが弁当らしきものは手に当たらない

優菜『今度は弁当か……よし優斗の弁当を分けてもらおう。気は……屋上入口の

扉の前?行ってみようか』

屋上への階段前

優斗「優菜?それならさつき保健室に行ったが」

竜司「そうか、サンキュー!」

竜司が降りてきた

竜司「早く教えてやらねえと」

優菜「誰に何を教えるって?」

竜司「うわっ!って優菜か……お前に言つとかなないといけないことがあつてな……」

優菜「……じゃあさつきのとこでいいだろ」

竜司「それもそうだな」

階段を上がる優斗が弁当を食べていた

優斗「どうかしたのか?」

優菜「竜司が俺に話があるってさ」

優斗「だから探してたのか」

竜司「あんまり人に見られたくない話だからな」

優菜「聞かれたくないじゃないか？」

優斗「席外した方がいいか」

竜司「いや、優斗も聞いたほうがいいかもしれねえ」

優斗「そうか」

竜司「さつきチラツとお前らの教室見たら、お前の席から弁当取って持ち出してるやつがいたんだよ」

優菜「どんなやつ？」

竜司「女子だが詳しいことは分からねえ、でも多分同じクラスのやつじゃないか？」

優斗「蓮とか杏はいなかったのか？」

竜司「確かいなかったと思うぜ」

優菜「まあ、それは俺がどうにかするから、お前らは今日の潜入のこと考えろ」

竜司「いや、そうだけだよ。気になってな。もしかしたらいじめかもって」

優斗「よしどこどいっただ今すぐ占めてやる」（早口）

優菜「だから、自分でどうにかするし、無理そうだったら助けぐらい呼ぶ・・・と

ところで優斗、弁当分けてくんね？」

優斗「いいぞ」

そして放課後

クラスの女子「優菜さん、ちよつとついて来て」

優菜「ん？いいよ。優斗達先行ってて」

蓮「分かった」

校舎裏へ

優菜「ここまで来て話す話って何？土砂降りの中話すの？」

クラスの女子「うん、ちよつと待ってて」

校舎の死角に入って行った

↑↑

——→

—→

—

つて感じで

優菜『さつきから、ついて来てるやつがいるな。一人・・いや二人だな』

クラスの女子「優菜さん、ちよつと来て」

死角から声がする

優菜「・・・分かった」

死角を進むと

クラス的女子「死ねえええええ！」

素晴らしいナイフを振りかざしてきた

もちろんナイフが折れたら面倒なので後ろに飛ぶ

そして後ろにいた仲間にも左腕と右腕を封じられる

ナイフ的女子「そのまましつかり捕まえててよ」

左腕的女子「アンタが・・・悪いんだからね」

優菜「何もしてないんだけど」

右腕的女子「そんなわけないでしょ。ネタは上がってんのよ」

優菜「・・・まあいいや。どうせ殺す気はないんでしょ？それだって脅しだけだろうし・・・ていうかそれ本物じゃないでしょ、百均とかに売ってる刃が入るやつ。ついでに言うと、さつきも当てる気なかったでしょ」

ナイフ的女子「もー！うるさいわね!!それじゃあホントに本物使うわよ!?!」

優菜「いや、むしろ使いなさいよ、あるなら。画鋲の時点でもう戻れないでしょ」

ナイフ的女子「分かったわよ！使えばいいんでしょ使えば！」

鞆から光沢のあるナイフを出してきた

左腕の女子「え!?!それって大丈夫なの!?!」

右腕の女子「傷害とか私ゴメンだからね!?!」

優菜「雨の中刺せば、血の匂いやナイフの血、もし殺しても私の死亡時刻もずらせる……てかそれ銃刀法違反……って私が言える立場でもないね」

ナイフの女子「何か言った?」

優菜「いや?何にも?」

ナイフの女子「条件を飲んだら今後一切いじめはやめてあげる」

優菜「条件って?」

ナイフの女子「今後一切優斗くんに干渉しない事よ」

優菜「それは必然的に無理だね」

ナイフの女子「は!?!なんで?」

優菜「学校の班とかあるじゃん」

ナイフの女子「じゃ、じゃあ学校で絶対にやらないといけないこと以外はダメ!」

優菜「それも無理」

ナイフの女子「次は何!?!」

優菜「だって優斗の家に滞在してるから、いやでも夜会おうよ」

ナイフの女子「嘘でしょ!？」

優菜「嘘じゃないよ。私優斗の従妹だし」

右腕の女子「でも確かに、従妹なら初日から一緒にいてもおかしくない・・・?」

ナイフの女子「ちよつと一回話し合おう。二人ともちよつと来て」

拘束がとかれ話し始めた

優菜『今のうちに逃げよう』

タツタツタツタ

連絡を取ると先にパレスに行ったらしい

なんでも優斗が「アイツは絶対OKだ」って言ったからだつて

全会一致はどうした

班目パレス

フォルス「そろそろ来てもおかしくないんだが・・・」

トゥルース「来たぞー」

スカル「おお優菜!大丈夫だったか?」

トゥルース「ああ、一応な。まああれぐらいのいじめぐらい大丈夫だよ。前の世界に

比べればね」

ナビ「い、いじめ!？」

トウルース「気にしなくてもいい」

スカル「にしてもアイツら・・・ホントに大丈夫か？『演技で誘惑してみせる』とかだいたいハードル高えこと言ってたけどよ・・・開く気配、全然ねーぞ・・・もうすぐ目が帰ってくんだよな？つかよ、鍵をモナが開けられたとして、班目に見せるって、難しくね？見せたとしても、フツーすぐ閉めんだろ。チャンスって一瞬しかなくね？」

フオルス「・・・話を要約すると？」

トウルース「絶望的」

スカル「それって、うまくいったら奇跡って事じゃねえか！」

フオルス「まあ信じる以外の道はないしな」

スカル「・・・そろそろだな」

・・・

・・・

・・・

スカル「何も起きねえ・・・状況、どうなって・・・ん!？」

すると地面が揺れ、襖が開き赤外線が消えた

スカル「・・・来た！」

ジョーカー「行けたか」

フォルス「なら早めに行こう」

トウルース「閉じる前にな」

スカル「そーういやそーうだったな！」

中に入ると門番のように入口にシャドウがいた

ナビ「動くそぶりもない。やるしかなさそうだ」

ジョーカー「行こう」

シャドウのそばまで行く

スカル「わりいな！そこ通してもらうぜ!!」

シャドウ「ぬっ!?なんだ!?お前達は!!そうか、その恰好・・・お前達が班目様に仇成

す族かっ！」

そしてシャドウがヌエになる

ヌエ「セキリユティを突破してきたのかっ!?!・・通してなるものかっ!マダラメ様の

お膝元であるっ！」

スカル「お前らなんて眼中にねえんだよ!ここでハマして杏にドヤされる方が、よっ

ほど怖いってのっ！」

トウルース「ヌエの弱点は火炎だ！」

フォルス「イフリート、インフェルノ」

ゴオオオオオオ

又エ「ぬああああ!!」

シユワアア

スカル「倒したな？また見つかったら面倒だ。さつさとセキリユティ切つちまおうぜ！」

左側の部屋で制御室を見つけ解除し、出てきた

すると赤外線を出していた機械がしまわれていった

スカル「うっし！完全にセキリユティ止まったつばいな！とつと戻ってパンサー達と合流しようぜ！あいつらも、上手く逃げてりやいいけど・・・」

パンサー「いやあああああああ！」

空から声が聞こえ、見上げると穴が開き杏と祐介、そしてモルガナが降ってきた

祐介が杏を受け止めながら着地

祐介「うぐっ・・・」

そしてモルガナが祐介の頭に直撃した

祐介「うがっ・・・」

モナ「あああ・・・いつってええええ!!」

パンサー「死ぬかと思った・・・って、いつまでくつついてんの！」

祐介を押して祐介が倒れる

祐介「うごっ……」

パンサー「やば！変なところ入っちゃった……？大丈夫？目を覚まして！」

ナビ「オーバーキルだな」

なんとか祐介が意識を持ち直した

祐介「なんだ、お前ら!？」

パンサー「待って、喜多川くん！私だって！」

祐介「高巻さん……？じゃあ、お前らは……その着ぐるみには見覚えが無いが」

モナ「着ぐるみ!？」

祐介「何なんだ、ここは……？」

パンサー「……心の中よ、班目の」

祐介が立ち上がる

祐介「先生の……『心の中』？高巻さん、悪いが……気は確かい？」

スカル「嘘じゃねえ、これが奴の本音なんだよ。欲望まみれの……金の亡者つてこつ

た」

祐介「でたらめを言うな！」

トウルース「でたらめじゃない、それはお前が一番分かってるんじゃないか？一番近

くにいたお前が」

祐介「それは・・・」

パンサー「信じたくないかも知れないけど、ここは班目が見ている『もう一つの現実』・・・斑目の本性なの」

祐介「こんな、おぞましい世界が・・・お前ら、いつたい何なんだ？」

スカル「腐った悪党を改心させる集団・・・てどこか」

祐介「確かにお前らの言うことが本当なら、俺の知る先生など、何処にも・・・」

スカル「目え覚ませって」

祐介「だが・・・それでも十年置いてもらった恩義だけは・・・消えない」

スカル「許すつてのかよ!?このままじゃお前・・・!」

祐介が倒れこむ

祐介「う・・・ううっ・・・」

パンサー「大丈夫？」

祐介「頭の理解に、気持ちがついていかない・・・」

モナ「悪いが、のんびりしてられないぜ!すごい警戒されてる!さつさと、ズラかるぞ!」

祐介「ハア、ハア・・・」

ジョーカー「肩を貸そう」

祐介「・・・いや、結構だ」

立ち上がり道を戻っていく

モナ「急いでここから脱出するぞ！とはいえ、シロートを一人抱えちまった。戦闘はできる限り避けて行くぞ」

道の端々にある、モノを見て少しずつ祐介の顔が険しくなっていく

泉の像まで行くと出口に二体シャドウが現れる

モナ「出口は目の前だつてのに！」

シャドウ斑「アーハッハッハッハ!!」

後ろから班目の声がし、振り返るとシャドウ二人を連れて殿様の恰好の班目が歩いてきた

パンサー「うわっ、この前の・・・」

シャドウ斑「ようこそ、班目画伯の美術館へ。いや、来館は二度目だったか？」

祐介「え・・・？先生・・・なのですか？その姿・・・」

パンサー「サイテー」

祐介「嘘ですよね・・・？」

シャドウ斑「あんなみすばらしい格好は『演出』だ。有名になっても、あばら家暮ら

し？別宅があるのだよ・・・オンナ名義だがな」

祐介「なぜ、盗まれたはずのサユリが保管庫に？本物があるのに、なぜたくさんの模写を!?聞かせてくれ・・・貴方が先生だというのなら！」

シヤドウ斑「まだ気づかんのか、青二才め。『盗まれた』など、私が流したデマだ！全部、計算しつくされた『演出』なのだよ！」

祐介「どういう・・・ことだ!?」

シヤドウ斑「たとえば、こんなのはどうだ？『本物が見つかったが、公に出来ない事情がある。特別価格で譲りたい』・・・ハハ！どうだ、この『特別感』！俗人共は、大枚はたいて食いついてくる！」

祐介「そんな・・・」

祐介が膝をつく

シヤドウ斑「絵の価値など所詮は『思い込み』・・・ならばこれも正当な『経済効果』だ！まあ、ガキには想像できんだろうがな！」

スカル「さつきから金、金、金・・・どうりでこんな気持ちワリい、美術館ができるわけだぜ！」

パンサー「てか、あんた芸術家なんでしょ!?盗作とか恥ずかしくないわけ!?」
フォルス「そこんどこどうなんだよおい！」

シヤドウ斑「黙れガキが！」

トウルース「正論言われてロクな反論できないからそんな風にしか言えないんだろうが！wwwwwwこんな大人にはなりたくないねえwwwwww（ハハ）プギヤア」

ナビ「うわー・・・ネットによくいる奴だ」

シヤドウ斑「ともかく！芸術など、ただの道具にすぎぬわ！カネと名声のためのな！お前にも稼がせてもらったぞ、祐介・・・」

スカル「ムカつくけどよ、あれがお前の師匠だ」

祐介「なら、貴方の才能を信じている者は・・・天才画家と信じてきた人々は・・・！」
シヤドウ斑「・・・これだけは言っておいてやる、祐介。この世界でやっていきたいのならば、私に齒向かわぬことだ。私に異を挟まれて出世できると思うか？フハハハハ！」

祐介「こんな・・・こんな奴の世話に・・・なっていたとは・・・！」

シヤドウ斑「ただの善意で引き取ったとも思っておったのか？有能な弟子を集め、着想を吸い上げれば、才能ある目障りな新芽も摘み取れる・・・着想を頂くなら、大人よりも、言い返せん子供の将来を奪ったほうが楽だ」

祐介「なんてことを・・・」

シヤドウ斑「家畜は毛皮も肉も剥ぎ取って殺すだろうが。同じだ、馬鹿者め！・・・喋

り疲れたわい。そろそろ……」

祐介「……許せん」

シヤドウ斑「ん？」

祐介「許すものか……お前が、誰だろうと!!」

シヤドウ斑「長年飼ってやったのに、結局は仇で返すか……くそガキめ! 者ども! 族を始末しろ!」

パンサー「下がってて!」

祐介「面白い……」

パンサー「えっ?」

祐介「事實は小説より奇なり……か」

パンサー「喜多川くん!」

祐介「そんなはずはないと……長い間、俺は自分の瞳を曇らせてきた……! 人の眞贋すら見抜けぬ節穴とは……まさに俺の眼だったか……!」

すると様子が変わり頭を抱えながらもだえる

祐介「う……ぐ……あぐつ……うあああつ……ア、アアアアツ!!」

祐介が倒れこみ、指先が地面と擦れ、皮が? け、地面に血がにじんでいく

そして顔を上げると同時に狐の仮面が現れ立ち上がる

祐介「よかろう……」

仮面に手をかけ

祐介「来たれよ、ゴエモン！」

叫ぶと同時に仮面を剥ぎ取る

すると怪盗服になり祐介のペルソナ・ゴエモンが後ろに現れ歌舞伎のポーズをし、歌

舞伎の様な音を立てながら現れ

祐介も歌舞伎のポーズをする

祐介「絶景かな……まがい物とて、こうも並べば壯観至極……悪の花は栄えども……

醜悪、俗悪は滅びる定め……！」

モナ「こりゃあ、凄いで！」

シャドウ斑「ふん……いきがりおつて！何も知らずに死んでゆくがいいわ！出合え

！出合えー！」

祐介「貴様を親と慕った子供たち……将来を預けた弟子たち……一体何人踏みに

じつて来た……？いくつの夢を金で売った！俺は貴様を……絶対に許さない！」

ジョーカー「お手並み拝見だな」

祐介「望むところだ！」

シャドウの姿が変わりイッポンダタラ一体、コッパテング四体になった

イツボンダタラ「頭が高いぞ、侵入者ども！」

祐介「勉強させてもらったよ、班目。真贋を見抜くには……ときに冷徹さが要るところを。心おきなく貴様を見定めさせてもらう！俺の……ゴエモンと共につ！」

ナビ「こいつらの弱点は……全員氷結！」

トウルース「ゴエモンは氷結が使えるぞ！」

祐介「蹴散らせ！ゴエモン！」

フオルス「弾に氷結魔法付与……くらえ！」

トウルース「ミツハノメ！ダイヤモンドダスト！」

ジョーカー「ジャックフロスト！」

パキイイイイイン

トウルース「クロノス、ギガントマキア」

バリイイイン

敵を全員倒し、祐介がシャドウ班目に近付くが、疲労に負け膝を落とす

祐介「う……」

シャドウ班「祐介、貴様はな、輝かしい未来をドブに捨てたんだ。貴様の絵描きへの道、あらゆる手を使って刈り取ってくれる……！」

祐介「班目え……!!」

シャドウ斑「私に齒向かった事を、一生かけて悔いるがいい」

祐介「待て・・・え！」

パンサー「喜多川くん！」

祐介が足を抑えながら言う

祐介「なんで動かないっ！」

パンサー「体力限界でしょ？無理されても足手まといだから！」

祐介「情けない・・・！」

トウルース「そう思うなら今は休め、覚醒後にずっと動ける方が珍しい」

スカル「言うこと聞いとけて」

ひとまず入口の椅子に座らせる

双葉は蓮の後ろに隠れてる

トウルース『流星に人見知りか』

パンサー「本当は、ずっと前から気づいてたんでしょ？」

祐介「俺は、そんなに朴念仁じゃないさ。数年前から妙な連中が出入りするようになったし盗作も、日常茶飯事だった。けどそんなの、認めたくないじゃないか。世話になつた人が、そんな・・・！」

パンサー「どうして喜多川くんは、班目のところを出て行かなかったの？」

祐介「『サユリ』を描いた人だし、それに、特別な恩義もある……」
スカル「育ててもらったからか？」

祐介「……俺には父がいない。母親が一人で育ててくれたらしいが、その母も、俺が三つの時に事故で死んだ。その時俺は、先生に拾われたんだ。母も生前、先生の世話になっていたらしい」

パンサー「らしい？」

祐介「母の事も、正直あまり覚えてない。だから先生を親と思つて尽くしてきたつもりだったが……先生は変わってしまった……自分の原点である『サユリ』までも、あんな風に……！」

スカル「……色々、あつたんだな」

祐介「お前達が盗作だの言つてきた時……内心じや気づいていたんだ。だからこそ拒んでしまった……俺は逃げてたんだ……すまない」

ジョーカー「気にしなくていい」

祐介「……ああ。自分を誤魔化してきたことと向き合う、そのきっかけをくれて、感謝している」

スカル「真面目すぎんだよ、お前。そんなだから行き詰まっちゃうんだよ。俺なんかもつとテキトーだぜ？」

パンサー「ホントそう」

トウルース「むしろテキトーすぎ」

ナビ「バカだもんな」

モナ「スカルの真似はオススメしないぜ」

スカル「皆否定しすぎだ！」

ジョーカー「だが事実だ」

スカル「止めを刺すな・・・」

モナ「祐介はこれからどうするんだ？」

祐介「分からない・・・」

スカル「班目が変わっちゃまったもんは、もうしようがねえ。けどよ・・・俺たちなら、心を変えられんだ。野郎の罪を、野郎自身に償わすことができる」

祐介「そういえば、『改心』がどうか言ってたな」

スカル「聞いたことねえか？『心を盗む怪盗団』の噂・・・」

祐介「・・・!?まさか・・・!?」

フォルス「ところでさ、めっちゃ警戒されてるけどここにいて大丈夫k」

後ろからシャドウが湧いてきた

スカル「つと！やべえ！」

モナ「話は後だ！逃げるぞ!!」

祐介「・・・？俺、こんなもの着ていたか・・・？」

スカル「今更かよ・・・」

ナビ「てか早く逃げるぞ〜！」

パンサー「走って！」

トウルース「魔法障壁展開！」

ドガツ

シャドウ「なっ!？」

トウルース「よっしや今のうちだー!!」

パレスから逃げ出した

ひとまず話をまとめる為に渋谷のファミレスへ

双葉は祐介から一番遠い左奥、そして手前に蓮、杏

右奥から優斗、なぜか優斗の股の間に座ってる優菜、手前に竜司、祐介

ちなみにモルガナは蓮のカバンの中

優菜「何でこうなる」

優斗「席がないから」

皆は祐介に鴨志田や双葉のことを話して丁度終わったところだった

祐介「・・・なるほど。それで、その体育教師は心が入れ替わったと・・・『心を盗む怪盗』・・・実在したとはな」

蓮「信じられないか？」

祐介「いや信じるさ・・・あんな世界を見た後だ。今さら常識に遠慮する気も無い。それでお前達は班目先生・・・いや、斑目を『改心』させるつもりって事か・・・俺も加えてくれ、怪盗団に」

皆「!!」

祐介「もつと早く現実を見ていれば、こうはならなかったのかも知れない・・・画家としての未来を奪われた多くの門下生のためにも、俺が終わらせなければ。それが・・・曲がりなりにも親だった男への、せめてもの礼儀だ」

杏「・・・礼儀、か」

竜司「いいんじやねえの。どうせ班目やんだしよ」

優菜「俺はいいと思うが」

優斗「異論はない」

モルガナ「じゃあ取引成立だな！」

杏「怪盗団の仲間が増えたね。よろしく、祐介！」

竜司「足、引つ張んなよ？」

祐介「善処しよう」

蓮「裸婦画は諦めろ」

祐介「あれはつまり、作戦だったわけか？・・・大胆だな、高巻さんは」

杏「私じゃないし！こいつらよ！」

竜司「仕方ねえだろ！祐介がヌードヌード言うからだよ！」

祐介「俺は諦めてないぞ」

優菜「いや諦めろ」

優斗「アレは言わなくていいのか？」

優菜「あーっと、祐介、スマホの中に眼のアイコンのアプリはあるか？」

祐介「アプリ？」

スマホを取り出し画面を見る

祐介「これの事か？こんなものをダウンロードした覚えはないんだが」

優菜「そ。これ使えばパレス行けるから、まあ一人で行くのは禁止な」

双葉「全会一致、だからな」

祐介「わかった」

杏「つて、そういえば・・・現実の班目、どうなったかな。私と祐介、相当ヤバい状

況だったけど・・・」

祐介「それなら、ここへ来る前に連絡を取った。俺は、高巻さん追いかけていたことになつてる。それと、君らの説明通り、シャドウとの事は、本人は知らないようだ」

杏「あいつ・・・何て？」

祐介「女子高生一人捕まえないのかと、警備会社に愚痴つていたよ。でも、怒りが収まらないようで、『全員告訴してやる』と言っていた」

優菜「いつものやつか・・・まあ、その前に改心させればいいだけだ」

祐介「動くとしても個展を終えてからだろう。期間中に醜聞が立つのは向こうが損だ」

杏「ヌードの件が済んだと思つたらこれか・・・！」

優菜「まあいつ行くかは、蓮に任せる」

蓮「分かった」

モルガナ「それじゃあ、いつでもいける様に準備しとけよ」

祐介「ところで、これはなんだ？」

竜司「あ？猫だけど」

祐介「喋ってるが？」

モルガナ「文句あるのか!？」

祐介「いや、そうじゃないが・・・」

竜司「なんで？」

杏「ちよつと人とテンポ違うよね」

モルガナ「このワガハイの描こうってのか？ちゃんと素材の良さを引き出せよ？」

祐介「ふむ・・・」

モルガナの方に祐介が手を伸ばす

モルガナ「気安く触んじや・・・」

モルガナの手前にあつたボタンを押す

ピンポンピンポン・・・

祐介『『黒あんみつ』を注文しようと思つてな』

竜司『『黒猫』から連想したなコイツ・・・』

祐介「ああつ・・・！金を持ってきていていなかった」

杏「やっぱ、この人へん・・・」

優菜「そのぐらいならオレが払つてやる」

祐介「かたじけない」

優斗「じゃあ俺もなんか頼もうかな」

優菜「お前は自分で払え」

みんなと別れ渋谷駅

優菜「ちよつとトイレ行つてくる。先帰つてて」

優斗「電車来るけどいいのか？」

優菜「乗れなかつたら、足で帰る」

優斗「じゃあ母さんには言つとけばいいんだな？」

優菜「ああ」

分かれてトイレに行き

10分ほどして出ると

ナイフの女子「あーっ！」

この瞬間、俺はパレスに行く前に会つたナイフの女子の声であると瞬時に理解し声が

聞こえた方向と逆方向を向き逃げ出そうとする

この間0・4秒である

だがガシツつと掴まれる

ナイフの女子「あんた優菜でしょ？よくも逃げてくれたわね」

優菜「いえ、人違いだと思いますが」（裏声）

ナイフの女子「いや絶対優菜でしょ!?!一緒に来て！」

グイツと引つ張られるが全く動かない

ナイフの女子「え？重・・・っ」

優菜「・・・分かった、付いてくよ。その代わりさっさと終わらせ」

ナイフの女子「じゃあついて来て」

近くの廃工場

優菜「こんなところがまだ残ってたのか。で？また殺そうとするの？」

ナイフの女子「今度は助っ人を読んでおいたわ。もう謝っても許さないからね」

優菜「助っ人ね・・・ミイラ取りがミイラにならない事だな」

ナイフの女子「それどういう意味よ」

ヤンキー「おい、幸！いじめられたって本当か!？」

後ろからヤンキーが来ていた

優菜「え？」

幸「そうなのよ、お兄ちゃん！」

ナイフの女子は出石美幸（いずいしみゆき）というのだが・・・ちよつと待て

優菜「お兄ちゃん!?!このヤンキーが!?!」

幸「輝お兄ちゃん！早くコイツやつつけて！」

輝「うちの妹を傷つけた罪は重えぞ・・・!!」

優菜「一回落ち着けシスコン」

輝「誰がシスコンだ!!」

幸「お兄ちゃんはね、こちら辺の暴走族を束ねるリーダーなのよ！」

優菜「暴走族ねえ・・・バイクは？」

輝「全員で駐車場に止めてきたわっ！」

優菜「それは駐車OKの場所なのか？」

輝「当たり前だろ」

優菜「お前ホントにヤンキーか？」

するとまた別のヤンキーが人を大勢連れてきた

ヤンキー「兄貴！全員連れてきました！」

輝「よし、よくやった！」

別のヤンキー「大兄貴のシスコンにも困ったもんだぜ・・・」

輝「おい、今なんつった？」

別のヤンキー「い、いや、何でもないです・・・」

集団の中の一人がいきなり苦しみだした

ヤンキー「お、おい・・・どうした!？」

苦しんでいるヤンキー「ううう・・・」

輝「胸を押さえてんのか？こいつ持病かなんかあるのか？」

ヤンキー「分からねえです！」

苦しんでいるヤンキー「うぐあああああつ!!」

グルンツと黒目上がり白目になる

そしてナイフを取り出し迫ってくる

優菜「ん？」

輝「おい!逃げろ!」

苦しんでいたヤンキー「あああああつ!」

ベキンツとナイフを折るかかと落として気絶させる

優菜「精神暴走・・・運があるのかないのか・・・いや運は宇宙の彼方に消え去って

るか・・・まさかバレてるのか？」

輝「何してんだ?コイツ」

ヤンキー「コイツ確かお偉いさんの息子かなんかで逃げたくて入ったとか言ってます

たからね。ストレスかなんかじゃないすか？」

優菜「今の目は精神暴走だな」

輝「精神暴走？」

幸「それって確か、電車とかで運転手がおかしくなつて事故つたとかいう・・・」

優菜「それだよ・・・てかやるの?やらないの?」

輝「やるに決まつてんだろうが!」

優菜「ならどうする？全員で来てもいいけど」

輝「女にリンチは男じゃねえ！」

優菜「一人ずつやってもリンチと変わらねえだろ」

結局一人ずつ倒してとうとう輝まで来た

輝「つたく・・・情けねえなあ。でもまあ、俺もここまで強いとは思ってなかったけどな」

優菜「こっちは帰らないといけなんだよ。だから一発で終わらせる」

輝「それじゃ俺は・・・」

ナイフを取り出す

輝「これでやってやる」

優菜「ナイフか・・・最初のあれ見てナイフは舐めてるだろ」

輝「舐めてねえよ。むしろ敬意だ」

優菜「一番慣れてるから・・・か。アイツにナイフ教えたのもあんただな」

輝「護身用としてだがな」

優菜「それじゃあ、やるぞ！」

パン

突然の事だったから反応できなかつた

頭を打たれた

輝「じゃない、幸でもない、撃つたのはさつき倒したヤンキーの中の一人だった銃のヤンキー」「俺達が倒されるなんて・・・あ、ありえないんだよ!」

輝「バカやろーッ!!何やってんだ!!」

ヤンキー「兄貴!ここは逃げねえと・・・今の銃声で絶対通報されてますよ!!」

輝「チツ・・・お前らは逃げろ!幸は俺と逃げるぞ!」

ヤンキー「こいつの死体はどうすんスカ!?!」

優菜「誰が死体だって?」

銃のヤンキー「ヒツ・・・し、死んでない!?ば、化け物!!!」

優菜「お前か」

カオスの空間から銃を取り出しヤンキーの銃を撃つ

当たった反動で銃を手放す

銃のヤンキー「ギヤアアア!撃たれたーッ!!」

輝「お前まで銃を・・・?」

優菜「面倒なことしやがって・・・仕方ねえな。カオス」

カオス「いいのか?」

幸「な、なんか出た!」

優菜「穴作れ」

グワンと穴ができる

優菜「捕まりたくなかったら入れ」

輝「ちよつと待ってくれ」

優菜「どうした？捕まりたいのか？」

輝「いや、俺達のバイクはどうなんだ？」

優菜「違法のところに置いてねえなら大丈夫だろ」

輝「いや、見た目が暴走族丸出だから持つてかれるかもしんねえ！」

優菜「はあ？仕方ねえな。カオス、ここにいる奴全員入ったら閉じて、俺はこいつら

のバイク取り行く」

カオス「分かった」

優菜「場所はどこだ？」

輝「あ、ああ・・・この先の駐車場だ、見ればわかると思う」

優菜「よし」

シュンツ

輝「消えた!?!」

カオス「さっさと入った方が身のためだぞ」

幸「と、とりあえず入ろ？」

そしてバイクを全て別のカオスの空間に入れ

アイツ等の空間に入る

輝「うわっ！出てきた!？」

優菜「全部回収したぞ、感謝しろよな」

輝「それは感謝している・・・ただ待つてる間に聞きたい事が出来てな、いいか？」

優菜「別にいいぞ」

輝「お前一体何者なんだ？」

優菜「それはな？守秘義務だ（適当）」

輝「守秘義務ってなんだ？」

優菜「絶対に話せない」

輝「・・・ならもう一つ頼みがある」

優菜「なんだ？」

輝「俺達を舎弟にしてくれないか？」

優菜「・・・お前達の中には女の下に着くのは嫌な奴もいるだろ」

輝「そんな時は俺がどうにかする」

優菜「拒否権は？」

輝「ない」

優菜「・・・やったら、条件だ」

輝「なんだ？」

優菜「お前ら全員高校生だろ」

ヤンキーたちがギクツとなった

優菜「お前からこれから卒業までずっと学校行けよ」

ヤンキーたちがギャーギャー騒ぎ出した

優菜「・・・じゃあ俺に勝ったら、サボるの許すが？」

シーン・・・

優菜「じゃあ、決まりだな」

輝「アドレス教えた方がいいか？」

優菜「ああ」

幸「どうしてこうなるわけ？」

帰ったらSNSで皆が丁度話していた

竜司「告訴とかシヤレになんねえ」

蓮「面倒事は避けたい」

竜司「警察にチクられたら、学校にも連絡行くし」

優斗「今度こそ退学間違いなし・・・か」

杏「退学どころか逮捕だよ？不法侵入、名誉棄損・・・」

双葉「余罪もまだまだありそうだ」

竜司「ん？優菜は見てねえのか？」

優菜「ちょうど今帰ったぞ」

優斗「そういえば、優菜はいじめの件どうなったんだ？」

双葉「いじめ!？」

優菜「あんま、そういうこと言うな・・・まあ、今全部片づけた」

杏「暴力で？」

優菜「途中まで・・・多分明日で分かる・・・というか明日休みてー」

竜司「いやすんなよ・・・と、とにかく今回は絶対に失敗できねえって事だ」

杏「ここからが本番だね、みんなで頑張ろ！」

双葉「切り替え早えー」

ということとで祐介＋謎戦力により戦力UP

そして寝た

番外編2

「いつかの誕生日」

今日は二月二十二日。俺の誕生日だ！

一年の中でトップクラスに入る記念日だ

そして日曜！今日は遊び倒すぞ〜！

優斗「買い物行くぞ」

優菜「へ？」

優斗に半ば強引に午前の十時から外に連れ出された

防寒服や手袋やマフラーはくれたけど、こっちは暖房効いた家でゴロゴロしたいん

じゃあぼけえ

優斗「今日誕生日だろ？だから何か買ってやろうと思って。ちなみに手袋はお母さんで、マフラーはお父さんからだぞ」

優菜「そうなん!？」

優斗「ああ、それで今日はやりたい放題やっていいぞ」

優菜「やりたい放題ねえ・・・じゃあまずは」

映画館で銀魂の映画を見た

優菜「やっぱパロディから始まったな」

優斗「でもアレでこそ銀魂だよな」

優菜「なー」

そしてゲーセン

優菜「UFOキャッチャーは昔から苦手なんだよ・・・」

優菜は豆柴のぬいぐるみを取ろうとしていた

優斗「任せろ。リトにコツは教わった」

優斗は見事豆柴のぬいぐるみを手に入れた

優菜「おおく（関心）」

優斗「ほらよ」

優菜「ありがとな！それじゃあ・・・豆助って呼ぶか！」

優斗「・・・お前ポチとかって名前付けるタイプか（てかそもそもぬいぐるみに名前

つけるのか）」

優菜「?どういう事？」

優斗「いやなんでもない。でもお前猫の日が誕生日なのに犬のが好きなんだな」

優菜「まあ可愛いのは大体好きだが犬が一番好きだな。なんかこう、スツゴイ元気で

じゃれあってくるじゃん？」

優斗『犬が喋ってるみてえ』

次はカラオケ

優菜「風の声く光の粒。まどろむ君にそそぐ」

※主の文才がないだけで割と上手く歌ってます

そして大通りのおもちや屋の前を通ると、優菜の目が二つのぬいぐるみに止まった

優菜「・・・」

優斗「?どうした」

優菜「いや、なんでもない」

優斗「そのぬいぐるみ欲しいのか?」

優菜「お前の財布からこれ以上金を出したくない」

優斗「お前が思ってるより持つてるよ。このぬいぐるみか?・・・また犬ね」

優菜「悪いか?」

優斗「いや、可愛いと思うよ」

優菜「可愛いって・・・カアアア」

優斗「この白のと色違いのオレンジ色のやつだな?・・・てかオレンジの犬のぬい

ぐるみなんて始めて見た」

優菜「なんか運命的なものを感じたね俺は」

優斗「ふーん・・・名前は決めたのか？」

優菜「白いのはわんわんで、オレンジはジュニ」

優斗「・・・わんわんはまだ分かる。何でジュニ？」

優菜「パツと思いついからだよ」

優斗「まあいいか。それじゃあ精算してくるな」

そして存分に満喫して家に帰った

お母さん「おかえりなさい・・・犬のぬいぐるみが三つも!？」

優菜「いや、これはその・・・」

お母さん「いいじゃない!私も昔はぬいぐるみいっぱい買ってたのよ。今も実家にたくさんあるわ」

優菜「あ、そうなの」

お母さん「ていうかぬいぐるみが欲しかったなら、前から言ってくればよかったのに。いっぱい買ってあげたわよ?」

優菜「いや、男がぬいぐるみ集めてのは・・・」

優斗「何言ってるんだ?別にいいだろ。世の中おじさんがプリキュア見てんだぜ?」

優菜「それは別だろ」

お母さん「まあいいわ。ケーキはもう冷蔵庫にあるから、優菜たちは夕飯まで好きに
していいわよ」

優菜&優斗「はい」

そして夕飯を食べてお風呂に入った後

お母さん「はい、それじゃあ準備はいい？」

お父さん「ああ」

優斗「問題無い」

優菜「いや、ケーキでかくない!？」

ケーキはざつと大きなウエディングケーキ並みの大きさだった

優菜「冷蔵庫に入るレベルじゃないよね!？」

お母さん「あら？誰も“家の”冷蔵庫なんて言っていないわよ？」

優斗「実はな」

カオス「俺の空間に冷蔵庫を作って、そこに入れてたんだよ」

優菜「ああ、そういうこと。じゃあ、この大きさにした理由は……」

お母さん「ペルソナの皆さんも一緒に食べるためによ♪」

優菜「だと思った……」

ヘル「という事ではやくやりましょ。ハッピーバースデートウユーってやつ」

アリエル「早くしないとケーキ溶けますよ？」

クロノス「ろうそくは上じや届かないな。1段目にしよう」

トラ「写真はもう撮ったぞ」

ウンディーネ「電気消さないと」

メーテイス「カマエルさん」

カマエル「はいっ！」

言われた瞬間、カマエルが電気を切った

アラメイ「それでいいのかお前は・・・」

アウラ「それじゃあ電気も消えましたし、始めましょうか」

イフリート「それじゃあ火いつけるぞ」

イフリートが一つ一つに火をつけた

エロース「それじゃあ、はいせーの」

皆「ハッピーバースデートウーユ〜♪ハッピーバースデートウーユ〜♪ハッピーバースデー

ディアゆるなく♪ハッピーバースデートウーユ〜♪」

優菜「ふー!!」

アフロディーテ「おめでとうございます」

ガイア「おめでとう」

ミヅハノメ「おめでとうございます」

ホバル「おめでとう」

お母さん&お父さん「おめでとう」

優斗「おめでとう」

優菜「・・・ありがとう！」

そして皆でケーキを食べて寝た

夢の中？

優菜「ん？・・・ここは・・・」

？「起きたわね？」

優菜「あ、お前！何で出てきて・・・」

？「ここは夢の中よ。それに何もする気はないわ。ただ一つ言いたいことがあっただけよ」

優菜「・・・まさかお前が？」

？「お前が言うな。でもそうよ。お誕生日おめでとう」

優菜「なんか皆とは意味合いが違いそう」

？「そうよ？でも悪い意味ではないわ。皆は誕生日自体を祝ってるけど、私は今日まで生きてくれてありがとうって意味なんだから」

優菜「・・・一心同体だから？」

？「そうよ。これからもちゃんと生きてくれないと私まで死んじゃうんだからね。優斗の方に逃げてても、貴方がいないと暇なのよ」

優菜「あつそう」

？「それと、ここにもう一人いたというか・・・隠れてるのかしらね。ともかく神堕ちてたわよ」

優菜「紙？」

優菜は？から紙を受け取った」

優菜「「お誕生日おめでとうございませす。これからもどんどん暴れてくださいね。こちらとしてもそうしてもらわないと面白みがないので」・・・誰からだよ」

？「知らないわよ。それじゃあ、おやすみなさいね」

優菜「ああ、おやすみ」

？が消えて、優菜も眠りについた

番外編3

「優斗の誕生日」

はい、タイトル通り今日は優斗の誕生日です

優菜「俺の誕生日は色んなところに連れてつてもらったりしたからな。今度は俺が連れてくぞ。何がしたい？」

優斗「家でゴロゴロゲームしたい」

優菜「・・・まあ、お前がそうしたいならいいか」

様々なゲームをし、いま優菜は優斗の足の間に座ってストリートファイターをしていった

優菜「格ゲーつてき。俺結構苦手なはずなんだよ。なのにさ、何でお前は10連敗してんだ？」

優斗「お前の苦手な基準が異常なんじゃないか？」

優菜「ていうか、10連敗でキレねえんだな。俺だったら結構イライラしてるけど」

優斗「勝ち負けより、お前とゲームしてるって事が大事だ」

優菜「・・・へえ」

優菜は画面を見て、ひたすら優斗の操作キャラをぶん殴っていた
優斗の答えに対して振り向くことはなく、耳を赤らめさせていた
そしてお昼

優菜「そろそろ昼だな。何食いたい？」

優斗「優菜の手料理がいい」

優菜「・・・じゃあ、改めて何食いたい？」

優斗「・・・丼ものとか？」

優菜「じゃあ牛丼とかでいいか？肉買い行くか」

優斗「俺も行くぞ」

優菜「はいはい」

優菜と優斗は買い物へ

お母さんたちはケーキを買いに行った

優菜「どうせだから夜も買つところか」

優菜が肉をカゴに入れてみると、優斗がお菓子を大量に持ってきた

優菜「そんなに買わんぞっ!？」

優斗「皆で食べようぜ」

優菜「・・・多いからいくらか戻してこい」

やはり優菜は優斗に対して少し甘いらしい

そして昼食後

優菜「そういや、まだ誕生日プレゼントやってなかったな。何が欲しい？」

優斗「お前と結婚する権利」

優菜「そういう話はまた今度だ」

優斗「・・・じゃあ、お前に何でもしていい権利」

優菜「・・・その要望が通ると思ってるのか？」

優斗「思ってる」

優菜「ええ・・・」

優斗「分かった。じゃあ大人の階段は登らない」

優菜「させねえよ!？」

優斗「節句酔はしない。ただ、キスはするかもしれない」

優菜「そう簡単にはやらせんぞ!？」

優斗「やるのは抱き着いたり、風呂に侵入するぐらいだ」

優菜「・・・それぐらいなら、まあ・・・分かったよ。今日一日だけな」

優斗「・・・愛撫はするかもしれないな」

優菜「どっちの意味で!？」

その後、風呂掃除をした後に全員で夕食を食べた

優菜「じゃあ、風呂入るけど」

優斗「もちろん一緒に行くぞ」

優菜「もちろんて……まあいいか」

優菜は優斗が入浴中に凸してくるのに慣れ過ぎて、もう何とも思えなくなっていた

二人で湯船に浸かり、少し温まった頃に優菜が髪を洗いだした

優斗「……優菜つてさ、髪とか伸ばす気ねーの？」

優菜「正直ない。伸ばしたら邪魔になりそうだし」

優斗「伸ばしてもいいと思うけどな……」

優菜「……そんなに伸ばしたとこみたいの？」

優斗「一回な」

優菜「……はあ、ガイア、ウィッグ作って」

優菜はシャンプーを流して、ガイアに黒髪ロングのウィッグを作ってもらい、被って

みた

優斗「おー。いいじゃんか」

ウィッグがどんな感じか皆に分かりやすく言うと、今話題のウマ娘のサイレンススズ

カの長さで、黒髪だ

それ以外説明しようがない

優菜「もういいか？」

優斗「ああ、十分だ」

優菜は、ウィッグをカオスの空間の倉庫に放り投げて、髪にリンスをつけだした

優斗は優菜が洗い終えた後、髪を洗って二人で風呂を上がった

そして、優菜の時のように全員でケーキを食べた後。自室で寝る準備に入っていた

優菜「さて、誕生日ももう終わりだぞ。最後にやりたいことは？」

優斗「さあ来い」

優斗は毛布を被り、両手を広げて優菜が突っ込んでくるのを待っていた

優菜「・・・抱き着いてほしいの？」

優斗「そうだ」

優菜「そうなの？・・・お前からこいよ、いつつもくるじゃんか」

優斗「まだ、何でもしていい権利は使えるはずだ」

優菜「それはお前が俺に何でもしていい権利であって、お前が俺に何でもさせられる

権利ではないぞ」

優斗「・・・」

優菜「・・・分かった、分かったよ」

優菜が電気を消してから優斗の前まで行くと、優斗が手を引つ張り毛布の中に引きずり込んだ

優菜「ちよっ……強引すぎじゃない？何も見えないんだけど」

優斗「別いいだろ。このまま寝るぞ」

優菜「ふ」

優菜が身動きを取れないようにし、眠りに入つた
ええ、今のはR指定にしてたら色々シてましたよ

書いてないだけでシた可能性もありますがね